梅園全集

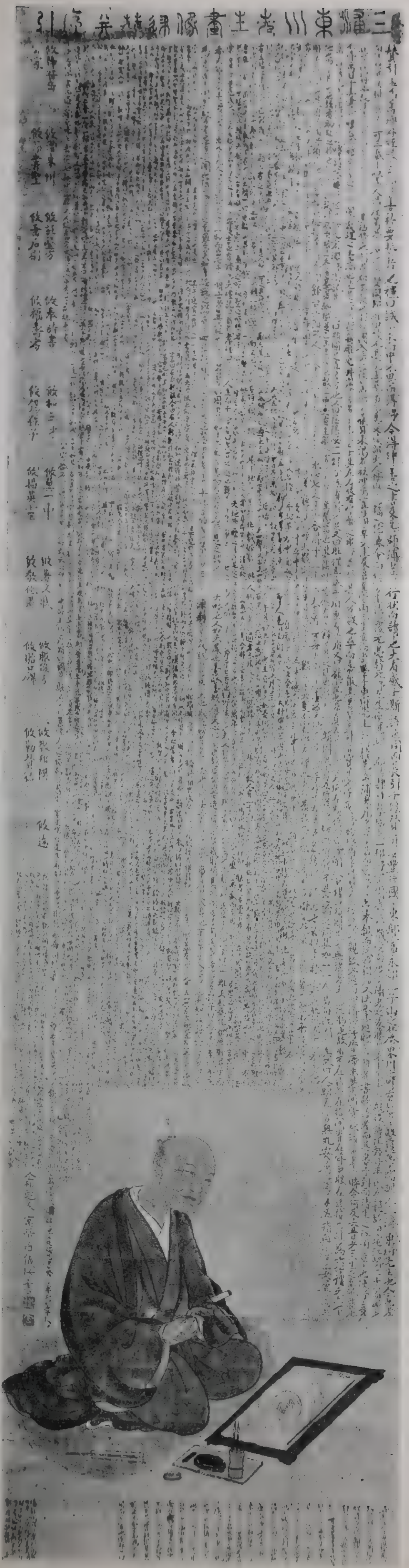
上卷



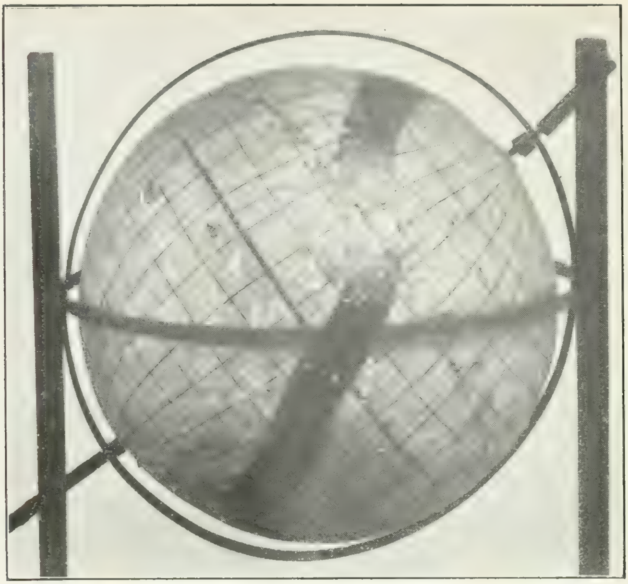
開来

[illegible]江

贈從四位三浦晉先生肖像　由良箕山賛　田邊文窓畫

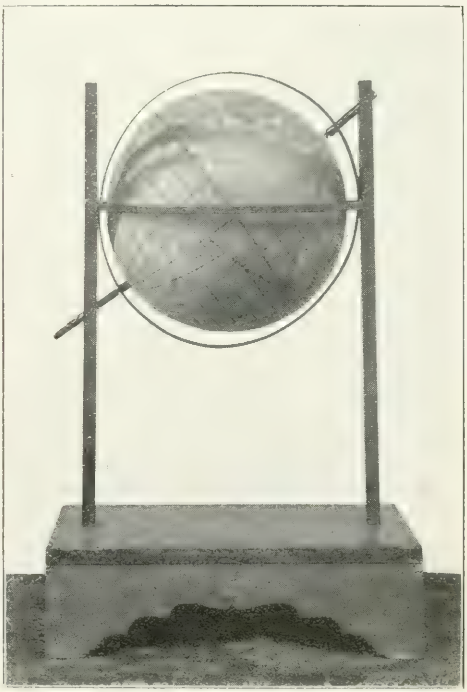


綾部克太郎氏所藏



梅園先生自製簡天儀

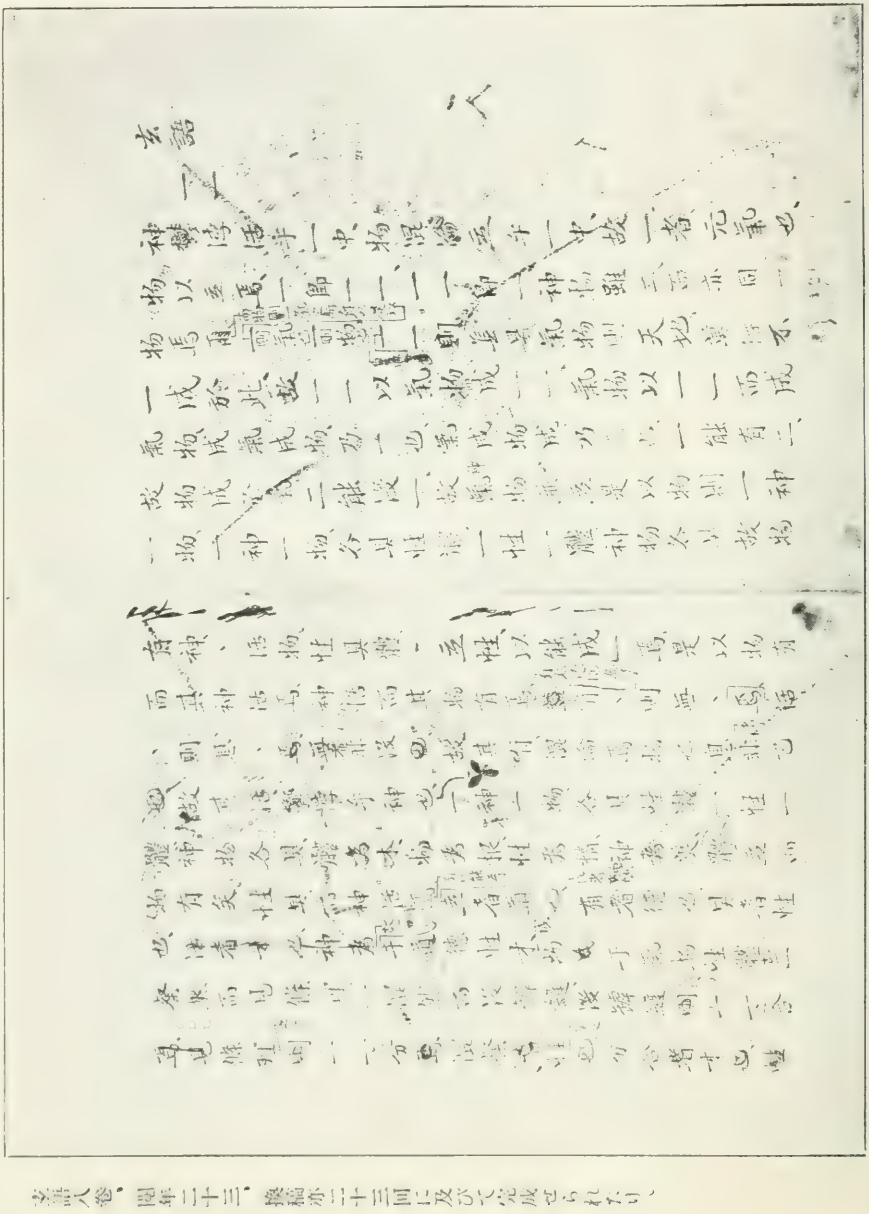
（天球儀）



其の全形

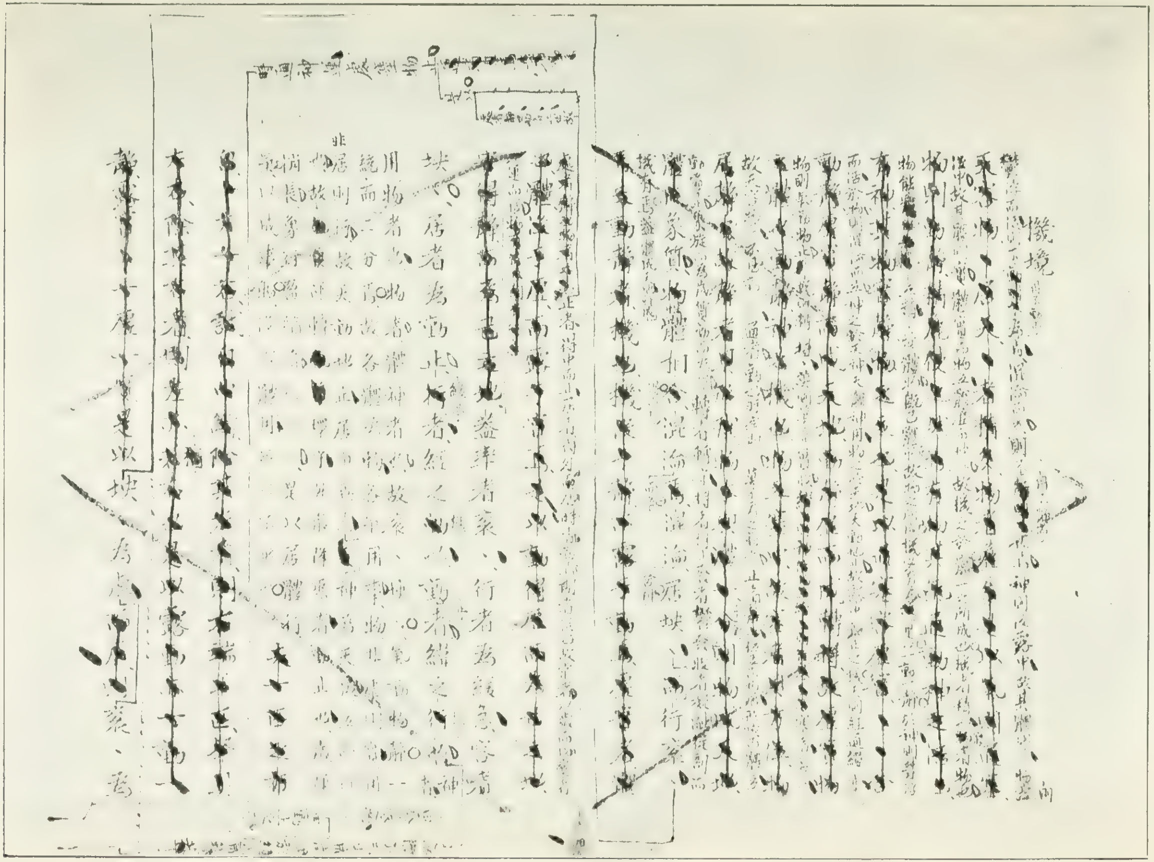
後嗣　三浦榮二郎氏所藏

玄語舊稿（舊稿の更に更に舊稿せしもの）



玄語八卷。閲年二十三。稿亦二十三回に及びて完成せられたり。

玄語舊稿



後闕　三浦榮二郎氏所藏

梅園先生手彫隨神之像



村社宮畑神社所藏

隨神頭部を解見し內側の文字を撮影す



內側ノ文字
玉眼を入申候于時寬保四年四月吉日富永の住人安貞作之

梅園先生西王母之賛

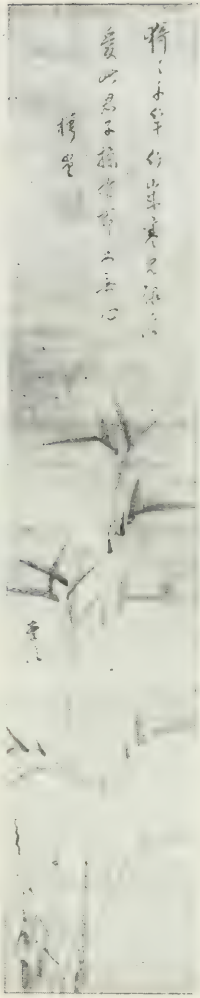
眞龍齋松峰畫



宮本金六所藏

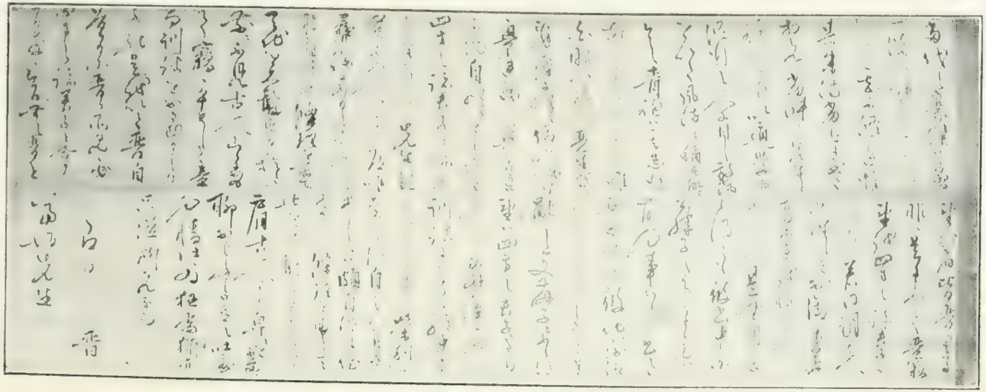
梅園先生墨竹

御先洗二疊菴賛



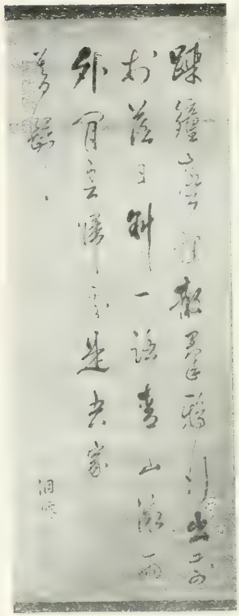
小川米作氏所藏

梅園先生書翰



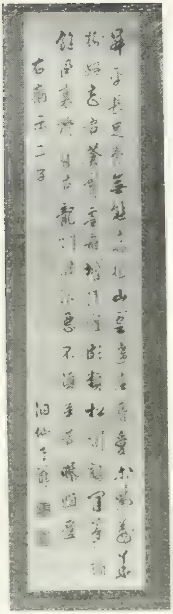
綾部絅齋先生の長男富坂先生に寄せたるもの

三浦助藏氏所藏



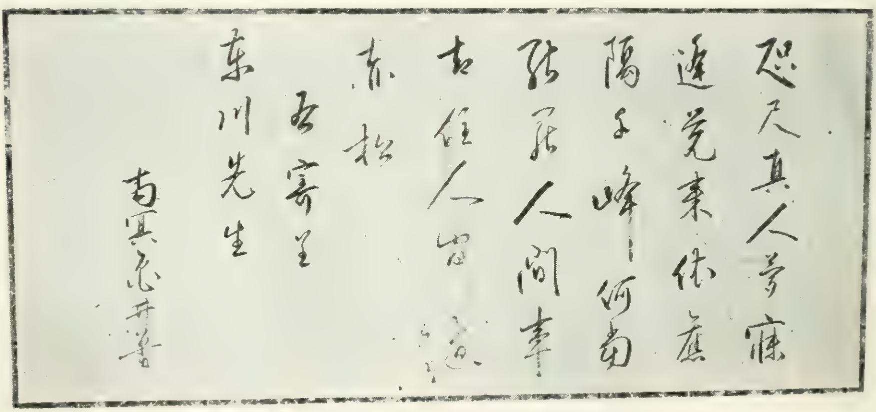
梅園先生暮歸詩（二十四歳之作）

鈴木則利氏所藏



梅園先生病示二子詩（晩年之作）

三浦榮二郎氏所藏



龜井南冥寄三浦梅園

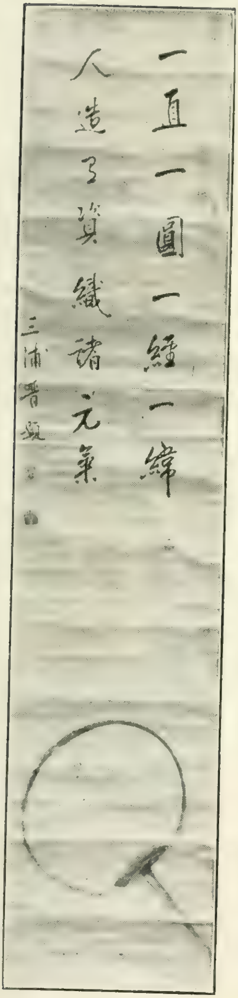
三浦榮二郎氏所藏

時に南冥四十歳梅園六拾歳

梅園先生畫賛



三浦孫六氏所藏



後藤作六氏所藏

梅園全集發刊之辭

梅園三浦先生は享保八年南豐子山の下に生れ寛政元年六十七歳を以て歿せらる今を距る實に一百二十四年なり爾來宏才碩學の士輩出し斐然として章を爲し南豐の圭運を張開したるもの洵に先生の遺澤と謂はざるべからず先生幼にして穎悟夙に天地萬有の玄象に大疑を懷き年二十餘にして躬ら天球儀を製し年三十にして條理學を創唱し拮据二十三年にして玄語八卷を著して深奧の玄理を解說し別に又贅語十四卷敢語一卷を著し一は玄語の餘蘊を盡し一は彝倫を講明せり亦其力を用ふること更に三十四年なりき所謂梅園三語是なり蓋し先生の造詣は先儒未發の卓說にして所謂條理學なり德川幕府が程朱の學を宗とせしより當時の大儒を以て任ずるもの

も多くは性理の說に局せられ別に發明する所なかりし時に於て先生卓犖不羈一家の新學說を唱道せしは識見の一世に超逸するを證すべきなり且夫れ當時の儒流漢學心醉の結果放伐を贊して聖道となし動もすれば我邦立國の大本を忘れんとするもの少からざりし時に於て先生敢然として惑はず忠孝の大義を明にし人心の歸趨を敎へて天下有二尊曰君曰父と提醒し君父臣子自有定分其位不可顚倒と喝破せし如きは啻に痛快の文字なるのみならず名敎を維持する千古不磨の達見と謂ふべし

先生の著書は三語の外尙三十餘種あり其論ずる所哲學、經義、倫理、道德、宗敎、敎育、政治、經濟、天文、曆數、地理、歷史、及び語學、文學、醫藥、博物、生理、衞生等の諸方面に亘り皆一家の創見を交へ其該博と創見と眞に一世を驚倒するに足る蓋し先生は懷疑より起り萬有の根本義を探求

するに忠實なりしと雖も必しも高遠を以て旨とせず同時に經世實用の學を忘れざりしを見る即ち藩主の諮問に應じて所謂丙午封事を奉り政務治術に關する意見を傾倒せし如き吉武莊助の爲に奉公之道を說ける如き窮民を救はんが爲に慈悲無盡を組織せし如き上田養伯の爲に經濟物價を論ぜしが如き殖林の經營今猶森森たる老杉を遺せるが如き其他枚擧に遑あらざるなり舊日出藩故文學米良東嶠其師帆足萬里先生の碑文を撰するや言へるあり夫學原彝倫、兼明物理、開智成務、以資厚生利用者、基于攣山先生、而大成于先生。と帆門の盛なりしも其本源自ら存する所あるを知るべし

嗚呼先生其學の邃き其識の高き此の如しと雖も僻村の蒿下に嘉遁し諸藩辟するも褐を解くを肯ぜず朝飲于溪水、夕臥于山雲、於晉乎足矣と以て其の志を見るべし况んや先生の歿後異學の禁令至嚴にし

て其學風著述並に顯はるるの餘地なかりしなり茲に世の開明進步に件ひ斯の卓越の識見と斯の偉人の德行とを汎く世に紹介するを得るの時運に至りしは獨り後進吾等の欣躍するのみならず亦學界の要求に副ふなるべし玄贅二語は嚮に明治三十二年帝國大學の閲覽する所となり文部當局者も間間摘錄して敎科書中に抄載するに至れり殊に天球儀、玄語稿本の如きは畏くも明治四十年　皇太子殿下の台覽の榮を辱うせり加之先生の學德は名敎維持に著大の功勞ありしこと遂に畏くも　天聽に達し茲に明治四十五年二月二十六日特旨を以て從四位を贈らるるの恩命を拜するに至れり洵に昭代の春風頓に二子山下の枯梅に暢ひ欣欣として復た花を著け馥郁として遠きに薰するを覺ゆ

夫れ先生が畢生の心血を灑がれたる大著三語及其他諸種の遺篇の

大部分は未だ遍く世に公にせられず今に及んで捜討に力を致さずんば恐くは散逸して千載の憾を遺さん是れ我が梅園會の起りたる所以なり本會は玆に學界の未知數として梅園全集を江湖に紹介せんとすること久矣而して今や編纂漸く其畢を告げ之を公刊するに至れり世の學者幸に涉獵研討の勞を吝むなくんば先生の造詣は吾が學術界道德界に永遠不斷の異彩を放つのみならず又偉人の名を無窮に傳ふるに至らん

明治四十五年孟春

梅　園　會

梅園先生年譜

藤井專隨編

享保八年癸卯　一歳

紀元二三八三年　中御門天皇十四年　吉宗將軍八年　藩主心源公九年　家康薨後百七年　藤原惺窩歿後百四年　林羅山歿後六十六年　中江藤樹歿後四十五年　伊藤仁齋歿後十九年　綾部道弘歿後二十三年　貝原益軒歿後九年　新井白石六十七歳　室鳩巢六十六歳　物徂徠五十七歳　伊藤東涯五十四歳　太宰春臺四十四歳　藪孤山三十八歳　秋山玉山二十二歳　前野良澤生　平賀源內生　小澤蘆菴生　島原亂平定天主教嚴禁後八十五年　明宗教外洋書輸入を許せし後三年　明治四十五年より逆算百九十一年　清、世宗雍正元年　露、彼得大帝歿するの二年前　佛、路易十四世歿八年

八月二日富永村に生る、富永村今は數部落を合して西武藏村と稱す。

先生姓は三浦、諱は晉、字安貞、後ち幕嗣の名を避けて安鼎に作りしも幾もなく初の名に復したり、園に梅樹多きを以て梅園と號し、其の居二子山に近きを以て孿山孖山二子山人等と稱し、園下を東溪と曰ふより東川居士とも又洞仙とも號し、更に無事齋主人の號あり。

其先は相州三浦の人、正治中地を豐後國東郡に避け、姓を丸小野と改めたりしが後本姓に復す。

祖父與四郎義房、泉石翁徹山と號す。父諱義一、字快順、野梅堂虎角と號す。母矢野氏。

綾部絅齋去年龍溪公の行狀を撰み伊藤東涯之に跋す。

綾部絅齋去年筑肥に遊び、長崎に留ること三日、聖壽山在留の支那僧道本禪師及謙光と詩交を開く。

此年綾部絅齋四十八歳　山本友石四十二歳　綾部富阪四歳

享保九年甲辰**二歲**

近松門左衛門歿　英一蝶歿　西川如見歿　幕府節儉令を發布し元祿以來の奢侈を匡正せんことを謀る。

是より先き正徳二年綾部絅齋三十七歲京師に遊び伊藤東涯及北村篤所に見へ經史を商推す。

此年綾部絅齋四十九歲初て室鳩巣及服部南郭に事へ經詩を學ぶ。

室鳩巣綾部絅齋の家庭指南に跋文を書す、家庭指南は正徳四年絅齋三十九歲、梅園の生るゝ九年前の著作。

熊本藩儒熊谷竹堂題家庭指南後の文を撰す。

先生が千古の知己と稱せし高葛陂生る。

享保十年乙巳**三歲**

西洋馬術傳はる　新井白石歿　露・彼得大帝歿

綾部絅齋騎士に列せられ侍講となる。

伊藤東涯絅齋の家庭指南に跋文を書す。

享保十一年丙午**四歲**

吉宗將軍鷹狩を再興し士風の振興を力む鷹將軍と呼ばる　戸口を檢す以後子午年を以て例とす　中井甃菴懷德書院を建つ。

妹りく生る。

享保十二年丁未**五歲**

都下の藥葺を禁し瓦拜借金を許す

後藤艮山歿　伊藤東所生　英ニウトン歿

ン歿

享保十三年戊申 六歳

いろは消防組設置 足利學校修覆 物徂徠歿 岡島冠山歿 細井平洲生 伯令海峽發見

享保十四年己酉 七歳

小野蘭山生 人參を植ゑしむ

享保十五年庚戌 八歳

中井竹山生 本居宣長生 三宅石菴歿

享保十六年辛亥 九歳

西國蝗大に起る 江戸大火 節儉令出づ 畵家沈南蘋長崎に來る。

享保十七年壬子 十歳

綾部絅齋五十四歳監郡となる。

家に藏する所の近江八景屛風の夜雨の圖を批評し、人をして其論理的頭腦の明快卓拔なるに駭かしめたり。

祖父與四郞義房慶安三年を以て生る、享保四年削髮して泉石翁徹山と號せり、此年十二月二十六日歿す、享年八十一歳、遺著算書二卷及閻浮置土產あり。

義房の生れたる頃其父淸兵衞義淸丸小野氏を棄て三浦氏を復せり、紋は三ツ引なりしが天滿天神の氏子となれるを以て梅鉢を用ふるに至れり。

父義一自ら奮て衣を解き食を推し又隣保を勸誘し千

海内饑死數を知らず
大砲を鑄る　林鳳岡生　永富獨嘯菴生　井上金峨生　上田秋成生　米ワシントン生

享保十八年癸丑十一歲

饑死九十六萬餘人に及ぶ中井履軒生
杉田玄白生

享保十九年甲寅十二歲

水戸家より禮儀類典を獻す　伊勢貞丈諸禮式の書を獻す　吹上御苑に弓馬始の儀式及流鏑矢の儀式を再興し以て尚武の士風を皷吹す　室鳩巣歿
皆川淇園生る。

享保二十年乙卯十三歲

此年大神君天下一統の支干、元和元年乙卯に相當し太平打續けるの故を以て幕府に祝典あり。養生所を建て貧民

端百計活を得るもの十數家に及べり。
綾部絅齋監郡として力を救助に盡し眠食を忘るゝに至る。
綾部絅齋論議時と合はず遂に職を辭す、五十八歲。
屋後の山を越えて里許、藩府の西白寺に漢字字彙を藏す、先生就て檢索するを許され、讀書難字に遇ふ每に之を記し、積て數十字に至れば就て之を檢す、此の如きもの每月五六回に及べりといへるもの此頃のことなるべし。
綾部絅齋反求錄を著す。
十月六日杵築藩儒山本友右江戶に歿す年四十六、絅齋墓碑銘を作る。
麻田剛立生

な救療す　細井廣澤歿　柴野栗山生
加藤千蔭生

元文元年丙辰十四歳

櫻町天皇即位　文字金を鑄る　薩摩絣、伊勢萬古燒、近江濱縮緬始　古筆了仲歿　伊藤東涯歿　荷田春滿歿　淸高宗乾隆元年

元文二年丁巳十五歳

篠崎三島生　安積澹泊歿

元文三年戊午十六歳

大嘗會再興　林子平生　井上通女生

元文四年己未十七歳

藩主心源公逝去、壽三十六、在職二十五年、寬量公嗣立時二十四歳　青木文藏幕府の蘭學員となる。

元文五年庚申十八歳

始て詩に志す、當時詩材家に唯周伯弼三體詩あるのみ。

正月始めて綾部絅齋に謁し教を請ふ、時に絅齋六十三歳、藩監郡にして又文學たり。

中津藩文學藤田敬所の門に遊ぶ、敬所其才を愛して其職を繼がしめんと欲したれども父母其一子たるの故を以て之を許さず、滯留三旬にして家に還れり、才藻日に進む。

獨嘯集に收むる詩此年の作より始まる。

綾部絅齋の二男妥三歿

綾部絅齋六十四歳再起用されて侍讀となる

春高田に客たり秋中津に客たり。

竹田出雲歿　塽國王位相續戰爭起

寛保元年辛酉十九歳

武德編年集成る　三宅尙齋歿　伊能忠敬生　青木敦書に命じて關八州を歷遊して舊記古書を搜訪せしむ　支那より康熙字典及圖書集成來る。

寛保二年壬戌二十歳

寛保三年癸亥二十一歳

龜井南冥生

秋高田に客たり

童丱より大に疑を天地造化に抱き之を思うて得ず數數寢食を廢するに至る、年二十餘にして稍天學の書を讀み、仰で觀、俯て察し自ら其器(天球儀)を製し其象に模し以て運轉の大意を知る、大意は知るべしと雖ども其疑ふ所に非ず。

六月十五日長姉かや歿すかやは寶永七年を以て生れ田染横嶺村小田原增右衞に嫁せり。

秋姫島に遊ぶ。

春再び中津に行き敬所の門に學ぶ滯留三旬にして還る。

秋高田に遊ぶ。

四月十三日伯母まん歿七十三歳、まんは寛文十一年に生れ高田町銅孫兵衞に嫁せり。

延享元年甲子 二十二歲

神田に天文臺を築く　是より先き將軍躬ら渾天儀を作り自ら之を試む　將軍青木文藏をして蘭學を講ぜしむ　甘藷を薩摩より取寄せ諸國に頒て栽培せしむ　櫨を植て蠟の製造を獎勵す　砂糖の製法を調へて輸入を防ぐ　新田の開墾を獎勵して殖產興業の發展を謀る　三輪執齋歿　藪孤山歿　岡藩の國學者清原雄風生

獨嘯集成る。

四月村社宮畑神社の隨神二體の彫刻成り玉眼を入る。

梅園詩集に收むる詩此年の作より始まる。

延享二年乙丑 二十三歲

吉宗將軍隱居し大御所と稱す　長崎譯官に限り洋文を讀むを許す洋學を一切禁ぜしより百八年なり　尾藤二洲生　南海部郡下直見村大庄屋佐藤甚兵衛植林の功勞を以て幕府より賞せらる。

秋長崎宰府熊本八代に歷遊す。

綾部絅齋七十歲老を告げ仕を致す。

延享三年丙寅 二十四歲

賴春水生　村田春海生　村瀨栲亭生

四月巡撫使神谷左内宿泊、父虎角居士に扇を出して發句を需めたり、祖先已來此宅にて上使の宿泊せしこと已

塙保己一生　耶馬溪樋田の隧道成る（僧禪海享保十二年工を起してより三十年を費し此年を以て竣る鑿岩三所延長百間竪横各二丈梅園拾葉下卷豐前僧禪海の章參照）

延享四年丁卯　二十五歳

桃園天皇卽位　高山彥九郞生　森狙仙生　太宰春臺歿

寬延元年戊辰　二十六歳

大岡忠相列侯となる　菅茶山生　僧六如生　立原翠軒生　倉成龍渚生

大淸一統志勅修　琉國王位相續戰爭終る。

寬延二年己巳　二十七歳

加茂眞淵國學を唱ふ　太田南畝生

寬延三年庚午　二十八歳

古賀精里生

に五回に及べり。

玖珠侯より辟さる謝して曰く朝飲孖溪水夕臥孖山雲於晉乎足矣　石垣原の詩あり　韓信論、小宮山內膳傳、某士傳、を作る。

財津某の爲に知足解一篇を作り之を與ふ。

二月十一日より三月二十三日に至る伊勢參宮の旅行を爲す、往路陸行、山口に大內氏陶氏の古を訪ひ、播州書寫山に上り、一谷福原を弔し、上巳の佳節を大阪に過し、奈良を見物し、千早城を望て楠公の昔を忍び、三月八日

兩宮に參拜し、琵琶湖を渡りて八景を賞し、比叡山に上り、京都の名勝を歷訪し、伏見より舟行大阪に出で、大阪を見物して、歸途舟行金比羅に詣で、今在家に上陸して歸山す、紀行東遊草一卷を作る。

梅園拾葉の跋文に寬延三年庚午九月既望と書せり、蓋し梅園叢書は此年頃より書初めたるものにして其稿本の一端に書附けありし詞を開版の際に載せたるものなるべし。

九月十九日綾部絅齋歿　哭伯章先生の詩あり、仙臺侯醫官工藤安世祭有終先生文を作る。

寶曆元年辛未二十九歲

吉宗將軍薨去　上杉鷹山公生　祇園南海歿　熊本藩始めて學館を起し秋山玉山を儒官に任す　佛國百科全書成る

綾部妥胤先府君有終先生行狀を撰す。

寶曆二年壬申三十歲

大岡忠相刑律を定む　山縣周南歿　山本北山生　龜田鵬齋生　加賀騷動

始めて天地に條理あることを發明し條理學を唱ふ。

平安長堅有終綾部君碣銘を撰す。

米フランクリン電氣を發明す

寶暦三年癸酉三十一歲

伊藤維楨古義書院を建つ　頼春風生

玄語第一回の草を起す　賀來子登の采葑錄に題す
八月晦日垂綸子の著成る　伯母まんの子銅貞右衛門
高田より富永に移住す。

寶暦四年甲戌三十二歲

山脇尚德死屍を解剖す我國觀藏の嚆矢　エトナ山大噴火

賀來子登の克終和詠に跋す　九月朔日蝕、本年の頒暦
に日蝕記載なし、麻田剛立前年之を豫言せり、人皆信せ
ざりしが果して驗あり、先生嘆美して書を贈る、與綾正
菴書是れなり、時に剛立二十歲。

寶暦五年乙亥三十三歲

服部梅園歿　朝鮮大凶飢幕府一萬兩を贈る

八月八日より十四日に至る豐後跡考を草了す。
綾部惟勤歿

寶暦六年丙子三十四歲

本居太平生　頼杏坪生　歐、七年戰爭始

贅語の草を起す。　眼を患ふ。　年凶なり、父虎角居士自
ら先つ資を出し誠を推し邑里の故老大家に勸誘して
救恤の事に從はしむ、美風郡中に傳り之に倣ふもの多
し。　十二月慈悲無盡與行旨趣並約束を作る。

寶暦七年丁丑三十五歲

梁田蛻巖歿　大槻玄澤生　關東洪水
杉田玄白西洋外科術を唱ふ　英ピッツ

死生譚一卷及元煕論一卷を草す。　門人矢野雖愚の爲
に字說を作る。　嚴君老大人自書せる合本象戲經の後
に書す。

ト內閣成る　クライブ印度カルカッタを取る。

寶暦八年戊寅**三十六歳**

勤王論首唱者竹內式部捕はる　中井甃菴歿　柳里恭歿　松平定信生　市川寛齋生　豐後工藤三助九十八歳を以て歿す野津原三渠等水利を圖れるを以て聞へたり。

寶暦九年己卯**三十七歳**

平賀源內電氣學を唱ふ　服部南郭歿

中津藩國學者渡邊重名生

寶暦十年庚辰**三十八歳**

家重將軍隱居　家治將軍宣下

高軍八玄語を讀みて其謬れりと考ふる所を論じて方圓生克の二辨を貽り來る、先生復書して其厚意は謝すべきも其說には從ふ能はざることを述べたり。

冬父虎角居士馬より落ち暫時不例なりしが幾もなく快復せり。

復覺上人文に於て大に豐後の山水風景を論ず。四月杵築古川氏の子舛を妹りくの養婿とし先生の弟とす。安節と字す。父虎角居士祖先當地に移住してより一百十年に相當するを以て賀宴を開く。十二月五日父虎角居士病を發す。

敢語の草を起す。正月廿九日夜半父虎角居士歿す、享年七十五、遺著俳諧文珠水一卷、俳諧硯の海十卷あり。二月三日墓所を宅南の岡に卜す。三月先考三浦虎角居士行狀一卷成る。先人の墓に詣で拜すること日に三回、以て常となす、寒暑風雨を以て其數を缺かず、晝間事

寶曆十一年辛巳**三十九歲**

家重將軍薨去　井上蘭臺歿　山東京傳生

寶曆十二年壬午**四十歲**

後櫻町天皇即位　臟志著者山脇東洋死　倉成龍渚中津藤田敬所の門に入る　佛、ルソウ民約論を著す。

寶曆十三年癸未**四十一歲**

秋山玉山歿　柴山賣茶翁歿　本居春庭生　歐洲七年戰爭終る。

明和元年甲申**四十二歲**

東照宮百五十回忌勅會　火浣布發明　谷文晁生　五月十二日脇蘭室速見郡小浦に生る　中津前野良澤京都吉益東洞の門に入る。

明和二年乙酉**四十三歲**

故ありて果さゞることあれば深夜といへども必ず遂ぐ。

來浦鳥居の銘を作る妹りく產後嬰兒を殘して病死す。

三月晦日名字私議成る、先生の字安貞の貞字幕府公子の假名たるを以て之を用ふることを禁せらる、由て字の近きものを選で鼎とす、後公子卒したるを以て舊字に復せり。

敢語一卷完成す、起草以來閱年四、換稿亦四、冬身生餘譚の稿を起す。

彥山に登り、宰府を過ぎて泰賀上人を訪ふ。　正月身生餘譚の稿を換ふ。　十二月十二日天狗說を作る。　長男黃鶴生。

正月門人矢野雖愚三語の跋となさんと欲して圖翼引一篇を草す。

綾部元亮歿

寶曆三年玄語起草已來執筆十三年換稿十五回、此年に

中根東里歿　太田錦城生

至りて天地に合せざる所有ることを覺り盡く其舊稿を棄て新に第二回の草を起す。

明和三年丙戌四十四歳

永富獨嘯菴歿

正月二十日塾制を制定す。

明和四年丁亥四十五歳

杵築藩主寛量公隱居、在職廿九年、襄公嗣立時に年十六。勤王家山縣大貳死罪、藤井右門梟首、竹內式部流罪。大窪詩佛生　曲亭馬琴生　倉成龍渚京儒伊藤東所の門に遊ぶ。

病中の詩あり中に伏枕六句猶未起の句あり。霜月十一日塾制に追加す。冬十月敢語自序を作る。南至日門人弓﨑恕梅園三語の跋を作る。

明和五年戊子四十六歳

僧日隱寂　蒲生君平生　國學者大藏永常日田に生る、後濱松侯に聘せらる　露土戰爭始　キヤプテン、クック地球一周を始む。

玄語明和二年第二回新草以來稿を換ふること三回、茲に至りて稍安んずる所あり。

明和六年己丑四十七歳

前野良澤中津藩の醫員に列し、同藩士坂江鷗の示す蘭書の殘片を見て蘭學研修の志を立つ時に年四十七、青木昆陽より蘭語集及和蘭文學略考を授け

玄語再び舊稿を棄て新に第三回の草を起す。喬鳳諸と問答の書翰あり氣昇質降の儀を述ぶ。

らる　青木昆陽歿　加茂眞淵死　佐藤信淵生　英、ワット蒸汽機關發明

明和七年庚寅四十八歳

五月廿九日母矢野氏ふさ歿す享年八十。

脇蘭室七歳にして父を失ふ、父總左衞門は、杵築井上氏より養はれたるもの、前野良澤藩侯の許を得て長崎に遊學し吉雄楢林等に蘭學を問ふ、蘭語廿五字の發音と單語五百餘言とを學び人身内景圖說を得て歸る　清國文士沈德潛歿

明和八年辛卯四十九歳

綾部剛立藩主の侍臣に列す。

前野良澤三月四日江戸千住骨ヶ原刑場に杉田玄白中川淳菴と共に刑屍を解剖し去年長崎にて得たる人身内景圖說と比較研究す本邦醫學的解剖の嚆矢なり、次てタアヘル、アナトミアの譯讀會を開き良澤其盟主となる。　松崎謙堂生　英詩人グレイ歿

安永元年壬辰五十歳

秋日田に遊ぶ、日田奉寄敬所先生の詩あり。　十月淨圓律師に書を寄せ條理を論ず。

綾部剛立藩を脫して大坂に隱れ醫を業とし心を星學

吉益東洞歿　佐藤一齋生　波蘭分割始

安永二年癸巳　五十一歳

龜井昭陽生　伴信友生　清國四庫全書成る。

安永三年甲午　五十二歳

前野良澤等解體新書を公にす、明和八年より年を閱すること四、稿を換ふること十一、本邦洋書飜譯の嚆矢なり、吉雄幸作序文を書す。僧諦洲濱脇に生る

耶馬溪樋田隧道の開鑿者僧禪海寂

加賀千代歿　藤田幽谷生

安永四年乙未　五十三歳

清國にて本邦太宰純の校正せし古文孝經を飜刻す。

安永五年丙申　五十四歳

に潜む姪麻田を用ふ時に年三十八。十二月五日麻田剛立より剝獸に關する書翰を送來る、造物餘譚に收む。

三月朔日山脇東洋門人河野大學の婦人觀臟說を得たり造物餘譚に收む。四月七日塾制を修正す。梅園讀法一卷及價原一卷成る。孤鈴二卷成る、後更に整理して梅園詩集二卷となす。十一月敢語上木成る。

三月三日豐後清章敢語の後に題す。五日塾制に追加す。

三月十五日日出侯に謁し麻池酒を賜はる、詩あり。端午の日玄語八卷完成す、寶暦三年第一回起草巳來前後を通じて歷年二十三、舊稿全部を棄つること三回、稿本を換ふること二十三回に及べり。五月塾制を修正す。

秋日出に遊び喬文學を訪ふ。

四月平安の高葛陂に復書す。是より先き先生の友人長

池大雅殁　菊池五山生　平田篤胤生　青山延于生　式亭三馬生　北米合衆國獨立宣言

安永六年丁酉五十五歳

杵築藩主手野村の孝子貞平を褒與す。田能村竹田竹田に生る　十市石谷杵築に生る、石谷好で寫生を爲し古法を師として別に一家をなす其作萬里先生肖像及百蟲百花之圖最有名なり、竹田と友交深く、鐵翁推稱して眞の名家

後卿高葛陂の門に學び敢語を進めたり、葛陂之を讀で稱諭を加へ又奇品數種を送來る、先生感喜して復書す。存問に酬ひ兼て三語の由來を述べ條理を說き末文新井白石蝦夷志の著あるを聞き渴望久し所藏ならば一度涉獵を許されたき旨又玄語の上木を促されたるに答ふる言あり。斯くて先生が千古の知己と呼びたる高葛陂は此年八月を以て歿せり年五十三。八月丹の庭上座の將に歸らんとするや再會期し難きを悲み寓意三十二章を作り以て驪駒に代ふ。先生の舊師藤田敬所先生歿す。冬至後三日枕肱亭記を作り西肥大村妙宣寺衞上人に贈る。長野春日社神門の銘を作る。春日出番文學の爲に匏瓜室記を作る。成佛村天滿宮神門銘を作る。中井履軒より白石の蝦夷志を借覽し、書を以て疑を質す、履軒爲めに蝦夷辨を書して贈來る先生之を讀で痛快なりとす、蝦夷辨は歸山錄に收む。十一月賀來子登に復書す、中に於て杵築藩僧卓榮歎訴の事跡及中津藩僧禪海開險の狀を陳べたり。臘月二

なりとす、其子王洋亦書名あり。
倉成龍中津に歸り世子の侍讀となる。

安永七年戊戌五十六歲

帆足萬里生　貫名海屋生

安永八年己亥五十七歲

將軍家治の世子家基英邁にして衆望

日答多賀墨卿書あり。

正月十三日通語一卷を草す。五月手野村貞平行狀幷墓志記を作る。六月杵築藩の豪家荒卷氏の遺孤の爲に養生訓一卷を著す。七月子嗣之辨を作る。八月十三日より十月十三日まで長崎に旅行す、一行十二人男黃鶴亦從へり、往復共に大村妙宣寺に遊ぶ、長崎に在るもの二十三日、歸途唐津を經たり、旅行中の見聞錄として歸山錄二卷を作る。長崎滯在中小比賀伯鱗の家に寓す、伯鱗は讃岐の人、此年家を挈て長崎に來れるものなり。倉成善卿に復書す、中に於て中津藩新に獲たる日本史の梗概を示されたるを謝し又根來翁の藏書目錄を示されたることを謝し、何れも我が痼癖對症の良藥なれば他日機を得て借覽せんとの希望を陳べたり、根來翁は中津の長者にして多く奇書を藏せし人なり。淸人程赤城贅語の書目及題言を揮毫す。

謝吉雄耕牛惠西洋管窺鏡壽の詩あり。四月望、再答多賀墨卿書あり。秋來浦に遊び、峨嵋山を過て歸る。十

おいしが此年俄に卒す、世人之を惜む

櫻島大噴火　富士谷成章歿　平賀源内歿　清、十八省通志成る。

安永九年庚子五十八歲

光格天皇即位　賴山陽生

天明元年辛丑五十九歲

佐伯藩主毛利寬龍文庫を城中に築く藏書八萬に達す　脇蘭室歲晩漫錄を著す時年十八、篠崎小竹杵築に生る　獨逸文豪レッシング歿　天王星發見せらる。

一月櫻島火變之說を作る。

近有賤名聞邦君者、或以終南仕進之捷徑見戲、有感賦以解嘲の詩あり。　三月十八日城樓瞻眺應命の詩あり。　春日出に遊び喬鳳渚を訪ふ。　暮春三答多賀墨卿書あり。　杵城營廟碑銘成る。　四月望、大船禪師菡萏集首に題す。　六月梅園讀法に龍野草廬及今城周左衞門の說を附記す。　子蔵漫錄成る。

仲秋中井竹山綾部絅齋の家庭指南に跋を書す。

二月二十日より三月十五日に至る小倉中津に遊ぶ、此旅行中の詩集を春遊草といふ。　中津滯遊中人あり久留米侯先生を聘せんと欲する旨を傳ふ、先生詩を作りて其人に謝す。　小倉滯遊中小倉藩の一大夫先生を其君に薦めんと欲す、先生之を聞き詩を作り其志を述ぶ。又中津滯遊中藩の侍醫根來東麟に逢ひ其父東叔の作れる連骨圖及其說明書を示さる先生由て之を謄寫す、是れ當時驗屍の先驅たるを以てなり、後之を造物餘譚

天明二年壬寅**六十歲**

此年享保子年已來の饑饉　脇蘭室年十九伊勢參宮を爲し又芳野に遊ぶ　廣瀨淡窓生　會澤正志生　近松半二歿　群書類聚成る　天文臺を淺草に建つ。

天明三年癸卯**六十一歲**

日出藩儒原田東岳中津に歿す五十五歲　岡藩儒由學館教授角田九華生　谷口蕪村歿七十歲　曾我蕭白歿　蘭學階梯成る　淺間山噴火死傷三萬五千

天明四年甲辰**六十二歲**

の內に收む。　四月造物餘譚成り序文及奧記を書す。九月梅園拾葉の題言を書す。　小春の頃鐵漿訓一篇を作る、其女の人に嫁せしに與へたるものなり。　冬日出藩文學裔維嶽先生の著に係る詩轍の序文を作り淸八程赤城之を揮毫す。

男黃鶴中津に遊ぶ。　筑藩文學龜井南冥詩を贈る、先生亦詩を以て之に酬ゆ、時に南冥四十歲。　七月貞一先生集の序文を作る。　九月三日綾部伊承歿す行年六十二歲。　九月十八日日出藩文學喬鳳渚歿す先生二十年來の交友なりき。　十月賀來惟次の吾嬬紀行の後に題す。逸孟子を得たり。　小野春樹梅園拾葉の跋文を書す。

正月愉婉錄二卷成る　富永の神山淸右衛門六十二歲にして八十八歲の病父六兵衛に事へて至孝なり、赤貧にして此年凶作、米價未曾有の高價なり、先生同情して訴孝子の文を作り同志を募る。　七月寓意成る、安永五年の稿を增補し三十三章として上木す。　秋配寺島氏歿す。　秋安岐に遊ぶ。

春峨嵋山に上り千燈寺に遊ぶ、又杵築に客たり。　花朝

大飢饉　脇蘭室二十一歳肥後に遊學す　宇佐郡驛館村上田の人上田春莊（櫨育口傳試百ヶ條を公にす）生　伊勢貞丈歿　井上金峨歿　佐野政言田沼意次を斬る。

天明五年乙巳　六十三歳

杵築藩主恭秉公隱居、在職十九年　剛健公嗣立、時に三十二歳　安積艮齋生　麻田剛立の高弟高橋作右衛門生　萬國圖說及紅毛雜話成る。

天明六年丙午　六十四歳

家治將軍薨　大飢饉　露艦北海に出沒す　普王フレデリック大王歿

龍草廬詩轍の叙を作る、草廬七十歳。五月五月雨抄二巻成る。秋冬の交病む。秋中津の賀來子登歿、先生碑銘を撰す、子登は敬所の門人にして先生と交最深し著書三十餘部あり。安住養國禪寺之碑銘を撰す。朝來植田氏の感狀に鑑定狀を與ふ。

綾部有終先生の著家庭指南に序並批を作る。五月中田の一笑子と共に峨嵋山に遊び山寺に芭翁枯枝の句を石に刻み且峨眉山十四境を撰み、眉の山集一篇を作る。六月麻田剛立に書を寄せ著書に由りて其不世出の才を以て極めたる造詣を後世に傳ふべきことを勸む。八月先生が同調の士を以て許せし多賀墨卿歿す。詩轍の跋を作る　脇蘭室二十二歳來謁す、初逢子善の詩あり。植田氏感狀鑑定の後に大神氏に關する考證を附記す。

五月所要あり杵築に出づ藩主剛健公待つに大夫の禮を以てし十一日十二日及十四日の三回召見せらる、即ち奉謁邦君及び夏日謁君侯而還渥恩便賜馬の詩あり。八月奉送邦君入覲東營序を作る、治國の要道を說く懇

切なり。藩侯の内命により政務治術に關する意見書を奉る、侯嘉納して常に之を座右に備へらる、所謂丙午封事是れなり。答脇子善書あり條理を論ず。梅園詩集序文を作る。

達亭記及益亭記を作る。八月吉武莊助の問に答へ奉公の道二十ヶ條を述ぶ。贅語の自序を作る。詩轍五卷刻成る。

綾部有終先生の著家庭指南の刻成る。

天明七年丁未**六十五歳**

家齊將軍宣下　松平定信老中となる　上杉鷹山公の治績を賞す。田沼意次に致仕蟄居を命ず　俳人蓼太歿　香川景樹生　草場佩川生　中津藩國學者渡邊重名二十九歳本居宣長の門に入る翌年歸國す　脇蘭室二十四歳中井竹山の門に遊ぶ、從遊半藏、後三十三歳再遊し逸史の序を作る。海國兵談出づ　露土開戰　北米合衆國憲法制定

春杵築及安岐に遊ぶ。病示二子の詩あり。杵城遺事の序を作る。程赤城梅園詩集序を揮毫す。梅園詩集刻成る。

天明八年戊申**六十六歳**

八月宴を樂壽亭に賜ふ、亭は公の遊息し給ふ所なり、命

京都大火　皇居炎上　柴野栗山幕府の儒員となり昌平黌の敎官となる　國學者鶴峰戊申（シゲノブ）（號海西）臼杵に生る、後水戸侯に聘せらる。　瑞典露國開戰

寛政元年己酉六十七歳

紀元二四四九年　光格天皇十年　家齊將軍三年　明治維新前七十九年　明治四十五年より逆算百二十五年　松平定信をして內裏造營のことを總裁せしむ　脇蘭室小浦に在りて嬌風會を組織し趣意書を發表し會員を募る　梁川星巖生　草場佩川三歲　高橋作右衛門五歲　廣瀨淡窓八歲　篠崎小竹九歲　頼山陽十歲　帆足萬里貫名

に依りて其記を作り且亭中望む所に就て三十景を撰び新に命ずるに雅名を以てす、依て更に樂壽亭寓目三十景記を作り之を進む、爾後恩賚絕えず。　小串仙介白川侯の國本論を貽る、先生依て之を讀み書を寄せて所感を述ぶ。　梅園詩集の刻成る由りて其後に題す。　十一月手野村周平、佐野玄仙、小原爲次郎、兩子文平、海老屋壽助の五氏發起者となり玄語贅語上木の醵金を募る。病中歲暮の詩中に玄草青山垂白髮、壯心殘夜撥寒灰の句あり。

贅語十四卷完成す、寶曆六年起草より歷年三十四、換稿十五回。　春日雪田大中携鯉魚訪病戲示二子の詩あり。三月十四日辛未逝矣、享年六十七。　越へて十七日甲戌宅南先塋之兆に葬る、次で孺人と合す、遺命して私諡を用ひず。

寛政二年男黃鶴先府君學山先生行狀を撰す。

寛政五年男黃鶴玄龜墓碑を建つ、平安福井軏文を撰し、浪華篠崎應道之を書す。

海屋十二歳　田能村竹田十三歳　菊池五山平田篤胤十四歳　佐藤一齋十八歳　香川景樹二十歳　蒲生君平三十二歳　曲亭馬琴二十三歳　藤田幽谷　脇蘭室二十六歳　市川寛齋三十一歳　松平定信三十二歳　大槻玄澤三十三歳　賴杏坪三十四歳　龜田鵬齋山本北山三十八歳　上杉治憲三十九歳　古賀精里四十歳　太田南畝四十一歳　菅茶山僧六如介歳龍渚四十二歳　賴春水塙保己一四十四歳　尾藤二洲四十五歳　龜井南冥四十六歳伊能忠敬四十九歳　林子平五十二歳篠崎三島五十三歳　加藤千蔭五十五歳　皆川淇園柴野栗山五十六歳　中井履軒杉田玄白五十七歳　本居宣長中井竹山六十歳　細井平洲六十二歳小野蘭山六十三歳　前野良澤六十七歳　龍野草廬七十五歳　佛國革命始和聖東大統領となる　明年異學の禁令を布く　中津藩進修館を建つ　明後年高山彦九郎蘭室を小浦に訪ふ。

梅園先生著述年表

藤井專隨 編

元文四年己未十七歲　獨嘯集に收むる詩此年の作より始まる。

寛保三年癸亥二十一歲　獨嘯集成る。天球儀を作る。

延享元年甲子二十二歲　梅園詩集に收むる詩此年の作より始まる。

寛延三年庚午二十八歲　東遊草を作る。梅園叢書此頃より書初めたるもの丶如し。

寶曆二年壬申三十歲　條理學を唱ふ。

寶曆三年癸酉三十一歲　垂綸子一卷を作る。玄語第一回起草。

寶曆五年乙亥三十三歲　豐後跡考一卷を作る。

寶曆六年丙子三十四歲　贅語の草稿を起す。慈悲無盡興行旨趣幷約束を作る。

寶曆七年丁丑三十五歲　死生譚一卷及元熈論一卷を草す。

寶曆十年庚辰三十八歲　敢語の草稿を起す。先考三浦虎角居士行狀一卷成る。

寶曆十二年壬午四十歲　名字私議一卷を作る。

寶曆十三年癸未四十一歲　敢語一卷成る。身生餘譚の草を起す

明和元年甲申四十二歲　身生餘譚の稿を改む。

明和二年乙酉四十三歲　寶曆三年玄語起草以來執筆十三年換稿十五回玆に至りて天地に合せざる所あることを悟り盡く舊稿を棄て第二回の草稿を起す。

明和三年丙戌四十四歲　塾制を制定す。

明和四年丁亥四十五歳　敢語自序成る。塾制追加。

明和六年己丑四十七歳　玄語第三回新起草。

安永二年癸巳五十一歳　敢語の上木成る。價原一卷梅園讀法一卷及孤節二卷成る。塾制を修正す。

安永三年甲午五十二歳　塾制追加。

安永四年乙未五十三歳　玄語八卷完成す、寶暦三年第一回起草以來歷年二十三、舊稿全部を棄ること三回、稿本を書換ふること二十三回に及べり。塾制を修正す。

安永五年丙申五十四歳　枕肱亭記を作る。高伯起に復す。寓意一卷を草す。

安永六年丁酉五十五歳　匏瓜室記を作る。答多賀墨卿書を作る。

安永七年戊戌五十六歳　通語一卷を草す。養生訓一卷を著す。歸山錄二卷を作る。

安永八年己亥五十七歳　謝吉雄耕牛惠西洋管窺鏡壽の詩を作る。再び多賀墨卿に答ふ。櫻島火災の說を作る。

安永九年庚子五十八歳　城樓瞻眺應命の詩を作る。三たび多賀墨卿に答ふ。杵城菅廟碑文成る。子歳漫錄一卷を作る。

天明元年辛丑五十九歳　春遊草一卷、鐵槳訓一篇、造物餘譚一卷を作る。梅園拾葉題言成る。

天明二年壬寅六十歳　貞一先生集に序す。

天明三年癸卯六十一歳　愉婉錄二卷成る。寓意を增補し上木す。

天明四年甲辰六十二歳　五月雨抄一卷を作る。安住養國禪寺碑銘成る。

天明五年乙巳六十三歳　家庭指南の序及批成る。

詩轍の跋を作る。峨嵋山十四境を撰み、肩の山集一篇を作る。

天明六年丙午六十四歳　贅語の自序を作る。達亭記及益亭記を作る。梅園詩集の序を作る。奉諷邦君の詩あり。藩主に丙午封事一卷を奉る。奉公の道一篇を作る。詩轍五卷刻成る。

天明七年丁未六十五歳　杵城遺事の序を作る。梅園詩集二卷刻成る。

天明八年戊申六十六歳　樂壽亭記を作る。

寛政元年己酉六十七歳　贅語十四卷完成す、寶暦六年起草より閲年三十四、換稿十五回。

先府君學山先生行狀

先君子、諱晉、字安貞、後避　邦君之諱改貞作鼎、姓三浦、其先相州三浦人也、正治中有三浦某、某者兄弟三人、避地于豐後國東郡、薙髮曰法道法行法念、法道無後、法念居小箇倉稱清原氏、法行居丸小野因氏焉、爾來世次不詳、後有丸小野大和守、戰死于苑狹云、又有丸小野將監者、始移富永村、其子兵部、諱某、生十郎義秀、義秀生彥兵衞、諱某、大友氏時爲里正、統正十二邑、彥兵衞生孫左衞門、諱某、繼爲里正、棄丸小野氏復三浦、孫左衞門弟清兵衞義清、於君爲曾祖、義清娶秋吉氏生與四郎義房、義房晚節薙髮號泉石翁徹山、業醫、亦娶秋吉氏生考諱義一、字快順、號野梅堂虎角、妣矢野氏、享保八年癸卯秋八月二日、先君子生于富永村、幼而穎敏、甫八歲、家藏近江八景圖屛風、君指夜雨圖問其父曰、是何圖、父曰、點炬火着蓑衣知其夜而雨也、君曰、目之所寓曰景、暗黑之中豈可覘望哉、屬之于情則可、屬之于景則不可、人奇之、既而志于學、寒鄉無師友、且家貧不得買書、稗官雜史隨得讀之、距家里許有一刹、藏字彙、每遇難字記之、積至數十字就而撿之、一月數次、及稍屬詩、家唯藏周伯弼氏三體詩一部、因讀之、造語數千言、戊午之春、君年十六、始造于藩謁綾部有終先生、先生藩之監郡、吾　先君龍溪公、待以文學、嘗受業於室鳩巢、旁學於伊藤東涯服南郭、君因得與聞其說、明年己未、君年十七、豐前中津藩文學藤田貞一先生、召君、於是遊中津、先生愛其才、欲令紹其職、父母以其一子不許、無幾而還家、才藻日進、然而童丱大抱疑于天地造化、思之不得、數至於廢寢食、年二十餘、稍稍讀天學之書、仰觀俯察、自製其器、摸其象、以知運轉之大意、大意雖可知非其所疑、年三十、始知天地有條理、其立意云、天地者氣物也、氣即一氣、物即大物、大物之外無一氣、一氣之外無大物、從其

所探得其物、故探陰陽得一二、探氣物得天地、天地有沒露之境、探盡沒露之境而知天地、陰陽有天神之境、探盡天神之境而知陰陽、不知陰陽不能知天地、不知天地不能知陰陽也、地占不可破之中、天占不可窮之外、各至其玄界而止矣、夫地半面晝半面夜半面裘半面葛、洪洪天地莫往而不反其跡、故條貫理折之道無所不有、於是從筆研草玄語十餘萬言、片言隻句不依古人之樣、自言、我豈忌古人哉、古人未論條理、以其無可襲也、重作贅語、頗與世論辨酬醋、又論堯舜周孔之道著敢語、皆折衷以條理、合爲梅園三語、起草在寶曆癸酉、換稿十五、至明和乙酉覺於天地有不合、盡棄其舊稿、新起草、閱年四、至同戊子三換稿、居一年又棄其舊稿起草、踰六年至安永乙未換稿五、通前後歷年二十三、換稿亦二十三、四冊七本並例旨八、贅語、寶曆丙子迄于寬政改元、歷年三十四、換稿十五、敢語、則以寶曆庚辰起草、至同癸未閱年四、換稿亦四、安永四年上之於木、嘗曰、既有玄故謂之贅、雖然既有天地玄亦贅也已矣、嘗慕陶弘景韓康伯之爲人、年二十五、玖珠侯辟之、謝曰朝飲孖溪水、夕臥孖山雲、於晉乎足矣、天明壬寅君遊于豐前、有人傳曰、久留米侯欲聘子、二其釋褐、君作詩謝其人曰、樵蹊不與世間通、高臥東山異謝公、古得烟霞吾已老、清風鶴唳白雲中、又某藩之一大夫有薦君於其君者、君聞之作詩述其志曰、擲金投大鑪、不問復如何、輕裘綏帶春風中、昇平久浴堯恩波、人間三島滿架書、階前豐草絕掃除、縣吏爲我取直廉、爲我安眠護我廬、君不見富春山中遁榮者、羊裘聞釣大澤魚、釣臺幸有伸足地、焉載人禍上人車、終不仕、嘗有題卞和詩曰、石裏清光天子珍、誰知十二照車輪、如何不待連城價、空示尋常琢玉人、又題諸葛武侯曰、梁父吟成還自閒、中原金鼓亂紛紛、誤爲先主窺龍氣、不得天間不起雲、高尚自得之風可見、資性淳正、望之儼然、就之溫然、未嘗疾言、未嘗怒罵、未嘗見急遽噪擾之色、一日與僧譚、適迅雷震于庭樹、僧愕然改容、君從容謂曰、師亦喫一驚邪、僧有

愧色、於讀書著述之業、汲汲孳孳、獨以繼晷、然對客譚、無少厭怠之色、或誨門人小子、諄諄不倦、雖頗有氣節、未嘗與人忤、然當義之所關岸然不可移、當可諫而諫、直言面爭雖權貴無所顧避、接人必以誠、人有過、提撕誘掖、辨析義理、厭其意而止、及既改之不保其舊惡、雖識容一世而謙冲自持、未嘗以其長加人也、敎育門人弟子、各隨其所長適其所好、曰、人心之好尚不同如面、羊棗膾炙焉强人於一律、故至自家之見非染指者不强傳之、又不爲矯激駭異之行、近世儒士倣漢典者、動用肉祭、君則否矣曰、本邦之風自天子至庶人無肉祭之禮、居其國宜從其禮服父母之喪也、曰、吾　先王之禮、絕于期、吾從此也、其爲文意至筆從、專主達意、少年嘗聊爲世所謂古文辭者、後知其非棄之醇如也、其作詩亦猶作文曰、唐人之妙境我不能、門人之優孟我不欲也、嘗謂子弟曰、我於勢利澹如、故詩中無烟火之氣、爾曹以爲如何、人有請其書者、多書知恥二字與之、又嘗曰、人宜知分、富貴患難行其所素可也、彼昬不知處乙糞甲、得隴望蜀、歆艷朶頤、終至兄弟鬩牆夫妻反目、職是之由、可不愼歟、又曰、莫賤於乞、莫辱於偸、莫暴於奪、莫慘於殺、乞而不輟必偸、偸而不輟必奪、奪而不輟必殺、殺奪之原皆肇于乞矣、乞兒不齒于人、以乞也、是以君生涯不爲乞物於人、在家也黎明則起、盥漱既畢先拜考妣及祖先之神主而後就事、坐臥飮食未嘗廢卷、所到必攜、先人之墓在舍南數百步在壯歲詣拜日三、老年日二、以爲常、不以寒暑風雨缺其數、脫晝間有事故不果雖深夜必遂事、死如此、事生可知、節儉自收、衣服器械居處飮食無所偏好、有贏餘必施之於窮乏者、門人或貧困資用不能自給者、雖蔬糲必俱共、人有來訪者、知與不知必供食、不必盛饌、歲除必送窮民米鹽、每歲爲例、嘗爲救窮募里中、每家出錢若米粟不問多少、君爲掌之、豐歲加其息、歉歲以賑給、其施之也始于最窮者、以漸及稍窮者、不論嘗所出之多少、故凶年飢歲村民由是存活者頗多矣、君在孩童、府君野梅翁誨之曰、人宜以慈愛爲心、

而慈愛以勤儉爲本、雖勤不儉不足、雖儉不勤不足、勤儉相得慈愛之志立焉、志既立則其事可行也、君節用好施、蓋有資其庭誨之薰聒云、又能走人急濟人難、往年吾支封之民十數村、連合騷擾、將入城、府君要諸塗解說、事終平矣、又某邑之神職數十人與寺僧訟、八村連騷、邑長縣吏居間者不少、終不和、君又解說使平、凡隣伍有口舌不平之事、君爲解說、莫不服從、孝子順孫節婦忠奴湮沒無識者、君爲稱揚焉、或告之於官以得褒賜、或募之鄉邑以求救助、又自饋米鹽、日月相給以使終孝養、其佗至閭閻子弟、有小善褒之、有小不善誡之、故人憚其嚴懷其惠、無賴之徒見君者、莫不革面感德之甚者、至合掌禮拜謝之、天明癸卯　邦君新襲封、欲召君見之憫其勞筋骨待杖藜出山、君聞之曰、以虛譽受賓禮非吾志也、削迹城市幾周朞、明年五月有不得已者至城府、　邦君待以大夫之禮、乙夜辭階、近臣執燭前導、其還山也給以廐馬、且曰、我欲以轎送女、聞其病注、是以命馬、天明戊申八月賜宴於壽樂亭、亭者　公遊息之所也、命作其記、且就亭中所望撰三十景、新命以雅名、仍更作樂壽亭寓目三十景記進之、爾後恩賚不絕、　邦君所賜詩中有云、相贈春色白雲長、其眷遇如此、每進必譚及國務、君雖業醫非素願、不背其祖業已矣、嘗稱無事齋主人、又稱二子山人、又號攣山、園中有梅樹因又號梅園處士、其所居曰東溪、故人呼曰東川先生、自稱曰東川居士、後改爲洞仙、所著三語之外、詩轍、寓意、梅園詩集、既行于世、愉婉錄、價原、梅園讀法、梅園文稿、梅園拾葉、同後拾葉、名字私議、五月雨抄、養生訓、歸山錄、若多賀墨卿書、既成藏于家、其佗雖有所著皆屬未成、所著書循環改修未嘗停手、五十年猶一日、生涯抄書積充一篋、君韜晦光彩不求聞達于四方、然負笈來學者日月不絕、初娶西氏、又娶渡邊氏、有故皆去、後娶寺島氏、先沒、男二人、黃鶴字修齡、玄龜字大年、黃鶴奉祀、女三人、長女夭、次嫁永松氏、次嫁安東氏、屬纊之前日病革、召家人及門生一一訣辭畢曰、使我手正、使我足正、使

我首正嚮南、凡使我四體莫不正、脫其故衣加新衣、而後命不肖黃鶴改 其著書、至夜半不復言、東方將明溘焉逝矣、實寬政改元己酉三月十四日辛未也、壽六十七、越十七日甲戌、葬宅南先塋之兆、次與孺人合、遺命不用私謚、明年庚戌六月孝子黃鶴謹狀、

學山先生墓

三浦氏主器曰、修齡奉其父書、與其所輯善狀、因介來請曰、先子沒既五年、未能得君子之言而表其墓。願賜一言。不惟不肖孤、先子亦感恩于九泉、予雖未識先生、已聞其賢而文矣、因考其狀、則賢於所嘗聞、及看其書。則又賢於其所狀、益知先生之賢而文、其狀之不誣、既賢之。則焉得不記其德。乃叙其故曰、先生姓三浦、諱晋、字安貞、後改貞鼎、號巒山、其先相州三浦人。正治中。避地豐後、改姓丸小野。後復本姓、曾祖義淸、祖義房、考義一、妣矢野氏、先生幼奇警、甫毀齒、視淡海八景圖、問其翁曰、服襏襫、把炬是何圖、曰唐崎夜雨也、先生曰、目之所瞙曰景、夜暗雨降、眼光何及、屬之情致、則可。列之眺望。則不可。人皆異之、十餘歲讀書能辨章句。始學于綾部有終。進道于藤田貞一。欲窮天地之所以覆載。思之不得、忘寢食而探討、泉涌木榮、遂達其奥、自省曰、天地唯是一氣物也、氣外無物、物外無氣。一條妙理。貫徹宇宙、玄界無際、神化無測也、自之志益堅、學益進、著玄語十餘萬言、論陰陽消長之度、氣物融化之道、又著贅語、盡其餘蘊、自謂。二語未及性命之理、乃爲敢語、以述先聖之道。謂之梅園三語、其他著述十有餘種、矻編摩窮年半百、敢語及詩轍、寓意梅園詩集、既行于世矣、天資淳靜。未嘗疾言遽色。不怒罵人。謙冲而有節、涯雖韜光。而令聞遠、從遊充戶履籍、然其開斷後學。各因性之所近而誘之、屬文古簡、詩亦淸雅、有請書者。與知恥二字、蓋警焉、嘗曰、君子順其所素而已。何必朶頤於不可求、是以一生未嘗乞物於人。先塋在舍南數百步、拜謁日三、至老不廢、自奉節儉、有贏必施、又醵米錢、歛出貸、年入息、因是免飢寒者多。鄉神祠與祠僧爭結黨相仇、縣吏不能制、先生諸侯累辟皆辭。　藩后新立。欲見先生、而憚勞之待其入都、先生聞之曰、無故而受寵、非吾志也。不出山殆朞、後有不得已而竊出。

后聞。即召見路寢。禮待優渥。給鞍馬送其還。自是每見輙訪政事。眷遇愈厚。恩賚甚重。嘗宴別墅。命作其記。至賜詩曰相贈春色白雲長先生雖臥邱壑。以箕裘故。垂手而翳人。盖述其先志而已。若又使獻力以翳國。必有可見者矣。嘗有詩曰樵蹊不與世間通。高臥東山異謝公。占得烟霞吾已老。晴風鶴唳白雲中。足見胸次。後園有梅因又號梅園處士。初娶西氏。後娶寺島氏。皆先歿。二男。長黃鶴。字修齡。次玄龜。字大年。三女。長夭。次嫁永松氏。季嫁安東氏。寬政元年三月十四日終。年六十七。葬于先塋側。寺島氏合焉。先生夙修先聖之道。而達天地之理。先躬行而蓄經國。然不得施之於當世。乃寓之書。以俟知己於後世。浩浩乎綽綽乎。與彼之文華技術之雄。騁衒於一時者。相去遠矣。嗚呼如先生則不庶幾乎爲君子之儒。銘曰。

識之卓也。學又博也。道貫三才。其言確也。德則孔尊。天之爵也。肥遯自優。於亦樂也。所存者大。所傳遐也。後嗣世濟美。永護安宅也。

寬政癸丑季秋平安福井軏謹撰

浪華篠應道謹書

男黃鶴玄龜謹立

梅園全集凡例

一、本全集編纂の趣意は三浦梅園先生の遺著を集成して一部單行の書となし以て汎く世の先生の學術言行を講究せんと欲する人の便益を圖り世道人心に裨益し學術界及教育界に貢獻せんことを期するにあり故に其の成書たると稿本たるとを問はず總べて之を網羅せしのみならず斷簡零墨と雖も苟も確實なるものは得るに從て悉く之を拾收せり

一、編次の體裁は漢文たると和文たるとを問はず成るべく種類を同じうする書を同所に纏めんことを期したれども其内容多方面に亘るものは便宜其次第を定めたるものあり

一、本全集收むる所の書目は三十四種なり編纂終了前此の書目を新聞紙上に掲げて此他に遺篇あることを知り若くは所藏する人あらば通知せられんことを江湖に向て需めたれども終に何等得る所のものなかりき。

一、慶長以來諸家著述目錄には梅園の著述として敎證及五靈集の目あり又樂壽亭寓目三十景之記と稱するものあるを諸書に散見せり又西州遺事といへる書名先生の書翰中に見えたるを以て種々に探討したれども遂に發見する能はざりしは遺憾なり。

一、刊本ある書は刊本に據り刊本なき書は概ね數冊の傳寫本に據りて校正せり寫本の誤謬は最明確にして何等の疑義なきものゝ外妄りに訂正を加へず聊かたりとも疑はしき者は悉く原文を存せり句讀訓點の有無多くは原本の舊に從ひ必しも體裁の一致を求めず

一、垂綸子元熈論死生譚身生譚の諸篇は未だ成稿とは認め難し原本修訂糾紛加筆糢糊とし

て字體辨じ難きもの多く加ふるに蠹魚の跋扈を以てす判讀に苦むもの毎頁數箇所に及べり其最困難なるものは妄りに編纂者の想像を恣にせず寧ろ文字を缺きて讀者の隨意挿入に任せしもの少からず。

一、丙午封事は三浦孫六氏所藏の寫本に依り梅園後拾葉及愉愧録は永松壯三郎氏所藏の寫本に依り其他は多く三浦榮次郎氏所藏の自筆本若くは傳寫本に依る梅園拾英梅園詩稿梅園文集梅園書翰集の四種は元來の成本にあらず全集編纂者の集成にして便宜命名せしものなり。

一、書翰の搜索には頗る苦心したれども拾收僅に七十餘通に過ぎざりしは遺憾なり其中最も多數の書翰を所藏せられたるは左の諸氏なり

莊野源六氏（十八通）、河野登氏（十一通）、中野豐氏（八通）、永松莊三郎氏（七通）、中島穆氏（六通）、清原道彥氏（三通）、

一、附錄二十二種多くは師友後進の述作に係り一は以て先生學術の淵源を原ね一は以て先生造詣の側面を照し本文と相待て先生風格の全面を講究するの便に供せんが爲に收錄せし所のものなり最後に梅園先生逸話集の一篇は全集編纂者が先生に關して先輩故老より聞きし所のものを存錄せしものにして庶幾くば又偉人の一側面を窺ふに足らむ乎

一、卷首に先生の肖像遺墨遺品等の寫眞並に先生の行狀碑文年譜及著述年表を置きたるは本全集を涉獵玩味する人の對照に資せんが爲なり年譜と著述年表とは全集編纂者の起稿に係る考證未だ悉さゞるもの多きを自覺す卷末逸話集と共に大方諸賢の叱正を待つ。

一、重光直愿三浦喜十二加藤依永の諸氏を始め地方多數の有志先輩は資料の搜索蒐集に奔走盡力せられ又杵築中學校生徒は各〻自家及親戚知人の所藏に係る先生の遺著書幅書翰等を運びて奔命を樂みたるもの多數にして編纂上多大の便益を得たり玆に之を明記して謝意を表す。

編纂者識す

梅園全集上卷

凡例

一、此卷には玄語八卷、贅語十四卷、敢語一卷、通語一卷、寓意一卷、垂綸子一卷、元煕論一卷、死生譚一卷、造物餘譚一卷、身生餘譚一卷、丙午封事一卷、價原一卷、豐後跡考一卷、五月雨抄二卷、東遊草一卷、歸山錄二卷、名字私議一卷、先考三浦虎角居士行狀一卷、都べて十八種、四十卷を收む。

一、玄語。先生夙に疑を天地造化に懷き寢食を忘れて探討研鑽せし結果、年三十にして始めて天地に條理あることを發明せり。其立論の要旨に曰く、天地は唯是れ一氣物なり、氣の外に物なく物の外に氣なし、一條の妙理宇宙を貫徹す、玄界際なく神化測ることなしと、是に於て玄語十有餘萬言を著し以て陰陽消長の度、氣物融化の道を論せり。寶曆三年三十一歲の時肇めて草を起せしより安永四年五十三歲完成に至るまで年を歷ること二十三、稿を換ること亦二十三、全く草を新にすること三回。四冊七本並例旨全八本二十八篇十有餘萬言、圖一百七十二。

一、贅語。玄語は唯之を天地に求めて古を援くに及ばざりしが、贅語は博く古今を援引して以て其說を悉せり、故に自ら謙して名くるに贅を以てす、蓋し本領は玄語に在り、贅語は其細目に入れるなり、玄語は天地を說き贅語は天人を說く、玄語は條理の根本を說き贅語は條理に依りて古今を論じ以て玄語の餘蘊を悉せしなり。寶曆六年三十四歲より寬政元年六十七歲即先生の歿年に至るまで年を歷ること三十四、稿を換ること十五、全六帙十四

冊七十篇十四萬言。當時門弟有志者醵金を募集し玄贅二語の刊行を企圖せしも先生の生前上木せしは僅に一部分に過ざりき、安永七年先生五十六歳の時淸人程赤城題字を揮毫し後八年天明六年即先生の歿する三年前に自序を書せり、此時第一帙諸家の篇始めて刊行せられしもの丶如し。其他陰陽帙上一冊、身生帙上之本一冊は僅に殘缺の刊本を發見したれども上木の年時詳ならず、善惡帙二卷は文政十二年十二月上梓、天人帙二卷は天保二年八月上梓せり、此四卷は今猶坊間に刊本を得ること困難ならず、先生の學說が多少世に知られたるは此四卷の刊行に依れるもの多きが如し。

一、敢語。玄贅二語は論じて未だ性命の理に及ばず、乃ち敢語を作り古今德を積み仁を行ひ國家を治むる大經を說き以て彝倫を講明せり。人の言ふを憚る所のものを敢言せしよ り敢語と名く、元是れ玄贅二語の餘論と稱すれども其の直接名敎に補あるものは敢語なり、當時の儒流漢學心醉の結果放伐を賛して聖道となし動もすれば我邦立國の大本を忘れんとするもの少からざりし時に於て先生敢然として惑はず大義名分を明にし忠孝を以て立國の大道となせし如きは名敎を維持する千古不磨の卓見と謂ふべし。玄贅敢之を梅園三語といふ先生學問の本領玆にあり、門人之を名げて條理學といふ。敢語は寶曆十年三十八歲より同十二年四十歲に至る年を歷ること四、稿を換ふること亦四。明和四年四十五歲の時自序を作る。門人矢野雖愚三語に跋せんとして才に稿を起して歿せり、友人弓崎恕之を悲み朱墨糢糊の間に拾て其志を成す、明和丁亥甫至日弓崎恕の跋文は即是れなり。安永二年五十一歲の時上木す。

一、通語。　安永七年五十六歳正月十八日に草せし未定稿なり、天人、爵德、立準、古處の四篇を收む、和漢風俗の別を論じ大義名分の觀念を闡明する所漢學心醉者頂門の一針なり。　爵德立準の二篇は贅語善惡帙中同名の篇と內容粗同じけれども辭句の異るもの少からず、彼此對照して發明する所あり故に之を存す。

一、寓意。　天明三年六十一歳の秋七月成る。　安永五年に成りたる稿本の小引には丹の庭上座の歸らんとする時、別を惜みて寓意三十二章を作りて驪駒に代らる旨を記せりといふ。今は天明三年の刻本に依る、小引には世の攻擊に答ふるの意を洩し、且つ獵者舍其弧矢の一章を加へて三十三章とす。

一、垂綸子。　寶曆三年三十一歳の秋八月晦日後序を書す、蓋し玄語起草前先づ其胸中自得せるものゝ大要を略述せしものにして條理學初期の梗概ともいふべきものなり。

一、元熈論。　著作年月詳ならざれども死生譚と相前後して成れるものなるべし、未定稿なり、內容は三語中所論の一班を平易なる和文にて示したるものなり。

一、死生譚。　寶曆七年三十五歳の夏成れる未定稿なり、一客來て談偶、死生の故に及びたるを機とし已に玄贅二語に說きたる死生問題を平易なる和文を以て說破し兼て問遊の人に示したるものなり。

一、造物餘譚。　天明元年五十九歳の四月序文を作る。　收むる所五篇、其一は根來東叔の連骨圖及說明書にして是れ當時檢屍の先驅なり。　其二は栗山献臣其師山脇東洋に呈して婦人の內景を說ける書なり。　其三は麻田剛立の剩獸狀。　其四は河野大學の婦人觀臟說。

其五は間說と題して動植生理に關する隨筆なり。

一、身生餘譚。寶歷十三年四十一歲の冬草を起し翌年正月稿を換へたる未定稿なり。本書は又一に病機管見と稱す。古今醫學上の謬說を提示して之を打破し、條理に求め實驗に照して自家の所見を述ぶ、內容は贅語身生帙の所說と粗同じきものあれども辭句の異るもの少からず彼我對照して發明する所あり故に之を存す。

一、丙午封事。天明六年丙午六十四歲の五月藩主剛健院親賢公の優招に依り謁見せし際內命を受け政務治術に關する意見を述べたるもの即是れなり親賢公深く之を珍重し終生机上を下されざりしといふ。

一、價原。金銀は貿易賣買の媒介物に過ぎず眞の財寶は自然界より產出するものなれば宜しく富源を開發すべきを論じ且つ惡貨良貨を驅逐すべきを說く藩士上田養伯の問に答へたる一篇の經濟論なり、安永二年五十一歲の四月序文を作る。

一、豐後跡考。前半は大友氏の系圖及逸史にして後半は豐後の社寺城邑山水原野氏姓樂曲紋章習俗物產等七十餘種の名稱に就き史跡及傳說を記載せるものなり寶曆五年三十三歲の時八月八日より十四日までに草了せしものなり。

一、五月雨抄。永祿十一年信長ウルガンバテレンを延見せしより寶永十五年島原亂平定に至るまで七十餘年間切支丹の流せる害毒を說き、聖人の道は義を以て我身の苦樂に代へざる旨を說けり。天明四年六十二歲の五月序文を作る。

一、東遊草。寬延三年二十八歲伊勢參宮の紀行なり、二月十一日發程、往路陸行、山口に大內陶

の古を懷ひ、播州書寫山に上りて一の谷福原を吊し、上巳の佳節を大阪に過し、奈良を見物し、千早城を望で楠公の昔を忍び、三月八日兩宮に參拜し、琵琶湖を渡りて八景を賞し、比叡山に上り、京都の名勝を歷訪し、伏見より舟行大坂に出で、大坂を見物して、歸途船行、金比羅に詣で、今在家に上陸して三月二十三日歸山す。

一、歸山錄。　安永七年五十六歲八月十三日より十月十三日に至る長崎再遊旅行中の見聞所感等を歸山の後記錄したるものなり。　滯遊中通詞吉雄耕牛松村君紀の二氏に交を結び天文地學に關する新說を叩き、和蘭陀文學を學び、又天象圖、寒暖計、望遠鏡、天球儀、地球儀、羅針盤等を目擊して幾多の新知識を得たること、其他宗教、禁書、醫藥、風俗、蝦夷、呂宋等に關する記事及諸學說に對する意見等の記事あり。

一、名字私議。　字安貞の貞字幕府公子の假名たるに由り令ありて禁ず、由て字の近きものを選て安鼎と改めたる時の作なり、後公子卒したるを以て舊字に復せり、寶曆十二年四十歲の三月晦日成る。

一、先考三浦虎角居士行狀。　三浦家の家譜及父君の小傳なり、寶曆十年三十八歲の作。

梅園全集上卷目次

卷首

本文

上卷

目次終

玄語總目錄

玄語

日本　鎮西　三浦晉安貞　著

例旨

○蔽必由明。塞必由通。一一之態。不得不然。蓋人之爲生。必染於所習。染於所習。則失其所素。是以。俗習之蔽。學爲之砭鍼。學習之蔽。殆擲藥石。染之也易。素之也難。蔽之也易。復之也難。夫因循薰蒸之久。猶臭人之不臭其臭。屠人之不羶其羶。數髮簡毛。非說之不精微。超天越地。非敎之不廣大。惟各德其所得而有。道其所由而行。拾珠而遺玉。惡珷玞而棄瓊瑤。異同紛紜。一護一訐。各據其門。各守其戶。區域相畫。是非互殊。於是乎。或相睨視。或相仇讐。學習之所以蔽人之聰明。病人之才力也。善惡之擇。是非之折。自非聖人。則弗能無得失矣。擇而不精。將以紫亂朱。惡而不學。將以瞽忌相。學而弗黨。思而弗偏。獲則而履焉。斯道也。我知其弗可及。而以射之拙。廢鵠乎。

晉自垂髫。所觸總疑。解者咻耳。夢寐之語難徵。思念塞胸。無權之衡作偏。人之言曰。火陽也。故熱。水陰也。故寒。晉則以爲陽者奚爲熱。陰者奚爲寒。人之言曰。陽輕而升。陰重而降。人之思也。至此而止。晉之疑也。於是已甚。隆然烏者。何爲視。遂乎谷者。何爲聽。目何爲弗聽。耳何爲弗視。人則至是而釋。晉則不能釋。不得已之所得而有而有之者。非之不由己之所由而行而行之者。外之人則於是能斷。晉則惑焉。人聞諸古。得諸書。便言焉。晉則未能全信於天地也。荒唐散漫而說。於死生也。恍惚曖昧而言。取驗於僻。懸舌於空。人則不介於意。晉則不能懌然。反覆思之。沈潛繹之。似有小窺於俯仰之間。竟不自量。此有斯述。蓋斯述由一一之條理。以取則於天地。則不敢

與古計校。造語有由己。一氣。陰陽也。大物。
天地也。世曰方圓。此曰直圓。世曰日月。此
曰日影。或其命名也新。或其取義也殊。惟
求與天地合。而不暇顧定說。惟冀人之不
病於所習。以活於所向。而是非之以天地。
取捨之以天地。弗護門戶。畫區域。禦他賢
哲。而外此亦子矣。儻語此讀者。專證于舊
見聞。專據于古訓詁。則晉之獲罪。亦將多
焉。

○其書四冊。曰本宗。曰天冊曰地冊。曰小冊。
本宗惟一冊。而他之三冊。各分兩兩本宗
則語鬱浡之神。混淪之物。然而物之所若
立。則以神之若活也。神之所若活。則以物
之若立也。立者露物。活者沒物。沒爲天露
爲地。天冊則其鬱浡。故鬱浡活者。擧繫此。
地冊則其混淪。故混淪立者。擧繫此。雖條
理粲然相判。而說沒入露。說露入沒者。混
成沒鑄縫也。含則開焉。開則含焉。故鬱浡

之神。混淪之物。已開於一焉。神開天地。陰
陽絪縕。故大廼能容小。小廼能居大。大廼
能給。小廼能資。自小觀大。則容者居者。各
自張勢。自小觀佗。則佗則大焉。大能統小。
小能散大。大者不可窮。小者不可盡。夫人
者。萬物中之一物也。心者。衆神中之一神
也。我遂開其境。則鬱浡混淪。皆給我境。故
以人統小。擧我措佗。是之爲小冊。於是乎。
本宗包天地之兩冊。爲我爲大冊。大無所
不給。小無所不資。故小冊。以活者。爲人部。
以立者。爲物部。物部者分別大小者。便我
地冊也。人部者。分別天人者。便我天冊也。
天地則一宇宙。語宇宙之經通。則序有先後、
語宇之緯塞。則言無先後。故天冊、分部於
活立、地冊分部於沒露。天冊、其一廼活部、
天與神也、其一廼立部。神與本也。地冊、其
一廼沒部、說通塞、其一廼露部。說覆載。小
冊。物露人沒者。以分大分天也。故將欲讀

斯語者。與泝流。與沿流。與自左。與自右。與自中提。與自端起。猶環從手之所觸而起轉。若次序之。則本宗有統鬱浡能活。混淪能物。人開小境。亦與天張勢。蓋人如欲於天地達觀。但要觀於天而獲之於天。觀於人。而獲之於人。書與圖皆贅疣。姑爲魚兎設筌蹄爾。故讀此書者。觀於天而有合也則宜取之。觀於天而有誤也。則宜舍之。晉何與

○物有經緯。寓諸文辭者。經可由先後而序。緯不可兩辭齊發。氣有混粲。託諸圖書者。粲可由條理而分。混不可籌縷縫綻。故文錯綜于變化。圖整齊于條理。夫物有統散之分。於其一天地。則小猶大也。故大物一有二。二成一。性物剖對。往無限焉。置諸一塵埃。求諸一秋毫。亦猶同也。爰爲圖書以求彷彿。蓋大物。於天。則天無不統。於地。則地無不統。所往皆然。讀斯語者。言天則徒天之。言地則徒地之。從指徒之。非能讀玄者也。玩圓而遺直。觀表而忘裏。非能玩圖者也。讀得一聲。須剖對性物。觀一天地之成此。及重得一聲。亦須剖對性物。成一天地於此。以得其粲。以得其混。一事一際。一物一境。己入其境。而盡天地於其境。擧甲也。乙丙丁皆來。繫甲擧乙也。甲丙丁皆來繫乙。自丙丁戊己壬癸。所往皆然焉。是故。居機也。則天地皆機。居體也。則天地皆體。如此而後精麁相得。統散偏全相融。一事一際。萬物萬境。欲以言語盡之。則不啻以蠡測海。且言有統散。有反比。有先後之可序。有不用次序。有專指其主。有擧一而例萬。專指其主者何。以體露物。則截然殊其物。故其如說天說地說水說火。專執其主。擧一而例萬者何。以性見氣者。混然融萬物。故其如曰德曰道。曰性曰才。混融萬物。言語之道。有譬諭。譬諭者。假彼曉此之

術也。今擧一而例萬者。示其端也。非譬諭也。故其言曰。言之於某。又曰。移之於某。說露者。多專指其主。說沒者。多擧一而例佗。蓋混成粲立。天地之態然。於是其言。有上統而下剖者。有不待偶而直下者。有句中自對者。有隔章相對者。有辭對而意汎者。有主對而辭汎者。有實對而句有長短者。有一隻則主孤。而一隻則主多者。且對有反。有比。有互。有汎。有彼此相證者。不審則將失。是斯語之文法也。圖。有直圓。有大小。大圓擬混成。小直擬粲立。大直爲剖析、小圓列對待。文有反合、圖有表裏、文有剖對。圖有雙岐。是圖之大意。有合於書者也。噫夫。畫華極妙麗。而不復含子。刻鳥致彷彿。豈爲其晛睆。於是。天巧不假于人、人巧不背于天。所獲則魚兎。所設則筌蹄。

○坱坱焉。洋洋焉。靡往匪氣也。靡往匪物也。物可見。而氣則漠然。漠然難見。故其粲然亦不易知之。氣有精麁。察麁以漸精。猶高遠之自卑近。蓋人坐于坱洋絪緼之間。觀視之弗見。聽之弗聞。觸之弗礙者。或以爲空。或以爲無。其未知條理。認爲空無。不亦宜乎。蓋陰陽之態。反物而同居。故充與空成。無與有偶。其所謂空者、空于體、而不空于氣焉、其所謂無者。無于質。而不無于氣矣。試觀製水注。必鑿二孔。一孔通氣、一孔通水。出一勺之水、納一勺之氣。水盡則氣充、氣不出則水不入。故不地者。皆天也。不質者。皆氣也。己與質相拒。而不相居。水以門戸出入。則氣亦以門戸出入。既已空無。豈以門戸爲哉。已有由門戸。已與物爭居。非嚴然充且有者哉。雖充而有。而闃無聲臭。是廼氣之謂也。而物與我。亦遊斯中。而鳥獸之所居。魚鼈不居。彼來此輒死。此之彼輒死。以此觀彼。以彼觀此。反而能同焉。我在此中。試執繩一條。垂之。無壓無援。而

直下正立。觀此氣之直。試以革囊鞠充氣於內。塞外出之罅縫。則雖千鈞以壓之。而不墊焉。觀此氣之持。囊破。則爆然爲風。以知風者此氣之動焉。隔風。則覺煦焉。以知溫者此氣之靜矣。物入水則溼。在此則燥。故命名曰燥。觀其與水相拒。則雖氣乎有體。有體者。得處而居。今此雖空于質。而空以成體也。夫已得其處而居。已與物爭其處。則氣亦物也已。物莫非氣。氣莫非物。氣以散而虛。體非無體也。物以氣而結實。非不氣也。前之可見之體者。麁體也。漠然者。精體也。知麁而不知精。詎在知物。其未知物。詎在知氣。氣麁則體露。氣精則體沒。沒而爲鬱浡之神者、德性、成而露混淪之體者。天地。露、陰也、沒。陽也。陰陽無先後。舉沒則露從、舉露則沒從。讀者。從拈不必序先後。且說沒則入露、說露則入沒。求諸粲立混成之間。

○夫人以蜉蝣之年。眇處天地。病于視聽之弗廣。苦于應接之弗徧。苟弗之審察熟體。則猶破鏡之不能炤物之全形。擊火之不能察物之全體。蓋雖世不乏穎悟。而未能審天地之所以然。見天地之偏半。以爲全體。見坱洋之絪縕。以爲空無。蓋天地混圓其形。虛實物於其中。今世實測與推步漸精。則於知其形頗熟。雖頗熟其形。而未能審天地之所以然者。何邪。以囿於陰陽之故也。夫陰陽者。對待之一一也。人其孰不窺其一斑焉。未見其全體也。已窺其一斑。而未見其全體者。何邪。未得條理之所歸也。已得條理之所歸。四肢百體。得其所統。而知其所分。奏刀騞然。肯綮自分。雖至族之難爲。而視止行遲。謋然而解。

○一一者。陰陽也。之爲條理。氣物分、性體合、故合者。合乎分中。而氣則陰陽、物則天地、靡往匪陰陽天地。人開口。則皆曰陰陽天

地。未知條理。何以知陰陽天地。於戯尙哉。庖犧氏之後。我未見能述陰陽者。蓋知之有道。未得其道。欲强知之。猶瞽者之思想文采。聾者之思想律呂。終以所思想。爲之言焉。謂之窺窬。瞽聾欺人。窺窬之説。爲政於天下。窺窬五家爲魁。五行自洪範以來。數千百年。汗牛充棟之書。皆爲之羽翼。則因循薰蒸。何與臭人之臭。屠人之羶異。雖然彼失徵於天地。則仰觀俯察之久。不能不生疑焉。於是世稍有議五家之妄者。知妄未遇眞。焉在秉燭於夜行。條理者一一也。分而友焉。合而一焉。是以反觀合一。依徵於正。非可以私調停也。夫人者以有意、能知能思。天者以無意。能爲能成。是亦其反也。先達推心觀物。終爲心所私。雖美雖善。非天地之本然。況非美與善乎。夫反觀合一。試執剪刀。裁紙觀之。一坳一突。一頤一欹。合之則混一無間。天虛地實。氣動物靜。火熱氷寒。雲升雨降。無往不然者。反觀合一。則窺窬之罅漏。不能自揜。人雖博洽。雖聰明。不自反觀門來者。則不上之於堂。噫窺窬之所繇。擬于推已窺不同于已者。夫天者。反人者也。推人窺天。天人混焉。其譚天地。言二亦合。言三亦合。言四亦合。言五亦合。有無眞妄。惟辨雄者勝。天人之辨。學者之急務也。未辨天人。安分瞽聾與聰明。人苟有志于辨事物。須先自此始也。

○物者。體成而立。故條理井然。事者。動而相交。故運爲紛若。雖條理井然。而在運爲紛若之中。古人終不能探窮條理之原者。運爲變錯。目爲之眩也。此故斯書之文。於物務條理整齊。於事出運爲變錯。苟欲從事於斯。讀中須先辨。此也天。此也人。此也事。此也物也。而後可以始讀斯語。

○聲、名也、主、實也。主、天也、聲、人也。以人呼天。或相稱。或相乖。或聲異而主同矣。或聲同

而主異矣。故一一之名。亦陰陽也。天地之性。亦陰陽也。經緯。亦天地也。沒露。亦天地也。分日影。亦氣象也。合日影。而對虛動。亦氣象也。分水燥。亦氣質也。合水燥。而對實靜。亦氣質也。水火。亦象質也。天地。亦象質也。生化之化。亦曰化。化生之化。地曰化。精靈之精。亦曰精。精力之精。亦曰精。精麁之精。亦曰精。精乳之精。亦曰精。歲運之運。亦曰運。運轉之運。亦曰運。知運之運。亦曰運。運輸之運。亦曰運。噓噏之噏。亦曰噏。噏噴之噏。亦曰噏。噏吐之噏。亦曰噏。外轉內持。亦曰轉持。橫轉竪持。亦曰轉持。自噓噏者。亦曰發收。自鬱肅者。亦曰發收。出納者。亦曰食吐。含開者。亦曰食吐。露中對持。謂轉。則合東西。謂之轉。對運。謂轉。則屬象者運。屬氣者轉。沒中。以晝夜冬夏者。爲轉。則以古今終始者。爲運。意爲之意。則兼心性意智之意。則分心。是聲同而主異也。曰一一

曰陰陽。曰氣物。曰天地。曰睡覺。曰寤寐。曰營爲。曰營施。是雖非無差別。而畢竟一也。一曰酬醋黜陟。一曰取舍予奪。一曰握步。一曰舞踏。一曰言行。一曰言動。一曰云爲。則聲主不同。而其歸一也。儻欲審聲主之義。須以所偶推之。繹條理之法也。故言氣。則有氣物氣體氣形氣質氣象天氣心氣。氣色之類。言神。則有天神本神神物神靈。鬼神神人聖神之類。言天。則有天地天神。天物天人天命之類。至天地之規矩。亦有東西南北。半天地之衡從。亦有東西南北。不由所偶。則將誤其主。且一氣。亦有氣物。大物。亦有氣物。而萬物各有氣物。是以。雖沒爲天。露爲地。而沒亦天地。露亦天地。天亦天地。地亦天地。所往皆然。故聲主之間。在推所偶以辨所混。條理明。則不惑于其主。不惑于其主。則不投杼於曾參之殺人矣。是以。比熠熠於暗。則曰明。比之焰。焰則

曰暗。比火於冥。冥則曰明。比之昭。昭則曰暗。分轉持言之轉曰氣。持曰質。持中分之。無質曰氣。有質曰質。分運轉言之轉曰氣。運曰象。象中分之。曙曰象。影曰氣。月象也。或曰質。水質也。或曰氣。猶狗小於牛。而比鼠曰大。蟥短於蛇。而比蛭而曰長。勿惑呼東家之西。爲西家之東。

○人之遇物。必命其名。此命之。則彼亦命之。名之所以每多於物也。雖然。物者其體嚴然人之所共覩而言也。氣者漠然。弗可得而覩矣。不視則不識。不識則安得而命之。是氣也所以每乏于名也。蓋條理之剖析。雖若弗可覩而粲然立于前。已獲其粲立者。未得其名。竟自我命之。如氣物曰沒露。天地曰通塞。是也。反日觀影。反水觀燥。雖是古人所未命名也。條理自有其主。雖欲不言。而弗得。新名之不可以已也。故不拘定說古訓。由條理言者謂之條理之言焉。

先達未詳條理。以似亂眞。如以方正對圓。以月正對日者。是未識對有反比也。故正揭直換方。揭影換月。木者。與草相爲植對。鳥獸之動。白者。日之色。以對黑。赤者。白帶黑。對暗接明之青。而今以木對金。以赤對黑。是錯亂條理者也。陰陽之位。則右陽左陰。赤白之色。則白陽赤陰。臟腑之分。則臟陽腑陰。而擧世倒置之焉。已有天地條理在。雖獲罪於先達。而不敢從。

○伯樂使弟子求良馬。弟子散之四方。纔見其高踏善鳴者。便以爲駿。相共爭其良。久而不決。一人直走得龍種。見夫高踏善鳴。而不顧。是得其眞。而不良不能自揜也。世之譚天地論造化者。不逢其眞。以自得者爲是。窺窬立準。使人據之。非取準於天地也。世之不見眞龍者。以意認驊騮綠耳。宜哉駿驁眩人。如夫五家。亦配當而已。而陰陽則對待也。對待者。天地之條理。配當者。

人爲之處置。天地安知彼配。是以男女偶也。夫婦配也。以男女配夫婦。配之善者也。雖善。亦人也。故夫婦有轉。男女無變。天人之別也。其善者猶轉。況其不善者乎。彙萬品。配之於五行。其言曰。東木也。西金也。東青。西白。是謂之混聲主也。東東木木。西西白白。主當名稱而無所眩。偶之眞也。由配病妄。以學而得蔽也。是故欲知事物之所然。則須觀水爲水。觀火爲火。觀幽爲幽。觀明爲明。宜以對待而反觀。宜就一一而剖析。吾雖無似。竊有見于玆。其確乎固執者。徵在天地也。徵在天地者何邪。今嘗擧日問人。曰。是乃陽而聚體。能使地上灼然晝。索反之之狀。則彼必得其狀。曰。陰而散體。能使天下暝焉夜。旣探得其主。影之體具其人。又擧雪問人。曰。是乃冬而水之凝。而自天降地者。索反之之狀。則彼必得其狀。曰。夏而火之發。而自地升天者。旣探得其主。需之體具其人。於是我言其半。而人知其半。徵果在天地。

○雖徵果在天地。而條理之道微矣。豈易言焉哉。我非造物者。詎能盡條理。詎能盡條理。則此編豈可恃哉。雖然。條理則天地之準也。若有所不得者。則吾之未遇良馬也。若有人於此。執條理之正。以質吾之所弗得。則天地安護吾之不能。是非者。條理之所在。聖人復起。豈得易之哉。是以是非之道。取舍之行。幽明之途。善惡之性。門設戶張。千古不了。條理之不講也。條理一立。宇宙爲一匹之文錦。雖若文采燦爛。雲飛霞涌。鸞鳳華卉。鬱乎盈目。一經一緯。有所由來。巧婦之意匠。奚得而逃。而後知火燒之一于水。漬鱗潛之不妨翼飛。川流敦化。左右逢原。是圖之所以示剖析反合也。惟其所習。目濡心染。執窺窬。而駁條理。所謂是亦一無竆。非亦一無竆。而亦物之所以有

偶也。

○玄語已草。直說其所見。重著贅語十數萬言。會衆說斷之條理。贅者。贅于玄也。善讀玄者。莫用贅焉。天地已在。而又屬役於筆硯。則玄亦已贅。善觀察者。又莫用玄。雖然。觀察之徵。條理灼然。而人至于今而不之講。竢吾言之。則此語亦弗可廢。此語弗可廢者。果是乎。贅亦可用焉。是以贅雖贅于玄。而事則相出入。彝倫之敎、自司徒之職已設。其道無遺漏。形骸之議。自素靈之學行。擧世爲表準。雖然。彝倫之敎則備。其條理則遺。形體之說則有。其條理則罔於是。至如彝倫之次序。形體之分屬。則略乎玄。而詳于贅矣。蓋夫人雖學窮天人。目空天地。然亦斯躬還在此。此故。舍斯人。瞠目於彝倫之外。曠矣哉。申明彝倫。有敢語一卷。以畢。如玄語。則言論無假古人。贅敢爲與世酬酢之態。便玄之所無。而贅敢之所設也。則亦不可不併讀。蓋所引之語。有全者。有略者。有取意換文者。有記所出者。有不記所出者。有雜我文中者。若無失其本志。居子幸恕。而其引古典考衆說。猶眇視跛行。將大招博洽之笑。

○天地洪蕩。實非筆硯之所盡也。故讀此書之人。須先知條理之分。統屬之所在。譬如擧火言之。則知雷霆隕流。皆此屬也。擧馬言之。則知羊鹿駝麞。皆此屬也。亦須必知。輕重浮沈者。虛實之間。奇偶多寡者。數中之事。沒露有無者。體中之事。長短大小者。形中之事。而能辨統與散。解結聚散。榮枯死生。名各有所當。事各有所統。至其零碎。不能盡紀於事物之散者。要在以條理統之。零碎以屬之。且天地者。天地也。已觀而論之者。人也。擧我以對天地。所擧之我者。有意也。所對之天地者。無意也。天人之間。意之有無而已。混意之有無。則識皆墜窺

窾。故知言之要。辨在天人。其死生通塞、天也、殺活予奪。人也。自人之私、而觀天之公、自天之爲。而分人之僞。天成偶爲。人成偶敗。而人中。死生睡覺則天、運用營爲則人。是天人之辨也。是以、悅怨得於天之德也。仁義。在於人之道也。學禮。修之之物也、榮辱。成之之事也。苟不觸類推之。引而伸之。紛若事物。非言之可盡也。

○有人必有言。有言必有名。是以我方之名物。固無假西土。蓋漢字之入我國。史以爲創於　應神之朝。然山海經而下。論衡有出鬱之事。魏史有通書之文。則其來舊矣。和漢言之異。彼則一音具一義。上下主客。以運用之。如我數音不具義。合數音。而成一義。轉聲變化。以致運用。故我已獲彼字。以用之。其用廼二。一以用其字。一以假其音。以我言合彼字。則あめ。合天。つち合地。猶彼間。大合摩訶。智慧合般若。洪蕩霄壤。

事物紛若其譯。或當或擬。或得或失。今之務博物者。將欲得漢名之正從之。業已用漢字。欲正名於漢稱者。其志善矣。雖然漢字用於我。殆二千年。有方稱已定而不可改者。有雖方稱已定猶可改者。有我稱俗而彼雅者。有彼稱俗而我雅者。有誤不可從者。有雖誤而可通者。亦有可彼此共用者。於是或彼此能合。或考合紛紛。是　本邦用漢字之難也。蓋人之博物。實須認其眞名須從主人。況諸方出物不一。則彼此何昭合。粗擧一二例之。世有稱川童者。形如獼猴。出沒水艸之際。命正名者。揭水虎魚虎而標。又揭水蝹而標。而不以川童而標。以異名。變本稱。欲正名。而反失其實。此間無猿。呼獼猴爲猿。又以疾風爲嵐。以烟爲霞。以洋爲灘。以海口爲江。不用之。則弗能通俗。而臨文則不可不取舍。如彼稱蟰蛸。我稱長脚蛛類。則彼雅。如彼稱棘鬣魚。

我稱鯛（源順和名抄爲出崔禹錫食鏡而禹錫之食鏡不傳今爲和名）稱平魚類。則我雅。亦何讓彼。如以胄爲甲。以鋤爲鍬。則誤之甚者。豈得從哉。如我之鶯櫻楓。久專其稱。我之所謂鶯者。非彼倉庚。於是正名者。曰剖葦。曰婆餅焦。曰報春鳥。以鶯標則定。以人所見。甲乙丙丁。名常轉矣。櫻楓皆然。夫龍者。鱗類也。而馬亦曰龍。斗者。量器也。而星亦曰斗。則同名何嫌焉。今我之稱椿者。國史稱海石榴。海石榴出酉陽雜爼。則蓋李唐所傳之名也。或曰。今我之椿。即彼之山茶。而我邦山茶。即彼之海紅也。雖然。彼邦邦人。稱我邦之事。曰櫻。曰椿。亦從我之稱。此間之杜若。誤彼燕子花也。雖誤。而難以本稱改古籍。則我之杜若。廼彼燕子花也。猶雖今之蘭。非古之蘭。其名弗可奪焉。苟知其眞。則何惑。夫仙陀婆如神。木鰹魚海鼠之類。我自有正稱。如海雀稻郎等。我自有雅呼。又彼曰䲢。我曰野老。彼曰鰕。我曰海老類。收諸漢語和名等書。則可共通稱。又葦鹿之從訓而書。於胡之假音而書。亦可同通矣。是以。操觚之間。不能不消息。　朝廷考文之治久廢。爾雅之擧未有。則雖欲消息分曉之。業又出吾之私。則復將使見者混淆鼠璞。故用方名者。以雙黑系分之。且條理之道未講。從見命名。隨意分類。於是庶物之品類。未合條理。此書業在條理。雖杜撰也。無舊稱者。新命名焉。分類者。專由條理。日之分。以星屬之。月之分。以辰立名。歲年之別。周官注曰。朔數曰年。中數曰歲。其説分曉。故以日之一周天者。曰歲。以月之十二會者。曰年。艸木者。植之分。輭小以歲榮枯者。曰艸。堅大度歲生化者。曰木。雖然。艸木者。正于枝幹之體者也。笣蔓者。變于枝幹之體者也。正于枝幹之體者。名曰卉樹。變于枝幹之體者。名曰笣蔓。卉樹分艸木。笣蔓具艸木。類

之所以不得不分也。蟲有飛走之二、飛曰蟲、走曰豸、菌有堅輭之二、輭曰菌、堅曰寓。陸有鳥獸艸木、而水得鱗倮藻樹、堅中植有金石土鹵、而動有螺蛤龜蟹之類。造名、則出于管之私、而分類則由條理之天。質者、雨水土石艸木之類、有實體之稱也。象者、日月雲煙之類、無實體之稱也。形者、直圓塊歧之類、體者、虛實剛柔之類、對氣擧物。對理說故、宇宙覆載、天神本神、雖如出私意、實正之於條理。故有聲同而主不同者矣。是其所以不專據古訓詁也。世之儒家、或斥言體用者曰、是非先王之法言。斥說心思者曰、是浮屠氏之事業。今夫西學入、則天下之譚天者、舍己從之。有所護于眞也。火器入、則天下之用武者、甘而習之。利莫善於此也。苟徵諸天地而有、則芻蕘狂夫之言奚廢。

○有書難通。傳注之所以起也。周易之十翼。魯史之三傳、爾雅爲訓詁、夏小正爲解通。後世之注、皆訓詁解通也。獨裴松之之於三國志、劉孝標之於世說、以輯補爲注。亦一體也。晉之於斯書、大者提、小者從、則與後世綱目之設相似而亦不同。目者、專守綱、如此書、本書未盡、引演其義、故或出于本文之所未嘗言、或收于本文之所既言。出入先後、不復規規本書。故謂之演義。贅語亦同例。讀者須融而通之。

○夫天地之化育、雖水火異性、而並育而不相害。聖人之治天下、能容衆情、而陶冶於模範之中。惟讀周禮、而後知聖人之心、若天地、蓋聖人之心。在愍愚容異。賢愚利鈍。各伸其情、各竭其力、各得其所也。先王道衰。諸士以口舌說天下之治、以己之所見。排己之所非。門戶互設。是非各張。加之以佛老、道與政離。欲以其相是非者治天下。於是從政者。亦以此爲心。以水惡火。以裘

忌葛。分赤子。而置諸愛外。大非周公治天下之設。而與天地化育之道異也。周禮之六官。有治。有敎。有禮。有政。有刑。有職。將備而用之。疏人情於其中。不然。則如占贈夢。儺敺疫。人死則復。年旱則雩。大喪則方相氏。入壙敺方良。日食則擊鼓而救日。何爲兒戲也。以此治之。不以聰明先天下與後世之撰異也。後世以先王之道。曰儒。然儒者周禮九兩之一流。爲學者之稱。老墨申韓。互興。相抗相攻。欲以議論勝諸家。勢不得不與先生之道異焉。孔子栖栖于亂世。其志將成東周。轍環天下。莫之敢宗者。終取先王之法。修而傳之。是乃孔子也。孟子起于戰國縱橫之間。抑霸揚王。亦其新意也。至論君臣之義。則與孔子不合。莊子雖放浪而至論殷湯周武。則不出孟子之下。則雖諸家。而弗可廢也。夫天下之擾擾于善惡利鈍。猶天地間有雲霧烟霞。山澤江湖。竹樹鳥獸之雜然。是天能容此雜然者。是君能保此擾擾者。自周禮觀之。則老墨申韓。亦儒也。自分道觀之。則儒者服先王之法。服誦先王之法言者也。其道雖善而不出九兩之一。各德其所德。各道其所道。以爲分界。分界一立。其地狹矣。狹爭。爭鬭。鬭則相見其非。不相知其是。是非不中。不足以相服。愈攻愈叛。愈廣愈狹。擾擾生民與我同胞。奚爲區域相爭。夫善者。人之所悅。惡者。人之所怨。是者。人之所榮。非者。人之所辱。推諸四方。建諸古今。公然者也。今夫爲善者。將治人之不善。將治人之不善。而危行於絕不善不善。失路於入善。竟激而害。其名則美。其實則損。孰執其咎焉。吾寒鄉一農。幸遇日月之休明。竊仰 聖澤之洪蕩。德與天地並行。物各得其所。衆之所悅怨。而知善惡衆之所榮辱。而考是非。無賢無愚。無同無異。四海兄弟。而敎育於

大父膝上。伏惟吾則王者之民。竊有窺天地。亦相與樂優游卒歲。開其門戶者入。閉其門戶者不入。置各好尙於大同之中。故不能守各家之學。專據一門。我棄而彼拾之。我非而彼是之。非大同也。故是非之以天。地取舍之以天地。言而有失。吾之不肖天地也。言而有得。吾之與天地肖也。

○玄語之次目一從條理。如贅語。曰天地。曰陰陽。曰身生。曰死生。曰善惡。曰天人。舉其要者言之。非以條理次之者。綱訓諸篇從之。是亦因要次之。非以條理者。是玄贅之異也。敢語同贅語。

○寶曆癸酉歲。吾年三十一。肇艸此編。繼有贅敢二語。贅自寶曆丙子至癸未。八踰年十換稿。至今之本。凡七冊。敢自寶曆庚辰至癸未。四踰年四換稿。至今之本。爲一冊。今玆門人上之於梓。此語自癸酉至明和乙酉。換稿士五。竟覺大憒憒。盡棄舊稿。新起艸。越四年至戊子。三換艸。稍若安焉。體一年。再思之於天地。大不合焉。庚寅之冬。又棄舊稿。起此稿。又經六年。今玆乙未。五換。纔得此稿四冊七本。併例旨凡八本。十餘萬言。一百六十有餘圖。歷年二十三。換稿亦二十三。物大事衆。犬馬之齒既過半百。鬢髮皤皤。加之以心胸之病。不知天假之年。將卒其業與。將奪其志與。於是不能無感。書以竣佗日。安永四年端午識

印　印

玄語例旨終

附言

○天冊之天者。性也。鬱浡之活也。地冊之地者。體也。混淪之立也。地冊二部。爲沒爲露。二部四界。天界之目。曰宇宙。曰方位。機界之目。曰轉持。曰形理。之爲沒部。體界之目。

曰天地。曰華液。性界之目。曰日影。曰水燥。之爲露。部。而方位者。宇宙之痕。形理者。轉持之靜。於是宇宙轉持爲綱。天地華液者性體之物。日影水燥者。性體之氣。於是天地華液爲綱。自一二分合之別剖之。宜先以轉持之動。形理之靜。探沒中動靜天地。而以天地之體。華液之性。偶露中體性天地。以繹其條理焉。宇宙者精。自以方位爲天地。而宙則袤袤之通。能潛宇內。一宇容沒露之爲一球。者。而天地立焉。天地以體成物。華液以性成物。日影以色氣播。水燥以性才布。華即日影。液即水燥。水火者。本持中之物。或以爲華液。蓋水火之稱。於地有專主。擴稱華液。在天言日月。皆因其性而言。於體界既言華液。於性界。亦言華液。唯言有詳略然。一者對而合。以成其條貫。二者分而反。以觀其理。析火之虛之象。水之實之質。皆物也。天地華液。雖隔體性。而同有體。而華液以反對反。以具向闕。不合彼。則不能成此。故體界之華液者。以虛象之物。偶實質之物。而其所成。合此成彼。合彼成此。華液既於體界爲物。物自有己之氣。故性界則日影播明暗之色。寒熱之氣。水燥布乾潤之性。滋煦之才。故條貫觀紘之通。理析觀用之別。是以天地華液。相得成一球。而日影水燥。各領不占心之圈。布政於上下。於是宇一容沒露之一球。一球分連環。於是宇者合而一。日影水燥者。吐而二。以成大物矣。宇則一中具方位。合轉持天地容之。而其華液既立其體。體立而其性氣施其才用。讀地再者宜先識此意而後探天地。

○一者不數而足。故剖之至不可破。猶不闕一。加之至不可載。猶不至一。一元氣玄也二者舉一闕一。言具見闕。亦玄也。或曰玄而玄則何待子之言。玄而不玄。則何用言

玄待言玄而後玄玄不足爲玄玄不待言玄何益子之言曰故玄也。

○以天地剖陰陽、天地各具陰陽、以陰陽觀天地、陰陽各具天地、分合之道、無適不然也。

○講條理須審剖析對待之經緯。剖析有混粲食吐之觀、對待有反比分合之態。剖析則一而二、對待則一偶一。

○陰成陽成之圈、與陰成陽成之天地不同焉。曰天圈、曰日影之圈、便陽成之圈也、曰地圈、曰水燥之圈、便陰成之圈也。共不占心之環、分而成二。轉持形理之沒、天地華液之露、共占心於中、合而成一。圈就外圓而言。環依中虛而言。天地之形其圓如毬。故地球即地毬。水火之地襲其上。或並之謂實毬、或分地毬實毬。日月之毬、襲水燥之上。或並天謂虛毬、或分天毬虛毬。與曰圈曰環。意稍異矣。

○直圓就其正而言。覌矩由持平而言。西中東中西線東線即赤道黃道也。守軸環軸。即赤軸黃軸也。從處異其聲、非主之異也。曰輪軸、曰弦弧、所假而譬不同矣。

○體界所言則天地華液之體、性界所言則色氣性才之用。然而性中屬色於明暗、屬性於乾潤。則亦有對色界之性界。

○明暗曰色黑白曰彩氣曰交物曰接條理之言也。然散言者從通稱

○人身之液有數義曰氣液之液者對氣之名身中之滑澤也血液者對血之名在表者也在裏則濁而赤血之謂也出表則清而淡液之謂也故液分者皮表也而經中之氣脈中之液亦稱氣液與骨肉之氣液別

一者不數而足故剖之至不可破猶不盡一加之至不可載不至一故强命曰一元氣擧一闕一言具見闕故曰玄或曰既玄

也何言玄爲以言而示何以玄焉玄而玄焉何待乎子玄而不玄徒觀子之勞予答曰故玄也

○以天地觀陰陽。天中亦具陰陽。地中亦具陰陽。以陰陽觀天地。陰中亦具天地。陽中亦具天地分合之道無適不然也。露中分色體之二界。色者性之見也體者天地也性者華液也之爲體性之分液則水燥合地球華則日影合天球之ヲ爲天地之分讀露部者不辨之則將迷其辨焉故水火在地上言者字之正詁也通天地而言指華液讀者宜尋繹聲主分之勿死聲認活主

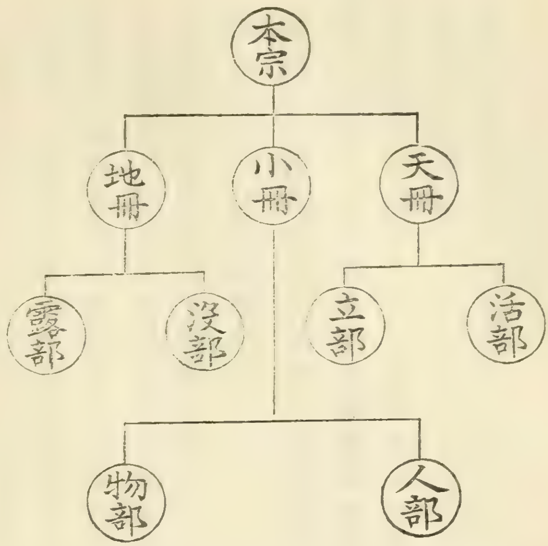
○比者反之偶謂反則有於此者無於彼也謂比則有於此者有於彼也而比方之比與反比之比別

○交接之義於氣言交於質曰接

○東西之行西曰轉東曰運歲時之行成于日月者曰歲成于水燥者曰運心之營出于意作者曰爲出于感應者曰運

○象者在天可見者之稱質者在地可取者之稱氣象或分日影而稱大言則曰影共象虛動者曰氣氣質或分水燥而稱大言則水地共質麁濁者曰氣火者在地而對水者而大言則日在天之火也然日火自有專主故天日地水之偶自古無專稱故今稱華液以爲偶名

玄語目



二

玄語

日本 鎮西 三浦晋 安貞 著

本宗

陰陽

物有性、性具物、性與物混成、而無罅縫、故其一也全、物偶體、性偶氣。物與性粲立、而有條理。故其二也偏。性性乎物、物物乎性、故一即一、一一則一、氣成天、物成地。性具一、體闕一、具一闕二、剖而爲經、一氣一物。對而爲緯。分則二粲立、合則一混成。一徒一則不分合、二徒二則不剖。對一二不徒。立則各焉、成則全矣。是以以剖分一、以對合二。剖則經焉、對則緯焉。經之緯之。條理自分。以錦言之、爲物經緯朱綠、成物鸞鳳華卉、其神則巧婦之意匠也。是以錦必一經一緯。神用物成。於是無一緯之不與經分、無一經

之不與緯合。合則龍起鸞舞。雖龍起鸞舞。而分則經自與經比、緯自與緯比。是以一匹之錦。性具表裏之二體。巧婦連神。蠶絲立物。人巧不知。至天造之滙。蓋大物之爲氣物。經緯以通塞。精麁以沒露。經通爲時、而神用事於此、緯塞成處而物體物於此。是以一匹之錦。經緯物焉紡織事焉。使龍起於斯鸞舞於斯。弄表之燦爛、而窺裏之隱幽。經緯相反。類類相比。以察對待之道焉。全錦一匹。表裏兩面。以察剖析之所矣。是以錦則本一、故全、表裏則二、故偏。全則表裏混成、沒縛縺、偏則表裏粲立、見條理。於是一匹之錦。條理整然。鸞羽龍鱗。巧婦不苟也。爰繹龍起鸞舞於經緯則起龍舞鸞於髣髴。

二之於一。亦一之於一也。是邪非邪元氣之玄開明閉幽。

混則一而粲則二邪。對粲則混亦與粲並立、雖並立而混則沒粲中、能全一、混有則粲亦爲混成、雖混成而粲則露混中、能偏二。故全亦對偏、而二能合一。於是二之於一。亦一之於一也。故一而伍於二。勢成一一著痕則見隻也。故性雖具一。與體之闕一並立。立則著痕。與一自有間。雖有間。性能具一、故其才能融能通、體能闕一故其用能分能隔、

性已性乎物、何亦有體、具闕而後剖析弗盡、物已物乎性、何亦有氣、精麁而後對待盡變。配則觀性體並氣物、合則觀性體入氣物。於是二闕反、合一具、分合其一而一、則易焉、一則陰焉。一一之得各名也。闕能體物、而立其二、具能性物而活其一、剖而散焉、對而合焉。於是具性走陰陽、闕體立天地。陰陽絪縕、神活其天、天地沒露、物立其地。立者活神之鬱浡、活者立物之混淪。故混成其一、而統散全偏、用一二之經、粲立其二。剖對反比。體一一

之緯。故溯之、則從條理、而偏偏歸全。望之則反對待、而偶偶皆合。以一同居、以二異道、以分均氣、以合反物。

本一、而一氣一物相分、一性一體相合。試援筆下一畫、纔露一點、則上下既立。上露則下成。表成裏從。表裏居上下之中。上下居表裏之中。上下表裏混成、而一畫立其中。是所以居同道異。氣均物反也。以物反、而露沒自異、以氣均、而對無軒輊。且以小言之。人立兩岈、各相望。其爲近遠隱見、則各相同焉、其所近遠隱見、則互相異矣。是以物之沒露、氣之隱見、雖異其道、而同其居。故物之所沒、乃氣之所見、氣之所隱、乃物之所露。陰陽非物、而能體物。故物沒露、則氣隱見焉。二之態也。故氣物爲物則沒露。陰陽爲物則隱見。氣精而沒、物麄而露。麄則氣亦見、精則物亦沒。故麄則見性體、爲華液、精則沒天地、爲天神。氣得物而陰陽粲立、物以氣而天地混成。以天地混成、而具于陽者、必具于陽、以陰陽粲立。而具于陰。者必反于陽。以陰陽同具、不能異其居、以陰陽反具。不能同其道。粲立則一平分、混成則一一相融。平分則彼此之發不同、相融則彼此之有不異。是以雖地成于結、天成于散。而地專于結則長而盡天、天專于散則散消而盡地。散結苟徒。則上無繼散者、下無置結地。移之桔槔。止則持而直、無意以具動之用、動則轉而圓自竢靜之復。移之於碓。抑前則後昂、天昂從人之抑、揚前則後低、人揚期天之低。故貪進則忽退、欲退則冥進、長此則彼消、傾東則西欹。

混成則無非一之有、粲立則無非二之開。一有二隱、二開一移。剖也分之二、對也合歸一。對則陰陽以絪縕、剖則天地以給資。非絪縕、則不能爲陰陽、非給資、則不能爲

天地。於是立者露氣物。活者痕本神。氣者天也。活之者神。氣也。物者地也。立之者本。氣也。性體和氣物。本根精英以成一。本根精英既立。神爲用。於保營運爲。性體隱氣物。本神天神以成二。本神天神既活。天用成於造化天命。於是一散一一。而萬有沒露。萬機動止。萬機異態。唯鬱浡乎。萬有變體。唯混淪焉。立混淪者。廼本氣。本根精英。身於神焉。活鬱浡者。廼神氣。保營運爲。神於物焉。爲之者神。是成者天。故性體氣物。爲具也。陰陽天地。成具也。剖析不盡。成者亦爲。對待相合。爲者亦成。蓋一之所立。幹立其物。活運其神。廼本與神也。二之所活。一以爲之。一以成焉。乃天與神也。一有二居。一活一立。性體貫氣物。氣物割性體。不有胡居。不活孰立。以有二。而一移居。二以一之移。而二各全一。於是陰猶如陽。小猶加大。猶如遞反。其變無窮。

剖對

氣爲本。物爲根。體爲精。性爲英。若非氣物體性之爲本根精英。則豈相依而成一哉。人者麁物。通于麁而泥于精焉。故但見植有本根精英。而不見動亦具本根精英。但見動植有本根精英。不識資諸大物。無不以氣物性體成者。則無往不具本根精英者。至大弗遺小。至精弗外麁。一之德也。人以渺麁小之智。欲探精沒者。難矣。雖然精麁混一。沒露同居。何外于天地。故合而一成。所以男女感而子成其中也。條理立於男女。罅縫沒於所生。分而各立。所以衆兄弟之分體一父母也。衆兄弟而散一父母而統是。故物立神活者。所成此天地也。性體合。氣物分者。爲此天地者也。雖成則成於爲。爲則爲於成。而爲成自別也。而非爲先乎成成後乎爲。故欲有觀乎天地者。須繹條理以居混成也。

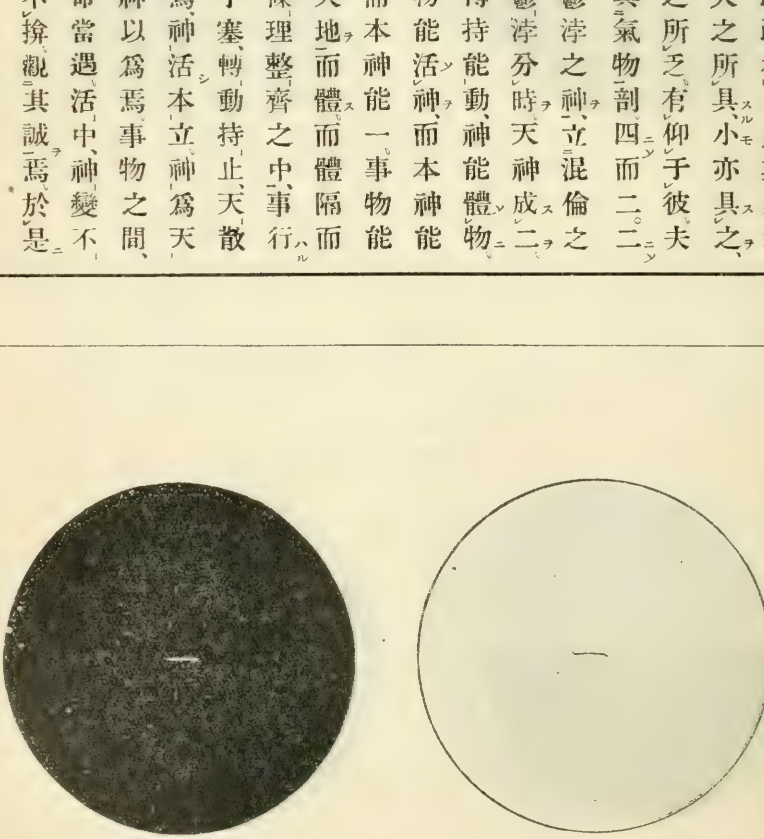
沿流而下。下一陽二陰。隔岸而望。則一陽一

陰。故剖則分分分分、至零至碎、末猶本焉、對則合合合合、歸二歸一。本猶末焉。反而執隻、從所往而反反對立、比而伴偶、從所往而類類相並。以性之且、氣能有之、以才之能。物能行之。以觀德之有焉。有則靡物、弗宅、往則靡事、弗路、行則靡徵、弗爲、有則靡一、弗成。是以鬱浡能活、混淪能立。性剖體偶、氣有物開、而一含萬有、而動植物其中、本神氣其中。植以資物、而能厚于本、動以資神、而能厚于神。雖分爲隻、亦能合成一、則資物者亦有其神、資神者亦有其本。故雖成則各有執。而眇忽亦能與大物張勢。張勢則與天地分立、給資則與天地混一。才活而性見、陰陽體立而物露。天地絪縕者神之運、沒露者物之立。本根精英之物、保營運爲之活。活成物成、乃二。成活成物、非二。故有有無無。是以沒露沓有、隻隻相闕。是以反合成全。

不有而無、不具而闕。闕者不具其具而闕、具者亦具其闕而具。無者不有其有而無。有者以無無而有。闕者唯沒也、無則直無也。以有而一其德、以具而二其道。是以其所無則無、其所闕則闕。是以有中無無、具中具闕。有者有於有中、有無則非有中。具者具于闕中。闕闕則非其具。故無非有。有而闕則在其中。故闕闕相得則全。以闕在有中也。有不以無並立。有能有有也。益氣有精沒奄露之態。露而有有、沒而有無。無者、無而後無也。如無而有則有之沒也。同聲而異主。謂之闕可也。故雖混成相食。謂之相。則已吐。故沒者不遂露。無者不遂有。條理見則一之分、罅縫沒則二之合。以反而彼此沒露、以比而彼此偕有。故奄中相吐、則天虛而氣、地實而物、相食則虛體物實、實體氣虛。唯其沒爲物之天、其露爲氣之地。沒罅縫、見條理。剖析、泝之則散、溯之則統、對待分之則反、合之則一。剖析生親疏、對待成反比。

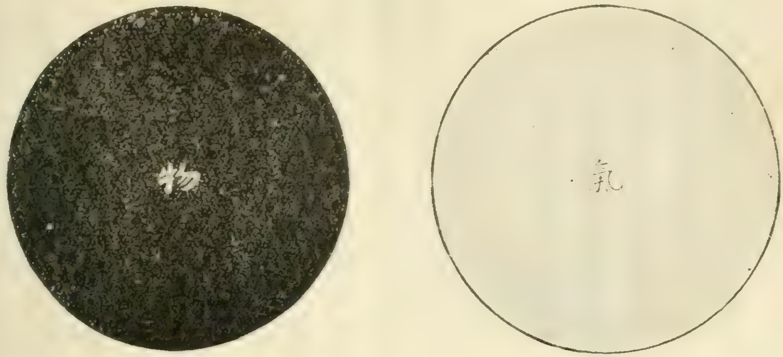
親疏同祖、資之者一、兒孫愈衆、則給之者滋、親親相偶、則其反者合、疏疏相向、則其比者依、大之小則小資大、故大之所具、小亦具之、類類比、則彼此依、故此之所乏、有仰于彼、夫氣物元有性體、性體終與氣物剖、四而二、二而一、是以一元之氣、活鬱浡之神、立混倫之物、混倫全處、本神成一、鬱浡分時、天神成二、氣能用神、而宇宙能容、轉持能動、神能體物、而天地能立、水火能著、物能活神、而本神能活、造化能通、天能成物、而本神能一、事物能雜、神以本神而神、物以天地而體、而體隔而物、神神交而事物立、於條理整齊之中、事行於變化錯雜之間、宙通宇塞、轉動持止、天散地結、華火液水、物以成焉、神活本立、神爲天成物、定專變造、來化往神以爲焉、事物之間、鬼神感應、造化之中、天命當遇、活中神變不測、觀其玅焉、立中天常不揜、觀其誠焉、於是物居性中、性遊物中、一

一一相食混成圖一合　一一闕體　相食具性

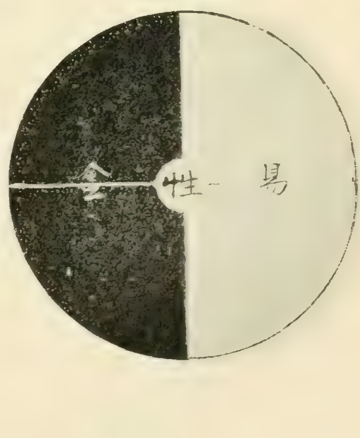


氣物相食混成圖

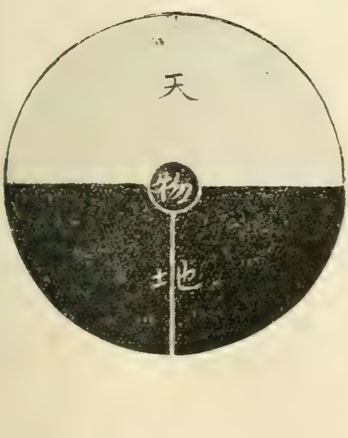
一合　一一陰陽　氣物天地



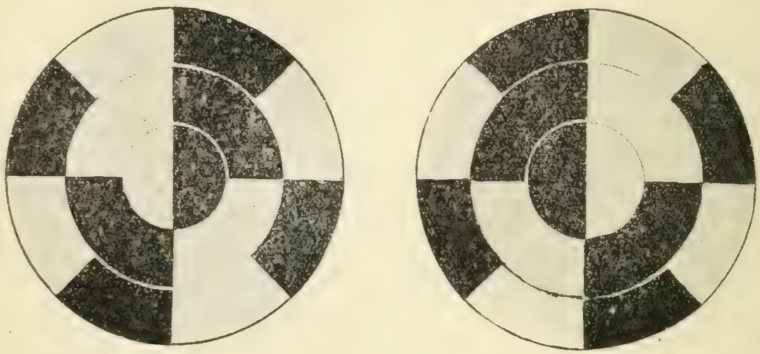
一一相吐絫立圖



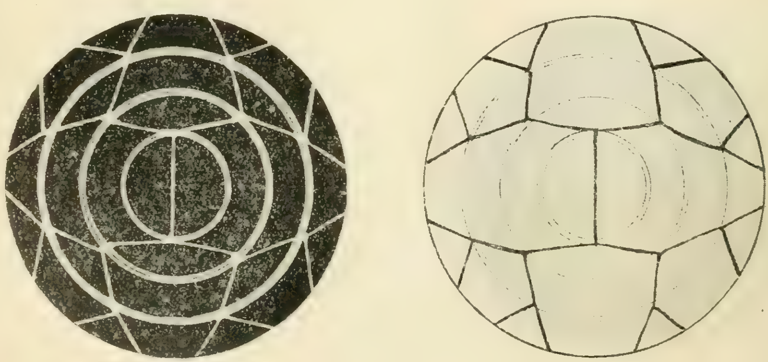
氣物相吐絫立圖



分合圖一合



剖對反比圖一合

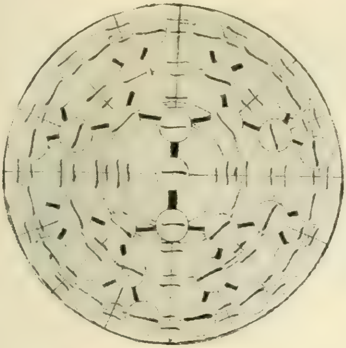


一一精麁圖

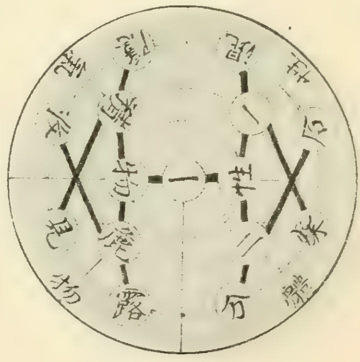
一一陰陽分合混粲偶一一之中
精麁天地隱見没露偶精麁之中



經緯剖對圖



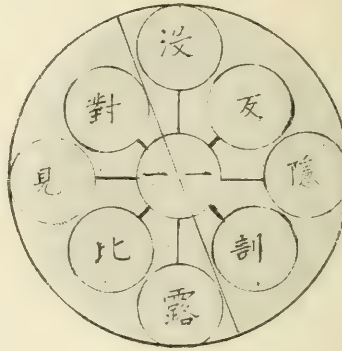
一一精麁圖



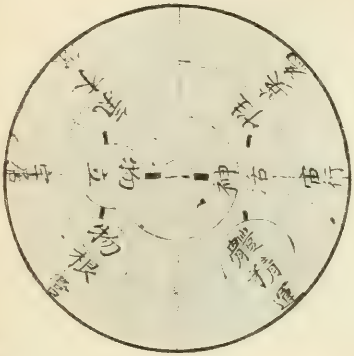
一二食吐圖



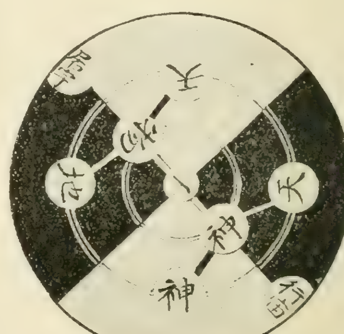
一一對待圖



神物活立圖

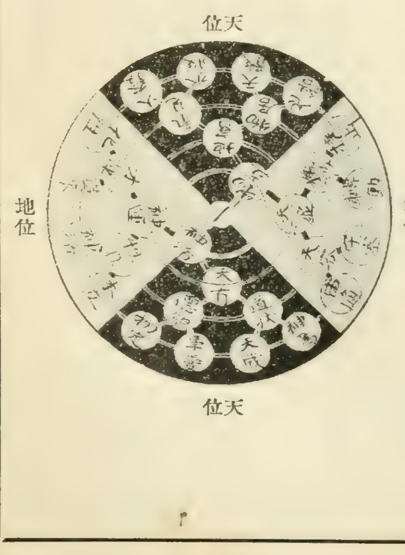


天神天也圖



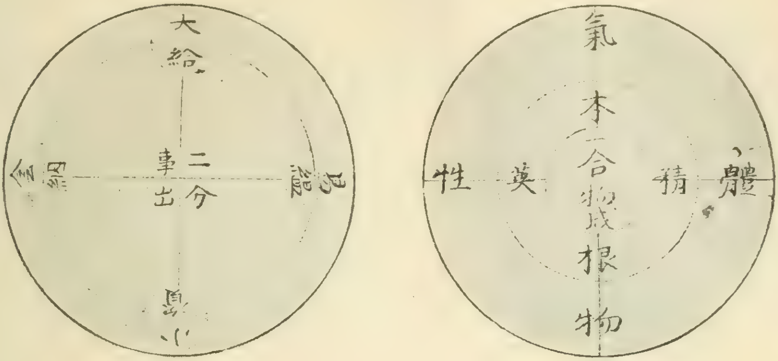
神物剖析圖

天神乃天冊ニ所レ說、
天地乃地冊ニ所レ說、



事物圖一合

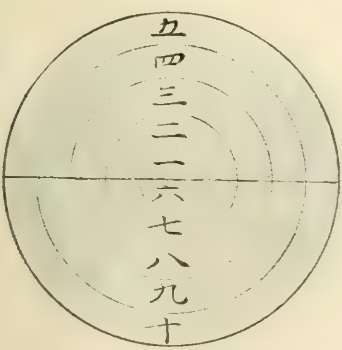
合ニ本根精英ヲ一而成レ物ヲ、合ニ大小陰陽ヲ一而爲レ二事ヲ



天數圖



人數圖



天地

神活爲成。物立爲氣物。爲成則天神、氣物則天地。天神則鬱渟之活、以窺其天。天地則混倫之立。以觀其地。性剖一一、物開精庵。一一成分合混粲、精庵爲沒露隱見。於是乎。氣能精沒、物能庵露。精沒則神之體、庵露則物之體。雖庵露亦沒露、雖精沒亦隱見。神而見焉、物而露矣。見者以沒爲其地、露者以隱爲其天。神本氣。而氣者天也、物者地也。神物共物。而天爲其宅路。則天亦地。而地幷食其所開之戶、所開之室。則終食萬有而盡。臨盡勾漠然者。勾得觀之。仍舊而氣而天也。仍入天境。解結散聚、則唯藐藐焉觀氣而弗觀物。以觀天之食盡地。於是彼此各爲隻。隻互吐隻、隻互食隻。遂觀天之混成、觀地之混成。以觀混成於一也。故萬有皆庵、精居庵中。食則靡弗氣靡弗物、吐則物弗氣氣弗物。

氣開一一精沒庵露。人之在覆載、以庵而居庵。慣庵而不慣精焉。獲庵而遺於精分則天能容地、地能居天。天大於地地小於天。是以不地之處乃天、不天之處乃地。合則天亦居地、地亦居天。天不大於地、地不小於天。是以莫所不地、莫所不天。

一而二焉、二而一焉。通隔之間、弗可端倪焉。鬱渟行則開路、混倫居有宅。宅路沒庵中、精見天機、庵露性體。天雖沒、而袞袞之通、坱坱塞、成宇宙。機旣見動止之轉持、形能成直圓之形理。於是沒成動靜之天地、體能立氣物之天地、性能活華液之陰陽。於是露成體性之大地。蓋以淸望濁、氣淸而散、物濁而結。火發而懸、水收而湛。火雖發、而終古不升者、由有覆者。水雖收、而終古不沈者、由有載者。故通塞散結。入幽玄之界焉。上覆下載之際。日月星辰懸焉、山嶽河海列焉。晝夜冬夏以成、東西南北以紀。文章燦爛、萬彙鬱郁。神遊焉、物居焉。於是天者氣也、成本、地者物也成根。

二說四界

地見其氣、性也、成英、天形其物、體也、成精、覆載以混成焉、機者動焉、以靜置實、體者實焉。由虛發機、虛而物其色、實而質其性、天地得華液之偶、於是精中通塞、龠中轉持、以成其天地於沒體、實中散結、虛中發收、以成其天地於露物、經通而時、生來者、化往者、爲神遊之路、此天爲宙、緯塞而處、載乘者、容居者、爲物立之地、此地爲宇、宇能容物、宙能通神、則宇宙隱沒、能容神物、物能居宇、神能通宙、則神物見露、能居宇宙、於是隱沒吐物而爲地、見露吐氣而爲天、神物靡弗活立、經緯靡弗通塞、巧婦執機杼、織斯貝錦、燦爛文章。龍飛凰翔、鬱渟含機、混倫立體、天定神變、天動地止。

三說四界

蓋混然之一、性具一一之體、其體則一氣一物、其態則精沒龠露。相比相反、相食相吐、粲立有條理、混成沒罅縫、故块块敷處、而物居此、而物之居此也、得中乘之、得外居之、中也則其微無內、載天地而不重、外也則其曠無際、容天地而不大、袞袞引時、而期從此、而期之從此也、待今見之、待端沒之。今也則其間倏忽、露事物而弗遺、端也則其長攸遠、藏事物而無示。神亦行此途、天亦居此宅。夫性開體、而一陰一陽、陽則虛其體、發其氣、神機活動、陰則實其體、收其氣、物體定立。天地以此分、水火以此成。是以成宅有物者靜、靜者沒焉、散結者、以露虛實之體、爲路由機者動。動者見焉。發收者以見色性之氣、於是靜者虛實、動者往來、故中有止而能維、雖諸動游移、而有所守、以定地定天、止之所在、乃地、動之所行乃天、今有見而能走、雖諸靜凝立、而有所率、而變時變物、體之所成乃天、爲之所變乃神。

宇宙氣也、天地物也、氣剖天機、物分性體、天機已分、而宇宙轉持相成、性體已分、而天地

水火並立。於是虛實之天地、水火之陰陽、時處之宇宙、動止之轉持、偶偶相合。成一大天地焉。氣開宇宙、而容轉持、隱然之天、所立之位、所行之方設焉、連氣之理成、物之形立焉、物開天地、而見水火、粲然之地、所容之虛所居之實露焉、所縕之華、所絪之液見焉。其合也、宇宙隱、而露虛實之體、轉持沒、而見華液之性。動者神而變焉、止者天而定焉。是故地止而定焉。而其地不以磅礴爲界。天動而變焉。而其天不以穹窿爲界。故块块常靜、轉持遊其中、運轉有守。升降有中。衮衮常走、靜止居其中、囘復悛期、游動變態、於是動雖變、而得靜而有紀。天定、地定、靜雖定、而得動而能活。氣變物換、是以天變于物、而定于期焉、地定于物、而變于期焉。天神之所爲、成於天地也。天地者、輕虛以沒、重實以露、

以質言氣、質者實焉、氣者虛焉、以氣言質、氣者精焉、質者麁焉、精于氣者、虛于質焉、

麁于氣者、實于質焉。是以、氣出于層層、而漸精、質入于重重、而愈實。微之於火、以體之虛而出升、水以質之密、而降入焉。氣閒無聲臭之可窺、而使地能在其中、則精也、虛也、質密無罅隙之可指、而使氣能在其中、則麁也、實也。天能在地、地能居天、不麁、則精不能在其間、不虛、則實不能居其中。精通麁中、實塞虛中。氣象爲轉中之物、氣質爲持中之物。天象猶地質、以將精而不能實焉、地氣猶天氣、以將實而不能精焉。無質者、有質之氣也。有質者、無質之質也。故塵埃雖爲氣所揚、而有質則終降、雲煙雖以氣而升、而結質則必降。昇者動焉、降者靜也。動者氣使然、靜者質自然。故質者地之體、拒外出、而保之於內。氣者天之體。拒內入、而送之於外。故煙火雲霧、氣勝者、疾昇、土石雨雪質勝者、先降。推持察轉、象猶質、東猶下、轉猶持。西猶上。

天神者。變動以活。定常以成。是以块块之中、物體、濁實重凝而下結焉、物氣、淸虛輕融而上散焉、故地體沈結、愈密愈堅、堅密依中、則粗粳之精而成天、衮衮之間、神性運轉噓噏而斯率焉、物期循環鱗比而退逝矣、故天氣轉動、愈疾愈剛、疾剛保表、則運緩之靜而成地、轉紀衮衮、地紀块块、是以轉拒物而不容之內、地載物而不沈之間、景影布處、星辰上環、水燥容物、動植下立、循環鱗比、期競追時。天氣動焉、地體靜、雖動能率象而轉、靜能容質而持、地寓端於天、天寄中於地、天守中、故動而不蹉、地奉端、故靜而不躍、故地雖靜、而氣活其中、天雖動、而位守其中、地載天、天覆地、其間乃日月星辰行焉、山嶽河海列焉。推遷轉持成焉。風雨雷霆旋焉。水火艸木生化焉。毛羽鱗介出沒焉。故目其象。臆其機。則天亦可度也。摩其物。踏其體。則、地亦可知也夫黑白之棊子。勝敗相

成者。託諸局也。今氣體物乎、何、天神事乎何、人之於天地、亦其幕席已。固乎堂者、不知幕席之所由來。不知幕席之所由來。則不知幕席也。故固於天地者。則不能知天地也。

天神運于宙通之間、天地居于宇塞之中。除天地而觀其容者之块块、充块块而觀其混淪之立、

以粢立觀之氣者氣也、物者物也、以混成觀之。物亦氣也。氣亦物也。是以氣雖不露體。容物居之、故燥假燥之處於天、與水相拒、轉假轉之處於天、與持相拒。故容者不施其處、則居者不得其宅、居者得其宅、則容者施其處也然而容者块块則居者無損、居者不小於容者、容者不大於居者。氣之物、則莫所不氣、體之天、則莫所不物。際歲時而觀其率者之衮衮、從衮衮而觀其絡繹之不盡、

直往不見標木、圓轉不得首尾。杲有端緒。則以所前于始、所後于終、將何置也、以所內于內、所外于外、將何如觀焉。故我南則北爲邊、我北則南爲邊。世世相望、則觀既往於今。時時相繼、則觀將來於今。時可得始終、處其有際涯。往則從而送之、來則逆而迎之。高則登而望之、深則入而度此竅竅乎疑宇宙者之爲也。

融此而觀天之洋洋、活此而觀神之浡浡。天散地結、機動物止。沒者虛焉、露者實焉、見者濁矣。隱者清矣。之間。清虛止散者精矣、

有痕則麁、無痕則精。有痕以推無痕、則無痕成痕。而精亦麁也。故以露索沒、則沒亦露矣。以實推虛、則虛亦實矣。精之極失精、而精之麁者、與麁相居。虛之極失虛、而虛之實者、與實粲立。清濁動靜聚散解結所往皆然。故動實濁結、靜虛清散。麁者各各露、精者盡沒。雖然散不混于虛、清不混于靜。靜爲動所推、虛爲實所推。不以相融、終爲粲立。粲立隔混成、混成別粲立。是以一一並見、而精亦露焉。雖一者乃二之粲立、難二者乃一之混成

濁實動結者麁焉、精隱麁中、麁居精中。坱坱得中、而天地以虛實居之、袞袞得今、而象質以歲運行之。雖神與物反、而能合一焉。故其性融而通此、其道爲而成此。故天地開位、而水火分物。天者虛也、虛中成可見之形。或曰象、或曰火、或曰陽、今新命曰華。實外以實成可弄之體。或曰質、或曰水、或曰陰。今新命曰液。宜玩其對。初其物要弗以聲眩其主焉

曰象質、曰水火、曰陰陽。既有專主。華液新名、可以汎稱。水火之本名、以著地者爲主。故以日爲火之宗。獲乎其實、而失乎其名。象者虛其體、有可見者之名。質者實其體。有可把者之名。而水猶氣類不成定質。則非質之專主。故合天地謂之。水在地上、日

在天中。然則天火得影而偶、地水得燥而偶。火之偶水於地上。固琉偶也。水火望於天地。而後爲親偶焉。然正名於親偶。則天日地火。還失其主。陰陽本一一之體。今大物露天地一氣見陰陽。推所本以言華液。華液自有其偶。就偶之素。曰氣象氣質。就其成。曰日影水燥。故通之於天地觀之。日陽而喩。則露結天間。命之曰月。水陰而排。則星生地際。命之曰火。天地本一物。故華液爲陰陽。天地既分境。故華偶氣象之日影。液偶氣質之水燥。人曰素麁。視物不視氣。從見獲其疏偶。天曰日月。地曰水火。故世人雖未以對日曰地。水便是月。對水宜曰天日便是火。故華液則合天地之水火也。依聲誤聽。未爲知其主者也。

是以一大全物而言者也。觀其所剖析。則兩圈相容。所轉之圈。即地圈。所運之圈。即天圈。轉圈則與天地合巓趺。運圈則與天地及巓趺。雖巓趺相反。而合其圓形。雖圓形合而運轉環守不同理矣。地趺乃天巓。天趺乃地巓。運轉有節。以繋日月之弧。弦弧既設地居轉弦之中、日繋日弧之中。物體結於天地、牲氣發於陰陽。性體不相不節以出枝。同胞孿胎。天地一球。華液運環。華圈分圓於天地。液圈分合圓於天地。雖合天地自天地之一球。華液自華液之二圈。天地一球合路宅。華液雙圈交歲運。蓋天地之大分。沒中有宇宙轉持、露中有天地華液。宇宙爲通塞。而宙通於宇中。則宇邈焉混焉混成一。宇中天地之體。轉持之機。二圓合一。居宇行宙華液兩圈。液圈則合天地液洽天地。則日影自出規矩。以成中外。已居其天。以影爲其地。抗然與天地張弦弧之勢。運轉反巓趺。其圓合焉。日影分圈。巓趺與運轉不同也。蓋物之成。以形體色氣全。是以形體不得。則物不能成。色氣不得則物不能沒露而色氣之所成。於華液爲濃華

開日影、液開水燥。以充虛動實靜之中。我已履地戴天。於是乎順逆定于我地之磅礴結土石。爲拗突。以居散虛之天。拗處水占、突處燥占。天文上懸、地章下捧。發收之際、寒熱明暗溫涼行焉。水燥之間。原野山嶽河海成焉。俯立之諸質皆依轉跌而立、重並之諸曜奉運巔而環。地不移弦中、日不住弧中。轉跌、實其止、運巔、處其動。一常一變。安知不東線一合轉輪。一橫守極哉。故轉跌之中即地。地上一層、迺水之處、水上一層、迺燥之處、運巔之下頭迺月。月表一層迺日。日表一層迺影。色界盛日、景影爲處、而星辰羅其下、於是覺巔小跌廣、體界主水。水陸爲處而動植立其上、於是覺跌狹天大。天者清矣、故星辰含乾燥輕明、地者濁焉。故動植含潤溼重暗。萬物之所遊天而日影、

至大無所弗容、至小無所弗載。無所弗容、則物沈其內、無所弗載。則氣浮其外。淘沙取金、重者必沈、潰物去粃。輕者必浮。故氣象浮轉中、氣質沈持中。夫天者無象而虛、地者有質而實。無象浮、則有象亦從而浮、有質沈、則本質更沈。故無象更浮於有象、本質更沈於諸質。故天麁於有象、精于失象、地實于有質、虛于失質。蓋夫天者精大、而日者麁小、麁小以居精大、月表一層、日環之、日表一層、影容之、地者堅重、而水者輭輕。輭輕以抱堅重。地上一層水環之、水上一層燥環之。燥影在天之一圓中。而天居坱坱之中。辰以景爲其處、其物陰而能假光、星以影爲其處、其物陽而能發光。然而日行黃道、星管橫極。

地而水燥。

日影者、天中萬物之所散、其物乾燥光明、輕而浮鋪。水燥者、地中萬物之所聚。其物潤溼黷濁、重而下就。動植之二。水陸同有。水則魚龍藻樹、陸則禽獸艸木

運轉之圏反巔趺動植亦資此植本地、動本天、故繫曰影者、雖有象質之分、而總歸天之象、虛其體、色其物、不示聚散之跡、以常其物、循環不已、以東西焉、居水燥者、雖有天地之分、而總歸北之物、實其體、液其物、常露解結之跡、以變其物、鱗比不斷。以昇降焉、於是天地能立、天神能活、天而日影、得氣而東西、地而水燥、得氣而昇降、以全大物、其一已分、陽縕陰絪、大給小資、而大能剖小、剖至零碎、末猶本焉、合歸諸一、本猶末焉、於是物各絪縕給資、又含散小天地、自日影之於星辰、水燥之於動植、以散以變、莫所窮極、於是雖蔦寄生於木杪、蛆化體於肉中、亦末猶本焉、是以沒精露、毻經時居處、神本成物、生化爲通資、大以成、依各以立、在天者、乾燥清明、在地者、潤溼暗濁、天地所有、我廼具之、我之所具天地廼應之。

成于小者資大、成于地者應天、天定運轉環守之方、而地亦中線兩極之位定矣、天更噓喻昇降之地、而地亦發收肅舒之氣變矣。地體一圓塊、其用更一一、天則日照影蔽、日煦影肅、地則晝照夜蔽、春煦秋肅、天氣清淨、物體濁穢、萬物成壞、遊火發水收之中、故氣肅則天清水涸、霜雪凝閉、植枯動蟄、氣煦則天濁溼、動雨露蒸騰、植榮動出、物之應于煦肅也。日照則天明彩見、植而花咲、動而神旺、影蔽則天暗彩沒、植而華合、動而神藏、物之應于照蔽也。天動東西、地動昇降、天動循環、地動鱗比、天象則日月運旋于東西、地象則水火昇降于上下、地陽蒸騰噴陰液、則發雲而昇、結雨而降、天陰肅凝收地陽、則閃電而出、發雷而擊、天者、動而變之體也、而其行則整齊、攸遠而天轉象運、日交月食晝夜定度、冬夏序氣、地者、靜而定之體也、而其行則錯綜、倏忽而風起雨至、霖旱不常、陰晴無定。

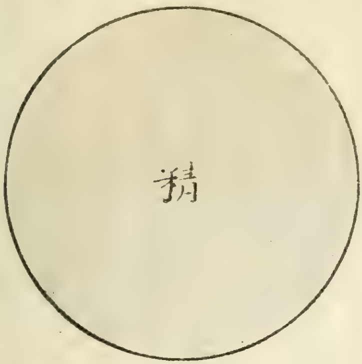
是則天定、神變。歳成于天、運爲于神。廻反比之間也。地者一水土塊。資天之守軸、爲南北、資天之中線、爲東西。天開景影之處、地開水燥之場。至自剖而相偶。則水之高者爲雨、卑者爲水。土之突者爲陸、陷者爲壑。燥領山、水領壑。山居水中爲島嶼、水居陸中爲江湖。八之取以居者山。對水呼陸。土之爲山者大壤二。而其散不知數也。神活物立。以生爲經、以身爲緯。肅而爲冬、舒而爲夏。神旺爲我晝、氣睦爲我夜。我亦分任督中界。而左右前後。有應東西南北。如欲數而盡之。則數盡大物乃始盡。

雖以龎而露。而唯一混含萬有。

天地之露物也。地塊焉中立。天藐焉外居。混淪一球。實天神之體。而一以此而成焉。一之所成即二之所合也。物以虛實而沒露、氣以清濁而隱見。分而張勢也。夫處者、块然容物者也、中定於不偏、外成於無垠。物者塊焉居處者也。乘無內之中、充無外之外。故物以虛爲天體、以實爲地體、氣以轉爲天機、以持爲地機。理以布氣、形以成體。內託諸中、外寄諸處。火華于天、水液于地。宅块块、路袞袞。大地者、物露體、水火者。性見體。天地者、至大之物、形位沒焉機體露焉、水火者。至著之物。性氣隱焉。象質見焉。故形體露物於天地、象質見性於陰陽。形體能合物、象質能分物。是以實體得結而堅、虛氣得動而剛。剛不容龎、堅不停清。轉持分處而天地定位、清濁布氣而象質得處。是以散也與處、合其氣、結也與物成其性。氣物性體。相得而全。是以質實收結、堅重爲地、虛象聚發、柔輕爲象。於是正偶相反、斜偶相比。一反一比。文章如織。我之所居。則水燥之所偶。煦嘘滋液。以認絪縕。象之懸天者。則日月也。日本明體、與影更明暗於地上、月本暗體、與日更明暗於天

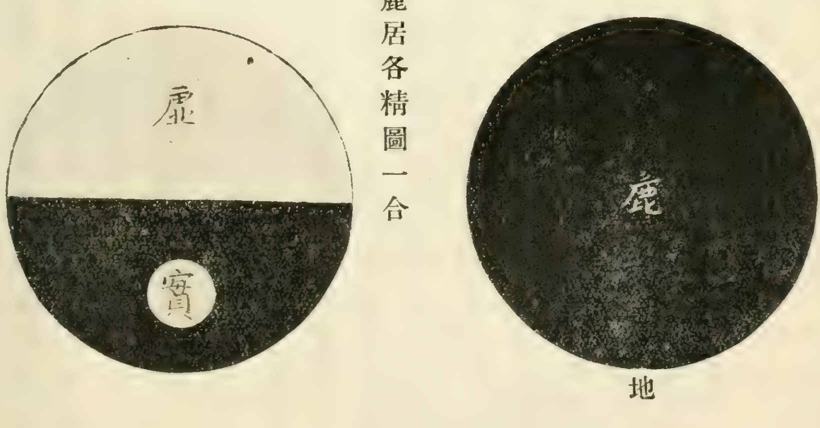
中。日與燥同性。故燥從地之南北而肅舒、月與水同性。故水從月之晦望而消長。日月旋轉于上、水陸羅列上下。於是日月周回、而朔望冬夏爲歲、水燥交錯而雲雷雨雪爲運。神鬱浡其中。絪縕摩盪。各具其本根精英成萬之動植。人者動中之一物。資之乎大。以成己之天地。已成其天地而開其境則并佗天地萬物。與我對。故分物曰人物、分氣曰天人。自人溯天地。則一開大物。境有露沒。我立小中。境有人物。

天容地居圖一合



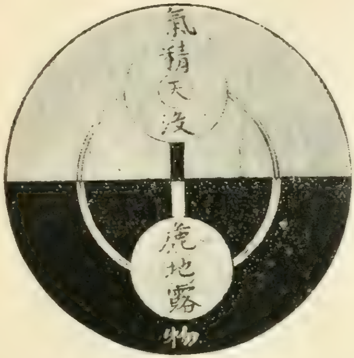
天

各麁居各精圖一合



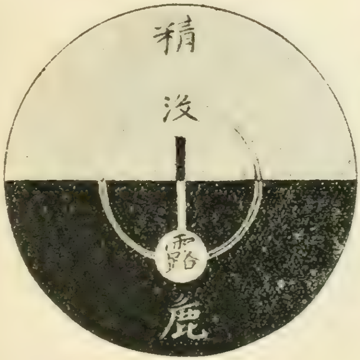
地

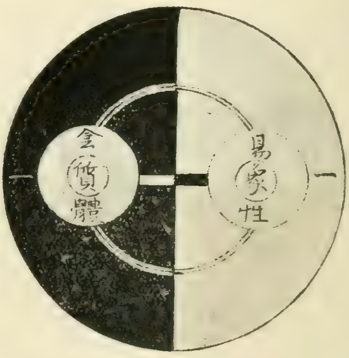
天象地質圖一合



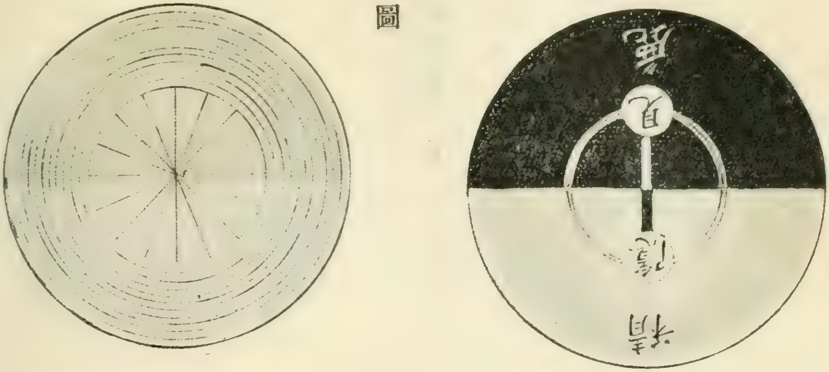


沒露隱見圖一合



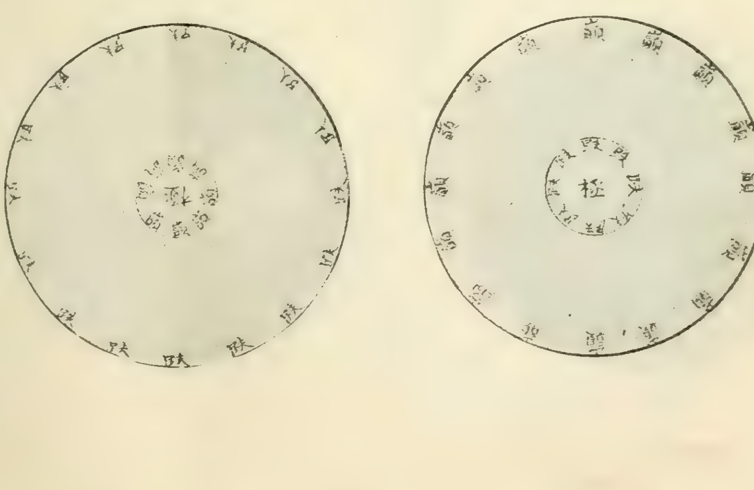


轉持圖



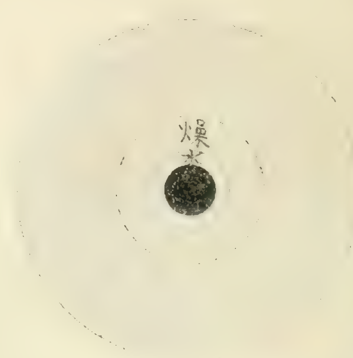
運轉合圏圖一合

上ヲ爲二轉圏一ト、下ヲ爲二運圏一ト



日地分圈圖 一合

水燥與天地合圈、
日影與天地分圈。





覆載圖

天地散結于虛實中外之中、
覆載俯仰于天地上下之中、



四界圖

天位



地位

玄語本宗

玄語

天冊　活部天神

道德有德走勢成之　並圖

天神居宅上路成之　並圖

事物物沒氣露成之　並圖

天命體隱性見成之　並圖

玄語

日本　鎮西　三浦晋　安貞　著

天冊　活部天神

道德

德

一有二、故芒芴之間、如杳、而能浡浡有萬開者、德也、二開一、故鬱浡之中。有得。而能歷歷開一有者。道也。故。德者、天也、一之有也、貌跡自成、道者。神也。二之開也。使爲機狀。剖一對二、經之態也、一分一合。緯之態也。非德、則弗能混有萬開、而沒鑄縫、非道。則弗能粲開一有。而見條理。故。德者、萬緯之所得而爲宅、道者。萬經之所由而爲路。是以。分而分焉、莫所不融、一之偏也、合而合焉。莫所不通。二之貫也。蓋。性體者、託氣物者也、氣物者。有性體者也。性體者、性活體立、氣物者。氣沒物露。夫。活立本一也、一也則不須交接、而足於己、故精奉力立、靈知神感、一體於本根精英、運用於

絪縕給賁、剖對已二也。二也則有用交接而依於佗。故德有勢走。居容路通、爲狀於交隔通融成貌於自使常變。絪縕給賁、造化行茲、自使常變、天命成茲。天有一、故本神本天德之立一也。神開二、故天神本神道之開二也。故本幹物、神運活、而天成之、神爲之神不能徒、本立體於物、物不能死、神活性於氣。惟德以有之、惟道以開之。是以德有道成、道德之所一也、宅容路通、道德之所二也。道者、神也、是以、非本神、則不能混成二而活立、不活立、則不能神物。德者、天也。是以、非天神、則不能粲立一而剖對、不剖對、則不能事物剖也。示條理、對也。幷反比、剖對不已、萬路無竄。混合不已、一有混然。故本神於大物、則活立大物、於散小、則活立散小。精者有而弗遺、麁者融而一也。一之德、有而弗遺、故其道也、開而弗已。二之德、融而一也、故其道也、通而貫焉賁諸一。有而剖析萬露、賁諸一活立而萬生萬活立。各物各性體、各神相發接。親者、反反混合、相得成一。疏者、相持相隔。竝立居一。雖然、得之於條理、歸其所歸。比類而相合矣。疏猶親也。居有物、行有事。故置之於緯、則絪縕之用、感應向背、而見鬼神。置之於經、則營養之活、往來生化、而示造化。宅者、成處、神得物而居、路者、成時、物得神而遊。既已居之、則靡非其有者、既已行之、則靡非其道者。於是。有開爲德、爲成爲道、有者之貌、則自然、其狀則成跡、開者之貌、則若使、其狀則機。爲就德曰天、就道曰神。天亦具道、神亦具德。故有開則天神之德、爲成則天神之道。故天神、則道德之主、名分而各具道德。陰陽之所以不盡也。

合則混然、分則粲然。欲觀其自、則須觀其故、繹其理。欲知其使、則須察其勢、審其力。理者昭昭、故者冥ゝ。勢以能走、力以能持。是以事物、挑理炤之、毫釐無所逃焉、而繹其故、則宜沒其跡。神不以爲己之分。況人

之聰明乎。若以自然爲本然、則孰使之然、若以使然爲本然、則奚容自然。使者、神之貌、自者、天之貌。

有則不有外之者。知有之有、而知無之無。行則不有遺之者。知行之行、而知活之活。

天地活物、故不死。天地有物、故不無。有則偶無而有。是故有者則有、無者則無。夫才有能不能。以相偶焉。是故有者則不能無、無者則不能有。是以其中則闕亦具之、能中則不能亦能之。全之所以全也。而其至散爲萬物。則性隨物、而一具一闕。才隨運而一能一拙。是以具于天者、闕于地。能于陽者、拙于陰。是以具翅則闕手、能飛則拙潛。試諸小、亦與天同。

故天融神通。其自剖者而言也。噫有之宅。雖芒芴如窅、以昭昭之理示之、以冥冥之故沒之以明開其戶、則以幽閉其室。神之所不得而窺。人豈敢視之哉。

言之圍碁。未對局倚奩之中。高下勝敗。千萬變化有於其宅。雖已有諸宅。然神運機動而後高下勝敗。千萬變化。始露於其途。是以。物成則各具其道德。道德已具。則各有其宅。行其道。故爲。則各開其戶。而上其途。成則各歸其宅。而閉其室。

道者經通。不能不走于此。宅者緯塞。不能不容于此。故往則當來者。來則遇往者。觀彼天德、甘此天命。

德者、其所有、道者、其所行。天德自然。而其道也成。神德使然。而其道也爲。故馬者。有行遠者。牛者。有負重者。馬者。行行遠者。牛者。行負重者。乃牛馬之道德也。是故神本則幹運于然。天神則爲成于然。走于牛。走于馬。持于牛持于馬。牛馬之勢力也。所以牛所以馬。以牛以馬。牛馬之故理也。沒中有牛馬。而牛馬出露中。以此推之。天地之所有、則萬物有有焉。蓋神物之所成。即德

性之所爲也。性者、一物者也、物者、二體者也。二之者、有而開焉、一之者、則具而能焉。性才道德之所以分也。居者宅焉、故謂之德、行者路焉、故謂之道。德行諸事、則道、道有諸物、則德。是以車、有旋轉於未旋轉之中、則機觸勢走、以行其旋轉之事於其物、桔槔、有低昂於未低昂之中、則機觸勢走、以行其低昂之事於其物。車與桔槔者、人造也。旋轉低昂者、非人造也。有旋轉低昂、以行旋轉低昂、則其器之道德也。旋轉低昂具、旋轉低昂發規矩之性才也。由具而有之、由發而行之。有具有發、則德、具之發之則神。雖分而混成焉。就聲音言之、發則聲行乎有外、不發則聲有乎閬中。是以一聲具音韻於未發、而後發者聲中能具音韻。

蓋理一一其一、剖析無窮。故爲成之具相絪縕。萬物如此、擾擾萬物如此、擾擾則道德亦與之從。是以精沒奄露、天地如此、

天氣動焉、地質止焉。動能率象而轉、止能載物而持、地寓端於天、天寄中於地。天守中、故動而靜也、地奉端、故止而動焉。徒動則無圓、徒靜則無直。故地雖止、而雲雨則止中動焉、天雖動、而諸象則動中止焉。勢使天圓轉、而猶弗違地之中、力使地直持、而猶弗差天之端。地向外而載天、天向中而裏地、其中間也。日月星辰之所行、山壑河海之所列、推遷轉持之所成。風雨雷霆之所旋、水火艸木之所生、化羽毛鱗介之所出沒也。其至貫之者、則大小有無、不能形之。智慮思索、不能至之。孰能容之、孰能居之。天、目其象、臆其機、以度之、地、摩其質、踏其體、以知之。雖度則不得而逃、而弗能之窮、雖知則可以數、而病於知其爲物。夫黑白之棊子、勝敗相成者、託諸局也。今氣物物乎、何之中、天神事乎、何之中。曰、空、曰

無、舍局而譚棊也、非妄而何、曰實曰有除氣物而索物也、非僞而何、人之觀天地也、其猶觀幕與席乎。囿於堂者、不知幕席也。囿於天地者、不知天地之所以然、不知天地之所以然、則不知天地、駕僞妄以往、雖辨屈千人、於通則未也

清濁隱見象如此

日影者虛體。以明暗露物。明有定象、託無體之天、暗無定象、依有質之地、日者易象也、影者陰氣也、於是物之在暗中者、象而光焉、物之在明中者、質而影焉。故天象能明、地質能暗。如使明可盡、則暗卽絕焉、若使暗可絕、則明卽盡矣。蓋明暗之相追也。明則折秋毫、暗則藏江山、明焉者、天地之氣也、睡覺者、物之從明暗也。唯諸動具意。故開通色之竅於目。故明暗之氣者、睡覺之所應、見不見者、通色竅之不忤明暗也、夫室之於明、明如自外至、則其暗奚去、暗售已充、則明何由入、表之於影、已其所有、則不爲日横斜、若非其所有、則奚自來邪。明暗者、施也、而猶難窺其跡、是故轉則轉焉。持則持焉。明則明焉暗則暗焉。精不與鹿隔、沒而露于其間。

若以絡繹往來、

經一緯一、處坱然塞、則萬物擾擾、聚散解結、時衰然通、則萬期憧憧往來生化。

若以倏忽聚散、

聚者必聚、散者必散、聚者不必聚、散者不必散、非以常也、非以變也、非以自也、非以使也。可聚可散者、乃機也、不能不以聚不能不以散者、乃勢也。爲聚散者、神之入機也、成聚散者、天之收跡也。入機收跡。雖精猶可測也。唯聚則聚焉散則散焉、孰得而端倪。

若布置整齊、若更互錯綜、若懸而列之、若陳而羅之、浴之、沂之、唯其然矣。然矣則莫不然

焉。莫不然焉。則莫遺乎。然。唯閉其室於幽、開其戶於明。難泝其故、易沿其理。開戶沿無居者以上路。路於走其勢、宅維於其力。往者向後來者向前。開閉雖異、而幽明同居、往來雖反、而當遇一會。雖同居、而幽則非明之所開、雖一會、而來則異於往之鬼。德有理故、麁資則通塞、宅有幽明。麁資則明暗。是以。雖一者一一一。而混亦與粲並立明中。明則不幽、幽則不明。是以。幽明者。德之室戶。暗不能蔽、明不能照。不能入其中、不能出其外。終能一之、德之有也。終能貌然。一之貌也。一之所有、神不能違。二之所行。天不能拒。

天者虛也、地者實也。地食天、而天亦實矣、而後其虛者稍精、天者動焉。地者止焉天食地而地亦動焉。而後其靜者稍精。蓋形之正斜、色之淸濁。麁之所對。也、精遂至沒痕。雖精遂沒痕。而猶且與麁並對。是以。其所謂精亦粲立明中。遂爲麁也。是以。幽則精不能入。雖不能入。而神使之與明粲立。

故一天一神。物反力均。

不能不足于此者勢也、能維時于此者。力也。是以。其理可沿、其故難泝。難泝而冥焉之故弗適、可沿而昭。然之理可見。故雖昭昭可見、而冥冥弗可見。雖冥冥弗不見。而亦太昭昭焉。蓋故者其所然、理其以然也。

蓋一一之分合。體用則能隱、天地則能露。宙通宇塞、而天容物居、居者亦容、而大遂之小、小小資大、大則給小、本幹神運、而天體神用。用者亦體、而爲遂之作於是。大物散小物、無意散有意。有意爲人、無意爲天、大物爲天、小物爲物。人者、各物中之一物、意者各神中之一神。人有眇此神物。張勢於彼神物。故天者爲而不思。分而不計。計之、思之、人之能也、計而不盡。思而有失。人之拙也。是故。故者其所、然也、理者其以然也。以然則昭昭、非暗之所蔽、所然則冥冥、

非明之所照冥、冥之中有所既昭、昭之中。有以當所然者冥焉、以然者昭焉、是迺故在未發、理在已發、已然者跡、當然者理、是迺故在已發、理在未發、是以。雖理昭昭而溯于所然、則冥、雖故冥冥而推于當然、則昭、故以冥爲體、跡必隨沒、理以昭爲體、機必隨顯德。有是自然之天、用彼使然之神。爲者則素、成者則文、氣物性體爲爲具、陰陽天地爲成具。

成具則成全、末全則各有其天地、故成具亦小物也、小物則資大、資則小亦全焉、故成具則對有其天地、小物則並有其天地。與全物張勢、故一一之道。分而各張勢。雖各張勢。而彼此相反。彼此相反。則一之所有、乃一亡之也。是以。體者、由氣能體之而體也、用者。由體能用之而用也。物體神用。全之所成也。是以火體燄燄、而用燔灼、水體溶溶而用滋潤、火露燄燄之灼、而沒溶溶之潤、水露溶溶之潤、而沒燄燄之灼。地一大全物。全分偏大之小。小能居大、偏能成全。

物則神之物也、神則物之神也。故天則沒物。袞袞焉、块块焉、經通爲時、緯塞爲處。處者、容物者也、中定而物位焉、時者。運神者也。今見而神游焉、天者精焉、宙以自通、宇以自塞、物者䍐焉、神活。斯中物立斯中。故宙袞袞引而經矣、神得而路之、宇块块要而緯矣。物得而宅之、德能含之、衞能開之。故物自有大小長短。長大能成天地、短小能爲天地、長大居全物中、短小散長大中。成者歸全、散者爲瑣。全以統瑣、其歸也一。全物、弗遺于大、弗出於長、小物皆居大焉。從長焉、萬物與我同。經歷所運轉之氣象、於通中、以期歲日、交接所彼此之氣質、於塞中、以成天地、資其意於神、資其身於物。宇容神、宙牽物、宙路于神、宇宅于物、性活

神、物立體、神行乎宙、物居乎宇。夫性者、精而見神、體者庵而露物。物體神、神用物。故宙以運宇、宇以維宙。本以護神、神以活本。天融神通、天運地立。唯其混焉、莫體弗性、莫性弗體、唯其粲然、氣能沒物、物能隱氣。是以。物塞坱坱之宇、神通袞袞之宙、剖析之所至、散而不已、混一之所成、統而無垠。統則各散歸一、剖則一物瑣碎。性隱而、體露、體沒而才見。是以一一之各有一一。同于一之有一一。有則發之、一之所以二也、一以統二以散、發則有之二之所以一也。散以偏、統以全、所以依資歸一也。是以庵則物露、精則跡沒、立則粲有條理、成則混沒罅縫。

故成具成于全物。

爲成之分如何。於緯則天地、氣物、性體、爲具天覆地載、而日月景影、從袞袞而循環則晝夜成、冬夏成、水燥土石、居坱坱而布列、則雲雨成、山海成、於經則天神、活立幹運、爲爲具神爲天成、而往來解結、從袞袞而競走則循環成、鱗比成、感應當遇、居坱坱而相交、則事物成、天命成。不成則不爲、不爲則不成。姑就小物言之、松柏檜杉、屋之爲具、而屋成則榱題柱桷也、氣液骨肉、人之爲具、而人成則耳目手脚也。是以。其爲者雖即其成者、成者非即其爲者。是以通塞沒露、成宇宙天地、清濁乾潤、成日影水燥、而後日影水燥、從轉居持而交錯、則成者有爲、而又爲中有成。是以日月景影、東西會轉、而爲順逆之行、氣象轉地持、而面背遠近、則晝夜冬夏、成于地上、水火溼燥、昇降依地、而爲發收之氣、氣質運地持而聚散昇降、則雨暘需雪、成于持中、而土石居虛動、載水與燥、水土爲地、燥氣成天、水抱土、則成島嶼、土抱水、則成江湖、高而成山嶽、深而成潭渦、既已成其物、與彼

爲者、終有別也。

陰陽對偶、大小容居。雖陰陽相對、雖大小容居、既已爲各、則彼此之間。不隔者相融、爲隔者相通。以融而天也、以通而神也。融則終一、以有二而然。通者猶二以體隔而然。故於對偶、則陽縕陰絪、於容居則大給小資。其所隔、事物交接、鬼神感應、其所通生化往來、天命當遇。

夫萬物之用、資大依各、反偶比類。以資大、而莫不應天、以依各、而莫不通事、以反而莫不有偶、以比而莫不有類。蓋大物一體、各體相隔、大氣一用、各氣相依。由體爲各、而物物相隔、由用爲反、而氣氣相通、一資一應、大小之間也、一交一接、彼此之道也。接者、體之往來也、交者氣之往來也。大小各有天地、故其勢各張、各各互有天地、故其用依體。故天則天而具天之天地體用、地則地而有地之天地體用、著而日月水火、小而艸木禽獸。其事同焉。此故天地日影之體立、而有轉持照蔽之用、東西上下之位成、而晝夜冬夏之跡定。彼此之所以相依而成然也。故萬物之各具神物、由大物之絪縕。蓋大物者體、而絪縕者用也。隔體有神物、而欲通用於並立之間、於是乎。氣交體接、艸木之於雨露寒暄、鳥獸之於飲啄營窟、皆通隔之事也。用者、行經中、爲于機、定于跡。體者、居緯中。天容之物居之。隔物通氣、彼此不同也。居緯行經、小大亦一也。是故、其體立用行也。神爲往來、天成當遇。往則當來者、來則遇往者。物通往來、謂之生化、事定當遇、謂之天命。

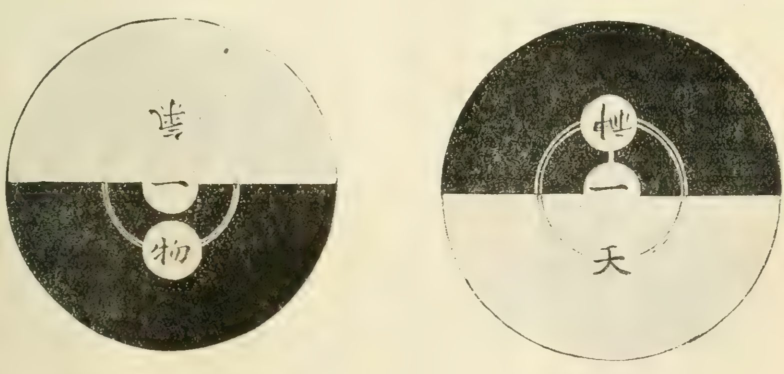
終不得不走于此、終不得于維干此。然而以能冥冥、以能昭昭。

以然者昭、所然者冥。所然者、故、以然者理。於是已然者亦曰故、當然者亦曰理。人觀當然者、未知以然之條理、察已然者、未考

所然之故、統故統理、見則未已交互、今之譚理者、則以理易氣、氣不可沒、故有理氣之說、理者天也、事物之以然也、氣者神也、事物之爲然也、故轉當圓、持當直、則理也、轉爲圓、持爲直、則氣也、况乎其所理者、未得條理之故、局於理非之理、竟以死底之理、抗活底之氣、於是乎、氣活理死、理不生氣、氣則有理、氣之所到、理無不有、理之所在、氣不必隨、譚理者、將以之盡事物、排理者、將除之說事物、借未得理者也、理者、一一之示條理也、故者、混成之沒罅縫也、沒罅縫、則冥冥不示、條理立、則昭昭能燭、故由條理以照事物之所以然、事物無地於逃、雖然、理亦故之偶照者、得得暗而照、暗者、得待明而暗、故理得冥冥之地、而施昭昭、故得昭昭之物、而布冥冥、是以、氣爲事物之然、理照事物之然、蓋理者、能照者也、氣者、能爲者也、是以、人造則理先、天造則氣先、譬如造舟車、先舟而照舟之理、以之造此、果爲載泛之用、先車而照車之理、以之造此、果爲轉持之用、輕虛、理當載而泛、然爲載而泛者、氣也、直圓、理當轉而持、然爲轉而持者、氣也、是所以人造之先理、天造之先氣也、輕虛之所載泛、直圓之所轉持、已有其故也、照當載泛於輕虛、照當轉持於直圓、是故、勝載泛轉持者、其力也、走載泛轉持者、其勞也、當然之理、可由已然之故論、已然之故、可由爲然之氣觀、是故、露者昭灼、沒者溟涬、不可以理而知、不可以數而推、不可以象而狀、不可以神而測、蓋天者能定、地者能變、故於天、則日月之道、運轉之行、勢隨理也、於地、則寒熱之運、風日之行、勢理各行、是故、理則子當孝、臣當忠、氣則子未必孝、臣未必忠、故至勢走、則壓理之當然者、當然者、不能如其不得不然者、何故勢會理、則事物和順、勢忤理。

則事物乖戻。是以。勢易伸於理之上、理難屈於勢之下。故。知理而不知勢、必也誣、知勢而不知理。必也眩。或曰照者智也。非理是未盡也。理者。分有條理。故昭昭以照。然則照者。燭也、目以見之、照者理也。智以知之。故秉燭而行者、無顛倒之患、是理之所以不可晦也、雖失燭而顛倒。而尚倀倀弗可已者。勢也。故假天地以牽之。而勢則不可停也。是以。知勢之所走、而可以處事、知理之所在。而可以曉物。圓轉弗見首尾、直推弗獲標本。沒之與露。孰執其一。已然者、則顧而視之、當然者。則望而惟之。今懸一理於溟涬無朕之前。盡繫事物於此矣。是固雖天地不可廢者。亦不能擔偏重之任。故舍理、理由故。觀其所覆載、而推覆載、觀其所往來。而推往來。

一神一物圖一合



神物剖析圖



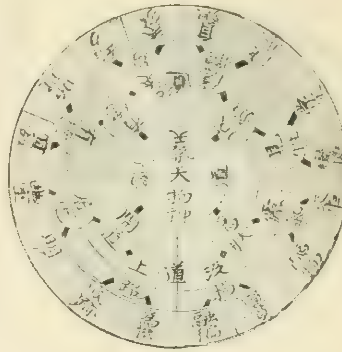
天神本神圖一合



本神天神剖析圖一合



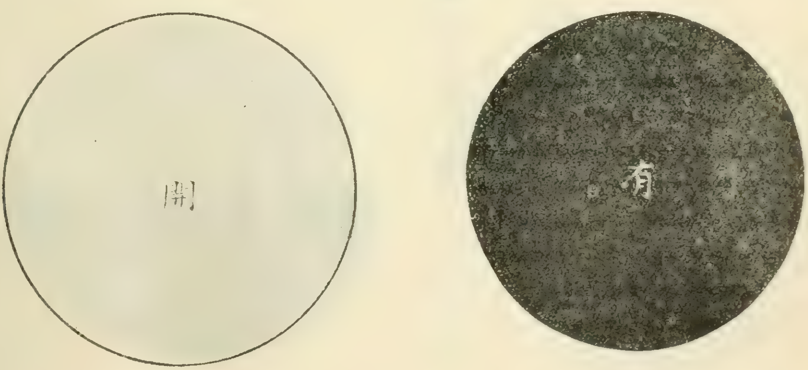




道德混成圖



道德圖一合



天神道德圖



天神

精麁狀貌。莫所遺于有。莫所遺于有。而精麁狀貌。莫所不開。開則一有含之。有則二能發之。由開見居者之有宅。行者之有路。由有見宅之有居者。路之有行者。神者。活而能爲。物者。立而能成。二有於一。一居於二。於是。經沒緯露。物體氣用。剖析之二。則物各氣反。活立相用。則氣交體校。於是。爲者見狀。成者露貌。神爲則事。當其使然而見狀。狀見而其使

然者可見。蓋其狀。以機而發。以跡而收。天成則物。由其自然而露貌。貌露而其自然者可察。蓋其貌。戶開而明。室閉而幽。機者。活之柄。以變而往。以則而立。變則非定規之所測。不識者。尙規規以有意而說。成者。立之體。以然而立。以自而往。然則非神爲之所運。不識者。祇芒芒見有體而說。故機者。發而不已。變而不往。但其天者無意。其人者有意。有意觀無意之天。動輒以禍福災祥擾之。跡者收而不已。定而不換。但其神者有爲。其天者有成。有爲觀無爲之天。動輒以意知技巧窺成狀。以貌而往。貌以狀而立。故狀爲于使然。貌成于自然。自之與使。而狀分于貌。自使合然。而狀合于貌。祇得於然而見貌。失於然而墮自使。如何其然。則然之於混。則貌其混。然之於粲。則貌其粲。故然者。如也。若也。如此也。有意窺窾容意於其正貌。有意窺窾容意於其正

狀失之於天命、誤之於天物。
蓋大物之成。一神一物。物開天地、神開天神。天地者、地物而天氣也、天神者、神物而天氣也。地、物也、故爲天所容。神、物也、故爲天所有。故天地、則沒氣露物、隱性見體。天神則露氣沒物、隱體見性。故天地、結其物而散其氣、天神、貌其物而狀其事。不活而爲孰認氣之神、不立而成孰認物之天。爲成者、神之所行也、戶室者、神之所居也。自者天貌、使者神態。天不先、神不後。天命之狀、天物之貌、若自則如使、何若使則如自、何走此、維此理可沿。故難泝。一居、一行。其有幽、而其發明矣。於是事物之狀貌乃如此。道、則上其路、而歸其宅矣。德、則閉其室、而開其戶焉、閉其戶而上其途、則一萬有畢露、萬態盡見、歸其宅而閉其室、則一有寂焉、鬱浡沒痕。是故、行則路焉、止則宅焉。歸、則莫不止於宅、行、則莫不上於路。行者止、則路即宅焉、居者行、則宅即路焉。道由二而爲其路、德以一而爲其宅。一以混成、二以粲立。一者、粲立之所居、二者、混成之所行。止於居、動于行。居則其宅也、閉其室、開其戶、行則其路也、爲其機成其跡、道、開其戶而行、則上斯路、德、歸斯宅而止、則閉其室。

就宅路言之、則飽露之物也、就道德言之、則精沒之氣也。故行者率從者、而從者有緩急、容者得居者、而居者有廣狹。於是從者絡繹、先後會遶、居者參差、大小錯雜。故爲者機發、成者跡收、發者變而不窮、收者定而不捔。不窮爲玅、不捔爲誠。不窮不捔、以鼓舞事物、以檢束事物。不窮之變、有意不能之得、而以爲不可測也、不捔之定、有爲不能之得、而以爲不可捔也。

是以、一之所立、物居其宅、二之所活、事上其路、就路上分之、地以宅此、天以路此、氣象行乎天、氣質居乎地。天行則地必居、地居則天必行。故鳥不水潛、魚不天翔、移之於人造言。

舟不可推、車不可浮。是以天地一全物、室閉戶開、路通宅容。天自然成、神使若爲。神爲態變、天成態常。以爲而成、以成而爲。爲則以居以行、成則宅也路也。蓋理一一、其一剖析無窮。故爲成二具相絪縕。萬物如此擾擾焉。故天地一大圓物。天懸日月、而代晝夜朔望、地運水火、而施雲雷雨雪。陰陽之成文章於天也、天定方位、而分東西南北。地定山水、而爲湖海島嶼、氣物之成文章於地也。天地乘載、陰陽絪縕、動植擾擾、分棲於無數。人在其中。資物以爲身、資神以爲意、終以有意之神、以勝萬物。能使令萬物。於是我已有此之天地。資規矩之方位、而定東西南北、觀分至之歲時、而準子午卯酉。梯山航海、探方域之所盡、聲主字、聲紀經歷之久近。以聲被主、以意索物、聲主會達、意物錯綜。雖意匠之經營、則不能同焉、而實測之所驗、則不可異焉。陸曼然居水、水邃乎爲海。海渺瀰于中線之南、壤洪曠于中線之北。大壤兩堆。一堆竪于此、一堆橫於中。川谷撩亂于陸、島嶼擁簇于水。南溟最洪渺。其中有壤、探索猶缺審。日月東西、從噓噏而南北。南北之極、一歲更晝夜。中線之地、一歲再冬夏。東西運轉、以成晝夜。南北噓噏以成冬夏。中線之下熱勝、兩極之下寒勝。其間則南北兩帶、互春夏秋冬。而寒熱溫涼交行。地球一塊見半面、則隱半面。故晝夜一半、冬夏並行。人立眇小之地、見半面天地、而居持中昇降之間、不察東西之運轉、觀圓爲平、觀直爲方。故未審實測、則條理弗可繹也。

宙經宇緯、天地與萬物、皆在其容牽之間焉。而神與物、神活路于宙、物立宅于宇。物、氣物也。氣則陰陽、成物於性、而活機行經、物則天地、成物於體、而立物居緯。是以天地巨于宇宙、象質著于天地。象質神機、而行歲運於上下、氣物立體、而爲天地於內外。於是元氣分經緯、而經緯分物。氣物成

天地、陰陽露象質。天地剖對、陰陽絪縕、萬物以化於其間。萬物非萬。惟有動植。動植。分居於水陸、剖類於剛柔。剖析不盡、則非萬之所盡也。夫天地陰陽者。其已成者也。而於動植則爲具也。蓋天地陰陽之成。成於一氣一物之所爲。其體、則天虛地實、轉剛持柔、其形則地直天圓。轉規守矩。體則成於形、物則立於位。於是。明暗寒熱、刻時於其上、發收噓噏。運氣於其下。水燥溼火、布物於持中、而雲雷雨雪。變化於其間。天、清虛而動、地麁實而止。水環地、燥環水、水燥與地合圓、而開地質之天地、日循轉影循日。日影與轉分規。而開天象之天地。天地混淪、坱坱極洪荒、象質絪縕。袞袞爲攸久。體爲虛實、性爲散結。散者、歸虛而之天、結者從實而歸中。故彌結彌實、彌實彌重、沈下不動、凝然立其中、彌散彌虛、彌虛彌輕浮升不停。精以成其外。結者猶有所下、

則莫重於中、散者猶有所上。則莫輕於外。虛實與清濁相得。而物皆見露。色著象質、而水火照蔽通隔、體成于氣物。而天地虛實剛柔。地壤點一圓塊於中央。浮氣載象。夫地者堅密、壞者粗輭。突者成山、拗者成壑。下則地、上則天。水結于解中、而居拗中之天、爲鹹則海、爲淡則水、土解于結中而居突處之天。平則成原。高則成山。合山原曰陸、并淡鹹曰水。陸曼然居燥、壑遂乎積水。山突起入燥、本合而末分、水拗陷充壑。本分而末合、陸在水中、呼爲島嶼、水在陸中。名曰湖澤。蓋日月之所更照蔽地受成冬夏晝夜之文者。地之和天也。雖然地之居持中以持爲天。天中有風恬、以地爲地。地中有山水於是。風恬山水持中開天地。而動植居此壤者粗實、水者密實。實者則能發氣焉、天者精虛。燥者麁虛。虛者則能拒物焉。於是。天者精清、燥者麁濁、地以麁

濁發之、天以精淸拒之、其發會拒而結也、化天爲雨、化地爲水、被拒則不得不之卑、水之行也、天者畜陰、地者蓄陽。地以蓄陽發之。天以蓄陰鬱之。鬱會發而解也。於天爲燥、於地爲潮。鬱則不得不發、高燥之行也。天輕浮無際、地重沈有極。夫物。天地者大、得萬物而容之。萬物者小、得大物而居之。大物者、自立自行、小物者、依立依行。輕重相動、則輕者浮焉、重者沈焉、大小相居、則大者容焉、小者居焉。此故。天而星辰、地而雲雨、小物之性成、其居虛中、地而土石、天而動植、小物之體成、其居實中、而星辰由精、土石由實、其久其體者也、雲雨由氣、動植由虛、其換其體者也。天設緯具塞諸坱坱、以合夫經具通諸袞袞者、陰陽相得、天地正全。是以、天緯中成物、經中成跡、觀其道、而至其德。出則開戶、歸則閉室、奉不揜之誠、仰不明之室。神、經中活氣、通中發機、觀其機、而依其路、往則成焉、來則變焉。仰不測之玅、伴鬱渟之途。

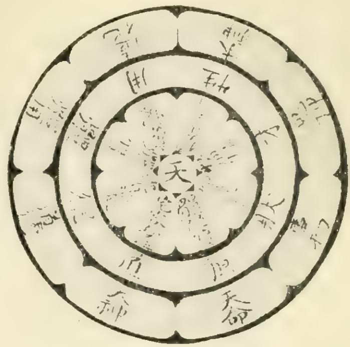
是故。其爲活于機、神于變、其成認于跡、定于常、故氣活物立。氣神而物天也、機神而跡天也。跡成物成、其貌也、發機成跡、其狀也。事者、神之爲于經通之間者、發機收跡、以狀其形、物者、體之成于緯塞之中者、氣活物立、以貌其物。開其戶、則千狀萬貌、畢上其路、順流而往、會來者、則成常定之天、閉其室、則爲成沒露、同居其宅、觸機而發、開有者、則爲變換之神。

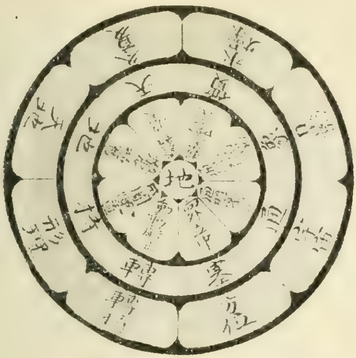
神物爲成圖



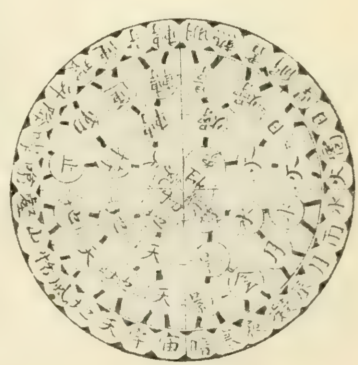
天地爲成圖一合

此圖地冊ノ篇目也今本ノ華液篇舊稿冬夏ニツクル疑ハク改竄ノ及バベル處乎本書ハ安永中ノ淨本トミエタリ





天地象質成之圖



歲運天地成之圖



事物

一者無痕、剖析著痕、痕著而物露、物露而貌成。貌成則天地之成功也。蓋其痕著物露。以有如此者、以立如此者、如此者必不隻立。必得其反而偶。故。露中、則氣沒物露、性隱體見、沒中。則物沒氣露。性見體隱。蓋道開一一。陰陽對立。對立相隔、則一移居二、二交相合則二融成一。故。一而有二則全中有偏、一中雙隻。則一能移二。故箇箇。能隻中自偶、偏中自全。於是。擧一毫、而無遺于天地、擧天地而有觀于一隻。夫剖對者。經緯也。剖則對。焉、分則合矣。不獲不彼此相織也。既已彼此相織。正傍更互。有親疏、有客主。有相繼、有相然。箇箇繼然、氣氣交錯。竟露其氣、見其性矣。蓋物剖各體。而各物有各氣。體析則氣分。氣分而物小。分之於派、同之於源。故物。資之於地之幹立、而幹持並立、資之於天之活爲。而活運相交。分則隔焉、隔焉則並立、合則通焉。通焉則相交。於是。體體相接、氣氣相交。體體然立。廼物也、氣氣相交。廼事也。物惟如此、是之謂貌、氣能運才。是之謂狀。物能露其體、而沒其貌、氣能隱其性。而見其狀。於是。物立於條理整齊之中、事行於各態紛雜之間。條理整齊者、天成之定貌、各態紛雜者。神爲之變狀。神以機而變、人不能測其變、贊其主、以爲神、名其態、以爲妙、天以跡而定。人不能拚其定。贊其主。以爲天。名其跡。以爲誠。機變之神爲、就感應、而認其性、跡定之天成。觀當遇、而、認其體。經者、神之所遊、而緯者。天之所成也。若剖析之於經緯之中。則緯中、其天、物以本氣立、而不易焉、神以神氣活、而不定焉、經中。神。機變不測。天。跡定不拚。

各物各形、各氣各態。各氣各定其態、各活各變其機。爲成變機、天神定態。事物、其天地也、機態。其天神也。變焉者何、天變于常中、神爲于成中、定焉者何。天常于變中。神成于爲中。

是以。天能立物、物能體於天、以天立物、而天態能常、物態能定、神能活氣、氣能用於神、以神活氣、而神態能變、物態能換。

天以成爲其道、神以爲爲其道、物者天成也、神者神爲也。是以。中止外靜、而地定天定。故天能常其天、地能常其地、機發活運、而神變物換。故神能變其神、物能換其物。蓋其常者亦變、雖變而始者、則終能始、起者則滅又起、變亦常矣、其變者亦定、雖定而逝者不再返、化者不復蘇。常亦變矣。是以。各活運動于天中、則其態雖變、而居常中、各體幹立于神中、則其態雖定、而行變中。

言之於小、以徵之於大。蓋身之爲身、惟我之一身焉爾。親子以愛而交、男女以感而交。於喜而笑、於憂而泣、酒則醉焉、舟則注焉、餌則能肥、毒則能死。其所交異、則其所應變焉。故天地正反。以散偶結。而日地正比、以熱偶寒、日水傍比、以潤偶乾。日影反於上、明暗有偶、水燥反於下、滋煦有偶。從交接之感應、而性之所見弗同。又言之於聲味、鐘鼓之懸、桴梃同一物、而洪纖則從其叩、鼐鼎之設、水火同一性、而苦甘則從其和。故非其性異、而當物見狀、從所交而變化不同也。是所謂各物各形、各氣各態、事物之所以紛擾錯雜於條理整齊之中也。

山有艸木土石、人有饑寒疾病、相得有溫飽藥毒、物有聲色臭味、人有耳目鼻舌、相得有視聽聞味、絪縕感應、變化千萬。是以。其以己會物、會父會子、會君會臣、會雨會日、會夷會險、會而絪縕感應、會異而才運別矣。各各分境、所以爲天地者異也。是故。陸物死于水、水物死于陸、鐵者剛于斫物、而柔于接鹽也、水者柔于入口、而剛于滅火也。

是以。本是一元之氣。一氣活其性、大物立其

體氣物剖析、體用交接。露者沒、沒者露。物各有其氣物。則態從其物而異也。雖異而不外常變矣。常者天態也、變者神態也。活機能變、物態能定。物者體也。氣用其體。各體相隔、各氣相交。體體曰接、氣氣曰交。

各體相隔、自佗分客主、各性相交。剛柔分雌雄。體以相隔而接不交、故金石不相入、水火能相滅、氣以相通而交不隔。故機形能相容。聲色互相居。移之於人言。乎之執器、足之踏地、飲食之入內、衣服之被外、共體之接也、憂喜之發心。愛憎之感情。聲音之於耳。文彩之於目。皆氣之交也。氣物之交接。其有定度者、則寒熱之爲冬夏、明暗之爲晝夜、莫所違于誠矣、其無定期者、則突然而雷起風生。倏乎而山崩海涌。莫所認于變焉。勢之所走、主以轉客、機之所變。雌以勝雄。

動則往來運轉、止則居止環守。日月會轉、則有順逆交蝕之事、水陸會象、則有凝融開閉之事。故體成物之貌、用爲事之狀。事狀神用之、物貌天體之。爲有天神、成有氣物。物則成而其體不變、氣則成而其跡定矣。體有天地之成體、跡有天命之成跡。蓋爲有神物。物交而其事變焉、神通而其事換焉。換有造化之通氣、變有鬼神之活態。天地成物於坱坱而塞之中、造化爲事於衰衰而通之中。鬼神盡氣物交接之變化、天命遂往來當遇之成功。氣物性體。以天物氣機而爲。則天地成于物、歲運成于氣。通塞用事、宇宙體物、動止用事。轉持體物。所往皆然也。一氣一物。廼天地陰陽。其活廼神、其立廼物。有之廼天、發之廼神。以有而物立體、以發而氣活用。體立而物露、用爲而事露。一剖而各立焉。以各之立而隔、以一之剖而通。天地相隔、造化相通。動植相隔、生育有依。

以隔觀之、則火發而盡物、水收而生物、以

通觀之、則火以水而立。水由火而存。是以通、則天地萬物、與我不隔、隔則耳目鼻舌、各隔其用。

故。天地萬物之並立也、皆以其隔也、天地萬物之給資也、皆以其通也。蓋。天者、定常之宅、故事定焉、地者。變化之藪。故事變焉。定常則數以推之、變化則其機不測。會違親疏、順逆成敗。大物有給、小物有資、資者、弗遺天地、給者。弗盡于小植、則冷止無意、堅剛堅立之生、動則溫動有意。柔輭横動之生。平分一一、予奪相反、而我則遊有意之境、溫動之體、神靈之用。爲技以能伸萬物。上下內外。前後左右。應酬最廣。曆于天行、史于人事、守則城郭宮室、衣服飲食、法度戒嚴、禦則干戈兵革。祈禳鍼藥。關門藩鎮。惡則賊害殺奪、愛則予活施譽。航海棧山、墾土煮海。其事。則非數之所盡。有天、則有天命、有神、則有感應、意匠終有天人酬酢之事、有物。則有通隔、有事。則有開閉

意匠能有信否奉覆之事。定常之宅、誠旺其中、變化之藪、神旺其中。

各各剖析。條理井然。彼此交接。運爲變錯。剖析成體性於條理、交接成事物於變錯。藁本艸中之一種。鹽亦水中之一味。水鼠者水蟲。蛞蝓者陸蟲。條理自有其分。而水鼠見藁則流、蛞蝓見鹽則爛。各性感應。雌雄相分。夫物立神運。事有會違。今姑言之於日。當與月會違、則明晦爲事、水物隨其事、以爲盛衰、當與月會違、則照蔽爲事。陸物隨其事、以爲動息。氷以澌此、水以涸此、膏以融此、肉以壞此。彼此錯雜。千萬變狀。是以。人隨所遇之夷險順逆。絪縕以出喜怒憂樂。千萬之變狀。於是。酬醋黜陟之間。有殺活予奪之事。遇雨、而後其事千萬于接雨、遇風。而後其事千萬于交風。是以。物以條理立、事以運爲變。以事觀物、運爲變錯、在條理整齊之中、以物觀事。條理整齊。

在運爲變錯之中。是以條理整齊中、亦自有天地。運爲變錯中、亦自有天地。一德融彼此。二德通彼此。於是爲則一氣之業成則大物之功。業立功成。狀貌沒露。

一分、一合。不合則不分。不分則不合。非陰則不能合陽。而陰則與陽反。非地則不能合天。而地則與天反。合者則一。分者則二。分則彼此相反。二則彼此相隔。蓋一大全物中成具。則並立成天地。萬物則並成立天地。是以成具。分一有對彼此。萬物資一有對彼此剖析之道。一剖一一。一能移二。一能移二。則末猶本。以末猶本剖析弗見所盡焉。是以體析彼此分。彼此體隔。彼此氣反。以反而合。以隔而通。彼此相立。各活其氣。是故並立一中。者各活立其氣物。得偶相合。得與相伴。紛紛擾擾居行其間。則無一不交接。接有客主。交有雌雄。客於此者、主於彼焉。雄於此者雌於彼焉。本立彼

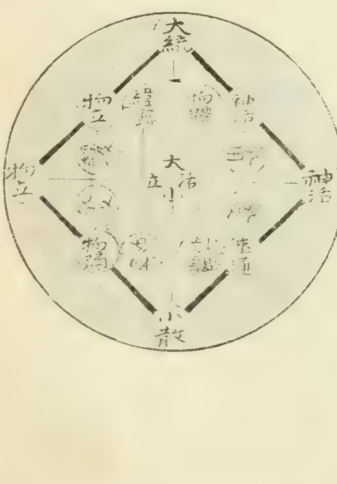
此之體。神活交接之用。其體則物、其用則事。各體運各才。偶與與。同相交接。是之謂事物。條理經緯也。交接以織之。其立物之體。收事之跡者。經緯相織。猨狖鵷鸞。華卉烟霞。以成錦文也。是以物各自立其體。行其用。則立者相羣。行者相交。剖析而各氣各物。井然整齊。交接而各事各物。雜然爲文。各物各體性。各才相發接。於是米麴之才釀酒。金石之才生火。水遇寒而結氷雪。燥鬱熱而激雷霆。山島湖澤。自水土相接而成。雲煙雨露。自水燥相交而起。交接則隔通反合。感應以絪縕焉。動植之所以成于成具中。而其雜糅。條理之所以結也。絪縕之態。時通率塞者。處塞容通者。地質止而轉天氣。天氣轉而持地質。火喩地之陰澤。水喩天之陽華。牡能給牝。子能資母。物之得偶而行其用也。金而遇人。歷水火之煉淬。而斫木穿石。麻而遇人。歷績縹之事。

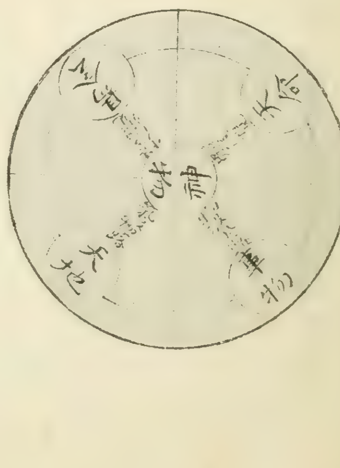
而衣人網魚。物之得與。而爲其用也。其性類者相親、狗守人門、雞伏鷲卵。性反者相畏。蛞蝓伏蛇。礜石殺鼠。是故。日月星辰者、物之立于天也、各體各行、循環爲期、會遌時變、山川水火者物之立于地也。各體各立。交接爲事。感應運體。於是。亦絪縕化物。保營護物。故地日爲晝夜、日月爲朔望。地物交日、而有蕭舒之事、水物交月。而有盈虛之事。艸木遇日、而華葉子苗、鳥獸遇日。而孳尾氄毛。會偶則偶、會與則與。靡弗絪縕其間焉。夫物已各成其物。物成而已。此則此爲主。佗爲客。己已有成。則天地雖大。萬物雖衆。則合之與己張主客之勢也。張則一彼一此。雖一彼一此。分張其勢。而彼則大衆、此則小孤。雖小且孤。而弗乏于應衆大焉。故物每遇他物。能與其物對。而感應絪縕。有爲于其間也。於是各物各體性。各才感應絪縕。夫物各立其體。各發其才。

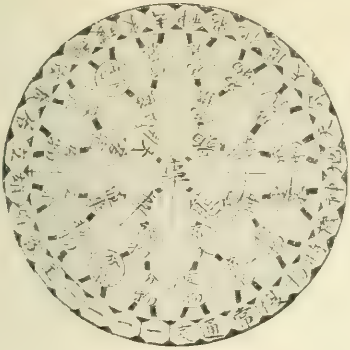
無反無與。借能感應絪縕者。以同有於一也。知通則感應。氣等同異。才區能拙雌雄向背。交接益廣。其事無窮也。不著條理之正。等於錦文絢爛于狻猊鵕鸃華卉煙霞。而經緯之巧。隱隱乎其中也。姑移之於人。己已成此天地也。大物之洪曠。萬物之紛擾。爲佗於己。而與己爲二也。自大物則動植竝立天地之中。植資本氣而立于體者多、動資神氣。而立于氣者多。人者。動中之一物。以意爲之巧。觀天地之情於髣髴故。二其物、曰人物、二其氣曰天人。於是己能與物張勢。取與我張勢者。以爲己之用。於是乎。物皆爲己之有矣。曆象日月星辰、疆域山原河海、資死生通塞、而施殺活予奪、資保營奉役。而設服食使令。天則不露爲之痕、人則運諸心思。施諸言行。衰衰之通、則置漏立表、块块之塞。則建方定位。觀理建道、由居成德。時榮茂而耕耘、相方穎而

收獲察土石之結、竊造化而造陶瓦、考滋味之成、假絪縕而釀酒醴。是以其所運遠則水火動植。近則君臣父子。轉勢力而爲權柄、修知通而爲禮教。各各本隔體。隔體本一。有隔則不通、一則不隔。是以通則天地爲一、隔則目不視背。隔本粲立之狀、一是混成之體、人偏立人之地。以意爲之能。受意爲之祟。隔則不通、合則相淆。是以體通與天地融一、執隔與天地爲間。於心思、則悟惑、於設施則慕戮。是以物隨條理分、事以交接合。以偶合者、合其素合者、以與合者合其素分者。故錯雜變化、事多於物。雖與而相合、則彼此之體性。感應絪縕。猶反合天地之感應絪縕。

事通物隔圖









天命

運爲之狀、迺一氣之業、幹立之貌、迺大物之功。體者、成二者、條理整齊、性者、成一者、通隔紛雜、以紛雜、而隱條理整齊之體、以整齊而見通隔紛雜之用。是以神爲于經、變化假路於此、天成于緯、定常占宅於此、爲中、則機發變化、跡收定常、成中。則物露立體、物沒成貌。體貌成立、以觀天焉、變化定常、以立命焉。故天命者。一氣之所業、大物之成功也。是故。氣物成而天地立、一一立而陰陽成、於是、天定其動、而運轉環守、地定其靜、而虛實覆載、陰陽成物、日月水火、文章絪縕、動植成於其間、天之立物也、經緯分而往來成。各各運而當遇定。於是經變其行、而往來生化緯變其居、而將迎會違各各當遇消長失得神靈活運、體跡定於其間。命之收跡也。是以天命之所成。各各並立。氣物相交。分之則氣物相交、迺其事、性才相運。迺其態。神爲變化機於當今

者、廼其狀、天成定認跡於既往者、廼其貌、是以。狀雖變化無測。終立貌之本然。本然則一有之德。能有自之與使之然。故物莫非其體。而其體、塞天地、不盡于天地。其氣、通往來、不盡于往來。充目、而弗可視。盈耳、而弗可聽。變之於無測。亦復如此。定之於不揜。亦復如此。如此而後物體立焉。蓋往來者。當遇之所成也。命之所立也。命中分之。當則天、遇則命。機來不窮、跡定不揜。各神各體。往來交接。向背會違。常變不一。是故。時處通塞。運轉升降。反偶之絪縕、與偶之感應。莫有不往來者矣。往則必遇、來則必當。當則天焉、遇則地焉。天當弗可避。故有天之名。地遇弗獲不從而受。故有命之名。蓋處者、地也、來者、時也。來者去、處者往。來則當焉、往則遇焉。故來當時也。就成爲天、處遇地也。由受爲命。成者天也、處者地也。故成處亦天地也。故日月旋轉者、有爲于成中也、晝夜冬夏者、有成于爲中也。故殺活予奪者、人之爲也、死生竆達者、天之成也。於是乎。天命之當遇。天人一也。往而遇焉、來而當焉。神靈之用見焉。生化天命之事成焉。生化、往來也神之所運用。機焉、跡焉、天命、當遇也。天之所成立。通矣塞矣。合之無罅縫、分之有條理。以有條理。其本。體也、性也、氣也。物也。於是。各物各體性、各氣相發接。於是。氣爲事、物爲物。事有往來、物有天命。

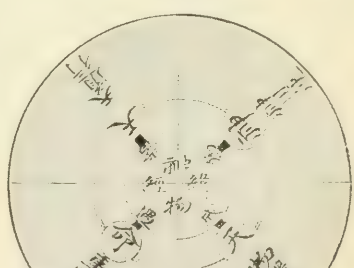
當有順逆、遇有會違。

神爲往來、天成當遇。往則遇焉、來則當焉。雖然。往來與當遇不同也。蓋萬之事物。莫非神爲。神之所爲。莫非天收矣。言之於人事。如越人之胡。胡人之越。蓋其之也。各神之爲也。而其會違則非神爲也。是以。一者精。而其神未可窺也。一一剖對。各神各相用。是故。氣轉象運、而東西南北成、日動影追、而晝夜冬夏成。東西得日月、而歲月成、

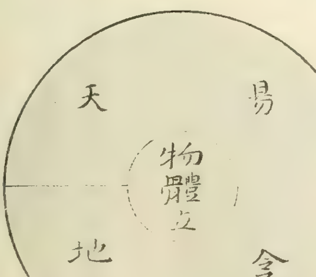
拗突得水燥而水陸成。氣象鼓于上、氣質應乎下。而動植之榮枯啓蟄成乎其中。人。善惡成悅怨、是非成榮辱。是故雖活運變化無非其績者。而至其成功者則神不與也。大矣哉。天之爲道。神盡變化之妙。而收其功焉。無爲而成。氣亦居天中。且人以一小氣物臨精大天地。動輙眩神爲之妙、瞻天成之誠。

神往來、而天當遇焉。雖不往來則無所當遇其天成。神爲弗與矣。神爲弗與而觀氣亦居天中。當遇著痕。觀天亦與神爲伍也。天與神爲伍而觀氣用之行焉。蓋人之開境。執意事作。其爲氣也亷、其爲物也小。執亷小、窺精大。以有於己之意技、弄非我之天命。頑嚚爲崇者多。故物體立、事狀定。往來爲、當遇成。弗能達此。言不背天地可也。

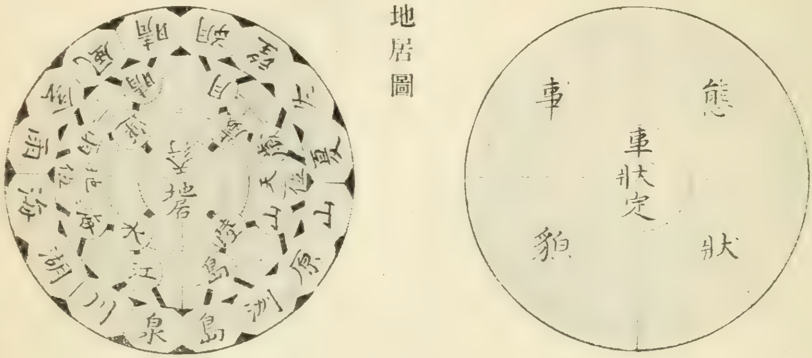
天命圖



體立狀定圖一合



天行地居圖



神運體立圖



玄語

天冊　立部本神

玄語

日本　鎭西　三浦晉　安貞　著

天冊　立部本神

本神　本

鬱渟不以混淪則靡所歸、混淪不以鬱渟則靡所運、不以則莫所成、則一也、以之則歸運、則二也。一則無可恃之侘、故其然者自也、二則有所待之一、故其然者使焉。以二鬱渟能活、混淪能立、以一鬱渟活混淪、混淪立鬱渟。鬱渟雖氣也、物不吐之、混淪雖物也、氣能食之。故鬱渟亦有有之之天、混淪亦有容之之地。故混淪開之、則有容之之地、鬱渟開之、則有有之之天。天則沒而通塞、地則露而覆載、神則麁而活立、天則精而有開、莫所不有、莫所不開、是以天貌如此、莫所不活、莫所不立。是以地體如此。立也則天亦地、活也則地亦天。合處沒鑄縱、故天精沒有其神、地麁露開

其天分處見條理。故天有開其德。神爲成其道。天中物神。物中氣神。物中氣神者。本神之活立。天中物神者。天神之爲成。地亦天。則神神卽一。天亦地則天者卽本。

本一也。故宇宙亦天地。本神亦天神。能二也。故宇宙轉持。天地水火。天神道德。本神體用剖折不盡。物而條理整齊。事而交接錯雜。一天一地。天有神。地冐天。有之開之。活之立之。於是天神岐本神。天地岐宇宙。天氣而有開神物。地物而活立神物。自本立神活。則物物而神氣也。自天有神開。則天氣而神物也。物神之天者。精而莫所不有。雖精而已。莫所不有。則天亦地。於地焉。氣神之本者。麁而莫所不立。雖麁而已。莫所不立。則本亦神。於神焉。於是乎。一卽一一。一一卽一天。莫所弗有。神莫所弗露。天有神本。開活開立。其體則一一。其性則分合。大物全一。故活立自成。陰陽立二。故爲使活立。是以混淪能立。鬱淳能活。天能含小。小能資大。故雖小物已成。其一。則鬱淳混淪資爲己之有。一之分二。以反爲偶。小之資大。以應成己。故有於己者。資於天者也。在於己者。反於天者也。本氣立混淪之物。神氣運鬱淳之活。本氣以天地陰陽爲體。奉之於天。保之於己者。其性也。以絪縕給資爲用。知之於己。運之於佗者。其才也。一體一性。體具用。性活才。故本氣之立。能奉其神。能立其物。立者。則保外持內。奉者。則奉己役佗。

活則爲焉。成則立焉。蓋其立也。內能有持。外能有保。保者。天之用也。持者。地之用也。自外保則自內護焉。於外而持。則於內而守。保護持守。於所成則天與萬物同。故大物。則天轉自外保地。地持自內營天。地止於內守。天容於外持。人氣自外保身。質自內營外。精於內守。皮於外持。營者。絪縕于天。運爲于人。養者。相給于天。飲食于人。

氣保、則有用于營養、精奉則有運于知感、混淪之體、弗運其神、體具而弗用、若偶人之失機關焉、鬱浡之神、弗體其物、氣動而無託、若大虛之起風颷焉、保營者、氣之守物也、奉運者、物之出氣也、奉者、一精一力、精有奉、力有役、運者、一神一靈、靈有知、神有通、

臣以奉君、其奉者外有以保內、有以護持之守之、於是其君者外有藩屏之保、內有傅保之教、鎭重以持之、法度以守之、故君之明無所蔽、其聰無所塞、君民一體、士勤于事、農力于耕、工走于職、商走于交、此給之彼資之、則其養意以思、技以爲則營、人事之所然、廼天之所給、慣有所應、不探所資者、涉流不知原也、既已得其所資、此言君民者、擧其一端而已、

夫混淪以實體而立、幹之者、營其實體之立、而以行經、鬱浡以精氣而活、運之者、運其精氣之活、而以立緯、保之奉之、營之養之、

地者陰結、日者陽聚、是以地噏陽於天、而噴於地、天噏陰於地而噴於天、景者、日所噴陰之氣、水者、地所噴陽之質、水生燥中、火生水中、火噏則溼生、水噏而乾成、是故日近則雨澤浮潤、日遠則水液枯涸、以水灌火、則火噏水、以火煮水、則水噏火、水之噏火也、適其可、則養其體、過其量、則失其體、火之噏水也、適其可、則養其體、過其量則失其體、火山熱池、得雨而燃、炭火油燈含水而存、給資以相養也、動植同有保營、而動、則發于牡、而收于牝、植則發于華、而收于實、絪縕之營、進者生、去者化、天地給資、陰陽絪縕、本能保其體、神能運其氣、保以立之於洪曠、奉以行之於攸久、保之奉之者、精也、精者隱乎物中者也、氣物已立、而奉其神、使之知運、保其物、成之性體、一也、以奉之、二也、以相役、行經、立緯、動靜通塞、絪縕給資、莫非爲一伸其才力執役、而其權全在

精。蓋一者自成、散者依成混淪之體、鬱渟之神、不窕洪曠、不疲攸久、轉換之體、倏忽之神、晝小天地、盲小造化、雖小、而鱗比不斷、雖小、而天地悉具、則神通洪曠、體傳攸久、給者不闕、資者何盡、精立而力役、外保內持、綢繆給資、萬物並出、萬事並起、起者居斯中、出者隱斯中、物雖大也、而爲之所保而立、神雖妙也、而爲之所奉而活、且以我之所資言之乎、夫意者、我之神之活、自者、我之體之立、精隱其間、華見其表、保持以保我之生、給資以養我之生、奉運以成我之物、綢繆以繼我之後、保物而奉其神、運神而役其物、心以此權役肢體、身以此力保肢體、國家之奉君、君上之役下、善觀、則隱見雖隔、精僞本一。

活立爲體用、幹運爲性才、氣之用迺天、物之體迺物、性幹之者迺精、才運之者迺神。

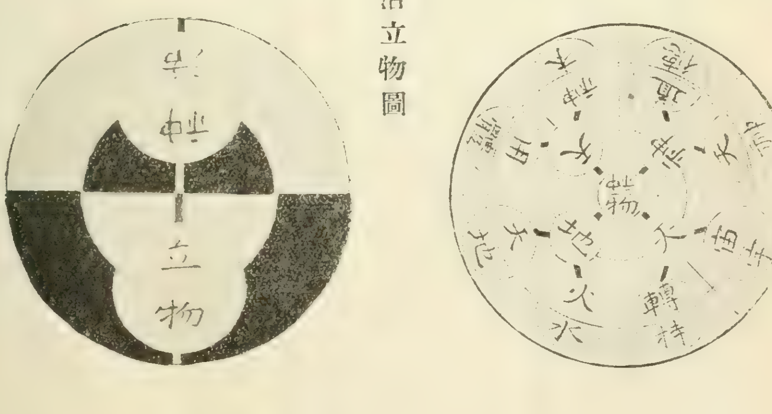
天物精神、合於本根精英故、本氣也根物也乃天地也、天地之外、豈有佗哉、隱而體之者迺精、見而此出者、迺華、故見露莫非華焉、隱沒莫非精焉、非精則神莫所依、非神則精莫所奉、蓋夫一者無外、散者有外、無外者自立、有外者並立、自立者自能保營奉運、並立者能相保營奉運、是以保營奉運者同有、而自與相則相隔、移之於火言之乎、夫一點之燈火、籠以保之、臺以持之、神以營之、膏以養之、其無知乎、擇乾就之、擇溼避之、其無所運乎、運明於燃、運熱於燒、是以近則葛裘飮食、遠則宮牆器貨、以爲保營己也、近則思惟營作、遠則使令習學、以爲奉運己也、是以內用保營奉運、則外亦有保營奉運、故知通天下之故、力役天下之物、有則之於天地、則擴業於天地、傳世於無窮、天地奚拒之、知所給、而觀所資、本猶如末、觀所資而察所給、末猶如本也、本末共同、自相何隔、象質者、發收之物、噓噏者、發收之氣、保之者精力、運之

者、神靈靈知神通、精奉力役天象、滾滾而運轉、地質擾擾而往來。運轉者、知其定期、往來者、通其變化。芸芸焉、擾擾焉、各氣物之相立。莫非各神靈之運之也。

神物剖析圖一合



神活立物圖

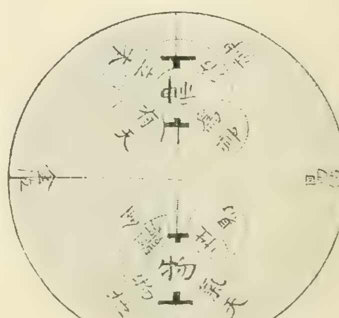


本神天神圖一合

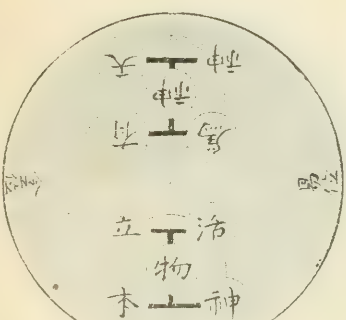




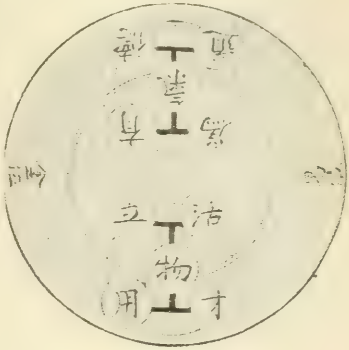
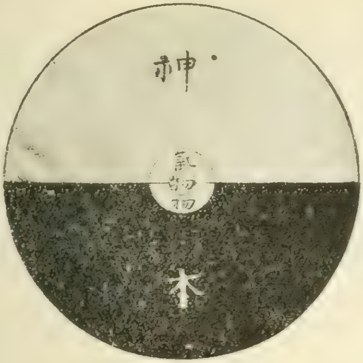
神物合圖



性才道德圖一合

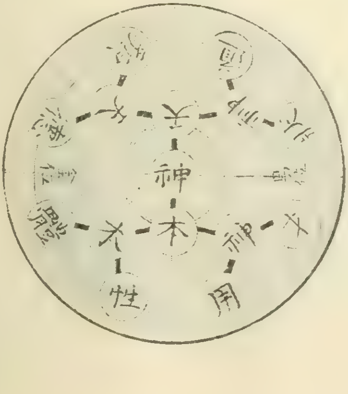


本神天神反氣物圖

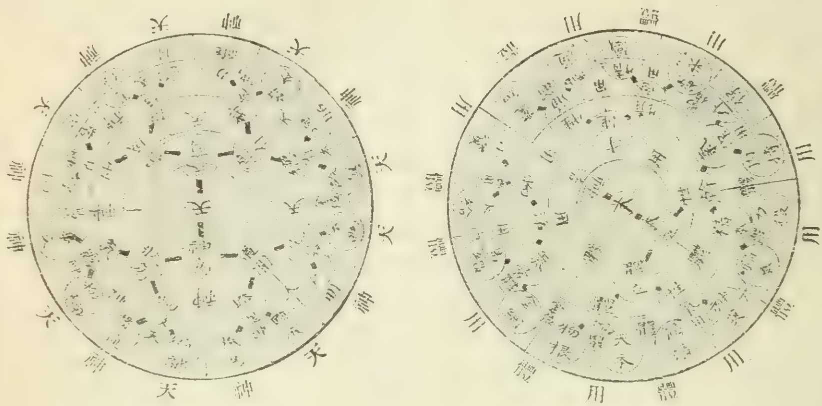



天本合圖

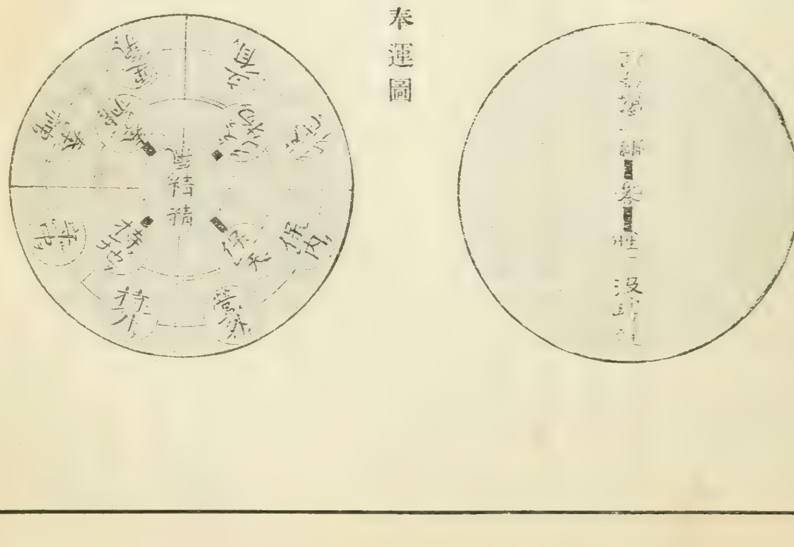




本神天神圖一合



保持奉運圖



鬼神

神

性剖而體二也、體合而性一也、是以一能一一、一能一二、反合一、一移居二、夫物能奉神、神能役物、役物者、活而運、奉神者、保而持、是故、神之妙、在感通焉、蓋一二則分體而竝立、二一則反性而相容、若無感通之運、孰見相容之痕、若無竝立之體、孰認條理之分、竝立而體相隔、相容而性相通、通則知焉、知則感焉、感則欲焉、通則性感、則情然而通偶知、而有神靈之別、感分求而有情欲之分、通不能不待蔽、知不能不因冥、感不能無應、欲不能無惡、神靈情欲相得、而其活者始運、夫性全其一、則其才不能二、體立其二、則其才不能一、以不能二也、遇物而莫所不通、以不能一也、剖物而莫所不隔、通而運焉、乃神之活、隔而立焉、乃物之立、一能一一、一移居二、則其所散不盡、一與不盡、物之所立、乃神之所活也、一一即一、二反合一、則其合者變、態變態合一、異之所立、乃一之所居也、故自成者、亦有立而運、依成者亦有立而運、雖活立無所不在、其態則隨處而異、故神活物立、宙通宇塞、神爲天成、天動地止、自水火之發收、冬夏之噓噏、一氣之絪縕、小物之生化、至微秒倏忽、弗遺乎活立矣、自一之所通而觀之、則神運即本立、本立即神運、然而立物者精、能隱物中、運氣者神、能見物表、夫神者、以爲爲道、天者、以有爲德、天者以成爲道、神者以活爲德、故天成而不揜、神爲而不測、不揜者定常之地、不測者變化之氣、神妙乎物、物誠乎神、是以神者物之主、以誠爲範、物者神之器、以活爲立、通動活于本氣、感通活于神氣、神者沒物、物者露物、各各立物、氣物交接、通蔽知冥、才之巧拙、由自立而有此運、感應好惡、情之酬酢、自交佗而有此運、蓋經能剖析、緯能對待、剖析盡變化、對待反氣物、相通蔽則性之才、相知冥則性之靈、感應好惡之酬酢、

則情之運態也。大物有此神靈情欲、小物爲意智情欲。資物爲自、資神爲心。人境之所以開也。故天人之性情、反其態、同其聲。聲者、人之所作、而主者、天之所成也。聲之同與異、天不與焉。神靈情欲、於我爲意智情慾、以性之一、而能通能知、以體之隔、而能蔽能宜。天地不通蔽、則人資蔽悟於何。天地不知冥、則人資智愚於何。感應好惡同然焉。以異物、而反意之有無、以一性而同氣之感通。蓋物之異、莫異於反、物之同、莫同於合。故其至合者、便至反者。反體能相隔、合氣能相通。於是乎、無不隔之物、無不通之才。其才亦謂之爲神。蓋神之通、其靈處能知、雖莫所不通、雖莫所不知、而見剖於體、則不能不以蔽而偶、不能不以冥而偶。一有之中、如此相反、無不二之體、無不一之性。蓋情之感、其親處有求。雖無所不分、雖無所不反、而見合於性則不能不應於感、不能不惡於求。對待之間、如此酬酢。夫人、眇一氣物、資於大物之所給、立於與物之所依體、以歧然、換彼混淪、神以耿耿擬彼鬱浡、反天而後以得人矣。既能反于天、於是合于天。天以無意之神靈情欲而給、人以有意之意智情慾而資。反有意於無意、而彼此之神物活立於一有之中。反者能合、則人可通於天。合者能反、則天亦冥于人。且感應者、各氣之酬酢。欲惡者、感應之知辨。以有于人者、爲無于天、則不知一有之德也。以有于己者、爲同于人者、不知相反之道也。

夫二反合一。合則相通移之於小物、言之乎、以水灌炭、炭能喻水、以火煮水、水能喻火、其相喻也。相入也、其相入也、反之所合。反而隔者、通而知焉。通則二之一、知則活之靈。夫物之散而爲各、其氣亦各也。氣物各別。而感通相異。故火之所通而水塞、水之所好而火惡。物之所知而我冥、我之所

知而物冥。故磁靈于知南、火靈于知高、狗巧于用鼻、人巧于鼓舌。通則知焉。知則感焉。感則親焉。故能通其反而合、則若置枘於鑿中、執其同而合、則若置枘於枘中。

神而向物。其才感通。是以天地並判、運轉升降。天日東西、而地成跡於晝夜、天日南北、而地成跡於冬夏。日感而燥物應、月感而水物應。動作輟于晝夜、植榮枯于冬夏。知通性也、感求情也。感通本一。天地反合。天地則鬼神伸能之地、鬼神則天地致活之物。而對有偶與、以分親疏。知通感求、隨物變態。

夫人者一也。分男分女、自男女絪縕、兄弟姉妹、父祖子孫、姻婭妯娌之結、疏、叔姪姑姪之遠親、其變不盡。天地之所給、我有資而然。蓋性一而具其二、體二面成其一。故一漸開一一。而一移居一一、則綱繫目、目成綱。二反合一、則偶之眞者、之爲親、絪縕給資、以能有合、布散傍望、則偶之與者、之爲疏、感應酬酢、以能相依。是故反偶、則絪縕以成造化、以與天地爲經緯、與偶、則感應以盡變化、以與佗偶爲參差。是以反偶、則氣物反、與偶則性類傍。夫各物各性體、各才相交接。雖反與同隔、條理有別親疏異道。雖鬼神無佗、而感應參差。夫體者、氣之幹、乃物之所立、性者物之神、乃體之所活。幹立爲應乎神之地、乃體物之天也。神活爲感物之氣、乃運物之神也。神者、變幻出沒、靈而妙也。物者、凝立定常、不靈不妙。蓋天莫所不有、莫所不有、則雖隔而能融、神莫所不貫、莫所不貫、則雖疏而能通。不鬼、則莫所活神、不神、則莫所起鬼。且夫同一鬱浡、或對物、或對天。偶本偶鬼、何乎。猶一縣之長。民亦謂之長、其佐亦謂之長。其對物者、具天神、而有變常、對鬼者、鬼定息、而神變化、物成各各、而活亦各各也。活者、自活也。通者、達己之通於佗也。故天活保

地、地活奉天。日活照物、影活蕭物、擾擾紛紛。莫往非活之運焉。是以自活者、活而運焉、通佗者、感而通焉。彼此自活運則天之所運、地不能焉、地之所運、天不能焉。一一相感應則陽能感陰、陰能通陽。

蓋條理之態。予此則奪彼、一能則一拙。是以物者緯露、止於物動於氣、神者經通、支於力。走於勢。支而鬼應、走而神感。勢力乃鬼神之車馬也。露於物則動、見於神則變。精麁異態、其機無佗。天痕其精、地見其情。感應之常、天感地應、感應之變、一向一背。常者沒跡、天也、變者露跡、地也。由精麁隱見使然焉。是以轉之依西線、象之依東線。一轉一運、整齊不差毫釐、地物應之、爲晝夜、爲冬夏。地之倏忽生風、驀地出火。一出一沒、參差不知其處。萬物於是相生化、相戕賊。天異乎地之變化、地異乎天之定常。天支于定常、而走于運轉、地支于持守、而走于變化。鬼神之跡、於萬物熾。於人爲甚。小而喜怒愛惜、大而予奪奉棄、莫非鬼神用事也。天事者曆推諸前後、而知數者穫其彷彿。地事者倏忽之間、地震天鳴、雖聖者有所不知也。若夫擊風起霆、擊炎熱若爇。而雹結其中、沍寒若裂、而雷解其間、衝至轉之下際。彗孛諸象爲妖、乃至小物之變化、則愈益百出。

氣以體居、體以氣立。天以神成、神以天爲、故天以天地爲體、以天神爲用。天道動而復焉、動則變焉、復則定焉。地道靜而往焉、靜則持焉、往則易焉。是故在天者、以變而定、在地者以持而易。定則常也、易則變矣。易而變者、爲也、定而常者、成也。天雖東西往來、動而變之機素定、齊整以成常、地雖內外上下、靜而持之機紛擾錯雜以爲變。體莫所不充、則莫不聚散者、氣莫所不通、則莫不生化者。而在天者、聚散緯中、而常其體、在地者、解結經中、而換其體。故在天

者、生化沒跡、在地者、生化換體。蓋感應者、變化紛若之爲、知運者素定整齊之事。是故天則其道也定、其運也常、感應之道微也、地則其爲也變、其交也各其各者以感。其變者以應知運之用不定。不定者、才露于感應、定者德具于知運。在天之感應、與知運相伴、在地之知運、與感應相用。雖然分其感應則如榮枯期春秋、潮汐期朔望、悲歡期吉凶、情慾期男女、感應之常也。雲雨風雷之機、生化聚散之發、喜怒愛憎之意、酬醋黜陟之爲、感應之變也。

是故苗得水土而茂、人食芻豢而肥、牡感牝而子應、種感土而苗應、水感火而其質盡、物畜水而其體壞。其跡雖反、亦同一感應也。故柔勝剛、則錫和汞而融、鐵見鹽而壞、水制大。則蝸蝓伏蛇、短狐射人。氣氣錯雜、其用無窮。是以憂擊聲異、榮枯彩轉、香臭相移、苦甘相轉。故鐘鼓之聲、以陰晴而清濁、諸肉之味、由鮮腐而腥臭、吳藍未紅、醋未紅、吳藍得醋、紅成其中、麴未酸、米未酸、米麴相得、酸成其中。不知其孰有之、孰與之。唯感應使如此、感應使不如此。

空甕無聲、掩耳則滂湃起聲、朝露無色、映日則金碧殊彩、臭穢人則催嘔吐、狗鳥則嗜之。嗜苦之人、不喜甘、嗜甘之人、不喜苦。同一彩聲臭味、交接相轉、則感應自別。是故老幼不同嗜、病健異味。水如可溺、而水族常水、氣不愈餒、而蟄蟲含氣。鳧雁以暖而去、昆蟲以寒而蟄、蛇無足而行、蟻無翼而飛、狐則魅人、而吠於人所畜之狗、人則食蠶而中於蠶所食之蟲。動不偶則不生、植無偶而種不定、則神之所爲、不變則天之所成。知不定感應、而知各氣之本相通、知各氣之相通、而知不定之所定。晝夜者自日影之色成、寒暑者、自日影之氣成。有意無意、從其色氣、而動息肅舒。物畜聲彩

臭味。而無意者、通不開其竅、有意者。通各開其竅。不用意者、不用以竅而通、用意者、不得不以竅而通也。

營養行居。有求與去。而為態於親疎好惡。日者求東者而運、而厭其西者而去、水者、求卑者而流、而厭其高者而去。磁求南而指、人求安而就。

夫天者、為淸者也、地者。為濁者也。淸中廼定常之府、濁中廼變化之藪。濁中則風恬山海為天地。而氣釀彩聲臭味。動植並立其間。而塊岐其形、神本其氣。分居於水陸。以類各分處。用氣於天、持質於地、相繼於經、通、相並於緯塞。已有意。開人之境。體接配嗣器地、氣交彩聲臭味。運為其意作、為感物之最。其所感應順以得之、逆以失之。向則會之、背則違之、向者、如耳目之於律呂黑白、鼻舌之於香臭甜苦焉、背者、如耳目之於香臭甜苦、鼻舌之於律呂黑白焉。或向或背。無往不感應也。故向則接矣、雷驚耳、熱發汗、磁引鐵、琥珀噏芥、背則不接、雷不怖聾者、熱不煦痞人、磁不引芥、琥珀不噏鐵、彼此向背錯綜成章。天地之所以為用也。何者、其所不呼則不應、惡則不親者、即所呼則應之、愛則親之者也。草木逐日而傾、潮汐隨月而起、鱗介死于陸、羽毛困于水。禾黍枯于霜、牟麥熟于暑。魚以先感而雨前噞雉以後應而震後雊、結之未應也、雲霧空散、達之未感也、萠芽徒屯、喜引於悅、怒發於怨、疎于此則親于彼、向于此則背于彼、其向者、感于合也、背者、感于分也。惟其為道邃然。今指其邃然者。委之於無。則可焉哉。故意之通也、或傳天涯之情實於夢寐、氣之獎也、或致偶人之靈威於祭禱。鬼忽爾來、神隱然現、災肅乎消、魅悚然走。精以引、誠以感、未可盡誣矣。是以。如寃憤之鬱而未伸、忿怒之動而未散、魑魅使氣、厲鬼含毒、事

之出非常者。未足怪矣。惟好常之者、誕也、思無之者、徧也。既照其姦、老精邪魅、弗能伸枝、方抱其惑、枯木朽株、能爲其怪。

地、則鬼神伸用之地。地上之萬物、乃感應之物。人開其境、意爲當萬物、終以之爲己之有、終以之爲己之用、以己統人。以感應操勢力、控掣萬里、皷舞大衆。此鄰分戒嚴、隔國同絃歌、以智通天地、以感役萬物、德行致奉戴、術智御人情、雖然。物之所通、我郤塞此、物之所能、我郤拙此、故我能天之所不能、天能我之所不能、我通物之所不通、我通我之所不通。則以己慢物、以人爭天、癡矣哉人。

陸產以冬夏而應日、海水以潮汐而應月。

萬物擾擾于其間、隔體通氣、相隔相交。體爲會違、氣爲感應。鳥飛獸走、苗生子結、則其各自相動也、雄唱雌和、人灌穀登、則其各自相感也。各物各性體。各才相發接、金石生火、米麴釀酒、寄居得蜷而居、鴨得雞而伏、神爲、天成。爲者貫成者、統以人造言之、爲抑於此、則揚成於彼、爲益於此、則損成於彼、呼則應焉、爲順感應、不呼則不應。爲逆感應、或呼而弗應、或弗呼而應、其變也、與感應會違、共氣物之往來也。往來當遇、而事成于天命。神爲使之、天成自之、自邪、使邪、能昭能冥。奚以若此昭昭、二有條理、奚以如此冥冥、一沒罅縫。昭昭理也、冥冥、故也。惟其然也、是以然也、是故、神德活通、天德幽邃。

體用性才圖



體用

體

精天奄地、混成之大物也、一陰一陽。混成之一氣也。一則弗嬴千大、大則莫遺于一。一能剖二、而一統一散、一能對一、而一分一合、人居擾擾中、將用其各立之纍纍。於是有計紀之法。計者、曲而序之、紀者、輯而統之。曲而序者、自一至十、而奇偶代位、輯而統者、十百千萬細巨漸積。計而進焉、之謂乘、計而退焉、之謂除。乘則倍蓰什佰、除則毫釐秒忽。長短則度之。多少則量之。輕重則衡之。久近則曆之。皆計之事也。蓋天數者、一統二散、統則弗遺、散則弗盡、弗盡弗遺、以觀其天、人數者、一奇二隅。奇則弗自立、偶則有所待。弗立而待。以觀其人。是以乘則雖進、而不能窮弗遺、除則雖退、而不能破弗盡。

以一爲二、故大物沒露、而分天地、一一相合、故一氣絪縕。而見陰陽。天地陰陽者、其成具也、氣物體性者。其爲具也。體託物於天地、性爲態於分合。性具體、體用性。故體有用、性有才。用神之活於體、體物之立於性。是以性活于氣而神、體立于物而物。其體物者性、性以觀體、用神者才。才以觀性。性能體物、物幹之而立、謂之本氣、性能用神、神運之而活、謂之神氣。立則攸久定常、活則倏忽變化。氣物如此沒露、性體如此隱見。有於此者、有之走之道、於此者居之上之。絪縕爲造化、機跡成天命。蓋性分其體。一氣一物。一一相乘。二二即四。分則氣物體性、合則本根精英。本氣根物。精體英性。本根是物、精英是神。合能成一物幹立其體、神活運其性、而養營其活立者。迺體之用也。夫物有大小。大統小、小散大。天地相給資、陰陽相絪縕。小者。化其絪縕、資其所給。是以。大小同神本活立。體成而陰陽也、陰絪陽縕、物立而天地也。天沒地露。非陰陽、則不能一一二一氣物之體、非天地則不能氣物一

一之性。性由體而立、體以性而成。成則一鬱渟而神、一混淪而物。活則經運而見其性、立則緯立而露其物。故陰陽絪縕。分剖沒緯經、合對示條理。融化其麁、通貫其精。其於物。一機一體。機以動靜而活、體以沒露而立。動靜莫所不有、於本氣立物、通塞于經緯、轉持于內外、噓噏于南北、發收于水火、沒露莫所不有於大物。成體聚散于天物、解結于地物、淸濁于氣象、乾潤于氣質。於是本干氣、根于物、精于質、華于象。一經一緯、神行其經、物居其緯、經緯通塞、成宇宙於其中、

宇宙、則自經緯之氣之所通塞。成、天地、則自精麁之物之所沒露。成。成者由爲、爲者由成。爲則通塞沒露、成則宇宙天地。蓋其成也。地體、則成水燥土石。天體、則成日影運轉。宙奉而刻歲月、宇容而定方位。姑就天物言之。經緯者。爲宇宙者也、故經緯、則不盡于宇宙。精麁者、爲天地者也。故精麁、則不盡于天地。故推成而知爲、由爲而分成。

一精一麁、神活其精、物立其麁、精麁沒露、成天地於其中。

身之居焉、足之立焉、目之視焉、耳之聽焉、則麁露之所成也、居而不知其天、立而不覺其地。色而不可視之、聲而不可聽之、則精沒之所爲也。天神、沒其物、而見其性、天地隱其性而露其物。莫非體者。而體則一虛一實。而實者、露天地之物、而居經緯、虛者見宇宙之天、而容精麁。宇宙能沒其體、天地能露其物。夫宇宙奚以謂之天、時與處偶、則時者天也、處者地也、處能容物、則容者天、而居者地也、故合時處、爲其天、天地奚以謂之地、氣與物偶、則氣者天也、物者地也、地能居天、則居者地也、故合天地、而爲其地、又進食之、則神能爲物、則此天亦地也、成者成天、則此地亦天也。

體者、物氣物體性於本根精英、用者事天地陰陽於給資絪縕。本氣幹此。神氣運此。之謂性才。有之開之。天神認之於道德。本以託根、根以依本、依託以其物而立、精隱體中。華見物表。隱見以其神而活、於是。大之混成一、亦此本根精英、小之混成一、亦此本根精英。

在經緯之中、則資諸經緯。造化爲經、天地爲緯、故物之所成。生化氣物。從經居緯焉。故物生而未死之間、是己之經也、己成而與佗別矣、是己之緯也、彼有經緯、此不資之於彼、則焉有此經緯、豈得非本哉、氣聚而活己者、天之於我者也。物結而立己者、地之於我者也。彼有天地、此不資之於彼、則焉有此氣物、豈得非根哉、本則體、體於體者性、幹立而活運、以體於體、而能隱于體中、豈得非物之精哉、物則根、英于根者、氣神有而英發、以華于物、而能發物表、豈得非物之英哉、故物無則已、有則本根相依、精英隱見、本具精、根發華。闕則非具、無

則非有。

物。則地爲根、天爲本、精于機、英于氣、天地設具。陰陽絪縕。萬物羅列、而並立其間。即已並其物偏偏合一。是以。動則專于神氣、植則專于本氣、動以專于神氣、而偏見神之用、植以專于本氣、而偏立物之體。雖其所專各異、而於具本根精英則一也。惟麁者易見、精者難見。推易見而察難見。精麁終歸一焉。一則全成、二則偏立。偏偏分散。一移居散。雖偏則相依、散則相給、而亦偏而全焉、散而成焉。蓋氣物之本、物氣之根、體之者精、用之者英、精隱物中、而保營物、英發物表、而知運神、神露物、物見神、神雖精英、而沒中亦有本根之可託、物雖本根、而露中亦有精英之爲發。剖析之所以不盡也。

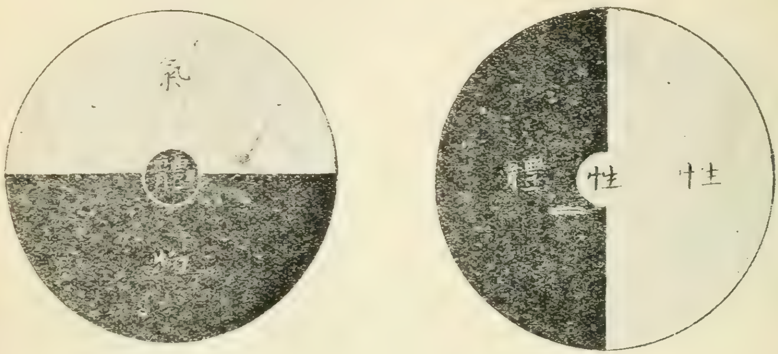
天地能有、故給之於萬物、萬物被有、故資之於天地、本根精英之易見者、其艸木乎。

其易見與難見。蓋見者之通塞、而物則不與依易知難觀物之法也。艸木種子託根。根能給枝幹。則幷枝幹而根也。夫物之成。見絪縕而其天立。有保運而其地成。故本者、物之所得於絪縕。已奉以爲天者、迺松而爲松、栢而爲栢者也。精者物之所以保所得之天。運所得之神。已以之開。已以之闔者。迺松而成松。栢而成栢者也。英者其天之精華。畜於根。運於精。終發之於物表者。相繼種子。爲鱗次者。亦在此。移諸鳥獸言之。絪縕之間。無馬之天。世豈有馬者哉。無牛之天。世豈有牛者哉。已各奉其天而立。各有所有之本根精英。以爲其一。精奉立其骨肉之根。情慾意智。運其神。發英於物表。天人張勢。以氣物體性。則猶有其分。以本根精英。則相依成一。是以至氣物體性。各得其天。以合其本根精英。則自天地水火。至散小萬物。莫有所異。而難易者。人之私也。易者資而麁者。難者給而精者。是以沒而本根。德也。體也。露而精華。機也。象也。物者。奉神而持己。神者。居物而運己。神者英也。爲物所奉。物者根也。爲神所資。神貫其各天。融其一。性具而才活。體體而用用。體物者。迺本氣。保持天地。用氣者。迺神氣。活運造化。體則天地。用則營養。立者則物。立之者則本。用者則氣。用之者則神。

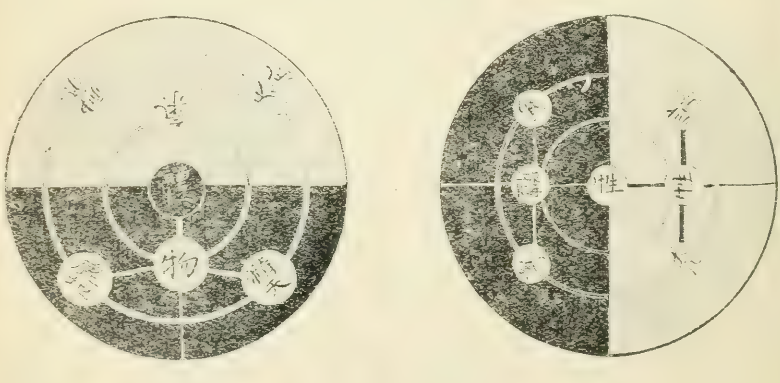
物曝於風日。則持者不能保。日漸消矣。生遇戕賊。則持者與營絶。漸向化矣。惟小物短期。不保不營。有換其物。大物長期。保營交通。長持其物。

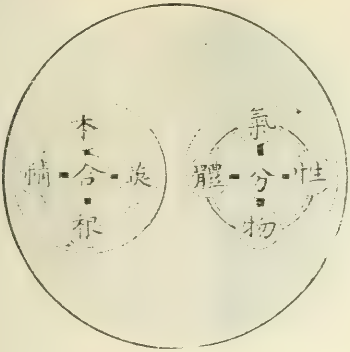
處洪曠。物體於坱坱之中。時攸遠。神用於衰衰之中。

性體氣物一合

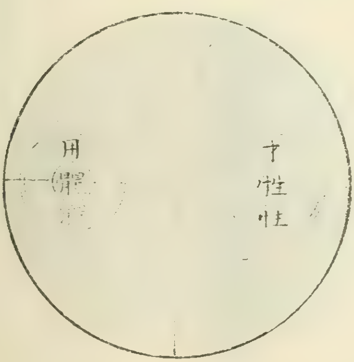


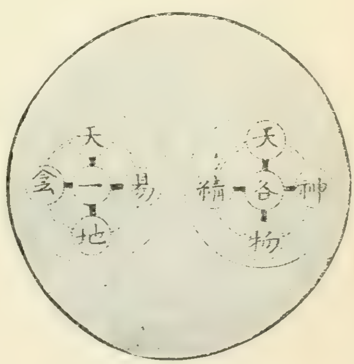
性體剖析一合



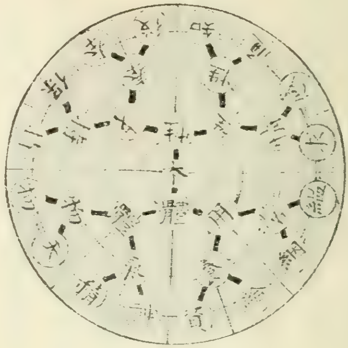

本
精
合
旋
氣
體
分
性
物


分
體
合
性
分
體


用
性


天
一
易
地
天
精
合
神
物

造化　用



神活精靈、若此鬱浡乎、物立天地、若此混淪焉。一經一緯、混淪立天地、而物體於緯鬱浡行造化而事用於經、氣物給資、天地立、一一絪縕、造化行。是以、靡立非天地、靡行非造化蓋混淪之體、鬱浡之用、氣以營之、物以食之營者、陽縕陰絪、養者、一給一資、非神則不能爲之、非天則不能成之、機于爲者神、跡于成者誠、沒于本、露于物、隱于神、見于跡、推跡入機、營養之用、莫所逃焉、大物以精、難見其營養、動植以麁、易見其營養。

孰一孰一。大物亦以絪縕而成、小物亦以絪縕而成、華與實、絪縕于繼苗、牝與牡、絪縕于繼子、胎實閉絪縕、將開其天地開閉相追。進則在旺、退則有謝、子苗絪縕于華實牝牡、動植絪縕于日影水燥、通塞覆載。

本神道德。亦皆絪縕於一一而成者也。是以。以保持而立者天地也、以絪縕而行者造化也。造化以引經、天地以立緯、而保持不外于絪縕、絪縕不外于保持、移之於萬物。認其絪縕之跡、寒暑從令、水旱失常。麴蘖釀酒、金石出火、飲食營養、思慮變錯、莫非絪縕之各態入機著跡。人惟認其神

雖見有難易、而引造化於經。則一也天縕于地、地絪于天、地亦縕于天、天亦絪于地。

天陽地陰、而天亦平分陰陽、地亦平分陰陽、故天亦縕于地、地亦絪于天。天物並居

天中、地物並居地中、然則豈特子苗之於動植哉。動植之所立。亦一絪一縕之間已。

天給于地、地給于天、天資于地、地資于天、蓋物分則各依其偏。偏待偏。而始爲其全。是以。水資火、火給水、火資水、水給火。

天能給地、地能給天、以地資天、其地亦天也、以天資地、其天亦地也。故陰逼而火發、陽噴而水涌。火必以陰溼而熾、水必以陽熱而溢。今觀一勺之水、一星之火。勢不繼者之相賊。以察造化、亦兒童之見而已。

剖則一二、分則一一、一一相資、一二相給。是以物之成焉、無大無小。同活立其神物。雖有反於成。而彼此同全其本根精英。無資于彼、焉能成於此、不給于此、焉能給于彼。露資沒、見資隱、而隱亦資見。沒亦資露。絪縕相依、給資相立。故非精則無給本根、非英則無發本根。非本根則無有精英。

一有萬、散居統一、統者自給自資、分散者彼此相依、依有親疎。疎則資疎、親則資親、姑就水火言之。水給而火能燃、火給而水能成。故火之居炭、薪乾者、火之化早、薪溼者火之持久、水之於天地、値冬寒則涸、値夏熱則溢。雷發而雨滂沱、雨甚而火山燃。以水灌火、以火煮水、養賊相居。是故生者有化、養者有賊。非水火獨然、水能浮舟、亦能覆舟、臣能奉君、亦能覆君。春煦秋肅。一生一賊。生與賊同絪縕。觀諸艸木之榮枯。鳥獸之代謝、而可知也。絪縕者、造化之營、給資者、相依之養。雨暘燠寒、噓噏飲哺、皆有資天地。可以養我。可以賊我。以此推彼。以麁推精。亦無佗也。若不反觀之、而以合諸一、則天地隔絕。水火相乖。而終不能融通于物。

見統則資之、並立則相依、養則有賊、自佗並立則然。成而不營、則通者斷于不繼、塞者盡于不充、成而不養、則立者斃焉、行者覆焉、牽

從同齡、而能行彼遠、望而不視其闔、顧而不視其闢、闔闢者塞也、塞則非通、惟以其通、觀絪縕給資之功、容居同量、而能立洪曠、歸而不盡其中、出而不窮其外、窮盡者盡焉、盡則非塞、惟以其塞、觀保營持守之立。

來而生焉、往而化焉、化化有收、生生有給、雖袞袞之精、而不能出生化、已不能出生化、則給資與俺同矣、物而居矣、氣而容矣。容者示中、居者有止、雖坱坱之精、而不能無中外、已不能無中外、則保持與物同矣、率從同齡、容居同量、經緯同然。如夫萬物、物俺跡顯。生化不精、居行有跡。依而立者、疲則殪焉、從而走者、不及則覆矣、殪則從而立者繼、覆則起而行者出、殪覆示跡、亦與天地久遠、坱袞沒痕、亦與殪覆代謝。

自散而觀天地、則天地亦萬物也、自一而觀萬物、則萬物亦一也、有痕無痕、如相隔而彼此相有則一、精隱于體、英發于物、天沒地露、神爲天成、經緯沒露、靡所弗有、則宇宙天地、靡所弗立也、鬱渟靡所弗爲、混淪靡所弗成。天地以保持立、造化以營養行、二資一、一移二、稍相移則其保持營養。引經居緯。散統一也。蓋星辰者天物、精淸明輕、以景影而居、動植者地物、俺濁臭穢、以水燥而居。故我與我之與、開境於穢濁、與開境於淸淨者、分天地焉。其境以淸濁動止而剖、其物以乾潤明暗而分、合之則反輕淸重濁、而同置其天地於緯、反循環鱗比、而同運其造化於經。故星辰動植、同物于天地、而絪縕于水燥日影之中。天從宙、地居宇、神遊氣、本結物、故短追長。小居大、其神遊其氣、其本結其物。彼亦具本根精英、此亦具本根精英、動植同有身生、而生遊其天於經通、立其地於緯塞、是乃本也、身爲其天於虛動、成其地於實靜、是乃根也、精實也、英華也、本根有立、收精於中、發英於表、英則神氣、物立而交事於

感應實則本氣本保而營事於絪縕絪縕於鱗比繼承者植則華實動則牝牡植繼于苗動繼于子雖生之者則非所生者而其胚胎種子亦同畜本根精英則精之爲實可識矣蓋物者能資於天地依於萬物絪縕於陰陽繼承於子苗保營於內外持守於上下植資養於水土雨陽動資養於噓噏飮食動爲營於有意之思辨植爲營於無意之知感大小所有不異所開相反具異於同中成同於異中

融一於反中隔反於一中絪縕給資本以幹于體神以運于性陰陽大小雖給資異其情至本根精英成一則融而有焉

天地全物則莫所不足於己萬物居天地則莫不資天地者既已散爲萬物於是萬物之資天地厚薄偏周萬而弗同蓋天地一大全物上懸日月星辰下布水火土石其物爲成具絪縕給資動植成于其間也

植偏資本氣故立其物於冷止無意動偏資神氣故立其物於溫動有意而動中得反爲鳥爲獸植中得反爲艸爲木彼此同在天地等資天地則就其物求其物末猶本彼猶此以其各則萬物萬天地奚盡於此雖然我已居我境觀我之資以爲此天地則佗有於天地者盡具於我矣天地莫所不給于我則有於天地者盡應于我應于我者盡有于天地故但摘一二言之夫天有道德性才故我亦有道德性才天有天地天神故我亦有天地天神天之宇宙天地人資爲死生身生天之保營知運人資爲營衞意爲天成東西南北則人成前後左右天成轉持動止則人成行居唖覺大物則陰絪陽縕小物則牡縕牝絪大物則天沒地露小物則生沒身露動者植之偶雖同資諸天地而反諸彼此故反有意於無意反橫行於竪立以反合一以合爲

依是以。人則牆屋、物則營窟艸、則枯于冬、木則凋于冬、雖事異也、而資之於保則同焉、植則食于水土、人則食于水穀、蛆食穢、蟬食露、水則食氣、火則食水、雖所食異而資之於養則同焉、天則以時而通、我則以壽而通、天則以物而塞、我則以身而塞、天則以陰陽之絪縕而生物、人則以男女之絪縕而生子、天則以本神之保營而繼持、人則以息食之保營而繼持、所往皆然、神則爲而不見跡、人則作用肢體、天則行不用足、人則行用足、天地有聲色臭味於內、故無自外取之門、物則置聲色臭味於外、故有自外取之門、動開自外取之門、植閉自外取之門、反用與不用也、而魚幷耳於目、蛇兼足於腹、同資之於天地、還反之於彼此。

陰陽絪縕、彼此給資、內營外護、以立以行、物於是乎幹立、華發子結、立物役他、外統內實、以知以通、神於是乎活運、幹立而物混淪焉、活運而神鬱浡乎、蓋精麁分物、天物精神各立、立、幹運體物、本根精英成一、故物之所各立、則本根精英成一相隨。夫絪縕者、陰陽之用、造化者、絪縕之痕、天地開其戶、而上之於途、天神入其機、而成之於跡、絪縕無痕、神妙入機、天誠成跡、人罩其見、窺其蘊蒙於不可捔之天、眩於不可測之神、窺窬百端、捉賊爲子。

機上於途、則使往使來、跡成於物、則以生以化、自施而造化、自受而天命、夫一二者沿剖、一一者竝對、著跡則認、陰陽絪縕、其神也妙。入機出機、誠以認之、故天而運轉變化、人而意念情態、水旱沴祥、殺活予奪、莫事非絪縕之入機出機也。

物雖有動止、而不以形體、則弗見、氣雖以絪縕而不以機跡、則弗認、能見能認、事物之所以如此也、使然者、神之精靈、入機出機、自然者、天之形貌、收神成跡、神運有態、

天成有貌變態定貌絪縕錯雜。蓋二剖一。一陰一陽。陰專于陰、陽專于陽。一移居二。則陽亦全一、陰亦全一。雖然。陽境非陰境之全、陰境異陽境之全。故絪縕則造化。入機出機。入者則神、出者則跡。跡而天命成。天命之所成。貌之於一。而觀本然。既已本然。歸自歸。使有意有私。

於是。天地宅於緯、造化行於經。體以立天地、用以行造化。蓋一一之道。物相分、則其體相隔、氣將合則各氣相交。氣物立、物交接行事。一一剖而相竝也。偶反而合。竝者、與而疏焉、反者。偶而親焉。親疏絪縕機入感應。造化便役使鬼神。夫物塞容載之間、氣通往來之經。天地無佗、塞之物也、造化無佗。通之氣也。神變。故移而不窮。天定。故常而攸遠。

夫一盞之燈。雖徹夜不變其觀。一一條之水。雖終古不改其流。而前火非後火、後水非前水。天地與萬物。常生生化化。生化者、造化之在物也、造化者。生化之在氣也。在氣者。一團之鬱浡。以氣屬物。入機著跡。始者繼終、來者逐往。不闢不闔、不故不新。往之與來者。氣物之相通也。往者率往者而移、來者以未者而至。蓋天物之精、與地物之實者、共沒生化之端。水火之麁、與動植之虛者。共露生化之端。雖露而無端緒、雖沒而有端倪。雖見露自異。而居則同有其宅、行則同行其路。宅則緯塞、塞者容居、路則經通。通者往來。來則生焉、往則化焉者、迺造化也、來者則當往者則遇者。迺天命也。

緯體經用造化乎爲天命乎成。

緯體要經用之行。則各起而從事、經用託緯要之體。則各居而住物。蓋神通。往來也。往來之麁者。立方於緯、往來之精者。立方於經。經方前後、緯方內外。往來者、行也。而行者用方、容居者。居也。而居者由位。故行者則駸駸、無不從其動者、居者則洋洋。無不住其止者。行

者住居中、居者行行中。
東西而不已、亦住此中、幹立而不去、亦行此中。是故通而不窮、亦維此天地、塞而能住、亦走此前後。是以。人之與物。以體居天地、以壽追日月、

物來向後、時往向前、故時則向前而生、向後而化、物則向後而生、過今而化、故自精則化在後、自麄則生在後、

無涯于緯者、無涯于經、有涯于緯者、有涯于經。是以。處則块块、天地則有中外、時則衮衮、造化則有前後、無中于中、無外于外、無前于前、無後于後、則其爲物也大、其爲期也長、日月、則自無前之前、而追衮衮天地、則盡無外之外、而居块块。是以經之緯之。洋洋滾滾。莫所不及焉。麄小之物。爲天地所絪縕感應之所在。化有涯之身生身生既有涯。於是居物不及于物、追時不及于時。執此境而窺彼境、終泥于思矣。何則有意。以得此體爲生、以失此體爲化、是有限之起滅。得之而自私。終不通生化之故。精麄則異生化之態、生化則不隔精麄長短。無有限。無無限。得今而見者、皆生、失今而沒者、皆化、

絪縕役氣物於解結聚散、解結聚散于緯者、其體恒久、解結聚散于經者、其物倏忽、雖其物倏忽、而相繼者不斷、雖其體恒久、而往復者換端、則此亦猶彼、彼亦猶此。是以。時者、往而生、生向于將、化退于既、物者來而生、生來自將、化去于既、向將 者。會去于既者。故沒前後、而露今於會、持體成跡者、皆生化斯中。

天地者、緯也、往來者、經也、緯物、而經氣也、氣活而物立焉、物得宅而居、神由路而遊、物雖能立於緯、而神能遊於經、緯則容居之物、經則造化之氣、造則活焉、化則死矣、故神畜活於將、 而送死於既、 將者未活、既者終化、將既爲端、而活當今、當今而

萬有皆露。造隱于前、化沒于後。是故循環鱗比。鬱浡乎。盡露萬有矣。

氣聚而物結、物解而氣散焉。聚結物生、散解物化。天地與萬物同物而已。結持其體、散通其氣、絪縕之所跡也。夫生者、神爲之發、化者、天成之收。於緯則活息于動靜、於經則活息于生化。神物經緯之用然。是以緯張散結而横宇、經引生化而竪宙。成具則常持一體、散物則每換其體。常持一體者、精不示生化、每換其體者、麁而露生化。不有而無者、廼無也。不明而幽者、廼幽也。故露而有焉、沒而無焉、則有中之沒露。起則明焉、滅則幽焉。則明中之幽明。幽明則神之地、沒露則物之用。故沒也、幽于氣、而無于物焉。起也、明于氣、而有于物焉。萬物聚散解結、而無之有、幽之明、明之幽、有之無。

氣而結體。故物也、物而解體。故氣也。物結、則有矣、解則無矣。人而發華。故神也。神發則明、神沒則幽。我之居天地、結物而發神、沒神而解物。明有之間、沒露起滅。天具幽明有無、物遊幽明有無。具者、兩全之、遊者、以明有爲其分、以幽無爲分外。無者不有、幽者不明。察幽入明、說無入有。噫。無而可說、豈無云哉。幽而可知、豈幽云哉。

常體則無窮、換體則有窮。皆一氣之通也。虛實、體之塞也。生化、氣之通也。故點燈於密器之中、不能化。化則生生不繼。蒔穀於豐艸之際、艸茂則穀瘁。可觀一氣之所通也。是故樹長子結、子隕樹生。樹中不有子、子中不有樹。雨露不有之、水土不有之。若曰無生物、則腐種能生、枯樹更榮。若曰有、則當素有之矣。必竢生者生生之理遂。無如可有、則天地塞焉。化化之道徵。有如可無、則天地竭矣。無不能生、有不能變。有無那開造化之蘊。煦之則爲氣爲神、液之則爲津爲體。火之、則爲煙爲焰、爲光爲熱、

水之、則爲苔爲菌爲臭爲穢、一氣通而然也。是故。火以木爲薪、木不盡、則火亦不盡、在地者之生化也、日以影爲薪、影不盡則日亦不盡、在天者之生化也、水依無體之火而爲命、影依有象之日而爲命、山不爲艸木之多而加高、海不爲沙石之降而加淺。

經居緯、緯行經、沒跡與露跡、分精與麁、無窮與有窮、同生化。

聚生散化、聚散生化者。一氣之通也。聚散、氣也、生化、物也。氣、陽也、物、陰也、聚者、陽之之陰也、散者、陰之之陽也。氣無象、物有體、生者、無之之有也、化者、有之之無也。聚、陰也、生、陽也。散、陽也、化、陰也。陰陽之道。難端倪也。夫日月水土之類。雖如常有而不與生化者。而生生化化、惟難爲端倪而已。山發水、而生生不盡、海噴氣、而化化不已。燭光宛然不動者。油氣之自下生生也。其遂不大者。向外化化也。雖化也、生則不盡、雖生也。化則不大。是之謂常。常而無窮。如不與生生者。故雖天地、亦生化不已。若夫天地不生化、則天地間物。何獨生化。天地不生化、則古之天地更新、今之天地更故。人皆曰。氣至而生、氣盡而化。氣豈可盡哉。生者氣也、化者氣也。生氣病、則化氣動、生氣盡、則化氣旺。

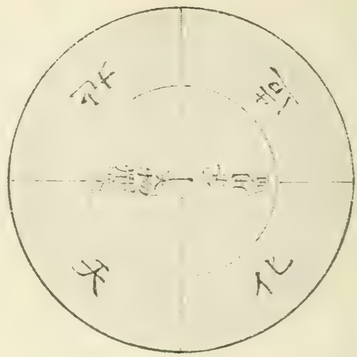
夫物成而應乎天、資乎給也、神活而運乎通、縕于絪也。蓋諸味之在鼎中、同受烹熟于火熱而成味於各各、故盈縮消長。闔闢旺衰。天變地動。世態人情。經緯全散紛紛若若。皆與我在一鼎中、同被薰蒸者也。雖同被薰蒸、其物各。則其氣亦各也。故自至精之不可得而窺其跡、至天地之解結。轉持之運動。日影之精。水燥之麁。金石之久。雲雨之忽。鳥獸艸木之不捨其跡。各態一氣陽縕陰絪、入機著跡。

夫物各有諸偶。雖無非絪縕、與則疏、偶則

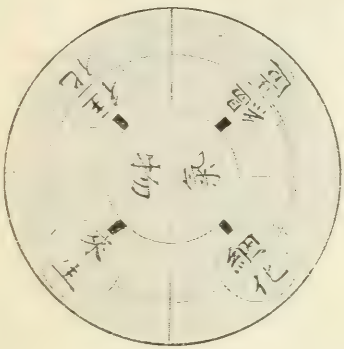
親。故天散地結、日發影收者、則相並成乎緯、神爲天成。時往物來者、則相重成乎經。夫萬物之於此間、體散氣飽。居天氣地質之中。受水燥日影之氣。天抱地、地奉天。故日影往來、水燥發收、而日燥則煦而發達、影水則肅而閉藏。於是。春夏則煦煦、鳥獸孳尾、艸木榮茂、秋冬則肅肅、諸動閉蟄、艸木實枯。陽煦陰肅。絪縕之痕也。其自所成也、動以牝牡而生、植以華實而生、魚龍水生、鳥獸燥生、草木土生、藻苔石生、五構之蠢、生于木、寄生之生、託于佗。木水由火而化、火由水而化。其變雖無窮、其實一氣之通。或露往來、或示始終。造者、陰絪之痕、活而爲焉。化者陽縕之痕。運而變焉。生化者。秒忽相換。至飽而爲一始終、而始分循環鱗比。盈縮消長。榮枯老壯。雖從觸異態。不出通氣之旺衰也。而生化者、旺衰之端也。生化者一始終也。曰世。曰代。曰壽。曰歲。

通之則非佗。故在彼爲生化、在此爲死生。在物。曰起滅。曰成壞。曰興廢。曰云云。任無意、曰死生、任有意、曰殺活。同神爲之綱縕。生生保養、生氣以育物、虐癘戕害、賊氣以傷生。爲生化者、不得形跡、成生化者、則示形跡。動而保營、結而持守。來而入生、往而入化。生來居今之宅、死去就既之途。天地活于此、天神生于此、萬露不得不來湊此宅。萬沒不能不去就此途。會于宅、達于路。會達之爲經者也。蓋萬物布列、萬事絪縕。天德則自然、其道則成、天態則常、天體則立、神德則使然。神道則爲。神態則變。神體則活。是以。物則自成常、立之體、神則使爲變活之用。是體則天地、是用則造化。

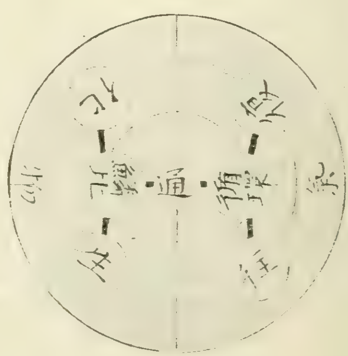
天地造化圖



造化生化圖



循環鱗比圖



玄語目

四界

通塞

玄語

日本　鎮西　三浦晉　安貞　著

地冊　沒部

天界之冊

宇宙

鬱渟之活、混淪之立、在神則神變天定、在物則機動體實、實與虛偶、動與靜偶、而靜與實伴、動與虛伴、故其精通塞、而地方位、其麁轉持、而物虛實體、散結入玄界、覆載具文章、性以色成日影、以性成水燥、經緯者條理之大綱。沒中剖對、露中通塞、通以爲時、塞以爲處。是乃物之所宅也、期之所路也。時則宙也、衰衰而移、處則宇也。块、块而住、住者亦移、移者亦住。鬱渟混淪之中。神爲天成、宇容宙牽、宇容而物居、宙牽而期從、期者物之經也、物者期之緯也。故物寓其體於緯、氣引其期於經。

故處得物而託體、時得期而見神。物者、神與物也。神爲成于衰衰、物散結于坱坱、爲成能循環始終、散結能布列大小。故散結之間、大小並立、始終之間、長短競走。居坱坱而不窕、以見天地之大、從衰衰而不窮、以觀運轉之長。處以含中、中者幹于處者也。時以開今、今者活于時者也。坱坱容物中能維之、衰衰牽期今能運之。而維者能沒、運者能見。故宇容弗露其坱坱、宙牽弗見其衰衰。物立中認時運今、見既已露物、則雖小之小、猶可破也。而中則不可破。非不可破者、奚得載天地而不撓。既已刻項、則雖短之短、猶可剖也。而今則不可剖也。非不可剖者、奚得湊萬露而弗遺。神莫所不用、故時期各通、時往期來、來者將當、往者既違、而今則將既之所會也。物莫所不體、故處物各立、處容物居、居則乘之、容則載之、而中則乘載之所在也。時有隱見、處有露沒、沒處則萬根之所託、發氣不疲於給、收質不充於容見。時則衆神之所遊、迎來不遺於當、送往不停於違。故時路乎神物、而今爲當遇之天。

塞者、不能不待于通、通者、不能不偶于塞。塞者維而住、故通者當而移。通者進而牽、故塞者追而從。是以塞者直通、通者直塞。故一塞中有住移、一通中有牽從。從者氣有來、牽者氣有往。氣以來而生、以往而化。故塞氣以來而常活、神之爲也。通氣以往而常通、天之成也。來者能去、往者能住。故坱坱之間、莫不往住、衰衰之中、莫不來去。往者當來者而往、來者遇往者而去。當遇之會。時則爲今、事則成命。今之既過、曰前、今之未及、曰後。除送迎之所、面則均今也。神機活于來、天跡成于往。故以今觀前後、猶居中觀左右。精難窺、麄易知。是以縱有神之來、而無物之往、有物之往、而無神之來、則何以得當遇之今。天地得今而見、事

物得今而成。故機跡見始終時處成無窮。
性不物外立。物不性外成。
處宅乎神物。而中爲乘載之地。今者送往迎
來。前將者後既者。
時者。彼此相向。彼之所前。我之所後。而我
之所前。彼之所後也。是故往者向將而背
既。來者離將而就既。地者彼此相背。午之
所上。子之所下。而子之所上。午之所下也。
是故午者上午而下子。子者上子而下午。
其事則反。其理則同。故自來者謂之。則前
既往。而後將來。自往者謂之。則前所牽而
往。而後所遇而去。
故來者見迎而去。往者見送而伴。來而將去
之頃而見。將來既去者則隱。故生者居將化
者去既。
無非通者。則莫往非生化。雖莫往非生化。
而精麁沒露異物。則其跡各不同也。故有
期者有跡于生化。無期者無痕于生化。故

期物

將生則來而向化。既化則去而遠生。既生
則起而從往。爲化則不及而息。故物有中
外。期有始終。既生者則見送而伴。伴而不
及。以觀其化。始在既。終在將。將生者則見
迎而來。來而不停。以觀其化。始居將。終當
既。
中者吐氣噏質。遠虛近實。故氣見吐而發。質
見噏而收。遠乎吐近乎噏之地而沒。吐之噏
之之處而露。故解者遊外。結者依中。夫處者
容物。物者居處。時者牽期。期者從時。故處與
時偶經緯。物與期偶經緯。故雖今能見事。而
弗立諸物。則將奚爲。雖處能露物。而弗移諸
期。則將奚成。期因物而成事。物因期而畢功。
處者塊然。物而後有所紀。時者衰焉。期而
後有所紀。其物則天地也。天有規矩。成東
西南北。地有拗突。成湖海山野。其時則時
期也。期有往來。見緩急盈縮。時有會違。示
明暗寒熱。故湖海山野依東西南北而紀

人境

方處、明暗寒熱依緩急盈縮而成節序、天地成物、節序成期、於是乎。物成事、期畢功。衰衰不窮、期則始終、始終者、而有長有短、块块無垠。物則天地、天地者、而有大有小。大物居块、块而不窕、而小物分天地而並居、長期從衰衰而不已、而短期追歲月而不及、而大小長短。亦自有統散。統中則天大而地小、轉長而運短、散中則天地大、而萬物小。運轉長而衆期短。人以小物、得短期、得實結如彈丸者、而踏之、見淸虛若瑠璃者、而仰之、時明暗相換、寒暑相推者、而經之、侶乾潤相生、動止相立者、而依之。以我之飳體、而認物之飳露。故日月山海、我之天地也、

由天若琉璃、地若彈丸、觀之。覆者爲天、載者爲地。雖然。天者氣之名、而地者、物之名也。故以處對時。則時者氣也、爲天、處者物也、爲地。同此處也。或呼天、或呼地、猶是此一身。對父而呼子。對子而呼父也。故如瑠璃天、如彈丸地、則開天地於物中、而有矣。次第相開。則天地愈有。而氣物愈瑣。

覆之緯
載經

晝夜冬夏、我之期紀也。絪縕於水燥之中、相依於動植之物。天地物于块、块、而萬物竝立其中、歲月期于衰衰、而衆期競走其間。時時於處、處處於時。期期於物、物物於期。蓋宇宙以精沒、天地以飳露。天畜動止之機、地有虛實之體。天雖虛而以動剛其體。何異地之以實堅其體。故飳露之天地。不堅則剛。故地之立物、天之浮物。堅剛同一。剛處、日影之象占之、堅處、水燥之物占之。於是象質隔天地而居、歲運分轉持而行、象與質各得其氣而配。氣象爲紀時節之物、氣質爲爲生化之物。故虛動、經具也、實靜、緯具也。實靜成天地、虛動成轉持。轉中則萬象運轉期在往復循環、持中、則萬質相換、期在生化鱗比。故轉物常持一體、持物每換其體。

大物容小物、有窟居無窟。小物者有窟、體

體相換、引致之於無窮、大物者無窮。常持
其體。生化一體生化一體者、雖生化、而不
露其痕。故曰無窮。體體相換者。亦雖致無
窮。以前體非後體。生化之痕顯也。故曰有
窮。前體與後體一、則生化行其中、而其物
者無窮。前體與後體別、則彼此此生而其
物若有窮。無窮者、終而始焉、有窮者始而
終焉。雖不同其道。而於生化之通則一也。
人者麁物也。小體也。身有所畫、生有所盡。
以有盡之生、有所畫之身。是以。其智有所
囿。以麁小推精大。窒大物、眩長期。
而萬物居大物、衆期從長期、地、塊焉一圓物、
下能爲上、西能爲東、
時以氣而通、處以體而塞。塞中、天動地靜、
通中事移物住。住者定于止、移者通于行。
中者、止之主、物居之、位立之、今者移之主。
事行于此物換于此中、立而不移、今移而
不居。立者、有位乎中外、移者。無方乎來去。

氣質物于坱中、氣象跡于袞中。氣質不物、
則焉得露處、氣象不跡、則焉得紀時。氣西
象東、以動而時之紀成、天外地中。以靜而
處之位立。坱坱之立、中不可破、而外無邊、
雖體一也、而有一面一背之二、用袞袞之
移。今不可剖、而時無界。雖行一也、而有一
往一來之二跡。圓中點一心、外無際涯、直
中見一頃。外隱前後中也、中于南、中于北、
中于西、中于東中于無際涯、而能維移動
者、今也。今于前、今于後。不積去而厚後、不
奪來而薄前。而能移靜立者。
時悠焉一直氣。轉前爲後、收生爲化。
觀彼水車。輪一邊載水、仰而來、一邊瀉水。
俯而往。水車輪者有體之往來也、猶且不
見端、前後者。無象之往來也。孰逆而見其
首。孰將而見其尾。蓋時者、以往來而爲前
後者也、期者。由生化而爲始終者也。時有
往來、物當而前後分、期有始終。時移而成

新故。是以天地有前後、萬物有新故。人以始終新舊之質、追駸駸者、於是將迎之間。智有所畫。以爲疑於天地。以今觀古。則鴻濛焉。以後觀今。則今胡不鴻濛焉。既往將來、除典籍之所傳、事跡之所推、而智之所不至也。四方上下、除見聞之所及、思慮之所至、而智之所不至也。於所塞。而强欲通之。故其所知愈廣、而所不知愈遠。其所知愈皦、而其所不知愈瞶。欲使混混者粲粲、欲使粲粲者混混、非誣理、則自蔽也。過則後也。不及則前也。天往來此間。物生化此間。知運感應之所爲、當遇會違之所成。於人。則治亂興廢。酬醋黜陟。皆於此。我生化此。自起滅此。不知無際容有際、有窮通無窮。欲窮此無窮於有窮難矣。

萬物成壞、有用給資、乘期始終、有爲旺衰。循環者氣象、鱗比者氣質。循環者各期相定、故推之、會違不出數也。鱗比者各期無定、故從之變化不可豫也。

氣象運轉、周天周地、其機不違、參差中整齊、爲日爲年、爲章爲紀者、歲也。象質昇降、行天立地。其機不定、整齊中參差、起風行雨、爲和爲戾者、運也。

是以循環者精、周周無端、生化相接、始終相依。鱗比者麁、一過跡顯、起滅爲始終、旺衰爲新故、而於生化之通于天地。則不隔也。故各體並立、乘期相追。各體比大體、大體無根、人立數而后比方物體之廣狹小大。乘期比長期、長期無際、人立數而後比方經歷之久近長短。

人已有所立。觀彼循環鱗比。循環有定度常期、則欲計各行而定會離。曆之所以起也。鱗比無定度常期、則欲係歲月而比長短。壽之所用也。天有長短之各期、人設奇偶之數、乘除計之。物有參差之變化、人設書數之技、連綿記之。蓋天者不可測。人

巧欲窮接物之法、故立衡、辨輕重、立量、知多少、立度、測長短、立漏、分久近。人之設也。

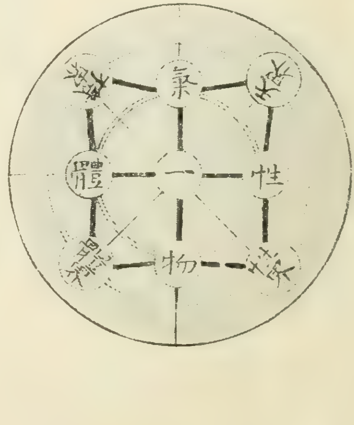
蓋處者天動地止之處、虛者遠浮、實者深沈、遠浮深沈、沈共露、而立者能容能載、而中之微露此曠大、時者神爲天成之時、前者將來、後者引去、將來引去共隱、而當者隨見隨隱、而當之忽成此攸久、物守中而立、向外而通、神當今而活、向後而息、物通而失體、神息而留跡、跡留而神息、機發而神活、統散各有神、而小則資大、故機發不絕、謂之生生、跡收不已、謂之化化、循環者往復爲期、始者終終者始、鱗比者生死爲期、死者息、生者繼、天物長存體、地物每換體、雖存換弗同、彼此同生化于通中、故於存體者、則曰歲、曰曆、於換體者、則爲殤爲壽、蓋一也、故於循環者、置漏刻時日、一周地之頃、爲一百、月周天、日周天、東西兩線之相旋、共資頃於此、故會離之紀亦成此、於鱗比者、則定歲立日、日一周天之頃、爲一歲、歲中會明暗、置月置日、長短夭壽之經歷於此資焉、故今循環者就人之所資言之、則日一周地一百刻、月一周地一百三刻、日一周天三萬六千五百二十三刻而贏、月一周天二千七百五十五刻而贏、以天之所成言之、各各一期、由期定而所推不逃、鱗比者就人之所資言之、長壽千萬歲、短期朝不崇夕、或數十歲、或十數日、以天之所成言之、各各一期、比歲月之定期、得察此長短、故相疊奇偶、紀十紀百、皆非天之數也。

萬物散小、居一大全、物全則神本力敵、敵則持焉、持則久矣、散則神本力偏、偏則頭焉、頭則頽矣、衆期之所不能爭壽於天地也。

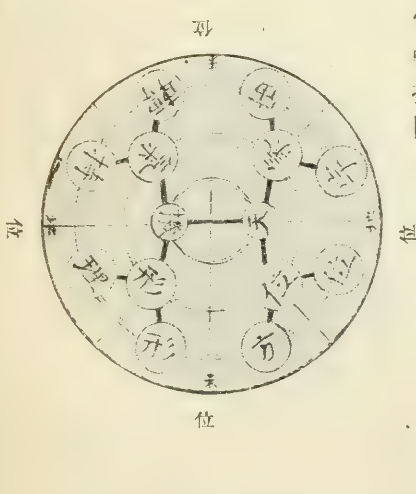
天地者以物成象、質者以性成、象者爲色而見、質者爲性而露、故日月景影、見色於虛中、水火溼燥、示性於實中、天地陰陽之

物立。而星辰上散、動植下聚而星辰循環之物、動植鱗比之物、循環者、其期攸久、鱗比者其期斯須。鱗比中亦有長短于神本。富于本氣者而能長之、于本氣者、而能短、富于神氣者而能變化之、于神氣者而拙于變化。至其錯綜則雖實物攸久、而鹵輭不能與動植爭壽、雖雲雨倏忽而朝菌蜉蝣不持旦夕。夫地止天行、天令地奉。於是天率日月而明暗照蔽、地從天行、寒熱肅舒、紀其事曰曆、乃晦望會離、晝夜冬夏之事也、時移物換、人運事變。於是萬物變動之事、人世換革之態、紀其事曰史、乃日月山河、人物鳥獸之事也。是以各周各轉各爲期者、天之曆也、相比各周方其久近立止地觀轉天、建規矩、正會違者、人曆也。

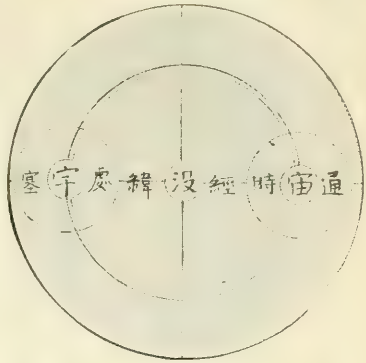
四界圖



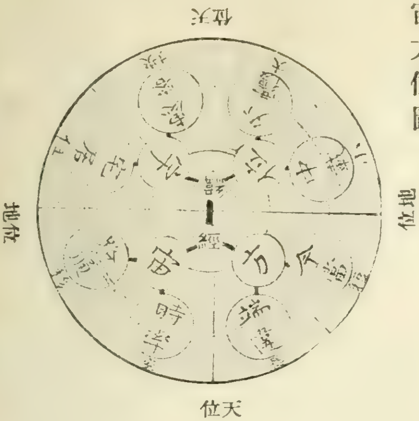
宇宙轉持圖



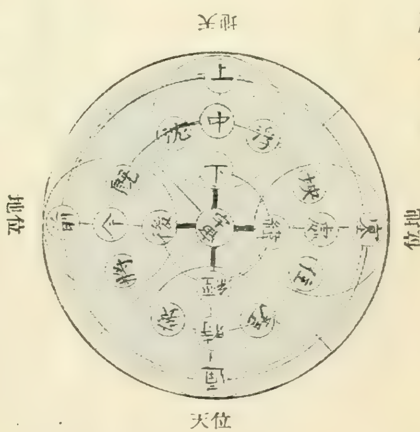
宇宙圖



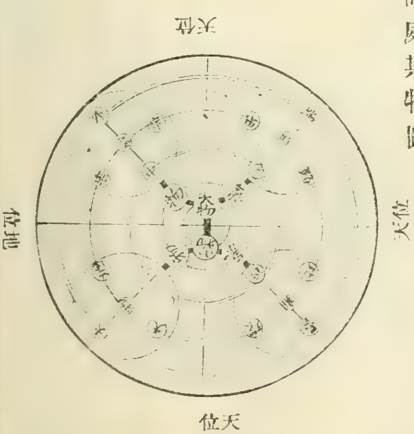
宇宙方位圖



時處今中圖



時處期物圖



方位

块然其處。物得之居、然而物則得神而活、神則得位而立。块块不得位、則何能容物、活動不得方則焉能行其神。故位者、所立之基也、物不得處則弗居、不得位則弗立。植著地而立、動依地而立。雖依著異而於立之由地則同也。我之與物、已由位而立。由小察大、天地不得位則弗立。故天得地而居、地得中而立。故外莫所不容、中莫所不載

方者所行之路也

置車則箱、泛舟則水。故不在上則下、不在左則右、居者不能不以位。行車從軌、行舟從風。故不方東則西、不行從則衡。行者不能不以方。

位爲基、而物以立、方爲路、而氣以行。故宇宙者、經緯之通塞也。時之袞袞、前後爲方、處之块块、中外爲位。竝其精者也。神見轉持、物露天地。愈由其方位、天地者物也。物者以虛實

之體、正斜之形、而居其位、行其方。故氣雖動而其形靜、時雖通而其位立。位以形之靜而定、形以位之立而成。於是形由位而布理、位由理而定中。雖形位相成、而未得虛實之體、物何以成焉。故物不舍形而存、形不除物而成。然而物體不能不依形而立。中占地於無內、而其外無垠。故位立而圓成、守見中於兩頭、而其縫爲腹。故矩立而成規。此故位以定其地、形以成其體。大物者、動氣實體也。實體不得位、則不能居、動氣不得方則不可行。而其實體之立、以動氣之活也。是以在持中、則動乎噓噏、在轉中、則動乎運轉。故位者、體之所立、方者神之所向。體立而神活其中、方定而神運其中。蓋體者立焉、神者運焉。體乃成形於外、成外者、能統內者、神乃成理於內。成內者、能貫外者。故發者資氣於中、收者歸體於中。中外者块块之位也。與時今之行古今偶也。故大小有體、而中外沒體。

持際爲內、轉際爲外。故內能輻持、外能輪轉。中者、無內之一點、外者。無垠之坱。坱。故地持者小、小者猶有容之內、無容之內者、而後莫物不載者、莫物不載焉。故天地乘之而止、天轉者大、大者猶有見容之處。無見容之處者、而後莫物不容者、莫物不容者之故天地居之而立。

天地一圓體。自氣見體露分之。則地占中於地心、天占中於轉心、轉心達中於兩端、可外者合縫於半腹地心占中於無內。外者位於無垠。故自天地言之、載山壑水燥之地、乘中之一點。容日月景影之天、居外之無垠。自覆載言之、所覆之日月景影成外、所載之山壑水燥成內。轉持爲內外、轉守極中端。是以轉內裏持、持外載轉。斜中觀之。規中能守、守外能轉、轉爲西、守爲北、西面逆象。北外轉環逆爲東。環爲南、西北則天之定方、上下則地之靜位、東南則轉之變方、內外則持之動位。

氣分動靜、動轉靜持、外爲轉處、內爲持處、物分虛實、虛天實地、下爲地體。上爲天體。內下、則本、本則歸中而止、外上則末。末則之坱、坱而無際。涯轉分運。而爲背馳。於是乎。氣運東西南北。混焉大物、以中爲其依、上下內外之位之所本、散結發收之所由也。滾焉轉氣。以極爲其依。東西南北之方之所成。噓噏運轉之所資也。於是動斜其形、而以行方、靜正其形。而以居位。車雖有輪、而輪不能不依軸而旋、軸雖幹于旋。而不能不用輪而行。是以向西旋者、氣也。正立使之向西者、氣之幹也。故之爲西軸、向東旋者。運也。斜側使之向東者。氣之幹也。故之爲東軸。西軸止守其位、東軸動環西軸。故東西者。各輪旋。則東西無指點之地。唯運輪通其一規、莫所不東、轉輪通其一規。莫所不西。已通一規。莫所不西、則其爲軸而守者、通兩端、而不得不爲北、已通一

規莫所不東則爲軸而環者通其兩端而不得不爲南是故西北之方者竪東南之方者橫人以天地之半爲己之天地立其中央衡從望之於是守軸爲兩端一爲北一爲南取日去之方於西行中線之所向以爲西取日來之方於西行中線之所背以爲東是以言靜而遺動者未足言全雖然竪爲兩向而人在半體之天地動者不定則就定者取方就定者取方則從靜規矩而定東西南北者亦人之不可以廢者也是以全方者成于動靜之規矩天也偏方者成于十字之衡從人也

是以升降內輻持運轉外輪轉運則東轉則西西則守北東則守南故上下內外以圓成其中謂之心東西南北由矩成其中謂之極一必具二是以靜圓得中外則動直亦得中外唯靜圓得中以成無內得外以成無外動直得中以爲至狹得外以爲至廣中極之所成也形者圓而成直故直圓爲正形理者直而成圓故規矩爲斜形規矩分理於經緯直圓混形於內外故中外之所成直圓各有平之則中邊長之則中端剖析之所成也

物者得中而立得外而居是以機不得止於中則不可動焉體不得居於外則不可實焉天地不同物故各立其位象質不同動故各行其方是以位以靜而立方以動而見中維塊然之處有實而給氣外抱眇焉之點以剛保物物則資之於給之氣氣則養之於保之物資給養保居此間行此間故物立由中外非行爲向背故氣象者時之物動不常其居是以用方氣質者處之物止不變其居是以體位故行者氣也路乃其方雖隱然而行者不得不由焉居者物也宅乃其位雖遂然而居者不得不立焉此故機者見氣動止之麁跡總入動體者露物虛實之麁體同爲靜是

以方位定處於物。而立事於物。物得外而居、得中而立、氣得外而行、得中而止。居者移焉、行者復焉、止而定焉立而靜焉。夫處容物、物居處。處容方位、物成方位。而物有大小。小處成小方位、

素而塊、文而岐。物形之態然。塞體者正圓正直質在內、氣在外、下合內、上合外、通體者斜圓斜直。南北相背、東西相面。日影之所照蔽、兩極之所隱見、必分地之半。人倚地之半。以平望與地從日之出入、而東西成、由極之隱見而南北分。繩生上下、身定中邊、衡從規矩。定東西南北。是人從地面之條理而定方位者也。人又就其形分方位。則前後左右。本末內外。以紀。以此比彼。所合于天之上下內外、於我分本末內外、所有於地之東西南北、於我爲前後左右。小物成小天地。小大同有天地、小大各具方位衡從橫竪之條理。上下內外之位、東西南北之方之謂四紀。上下合中外、表裏合內外。衡從統東西南北。小物資爲本末內外之位、前後左右之方。蓋中外之位。物及巔趺是以。動植有資。又反其本末動本在上、植本在下。外則表皮、內則裏肉、前後左右。動分於身之面背手足、植見於葉之面背中邊。以彼此異類。而異其樣。以氣異而理形方位不同也。故日月星辰之經緯其行、雲雷水火之浮沈其行、山壑之拗突、水潮之流溯、隨理而變化。天地已得成器。已全其物、成器絪縕。物生其中。

動植分形於塊歧爲理於邪曲。

植著地而竪立、動離地而橫行。動植之並立。隨塊歧。次第開其文。金石亦植、塊然其形、而艸木則歧然開文、介甲亦動塊然其形而禽獸則歧然開文。故金石纔有內外。末得本末。艸木鳥獸。漸有本末、而艸木、下本上末、鳥獸上本下末。植者質物、資養於下、動者天物。受養於上。動曰首尾、植曰根

幹雖首尾根幹。不同上下。而草木精華發末、鳥獸精華在上。則終歸一本末焉。

亦各隨其分。各具其方位。

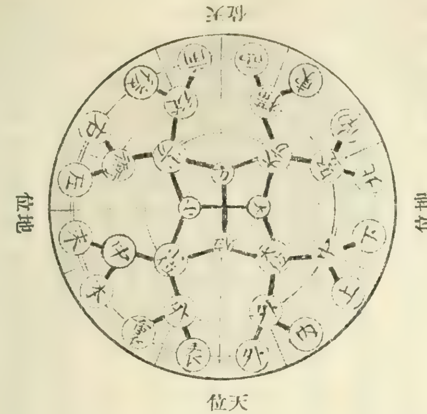
內外者皮肉之分、本末者首尾之位。人之有前後左右、猶天之有東西南北。自頂之前後。並下至臆。爲中界。人之有此界、猶天之有中線。人在地上。以半天地爲全天地。觀圓體。而爲平體。從其見界。定四方。是雖以能正見界之條理。而遺直圓之眞。身有中界分左右。同于地有中線分南北。南北則同樣彼寒則此熱、彼動則此止、左右則同形。左持則右轉。右行則左止。南北有迭互之序、左右有迭互之用。天行自東進、而不東退。人行向前進。而不能卻步。是以左右應南北、前後應東西。而南北則均其用、左右則有利鈍者。蓋我以半天地爲全天地。又分中線各分處。故北人偏身於西線之北。偏北爲其正地。南人偏身於西線之南。偏南爲其正地。然則北人左右之利鈍。爲南人之反乎。或佗有反者。而我未識乎姑存侍他日。

故人不得方而行則躓、不得位而立則顚天則方位、與立行一、故有其位則立、有其方則行。人則方位與立行別。故能者安其位由其道。不能者則至顚躓。是以人位則有安危。人道則有淑慝。由內畜情慾意智焉。是以人生不及天之自然。人情欲得天則法之。是之謂人義。若能法之則以德居其位。以道由其方。

中外方位圖



大小方位圖



動靜

機界之冊

轉持

在神本則活立、在天神則機跡、在宇宙則通
塞、在天地則動止、居于德、行于道、定于物、變
于事、轉于轉、持于持、發于華、收于液、莫往非
動靜焉。動靜是機。廼本根之精也。此氣以發
收華液。靜也以精而隱、動也以麁而見。以靜
而路宅于神物。所以活神露物在此中。非動
也弗可見也、非靜也弗可位也。故其運轉昇
降。拗突高下。芸芸擾擾。皆由靜而紀。是以動
得止地、以紀變擾、靜得動天、以發蘊奥。中者
靜之心。而動之所就而止。是以與靜類焉。猶
虛之與動混也。氣物之結天地、其質實于地、
其氣達于轉。故天地分動靜。靜者虛天實地、
動者轉天持地。轉中以運轉環守、持中以噓
噏發收。故靜則物之體混淪有宅。動則神之
用鬱浡有活。故塞者靜也、天容物居、喪動之
根、通者動也、時牽期從。沒靜之狀。靜者不動、

本通塞神物

位立物居、形成體立、動者不靜。象旋歲成、質動運出轉者轉守、持者持止。發者鬱發、收者肅結從剖而機有焉。蓋體成天地、性成天神相得而物舍神居塊塊、行衰衰塊塊爲處、衰衰爲時。

塊塊末見方位、象質動而方位見矣。衰衰末見歲運象質交而歲運成矣。塊塊其處、內外容散結、衰衰其時往來成歲運。散結能塞、往來能通。塞者以居、通者以行。通而行者亦塞而住、塞而居者亦通而移。居者常其體、行者移其體。昨之天地、今弗可收、

以觀住之移、今之事物、無所異於昨、以觀移之住。通塞雖精、亦動靜之機也。

時處、天也、神物、物也。天能容物、物能居天。天地用天神、天神體天地。是以雖住而爲塞者亦移、雖逝而爲通者而住。處容而物居、天有而神發、時通神運、處塞物止。止者依中運者當今、於是處塞而物居、時通而期從。常者以

歲運轉持

歲而成、變者以運而爲。蓋牽者衰衰、動者以理而行止、容者塊塊、靜者以形而虛實。經通由發收之物、而成歲運、緯動從散結之物、而成轉持。

神者用物者也、物者體神者也。故衰衰塊塊氣動物止、各體爲物、各神用事。體非虛則實、用非居則行。故天動地止、居而動焉、神爲天成立而行焉。故運轉環守、噓噏發收者、動止也。歲運消長、象行先後者、遲疾也。是以居體行氣、以成事物。沒露體用、無往不然也。

入形理

觀機於全天地、則天者動焉、地者靜焉。剖機於天地、則地成氣虛物實之靜、天成氣動物止之動。天地故全天地之中以動靜。而天地爲轉持之偶名、而大物以天地而動靜、小物由天地而動靜。以天地者、行居不露方位、由天地者、行居各由方位。物之沒露、由體之虛實。體由形而成、形由理而布。理者氣之

道路、形者體之容貌、氣不運則形不見。形不見則物不露。體有氣物性體。全偏大小。性異則物異、物異則理異。理異則形異。各氣隨各理。各理成各物。是以天地者靜也、圓合直、轉持者動也。矩成規靜。謂直圓、動謂規矩。規有東西、氣從而運轉、矩有南北。氣從而噓噏、而圓布內外、氣以轉持、直有上下、氣以發收。內外者圓之位也、上下者直之位也。

轉持者、氣也、轉位占外、持位占內、天地者、體也。天位占上、地位占下、天以圓爲形、地以直爲理、轉以規爲形、持以矩爲理、天者動焉、地者止焉。天以動而運轉分東西、地以止而環守分南北。故天以運轉而動、以環守而止。地以土石而止、以噓噏而動。運轉在東西、噓噏在南北。天地共理於圓中之直。而以爲規矩。以圓而氣轉面西、象運面東、以直而陰噏陽噓。南北代面。是以天氣南噏、則地氣北發、而其間則水燥之所

天地
水火

遊。自下發而昇、自上結而下、蓋地體者止、萬質皆親而著此、天氣者動、萬象皆親而之此。親天而之氣、則其勢爲輕、親地而著質、則其勢爲重。此以輕浮之勢勝、則雖重而不能沈、重沈之勢勝則雖輕而不能浮、以人造言之。如彼舟。虛以盛輕浮之氣。而重沈爲之所舉。而不得沈故沈。實之重、輸于其輕則不沈、輕浮之勢。輸于其重則不浮。是以輕浮重沈之勢。本非胡越也。何則今試自氣中繩以繫石、而下諸千仞之岸、重援于下、而力不可復舉、又試姑潜身於水底、空器盛氣、綸而上諸千尋之上。輕引于上、而力不可復潜。蓋勢反而力侔事殊、而意同焉

轉持動天地、虛實靜天地、氣物立天地、物氣活華液、物者天地也、氣者陰陽也。華液乃陰陽之見者。天地能運轉噓噏、

氣象之行各爲東西、西者以北而守、東者

以南而環、象則一聚一散。聚者明而熱、散者暗而寒。雖氣能東、而東者象爲主。雖象能西、而西者氣爲主。若以西行爲象隨之、則何以日月星辰相南北。若以東行尋爲象之行、則恒星何以齊東西。然而由日往影移、月疾星遲觀之、則象中有緩急。由西者守定而疾、東者守環而遲觀之、則氣中亦有緩急。故分而言之、則氣西象東、合而言之、則氣象各東西。蓋西轉之一周則近矣。西者之軸、爲北而立、北者之輪、爲西而橫。其中線一規、即西中也。東運之一周則遠矣。東者之軸、爲南而立、南者之輪、爲東而橫。其中線一規、即東中也。故北軸常守、南軸常環。環者其行遲、守者其行疾。且西者轉氣、東者運象。象雖由東旋而運、亦各自爲行。日者象之主也。路緣東中、故參差之間、取準於日行。蓋以西者爲正、則東者斜也。猶舟行之不可正對風、避勢斜走天地之機。一動一止。動在外則東西、在內則噓翕。東西與噓翕同氣也。天之爲轉、東明則西暗、西明則東暗。物從之而爲動息。地之爲持、南寒則北熱、北寒則南熱。物從之而爲消長。故日影在東西中、而東西。水燥在上下中、而上下。上昇下降、上面始轉、東運西轉下、而始持。天之無偏覆者、以西也。日之無偏照者、以東也。故氣有東西之轉、象有順逆之行。西轉使日逆行、以成年。東運使日順行、以成歲。於是氣東西南北、則象明暗寒熱。明暗得東西、而晝夜成。寒熱得南北、而冬夏或。

華液能鬱發凝融。

天地者體物、得處而居。華液者性物、得天地而居。是以天地有運轉噓翕、華液有鬱發凝融。其事同焉。鬱陽發而爲火、凝陰融而爲水。天地者長持之物、解結聚散成於緯、水火者相換之物、解結聚散成於經。而

運轉噓噏

鬱者止、發者動、凝者收、融者發。

天者圓而無端、地者直而有端、直而有端者長焉、以體有於天、圓而地爲一小圓塊、圓而無端者大也、以氣持於地、直而轉爲一平長線、圓而無端、運轉分行於中、運轉唯一圓線、一線西轉、一線東運、圓之道也、東而不盡、西而不窮、直之道也、以長逝而東運不盡、西轉不窮、以循環而西轉東運、往復爲輪、氣爲運轉、物爲順逆、故日行逆、月來而爲朔、日行逆月去而爲望、月與日通行於天中、東西順逆、以分上下、

天象運行

日行會天之舊位之頃、爲一歲、轉行會地之舊位之頃爲一轉、日東而遲、轉西而疾。遲在疾中、東者西、東者周天、西者周地、故日之周天爲歲、周地爲日。

直而有端、噓噏分氣於中、噓噏唯一直氣、半邊內噏、半邊外噓、直之道也、噓極則噏、噏極則噓、圓之道也、以長逝而噏乎此、噓乎彼、以循環而南北噓噏、往復爲輻、氣爲噓噏、物爲發收、故氣噓得物發而爲夏、氣噏得物收而爲冬、日與地隔居於天地南北噓噏、以分環守、外則運轉、內則噓噏、轉持無所不動矣、上則散虛、下則實結、天地無所不靜矣、然而靜天地、巔天趺地而居、動天地巔持趺轉而活不凌絕頂、則焉辨丘陵之迂邪、運行主象轉行主氣、兩圓相合、則中外圓合、環守理分、若分其合、則運圈之所戴、便轉圈之所立、轉圈之所立、實地占之、轉圈之所戴、便運圈之所立運圈之所立、虛天占之、出地球之所實、則水球燥球相重、見天趺粲爛之文、靜天以影充其中、踰天趺之所虛、則日規月規相重、遇地趺錯雜之章、動天以燥居其中、靜地之所露、而動天隱、動地之所見、而靜天沒、靜中虛實分居、動中運轉分行、是以同是一日月、以爲東行、以爲西行、或爲南照、或爲北照、地質靜物、天象動物、天行周地、象行同天、天行回

象象翻周地。

日環東線成一轉高卑別輪周天在其中、而其間、星東移、天西移、月環月道成一轉。高卑別輪周天出其外、而其間、日東往交西後、故周天之會期非各天之成紀也。日月周天爲順行、周地爲逆行、神爲也、天會日則一歲成、日會地則一日成、天成也。是以日月之體、會而朔成、違而望成、運轉之線、會而分成、違而至成。

分者春秋之中、至者冬夏之端、混地二用。一面一背、我所居爲面、所不居爲背、所面可觀、所背可察。故面北之地人者背南、日北則夏、南則冬、當北向之衢則春、當南向之衢則秋、面南之地者背北、故日北則冬南則夏、當北向之衢則秋、當南向之衢則春。故混地之緯用、一邊降雪、一邊發雷。是以分面背、則有晝夜冬夏。以混地則夏即冬、夜即晝。然是又大槩之說、非所盡天行之微也

是以會違交錯之狀。日周天而東、依違西線而西、月周天而東、依違東線而西、月道一周東線曰一章、日道一周西線曰一紀、順逆之可數者成。

地道靜而陽矣、天道動而定矣、以陽地物之往來、亂而變矣、以定天物之往來、錯而常矣。日月運轉之會違、人驗之於止地、而認其紀、日一周地、刻之於一百、日月一會、儉於三十日。故日一周天之頃周地三百六十五而贏、與月相會一十二而贏。待贏而立閏。故曰日、曰月、曰歲、曰閏、成于交錯之會者也。若以芸芸之數、爲實日月之紀也、則亦焉知神爲之運。夫天之數、雖能積無數、而亦一焉耳矣。故奇偶以計紀之、皆出人爲、成者天也。知成者之出于天、而不知爲者之非天焉。人之眩于數也。運者唯運、各行運轉、引而不見其極。人欲數天行

之術爲圖彼百刻二十九日十二月三百六十五日等之數而知各各一轉會否哉予其圖此所圖而復者之常哉始終引而行者之竟無始終也唯人得而度此之域域得而刻此之登衰此故長逆者、無可紀者、往復者可以數也日月星辰各違又分高卑之行步有緩急各各一轉無違其時以竟歸乎行雖歸而各各不相與雖不相與而計自己遇轉而一周地畢矣故其氣轉象運氣一象各也日一周地之頃計爲一百刻則轉之一周地則九十九刻之餘日一百刻、月一百零三刻餘是日月之逆行也、日之周天、三萬六千五百二十三刻餘、月之周天二千七百三十二刻餘是日月之順行也月道西而一周東線、六十八萬數百餘刻順行一周、則逆行六千五百七十七回餘、日道西而一周西線、凡若千億順行一周則逆行之日應其刻也故西者

爲逆行之日月、東者爲順行之日月、說其會違則月半周天而不與日望更進百十刻餘爲望、一周天而不及于日又進二百二十刻餘爲朔日三百六十五周而轉三百六十六周蓋天道常哉、故其會不差、人得計之、地道爲變故會否無常、不可計之故以曆紀計之則日一周地之爲一日、日一周月之爲一月、日一周天、之爲一歲、日十二會於月之爲一年、年者得歲之餘而置閏爲之於循環之間使不差寒暑者也是故以天言之轉者西轉一始終而復相積曆之所紀之日、則其逆行復地之舊位之類也、而月之逆行、則不還、一歲則日順行復天之舊點之期也而月之順行、則數日之台故一月之紀者及日之時也、一歲之紀者日復舊點之時也而日月之自行見於高卑故今之曆者紀日月之會朔非謂其周紀矣故月常半明魄朔望晦于自

地望日月各一周、閏餘成于以會而紀。是以地者一圓塊、守正中而居外、天與地反、日與地比。故轉行由經理、晝夜之所成、群動之動息之牽、運行由緯理、冬夏之所成、萬物之發收之與。

烟起氣滃、雷發雪結、鳥獸毨革、草木榮枯、物之從發收也、風狂雨旋、地震天鳴、物之爲鬱發也。

華者、一氣之英華、液者、大物之滋液。陽氣發焉、陰體融焉。無液則體不成、無華則氣不見。是以天地轉持、與水燥日影、性體相合。天地轉持開物、日影水燥交氣。小物以生化於其間焉。是以大小之物、同聚散解結、露於緯則靜、露於經則動。氣聚質結、而物能生、氣散質解、而物能化。生化者即一動一植、是之爲小物。

大容小、常容變。小者觕也、往來換體、大者精矣。生化一體、以觕徵精、以常察變。此猶彼、彼猶此。散結持常者、沒于化之端、散結換體者、露生化之端。金石成壞于攸久、雲雨聚散于倏忽、皆道異而居同焉。

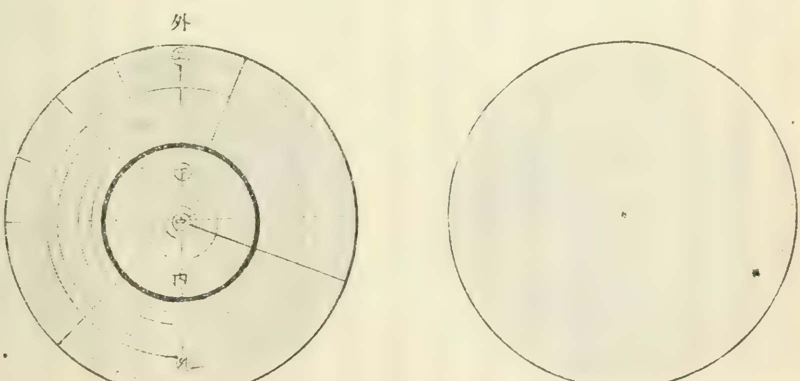
動者有意、植者無意。有意則能動、無意則能靜。而動能作止、植能榮枯。故其爲氣聚散、物解結焉、其成動作止、植榮枯焉。至作止之變、則隨剖而體各具性。體性愈分而態愈不同也。植則止極形體之變、動則動極動作之變。天行止於持、地行止於轉、氣轉象運、以圓而行、雲騰雨墜、以直而行、水斜流、潮斜溯、鳥御氣、魚游水、獸走地、魚泳水、蚤能跳、虱能跂、蟹橫行、蝦郤飛、人立行、蝶倒行、蛛走絲、鼴穿土、水母浮、海參唯轉、蜈蚣多足而行、反鼻無足而行、獸四腳、人雙腳、極行之變也。日月居轉、雲烟居持、植土居、動氣居、魚龍水居、藻苔石居、獸伏人臥、鳥摑枝、蛾點壁、鳧鷖能浮、魚鼈能潛、物正處而伏翼倒懸、物夜休而鵂鶹晝睡、極止之變也。生

委曲入機

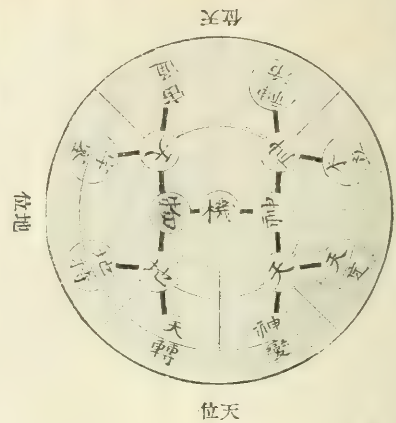
生之跡金石自凝隱變化之所由螺蛤不交沒感應之所跡華實已見牝牡最著就跡極其變動有牝牡植有華實動分卵胎植分子根而動植有氣化有體化是以植或結實或無子或生瓤於肉中或成實於皮中或自根生或自華結麻分華與子紫檀一葉與子水物之薄感羽族之薄交魚一胎數萬人數交一孕鳥能伏卵魚不伏卵蟷螂結子於螵蛸蜘蛛畜兒於囊中或有抱子者或有負卵者

是以其所行止在天之氣象則東西南北在地之氣質則噓噏發收至萬物則或正順或乖忤或滑通或澀躓所以人死生老少經動營爲言施緯動德分善惡道分邪正

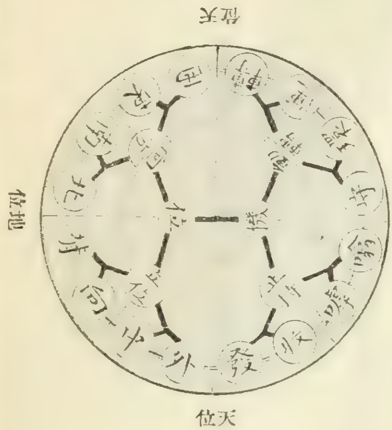
形理轉持圖一合



神物入機圖



轉持方位圖



形理

一氣通塞、大物活立。大物已立、則小散其中。蓋物依于體。體成于形。形依于位。位成于物。圓外而虛內、則可以養物、實內而銳外、則可以刺甲。雖同是鐵也、形異則用不同也、雖圓外虛內、而造之以木、則可受水、而不可當火。雖實內銳外、而造之以土、則可弄、而不可爲兵。雖同其形、而體異則用不同也。故同一土泥瓦之、則可覆風雨、甕之則可盛酒漿。同一木片。模神而後可致蘋蘩之敬。削屐而後不避土泥之汚。因人造以窺天造。其爲轉持也、分于形之直圓。其爲山水也。由于形之拗突。是以雖體必成形、而形非體也。雖形必由體、而體非形也。

氣者依活而動、物者依立而靜。立則中外成位、氣體爲物。其理立於靜、其氣活於動。是以氣由理而布、形由氣而見。不以理、則莫所運鬱浡之活、不以形則莫所成混淪之體。混淪

正形

得塊然而居、鬱渟得袞然而行。故通袞、緯塊、形理之祖。形理見痕、從物成正斜。正中直圓爲正、規矩爲斜、斜中塊歧爲正、邪曲爲斜。直圓正而形理混成、規矩斜而形理粲立。直矩爲理、圓規爲形。然而散者邪曲其理、塊歧其形。塊者圓之地、袞者直之本。塊歧則直圓之變也。故直矩之理、散之邪曲、圓規之形、散之塊歧。動者不能不循理、靜者不能不成形。夫物之爲物也、神活於體、體立於神。活沒中見則通、露中見則動、立沒中隱則塞、露中隱則靜。其塞靜沒、縛縷通動露。條理通動塞靜。由理而成形。理通道路。氣從此布。氣之所布。正斜成形。時經通、處緯塞。體自靜、氣能動。均之則通乃天之動、塞乃天之靜、動乃物之通、靜乃物之塞。物中靜體成天地、動氣成轉持。相得則各有動靜焉。故靜也則天圓地直、

處止而終圓、時行而終直。以持直自中分表裏。表裏難分、而混成一圓物。直以運圓。自今分前後。前後難分。而滾成一逝時。環守爲南北。運轉爲東西。逝者爲前後。旋者爲歲日。故圓象之旋而復。譬若循環往則復。終無端緒矣。直象之往而不返。譬若以繩矩之繩。盡而直不盡。引而不見其所止矣。

動也則轉規守矩。

上下以虛實分。體之天地也。虛實相分則直圓混成。內外以轉持分。氣之天地也。轉持相分則規矩粲立。是以轉持之間。轉爲外。天成其處。而象居其中。持爲內。地爲其物。而質居其上。自混成觀之。則持直向外而圓也。自粲立觀之。則竪矩貫中而規也。分天地。則轉持合矣。天體自虛。地體自實。成。分轉持。則天地合矣。轉氣自精。持氣自貫。轉而直。徹持而圓。不以動爲形。直圓混麁。貫地而爲矩。轉天而爲規。不以靜爲形。規矩粲立。靜塞于動中。動通于靜中。容動

之靜、靜而無跡、故令之動、則東西不礙、昇降不妨、用靜之動、動而守處、故令之止、則南北爲軸、內外守位。

二則能合、一則能分、天地成靜、轉持成動、而動靜同圓其形、同直其理、唯其理動則斜、靜則正、不能不不然而然矣。

圓者形也、而成動之體者也、故塊然能形於物、足包以容、雖塊歧方扁、種種之異形、而於可統居者於內、則同不失塊然之體歸圓、直者理也、而成氣之路者也、故遂乎能理於物、足給以徹、雖有橫竪邪曲千萬之態、而畜活於本、施氣於末、則不失遂乎之理歸直、此故直可運氣於體、圓可成形於體、是以道由理而有、非道即理也、體由形而成、非體即形也、姑且以小喩大乎、夫動之於身首羽毛、植之於根幹華葉、體則相似焉。至爲禽爲獸、爲艸爲木、散爲萬品、則何以分爲。蓋形之爲異也、從氣之布、氣之所布。乃理之所在。理於動曰衇。於植曰文、玉曰理、石曰砌。山水曰衇。轉持曰規矩。

活性自此運、形體於是成。

氣依動而通、體以實露、位依靜而立、形以虛而成、旣是靜虛形位奚以見、若夫行路之人高下由其地。而路圓則行圓、路直則行直。於是觀圓非運轉之所爲、直非昇降之所爲。理則正直斜矩、形則正圓斜規。故形者理之所成、理者形之所立。理正形正、直成圓、理斜形斜、矩成規。故天地圓以含直、轉守規以抱矩。

圓者圓而圓、其形如毬、無垠以極其大焉、直者直而圓。其形比栗毬、規者扁而圓、其形如輪、運轉以成其橫焉、矩者直而立、其形比車軸、幹守以成其竪也、以持有所垠、而內動之勢、至轉而盡、而其精靜不隔轉持、以轉有所止。而平運之勢、至持而無、而其危動能分橫竪、精靜能混直圓、直自中貫外、則止而靜也。矩自端徹中、則旋而動

入斜

焉。故矩爲軸、規爲輪、規與矩同直其理、圓爲外、直爲內。圓與直、同圓其形。

混成其形、則經衰緯块、未見直圓之痕、粲立其物。則彌變規矩之體。體以虛實、機以動靜。機體之間。性成水火、體・成山壑。星辰橫其上、而衡從其行、動植立其下。而本末其體。山者塊然之體、拗突其形、壑者歧然之體。邪曲其理。夫物之所成。性活而氣運、禮充而形成。氣不徒運。由理而運。理者。氣運之通路。布氣成形。大物混然爲圓者、以其理之直也、合則圓成、而直立其中、分則直理、而圓成其表、運者活之性、有所資而始、有所給而繼、故本歸中、中之外、是以地塊然一毬發收代用、一噓一噏、發收從圓、噓噏從直、從噓噏見南北之用、

地體、一而全矣、上下與中外伴、而能成圓、故資之於下、以發之於上、地用二而相闕面背更於南北、而能爲直。故用之於所向。以廢之於所背。是以一塊大物。氣之所資、圓有中外、用之所成。直分面背。中外者定位也、能定其處、面背者變用也。或面或背。故其成於緯者、半面爲冬、半面爲夏。成於經者。半面爲晝。半面爲夜。其一直之所貫、露端於兩極、一平之所分。爲界於中線。故地一圓塊。萬物環而居之。氣爲上、質爲下、轉爲外。持爲內。昇者之天、降者著地。方以東西定、位以上下立。東西分於規、上下成於直。而圓者直、直者圓。置身於北極下、則南地爲背、置身於南極下。則北地爲背。於是背地若倒懸、中界若側立。轉環之間。倒側相移。倒側相成。由有二用、倒側相同。以一體也。圓成則直在其中、形爲栗毬、直立則圓成其外。理爲車輪。故直之持地、如車輪環外、而輻不能散、不能倚、盡向軸也、直之承天。如轂在中。而軸不能陷。不能墊承輪也。故以天地觀之、氣上質下、以己觀之頭上足下。是以轉者通之露體處、持者塞

塊岐
邪曲

之示體處、一一之所分也、通不隔持塞不遺轉、氣物之所合也。

一機粲然爲規者、以其理之矩也、合則矩立、而規成其外、分則矩理而規範其動、動者運之露、有所守而止、有所轉而循、故守持竪轉爲橫、是以天混焉一氣運轉互用、一守一環、運轉爲規、環守爲矩、從運轉見東西之用、故天地靜、而形理含直圓、轉持動而形理示規矩、天者運轉環守、一平一直、地者水燥土石、一俯一立、愈之斜焉、而塊然之球、異於天行之歧其理、而天歧者橫竪其理、混焉之氣異於地體之塊其表、而地塊者邪曲其理、故象質之行、分衡從本末、山壑之體、分坳突邪曲、天轉地持、爲體之物、水燥日影、爲性之物、體物居露地、性物居沒地、故象亦成直圓、而分規矩於天地、質終爲俯立、而合直圓於天地、氣體以直圓而立、象質以橫竪而成、

性、則陰陽、體則氣物、而陰陽與氣物各同具天地萬物。以氣物而統陰陽、則一中外、而彼此混成、以陰陽而比氣物、則各中外、而彼此粲立。是以成于體者天地、成于性者日影。天地者天轉地持也、日影者氣收象發也。日象影氣、下與水質燥氣偶、故雖日影與天地張勢。而影收日發、而日居孤中、而繞地外、水潤燥煦、而水就弦中而浮地表、華充于天間、液漾于地表、象質各偶其氣。見陰陽之物。雖然水燥合天地、日影比天地、則日影能與天地張勢。於是天中之萬物、得日影而繫持中之萬物、得水燥而列、

絪縕摩盪。上則懸星辰、衡從其行於日影之間、以能循環、下則化動植、俯立其體於水燥之間、以能鱗次、於是動植之物資形於塊岐、愈變其塊岐資行於邪曲。愈變其邪曲形位者大物之所成、成具小物有資。以別開天地。直圓出於理形之正、邪曲極於理形之變、

正有直圓規矩、斜有塊岐邪曲。塊者不岐、而未得正規、岐者不塊而未得正矩。故天之所運、岐其行、地之所立。塊其體星漢最高、其行循東規、日月最卑。其行岐東規、坱坱之間。天形正圓、水燥漸假之、地形以坳突爲文章。望遠鏡之所窺。日月之體。有文章如地。於是雖天象而漸已近地。則日月塊其體、岐其行。然而與地中之塊岐不同者。天地之大分也。故輪軸既設。方處既定者。形之斜也。斜中分之。西規北矩、以高而正矣、東規南矩。以卑而斜也。日月塊然、其行輪架輪至月則愈近地愈生輪輪重疊如蔓之緣木隨日之諸辰。各自持機軸輪輪相架異於星漢之通脈絡。斜者雖地物之形理。親天者自含正以人目言之。四邊茫茫、所視則一圓象、萬里歷歷。所指則一直線。是以光耀之及、聲臭之至。東西南北偏徹。偏者圓之勢、徹者直之力。

是故大物天地也、一機轉持也。天氣地體、同圓其體、而分大・小、轉軸持輻。同直其氣而分長短運轉同規、分平側、環守同矩、分立倚衡從同橫、而有經緯之別、本末同竪而有上下之異。塊岐同物、而有俯立之分、邪曲同理而有直圓之道。故大物之成。小居大容、短止長守長矩守其位而旋、大規轉其方而行。天圓裏而覆地、地直立而載天。內外分焉、經緯立焉。

外之位者、圓而容焉、內之位者、圓而居焉。

經之方者。以直爲規、緯之方者。以直爲矩。直矩爲理、圓規成形、虛中之形也、橫竪成理。塊岐爲形、實中之形也。景影爲處、而天物居此、水燥爲處、而地物居此。天物塊然、地物岐然。天物乾燥、虛中曲行、地物潤經。實中邪行。轉中、守矩立而定緯位、平轉西之經紀、環矩倚而運緯位、側紀東之經象、

經者東西之平規、緯者南北之竪矩。統則

堅矩自定、平規自轉、分則守而西轉、環而東運。於是東西斜絡、南北出入。氣象之所錯綜也。自守者、而觀環者、則環者斜也、自環者、而觀守者、則守者斜也。而環而運者卻遲、守而轉者卻疾。

持中。氣圓而堅通、水燥之物、質平而橫列。山壑之體、天者以散、而諸象布列、地者以結、而諸質附聚。布列者自成、故其形直圓、其行平側、附聚者倚成。故其形塊歧、其行邪曲。人物開境於天覆地載之中、遊於風俯恬立、海坳山立之場、而堅生塊然閉體、輭生歧然開體。開閉別生、邪曲盡變。

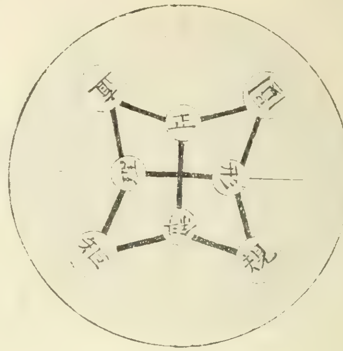
一形分正斜。正則直圓含規矩、斜則塊歧兼邪曲。正斜錯綜。萬形極變。是以植不得堅立之正、以盡邪之態、動不得圓轉之正、以盡曲之態。然而天物之邪曲、多于行而微于形、地物之邪曲、與塊歧相配。夫萬之形、居于天者之塊然、居于地者之歧然。何以其然。在天者、散中聚象、猶噴水得許多之圓滴、雖斜而諸象爲塊、依地者、結中凝體、猶碎壁得小大之缺片。雖成而極歧。在天者、塊然爲圓、而明者高矣、平布一列、暗者卑矣。重疊參差、在地者、歧然爲變、而植者著地、平布守位、動者居天、位序變陽。於是地上之萬形、爲峙、爲陷、爲匾、爲頗、爲橢爲稜、爲方、爲角、爲邪、爲曲、以著、以依、以纒。以蔓、以倒、以正、以長、以短、體行之間、莫所不盡其變焉。正圓不用平、規能爲平、正直不用堅、矩能立堅。不平圓、謂之曲、不堅直謂之邪。地者、以體爲輹、故地橫俯、氣堅立。地坳而容水之平、布突而居燥之混圓、艸木邪而立、鳥獸曲而俯。然而星辰之行、在轉宛轉、渾天之形、裏地直圓、圓則在地者皆在天、在天者咸在地。

於是運轉環守、噓噏・發收、見天地之動機、中外上下、東西南北、立天地之靜位、天地轉持。

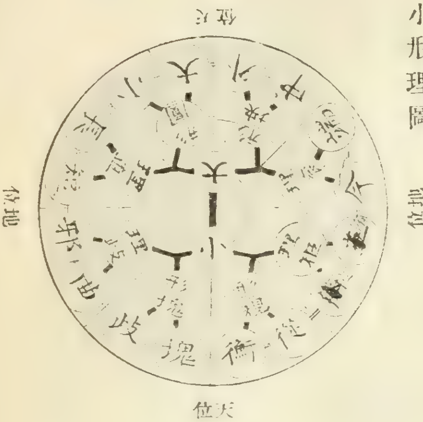
水火山海。以成物之體。直圓規矩橫竪塊歧。以成天地之形。若風雲水火土石。雖有體。而未持定形矣。是以分則斜斜錯綜。合則直圓混成。唯天則行合理。人則行待理。

人與物。同具情慾意智。而思惟分辨之智。人爲最。於是唯人足知天地。唯人足行天地。雖資直圓規矩。以歧然之身。依邪曲之行。天地有正邪。故人物資正邪。天地不有正。則物焉有正。天地不有邪。則物焉有邪。動必有方。人得而道之。天地有規矩。人得而則之。故圓爲規。直爲矩。圓之機也動。直之機也止。圓之力也轉。直之力也持。圓之體也統。直之體也分。圓之用也混。直之用也粲。圓之化也偏。直之化也徹。圓之才也容。直之才也入。是以靜而圓者湛。靜而直者皦。動而圓者安。動而直者正。思而圓者靄。思而直者敢。交而圓者愛。交而直者敬。望而圓者溫。望而直者莊。辭而圓者婉。辭而直者切。是以有則。有理。有紀。有章。位序粲然者。直之事也。不可詰。不可捉。動而愈變。出而愈不窮。措之無知其處。置之不見其跡。變化混然者。圓之事也。是故直之至。天不能違之。圓之至。神不能窺之。觀夫圓行直止。圓爲規。直爲矩。行止中規矩。聖人之事也。不圓則曲。不直則邪。邪曲則小人之事也。是以智不圓。則不通事物。不辨幽明。隔物我。惑是非。行不直。則外飾內疚。此縮彼薑。智不直。則姦邪放僻之謀。行不圓。則不得從容。不役於物。粲立著痕。混成沒跡。混而能通。活而能神。不窮而變。無痕而化。不混則不通。不通不神。不神不變。不變不化。不化不成物。不成物奚事物之有。

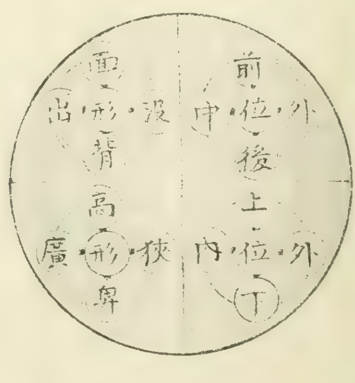
形理正斜圖



大小形理圖



形位相合圖



玄語目

同胞孿胎

玄語

日本　鎮西　三浦晉　安貞　著

地冊　露部

體界之冊

天地

錯綜觀之、則天虛而動、地實而止、日月上通、水燥下塞、剖析觀之、則機以動止。體以虛實。衡持輕重、精有乾潤、條貫而子孫仍雲、孤以紀衆、理析而反比傍斜、多不嫌寡。是以天地者氣物之成名。成則性體入氣物。氣物以全。全則雖鬱浡之活爲天、混淪之立爲地而地中。氣象依動天地、以通於袞袞、氣質依靜天地、以塞於块块、块動則轉持、靜則天地機體相合。一球混然而立。靜者能居、居者不能不以位、動者能行。行者不能不以方。位則上下內外、方則東西南北。沒由露認、露由沒成。山嶽河海、在內占位、日月星辰行外占方。沒露動

靜。相得而全。止者動之止。而與靜異也。故動中有動止、靜中有虛實。氣象者動物、依虛而行、氣質者靜物。以實而止。虛實合球。同胞孿胎。胎中雙兒。各持天地。一球能容連環。天體散焉、地體結焉。日體動焉。影性收焉。運轉與虛實合其圓。而孿胎雙圈。水燥襲本圈。日影成別圈。本圈則直圓山壑、雙圈則日影水燥。日影景月、循行靜虛規矩之形中、水燥溼火、居山壑拗突之體上。動止內含形理、外吐華液。夫天地之分。天體者虛、地體者實、天機者動、地機者止。而陽性者乾、陰性者潤、陽體者輕、陰體者重。虛乾輕動、成物於上。潤實重止、成物於下。乃華液之所成也。華液既成。而性體並立氣物焉。轉持形理、則機寢於沒中。天地華液。則體物於露中。物之成也。形體相得色性相合。分之則轉持天地、以形體成日影水燥以色性爲。色有清濁明暗。氣質之爲通隔者、清濁也。氣象之爲照蔽者明暗也。升之

謂色。而清濁偶轉持、明暗偶寒熱。日影之政、在明暗之色。寒熱之氣。水燥之政。在乾潤之性。滋煦之才。而明暗寒熱受之於水燥。而爲清濁溫冷、乾潤滋煦望之於天。則觀發收肅舒。故天象輕乾、虛而動、地質重潤實而止。名圈之氣物。分象於天地。色性充塞。絪縕摩盪成焉。虛實之間、序上下內外之位於緯、動止之中。成東西南北之方於經。而內外爲動分位於上、上下爲實分位於內。而西北者止方也、東南者動方也。內外者動位也。上下者靜位也。天徹地而動、地貫天而靜。而動依靜之奉。靜依動之保。請審運轉之道。以導其脈。夫天地者、天巓而地趺也。而轉者合此條理、運者天趺而地巓也。而日影分此條理。於是運轉返巓趺、循環脈通。天地分日影。剖析勢張。於是陽成則日巓影趺、陰成則天巓地趺。唯導其脈。則轉自根而上達以爲幹、運至枝而下鬱以歸根。轉巓者廣、轉趺者狹、運巓者狹。

運跌者廣。辰以晤體、而景中重、星以明體、而影中列。列星雖廣、而一其脈絡、重辰雖狹、而各其脈絡。中日而影外圍、中地而天外散、而地者固中也。日如在偏焉。日不以出體爲中。循規爲中。於是陰影與陽天歸一圓毬、而星者影曜也、辰者景曜也。運圈中星辰日月。軸分緩急之節。圈乃弧、軸乃弦。月弧之弦短、而運熱急也。日弧之弦長、而運熱稍緩。亦同中之異爾。至星・天則弧形最大。弦旋亦遲。運標將結根實之前。陰陽之精著華。地者以持之水燥而自養。運熱入持中、則無陽蘊播地面。爲質實之養。天者以日月護其根。其文在運中、而月不歧其象、歧其行。日不歧其行。散其象、猶花蕊之多。其辨目自守其心。而日華于其弧中。自出機軸。諸辰圍繞其日。以開華之天地、以偶實之天地。於是保根之氣西轉、養花之氣東運、而

諸辰層層相重、運機軸、象星點點平布圍罫面。於是衆星一脈絡、諸辰各脈絡。運環之所成、層層有緩急。故轉者羅章於地、沒物於轉中、運者繋文於天、潛氣於持中。故轉圈自地心起、而至天表、運圈自天表反、而歸地心。轉亭亭爲幹。章具持中。運開文於運中。生節出枝、開華出蔓。嘘噏以致日之南北。蓋日弧以內之動也。地以根占中。其華不能不居孤。孤周地。日遍天地。日月既自生節出枝、以開其華、合根爲實。何其與艸木能相似焉。然而日月之爲物、陰陽之性之成于標也。水火之爲物、陰陽之物之成于本也。水火者範象、遂培地質。運轉者虚氣、以釀日月。此則自質結氣、彼則自氣發象。以通其理、混成一球。是以水火有用于地、日月有爲于天。運之折、陽向地經數萬年而一周天。標爲日月之偶弧。其熱急。日度轉三百六十有六回之頃、月度轉

二十七回之頃、轉行一齊推去、下緩上急、得之於自然、運行節節分推。上緩下急、得之於使然。日影者陰陽。陰陽著象。與天地相抗。自開英華於枝頭。與根實張勢。是以日爲中、影爲表。日爲巔、影爲趺。日爲天、影爲地。諸辰以日所私之軸。旋其輪於是日所駕者爲游輪。依達黃道。亦與月相遇以爲西轉之二游輪於是歧不在圈線。故星漢布罫。日月認其處、日月東運之線。有一西線棄之。日者盛其華英。其依達之歧微也。月者不分華英。迂邪其行。似艸木出蔓者。杳渺旻天。星漢則遠。日月始能與地親。於是除屬物。則見日月之二。持者柔境水燥以合陸。寒熱殺威。日月絪縕于此。於是轉氣而保外。運象而營內。

昇降條貫。比之於樹之外影、獸之內體。依稀觀其不佗焉。地者陰實之質。由天動而氣上伸。伸者有垠。不與精融。達翻爲鬱。如折而降。

象實

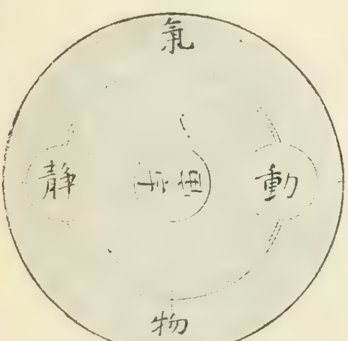
陽虛之復勢歸根。結實。地體者根實也。鱗比者分根實。循環者一根實。地體爲根。轉爲幹。運下垂。生枝結華。杪歸地而爲實。故轉幹亭亭。一齊推去。能漏本根之鬱。運文場地枝蔓各動。能蘊華實之精。天以轉成剛於外。故持能柔。地以地成堅於下。故水能輭能開滋煦之境。地體一圓球。中界噂喻。與運轉之斜。合其進退。運轉相得。而日月駕焉。水生沈水。燥生浮燥。諸辰重於景中。衆星列於影中。天體者清虛。地體者濁實。清中淡濃。以虛體成物。實中通隔。以實體成物。以實成者。則收而結。以虛成者。則鬱而發。收氣則影。收物則水。影與水。同德同機。鬱氣則燥。鬱物則華。華與燥。同德同機。雙環並成。脈以反通。於是地者暗濁潤重而歸本。就弦中結陰質。質結則氣外達焉。華者清明輕乾而發標。向弧中發陽象。象發則氣內鬱以鬱之達。以達之鬱。相得而爲保奉護養。

天地者、成于陽散陰結。日影者成于陽發陰收。地者物也、天者氣也。立于體界者、居天而履陰球。在于色界者、居影而奉陽球。陰球在弦中而不移、陽球行弧中而不往。日地分持弦弧、而地之兩端、在弦之左右。日地常爲矢勢。以車比之、地如軸、日如輪。日地異環守、則各有輪軸。既謂之變、則無所不變。始能副其名、由條理推之、洪濛之前、悠久之後。轍跡遍天。而日之射地、將盡其跡。而星辰之於天亦然。謂之天變地常。而其心地外天、心日外影。張二之勢也。自一之所成觀之、轉巓歸運趺、運巓歸轉趺。於是觀日之歧運、屹爲一敵。既已依立一天天地且置運之巓趺。日影別開天地。於是運轉順逆歸一。日自出機軸、反于水燥之合機軸於天地也。既天地二其球。於是衆星從運之輪軸、諸辰從日之輪軸。日月既居運小環弧中、則不能自爲衆星之心、

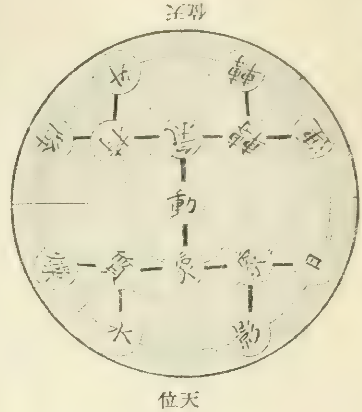
衆星之心。則歸運巓而止。然則日月之爲歧可知焉。以一之統、日月之弧歸環軸。與衆星爲重形。以二之分、弧中爲心。與暗影成天地。而日通之線乃東中。日依違東中。又自爲圓。月依違東中。爲種種之歧行。所以稱蔓也。大圈有星漢。小圈有日月。月者日之配。諸辰者日之屬。小辰黯黯、大辰暳暳歲填又出輪軸。自領屬辰。歧出歧。而枝椏益繁。故象星之列布。與諸辰之重疊。其心不同。而日月則歸圈於運心。而不出一統。但諸辰者重居日表。諸星者列布影中。辰者暗物、爲天之露。猶火之明象。爲地之星。是以星漢之體散而輕。日月之體聚而重。日影水燥者。性之物。爲絪縕於虛天實地之際。以爲生生化化。故其物數得無間。故分則兩環張勢、合則運轉通。脈既已通脈。於是轉自內向外、運自外向內。東西反旋。亦似非他糺焉、

天地者、氣在根上、氣象者、華在氣中、水燥之天地者、合其物、日影之天地者、分其物、二圈又歸一球、而上下定位、虛實立體、清濁分色、乾潤反性、於是靜境定物、動境變氣、其位既立。其理既布、運轉在清、昇降在濁、濁結者質、質成則實、實則物不得不居地表、清散者氣、氣成則虛、虛則物不得不在天中、星辰動植。物之所分也、故氣物之活立、成于動靜虛實、陰陽之絪縕、分于清濁明暗、盔宙間天神遊、宇內天地居、天則清虛隱沒、地則濁實見露、氣活而機軸運、體立而文章成、天文璀璨以紀宙、地章鬱郁以成宇、覆載有所垠、無垠入玄界、一室之開閉、不知明暗之往來、烈風拔樹、不動穴隙之明、圓轉沒首尾、直往失標本、天地以中而立、而中不可思、天地以外而成、而外不可知、起滅入機、其神竆變、其天能定、龕露則雖開門上途、隱沒則入室閉戶、妄人摸索幽冥、搆幻事物、聽者優攬龕心、結幻城郭、燦爛文章、皆入空濛、邇之我閉我、遐之物閉物。

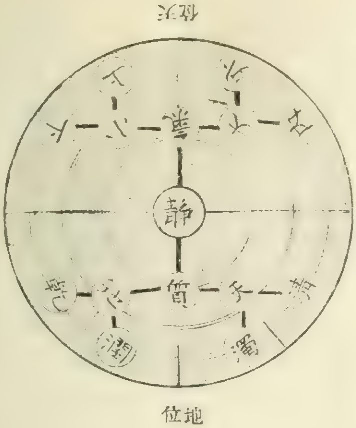
宇宙動靜圖



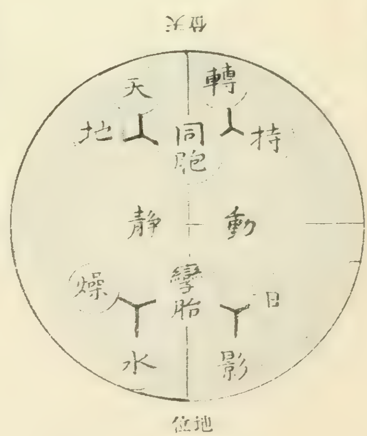
動天地圖



靜天地圖



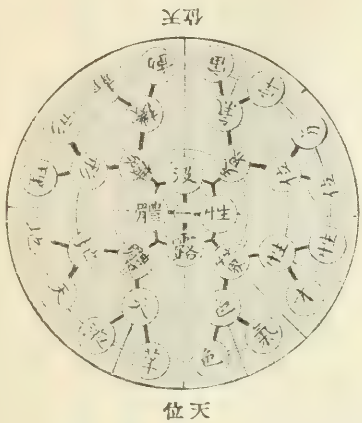
同胞孿胎圖

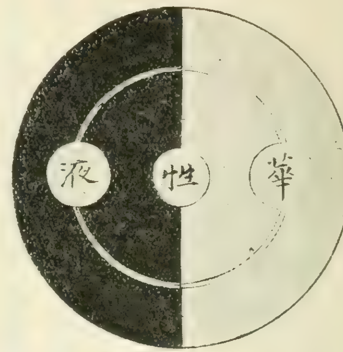


天地華液圖一合



四界圖

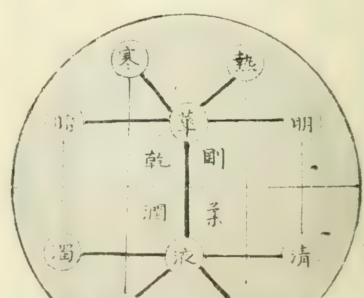




性體二界

華液

鑄縫既綻。精麁沒露。沒境見天機之活、露境露性體之立。體以形體而成、性以色性而成。虛動靜實、爲體之物、明暗寒熱、爲性之物。體物容性物、性物居體物、物物一球、條貫相通、性物兩環、理析相隔。雖理析相隔、而條貫一球。是以其分者偶比合一。日影析月景而動乎上、水燥析溼火而遊乎下。日影水燥者其雄、月景濕火者其雌。體爲一球者天地、探天



散結發收

地則入體之虛實動止、性爲連環者華液。探華液則入性之色氣性才。體見同胞、性見孿胎。水燥見截而假地圈、日影見容而別天圈。剖析而反對者。一之分。分能歸一。則孿胎成于一母。天地者、用之於散結、體之於虛實、華液者。爲之於發收、成之於乾潤。華者日影、物發收於虛體。而爲明暗寒熱、液者水燥。物解結於實體。成乾潤滋煦。蕃块块之處。中外既立。結有所依、而成質於中、散有所向。而充氣於外。比之於块块之併中。而無所結。則其散亦結也。既併散爲結。鬱然之文章。成于一大結物。既得一大結物。又餘一块散氣。

一之剖析。陰陽平分。平走不平。不平合平。衡不低昂。其力相持。走陽走陰。其勢相頡。故陽物向外、託其虛動、陰物向內。託其實止。日影水燥者性。物託天地之體覆者見文、截者呈章。而天物以色見其虛體、地物以體露其實體。其勢則背而相走、其力則對而相持。天散地結、火發水收。天地體露、水火生見。體立其位而覆載、性活其形而絪縕。人以麁小之身。立水火之中間。自已分天地。亦未盡也。若以一块散氣觀此一大結物。雖如此大。而亦陰也。小也。結也。物也。故天地本一。移之於散物。則植之皮身也。動之皮肉也。故块块一陽散氣。爲此一陰結物矣。一陽散氣、一大結物。開結物見天地。開天地見華液焉。氣則精沒、物則麁露。天爾散虛精清、地爾結實麁濁。人立地上。望天上之低覆者。以己以下者、爲結實麁濁。以己以上者。爲散虛精清。是以己之身。暨偕居者分之者也。若精己之身置於日星倒射之地。以觀此天地。則水土之核。日影桴之。水烟星月匝聚。而同歸結實麁濁。於是結實麁濁。食散虛精清。若散虛精清。吐結實麁濁。則散虛精清。焉得精沒。既已不精沒。則相與張勢焉。故沒而立方位

形理、露而爲散結通隔者、沒中有見、隱中有露、彼此粲立。以成覆載。

故精麁食混、成天地、吐粲立天地、粲立則一氣大物。一氣性見於華液、大物體露於天地。天地散結、陰陽絪縕、萬物遊於此焉。陰結則結中陽發、陽散則散中陰收、陰排於天中而影收於地中而水、陽發於天中而日、解於地中而燥、天色清通於散虛、地影濁隔於結實。虛實者沒露散結、淸濁者隱見通塞、天地觀之於體境、華液觀之於性境、體實之物謂質、體虛之物謂象、見容之物、從容之之體。則象中亦有象質。是以性體之所合、收而結焉、其堅則地而其輭則液也、發而散焉、其精天、而其麁則華也。天象者日爲盛、由陰影之歛、不能散爲天、地質者水爲大、由陽氣之噴、不能結爲地。故陽散之中陰發陽、陰結之中陽噴陰。

細尋繹條理之所貫、陰自陽散之處收而結質、陽自陰結之處發而見象。蓋地者實焉、其體密結、其氣粗解、密結不可入、則物皆居粗解、天者轉焉。其轉剛急、其運柔緩。剛急不可行。則物皆從運緩、轉中則氣西走、象東走、實中則氣上行、質下行、實之極、堅於土石、潛於露質之下、動之極、剛於風濤、急於沒氣之標、時處精沒其物、經通緯塞、無所露焉、天地麁露其物、文象實質、無所沒焉。天則虛、而地則實焉。天虛莫所不透、地實無所不隔。天象東行而西退、地質天居而地立、於是火之象、則以虛而外出、日發氣、以食物、物來接則食而吐焉。水之質、則以實而內入、以容物、以拒氣、氣來交則拒而容焉。故水能食火氣、而養火體、雖養而不容火體、小中分別、則膏能養、而水則賊焉。自大物觀之膏與水奚擇、火食水氣而養水體、雖養而不能容水體、小中分別、則燐能親、而火則疏。自一氣觀之、則燐

與火奚擇。天散地結之分。氣有聚散。質有解結。蓋一也。其用則見吐食。火著濕柴。則溼暗上浮。火煨溼物。則溼潤內結。是以影體以日氣之發。而爲散。日體以影氣之斂。而爲聚。燥體由見占地於水質。而昇解。水體由見圍地於燥氣。而降結。是以水質之所收。爲火發之本。燥氣之所解。爲水結之原。故火解南地。則水凝北地。火解北地。則水凝南地。

影收地結。而天地陰成。天散日發。而天地陽成。水融質於結外。而偶於所解之燥。日發象於散中。而偶於所收之影。

轉間有日影。地表有水燥。水可親。而火不可親焉。試諸地上之水火。而知其用。而後華液之絪縕。可以窺焉。蓋陽自收結之中。鬱發於天間。則爲華於象。華以日爲其宗。陰自發散之表。疏收於地上。則爲液於質。液以海爲其宗。故火者發於天陰收中。水者融於地陽解中。發收解結者。天地之態也。以天地異也。其態異也。土石者體成。金水者性成。成於性者凝融。成於體者解結。凝融解結。本非佗焉。唯以其性之異。而其態亦異也。故土而常解。石而結。金而常凝。水而常融。水者天然之融物。金者天然之凝物。氷者水而凝。汞者金而融。石者天然之結物。土者天然之解物。玉者石而精。石者玉而麁。土者土而解。砂者土而結。結者固而脆。凝者輭而黏。金黏石脆。埴黏壤脆。此性靡所不有。則艸木鳥獸。萬之事物。人之性情。雖從物異名。堅輭莫所不有矣。稻之糯粳。禾之粱秫。所結非佗矣。水火者。陰陽之麁體。有綻露陰陽之用。故或解結。又能固結。或結解。又能輭結。試之於此。水者以滋潤黏物。火者以乾燥固物。陶瓦者人造之石。水黏火固。氷金者。天凝之水。晛澌火融。是以和土以水。攻之以火。其質爲石。

灌之以水、攻之以火、其質終解、以體而成者、見火而解、以性而成者見火而融、條理必剖於所往。

而日吐景、水吐溼、溼含火、景含月、天者散陽也、地者結陰也、其間則日影水燥、影者收陰也、日者發陽也、陽發伸景、則露結其中、水者結陰也、燥者解陽也、陰溼鬱陽、則星發於其表。月與辰者、天之露也、火與雷者、地之星也、地結陰於弦中而止、日發陽於弧中而走。居中而觀外。日不盡際涯、以囿於地也。日景、陽之一圓物、影地陰之一圓物。天包地、日循地、混淪一圓物。未歸之於块块。

氣收則陰肅、肅而結則地質結則氣達、達屈則鬱、鬱而發則日、日標之餘氣、歸地而燥、燥陽而解、水陰而融、水則上比影反日下反火比溼日食陰、而其發弗盡、地噴陽而其融弗已、剖析之所不盡然焉。發則乾焉、融則潤焉、

象質
通觚

潤以釀水、乾以致火、乾者、求而贍者也、潤者、漏而慊者也、水以燥而融、以火而枯、觀火之吐而食、火由溼而然、由水而滅、觀水之噴而喻條貫之道也。是故天散地結、陰收陽發、收者歸地、發者之天、散結成天地、發收爲華液。故日影照蔽於天、水燥滋煦於地、於是象濃於色而見性、質實於體而露物。

天氣者精、地氣者麁、天體者虛、地體者實、吐則天精不容地麁、地麁不居天精、於是乎精亦麁也、天體者虛、地體者實、天虛不容地實、地實不居天虛、於是乎虛亦實也、食則不出麁而後精、不拒實而後虛、沒跡與露跡同居、沒體與露體同居、同居不妨粲立、以能混成、混成則觀天於地、粲立則吐天於地、故天沒於地、地露乎天、則觀地若天之大、地以吐天、天以吐地、則觀天大而地小、於是觀此麁露之天地之爲地、精沒之天地之爲天、是以雖體虛之地、精於

體實之天。不可取其地以爲是天。不可取此天以爲其地。於是觀聲者麁。而主者精也。主者活矣。聲者死矣。以死聲呼活主。指其所定於前。則所活逸于後。其得實弗勝逸焉。苟不活意於聲外。則無益于言語。已粲焉立。聲不可移之於毫釐。本混焉成。可以盡之於天地。是以雖虛者虛也。而呼虛則實亦從。雖精者精也。而呼精則麁亦從。故呼之陰者陽也。呼之地者亦天也。故雖氣非物。而其所呼之氣。或氣也。或物也。移之於他。靡不皆然焉。足以謂之實結者。亦謂之散虛。謂之地體者。亦謂之天氣。聲聲主主。弗以此求之則將泥聲主。

天體者散。散中偶明暗。地體者結。結中偶乾潤。

陽氣散之中。收陰發陽。其成象於清虛運轉之氣中。就其中言之。以影收闇日。而日鬱發以排影。則影爲氣。日爲物。是氣象明暗之偶也。陰質結之中。解陽結陰。其爲氣於濁質昇降之持中。就其中言之。以水結排氣。而氣沛然而出。水則燥爲氣。水爲物。是氣質乾潤之偶也。故剖析而對持。則天地各偶其物。一能立萬焉。雖一能立萬。亦各不廢天地之對。

體虛者則神活。體實者則物立。以虛而活。而規偶矩持。轉體以剛。持體以柔。以實而立。而天覆地載。天體以虛。地體以實。水火者。以氣爲體。而火則粗焉。水則密焉。而日影偶於天。水燥偶於地。而地體土則輭焉。石則堅焉。動植資體於此焉。水者地之象。比諸天象。則以融質。而猶類地質。月者天之水。比諸地火。則以氣精。猶輕於地象。轉剛拒濁。持柔容質。地堅拒質。燥柔容象。

物者成于體。和于形。立于位。行于機。形則正斜。體則虛實。虛實不得正斜。則不成。正斜不得虛實。則不立。物之成乎體也。雖神

物亦以虛實而沒露。故一氣則其體虛焉、大物則其體實焉。實則中外爲位、而上下內外有定、天地之爲物、體淸虛濁實於其中焉、虛則正邪爲理、而昇降運轉有變。水火之爲物、性乾潤焚溺於其中焉。一動一止、動成轉、止成持、一虛一實、虛成天實成地。虛而動、動而旋、廼之爲轉、靜而實實而立、廼之爲地。故虛氣轉象、體爲剛柔、實體持地、體爲堅輭、宇宙則以精沒其物、雖沒而經緯粲然、天地則以麁露其物、雖露而方位隱然。轉持以剛見規矩、雖見而隱直圓之正、水火以柔見華液、雖見而不示寒熱之形。故淸濁寒熱、雖有徹物之力、以其柔而不礙、轉持水火、雖有虛氣之體、而以其剛而拒物。宇宙不精、何以得牽物移之、而沒其跡、容物住之、而沒其體。天地不實。則奚以透精麁融堅密、起山嶽、畜河海、然而天虛不礙、以成虛、地實不容、以成實。天

地者物也、體者物之所成也。是以對氣則體也。對虛則實也。對天則地也。體開物於實體地中。則性亦爲物於其中、體性麁露。而天可戴、地可踏。色可視。氣可觸。日影相追、水燥相盪。氣持風動。山峙海陷。皆其體也。於是天體者虛、一精一麁、地體者實、一粗一密。其有痕於精者、未出麁者也、有痕於虛者、未出實者也。是以拜精麁而麁之。拜虛實而實之。天地之一大結物。麁濁動實結體、而精淸靜虛散氣。地者實質凝重、降結沈下、至小爲極、得中位乘之、故埆埃莫所漏、而降結有所歸。天者虛氣輕融昇散浮外、至大無窮、得块块居之、故洪荒無所窮、而融散竟沒跡。故地者重凝而下居、堅密凝結爲核、輭粗融解爲壤、坳處水占之、突處燥占之。天者輕融而上浮、精淸融散容轉、麁濁舒解容持、轉處象占之、持處質占之。於是物。或得天而居之、或得地而

小境

立之、得天者虛、得地者實、各從其所資也。其散爲萬物。上則星辰雲雨、下則土石動植。而雲雨則象中之實物、動植則質中之虛物。天者氣之藏、地者質之府。是以質愈寡乎天、象愈寡乎地。居天立地。雖物擾擾于絪縕之間。亦唯一動一植。一動一植。是之謂生。生分物於動植。分居於水燥。以資地以生。體有堅輭。以體乘生。曰堅植、曰輭植、曰堅動、曰輭動。分居於水燥。則堅居水、輭居燥。陸則草木鳥獸、土鹵金石、水則魚龍藻樹、龜介鱗甲。

靜而天地、動而轉持、風恬水陸、則體縮之於持中也、轉而日影。持而水燥。晝夜冬夏。則性縮之於持中也。一自天中、收陰結質、一自地中。發陽散氣。收者黯黯于淸虛之中。以能蔽物、結者體堅

地者水土塊中之核子、堅而至重、止而不動、解爲土石、融爲淡鹹、反之於天。則天者運轉於核子。至輕而柔、動而不已。物爲日月。氣爲景影。故觀土石以爲地者、食末至核子、火之而碎、槌之而破。豈足語堅哉。觀運轉以爲天者。見未開胞淸拒地。剛拒物。豈足語柔哉。

力引、

火輕而昇、水重而降。行不同其路。而以好質而常欲就地。所以象質之同歸物而異於氣也。日月者。天之水火。其路之不同。彼此一也。故於天則東爲物之地、西爲氣之地。氣而輕虛、物而重實。日廼火。同食陰。故雖從天行、而有求陰行天之西、猶地之上、天之東。猶地之下。故水降而就地、其尾在下、火昇而向天。其首在下。觀火尾欲昇不能昇終失其形而知火亦好陰而一就地、月東而向日。其尾在東。日西而向東。其首在東。觀日尾欲西。不能西終向東。而知月亦雖東而首向西。天虛而輕。故親天者輕

而浮、地實而重。故親地者、重而沈。故火發而不及于天、水結而不透于地。天火則見發于陰、而存常持之體於內、地火則見發於地、而滅每換之體於外。地水者降焉、地者止焉。故地水者、得所止而聚于地、天水者東焉、轉者西焉。故天水者無所止而運于天。

以濁隔而塞彩於其表、發者昭昭于濁實之表。以能照物。散者氣麁力浮。以清虛而通色於其外。而日華于天地、水液于天地。華以影而護、液以燥而稃。故日之鬱發。熱舒明布、氣往交則乾、象引接則焚、水之融盪冷肅液滋。氣往交則溼、質引接則溺。

天地之物、定其位而體不接。天地間物、移其位而體相接。故火接水則涸水、接木則食木、水接木則腐木、接火則食火。乾熱遭寒而和溫、喩水而致滋。燥溫煦物、水滋液物。持中之萬物。受其滋煦。是絪縕之露痕

用

者。

影肅日舒、燥煦水滋、絪縕以成用於造化焉。

散氣伴虛動、結質伴實止、天地容居、水火絪縕。

轉中者氣剛、故氣極其力、持中者氣柔。故氣力自微。故寒熱明暗、在天極其甚、溫冷清濁、在地殺其勢。轉以剛自取、以柔讓之于地。持中之柔輭可知矣。於是持之物。常不勝剛勢。其遇大寒大熱而凍焚、遇大暗大明而盲羞。亦其徵也。是以艸木鳥獸皆柔輭之物。通觀彼此、得以下工夫於此絪縕。

蓋其所成。陰以收而結、陽以發而散。燥火同性、火走天、燥居地。水影同性。水浮地、影沈地。影之常斂也、所以束火也、火之常發也、所以排影也。

以發物、而明常進、暗分以收物、而暗常抱明熱。

聚散解結、體成之用、發收排噏、性成之用。鬱達肅舒。發斂凝融。變化其間也。
天者精矣。容萬物而不見有餘。除萬物而不見不足。故聚散解結者。遊其中焉。蓋氣能聚散、質能解結。然而氣不聚則質不結焉、氣不散則質不通焉。此氣也。分明聚散。若無間于彼、則何聚于此。可聚于此則何無間于彼。已能聚散。而能容聚散者。豈得不精哉。以水注弄水。水不出則氣不入、氣不入則水不出。如無毫末之間者。雖然取蘆莩風之。撚兩端而縮之。則其脹小而堅。緩之則其脹大而輭。於是觀無間者亦有縮脹。是以發者噴于有餘。今徑尺之鼓、徹聲於數里。數寸之燈、致明於百步。收者噏于不足。一滴之水、收照百步之明。灑鼓之雨、鈍徹數里之聲。故發收者、相資之道。散結者成體之用。是以氣之聚散、質之解結。雖有經緯。亦生化之事也。物之將生也、其氣聚焉。物之已生也、其質結焉。物之將化也、其氣散焉。物之已化也。其質解焉。故兩將結、則陰溼先動、子將結、則感悅先動。將生此物、則此氣聚焉、聚焉則質結、將化此物、則此氣散焉。散焉則質盡。生化之端。水火其可徵者也。蓋持中氣者燥也。質者水也。而水氣好收、燥氣好發。是所以氣之常昇、質之常降也。收之極也凝、發之極也散。故甕中之儲水凝甚、而氣聚散終碎其器、爆竹之鬱火逼急、而氣發出、以裂其質。故收而收之、氷之大、小於水也。發而發之、火之大、大於薪也。是以氷之小體於水者、非氣之散也、氣之内收也。火之大體於薪者、非氣之聚也。氣之外發也。是故置水於鑵中、火以煎之、則水沸鑵中、燒綿於匏内。置之於瘡口、則膿入匏内。水沸於鑵中者、則火發散其收物也、膿入於匏内者、則水收斂其發氣也。故燥自結鬱成水、自解發融、

故充者不徒充、結者不徒結、皆遊于天中。一結物之外。坱坱之虛。唯清而虛焉。日影水燥。以敷其間也。天地一胞、華液孿胎。日圈不能占天心、以行弧中、全其圓、水圈不能占地心、以遊地表。全其圓。是以水燥之圈。雖能合天地之球。而其實不占心之二圈以立於天地之中。二顆之玉、置諸日照之中。陰影圍倚、火發其清下、一面之鏡。蓋諸淫蒸之上。清氣有拒。露結其濁上。華液之爲物。可推知也。天者以日華播陽德於上、地者以水液施陰德於下。故星辰皆承陽華、動植皆含陰液。日影者、華之營衞。水燥者。液之營衞。日火與月水、景燥與影溼、同其性類。而反其天地焉。日月與水火。景影與溼燥。同其位類。而反其陰陽焉。所剖愈多。而所對愈多。所對多則交態各異也。是以天日地水。則一球中乾潤發收相貫。兩圈既相分。則日影有明暗寒熱、水燥有乾潤滋煦。

日影有寒熱明暗、水燥以溫冷清濁比其用、水燥有乾潤滋煦。日影以發收肅舒比其用。

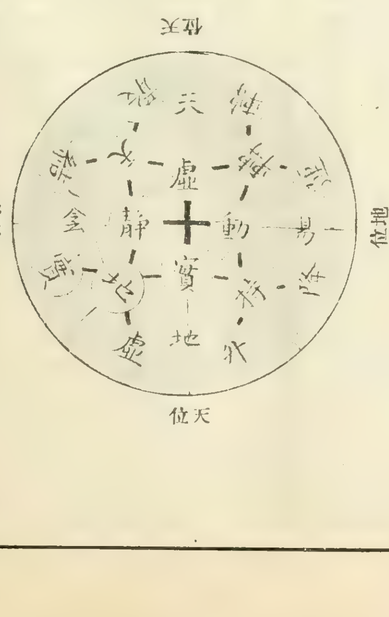
引伸觸類。可以推矣。

天地已相分、萬物已並立。其物之並立也。各用其氣。從所交接。亦有相對者也。姑移徵於人言之。己身則一而已。對君則以忠交。對臣則以禮交。接父則孝。接子則慈。男女相感。怨讐相嫉。故物則以條理而立。氣則從所會而變。是以雖正偶非佗。並立而相反。莫有所不對焉。故火者以陰而燃者也。會陰之肅寒。則鬱而熱矣。會金則融之、會木則燒之。會暗則增光、會水則收象。水者以陽而融者也。會陽之鬱熱。則肅而寒矣。會金則沈之。會木則浮之。會明則發光。會火則失質。是故地者結物。而水融火發於結外。乾交地而燥、水接天而溼。天者散物。日發月收於散中。質交日而影、日交月

一分　二合

而景天地覆載、陰陽絪縕。天而星辰、地而動植、紛綸錯雜。弗見其所濫。於是日影開處於天、而星辰旋焉、水燥開處於地、而動植住焉。地著之質、從地之性、故潤而暗焉、天懸之象、從天之性、故乾而明焉。故月雖暗體、從主而假明、火雖明體、從主而爲暗。火者鬱而發、象而居天、推其以食質、其尾向上、而知日之首向東。水者收而結質而居地、推其以資氣、其尾向地、而知月之尾向東。火有出地而無入地、水有降天而無昇天。而日月水火、雌雄亦能張勢。日以成歲、月以成月、而燥物應日、水物應月、滋煦正成也。水以凝雪、燥以發雷、以爲其極也。於是晝夜冬夏者、日影也、生化解結者、水燥也。水燥塞持中、以爲水陸之文、日影通轉中、以爲歲時之章。時精通無痕、生化處精塞不示方位。唯物而後生化而從衰、衰物而後虛實而居坱、坱雖孿子含各活立、而胞中之氣血、均養兩胎。故華液之二圖。在一胞之中、同成其天地動止。故謂之華液、則孿胎活一胞之化育、謂之兩環、則一胞立孿生之天地。

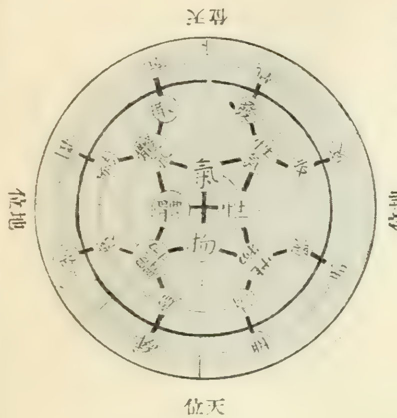
體物圖



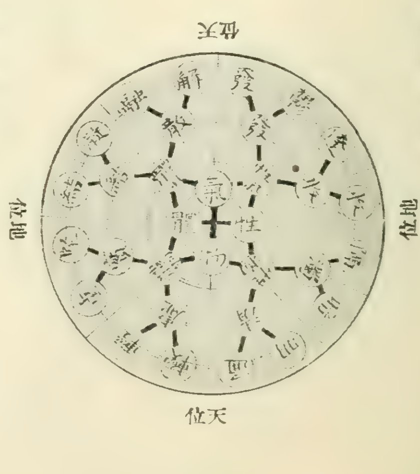
性物圖



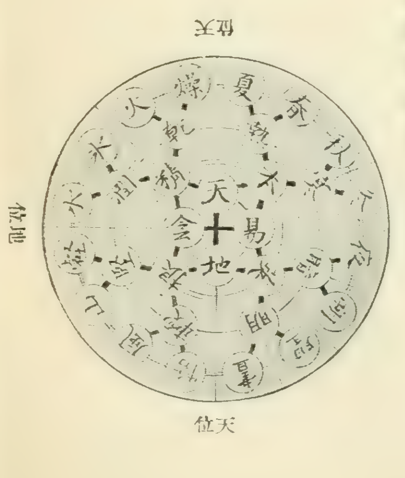
性體氣物圖



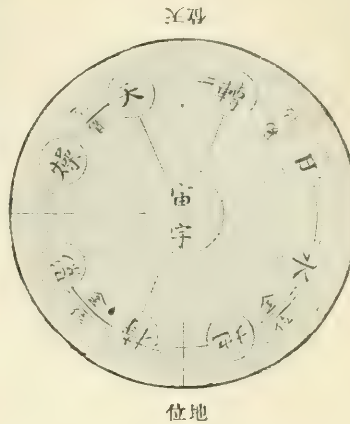
爲物剖析圖



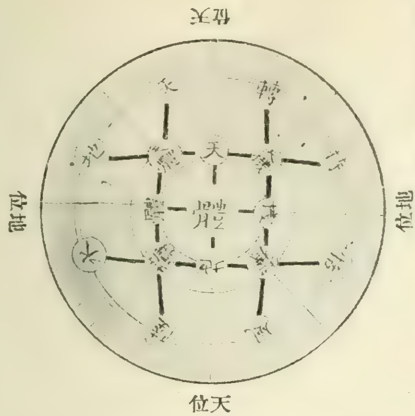
成物剖析圖



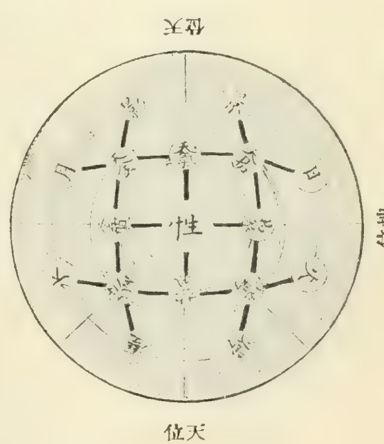
天含機體性圖



體成大小二境圖



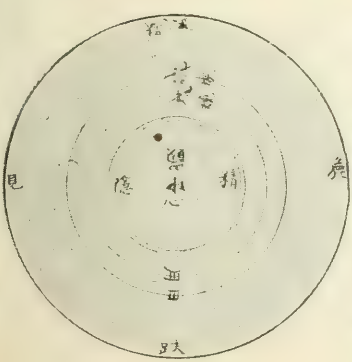
性成象質二物圖



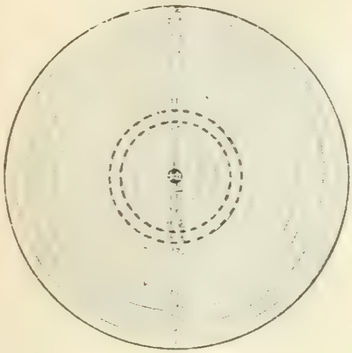
天地圈一合

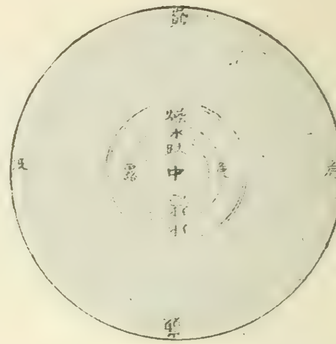
天圈則日月之毬居其趺上
地圈則水燥之毬居其趺上

位地

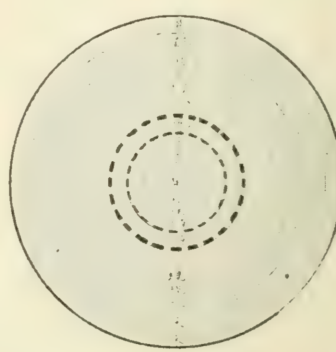


水燥圖

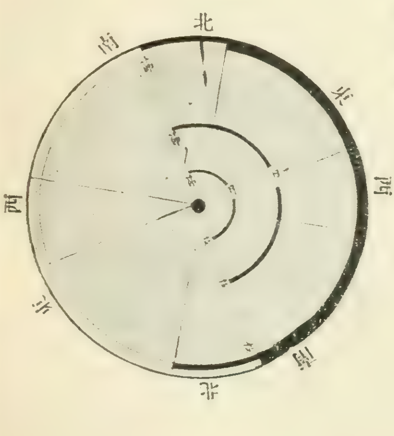




日影圖



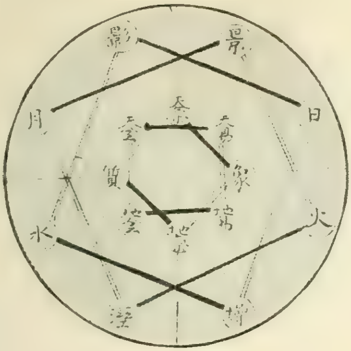
雙弦弧圖



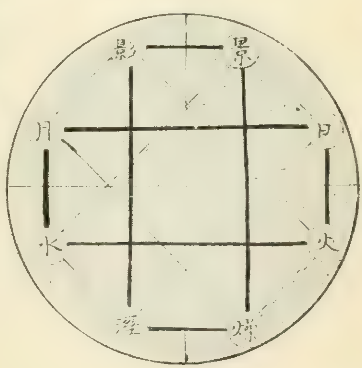
性物剖析圖



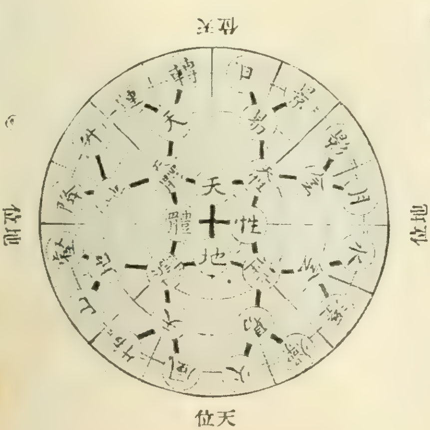
同反比圖



同比斜親疏圖

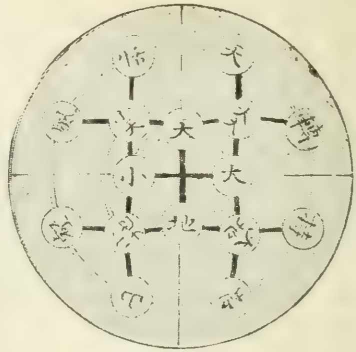


性體二界圖



四界

大小天地圖



性界之冊

日影

宇宙氣也、本也、之爲天界、天地物也根也。之爲體界、轉持者、其氣能體物、故精也、之爲機界、華液者、其物能見性、故英也、之爲性界。四界合成一天地。從條理剖析之本源末派。多少弗同。夫宇能立物。宙能通其間、通已通塞中。則宇直一也宇中轉持之機、依正斜之形、以沒其物、虛實之體、以華液之性、以露其物。

清濁通隔

合露沒。以得全物。雖然機體能合、華液能分、分則各持天地。以機體所不有之色性、充塞之於虛天實地之間。故華液與天地合其源分其派、形體相得、而其體立、色性相得而其性活。於是宇能成機體於一球、華液分環於球中。性者就水燥之性才而言、色者就日影之色氣而言。色者清濁也、自虛實之爲通隔而成、氣者寒熱也。自動靜之爲發收而成。於是色氣者機體之流派。以觀一胞孕胎之狀。是以入氣境也、莫不氣者、入色境也。莫不色者。夫宇者合機體爲一球。以容之。一球容陰成陽成之兩圈以成性之物。陰成以水燥襲地球、陽成以日影駕天轉。日弧之東規絡西規一線。日駕其線。與東規相斜東之西之日既駕此其駕日者能中斷運天所駕之日者自出機軸立中布外。輪軸脫軏衆辰駕之。近日者疾、遠日者遲。例諸日日之弧。似有節漸爲急者。例諸人上途者。似由道路有近遠者。

既以虛爲物、以動爲行。以色爲體、以性爲氣。其色則明、而外氣爲暗、其氣則熱、而外氣則寒、此物接持中、爲晝夜冬夏、由是推之、月其色暗、外氣爲明、外氣則暄、其氣當冷、漸轉中爲晦朔弦望、故日月相比、下與水燥爲應。是以日布陽化而和燥、月布陰化而和水。是以水燥滋煦之化、全假力於日月景影、色界有氣、猶性界有才、而氣之寒熱、成于動靜、色之明暗、成于清濁、夫虛者清而通、實者濁而隔、神活以上、以清不見其體技、物立以下、以濁不沒其體技。

隔何以隔、以其能呈彩而隔、隔則一白一黑、通何以通、以其能播色而通、通則一明一暗、變化之所成。瑣而不盡矣。轉持者清、以機伸其技、明暗者濃、以色伸其技、

濁中清濁通隔、通開素色、隔呈文彩、而素色文彩皆色也。機態勢氣皆氣也、而其以明暗寒熱成物、與天地張勢者。日影也。故明暗寒

素色
文彩

清濁
明暗

熱成日影、日影有明暗寒熱、於是偏言色氣以要人知日影之專有明暗寒熱、蓋物者立于體、而見于色焉。故天者散虛、清而通、地者結實、濁而隔、素色文彩之所託于體也。濁食清。復能吐清、於是濁物以淡爲清、以濃爲濁。濁中清者、日光地陰、以播明暗之色、濁中濁者、日白地黑、以呈青赤之彩、於是色成見虛沒之氣、彩呈見當露之物、於是體見于色、色露于體、而天地象質、禽獸羽毛之美、艸華葉之麗、皆不能出彩色也、是以淡濃則露中之清濁。天者清焉、地者濁焉、清能發明、濁能起暗。明者、其彩白、其文光、暗者、彩黑、其文陰。

清能發明、故日聚天中、水亦地之清物、是以水氣發明、水體受光、濁能起暗、故影散地上、日亦天之濁物、是以日體隔物、日氣爲濁、地火天水。其事同然。影靜而日動焉。日追影移、而晝夜冬夏有焉、雖有而日則轉、影則移。移者靜也、運者動焉、動者依天

也、靜者依地也。
日影雖濃在清中、故不隔彩、水燥雖淡在濁中、故陽隔物、天以通、而光陰播明暗、地以隔、而黑白呈淡濃、日明而照、影暗而蔽、水清而通、燥濁而隔、是以地者陰體、影以陰氣而依地而充天、雖然日排充天之影、而使地居明中、則地常持半面之陰、故分之、則有天影、有地影、日者陽體、景以陽氣而依天而充地、雖然、地以隔色之濁、使日當半面、則日常播半面之明、故分之、則有天景、有地景。
陽散地結、露體於虛實、散虛覆地、結實載天、陰收陽發、見體於明暗、發明照天、收暗覆地、天機者清、天象者濃、天機則轉持、天象則日影氣以東西、象以照蔽、天不見于除東西照蔽之外、不見以觀天之精清、觀精清、而知機象之猶未清、故天地以通隔、日影以照蔽、天者體而虛、地者體而實、影者收而象、日者發而象、點火於中央、四邊

必瞑、彼蒼者象光不到之地也、火邊有物、一邊必影、地上之晝夜者、明暗之相轉也、能使發陽聚于上者、影之下收也、能使收陰散于外者、日之裏發也、明氣者景、分而爲晝、暗氣者影、分而爲夜、是以晝夜者、明暗之可徵於地者也、景影者、明暗之可觀於天者也、蓋以地對天、則濁結成于地、清散成于天、以地對日、則明熱寓日、暗寒依地、景使品彙呈彩、影使朱綠收色、暗寒依地、故日隱而暗、日遠而寒、明熱寓日、故日見而明、日近而熱。
素以呈彩、文以播色、故依質者資彩、依象者資文、合言之、則日白而光矣、明而通矣、地黑而陰矣、暗而隔矣、分言之、則彩則黑白著體、文則光陰離體。
體分上下而居、氣分前後而行、明暗亦伴寒熱而行其時、清濁亦伴乾潤而居其處、故天清而乾、地濁而潤、於是清濁爲天地、

乾潤爲象質、日明而熱、影暗而寒。寒熱爲冬夏、明暗爲晝夜。

故素者、色之天也、色者素之地也、而素色有所運爲、文彩有所變化。景明影暗居天清、水清燥濁居地濁。是以天中之散物、亦明暗其象、聚散其體、以懸景影之中、地中之散物、亦乾潤其氣、解結其體、以立水燥之中。故月辰之暗於景聚、星漢之明於影散。

居景中者、其象暗焉、受明而光、偶者月、屬者辰、散而居景也。居影中者、其象明焉。居暗而光、聚者漢、散者星、列而居影也。地居明中、爲景所映而見彩、日居暗中、爲影所擁而露光。

雲烟之濁自水解、雨露之清自燥結。

日有景影、地有水燥。地者精英之根本、爲體於下、其居占中、水環地、燥環水、數層幷一圓。日者本根之英華、爲體於上、其行守中、景環日、影環景、數層幷一圓。於是日與地張勢也。故日爲景影之主、地爲水燥之主、合則皆歸一圓矣。於是月辰暗而居景、星漢明而居影、雲烟濁而出地、雨露清而下天。

運爲

地隔燥濁、其濁中濁焉、日照影蔽、其清中濁焉、地與燥共濁、而地濁而隔、燥濁而通、日與影共濁、而日濁而隔、影濁而通。

是以日彩者白、其文者光、以明而播照、地彩者黑、其文者陰、以暗而播蔽。故明者陽之色、其用照焉、暗者陰之色、其用蔽焉。白者象之彩、其用持明、黑者質之彩、其用和暗。暗和明而青、黑和白而赤。

雲霧昏濁之中、遇皆既之食、觀地之本彩、天氣清朗之夜、望無月之天、觀天暗之不及地黑、可以辨青黑於天地。天氣清朗之時、望正晝之日、觀日之本彩、雲霧昏濁之中、望晦夜之火、觀地明之不及天白、可以辨赤白於天地。

光在質而澤、陰在體而影、夫明暗之於照蔽照、能具陰陽、陽氣則以發而播他、陰體則以收而假佗、陽照、在天則日、在地則火、陰照、在地則水、在天則月、蔽亦具氣物、氣體則以濁而翳佗物、體則以隔而遮佗氣、蔽在天則影在地則燥、體蔽在天則食、在地則夜、是明暗之運爲也。蓋清者、陽之素、其用通焉、濁者陰之素、其用隔焉、陰隔之中、氣則能發、體則能隔、氣發、清則被於物、濁則持於己、體隔、清則假彩、濁則見彩、

明者、布光而被物、暗者、布陰而被物、色而外發也、白者、含明而持物、黑者、含暗而持物、彩而自持也、且隔者、隱後見前、是以清則假佗色而見、猶鏡之隱背面之畫圖、而寫前面之物象、濁則以本彩而見、猶地之隱下面之天、而見上面之物彩、陽通之間、氣則能透、體則能受、氣透明、則透質、暗則透象、

物之在地上、資於剛柔動靜、受於寒熱明暗、明暗行事於晝夜、寒熱行事於冬夏、明暗、物受之、而覺于動靜、故動能爲睡覺、寒熱物受之、而覺于發收、故植能爲榮枯、故明暗與寒熱爲偶。而用氣於歲日物之路乎時者、皆經此代旺者、然而其體則在日而熱、在地而寒、以景而明、以影而暗、故目之於色、明則覺目之通、暗則覺目之塞、非暗塞目、惟暗則隱地體、而見天象、非明通目、惟明則隱天象、而見地質、且氣而清、則無體之隔、故以通後、而不得受之於前、體而清則有體之隔、故以隔後、而不得不受之於前、夫清則淡焉、淡焉而無體、則不能不透于底、淡焉而有體則不能不受于前、

透受之辨也。

體受象則浮之質則沈之。

氣者、能透、體者、能受、清之運爲也。蓋天者淡焉、象者濃焉、是以明之於天、以濃而隱

黑白青赤

象、以淡而見質、雖涓埃之擾擾、弗遺其彩、暗之於天、以濃而隱質、以淡而見象、雖熠燿之耿耿、弗餘其光、且有體則無所透于後、淸則有所受于前、故浮象、則爲虹霓、爲波光、艸間之露、蚌中之珠、隨弄轉彩者、自受而浮成、沈質、則爲海市、爲水影、眼中之色鏡裏之影、隨見現形者、皆自受而沈成。是淸濁之運爲也。色成彩於運爲、彩依色於運爲、色運不窮、彩變無限、是以、黑白持于體、光陰發于氣、日體之白、隔地氣之黑則赤、而黃之與赤、由隔之厚薄、地氣之黑、受日光之照則紅、而紅之與紫、由映之正斜、白者、淸體之明彩、和黑濁而赤、故火之赤、由食濁質也、是以、赤彩成于地、而不成于天也、

質者、暗焉、象者、明焉、水者、氣之之質也、故氣而質也、火者、質之之氣也、故氣而象也、故。水、深則暗焉、淺則淡如氣也、火、熾則暗焉、燃則明爲象焉。水、以液爲體、以暗爲氣、

月以象暗、水以質暗、月者陰質之依無體者也、故能爲明、水者、陰質之依有體者也、故能爲暗、火以熖爲體、以明爲氣、日以白明、火以黃明、日者、陽象之依無體者也、故其色也白、火者、陽象之依有質者也、故其色也黃、黃者、赤之未甚也、猶碧之於靑。赤者、彩于黑白之間、靑者、彩于明暗之間、故、陽火、以不能白而黃、陰火、以不能明而靑、天影不能暗而靑、雲烟不能暗而黯、是以。火雖氣、而以依質、而未若日之白、水雖質、而以自氣、而弗若地之黑、

天氣之暗、透日氣之明則靑而碧之與靑、由透之淺深、地體之濁、隔日光之明則黑而黯之與黑、由隔之正斜、黑者濁氣之暗彩、和淸明而靑、故水之靑由結淸質也、是以、靑彩成于天而不成于地也、

天影者大、地影者小、而天影之淸暗則成靑、不若地影之暗濁、成黑之濃、天象者大。

地象者小。而地象之濁明、則成赤。不若天象之清明。成白之濃。故黑彩於地勝、青則於天勝、白彩於天勝。赤則於地勝。氣淸則明放光、暗爲影、濁則明含光暗受影。

光者、象之輝、在質則爲澤。故澤有所映則假光、陰者質之翳。在淸則爲影。故影有所印而受彩。

雖均是陽、而日者發光、星者含光、雖均是陰、而月者發光、燐者含光。雖同是陰、而夜者隔日、影者翳日。雖同是影、而象則映之。質則寫之。是以月輝波光、受之於天光、虹色露彩、成之於地澤、靄黯雲昏、得之於氣濁。海市水影、成之於質淸。

無不色于淸濁明暗者、則無不居黑白光陰之彩者。且夫天地各散物。而天物常持其體、地物每換其體。常持其體者、無新陳、每換其體、則有盛衰。盛則色澤膏膩、衰則形容枯槁。彩之與體。同相移焉。動、亦內而白外、植白內而青外。是其大分。區而別變而換。就而認之則可、數而論之則鎖。

彩盡變化、假運爲於色、色用運爲盡變化於彩。是以氣以色而見、體由形而成。光有陰陽。陽光、以照被於物、陽影。以彩印于物。是以物莫不由于形者、隨形而其影亦變、氣莫不由于色者。隨氣而其彩亦變。故圓珠之受影、以爲直之中心於珠之正中。不差一絲髮。而能縮大形。平鏡之受影。以直直相當。而小大宛然。左右易位。盃之淺而受影。以直之中心在物之後、而漸大其形。其深而受影。以直之中心在兩間。終倒其影。影成一直之中。則雖數鏡而不能多物。影影成直圓。則泡沫累珠。其物愈多。其影愈多。陰影布地者。隨景之直。而爲隱見轉換之變。暗室之隙浸通明。而寫外邊竹樹之影。明之所通。結直之中心於孔中。使影能倒。與大明之中。飛鳥冲空。而影終盡之

二段寒熱

結直之中心於烏下者。同其理也。而又有陽明陰明之分。夫物暴之於日。則其形小。漬之於水。則大其形。氣亦然也。故水氣籠日月。則漸大其形。雨氣籠山嶽。亦漸大其形。日月離水氣。則漸小其形。晴氣滿山嶽。亦漸小其形。影之依形而運為也。日白氣黑之間。紅紫黃赤成。氣暗象明之中青碧黯黑成。積陰曖昧。雨意蒼茫。露彩璀璨霞色燦爛。紅炭赴水而黑。金鐵赴火而赤。木葉變于秋。鬢髮皓于老。熖光赫爍。遇晝則熛而暗焉。海濤暗黑。遇夜則爛而光矣。故細雨射於日。而為青紅之暈。雲烟照於日。而為種種之霞。是以氣之所運。人面得酒。而運素於紅。丹砂見火而轉紅於黑。映黃於燭則素。皐燐於明則無彩之由氣而運為也。

是色之變化也。氣起氣質動靜之機。由鬱達發結之態。以凝融肅舒之勢。成寒熱溫冷之

日影成

氣。試之於小。物相摩則火。火則熱焉。熱則成於質動。氣相扇則風焉。風則涼焉。涼則成於氣達。閉氣之動搖則恬。恬則溫焉。溫則成於氣鬱。止水之融盪則氷。氷則寒焉。寒則成於質靜。今以水火試之。水氣者冷。燥氣者溫。火者燥之發。氷者質之結。其寒熱極焉。以此推之。知明暗之自虛實之清濁來。寒熱之自氣質之動靜來。蓋虛實通隔之中。成體於明暗之色。動靜發收之中。成氣於寒熱之性。日影以此而成。日影有此而立。是以明熱之日寓虛動。暗寒之影寓實靜。散中陰收。陽不得不發其中。結外陽解。陰不得不結其下。天者散氣。火者發象。地者結質。水者收象。華液分天地。日影水燥成焉。故影水并地。其結陰。日燥并天。其散陽。陽而發則其氣熱。陰而收則其氣寒。日者發陽。其體虛。其色白。其機動。其氣熱。影者收陰。其體散。其色黑。其機靜。其氣寒。收氣結物。舉地皆暗寒。發象解氣。舉火皆明

熱寒熱者其極、溫冷者其微、持者解陽不伸、故蘊而溫、轉者結陰不屈、故達而凉、地者陰收而質結、故寒、日者陽發而象散、故熱、轉達而凉、持蘊而溫、天假日發之熱、地假影收之寒、互其用、則地以發陽而陰寒凝於結中、天以收陰而陽熱發於散內、日影已有明暗寒熱、而水燥以淸濁溫冷而應天地、則緯居、冬夏、則經行、氣物交動靜結寒達凉於轉、發熱蘊溫於持、景暄影凄、水冷燥溫絪縕以爲滋煦、天地之物、既塞於緯、亦弗得不通於經矣、既已弗得不然矣、是以散結之塞、乃天地之體、發收之氣、乃絪縕之態、運轉噓噏、從其理、異其態用焉、爾發之態、食質吐氣、收之態、搾氣結質、食質吐氣、使有之無、其氣照而熱焉、搾氣結質、以無之有、其氣蔽而寒矣、動靜虛實屬天地、明暗寒熱屬日影、是以日影、以虛爲體、以動爲機、以色見其體、以氣施其用、於是明暗以行晝夜、寒熱以行冬夏、晝夜冬夏者非天之事、水燥依地爲海陸、以晝夜冬夏分滋煦之氣候、是之謂節物、景之吐氣而暄、與轉之達氣而凉偶、液之融質而冷、與持之鬱而溫偶、天地正圓、動止虛實、發收鬱達、絪縕于結中焉、

覆載一結物、地爲其核子、故陰上達、而轉者爲其外稃、陽下鬱、而持者爲其內仁、故陽散而陰結焉、陰結而陽鬱、結則收焉、鬱則發焉、不發則無給收者、不收則無給發者、給則有資、資則生生不盡、不盡以觀造化焉、是以發與散不同、散也块块、不爲其涯、發者居保中、若使發者不住保中、何以聚而爲象、象發地至天、以走偏其圓、聚散之別也、收與結不同、結也秒忽、不成其形、收者向結中、若使收者不住結中、則何以結而爲質、質降天至地、以乘偏其圓、解結之分也、故天地亦一顆之木菓、皮肉盡營於核肉、核肉盡保於皮肉、

結而動焉、不得不轉而圓、結而實焉。不得不止而堅。陰而密結、不能不搾而排陽、陽而鬱發。不能不食而吐氣、以鬱陽會達陰、故日象不能不得竅於東中而走、以結陰偶散陽、故地質不能不爲宅於天中而止、自轉圓之穹隆、至蒼蒼赫赫、皆天也。自拗突之旁礴、至茫茫津津、皆地也。地結融爲液、天鬱發爲華、華液則水火。對結實之地曰象、象中相分、亦曰象質。水得燥成水陸於地、大而覆載、小而水陸。緯體既鋪、火得影成晝夜於地、氣而冬夏。色而晝夜經氣以通天地一圓物中則發陽斡旋、極則收陰凝結。日熱散而景播暄、地寒融而水持冷、而陸温水冷。動植絪縕於其地。圓行之一東一西、旋明暗、而爲晝夜於經、直行之一南一北、互寒熱、而爲冬夏於緯。

塊然一球。地表廼天裏。日從轉來照則晝、從噓來煦則夏、影追日來復則夜、以噏歸肅則冬。陰陽在結中、以相侔之力相走之

地中之物

勢、各用其技、發收之爲物爲事。不得不然焉。然而陰絪陽縕。大給小資之中。一鬼一神、運二之通於感應。於是氣寒則地肅、氣熱則地舒。氣肅則物凝、氣舒則物融。日噓則燥煦、影噏則地寒。動植得煦而發生、得肅而收閉。蓋天有運轉、地奉之而成晝夜、地有噓噏、天從之而成冬夏。日者陽之陰中發者、之地氣之噓處、影者陰之陽中收者。旺地氣之噏處。故動植應其噓而蕃孳、應其噏而枯蟄。日煦則地氣游動、動覺植開、影肅則地氣收斂、動睡植閉。噓也、天日地燥相應、而水融氣温、於是遊其間者、擧爲發動之用。噏也、天影地水相應、而氣沍水凝、於是遊其間者、擧爲收止之用。然而察剖析變化之用、則莫不盡其錯綜。雖錯綜盡變、而條理井然。不可得而淆焉。

蓋地中之物。水燥爲雲爲雨、爲雷爲雪。動植並立于其間。燥迎日之暄而爲春、發應日之

熱而爲夏、影迻日之暄而爲秋、收和地之寒而爲冬、春暄鼓而煦焉、秋涼驅而肅焉、夏熱鬱而蒸焉、冬寒達而凍焉、煦蒸起長、肅凍歸復、嘘噏晝中、線寒暑追嘘噏、天運轉環守而地定極與中、極之一直、即嘘噏之理、中之一線、則東西之路、熱象循中而走、寒氣依極而引、極以遠于日施政之地、而聚斂之氣旺、中以遠于陰收斂之地、而鬱發之物盛、中帶暄煦、爲生物蕃息之地、極下寒肅爲萬物閉息之處、地之所以分寒熱也、於大物則達地陰於天則涼、收天陰於地則寒、煦天陽於地則溫、鬱地陽於天則熱、一氣一物、一動一靜、物者熱于動、寒于結、氣者涼于達、溫于鬱、於是天則轉涼吹日而熱、地則持溫融水而冷、自精者而觀之、則氣體不二、自麁者而觀之、則氣體素別、氣體各有動止、發收排噏、動止之事也、故寒熱溫冷者氣、自動靜之精而見、故氣動則達而冷、靜則舒而溫、體動則鬱而熱、靜則肅而寒、氣動則體止者、天地是也、於是天動而冷、地止而寒、動靜之間、同氣相和、體動則氣持者、日燥是也、於是日動而熱、燥靜而溫、動靜之間、同氣相和、地靜而寒、則日動而熱、轉動而冷、則持靜而溫、錯綜則各氣相交、天者虛而動矣、地者實而靜矣、對虛實者、動靜也、日者、以象而動、故熱、轉者以氣而動、故冷、地者、以質而靜、故寒、持者以氣而靜、故溫、故自天動地靜則其氣寒冷、自日動燥靜則其氣溫熱、動靜之分也、是以日鼓物、則持氣漸恬、而風籟不驚、其氣混濁鬱蒸而浮、雲塞雨溼、水涌海溢、艸木怒張、花發葉布、鳥獸孳尾、毛革羽毨、結者解、聚者散、蟄者出、蛹者脫、故暑候者、質動而熱鬱也、質動則氣靜、氣動則物肅、於是風颷激驕、混濁浮動者肅收、雲霏霖歇、潦盡泉涸、艸抱子而死、木脫葉而童、往者復、見者隱、流者止、融

者凝。寒候者體靜而寒達也。溫、暑之漸、涼、寒之漸。春秋、寒暑之交。猶昏曉之於晝夜。天氣者烈、地質者肅。日者燄燄、燥者煦煦。故寒熱雖由天而地亦有之。惟微甚之異也。若曰熱惟日有之、則夏至當熱、冬至當寒。而今過夏至而熱進、過冬至而寒進。春秋二分、溫涼當均。而春分不勝寒、秋分不勝暑。精麁錯綜。變化參差。夏夜有時而熱於晝、冬日有時而寒於夜。故其事有不專從日者。故日退而暑進、日進而寒從。海者質動、故海上則氣靜而溫、山者質靜、故山頂則氣動而寒。山不以近日而溫、海不以遠日而冷、各自有動靜也。是以轉之涼、與地之寒不同。轉則以動涼、地則以靜寒。持之溫與日之熱不同。持則以靜溫、日則以動熱。是故煦煦和、質動而熱、肅肅和、氣動而寒。氣體之動靜。寒熱溫涼之所成也。日鼓物、而肇其事、地承其事、而成物。猶夫唱

人身寒熱

婦和。君令臣奉。

蓋地不能動。以火而動、日不能止。依地而止。言之於小。燈火根一盞之油、而燃而不止、陶瓦由鑪火之攻、而結而彌堅。緯則寒歸地、熱歸日、經則從噓而熱、從喻而寒。夫宙通宇塞、天容地居之間、日熱影涼、水冷燥溫之中、上而雲雨下而動植、雨者結而歸地、雲者解而之天。動者動而行天、植者止而立地。雨露之融、寒收之則霜雪。雲烟之釀、熱發之則雷電。於是乎雲暖雨冷、動溫植冷。霜雪居寒之極、雷電居熱之極。

陸者溫處、水者冷處。溫中之動植自溫、冷中之動植自冷。溫中動質溫、止質冷、則冷中亦不能不同。然矣。猶分之則鳧雁好寒、燕子好暑。稻粱夏生、牟麥冬生。

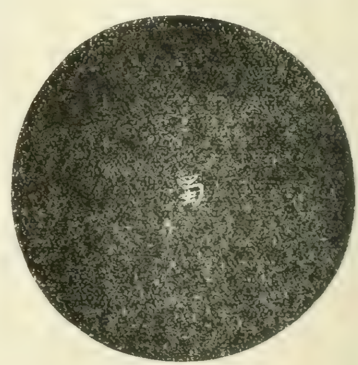
人之居造化胎中、以溫立我中。鱗比血肉之弱質。氣鬱則熱、熱則神喪焉。氣達則寒、寒則神脫焉。所以與剛堅天地不同也。色境成於

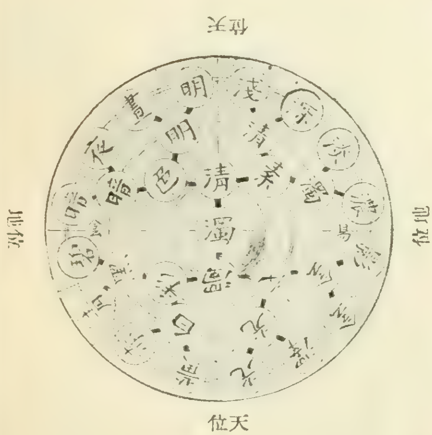
動圏、其爲物也虛、環而行、時性境合、於地珠。其爲物也實。止而立。虛動中之物、爲紀於衰衰、行鬼神於其中、靜中之物、爲章於垬垬立山壑於其表、地有水燥、天有日影、水燥爲乾潤滋煦、日影爲照蔽寒熱、兩環合一。造化成焉。中線下常熱、兩極下常寒、南北以反、其節氣、日到處常明、影隨處常暗、東西以反、其刻分。

清濁圖一合



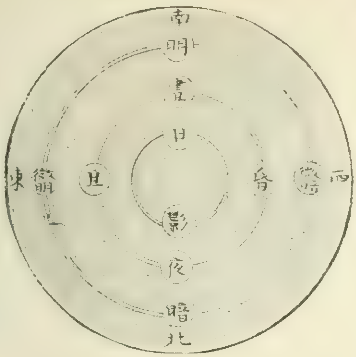
素色文彩圖



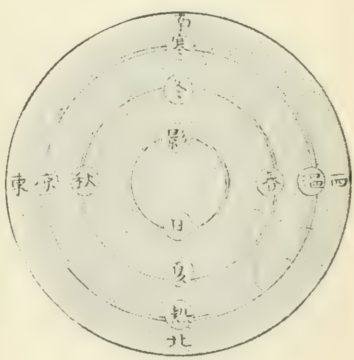




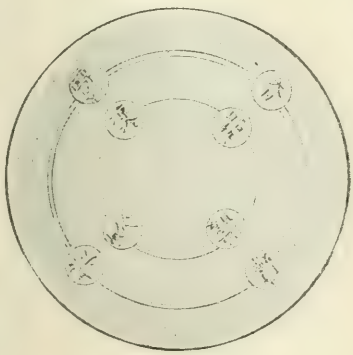
明暗圖



寒熱圖



寒熱緯圖



極徵

水燥

轉體者剛、地體者堅。轉以柔歸持、地以輭歸上。天成其極、持成其微。是故天形極其正、天體極其大。天動極其疾。天壽極其長。天色極明暗。天氣極寒熱。地非無此。柔輭之境。其事微焉。是以持中雖分溼燥、燥之極不過乾、雖分水火、火微則猶含潤。是以持中則以柔潤立天地。上不上剛之天、下不陷堅之地、斜止溫冷間。生化弱物。以塞其内。異乎夫正大之體、攸遠之壽、極色氣之盛者也。居天圈者、爲循環、居地圈者、爲鱗比。鱗比者弱質含水。蠢然莽然。擾擾然。爲一團絪縕。水燥景影。化醸滋煦之氣。而萬物成焉。日影之圈、爲中於已、水燥圈之假中於地。地者駁然、突出山嶽島嶼、陷入川谷湖海。生生之氣、不能不生物。乾虛中則爲乾虛之物、潤實中則爲潤實之物。潤實分物於水燥。地突爲燥之處、地陷爲水之處。衆生各得其處。觀條理者之巧焉。持中。

日影 水燥

其氣柔而燥、其質輭而溼。故持中則水燥爲政。寒熱明暗。殺其極、致其微。絪縕合天地造化。成於乾潤滋煦。蓋天圈則華于運之枝頭、地圈則幹于轉之根頭。地勢高下成山壑之章。象形聚散成星漢之文。於彎圈乃爲地、天文。日弧繫日、月弧繫月。地章水融低處、火發高處。於彎圈乃爲天。本天則精虛。隱沒於庵實之處。日者發火自處、月者含露相從。水者醸溼自處。火者吐星相立。

月規者小、日規者大。駕以運轉、而星漢者大規、能居靜虛之影。水球者小、燥球者大。乘以止住、而土石者小球、能居動虛之天。而星漢者變動之物、土石者實靜之物。星漢以變動之物、居靜虛之景。故一其脈絡。月辰以各陰之物、賴變動之日。故別其脈絡。是以影曜無牽從之分、景曜爲牽從之別。地者定於山壑之方位。運者變於樞機之活動。地質聚結、置物於其表。天氣散敷

容物於其中。故彼星漢之文、猶此山壑之章。彼日月之繫規、猶此水燥之依球。各有依而然。天之比日月、猶地之比水火。地之反水燥、猶天之反日影。日影爲晝夜冬夏、而月之功微也水燥爲乾潤滋煦。而火之功微也。日月星漢、周天周地。衆辰在日機軸之中。以爲其所屬。於是影曜與日同陽德、景曜與月同陰德。日與火同其物、而於地則火爲微。水與月同其物、而於天則月爲微。月者暗象。暗爲日所轉。爲晦朔弦望。而衆辰皆暗象。同居景中。小者難見。或傍日而遠、或傍歲塡而遠。僅假鏡力見之顯者、爲塡。爲歲。爲熒惑。爲太白。辰則近日。因近日而急其旋。夫轉者達地氣而上。運者以天氣而降。是以陽華開而近地者運轉之脈理歸其標。地者實質託根處。是以華發枝頭。故日圏爲極陽之地。陽得盡舒暢之力。舒暢之陽餘。與地解之燥和。鬱發爲

火。火井熱地者其常。時而裂山而出火。入天爲霹靂流隕燥之火。猶水之氷也。夫水者以自氣來、而其質密。燥以自質往、而其氣粗。結者重而密、雖結而密、而不能如地之堅。凝而不動、則勢不能不水焉。解者輕而散。雖輕而散、而不能如天之精融而不濁。則勢不能不燥。

占天者、陽物陰氣、占地者、陰物陽氣。水燥之地、則淫火爲微、而淫則水之散、火則燥之發、故於地則火爲客、

不地者則天、不水者則燥。水燥相拒。以性反也。合天地言之則天散之中火麗之。地結之上水布之。日與影爲歲、水與燥爲運。於天則水爲客。於地則火爲客。故火者自虛體之陽氣、發而見象也。淫者自實體之陰質、解而失體也。故水偶燥、火對淫。蓋火者燥中有體。以偶水外之解體。此則能對水。再比所剖析、則燥之火猶水之氷。燥陽

解而虛於水。故燥常充、火時發、溼時動。水常有。燥常燥、火時燒、溼時冷。水常溼。燥物而無其跡。故燥精於火、溼物而不見體。故溼虛於水。是以影之於日、切於月、燥之於水。切於火。故水雖一擔、猶助化育、火則雖大而不能育物。故曰。生化解結。非水燥則不成也。

正偶反、傍偶比。日影水燥、偶之正也、日月水火。偶之傍也。

解質於有質之中、而散于天者、火也、結質於無質之中。而聚于地者。水也。以火煨物。熱閑而陰不能散焉、潤生其中、以玉取火。影園而陽不能出焉。火起於中。分者二也、統者一也。水待火而結質、火待水而起氣。水見火而散質、火見水而斂象、觀水之末結質、火之末發象、觀水之既散質。火之既斂象、知其末始有二。今夫假令月除、而晝夜寒暑則有、今夫假令火除、而山水雲雨則有。故影之與日、水之與燥、反氣物、而對陰陽、以爲生化物者立焉、神者活焉。故性物活而通。體物立而塞。活通之中以其活通、而日影常移其處、以其立塞、而水燥常占其處。夫天地者。虛實同居、動止分界、同居者何、天能在於地、地能居於天、分界者何。轉能居天。持能在地。輪轉不到處、謂之內、輻持不及處。謂之外。外日影整齊、周地周天、內則水燥錯雜。之天則之地。整齊之期爲歲、錯雜之變爲運。蓋地有上下表裏、天居之、天有東西南北。地奉之。故兩端從噓噏、中線依運轉。兩端遠日、中線近日、蓋物必一體具二用。中分南北。而春秋冬夏代行。日分面背。而昏曉晝夜迭成經緯之異也。

日影以明暗寒熱爲政。而水燥者日影之反物。以明暗寒熱爲清濁溫冷。清濁本天地之色。天地之清濁。大於日影。水燥之清濁。小於

吹火球

日影。是以水質淸如天、弗及天之透徹、燥氣濁如地、弗若地之隔遮。於是濁中水燥之淸濁者、淡而素也、淸中日影之明暗者、濃而色也、水解爲溼、燥發爲火、燥中有火、猶水中有氷、皆其極也。得吹火球弄之。一銅容丸鑿一纖孔。火之則發盡丸中之燥、投水則以發盡燥、噏水而實。實水、投火。則結質解而爲風竭。故陰質將結。則排組陽而榨成實。陽象將發則衝密陰而發成虛。觀於小。推之於大。地陰之以轉達天、天陽之以運鬱、持風颸之發地下之畜鬱、霧霖之疏天下之淫質。可以想像焉。日者陽宗、得中位而發、迸者嘒嘒布列、散者失其象焉、陽鬱噴發、則求結陰而噏之、陽求而噏、則陰輒從焉、雖從而食於乾熱之發象、則不能存其中也、從而涌焉、適而沒焉、適沒已沒其物、從涌正露其質、從則冷焉、涌則潤焉、水者其宗、得坳處而潴、適者津津下灑。結者凝其質焉。

自通塞觀之、機者陰也、自氣物觀之、性者陽也、轉者達陰沒色、而冷動鼓火、日者鬱陽釀明、而發熱御風、故火由風之鼓而燃、水由土之戴而湛、是以堅軸者、轉保氣之根、而束規者、洩鬱陽之方也、陰者下聚、故陽排於收陰之無罅隙、陽者上散、故陰疏于發陽之所充塞。滋液者、陽華之所噏、從涌而化、故天中之質之雨、山中發原之水、合爲一體、乾明者、陰液之所排、噴發而出。故地中洩陽之竅、影中發光之象、散如蜂窠、火雖遭陰之排而發、亦能噏其液而立、水雖遭陽之噏而涌、亦能排其氣而立、觀火之食薪、則火非離木而立者、火可離物、赫赫燄燄、向外而散、觀象行之不昇降於本位、則以地爲薪也可識、觀夏而水溢、則水非離火而立者、水不從日、洪洪蕩蕩在下而結、觀水液之能昇降于持中。則以火爲原也可識。故火者、食于地而燃于天、水

而解、水陰而結。水以結體而潤、火以解體而乾燥、其氣溫焉、甚則熱爲火、水其氣冷焉。甚則寒爲氷。地火之體微也。未能與水並立。專解結之用。雖然體體相比。能結體解體。則氣質之端見。此是以火者質之之氣也、故象明而氣暗矣、水者氣之之質也。故體淸而氣濁焉。水以質密而能入粗解、火以氣粗而能入堅密。水生苔化蟲、使無之有、火涸水食木、使有之無。是以水自高就卑、火出地歸天。水者氣之動而結也、火者質之動而解也。故結而成質者、先始于水、解而失質者、皆由于火。水能收、故可洗塵垢、是以能見其內而不照外、漬則使物色深、滌則使物質白、火能散、故可化實體能照外而不見內、燥則使物色淺、燒則使物質黑、水就質而往則青、火就質而往則赤。水値日則明、値影則暗、火値日則暗、値影則明。水之體也實、其氣也收、收而成質則凝。故融而流者、氣之動也、火之體也虛、其氣也散、散而虛則竭。故動而往者、質之持也。故烟者溼之不能居燥中、兼火而散也、雲者燥之不能處溼中、帶水而上也、

日影之處、則月景爲微、而影則陽之散、月則陰之結。故於天則月爲客。

景溼者氣之自體生也、月火者、體之自氣生也。日影水燥之用、雄于天地、月影溼火之用、雌于天地也。故水措燥而對火、日措影而對月、對之比者也。是以日月雖異明暗、水火雖異明暗、其是有體之物也。是以水火之與日月。溼燥之與景影。雖天地虛實相隔。反體而同性矣。水能收、故不能遺火、氣冷、火象暗、火能發、故亦能遺水、氣熱、水質照、一收一發、陰陽之道也。日在暗中、而不受暗寒、猶秉炬於暗中、而暗寒自遠也、月居景中、而能受明、螢猶水在火邊、而受其光耀也、鏡受炬之明、照一邊、傍觀之

人並觀鏡炬以爲同物。是由所見而誤也故。月者正蝕。日者蔽蝕。蓋月體水、則諸辰之在景中者、皆體水也。日體火、則衆星之在影中者、皆體火也。雖然、月。如地之水之實、則滴歸地、日如地之火之麁、則降著之、日食無質之陰、月浮虛體之天、火則食質、不能離地而燃、水則依地、不能在虛而居、然而月之在天、比諸日之象、則質也、自地質觀之、則氣精體虛、幾象、火之在地、比諸水之質、則象也、自天象觀之、則氣麁體實、幾質、是以。月質亦象中之質、火象亦質中之象、夫月者、明中之物、在天而近地、以近日而其體暗矣、以在天而其氣光矣、火者暗中之物發地而之天、以之天而其體光矣以發地而其氣暗矣、是以。水能充地、火不能充天。日能爲晝、月不能爲夜。水者結陰、燥者解陽。水常溼萬物、燥常照萬物、日者聚陽、影者散陰。日使天下晝、影使天下夜。蓋氣體之交。其道不同、體相交、之爲接、氣相交、之爲交。體接不混、氣交不分。故地日隔體、天影混氣。燥者、居地之氣也、爲持中之天、轉者。在天之氣也、爲轉中之天、而轉之天者、淸矣、精矣、持之天者、濁矣麁矣、故月雖在乾燥之象、而天中爲質、比性於地中之水、火雖居潤溼之質、亦地中爲象、比性於天中之日。而月以暗體而光、火以光體而暗者、各不出其藩圍也。地不能自照、受一半之光於日、爲晝、月亦不能自照、受一半之光於日爲明、其不受光之處。於地謂夜、於月謂魄、日照地一周、謂之一日、日照月一周、謂之一月、雖雌也而爲敵、燥與水充持中、爲生化解結之用、火之在燥、猶氷之在水、影與日充轉中、爲寒暑晝夜之用、月之於影、猶日之於景、是以。燥亦火也、以解而精於火、火亦燥也、以發而麁於燥、水亦溼也、以結而實於溼。溼亦水也、以

給水、水能給火。無原之水、會有餘之火則涸、無根之火、會有餘之水則滅。

溫煦冷滋。動植之生化、假絪縕於此。水火者發收之物。雖比而造化之端於此漏。水濯使物潔者、兼塵垢收此也、物之所映、使影含者、收其色也、火焚使物盡者、兼形質發之也。物之所照、使彩呈者、發其彩也。收者歸之於靜止而已。發者輸之於動散而已。故散者之天而化、結者歸地而造。生者化而來、化者化而往。生者食新、化者吐故。水執潤中之柄、是以水功不及天、火執乾中之柄。故火功不及地。是以日以影爲乾中之偶、水以燥爲潤中之偶。於此華液合天地、水燥偶地中。故持中之造化。火燒去陳腐、水滋出新鮮。合大物觀之。火走而外燒、恒以去其故。水融而内液、恒以出其新。燒而弗盡、嘒嘒布列。液而弗已、津津淋漓。故火資水、水資火。火觀自有之無之跡、水觀自無之有之跡。發之於天則華、日乃諸火之宗。收之於地則液、海爲諸水之歸。是以性物雖是象也。類其所居。是以日影者氣象、水燥者氣質亦其分也。

天者氣而發象於華、地者物而收質於液。華液者陰陽之文。彼此給資。常恒相持。天地相望。眞成本偶也。然而在天者得與於天、在地者得與於地。於是日偶影而照蔽于上、水偶燥而滋煦于下。燥不煦則水不融、水不滋則燥不長。水極結氷、燥極發火。是以燥自有潤意、乾則絕潤意。乾者天華全有之、地火則以在潤中、不有其全。猶潤者地液全有之、天水則以在乾中、不有其眞。故雖天火地水、爲眞成本偶、而自天中日以影自偶、地中水以燥自偶觀之。則天中日之對月、地中水之對火、猶叔之對侄。是以天中之水者、雖滋而能乾、地中之火者雖乾而能潤。

收而寒者、陰之氣也、發而熱者、陽之物也。寒

熱者絪縕之著形、是以溫動冷植。介于陽熱陰寒之間、居于水冷燥溫之中、燥溫之煦、水冷之滋、織之於春暖秋涼、夏暑冬寒之經、體析而天地轉持、體之小者、爲風恬水陸、氣析而明暗寒熱。氣之標者、爲晝夜冬夏。天陰以影而收、以月而結、地陰以水而結、以溼而融。天陽以日而發、以景而散、地陽以燥而解、以火而發。雖有相類而隔天地、則有潤濁乾淸。輕虛重實之不同焉。是以月能浮於天而明、火能沈於地而暗。燥卻含潤、影卻含乾。故地中之火、雖大起雷、小著薪、陽而燄燄、陰而耿耿、猶自食溼、而首向地、推之至大、天火亦同其理。地中之水、雖大湛鹹、小疏淡、遭陽假光、居陰含淸、猶自由燥而尾向地、推之至天、火水亦同其理。故條理之態、反跡同理。是以天物之以乾爲體、猶地物之以潤爲體、地物之換體、猶天物之常體也。故鬱陽迸散、居轉爲通、物乾光常持一體、收陰聚結、居持爲塞。物潤濁每換其體。故氣之聚散、質之解結。雖反亦比而戰、自比而應而觀之、則聚散解結、六物之塞、而來去生化、一氣之通也。塞則宇之天地、通則宙之前後。洪曠攸遠之中、東西南北紀方、晝夜冬夏紀節。天物者精、沒生化而通體、雖通亦充緯。地物者麁、露生化而塞體、雖塞亦從經。雖杳眇難識、而撫摩以推之。反此觀彼。彼焉廋哉。觀地著潤濁之質、分水燥而居、知天麗乾光之象、分景影而居。故物虛實爲其地、而水燥各爲其天。水物以水氣爲其天、以水質爲其地。混天地而遊其混中、燥物以燥爲其天、以土爲其地。分天地而遊其粲宇。天物常一其體、而歲能整齊、地物每換其體而運能錯雜。於是物不獨成。水燥之用事、仰之於日影。故陸水由日而溢涸、海水從月而消長。

日正對影。是以一寒一暑爲冬夏於上、燥正對水。是以一長一消、爲發收於下。日來

者、生于天、而潴于地、夫地中之物、親地而居地、運中之物、親天而行、東火者、向膩液而進。其尾能向天。其實不能昇。昇則失其象。火之向膩液而進、水之就地質而止、共有下就、而無昇去。故日月共東行、分之則月東行、日西行、水火共地居、分之則水退居、火進居、

故氣散則物結、結者歸中、物結則氣散、散者向外、散中陰收、結中陽發、發中噏陰、收中噴陽。水液于大物、火華于一氣、故自收陰天中之影、從涌景中之月、至雨露河海、水氷汞鐵、靡非水也、自榨排海中之氣、鬱發持中之燥、至燐火雷電日景星漢、靡非火也、一瓶之水、一爐之火、人之所資用者也、火噴則解質、質亡、則失所噴之火、陰涌則結質、質存、則繼所噴之火、故天華薪不盡之陰、地液原不已之陽、陰與陽同壽。彼此給資。華液常住、與瓶水爐火無所仰給而竭絶者異也、

乾潤
滋煦

大物之發火、有與小物不同。夫大物者、持體於攸遠、小物者換物於前後、持體於攸遠者、陰陽力抗、故發者發於收不斷之中、鬱由其縫而發、換物於前後者、收絶發盡、故發者發於收不斷之處、鬱發食體而盡、言之於水、陽有釀之水、衰衰不盡。汲納甕中、既絶其本、上鼎下木。一火可竭、水者融物也、氷雪者凝物也、氷雪之漸於晛。其結不固也、是以其有物而凝。若固於氷雪、則其寒甚於氷雪也可知。

一氣本全、陰陽背走、背也反矣、面也合矣、故地氣收而暗矣。天象發而明焉。天氣乾而噏焉、地質潤而噴焉。天象得地氣而日影相偶于上、以成其歳、地質得天氣而水燥相偶于下、以成其運。天影地溼、同一陰氣、地燥天景、同一陽氣、乾華潤液隔境、則其氣亦異也。故景與燥同乾物、唯以燥者潤中所噴之陽、而雖乾而以煦爲德、而其溫也、熱和地寒也、月

與水同潤物、唯以水者乾中所嗡之陰、而雖潤而以滋爲德、而其冷也寒和天熱也、聚結不得不歸而一、迸散不得不散而布、津津合地、嘩嘩分於天、故水者、於淸虛之中、涌于乾熱之嗡、而結于蒸騰之中、以自氣之質、而其氣也淸、燥者自濁質之中、噴于潤寒之排、而發于收肅之中、以自質之氣、而其物也濁、故水則融而冷、寒凝爲氷、燥則鬱而溫、發熱爲火、故水燥有滋煦之悅、氷火有凍焚之慘。

燥或居持中、或居地中、居地者、以爲質所收斂、激而發焉、不如居持中者之得處而和、水或居地中、或居持中、居地者、受氣之煎熬、淸而濃焉、不如居持中者之淸而淡、是以同是燥、而天燥者和、地燥者激、同是水、而天水者淡、地水者濃、是以燥有和激、水有淡鹹、風者動天也、燥者靜天也、水者動地也、地者靜地也、燥之在地。爲密質所排、由空穴而發其氣、猶水之在天。爲淸氣所蹴而釀其質、是以燥之發持中者、風也、水之釀持中者、雲也、烟也、霧也、雷也、火也、雨也、露也、雪也、霜也、泉也、動地與靜地、靜地有高低、居燥而受水之養、動地有深淺、居水而受燥之煦、陸有平原長流火穴風孔、水有平海長流潮汐之吐納、而爲我造化、爲柔和者、持也。

水雖融而本收物、火雖微而亦發物、通給資而立、反乾潤而成、逆之則相食、順之則相生、爲讎敵者、能爲親昵。

收者寒焉、發者熱焉、從微甚而分寒冷溫熱、地者收之極、而水者氣之始之質也、故水冷不若地寒、火者發之極、而燥者質之始之氣也、故燥溫不若火熱、陰肅結則陽鬱、不鬱者上達而保地、於是日鬱而熱矣、轉達而涼矣、陽鬱達則陰結、不結者下生而營天、於是陰結而寒矣、持止而溫矣、氣物之從動靜而見其氣也如此。是以火能

淺者爲色野火湖光也蓋至暗之間有氣而不與暗融其氣青如燄見者爲鬼龍之所爲龍末挑龍燈鬼焉解鬼火

至其變則火體能爭天象

火或在地爲火或在天如象雖然皆一也已而地火食質故其火時發雖然地賦之所結則火常有矣天火陰圍故其火常見然而陰守之所疏則其火時滅奄濁之陽不能散精淸之中則與日爭暉與月共繁化彗化孛轉中動者也有類象焉有聲爲天狗無聲爲狂矢飛爲流星隕如星雨持中動者也奄火之類也

水者已有質滯者其解而遊也湛氣相逼雲霧相感濁氣爲重滯體相引則降結爲雨露雲霧者氣之蒸蒸自濁中昇也猶氣之呵鏡雨雪者質之津津自淸中來也猶露之結鏡面

寒温相逼而肅則雪霜逆陽象則發烟霞虹暈之彩

地氣蒸蒸之暗濁昇浮披布而散則其氣茫茫而爲烟靄降低分靡而結則其質紛紛而爲霡霂烟靄疎於雲霡霂密於雨日月之光自其薄處直射茫茫之烟靄則爲暈斜射紛紛之霡霂則爲虹其輪則明衝暗暗抱明之界也故日月至高則不易爲虹至低則不易爲暈

從陽性則爲硫礬膏賦之物至其變則水氣能奪物象

淸而沒體者能透色淸而露體者能受色明而有體者能光明而沒體者能見是故明者施色於外淸者受色於內是故水遊天間能受地之物影謂之天開遊水面能受傍之物影謂之海市

景影中有物能爲循環影物曰影曜景物曰景曜水燥中有物能爲鱗比燥物曰燥生水物曰水生蓋寒熱者發收之氣滋煦者噏噴

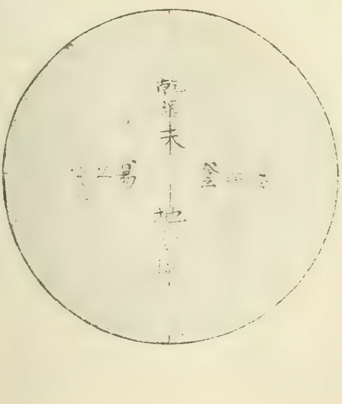
之性天先地後天唱地和。春夏滋煦、秋冬寒收燥煦而生育、水液而聚結。其神斯活、其物斯立。天動而歲定、地靜而運變。晝夜爲本神之開閉、冬夏爲生化之活息。

地物之生潤則結、乾則化。火之燒而散質、水之潤而結質。亦其徵也。艸木長于土氣、禽獸長于食息。是故爲生者自解結養生者由乾潤。夫寒熱之所、爲則冬夏也、明暗之所、爲則晝夜也。是以生。隨明暗而睡覺、隨寒熱而榮枯。覺者神之旺也、睡者本之旺也、榮者精華之發也、枯者本根之復也、而艸木顯于榮枯之氣、鳥獸顯于睡覺之氣、觀華葉之夜閉晝開、則彼亦具睡覺者也。觀禽獸之暖而孳尾、寒而氄毛、則此亦具榮枯者也。唯人長于神氣、故不假羽毛之用。孳尾之時、故爲難見。猶松柏之長于本氣而榮枯之時之難見也。

動植之用、氣液而活立也、水燥之以滋煦而

絪縕也。

乾潤滋煦圖



而燥煦、燥煦而地澤融、影來而地肅、地肅而水澤凝。故雖日能乾水、而發陽鼓、而鬱陽煦焉、故水澤以暑候而溢、雖影能和水而散陰鼓而結陰肅焉。故水液以寒候而涸。日者天之陽象、月者天之陰質、而日月相比天中、陸者地之陽質、海者地之陰象、而海陸相比地中、夫天地者以類而應者也。故日能率燥中之物、月能率水中之物、陸以發收而從日、海以潮汐而從月。陸水在發收氣中、海氣在潮汐質中。日行爲冬夏、月行爲晦望。蓋日影者陰陽兩物、明魄者一陰月體陸水夏而得燥煦而溢、冬而得地肅而涸。蓋明暗兩物也。月之於海水、正衡則陽鬱甚而溢、傍衡則陽鬱微而涸蓋明之正衡魄之正衡、其方專則水之所應同焉。是以朔望之潮汐同其勢焉。上弦下弦。明魄相半。是以其力駁而鬱勢微也。潮汐亦勢不盛焉。陸物夏而長、冬而消、海物晦而肥、望而瘦。是晦望之所等冬夏也。日率燥中之物、而燥物能知冬夏、月率水中之物、而水物能知晦望。故水生于天則疏爲雨、老于地則釀爲海、燥達于陸則爲風、鬱于海則噴湖。

陸者氣煦于上、水滋于下、海者水和于上、燥鬱于下。滋液能通、氣鬱能發。水通之路、之謂川、氣發之路、之謂窖。水自氣中注而爲海、氣自水中泝而爲潮、氣自水中泝而爲潮。是海水從月也。夫水者陰物也、氣者陽物也。水與月相應。故月在上則陽氣勢屈、而鬱水中。故鬱陽洩于月之兩邊而爲潮汐、朔望則月體正衡、兩弦則月體斜衡。故陽氣鬱發、勢不同也。是以濤之大小不齊焉。或曰、然則海氣不以日而洩、以月而鬱者何邪。曰日和燥、故陸物應之、月和水、故水物應之。海中之氣、見月而屈、猶陸中之水見火而乾也。

夫地上一層者、水之毬也、水上一層者、燥之毬也。燥毬之水者其色清其味淡、燥疏之而下、水毬之燥者其氣濁其性悍衝水而上。是以雨露之下、由陸燥之和、潮汐之沂。由海氣之悍。海味之濃、由水底之鬱蒸、陸氣之濁、由地面之滓濁。故天中燥疏則水結而川谷爲其通路、地中燥鬱則火發而窖穴爲其達路。天中燥疏之盛、水爲滂沛、地中燥鬱之甚、火烈山嶽。

燥者猶沒體、火者其鬱而發也、故地陽鼓舞地氣、蒸騰水滓、濁不入於清、昇不能入於轉、則俯覆爲雲霧、

雲者水土之氣。濁而靄靄。其白玲瓏者與象映也、其黑慘澹者。與象隔也。赤而映空者、與日光斜射也、昏而俯地者。上面氣清也、無風則如綿如練、有風則如鱗如翼。雲霧者氣之帶質也。其結也爲雨雪。其解也散。散者質之之氣也、結者氣之之質也。是以昇者則以其氣而能昇、降者則以其質而能降。雖有質、而氣勝者昇、雖昇而其質終降、雖有氣。而質勝者降。雖降而其氣終昇。

水火相擊、而怒則爲雷電、

氣通則已。鬱則發、火以爆竹言之。其氣鬱而迫。擊而發也。轟然爲響。是以陰氣封地。則陽鬱于下。鬱陽迫而發。衝而出則地有震。有鳴。有裂。有火出。欲衝而直昇遇中間陰氣之壅閉。則火勢愈鬱愈屈。愈迫愈激。求出而縱横相衝。闘而相擊。則爲雷爲電。秋夜暑將退。涼將至之交。必有閃電。俗曰稻。即言此物夜來則稻必結子。是亦鬱火也。唯發者輕。閉者不密。不能與物激而散耳矣。

逆陰質、則起野馬澤燄、火井熱池之氣、順陰性、則爲涼燄湖光、龍燈鬼燐之象、

陰閉則陽鬱而起、氣火山熱池也、暗深則

天者、爲而無意、成而不有、故莫不爲、莫不成、人者、謀之於爲、營之於成、故不爲則息、不成則敗、非天異于人、人有分于天者、人者、意運爲營、用意爲者、雖神巧於其所向、而於所不向則遺、雖鼓舞於其所爲、而所不爲則失、舍意爲者、雖不事神巧、而莫所不成、雖不用鼓舞、而莫所不爲。

禽獸魚鼈者、有意之物、惟少神巧之通於所施、故雖有爲而多不爲、艸木土石者、無意之物、不假運營之爲技、而任神誠之天神。

故人焉者、智能通物、力能役物、天焉者、無所不通、無所不役、天者、無意而成、人者、有意而作。

在物則以神對天、在人則以人對天、其分如何。蓋自天地至萬物、無非物者、而物中有物、有意爲其神、發作爲其技、是之謂人。人在物中、以觀非人者、則皆以無意爲物。

於是合彼天神、而以爲天。人者、物中之一物、意者、神中之一神也、是故、以天神之分、則人意亦神中之事也、以天人之分、則神爲亦天中之事也、故自大分而言之、則以性爲德、以才爲道、自人而言之、則以我之以有意之神爲德、觀彼無意爲天之德、以我之以不測之爲爲道、觀彼之無作之成、爲天之道、天人雖弗同、而其爲氣則同。雖爲氣則同、反意之有無、故天者、無意而爲、無作而成、人者、有意而爲作而不成、以物分之、天地山海、艸木土石、不具意者、天之屬也、鳥獸魚鼈介蝦蟲豸、具意者、人之屬也、以事分之、無意而成、天之事也、有意而作、人之事也、人以此爲、天以此成、死生通塞者、天也、殺活予奪者、人也、殺活予奪之爲、遇死生通塞之成。然而殺活予奪之人者。亦隔彼之與我。我者。我之可如之何者也。非我者、非我之所可如之何者焉。我之

可如之何者、自我致、則我之人也、非我之所可如之何者自彼至、則我之天也。且一身之所立。亦神本而已。神氣以有意發、本氣以無意立。由是觀之、天人大段有四。擧具意者對不具意者、一也。以人對天、二也。以彼對我、三也。以本對神、四也。

無意者、天德、以人觀之則公、

無意者、天德也。人不可不法之。有意者、人德也。人不可不修之。故人修其人德、則有意于善。荒其天德、則無意于善。法其天德、則無意于不善。荒其人德、則有意于不善。故雖聖亦人也。運用以體物。故其德也天。若曰舍女之有意、以從事于無意、舍彼之無意以從事于有意、則失。

有意者、人德、以天考之則私。

意者。人之所得而有之德也。雖呼之曰無意、舍機使智、惟執有意者、不知天也。任無意者、忘人也。有意于善、則無意于不善、有意于殺、則無意于活。擇而從宜。是之謂修。

成者天道、以人觀之則誠、

斐然成章於天地、粲然成跡於往來。微弗隱之、久弗舍之。原原而來、常常而繼。天之道也。今棄涓滴於海、曰海水不增、雖人弗信、而誠之道也。曰海水增、雖人信之、而欺之事也。冥冥難見、昭昭易知。日月之明、纖毫不容暗焉。是以穿鍼之隙、莫不通明。造化之行、須臾無休息之間。是以彈指之頃、不駐逝者。宇宙萬分芥子之一亡、誠則爲之盡。薰不揜薰、蕕不揜蕕。充宇宙而無不足、入忽微而無贏餘。是無意之公、無爲之誠也。有意之爲、則不然也。欲顯之、則以微爲大、欲隱之、則以大爲微。內求東、而外則西、爲爲進、而意則退。是以若使天地之轉持如人之有意、則有時作之、有時廢之、轉之不已、持之不息。悅于爲之、倦于繼之、可觀天人之反。故觀無意之吉凶、以爲有意之

玄語目

玄語

日本　鎮西　三浦　晉　安貞　著

小冊　人部

天人

天地若立、天神若成。大能散小、小能居大。神本合氣物、動植分神本。至神氣則性通情感、本氣則精保力立。則雖大小、彼此同相有。然既分其物竝之。則彼專本氣、此專神氣。蓋植者、艸木也、水而爲藻樹。堅則土石、餘生則菌寓、動者鳥獸也。水而爲魚龍。堅則甲介餘生則蟲豸。蓋動中感通之運。是之謂意。雖感通不隔彼此、至爲能於意、則動有之植沒之。有意則其爲也卒弗獲不用意。沒意、則其爲也卒弗獲不舍意。無意之爲則神、成而誠也。直謂之爲。有意之爲則人、亦謂之作。成而僞也。蟲豸甲介。魚龍鳥獸。偕同有意。則其境也人。雖然。至極意爲之妙、則變化鼓舞。孰優於人。

故自物觀之、則大有小、而小中動植並立、自人觀之則我有意爲之玅。技以敵天神之爲成於是乎。含靈屬人、艸木歸天。夫人者萬物中之一物。意者萬氣中之一氣。大能給小、故小以應於大。一能之二、故散終有所專。是以小應乎大、植反乎動。人開天地而本氣爲生、神氣爲意。天有感通之神、營養之爲。人資爲心性之意爲技之作。故意者人之心性。作者人之爲技情欲之天。運感求意。智之神運智通。故天者神爲天成、

有則有矣、無則無矣。生則生矣、化則化矣、廼天也。執而隔者、則拘有泥無。執生惑死。舞智弄物者。無有有無。不生生不化化枉費模索矣。以常度則差于變、以己比則違于物。蓋氣之於物、莫不各成各足焉。是物物之全也。有耳目而視聽、有手足而舞踏。有意而思辨、發技而營作。是人之全也。如他之含靈、雖似而拙于思辨營作。雖拙而於彼乎足。其佗則不假耳目鼻舌神靈機智而足。故無腸胃而活。無根株而生。不有氣息而存。無心思而動而見蚿異蛇之行、見鳥訝魚之潛。以己窺物也。不營而爲者、神也。爲而無意者、天也。在人之一氣、粹華爲神。是惟人有者也。彼執而拘者、以爲己有意而視聽知辨。天亦必有意而視聽知辨已。己有意而愛憎黜陟。天亦必有意而愛憎黜陟。生時之情態己如是。死後之情態亦復如是。猶瞽之思想文彩、聾之思想律呂。人之於動物、同生之類也。而猶且不可以己比物。况天乎。故下羅網而漁者、所獲不勝所失。引繒繳而弋者、所中不勝所逸。有意以得之、則無意從而失之。天之所成也。故以耳目而視聽、以心志而窺察、亦難矣哉。惟無意而爲。故涓埃之微莫不爲焉。惟無作而成。故覆載之大莫不成矣。天能容、孰得而逃之。誠能成、孰得而拚之。

酬醋。弗知誠僞之分也。若夫爲善盡有福、利者先爲、爲不善盡有禍、怯者先避、那待君子以爲之爲不善而多福、爲善而多禍。人將何適。蓋天者、無意于愛憎酬醋、人者、有意于愛憎酬醋。雖不善人而積則弗得不富、雖善人而散則弗得不貧、雖暴戾也、而强則力難爭、雖方正也而覆則勢難支、事難兩全、勢難持平。惟成於誠之所在。弗可以有意矯之。善者、人偕欲之、不善者、人偕惡之。所偕欲者、衆歸之、所偕惡者、衆棄之。理弗可以勢晦之、心弗可以力服之。邪欲屏之、正欲擧之、仇欲酬之、德欲報之。意之所向。天弗能如之何。於是人爲遇天成。其遇參差。如市人之迭面焉。竊鉤之人、而獲竊鉤之禍、分飯之人、而獲分飯之福。雖有司之察、察者、尚弗堪也。縱能察察堪之。而豈有德者之所爲哉。人之有德。猶且不爲。而望之於天乎。行一善、而求一報、拾一不善、而指一報、天豈以交易爲道哉、於纖毫之善不善、則不省之、以其大者禍福之、則以苟安爲謀也。天豈以苟安爲謀哉。然而其一毫之功過。遂不可掩。猶千鈞之衡。增減錙銖。雖如人未覺。衡未移。而冥冥而移者。竟不可掩焉。於是棄海之涓滴。終弗可之沒矣。不知者、以爲冥冥、知者、以爲昭昭。智愚之所以分也。是以其有力者、進而移權、無力者、退而移權。賢否之所以分也

作者人道以天考之則僞。

己爲一物、己爲一氣、有己之氣物。別觀混有者。則有己者、各自私焉。自有己之私、而觀所混有者。則彼也公。故自我之有意、而謂無意於天。自有意之私、而謂公於彼。私也者、人意之謂、僞也者、人爲之謂。故雖意在安天下、而自天觀之則私也。雖修至聖人、而自天觀之則僞也。既己人也、私僞反公誠、爲人之賊。是以人之公誠也、法天也、

其私僞也。任人也。故對人言天者。則除人則失其對。如對神之天。對機之誠。不假人而存。意智情慾者。我之意也。運用言動者。我之作也。分。則運用爲爲。言動爲技。

夫內有者。德也。外發者。道也。神運用內具之心性。以發言動之爲於外。人有意而爲殺活予奪。天無意而成死生通塞。天人交接。其事無窮。此故修者則志。治者則業。人爲立焉。往者則當。來者則遇。天命成矣。人爲則天準之所在。天命則人事之所歸。

人事之重。生化天命也。生化者。聚散解結之往來也。故生化非天命之外矣。是以。生化者。神爲。天命者。天成。以神爲。則往來主。而當遇客也。以天成。則當遇主。而往來客也。此故。感應往來之生化。當遇會違之天命。以分以合。常變無窮。是以時之沒體。物之露體。雖則異焉。而來則生之。往則化之。往來主也。來則當之。往則遇之。當遇主也。

人以神御軀。隔自佗。而各運其神。故自內具者擇。則善惡是非存矣。

有枝幹。有榮枯者。木之所同也。曲直疏密。壽夭肥瘠者。木之所獨也。人其孰無獨者。獨者勝同者。則小人也。孰無同者。同者勝獨者。則君子也。同者不可無也。故其爲末盡出于善。其大者立。則不失令名。其爲末盡出于不善。其大者誤。則不免醜名。雖不善者。豈無細行之可拾哉。雖善者。亦豈無瑣事之可貶哉。故拾其美而譽之。則可以掩其不美。舉其不美以毀之。則可以掩其美。叱咤者。戾聲也。而愛者豈無叱咤之聲哉。唯喩者。和聲也。而戾者。豈無唯喩之聲哉。巧衒美。則雖固不善。而世必沾沾以相譽。不幸而爲不美。則雖固善。而世必睊睊以訾訾。密窺陰謀。致富致貴。見之則秩然有序。望之則嚴然有儀。就之則敬而惠也。去之則愛而思焉。訟之則能折。諫之則能

聽、孰知其不善焉、知微見機、截惡於未萌。誅亂於未發。有慮而或不恕、有憂而或不假言而不投時、好立而不趨時勢、孰知其善焉。聲主可愼。豈易輕爲毀譽哉。豈易輕聽毀譽哉。有瑜不掩瑕、然玉則玉也、有文以飾質、然石則石也。噫玉不易相、石亦不易辨。

就外發者觀、則守禦虛實作矣、動之事、自守禦出言之事、自虛實出。

戲調則誇于己、抗衡則不察他、爭則競、妒則忌。內之則護、外之則訐。守禦之間。聲主參差。此故。正名而弗正實、以正聲欺人也、枉實直名、以直聲自賣也。弗務實而張名、以虛聲欺天也、有實而惡名、以實聲尤人也。世有未知主而謾呼之者、有遇主而未得名者、有同主而異聲者、有同聲而異主者。是以、激言過實、諉言遷實、暴言傷實、佞言溢實。惑言失實、盜言偸實。淫者其言私。竄者其言遁、忌者其言沮。畏者其言縮。毀譽褒貶者、聲也、善惡美醜者主也。雖主能爲聲、聲亦能移主。聲主稱則可、不稱則寃憤忿怒謬誤過失由此而興。故所自藏者、石也、而諛人玉其名以獻媚、衒者知而自强、愚者不知而寶之、其惟智者乎、聞之不懌、是非惡聲之美、惡虛名之無益於主也、所自藏者、玉也、而妒者石其名以排之、褊者知而慍、愚者不知而棄、其惟智者乎、聞之自若、是非愛名之不美、知虛名之不足累主也。苟聲不稱主則美醜同歸不智、褒揚貶抑、與實乖馳。君子豈爾爲。是以以名蔽主者、不肖也、以名疑主者、不明也。以名蔽主者、又以名浮主、以名疑主者、又以名信主、難以上人、難以下人、不可以通事、不可以體物、以人誤人。其失猶如斯、況以人誤天者乎。聲主不稱、則不足以正事物、豈可語天人哉。

夫質之有無者、天地之所分、意之有無者、天人之所分。故天者、無意而爲、不作而成、人者、有意而作、作而不成。

質之有無者、天地之分也、意之有無者、天人之分也。天人同氣。而人者、有意而作、天者無意而爲。其爲豈同哉。夫自使者。勢力之分也。擧水火言之。使之水而就卑、使之火而之高、是神爲之力使然。水不得不就卑、火不得不之高。是天成之勢自然。人者氣物。氣者必爲。然而有意之氣爲與無意之氣爲不同也。故混言則雖同言之爲。爲自有殊。故分之無爲之爲、之爲爲、有意之爲、之爲作。雖分爲人作元神爲中之事也故或通爲作而言。夫氣爲天成。事屬會違。其間也。譬如越人之胡。胡人如越。其之者、氣爲也。而其會違者。天成也。天成者何。其會也、或於江、或於河、其違也、或於江、或於河。是以。雖天成不外於氣爲而天成與氣爲不同也。是以。雖不爲則不成。而成則非爲矣。故明暗寒熱者、氣也、以爲而言。晝夜冬夏者、天也。由成而言。不爲則不成。故天一於氣。成則非爲。故氣非天也。是故。分天人言之、則氣爲天中之事也。分天神言之、則人爲氣中之事也。是各主各聲之所有。統者也。故通塞生化、氣爲之、予奪殺活、人爲之。而其成者非爲。故氣道者爲、天道者成。或曰有成則有敗。天道獨有成而無敗與。曰天成者與人爲對者也。成敗者。經營中之事也。猶對地之天與對人之天同聲而不同主矣。且成有敗。與爲有已同焉夫人者。以意度、以作營。其方欲生也、以生爲成、以死爲敗。方欲死也、以死爲成、以生爲敗。因意之所向而主轉而聲換矣。活之則活成。殺之則殺成。是殺活同成也。是以。天之成與爲同居。故莫不成也夫人之成。與敗爲對。故有成有不成。故曰不成。是以。自

天觀之、人爲與氣爲、同一事、以對天成、自人觀之則氣爲之而天成之、與我作中之成敗爲對。氣爲與天成對、譬猶曰東西者、天也、昇降者、地也、以正當平分言者也、合氣爲天成而天成也、而與人爲對者、譬猶曰雲雨亦與東西者同天也、自我而分也。

物分體備、人交天、我接彼、天人物我之間、心性之神靈、感達于爲技、天神之爲成、交接于彼我意智、情之適否、智辨事之當否、故虛實守禦之間。生善惡是非、故人以虛實守禦當善惡是非。故有殺活予奪之事、歸成功於天。夫天者、萬物往來而吉凶失得、其爲不測、其變無窮、故神也、其成不可辭、其誠不可揜、故天也、物者、天之以體整齊而成也、事者、神之以用爲而變錯也、此故天人物、而爲成事也、物、則有性發才、事則氣交體接、有意其無意、以望作於天、同趨舍於已、以求成於人。望弗遂則怨、求弗得則尤、不知天人者也、感應、氣之往來也、酬醋體之往來也、是以。人有作則取物爲已之有。

人者、取物於身之外、以有之、物者、雖有取物於身之外、而不有之、是人與物之分也。故取土地以有之者則君、不能有之者則民、取貨財以有之者則富、不能有之者則貧、治亂者、取舍予奪之事也、興廢者、失得存亡之事也。無則謀得之、有則恐失之、得而有之則意滿而驕、求而不得則心沮而苦、是以。其取也有人予而我取之、有人惜而我奪之、有人護而我竊之、有人拒而我害之、或欺或劫、窮達榮辱繫之、喜怒哀樂由之、治亂興廢本之、貴賤貧富分之。而其物則非人也。

水火艸木者、皆天也、飲水以醫渴、茹艸以療饑、鑽火而烹、斷木以巢者、皆人也、以人窺天。則皆如爲人設之。然無意非期用於

有意。有意使無意之物。能爲用於已也。生左足者、豈爲右足哉、生右手者、豈爲左手哉。弗爲牙蛙而生齒、弗爲蟣蝨而生膚。是以。亦不爲虎狼生人、不爲暴主生民。萬物相依而無不足者。若曰有爲人。則天之私人也、以人窺天也。

故成往來聚散。生化消長。有無小大。美醜强弱者。天也。喜怒愛憎。慾惡親疎。酬醋黜陟。分別思索。機智變巧者。人也。有意則觀彼來者聚者、生者長者、有者大者、美者强者、則喜之愛之、欲之親之、觀彼往者散者。化者消者。無者小者。醜者弱者。則怒之憎之惡之疎之。是雖天人之所相應。而非其合也。應與不應吉凶失得出。而治亂興廢定、賢愚邪正分。惟以有意觀無意者。以人窺天也。謂之窺窬。

美醜在物、天也。分美醜在我、人也。故美物不有羨、醜物靡不足、本無意于美醜也、美則自足。醜則不滿。已有意于美醜也。是以美人。鑑之以鏡、方之以醜、始能分其美、醜人鑑之以鏡、方之以美、始能分其醜。既已以意分之。則美者矜美、醜者羞醜。未有意于分醜、何以爲矜其美。未有意于分美。何以爲羞其醜。美醜、物也、萠乎生、成乎形、愛憎、人也、分乎機、長于勢。是故。無美醜則已、有美則不能無醜、有醜則不能無美、無善惡則已。有善則不能無惡有惡則不能無善。故猫狗方爭食、相嚼是未始知彼之可親也、及相褻相愛亦未始知彼之可疎也。未有意于親、奚嫌疎焉、未有意于疎、奚厭親焉。美醜成於無意、善惡分于有意。今以其分於有意者、求諸無意。所致不通也。然而美醜者、有形之物、善惡者、無象之意。美不必善。醜不必惡。錯綜以成章也。

故觀彼往來聚散。生化消長。云云者分別是非善惡。指示酬醋黜陟。雖似乎。夢思夢語達者弗與。

道傍有一木片。過者以爲棄材而不收。有困者。取以爲枕而憩。重過者。取以爲屐。有乞兒。又拾餘片以薪之。棄而不收則棄材也。臥而藉之則果枕也。斲而履之則果屐也。鑽燧而火之則果薪也。片木無意于棄不棄、無意于用不用。棄則棄材也、用則用材也。以有意觀之。宛如棄材。宛如用材。宛如供枕。宛如供屐。宛如供薪。是故。論辨苟僻於所好。淫於所從。雖果有明據。亦夢焉已。

是故。君子通天德、奉天道、修人德、治人道。有所心瘤目盲。則竟不能出此。是故。人處乎混混。應乎粲粲。則用之無盡。數粲粲而弗見混混。智力將窮。混而不粲、踏虛駕空、捕風繫影、贅瘤事物、土塊彝倫、粲而不混、惑死生隔物我。

己不能、則使人能之、己之能也、己不達、則使人達之、己之達也、己不能、則護其不能嫉人之能焉得護其不能、己不達、則惡其不達。妨人之達焉得己之達。物我相通、則如兩手相護。隔則如痿人自厭。

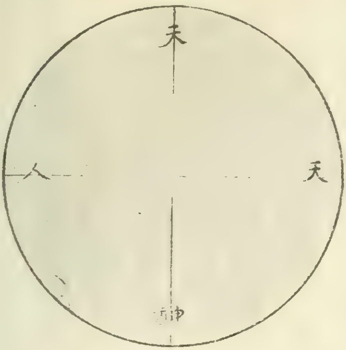
驚禍福、困吉凶。

一鄉有火。家家扶老攜幼。蓬累負荷而奔。有貧人。借佗室居。亦無妻子。熟視火之起。徐起緩避。塗見一壺之遺。因頓而飲之。頹然醉。恬然觀。是人初不積慶賀福澤。於是日乎。無失無憂。是日大憂之人者、佗日大歡之人也。是日少失之人者、佗日少得之人也。故得而欲不失、生而欲不死。非愚則妄也。知而厭之。出吉凶得失之境。高踏不顧。亦與世異。知而不惑。能處其間。可謂得之矣。吉凶相依。禍福相根。事之常也。是故。以辱之道而求榮。以損之道而求益。以死之道而求生。以危之道而求安。哲人之所畏。衆人之所履。

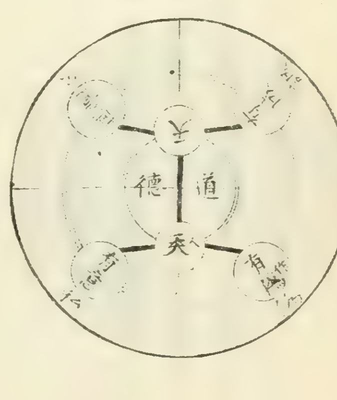
動之則纏、轉之則糊。故熟視其象形、熟聽其

聲音熟識其情性以此呼之猶且誤其主况其象形非目之可洞。其聲音非耳之可瞰。其情性非可模索思量顧呼之而弗應、逆呼之而弗戻。是以爲之天地之主、萬物之祖、而不加貴、爲之瓦礫糞壤而不加賤搭之則髣髴在手、取之則洪蕩無垠。故莫玄於不玄、是以莫不玄於玄。

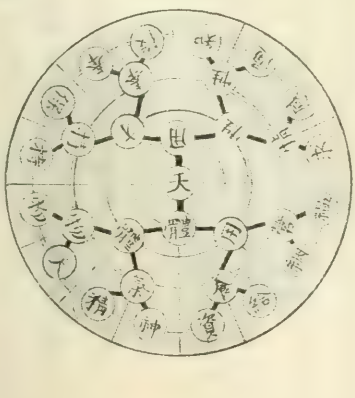
天神天人圖



天人道德圖

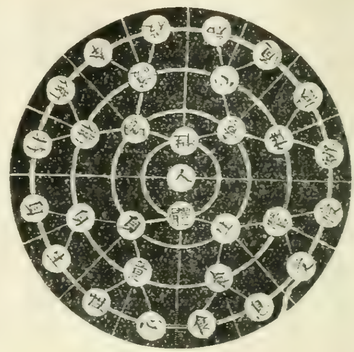


天人反合圖一合



意爲圖





給資

大物能有、萬物能開。陽縕陰絪之際。有者能給、開者能資。於是乎。各各開其天地。以成其體用。是以。萬物之擾擾。雖變態無窮。而資諸天地。則一也。是故。資者能應給者。給者能變資者。蓋大物能統、小物能散。統則混有之天地、散則各立之氣物。雖各立盡變。而同資之於混有。資則有應、變則有反。盡變居一。於是乎。萬物擾擾。以反以依。夫物之相散。雖萬不同。天地水火。其所化。惟一動一植。

火熱而昇、水冷而降。然而水者。以火而成。火者。以水而成。是相反而相依也。動則溫動有意、植則冷止無意。然而蔬穀依人而立、人依蔬穀而存。獸多依艸、鳥多依木。大而言之、則人物不依天則不居、不依地則不立、小而言之則鴨假雞之伏而孚、蠶待人之養而生。

神活本立、動熱止寒。大物雖同有動植能分

賓其生化之跡。精則沒之、麁則分循環鱗比。動植謂之生。生必有身。陽縕陰絪、一給一賓。萬物之所成。給者、於我爲賓始之氣、賓者、於我爲賓繼之氣。賓繼者、營養衛護者、賓始者、保持奉役者。保奉氣存、營衛相繼。生之所立。艸木賓之、而絪縕于華實、給賓于其天、與其與鳥獸賓之、而絪縕于牝牡、給賓于其天、與其與而其一箇活立之間。皆莫所不用此始繼。於是大給小賓、而我有有應于天。故我之軀、身生以應于天地、我之神、心性以應于天神。天有東西南北、我有前後左右。天有內外本末、我有內外本末。天運氣於外、保體於內、我運氣於內、保體於外。然而我則具前後左右、植則猶混其方。我則上本下末、植則上末下本。我則氣溫體動、植則氣冷體止。莫所非給賓。非可盡數也。然而天人給賓相反。則我則有限、天則無限。我則須臾、天則攸久。我則有意而作、天則無意而成。

天則自然也、不擠也、成也、常也。神則使然也、不測也、爲也、變也。故非我者、則以無意爲天、以氣爲爲神。於我則以氣爲爲天、以有意爲爲神。何則其維持我之天地之氣、非天而何。其鼓舞我之天地之心、非神而何。蓋我之天地者、神之所爲。受神之所爲、以爲己之天。於是心爲其神。是故無意者、不以靈爲能、以變爲不測。有意者、不以氣爲變、以意爲不測。故以神爲屬天、則人爲爲作。今夫人不衣食、則凍餒不擠、是氣也。人之天性也。雖凍餒、而衣食之、不衣食之、惟其所欲也者、是意也。人之神爲也。是故天人之間、亦有天神之辨。且天以容人、人以容於天。天以人爲意、非人外有意。人以天爲神、非人神外天。於是天人之所反、一以觀其分、一以觀其合。

天公人私、天誠人僞。雖然、人則賓私於其公、賓僞於其誠。無意給有意於我、無爲給有作

於我資應變而反給資之道然。天給及我。故自我觀天地、泥爲窺窬、我資自天。故自天地觀物漸得條理。

造化、成于陰陽之絪縕、活立成于天地之給資。資而應焉、變而反焉。不正視者。不能不眩其目也。此故。絪縕之道。天則沒其跡、動植則露華實牝牡形化有假於此、氣化無假於此。又姑言資於行止。天資行於運轉、地資行於升降、鳥飛魚游、人步獸走數而不盡焉、天資止於環守、地資止於方位。鳥棲魚潛人寐獸伏、數而無窮焉。縱隨物異其態。有通于給資。又何隔焉。

資始之氣者、自天得者、保持之精、奉役之力也、資繼之氣者。自外得者。衛護之表營養之裏也。衛者衛其精力。營者營其精力。資始之氣已燼、資繼之氣莫所用焉。鱗比之態。露端於始終。近取之於人言之。蓋人有限之身生。以意爲爲、其能長乎聲色臭味之中、遊乎器地配嗣之間。有所圍而以若洞視動植分神本。竝起追衰。衰作止換體。魚鱗相比。惟人以有已。而疑鱗比於造化。天者成物跡事、神者。住感來應人執有意、窺窬天神。觀不揜不測者。比之乎有意。是以。神亦人之、天亦人之。人其意智情慾。人其酬醋黜陟。人其容貌。人其冠冕。不知資之變於給。執妄說眞。人哉人哉。縱以通自許。其實則塞。蓋夫混淪一天地。其體淸淨。水浸燥煦之際。濁而穢焉。絪縕釀物。解結動植。鱗比其體、相換其神。穢濁麁脆新鮮舊敗。不通絪縕、則不識造化、不通給資、則不識人物。痼身生於穢濁、釀意想於虛妄。爲明者所蔽、爲通者所塞。智之不貴也。一如此。混成、二如此。粲立。天莫蔽之。人致聾瞽。苟通所給資。則天人本一。造化何隔。

言動

人者、生以保身、意以爲爲。意則知感、爲則聲技。聲技者。知感之所運。含靈同有。聲之爲之

言則惟人有之。蓋人之爲言。精乎動、而麁乎意。故言不能盡意、而爲則盡于言、夫言者、由主命聲。運爲聲主、抽緒引之於是。有其主、而可上之於口、無其主亦可上之於口。認主聲之聲之善者也。是故。主者、天也、聲之者、人也。呼未知其主。應非其主。善知其主、以呼之、不受隣人之應、未知其主、以呼之、雖隣人應而信之。聲者、人也、轉矣、舟不亦可以呼車乎、主者。天也。定矣。舟不可以爲車也。主貴得實、聲善相稱。車車舟舟。實當聲稱。

意有於內。技施於外。故意智內運、言動外露。動者。一守一禦。以之酬醋。發于聲者。正誕信僞。造化之間、有常有變、有正有妖、言動之間。有正有誕。有眞有妄。不審之則妄誕與變妖混。信疑不與眞妄配行、是非不與正誕配立、大朁斯衆朁、大聾聽小聾。

是以。就德呼之、無意爲天、有意爲人、就道呼之。爲爲神。成爲天。一一爲各。反道混處。不必相先後雄雌也。故聲於不得不然者曰勢。聲於使之然者曰力。所然者。聲。故以然者。聲理。駕之以往。莫所失於聲主焉。主、實也、天成也、不俟人爲、聲。名也。有言而後成。人之事也。名者、實之聲、實者聲之主。知名而不知主、入門而盤桓、知主而不知名、出門而傍徨。主得之於心、聲得之於言。失諸思言向背異途。是故。無意者。主也。天也者。聲於無意者。有意者。主也。人也者。聲於有意者。爲成者。主也。天神也者。聲於爲成者。故以名求之、實爲之解、以實言之。名乃其解也。

有得良馬名神龍者、聞神龍至、而弗識者驚走、有函死鼠贈諸人者曰贈璞。其人以爲未磨之玉。呼之異、則不察其主之同異、而先疑之、呼之同則不辨其主之眞假、而先信之。名有邪正、不可不擇焉、主有美惡。不可不察焉。名者、人之所命。實者。天之所爲。或亂聲主、或繆聲主。厲階之所生也。事

固有呼之同、而實異者、信、則因其名之同、而愛異主、疑則因其名之同、而惡異主、又有呼之異、而實同者、惡則以其名之醜、掩同主之美。愛則以其名之美、掩同主之醜、徒譽其名、而不察其實、弗能榮之、還遺辱於其主、徒毀其名、而不察其實、弗能醫其病、還致佗之侮、名實之義。大也。宜審擇明察之。

是故呼天呼人。呼天神。呼云云。以跡指而示之。則各主爲各聲。然各者、統之分、統者、各之體。豈數轅與輪輻。不知彼車哉。

言可以盡于動、動可以盡于言、則其爲技。固一也。然而以意比技。則言動以門戶出入。已以門戶出入。則其麁也可知矣。雖麁而其指揮出神明矣。認麁跡之定。求逢精主之活。雜矣。故施技之道、其善、果善乎惡乎、其非、果非乎是乎、不語之道、其汎、果汎乎切乎、其正、果正乎誕乎、活主御其麁定

中爲變化、耳聽目明、手巧足健、天者、神營而爲物、人者、意營而爲之於物、故天者、言動之、人者、言動于此。故意之所運可口可身爲之於物者、欲成物也。故事之天人者、爲物與爲之於物也。夫物者、不用畜藏於服食、不用營巧於居宅、不用玩好於肢體、不用離合於羣醜、人則用之。故與人相輔、將物自足。故以天地萬物、皆爲我之用、是以能爲之於物也。故天爲數、人數之、天有運轉、人曆象之。天爲親子、人尊卑之。天爲男女、人配偶之。天爲土壤、人都邑之、統治。依養。故爲之於君民、治材爲用。故爲之於士農工賈、愛之以德、威之以兵、知之以思與學、行之以勤與禮、蓋天地活立。故其用亦活用。我以隔散之生偏用有意之神。故未能通而活。其思泥。其用死。夫一分一合者、體也。分之合之者、氣也。元氣本一、故分、陰陽本二。故合、分者、天性之活、合者、神才之通。用之不達其通、罔二之反、

通則聖焉、執則頑焉。通者、天不之至美、執者、天下之通患。是故、愛者、令德也、而小人之愛也溺愛、惡者、醜德也、而君子之惡也歸愛。活者、美事也、而小人之活也釀禍、殺者、醜事也、而君子之殺也布福。執則雖此於通、而彼於塞、雖此於恩、而彼於怨。通不求伸於屈外、不謀利於義外、樂於困中、達於窮中。是以雖凛乎不可奪、雍容有餘裕、雖如不可企而及、莫有岸崖。雖可觀而不能測之、雖貢然不可端倪矣。

運之不至其活間一之合。

通者、天成之才、活者、神爲之性。良醫以毒治病、良將以弱制强。拙工以藥致病、怯將以强畏弱。於是强弱失名、毒藥易用。人以有意運之、天以無意運之。是以世或有福禍禍福、悲歡歡悲。皆運轉之無常也。事不偏行、物不隻立。皆成于二之間。故曰、順、則其聲美也、曰逆、則其聲醜也。然徒順徒逆。不爲用也。故剛直諫規、逆而美也、阿諛足恭、順而醜也。順者、隨而將之、逆者、向而迎之之事物、必成于向迎之間。是故、地載向天覆、萬物皆成於其間、左手向右手、萬技盡出于其間。順而不反逆而戾之、同歸不美、奚擇順逆、逆而不爭順而能守、同歸善矣。德之相得而全也、順之難專行者、流于柔也、逆之難名德者、至于戾也。如未達其活、則美亦難行、醜亦難避。故人必見物、則爲塞、見己則爲通。其塞也、塞於我之所通、其通也、通於彼之所塞。若以彼之所通觀我之所塞、禽獸不敎而能搏擊、無學而能辨毒藥。且猫狗之能鼳、狐狸之能魅、豈我之所通哉。是以貴人羹餼之饌、餓者朶頤之食也。我憂苦鬱悶之時、讐家抃躍之日也。是故以我觀地、地者大也。以天觀地、地者小也。以地觀我、我者小也。以蚊虻觀我、我者大也。而其大不止於天、其小不盡於蚊

虻然則通塞順逆。強弱小大奚以定之。是以旋轉而觀之、無所不左、無所不右、上下而觀之。無所不高。無所不卑。執則塞焉、通則活焉。尋跡者、至於無跡、則迷塗、數察者。至混則拱手。安活斯之達。是故昏主亦必用人之言、聽主亦必御人之言。惟昏主無活權衡、故以容此、而御彼之昌言、聽主有活權衡、故以御此。而容彼之昌言。故賢者以古訓規之、則不背者亦以古訓飾之。正士引法言以正之、亂人亦引法言以亂之。故觀物不活於物。將病於物。看書不活於書。將病於書。說理不活於理。將病於理。是以義以宜。禮以中。智以通。應以變。用之所活也。運用苟不活。則雖有技能。奚以用爲。

惟混焉一也、孰執二以應事、

雖天地異位。相成非二。雖耳目兩兩。雖手脚隻隻作用則非二也。故駐左脚者爲運右脚也、息於昏夜者、爲動於朝日也、物之動止。心之善惡。觸則二跡矣。孰求一於其外。二可直以爲二。則左畫方、右畫圓。前接東呉之話、後聽西秦之報。吹冷、噓溫。機觸而跡反。孰知其所由而來。是以能奉一者。能愼其機。故其應事物也無窮。

惟粲然二也。孰執一以御物。

認跡固執。於通乎病。北人疑再登之國、南人不信常夜之國。雖然。無者、有之所待、實者、虛之所偶、故好欲明也必昏、好處美也必醜、欲全則缺、欲譽則毀。欲長則短、欲治則紊。欲逸之則勞、欲悅之則怒。故自爲智者不必智。自爲賢者不必賢。能成文者。質也。能爲剛者。柔也。養怯者能勇。積卑者能高。能變者常也。能動者止也。能危者安。能默者言。能明者。不赫赫。能晦者。不昏昏。至清如濁。至巧如拙。能知如愚。能慮如迂。反以濟偏所以成一之美也。苟亡其道則囹圄湯鑊、不能懲姦凶。能由其道則朽索可

以馭騂馬。是故不通于二、則不能奉一。二即一焉、親疏和、一即二焉、上下序、事爲經、物爲緯、經沒氣物、緯露氣物、沒爲天神之用、露爲天地之體、孰能沒之、孰能露之、混而無縫、其一也全、粲而反跡、其二也立、一者二之全也、無二外之一、二者一之分也、無一外之二、而弗及玆、以有限之智、將窮無窮之爲、終弗能之窮、見爲不測、以有作之變、觀定常之成、終弗能之易、呼以爲不揆、蓋物者無意、知則運矣、感則應矣、人者有意、故知或不運、感或不應、所以能盡變也、視聽云爲、感應之文、變化之於神、而思辨好惡、錯雜之於爲、而運用言動。

物不具意、人而具意、故物混然于精神之分、人則粲然于其間、故好惡之性、運爲之意、反其有無、事亦以異、蓋物成則氣具矣、具之氣、之謂性、具而華之謂神、是故、情者、好惡也、分之則與慾偶、意者運爲也、分之則與智偶、故情慾者性之所具、意智者神之所華、性以具于生、神以使體、體各則隔、氣同則通、神之能通、以體之隔也。

莫往匪感應者焉。是以以怨感衆、衆以怨應、以德感人、人以悅應、垂泣授命、切齒相賊、孰使之然、或患難之感、切于己、或喜樂之應、反于彼也。以桴感鼓、鼓以響而應、以形感鏡、鏡以影而應、治亂興亡之途判、安危榮辱之機決、而弗識。以出于爾者、怨尤天人、是以意智能通則聖、

能體則通、君子之事也、於是知者自明、處者自到、不能體而通、則專己而忘人、爲己而榮辱人、我聞之、君子無專、專孝、不友于兄弟、專忠、不良于同僚、專功近害、專惠招疑、是蓋未能與人通、爲善也、美事猶且不可專也、而況其不美者乎、非之則以其辭害其意、是之則以其意足其辭、無佗、不能通物、情慾與佗隔也。

感應能鼓則神。
紛解難結、福市禍嫁、絃歌代鼓鼙、呻吟轉舞踏、機使之然、利則爲制、鈍則受制、安危治亂決此勢之所走、虎爲鼠、爵爲鸇、故鼓之舞之、則怯者不能不勇、懦者不能不力、勇而且力則孰敢謂之法、懦使之不得不反、反則從亦其族、使之不得不怨、怨則從賊其人、不亦寃乎。或使倜儻慷慨之士、玷行垢名、或使放蕩狡黠之徒、撿身革面、故使有才倒用其能者、秉勢者之罪也、使駑馬盡其能者、執轡者之良也。

天地、物也、感應、事也、有物則有事、有事則有物、觀物知天地、觀事知天神。

鬼神者、用物者也、非物之體也、天地者、體用者也。非氣之用也、非體則耳目不得而及、用也則感應不得而揜。是以祭祀必主至誠、事感格風雨雷霆之變、至厲鬼妖孼之怪、感應之所致。變化不可測矣。欲不信之、則的然有驗、欲信之則沒焉無跡、是所以辨者之窮於辨、惑者之淫於惑也。譬猶衆之在戲場、優人之所爲、至辛苦相逼則觀者爲之、或悽愴、或欷歔、或還自若。是非感者之異也。應者之不同也。又轉入嬉戲則前之悽愴欷歔者、捧腹解頤。是非應者之不同也、感者之異也。故或相感應、或不相感應、或感而不應、或欲應而不感、異同厚薄。千變萬化。於是祭禱之驗、報應之道。妖怪之事、有焉無焉、存焉亡焉。是乃無意之所爲、不可以有意測之、必之、世之惑者、於不可測者測之、於不可必者必之、瀆神媚鬼、爲城爲郭。上自日月星辰、風雲雷霆、下至山海艸木、水火蛇龍、皆泥塑木偶、戴冠冕垂衣裳、以形其神、望之儼然人也。故事之者、人事之、祈之者人祈之、不知物之所致也。

設施

桴鼓相當、則聲成其中、形鏡相當則影成其中。故火成乎相摩金石、水成乎相結燥溼。成則酒非麴蘗、子非父母。是以氣象運轉、則日月歲年、成乎其中、氣質噓噏則風雲雨露成乎其中。故爲則成焉、成則爲焉。是以運轉噓噏之中、動植成焉。人者、含靈之長、成于天、而爲于人、爲于人、而沈于人、爲于人、而法于天。賢愚之所以分也。蓋人。生有厚薄强弱、身有美醜小大。是以智不能無明暗蔽悟、利鈍賢愚之所以生也、思不能無公私誠僞善惡邪正之所以分也。天人之事。反而合矣。是以天之常變露沒、弃之於言、而正誕謾訐。天之通塞生化。露之於行、而予奪殺活。於是天人芸芸。會達千萬。雖千萬也。一言以盡之。曰安仁以安人、義以安己。夫人。類有男女、等有尊卑。而相合交焉。其合有天人。故交亦有天人。人之以天合者、父子也、兄弟也。自是而叔姪宗族之交自成。以人合者、君臣也、夫婦也。自是而上下内外之交自成。雖擴之則無窮、約之則四也。是以子之於父、臣之於君、各將安之。父子者、家之君臣、君臣者、國之父子也。而孝者事親之名也、忠者事君之名也。愛敬盡之。天下和睦。

用心則誠僞成于其中、服事則怠勤成于其中。夫婦相配、則姻亞成于其間、兄弟相繼、則叔姪成于其間。故事物之間。爲者可數、成者無限。是以師弟成父子於道、夫婦成兄弟於室。親親在愛、和疏在敬。

道雖異、而德一也。雖德一也。設施各有所當矣。知其義、考其禮。交接雖廣、其德不忒也。夫人者感應以運、爲之未有衆心之所適矣。而失德者焉、未有事宜之所失矣。而之道者焉。

人情之所適而說、與所不適而怨、安危之所關也。謂之善惡。事宜之所當而美、與所失而醜。榮辱之所繫也。謂之是非。蓋事爲之多、態誠僞、敬慢、讓奪、勤怠、隱忍、勞逸、苟

欲就善、是不可不擇而修之。擇而修之、毀譽褒貶殺活予奪。得衆之所同、而人悅美之也。不修則荒、不擇則雜。修善則仁、修是則義。爲擇之而爲學、敎之師之任也。爲修之而作禮、由之君之業也。學禮無他、仁義之修具也。故善惡是非者、悅怨榮辱之本也。悅怨榮辱者、治亂存亡之機也。

故仁義之所成。

意智以思辨運爲、情慾以好惡感應。好惡者、性之自然也。思辨者、心之使然也。是以自處者、好惡勝思辨、故能恕。觀人者、以我之思辨律人之情慾、故能責。以自恕者恕人、以責人者自責。是修好惡思辨也。人悅則親、親則天下歸矣。人怨則疏、疏則親戚棄矣。己之醜、知而惡、則慚意生矣。人之美、知而愛、則讚意生矣。讚爲嘆、嘆爲榮。慚爲笑、笑爲辱。悅怨榮辱者、仁義之所生也。

乃道德之所全也。

德、有也。道、發也。能養其有者、愼其發。心者混然。善惡分于機焉。故能養其有、則善油然長焉。能愼其發、則惡消兆朕。德、得也。道、行也。得者、得之於行。行者、行之於得。德者行之主、得由學而得。道者得之賓、道由禮而行。得而行、得而有者、混然不可目。由而行者、粲然而可目。由名而論者、易失其實。由實而行者、不妄失其名。故君子奉得者、愼行者。所得而有者善、則所由而行者正。忠以事君、孝以事父、所由而行之目也。事君則忠、事父則孝。得而有者之不可目也。非目焉載斯道、非德焉總斯目。此故以欲安之爲心、則保其德。安之有道、曰愛、曰敬。欲安之而未得其道、姑自諂佞。危害之是。古之君子所以設學制禮、模範人於敎化之中也。得有善惡、行發邪正。得其可得者之爲善、行其可行者之爲正。名載實、實有名。故君子有實而不有名、奉名而由實。

呐呐自安貌

夫人之情慾、呐呐焉、鄉鄉焉、守防之務、利害之謀、我之所欲、人之所欲也、我之所謀、人之所謀也、是於相怨相惡、相奪相殺。蓋物之相怨惡殺奪、止於身矣。人之相怨惡殺奪。結而爲勢。一怨起而天下隨焉。故其治呐呐鄉鄉者。人之聰明也。故有群醜、則不得不治之、有情慾、則不得不敎之。治之者君、敎之者師。君師立。天下同然。悅愛予活。悅愛予活不同然、則怨惡殺奪矣。

天莫所不容、而弗逃于誠、人莫所不具、而弗違于所同、以物觀人、人者、各中之一物也、以人觀我、我者、同中之各也。物一則氣一也、是以好善惡惡、可與天下一焉、物各則氣各也、是以趨舍嗜好、未可以天下通焉。同欲者善、獨欲者惡、同思者正、獨思者邪。故修衆之所同、君子也、荒己之所獨、小人也。舍己之所獨、從衆之所同者、勸也、舍衆之所同、從己之所獨者、放也。惟有所冀望而志道、則求而弗已、有所廻避而遷善、則行而屢顧、求而弗已者、有期于報、行而屢顧者、弗忘於利、惟大人以天下爲一身。故忠以盡己、恕以推己。蓋同者異之偶也。橫目竪鼻、各莫不同者焉、而聲音容貌、各莫不異者也。其同者亦人人有之、其異者亦人人有之。蓋同戴天履地之人、而同圓顱方趾之形也。同倫君臣父子夫婦兄弟、同服水穀、同著葛裘、一人之所好、則天下之所好、一人之所惡、則天下之所惡也。雖然、意智之所向、趨舍嗜好、各不同矣。故或輕視萬乘、或慷慨一諾、或浮沈弄世、或蟄蹙避人、或見機弄勢、或守道踐節、或狷介自守。或傲蕩無爲、或顯暐赫身、或栖遲韜光、皆豪傑之態。是非之所興也。唯大人樂則與天下偕樂、安則與天下偕安。故其功、則天下之功也、其道、則天下之道也。故豪傑之能乃大人之資也。

蓋悅之有道、有時乎、怨亦弗避、予之有道、有時乎、奪亦弗厭。善惡是非之所存也。是以忘道而任愛憎欲惡於人、能適人之私、據勢而縱予奪殺活於人。能賊人之志。此故天下之事。一治一亂一興一亡。或相亡。或相持。勢然也。惟回勢者。力也。故有力者。回亂爲治、轉亡致存。凶換吉惡變善。故情慾者、吶吶鄉鄉、荒則走凶、意智爲之役、則姦邪放僻、惟私之謀、意智者。思惟分辨。修則至道。情慾聽之命。則視聽言動。惟義之從。戰勝吉凶分焉。故自修之道、在思辨焉、治人之道在保通焉。夫情慾之私者、所便于身也、故自好之、意智之公者、所宜于人也。故必律於佗惟以律於佗者、自修、以便於身者。望衆則安焉。此故德莫善於修身、功莫大於濟物。故情慾、保之通之、毋傷之、毋塞之、意智、正之明之毋頗之毋晦之。保通之道、安焉、和焉、養焉、疏焉、

是非者、意智之斷、截然者也、善惡者、情慾之成、未截者也。行截然於未截之間、察察則人情失、邪人信邪、而不信正、正人信正。而不信邪。各欲伸自信者於佗不信者之上。嗷嗷則凶機逼。人情失、則和氣傷、凶機逼則顚沛近。

正明之道、思焉、學焉、擇焉、修焉。通衆之所同思慾、疏衆之所同斁惡、則衆情悅、擧之於政、則勸懲漸化。

・　・

心之爲物、動而不住。往而難反。拘於所見。牽於所習。著於所處。遷於所之淫於所好塞於所惡。終使耳不敢聽、目不敢明。是以善惡、長於所習、塞於所廢、是非、明於所擇。昏於所棄。惟習移人。慾晦智惑者多、則所同好惡者、亦或未出於心之本然、不肯者多、則所同是非者、亦或未出於事之正。人則天地之人也、道則天地之道也。善惡則天地之善惡也、是非、則天地之是非也。正視不眩目、正履不失步。大丈夫之事也。是

非不明、則怨怒作、善惡不分、則昏亂極。是非瞰瞰、則人情藏、善惡察察、則凶機逼。勿論于不明不分。瞰瞰察察、豈可喜哉。惟能體。故能處不屈人情。不激凶機。明于是非、審于善惡。莫不從容自適。亦大人之事也。是天地之是非天地之非、誘天地之正、防天地之邪。則衆心悅。施之於敎、則撰擇有修。未能以天下之胸臆思量之、以天下之好惡黜陟之德、己之所得而有、道己之所由而行。或依一个之聰明。或依一時之利害。或相抗衡。或相守禦。或以自斷。或以爲區畫。斷而聽者、不能通其言、量其意。猶權衡定而量物。聽而斷者、能通能量。猶隨物而移權。是以不容人之言者、不能聽明、難以上于人。以私者、不能通事、難以師于人。是故君子者明能斷是非、公能處是非。敎以誘正、體以防邪。見定各是非。未免在於齊之。烏肖天地之成物。

一尺之面不同、億兆之情焉齊。不同亦横目竪鼻、不齊亦好善惡惡。故政者、同其同者。敎者、不齊其不齊者。政以闘道、敎以成德。政不善則壞才、敎不善則壅道。壅而不通、壞而難復。於道立物成乎病。政敎者、上人者之柄。不可偏癈。舍敎而任政、民雖肅而不知方。況挾謀計、任私智、舞文弄法、欲齊其不齊者乎。無政而爲敎、雖善而不徵。況執其所見、而立門戶、不察衆之同者、欲遺同己之所欲者乎。人不能無獨者、不無同欲者。雖獨欲者、有可恕者。雖同欲者、才有長短。故天地者同。同者、不齊。不齊者、是以乎能成物。譬如金鐵不齊利鈍、而各能成其才。依其成才、乃還有各各之用。長者以長成之、短者以短成之。安能得執己責彼。東家之子者、肥而美、西隣之女者、瘠而豔。苟欲其肥瘠之相同、欲其長短之相齊、

則戕賊人、殘害物。故能執政敎者。助其所能、措其所不能。同其所同、不齊其所不齊。於是乎。道立物成。如不能成物。則政敎道德。無益于世。檃栝修治。固也、而物成於汪洋之中。規諭訓誨。固也。而才成於寬容之中。

不眩紛紛之是非。

是非之紛紛者。各好尙也。觀彼天地之成物。短者以短成之、長者以長成之、大者以大成之。小者以小成之。是故置人於陶冶中者。務成之。而不咎其異。故士農工賈。至諸子百家曲藝之徒。得其人。則功肖天地。而不知。欲以是非律天下。所以勞而寡功也。

不惑滔滔之邪正。忘而通。則親而和焉。宿而隔。則疏而賊矣。

忘則通、不忘則隔。不忘者。宿於心之謂也。喜則宿喜、怒則宿怒、愛則宿愛。憎則宿憎。宿喜之機者喜、宿怒之機者怒、宿愛之機者愛。宿憎之機者憎。惟忘富貴者、正立于王公之前。忘威武者。能行于干戈之中。百結之衣、服而不厭者、忘于衣也、一簞之食。食而足者。忘于味也。功成而不忘必也伐、惠成而不忘必也倨。富而不忘、必也輕物、貧而不忘。必也貪物。故妬者、不忘物之美也、方者不忘己之能也。功成惠成。而能相忘。何以得有矜伐之色。物我介意。則不能忘。於是。蚊虻爲雷。培塿成山。何則酬彼者薄、自以爲厚、報我者大。自以爲小。由物我而相隔也。故德待川流江浸、纔以免罪咎、惡雖如羽毛瑕疵損價。片激棄千塲之歡、一怒賊百年之恩。善惡成敗之難易也。忘而通。則於其榮辱窮達。猶同肆之相救。水火。雖有宿憤宿怒。相扶如手足之相護矣。通切其身。則欲不忘。而豈得哉。化者。忘通之無跡也。或曰我功可忘、則人之功亦可

忘、我惠可忘。則人之惠亦可忘。曰、忘豈徒忘哉。安而有之、正而行之。無有町畦。勇士臨陣忘身、怯者見敵忘主。其能忘其身者、以不能忘其主也。其能忘其主者、以不能忘其身也。豈有忘其主、又忘其身者哉。豈有不忘其身、又不忘其主者哉。忘者、天德也。故通若徒忘者、心疾之人也。噫又何言。而以之文章之、以之品節之、以之和樂之、以之次序之、以之號令之、以之鼓舞之、化之被深。道之行遠。老幼受其養、少壯奉其職。熙熙焉雍雍焉。人人愼其不同者、務其同者。之謂大同也。君師之任哉。非大有力、將孰能之。予人食者、未能使人飽。予人貨者、未能使人富。不奪其業、不奪其時、則人且富而飽。是故以善勝人者、人未全服之。以善下人者、人必悅服。由是觀之、彼使人孝弟忠信者、豈家說戶諭者哉。

人道

動轉止持。分境於清濁。清境者、神雌于天。濁境者、神雄于天。故轉中由變動而定、持中由定常而變。故爲成于通、則曰天神。感應于情、則曰鬼神。雖情道異聲、其主一也。以神雌而爲成爲天事、以神雄而感應爲地事。故地噓噏、而東規南北、日南北、而地物發收。則天成其感應也。日順行、而冬夏斯成。日逆行、而晝夜斯成。則神從其爲成也。是故天中之爲、則神聽於天。地中之成、則天從於神。故天物之態、則錯行不軋其體。氣氣相交、感應有常。地物之態、則錯行相軋其體。氣物交接、感應無常。是以地者穢濁。釀彩聲臭味、事交接生化。是以濁境而事物錯綜、爲鬼神變化之府。濁境之並立。一動一植。雖於天則同資、而於物則有分於植。則給運用於無意。於動、則給運用於有意。見給而有意、而給者則無意。觀反而合者焉。故彩聲臭味之境、交接生化之地。含意有意。相依其間、有意。內有其意、外發其

技意。則思惟分辨。愛憎欲惡也。我開我境。立人之天地。愛憎欲惡、與物類、思惟分辨、於物長、思惟、意也、分辨、智也、合之爲心、愛憎、情也、欲惡、慾也、合之爲性。心性相和。則其情慾。亦與物異也。故人心之適否、作離合之勢。合則億兆結心、而上下和同、離則天下散心、而彼此乖戾。是以。等辨貴賤、類辨親疏、順天奉其則、由人立其道。安衆者、人之大功、自安者、我之廣居。是以。人守其分、勤其職。不守分則僨亂、不勤職則荒廢。雖職有士農工賈。而上自一人、下至億兆、以贊造化、爲職、上自一人、下至億兆、以守其地、爲分、貪天功、費天物之謂汰、偸人功、費人物之爲賊。仁義學禮、道之綱也、殺活予奪、政之柄也。鰥寡孤獨之愍、士農工賈之用。甄拔才良、沙汰盜賊、水而舟之、谿而梁之、春而啓之、秋而閉之。故人之所志、則家國安寧、人之所辨、則尊卑親疏、不貪天功、則莫所用欺、不費天物、則莫所用奢、偸人功者、莫所用勤、費人物者、莫所用儉。夫人交接雖廣。人際之務。餘力及物。道之序也。人際雖廣。不過望衆自修。自修惟嚴、望衆惟寬。蓋夫人之爲生、善惡正邪、智愚利鈍、其自天來焉以贊造化爲心。愉於安人。樂於通人。欲安者、安其危、扶其覆、以難兩全、而鋤其莠、培其苗、欲通者、啓其塞、通其蔽、以難盡通、而疏其情、懲其弊。君師之任也。父則家而君也。君則國而父也。故慈以愛子、孝以敬父、孝慈無不安之家、愛敬無不安之國。於學知之、於禮修之。才德。如艸木之異類別能。故不啻於人知其才德、於身亦宜揣其才德。故伸力務於濟物、不能則退而自善。故大人者、量國而用、小人者、量腹而食。欲使人盡向己之所向者、癡也、欲使人盡欲己之所欲者、仁也。夫衆智者、乏于明、病于通、得耿耿而爲明、得滴滴而爲通、迷悟混淆、眞妄朦朧、故智之事、廓之以天、

天成萬物、神用萬神。物萬則其形萬、神萬

則其情萬萬者資一、一者給萬。故原一派別。雖同亦異。蓋天地者。大物也。雖然猶且相依而給資。一一絪縕。萬之神物。成于其間。而人居其一。故自一元氣觀之。天地水火、變之雲雷雨雪、水陸動植、碎至菌寓蟲豸莫借。非我之與焉。而雲雷雨雪屬水火風恬山堅。屬天地。則絪縕於此爲其而釀成者。動植也。然而天地水火。則居清淨之府、活循環之生。水陸動植。則居穢濁之境。活鱗比之生。鱗比立生於堅輭、活意於有無。故自我分類。則雖大異。而自天成物則合成一天之釀。此生植勝于資本氣。動勝于資神氣。其所分。乃有意無意也。動植雖於意則有無。而於生則彼此同焉。故其所謂體用性才。彼此同有之。而其所有之態則不同矣。故天曰天物精神者、我曰身生心性。天曰精靈鬼神者、我曰情慾意智。是以其用之絪縕給資、性之保持立役。以聲求之。則雖若混焉。而以態察之。則天人異也既已異。態則其技何又同焉。萬物之釀於絪縕之間生者、天之營也。育者、與之養也。天地絪縕成水成火。雖水火隔天地。而同立其地、同居其天。水育於食火、火育於食水。動植又釀其間。散爲萬品。又資用於天地水火。故自人之境言之。其寓斯世也。資之於無意之天、成之於有意之物。立地、居天。液於水、煦於燥。與並立者相依爲與。是以神活於保運化持、氣交於聲色臭味。物立於配嗣器地、質依於飲哺便溺。保者、資天之所給。自外衛護內也。運者、依與之所通。自內營養外也。故物之始生。目未辨色、耳未辨聲、噓噏直通乳哺。從辨噓噏未足、外以羽毛鱗甲而保、乳哺未足假他艸木鳥獸而養人者。長乎神氣。而不足乎本氣。以神氣之有餘、補本氣之不足。飲啄之養、待水火之調。而食、羽毛之防、假布帛

之工而補。尚猶不足。爲宮室。營城郭。爲醫藥。用鍼焫。夫物之剖析而散也。散則盡變。故謂之植。則一、就植析之。則無不有之形、謂之動。則一。就動析之。則無不有之物。故人之以有意恃長於天地間。亦萬變中之一態。以其意技能自貴於天地間。非天之私人也。雖非天之私人。而以所資於天之意技能得自貴於天地間。故其稟也雌于本氣、雄于神。氣能取其雄、以補其雌。故服御之用廣、調和之求冗。於是。墾地取穀。煮海取鹽。艸木土石、見則取以材之。其不當材者、用之於糞壤。鳥獸魚鼈遇則殺而啗之。其不可啗者。當之於服飾。竟恃其力取天地以爲己之有。夫人開己之境。以己爲貴。終以其智以窺天。不知人之身、萬物中之一物、而其意、萬神中之一神。以爲天獨私人。蓋人技、雖巧亦惟巧於人之所巧。人意、雖長亦惟長於人之所長。方諸其所並

立。互有工拙通塞。若傍觀之。惡視拙。群才而跳出。夫無意之爲境。廼清淨之府。以其無意。不以畜善惡愛憎。以其清淨。不以用聲臭配匾。天人之反也。不反不合。不合。則天知支離焉。觀死生。而不融天地。觀無意。而不反有意。不自造化中觀己。自己觀造化。魚躍不出水。養賊逐其子。夫人者。資生於濁穢。成物於鱗比。依養於並立之與。則不能不求聲色臭味配匾器地。以多智多技。遭於用廣求冗。遇物無所不殺。則其嗜殺也、熾於虎狼。修飾以掩垢穢。則其不淨也。甚於鳥獸。而妄惑之念。亦莫甚於人。夫屠廝膾醢。魚腸與狗之逐臭。鳥之貧穢奚擇焉。故人物各開其境。則其美醜亦各從其愛憎。故思想技巧之運、比之於無爲之巧。則惟觀其頒、羽毛骨角之美。納之於清淨之府。則唯觀其穢而已。是以。人之開境。以其思慮知辨。愛憎欲惡。施其技。故人者。

以有通物之智。終有不通之智。以決事之斷。還抱不斷之惑。好沾沾之窺窬。罔反合之達。觀欲有所求、智有所勞、樊鳥檻獸。調味文服營之於己而不足。亦求之於類。有力執無力。驅使鞭笞使之稼。而食其粹。使之織。而衣其精。食其粹、衣其精者、則爲君。食其糲、衣其麁者。則爲民。於是有力不能自衣食。恃奉於民。無力不能自守禦。依保於君。君民通工。相共奉保。以迭執其役焉。故民職奉其君。君職保其民。而民格于君而不倦。君取于民而不已。下者則誅。上者則移。故天人者以反合一。夫反之爲態。沒于彼者、露于此。隱于此者。見于彼。雖資之於一、而反于二。是故。如悅怨于善惡、分辨于是非。惟意之所有。而天不與也。是故。天之神爲人之意作。其態固反焉。惟其資也有應。故天有卑高、人資爲尊卑之態。天有親疏。人亦爲親疏之態。蓋水火者。兄弟也、

人觀以爲親。水魚者。疏屬也、人觀以爲疏。蓋人之倫。約之則親疏尊卑也。夫婦則自疏來親。兄弟則自親之疏。自親以上、自我爲尊。自子以下、自我爲卑。推家於國、則君民即父子。推己於物。則萬物皆同胞。是故。人性自有奉戴臨御之意。觀夫造化感應之爲、以建神道、以感始思本之心。以設祭祀。以是之故。人能尊天卑地。噫。高下、天也、尊卑、人也。天不爲人之仰之。而尊、地不爲人之臨之而卑。且姑就天地之體言之乎。夫奉所戴、臨所履、人之態也。而人能戴天履地。則尊卑自我定焉。故樞紐守極。衆象共之。於是乎。可擬帝所與地之受穢濁居至卑懸隔。若自全天地觀之。則人物則立而履地。天象則循而拱地。雖人尊極辰。亦惟中之兩端。然則地物戴天。天象奉中。中外未定高卑。如何果定尊卑。如惟索其鬼神造化。天地無所不有焉。此故。天神非尊

卑之所囿。人囿於天神。以囿而有用。敬仰於此。人環居彈丸之地。畫洲壤。各爲其國。各設其君臣。各製其衣冠。意匠之所營。其用則一。而其巧變化。是故。其天神奉戴之意則同一。天神奉戴之設則各異。泥塑木偶。以人建體也。鐘鼓犧牲。以人饗之也。賞善罰惡。以人望之也。宮室几筵。以人安之也。天德之洪蕩。無意于眷我。則亦無意于棄我。惟天道之不揜。經不矣。一須臾則緯亦。不遺一秋毫。不以明爲著。不以冥爲晦。嚴於自上臨。察於自傍觀。使其微顯。使其長消。惟誠之所在。故天德未有所私。天道未有所揜。天神于天地者。不寓於像形。不食於祭祀。不用善惡黜陟。不揜明暗幽明。物物並立。神神相交。往來酬醋。感應見鬼神。鬼神之態。向焉。背焉。順焉。逆焉。有焉。無焉。存焉。亡焉。以意索之。能遊意外。以常求之。不居常中。人。有如此思辨。行如此技巧。

以此思辨技巧。索遊于意外。不居常中者。惑于其不測。而不可得。竟提人而漸。漸而不已。執私僞。談公誠。知解愈巧。蠱惑益深。通之以人。

小物之大分。迺一動一植也。於是。植之無意。有異于天。動之有意。不同于人。人之於天地。有其所有。行其所行。其有。即有意之私。其行。即有作之僞。以我之所有。望我之所無於天。於是觀無意之公。不揜之誠。於天。是蓋以以人望天。故得公誠於天。苟不以人望天。則併公誠而失。故雖公誠則非人。而以人食天也。是以。不知人。則不知天。不知天。則不知人。雖諸動營營。同用意智情慾。而我則以我之愛憎欲惡。用其知解分辨。以施其技巧。人之性。多求於外。運情慾於愛憎欲惡。愛。則護而望其長。憎則厭而願其消。技守禦於思慮知辨。愛憎動於辨。安危運于慮。於是群醜連結。勢動搖萬

里與彼鳥獸之各各行其喜怒愛惜異也。且我以長于神、薄于本而水火土石艸木鳥獸。其求甚廣。無意無所禁、有意恣取有故勢之所走。不得不建國於君臣、成家於夫婦分尊卑於父子、講交際於師友。如彼鳥獸因乳唯知所生、辭乳則忘同胞人。則有知而辭之者、有思而慮之者。於是親昵內、疏疏會外。於是群醜忘其思辨、各恣其情慾。相奪相食。多知多求。勢不得不然。則不能不教方以矜式之也。蓋人心思、則有不以自安忍苦佗、感則有不以苟生易其辱悅、則欲奉戴之、惡則欲消滅之。是乃物之所無、而人之所有也。人以此性、由此勢、以此心用此智。假令其國不同、境域不通、舟楫有人而不具人之意、則不知焉。若有具其意、何往無此設焉。雖此設則有焉。人以窺窬之通惑、用技巧之異。教不一同。爭月於所指之地、雖教不一同、爭月於所

指之地而爲各恣其情慾、相奪相食設之則一也。舉小事例之、如衣服飲食、雖從方異其製、以地異其調、爲饑寒設之則一也。已。人不察由窺窬之通惑。推己觀天智解不一技巧不能同之。故規規吠於不同於己我亦猶居其中也。是故觀於天地者不執所慣、疑所不慣、不黨所習、驚所不習、表諸天地而可依者。以修自安、以治安人。是故親疏尊卑之倫、可達之於天下、士農工賈之利、可通之於四海。善惡自天來、是非以智分。故人之處世、勢不得不有事于此。修善除惡、去非就是、合符於悅怨榮辱。姑言之於農、苗之爲養、莠之爲害、天地同有之苗則愛之、莠則惡之、人獨持之愛惡生奉藥之態、奉養藥除、設施有當否。設施苟不得其當、則事與情乖馳。是故親相愛、疏相敬、通天下之情也、善則賞、惡則懲、通天下之義也。是以思與衆安者、得所思而

思者也、行與衆利者、得所行而行者也。蓋地之生艸木、形性千萬。可以爲柱梁、可以爲椽桷、可以葺屋、可以織席、可以禦饑寒、可以醫痛痒、不齊之能也。一之散相千萬、人之成才亦同。在其中、則孰得而一之。以不一能濟天下之用、是故天下之道、盡於愛敬、天下之樂歸於安利。學者所以知之者也。禮者所以行之者也。義者其宜也。仁者其安也。君者以此御衆者也。臣者以此輔君者也。衆庶者以此處世者也。非爭善惡之自天、與不自天也。苟不用此則衆情不適。天下鼎沸。是故天下之思行、善惡是非、而散之、則其情千萬。噫善而情適、是而智感、而奚又或惡、或非。蓋思慮之念、自他反用、是非之途、智愚不一也。是以惡便于自處、非可于自辨。雖自便而不適於衆情、雖自可而致憾於衆智。以不適而自適、以致憾而自是、終陷其私。是故善是則天下

奉戴、惡非則四海厭棄。至若夫各性運才、各智異技、是乃天下之所濟用、而達者不望好尙之一於衆。將欲保而持之、疏而通之而已。蓋生物之態、美材鮮少、而散材衆多。聰明難得、而聾瞽成群。故愚象哲孤、擧世之通態、自利遺他、彼我之通病。是故爲天下立教設道、正其倫、生其材、自安利人。各好不害同。各才交濟用。若是而已。是故褒賞通達、惟其榮利、鞭笞刀鋸、皆其鍼焫。若欲置之立教開道、非高明幽玄、則適愚應惑者、非安衆者之用焉。又彼欲安衆者、不知疏通保養、欲使夫人齊好尙、不過病人。不見女子之爲粧乎。髮以膏澤其黑、面以粉增其白、脣臙脂以添其紅。小事可以說大事。故人道不戕賊其性、以爲之器、於是種稻於水、播禾於陸、善熟其性、以養其物、是故志業立於自佗之安利者之爲尙焉。自安孰妨。至安他則有時有命。

有勢有才。有不獲于此。退而自善。思不出位。謹守其分。時有可否。命不可如何。勢不可爭。才有得于天。然則或能或不能。苟得其道。良民於天則一也。是故。或有樂天命而韜晦其光者。或有融智於天地形骸相忘者。自是而下。則紛若非所盡也。今居紛若之各態。尤不同於己者。得無與狗之尤人同哉。且以人觀天。天者公誠。而人者私僞。離有意無善惡是非。則其善惡是非。乃私僞中之事。法之於天。則以成其公。以成其誠。雖然。天則無意而爲。無爲而成。人則有意而作。有爲而不成。是以。天自有天境。人自有境。人已開人之境。亦自有人之義。人已開人境。又與天地張勢。事亦何與天一焉。是以。人以其智巧。勝萬物而直上。於是天地亦爲己之有。則人食天地。天地翻在人中。是故。以天地觀之。虎狼之食人。與人之寢處虎狼。豬鹿之侵稼。與人之奪豬鹿之居奚擇。唯人開其境。取天地爲我之有。於是虎狼豬鹿可嫉。牛羊鷄犬可愛。若使牛羊雞犬具人之意。彼之觀人。豈謂異於人之於虎狼豬鹿哉。是故。執所慣。黨所習。未可謂達也。是以。人之開人之境。以乏於本氣。資用於水火土木。水火土木。而不足。資之於鳥獸魚鼈。天以公。而無意于惡之。無意于愛之。人以私。而有意于愛之。有意于惡之。人塞于私己。故潔我所好。穢我所厭。恕于物之慘。恕于人之慘。自己之境而然也。勢也。故人開人境。取萬物。以爲己之有。不能不殺物通用。故殺害之中。建義論道。人之事也。非天也。蓋以人知天。不反則不得以人知人。不推則不得反比之分也。苟思不至此。將罔於天。而誤人之義焉。以不切人事。爲人事之急。噫人而切於人外。彜倫而何。明巧乎進照。拙乎反照。情便乎自恕。刻乎律人。故辱燭乎背。禍巢乎睫。感始思

本、人之本心。

蓋人之驅萬物、以役使之、以智技之巧之勝也。蓋智巧之勝物、以思辨之運、有抱睿明也。思行鬼神、而情抱適否、事運絪縕、而辨有當否、夫物靡不有始、靡不有本。已有思辨之明、愛敬運于酬醋、則靄然以感其始、思其本焉。是乃人心所以秪肅于天神、眷戀于君父、不隔幽明、以奉事不肯畔者也。惟利害之心、安危之慮、務得憂失、順忤激縱、終有畔之焉。反明曰幽、反生曰死、非人稱天、非生稱鬼、自古之定言也。反人而其天可知、則反明而其鬼可窺。蓋一大地球、舟楫之所深。大壤二、小壤不知數焉。其爲國也亦衆。歷視其萬國、雖智技之巧弗同、無不設神道者。則感始思本、靄然之情、同者可見也。而其所謂神者、或神也、或天也、或鬼也、或妖也。惑者由惑有之、達者由達有之。是故人之死生、一氣之通結、則隔焉、解則融焉。與天地生化、無痕之可著。天成誠、神爲妙。誠妙不用意、能爲能成。雖彼不用眷念、我則感始思本、雖彼不有德之、我則感恩思報、愛敬于君父、祭奠于鬼神、其事一也。是故人有感而思、則將報而謝、於是死生之間、蘋蘩鐘鼓、車馬玉帛、貧苦棄材、患難獻身、如反之則呪咀毒殺、皆不外于此也。是故人苟亡感始思本者、則何處事父奉君、何適尊天敬神。天覆我、日照我、地載我、水液我、外而山川雨露、內而功業恩德、奚得我不從而奉焉。是故神道之設、人道之義厚矣、至矣。人而亡感始思本者、奚以爲人。明孤愚衆者、天下之通態也。觀夫積者發于誠、禍福動于感應、駭其酬醋之態、棄財賊身、求媚致瀆、衆愚痼此、殆不可醫。誠積則冥加照然、意無則吉凶參差、瞽而視之、聾而聽之宜哉。其矇朧是故、我則過其祀、欽其公誠、奚將意技之巧拙、

與衆人鬭爲焉哉。

惡禍羞辱人之良智。不忍敢之惟義之察。故不矢規矩。則其履正。不慕榮利。則其操高。莫賤於乞。莫辱於偸。莫暴於奪。莫慘於殺。四莫之醜。有時敢之。惟出于不得已矣。故志以操而立。行以勢而定。操成剛毅。行權時勢。蓋衆情者。溺乎所愛。淫乎所好。憚乎所敬。怠乎所逸。見利而爭。見害而避。智有蒙此。則當交尤人。當御自躓。鬼神之出沒。惟是感應。揮之上絃誦。驅之趨水火。鼓舞之妙也。火焚水流。鳥飛魚潜。天地無所不容。而莫所亂其序。故立道於險隘。雖如可觀。病于濟衆。故君師母以各好尚。率衆。終害大同。天地生物。資用於此。爲無益。害有益。背造化之德。故其善惡。則天地之善惡。其是非。則天地之是非。故開其道。結其黨。率其徒。餬其業。大人保而不與。是故。君子。順天奉誠。居仁由命。

人與物。同抱喜怒愛惜之情。而物無戒令教訓而立。人待戒令教訓而治者。何哉。蓋思辨之巧。鼓舞之妙。物不有之。而惟人有之。以惟人有之。能挾離合之勢。已挾離合之勢。不合則壞亂至焉。故君子者。不能不爲世憂。不能不爲不肖教。人境一開。上奉一。而掌其平。下御一。而執其役。勢之所至也。勢則至焉。而人之智解意匠。則不一。不一則雖爲世憂。爲不肖教。則一也。其設或異趣。是亦事之態也。勢之所至也。蓋人之爲群。抱喜怒愛惜。挾離合之勢。則勢不得不使上奉一。而掌其平。下御一。而執其役。若剖而散也。千萬不盡。故其憂而教人。一君一臣。以教以賞。以戒以殺。若悉其事。孰能極其終。是故。其上者。父母于赤子。其下者。手足于身首。已爲身首。爲手足。口之所食。目之所視。痛癢饑寒。百役莫所不執。而亦莫所不祇其命。已爲衆人。爲父母兒之所可生養者。所可防禦者。吉凶驩虞。百事

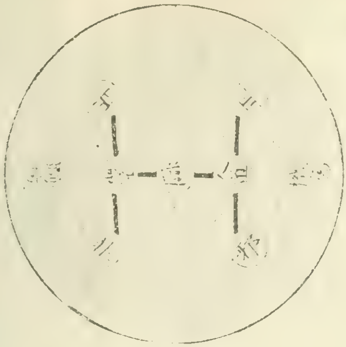
莫所不慮、而亦莫所不敬其事。故下者養上、而掌我乎於此、上者御下、而恃其養於此。於是其君者、位尊于上、臣者位卑于下、而尊卑之道、人人知之。雖人人已知之、其於天人之分。世稱、稱識者、猶罔于其分。其分如何。盇人境自有用于尊卑、上尊下卑。天境本無意于尊卑。交執其役。苟愚而思不及天境、自傲君位、凌虐暴掠、終失其尊、罔而義不明人境。不供下職、怨望悖逆、禍延子孫。是故。君以安民爲職、臣以奉君爲義、而四民相君之職、而息其蔭者也。故君師本一道。君能執其柄、師能明其義。苟君舍其柄、師亂其義。毒流無窮焉。此故。智未通天、行未適人、規規執法度相鬩。弗足稱達者也。蓋生而或爲上、或爲下、各有分也、或任事、或處閑。各有地焉。何擾擾癈其守哉。非敢癈其守。惟誘人於善者、不可已焉。彼爲世憂。爲不肯敎者。將與他樂此樂。

有食推之、有衣解之。豈有此樂而可不與人偕哉。自古仁者之心同然。雖然、誘善之意、不可已。而事之態勢之所至、不能同執而騁道上口舌。聚訟騷然。終爲敵讎。蓋人之將證眞。必引天爲證。然而天人之道反。以反證類。雖其居一中者不異而反類者。豈得不誤哉。蓋人之知人、其術貴推擴、而不舍其反。人之知天、其術貴反觀、而不舍其比。而不若爲惟推擴之務。終自以爲極天悉地。入幽鉤玄。然天地洪蕩、其向者任向、其背者從背。雖我不憚容此。若言之順天應人、則末也。今之習學者。從其主守其門、與從彼主守彼門者。各率其徒、相其爭于巷。使傍觀者、終不知所歸。噫人。七尺之身、百年之生、眇立斯世。其傷日月之逾邁、感江山之依稀、惜生之情也、往思其化之所窮、終索其神之所托、持生之疑也。推之於經者如此、推之於緯亦又若此。執其情

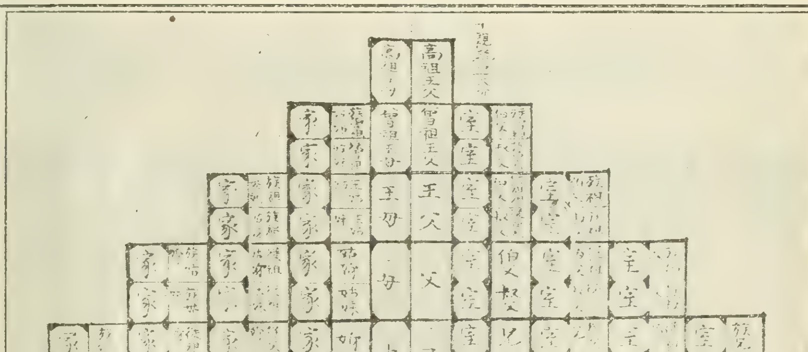
疑。自生智解。獲其心之所安。擴之於天地。其所師者心。持人索天。天遼遠矣。因循薰蒸。往而弗復。苟非膠固執泥。則鋤口于此也

盡道於人。待命於天。

人道天命圖



親疏尊卑圖



天命

自天言之、則爲者氣也、成者天也、自人言之。則致者我也、至者彼也、我者、善惡機焉、彼者、吉凶事矣。我者、可如之何也、彼者、不可如之何也、可如之何則人、不可如之何則天、人中之天人也。死生通塞者、自天、殺活予奪者、自人、自天者、氣爲天成、自人者、我致彼至、爲成致至。來而當者時、處而遇者地、自來當而觀之、則無非天者、自處遇而觀之、則無非命者。故天當其時、夏矣、冬矣、古矣、今矣、物遇其時、榮矣。枯矣、生矣、化矣、故時來而當焉、人往而遇矣、彼來而當焉、我往而遇矣、自當曰天、自遇曰命。

統而言之、則人亦天也、天亦氣也、分而言之、則天分天神、人分彼我。故謂之天者、以有意、任無意也、謂之命者、以有作受有爲也、惟能知其無意、是以委之於天、惟能知其成是、以安其地、自有意而謂遇、自受而謂命、惟能知其有意、故不求其同于己、惟能知其受、是以不詭遇其外、已往不可諫、來者猶可追。安于當者、愼于遇者。

故天人同氣、則爲同矣、反意、則態異矣、於是爲作分焉。是以。來者當、往者遇、則爲成致至。參差錯綜。如市人之相面然。來也、發于機、往也、成于跡。機者、可陰、可陽、可天、可地、可修、可荒、可活、可殺、弗知所由而來、弗測所觸而變、跡者、陰也、陽也、天也、地也、修也、荒也、殺也、活也、成于所變、不揜所觸。

機其射乎。意未觸。則殺活相忌。觸則殺活成跡、是故。機觸則有跡。有跡。則可窺。是以機觸跡成、對待分矣。對待既分、柔非剛、剛非柔。惟其一也。轉天不已、持地不息、不蔽目之明、不隔耳之聰、寒暑相通、升降不碍不剛不柔、非不剛柔矣。或曰。火生於無而有。自有而歸無。如斯若何。曰。無則非火、有則非無、燃則非暗、滅則非明。跡則二也、爲

跡者非二。

是故。來則靡不當焉、往則靡不遇矣。遇吉曰福、遇凶曰禍。不遇吉則遇凶、不遇凶則遇吉。勢難持平。力難兩全。勢力不同。而時機之變難預焉。

以弧矢喩之。弧矢者。物也。弛張者。事也。不得不弛張者。勢也。勝弛張者。力也。可以弛張。不可以弛張者。時也。可以弛張。不以弛張者。機也。是故。機之由觸而時者。哲者不能預之。是時變之所以無窮也。事之隨勢而赴者。庸人必察。理事是之所以無二也。時機不可知。事勢不可如何。故權時而動。見機而作者。不辱其身。隨勢上下。臨事揣摩者。將辱其身。故哲者。愼機。有力者回機。是故。姦邪暴虐。擧衆反目。而不能使之窮。溫厚慈愛。擧世注目。而不能使之達。苦節人以愛之。衞生自以護之。而不能使之壽。悖德世以厭之。縱慾自以棄之。而不能使之夭。故。無意于其事。而能爲其事者。氣也。無意于其事。而其事成者。天也。愛則奉之。惡則棄之。思惟謀慮。以爲殺活予奪者。乃人也。然而殺活予奪。自我者。可養也。可愼也。故修之。自彼者。難養焉。難愼焉。故俟之。是以。修荒不在天矣。以志行言之。禍福不在己矣。以天命言之。機觸而勢走。力持而跡成。故。觸者不可測。走者不可回。持者不可爭。定者不可變。

譬如暗取棊子以擲之。奇偶參差。或奇或否于我之所欲。不得不奇偶者。勢也。奇偶之者。力也。發奇發偶者。機也。奇偶成而不捨。跡已定矣。然而欲奇欲偶者。人之私也。奇偶非爲己之欲而來。非違己之所欲而不來。其然者。與己之所求者有會。有違。是所以時之不可避。命之可遁也。惟以天爲徒。然。故侮無意。不信誠。其弊也放。惟觀神爲有意。故役於鬼神。陷於因果。問之於數。委之於前定。其弊也愚。

弘兵多寡言寡觀陸福之人以時有多窮故不可窮命之正非也か漢火屬云ゝ最負人理者而犯之蓋寡

善惡有歸者、誠也、治亂不定者、勢也。我以有意之爲、觀無意之成。成會于意之所期、則爲順、不會于意之所期則爲逆。此故遇之順逆。成于無意、分于有意。

世或意。命者。天之所賦。人人生前預定。人各負荷之而行。天者。穆然上居、以賦命於物。又能察臧否、降賞罰、於是見水火兵歳之災人。兼千萬人而一時竭者。惑之譬有二臣于茲。同奉君命於危難之際。將使東西而繫舟於港口待風。時方西風起。東舟乃發。二臣各齊懷忠各齊憂急。然而東使忠懷以伸功名以遂。西使忠懷不伸。功名不遂。風豈有意哉。遇風者有意而已。縱使東使以爲天穫已西使以爲天棄已。亦有意之窺窬耳矣。其成者、會于己之所欲、則順于我也、違于己之所欲、則逆于我也、天果預定命乎、何惡西使、何愛東使、至者命之正也、豈多寡之事哉、視水之漲而涉、視火之熾而踏、招寇而致死、不耕而餒、致者命之非也。豈多寡之事哉。下焉者、受命於上。士死顚沛之厄、民餓饑荒之歳、我不可知之何。上焉者、制命於下。其爲校牧者、不悔失策、不知發倉、拱手于可如之何、故天者、非觀監下、降賞罰者、惟有誠之不可揜焉、命者、非生前預賦之於各各、惟定當遇之事、以天人分之、則爲成者、天也、致至者、人也、自我言之至者亦成者也、惟致者而我之爲者也。

孝悌親於父兄、忠信信於君上、自修人從德、施福隨、是遇之順、事之當然、有意之所愉者也、孝悌不親於父兄、忠信不信於君上、身修人悖德、施禍結、是遇之逆、事之不當然、有意之不平者也。是故。以意分之、則有順逆、以道修之則有正非。爲者自己、成者不在我。故盡爲者、不問遇者之順逆、惟曰有命、修己而安於所遇惟曰俟命。蓋君子之於命、俟而不謀、

正而當之、小人之於命、謀而不俟、詭而遇之。故惟君子、而可以曰天曰命、小人、而未可以曰天曰命、正非之分也。

君子者、不冀遇於正履之外、小人者、謀幸於詭遇之中、蓋農之於田、種植不後時、耕耘不省力、當遇稼之多、然其多寡猶自不可必焉、若惡獲之寡、而不時種植、不力耕耘、縱有獲之而幸也、故不以穡之寡、改稼之務、之爲良農、倦稼之事、而望穡之多、之爲惰農、是以命者可俟焉、不可謀也、俟者、從容當之之謂、而非乎期之謂矣、忠信孝悌者、天之則也、我從而履之、親疏信否者、人之機也、我正而當之、謀者、詭遇而求之謂而非乎慮之謂矣、迎親信於阿順、避忌諱於足恭、不履可履、而冀幸於自外者、足恭阿順之遇於時也。必笑忠信悌孝之不容於世者、命也、遇於時者、幸也、詭遇之遇、君子不迎、正履之厄、丈夫寧避之邪。是其所以俟而不謀也。謀則不俟。不俟則詭遇、詭過則莫所不至矣。故爲者在己、而可如之何者也、故分遇於正非、成者不在我、而不可如之何者也、故從遇之順逆、譬有二人於此、其一人、餐飯而死、其一人、飲酖而不死、人雖親見之、何飯之舍、酖之飲、故不問之於不可如之何者、故寧得正而斃、而不希以不正而存、貧賤常憤憤、富貴猶快快、纔有所拂戾、則起色曰。善無利。命不足言。天無報。惡可縱。是乃正欲與天爲市也。出處忘操守、取舍致爭奪、不知禍之所伏、不顧辱之所從、頑然動、敖然無畏、是乃以天爲既休也。君子豈惡富貴、而就貧賤、厭安佚而從艱難者哉、履則而正立、來者當之、去者不追

失自者、好立危之地、失義者、好就利之所在、好立危之地者、於可如之何者、而不如之何、好就利之所在者、於不可如之何者、將如之

何縱欲忘養、蕩情忘身、見難而散、逐利而聚、得喪存亡。則雖弗同、而失正則同矣。有者、德也、發者道也。推車者豎之、織布者橫之。物之所以有則也。無意者、自隨道、有意者、使由則。由則、之謂修、棄則、之謂荒。君子未以其荒為道德。是故與道隨者、得天福、

極高者、難于立足、持滿者、易于失手。美味含毒、美器栽禍。熟察其禍機、則奚畏和鴆於玉饌、裹火於錦囊。貧富相從、貴賤相伴。富貴何必謂之天福。是故搔痒呼痛、快惟同病之人和之、羹藿亦聊足獨爽口之人愍之。苟為地所遷、為物所轉、則烏得憂樂所其憂樂焉。樂搔痒之快、憂羹藿之味。此世人之憂樂也。不福其天福、不禍其人禍朶頤富貴、引涎歡樂、蔬食藍縷、為疾苦之地、快意縱欲、為得意之地。夫名譽動人、則人必洗垢求瘢、功業蓋世、則世必墜膽畏後、雖甘而含毒、雖美而栽禍、未達其道。而毒出於饌、火發於囊、則雖悟亦既晚矣。與勢忤者、遇人禍。

君子從容間暇。不離道、不忤勢。如不得全二者、則不問勢。志士激勵憤發、不能遜守而處勢、有殺身而害義、怯者畏勢而無問邪正、利者走勢、而不問可否。

安天禍、不矜人福、君子之恬也、喜人福、不安天禍、小人之躁也。

天人機常觸、勢常走。故無人無物、無智愚、無強弱、紛若遊此中。道者、德之發、德者、道之有勢者。力之所走、力者、勢之所立。天人各然。故德雖至、而不據勢、則困、道雖正、而無力則窮。惟上者、宜據之、下者、宜從之、宜據之、而縱之、則上下之情離矣、宜從之而竊之、則上下之道亂焉。是以舍道從勢、無所用廉恥之心、離道弄勢、無所不逞縱肆之慾、厭飫于道、從容于勢、則隨處而樂、揣摩于勢、婆娑于道、則雖有樂地、不得而安。

矣。故事勢力者、不見道。修道德者、忘勢。勢以力强。故易伸於理之上。理以道明。故不屈於勢之下。爲有可否。遇有幸不幸。爲之可否、素定於事之前。遇之幸不幸、更定於事之後。爲者可預。遇者不可預。預謀過者、無意于擇可否。預擇爲者、不遑于問幸不幸。故執所遇之幸不幸之跡、不察所爲之可否之實。所毀譽是非、未得聲主之道焉。故務于有意、而任無意者、不怨天。務于有作而受有爲者、不尤人。

致者、我機也。至者、他機也。故不求諸在人之機、而愼自己之機。苟不察此機、則怨過於已。求備於人。責柔以剛。責剛以柔。是乃尤人也。人者、有意而爲。天者、無意而成。故殺活予奪之爲、死生通塞之成、參差而遇。豈怨天哉。履道、則仰而無怍。修德、則內省不疚。是乃樂天者也。

履也循則遇焉不正、履也失則遇焉不非。惟目病、則看亂花於大虛。耳病、則聽蟬噪於空。漢竅之爲病也。

福必於善人、禍必於不善人乎。否。福果不期於善人、禍果不期於不善人乎。否。蓋天人各有其所能。惟能轉天而爲人、以其有意、而喜怒愛憎、殺活予奪、是人之所能也。惟容人而成天、以其無意、而聚散往來。死生通塞、是天之所能也。憎而思其亡、愛而思其榮、縱使其事出于正、亦有意之私也。況其未全出于正乎。窺無意以有意、故惑報應。又疑其難必。無意而爲者、天也。無作而成者、誠也。往而不停者、勢也。來而當者、時也。往而不可回、當而不可避。是以轉機回勢者、人之能也。機轉勢回者、非人之所能也。是故、死生通塞者、天也。死之生之、通之塞之者、氣也。致死生通塞者、人也。今將以一定之理數報應、以論命焉。雖辨如懸河、識者不惑也。

或望有意於天。或歸禍福於理。或偏諸自使。罔於爲成之分而惑於天命之事也。愼辨天人。能分致至熟稽之於古。深量之於今。知可否。審損益察衆之所好惡。考百家之所是非。能體能忖。容廣擇審推諸事物而不謬。試諸天地而不差。權合經義適宜禮中。智通用活。應變。有於內者安。行於外者歉。

有者發。發則行。有者德也。行者道也。天德無意。道成。人德有意。道爲。人爲而不能成。天成而無爲。故君子務爲而不謀成。小人求成而不務爲。求成而爲者。多悔。爲而望成者。多尤。意統善惡。爲具邪正。宜有而有。宜行而行。而後君子之道德也。是故君子。不德人之所不同欲者。不道己之所獨者。得人之所同欲。則其德也美。由己之所獨。則其道也偏。雖有嘉穀美材。不耘耔灌培。則不成焉。故道德不修。非我之所謂道德。修者。耘耔灌培之謂也。不耘耔灌培則不長。如果可不長。則孰敢耘耔灌培。內外交修。而不偏廢。安而有之。正而行之。耘耔灌培之功大也。有觀修目爲僞者。是將甘食秕糠而荒耘耔灌培。有以修誣于聖者。將望櫲樟之參天於禾苗。有者足于己。則不務外徇物。行者循則。則不披荊棘冒岸崖。德乎。求諸天地。無所不有。尋諸毛髮。無所不得矣。道乎。放諸宇宙。無所不行。置諸埍埃。無所不發矣。天地旣不能之舍。鬼神安可外之。有物必有則。則者理故之所在。得則而德成。由則而道立。以得爲德。猶善惡之戰于心也。故成德者。在有之於己。以由爲道。猶邪正之爭于前也。故達道者在自己而行得者宜擇。由者宜審。有者宜養。行者宜愼。仁者。得而居之。義者由而行之。智者知之。能者能之。欲得之而不信教。欲由之而不求則。志則是也。所爲則非也。故得之由之。在問學。有之行之。在自達。而德莫

大於安衆、道莫大於濟物天下之成功也。夷險不一情態各異、故大道不廢小道、狹斜險巷、有所以資大德不舍小德、硜硜嘐嘐有所以用惟沾沾甘小德、規規求小道大人不爲涼德害人、故懲之、左道惑衆、故塞之、左道塞、則衆望正、故濟物之功立、涼德懲、則衆害弭、故安衆之澤成、故以之據勢者、大制作以被化於世、禮樂於是乎成、無勢任之者、能祖述以垂敎於後、法度於是乎傳、制作者、君之事也、祖述者、師之任也、志之者、志士也、爲之者、聖者也、不知損益者、不能制作、不辨小大者、不能垂敎、故不使人被雍雍之化者、君之不能也、不使人履正大之道者、師之不良也

故知天知命者、學者之務也、安命樂天者、聖者之事也、不從事於聖、難乎免矣

玄語人部

玄語

小册　物部大小

大物　並圖

小物　並圖

混物　並圖

粲物　並圖

玄語

日本　鎮西　三浦晉　安貞　著

小冊　物部大小

大物

天者精矣、時經處緯、物者麁矣、神通于經、物塞于緯、神無體焉、露體於物、物有主焉、見主於神、是以、天地物立、天神氣活、天地大也、偏立全一、一全而成焉、二偏而立焉、偏立成具、一一絪縕、絪縕化物、小散于大、剖析而散、對待、而偶雖有統、散而同爲物也、物者、天地也、天地相得、物能全焉、是以雖小者大之所含、而各全天地、同張彼此之勢、夫天地體成、象質性成、成具合偏、大物立一、神活而用、物立而體轉、保外、持運、內實止而持體、虛動而化氣、蓋地者、大物之核子、以潤濁之體、結寒而散暗、天者、一氣之本幹、以乾清之氣、聚熱而播明、明熱聚則火、解燥而能煦、暗寒散則影、結水而能滋、燥能煦焉、而能發火於其中、水能滋焉、而能解溼於其外、日月景影、旋轉乎上、水火溼燥、絪縕乎下、故物露一圓球、而地結天散、性體之物、沒露隱見、經緯之氣、運轉噓噏、火發水收、氣昇質降、其氣則鬱發達歛凝融肅舒、天之爲處者、則景影也、星辰舖象於其間、地之爲處者、則水燥也、雲雨散質於其中、天時上行、歲運下旋、日轉影追、水滋燥煦、成色者、更行晝夜、爲氣者、代爲冬夏、地坳突而列水陸、氣動止而爲風恬、奉端於南北、而定地之兩極、環線於東西、而分地之中界、然後物與我、能遊其中也、故天者、淸淨之府、地者穢濁之藏、而其穢濁之中、分處於水陸、水者居地、陸者居天、天中、氣守則恬、雲雨路玆、氣旋則風、陰晴任玆、

同是一氣也、動則麁能橫旋、靜則精能竪立、風恬之所以成也、靜則能竪立、故昇降同容而任行於物、雲從之而升、雨從之而

降、昇不礙降、以觀恬之精、麁則能橫、旋故縱橫相拒、而靡物於己、或牽雲雨而縱、或牽雲雨而橫、縱不容橫、以觀風之麁、地者資天、故天之有者、地能有之、天者與地並立、故一之有者、一能反之、是故持之於風恬、猶天之於轉持、是以。其大天天者、小于地也、大于地者、小于天也、天者、動之分也、故動大于天也、地者靜之分也、故恬大于地也、雖有大小、亦各有之。故氣動於持中而爲風、比之於天之轉則微、質止於持中而爲恬、比之於天之極則大、動靜者虛實之所爲用。氣體各由之、夫持中之事、風恬猶轉持、雲雨猶日月、天不容質、乾燥爲性、故象熱而乾燥、轉冷而乾燥、地不主象、潤溼結物、故質冷而潤溼、持溫而潤溼、是以。月雖似水、而異於地、水之潤溼、火雖似日而異於天、日之乾燥、故堅氣溫潤、昇雲降雨、其氣濁矣、橫氣冷燥、招陰致晴、其氣清矣。是故植者止質、故其氣冷矣、枯則溫焉、動者動質、故其氣溫矣、死則冷矣

持中體止則陸燥、生之居、體動則水、水生之居

雨水積爲海、土石積爲山、此故在海醸鹹者、水底之氣、在陸化液者、地面之氣、化液而疏氣者、陸中之水、積流而鬱氣者、海中之水

水陸之生謂之動植、夫日月星辰之常、持其體、雲雨動植之每換其體、精麁使然也

日影布明暗、水燥布乾潤、天物以明暗爲其處而居、地物以乾潤爲其處而居、明、景也、暗、影也、潤、水也、乾、燥也、而乾者之天、暗者歸地、景影分氣於陰陽、故星辰亦分陰陽、水燥分性於陰陽、故雲雨亦分陰陽、故天者、乾燥光明之處、雖明暗相分、而天懸者、以虛動而乾燥光明也、地者潤溼暗澹之處、雖乾潤相分、而地著者、以實重而潤

溼暗澹也、天物者、常持一體、以循環、爲其期、地物者、每換其體、以鱗比、爲其期、辰者、陰物也、居景中、而順逆之行參差、星者、陽物也、居影中、而順逆之行整齊、陸生者、陰物也、居天中、而能沈重、水生者陽物也、居地中、而能輕浮、

同居物於解結塞中、同行氣於生化通中、精常持其體、則古猶今焉、麁每換其體、則今非古也、天地者、大物也、萬物者小物也、雖大小有分、而同是物也、同是物也、則同從其經之牽、同居其緯之容、謂之有於一也、大物以成具、而成于經緯之中、成具、絪縕、小物化生故小者、大之所有也、彼者此之所偶也、故小之於大、資而成焉、此之於彼、依而立焉、小之所資、廼大之所給、彼之所依、廼此之所通、於是、成者足於我、立者敵於彼、蓋成者不徒成、得其具而成、立者不獨立、依其與而立、成者全矣、二足乎己、立者偏矣、一待乎佗、故、立則彼此相持而一依一焉、成則大小並分、而各成一焉、是以、萬物有萬天地、各與大物張勢、彼此相持、而更贍其不足、是以、各散天地、在一有之中、亦能爲萬不同也、故、自其大、剖析而觀其小、自其麁、尋繹而察其精、比之反之、以觀髣髴、是以、小亦各發一有、而有其德、發其道、居其天、成其物、日影通具、從彼衰衰、而剋其節序、此則並衰衰與節序、爲此之時、就之而始生、不及而便化、天地塞具、依彼块块、而而鋪方位、此則並块块與方位、爲此之處、所立而得地、所居而得天、物、則神沒體、而見其氣之神、物露體、而隱其氣之本、於是、神、則天神、物則天地神爲之、天成之、天沒之、地露之、大則素有之、小則資有之、成則大小有氣物、而其勢相張、立則彼此反一一、而其勢相敵、資則有於大者、皆有於小、依則見於彼者、皆隱於此、

大物、則自爲中而立、自爲外而居、小物、則

依立中之地而立、得居外之天而居、大物則自爲理而成形、自爲氣而成物、小物則爲其所理而布形、爲其所氣而成物。是乃小資諸大而自有之也。大之立也無假于佗、小之立也有相依矣。大則一中具天地陰陽、而以絪縕、小則絪縕於天地陰陽、而以成一。水由地而止、火以天而存、植無質之著則不生、動無食之養則不存。是小之所以依佗而立也。大能具天地陰陽、小亦具天地陰陽。大能具本根華實、小亦具本根華實。大分偏於小、而小不異于大。是物之所以各自成一也。

於是資於乾潤土石、而有氣液骨肉、資於神靈感運、而有心性爲技。雌雄陰陽、身生天地、保運化持。噓喩吐納。資而成焉、反而立焉。天以精而淸淨爲府、地以麁而穢濁爲藏。然而時通處塞之天地、淸而淸焉。象循質隔之天地、淸而濁矣。日照影蔽、燥煦水滋之中、濁而淨焉。熱蒸潤釀、象起質滅之中、濁而穢焉。故濁中。大境則色聲氣性、始而濁焉、小境則彩聲氣性、漸而穢焉。

精界未有彩聲氣性之可窺焉。氣麁而後彩聲氣性有焉。麁中分淨穢、而大界爲淨、小界爲穢。淨爲色聲氣性、穢爲彩聲臭味。淨中則充定常之氣、穢中則充變化之氣。蓋天有淸濁之素、以爲通隔、象有明暗之色、以爲照蔽。於是物由隔而呈彩、由通而受彩。照而見其呈彩、蔽而隱其呈彩。天地爲動止。動者行淸虛、止者居濁實。未嘗相軋。持中氣質相搏。未軋則已。若軋而激則發聲。寒乾氣淡、潤熱氣濃。潤熱之相釀薰則離其質、畜則著其質。著者爲性、離者爲氣。以於天成、謂之氣性、以於人覺、謂之臭味。彩者持物之氣、隔而呈己也。聲者持質之氣。軋而發己也。故物持則必呈彩。是以天地日影、亦各持其物、則有黑白淸濁。惟

彼爲定常、此爲變化、濃中有精麁、所以有彩色之辨也。聲比色、則爲麁小。故彩者、物之所持、莫所不有、聲者、氣之所摶、與質軋而激、故天地水火。金石動植。無所不持、則莫所不呈彩、有所不軋、則有所不發聲、潤熱質中相醸。之爲氣性、氣爲陽所發、性爲陰所畜、故。聲離物、彩依物、氣離質、性畜質、各有精麁之分、彩聲氣性、於物各有。彩自黑白散、聲自清濁散、氣自淨穢散、性自濃淡散、熱蒸潤醸、象起質滅之地。比諸清淨、以知穢濁、散小醸其間、而彩聲氣性、散而無統也。人之知覺、彩以目而通、聲以耳而通、氣以鼻而通、於人曰臭、性以舌而通、於人曰味、何則雖不假耳目、而彩聲則自持其名、若不假鼻舌、則氣性不可爲臭味、故海魚不可入水、河魚不可居海、酸和紅、香逐穢、

蓋清濁者。精麁之分也。氣者精焉、故清、質者麁焉、故濁、清則無痕于其氣、濁則有跡于其氣、是故。持中。機體沒露之間、物以實而隔、以動而軋、水火絪縕之中、氣以蒸而薰、以醸而畜、故氣清則通焉、其濁而隔也、彩之所成也、機精則闐焉、其麁氣而觸也、聲之所成也、氣不蒸則恬、蒸則薰焉、性不醸則澹、醸則畜焉、氣性之所以成也、是故。精麁絪縕。爲通隔闐觸恬醸澹畜、通闐恬澹、混焉無痕、隔觸薰畜、粲立、立彩聲氣性、是境之所以分清濁也、是以清則立天機氣物、濁則醸彩聲氣性、蓋動之爲物、開鼻通天氣、開口通地質、鼻神覺其氣、舌神覺其性、在物氣性者。就我之覺而爲臭味、只同一物。由主客異其名焉、天機氣物。醸出彩聲氣性、能給動物、動物開耳目鼻舌、運用於視聽聞味、是以雖乃大境之鎖者。而於小境則爲最要、蓋氣體者清、物體者濁、濁隔之小、各自呈其彩、活機者動、立體者靜、動摶之小、各自軋其聲、而乾寒爲淨、潤熱爲穢、

煦氣有蒸滋性有釀蒸釀異方。酒醴酢醪不同矣滋液津津各畜其性。煦熱蒸蒸各起其氣。

大則無不充、小則有所不充。故色則莫所不有、而彩則偏著其物、成于濁、而不成于清也。動則莫所不有。而聲則偏依其物。激于軋、而不激于動也。臭起于熱味、成于潤、彩無于清、聲無于閴。氣恬於香臭發之外性淡於苦甘之外。然持中之物。其本資天之天機氣物。以爲此彩聲氣性也。蓋精則不露生化之跡。引壽於悠久。故清淨也。麁則露生化之跡。換體於旦夕。故穢濁也。噫不入清淨之府。則烏辨穢濁之物。

以上與老。分新陳。以新與敗。分鮮腐者。是穢濁中淨穢之分也。而精清引壽於悠遠者。則未知之也。

生者必長、滅者先老。將長者、色澤鮮膩、順之則其聲朗洞。將滅者、色彩枯澹。逆之則其聲湮鬱。其於臭味亦然。然而人者與萬物並立。故好惡有與物反焉。故以人斷彩聲臭味者。可于人之彩聲臭味也。故雀矢龍涎可于人鼻、而人屎壞肉。適于狗口。

且大物之在宇宙。一反一比。得偶而居、沒體露體。得繼而從。而天氣之運。幹轉日月。地氣之爲。經營事物。偶繼物也。分經緯運爲氣也。分天地。而小物依此氣物之分。

反則以物偶氣。比則類類相偶。沒體者、則自將而來、向既而去。露體者、則自既而來。向將而去。氣運而幹轉日月。氣爲而經營事物。大則以地偶天。小則植偶華實、動偶牝牡。大則以今繼古。小則植繼子苗、動繼子母。大則轉氣持質。小則植以幹而持、動以足而行。大則天運神爲。小則植營爲沒跡、動意技營爲。

常持一體者、無成壞于體。日月山海皆然。先後換體者。有成壞于體。雲雨動植同然。自麁

觀之常體者、不生化、換體者、而始生化、自精觀之同一生化。不過沒露異跡焉。是故。宇宙衰衰。覆載攸攸。雲雨倏忽。動植斯須。亦非異途也。故。雲雷雨雪。或聚或散。未及在天者之精。艸木鳥獸。或結或解。未及爲地者之實。大物無窮小物有窮。經緯同然。是以。物之將結也、氣勃乎興、其將盡也。體頹乎壞。故上而雲雷雨雪、資物於水燥、下而草木鳥獸資物於土石。明暗分天地於上、水土分天地於下。天地愈分、生物愈蕃。艸木鳥獸、燥居、魚龍藻樹。水居。夫動植之有天地、物氣液骨肉、神神靈感運、依偶繼運爲用、彩聲臭味、植沒有意之文、動露有意之文、其同質實之地、其爲物也同、隔水燥之居、其成生也異。故。毛羽生氣中、而活于氣、雖飲水、而死于水、鱗倮生水中、而活于水、雖喩氣、而死于氣、噓噏吐納、飛走游潛、跡反理一也。雖理一也、物則相隔。有所資而竝立也。

不變則不常、不常則不變、明往暗來、寒謝暑至。常者能變、變者能常、自變者而推之、則皆變、自常者而推之則皆常、惟常往者、則來者變也、常來者、則往者變也。魚之潛水、鳥之翔天、一常則一變也。故植下本上末、動上本下末、跡則雖反、而名則有所資故反則分一、同則合異。

成天地者一、成于天地者各、一者有此、各者立此、大之所有、則小之所資、各之所立、則一之所成。故大物有萬物、萬物異大物。

成天地者一、成于天地者各。故機體象質、聲色氣性、天地之成具也、氣液骨肉、心性爲枝、人之成具也。成具者闕一則有不成于其物、有成于天地者。譬如鳥與獸、如松與竹、雖闕彼。而於此已成。故彼我各成其天地以遊大物中、彼此異生、故其物也立、彼此交接、故其事也活。

夫人者。萬物中之一物、各氣中之一氣、是以

天地竪物。與我並立、與我並行。立若天地、活若天神。故其體則歧然、交氣於彩聲氣性、接質於纖偶運爲、其神則渟乎運本於保運化持、爲神於情慾意智、局於眇眇之體、囿於耿耿之智。於是乎病於意者。巧於索、拙於得、精於度、跪於通。是故以意索物、索而不得則疑。以智度事、度而不通則惑。失得有亡累之憂悲苦歎擾之隔、於有已、塞於有意、不以小物置大物、不以有意任神、爲終于窺竅以觀天地。耳幽明、氣也、有無、物也、尋幽明於物、繹有無於氣、遠矣、求幽明於氣、繹有無於物、通有意於無意、體無意於有意、則無住而不通也。已寓生於此。然而不知所由而來、不測所住而變寄眇眇於須臾、欲窮耿耿於攸久。不嘗其死後之不可知、生前亦無知之何。不嘗生前死後爲然、此生亦不可知也、蓋此之爲生。已有其寓、亦智其知、其有則實其有也、其智則實其智也、不知。素有、而今

亦有之乎、素知而今亦知之乎、今始得其寓以有之乎、今始得其智以知之乎、既有其有、既智其智於是。疑有之所不有、惑智之所不知、無者、有之外也、幽者、明之外也。而幽明非有無、有無非幽明、外者能與内反、猶晝之外夜、夜之外晝、今執明以窺幽、執有以思無、猶執晝之色、以疑夜之蔽、執夜之色以疑晝之明、又猶閉目以尋明之所在、秉炬以探暗之所在、故明中尋暗、不知姑屏所見者、致思於冥晦之中、以知暗也、不知暗、則其知明亦不審矣、暗中探明、不知姑舍所晦者、致思於明朗之中、以知明也、不知明則其知暗亦不審矣、明中屏明而通暗、暗中忘暗而通明、謂之融通、明中致思於暗、以其暗能知我之所在之明、暗中致思於明、以其明能知我之所在之暗、謂之反觀、猶鑑鏡之見我身於身之外。以身之外者反觀、則通彼而知我。不通則

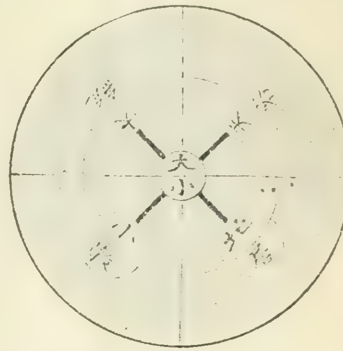
不能用鏡。不能用鏡。則無以知己也。以有體無、以無反有、以明體幽、以幽反明、何病於通。今執有以窺無、執明以窺幽、尋質於幽明、求氣於有無、猶閉眼求明、秉炬追暗。釣竿非捕狐兎之具、瓦缶非爲鳳鳴之器。雖勞而無功也。

結諸一氣、解諸一氣。

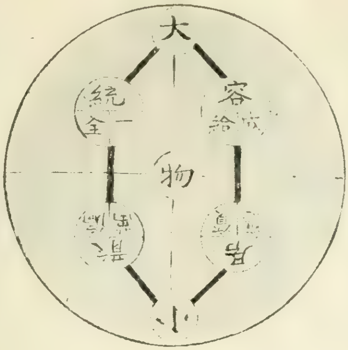
物之有天地、猶車之有輪輻。車無輪輻、則弗可行、物無天地、則弗可立。物之有氣、猶車之有御者。無御則車弗爲用、無氣則物不有立。一氣之應用、猶心之無痕於喜怒哀樂、而應接無盡。是以食膏粱者、其人也肥、培糞壤者、其苗也長。而膏粱非人之肌膚、糞壤非苗之枝葉。惟相依之間、見彼此之給資。雖然、人死而弗可蘇、物化而弗可復。生化榮立、唯自混有之一。則解亦一氣、結亦一氣。生非得之、死非歸之。反終於始、則洋洋乎。求後於今、則滾滾然。榮之與混、機於其中、幽之與明、跡於其間、神明何物。一肉團之氣、還其智通於天之氣感。含而通焉。通而化焉。生則生矣、化則化矣。與夫造物同化。惟其然焉惟其然焉。

生者生矣、故謂之生。化者化矣。故謂之化。化者生不及而化、生者化不行而生。生不可爲化、化不可爲生。故生化得迭行。而不得同行。動生子、植生種、聯綿不已焉。動息植斃、陸續不絕焉。可絕則非化、可已則非生。生生者必化、其所一也。生必非化、其所二也。

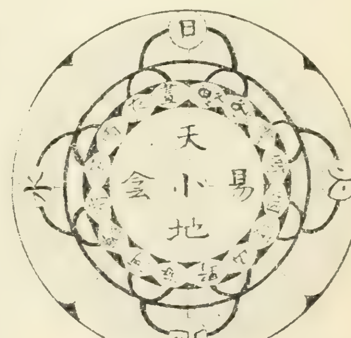
大小圖



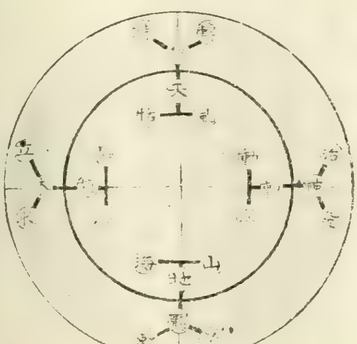
統散容居圖



持中天地圖



天地動植圖



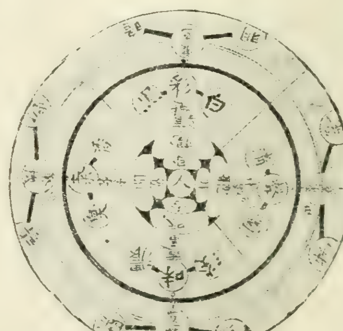
清濁沒露圖



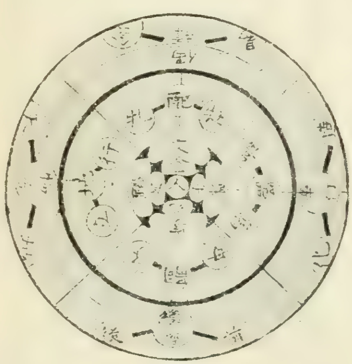
造化之技沒。而露生於動植。動則持意、植則舍意。故動則牝牡、植則華實。動則子母、植則本苗。雖不示意枝。自有轉動。造化之運爲。異曲同工。沒不隔露。

視聽聞味圖

外用與下爲一合



交字舞踏圖



小物

夫轉中之萬物者、以日影爲天地、持中之萬物者以水燥爲天地、以其居轉中、天物常動、以其居持中、地物終止、是故。日影爲天地於天剖而分者、上而星漢、發明疾勝轉行、下而月辰、含暗疾勝運行、水燥爲天地於地分而散者、上而雲雨以清動竪中、下而動植以濁動橫中。

蓋天物者、箇箇圓成、陽象居影而發光、陰象居景而受光、陽象者星漢、東運至微、如與轉伴、陰象者辰沫、東運甚速、遲速留退、地物者箇箇異形、陽質在天而爲清陰質在地而爲濁陽質者雲雨、著于昇降、陰質者動植見于橫竪。

蓋天者、杳渺艱于測驗、地者親附熟于交接。故其說也、略天悉地。蓋大以轉持覆載成、是以持亦以風恬水陸應風恬水陸開天地、而雲雷雨雪爲象質、絪縕摩盪、物化其間、物之化其間、每換其體、以成敗爲鮮腐、夫小者居而資焉、大者容而給焉、於是轉成理於規矩、持成理於橫竪、象轉持覆載、以能恬立風旋、山峙海俯資者爲大。復給其所絪縕神爲居給資之中、變化無窮。動植發地而居天、土石結氣而凝地、故動植虛質也、土石實質也。

水者橫質、氣鬱于下、而水和于上、山者竪質燥煦于下、而氣達于上。氣鬱于下、故其植鮮少、水和于上、故其動蕃滋、燥煦于下、故其植衆多、氣達于上、故其動鮮少。是故動多于水、而少于燥、植多于燥而少于水、水物以吐納爲息、陸物以噓噏爲息、鳥獸艸木、在竪中而其體立、魚龍藻樹、在橫中而其體俯。然而動行迂曲、竪立邪長、動則其體橫俯、植則其體竪立、而其中又各俯立相偶。細觀其所錯綜、則水動之伏、雖伏而潛、而無寢、有時而跳躍、燥動之立、雖立而行、而有寢、有時而坐、鳥橫翔而竪寐、獸

竪行而横寢、且鳥資天氣多、故體輕而飛、飲少而不尿、獸資地氣多、故質重而走、飲多而尿、魚受虛氣多、因水爲息、龜受實氣多、閉氣而潛。（是以大物爲于絪縕萬物成于絪縕萬物雖散而泝之則歸一一能生二爲動爲植夫物之反待對而合合而歸一則失其所跡之痕觀之於火灼水浸之態合二則復歸於一氣既已著覩之於甲勝之時即乙負之時故分動植之對待以知資生於絪縕之一蓋物之成必供性體氣物動植已分動以偏于神氣爲氣物植以偏于本氣爲質物於是動性活而輕焉植性立而重焉動體動而浮焉植體止而沈焉動氣通而偶焉植氣塞而孤焉動物橫而虛焉植物竪而實焉能知其反則知其本之一也剛柔者、天之體也、堅輭者地之體也、地物資體於地。於是生分品於堅輭混然一地球水燥爲裏虛之圓。水燥分界動植變形動分鳥獸植分艸木魚龍亦鳥獸藻樹亦艸木）

天地所具萬物資焉。資則雖如有全之、剖則有所偏之。相反焉。相應焉。相灌焉。相漸焉。有本生、有餘生、有同天地、有別天地、皆具神爲之妙焉。故動植塊、此其形横竪。其物虛實。其體溫冷。其氣本末。異彼此。神本相長短。緯偶有牝牡華實、經繼有子母幹苗。鳥獸類分横竪、艸木類分大小。小輭大堅、横重竪輕。雖鳥竪獸横、艸小木大、有大分、亦能錯雜還相結、故獸之類、竪分人寓、横分貓狗、大分牛馬、小分貂鼠、鳥之類、竪分鶴鷺、横分鷹鶚、大分鷄雉、小分鳩雀、陸生富文、水生乏文、似其富文、而鳥獸能以陸漸水、

横竪之間。賢有人寓、横有虎䮕。人有人犹之類、寓有猿狨之屬。而此重彼輕、此智彼愚。虎有虎豹之別、䮕有牛馬之分。而一重一輕。輕者猛、重者力。人類者、保體敏性、而技在智巧、寓類者。被毛性黠。而技在輕捷。虎類者、肢指有技、猛而有利牙尖爪、䮕類者以蹄代爪。强而含牙戴角。虎豹。豺狼。熊羆。貓犬。狐狸。虎之類也。牛馬。牦驢。㹀駱。豬鹿。羊豕。䮕之類也。此之爲大。而亦有小類。其大者爲兔麞之類。自貂鼬至鼷鼠漸小也。鳥之竪者。鸛鶴也。與鷺鵁偶。鷹鶚烏梟。

猶獸有虎類。以具利觜尖爪。鷄雉鶴鷲。猶
獸有馱類。以具大觜長距。此之爲大。而亦
自有小類。其大者、爲鳩鴿之類、小者爲燕
雀之屬。獸之漸水。海人川童。水豹臘虎。海
驢海牛。水鼠海鼠。皆從陸形焉。鳥最富於
漸水。長鶏短尾。矮脚而蹼。雖稍如異類。而
有所近似。故鵝好食蟲豸。夜鳴應更。鶩能
與鷄相羣。卵假鷄伏。則其性與雞不遠也
是以。鳧雁之遠翔。亦能地居。漫畫之重身。
鴛鴦之文彩。類愈近鷄。然而其大者爲孔
雀爲駝鳥。而鸕鷀之近鷺。海鳥之近鳥。海
雀之類。雀漸水之間。亦自有大小横竪之
類。以浮者。不用立。食魚者。不用猛。故其類
微也。是以鷺鶂魚鷹之類。以陸形居水。
以其乏文、而水生惟有魚龍。魚塊而龍歧焉、
玩之則鱗保龍鱷分焉、
以鰭鬣游者、爲水之鳥。故統鱗保、皆魚也、
具手脚潛者、爲水之獸。故統龍鱷。皆龍也。

於是乎。鳥獸各有鱗保也。鱗、則雖有大小
強弱、微鱗巨鱗之異、皆其體竪、而不出鱗
也、其生手脚也、爲鼉、爲鯪鯉、皆龍類也、於
保、則海鷂之扁。河豚之圓。杜父之小、海鰌
之大。鰻鱺之長。鮫之痱癗。雖形狀弗同。而
其體横、而不外于保。而其生手脚也。爲鱷
爲鯑鯋。皆鱷類也。以鱗之有無分之、鱗一、
保一。以手足之有無分之。魚一。龍一。凡鱗
者卵生、保者胎生。鱗之沒鱗、猶有微鱗如
玉屑、保之固皮。終有堅沙爲痱癗。
而鱗保、龍鱷、與螺蛤龜蟹。合爲鱗甲之二種
也、雖艸小木大。鳥竪獸横。有大分。錯雜還相
結。故植之類。竪有笣竹。横有藤蔓。木有喬矮。
艸有豐細。陸中富植。水中乏植。以富植而其
餘漸水。
動能隔類、植能雜類。隔則不混、雜則相淆。
是以。横竪大小。分笣蔓卉樹。卉樹、艸木之
正也、笣蔓。艸木之變也。笣者、竪也、蔓者、横

也、卉者小也。樹者。大也。而笣蔓者、艸木各在其中、卉樹者。其中各有艸木。類之所雜也。是以。竪爲笣、横爲蔓。笣者、竪矣、直而不能由、蔓者。横矣。依而不能立。艸木之種子。其生芽皆下向、而笣類之種子。其生芽皆上向。似有分資直圓之道。且柔生、皆以皮覆肉、惟笣以皮爲笣。脱笣露體。爲木、則虛爲竹、實爲椶櫚、爲艸。則結子爲牟麥稻粱。吐華爲茅芒菰蒲葱苔之莖葉、木賊燈艸之葉莖。水仙燕子之重葉。爲蘭。爲薑。爲菖蒲。爲萬年青。皆笣之極變也。而漸水。則爲蘆。爲荻。皆具竪理而無横文矣。蔓者横植。蔓而艸之謂蔓、蔓而木之謂藤。雖同是豆、而豇葛分藤蔓、雖同是蓏。而黄瓜錦荔。葡萄蘡薁。分藤蔓。雖同豐根而菝葜仙糧。薯蕷萆薢藤蔓殊也。於是。或相有無。或相比類。蓋弱之變化也。而漸水。則爲蓴。爲菱。世不分生之藤蔓、槩言之蔓、不分笣之艸木

疑之於艸木。樹正于枝葉根幹之條理、卉混于枝葉根幹之條理。而木者剛大、亘氷雪而保久、艸者柔小。逐春秋而相換。故以華臺爲幹。有如雞冠米囊者。豐根爲肉。有如萊菔蹲鴟者。以根爲幹。有如欵冬芙蕖者以枝爲幹。有如紫蕨鳳尾者。野蒜結子於葉頭。蘘荷發華於莖外。皆異于樹之條理也。其類雜者。如鵲豆豇豆。爲竪爲蔓。蒴藋接骨。爲木爲艸類也。枸杞懸鉤之屬、卉于樹中、牡丹棣棠之類。樹于卉中。樹在水、則變質爲火樹海松、卉在水。則變形爲藻薀水富動物、故動極變於水。陸富植物。故植極變於陸。故海動。一胎數萬。猶植實也。於是。有手無足。如彈塗、以左右爲腹背。如比目、倒身如章魚、外骨如龜、沒文如螺蜯。著物如牡蠣、爲毬如海膽、塊然如水母、頑然如海參、皆陸變之所不有也。以之植而、水生惟有藻樹。藻横而樹竪也、玩

之則苞蔓卉樹分焉苞蔓卉樹與金石土鹵
望爲堅輭之二種
雖託根於水底而華葉在水上者陸漸之
種而非水植全體潛水託根於沙石者而
乃水植也陸植著土而生水植著石而生
藻則柔輭樹則堅剛故藻則水中之艸神
馬如蔓菅藻如苞昆布類蒿苣黑目如蔓
菁有松者有柏者有梅者居水含生意出
水枯硬類石如珊瑚樹如石闌干屈曲錚
錚閉華葉夫蒙茸如海蘿陟釐雞冠鹿尾
則餘生爲苔苔則專于水而能至陸菌則
專于陸而能至水水底石間生菌芻鬚如
陸產石面水際有苔依稀似水產
雖之也鱗介亦漸陸
鱗中之魚龍陸漸則爲蛇爲蟒爲蜥蜴爲
守宮保中之魚龍陸漸則爲鯢爲鼉爲蚯
蚓爲蚰蜒甲則龜蟹或山棲介則蝸牛夜
啼或陸處

藻苔亦漸陸
然而陸極植之變水極動之變是以水陸動
植類可分而種自無窮生氣不盡於此
蓋苔菌蟲豸餘生也餘生水陸各有雖同是
蟲也一則堅體一則輭體雖同是豸也一則
用脚一則去脚
雖同是苔也或生枝葉或爲衣黴雖同是菌
也或爲菌茸或爲寓類
菌一幹載蓋茸偏形依物寓麥蕈馬勃輭
結伏靈豕槖堅結
陸愈富于植則水愈富于動苔種盛于水飛
蟲富于陸陸植文而多矣水植素而寡矣陸
動靈而鮮矣水動癡而繁矣有類有分以觀
其分相之相合以觀其合
故之水者牡蠣石蚴如植而含神之陸者
石螺石蛤如動而含神觀其所之則鍾乳
水銀水石相之櫲樟不灰木石相之牡蠣
鹽麩動植相之觀其所合則鷽鼠蝙蝠彼

毛垂肢宛然獸也。膃肭海獺共被毛。前鰭開則爲手。後脚收則爲尾。開鰭尾立則爲手足。而獸也。收手脚游則爲鰭尾。而魚也。

在虛中者。恬于氣也。在實中者。止于質也。故物潛在質。則能爲生。生蓋地之類也。火發出質。則能爲化。化蓋天之類也。火傳之於氣中。益熾。物潛之於質中。愈蕃。跡反而理一也。是以鳥獸。氣物也。艸木。質物也。水結質。燥煦生。萬物由以生。燥不居。神不守。萬物由以化。以故動舍神。生化于天中。植持質。生化于地中。雲雷雨雪。聚散于其上。時有時凶。無母無子。艸木鳥獸。解結于其下。先後換體。生化相繼。

氣氣感應。萬物變化。大者無跡于感應。小者有跡于感應。蓋小物彼此偏立。而其彼此。或同物。或異物。同物則雌雄牝牡之類。異物則風雲動植之屬。體接氣交。則無同異。有感應。感應則有變化焉。若不能執彼以觀此。反此以同彼。則不復能通焉。夫天地之間。無不通者。則無不感應者。執我不察彼。病于佗也。是以。氣氣之相交。感應成于此矣。是以。自氣出沒于質。則爲變幻於幽明之際。自質出沒于氣。則爲妖怪於恍惚之中。以質動氣。瓦釜生響。以氣動質。雷震山嶽。以氣感質。木葉秋萎。以質應氣。海珠望滿。變其性。則米化爲蜉。楠變爲石。換其質。則蠋縮爲蛹。蠶脫爲蛾。

螺蛤無交。金石自結。分異其道。合同其居。虛者不實。動者不靜。是以。有於此者沒於彼也。是故。有角者無牙。有翼者無手。孰能予之翼。以奪其手。予之角。以奪其牙。牙即角。翼即手。反之常也。

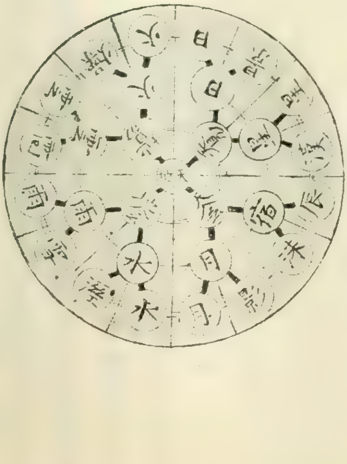
雖全于此。必虧于彼也。有於一。而反於二。故鳥以羽換手。而羽還爲行身之用。羽以行身。則脚爲把掴之用。於是。彼脚我手。我手彼脚。魚以鬛換羽。而鬛還爲行身之用。鬛以行身。則尾還爲守禦之用。於是。魚鬛

鳥之羽鳥脚魚之尾鳥以啄爲主以屎秉屎、魚以飲爲主則以腮爲鼻雖足而莫所不偏、雖偏而莫所不足故塊然金石、岐然鳥獸彼之所無、充于此、此之所乏。餘于彼。雖偏於二、而全於一矣雖反於二、而有足於一矣天地雖大。動植雖微。弗獲違於此也。

氣聚物生。物生有氣。氣以爲生、之謂生、物以有體之謂身、金石塊然富本氣生化攸久沒四紀。自螺蛤至龜蟹自塊然。漸岐然。艸木比之於堅生則岐然爲文根幹皮肉。具內外本末。

堅植塊然而金生於礦、玉抱於璞則漸生內外珊瑚樹石闌于終。爲枝幹則又生本末。輭植岐然而菌沒皮肉、寓沒本末則塊岐相之。堅動塊然而龜蟹則備四紀、輭動岐然而海膽水母。將沒其紀。鳥獸已富神氣。本末內外。又多前後左右是以文章之條理粲然于輭生之岐、曖然于堅生之塊本氣者天成、物之所以爲本之氣也、神氣者神爲物之所以爲神之氣也。堅生與我爲類疏、輭生與我爲類親。親之故。氣之本神質之皮肉。與我同繼生生於種子。同先後換體。本神皮肉雖同。而亦有有餘不足之相反故好惡知辨。彼以無意、此以有意生生之種子。在彼、爲實爲苗、在此爲精爲子。

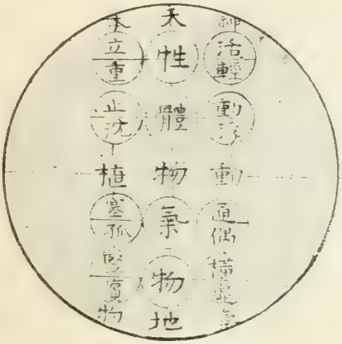
大物爲子絪縕圖



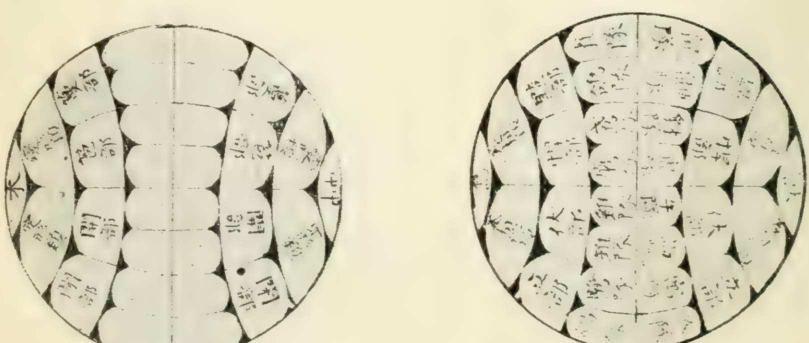
小物成于絪縕圖



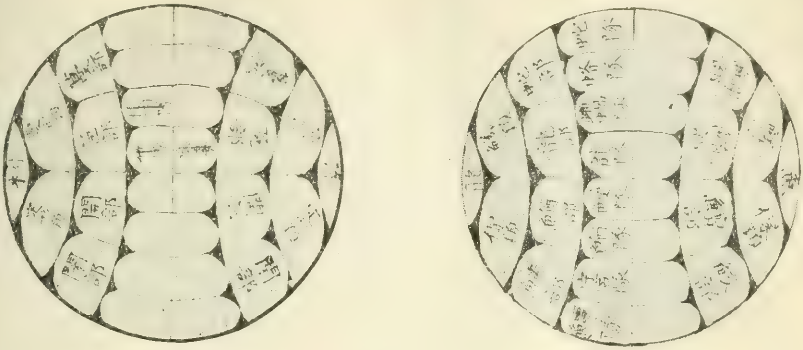
動植氣物性體圖



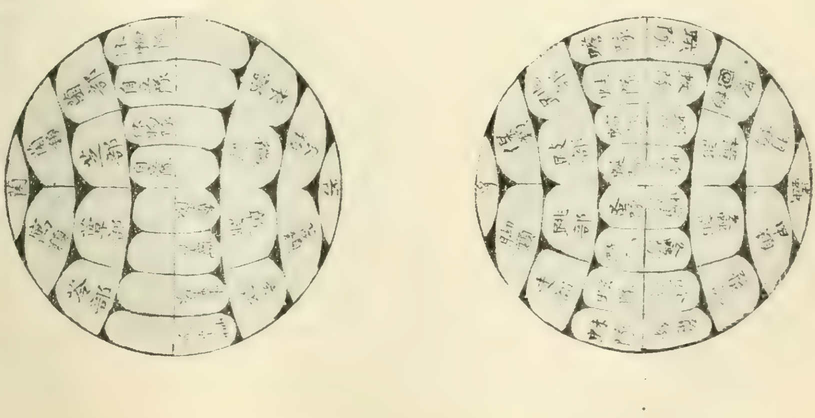
陸動植圖一合



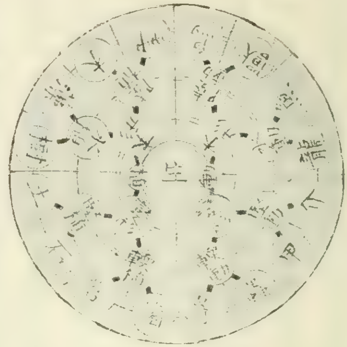
水動植圖一合



輭動植圖一合



動植分合總圖



混物

大與小異而有與資不同矣。雖然成者有應、資者有給。故資之於有而一歸、成之於各而立。物資之於一有、成之於各體。各物各天地、終各張其勢。蓋持中者濁境也。其天則氣恬風動、其地則山峙水俯。其陽則燥火、其陰則水溼。而雲雨出沒于上、動植生化于下。雲雨濁中淨焉、動植濁中穢焉。淨則運爲沒提步之跡、穢則絪縕露交字之態。蓋動植者天地間之小物也。雖然我爲動中之一物、具神中之一氣、以眇形骸開天地於人、遂與大物張勢。植則冷止無意、動則溫動有意。夫物有天地、氣具神本。動成天物、植成地物。動專神氣、植專本氣。能專本氣而成地物、故植其神則無意、其體則著地。能專神氣而成天物、故動其神則有意、其體則居天。故植體則實內以止、資冷於地之寒。動體則虛內以動、資溫於燥之煦。蓋大物之有、以上下而居中外。故小物之資、以本末而居上下。然而植下本上末、動上本下末。

有於一、反於二。故雖以本氣爲生、則彼此同也。而冷止我惡之、溫動我好之。雖以神氣爲靈、則彼此同也。有意運于我、無意運于彼。雖華榮實種、則彼此同也。彼以質實、取物於外、養生於下體、結實於上頭。此以氣虛、取物於內、養生於上竅、生子於下體。雖爲生爲命、則彼此同也。而彼自根生、而

命在根、此自首生、而命在首。惟以有意立者、有事于有意、以無意立者、無事于有意。於是。無意、混然于有意之事、有意、粲然于有意之事。既已粲然。視聽聞味。思慮知辨。有其物、有其事。自偏者觀之、無于彼者有于我焉、自全者觀之。混有于彼者。粲立于此。是故。有身者。有本末內外。動實外。植實內、而動本上、植本下。本末內外。動植之所同也。有意有所向。向背爲前後。有前後。必有左右。故前後左右。分于有意、混于無意。有意。用視聽聞味。知覺好惡。故耳目鼻舌。意智情慾。分于有意、混于無意。是多少有無之所成對也。未知混粲之分於多少之對而泥。

大物、居塊塊、而從衰衰。故小亦居天地。而從節序。然而植、配華實、而繼幹苗。動、配牝牡、而繼子母。大物、氣運其物、神爲其事。故小、亦氣運其物。神爲其事。然而植、止而運爲于無意、動動而運爲于有意。蓋大者機體象質、縮諸風恬水陸、釀諸彩聲氣性。故動植、則居其風恬水陸。用其彩聲氣性。

虛爲天、實爲地、風轉旋、恬持立、質湛水、燥充陸。故風恬水陸者、自機體象質成、清爲天。濁爲地靜呈彩。動激聲。熱發氣。潤收性。故彩聲氣性者。自色聲氣性釀是。以風恬水陸之境。則彩聲氣性之所充也。故合而言之、動植、動靜燥溼爲物、彩聲氣性爲用、分而言之。動體動而溼。能發彩聯氣性。植體止而燥。能收彩聲氣性。蓋動取質而養內之時。覺其性於舌、之謂味。嗡氣而通內之時。覺其氣於鼻。之謂臭。故於物、則彩聲氣性。於我則彩聲臭味。蓋一也。

大則莫弗成、莫弗立、而小則資大而成。依物而立。資則應於大、依則感乎與。故大物、亦有本根精英、小物亦有本根精英、

本爲天、根爲地、精成陰、華爲陽。故天者、本

也、物皆資之、地者、根也、物皆依之、精者、陰也、隱氣於物、華者、陽也、發體於氣、故氣藏本根精英、物露天地陰陽、天沒地中、地露天中、爲根者止、爲本者動、故天通地塞、爲本、天虛地實、爲根、精隱動止、英見發收、蓋神物之體、用神靈運事、本根體物於是、本氣成物、神氣爲事、事物者露、本神者沒、天地則本氣之所成、天神則神氣之所成、經通緯塞、動轉靜持、天虛地實、陽發陰收、莫不於此者焉、故大物、天地也、小物、動植也、大物有神本、則小物亦有神本、本氣則彼此同名、神氣則彼謂神、此謂意、以物異也、而氣異也、以氣異也、而名別也、以一剖而氣應焉、以氣應而名通焉、動爲有意、神氣之物也、植爲無意、本氣之物也、而神本相有、動植全成、

成具、則天神也、天地也、天則定常、神則變化、變化之地、神靈感運成焉、天則乾明、地則潤暗、潤暗之處、水燥土石成焉、故雖物芸芸然、亦惟一動一植焉、爾動植、居風恬之中、立水土之上、成神靈之神、用感運之氣、故物資水燥土石、以爲氣液之生、骨肉之身、

潤暗結實、水燥居天、土石結地、水燥則之雲雨、土石則之動植、動植同生而反物焉、故彼曰根幹、此曰身首、動植雖分物、而同有之、故水燥土石、得於我、而氣液骨肉也、植欠骨、則寓剛於肉、欠血則寄潤於氣、此溫動有意、彼冷止無意、於是、其有意之器、彼無而我有矣、蓋夫人之爲身、氣液骨肉也、氣分溫動、液分膏血、肉分臟腑、骨分筋骨、和膏而皮成於外、和血而肉成於肉、皮能裹物、肉能畜神、是故、府者、納物之名、爲皮之別名、藏者藏氣之名、爲肉之別名、臟爲上體、腑爲下體、上下體成、神本氣分、

氣資神靈感通、以爲心性之意、爲技之爲、體之大分、天也、地也、人者、地中之一小物

也、故水燥土石、得於我、而爲氣液骨肉、氣之大分天也、神也、而意者神中之一小氣也、故神靈感運、得於我、而爲神靈爲技、神靈爲意智之心、感運爲情慾之性、相和爲運用之爲、言動之技、意智情慾、合而言之、則無意智、無情慾、自然而有於我、則性也、運爲而用於事、則心也、分而言之、情慾之感應發于自然、則性也、意智之運爲用於使然、則心也、然而無意、則精靈自然、而感應使然焉、有意則感應發于自然、而知運使然焉、天人之別也、然而無意無作之神、爲往來分合、有意有作之神、爲運用言動、運用者、爲於心、故曰爲、言動者、發於外、故曰技、

然而彩聲氣性、具于物焉、好惡知覺、具于氣焉、大自外保、小自內保、大則內質、小則質外、動植者、小中之偶。用意、則分氣液骨肉、舍意則合氣液骨肉、虛內、則取養於內、實內則取養於外、故植呈彩聲臭味、動用彩聲臭味、成則自保自運、依則或給或資、故小物成也、則各自保運、立也則互相給資、心性之意、爲技之爲動以分之、植以合之、不分則混有之、不合則粲立之、人則物中之一物、意則神中之一氣、人有己以開其境、於是併非己者、己與之張勢、故其所遇皆物、而所往皆天也。

物者、得乎天地而成物者也。物成而與天地張勢焉、於是天神並立、人物相居、故彼能沒露、此亦沒露、露中則天地、得乎我、乃身生也、沒中則神本、得乎我、亦神本也。於天而資、依與而立、故動植同居天立地、以水燥、能宅其物、從日影、能行其氣、氣液骨肉、心性爲技、自精觀之、彼此同有、自麁觀之、彼此相隔、故植之沒跡於混有、亦其氣在其中、動之露跡於粲立、亦不其氣在彼外、故我之立也、同有混粲之氣體、神氣混用體、本氣粲成體、生體粲有神、身體混成本、混體則軀也、

軀以身生立、而生則氣液、身則骨肉、氣者、一溫一動也、而溫有營衞、動有息脈、液者、一血一膏也、而血有津血、膏有脂髓、肉者、一臟一腑也、而臟腑各分內外、骨者、一筋一骨也、而筋骨亦分內外、混氣則神也、神以意爲成、而意則心性、爲則爲技、

地之水燥土石、乃人之氣液骨肉也、故水之爲氣、氣之之質也、之質而未定質矣、於是乎、水猶氣也、是以、氣則溫焉、液則潤焉。故其生也、模之則溫、傷之則血、其死也、摸之不得溫、傷之不見血、於是觀氣之爲物、死則亡之、物之爲物、雖死留之、故合動植言之、神氣爲技也、分動植言之、植爲神氣爲技、動爲心性爲技、蓋神之爲物、主于物而用物者也、主于物而不爲體矣、雖不爲體而成物於沒中、爲技也者、惟其發而爲事者也。

心者、一意一智也、而意有思慮、智有知辨、性者、一情一慾也、而情有愛憎、慾有欲惡、爲者、一運一爲也、而運有運行、爲有立持、技者、一聲一技也、而聲有和激、技有守禦、

氣、我之燥也、液、我之水也、肉、我之土也、骨、我之石也、性情、於我爲心性、造化於我爲爲技、天地之所與我同也、而彼者、地質內結、天氣外轉、我者、骨肉護外、溫動保內、是天地之所與我反也、然而氣有溫動、液有膏血、肉有臟腑、骨有筋骨、心有意智、性有情慾、爲有運爲、技有言動、而愛憎欲惡者、好惡也、思慮知辨者、知覺也、物無不有好惡知覺者、蓋人之大分、意與身也、而身與生偶、意與爲對、身生者、動之天地也、意爲者、動之性才也、蓋天地之條理、質必冷止、氣必溫動、而植質冷、動質溫者、何質有動止之異也、性情爲技者、動植之所共有也。惟於意相有無而已。植就地、竪立、地之類也、故舍意之神於冷止、動在天、橫行、天之

類也。故寓意之神於溫動。溫動者、生也。氣血絜之、形體者、身也。骨肉成之、質體者、冷止之物。有神動于此中。是其體之所以溫也。蓋天地者、以偏寒偏熱而成者也。然而動者。以溫動之氣。和冷止之質。和合以活、乖離以化。化則溫去冷生。以觀質之自然。活則冷去溫釀。以和氣之使然。氣溫而動、血溫而活。故血之充體。存則滾滾而充。死則倏忽而失。由是觀之。血者活動之氣化也明矣。故血者氣之化也。得氣與骨肉之實質對。於是乎骨肉氣血爲親。以能好惡知覺。此故感應之所運爲。於性有者、於神有之。是故雖意之有無分於動植。而動中亦平分此有無。故生之好惡知覺、於無意。心之好惡知覺、於有意。同是神爲也。雖同是神爲也。而其爲則反。由反觀同、由同觀反。其態可識矣。粗擧其槩以言之。知勞逸、知睡覺、知痛苦、皆無意之神爲也。知適否、知蔽悟。知憂樂。皆有意之神意也。是以好惡知覺。有意無意相態焉。是以生有痛、則心亦有悼。生有痒、則心亦有痒。痛爲呻吟、悼爲哭泣。身痒則爪搔、心痒則齒切。身麻則左右無所運動。心癡則進退無所運爲。摸人之陰肌、則肌羞而口笑。訐人之陰事、則已羞而人笑。割人之肌肉、則肉傷而氣痛。割人之親戚、則情傷而心痛。氣鬱而病、達而快。心鬱而悶、達而安。氣病則身癈、知病則德壞。是乃天人之應也。然而情慾、有意之感應。意智、有意之知運。體有耳目鼻舌、手足陰乳之文。而其爲萬變。心有意智實守禦。而愛憎欲惡、成于其間。意運思慮情慾。運用營施之事。而其運錯綜爲。爲虛知辨。而善惡是非。出于其中。

絜體、則文也。體以臟腑成。而臟、則內臟外臟、腑、則內腑外腑。內臟分上下。上、則心肺。下、則肝腎。外臟分上下。上、則耳目。下、則鼻舌。內腑

分上下、上則咽胃、下則腸腑、外腑分上下、上則陰乳、下則手足、

獸必俯身、俯身則横、横則手足在下、陰乳在上、人以竪身、異其體而已、

粲氣則從體之文之氣也、其氣以本神成、而神、則內神外神、本則內本外本、內神用精麁、而精以保運、麁以化持、外神用精麁、而精以視聽、麁以聞味、內本用精麁、而精以納畜、麁以收送、外本用精麁、而精以交字、麁以舞踏、

混氣物者、體也、資諸大物、以爲己之有、粲氣物者、文也、得諸身生、以用己之神、植亦多種、動亦多種、資給不同、通塞各異、雖然、動中極意智之巧、弄造化之機者、人之爲最焉、故自我境而推、有意察無意、混資成己、粲立用佗、混體則本根之身生、粲立內外臟腑之文、混氣則精英之神爲粲、立內外本神之文、

天地天神者、成我之氣也、彩聲臭味者、我所交之氣也、而氣豈啻此四焉哉、寒熱溼燥覺于膚、善惡是非、覺于心、輕重覺于捧、强弱覺于持、堅輭覺于摸、毒藥覺于養、配嗣器地者、立我之質也、水穀便溺者、寄我之質也、而質豈此四焉哉、絺綌裘帛、切于寒暑、門牆干戈、切于守禦、藥餌切于疾病、枕席切于臥寐、惟彼氣質各八者、動之至切者也、已此、故魚無耳。鳥無脘。艸木不假于配偶。魚介不假于手足、瞽者不假于色。聾者不假于聲。

精英能發本根、本根能收精英、故天以成己、神以用己、故所本根者、兆胚胎、貫黃壞、所精英者、後榮先謝、晝神夜昏、故正則治焉、病則亂焉、是以、神居軀之爲生、軀喪神之爲死、

氣以無體動、質以有質止、氣聚則體結、體解則氣散、暴露者、體必早壞、無佗、以氣之易散也、蟄藏者、體必久持、無佗、以氣之不洩也、心者、氣之華也、身者、氣之根也、氣者、易動而難伏、故心宜以恬澹養、體者、好靜

而惡勞。故身宜以動作養
神役軀之爲覺、軀役神之爲夢、
視聽、耳目之氣也。舞踏、手足之氣也。而好
惡思辨者、神氣也。氣爲本根、心爲英華。心
固一身之主。四肢百骸、皆爲其役。是故心
能使令、氣能聽命、則耳目視聽、手足舞踏。
心雖令而氣弗聽、則聾瞽癱瘓、癲狂妄動
焉。心雖尊而不能執事、氣雖卑而作用由
已。老壯病健、惟氣之從。是以心役氣、則視
聽云爲、自正矣。覺之事也。氣役神、則心不
役耳目於視聽、反役於所視聽之氣。心不
役手腳於舞踏、反役於所舞踏之氣。夢之
事也。故雖有正、有邪、有感、有背、有記前事、
有知將來、有由所思、有得所不思。可愛、可
惡、可驚、可樂。其狀千萬、惟由心之役於氣
也已。本根困則精華瘁、精華病則本根苦。
憂悲思慮者、心之病也。痛癢饑渴者、氣之
病也。心勞則氣困、氣病則心苦。是以魑魅
毒神、疾病亂心、則恍惚弗分夢覺。徒視徒
聽、徒舞徒踏而已。神明爲主、號令嚴肅、則
肢體各待命、而皆統用於一心也。

生充身之爲壯、身散生之爲老。生旺于神之
爲寢、神旺于生之爲寤。

氣來則充、往則散。而寤寐者、神本之更爲
政也。夢覺者、神本之更爲役也。

故神執其權則正、失其權則狂。

生爲本根、猶國之以衆爲基。心爲英華、猶
國之以君爲主。夫朝廷者、禮樂文物之所
在、聰明才德之所居、號令控掣之所由也。
郊野者、不足於禮樂文物、乏於聰明才德、
亦不有號令控掣之權。前後左右、仰待之
於上者也。故上執控掣之權、以馭下、下奉
號令之命、以聽上、則能致太平。上失聰明
之德、而不能監下、下竊控掣之權、以犯上、
則終致擾亂。故氣者心之基、心者氣之主。
心號令控掣、以能役使氣、氣動靜云爲、皆

待命而爲是、故氣苟有痛癢恐懼、則懊惱戰愕、不受心之制、心苟有感激憤發、則重傷大疵、不自覺也。是主客之事也。夫視聽舞踏者、氣之所爲也、役耳目之視聽、役手腳之舞踏者、心之所爲也。心令氣聽、則視辨其色、聽辨其聲、舞中其節、踏得其地、人之正也。心不知令之氣、徒爲其用、視不辨其色、聽不辨其聲、云不擇其言、爲不擇其事、是之爲狂。上下有序、治安可謀、位序未分、烏得謂治焉。下苟弗聽於上、則衆各爲其用於國、則爲亂爲亡、於人則爲癲爲狂、主專權柄、則衆困於役使、於國則爲弊爲危、於人則爲病爲死。

守其精則眞、喪其主則妄

神者、心之精爽也。是以目病、則大虛見蚊虻、耳病則漠中聞蟬雀。夫病邪元在內、而聲色爲妄於外。心不失精爽、則辨聲色之眞妄、心失精爽、則必樸蚊虻驅蟬雀、不病者、不認妄狀於視聽、病者則認妄狀於視聽。故神正、而與衆同視聽、是其眞也。神病、而與佗別視聽、是其妄也。物已具象形、孰逃於目。何則面前之色、印於目、目之神、接而鑑物、左右之聲、感於耳、耳之神、受而辨聲。色不印目、聲不感耳、而成色與聲者、豈在外者哉。故心爲邪所役。使其視聽擧動。如對物者、實妄狀而已。何與眼華耳鳴。睡語夢影異。

故生適其可則和、過其否則勞、

天地者、一寒一熱、而我身、則和寒熱而溫、戾則生偏寒偏熱、天地者、一燥一溼、而我身則合燥溼而中、偏則成偏燥偏溼。此故衝寒暑、冒雨雪、過饑飽、淫嗜好、役于力之所不及、勞于智之所不能、彼勞苦之事、皆職此之由。

得其養則健、過其毒則病

食色器貨、淫則毒人。寒熱風溼、忤則毒人。

水火金石觸則毒人。諂佞便戾親則毒人。故意具爲則性、爲能意則才思者、意之運於物也、業者物之運於意也、於是交接之間。意有順忤、態爲治亂。是故。人資于天地之所給、依于萬物之所立。故大物給神、我資爲意、大物給爲我資爲意則心性。性者、神之所給、心者靈之所給。故情慾者、神之所與物交接、感應之態也、意智者靈之所與物交接運營之態也、爲者、神爲之所自用、技者靈爲之所用花。故運爲者、運行立持氣體也、聲技者和激守禦氣體也、夫物並立天地之間。而彼此爲交接。是故。情感外、而愛憎動、慾應內、而欲惡出

情者、心之感氣也、慾者氣之感心也、是以。心者在內、而爲用於外、物牽則從愛憎於外、體者在外、而用事於內。身動而求色食於內我之愛憎、自花之美醜吉凶矣、酸鼻之隱、甘心之忍、思快之於內、而伸之於外、他之聲色服飾、爲我之耳目口體而求焉。輿馬粉黛之美、絲竹羞饌之具、欲備之於前。而恣之於內。內求則外之從、外從則內之求。

意運而思慮神智營而知辨靈。

愛憎之所施、致親疏、欲惡之所接、動悅怨、愛人之美則美、愛己之美則矜、惡己之惡則羞惡人之美則妒。思有順忤、而喜怒應、慮有肅舒、而憂歡成。智解吉凶、而哀樂感、辨分得失而悔吝生。且情。注而慕、背而斁、欲合而求、惡分而惜。意、鬱而慍、暢而驕、智素而愨。飾而詐。思之所存凶、有記忘、智之所動止、有信凝。用辨於事物、則美醜分、考道於進退、則榮辱成。此故。神。有所刧則驚、有所危則畏、有所痛則泣、有所弄則笑、有所病則苦、有所役則勞。

運以運行氣體、爲以立持氣體、發吾聲、而見虛實

爲之用、精一則發聲、一則發技。發技者、爲守禦、發聲者。在和激守禦之技、或於齒角、或於距觜、或於首尾、而人則專於手足、和激之發、笑泣喜怒各發、或有發音聲於羽脰者、或有不假聲音者、人者。長意爲者也。故弄聲音、而爲言語之文、役手足而爲千百之事業。故人運意於適否、而善惡歧、用智於當否、而是非作、吐情於口舌、而虛實成、施慾於手足、而守禦起。是以物之已分、已切而佗疏焉。欲守切者、故禦害者。故曰學、曰禮、曰仁、曰義、曰業、曰務、曰藥餌、曰飲食、而千萬者、皆守之事也。曰衣服、曰牆屋、曰軍旅、曰城郭、曰戒、曰禁、曰禱、曰刑、而千萬者、皆禦之事也。務守禦之間、弄物之工。一正一誣、一護一訐。虛實之間也。正者、直也、質也。護者、以褒、以覆、而千萬也。誕者、詐也、誣也。訐者、以犯、以害、而千萬也。故寓者、雖虛于言、而實于意也。訐者、雖實于事、而虛于意也。或正于言、而曲于意、或迂于言、而敏于事。故以情言之、一虛一實、以事言之、虛實共可否。

發動作、而爲守禦。

人與物、同具口舌手脚、同具聲音營施。物之聲音營施、自使混然、人之聲音營施自使粲焉。自使混然者何邪。鳴則其聲自發、動則其技自露、自使粲焉者何邪。泣笑自發於憂樂、而歌哭以轉折分焉。舞踏自成於動作、而技巧由意匠變矣。有意之能轉折意匠、轉神靈之妙。弄鼓舞之巧。是乃人之所獨有、而別發吼囀飛走之外焉。聲音轉折、而事物成狀於無形、謂之言語、咨嗟詠嘆之、而作歌曲、序之而爲律呂、技巧經營、而事物成體於有形、謂之事業。文章修飾之、而爲禮樂、虛之而爲跡、實之爲器。認聲爲書、摸形爲畫。言語者、轉意智情慾於聲音者也。事業者、舞意智情慾於技巧者

也言語之道、生乎心、而發乎聲、受乎耳、而辨乎心矣、生乎心、而發乎聲者、虛亦成狀、實亦成狀、或素以直之、或文以飾之、或野以出之、或誕以欺之、受乎耳、而辨乎心者、或以信之、或以疑之、虛實于信疑之間、而成于言者、千萬也、動作之事、發乎心而動乎身、出乎我而見乎彼矣、發乎心而動乎身者、以能守焉以能禦焉守也以修身以治產、禦也以愼微以修備、出乎我而見乎彼者、或以往焉或以來矣、守禦于往來之中、成于行者千萬也、此故、出好興戎、綏禍致福、機于心性、而定于言行、

於是文以具其用、衛人之設、府庫置錢帛、開門戶爲出入、故肺保天氣、肝化地氣、心運其神、腎持其天、咽納水穀、胃畜水穀、膀泌別其淨、腸送輸其穢、耳目鼻舌、通彩聲臭味、陰乳手足、用配嗣器也、

橥氣、則接物之氣、橥體、則用意之器、是以、神本之氣、居上下之體、精麁之氣、雜內外之體、於是、肺肝心腎、耳目鼻舌、保運化持、視聽聞味、咽胃腸膀、手足陰乳、納畜收送、舞踏交字、上體爲臟、下體爲腑、而臟腑各有內外、內臟、中則心、端則腎肺肝、外臟、中則舌、端則鼻耳目、內腑、中則胃、端則咽腸膀、外腑、中則陰、端則乳手足、神氣、神也、本氣、天也、而神本各有內外、內神、精以運持神本之氣、麁以保化天地之氣、外神精以視聽聲色、麁以聞味臭味、內本、精以納畜水穀、麁以收送便溺、外本精以交字配嗣、麁以舞踏器也、

混然體用、以合物、粲然氣物以開神、鳥獸鱗甲、大抵相類、惟人、觀則於天地、以立道、開爲於設施以制禮修以防亂荒以擾治是物之所無、而人事之關鍵也、夫水陸者、持中之兩天地、堅輭之動植、擾擾焉並立其間、神爲變化、有無通塞、具盡所有也、蓋物之將生也、其

氣混混沌沌、惟神涬涬、存天地於其中、其既化也、其物汪汪洋洋、惟氣衰衰。一其物於天地生有本生、有餘生、餘生或以氣而化、木生必以形而傳。

水陸之艸木鳥獸、謂之本生、水陸之蟲豸菌苔之謂餘生、本生守條理之正、餘生盡條理之變。本生、正中盡變、餘生變中含正。是以。鳥獸正形、而鱗甲盡其變、笣樹正形、而卉蔓盡其變。是以。人則竪立、獸則橫行、我則具神靈、物則乏聰慧、獸則肉脣、鳥則骨觜、獸食鳥啄。鼬嗡魚吞、獸則食息、魚則吞吐鰓、以腹安頭之處、蛇以腹爲手足之用、象以鼻爲指、猿以足爲手、馬以吻代牛之舌、牛以舌代馬之吻、鳥方寢而如人之坐、人方伏而似魚之行、鳥則無尿、蟬則無屎、牛馬勝力、貓犬勝捷、鳥以手爲翼、魚以鬣代肢、諸生口尿異處、鰓則口尿一處、人好清潔、烏鳶則喜臭穢、蝙蝠倒懸、螺則倒行、鰕向後而跳、蟹向旁而行、諸動、則內骨外肉、甲介、則外骨內肉、鳥之羽翼、則魚之鱗鬣也、鷗鷺能著水、人則好執火、望潮沒頭、水母無骨、水魚不瞑、土蟲不息、蟻以鬚視、魚以目聽、蟷螂竪口、蚊虻長舌、蜂則滿面皆目、蛛則滿身皆腹、鸚鵡與河豚、瞼如獸、鯢魚與蟾蜍、體似獸、鸓鼠則獸而翅、鯪鯉則鱗而毛、龜如獸而卵生、鰐類鱗而胎生、蠶類則蚪而蠶、蠶而蛹、蛹而蛾、蟾蜍則胞而蝌蚪、蝌蚪而生手脚、禽獸則專用聲音於口、羽蟲則專用聲音於羽、然而魚鼈則少用聲音、人之於技、學而後成、物之於技、不習而得、牡蠣石蜐、含靈而生類艸木、石螺石蛤石體而形類動物、苔蘇不假枝葉、菌寓全異艸木。

形之所傳。牝牡感應胎託其中、軀殼開折。其物始成、植之子也、或殼肉、或殼皮、動之子也或殼卵、或殼胞、繫殼之處、植謂之蔕、動謂之

臍鱗比相繼之痕。或亡或存。葉布花發、繫樺殼於其中、牡感牝應。託子胞於其中。故男女之情者、發生之感、而子母之愛者。保生之應也。物之生、資之於天、物之養。取之於物。故曰以影而養、燥以水而養。

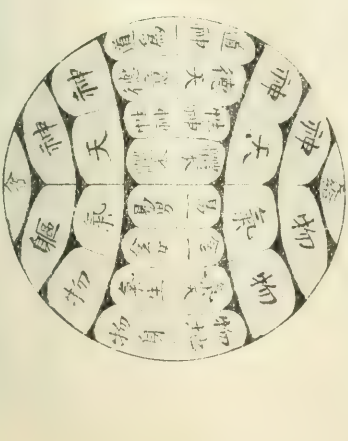
己以天而生、己以天而死。其已生未死。能持而存此體。持存之間、有生事。是之曰養。反養事。是之曰害。天養之以氣、地養之以質。天害之以氣。地害之以物。艸木得寒暑、而養于天、得水土、而養于地、鳥獸得噓噏。而養于天、得飲食。而養于地。氛沴瘴癘、能害動植於氣、水火金石。能害動植於質。

故動植得生於天、取養於物。內實者、自外養、內虛者。自內養。同取諸氣質成。

植無意而止、待天地之用於無爲。動有意而動。作天地之養於有爲。蓋內實者、取養於外、內虛者。取養於內。故奪彼之生、給我之生。於是有殺活之道。是故、物之天有殺動而保我之生者、有殺植而保我之生者。惟植者故保生之道。莫非殺彼而保我者。惟植者無意、故無慘怛之憾、動者有意。多慘怛之意。惟自豺虎鷹鷂、至蟷螂蟾蜍之屬、殺動以保生、自馬牛羊豕。至蝶蛾之類。殺植以保生。人。則得動植。調之於水火。能保其生。雖然。其稟性、懲慘怛。而忌殺之醜專。

故本氣保運于內、神氣爲技于外。故混然氣體、動植同有之、粲然氣體。植舍動之用。

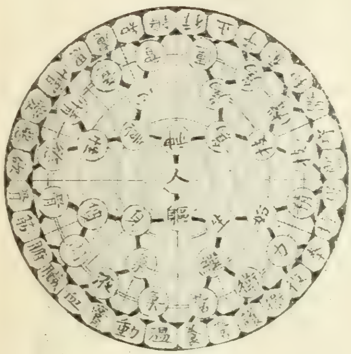
天人給資圖



體用性才天人合圖



混氣體圖　與後粲氣體圖爲一合。以觀神軀之全。



粲物

植則無意、動則有意、故氣隔溫動冷止、體隔堅堅橫輭、故植一骨液於身生、動分性爲於意技、混則沒其文、分則露其文、文者、依臟腑而成、臟者、藏氣者也、故能爲與氣交、腑者納物者也、故能爲與物接、神本分精麁、臟腑分內外、故混物、則身生神爲、動植同有之、粲物、則臟腑意作動能分之、是以動有粲物以交接氣質於是。有神本天地之氣於內、交彩聲臭味之氣於外、畜水穀便溺之質於內、接配嗣器地之質於外、神者、爲之神、運之於心、本者、成之天、持之於腎、

神爲有意、本成無意、本神以混成一身焉。雖然、神由心而占運神之地、本由腎而占持本之地、故神本之二氣、能成混粲之物、心腎之二物能成運持之氣、

天氣者動、噓噏保之於肺、地氣者實、飲食化之於肝、彩者、體之靜而有者、視之於日、聲者、

氣之動而發者、聽之於耳。

既開其竅、則各有其神、各爲其知覺。色者。目之所覺也、而色有氣質氣色、于明暗、質彩于黑白。蓋目逢至明則閉、値至暗則盲。晝則神旺、夜則神潛。自蒼蒼之天。歷歷之曜、爲物於彩、則得而見之。故目也明則辨彩於其中、暗則失彩於其中。彩者、靜而有、故常有之。聲者動而發、故時而有之。蓋彩聲臭味之氣、則意爲之所不能不用也。已不能不用之、則不能無其交器。彩者、體之靜而有之者也。聲者氣之激而得之者也蓋色則明暗與寒熱之氣偶、氣之大者也、彩則黑白與清濁之氣對、氣之小者也故人睡覺于明暗、肅舒于寒熱、見于黑白、聞于清濁。蓋彩聲臭味。物各有之。物有所限。則彩聲臭味。亦有所限。異于彼不暗則明。不明則暗。不寒則熱。不熱則寒。目、隆然洞朗、辨其彩、耳、邃乎空豁。受其聲。其氣以精居鼻舌之上。又與臭味精麁爲偶。臭者、氣之由熱而釀者、聞之於鼻、味者性之由潤而畜者、味之於舌。

聲者、激而發焉、彩者靜而有矣。臭者、動而發矣、味者靜而有矣、又各有精麁。凡物各有彩聲臭味、彩覺于目、聲覺于耳、臭覺于鼻、味覺于舌、是在外者也。且如其有于己者、彩味者。靜者也。臭、內畜而不外發、聲、內運而外發。故臭者、血肉便溺之畜、聲者思慮運爲之發、內畜之臭、外漏者爲胡、外發之聲、內結者爲啞。且夫家狗之尾人。向風鼓鼻。左右迂曲。必辨其跡。由是觀之。人之覺、通于鼓舌、狗之覺通于聞鼻。

水者、液物者也、穀者、養物者也。納之於咽、畜之於胃、便者穀之滓溺者液之汚。送之於腸、收之於脬。物從通氣而行、以神爲而爲。經則相繼、緯則相對。

衰衰而逝、故小物亦繼之而從、块块而塞。

故小物亦得偶而立。天以用而運、故小物亦以用而運。神以物而立。故小神亦以物而立。故時適、則後繼前而不絕。處塞、則天偶地而不離。故大物、則偶天地、而繼前後。水火土石、以自結而偶、資于反、繼資于氣。鳥獸艸木、以有感而植、偶華實、繼種子。動偶牡牝、繼子母。天動地止。動者以行、止者以事。故東運西轉、行乎天。冬夏晝夜、事乎地。雲騰雨墜、行乎地。發收動息、事乎物。小物之所應。運爲行、爲爲事。故分動植、則植止而不枝、動行而爲事。故植、則行于升降、事于發收。動、則手枝于事、足運于行。故有無手足者、有有手足者。而至枝其事運其行、則同一也。故天偶地、陰偶陽、絪縕無窮、雌配雄、華配實、生生不盡、生生不盡。故大物、則後繼前、寒繼暑。小物、則實嗣苗、母繼子。故偶以對、繼以往。技于事、運于行。無大小、同有之。惟精麁相隔、其狀夐別也。

配者、己之偶、交之於陰。嗣者、己之苗、字之於乳。

男女之受授、生生之氣、感子母之乳哺、生生之字育。故男有餘于生生之器、女有餘于生育之器。故精感于生生之氣、則有矣、乳非字育之日、則無矣。其腑之所納物也。

地者、我之所立、步之於足。器者、我之所用、舞之於手。

腑者納物。何手足之不納物。蓋人之爲手以執技巧、足以載軀殼。載以行地、執以技物。器地者、身之外也、水穀亦身之外也、

運爲繼偶。獲諸天地、交諸各物。故心肺肝腎、咽胃腸脬、在內之臟腑也、

臟者藏氣、故內實。腑者納物、故內虛。水穀便溺。非身之物。資繼之氣。不假此則不立。故物得此、而後釀膩液、輔溫動息者、引天氣於肺、而衞一身。其氣循環、又出于鼻。食者運地氣於肝、而營一身。滓汚爲便溺、而

送之於肮豚。

耳目鼻舌。手足陰乳在外之臟腑也。而臟者內肉、內肉雖在外、亦能爲皮所覆、腑者外皮。外皮雖在內、亦能爲肉之表。內者在上、乃神氣之所分、外者在下。乃本氣之所分。

本氣用腑而爲、神氣由臟而意。本氣爲本、神氣爲華。資始之氣、坱洋然無處、此氣也、成于有生之始、散于體解之末、首攝上質之肉、身攝下質之皮、噓噏保我、飲食養我、資繼之氣鼻口爲門戶。此氣也。成于有生之後、盡于體解之前。臟者。心肺肝腎耳目鼻舌。皆上向腑者。咽胃腸脬。手足陰乳皆下向。

而內者含意、則本氣旺此、外者用意。則神氣旺此。

目視耳聽、鼻聞舌味、用意於外也、肺保肝養、必運腎持、保意於內也、氣之用也、咽納胃畜。腸送脬收。爲爲於內也、手技足行。陰交乳孳。爲爲於外也。質之用也。然而神者在內、而外之用、氣者護外。而內之用。故神華于心、而實于腎矣、肺肝以氣保養、咽胃納畜、腸脬收送、共在內者也。皆不能以意運用者也。氣華于配。而實于嗣矣。手足以肢而行技。耳目視聽。鼻舌聞味。共其在外者也皆可能以意運用者也。故雖臟爲神氣之器、腑爲本氣之器。而內質還爲有爲之器、外質還爲用意之器。且神本迭旺、而一睡一覺、氣質相給。而一食一息。夫神本者、與生偕立、故充塞一身、而不假門戶、臟腑者得物能立。故運化氣質。能用門戶。息食之受口、爲口、爲鼻、便溺之瀉口。爲肮爲豚。鼻者、喉之口也、口者、咽之口也、肮者脬口也。豚者。腸口也。此各一物、而具二名。合統之於咽胃腸脬。非別有此文也。是以。鼻舌者、所具聞味之臟也、而鼻口者。息食之道路也、陰乳者。所具交字之生之腑也。而

肮豚者便溺之瀉口也。臟者藏氣、腑者用質。故耳目通聲彩、鼻舌受臭味、肺肝保化天地之氣、心腎運持神本之氣、而視聽、或用或體、聞味或欲或厭、咽胃通水穀、腸脬通便溺、陰乳生化精汁、手足握步器地、而手足或取或捨、精汁或有或無。夫動物者、種子相繼。先後換體者也。故發生之氣、感則得精、生育之氣、通則生乳、臟根于肝、葉于肺、華于心、實于臂、而開受彩聲臭味之孔、於頭中之耳目鼻舌、而其系上向、爲氣之用焉、腑幹於身、技於肢、華於配、苗於嗣。而開受水穀便溺之孔、於腹中之咽胃腸脬、而其系下向、爲質之用、臟者親神氣者、資養於肺肝之息脈、腑者親本氣、本氣者、資養於咽胃之水穀、故神本之所養皆在內、所資皆在外、神者、發氣於耳目鼻舌、本者、發爲於手足陰乳、故內者爲天之用之器也、外者、爲人之用之器也。

動植本同生、豎立橫動、汲露意爲。故植、著地豎立、直當寒暑雨暘、是其以長本氣也、動離地橫行、假巢窟飲哺、是其以長神氣也、長于此、則短于彼。二之勢也。故植、足于自護之本、故保養任之於自然、動乏於自護之本、故保養仰之於營爲、豎植、不假輭植之榮枯、豎動不假輭動之飛走、偏各保其天也。夫生之處、則水也、燥也、而水則非我之處、生之類、則動也植也、而植則非我之類、然而本生、則天地水燥、餘生則分依小物、陸。日影、爲寒暑晦明、水燥、爲雨暘煦液。故水動。比諸陸動、則陸動、得絪縕之和、文具神富。岐形多技以有聽明之神、分之則鳥輕獸重。獸靈鳥頑。鳥以手爲翼、以翼行身、以足執事、獸以翼換手、以足行身。然而鳥則富本氣、獸則富神氣、乏神氣、則足本氣、故羽、步翔自在羽翼自護、陽于產啄、拙于謀慮、富神氣則乏本氣、故獸、步而不翔。營窟有假產、少乳久思謀漸巧、蓋陰陽之態。

不能兩長。故有餘于生者、不足于文、有餘于文者、不足于生。是以陸植多於水植、水動多於陸動。故海動陸植、生子數萬。而陸中獸寡於鳥獸中。穎悟莫勝乎人。獸猶一胞數子。人不過一胞一子。以故。則人當最寡。雖然、以智力有勝、以能致蕃滋。終運爲、其神取天地、爲我有。以萬物爲我器。以神氣之長、而本氣不能自立。產乳最難。疾病最多。外護內養、都補不足於神氣。故架木覆茅、以禦風雨。績麻繅繭。以防寒暑。鑽燧引火。鑿井出水。煮海取鹽。墾土歛穀。攻痛痒於醫藥之營。養饑渴於調和之爲。不假屋宇、則不能當雨暘。不假屨屐、則不能踐土石。可觀補本氣之不足於神氣之有餘。故贏於此者、儉于彼、贏于彼者儉于此。雖彼此相儉贏、而於所成則全也。一二之故也。故雖同具內外臟腑、雖同具營爲技巧、莫與人爭能者也。然而於通塞巧拙、則各有也。

物自具氣。神自用物。所以鬼神之體物而弗遺。萬物各存鬼神也。無意感求爲性。知通爲神。有意情慾爲性、意智爲神。雖同是性神、天人不同也。蓋人者、有意之統名。禽獸蟲魚、亦皆具意。惟以物殊、而氣殊也。通塞不同也。故彼無我之神靈之通、鼓舞之巧。通于此者、塞于彼。條理之道也。是故、物厚于氣感、人深于知通。其以氣感者定矣、磁之指南、水之就卑、雞之知晨、燕之智春、如期然也。其以智通者變矣。雖好惡思辨不別、感應運爲不同。故意通氣感。跡則反、理則同。人者、思之而覺、慮之而通、學之而能、謀之而爲、物者、可知者自知、可能者自能。鳥之伏卵、隔殼知其化、啐啄相得。無誤之者。若索之於智慮、雖能知之、寧保不忘失哉。若夫食色動心、睡覺轉智、亦人之氣感。而意智之隨也。雖人則有意也、亦平分無意。故雖於思慮智辨、經營動作、則知之、

於運持保化、老壯病健、則不識焉、分者、物也、有者氣也、物有天地鬼神之由、事有感應氣質之用、故日月有行、寒暑有序、南北有方、天地有位、物之體也、常也、日月旋轉、寒暑往來、南北造節、天地相通者、氣之用也、變也、故鬼神、以天地為體、天地以鬼神為用、故神者、為水、為火、為有意、為無意、天者水成、火成、有意成、無意成。

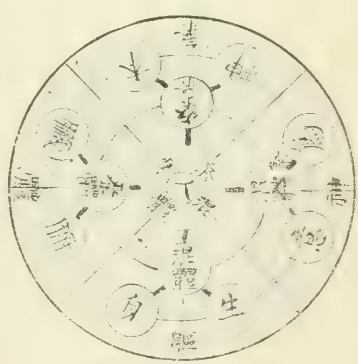
而穎悟多文。與天地張勢者。惟人有焉。故摶獅雲霄、繳而及之、潛蟄幽壑、餌而鉤之、含牙戴角、服而役之、利觜鉤爪、繫而檻之、曆象日月星辰、經界山川丘陵、於是江海山原。金木土石。艸木鳥獸。魚鼈蟲豸。莫非己之用者。能轉聲音、而萬事物、擧認之於言語、能役手脚而萬技巧盡運之於營為已、而造字、而記言語於指頭、製畫而認物象於目中。我有於天地、而我亦有天地張勢。則天無意而成、人有意而為彼開天境、而物盡居其中、此開人境而已獨立此中。是以天之為境、無意而成、人之為境、為而不成、神運于內、為營于外、取彩於目、取聲於耳、取氣於鼻、取性於舌、運技於手、用行於脚、通交於陰、為字於乳、意之外用也、噱噏保天氣於臟中、飲食化地質於腑中、噱噏飲食、給天之生生、意智情慾、成人於其中、為之內用也、

鳥、技在觜脚、獸技在齒爪、惟蹄指者、技在口鼻、不利爪齒者、技在手指、然而魚則施之於鰭尾、蟲豸則變化萬狀也、且諸動之於聲亦技也、而鱗保少用聲技者、鳥獸少無聲技者。至若餘生羽類有無聲者、有則發之於羽、豸類多無聲者。有則鼓之於喉。至鳥獸而後噢噱哀樂用之於聲。及人之有意多智聲之於技。與體技半。

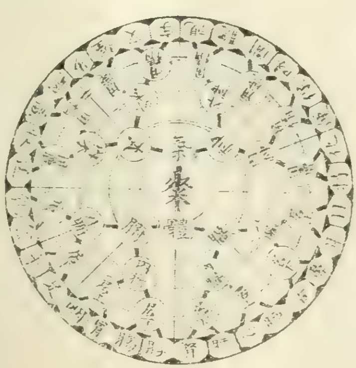
言語為文章、營為成事業、意智則思慮智辨也、情慾則愛憎欲惡也、故知有通塞信疑、辨生善惡是非、思致予奪殺活、慮成正詐安危、

思辨好惡。融而不分。神運變化於此。粲物者由門室而爲行居。爲混物。能執其役。故彩聲氣性者。氣之交我者。配嗣器地者。質之接我者。物厚于氣感。人深于意念。意念之所運思注。而嗜好淫念僻焉。情厭而斁惡棄捐出矣。以本氣之弱役意念之深。故憂樂失節。疾病內釀。其於保天壽也則不逮于物。利我則損彼。快我則困人。彼我反用。勞逸殊塗。是故聖人觀則於天地。以立道。開爲於設施。以制禮於是。其位可立。其分可守。其道可行。其宅可居。物有制度。事有法則。由適否而生悅怨之心。而以擇善惡。由當否而分榮辱之智。而以擇是非。知之以學。修之以禮。

混粲氣體圖



粲氣體圖



天人交接圖



梅園三語

贅語

反觀合一捨心之所執依徵於正

乾隆四十三年戊戌三秋吳超程赤城書

贅語自序

晉雖之於稽古而徵諸天地則有矣。夫我以天地居。以陰陽立。當善惡之衢。遊天人之際。舍之弗講。則亦罔焉也已。於是著天地陰陽善惡天人四訓。而且身生罔於條理之道。死生惑於幽明之分。於是身生死生閒於其間。以訓爲綱。條論鱗次其後。其言而不足。猶加解通。夫我說非于天地邪。人駁我也可。我說是于天地邪。人與我也可。我說是于天地邪。人駁我也誤。我說非于天地邪。人與我也惑。玄語已草。猶喋喋不已。爲之贅者。當天明丙午孟冬識。

贅語總目

贅語總目錄

總六帖十四冊七十篇十有四萬言

(有圖)

附錄

復高伯起書

贅語一天地帙目次

贅語一

天地帙上

日本　鎭西　三浦晋　安貞　著

若使其身長於雲霧。則不以陰晴煩己。又以其身置蒼蒼之表。則觀日月星辰結著地。又使其壽從袞袞而不盡。則見古今於旦暮。今人以生死闔闢己之天地。坐十字東西之上。以望天於碧琉璃之中焉。而天下之人。皆開眼於斯。晋以此爲一大疑團。三十年不融。既而知世紛紛之說。不足爲家珍。仍求諸條理。以作其說。然性墮不學。乘除視短。不辨嘒嘒。故於日月之行。星辰之象。則不能自徵悅目於自門入之珍。於是自愧矮人之觀場。笑語自人焉。

天地訓

一具二。故混而粲立。二分一。故粲而混成。一

神物

宇宙

機體
色性

者性也、二者體也。性能偶物、而性剖體、物偶氣、故性一克具氣物、體二克成氣物、物混淪立乎神、神鬱浡活乎物、物是體之根、神是性之英、以立呼物、以活呼神、亦不他也。是故一性分體則陰陽、是之謂一氣、二體立物則天地、是之謂大物。性體立氣物、能剖能對、是以氣物立物於體、一一反體於物、不反則不成神物、反則爲活立於是。一性、二體隱沒反痕、神物見露、神者天神也、天冥然而神之活見、物者天地也、天邃乎而物之立露、神物即天地之大分也。蓋一之剖一一者、經也、一一之對于一中者、緯也、剖對託物、其眞沒焉。宇宙以成、經緯可見、神者活而行焉、物者立而居焉。宙開其路、一長通氣、鬱浡于衰衰通爲時、宇成其宅、一大結物、混淪于坱坱塞爲處、物中、體分機體、性分色性、機體便天地、色性便象質、體者物也、以虛實成天地之體、機者非物、以動止成轉持之形、於是天中能轉、持中

機形

能持、故機體合物、而虛中能動、靜中能實、有物則有性。是一一之常。地性漏于潤溼之液、天性漏于光明之華。華液便象質之謂也。虛者其氣淸矣、而託濁於地、實者其性潤矣、而送乾於天、於是地液爲質而性也、天淸爲象而色也。性反乾潤、成燥氣水、質之天地、色反明暗、成影氣日、象之天地。天地各有天地、而萬物成于此中焉。象者其體屬虛、虛而非虛、是以邑也、質者其體屬實、實而非實、是以性也。體合天地轉持、性合日影水燥、水同性於天之影、而地上以燥而偶、日同性於地之燥、而天中以影而偶。於是水燥塞於下、日影充于上。天地者、成體者也、轉持者、爲形者也。天體本虛、何以觀其圓、氣動而西、象動而東、假路於斯、地機本止、奚以觀其直、雲昇而散、雨降而聚、假路於斯。假路者、非爲路者、假路者龕、爲路者精。就龕以觀精。又焉能逃。是以其虛之圓、止之直、形之正也。龕則形亦斜也。斜

十字

者一橫一堅也。規矩始見、邪曲盡變。於是地直圓其外、天圓直其中、而轉氣之矩、北也、爲止軸、運象之矩南也爲動軸、動軸反止軸。東西運轉。是以止軸之中線一規、西中也、渾儀赤其規、謂之赤道、動軸之中線一規東中也、渾儀黃其規謂之黃道。於是止軸西轉氣質之氣而守、動軸東運、氣象之象而環。二規相斜絡而二分、則日麗其衢、二至則日遠之規矩中分之、爲弦弧之勢。地守己之弦中、而成其圓境、日占己之弧中、別開其圓境、氣質氣象之雙天地。一其根株、連環其輪軸、故日影統於天地之一守心、天地分於日影之異弦弧、而人得一撮土而居。以其半面天地爲我全天地、不知地心即下。直直相當、終其視天若圓蓋、視地如方輿、因指運環之規矩、取方於轉守之規矩、於是分止軸之兩端、爲北爲南、指西規之兩界、爲西爲東。衡從畫十字、便方位於指授。是先儒之所、比南北於瓜之蔕

水燥　轉持　二境

臍者。而衆之所各別東西者也。日影以東西代其行、水燥以坳突分其處。突者山嶽原野、燥占之、坳者川谷湖海、水占之。動者外轉、止者內持。轉能保外、持能營內。轉之於持、猶輪之依輻、持之於轉、猶軸之居轂。東西乃轉中之事、昇降即持中之事。轉者、淸矣涼矣、運轉氣象、整齊以爲歲焉、以拒濁而禦質也。持者、濁矣溫矣、昇降雲雨、錯糅以爲運焉。麁氣而結質也。譬之猶一紅炭在寒風中、炭外自帶一團之火氣、溫濁在地、猶燥熱在炭、淸冷在天、猶寒在熱外。雖均是天也、其不同如是。彼轉、此持、彼圓、此直、彼淸、此濁。日月星辰、羅乎彼中、雲雷雨雪、行乎此中。混淪一大結物體者散結、性者發收。水燥與天地同直圓、而噏噴合散結、故或同謂之氣質焉、日影與天地分弦弧而發收異噏噴、故別謂之氣象焉。是以日影天地之張勢也。地結于弦中、而天散其外、日發于弧中、而影收其外。萬質從地之

剖析

重、皆聚而著地、萬象從天之淸、皆散而居天。
體境、天爲巓、地爲趺、色境日爲巓、影爲趺。故
體境則天廣地狹、色境則地廣天狹。日之與
水。隔天地望對。而水與燥偶于地、日與影偶
于天。天中景影分處、星辰散布之、持中水燥
分處、動植生化之輪雖大、而軸雖小、而具不
可闕之用於車則同焉。於是乎日影雄于天、
水燥雄于地、月景雌于天、滊火雌于地也。雖
雌雄各有不可闕用於造化則一也。天地立
物、象質著氣、而物之在其間、各從其性。故在
天者、輕而乾燥淸明、在地者重而潤滊暗濁。
重者不得不就地、輕者不得不之天。故動植
混處于水燥、星辰分處于景影、體界之趺、止
而占地於弦中、色界之巓環而占天於弧中。
故地客弧、日客弦、且機於天地、則天動地靜、
於日影則日動影靜。諸質之在地、在水者平
俯、在燥者竪立、諸象之在天、在景者相重、在
影者相並、並者一脈絡、與地之凝結山川似

境別

剖析

焉。色境日以象成天、比天之轉而不住、影以
氣成地、比地之靜而能定。地者靜而止焉、以
轉爲其行、日者動而環焉。以影爲其居、天者
散陽也、而陰影充之、影自無際涯向中而收、
由收而地質結于弦中、由弦中結質、而火發
而燃于弧中。地者結陰也。而陽氣生之、陽自
無內中向外而發、由發而陽氣解于地表。由
地表解陽、而水結而向弦中、地之性潤、而其
氣寒焉。故以乾熱歸之於日矣、日之體明而
其用照焉。故以暗蔽歸之於地矣。日發不匱、
由天陰圍而聚其陽焉。水化不盡、由地陽噴
而疏其陰焉。影爲日所發而退、燥爲水所逼
而昇。日光及者景、而與影比、水氣動者滊而
與燥比。日表噏陰而成質則月、而與日比、質
上逐陽而成象則火、而與水比。水與地合形
理。故燥沈水、水沈地、日與天分形理。故日發
景、景發影。天影地水同其收性、天日地燥同
其發性。是以燥似日、影如水、燥陽而解、無體

我居　爲成

而溫、火陽而發、有象而熱。水陰而結、有質而冷。影陰而收、無體而寒。並立爲絪縕焉。蓋地者以實爲其體、天者以虛爲其體。日地結于弦弧、色體爲一連環。於是地質成實毬、而水火充其表。天運爲虛毬、日月行其中。地毬之體爲主、而水火之遊依之。日月之偶爲主、而運行之毬成之。持中者我之所居。望日光不及之影、於杳渺以爲蒼天。平望一圓球之地於半面、以定八紘、外其水以居燥中。故持中則水燥之間踏實毬、戴虛毬。燥靜則恬、動則風、水降則雨、潴則海。仰瞻氣西象東。日明影暗、錯綜成章焉。日景當地、謂之晝。日入影蔽、謂之夜。日近而暑漸、之謂夏。日遠而寒旺、之謂冬。東西南北之行、乃神爲。晝夜冬夏之痕、乃天成。故神西轉、而天成逆行之日月。神東運、而天成順行之日月。運轉之各周、步回而復者、則得三百六十五而贏。於是經緯之度、時候之步、可數者生焉。西法則除其奇零、爲

周天三百六十、共本日行便是人之數、成于天者也。於是地上歲日之所成、極北之地、我春分而見日於地上、橫回不暮。一百八十餘周、過我之秋分、而全不見日於地上、冥曚不曙。度我一百八十餘日、於是極南之地、方見日於地上、橫回不暮。一百八十餘周、又全不見日於極南之地。故當二極之地者、一歲代爲一晝夜。地之當中線者、見我之冬至之日於南、見我之夏至之日於北、而見我二分之日於頂。故三百六十餘周之日、一南一北而二中、一年遂爲二熱二涼。唐咸亨中、有僧義淨者、西遊記其風土、寄歸曰、室利佛逝國、春秋之中、日中人立、並皆無影、日南則北畔影長、日北則南畔影長。是乃當其線之地。今依地圖考之、則南海諸島之地爾。中線以北、則斜望南至之日、以爲冬、仰瞻北至之日、以爲夏。中線以南、則斜望北至之日、以爲冬、仰瞻南至之日、以爲夏。故南地春、則北地秋也。南

人蕩。則北人裘矣。自中線而南北。氣候同。而反其時。中線一路。晝夜平均。日一南一北。源熱雷雨毎行。蛇蝎蚊虻恆不蟄。艸木蚤榮。種穀數登。自此漸相近兩極。則夏日愈長。冬夜愈永。暑淺寒多。動植難滋。日長之至。極於不暮。夜永之至。極於不曙。北極至南極。相距一百八十餘度。以中線折之。九十餘度。其間寒暑成於地者。二熱二涼、至一寒一溫。晝夜成於地者。三百六十五。至一晝一夜。唐太宗。收至骨利幹。置堅昆都督府。其地日沒而後天色正曛。煮羊脾適熟。則日已出。蓋自極北漸南。則晝夜漸多。是日光漸隔於地體也。是以混淪一球。北行則朞日稍不足於三百六十五。南行則稍多於一晝一夜。是以熟羊脾而曉之地者。必有熟羊脾而曛之日。日照一邊。則影蔽一邊。日西轉。則影東移。故從日無夜、追影無晝。立而將迎者。而各見旦暮晝夜。與我距一百八十餘度之地者。與我反晝夜。與

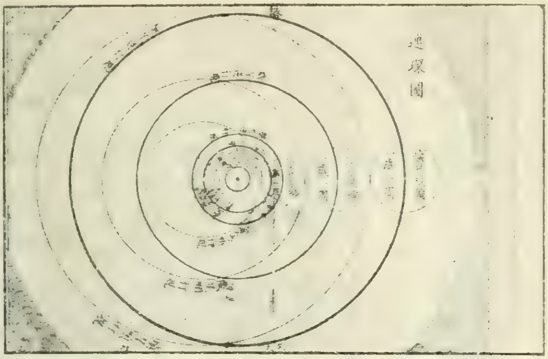
食

歸人

我距九十餘度之地者。日暮我之晝夜。是以日有多少者。由南北有常處。時有蚤暮者。由東西無定位。地有水火以居天。天有日月以周地。火雖微。亦水之敵。月雖微。亦日之敵。故月火不得相離、日水焉。以日火同性。而燥物應日。以水月同性。而水物應月。火者生地。而雷爲大。故雷居夏之極。水者化天。而氷爲至。故雪居冬之極。而日月乃天之水火也。天乏于水體。地乏于火體。水火升降。日月先後。朔則相會。望則相望。日周天而紀一歲。月會日而紀一月。朔而同經緯之度。月蔽而不見日。地顯其本色。望而同經緯之度。地隔而月失明。月顯其本色。乃神之所爲。天之所成也。一氣絪縕。而生化通其中。物曰立。氣曰活。活而通。以見神爲。立而塞。以見天成。造化經爲事物緯成天。中常恆之體。唯見循環之行。持中代謝之物。常露鱗比之跡。於是持中風恬山海之處。上和雲雷雨雪。下化堅輭動植。今之

活通

譚天地者。舟揖親探山海。推步實測日星。智力思量之所不至。拔擢閎閎然而止。取偶人以比之於活人。耳目肢體雖髣髴。而精神運用邈焉。見物未察精神。惡視其神焉。宇宙分經緯。天地具活立。合之則粲然示條理。分之則混然沒鑄縫。達此則活。融此則通。



序

蓋天

周髀

諸家第一

人之託身於宇宙。不過蜉蝣之一日。而騁目於天地。猶熠燿之炤大澤。乏于測驗。弗熟推步。豈易知矣哉。言天者。明張鼎思瑯琊代醉。載八家。曰蓋天。曰宣夜。曰渾天。曰軒天。曰穹天。曰安天。曰方天。曰四天。然諸說未止於此。請嘗論之。漢蔡邕曰。古之言天體者三家。蓋天。宣夜。渾天。宣夜絕無師法。周髀多所違失。渾天近得其情。今史官候臺所用銅儀。則其法也。按晉書天文志。周髀即蓋天。其本庖犧氏立周天之歷度。其所傳則周公受於殷商。周人志之。故曰周髀。髀股也。股表也。其言天似蓋笠。地法覆槃。天地各中高外下。北極之下。爲天地之中。其地最高。而滂沱四隤。又同書載周髀家之說。曰。天圓如張蓋。地方如棊局。天旁轉如推磨而左行。日月右行。隨天之左轉。譬蟻行磨上。同稱周髀。然前說則以地爲滂沱四隤。後說則以地爲平如棊局。穹天

論虞喜之族祖。河間相聳所立天形穹隆。如雞子幕周接四海之表浮于元氣之上譬如覆奩以抑水。其不沒由氣充中日繞辰極沒西還東不出入地中。斗極之下不為地之中斗極傾在卯酉之北雖是與周髀異亦見半面而不見半面以地為突起則同也。梵家說須彌曰。風輪載水。水輪結金。金輪之上。蘇迷盧處中。鐵輪圍山周匝外自蘇迷盧數而第八山之外。鐵山之內。鹹水湛之其間有州曰東弗于逮。曰南瞻部。曰西瞿耶尼。曰北鬱單越。統名娑婆世界。日月繞其半相為晝夜。故其下者日月臨照。其上者日月倒射。雖然無如何樞紐一星常懸不移者。或夫梵地偏南。蒙氣曖曖。不見極星邪。是又比之周髀則突起者愈高。四遊之說。鄭玄註考靈曜以為地厚三萬里。天徑正半一十九萬三千五百里。地與星辰四遊升降乎其中矣。是以地為動者也。軒天又作昕天。吳太常姚信立徵於人

之頤多臨胸。項不能覆背。觀天體之南低入地北則偏高。冬則極降。是以日道南低。夏則極升。是以日道北舉。是以天為昇降者也。而復與前說反。浮屠家為五種風吹轉日而行者。唯見日西而不知其東也。春秋元命包曰。天左旋。地右動。是以天地同歸動矣。明黃石齋曰。地轉天靜。是之為戾之極。雖然吾逢舌人聞之。西洋百年來。說天以日為心星辰月地同周日。立其說者曰くとろめんす。其儀曰動地儀。云構思百端。不得于條理。恐謂日地分弦弧守其中者焉。渾天之說。說者歸璿璣玉衡。書曰。舜在璿璣玉衡以齊七政。其窺日月正歲時者可識矣。其製與渾儀一耶否耶。未知也。晉志曰。春秋文曜鉤云。唐堯即位。羲和立渾儀。儀象之設。其來遠矣。史官禁密。學者不覩。故宣蓋沸騰。暨漢洛下閎鮮于妄人。耿壽昌等。造圓儀以考歷度。和帝時。賈逵繫作。又加黃道。順帝時。張衡製渾象。具

內外規。南北極。黃赤道。列二十四氣二十八宿。中外星官。及日月五緯。於是渾儀之制極巧。其後陸績修。至吳時。中常侍廬江王蕃。依劉洪乾象曆。修錢樂。李淳風。張思訓。郭守敬。世相繼修之。法漸密。逮明人立黃極。最密。不能使地不動。渾天能圓天。而不能圓地。蓋天雖不得其半。有顯其顯。措其隱之意。與蓋天。作齊楚之得失。故淸梅文定。論之曰。自揚子雲諸人。主渾天。排蓋天。蓋說遂詘。渾天雖立兩極。以言天體之圓。而不言地圓。蓋天以天象蓋笠。地法覆槃。極下地高。滂沱四隤而下。則地非正平。而有圓象明矣。故其言晝夜也。曰日行極北。北方日中。南方夜半。日行極南。南方日中。北方夜半。東西同然。此即西曆。地有經度。以論時刻早晚之法也。中衡左右。冬有不死之草。五穀再熟。北極左右。物有長生暮穫。即西曆以地緯度。分寒暖五帶。晝夜長短。各處不同之法也。如曰中高四下。及天如倚蓋。即中國之所見。安得以辭害意哉。故寫天地以圓器。則蓋之度不違於渾。圖星象于平楮。則渾形可存於蓋。唐一行。蓋天圖法。元郭太史。異方渾蓋圖。西曆平渾儀。皆深得其意。故渾蓋之用。至今日而合。是雖於蓋天微加回護。於論二說之得失。則得其平。水者與火爲伍。在有限地中者也。天者塊塊一氣。豈爲物所浮哉。渾天觀物未融。以爲水以載地載天也。晦菴辨其說曰。天外無水。地下是水載。亦與混說爲伯仲。元朱丹溪。亦曰天氣運外而攝水。地形居中而浮於水。是皆以水爲平。爲大於地。由所見而誤者也。

方天

方天。則王充據蓋天。以駁渾儀。謂天與地共平正。北極爲軸。我居其南。故日出東方。則入西方。出南方。則入北方。天形非穹隆。以遠似低。日之隱見。猶把炬行曠野。近則見之。遠則弗見。是併天地爲平者也。

宣夜

宣夜。蔡邕以爲殷代之制。絕無師法。雖然晉志則引宣夜之書。曰。漢祕書郎

安天　正天　靜天

郄萠記師傳云。天無質。無極爲蒼。蒼譬之遠山之青。溪谷之黑。非其眞焉。成帝咸康中。會稽虞喜。因此作安天論。天高窮於無窮。地厚測於無測。天在上。有常安之形。地在下。有居靜之體。其幷天地爲安靜者。未爲失之。幷天地爲平者。失矣。其他晉書載魯勝正天論。唯言立晷測影。日月之徑百里。星之徑十里。而已。蓋水火之所居、之爲實毬、日月之所運之爲虛毬。虛實雙毬。合全地球。經星所居之天。與之遼絕。以爲天毬。以容虛實一偶之地毬。故自地度推攟。則雖日月大而星象小也。若自傍比較之。則日之於星。將如星之於日焉。豈可謂之正哉。西洋言天有九層之說。於宗動天上。立一層之靜天。漢黃憲著天祿閣外史。曰。天者淸明不動。動者日月星辰之運也。天外也。日月內也。內則以日月爲涯。故躔度不易。而四時成。外則大虛無涯也。無日月。無躔度。終歸于虛。夫除日月運轉動之不可推。

海窖

靜亦不可言也。無涯之天。莫非氣。無痕有痕。不可以分虛實。歸動於日月星辰。歸靜於不地之處。黃憲亦虞喜之徒與。然此書繫僞作云。則其人不可責也。求得條理動靜虛實。反跡同居。若沒動實之跡。靜虛亦不可求矣。外史觀精而爲靜。西洋出動而說靜。宣夜舍動而說靜。雖其說有雌雄。其弗獲乎靜則一也。

夫川谷滾滾。瞳子之明。不盡海矣。見其生而弗知其化。驚其汪汪而苦其智矣。故列子意。歸墟受八紘之水。莊子意。尾閭泄萬川之水。受畜之於何。地泄瀉之於何處。何其見天地之隘。知生化之罔哉。其所謂歸墟尾閭。本於海人語海窖邪。海窖者。海氣之道路。內有納氣之大遂。地表通水者。川谷也。地中通氣者。遂道也。古人曰如菌瓣蜂窠者。是也。其通陸者。氣鬱而爲火。達而爲風。其通海者。便海窖。氣吐則奔騰滂湃。起潮汐泝陸。氣噏則衰衰蕩蕩。爲渦受水。浮屠氏所謂劫火燒世界。渾

天所謂水浮地。皆異旨同病。要由弗知對待而已。弗知而窺窬。於是妄生意見。不鑿則誕矣。鑿者局促糢糊。誕者洸洋自肆。故須彌終歸于沙界。九州竟盡于瀛海。不得則言六極之外。存而不論。其曰不論者。非智窮之言。而何。素問者周季之書也。爲黃岐之問答。曰地爲下否乎。岐伯曰。地爲人之下。大虛之中者也。帝曰憑乎。曰大氣擧之也。說地體者。此說爲最。黃帝舊矣。三墳五典。倚相之後不聞誦之者。此說雖善。而不先于璿璣玉衡。且退考其書。或以木火金水說四方。或又曰。天不足西北。地不滿東南。然則其謂之大虛之中者。亦非定見也。呂覽曰。當樞之下。無晝夜。白民之南。日中無影者。似若有所試者。讀淸梅子曆學疑問補。曰漢趙君卿主周髀算經。時未有西法。而已有北極下晝夜爲歲。赤道下穀能再熟之說。與歐羅巴實測之算相應。然後知周公受學商高。非無本焉。由是觀之。則古

已辨其大體。中古竟失其所傳邪。而梅子由有是等之說。遂謂西學之源流。本出于漢。是好勝自誇。漢士之態也。今居其間者。猶不能存提耳之丁寧。而爲以重數譯外之發明。由己之朦朧之說。獲之傍人。豈信焉哉。爾後程正叔推理而察地之爲天中之一物。郭守敬見極而悟地之爲一圓塊。皆卓見也。方圓之說。太戴之天圓。呂氏之圜道。皆以天地之道爲方圓。而不及于天地之形。莊子則以圓爲天時。以方爲地形。考工記曰。軫之方也。以象地也。蓋之圜也。以象天也。宋玉曰。圓天爲蓋。方地爲輿。靈樞邪客篇曰。天圓地方。淮南兵畧訓曰。圓者天也。方者地也。晉志引周髀曰。天圓如張蓋。地方如碁局。是之爲據。又按易說卦曰。乾爲天爲圜。坤六二曰。直方大。不習无不利。若以此爲經見之證邪。不亦支離乎。至若起世經有日體正方。月形圓滿之說。則方圓反在月日。至王充方天曰。日火之精。月

水之精。水火在地不圓。在天何故圓。奪日月之圓去之。至若含神霧。有天地東西則二億二萬三千里。南北則二億一千五百里。上下則一億五萬里之說。則方圓亦癈。天本無極。里數不可言焉。然晉書爲東西南北各二億三萬一千三百里者。猶未失其圓也。蓋物之營巢窟。善爲圓。人則善爲方形。慣爲方形。疑天地於方圓。直者自然成。方者出造。爲直可爲方圓。方難爲直圓。直也。置之則天圓混成。而垂則直。橫則平。轉則圓。折則方。衡從定四方中立成六合。直與圓同成。則圓亦與直混成。是故。中歸一點。昇降運轉。莫不本此。非如半天之諸星。環拱北辰。而猶半天之諸星。背向南辰之類也。故外能成渾淪之圓。以成其天。是以直圓之爲形。輾轉欹側。同其形方也滯直圓。輾轉欹側。不同其形。所出於造意也。且扁而方者。四隅二面。方而方者。八角六面。焉爲盡天地之數。焉足語無窮。惟直與圓混

歸正

成。規與矩槃立。正斜變化。無有遺形。方者有隅。有隅者必盡。盡者不足語無窮焉。天地渾圓一球。其說根于璿璣玉衡。髣髴于渾蓋等。獲于元之西域儀像。成于西洋之親測。元時所獲者。乃札馬魯丁之所獻。曰以木爲圓球。七分爲水。其色綠。三分爲土塊。其色白。畫江河湖海。貫串於其中。畫作小方井。以計幅員之廣袤。道里之遠近。其小方井則經緯之分度。貫串則繫南北二極者。則宛然。今傳西洋地球之製也。西洋之學一入。歲差歸星之東行。月食定于地影。環海之洲壤。地上於几案。南極之蒼茫。星歸於指掌。於是滿天之星象。張羅而獲之於其目。渾輿之地理。布枰而取之於其罫。渾地觀之於西圖。一圓球中。有大壤二。一在北。其東邊亞細亞。其西邊歐邏巴。中邊利末亞。一在中。曰亞墨利加。分部於南北。而南溟渺瀰之際。探索未盡。唯島嶼羅列。歷歷可摘。測驗符。聖製合。舟楫之所通。象胥

皇和

之所接。何假搏風之翼而圖南仗鄧林之策以極西。

皇和第二

渾地北壤東南海中之一洲。卽是和。和之爲地。常幾見極三十五度太。起於蝦夷之南。見極四十度而爲奧。三十度而盡於鎭西之南邊。西北則阻淸及韓。迤南則島嶼陸續。以抵流虬。東南之表洶涌蓬勃。波浪呑天。所謂大東洋者是也。洲之大形。神武天皇以爲如蜻蛉而後。世如琵琶云。圖書編如獨鈷云。拾芥抄 但近西肥。西川子。著水土考。云如游龍者幾矣。其地不接鴂鳥不育蝎蠍。虎豹之彙。唯聞其名。豬羊之肥。偶獲其種。而能遂其生。進則服敵。退則自守。法輕而治。家世而榮。幅員恰好。顧足自保。上下不改。足以寡亂。肅愼之楛矢。終橐之。遼東之蒼鷹。供貢獻。隋雖强而我抗其禮。元雖猛而我鏖其軍。

華夷

國常立則藐矣。自 諸 册之尊。獲自凝之島。神裔相承。 例聖相繼。不復識其歷載。政自廟堂下。垂衣裳。御宇內。中葉 天子。雖倦政委之幕府。北辰之尊。衆星共之。 寶祚之隆。與天壤無窮。分定之故也。彼古稱東方有君子之國。衣冠而治。孔子欲桴浮海。且曰。君子居之。猶謂之無明據乎。渉此東洋。除我其孰。唐人以爲君子國者。雖固贊粟眞人之言也。而唐則玄宗稱禮義之國。宋則太宗稱有古之道。何負其名焉。中外之稱者。自我所居而立。華夷之辨者。自文樸而分。我方大璞未琢。光彩猶韜。儒生雖抱賈生之嘆。人主常執漢文之恭。觀彼之爲國。道德文物。堯舜魁之周孔殿之。聲聞之所及。牽而望之。況四通八達之地。山水佳麗。人物鬱郁。智黠力强。是以。彼常睥睨四國。如臣妾奴隸。至一旦力竭勢窮。變服改容。我竊代彼愍焉。夫彼此同戴天同履地。我自立正朔。我自保邦境。其相聘問。

善隣之禮也。故周公曰德不加焉。則君子不饗其質。政不施焉。則君子不臣其遠。我遣聘使。則彼以爲入貢。分處於日之出沒。各帝於其地。伯仲其位。豈我倨彼哉。故

舒明之朝。馬養待唐使曰。天子所命之使。到天皇朝。唐玄宗稱我　皇曰主明樂美御德。典禮可觀焉。蓋我之通彼也久矣。後漢書則爲自武帝滅朝鮮。武帝則當我

開化天皇。又曰。光武時通使。光武當我

垂仁天皇。天明甲辰。二月二十三日。筑前那珂郡志賀島農夫。墾田得一印。方七分八釐。高三分。紐頭刻蛇。高四分。精金以製之。刻曰。漢委奴國王。古時鎭西之豪長。稱國王以貢獻漢者。蓋有之焉。而此印沈埋邊鄉。此事於我國史不見之。漢志則數言之。魏晉之史稱卑彌呼者。乃

神功皇后。　皇朝通彼之初也。上此則論衡曰。倭人貢鬯草。則復出

神武之前。上此則出山海經。或似自唐堯者。松氏異稱日本傳曰。太平御覽引魏史爲自上古使詣中國。而今志則闕如。通而考之。雖事屬渺茫。其通彼蓋久矣。彼大我小。彼文我樸。是彼之所以常倨我也。王維送晁卿序曰。同儀加等。禮在王侯之先。掌次改觀。不居蠻夷之邸。唐人之待我也如此。而宋齊梁間。史之所載爲甚怪。其說曰。我世修貢。彼授爵曰。安東大將軍倭國王。宋順帝時。有倭王武者。上表曰。臣雖下愚。忝胤先緒。夫我以推古之女主。會强盛之隋。而猶不受屈。况乎是時當我

雄畧天皇之御宇。　皇者英武剛毅之主。彼者江左偏安之君。我固無入寇之懼。彼豈有及遠之德。何以舍　天日嗣之尊。甘臣僕於彼。或是日本國王良懷之類。非我之　皇朝之事。唐書曰。直隋開皇末。始與中國通。通問非始此。而曰始通。可以正六朝之濫記。夫我

皇帝王

邦瞰彼者豐臣氏。臣於彼者。足利氏也。明代我邊海之亡命。與彼姦商貪賈。相扇揚。爲剽掠。彼爲之設海衞。亘數千里。其害至與北虜並稱。彼惡我之始也。然實是艸賊姦宄。若不然。則至我國史野史家乘。何弗見侵彼者。蓋足利氏之覇。莫非蔑皇家矣而鹿苑窺王綱之弛。反私明主。以受其爵。義教相承。遣書曰貢。茆不入。不知足利氏何由有貢茆之典於朱氏。至義政則靦然曰。日本國王臣義政成。夫覇主雖實掌握天下。而官則大臣。職則將軍。而王於我。而臣於彼。辱國體孰甚焉。豐太閤掃清四海。問人臣之極。以自進於關白。而欲取明帝之。毫無不臣之意。當鷄林乞和。約封於明主。行長惟敬誤事。明主册封日本國王。册辭亦倨。太閤大怒。叱曰。我何問王於我于汝乎。和議破矣。雖事出橫恣。比諸鹿苑不可同日而語也。蓋其曰皇。曰帝。曰王。竝有天下之稱。唯以世異稱而已。曲禮曰。崩曰天王崩。復曰天王復矣。告喪曰天王登假。措之廟立之主曰帝。晉按。此本兩章。上章。周之制。而下章。古之制也。蓋人主之稱。皇爲最古。而帝。而王。皇不知存沒之分。帝徵此則沒後之稱。生前唯稱堯稱舜。書之稱帝者。蓋追稱而已。夏殷之交稱帝王。周語所謂夏王帝辛之類是也。雖是非措廟立主。而帝則沒後之稱。不然則同主重複。蓋古者措廟立主。以曰帝。猶周之葬後稱謚。呂刑曰皇帝。蓋亦是之義也。不然則皇帝王奚擇。措廟立主。以稱帝。則帝則人主之鬼之名。鬼神本一物。故帝也者神之也。自周沒後稱謚。帝爲天神之稱。秦始制作。欲踰周兼三五。故以皇帝自稱。

先是雖齊秦已有皇帝之稱。而兼三五稱皇帝。實始始皇。

以王比公侯。而後世慣而不覺帝則沒後之稱。王則有天下之名。終爲人臣之稱。行之已久。天下之耳目熟之。勢實難復也。本邦。上古

淳樸。天子未有別稱。唯尊者稱美御德（卽みこと）用漢字者。以尊充之。神武之後。稱阿每主明樂義（卽あめすめらき）阿每者天也。主明樂義。猶謂經隅上君臨四表之謂也。由義以皇字合之。故阿每主明樂義之上。謂天皇不敢斥言天皇。曰御門（卽みかど）猶彼間謂之大家。譯者以合帝。天子之子。曰大君。（卽おほきみ）譯者以合王。譯義取漢制。和語合漢字。雖合其主其所名之義。則各不同也。由是觀之本邦用王字與皇帝之字。不同其義焉。今此私立譯義曰。王者大君也。言天子之子。是其正義也。異稱日本傳曰。三代實錄曰。謹撿天長九年十二月十五日詔書。稱彼王氏者。王號止於五世。資蔭不過六世。典制斯在。沿來浸久。是以六七世賜姓。及嵯峨天皇諸子繼體外。賜姓令列於人臣。勤勞于王室也。其後四世賜姓以爲例。近代貞成親王之後。號親王。淸仁親王之裔。任神祇伯者。稱王氏。此外無王氏。此其制也。未聞以王賜朝臣。然則未有所賜而稱之。非僭而何。故就漢之正訓言之。王也者君臨四海之稱。就和之正訓言之。王也者天子子孫之稱。苟以徒掌握天下之威柄。稱之爲王。夫阿衡親政。周公負扆。盍以王稱諸齊桓以侯號令天下。則重在侯矣。霍光以大司馬控掣百僚。則重在大司馬矣。足利氏以將軍爲重。則將軍重矣。豐臣氏以關白爲重。則關白重矣。今之操觚家。動輙以王稱足利豐臣氏。若夫足利氏奉職於將軍。成業於盟主。縮頸於彼而稱臣。跛扈於我而稱王。縫掖之務。在誦先王之法言。不傳不習。況禮非無位者所議乎。我聞天子賜爵位於下。未聞匹夫獻爵位於上。以周公之勳德。元老于天子。然淸議尚不容周魯賜受天子之禮樂名器之假否。人主之重事下者豈可與奪哉。夫足利氏之業。齊於齊桓匡合之功乎。同於楚莊問鼎之勢乎。繼齊

漢風

桓之業。世爲盟主。號令諸侯者晉也。未聞修春秋者。以其勢齊王者。而稱之王也。倣楚人之僭。相繼稱王。欲號令諸侯者。呉越也。雖然。記春秋者。黜其僭號。竝稱之子。然則和漢無是制也。

或曰。豐玉姬之父者。海島之主。令人親王。下筆稱王。曰。是時天下未一統。人各有其地。於是令人王下此字乎。雖下此字。非取大君之義。字本漢物。以和語合之。訓義不同。面目非眞。縱於舊史有之。而後世已立制。豈可違制哉。

東照公身提三尺策。靖四海。覇治以來。未有如此盛也。而能服事　帝室。韓人雖懇請。固拒王號。

寬永十二年。僧玄方。柳川調興。以竊許王號於朝鮮。幕議宥死一等。貶黜之。

於是　至尊穆穆。垂拱九重。視之文王。而無愧。比之武王。而如優。與魏丕晉炎。居其宮。刧其孤。豈可同年而語哉。今吾邦擅美於萬國者。君臣之分也。徒贊彼以矜其美。旁觀難掩。觀彼之爲俗。朝帝趙三。暮王李四。雖禮有刑不上大夫之文。其設情也險。昨則與之高牙大纛。今則加之桎梏。讀歷朝之史。雖名臣大家。一旦觸逆鱗。若刈艸菅。於是烹之。醢之。族之相繼于史者。如魚鱗。鷄報曉。狗守夜。牛則服役于耕負。而報其德。以湯火異類。猶可財竭則發塚。歲荒則屠人。天已全生之。已執閣之。而其惡之如仇讎。終激其勢。以相屠滅。若使此事彼無我有。彼必酸鼻云。夷夷。況彼畫大壤之一方。邊徼無險。南慮北顧。一日則章甫。一日則辮髮。由地形使然。雖大何足羨哉。

本邦地名

如我其稱曰浦安。曰秀眞。曰瑞穗。曰秋津。曰葦原中國。祝稱寰宇者。非建立國名者。

神武天皇東征。定都於膽駒山之陽。貝益軒曰。山陽爲山外。山卽やま。外卽と。於是やまと之號建。終拈出和字合之。亦立譯義。曰。山

陽曰和。以

神武都膽駒山之陽。曰和。彼此稱云。邪馬臺。漢書魏志邪摩堆。南史耶摩騰。神代記夜摩苫。景行紀耶麻止。纂疏竝やまと之轉也。故和爲正稱也。次則日本。日本合やまと。似自やまと爲國號。後之造也。舍人王修史用之。則可謂正矣。然未識其名成于何世。史記正義爲唐武后之所改。張守節者。開元中之人。去武后不遠。或其有所據耶。東國通鑑。新羅文武王十年八月下曰。倭國更號日本。自言近日所出。東厓秉燭譚曰。是丁唐高宗咸寧元年。乃我天智帝九年。據此則在于武后未用事之日。以晉觀之。爾雅說。四荒曰。觚竹。北戶。西王母。日下。註觚竹在北。北戶在南。西王母在西。日下在東。疏云謂日所出處。其下之國也。日下日本和訓相同。桃花老人日本紀纂疏曰。天無二日。故於文圈一爲日。說文。木下曰本。大陽出此地。自爲日下。故名曰日本。此義甚明

倭

也。唯以辨多冗。其解爲艱澀焉耳。推古帝之通彼。稱日出處日本卽日下。此爲肇于爾雅而可也。倭者非自我稱者。而暗與我之和之呉音合。蓋倭名出山海經。纂疏曰。舊說吾邦之人。初入漢。漢人問謂汝國名如何。吾答曰。謂吾國耶。漢人卽取吾字之初訓命之曰倭。未知然否。彼又加一字。曰倭奴。曰倭面。曰倭人。我舊無此等稱。彼何以加奴字。疑著數年。後得其說。蓋本邦之讀姓名州郡等。皆箝之字。猶左傳之介之推。呂覽之丹之姬。莊子之南之沛。家語之江之津。以之之和音。與彼呼奴者混。以之爲奴。是不解我謂倭之國也。

按圖書編。以蓮之池爲法司奴一計。以上之闕爲哈密奴失記。以尾之道爲和奴密知。以紀之州爲乞奴苦熱。且魏志序我州名。甚不可解。就中用奴字頗多。以上例推之。其彌奴國。濃與之呼相通。則當爲美濃

自彼之稱

國。鬼奴國。當爲紀之國。由是觀之。倭奴國。不解我之倭之國也。

或曰。倭奴國。訛我之瑕馭盧島之嘑也。和者本一州之名。猶周之興于周而號周。日本猶謂之天下。乃全洲之總名也。其稱既久。而播之於外。在李唐時。而彼又作說曰。惡舊名。以改其名。皆自作僻說。誣弄之。倭字我何惡之。國史可觀矣。至杜譔之僻說。以誣弄之何得不惡焉。然其實則彼之鹵莽可笑矣。彼又謂我有日東阿每烏卯等之稱。蓋我日本。當彼之東。故曰日東。隋唐之史同言。其王姓阿每氏。明代諸書。謂其君以王爲姓。阿每者天也。謂之阿每鄕者。就姓而言。若譯漢字。則天鄕也。然我　天子。自洪荒。繼統不墜地焉。以爲天之子。事必以天而稱。有賜姓。而無以姓焉。叡山覺阿西遊。對靈隱佛海曰。國主無姓氏。可以破此謬矣。烏。日也。卯。東也。烏卯卽日東。猶司馬呼之典午。又曰秦徐福來留。子孫有國。故曰徐倭。福之入海。實孝靈天皇七十二年也。杜譔甚矣。自昔書而後史多稱我爲太伯之後。嗚呼太伯無子焉。得有後。俗傳梁寶誌讖者。稱姬氏國。同一謬說。至油幢小品以我鄰三韓。謂韓中則奇怪可驚。皆非我之所用焉。

中外

夫中外者各各之自稱。源親房曰。彼以我爲東夷。猶我以彼爲西番也。故淡海公撰職員令。掌遠人謂之玄蕃。萬多親王區別姓氏。秦漢之裔。收之諸蕃。是以國史謂中。皆我自稱也。季世學衰教荒。人惑稱呼。慣讀彼國書。自稱曰日東。曰東方。曰大東。指彼曰中。曰華。中彼者。外我也。華人者。自夷也。混然天地。豈有定中外哉。東西南北之方者。自己而定。我所居果東乎。則我東何以稱焉。胡呼彼曰漢。天篤呼彼曰支那。曰震旦。我呼彼曰もろこし。曰から。

から本一國之名。國史曰意富伽羅國。韓史曰大駕洛國。新羅滅爲金官郡者也。蓋

外國之通我自此國始。而我之至彼亦由此。故遂謂彼曰伽羅。もろこし於字爲諸越。から於字爲伽羅。雖義不同。所指無佗。故兩訓共合唐。我謂彼爲唐。以唐於我。聘問最親也。故明宋學士。日本曲。賞櫻曰。日本勝於唐。知我呼唐也。近所歸化朱舜水。釋卽非。皆斥彼曰唐。清賈之來長崎。皆曰唐山。可謂得居人國之禮矣。唐非醜名。彼人弗憚言之。儒生獨忌。爲屈國之態。曰中。曰華。而自東。自外。謀背本國從佗國。律文存矣。何其不臣也。何其無稽也。又其指曰彼。亦此間之常言。彼人亦知之。勝鬘經疏曰。此是大倭國。上宮王私集。非海彼本。疏法曰。彼卽指此國及新羅國。日本國指此二土。俱名爲彼也。以新羅國有曉法師。勝鬘疏此間上代。亦有此經疏。爲簡異。非海彼本也。噫今之事翰墨者。何顚倒稱呼。不及于輿儓芻蕘之直能曰唐。」

精麁第三

鮑子曰。滅得一尺地。便有一尺天。張子曰。氣之聚散於太虛。猶冰之凝釋於水。列子曰。天地者。空中之一細物。有中之最巨者也。世以爲格言。然未盡矣。蓋世皆視麁認氣。未能視其精者。爲空。爲無。爲道。爲理。氣麁則著痕。精則沒痕。如製水注。必鑿二孔。一孔通氣。一孔通水。出一勺之水。納一勺之氣。水盡則氣充。氣不出則水不入。是猶以麁爲人所窺。至其精也。何與水火相拒。何與天地相拒。至何與天地相拒者。則拒者不能外之。及至此也。竟并精麁失之。天者氣也。地居其中。地之居天中。非除一空而容地。地中天在。猶物在水中。而水亦在物中。是所謂天能有於地。地能居於天者也。鮑子曰。滅得一尺地。便有一尺天。蔡季通亦曰。地上便是天。此與地相拒之天。而非與地相有之天矣。精者。充天充地。莫所不氣。而不著痕。不著則不著矣。豈得爲無哉。

姑以人言之。其所喜怒睡覺者。混然精矣。不觸則不著痕矣。若曰喜怒睡覺者。氣也。所喜怒睡覺者。空也。無也。道也。理也。豈是焉哉。沒痕露痕。元氣有之。氣麄結質。質散之氣。質入重重而愈實。氣出層層而愈精。實居虛中。精通麄中。虛者。虛乎質。而不虛于氣矣。無者。無乎體。而不無于氣矣。今論虛實有無於氣。猶辨寒熱於聲。辨香臭於色也。聚散者。其痕也。精非聚散之可見矣。是求粲立於混成之外。尋混成於粲立之外也。彼曰氣聚散於太虛者。離氣而見虛也。彼曰空中之一細物者。除天而見空也。明潛老父曰。充一切虛。貫一切實。唯斯得之。故老子之無。釋氏之空。宋儒之理。各成其趣。則可也。徵諸天地。則未也。

日月第四

天象雖若擾擾。而以條理觀之。亦有肯綮之可剖焉。水天之月。火天之日。則體立氣天物地。性著陽火陰水。而火卽華。華能旺于天。水卽液。液能旺于地。華液既分天地。則地物之多。水火統之。天物之繁。日月統之。日月則水火之著象。循東中。結西中。於地表。成其歲月。認其絪縕。是以日月感于上。則水燥應于下焉。爾雅云。月爲陰精。日爲陽精。周髀云。日猶火。月猶水。火則外光。水則含景。故月光生於日之所照。魄生於日之所蔽。當日則光盈。就日則明盡。是言是也。水偶燥。而與天地合形理。日偶影。而與天地分形理。形理已分。性體並立。是以陰收陽發。成日影於色氣散物結。成天地於體。然而物體以虛實成。氣形以動靜成。西行爲轉。東行爲運。轉者則結地於其心。守軸於其極。其行一整。以速也。運者雖維心於地而避軸於守。其運屬層。以緩也。一規中分。勢爲弦弧。地結轉弦之中。日發運弧之中。以樹譬運轉。則轉爲幹。達根地之陰於表。運爲枝。鬱華天之陽於裏。故轉幹如伸。運枝如折。伸則以地陰向上。折則取天陽向下。於

是向下者節節生枝其標歸地。終以根爲實。是以轉天一層爲幹、運天數層爲節。初節則一大圈、衆星塲此而起、二節則小重圈。外圈駕日。內圈駕月。月者陰質之精、行接地際、日者陽氣之精。行極天際。而日弧中發毬諸辰重于此中也。於是星塲影也而鋪、辰因日天而重星也者影中之曜、世謂經星是也、辰也者景中之曜。世謂緯星是也。蓋天者動物也、地者靜物也、日者動物也、影者靜物也。是以體成之天地者、天巓而地趺也、趺上水鋪、壤聚其間也、性成之天地者、日巓而影趺也。趺中影充。星散其間矣。

地者、以實質爲圓形於中、天者。以虛氣爲圓形於外。在地者根據其質、洲壤湖海、以居成其圓、在天者撒在其象。日月星辰。以行成其圓。是以星體雖居弧之偏位。運轉則歸大同之圓。故以偏位立中外者。亦以行終歸一點之圓。

星之散于影、猶壤之聚于水也。星雖以任動、中而從其運。一面布羅者。恬然不動。於是星文之恬然于陰暗靜塞之中。與洲壤之巍然于海濤動搖之中可以比焉。比則反焉。以體成之所天、爲性成之地、故日者性成之天。發而環于星文恬然之中。西轉守常、東運盡變。轉圈、其所天者大、而其行急、其所地者小、而其行緩焉。運圈。其所地者大而其行緩。其所天者小而其行急焉。星者合其衆而成一圓象、以圍日道、以圍地球、辰者重其類而爲一平規。別生東運以環日體。故星以通脈絡、而其行也死、辰以各其運旋。而其行也活。蓋自內向外、占其心於地、急其旋勢於外者、不得不一其毬。自外向內、讓其心於佗。急其旋勢於內者。不得不分其毬。合天地而剖陰陽。則上日下火一陽象、上月下水一陰質。雖陰陽一性。而位已隔天地。於是。比之於日、則潤溼暗寒、比月於水則乾燥光明。天地之分也。蓋

天虛地實。以爲二球。實爲地球、水火居其上、虛爲天球。日月行其中。於是水火之所居、則持中之巔毬、日月之所行、則運中之巔毬。日月以運中之巔毬爲其天、水火以持中之巔毬爲其天。故水與燥偶、而與火比、地火與天日通其德、爲彗孛流隕之變、日與影偶、而與月比。天月與地水通其德、爲雨露霜雪之化。而星與日同在影中、辰與月同在景中。是以其性各從其類也。西者一滾推遷、下緩上急、天之所成自然。東者各動不整、上緩下急、神之所爲使然。星居有象之極、其境最廣、其處瞑焉而晤。是乃與地蔽合、與地靜合。月行有動之極、其境漸狹、其處昭然而明。是乃假日而明、假日而動。星月雖同東運、不同其運圈。於是諸辰心日體而居景中、各其運、相重而參差。衆星心地體而居影中、一其運、而相並而整齊。於日則其步易、而於辰則其步艱、於月則其步艱、而於星則其步易。日者占巔於中心之外、爲陽之極、以爲乾燥明熱之歸、地者爲跌於地球之表、爲陰之極、以爲潤溼晤寒之歸。月始漸天、是以能親乾燥、感水之潤溼。火始生地、是故能食潤溼、應日之乾燥。地者晤質也。月以自地而晤其象、而諸辰以類其性。天者淸虛也。日以自天而明其象、而衆星以類其性。辰以陰物居景親月、星以陽物居影親日。而月雖同性於辰、不與辰同行、還與日抗其規。日雖同性於星、不與星同居、還與月比其物。星依運毬、以容日線、辰依日線、不同日線。地以夜爲主、月以魄爲主。魄已主也、故其明則日之傳光而及物也。夜已主也。故其晝則日之施光而見物也。故晦望二弦者。傍觀其面背欹側也。是以地之晝夜、月之明魄、一也。日一周地、則一日成、一周月、則一月成。蓋運轉之中線、斜絡于混球之中。日月相比。而黃白分道。黃白者道也。日月者行道者也。道與行道者、固不同也。黃白之線、各出

游輪。日月駕之。而日者剖其華。月者析其蔓。游輪蔓延。蜿蜒而行。黄白之道。與游輪相糾。其衢爲交。出入分正中虚位也。是以隔地而日月同線。則月不得假者。謂之月之食。則是也。隔月而地日同線。則地不得假者。不謂之地之食。則非也。地食自有隱見之分。月食唯爲蚤暮之異。由影之大小。機之動止焉。古人未覺地之一圓塊。而與日月同線。強解之曰。日有暗虚。以射月爲食。蓋觀之於離之象。夫日果有暗虚乎。熱帶一路。日午恒必見暗虚。不通之論也。蓋古者質測未成。以日食爲天地之變。人事之所致。窺竊以混天人焉。請擧質測未成之徵言之。蓋史之記。踰月之食者。魯襄公二十一年。九月。十月。同二十四年。七月。八月。漢高祖二年。十月。十一月。同文帝三年。十月。十一月。按東厓辨疑録曰。宋書禮志。載魏史官之言曰。黄帝顓頊夏殷周魯六曆。皆無推日食法。但有考課疎密。大衍曆議曰。

黄初以來治史者。始課日食疎密。及張子信而益詳。春秋日食三十六。胡氏曰。後世治曆明時之法也。此説不然。禮曾子問諸侯旅見。入門不得終禮廢者。曰。太廟火。日食。后之喪。雨霑服失容。當祭而接祭而已者。曰。日食。太廟之火。葬之引至于堩。日食。以爲不知其遲速則可以行。則古者無推日食之法。斷然可見矣。是以古典徵者也。又以實事徵之。夫人之能豫交食。知其遲疾參差之行也。古徒知平行而不知有不整之運。苟此之不知。孰得而合之。清梅文鼎曆學疑問曰。漢晉諸家。皆以太陽日行一度。故一歲一周天。自北齊張子信。積候合。觸加時。始覺日行有入氣之差。而立爲損益之率。又有趙道嚴者。復準晷景長短。定日行進退。更造盈縮。以求虧食。至隋劉焯。立躔度與四時昇降爲法。加詳。厥後皆相祖述。以爲步日躔之準。授時曆議曰。襄公二十一年十月。二十四年八月。不入食限。有

曆以來。無比月而食之理。食之以漸明于世也。如此其晚矣。而後猶待西學。苟以完矣。而抱經之末徒。諱以古聖爲不知之。故種種回護。舜讓工於垂。孔子讓稼於老農。奚損於其爲聖。是猶未達之浮屠。至譚天地。固持須彌說。是皆半吝家說之敗。半由勝情之競。蓋日一周月。則一月之紀成。一周天。則一歲之紀成。月道一周東線。謂之一章。東線一周西線。謂之一紀。蓋一歲之數。日復舊位。而星東移。交西移。以微動未覺其故。諸家皆意。常星專懸於天而西轉。虞喜見其東行。而不知東行者。以爲歲差。及西說入。始知是實係恒星之前行。

曆學疑問補。詳歲差之來由曰。漢人未知歲差。誤合爲一。故即以冬至日交星紀。而定之于牽牛。逮晉虞喜等。始覺之。五代宋何承天。祖冲之。隋劉焯等。言之益詳。顧治曆者。株守成說。至唐傳仁均造戊寅元曆。始用歲差。而朝論多不以爲然。故李淳風。麟德曆。復去歲差不用。直至玄宗開元某年。僧一行。作大衍曆。分天自爲天。歲自爲歲。歷代遵用。元世祖時。用授時曆。郭守敬。測定六十有六年有八月而差一度。回回泰西。差法略同。故冬至日。一歲日躔之度已過。尚不能復於星紀之元度。必再行若干日時。而至星紀云。云

於是知日月星辰右旋之說。古人不苟焉。恒星一其脈絡。以稍移。東線終周西線。以行微難見。遂爲繫於天而西。如日月。則東線分明。然橫渠反言。日月星辰從天左旋。其不及者。似右。紫陽繼和之。今測家察經星之南北。而直知氣象異軸。左旋之說。不辨而破。

日月從轉而西者。逆行之規也。以運而東者。順行之規也。順行之規。又得西旋者。而相輾。猶自鳴鐘之輪輪相軋。各各背走。故順行之輪。向東而激進者。有游輪駕以激

退。頗與宋儒之說似。而不同焉。

且左右者、人之位、東西者天之位。天行措東西而言左右。命名不當也。命名不當者。移之則抵格。立北極下見日月。謂左而可也。若移在南極下。則唯見其右旋。於是唯有東西字而當。對待者。天地之條理也。轉中之東西。猶持中之昇降。氣西象東。氣昇質降。是其大分也。至其錯綜。則亦各有焉。持中、昇降兼噓喻、轉中。東西兼順逆。陽發則氣必噓。陰收則氣必喻。以氣噓喻。而質亦昇降。象東則氣亦從。氣西則象亦從。以氣東西。而象亦順逆。日乘東行之輪。以周天。乘西行之輪。以周地。日乘東行之輪以周天。是以其軸常掉。以致南北。以南北而爲冬夏。象之活行也。故之爲順行、又謂緯行。日乘西行之輪。以周地。是以其軸常守。以成東西。以東西而爲晝夜。象之死行也。故之爲逆行。又謂經行。天地正具直圓。輪軸斜見規矩。日者陽象之主。月者陰象之宗、是以經星之齊運、諸辰之各汗。亦有所統也。故日月順逆。周天周地。燥處則動植以發收而應日、水處則潮汐以盈虛而應月。

月中有翳。天下疑之。既有疑者。亦必有作其說。譸人者。嫦娥爲蜍。吳剛伐桂。七寶合成。金闕瓊樓。修月之戶。一萬二千。有白兎以搗藥焉。唯可以供辭家藻翫之料焉已。法苑珠林。引起世經曰。大洲中。有閻浮樹。樹影現月中。引瑜珈論曰。大海中魚鼈等影。其爲兎者。引西國傳曰。有兎行菩薩行。天帝試之索肉。兎捨身於火。帝愍置焦兎於月中。段柯古酉陽雜俎曰。佛氏以爲天地山河影。我遊長埼。見西洋圖書。就舌人聞其譯。曰。月翳者。地影之所映。以國字一一合其所映。於是知。梵則兼天地之影。而西洋唯爲地影。日形則熖熖。兩畔見如山者。其間則如談浪爲洋者。山際洋中。有如可謂火井者。黑煙昇騰。蓋深思審察。物之

己有光而喩佗無光者。影必無此理。以質諸予友麻剛立。剛立曰。月距地大抵當我七萬里。於是自月見地當二度強。自地見月當半度。然則自月見地。大抵可四倍于自地見月。且我得軒轅鏡。傍懸同等之球。映之。其影僅當鏡三百六十五分之二。鏡面唯見一小粒子。月之寫地假得其影亦何異於此。况望時自月見地。猶朔時自地見月。朔不能自地見月。望焉能自月見地。此說明白痛快。麻子且曰我製器望日月。於日未見黲黲之象。唯見數點之煙黑子。於其中。日日自日之東。轉當正面。向西而繞。大抵三十日可一周。日而其點在黃道線。不在兩端。月色亦不甚明瑩。明處翳處交錯。其中有凹而如池者。明處最多。翳處鮮少。其岸有峻者。有曼者。有淺有深。有大有小。或有池中如有山者。有其畔如有堤者。何以能知其池之淺深。上弦則陰影在西。下弦則陰影在東。觀其影之長。以知其深。觀其影之短。以知其淺。觀其常暗。知其最深。望則以日光直射其底。池形却難見。又窺木星。有微星四。如鬼中之白氣。距星有遠者矣。有近者矣。近者行疾。一晝夜周。可過星之半。遠者行遲。十餘日可一周。西洋有其行度之密測。我則未得其密。土星者。兩側有附耳。或見或不見。見如耳者。與本星相距之至近也。有見不見者。旋本星之故也。予曰。夫人之怪月中之翳也。其意曰。本合朋瑩。何以爲此翳。其謂宜明瑩。亦人之通病。若人提此心。登天以見地。必謂本當一澤。奚以爲此斑文。地之不歸一澤。人不疑之。月之不歸一明。還疑之。非通病而何。因造杜讓之言曰。有物各具其天地。古人所謂物物各具一太極。是故聲有純陽純陰。主無純陽純陰。日月雖固天之水火。己各有其體。亦各全其天地。是以地體

推之於天物。日中山井火烟之象。月中明影池提之象。猶水有江海川澤之文。火有雷霆流隕之章。觀歲塡有繞之之星。知諸辰之繞日皆如此。於是地有日月。日有水金。日中亦有萬象。月中亦有萬物。故地中之物。一物各有其天地。亦自有其文章。滿天之諸象。雖目力所不至。推此思之則思過半焉。

贅語一

天地帙下

日本　鎮西　三浦晉　安貞　著

辰體第五

分蠶絲折牛毛。經緯網羅。拾天文之錯綜於其目中。因以乘除之。置千載之日至於指掌之中。推步家存矣。推步家之術。雖若此其密也。條理未講。西人雖善譚天。非生羽翮摶至其處目視而口傳焉。實測之外。思量摸索而已。故其觀天。諸曜層層之行。計之則計之。剖之則未爲也。蓋地載物。天容物。物之所居。能分轉持。清明乾熱。以象居轉。濁暗潤寒。以質居持。雖濁暗潤寒質以居。而處分水燥其物相反。以此比彼。清明乾熱象以居。亦分處於日影。而其物相反。日者發陽。辰者。日之喩陰。成露於其間也。影者。收陰。星者。影之噴陽。成火於其中也。辰與月同性。星與日同性。星辰之字。舊無明解。由條理分之。以經者爲星。以緯者爲辰。新義也。以星名爲嘒嘒之總稱也久矣。辨之星象篇。辰被之於非類。則其淆益甚。皆非此所指者也。論語所謂北辰之辰。朱子以爲天壤。邵子以爲天土。皆指彼蒼而言。日月星。亦謂三辰。是通之於諸曜也。書曰五

辰。未得其說。詩云。我生不辰。逢天僤怒。謂時
也。自子至亥。十有二時。日月交會。十有二次。
其有辰之名。房心尾幷。亦名大辰。心獨亦名
大辰。閼伯主辰之辰。大火。則心除大字亦可。
於是與水星之本名同稱。故辰屬曐。曐者。緯
之水星。經之房心尾而已。至隋則州亦有辰。
之爲最遠焉。今斯辨運中又有不同之圈。正
星辰之分。故其曰五星。曰緯星。姑從通稱也。
爾。蓋天行能西。又能東。象行能東。又能西。象
而在下者。六曜也。象而在上者。衆星也。在上
之象。布列一天。其行一整。以同其脈絡。在下
之象各領其天。以自相環。以在上而知其經
清。以在下而知其重濁。合衆一脈絡。故共能
守其極。而不移其位。分軸別運動。故各圍繞
日體。而各不同其運。然而天散地結之爲體
具陽發陰收之性。陰自無邊際。向中而收。陽
自無内中。向外而發。故日者爲陰所收。而成
明象者也。是以月又爲陽所喩。而結暗象也。

性體分天地　層層天

故月陰見喩而結。日陽被收而發。故影中有
日星。景中有月辰。而人知辨日月。未知辨星
辰。於是有七曜之目。從見數之也。曰性者陽。
與影偶。與星比。月性者陰。與景偶。與辰比。能
知性之別。不爲目眩。日能發陽以充下天。下
天布陽氣。與滿天之影偶于天中。於是下天
以日而陽氣充焉。上天以影而陰氣充焉。陰
氣之所充。即星之所繫。陽氣之所充。即辰之
所遊。遂錯綜之。日率陰類。影合陽類。日月偶
輪。而月者依地心。日者生己之心。分性體之
別天地。於是日爲陽體之最巔。月爲陰體之
最上。以偶相隣焉。辰體者近地。假光於日。過
日漸天。愈漸則愈失其麁。而漸其精。故自麁
漸精之序。自月而太白。而辰而踰日。而熒惑
歲塡。坐地觀天。觀其死行。而不知活行焉。得
此七曜之運。而上至經星。其上一層。率日月
星辰一晝一夜。西轉一周。號爲宗動天。是乃
九天之序也。動極則靜。故宗動天上置常靜

天以爲天樞之所倚。而算家取定準於斯。遂想像其體。謂之天殼。曰。正圓深碧如玻瓈。層層相裏。猶葱頭皮矣。猶尚不已相加至十有一天。麻剛立曰。西洋當周顯王時。有依巴谷者。其法專用黃極。猶漢之謂赤極。當漢順帝時。多祿某者。定九重天。當明正德中。歌白泥者。置二差之天。爲十有一天。當萬曆中。地谷者出。廢其二天。是層層天之沿革也。蓋自地數。以爲之七曜者。其位以高卑分。以周天東行疾爲下。以緩爲上。故月之周天則二十七日餘。而水星。而金星。而太陽。皆三百六十五日餘。而火星一年三百二十一日餘。而木星十一年三百十三日餘。而土星二十九年一百五十五日餘。而恒星。游子六推自崇禎癸未上距帝嚳甲子。四千二十年。得差五十七度。獲二萬五千七百三十五年。得一周天。晉不解乘除。姑記大槩。夫地守中而天成外。於坱坱於是西轉東運。無違中之一點者。雖然

西轉東運。反均其力。則環守異軸、緩急分行。諸象則東運之粲禮。與西轉之混氣對立。然星辰異環地環日。則雖如不歸一。而其本天爲止軸所繫、以終歸一極矣。人皆知月之受日光。而不知諸辰亦同然。望遠鏡出、而知太白亦有晦朔弦望。人皆知太白辰星之繞日。而不知餘辰之繞日。知餘辰之繞日。而不知踰地者之精。不同于不踰地者之麤。西人仰其行止順逆之行。於本天上而認歲輪而認軌跡軌跡實是環日之正規。本天者就西轉而成耳矣。自地載天言之。月爲最下。而至日水金自日圍於影言。水星至近。至太白。至月。至地。至熒惑。至歲。至塡。自地者、出持入轉、自日者。出景入影。辰在景中、纍纍相重、星在影中。燦燦相竝。故層層之間。自地而觀、則運勢漸殺、而至衆星、自日而觀。則日軸輪金水載月地以運三辰之大輪。以轘衆星天中。若夫謂天殼皮瓈。如葱頭皮。而星月堅凝于其中。

辰數

不知氣質精麁者之言。奚瑣瑣辨之爲。五星本辰星。太白。熒惑。歲。塡。五家觀物。弗配弗措。素問曰。五行之氣。上爲五星。漢史曰。水合辰星。火合熒惑。金合太白。木合歲星。土合塡星。自此直謂金木水火土。就附合。認其性。熒惑色赤。以合於火。水星近日而難見。則謂合於水亦幾矣。土木二曜何不青黃。太白色白。以合於金。何不以日爲金。熒惑辰星。水火也。日月水火也。何天之多于水火。而乏于金水土。土居上。而木而火。而金而水。其序不能相生。不能相尅。其說自苦。今觀條理者。能辨星辰陰陽之性。知變名之出。配當何眩。夫仙陀婆。且配當之爲窺窬。不獨漢人然。余遊長埼。觀西籍於吉耕牛之宅。且聞其譯於主人。其配。日爲金。月爲銀。辰爲汞。太白爲銅。熒惑爲鐵。歲星爲錫。塡星爲鉛。亦同日之譚也。星不限其數。辰何以五其數。天位杳渺。日邊之小暗象。雖有而孰得而識之。史中記日中黑子者不斷。有謂一者。有謂二者。有謂三者。其形。曰如瓜。曰如桃。曰如李。曰如栗。曰如鵝卵。曰如鷄卵。如鴨卵。天經或問曰。金水二星。與日同度。日輪中有黑點。以星處高。仰視遠。不謂之食。物理小識曰。日中黑子。蓋恒有之。或見或不見。太白有二黑子。塡星有四黑子。旋轉其上。方中通曰。金水二星附日爲輪。正在日下。則爲黑子。此自是金水之二食。數家必知之。麻剛立製鏡候日。其中恒有數點。小黑子右旋句餘。必爲一周。是又金水之類。而與金水爲食者不同矣。其他魏書曰。二黑氣橫貫日。晉書曰黑氣分日。又曰如飛燕。又曰。分明見三足烏形。曰若燕者數。日乃消。曰若烏者五日乃止。似日下有物爲其翳。不知日中所起之烟氣有時而發乎。非星類也。物理小識。引左藏一言曰。于夕陽時見滿天黑子。不知何術以候之。若此則辰象亦無數。九重之天。揭子宜曰。如山之宿石。或巔或半。或麓。雖高下

氣西象東

實一體也。雖一體、分高下而居。是由不知條理。爲此朦朧之說。夫辰者重者、各各成己、星者並者、合衆成一。是以諸辰居日表、合數層爲一天、衆星居影中、一層自爲一天。從視剝曜曜。則地上爲月天。以金水不包地。其實不可從地剝之而剝爲金。爲水。爲日。終至火。至木。至土。至經星。至宗動。若從條理自弦中者起地。至月。至日。至經星。宗動者。一日一周之天。無隔層。層自弧中者起日。一水。二金。三月。四地。已過運心而五火。六木。七土。層層爲別圈。以居大圈焉。於是衆星定而平鋪。以通其脈絡。衆星之懸。猶碁枰之布罫。諸辰之變。猶碁子之變于罫也。常變爲經緯。勢不能不然焉。又衆星猶郡縣之制。雖散而奉天子之尺一。諸辰猶封建之法。雖統各立一國之刑政。明中之各動。暗中之一整。雖能爲反態。亦比中之反。不能不取準於東行一線。則亦不能違其總轄。於是東運各成之天。與西轉一滾之天對。古之譚天家。不知經星之東運。見星東行而移度歸差於歲而已。天行無差。各動相結。以結而求躔次於星。求於星而求非星。求非星而知各動積。而數成其間。右解運環於斯。則知差之不在天。蓋日月右旋之說。昔書以爲周髀家說。內經亦載之。而弗察焉。不求於古書之失也。氣西象東者。條理之大分也。氣象各東西者。盡其變也。其東運與西轉偶者。察之於黃赤之依違。知一周在數萬年頃。日月之疾行。諸辰之異行。皆統於此大運也。譚天地者。皆取準於日者。以其著見而便于推步也。若以日行取準。則月特疾行。熒惑以上以序緩其行。故大觀之經。星東運之行爲總轄。七曜各自之遲疾。各爲小圈。是以衆星由其極。故屬正觀。諸辰依日。故屬傍觀。蓋氣者混然虛其體。異于物之粲立。隔不相入。徵之於色。中容聲。聲中容臭而知焉。是以運轉同氣。正斜異向。而遲速分勢焉。事與驅車

動靜二天

突來車弗同也。是以日月日日西轉、謂之不西則非也、日月依其道而東運、謂之西則非也、故氣能東西象亦東西、故日之成晝夜者、從西轉也、謂之逆行之日、成冬夏者用東運也、謂之順行之日、是以運轉二氣、異道同居。一滾中之絪縕而已。若使宗動天超然在諸象之外、猶江水帶堤外之物、而流豈有此理哉、相吐則不天處乃地也、相食則盡地而皆天也、是故天者氣而動焉、氣動豈遺地哉、地者體而靜焉、體靜豈外天哉、今一室之內、有方面之靜、疾風終日、豈能吹去方面之定位哉、故動靜亦異道同居。欲竭止其動、而認其靜、不知精麄之故、以比兩極於戶樞碍臍、又索樞臍安附之地、於宗動之外、實不識靜之處也、故謂之便推步則可也。若分此天於曆曆中則遠矣、

曆學疑問曰、有以天爲九重者、則以七曜各居其天、幷恒星宗動而九也、有以天爲十二重者、則以宗動之外、復有南北歲差。東西歲差、幷永靜之天十二也、有以天爲層層相裹、如葱頭之皮、密密相切、略無虛隙者、利氏之初說也、又有以天雖各重、而其行度能相割、能相入、以是爲天、能之無盡者、則以火星有時在日天之下、金星有時在日天之上、而爲此言、曆書之說也、又有以金水二星遶日旋轉、爲太陽之輪、故二星獨不經天、是金水太陽合爲一重、而九重之數、又減二重、共爲七重也、然又謂五星皆以太陽爲本天之心、蓋如是則可以免火星之下割日天、是又將以五星與太陽幷爲一天、而只成四重也、（一月天。二太陽。五星共爲一天、三恒星天。四宗動天。）其說之不同如此。又曰兩歲差之天、利泰西言之、徐文定公作曆書時、湯羅諸西士、棄不復用、厥後穆氏著天步眞原、北海薛氏本之著天學會通、則又用之、故知。其受授非一家也、今卽其說推

之則穆與利。又似不同。何也。西人測驗謂。黃赤之距漸近。此亦可名南北差。若東西歲差則恒星之東移是已。而恒星既爲一重天。不應復有東西歲差之天。則泰西所言。不知何指也。至于穆薛之說則又不正言南北東西兩歲差。而別有加算。謂之黃道差。春分差。其法皆作小圈於心。而大圈之心循之而轉。若干年在前。若干年在後。其年皆以千計。有圖有數有法。且謂作曆書時棄之。非是也。然於泰西初說亦不知同異如何耳。」

日月水火

天章者、日月景影、地章者水火溼燥。地者陰質也。故陽火就之、日者陽物也。故陰象就之、星者陽物、以象自照、宗日在上天、辰者陰物、假象爲明。宗月在下天、以持言之。火者質之之氣也。故知日之自地之天、水者氣之之質也。故知月之自天之地。故雲雨者漸持之巓、星辰者漸轉之跌。地者能結質者也、天者能沒質者也、故一塵之質終歸地、一濁氣之雲不入轉。氣有精麁有動靜。動者天也。靜者地也。麁而能露。精而能沒。靜也者何。不動者也。

動靜

天動而圓。地靜而直。吐則轉持分立。食則天地混成。豈求靜於動外哉。是故亡動則不存靜、失麁則不得精。見沒跡以爲精。見精者以爲虛。天下滔滔。自古病之。

明暗

明暗者。發象收氣之色也。人在明中。望日力不及處之暗。暗交明而成青矣。莊周不識疑之曰。天之蒼蒼其正色邪。其遠而無所至極邪。其視下也亦若是則已矣。即宣夜之見也。明游子六據曰。天色在五行之外。青亦非其眞體。既說五行又說五行之外。不通甚矣。明暗者色也。天者非色也。無明則無暗。無暗則無明。明暗豈有主客哉。考亭曰。黑滓滓地。天之正色也。是以暗爲主者也。譚天者曰。太陽之火充滿全天。夜者地影也。無地則無夜也。夜固地影也。暗豈翅地影矣哉。若陽火滿天則天色蓋白。奚用

精麁虛實

又歸星辰

歳輪

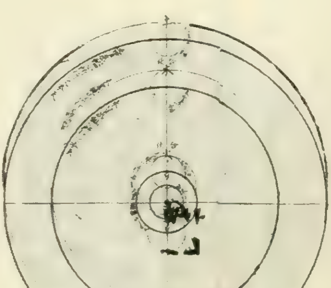
彼蒼蒼。此則反考亭以明爲主者也。二説雖不同皆似而非者也。天氣者精。而地質者實矣。實氣者麁。而精體者虛也。精麁虛實。天地之分也。是以日月水火雖相似。而精麁虛實不同也。若無精麁虛實之異。則豈能月體浮空。日體離質哉。是以轉之大象二。日者天之火。月者天之水。持之著象二。水剖爲雨雪。火剖爲雲雷。故歷歷之衆星。與日同性。點點之諸辰。與月同性。月者偶日。諸辰心日。日者與星不同天。而類之於星。何邪。蓋象中陽其性者。居陰暗之中。陰其性者。居陽明之中。故日者。與星俱居陰暗。與星俱守動軸。而運東連中線。能爲運天之中分。月者雖以偶日沿東中。與辰俱居陽明。各自爲小圈。是以日之態類星。月之態類辰。

梅文鼎。五星紀要曰。五星與太陽有定距。歳輪心。既爲宗動所掣。漸離太陽而西。則星不得不自歳輪之中線。即平行度漸移而東。以就日。而星既在日之上。亦即不得不自歳輪之頂。漸移而下。以就日也。既漸移而東。又漸移而下。則不能平轉。而爲環行。歳輪之圓象成矣。歳輪心正在太陽之上。星又在歳輪之頂。作直線。過歳輪心。以過太陽之心。而指地心。是爲合伏。合伏以後。星在歳輪上東移。有類平轉。故東移速。日猶金水環心。離日漸遠。星在歳輪離合伏之度。亦漸遠而向下行。則東移之度漸遲。古謂之遲段。歳輪心。離日至一象限。星在歳輪直向下行。人自地觀之。不見其動。古爲留段。過此留段。輪心距太陽益遠。將至半周。星行歳輪之底。轉成向西行。是爲退段。輪心與日冲。星正居輪底。自輪心作線。過星以過地心。而直射太陽之心。亦爲一直線。是爲退冲。未至日冲。皆爲晨見。冲日以後。則爲夕見。夕見者西與日近。東與日遠。輪心反在日後。而西。

行追日。日在西。星在東。星不得不自輪底西移而就日。（故仍爲退段。）輪心西距日益近。則星漸西。而亦漸上行。以就其距日之定距。星已在輪邊。與輪心亦有定距。則其西移過半象限。不得不轉而上行矣。至于西距日一象限。上行之勢又直。人自地觀之亦不見動。（古亦謂留段。）過此而輪心距日益近。則星亦在輪上漸向東行。以就合伏之度。以就其距日之常度。於是又見其東移之速。而至于合伏。（古亦謂疾段。）是爲歲輪之周。依就火星本法。掲緯星繞日之圖。以條理剖之。陽象以地爲心、陰象以日爲心。人在地上。於爲陰象所轉掣。眩于其本行。唯視遲疾留退之行。未知何故。西人觀遲疾留退。認天間歲、爲一圓象。號爲歲輪。依歲輪觀繞日之大輪。於是以成于西轉者。爲本天。以繞日者爲軌跡。以歲一周者爲歲輪。雖然

星辰

土木火環日猶金水環日。但以隔地爲其異焉。然則西人爲軌跡者。實活行之圓象也。是以本天者。成于西轉之率。歲輪者。成于土木火繞日。而遲於日。共死行也。



星象第六

不繹條理。欲探天地。猶不結網而羨魚焉。夫剖析者。條理之道。莫往不然。故大物分處。而水燥占地、日影占天。蓋其占。水卑燥高、而陰陽定位焉、日卑影高、而陰陽行氣焉。水不卑、則不可受所下之陰、影不高、則不可攝所發

星之名實

之陽夫衆星者、守心於地中、諸辰者守心於日中。於是陰陽反性、星辰分行。是以經星之布天、能通衆絡、爲緯象之定盤焉。夫魚之似琵琶、名曰琵琶。螺之類鸚鵡、呼爲鸚鵡。雖謂之琵琶、不爲宮商。雖謂之鸚鵡、豈解嘔啞名者自我命者。而實者在彼者也。以自我命之名、責在彼之實、彼焉得塞其責。人之於事物、無不名而呼者。名者聲也。非其主也。且萬國同望斯天、而經營異其意匠。蓋古之明天體也、將正曆象授人時。故爲定日之躔度分星定二十八舍、爲紀月。隨斗杓之所向。定一十二支。自是漸推五星之伏見、定諸星之離屬、測南北之出入、正天曆之先後。北規七十餘度、常見不穩。衆星環繞共之。有帝居之象。於是紫微其垣、閶闔其門。太子后妃、四輔三臺。隨有命官。太微天市、亦有諸星環繞之象。故以帝所命之於是紫微比宮寢、天市比明堂、太微比朝廷。漢水出于嶓冢、入于江而東流。

分野

河水發于西荒、爲九河而入海。見彼小星攢聚、如一條流水、不能辨之。以其似而呼河、呼漢。又由其聲求其實。於是河影水精之說興。古昔人愨而貴神道。天地日月山川、至猫虎昆蟲之微、皆神祭之。況星宿乎。如遷閼伯于商丘、主辰、遷實沈于大夏、主參、是也。祭法謂帝嚳能序星辰而世之所傳。軒轅之鬪苞、高陽之重黎、唐虞之羲和、夏之昆吾、湯之巫咸、周之史佚萇弘、宋之子韋、楚之唐篾、魯之梓愼、鄭之裨竈、魏之石申夫、齊之甘公。雖其詳未可知、而漸增其名。及後漢張衡作靈憲、總序經星、時遭喪亂、所鑄之圖湮滅。吳太史令陳卓、列甘石巫咸三家之星官。是蓋後世所傳者也。周禮保章氏、以星土辨九州之地。所封封域、皆有分星、以觀妖祥。而其書則亡矣。久矣哉。人之望有意酬酢之態於天也。史記及漢書云、角亢氐。兗州。晉志曰。鄭兗州。房心。豫州。同曰。宋豫州。尾箕。幽州。同曰。燕幽州。斗。江湖。牽牛婺女。

揚州（同曰斗牽牛須女呉越揚州）虚危青州（同曰齊青州）營室至東壁并州（同曰衛并州）奎婁胃徐州（同曰魯徐州）昂畢冀州（同曰趙冀州）觜觿參益州（同曰魏益州）東井輿鬼雍州（同曰秦雍州）柳七星張三河（同曰周三輔）翼軫荆州（同曰楚荆州）淮南子云、角亢鄭。氐房心宋。尾箕燕。斗牽牛越。須女呉。虚危齊。營室東壁衛。奎婁魯。胃昂畢魏。觜觿參趙。東井輿鬼秦。柳七星張周。翼軫楚。鄭玄及月令章句曰、十二次之分星。紀呉越也。玄枵齊也。娵訾衛也。降婁魯也。大梁趙也。實沈晉也。鶉首秦也。鶉火周也。鶉尾楚也。壽星鄭也。大火宋也。析木燕也。是漢人説星之大槩也。西洋頗從條理。中分於黄道。爲南北兩部。次第大小。以分六等。因其難識認。假人物之像。以別名。北部二十一像。南部止十五。蓋西洋亦偏北之地。以未盡極南之天乎。當明弘治丁己。西人呉默哥。安德肋翟入海。始探之。萬暦庚寅。有胡本篤者。終測定之。増一十二像。合之二十七像。在

黄道中者。即十二宮。以按節氣。一曰白羊。即春分清明。蓋西洋起節於春分。猶漢法起於冬至。故之爲第一。二金牛。穀雨立夏。三雙兒。小滿芒種。四巨蟹。夏至小暑。五獅子。大暑立秋。六列女。處暑白露。七天秤。秋分寒露。八天蝎。霜降立冬。九人馬。小雪大雪。十磨蝎。冬至小寒。十一寳瓶。大寒立春。十二雙魚。雨水啓蟄。猶漢宮次。玄枵星紀。析木之津。大火。壽星。鶉尾鶉火。鶉首。實沈。大梁。降婁。娵訾之日配。自子至丑。古測四十八像。得極南之星。通爲六十像。已謂之像。則非直取以爲名。假以便識認。遂髣髴畫其像。怪醜可惡。不亦爲癡者之惑乎。漢人之認曰躔者。紀之於二十八舍。西洋之認曰躔者。紀之於十二像。是以其所形象。此見以爲龍之尾者。西洋以爲天之蝎。此以爲鬼之積尸者。西洋以爲巨蟹。此以爲如缺椀者。西洋以爲如冕旒。如日月之行。此見以爲盈縮。西人見以爲高卑。各國各望斯

梵星說

天。經營之意匠。宜若此異。而西法亦有二十八舍。第不用蓍宿。用天蝎為異而已。彼方傳曰。古有諸厄者。通于天下萬國。不知彼諸厄者。傳漢法乎。梵典亦說二十八舍。有驢脣仙人者。得之於天云。嗚呼天則何違。成於人意之經營者。焉能脗合。意其驢脣仙人者。非漢人入梵。則梵人習漢法者也。渾天之大。固不為一方私也。漢以撮爾九州。分野於浩浩之天。不亦倨乎。首楞嚴曰。閻浮提除大海水中間平陸。有三千州。此中一國。同感惡緣。則當土衆生。或見二日。或見兩月。乃至暈適珮玦。彗孛飛流。負耳虹蜺。種種惡相。但此國見。彼國衆生。本所不見。經意姑舍。或置九州於瀛海。或分野察災祥。彼此雖微變。意匠之巧。而提人窺窬天地。通天下之同可觀矣。佛氏本以世界容善惡中。楞嚴曰。是娑婆界。有八萬四千災變惡星。二十八大惡星。復有八大惡星。作種種形。出現世。時能生衆生種種災異。

星名之義

擧星象。總為魑魅罔兩之種。比之漢說益怪。星象本無名。象物名之。諸方一也。故其形似箕則謂箕。似畢則謂畢。雖謂之箕。而不可揚糠。雖謂之畢。而不可獲魚。既已名之。由名附會其義。洪範。星有好風。有好雨者。箕畢也。周以柳燎祀風師。風師即箕星也。蓋箕以主簸揚。能致風氣云。又以槱燎祀雨師。雨師即畢星也。蓋以畢為水物。詩有月離於畢。俾滂沱矣之語。轉者清矣、持者濁矣。是故氣能達則晴。下畜則陰。蒸騰也。臭臭霏霏。自溪澗洞壑升。升而為清精肅收。則淋漓為雨也。故石礎溼。琴絃緩。雨徵在地。不在星也。煙霞靄霧。卿雲氛祲。野馬海市。護霜之雲。蚩尤之旗。皆雲之變也。驟雨霡霂。雹雪霜露。皆雨之變也。月固感于水、日固感于燥。箕畢風雨之應。不見其驗。有若之弗能答。滂沱之問。不亦宜乎。雖無其驗。猶泥其名。呼之司命。泣而乞命。呼之司危。禳而訴災。不知彼奚以當其責。故二十

影星

觀星之惑

八宿。樞紐北斗之外。無用於推步生占候之惑。竟有名之不如無名焉。蓋影與地、靜之體也。而影抱星、地抱於水。而水者止中動焉、星者靜中動焉。以止中動、而雖動而流下者歸卑、以靜中動而雖動而推去者一滾而星體山形。擾然雜置。無復東西南北之整齊。然而擾然之置。爲齊整之行所統。以通東西南北。故上星下地之間。有運轉之輪以載日月使東西南北。不移其處者。同受其化。於是上有日月、下有水火。不能動者。迎之爲其用。故天之日月。猶地之水火。而諸辰者日之具。猶車軸之待輪輻而成也。星之布天、猶山之布地。是其大分也。是以列宿本不同七曜之常不定其處。唯東運與西轉。不同其軸。故雖緯度有時易位。由東行線觀之。千古不移。既不移。則其一脈絡奚疑。星行不守靜軸其象之橫斜欹側。則有矣。若夫河鼓不欲曲。心星不欲直遷。史句信維散。龜龍不居漢中等。皆無徵杜

客德彗孛

撰。不知天象而至此。是故羊裘動天象。臥龍隕將星。偶然驚兒女。豈可上識者之口哉。而熒惑守心。翟方進就殺。窫窳之毒至此。豈得謂小焉哉。古人以星爲嘒嘒之總名。然就條理觀之。嘒嘒異性。星辰分經緯。然而遊火亦以非類竊星名。遊火猶似星。若黃白之交。龍首謂羅喉。龍尾謂計都。月行極高遠之地。謂月孛。亦失嘒嘒以竊星之名。周書。日月星辰四時歲。又謂爲九星。雜取明暗以立星之名。於是牡丹與牛混其名焉。遊火之變。以其大者則曰德。曰客。曰彗。曰孛。以其小者則曰流。曰隕。蓋彗孛德客。天陽之迸出不與陰暗融者。暫從天行而轉。久而滅焉耳。我見彗孛未見德客。且參考諸說。梅子侯星紀要。於客星有計之十二章。其測於客星以爲不麗空際。而麗列宿天於彗星以爲在日月二天之中。由是觀之。高卑復別也。物理小識曰。彗孛之氣。冲入晶宇。然比之于七曜。不啻下甚晉

不識暦算竝擧問之識者。且據梅子之說。客星無芒。彗星有芒。彗又之謂孛。晉書天文志。偏指曰彗。芒氣四出曰孛。或曰就通鑑元封元年集覽考之。史記天官書以景星爲德星。孟康爲黃星三合。正義爲狀如半月。蓋王朔所言。則曰塡星出如瓜。食頃復入。有司以爲德星。郊祀志云。塡星出如瓠。集覽以言歲星所在有福。乃曰德星也。然塡星歲星。卽土木之二辰。不合德星之狀。且如孟康正義。郊祀志說。遊火之象。不宜在星辰之界矣。嚴子陵入漢宮。司天監奏。客星犯帝座。陳仲弓造荀子。太史奏德星之聚。不知當時何以辨客德。若以緯星之聚。爲德星之聚。似司天無人。人漢和發使。李郃見使星。不知客使之別復如何。漢明永建元年。虞詡自繫廷尉。孫程等曰。今客星守羽林。集覽曰。客星唯是彗孛變名。客彗本別。此註誤乎。不然。漢人之曰客。曰德。本無實詣。故其客星。或得其實。或錯認彗孛

歲塡。於是彗孛亦呼爲客星而已。天經或問曰。新星著天甚高。行度有則。初起時小而漸大。後又漸滅云。乃客德之間也。其佗妖星之目多。多皆誤認游火者。地陽昇逼。天陰不相融。其象如日月。如星辰。倏忽起滅。而不及于轉。有聲而沒。則爲流星。引光而沒。則爲枉矢。麁濁爲精淸逼。則爲火於中間。結氣於體質。則隕石於地上。鬱火陰溼。擊爲火。則雷電也。結爲石。則或類人造。其事亦一也。唯彼此以轉持精麁弗同。其象異而已。唯見光而隕。隕而石。則人以爲星隕爲石。唐貞觀中。恒山忽有飛石墜。因建祠而祭。（明一統志）蓋夜間則人望其焰焰。晝則日奪其焰焰。故直曰飛石。與雷後之石一物而已。形類則曰斧。曰楔。曰鑽。曰墨。而其焰焰。有燒物。有不燒物焉。夢溪筆談載者。治平元年。震于宜絳縣許氏園者。火光照天。有物入地中。視之地中熒熒。熱不可近焉。鑿得一圓石。如拳。藏之於潤州金山寺。於

是彌知雷流火隕石雷墨無佗。由彼隕石。又妄意。星者山嶽之精也。觀彼斧楔。終以爲雷則步空之鬼也。張衡以天文橫行於一代。其及著靈憲。曰。三光形似珠玉。神守精存。宣其明。其衰神欲精斁而隕。彼而猶不辨珠魚眼。況其下者乎。其最可供捧腹者。唐太宗時。汾幷兩州之界。有隕石。帝問之胡僧。胡僧以龍之食而對。（明一統志）嗚呼天地不私覆載。象質不私照蔽。人殊境界。別言語異衣裳。則各有其君臣。天地象形。豈獨爲漢兒示變哉。夫華于天者火。液于地者水。至其相錯。雨水液于地。月辰液于天。日星華于天。雷火華于地。天華之變。唯客彗。而地華之變無窮焉。天狗枉矢。或飛或隕或光耀與日月爭。雷。漢人多爲發。方俗多爲隕。震與擊者其狀也。又意有物如鬼。能擊陰慝者。不擊邪莽之徒。滔天之惡。瑣瑣反擊田夫行商。何其不公。雷者陰閉陽。陽鬱而屈。屈而欲伸。欲知其狀。宜雷霆之時。立中庭靜聽之。閃電而聲繼之。忽曝然而起。或一處或兩處。連發益多。轟轟唯作火燃之聲。已而般般散矣。若一聲擊物。蒼茫暗昧。倏見火閃。擊後唯覺硫礬之氣。其物何難知焉。故知火之變。則地震海溢。天鳴雷擊。火走石隕。知其無佗矣。

水生于高而就卑。火發于卑而昇高。水者。氣結而生。止而湛。溼而浸。暗而冷。火者。氣鬱而發。動而鳴。燥而燒。光而熱。水在上則雨雪霜露。在下則井泉河海。燥在上則雲霞雷電。在下則潮濤烟火。是其常也。而水能常。火能變。故火變于下。則爲海溢。爲地震。變于上。則爲流隕飛奔之火。皆雷之類也。溼質爲水。燥氣爲火。陽鬱必熱。熱必發。陽發火。與凝陰相擊者也。激而爲聲。洩而爲光。就而爲擊。結而爲質。故雷有鳴而不光者。有光而不鳴者。有就而燒物者。有擊

而不燒者。有無雲而雷者。有無雨而雷者。能知雷之狀。察火之變。則地震海溢雷雹流隕。本鬱陽可識矣。姑就和漢之史言之。金興定中。陜右地有聲如雷。頃之。地大震。元至正中。邵武地震。有聲如鼓。元大德中。大同地震。有聲如雷。我貞觀中。陸奧地震。流光如晝。駿富士山延曆十六年燒。曰。其聲如雷。灰下如雨。二十一年熱。曰。沙礫如霰。貞觀六年燒。曰。焦巖崩岸。沙石如雨。寶永四年燒。隣國皆震。天暗不辨晝夜。飛沙如炭。奔響如雷。是非雷而何。或地裂或火出。或海潮暴溢。雖其態異。而其由來一也。天者動而變矣。地者止而定矣。雖動而變、而其事常也。雖止而定。而其物變焉。禹貢之九河已入海。歷陽之都。一夕爲湖。意不誣矣。又我明應中。遠州之湖。海溢而爲陸。貞亨中。越前阿古山。半崩爲湖。慶長中。八丈島傍出一大山。寬文中。泉州海中爲一小島。皆以大風洪波。天平寶字中。隅薩之界。烟雲晦冥。奔雷去來。七日之後。出三島。炎氣露見。有如冶鑄之爲。是非雷而何。又有其事常而與雷同者。明一統志所載。山西平陽府鳴山。浙江寧波府鼓吹山。皆欲雨則鳴。是欲雨則陰滲外塞。鬱陽動于中也。觀福建興化府鳴山。頂有穴。欲雨則鳴。隱然如雷。則彌可知矣。觀江西廣信府自鳴山。上有湖。欲雨則水涌。其聲如雷。則潮之鬱陽。而與雷不遠可知矣。夫水者體重質止。唯質結于天。則不得不降。生于山。則不得不流。唯氣發于中。則不得不涌。陽發于下。則不得不潮。故水之動者。非其質之自然。欲止而未能也。自鳴山湖。其跡可推矣。潮之與月期。已載玄語。則置之。游藝數水動之變。曰。海早晚兩潮。廣東一潮。柳州昔相嶺下潮井。一日三涌三落。滇太華山聖泉。應子午卯酉。四潮。厄勒祭亞

一島海一日七潮。貴州城外漏泃。一日百盈。以應刻漏。安寧州潮泉三溢三蘸。連州斟泉。一日十溢。移風縣湖鷄鳴長。錢塘江。僯海口子午潮不爽。歐羅巴。西北一地。其海無潮。廣東金陵間。常涌水十餘日。不退。名曰海嘯。是皆地體之疏密。陽氣之鬱發。有使然而然。然則雖潮水有常期。火之變無窮。則水之涌溢。亦無不有矣。是在地者之變也。晉永興中。天鳴。曰。亦氣亘天。砰隱有聲。元至正中。天鳴。曰。黑氣蔽西方。有聲如雷。其佗則不言雲之有無。又我應永中。天地鳴響。蓋天之鳴。非天實鳴。地氣奮發。聲響于天也。然則天鳴地鳴。天地同鳴。亦其事同矣。東晉升平中。天裂。有聲如雷。梁大同中。天裂。光出如電。其聲如雷。天者氣也。氣豈可裂哉。由其說推之。皆雷而異狀而已。夜間有物。帶光而出。遲曰流星。疾曰飛星。皆以類星而假其名。唯大者炎炎如

火。共非別物。考諸古史。其狀不一。晉太康中。唐中和中。寶龜中。元慶中。星隕如雨。皆不言雲及聲之有無。春秋莊七年者。曰。恒星不見。星隕如雨。則天暗可知矣。漢永始中者。曰。星隕如雨。長一二丈。繹繹未至地滅。則其象可想矣。唐開元中者。曰。有星西北流。大者如甕。如斗。小者不可勝數。則大小一物可知矣。天平中者。曰。天衆星交錯亂行無常所。則流星有時多可知矣。隕星漢元延中者。曰。殷殷如雷聲。晉大安中者。曰。如雷。唐武德中者。隱隱有聲。同景龍中者。聲如雷。野雉皆雊。後周顯德中者。曰。其聲如雷。牛馬皆逸。京城以爲曉鼓。皆伐鼓應之。宋咸平中者。曰。聲如牛吼。是皆其有聲者也。唐元和中。流星墜陳蔡之間。初起中天。首如甕尾如二百斛船。神龜中。流星長可二丈。光照赤。四斷散墮宮中。此終露火形。夫火性昇而不降。水性下而不昇。水

就變論事應

雖好降、陽欲達于上則爲之泝、火雖好昇。陰欲結于下則爲之降。蓋其或流、或隕、又如日如月。自有輕重淸濁之分。至其麄濁重厚、終結石質、觀其結石而隕、而知其不結石而隕者。亦與結石同氣。蓋在轉中者、形圓行轉、在持中者、形斜行邪。故彗孛之類、與飛流隕昇、隔轉持則其品亦異。」

象動則朔望晝夜交食。勢不能不然矣。春秋者史也。天地之變。人事之故。不可不以紀。非復爲事應焉。邵子嘗問程子曰、子知雷起處乎。程子對曰、起於起處。於是程子勝於邵子。沙麓崩則記其崩、震夷伯之廟、則記其震。沙麓之崩、爲晉惠獲於秦與宋襄之囚於楚。宋山盡崩、震夷伯之廟、爲展氏有隱慝。與盡震共仲之廟、雖宋景似有三舍之福、而郕文不見延期之報。故以事應合天人、雖詳而竄窾之事也。迅雷風烈、必變者、禮也。是故爲人君者、値天地之變、徹樂求言。所謂小心翼翼。昭

溢辭

事上帝者。而王者之美事也。而不知厭禍禳災。其弊終至上豫殺人以厭之。下引咎以自裁而極。夫天行者定焉、之爲歲、地行者變焉。之爲運。張衡嘗造候風地動儀。形似酒尊。外有八龍首銜銅丸。下有蟾蜍張口承之。若有地動尊則振。龍機吐丸蟾蜍銜之。一龍發機。七首不動。尋其方面。知震之所在。未能推在天之定期。欲預知在地之變化。彼豈能焉哉。主者、天地、聲者、人也。出于天者、定于一、成于人者、紛紛不同。彼諸星之離屬。由國而異。不知災祥亦由是而轉乎。以定于人者、爲天之本然、以僻驗轉相證。終弗覺其非。詩曰維南有箕、不可以簸揚。維北有斗。不可以挹酒漿。噫織女不成章、牽牛不服箱。琵琶之不爲器。鸜鵒之不爲鳥久矣。」

五長第七

麟鳳龜龍、垂之於經、載之於記傳、昭昭矣。而家語曰、羽蟲三百有六十、而鳳爲之長、毛蟲

三百有六十。而麟爲之長。甲蟲三百有六十。而龜爲之長。鱗蟲三百有六十。而龍爲之長。倮蟲三百有六十。而人爲之長。以晉觀之。殆不然也。蓋古人之屬辭。贊貶率多溢辭。故稱樂之美。則曰。簫韶九成。鳳凰來儀。曰擊石拊石。百獸率舞。語歸伏。則曰。舞干羽于兩階。七旬有苗格。言偃武。則曰。歸馬于華山之陽。放牛于桃林之野。祝壽則曰。卑我尸賓。壽考萬年。稱人才。則曰。天命玄鳥。降而生商。曰維嶽降神。生甫及申。語水之大。則曰。懷山襄陵。浩浩滔天。言人之可罰。則曰。皇天降災。假手于我有命。贊先代之美。則曰。有夏先后。方懋厥德。鳥獸魚鼈咸若。言居喪之謹。則曰。高宗諒陰。三年不言。鳴紂之罪。則曰。皇天震怒命我文考。肅將天威。述如在之義。則曰。文王陟降。在帝左右。曰工祝致告。神具醉止。語牧野之敗。則曰。血流漂杵。言邊戍之苦。則曰。靡室靡家。玁狁之故。比彼此之多寡。則曰。受有

獲麟

億兆夷人。予有亂臣十人。說大風。則曰。禾盡偃。大木盡拔。語其反。則曰。禾則盡起。歲則大熟。刺時之亂。則曰。亂生不夷。靡國不泯。怨大旱。則曰。周餘黎民。靡有孑遺。述兄弟之厚。則曰。每有良朋。烝也無戎。刺婦人之惡。則曰。懿厥哲婦。爲梟爲鴟。贊應則曰。雲從龍。風從虎。是豈皆實事哉。果是實事邪。德光初四表。格于上下。而何洪水之割。懷山襄陵。萬邦協和。黎民變雍。而何有嚚訟之子。方圯之臣。頑嚚之民。麟鳳者。羽毛之美。而世之珍也。故以是比美德。贊美業。孔子者。魯人也。春秋者。魯史也。而麟者。魯之所獲也。以魯人作魯史。善不沒。惡不蔽者。史之道也。非常必書者。史之法也。麟者世之所美也。獲麟。魯之實事也。蔽實史豈敢哉。以魯之實。結魯史。記實含贊婉而不諂。噫夫子以麟爲聖人不當世。則不見者乎。獻媚也。以爲己聖而不遇。故麟亦遇害乎。不遜也。媚與不遜。君子不爲。夫麟鳳爲足以

卜聖人乎。後世麟鳳間出。奚聖人之弗出也。若曰。後世之麟鳳。非麟鳳矣。麟鳳之出。有待聖人也。故聖人而後能知麟鳳。則竢聖人之言我便聖人也。是乃眞麟鳳也。乃待我而出。決之乎。若又曰。當聖時。則謂之麟鳳。不當聖時。即不謂之麟鳳。則惟其名貴。而其物不貴焉。孔子若以麟自負聖。則非聖與仁則我豈敢之聖。易云。勞謙。孔子豈以勞自矜哉。既不以聖自負。不以聖媚人。何以爲之聖兆。又按。春秋之修。據孟子。則爲懼亂臣賊子而作。據孔叢子。則夫子屈於陳蔡而作。杜預則謂感麟而起。其說曰。麟鳳五靈。王者之嘉瑞也。今麟出。非其時。虛其應。而失其歸。此聖人所以爲感而起。固所以爲終也。非時不祥。虛應不靈。失歸不智。然則其或聖世有此物而出。由此感衰世則有焉。惟未得其徵焉。左氏之傳曰。魯哀公十四年。春西狩於大野。叔孫氏之車子鉏商獲麟。以爲不祥。以賜虞人。仲尼觀之曰。麟也。然後取之。夫春秋感獲麟而作。奚左氏記事之疏。據何休所傳。則公穀亦同。不之傳。然則春秋何以作。周東遷後。官失其守。孔子遊諸侯。不能爲東周。遂反修周家之禮。訂正詩書易春秋禮樂。是修周之典禮者也。而修時則未可知之。蓋周公垂法。已來國各有史。故韓宣子之魯。見易象與魯春秋。曰。周禮盡在魯矣。吾乃今知周公之德。與周之所以王也。意春秋之典。周公至孔子。歷世已久。史非一人。策書於義。未能無可否。故闕如文獻之所不足。裁修隱公以下也。非作也。蓋孔子之修春秋。史之事也。孟子急于辨。好辨之謗。故引舜禹孔子。設說終以孔子作春秋。爲天子之事。說家之態也。素王素臣之說之所由萌與。蓋各國之於史。名據孟子。則晋曰乘。楚曰檮杌。魯曰春秋。云。雖然。春秋之名。不獨屬魯國。故管子之書。稱曰。春秋之記。則齊史亦春秋也。晋語。司馬侯。對悼公。曰。羊舌肸習

於春秋楚語。申叔時對莊王曰。敎之春秋而爲之聳善而抑惡焉。以戒勸其心。則晉也。楚也。亦春秋也。蓋春秋。有事則諸侯之國。相赴告。赴告之事。乃策書之。故楚范武宇言曰。衞蒲戚出獻公。宋蕭蒙殺昭公。魯弁費弱襄公。齊渠丘殺無知。晉曲沃納齊師。秦徵衙難桓景。皆志於諸侯。又宋華耦曰。君之先臣督。得罪於宋殤公。名在諸侯之策。衞甯殖曰。名藏在諸侯之策。曰孫林父甯殖出其君。蓋史官大事書之於策。以視於朝。小小事簡牘。策者。其辭簡而其筆法。簡牘者。其言詳而其事實。蓋以傳春秋左氏。爲丘明者久矣。業已爲丘明。故或合或分諸恥足恭匿怨之人。同歸無徵焉。古昔史有左右。左氏其左史之流。亦不可知。則君子其於疑闕之亦可。後世不滿于左氏者多焉。左氏固不滿人意。雖然世無善於斯書。則是乃簡牘之體。其如誣。如怪。如可信。如不可信。意左氏傳其所聞。以竢識者之

斷。然則今之以此責左氏者。其得無或過于刻哉。故今之讀春秋者。取捨斯簡牘以讀經。左氏何負仲尼。故左氏之所傳。古者簡牘之體。策書無簡牘。則不可之考。簡牘無策。則不可正之。簡牘者。惟紀其實而已。策書者。國家之曲章也。齊崔杼殺莊公。齊太史書曰。崔杼弑其君。魯史從之書曰。齊崔杼弑其君光。趙穿殺晉靈公。晉太史書曰。趙盾弑其君。魯史從之書曰。晉趙盾弑其君夷皐。許止進藥不謹。亦書曰。弑其君買。史以其職正筆示朝。趙盾之位。崔杼之威。許世子之貴。不能枉之。懸褒貶於時。傳美醜於後。噫彼賊子亂臣。斧鉞湯鑊。猶能犯之。若徒以筆頭之微辭。勸懲之。不亦迂乎。故今之經傳。則古之策牘。史官之所素有也。非所謂丘明者刱之。故以策見之。崔趙與許同辭。由牘考之。爲崔氏正揭其罪。使國人知其惡。爲趙氏責不討賊。爲法受惡。爲許止懲其不謹。示事父母之道。三子者異

旨同辭。苟非簡牘。孰辨析之。伊川嘗曰。傳是案。經是斷。比諭善矣。王陽明非之云。如書弑君。即弑君便是罪。何必更問其詳。書伐國。即伐國便是罪。何必更問其詳。苟如此不考策牘之分。不審作修之異。謂之爛朝報。亦可也。噫果若王說。書者有義。不書者無義。夫諒闇天下之大事。然不赴不書。即位一國之重典。時或闕之。或以懲不敬。或以示義類。然則書與不書。同有義存。王氏誣矣。夫列國之史法。何非周公之制。雖然魯者周公之國。流風猶存。故今得魏哀冢中之紀年。相比若紀年則書晉獻公會虞師伐虢滅下陽。魯史則書虞師晉師滅下陽。紀年則書周襄王會諸侯于河陽。魯史則書天王狩于河陽。優劣可知矣。韓宣子之所嘆。蓋如此類。而今列國之春秋。與魯之舊史俱亡。則孔子之所修亦難考異同。又按公羊傳。莊七年。星霣如雨之下。有引不修春秋曰。不及地尺之語。則時尚見其不修者乎。蓋孔子之修春秋。時當獲麟。故止獲麟。結得婉轉。縱使此時當鷁飛星隕。亦可止鷁飛星隕。是故連綿相繼。後史之任也。春秋竭於斯哉。是故孔子之所修。至獲麟。延至孔丘卒者。史之相繼者然。欲以爲孔子之書。故以孔子卒裁。噫征南之於左氏。專守其傳。以說經。而於獲麟則不守其傳。更引孔舒元之公羊傳者何邪。或曰。春秋之說我獲聽命。若主東遷。宜始惠公。而始于隱者何邪。曰。晉未聞其說。竊以爲起于文獻之可徵焉。尚無已。則以詩例之。蓋詩自東遷而降于風。置王於此衰與名分隱然見其間。

焦氏筆乘辨解孟子王者之迹熄而詩亡。爲黍離降爲國風。謂風雅者。體製之異也。故其聲風。則二南亦系之風。其聲雅也。雖如正月之篇。出幽王以後者。亦系之雅。此似而非者也。蓋雅者王朝之詩也。風者諸侯之詩也。王公自有其聲之分。觀季札論

樂風雅共在大師而師官闕杞宋者何非天子也夫當時杞宋魯之人獨不能詩哉。有詩而師不取。蓋古之遺禮也。故雖曰周曰召曰豳。而同諸侯之詩也。而其降者。王朝自棄其禮。還作諸侯之聲也。而王者。晉師不混之於諸侯也。若曰不然。則季札之時。何於杞宋魯不存一詩。若言無風者。不獨杞宋魯乎。然宋魯文獻之盛。不可比之於燕楚之僻遠邾許之小國。宋魯有頌而無雅。西周有雅而無風。豈是可謂偶然焉哉。

夫書與春秋。同史也。書終文侯之命。春秋起魯隱公。春秋之義。以宗周之滅于幽而創業於東遷之主。書之義。以王綱之不絶于幽而存義於東周之命。一以哀其滅。一以冀其振。不欲致絶於東周。故寓其始傷衰於東周。故起事於其主。而春秋者。魯史也。非周史矣。而隱能讓者也。其所以託始乎。

夢溪筆談有平王東遷在惠公二年之說又近是。

鳳凰

鳳凰爾雅禽經共。以鳳爲雄。以凰爲雌。說者曰。鷄頭蛇頸。燕頷龜背魚尾。今由圖與說考。蓋亦鷄類焉爾。鳥本有步飛之分。鷄雉者步鳥。有文彩。不能高飛。亦有鵷鸞。鳳與鵷鸞共實未審其形色聲音。若古人所言。鳳凰生東方君子國。翺翔四海之內。鴻鵠之類也。司馬相如賦稱鵷雛孔鸞。諸家以爲鳳類。以予臆斷之。經稱鳳多言其聲音。經言鸞。曰和鸞。曰鸞刀。共有聲之器。然則鸞與鳳。共聲音美好。幷羽毛而美者。而鸞者飛鳥。鳳者步鳥。以羽聲之美。混稱之。鷄頭燕頷。則分明鷄類。鷄類則焉縹縹翔千尋。然則鸞者具羽聲之美。翔空之鳥。鳳者具羽聲之美。步地之鳥。昔者外國來王者。貢其方物。是乃來儀。後世屢見而人以爲鳳者。鸞類焉爾。食竹實。棲梧桐。孰識其然焉。故知文成致麟者。妖妄之言。鳳鳥不

龍

至河不出圖者。傷衰世之婉辭。龍亦我未得而見。果能起雲霧鼓風雨邪。果能潛蟠水底飛揚天衢邪。說者分品。鱗曰蛟。翼曰應。有角曰虬。無角曰螭。蓋龍、鱗類也。雖謂之有翼。不過長鬣條理之道。無翼者不翔。有鬣者有泳。而風雲非動物之所使。見魚喩而雨。鳶鳴而晴。意魚鳶致雨晴。不知雨晴之氣能使魚喩鳶鳴。龍亦一動物。何得違條理。意其跳躍乘疾風驟雨邪。今見一路大風翻屋拔木。託之於龍。雖託龍而不見龍焉。知非風矣。古之天地猶今之天地、今之龍不可褻。古之龍。豈可褻哉。晉蔡墨之言曰。有飂裔子以畜龍服事帝舜。賜姓曰董。氏曰豢龍。及夏有劉累者。學擾龍于豢龍氏以事孔甲。賜氏曰御龍。龍水物也。水官修其方。龍可生得矣。昔者太皞以龍名官。安知龍官之遺名不傳至虞夏哉。蔡墨亦述其所聞矣。其傳五官之正。傳龍之荒唐。雖終引易以實之。然易之於龍將言其一潛一見。一躍一飛之德。藉龍之不可褻以言之。非言龍有是德。故擬之牝馬柔順則稱牝馬之貞。馬豈有貞德。人擬之哉。龍德果如陽辭乎。非嗜慾飲食之所啗羈。有劉累何爲。宋時茅山之池有龍如蜴蜥。而五色祥符中。使中使取二龍。中使奏一龍在途騰空而去。程伯子至。捕而脯之。同一蜴蜥。或騰空。或上俎。在其人哉。

蓍龜

周禮有天地東西南北之龜。龜人掌之。卜師掌開兆。龜之蠢頑無靈。曝也爲烏鳶弄。蟄也爲漁人獲。且元緒之虛誕。何足實之。夫人有智則不能無信疑。疑者不可決之於有意。有意之不可決者。不得不問諸無意。此所以古稱稽疑也。既欲問諸無意。不得不設其術。既有其術。不得不尊敬之神明之。彼之古。決疑之設二。曰蓍。曰龜。蓍數也。龜兆也。敬信數兆之餘。及其物。故蓍爲靈艸。龜爲神物。曲禮曰。龜爲卜。筴爲筮。卜筮者。先聖王之所以使民信時日。敬鬼神。畏

法令也。所以使民決嫌疑、定猶與也。故曰。疑而筮之則弗非也。古人設卜筮之意。可觀矣。蓍龜果神靈乎。一事再占豈可違哉。人有疑事。取之一決。再則占亦疑。故易曰。初筮告。再三瀆。瀆則不告。利貞。再三則再三告而曰不告。非占亦疑乎。灼龜觀兆。揲蓍畫卦。彼之古俗也。燒鹿骨觀吉凶。流柏葉占浮沈。我之古俗也。夫餘於牛蹄。粤於鷄骨。或籤。或珓。雖術不同。天下同情態。可觀矣。是猶雖我跪彼立。而同爲行敬。胡彈骨。漢歃血。而同致結信也。蓍者蒿類。龜者鼈屬。人之神明之也。非以彼之神明焉。然則龜鷄牛鹿蓍柏何擇猪犬藿葦。用之則何異。敬而遵守古。愼之至也。蓍龜其果知吉凶。出兆見數以告人乎。今無事而卜筮之。猶得其兆數。故兆數吉凶。參差如市人相面。夏后孔甲畋。避雨於民屋。主人方乳。一曰后來之子必貴。一曰不勝之子必殃。后取其子歸養。以斧斬其足。遂爲守門者。孔甲

祇避雨。主人祇乳。本不相關。雖本不相關。以吉凶之言。指遊吉凶者。言殃者不中。則言祥者中。兩人互言。一必中。雖中何奇之有。是故周官占人。歲終則計占之中否。龜筮已神。何須計中否。周禮。卜三兆。曰玉瓦原。杜子春以爲玉兆顓頊之兆。瓦兆帝堯之兆。原兆有周之兆。金縢曰。啓籥見書。而左傳間載卜之辭。則卜亦有書。今不傳焉。惟易先聖畫象。後聖繫辭。考之陰陽消長。以盡出處進退之義。非徒爲射覆中隱矣。是以君子居則觀其象而玩其辭。動則觀其變而玩其占。故荀子曰。善爲易者不占。不占之爲占。玩之者而後能知。洪範七。雨霽蒙驛克者。卜之兆也。貞悔者筮之用也。箕子曰。汝則有大疑。謀及乃心。謀及卿士。謀及庶人。謀及卜筮。然則古之占。未有不盡之乎人。而以委卜筮者。惟鬼神祭祀。不可專之於有意。故用卜筮。衆謀已定。何用卜筮而箕子有龜筮共違于人之語。我不解其

所適宜。又且不應於汝則有大疑之言疑誤昔者舜將禪禹。禹謀枚卜功臣。從其吉。舜不聽。而言官占惟先蔽志。昆命于元龜。朕志先定。詢謀僉同。鬼神其依。龜筮協從。卜不習吉。蓋官占之先蔽志而後命龜。與枚卜之歷之從其吉。必有其禮與法。而今弗可考。昔魯哀之時。巴人伐楚。子國卜爲右司馬。如志。故命之及巴師至。將卜帥。楚子曰。寧如志。何卜焉。君子曰。惠王知志。夏書曰。官占惟能蔽志。昆命于元龜。其是之謂乎。可以徵焉。楚莫敖之與鄖鬭。謀定欲卜。鬭廉曰。卜以決疑。不疑何卜。此義可由也。曲禮占日法。卜筮不過三。卜筮不相襲。占日故至三。貴貞。故卜筮不相襲。未必與彼初筮告再三瀆者。相反。三蓋如彼周禮太宗伯祭祀帥執事而卜日。宿春秋改卜郊牛之類。然夫鳳高摶。龍深潛。玉靈夫子。何不能自護。獨離燔灼之厄。何智之短于生前。神于死後。人者。獸類也。獸中有竪立。有橫俯。橫俯多種。竪立亦不少。至猩猩能言。獼猴多智。則最逼人。其爲類也明。蟲者。異類也。各依一物。以其一物氣、爲天、以其一物質。爲地。故有瓜之氣物。以蠸生。受苗之氣物。以螽生。故蟲之所天地。非我之所天地焉。既不與我同天地。故羽而飛非鳥。脚而走非獸。有鱗者。有甲者。有卵者。有胎者。有化者。有變者。或水飲。或粒食。或食肉。或噏氣。或羽鳴。或股鳴。或逆步。或轉跳。非異類而何。然倮者蟲中之一種。最蠢蠢者也。蝦蟆蚯蚓。蠐螬蛞蝓。豈我伍哉。雖惡獸之愚。孰與於蟲。夫動物之於天地。非素有此長大勝小。强制弱。智使愚。人雖無爪牙之利。鱗甲之固。飛泳之技。以智術意匠。闌虎狼。羈牛馬。驅犀象。繳鵰鶚。罔鯨鯢。相地形而邑。芟艸木而室。航海棧山。播野煮海。范金合土。製衣裳。修冠履。差親疏尊卑之等。飾嫁娶葬祭之儀。畫地度天。爲天地間。主萬物之長。神氣優之所致也。齊田氏坐有獻魚鴈

者。田氏乃歎曰。天之於民。殖五穀。生魚鳥。以爲之用。鮑氏子前曰。天地萬物與我並生。類也。類無貴賤。以小大智力而相制。迭相食。非相爲而生之。人取可食者而食。蚊蚋嗜膚。虎狼食肉。豈天本爲蚊蚋生人。虎狼生肉哉。此說却公也。禮運曰。麟鳳龜龍。謂之四靈。故龍以爲畜。故魚鮪不淰。鳳以爲畜。故鳥不獝。麟以爲畜。故獸不狘。龜以爲畜。故人情不失。此不惟溢辭。涉無稽荒誕。子產有言曰。吾無求於龍。龍亦無求於我。我讀譚子化書曰。神龍見。喪風雲之象也。鳳凰來。失尊戴之象也。麒麟出。亡國土之象也。觀我之義。禽必不義也。以彼爲祥。禽必不祥也。四者其靈。果以長於物。則譚子之言。幾于實焉。又曰。禽獸之於人也何異。有巢穴。有夫歸。有父子之性。（按父當改爲母）有死生之情。焚其巢穴。非仁也。奪其親愛。非義也。以斯爲享。非禮也。教民殘暴。非智也。使萬物懷疑。非信也。此儒流之所未見到也。蓋

四靈祥瑞之末說。達者不取。而今搢紳譚及龍女雁王。則排。至簫鸞董虎。則笑。至說麟鳳龜龍。不啻敬且信從。而爲之辭。旁人必言阿其所好矣。新劍以詐刻加價。弊方以僞題見寶。葛子之言信哉。

始終第八

客難曰。兩儀未分。混混沌沌。淸陽者昇爲天。重濁者降爲地。故回視彼盤古之前。則鴻濛焉。列聖開物成務。汙尊抔飲。爲簠簋俎豆。被毛穴處。爲衣冠宮室。今不過四五千年。謂之天地無始終。何以世有古今。予對之曰。天圓褁地。地直載天。圓有東西。直有昇降。地能輻輻持。天能輪轉。質之好降。猶象之好東。地氣之好昇。猶轉之好西。迎無首。將無尾。往弗見標。還弗逢本。是以天地無窮矣。已無窮矣。豈有所終始哉。彼混沌者。果未分邪。何地有輕淸之可昇。何天有重濁之可降。既輕淸重濁。既昇降浮沈。曷在未分。果其混混沌沌。疇視

傳之既置混沌於天地之先天地之後盍棄混沌天地之後不廢混沌混沌之時何可廢天地無稽莫甚焉噫大物之中假有昇降之爲物亦持中之事而已覩輻末知輪豈足語全天地哉夫人之口傳至再至四不能存實至五至六虛實可陽裁其可傳實者書典之設而已書典之制未久焉得知其前況書典虛者傳虛誕者傳誕今庸衆人識父識祖至曾高則傳聞朦朧推至五七世之先則茫茫焉傍有人曰我知爾先則拱手而聽謂之越亦信謂之胡亦信謂之自天亦信謂之自地亦信不啻其人信之傍聽者亦信見牛於門內孰誤其牛望之於曠野曰豬亦信曰馬亦信望之於遠郊曰木亦信曰石亦信置之於杳渺之地曰有亦信曰無亦信三墳五典喪焉尚書存於老叟之口傳孰辨古於豬馬木石有無焉故身首蛇牛以誣古聖莫之敢疑是以視聽之所不及稽考之所不至說之愈

無窮

詳者失之亦愈多無稽荒誕之言公行於世以有書之後疑無書之前以妄傳而終惑實事皆囿於聞見者也噫使今無知古則曾高之前必鴻濛之時使後世無知今我當有巢燧人之世昔魯公問戎兵之所起於孔子孔子對之曰與民皆生如被毛穴處之衣冠宮室汙尊抔飲之簠簋俎豆結繩之篆隸衣薪之棺槨有以世而變焉身之於衣口之於食父子之於親男女之於感疾病之於醫藥信疑之於卜筮苟有其物則不能無其事勢與民偕生奚竢有巢初巢竢燧人始炊故後世舟楫車馬探絕域臻異國風氣之所開有衣食有室廬有兵戈有醫藥有舟楫有網罟有耕稼有布帛有貨泉百之營作亦不甚相遠矣由是觀之夫子之言可信諸家之說出臆度坱坱然靡物不氣矣孰敢先於氣孰敢後於氣是以無與有同成虛與實齊成莫有首尾焉是故謂之稀夷葛天今之天地也謂之

龍華會上。今之日月也。既往將來。自今分。猶東西之自我定。內外者。宇也。往來者。宙也。宇物。而宙事也。雖內外曰宇。內外無窮。雖往來曰宙。往來無窮。眇五尺之生。以往來之窮於死生。內外之盡於肢體。比之於無窮者。是猶執衡度丘陵。執斗量河海。其智安不窮焉。一氣大物。人得而窺之。一氣之所以一。氣大物之所以大物。苟無露其跡。則孰敢窺之。故圖於我形跡。不知形跡我者。故高者。混混而談。卑者。粲粲而計。天地之道。混兮粲兮。故一也。粲兮混兮。故二也。唯沒沒痕。故能著痕。唯能著痕。故能沒痕。聖不得而窺。故愚得而見。愚得而見。故聖不得而窺。唯能始終。故能不始終。唯能不始終。故能始終。宇宙有此。此有宇宙。來則往。生則化。是爲始終。往則來。化則生。故成無窮。有限之身。以比無窮之體。有窮之智。以度無窮之氣。於是乎。生窺窬。夫一身之死生。猶一艸一木之生化。一艸一木之生化。

圖闕

豈損木曾之山。終古之蒼蒼哉。譬之猶涉水之人。見衣裳點滴之乾。推之以恐河竭矣。以全天地觀之。化于此。則生于彼。消于彼。則長于此。蘇子所謂往者如斯。未嘗往。盈虛者如彼。卒無消長也。邵子淫數。觀一日十二時。一月三十日。一年十二月者。以一元十二會。三十運。十二世。十二萬九千六百年。說開闔。佛氏則識爲大。故以天地爲器。是以曰世界者。四大之所成。業和緣合而作。數盈災起而滅。皆以人窺天也。及明代西學入。天地曆算始密。然猶傳回回三元之說。梅定九辨之曰。是明吳郡人陳星川之所立。非回回法。天地人三元各二千四百一十九萬二千年。今嘉靖甲子在人元。已曆四百五十六萬六千八百四十算。所以爲此迂遠之數者。欲以求太乙數之周紀。注曰。王肯堂筆塵曰。太乙家多不能算曆。故以曆法求太乙。多不合。惟陳星川之太乙。與曆法合。地者。天之質。天者。地之氣。而人者。天地間之一物也。邵子却言。天闢於子地

闢於丑。而人闢於寅。釋氏則曰。刧初天人初下。由身光失。日月生焉。似聚兒譚鬼也。於其說之最巧者。揭子宣曰。太虛之中。元氣摩盪。蒸爲重脹白霧。陰滋陽長。吹息不已。遂豁然內空。有若浮漚。日月星辰。從茲麗矣。故造天元。起于微氳。于空漚中。陽氣噴薄。燥爲野馬塵埃。日飛露聚。旋轉凝中。遂坏然內實。有若彈丸。大地山河。從茲始矣。故地原起于微塵子宣何物。識洪荒。如此其詳焉。見鳥之伏卵。醋甕釀醯鷄。造此想像說也。其假曰天地闢亦不過以無爲有。曰天地闔。亦不過以有爲無。物本無始終。奚得而始終之。氣本無有無。奚得而有無之。氣既不可有無。物寧獨始終。氣物既不可以有無始終之。天地何以開闔。夫風化之開不開者。人以敦樸而居。與以聰慧而居之間。而彼一時。此一時者。何與天地之開闔。自就粒食者。觀夫茹毛噏血之民。實如不同其性。然腸胃者。安於所慣。高車之知

粒食。見魏書蠕蠕傳。夜來山西之胡。啖生肉。不火食。見夢溪筆談。然此猶遠矣。我之鄰壤。蝦夷。或曰。此乃古肅愼之地。舟楫之所通。請近取徵之。蓋其壤當我東北。諸島相聚爲國。西北與韃靼隔海相望。東北則邏迤接彼西人所謂亞墨利加者。北則瀚海浩蕩。直去入夜國。其間山尖水駛。其俗璞不琢。有言語而無文字。有交易而無幣。見盈虧而紀月。時寒暑而識歲。刳木之舟。曲木之弧。鳥獸魚蝦。以餬其口。故山有金銀而弗採。水有琅玕而弗寶。今也。其南邊已歸版圖。則其人亦我人也。其食亦我食也。風化之所及。近鎭之東西稍稍就粒食。耒耜或用。事詳于源在中蝦夷志。然則此地結繩爲網罟之庖犧已出。劉木作耒耜之神農未生。是以棺槨易衣薪。書契代結繩。明天道修人紀。往將竢諸將來之聰慧。子或以開物成務與茹毛汙尊說開闔蝦夷天地。後我天地而闢邪。亦奚以以敦樸而居。

與以聰慧而居疑天地之闔闢為。曰雖然我猶有疑。朱子曰。五峰所謂一氣大息。震蕩無垠。海宇變動。山勃川湮。人物消盡。舊跡大滅。是謂洪荒之世。嘗見高山螺蚌殼。下者為高。柔者為剛。是言也有徵。如不誣然。曰噫是何足以為徵。夫有天地而有陰陽。陰陽絪縕。物生其間。螺蚌之生山間。地脈有通而然乎。一方山川出沒之所致乎。是雖未可知。而非一大造前物也。何則其當日月失明。天行壞亂。山崩石阬。川竭海翻。螺蚌何物。能全其質。考亭偶未思焉耳矣。象山陸子幼疑天地之所窮際。看四方上下曰宇。往古來今曰宙。忽省曰。元來無窮。人與天地萬物。皆在無窮之中者也。可謂卓見矣。然陸子見以為理。則開境於理。未開於氣焉。猶隔一層也。曰然則天地如斯而已乎。麻剛立一生精力。盡在推步。曰天行無一不成角形者。黃道特斜于赤道。而不得角形。古大今小之理。無所推本。由古大

今小推之。數萬年之後。黃赤同合。其輪同合其軸。此時日恒行赤道。晝夜無有長短。二極恒見半輪之日。無有冬夏。漸而黃赤分輪。歷數十萬年。黃輪當赤輪。赤輪當黃軸。於是北為東。赤道南北。不暮者各半年。不曙者各半年。冬至之日麗南極。夏至之日麗北極。常見日之橫回。天道如斯變。土地山川人物草木。已異。氣候恐非今之物焉。又過半象限。二至反其點。氣候相同。又過一象限。而輪輪軸軸相當。復舊矣。輪輪相當也。其行縮矣。輪軸相當也。其行寬焉。寬而止焉。黃道之行。異其向矣。異其向矣。故黃道為東。黃道為一周天。二經洪荒。於是天數可言也。然人滯夏蟲之見。無之敢是。晉聞大感其言。曰剛立氏之術。至是窺神機。吾不知數。以條理徵之。常也者。定而弗易者也。非定而弗易。不以足為常矣。變也者。盡變而後變也。不盡變。不以足為變矣。轉者定而守常者也。運者動而盡變者也。苟

不如剛立氏之所言則於變有未盡焉五尺之身百年之命以吾所慣泥所變焉何足以大觀焉如此則氣候大變山現地陷之變亦不可識焉而絪縕已異則人物草木亦或其行變亦弗可測焉然而天地未嘗滅焉

贅語一天地帙下

贅語二陰陽帙目次

贅語二

陰陽帙上

日本 鎭西 三浦晉 安貞 著

天地生人。而人居天地。人之資于天地轉其神以爲此心。心之所運。以通以塞。通塞之間。信疑悟惑雜出。眞妄正邪相閲。通塞相爲雌雄。雜閲相持于世。五尺之軀。百年之命。提己觀非己者。以立準於衆萬驅入之於己。不假人意。不用按排。而天則可得者。唯有條理。以有條理。人莫不言陰陽者。以不能繹條理。無復識陰陽者。晉始得剖對反比混粲食吐之故。如觀其髣髴。草玄之餘暇。重著贅語。陰陽有帙。多口饒舌。以啓童蒙。蓋性一體二。二卽一一。一一卽陰陽。天地露物。一一體之。而露中氣物露體於天地。陰陽見性於華液。故此帙始言陰陽之爲一一。終言物分體性。各有其天地。先達不辨天人。以人數譚天數。於是塈除汙萊。以及與氣物分天地之陰陽。

陰陽

陰陽訓

性、一具體之二。體二見性之一。一莫所不混成。二莫所不粲立。二則一一。一爲陽、一爲陰。一能剖析、二能對待。故自一析二。廼是經。以一望一。廼是緯。擧二觀一。則一隱二中。執一望一。則一能反一。一隱則二見。一反則一合。一一固一一。一二亦一一。一一同居同名。獲乎天。而未稱乎人。陰陽。反態異名。獲乎天。而能辨乎人。是以。氣物之物。孰天孰地。可指摘致人。一一之體。孰陰孰陽。在意解自識。數車無車。而其不沒車之名者。車存于轅與輪轂也。故執粲立之專主。失陰陽之面目者。兒童之見也。一則能全、二則能隻。以一而一移居二。以二而相合成一。故一剖一一。一一無數。無數合偶。合合歸一。是以。一陰一陽。同居異

竹喩

道。其爲位虛。其爲用實。其跡相反。其力相均。試取竹裁管。必得兩端。惡其有端。斷使無之。兩斷各持端。至盡而不已。物雖微。而不與大隔。二者一一之粲立也、合之則分有條理、故其道也異、一者一一之混成也。分之則合無罅縫。故其居也同。是以。一一者、陰陽之未有各名也、陰陽者、一一之已有各名也。一管必具兩端。故一氣即陰陽也、兩端以成一管。故陰陽即一氣也。分則隨分有本末。位之所以虛也。本不爲末之用。末不爲本之用。用之所以實也。不可執本以廢末。不可執末以廢本。力之所以均也。本東向則末西。西向東者南轉。則西者北遷。跡之所以反也。是以。一一之態。一能反一。反反相合。反則露于此者、沒于彼矣。闕于此者。具于彼矣。自一來。而相反。是以。雖反有比。以比而同居。以反而異道。位虛用實。跡反力均。以此求物。觀地而知天。觀火而知水。惟末獲乎條理。師心立準。冥搜暗索。焉

繹條理

態

得其正。故得條理者。反此索彼。不得條理者。推已盡物。人而察人。推己也可、人而察天。不反焉得。天雖反而比、不比安得其應。人雖比而反。不反安得其道。苟以此觀物。物焉得而逃。而不繇此。看耳知驢。看角知牛。簡髮而梳。數米而炊。未暇自知何以鑒物。是以。條理之態。一剖、一對。剖則一二之經。對則一一之緯、一而混全統合、二而粲偏分散、以二而相吐以一而相食、一則體露對比。一則用沒剖反。以陰而立體。以陽而運才。本分一。故分者不能不比。比也。則陰於陰。陽於陽。本合二。故合者不能不反。反也則陰於陽。陽於陰。於是。成體者則物。爲用者則神。物立而露。則神活而沒。物剖而一神一物。以物剖。而其體比。神剖而一活一立。以神剖。而其用比。故其分雖二。於成則一。於是。自一至萬。有成者皆合二成一。其成一也。一體於本根精英。運用於絪縕給資。雖一性分體。體分則性亦從而反。性則

神、本鬱浡而活、體則物、本混淪而立、物得此神成物、神得此物成神。是以神則沒于物中、物則露于神中。故條理著痕、神隻物隻。神物即天地一一即陰陽。神物反合一大全物混成萬有。神、則一神一天、而其天則物之所成、物、則一天一地、而其天則神之所活。於是一一相食。靡所不天、靡所不地、靡所不天則神精沒、得天而活、靡所不地則物麁露、得地而立。地者精成宇宙、麁成覆載。天者精成本神、麁成天神、終成此大物。我眇居此中、徒天其如碧瑠璃者、徒地其若彈丸者、豈謂之觀天地者哉。蓋一成而本根精英具于其中。本則氣焉、根則物焉、精則精焉、英則神焉。觀之於鳥獸、求之於草木、有所資、則靡不同于大物。是故陰陽者、一一氣物者也、天地者、氣物一一者也。精麁沒露、性體成天地、性幹才運德有道開爲也。認狀成也。認貌沒中見狀貌、猶隱中露形體。非狀則莫所見事、非貌則莫所見天。蓋物之成、成者則一。成之者二。是以性體能沒于氣物之中、氣物能露于性體之表。性以幹于體、而精奉其體。氣保其體、然而才運于物、而性通于其物、情感于其物。體以體于物、而性神于其物、體物于其物。然而用能養其物、才能營其物。是一之所成也。一莫所不有。有而開焉、謂之道德。以道開、而氣爲有狀、以德有而物成有貌狀。則物相隔、事相交。雖隔而能融、雖交而能貫。貌則一變一常、自使終歸本然。其所以然、不得不然。其機也神、其跡也誠。開戶上路、莫不見其明。歸宅閉室、神不窺其幽。

陰陽
子義

餘論第一

與門人弓美忠書曰、昨與子語甚樂。由譚陰陽、未竭所懷。因勞筆研、以卒餘論。蓋陰陽之目、於陽始見。然其所言、或曰道焉、或曰儀焉、或曰爻焉。雖於說易則然、於觀之於天地、猶隔靴搔痒也。加阜呼地之向背於日、借別生

條理

義。莫關于此。夫有學以來歷世既久。歷人不少。雖然猶望洋於觀天地。何以其望洋。不知陰陽也。觀天地有二忌。忌以己意逆在彼者。忌執舊見聞。不徵其實。陰陽也者。條理也。條理也者。取義於草木之理也。條者首尾貫徹理者左右析反。夫草木之種子。混有根幹華葉。及機觸開物。一能剖析。剖析對待。條理出矣。於是乎。其氣從理而運。故其木之生。千華萬葉。雖極其繁。亦唯種子之一性。從理布氣布氣成物。是以、一元之氣。唯認一氣一物。而氣物天地也、一一陰陽也。一氣有爲。大物以成。一一者、陰陽之末有各名。他、陰陽者。一一之已有各名也。氣物即一一也。一一謂之陰陽、氣物謂之天地。不知者。以一一如虛氣物如實。分之爲支離焉。是乃條理之所以不明明世也。唯舍在己者。體在彼者。措舊見聞。徵之於實者。而可始與言之爾。蓋天地之成。爲者乃體氣物、成者乃陰陽天地。性體沒而露

二態

氣物。氣物露而沒性體。沒而能見。露而能隱。有隱則露亦難知矣、有見則沒亦無所逃焉。條理之態然。而今觀露而未察沒。觀見而未知隱。謂之達則未也。夫天地之數唯一。觸之則能一一。自三以上。隻奇雙偶。十復一。而百千萬億相積者。於天無所用也。以無所用於天者。求之於天。三才四大五行六氣。洛書之九。河圖之十。以瞽人之聰明也。一者物之所性。具而全焉。以混成無罅縫爲其貌矣。二者物之所體。剖而對焉。以粲立有條理。爲其貌矣。二立體。則一移居二。居則往。剖對。二則分一反其性。反能立體於陰陽。合能活物於天地。故性隱體中。體分物中。隱則居彼此。分則立一一。故性剖則一即二。所以爲經也。體對則一偶一。所以爲緯也。經緯相結。剖與對對。陰陽之徵不可沒。故世有陰陽之目。而陰陽之體難窺。故人泥陰陽之說焉。夫陰陽之爲體也。以剖以對。以相吐以相食。同居異道均

釋二

力反物。蓋其體之並立。以對能反。以反能合。以在一之性中。一一相食。以在二之體中。一一相吐。反之態。枘鑿反物比之狀。經緯同絲。近言之於身。神活身。身立神。乃神物互相食之狀也。神活分物。物立分神。乃神物各相吐之狀也。神得身而居。身得神而運。乃其居之同也。神定于運之身。走于立之。乃其道之異也。神竭體斃。體斃神竭。一一力之均也。神則精沒。身則麄露。彼此物之反也。是以。一一則體。氣物則物。物則露于氣物。體則見于一一。見者沒其物。露者隱其體。所以一一之歸氣物。陰陽之不同。同天地也。體隱物中。故性以氣而見。是以性具一一。氣用絪緼。是以。謂之天也。地也。水也。火也。雌也雄也。動也植也。則沒陰陽謂之陽也。陽也。則亡天地水火雌雄動植。夫已物其體。則其物皆可指摘而敎。若體其物。則指陽象如何。指陰象如何。未體其物。則不得如何以形容之。不得如何以指示

易

之。雖然意識自解。隨迎析之。自然能分別。是陽是陰焉。今夫物之生。生也結物。化也解物。而不以生陽化陰。而惑于結陰解陽者。唯意識自解。有不待指示敎諭者。雖然古之人。有顚倒爲左陽右陰。男陰女陽。白陰赤陽之類。則意識自解亦不役聰明。則惑矣。吾之頑冥。豈敢競穎悟於古人哉。雖然於達觀天地。不屈膝於古人者。知繹條理也。繹條理之道無佗。反火之昇而乾。而繹降而溼者。於水性觀地質之潤溼暗濁。而繹乾燥光明於天象。故反此繹彼。目明耳聰。可以人知天。可以生知死。是乃取鑽鑰闢天門也。天門之鑽鑰。反觀合一。舍心之所執。依徵於正。彼副墨之子。洛誦之孫。爲鬼爲蜮。動輙魅人。若徒地如彈丸者。天如碧瑠璃者。優孟於陳編。推己於非己者。雖辨如懸河。伎倆則已窮矣。

太極第二

易大傳曰。易有太極。是生兩儀。兩儀生四象。

四象生八卦漢書律暦志曰。太極。元氣函三爲一。極。中也。元。始也。三。說者以爲天地人。然則一元氣即太極與。是泥字者之言也。請論其梗槩。古者庖犧氏。始畫八卦。而未有易之名。謹考書。卜筮之事。唐虞既有之。未知其狀。史記曰。文王因羑里。蓋益易之八卦爲六十四封。楊子法言曰。易始八封而文王六十四。漢書同之。淳于俊。對高貴鄕公曰。庖犧因燧皇之圖。而制八封。神農演之。爲六十四。司馬禎補史記曰。神農重八封。爲六十四封。陳定宇則曰。庖犧則河圖洛書。作八封。以通神明之德。類萬物之情。重之六十有四。考周禮曰。易有三。一曰連山。二曰歸藏。三曰周易。其經。封皆八。其別。皆六十有四。然則太史楊班之說非。而淳于司馬亦未得適據。陳氏惟想像而已。明郝京山。著談經。斷然以爲伏義其說謂。大傳序庖義神農以來列聖開物。所取十封皆重。儻重封自後世。始聖人之立言。必不爾。是雖固於繫辭如可據然。然謂古之聖人。重布八封。由其象觀離而後獲造網罟觀益而後獲造耒耜。則迂亦甚矣。以晉觀之取諸離。取諸益。取諸云云。非開物者。取此以造此物焉。玩易者。庖犧網罟之設。取之於離。以得之。神農耒耜之設。取之於益。以得之也。如是而後。與上文近取諸身遠取諸物。相協。往古藐焉。易之可考。惟大傳有焉。大傳則曰。易之興也。其於中古乎。又曰。易之興也。其當殷之末世。周之盛德邪。當文王與紂之事邪。而未明斥出誰人。蓋易者。書之名也。易之爲書也。與天地準。能彌綸天地之道者也。故封爻以象陰陽名數以準天地吉凶悔吝之狀。出處語默之敎存矣。廣大配天地。變通配四時。開物成務。冒天地之道也。非直說天地者矣。故曰作易。易若天地。則豈可謂之作哉。一元氣之稱。蓋出于後世。後世稱其聲。未知其主焉。或又與太極竝言。前志曰。太極運三辰五星

於上而元氣。轉三統五行於下。如此。亦非以太極爲元氣者也。夫易者。封爻象數之事也。後人以天地爲易。於是乾坤之封名。爲天地之別名。是以。曰太極生兩儀。則曰。太極氣也。又曰。理也。又曰。道也。又曰。無極也。皆非命名之初意矣。故曰易有太極。而不曰天地有太極。其解之。爲氣。爲理。爲道。爲無極。爲元氣。猶觀冰之洞徹。認爲玻瓈也。爲水精也。若曰易者。自天地上者之名。則當曰易生兩儀矣。以太極贅若曰易者。天地也。則其曰易有太極。是生兩儀者。太極上。又置天地。至濂溪演太極圖。以此爲造化陰陽之根本。上加以無極。下加以五行。與易大異矣。且其無極之說。雖朱陸往復不決。朱說亦不暢。終歸無稽。曰者讀益軒大疑錄。無極而太極。本是唐杜順和尚。華嚴法界觀之語。雖朱子之博洽。有所未考者。專歸之於周子。而至今。而其說陰陽。亦曰太極動而生陽。靜而生陰。動靜又爲陰陽

之母。如此。亦非我所知也。邵易亦直說天地。故以太極爲道。變天澤火雷風水山地曰。日月星辰水火土石。亦與周易大異矣。而以道爲兩儀上物。亦老子之故態而已。以是觀之。則易所謂太極。與後世所謂太極。與天地之元氣。亦各不同矣。兩儀。說者以爲陰陽。此乃陽爻陰爻也。若曰氣理之太極。以能生本然之陰陽。則陰陽子婦也。太極母也。竝立爲三。生之一字。豈得無病哉。故以封爻言之。則無害于辭。以天地言之。則有害于辭。陰陽。著痕則粲立。沒痕則混成。故陰陽者。一氣也。非二氣也。其粲可果於分、豈見無罅縫者哉、其混可果於合豈見有條理者哉。難合、故粲立、難分。故混成。不辨混與粲。求截然者於陰陽。故立純陰純陽之目。純陰純陽之目則有。純陰陽之物。安得有之。何則求粲立於無罅縫中。有所反於此、則有所此於彼。是故。以氣物分之則天地者物也。而物者陰也。象質者氣也、

郝易

氣則陽也。以陰陽分天地則天陽也。地陰也。於天地分陰陽則日燥陽也。影水陰也。於象質分陰陽則日火陽也。月水陰也。於體分陰陽景燥溼影陽也。日月水火陰也。於性分陰陽則日火景燥陽也。月水溼影陰也。故二者一之分也。一者二之全也。分之則合。合之則分。其觀一爲徙一。觀二爲徙二。計之道。而人之數也。人以人之數爲天之數。故觀陰中之平分陰陽而疑其陽。觀陽中之平分陰陽而疑其陰。故曰。火陽也。又曰陰也。水陰也。又曰。陽也。男陽也。又曰陰也。女陰也。又曰陽也。錯亂其位。介無所適從而已。機之動靜。色之明晤。水軍之來去。桔槹之低昻。非彼隱乎我矣。苟未達于斯。見位之虛用之實。方之均跡之反者。難矣。宋學盛行。世以風靡。至明而世已久。又盛議其瑕。雖然。旁觀之。亦各有得失。京山說陽。先已言之。蓋其人極力排朱易。觀其論陰陽太極。謂陰陽二氣。其實一易而已。一

繫辭

即元炁之始。所謂元陽。謂太極其元陽。靜爲陰。動爲陽。其所謂元陽也者。則生也則惟是此一氣而已。又曰。人中天地而立極。故人者天地之心也。陽行乎天地之中者人而已。故易有太極。人心之謂也。勿論其不知天人之辨。既有陰陽。又取太極爲陽。又取爲人心。此以喩矇。責朱子。見其不知量也。或曰。子論易以繫辭斷。而昔歐陽永叔。於繫辭文言說卦。以下不信其爲聖作。然知其說者希矣。十翼。果可信哉。曰。雖見有異同。以繫辭以下爲非聖作。予亦同歐陽。歐陽子曰。古之學經者。皆有大傳。今書禮之傳猶存。此所謂繫辭者。漢初謂之易大傳也。至後漢已爲繫辭矣。語曰。爲趙魏老則優。不可以爲滕薛大夫也。繫辭謂之易大傳則優於書禮之傳遠矣。謂之聖人之作僭僞之書也。噫大哉繫辭。今之欲讀易者。舍之何執。此蓋昔賢撫古言。教讀易者也。非孔子之成書矣。故善讀者。在不泥矣。文

配當

言之言乾之四德。歐陽子辨之當矣。惟後世之學。配當之務。故元亨利貞。與春夏秋冬相配。與仁義禮智相配。

文言曰。元者善之長也。亨者嘉之會也。利者義之和也。貞者事之幹也。君子體仁足以長人。嘉會足以合禮。利物足以和義。貞固足以幹事。君子行此四德者。文言始言仁義禮固。

易始

亦五行之爲祟也。經以乾爲龍。以坤爲馬。說卦以乾爲馬。以坤爲牛。其不合也如此。故讀易者。以彖象爲註。以繫辭爲傳。取舍其佗以觀之焉。或其庶幾。東匡古今學變曰。文王系彖。始見於荀卿之書。而周公作象。起於馬融陸績之說。至翼易之說。則其語始乎史遷。而佗無所憑。是言是也。雖然殷之末世。周之盛德。能援筆爲之者。其孰也。見易象知周公之德。韓宣子有焉。然則文彖周象。未可謂全無所根據也。傳曰。左史倚相讀三墳五典八索九丘。孔安國序書曰。八索。八卦之說也。孔子讚易道以黜八索。未知孔說之所由來。於是。除彖象外。以當雜肋。雖存其味。而非全肉也。

本數第三

天數

合則一。块块混成。分則二。累累粲立。以統以散。如是而已。人立块块之中。數其累累。奇偶乘除。有數目紀法。請試論之。夫一即二者。天之數也。一又二者。人之數也。是以。人積一疊二。析奇分偶。倍蓰什佰。毫釐秒忽。遊于一中。命名於奇偶交互之間。以十紀之。十百千萬。一之巨名也。一總諸數。能始能終。而不露始終。二散諸數。能分能合。而不用奇偶。而人之爲數也。四六八十。疊二而成。三五七九。加一而成。雖奇偶自迭。奇偶則非天矣。譬如數指。

人數

自母指則母指一也。自小指則小指一也。次第相數。莫有定名。顧一有二之名。顧二有三之名。不顧則累累然一也。是以。人之爲數。積一分一。命名不及則窮以觀人爲焉。天之爲

天數

數一具無數。無數成一、無得而知其處矣。以觀天成焉。是以一不母於二、二不子於一。天地者、混成之一、陰陽者、粲立之二。天地相通、陰陽分物。試徵之於人。手舞足蹈、夜息晝動、哀生而哭、歡至而歌、雖跡則反而氣則貫之。猶一確具低昂、一磨具來去。是故一中具數者天、一外俟數者人。

紀法

夫計之爲法、始一終十。以一俟二。次第上之、奇偶交互、目而紀之。數者天也、紀者人也。數本無可始之一、無可終之十。不爲紀而設、不爲不紀而廢。人則用累累、勢不得不計之。計者、命之於指。指之數五。屈伸得十。乃以爲紀。故以先得名一、以後得名二。措後得、則先得奇也、先後相比、則得相而偶也。先得無待後得、後得無待先得、則累累之際、將孰奇孰偶、奚始奚終。故一奇、則偶奇奇也、二偶、則一乃隻也。奚以之爲天。先得後得之相隻、此之曰奇、先得後得之相竝、此之爲偶。先後相失、則偶非偶矣、先後相得、則奇非奇矣。奇爲一、偶爲二。一爲始、十爲終。紀之法也。若言之不然、則嘗除九十之目、八上起數。如易亦得。十上增二、以此紀數、如月亦得。一中具二、一外俟數、天人之不同也。具者可數。可數者便具。天人之不異也。

說數第四

數由

數者、一分一合而已。散在物、則累累然列。數之、則奇偶代位。至十立紀。爲一之巨名。又相乘之、立百千萬之巨名。是計算之術也。人之數也、縱橫增減、皆由茲而計。累累者天也、數之者人也。以人數天、終生窺窬。一中粲立一一、觀其一一之所剖析、浩浩然除不盡乘不窮。今人於累累中設數目、立紀法、以計之。冥焉不見首尾。於其不見者、欲强見之、徒自苦也已。是以人之數、一外竢數、得則至二、至三、至千、至萬、不得則徒奇也。天之數者、一以具無數。奇之、一一粲立、偶之、混成一一、不可以奇偶名。不可以紀法盡。古來說數、自一至十。

加一倍

三

靡不有者。請述之。夫易有兩數。太極。兩儀。四象。八封。一十六。三十二。六十四。以封象而言加一部之數也。一二三四五六七八九十。以揲著而言。計紀之數也。加一倍者、陰陽之爻數、幾天、計紀者。奇偶之算數。爲人。故陰奇陽偶。天奇地偶。易之立敎然。若曰此果天地之本數。則奚戻一陰一陽之道也。三亦其說尚矣。子夏誦之乎孔子。曰。天一。地二。人三。三三九。九九八十一。孔子聞之曰。我昔聞老聃。如汝之言。見家語。而道德經云。道生一。一生二。二生三。三生萬物。老子說道甚高。故其一亦道之所生。則一上有物。彼焉知一焉。楊雄由此作太玄八十一首。以擬易。而自期後世之子雲。然其書不甚行世。蓋古之置官。三公。九卿。三十七大夫。八十一元士。白虎通曰。天道莫不成於三。天有三光。日月星。地有三形。高下平。人有三尊。君父師。皆同一說也。子華子亦專說三。而朱元晦。以爲僞書。或然也。天之

四

數。本一而二也。然則自三而下。決非天之數也。四也者。二二也。易有四象。乃爻之象也。說者云。太陽太陽、少陰少陰。邵子述之。說加一倍之數。蓋康節。平生觀物。皆爲四頭。曰。日月星辰。曰。水火土石。曰。風雲露雷。曰。艸木飛走。莫適非四焉。梵立四大。曰。地水火風。而五之曰空。六之曰識。西洋立四行。曰。水火土氣。亦各一家之說耳。說者欲併一之於五行。故曰。風木也。氣金也。其爲說愈僻。五也者。五行也。

五行

權輿洪範。曰。一五行。一曰水。二曰火。三曰水。四曰金。五曰土。水曰潤下。火曰炎上。木曰曲直。金曰從革。土爰稼穡。潤下作鹹。炎上作苦。曲直作酸。從革作辛。稼穡作甘。謹按尚書禹謨。水火木金土穀。謂之六府。府也者。財之也。洪範謂之五行。行陳也。水火金木土穀者。民生日陳而財用之者也。先王最重之。洪範除穀者。寄之於土也。是以。禹曰。於帝念哉。德惟善政。政在養民。水火金木土穀。惟修。正德利

用厚生。惟和。帝曰。兪。地平天成。六府三事允治。萬世永頼。時乃功。大傳曰。水火者。百姓之所飲食也。金木者。百姓之所興作也。土者。萬物之所資生。是爲人用。伏生蓋有所傳矣。夫洪範者箕子入周。述九疇者也。蓋九疇者。舜禹治天下之大法。而養民之物。具此五也。故九疇之目先之。而目下之釋者。箕子之言也。不然。則潤下炎上。及五味之說。何與禹謨弗相類哉。何與禹之設殊哉。甘誓曰。有扈氏威侮五行。怠棄三正。天用勦絶其命。三正。孔安國曰。天地人之正。蔡沈曰。子丑寅。其說本大傳。子丑寅。時王代定正朔者。而非一時用者。五子之歌。曰惟彼陶唐。有此冀方。今失厥道。亂其紀綱。則夏襲唐虞之紀綱。可知焉。與禹謨並考。五行三正。豈得非六府三事哉。洪範序曰。鯀陻洪水。汨陳其五行。帝乃震怒。虞夏之重五行如此。明吳廷翰曰。五行之說。人君行政之名。而誤以爲天之運也。甘誓謂威侮五行。洪範謂汨陳五行。若以金木水火土。何爲威侮。何爲汨陳乎。此論是也。晉叔向曰。天其生五材。而將用之。宋子罕曰。天生五材。民並用之。晉蔡墨曰。夫物物有其官。官修其方。朝夕思之。一日失職。則死及之。故有五行之官。是謂五官。封爲上公。祀爲貴神。社稷五祀。是尊是奉。少皞氏之四叔。能金木及水。重爲句芒。該爲蓐收。脩及熙爲玄冥。顓頊氏之子曰犂。爲祝融。共工氏之子曰句龍。爲后土。烈山氏之子曰柱。爲稷。句芒。木正也。蓐收。金正也。玄冥。水正也。祝融。火正也。后土。土正也。稷。田正也。鄭子産曰。臺駘爲玄冥師。宣汾洮。障大澤。晉士弱曰。古之火正。出內火。皆與虞書之意符。與洪範不合。郯子曰。黃帝氏以雲紀。故爲雲師而雲名。炎帝氏以火紀。故爲火師而火名。共工氏以水紀。故爲水師而水名。太皞氏以龍紀。故爲龍師而龍名。少皞氏以鳥紀。故爲鳥師而鳥名。顓頊紀於近爲民師。

配當

命以民事。班固曰。顓頊已來。爲民師而命以民事。有重黎。句芒。祝融。后土。蓐收。玄冥之官。然則五正。顓頊氏之官名也。大戴禮。孔子曰。水火金木土穀。此謂六府。脫一不可。進一不可。民竝用之。與禹謨及叔向蔡墨等諸說同。讀管子。五行配四時。曰。昔者黃帝得蚩尤而明於天道。得太常而察於地利。得奢龍而辨於東方。得祝融而辨於南方。得大封而辨於西方。得后土而辨於北方。蚩尤使爲當時。大常使爲廩者。奢龍使爲士師。祝融使爲司徒。大封使爲司馬。后土使爲李。黃帝以其緩急。作五聲。五聲既調。然後作立五行。是以顓頊氏之官名。爲人名。以當之黃帝時。侶濫在孔子前。雖然。其書中有引及毛嬙西施者。則未易悉信焉。爾來。子產語禮。有五行六氣之說。至禮運。漸以言造化。五六必相對而說。鄭語。周史伯曰。先王以土與金木水火以成百物。是以和五味以調口。剛四支以衞體。和六律

勝復

以聽耳。正七體以役心。其言數。亦未深相粘矣。亦未有及勝復者。至禮月令。家語五帝等。配相生之序。帝太皡。炎帝。黃帝。少皡。顓頊。神句芒。祝融。蓐收。玄冥。后土。蓋月令。據呂氏春秋。呂氏春秋。似本於管子幼官五行等篇。而不同。其孔門之所不言。詩書之所不稽。未如夏小正之質淳遠矣。

月令。四月有命太尉之句。儀禮通解曰。三王之官。有司馬無太尉。秦官則有太尉。今俗人皆示周公作月令。未通於古。又有九月爲來歲受朔日之句。高誘註曰。秦以十月爲正。故於是月受明年曆日也。由是言之。月令非周制明矣。禮記節義曰。呂不韋集諸儒著十二月紀。名曰呂氏春秋。篇首皆有月令。言十二月政令所行也。月用夏正。令則群摭古制。間襍秦法。禮家記事者。抄合成篇。又名曰月令。蔡伯喈。王肅。皆云周公所作。不合也。又曰。此篇。漢淮南王劉

妄因之作時則訓先儒謂。小戴禮記。無此一篇。至漢馬融始入戴記也。且若從月令之說。天子。春則居東服青。於理。不得不東面以立。秋則居西服白。不得不西面以立。若此。則唯夏當南面。非先王之法。

五帝勦掠左傳蔡墨之言。託之於老聃。於是。爲天有五行。蓋周季豪傑。以口舌馳鶩天下。儒墨刑名。至技藝之徒。皆開口斐然成章。且五行達禹舜之道。在箕子前。則至此數百年。又益以勝復。是周季辨士之爲也。如黃帝內經。蓋起此時焉。荀卿非思孟以爲子思造五行。孟子和之。荀卿去孟軻不遠。必有說。而其所謂五行者亦不識何謂矣。雖不識何謂而不出孔子也可徵。楊倞注荀子以五行爲仁義禮智信。其說已見詩之鄭箋。仁義禮智信。後世謂之五常。然古之所謂五常者。木火土金水也。而思孟時。未有仁義禮智信之目。竊疑。思孟亦於五行有所言與。而孫子已言五行無常勝。四時無常位。蔡墨言火勝金。水勝火。又且泝之五行之勝。已出龍韜。雖然。六韜託古者。難以爲據。彼此相考。其說尚古於思孟宜矣哉。禮運已下。諸篇之混淆。又按漢書郊祀志曰。自齊威宣時。騶子之徒論著終始五德之運。及秦帝而齊人奏之。故始皇采用之。如淳曰。今其書。有五德終始。五德各以所勝爲行。秦謂周爲火德。滅火者水。故自謂水德。其後魯人公孫臣。推終始傳。以爲漢當土德。蓋騶衍以陰陽主運。顯諸侯。則得無非騶子之輩所附益哉。史記騶衍傳云。騶衍後孟子。深觀陰陽消息。而作怪迂之變。終始大聖之篇。十餘萬言。其語閎大不經。必先驗小物。推而大之。至於無垠。推而遠之。至天地未生。窈冥不可考而原也。又曰。接引天地剖判以來。五德轉移。治各有宜而符應。水火木金土之小物推之。造化之大。周季之事也。故漢書藝文志。五行家下曰。其法亦起五德終始。推

其極。則無不至。而小數家。因此以爲吉凶。而行於世。寢以相亂。按史記秦德公二年。初伏。惠文君十二年。初臘。伏。漢舊儀云。伏者。萬鬼行。故閉晝日。不干求也。東觀漢紀。和帝初令。伏閉晝日。伏之義如此。而曆忌釋以下。以爲秋以金代火之故。至庚日伏。是時豈有此事哉。至緯書盛行。終誣之於聖人。董生劉向徒。說休咎災祥。合之於五行。人侵淫弗覺。以此大修飾聖人之道。班固鄭玄亦勤矣。於是橫說竪說。不能出五行。夫人立天地間。取物爲用。種植居處。取之於土。宮室器械。取之於木。兵甲交易。取之於金。灌培燔熟。取之於水火。是豈可令民一日闕哉。故五行者材也物也。爲氣所生化者也。人所取以爲用者也。非所生化物之氣也。宜矣哉。古乃之謂府。謂行。謂材。而不之謂運。謂氣。謂德。通鑑前編曰。黃帝察五運。立五氣。釋義曰。五氣謂五行之氣。即溼涼寒燥溫。五運。甲巳土。乙庚金。丙辛水。丁

六

壬木。戊癸火。益迂怪焉。五家之說。一成爲造化之樞紐。天下此之由。宋儒最不信漢儒。於說五行。則依違因襲諸家。靡然牽合回護。惟恐違之。蓋五家之於事物。不配弗措。謂之風寒暑溼燥火。而餘一。則二火。謂之日月五星。而餘二。則二水火。謂之天澤火雷風水山地。而餘三。則二金木土。謂之春夏秋冬。而少一。則寄土於其間。謂之六合。而餘上。則舍而不論。十干。相倍。則以剛柔乘之。十二支。不可以五數。則四土。六律餘一。則以半徵半商補之。至若其金生水。火生土。雖爲之說者。終不能自解。遂謂之五氣。災異妖祥。文物制度。鍼藥之道。祈禳之具。皆自其旺囚勝復來。稽之於古。徵之於天地。我兩不能信之。六也者。如周之置官。有天地四時。先是。陶唐之時。羲和欽若昊天。敬授人時。羲仲平秩東作。羲叔平秩南訛。和仲平秩西成。和叔平秩朔易。蓋配當之見。开書者。始於此。

七

以四時配四方。已出堯典。以五味配五行。亦出洪範。配五色於四方。配五味於四時。出周禮。配五音於五行。出六韜。配五行於四時。於管子見之。虞書所謂五辰。注家以爲木火土金水之時。是時何有配五行於四時。洪範。虞夏之大典。協用五紀。五紀。歲月日星辰。曆數也。然則五辰之爲五紀。明矣。注難據。

八

賈誼新書曰。天地陰陽人物。故陰陽各有六。月之節。而天地有六合之事。故有仁義禮智聖樂之六行。道德性神明命之六理。書詩易春秋禮樂之六藝。又歲時日月星辰。是爲六物。皆伯瑕之言也。天有六氣。曰。陰陽風雨晦明也。分爲四時。序爲五節。是醫和之說也。與素問所謂。風寒暑溼燥火。粗相近矣。呂覽則曰。天生陰陽寒暑燥溼。是亦相似矣。張志和敷衍曰。天之六氣。風暑火溼燥寒。地之六氣。霧露雨雹氷泥。人之六味。酸苦甘辛鹹淡。歲時者日月之積也。而與日月爲伍。陰陽非在風雨晦明。寒暑燥溼之外。而與此竝言。未釋然也。以七說天地者。鮮矣。濂溪演太極圖云。無極之眞。二五之妙。朱子注中庸云。天以陰陽五行。化生萬物。人物之生。因各得其所賦之理。以爲健順五常之德。其意未分之七。故曰。五行即一陰陽。陰陽即一太極。然竝言二五之妙。竝言陰陽五行。則侶說七者。八也者。又易也。以卦則乾兌離震巽坎艮坤。蓋陽有三。連山。歸藏。周易。杜子春曰。連山。宓戲。歸藏。黃帝。邵子以爲。庖犧氏之陽。先天也。首乾。文王之易。後天也。首離。蔡西山因之。以爲連山首艮。歸藏首坤。蓋以山藏字。推艮坤之爲首。以大傳辭。推乾離之爲首爾。于令升謂伏羲之易者。小成。爲先天。首乾。文王因之。神農之易者。連山。爲中天。首艮。夏人因之。軒轅之易者。歸藏。爲後天。首坤。商人因之。宋儒蓋原此爲異同而已。九也者。周書有九星之目。爲星

辰日月四時歲。夫九者。三三者也。十者。二五者也。孔安國。劉歆。以八爲河圖。劉牧。以十爲洛書。關子明。邵康節。以十爲河圖。九爲洛書朱子取之。蓋洛書以十反一。至九而究。河圖擧紀之全數示之云。易大傳曰。河出圖。洛出書。聖之則之。是河圖洛書之本說也。其次。禮運曰。山出器車。河出馬圖。始見馬字。然是贊禮。而浮言其祥瑞者也。齊桓公葵丘之會。天子致胙。母以下拜。桓公。以三代受命者自比。將不下拜。管仲曰。昔之受命者。龍龜假。河出圖。雒出書。地出乘黃。今三祥未見有者。雖曰受命。無乃失諸乎。於是止。蓋桓公信受命。故管仲以祥沮之。其失蓋溯于此。孔安國曰。河圖者。伏羲氏王天下。龍馬出河。遂則其文以畫八卦。洛書者。禹治水時。神龜負文而列於背。有數至九。禹遂因而第之。以成九類。於是龍龜成。劉歆曰。虙羲氏受河圖。而畫八卦。禹治洪水。法洛書。陳洪範。是二子皆分河圖與

八卦洛書與洪範。爲別物矣。至朱子著啓蒙。嚴然成河圖洛書方圓之圖。不知孔氏何以知河圖馬文而伏羲則之。洛書龜文而禹則之哉。乾鑿度曰。伏羲時龍馬出河。戴九履一。左三右七。二四爲肩。六八爲膝。五居其中。謂之九宮。是其權與乎。繫辭曰。古者庖犧氏之王天下也。仰則觀象於天。俯則觀法於地。觀鳥獸之文。與地之宜。近取諸身。遠取諸物。於是始作八卦。以通神明之德。以類萬物之情。夫庖犧者。世傳初生成紀。後都於陳。成紀漢屬天水郡。禹貢雍州之地。而陳禹貢豫州之東。乃河之南也。庖犧氏之畫卦。蓋在河畔也。圖者。乃所畫之卦。故曰河圖。顧命所陳東序者是也。何晏注論語。猶曰。河圖八卦。可爲得古傳矣。洪範。箕子曰。在昔鯀陻洪水。汨陳其五行。帝乃震怒。不畀洪範九疇。彝倫所斁。鯀乃殛死。禹乃嗣興。天乃錫禹洪範九疇。彝倫所叙。由是考之。洪範者。天之所錫禹。非法洛

書陳之矣。怒者。帝之怒也。與者天之與也。之爲天者。舜之不自私也。湯誓曰。有夏多罪。天命殛之。泰誓曰。皐天震怒。命我文考肅將天威。是豈天親命之云哉。又湯武不自私之意也。故禹謨曰。正月朔旦受命于神宗。神宗。豈諄諄命之哉。舜爲受命之禮。而人不爭。人不爭而信爲神與之。故曰。天聰明。自我民聰明。天明畏自我民明畏。泰誓曰。天視自我民視。天聽自我民聽。故其震怒。謂帝。錫謂天。以觀人。予天弗違焉。若直以爲斥彼天。其怒也。孰得見之。其錫也。孰得聞之。禹貢曰。禹敷土。隨山刊木。奠高山大川。蓋治水。自下流。故載冀至兗靑徐楊荊。至豫。至梁。至雍。導之。則自上流。故導弱水。入于流沙。導黑水。入于南海。導河。導漾。導江。導流。導淮。導渭。至導洛。而畢功。於是。方之貢物。辨壤之上下分。山川定矣。遐邇序矣。人民蒙其澤矣。故曰。九州攸同。四海既宅。九山刊旅。九川滌源。九澤既陂。四海會同。六府孔修。庶土交正。底愼財賦。咸則三壤。成賦中邦。錫土姓。然則禹之功。至洛而成。於是錫之土。以立國。錫之姓。以立宗。洪大也。範法也。有虞治國之大法。錫是時也的矣。漢書五行志猶斥洪範曰洛書。由是觀之。則庖犧之圖。則天地而出河。夏禹之書。天人予成於洛。故曰。河出圖。洛出書。聖人則之。是聖人倡斥作易者也。後世讀易不求於理。讀洪範不求於事。若劉歆謂河圖洛書。相爲經緯。八卦九章。相爲表裏。因蔡九峯衍數繫辭。洪範亦爲易。亦太玄之類而已。蔡元定云。戴九履一。左三右七。二四爲肩。六八爲足。正龜背之象也。洪範九疇。初云次云。猶曰第一第二。若乃戴九履一。則當初九次一焉。而其曰一者。二者。各五。三者八。四者五。五者一。六者三。七者七。八者五。九者五六。何以當之。緯書之說。不足取焉。天一地二。天三地四。天五地六。天七地八天九地十。易傳之正文。以陰爻離。陽爻

天地分數

推數

屬奇天偶地數著紀十。故言揲蓍之數而已。然則河圖八洛書九。明矣。龍龜妄誕。審矣。且分天地言數者。易家有參天兩地三三九。爲老陽之數。二三六。爲老陰之數。而七爲少陽。八爲少陰。陰陽本無老少。則六七八九。是筮家所設之數爾。魯展禽晉史墨。則曰天有三辰地有五行。是隨目數之者也。管子則曰天道以九制。地理以八制。人道以六制。注爲九重八方六腑。隨有而數也。子服景伯對呉人曰周之王也。制禮上物不過十二。以爲天之大數。是以一朞十二月也。素問則曰天以六六制節。地以九九制會。唐一行則曰天有五音所以司日也。地有六律所以司辰也。是本易之天五地六。及禮運等說五六之說。兼音律而說支干者也。諸說各不同如此焉。將奚適從。其推數者。老子自一而二。自二而三。自三而萬物。列子自一而七。自七而九。自九復一。周子自一而二。自二而五。自五而萬物。自

一次第至十。漢儒生成之數也。是取繫辭天一地二者。合之於五行。其說漢書律暦志云。天以一生水。地以二生火。天以三生木。地以四生金。天以五生土。五勝相乘。以生小周。以乘乾坤之策。而生大周。易鄭注云。天一生水於北。地二生火於南。天三生木於東。地四生金於西。天五生土於中。陽無耦。陰無配。未得相成。地六成水於北。與天一幷。天七成火於南。與地二幷。地八成木於東。與天三幷。天九成金於西。與地四幷。地十成土於中。與天五幷也。大衍之數五十有五。五行各氣幷。東厓古今學變曰。其曰天一生水者。班固述劉歆之言。載之前志。而曰地六成之者。則具鄭氏之說。易繫辭曰。天一地二。天三地四。天五地六。天七地八。天九地十。五位相得。而各有合。天數二十有五。地數三十。凡天地之數五十有五。此所以成變化而行鬼神也。夫易者。準天地之書也。故卦爻象數。皆準諸天地數有

撥亂

奇偶。故天奇地偶。易奇陰偶。君奇臣偶。奇偶紀之於十。數之五十有五。錯綜之爲易之變化。而取其五十。而用四十九。其所除之五無說。未可以五行杜撰也。易之說十也。我聞其爲揲蓍言焉。未稽爲五行設矣。萬物資始質於水。資始神於燥。氣之質爲水。質之氣爲火。水火者。氣質之端。可以窺造化矣。非曰水火能爲造化也。夫水者。待火而結質。火者。待水而起氣。水者。見火而解質。火者。見水而滅象。故以火煨物。外焦內潤。以玉取火。外影內燃。氣質相有。豈有先後之序哉。班鄭之說。未稽之於古。未徵之於天地。何以信哉。夫一者。一氣也。二者陰陽也。一而二。二而一。一即無數。即一。是天之數也。自一至二。自二至三。次第相數。千萬億兆。人之數也蓋言陰陽。莫先乎易。然而易傳之言陰陽。陰陽爲天道。剛柔爲地道。仁義爲人道。陰陽與剛柔仁義竝言。恐非經意。雖然。爻三重已者。天地人與。皆易書之教。而非天地之本數也。若以本然陰陽言之。天地剛柔。仁義皆陰陽也。故關子之洞極。二十七象。楊氏之太玄。八十一首。司馬氏之潛虛。五十五行。我雖未得盡讀。皆眩累。累之數。惑奇偶之名。因循紀法之數。以混天人者也已。

洪範第五

書者史也。往古事簡。惟大綱之書。與後世之史異體而已。續之者。至晉文秦穆而止。其中亦有敘事者。有錄文者。而不同。已史也。故開卷見之。其德業各自不可揜焉。是以周武之誓師。曰。撫我則君。虐我則讎。比之於殷湯之慙德。則湯武之德不可揜矣。啓之誓六卿。不用命則孥戮。比之禹之班師敷文德。則虞夏之德。不可揜矣。未必爲片言隻句可盡遵守矣。惟在通一篇。達古今。故古以疏通知遠而不誣。爲深於書者。若爲片言隻句可盡遵守矣。則福善禍淫。何異于死生有命。富貴在天

之撰。孟子曰、盡信書則不如無書。吾於武成。取二三策而已矣。仁人無敵於天下。以至仁伐至不仁。而何其血之流杵也。洪範之爲書。雖今文古文倶有。有可信者。有可疑者。最爲難讀。漢儒盡信之弗疑。及劉向召校秘書。因洪範箕子之說。集合上古以來歷春秋六國至秦漢符瑞災異之記。推迹行事。連傳禍福。著洪範五行傳論。與巫覡星卜相似。施至後世言災祥。殺臣殺子。何圖說經之弊至此。不亦悲哉。夫洪範者。有夏所得于虞治國之典章。詳之於前。降及于殷。箕子在父師位而典之。武王克殷。欲悉前世之美政以法之。故武王言曰。嗚呼箕子。天陰騭下民。相協厥居。我不知彝倫攸叙。是武王懇懇求善言也。於是箕子。誦洪範曰。初一曰。五行。次二曰。敬用五事。次三曰。農用八政。次四曰。協用五紀。次五曰。建用皇極。次六曰。乂用三德。次七曰。明用稽疑。次八曰。念用庶徵。次九曰。嚮用五福威用六極。班固云。凡此六十五字。皆洛書本文。是說爲得也。其目。五行。則水火木金土。五事。則貌言視聽思。八政。則食貨祀司空。司徒。司寇。賓師。五紀。則歲月日。星辰曆數。皇極。敷言一章。三德。則正直。剛克。柔克。稽疑。卜五。雨霽蒙驛克占二貞悔。休徵。雨暘燠寒風。五福。壽富康寧。攸好德。考終命。六極。凶短折。疾憂貧惡弱。是目乃箕子之所傳。目下之釋。則箕子之所述。而洪範之解辭也。故漢王嘉奏事。以臣無作威作福亡有玉食等語。爲箕子戒武王語。蔡傳亦曰。按篇內曰而曰女者。箕子告武王之辭。意洪範發之於禹。箕子推衍增益。以成篇歟。噫箕子去禹殆千年矣。已失其傳乎。抑後人亂之乎。何其說水火木金土。與禹謨矛盾邪。久矣哉五家之託胎也。蓋水火木金土者。民生日用之物。莫先焉。故初陳之。次貌言視聽思。謂之敬用。曾子所謂動容貌。斯遠暴慢矣。正顏色。斯近信矣。出辭氣。斯遠鄙

倍矣。孔子所謂。非禮勿視聽言動。詩所謂。思無邪也。是皆修身之事。天子至庶人所以爲本者也。今解者。忘敬用字。惑庶徵之言。曰。貌澤。水也。言揚。火也。視散。木也。聽收。金也。思通。土也。是箕子所未及知也。八政者官治之事。故曰農用。五紀者堯命羲和。欽若昊天。曆象日月星辰。敬授人時之故事。世以洪範比易。以五行合八卦。故以皇極如太極。然讀其敷言則其義分明。曰。無偏無陂。遵王之義。無有作好。遵王之道。無有作惡。遵王之路。無偏無黨。王道蕩蕩。無黨無偏。王道平平。無反無側。王道正直。會其有極。歸其有極。此語有韻有法。箕子繼之曰。皇極之敷言。是彝是訓。于帝其訓。明是其所建用者。非箕子之言矣。然則皇者王也。大也。極者道義之正直。平平者也。與周禮惟王建國。辨方。正位。體國。經野。設官。分職。以爲民極之極義同。與堯命舜允執其中。舜又命禹。符矣。是洪範之極。故位亦在九

之中。三德。正直者。王道之無反無側者。不可尙矣。剛柔者。才德之過不及。以克修之焉。如詩所謂飮酒溫克之克。故曰人用次稽疑。祥之於災祥之條。福君之所以賞善。故曰嚮用五福。極君之所以罰惡。故曰威用六極。故壽富。康寧。攸好德。考終命。凶短折。疾憂貧惡弱。雖未可考。皆賞罰之目也。如書大傳諸侯於天子。三年一貢士。大國三人。中國二人。小國一人。一適。謂之攸好德。再適。謂之賢賢。三適。謂之有功。周禮治官之八柄。二曰。祿。以馭其富。五曰。生。以馭其福。六曰。奪。以馭其貧。亦可徵矣。解者直以爲禍福。故於曰嚮用曰威用曰予攸好德。汝則錫之福。又曰惟辟作福。惟辟作威。惟辟玉食。臣無有作福作威。玉食。臣之有作福。作威。玉食。其害于而家。凶于而國。等處。不通焉。況以說命乎。惟後儒過信聖人。而不通于聖人之意。故洪範之美。不啓于世。而爲纇窾家之經。

贅語二

陰陽帙下

日本　鎮西　三浦晉　安貞　著

五行第六

木生火、火生土。土生金。金生水。水生木。木克土。土克水。水克火。火克金。金克木。生者爲母。所生者爲子。克者爲讎。代爲旺相死囚勞。是勝復家之定說也。夫物。有氣化、有形化。蔦生於樹。菌生於朽。孑孑生於水。蛣蝠生於木。雖因其氣以化。不心子母自形化而言之則禾生禾。黍生黍。馬則馬。牛則牛。何嘗相轉、夫水火土金者。氣化也。水或化于天。或化於山。火或化于天。或化于金石水土木。雖跡如異母。而資之於一氣。則無異也。土不示生化之痕。而金化于土中。木者與動同爲形化者。栢化栢。檜化檜。五物之生化豈如彼障眼術者。數換物手中。最後還出舊物哉。生化一氣之通。

不通則不生化。是以。雖曰木生火。木生從暄。雖曰火生土。火發土中。雖曰土生金。金鏽爲土。雖曰金生水。水中藏金。雖曰水生木。木中藏液。如是則相爲子母也。雖曰木克土。土能腐木。雖曰土克水。水能流土。雖曰水克火。火能涸水。雖曰火克金。金亦隔火。雖曰金克木。木亦刓金。如是。則相爲勝復也。既已如是。倒說亦不爲不可矣。雖木生火。火食木。雖火生土。土埋火。雖土生金。金鑿土。雖金生水。水壞金。雖水生木。木壅水。如是。則以子克母也。雖木克土。土中生木。雖水克火。水亦生火。雖火克金。金能生火。雖金克木。莧亦出汞。如是。則以讎爲子母也。既已如此、反說亦不爲不可矣。若謂之擧其僻者言之乎。金生水。火生土。亦僻也。謂之以造意者言之乎。火克金。金克木。亦造意也。且夫水者。地之液。非金之所生。灰者、木之查滓。非火之所生。火者、在天者。日星彗孛。在地者。雷霆及依物之火。生天中及

金木土石水。或依地賦。或依艸木。非木之所專生。風者。氣動搖物者。非木之所生。故天無木。而風火常有。火之克木。併其質而滅。豈火克金之類哉。火之涸水。併其性而亡。豈土克水之比哉。木能生於土。而曰木克土。金能出火。而曰金生水。土之生木。多於生金。火之生於木。而克木。勝於木之生於土。而克土焉。惟陰陽反跡。事物以成焉。推之至無窮。剖之至不盡。是故。歲以寒暑成。溫涼。其交也。晝夜以明暗成。昏曉。其分也。當土用於四時之末。配濕土於夏秋之交。無用于世。無驗于事。作者自勞而已。東方木。西方金。無可徵之者。南方火。北方水。可於中線以北。言之而已。若中線以南。亦南水北火。猶可言也。不知中線暨兩極。如何配之。故戴極之地。不可以子午卯酉定方。中線之地。不可以長短言晝夜。唯其二乎。非陽生陰。非陰生陽。非陽克陰。非陰克陽。相生相化。相拒相居。至若聲色臭味之配當。

最戾條理。由條理言之。夫人之爲體。首者。覺於聲色臭味。身者。覺於器地。配嗣。配當家。獨取聲色臭味。措在身者。何。浮屠氏。則曰。色聲香味觸。此詳在首者。略在身者。雖彼善於此。而猶缺分曉。蓋聲色臭味。五家分配之數。聲曰宮商角徵羽。色曰青黃赤白黑。臭曰臊焦香腥腐。味曰辛甘苦酸鹹。一切皆爲五。雖然。各物各體性。各才相發接。蓋天之生萬物。聲色臭味。自具其中。有意開竅於耳目鼻舌。視聽聞味之感。能相交。而其聲色臭味者。多寡參差不齊。其視聽聞味者。知覺彼是不同。多寡不齊者。何邪。物之露體以上。無無色者。則目之所交廣矣。雖已露體。而有無聲者。則耳之所交狹矣。口之所味則廣。而鼻之所聞則狹。豈可一例推擴之哉。彼此不同者。何邪。犬之尾主。向風聞臭。人之抱臭。他厭不省。鳥逐腐群。人遭穢嘔。豈可謂知覺不異哉。請嘗決其源。以灌其泒。蓋天地之開境。分大與小。而

其大則清淨之府。小則濁穢之藏。經緯痕於露上而時衰衰而通處塊塊而塞。天地一大結物。移住其間。萬物散于結中焉。天地塞具、依彼塊塊、而鋪方位、小物、則併其塊塊、與其方位、爲此之處、所立而得地、所居而得天、日影通具、從彼衰衰而刻節序、小物則併其衰衰與其節序、爲此之時、就之而始生、不及而使化、天地之間、散物二象者、乾燥光明、一體不變、生化沒痕、在轉中、能循環、質者潤溼黯澹、各體相換、生化露跡、在持中、能鱗次。夫動植者、生之一雙。穢穢境中。各體鱗比、小物之態。營於陰絪陽縕、資於天之所給、待於物之所贍。是以。衰衰之通、塊塊之塞、未著象質之痕。天地體立、象質露物、於是。象以持色、質以持彩、故時通處塞之天地、淸而淨焉、象循質隔之天地、淸而濁焉、日照影蔽、燥煦水潤之中、濁而淨矣、熱蒸水漬、象起質滅之中。濁而穢矣。濁中大小之境。大境、則色聲氣性、小境、

則彩聲氣性色者。本淸濁之氣。明暗照蔽與彼發收之氣。寒熱肅舒者、對。故明暗者、爲晝夜之具也、寒熱者、爲冬夏之具也。彩而隔物。與聲之離質對。蓋熱蒸水漬、象起質滅之間。以蒸而氣外發、以釀而性內畜。唯大中末覺氣性之痕、小中深于氣性之痕。蓋物之成而立。成者足於我、立者敵於彼。成、則得其具而成、立、則得其與而依。依則彼此相通、贍其用。於是乎。物以隔布彩、以軋起聲。以蒸發氣、以釀畜性。耳目鼻舌者、通物之彩聲氣性於已之竅。已通覺于此、而後彩聲臭味也。彩聲未交于我。猶可謂之彩聲氣性。未交于我。難以謂之臭味。蓋濁穢之境成生化於鱗比。釀生此物、敗化此物。是濁中之氣性之所以深于痕也。物之所分、雖剖析無數、條理井然、各物並立、氣之所交、雖各物粲立、錯綜紛若。萬事相通。是以萬物散成天地之間、各各成其天地、以能並居其物也、並居而相隔、其氣也並

動而相交、於是各成之彩聲氣性。入我之視聽聞味、以今津之爲五、豈理焉哉。若從條理觀之、彩則黑白。聲則清濁。味則濃淡。臭則香臭。若就散數、之則萬物萬之彩聲臭味奚得以五律之。明暗者、象質之色、寒熱者、象質之氣動之睡覺。隨明暗、植之榮枯、由寒熱、目逢明施其枝、迎暗閟其監。故彩則唯黑白。若彼明日暗影、言其彩則日彩歸白、影彩歸黑。見日體之光耀、則目羞、見影體之曖昧、則目盲。於明暗之體、目實不能辨。以爲夜以爲晝者。則氣也。故目施枝在暗。辨歷歷之白、値明辨絢爛之彩而已。夫天生萬物、各具其彩聲臭味、則己亦具其視聽聞味。於是彩聲臭味、各成各天地中、而各各交接。其變無窮。豈得倫序之、而齊其多寡哉。日影有彩。孰辨其聲臭。雷有聲臭。孰識其味。水有性。飲者得以味之。火非無性。孰嘗而味之。彩鋪體、則莫所不有、聲軋物、則動而始有。臭有蒸、則發離質、味有

釀、則收著質。孰倫序齊其多寡焉。明者、日體其彩白、在天被明於物、暗者影體其彩黑、在地蓋暗於物。黑白爲正對。五家置青於東、置赤於南、置白於西、置黑於北。以黃爲中央之色。青爲陽色、赤爲至陽。白爲陰色、黑爲至陰。夫白者陽彩也、黑者陰彩也。今試暗中辨彩。白者歷歷。黑者茫茫。而青赤亦同歸茫茫矣。土與地一體。地氣暗。則地彩黑。水自天來、以清依暗者也。日彩之白、帶地氣則瞳朧而赤、影氣之暗、隔日景則幽穆而青。朝暮之日、斜射陰雲、則或紅、或紫、晨昏之氣、深擁烟靄、則或蒼或翠、青赤。愈深其色、則各歸黑、愈淺其色、則各歸白。不持天色以爲間色。黃者、白之初黑也。非土色矣。是故、日之將暮也、漸黃、漸赤。漸般漸冥。月以未大白、其接暗、亦不能如日之赤。出沒黃勝。昇則白復矣。焔影散布。動搖日中、則黃烟氣昇騰、掠蔽日光、則黃。故以黃綠映之於日、則黃者自黃、綠者自綠。還映

之於濁。則黃者如素。緑者如靑。是非物之失彩。大黃發物之黃也。故赤物多黃。汁黃老終爲赤。於是。繪事。白可受諸彩。黑可抹諸彩。亦黑白從明暗之色也。方無木火土金水。又無靑黃赤。白黑第作記識。分色於劣。則有焉。方豈有色哉。影與水。自暗而爲靑。日與大。自白而爲赤。動者。氣物也。畜赤於內。植者。質物也。發靑於外。孰陽孰陰。條理可識矣。聲之發于自然者。水火風雷。鳥獸蟲魚。無倫序節奏。激于造意者。金石絲竹。匏土革木。作倫序節奏。而人身之彩聲。發見于外。臭味閉藏于內。彩者。氣血之鋪。聲者。情意之發。質之爲言語。文之爲歌曲。人意之狀。氣交發于口。質接露于身。我之聲音。由口而轉。物之聲音。用手而鼓。人中自使之音也。是以。以人聽天者。自然之發也。以人調聲者。不過以淸濁高下之倫而序之。節而和之。彈絲吹竹。鳥聞之而擧。魚聞之而潛。游魚出聽。玄鶴降舞。樂家欺人之誇

言。知天人者。豈受其欺哉。蓋耳目勝于外交。鼻舌勝于內接。外交者。廣矣。內接者。狹矣。臭味之所以小於聲彩也。鼻舌之用閒事寡。而味事多矣。故動之腥臊。植之芬苦。火造之香臭。水穢之臭腐。人固陽辨之。舌接之知覺。難以五味言之。其故何哉。人有所食者。有所不食者。雖可食。而有適口者。有不適口者。是故。人覺于所食。不辨于所不食。適口者爲美。不適口者爲不美。人之養生者。飮食也。飮雖多。而除造釀外。唯水而已。水有淡鹹。而鹹食淡飮。河魚不育于鹹。海魚不育于淡。則彼此之物。有相畏焉。又有通淡鹹而居者。鳥獸亦然。夫火者。水之對也。水可飮。而火不可餐。人雖辨水之淡鹹焉。知火之味。夫水性冷滏。火性熱燥。水灌漬滋潤。火烹熟調和。以能作適口之味。是以。養人之中和。有假水火。其適口者。穀肉菓蔬。不適口者。金石土壤。味有淡有旨。有蘞。有麻。有澀。五象不數。夫穀肉者。人以適

口。常嗜不釋。然穀肉之味。不知何屬。木草家。無槩配五味。非五味豈尽盡具實哉。自蔬之菓。愈濃而愈陽辨。而水味者。淡鹹也。火味假烹炙而已。肉中雖非無辛螺之辛。蝦蟹之甘。膽汁之苦。然粲列諸味者。艸木之賦備焉。雖諸味備而養我者。蘩滋肥淡鹹而辛酸甘苦。取其和焉。金玉土石。本非人之所食。姑假其氣於攻病。故苟欲區別諸味。水味。宜分于水。肉味。宜分于肉。艸木。宜分于艸木。故以智覺言之。惟濃淡而已。辛者。味之濃也。淡者。味之薄也。淡可以調諸味。辛可以鑠諸味。而酸之攢眉。苦之喎口。澀之滯舌。蔹之戟咽。鹹之致渴。皆濃之動質也。是以。淡之受諸味。猶白之受諸彩。辛之鑠諸味。猶黑之抹諸彩。且五家之以配當。統諸物。不試諸物。而信諸書也。故以色。則木青。火赤。土黃。金白。水黑。木之青。猶可也。金未必白。火以黃勝。水以淡成。五行各無定色。若可強言色。土黝。木緣。金淸。火明。水淡。猶近矣。舉其類。則金木土石。諸色相具。水火則觸物。而其色變。配味。則木酸。火苦。土甘。金辛。水鹹。味者。舌之覺也。可食而後言也。火沸可食。則味亦弗可識矣。嘗餘燼曰火苦。盡見冷炭曰火黑。冷炭非火。則餘燼亦非火。火不可曰黑。又弗可曰苦。土非所適人口者。其味亦非甘。而謂之甘。誣亦甚矣。淡鹹者。水之味也。酉陽雜爼曰。天竺出蜜艸。塞上出蓬鹽。李時珍曰。木鹽生于樹。蓬鹽生于艸。瑯琊代醉曰。女貞國。鹽生木枝上。今適若蓬嘗之則鹹。觀彼金有水銀。石有火石。則天地間。當有者也。

雖然。無妨于言淡鹹水之味也。鹹者。水之假陽化將涸之味也。豈可以鹹概水哉。潮在海而能吸水。鹽入肚。而能爲渴。涸之勢也。是故。潮大少鹹。潮涸多鹹。水者。氣之初之質也。故煮水。未能得淡味之物。海者。氣之既之質也。故煮海。以得鹹味之質。淡則水味。鹹則海味。若以鹹爲水之本味。則可謂水克木。豈得謂水生木哉。故雖

海亦水也、以鹹專爲水味。偏也。惟水者、氣之初之質也、有氣多矣、故質弱而難浮物也、海者氣之既之質也、有質多矣、故質剛而難沈物也。以反跡觀之。則淡鹹者。水味之陰陽也。穀與菓蔬。人之所以繫生。其味。專備於此。何必酸之主。其佗艸根木皮。金玉土石。非無味焉。本非養生之具。故味之爲品。水味也。穀味也。肉味也。菓蔬之味也。宜各就其品識別其味。蓋聲。天也。而人激金石絲竹匏土革木而取聲。色天也。而人和艸木金石水火土泥而取色。臭。天也。味。亦天也。薰炙造釀淹乾烹飪爲人之臭味。人未辨天人。知彩聲臭味亦難矣。東方主生。而生數乃死數也。西方主殺。而殺數乃生數也。火主南。而南人弗燋。水主北。而北人弗溼。條理已立。觸類推之。豈用此喋喋爲。配當家其言本無徵。以五穀五菓五畜五菜。配五味。秫米棗牛葵屬甘。麻李大韮屬酸。大豆栗猪藿屬鹹。麥杏羊薤屬苦。黃黍桃雞葱屬辛。不知何謂。

曆數第七

剖析。以整齊成物。彼我。以錯雜爲事物者。居處而往。氣者。經時而來。往者遇來者。來者當往者。收往者曰前。推來者曰後。時有前後。猶處有內外。處者。坱坱焉者也。時者。袞袞然者也。其坱坱焉者。惟在而立。其袞袞然者。惟運而逝矣。往來相轉。前後分于袞袞之中。氣物粲立。內外露于坱坱之間。各物各體性。各才相發接。外露東西之氣象。內露升降之氣質。前收往而跡之天。後機來而發之神。坱坱本無方。內外立。而方位定矣。袞袞本不紀。前後摩。而歲時成矣。東西南北。動于處中。晝夜冬夏。環于時中。雖時處異也。混沒縛縺。人觀循環坱袞之間者。之錯綜相結。無觿解之。終眩目於條理。天能動。地能止。天行周地。象行周天。天行回象。象翻周地。於是。有順行之日月。有逆行之日月。日月星辰駕東西南北之氣。

各行遲疾。先後相動會違可紀。地持與天西日東結成晝夜。天行與日遲月疾結爲晦望。日之周天也。與月相結十二。以成年。舊點相復一會。以成歲。月道結東線循環成章。日道結西線循環成紀。其大略然也。人立地上以見日月。日有一週地。則月亦有一周地。日之出沒、燥氣相應。月之出沒、水質相應。而日以明暗紀出沒。月由潮汐紀出沒。蓋收往推來。以數循環於衰衰中者。迺謂之曆。於是曆有天人之別。天曆者、置而不計。人曆者數爲首尾。蓋曆之爲法。日月而已。謂之太陰太陽。太陽、日也。太陰、月也。太陽之曆、則成二分二至。爲一歲三百六十五日餘。太陰之曆、則積一十二月爲一年三百五十四日餘。節者日也。驗在分至。月者月也。驗在朔望。蓋以一例言之。日一周地。以爲一日。則月一周地。可以爲一月。日一周天一歲。則月一周天。宜以爲一年。而法則稱一日之日。則其一周地之名。而

取義於其一明暗。稱一月之月。則日月合璧之名。而取義於其一明暗。日者、著於出沒。月者著于朔望。從人目之所見。著則立之。微則置之。而今欲從人之所置。以探天之條理。不亦惑哉。故神之運爲。日一周天、亦一周地。月一周天、亦一周地。日絡西線。月絡東線。唯日月旋轉。相追之間。得月之離合者。大槩十二而已。故以太陰追太陽。則不及十三。以太陽期太陰。則過十二。所以設氣盈朔虛置閏也。人也。非天之事也。天悠曠也。測之者。刻轉日往來之錯綜。爲三百六十五之度。地洪渺也。測之者。察樞紐高低之隱見。定東西南北之處。是人之所以觀天地之法。舍之不可以著手。雖舍之不可以著手。而人也非天之事也。此故其本然。天周之頃。而天周之頃也。日周之頃。而日周之頃也。人求數於此。取準於日之周地。漢有漏水之壺。蠻有自鳴之鐘。日周地之頃。刻爲一百。曆家以爲一萬。此法一立。天

行之東西。星月之各周。莫有不由此者。故日之周、地。爲一百刻。而天之周、地、不足于此、月之周、地、以過于此。而日之周、天、三百六十五之而贏、月之周、天、二十有八之而儉。是知人爲姑立準於日周、統各行於此。以便推步者。而其實則各周各一也。已數日周、以推東西運轉者。於是。氣節之微。悠遠之歲。秒忽之消長。無不入數者。可謂邃微矣。雖謂邃微乎。人也。非天也。天道者。衰衰而運。各轉不差秒忽。誠之謂也。既已誠也。故日行可以推各轉、各轉可以推日行。然人立地上。以將迎日月。日周天。而復舊點。其曰一歲者。實順行之一日也。有一寒一暑。而歲功成矣。其間。月行離合。爲夜之明暗者。十有二而贏。循環無端。將迎相繼。而人之意匠不同。所見亦互異。是以。言時節者。終不能一同也。蓋一歲之間。日當中線者二。離于南北者各一。端末至二極。中末至中線者。西人呼爲正帶。二分二至有節。其

北者。乃和漢梵等之所在。於是萬物生長收藏。則春夏秋冬之設。猶旦暮晝夜。然。正晝宜在日之南中。則中夏宜在日之北至。堯典言日永正仲夏。日短正仲冬。而數月之法起子。則人之按排。可識焉。人工將擬數於此。不能不立首尾。於轉環無端之中。其記端無所不可爲首。歲首。蓋夏取寅月。商取丑月。周取子月。秦取亥月。夏正即唐虞之正。唐虞之正。即顓頊之法。仲冬在子。仲夏在午。若商未得其四時之說。據晉書天文志。曰。陽作段歷。弗復以正月朔旦立春爲節。更以十一月朔日冬至爲元首。則不改四時而取歲首於氣節。周擬春於子月。蓋冬於亥月。秦置歲首於亥月。倣四時於夏正。魏明帝景初中。造景初歷。以建丑月爲正。改其年三月爲孟夏。帝崩而廢。白虎通曰。夏以平旦爲朔。殷以鷄鳴爲朔。周以夜半爲朔。協義於月也

瑯邪代醉曰。自初昏以丑時皆作今日之

夜。寅時。乃作明日之旦。故上古造暦之始。十一月甲子朔夜夜半。爲暦元。夜半子時。仍屬甲子朔日。言夜半者。明全夜皆係是日。而子時居其半也。今暦家。節氣遇子時。曰某日夜子時。猶有此意。但以前二刻屬今日。後二刻。屬明日。則於理未盡。必子丑二時。倶作今日之夜。乃合月令昏旦之義。而于歲月。又相脗合。晉按。此夜而半也係昨係今。無害。曰夜半。然業已用夏正。晝夜之分。如是爲協。

循環無端。歲首可改。寒暑有節。四時不可奪。故春初在子月者。唯周家一代之制也。雖則周家一代之制也。亦於時不能廢古。

周之端月者。子月也。何以知之。左傳載曰。至於正月也。殷之端月者。丑月也。何以知之殷冬至。漢書曰。太甲元年十二月乙丑。也。與前所引晉書天文志之説不同夏正者。堯舜之所用。孔子之所欲行。殷周之制。雖迭有廢立。年從月而始。時以代而改。而夏正則不全廢。是以周禮。有正歲正月之分。猶似兼用夏時。明張呂察。作正月考。辨之當矣。然於詩左傳。爲盡歸時月於建子。則誤矣。蓋是時。人雖由周之正朔。而夏時未全廢。詩自豳風七月。至小雅出車四月。胡在周正。左傳晉卜偃。以十二月丙子朔。爲十月朔丙子。見僖五年。縫縣老人。數歲。始夏正正月。見襄三十年。昭三十一年。十二月辛亥朔。日食。史墨曰。云云日月在辰尾。林註曰。周十二月。今之十月。夏正之不廢。可觀矣。賈季對酆舒曰。趙衰。冬日之日也。趙盾。夏日之日也。孟子曰。冬日則飲湯。夏日則飲水。楚辭曰。悲哉秋之爲氣也。蕭瑟兮。艸木搖落而變衰。而襄十六年。正月。晉人烝于曲沃。非夏時而何。晉楚人之言如是。此左氏之所以書周正月也。將與不周者辨也。秦月用夏正。歲首亥月。蓋亦一代之制耳。説者

或謂之顓頊暦者。意但用其四時之謂乎。和暦。自古同夏正。諸方相比。其設亦種種。梵・由二二行而分六時。漢由二二至而分四時。紀歳主二分二至。分朝夏秋冬。而分至居其中。故推春夏秋冬之始。竄立春立夏立秋立冬。合之爲八節。其餘十六節。自此按排。漢以支紀月、梵以宿紀月。以起四月半者。爲頞沙茶。以起五月半者。爲室羅筏拏。梁眞諦之說也。以起三月半者。爲阿沙茶。以起四月半者。爲室羅筏拏。泰法師之說也。而餘冬序録。以頞沙茶。爲鬼宿之名。以室羅筏拏。爲柳宿之名。然難與月次星纏合。未知何故。

漢以一日。爲十二時。梵以一日。爲六時三十分。

出智度論。雖然。是皆出人巧之變化。非天成之一定。故梵中亦似不一同。義淨寄歸傳。曰。西國大守。皆有漏水。下以銅盆盛水。上乃銅椀浮内。孔在下穿。水便上涌。始從平旦一椀沈。打鼓一下。四椀四下。然後吹螺兩聲。更打一下。名爲一時。即日東禺也。更過四椀。同前鳴螺。別打兩下。名兩時。即正午。過午兩時。夜亦四時。一日一夜。成八時。其莫訶菩提。及倶尸那寺漏。從且至中。椀沈十六。若南海骨崙國。則銅釜盛水。穿孔下流。水盡之時。即便折鼓。一盡一打。四椎至中。齊暮還然。夜同斯入。總爲十六。

占城以一日。爲十時。

暦學疑問引馬歡瀛涯勝覽曰。占城國無閏月。十二月爲一年。晝夜分爲十更。用鼓打記。又引素問。一日一夜五分之。隋志。晝有朝有禺。有中。有晡。有夕。夜有甲乙丙丁戊之語曰。晝夜十更之法。中法舊有之。又引熊磧石島夸志曰。船舟視毫羅之針。置羅處甚幽密。惟開小扃。直舵門。燈長燃。不分晝夜。夜五更。晝五更。按此以十更。記程而百刻勻分。不論冬夏長短。與記里鼓之意

略同。若素問隋志所云。則以日出入爲斷。而晝夜有長短。占城用鼓打記。不知若何。要不出此二法。按最後之說。以十更合天之平行度。始知意匠之巧。靡所不有焉。

漢月起合朔。梵月起既望。

法苑珠林曰。依菲法師西國傳云。居俗日夜分爲八時。晝四夜四。於時各有二分。月盈至滿。謂之白分。月虧至晦。謂之黑分。或十四日。或十五日。月有大小故也。白前黑後。合爲一月。六月合爲一行。日遊在內。北行也。日遊在外南行也。總此二行。合爲一歲。又分一歲。以爲六時。正月十六日至三月十五日。漸熱也。三月十六日至五月十五日。盛熱也。五月十六日至七月十五日。雨時也。七月十六日至九月十五日。茂時也。九月十六日至十一月十五日。寒時也。十一月十六日至正月十五日。盛時也。如來聖敎。歲爲三時。正月十六日至五月十五日。熱時也。五月十六日至九月十五日。雨時也。九月十六日至正月十五日。寒時也。或爲四時春夏秋冬也。依論計之。十五夜爲半月。兩半月爲一月。三月爲一時。兩時爲一行。一行即半年。六月也。兩行爲一年。二年半爲一雙。此由閏故。以閏月兼本月。此謂月雙。非閏雙也。又按。五時者。南海寄歸傳一冬時。四月。從九月十六日至正月十五日。二春時四月。從正月十六日至五月十五日。雨時一月。從五月十六日至六月十五日。四終時。唯一日一夜。六月十六日。五長時。從六月十七日至九月十五日。此乃獨於律敎中。佛制如是次第。明有密意也。若依方俗。或作三時。四時。六時。

步月離漢始于朔。梵始于望。而天方之諸國。月之第一日。在哉生明之後。所謂回回曆。與漢差三日者。是也。漢日起子半。西法則午中。漢之節氣起冬至。西法則春分。且印度之歲

首月之哉生覇。西洋之歲。起日之己向北。
曆學疑問曰。西法正月一日。定于太陽躔斗四度之日。而恒星既東行。以生歲差。今定于冬至後十一日者。溯而上之。可七百年。則其正月一日在冬至之日。順推至後七百年。則又在冬至後二十日。是說是也。雖然。西洋之人思緻算巧。譯人飜譯恐有未盡其意者。飜而其意而盡焉者

支那置閏於月。西洋置閏於日。
西川子曰。紅毛曆。正月元日。當冬至後十日。正月三十一日。二月二十八日。三月三十一日。四月三十日。五月三十一日。六月三十日。七月三十一日。八月三十一日。九月三十日。十月三十一日。十一月三十日。十二月三十一日。一歲十二月三百六十五日。四年置一日之閏於二月。爲三百六十六日。是閏年也。是以。每歲春分。當三月二十一日。秋分當九月二十四日。夏至當六月二十二日。冬至當十二月二十三日。又聞諸西人之說。今之榜葛剌。則古東印度之地也。而置月十二。而不置閏。雖其制不可知。而或倣和蘭之曆歟。

而周秦置閏於歲之尾。其他辨諸中氣之有無。
曆學答問曰。閏月之議兩端。謂無中氣爲閏月。此據左氏擧正於中爲說。乃曆家之法也。其一謂古閏月俱在歲終。此據左氏歸餘於終爲論。乃經學家之詁也。曰。自今日言曆則以無中氣置閏爲安。而論春秋閏月則以歸餘之說爲長。何則不徑書閏月俱在年終。按周之年終則十月。秦法置閏於九月。是法周法也。而今之頒曆則安永乙未十二月之閏。天明丙午十月之閏。共有中氣。

又聞眞臘曆。全合秦正。
瑯琊代醉曰。周達觀眞臘曆云。眞臘每用

中國十月爲正月。歲閏置九月。晉按和法。神武以來用寅月爲正。漢法歷代不同。漢承秦正。以至武帝。武帝復夏正。至今奉之。唯王莽及魏主叡。用建丑。唐武后肅宗。共用建子。皆不久而廢。

回回以動的月。立歲。爲太陰曆。

梅文鼎曰。回回國。太陰年。謂之動的月。其法三十年閏年十一日。而無閏月。惟以十二箇月爲一年。無閏。則三百五十四日。有閏。則三百五十五日。故遇中國有閏月之年。則其正月移早一月。故曰動的月。然如是則四時之寒燠溫涼。錯亂無紀。因別立大陽年。以周歲日躔。勻分三百六十度。又勻分爲十二月。以爲耕斂之節。而起算春分。是亦事勢之不得不然。但彼以春分爲太陽年之第一月第一日。遂不得復用分至啓閉之法。及春夏秋冬正名。其大陽年。則謂之不動的月。其法以一百二十八年。而閏三十一日。皆以太陽行三十度爲一月。即中曆之定氣。其白羊初。即爲第一月一日。歲歲爲常。故曰不動的月也。然其紀歲則以大陰年。而不用太陽年。文獻通考曰。回回歷者。異人馬哈麻之所作。其原實起於隋開皇十九年已未。

泰西以恒星年。立歲。爲太陽曆。

曆學疑問補曰。西法以太陽會恒星爲歲。謂之恒星年。其法以日躔斗四度。爲正月朔。其斗四度。蓋即所定磨羯宮之初度也。在今時冬至後十二日。自此以日躔。行滿三十度。交一宮。即文爲一月。而不論節氣。然其十二月之日數。各各不同者。以黃道上有最高卑差。而日躔之行度有加減也如磨羯宮。日躔最卑。行速。故二十八日。而行一宮。即成一月。若巨蟹宮。日躔最高。行遲。故三十一日。而行一宮。始成一月。其餘宮度。各以其或近最卑。或近最高。遲速之

行不同。故日數皆不拘三十日。是說與西川子所說紅毛曆似。而日數不同。其說有誤。明算之士宜正之。

北胡只紀艸之榮枯。亦巧拙之分也。至唐曹士爲。符天曆。以雨水爲歲首。私造擾王者之正朔者。不足爲一法。

曆學疑問曰。唐建中時。術者曹士爲。始變古法。以顯慶五年爲上元。雨水爲歲首。號符天曆。行於民間。謂之小曆。

明游藝以爲。以太陰爲曆。則以月爲主。故有盈虛。而太陽節氣之宮度。反分註于月之下。若以太陽爲曆。則以節氣爲主。朔望分紀于節氣中。故私擬天曆。欲以爲萬世之定法。梅文鼎非之曰。以閏定四時。即堯之敬授人時者。未明古聖人之意。今其欲改革之者。亦爲定四時。敬授人時而已。豈有他焉哉。皆見趣之乖馳。意匠之不同也。劉昭後漢律曆志曰。記稱。大橈作甲子。隷首作數。注引月令章句曰。大橈探五行之情。占斗罡之所建。於是始作甲乙以名日。謂之干。作子丑以名月。謂之支。支干相配以成六旬。往古渺遠。言事之始者。多託黃帝。雖橈首未可知。其來也久。首之所作也者。一二也。橈之所作也者。甲子也。甲子有分行者。有兼行者。于支迺分行之名也。于以數日。支以數月。小數也。甲子迺相兼之名也。竟以紀歲月日時。大數也。于十。曰甲乙丙丁戊己庚辛壬癸。支十二。曰子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥。猶數有一二。卦有乾兌。造名之初意也。于支又曰子母。干支取義於木。子母。取義於人。本各用之數。相配以便推步。禹數日。曰辛壬癸甲。詩曰吉日維戊。陽曰先後甲庚。卜楚丘曰。日之數十。干已日也。支豈非月乎。夫後人記古。多以後之所有。誣于古之所無。其所謂探五行之情者。黃帝之時豈有此叓哉。一歲之間。大氐十二月。世有以晦望無定躔。取北斗定柄之方處之說。故日。正

北曰子。北東曰丑。東北曰寅。正東曰卯。東南曰辰。南東曰巳。正南曰午。南西曰未。西南曰申。正西曰酉。西北曰戌。北西曰亥。起其數於北。合曆元。斗柄一朞十二建。以復舊位。夏正於建寅。殷正於建丑。周正於建子。秦正於建亥。是相傳之說也。是其所謂占斗罡之所建也。如此。則子丑本方名。除建字不得以爲用。斗建以先月。不亦可疑乎。或曰。冬至曰極南。夏至日極北。以月言之。子月宜在仲夏。今以日之極南反言子。明子丑自方焉。是以子爲北之說成。而後之論也。造命之始。子宜爲北。宜爲南。宜爲東。宜爲西。東西南北爲方之本名。甲乙子丑。可謂非日月之數目焉哉。否則于支子母之偶稱。取義於何哉。故除建字以稱月。可以爲正焉。北斗。本恒星而繫天。人望所羅列之七星。爲一座。以似名斗。仍望之則其杓者旋轉。莫所不向。蓋當時數月。適會日南至。斗建北。因次第以分十二方。雖然。星每東移。日亦移。曰躔。則建子者。稍將建丑。故以子丑數之。則月不與天離。以斗建數之。則柄稍與月差。清梅文鼎曰。斗建之說。古無其說。惟史天官書略言之。曰。杓攜龍角。衡殷南斗。魁枕參首。用昏建者杓。夜半建者衡。平旦建者魁。是則衡亦可言建。魁亦可言建。而非僅斗杓。非初昏。其言甚圓。又曰淮南子等曰。招搖東指。而天下皆春。太槩言之。非以定月。可謂正斗建之習弊矣。子丑本非天。故十二一日。則子起於北。東而南轉。十二一歲。則子起于南東而北轉。故以子丑。配一日者。爲紀於晝夜旦暮。使之陽分也。以子丑配黃道者。爲紀於星宿躔度。使之陽辨也。皆人也。非天之事也。故以天言之。日月本無支于之數。故以于數月。則餘二而僉于三。以支數歲。則盈一而不盡贏。豈天焉哉。是以于支分行之義稍廢。大周六十。存而便於紀算。歲日並用。推步家之所襲也。是故。漢之紀日。雖以甲子六十

而周。而回回西洋。紀日於七曜。以七日而周。漢之紀歲。雖以甲子六十而周。西洋以總積六千餘年為數。意此義亦已久。春秋桓十七年。朔日有食之。而不言于支。左氏穀梁。共為不言日。武成日。惟壬辰旁死魄。越翌日癸巳。召誥曰。惟二月既望。越六日乙未。三月惟丙午朏。越三日戊申。畢命曰。惟十有二年。六月庚午朏。越三日壬申。由是考之。古之數日。與後世用朔二三者不同焉。于之以十計之。人也。支之以十二計之。人也。天弗與焉。唯人於地上。以明晦言月。月者。卽為所取日之數焉。故朔望為月之名。望者、日月相望也。朔者日月同位也。望位之至密。為食矣。故朔對望之名。而晦非對望之名。故晦書日食者。古曆之失也。

曆學荅問曰。古日食每不在朔者。以古用平朔耳。古所以用平朔者。以日月並紀平度也。東漢劉洪。作乾象曆。始知月有遲疾。北齊張子信。積修二十年。始知日有盈縮。在此二端。以生定朔。然而人猶不敢用也。至唐李淳風。僧一行。始用之。

增鏡。德治二年十月晦。追保元之例。為十一月朔。嗚呼人縱自肆。而豈可換天哉。不敬亦甚。夫天露東西氣象之動。以定時、地露升降氣質之動。以變運。天動而定、地止而變。條理之道也。于支隨五家之手。而五行司天。六氣在泉。主客並行。燠寒風雨。豐凶天札。決于此也。轉環六十年。仍舊而始。何觀造化之隘。甲乙為剛柔之木。子午為水火之宮。不知于支本數日月之一二。蓋一二之於數。不用群而通。於于支。則甲。拚乙。屈。子。孳。丑。紐。欲通益塞。終所十二禽。以為支之神。測晷推步。能入其數者。天之行也。須臾變化。倏忽出沒者。地之運也。昔有樵叟。入山得古株而歸。失之於牆頭數年。逮風雨暴蛣蝠嚼。形象頗若神。於是。兒孫聚視。以為神。為之祠。求福禳禍而弗

已無意以成、有意以惑。殆與此事類。故思不至則失之於鹵莽、思過則失之於穿鑿。

水燥第八

持中。上承日月之運、下充水燥之物。地體突出于水面、洲壤成焉。是之爲陸。是我之所處也。燥者、充地無體之氣、水者、充地成體之質。乾與燥同性、而其所異者何、轉持既分境、燥在持中而受水濕之化。是以雖燥之極爲火、猶不出潤濕之性。至轉中、燥初爲乾、月與水同物、而其所異者何、天地既分境、月以在天中而受淸虛之氣。是以雖影之極爲月、猶不出淸虛之體。入持中初爲水。是以我之所居、燥地中生、天中居、水天中生、地中居陸者、曼然居燥中者也。海者、邃乎爲水者也。陸、突起爲山、合其本而分其末焉。海坳陷爲洋、分其本而合其末矣。陸在水中爲島嶼、水在陸中爲瀦澤。水路在陸爲川、氣路在水爲海窖。是本然之條理也。氣充天中、水實地中、燥畜地中、水成氣中。故雲自地升、而化天中。雨自天降而化海中。山居天中、海居地中。天以氣生水、地以質生燥。故山噴其氣、以生衰衰之水、海食其水、以畜煦煦之燥。夫水者、自氣而來、故能結質。火者自質而往、故能化質。壞者、質疎而氣陽達。海者、質密而氣陽鬱。故海者、陽鬱于下、水和于上。是以植鮮于下、而動多于上、以反于陸生焉。水結則燥居其中、燥充則水居其中。燥抱水生、水抱燥生。生化雖反、跡其理一也。陸水者、氣之初之質也。其氣淸、其質柔、其味淡。陸氣抱水。海水者、氣之既之質也。其氣濁、其質剛、其味濃。海水抱氣。水有海陸、則氣亦有海陸。氣抱則其水質陽而氣陰也。抱氣則其水質陰而氣陽也。雲者濁質爲燥所搖而爲象也。雨者、淸氣爲溼所結而爲質也。水以生天中而淡者、爲壯以能生生。是以其歸海。漸沈則漸就化、燥以生地中而簇者爲壯以能生生。是以其之天。轉上則轉以

老。溼者、無體之水也、火者有體之燥也。氷者、水中爲物者也、火者燥中爲物者也。故燥、或晴或雲、聚則雷霆、溼或雨或霧、結則霜雪。是以。雨晴迭爲政。雷霆霜雪居其極。溼之爲氣、重而清冷、烟之爲氣輕而溫濁。烟隨升而失象、溼隨降而結質。是以。春而烟動、彼而露肅、夏而雷發、冬而雪結。皆水燥之剖析而交互者也。人有言。雷起萬物出、霜降萬物肅蓋。日鼓物、而肇其事、地承其事、而成其物也。發陽之日近、則解陽之燥應、收陰之影進、則結陰之水應故。日來則萬物皆出、雷亦其動中之一物也。影進則萬物皆肅、霜亦肅中之一物也。冬者、陽氣微也、偶鬱發與陰氣鬪則雷。理與夏雷同、夏者陰氣微也、偶降結爲陰寒凝則雹。理與冬雪同。機之所變。其神不測。西洋說雨露霜雪。遊火雷電等。先於天地之間分三際焉。曰。水土之塊太陽蒸之。是成溫際。眞火同天。是名熱際。中間通達而冷。是名冷際。水火之萬變。皆歸諸斯陶冶。若就條理察上下之清濁、識寒熱溫冷之成于氣質動靜、則其說不辨而破。方密之揭子宣已粗辨其非。見物理小識。只欠其瑩焉爾。

水火第九

火者、統日星火雷等天地諸象之稱也。水者、統月辰淡鹹等天地諸質之稱也。天地一結物。以地當陰陽之氣。故地排所生之陽而摔、則露火而走天。噏所收之陰而噴、則結水而湛地。氣散質結、陽發陰收。於是天地開虛實之體、水火露象質之物。然而分之、則火充轉中、水充持中。水之處、則混濁勝。是以火勢微也、出沒其物、不能常其體。火之處、則乾清勝。是以水勢微也。明暗其象、不能專其體。蓋地者、陰結之物、其天晴而收、命之曰影。天者陽解之氣、其象濁而發。命之曰火。天地已分界。於是。收陰之氣、發陽之象、與影偶天、發陽之氣結陰之物、與燥偶地。陰陽比其露、則天日

地水。華液大物分天地。氣物相對。水得燥而偶地、日得影而偶天。天之水也小。同地之火、地之火也小。同天之月。故相望。則天象地質。各占其處。天中比日月、地中比水火。水以氣之之質、天生地化。之謂自高就卑、火以質之之氣、地生天化。之謂自卑之高。大其物則火宗天中、常懸天。水宗于地中。常湛地。世人弗識條理。以地上之水火。爲正偶。似而非者也。燥中之有火。比水中之有氷。嘗由條理論之。今夫對照者何。蔽也。對熱者何。寒也。火照。水石蔽。火熱。水不寒。何能反而合焉。反冷者何。溫也。反有體者。無體也。有體之冷者。水也。反於無體而溫之燥。燥以氣煦萬物。水以液生萬物。故焱焱燔灼者。燥中之一種。比水中凝結之氷。煦煦之燥。非水之所能滅。津津之水。非火之所能盡。而水能生氣中。燥能生質中。相生相化。相拒相容。竝立爲造化之功焉。其跡相反。其力相均。火者。燥之鬱發者。擊而升則雷霆也。氷者水之收凝者。結而降則雹雪也。人得一瓶之水。灌一爐之火。見其滅。曰水勝火。瓶之水。爐之火。已截絪縕之本。猶已折之枝。而開花是故。已截本之水火。煮之則涸。灌之則滅。若不截本於絪縕。火得水而愈熾。水得火而愈溢。故火山値淫雨而增勢。川谷値久旱而益流。火之用。專在天。是以其勢微于地也。水之用。專在地。是以其勢微于天也。天水地火。其勢雌。天火地水。其勢雄也。天月地火。其功雖雌也。而能合雄於是。日月懸天。水火動地。惟人以火養生。生使火不有。將苦於熟食禦寒。鳥獸之於保生則何與。日影收煦于上。水燥絪縕于下。是以。物液盡則形枯。燥盡則神絕。造化之物。可知也。客曰。水性素冷。有溫泉。火性本熱。有寒火。溫泉所在有之。寒火不少。彼之蕭丘。我之越後。子將謂之何。予曰。噫子盍思諸。夫水性者冷。火性者熱。冷肅而寒。熱微而溫。是以水有寒冷。而無溫

熱、火有溫熱而無寒冷、水火之分也、硫礬者、地之膏膩。火依此、此火不值水則爲火、值水則爲溫泉、故溫泉之熱者。硫礬之客氣而已。客氣已去。則冷性又復。與沸湯值火。則熱氣容之。客氣去則本性復、何異。以客氣爲本性、於是。有水有溫冷、火有寒熱之說。溫泉、客氣耳矣、豈其本性爲熱哉、陰火不熱耳矣、豈其本性爲寒哉、謝肇淛五雜俎曰。江寧縣寺。有晉時長明燈。火色青而不熱者。是也。冷者、水之本性、寒則爲氷爲雪、溫者燥之本性、熱則爲火爲雷、班固邵雍共言、有溫泉、而無寒火、丹溪東壁言、五行皆一、惟火有二、其說則如相反、其病於條理則同矣、是以。水以寒冷自對、火以溫熱自對、是本然之條理也、陰陽者。虛位也。一一之各名也、以天地分之。日、陽火也、火陰火也、月、陽水也、水陰水也、以地分之。雷電、陽火也、地火、陰火也、雨水、陽水也、氷雪、陰水也、以氣分之。則燥、無象而溫、陽也、火有象而熱、陰也、溼、解而無質、陽也、水、結而有質、陰也、以陰陽言之、則明爲陽火、暗爲陰火、水爲陰水、膏爲陽水、夫明而爲象、火之體也、溼而爲質、水之體也、明象不爲火之用、之爲陰火、溼質不爲水之用、之爲陽水、龍燈鬼燐、湖光海火、腐水熠燿。魚鱗波光、月之明。鏡之照。眸子之視、與彼蕭火越熖。共陰火也、石油地波。動之膏。植之油、皆陽水也。陰火以陰暗熾、陽水以溫熱沸、是以。膏膩、水而非水、與火相親、見火則融、得火則燃、陰火、火而非火、與水相親、得水則生、由水則光、故。陰火、無火之性、而有火之象、是水之火也、是以、火而不與火相居、陽水、無水之性、而有水之質、是火之水也、是以、水而不與水相合、客曰。氣靜則溫、動則冷、溫靜、燥也、冷動、風也、分明一物、何曰火無寒冷焉、予曰。氣有寒熱、火無寒冷、夫天之爲物、動而虛也、地之爲物、靜而實矣、氣、動則冷、靜則溫、質、動則熱、靜則寒、氣動質靜、同歸

寒、氣靜質動、同歸熱。然則氣有寒熱、火無寒冷。天地之條理也。客聞之曰。其論寒熱已得聽命。子且曰。海在下流。陽氣下鬱。陽化將涸之勢。能爲鹹矣。而彼山西河北。川中雲南出鹽。若我東奧飯富山中。亦有鹽井。如此者陸地。而又能出鹽者何。曰。水者、氣之之質也。燥抱而水生、故水與氣同味而淡、火者質之之氣也。氣鬱而水煎。故海與水反味而鹹。故海者。水之所積。質密而能鬱氣。且聞。當支那西北。有水而瀦。曰北高海。水瀦地中甚廣。陽氣鬱煎其瀦。終以爲鹹云。然此地絕遠。或通北溟與。未能悉之。雖未能悉之。而理則不出此。是以。土地洪曠。水溼游溢。陽氣鬱不洩。雖陸能釀鹹。海淺未能密封陽氣之處。處處得淡於鹹中。我聞。蜀地鑿井求鹽。往往逢火。北高海畔。火炎上古今不絕。是蓋鬱陽之餘發也。客曰。水之生必淡。鬱陽以釀鹹。然則出火地。當盡出鹽。今不然者何。曰。火能達則已。不能達。則居水久。而能釀鹹。居不久。直衝而出者。乃溫泉而已。而天地之間。有不溫其水而火燃水面者。比之於溫泉。其達尤銳。是蓋火之依硫礬與依水溼之異而已。

贅語三身生帙目次

贅語三

身生帙上之本

日本　鎭西　三浦晉　安貞　著

人所含之靈。乃情與智也。欲治之者。在審情精義明利達患也。是以聖人人情爲田。以講信修睦。尚慈讓。能耨爭奪相殺者。於是乎宇內乂安。而身生者。所載此靈之輿也。學者審其所乘者。而略所載。擧遺之於醫人。可怪矣哉。而今無人於質問。索諸條理。探諸郡典。若微有通者。是亦宜審情精義明利達患而已。爭奪相殺者。病也。講信修睦者治也。安國則有王者。治疾則有醫人。而今學者覃思於禮樂刑政。屬身生於屠龍。雖然無載者。則無乘者。無屠者。安有嗜者。於是一帙二卷。上者說其情。下者說其患。而世之執綏者慢忽。執策者鹵莽。受侮於

識者是孰之過與。因竟之。亦及執策者
之與與行。

身生訓

元氣

宇宙轉持沒其物、天地水火露其物。而絪縕
給資。動植化于其間。天地者元氣也。故有天
地者。莫不保元氣。而物異也則天地異也。天
地異也、則元氣亦不同也。持中者濁境也。物
之體、成于水燥土石、神之用。見于神靈感運。

人居

陰絪陽縕。給資機動、大小物分。大則天地合
一、小則動植二分。植成無意、動成有意。爲偶
於持中者也。人開己境、以望天境。於是有天
人之分。神則分於意之有無、物則分乎體之
虛實。神靈於我具心性之意、感運於我發爲
技之爲、水燥在我爲氣液之生。土石在我成

動植

骨肉之身。且持中。居有水燥。生有堅輭。堅生
塊然、輭生岐然。水居少文、燥居多文。是以自
金石之塊然、極文於艸木、自螺蛤之塊然。極
形於鳥獸。而藻樹漸文艸木、魚龍漸文鳥獸。
以居異者也。性則一焉、體則二焉。物能立二。
陰陽相反。多寡物之數也。偏全物之性也。故
物分類於多寡。成性於偏全。剖析不已。萬形
雜出。

剖析

一能剖析。二能反對。剖則反從。反則剖不
盡。故造化之業。化無意、便剖有意、化本生。
便剖餘生。陸化動植。水亦化動植。動剖鳥
獸。植亦剖艸木。化獸使手技足行。則剖鳥
使翼行足技。化有手足之鳥獸。則剖沒手
足之魚介。諸動外肉內骨、則介甲外骨內
肉。重化便輕成、柔化便剛成。橫則待堅。智
則偶愚。是以不得不動、不得不植。不得不
獸不得不人。而狗剖狗中、鷄剖鷄中。於是
鼠亦有矣。貓亦有矣。伏翼亦有矣。鷽鼠亦
有矣。

動植反合

是以成水燥土石者、本氣也。本氣成氣液骨
肉、爲神靈感運者、神氣也。神氣成心性爲技。
而氣液骨肉。約之則身生。生則氣分溫動、液

動植方位

分膏血、身則骨分筋骨、肉分臟腑、是以氣液之生、骨肉之身、萬物偕有、而温動之氣、膏血之液、限之於有意、神靈之神感運之用、萬物偕有而神靈之意感運之技、限之於有意、當其分體也、植則一骨肉、而堅植約肉於骨、輭植約骨於肉、動則分骨肉、而堅動以骨包肉、輭動以肉包骨、堅植閉文、輭植開文、堅動意乏、輭動意長、動植合隻生、能全一、故鳥獸我類也、艸木我與也、其岐然之生也、蓋天地之位、有内外、有上下、而物亦有内外、有上下、唯物、歸外氣内質於天、以外質内氣、有之於已、歸中下外上於天、以首本尾末、有之於已、然而動植亦反物、雖反亦同生、是以本末則同有之、而艸木下本、禽獸上本、動條理定其形、而變其神態、植條理變其形、而定其神態、以類異、而名異也、故動則身首、植則根幹、動則肢指、植則枝椏、同中反焉、動植之已分、各以偏成、全無意者混于其氣、而用意粲于其器、

身生

動植異類則反意之有無、同生則同體之生化、是以自非用意之器、則爲生之具也、用意之器、動獨有之、爲生之具、各相有焉、雖爲生之具、各相有焉、而動内根葉華實、根外根葉華實、意之所反、物亦異也、鳥獸分肉堅於骨、分氣濁於血、而分神於意、分爲於技、艸木欠血約潤於生、欠骨約堅於肉、欠意技、則露情於好惡、運爲於發收、植根在下、分技而上行、實内體、而布華葉於外、謝華結子、以爲苗之生生、動首在上、分肢而下行、虚内體、而垂心肺於内、動心構精、以爲胎之生生、植者堅立堅剛、動者横行柔輭、堅立堅剛者、其生冷止、横行柔輭者、其生温動、而鳥高而小、獸卑而大、艸卑而小、木高而大、鳥木樓而好木實、其羽則類木葉、獸艸樓而好艸實、其毛則類艸葉、且大物、土石持内冷轉保外、有意骨肉特外温動保内、則温動者我生之基也、神靈依之而存、失之而滅、假有骨肉、而神不舍冷止、

混槃氣體

矣、而心性爲技、成于精靈感運、氣液骨肉、成于水燥土石、則物也、窮達死生成于當遇致至、睡覺榮枯成于明暗寒熱、則事也、是以溫、在外爲衛、在內爲營、動自外爲息、自內爲脈、營衛之溫、息脈之動、生則存、死則喪、津血之液、脂髓之膏、生則融、死則潛、以生存死亡、是之謂生、肉雖有皮肉臟腑之分、骨雖有筋絡標本之辨、而除溫動之餘、則身死而體存者、是之謂身、身生既立、其派可言也、蓋條理之態、統者混然、分者槃然、是以意爲之氣、身生之態、通成一、謂之混氣體、臟腑之別、神本之分、隔成各、謂之槃氣體、溫動膏血、皮肉筋骨、融一身、無所不有、故曰混氣體、心肺肝腎耳目鼻舌、咽喉腸脬、手足陰乳、有官守、不與佗通、故曰槃氣體、混槃之間、軀乃成、而神棲其中、神者其氣精、出入不用門戶、駕志往來、異于槃氣體之使令、分明也、於臟腑之分、世無繹其故者、請述其大意、以爲張本、夫天地者、

天眞地假

神物而已、神者精而不爲其處、醻渟而活、物者麄而定其處、混淪而立、天有給、人有資、則彼此以神物而全、神雖出入不用門戶、駕志往來乎、其所根據在所資始之心、之爲天眞、穆閟外戶、其地爲玄宮、是乃天眞之所成、而天眞即神、神取奉於地假、地假之物分天地、天謂氣、地謂膩、天氣者、噓噏也、地膩者、飲食也、艸木者、以水土爲地膩、鳥獸者、以飲哺爲地膩、植抱於地膩而立、動抱地膩而立、天氣地膩元外物、於我如不相與者、然不假此不能以保此軀、奉此神、其處爲胃府、上下大開道路、進新退故、得噓噏成絪縕、於是地假之物、與天眞之神、均其力矣、天眞之宮、地假之府、我君相之所居、君相雖定居、而無羽翼之供奉之者、則其功不可成也、是以宮府各有翼趾、神舍則兩肺爲翼、搏爲摩盪、經脈布周身、運用莫所不到、胃府則肝脾爲翼、夾爲絪縕、咽腸通上下、受瀉莫所不貫、腑者容物、

臟者容氣。心爲政於胸中、胃爲政於腹中。腹中肝脾爲偶、肝脈上維心肺、傍脊維腎。一脈聯貫。剝而提之。如繫物於長絲。唯脾肝之接微也。終出綱脈用事於下。胃之在腹。猶地球之在天。心於是。胃上出肝脈、胃下出脾脈。天以轉保外、地以持營中。一身之營衞資諸大物之轉持。不但我資此。萬物各然。以粟言之。則衞護在稃、營養在米。稃米便粟之臟腑。稃不舍米而存。米不舍稃而活。衞中棲有己資始之一神。營中塡立己資繼之佗物。尋繹其形跡。終窺此天眞地假之窟。則必識佗之文章。皆執役於此。心中之眞者、與我始終。胃中之假者、新故相換。大物合神物而成、持中合水燥而成。眞假以觀神物。息食以察水燥。

天眞者、胎前成生者。地假者、胎後繼身者。是我天地之眞偶。噓噏元燥氣。飮食元水穀共胎後繼身之物。故雖謂之天地。而其實天氣地質之天地。與天眞地假之天地不同。讀者宜以其所對精別之

腎

內外臟腑

天地混圓。日影分其球、水燥合其球、大物則其天轉、其地持。人之所有。則假其天氣。以爲摩盪。假其地膩。以爲絪縕。而水球則襯地、燥球則襯天。觀胃之資水穀。而知肺之資天燥。於是神悉之於心性、物繹之於身生。則神軀之事全矣。動之系末繫腎。猶植之枝頭結子。故心者華、而腎者實也。所以退居無事之地也。肝肺心腎。觀之於艸木。則根葉華實。而於植則外發、於動則內收。於是內而摩盪絪縕、息食便溺、外而聲彩臭味。器地配子。本氣之用外居、神氣之靈內存。本氣之活內運。神氣之用外發。夫濁境。水燥絪縕之中。旣生是人。不得不內用息食、運性精、外交聲彩臭味。接器地配子。審察其位。亦不濫其次第。故彩聲者精、耳目者受精之器而居上也。鼻舌者受麁之器而居下也。器地者疏。手足者接疏之器而居上也。配子者親。陰乳者接親之器而

居下也、雖精而彩精而大、聲麁而小、雖麁而臭能離質、味猶著物、雖疏而器可以離地、當能著、雖親而配自疏近子自親遠、蓋有彩聲臭味之氣、我用視聽聞味、有器地配子之質我用舞蹈交字、雖文所用而異門戸、其實相通、魚雖無耳、能驚于聲、鯔目瞑則聽疾、聽重則視明、夫耳目兩系分而爲四、其體則一虛一實、是以魚無鼻、則息于飮、人鼻可通聲、口可呵氣、而咽喉兩管、一虛一實、爲鼻舌、鳥無乳則一後、獸二後、則有乳、獸以手歩、鳥以足握、則手足陰乳、亦各一之分也、牛馬四蹏唯充歩立之用、則其技或在吻、或在口、魚去四肢用鬣、則其用以在尾、以在口、擴言之、於天地則轉以轉而歩、持以持而居、天地相給資、陰陽互絪縕、技爲于神、功成于天、故自其本而觀、則物與天地一也、執其末而觀、則各分天地、自各觀一、則一爲通、自一觀各、則各爲隔、水土草木飮食鳥獸各體之隔也、艸木以

小天地

水土存、鳥獸以飮哺存、則一氣之通也、雖一氣便通、而各體相隔、故水土飮哺、繼生生於動植、不能爲生生於動植、通以觀全中有偏、隔以觀偏中有全、於是全者即偏、偏者即全、全則同有天地、偏則彼此異物、雖同有天地、而物分動植、意反有無、彼艸木之無意、則姑舍焉、我已成開形極文之天地、神氣爲有意之神、本氣成無意之天、虛而動者、我生也、實而止者、我身也、氣液爲我之水燥、骨肉爲我之土石、睡覺爲我之明晦、噓噏爲我之發收、意智我之精靈也、情慾我之鬼神也、而陰精生鳥珠之火、陽氣釀醴泉之水、毛髮爪牙植于我、蟣蝨蚘蛆動于我、心尊爲君主、氣卑供使令、喉鼓發雷霆於言笑、身動降雨露於汗涙、天地者元氣也、資有天地者、無不保元氣也、而物異則天地異也、天地異也、則元氣亦不同焉、大物者、造化在元氣、小物者、元氣在造化、故我之於元氣、可養焉、可賊焉。

麄者粲然可見焉、精者混然泯跡焉。粲然者開闔屈伸自見其門戶、天眞之神唯志所向、欲視則之目、欲聽則之耳、思慮則復心、縱横無礙。己之所有而不能自知、以觀其精焉。既已精矣、由門戶道路以用其麄者、於是其運分、意爲意者心性之感運、爲發四體分之則其成乎口者曰聲、成乎體者曰爲。魚無聲技、其舌短也。蟲聲不必口。鳥有聲技、而不若獸矣。人以富情意最富聲技、與手足半其技。故謂言動、又謂云爲。聲音者、情意之文章。假舌以成手足之技。在物則各異也。牛技在舌、馬技在肭、象技在鼻、鳥技在脚、魚技在尾、蛇則無手足以伸而行、以卷而技。是以分則隔行與技、合則手舞足蹈、同是歸一技矣。故人以手而執、以足而行、鳥以足而摑、以翅而行。凡諸動守禦之技、雖各異其所出、而多在其首。獨人用手、是無他、由衆生者俯四肢以載身喙嘴進在前、而人者其體立足載身手出技、首退居後也。於是口技文言、肢技巧營爲、故鬱浡之活、運于意爲、混淪之立、見于聲技。

序由

臟腑第一

欲識魚與先讀魚史、亟就魚肆、欲識華與先繙華譜、急趨華圃、素靈者周季之造、五家之巢窟、五行爲崇。人眯條理筋骨臟腑、觀者索諸簡策、弗繹諸形體、唯耳之信焉。目之舍焉。獨新王莽逮捕翟義黨王孫慶、使太醫尙方與巧屠共刳剝之、量度五臟、以竹筳道其脈云。宋崇寧間泗州刑賊於市、郡守李夷行遣醫幷畫工往親決膜摘膏肓、曲折圖之盡得纖悉。楊介校以古書、無少異者、乃作存眞圖。然今不合條理、抱疑者久矣。魚鼈鳥獸獲則剝之、一剝一得、稍知素靈之誕、悉存眞之妄、然而自嘆、我所觀獸也、難以獸說人。既而自悟、獸之與人、耳目鼻舌手足陰乳情慾之感

應意智之運爲己無異焉唯其所異面有長短體有橫竪。以牙爲角以爪爲蹄。神本相長短智愚迭通塞而已。就魚鳥考其所反就諸獸。悉其同異參伍錯綜亦可以知此而會世盛倡驗屍西圖亦行因有獲之乎髣髴西人之學。務驗諸實。加以機巧絲分縷析。殊于漢人之冥搜也。雖然天地之間一半露、則一半沒矣。粲粲開之、則混混含之矣。未得之於條理。不足以慰我心。

西人能剝人。有圖書而傳。爲大有益于世。然自不忍之心觀之。有悶悶者而存漢人之冥搜。則吾惡之。西人之親試、則吾弗及。我遇禽獸魚蟲。剝觀之。足以廣我思。家鼠易得則便于數剝。至決膜道系。莫如大獸條理有難觀于此。而可攻彼以知焉者。譬如觀竹而知木之實。而具橫文。觀介而知佗之內。骨而外肉。又如觀佗魚之俯。知鰈之以左右爲上下。觀佗獸之俯。考人之以上下混前後慮未及此。唯人之務幾乎固陋。若融通之獸之所視聽飮食交字便溺與人奚佗焉以異隔之。堯耳參漏。舜目重瞳。昭烈之手過膝。姜維之膽如斗。歐希範之喉三其道。故我眼未活則分毫析毛。未足以爲明眼。精有徹。雖無照膽鏡亦足。

方位

蓋條理之道。大給小。小資大。資則相應于給、分則此反於彼。一生二類。動植相立。而植者地物而實。自然就養於天地。動者天物而虛、使然就養於天地。以實閉其中、以虛通其中。故動物之體。其氣含神。其物通竅。是其大綱也。故人者一肉團。資諸天地。有氣液骨肉之物。有內外標本之位。標本立于骨之技幹。內外分肉之臟腑。肉分內外。外爲皮、內爲肉。骨分技幹。中爲幹、端爲技。肉在外曰肉、在內曰臟。皮在外曰皮、在內曰腑。氣活于內。氣液以立其營衛。骨立于外。脂髓以運其精力。然而營衛立於本氣。精力活於神氣。其神氣占居

於內、其本氣固守於外、諸動定內外標本之位、而分中端之方、中分左右、端會前後、小物之前後左右、資大物之東西南北、中界背者、自口齶之正中、經尾骶之突、至肛門之上頭、而入內、爲背之中行、腹者自舌本之正中、經膀胱之坳、至肛門之下頭、而入內、爲腹之中行、會左右、而成中位、界左右而分腹背、醫家謂腹背中行爲任督、以屬脈。此界非脈、豈得稱脈哉、姑假任督字、就分曰督中任縫、就統曰任部督部、任部即腹、眞部即背腹背之分漫然、異于中行之截然、任督則生物各有、姑就蛤蜊觀之鈕釦是督、即總督兩片之位、其脣是任即湊合一道之處、唯此橫其物、開見其肉、鳥獸竪其理、閉隱其物、故督開其一至任合其縫、臟依合縫之方、骨倚鈕釦之位、督送其總而開幅、任迎其分而合縫、觀之於獸毛魚鱗、亦昭昭焉、蓋內外之狀、內爲地位、液濁而赤、外爲天位、液清而淡、本末之狀首爲

天位、清而氣爲用、身爲地位、濁而質爲用、腑體本陽、爲容質之陰器、臟體本陰、爲藏氣之陽器、腑包息食、臟活營衞、皮包筋骨、肉活膏血顱脊之幹、統者分背於四肢指爪之標、經脈之系、分者合縫於肌表毛髮之末、臟名取於藏氣、腑名取於納物、人之活立、全成於臟腑、臟腑分內外爲二、臟二腑、內外各剖析疊四爲八、是乃人身之大紀也。約之則歸皮肉。皮容筋骨、以立其體、肉有膏血、以活其性、合皮歸肉、肉與骨偶、爲身以配氣液之生、身生者、人之體也。體之爲軀、以合心性之神、神軀成、人己之天地成焉。軀中氣充液中、骨實肉中、而氣液得骨肉而立、骨肉得氣液而活、骨有標本、肉有內外、外則皮而依骨、本骨架身首、標骨岐手足、內則肉和氣、本氣立營衞神氣運精力、本骨在中而一、虛而畜物、標骨在端而偶、實而入體、皮者在外、抱臟親膏、以在清分、而其色淡、肉者在內、居腑親血、以在濁

四紀

分而其色濃筋維骨、系維臟身首者我大物、擧氣質體之、本神者我一氣擧氣質用之肉潛于腹、則心肺肝腎爲內臟、以取本氣之役、發于面、則耳目鼻舌爲外臟、以遂神氣之用、皮向外展則手足陰乳爲外腑、以奔神氣之命向內卷則咽喉腸膀爲內腑、以遂本氣之用、蓋大物、內外上下之位、東西南北之方、給動則爲內外本末之位前後左右之方、天地者一大全物、內外上下混成、東西南北粲立、衆生者萬小散物、內外本末錯綜、前後左右繚繞大物自成全形、小物分爲偶形、全其形者、己成中位、散其形者分立半天地、精者不待養於外、麁者仰養於他、天者淸境也、地者濁境也、以濁能釀彩聲臭味、彩聲臭味之場、既生有意者不得不開視聽聞味之竅大物、內乘中、外居上、故內外與上下合、小物下履地上戴天、故內外與上下離腹背乃上下之位、皮肉乃內外之分合於天地者、以分於小

腹背

物也由混儀六合之象言之、則上下四方均齊方正而中點盡外、自偏形者言之、錯綜繚繞參差迂邪群動腹背分上下、首尾定前後、前而上者顱也、畜淸物居天位、後而下者肛也容濁物居地位、而上極於頂、下極於足、前起於鼻後極於尾、今指腹背言上下者宜就條理觀之、夫人者重身首成幹、並手足成技、於是其中界則截然、而腹背之界則漫然腹背一皮展于督、縫于任、任督之所始則鼻卻則入頞中、前則入淵中、如人餘皮外垂沒其縫操其聲音以成文章、察之於獸類除其餘皮、缺其脣者居多足以察人有人中之故焉、背者自此過顱脊、前手後足、盡赤肉而止、腹者亘胸腹前手後足窮白肉而止於是身之背者在後肢之背者旋前無佗背者兒在胎之日蹲踞受外之處也魚則無手足任督之中間有爲一條間道者唯萬生中鼈以肉裙嚴腹背之界焉人身內外之分外則皮肉合、

內外

故左右分隊、整齊持衡、內則臟腑分左右爭居、繚繞相處、合天體之常而定、地物之變而換矣。故頭中有腦、如腹中有腸。腸則左右蟠屈、腦則左右為界。包肺之膜亦左右為界。肺腎接外。漸歸整齊。條理之分也。故內而本氣奉營衞、外而神氣役精力、內則臟引蔓、腑通質、以相繚繞、外則皮裏骨筋維肉、以成整齊。是內外之大分也。而身有隔膜以隔天地。隔膜之狀、從豎生觀、如隔上下、從橫生觀、如隔前後。若欲以分內外、則臟腑混處。何以定之。蓋身者腹也。腹者內、而首者外也。自骨而筋骨之所及、皮能包焉。之為外、自臟而經脈之所及、肉能守焉。之為內。臟腑者皮肉之本。膈膜者營衞之分。膜上即衞之府、衞具為天而包地、膜下即營之府、營具成地而奉天。而至天地親密。則合而歸一。是以天氣自肺直充皮表、經受而朝心。地質自肝直出膜外、脈輸至心。肝資地液於脈而營養至天、肺資天氣於已而衞護至地。故營中成內、衞中為外。是以衞府之文章、多成左右整齊、營府之文章、多成前後不同。而臟主於膜上、而咽喉為客、腑主於膜下、而肝腎為客。動與植者、一生而分類。於有意無意溫動冷止。方位之紀。內外本末之所反。植則本著地、末居天、植素其內、而根葉華實盡發外、動則本居天、末著地。動文其外。則根葉華實咸內潛。於是前後左右之方。動含之於根葉華實、而見于本幹、植含之於本幹、而見于根葉華實。植具前後左右之華葉、每歲代謝。非性命所繫者。動沒前後左右之華葉、終身長保。性命於是乎存。前後之於人。以任督為中。背展腹卷之間。為左右。植則為督於葉之中心。卷于動者。舒于植。任位反為左右之緣。首本身標。界于此者頸。植沒其界、動為其界。

動物分頸界、而蚯蚓螺蛤沒其界、植類沒頸界、而萊菔蔓菁露其界。

臟腑

首則天、分部於精麁、身則地、分部於營衞、精部屬背、麁部屬腹、精中則收體畜腦、能閉收彩聲、麁中則噏氣食質、能開取臭味、衞部爲天、營部爲地、衞中則收氣取液、能閉・用精力、營中則受尿受屎、能開放查滓、鼻之與舌偶、在腦髓之外、猶肺之與心偶、在飲食之外、衞部屬天、槖籥以運噓噏、營部屬地、練漉以資飲食而養護之、二道上以鼻口納、不以肮肛出、鼻神舌覺之臟、繫此道、欲識人身、宜先正天地中外合六合之方位於渾儀、悉之則知我迂邪綠戾之方位、方位辨而後形體之綱紀辨焉、夫腑者外也、易其體而陰其用、故其用則接質、外者展以合一身、手足陰乳以接器地配子、內者卷以閉一竅、咽喉腸膀以通息食便溺、臟者內也、陰其體而陽其用、故其用則交氣、外者伸以發神氣、耳目鼻舌以交彩聲臭味、內者屈以有本氣、心肺肝腎以爲根葉華實、腑者包一身者、自卷通一竅、取外

六關

質塡已之地、取臟收之於衣之容纊地、所謂一竅自口達肛、與外皮相連、一條皮囊、緩縮受送、如水蛭之爲勢、其內機關有四、幷出入之關爲六、口者赤肉也、臟體也、外唇爲開闔以爲口實之初門、即第一關、過口則皮爲關、會厭爲隔之爲第二關、古謂之噏門、胃管即咽、貫膈膜以下、蟠爲胃、胃有受瀉之二口、古人謂之脘、受口在左、之爲第三關、謂賁門、下之則胃爲囊盤居瀉口即淸腸之上頭、便穀之分界、上幷受口右所謂下脘爲第四關、謂幽門、從此斜下爲腸、縱橫屈曲、上者淸焉、曰胴、下者濁焉、曰腸、自脾下網衇括之使維不亂、意其淸者猶胃管送物不停、其濁者猶胃囊畜物少止、胴腸相接之機關即是第五關、謂闌門、西人謂盲腸、濁物一過此關、不得再還歸、闌門之名最當、濁腸上繞胃麓後、折就脊繞胃麓者、似假網衇脂膏之力、就脊而下者、似假表氣以助輸送之勢、其末歸肛、肛門

乃第六關。開閉之權歸精力。就脊者曰直腸。與膀胱前後相望。首尾之二門。脣肛也。難經分脣齒於二門。脣曰飛門。齒曰戶門。然脣齒原重門一關。今存飛門偶肛門。飛門係臟。口實則猶在外。過喩門而入內。喩肛掌出納之關鍵。以其近表。精力相及。漸內則精力不及焉。以任天工。腸前別生囊。爲脬。當曲骨中頭。夫咽輸水穀。以混畜胃內。肝脾絪縕。賴肺之摩盪蒸騰。精液爲雲雨。於一身混淪之體。以此而成。化工既施。而雲歸空。雨歸壑。口實同入咽胃。便溺分歸腸脬。其質實赴後門。滂沱之餘。赴前門。觀食實雖赴後門。而其精化游天間。而知氣息雖復鼻。而其液終歸地下矣。咽與胴同受器也。一則直伸。一則曲屈。胃與腸同受器也。一則廣寬。一則狹窄。臟於氣。腑於質。不能獨立。其功水燥相錯。持中之造化成矣。故咽喉者。資養之偶。腸脬者。逶沓之歧。氣質受諸咽喉。而藏營衞。便溺畜諸腸脬。而

筋系

瀉肮肛。是腑之大綱也。

骨者。箇箇皆離。筋以維之。臟者。臠臠各別。系以維之。筋自頂下。左右相分。至四標。織織以成整齊。系自心出。左右相伴。達四標。錯綜以極繚繞。故內體參差。外體整齊。血者。液之溢外者。膜者。筋之入內者。筋能束縛外。膜能包裹內。衇能維絡內。血能滋潤外。內腑一條。由要害。置關。鼻聞之位已過。懸垂爲簧。舌覺之神已盡。會厭爲蓋。簧蓋爲前門之關鍵。肮肛作後門之括開。咽喉。氣質之兩道。咽輸外來之質。於胃。喉送外來之氣。於肺。胃以容麤。其器密。練漉泄其氣。肺以容精。其質疏。疏泄通其氣。何以試其疏密。以管吹之。胃則蓄其氣。以及腸。若蟄龍之起。蜿蜒昂頭。肺則泄其氣。膨膨然充衞中。其精者徹脊中。敷左右上下。窮乎任縫。壓溲壓便焉。蓋動之體。外有筋骨。以其精力。能奉神之使令。腹部筋骨不至。唯

此噓喻得以奔命焉。胸者、衞中之外郭、腹者營中之外郭、胸以容氣、骨堅其外壘、腹以納質、皮輭其外體、而衞中閉氣、而心爲主、營中塡物、而胃爲主、心閉天眞、胃塡地假。一身之氣液、資於天地之水燥者也、鼻喻燥氣、口取水穀、有所絪縕、而我雲雨之用成。於是兩肺自內散氣於衞中、陽臟好開發也、肝脾自外資養於胃中。陰臟好收閉也。何以徵其陰陽。投之於水肝則沈焉、肺則浮焉。胃則倉廩、用倉廩者。其翼也。是以胃積之用、以肝脾成焉。咽喉二管、膜合成一。挾膜見二。其故何。邪。神得天而活于無形、物得地而立于有形。天不得地則不運、地不得天則不持。天地者一陰一陽也。喉導氣於衞中爲天、咽聚質於營中爲地。氣之質有事於膈下、質之氣有事於膈上。氣管開而通、則食管逼而蟄、食管開而通、則氣管逼而蟄。兩管合成一。脬爲溺室、腸爲便室、達精壓麁、飲哺之養、徐推陳腐之長物、混容乎上者、分別于下、而溺道開而通、便道被壓而塞、便道開而通則溺道被壓而塞、兩道代爲去滓之用。

內景錯綜

人身內景、錯綜糾紛、難得要領。蓋臟者欝欝自別物、以脈綴之、腑者綿綿一長條、以皮通之。其曰心肺肝腎、曰咽胃胴腸者、繇其一脈之所繫、一皮之所連而言。若以其糾紛言之。脾不主肝脈、脬不連腸皮、喉與咽同其膜、走佗道、脬與腸偶其用、隔其處、經脈繚繞于表、絪脈蔓延于裏、腎繫系標、男子而睪丸、女子而子宮。何其紛紛然。如市人各自有營、莫知其歸焉。陳一脈之所繫、一皮之所連、反比合之則統領有得、歸二歸一、以觀造化之機巧。

內景大梗

外臟腑則文。文各執其職。外焉而百官職修者。內焉而君相執其權也。是內外之辨也。蓋人身外有首有、以開置百官之地、內有心胃、以置統百官之官府、官府出政令、百官無違。

宮府既立。紛錯得所屬。心得胸而居、以骨爲外屏、而能爲君之宮、胃得腹而居、以皮爲外屏、而能爲相之府。心胃譬之雄雌二禽棲上下之架。禽身具翼趾。心胃亦具翼趾。心形堅垂、其翼則左肺右肺、正抱心、心則閉其內。是以肺虛其內、其趾貫肉至皮、胃形橫承其翼則上肝下脾、斜夾胃、胃則通其內。是以肝實其內。其趾貫膈達表。宮中資外來於傍、府中資外於己、眞假互爲主也。胃趾向上者咽、受其質、向下者腸、漏其質。心趾自右者、脈給其液。自左者、經給其氣。心資天氣於其翼、通其摩盪於膜下、扶胃化。胃送地質於其趾。通其絪縕於膜上、和肺氣。於是心翼者其腑、而其趾者臟也。胃趾者其腑、而其翼者臟也。

古人於臟腑字、未甚分曉。故有九臟十二臟等之目。然容物之一條、藏氣之一系。條理自有其別也。雖然臟腑既分其品、臟虛腑實中亦各以虛實、咽以虛爲用於受水

心胃

穀、胃以實爲用於畜水穀、胴虛以送便溺。腸實以瀉便溺。肝脾者實其氣、化地假之物、兩肺虛其氣、奉天眞之氣。

趾比之於樹則技也。心趾以析、胃趾以偶。經脈、入者資系、出者給系、折以成焉。咽腸、上偶者喉、下偶者脖、偶以成焉。腎者一身之孤臟。男繫授器、女繫受器。授器外露、受器內沒。睾丸下垂、宮耳上起。雌雄相合。其器始全。如此而後條理見焉。大綱立焉。夫心者資始之玄宮。神之所憑。深鎖其門、外氣無入處。穆穆深宮、受氣液之奉、邃然而活。一身之爲形跡者、擧執役以奉之。晝則昭昭、夜則冥冥、出入遊寓於四體。而我不能自知也。此神也混成在胎之日、而粲立出胎之後。夫然後胃能偶心。以地質而居。地球得水而居、天球兼燥而包。於是天眞兼燥於肺、而歸其龕於地、地質資水於胃、而輸其精於天。故神燥別處於上、水穀混處於下。燥入喉、水瀦脖、動之纔生者、爲

天氣地賦、奉精於天眞、而其麁者退爲伍、心者天眞之所憑、位胸之中央、胃者地假之所舍、位腹之中央、天用離質、地用著質、質道一、通竅貫膈膜而下、漸廣爲水穀之壑、胴接胃輸之、腸受胴泄之、腸中穀化爲屎、水化之尿、尿之所瀦則脬、脬畢竟外皮坳陷幽邃谽呀之空洞、雨露滲溼之委、開口再漏、爲一身之尾閭、終與直腸比其事、咽者質道也、以在膈上、常能虛、下膈下則能實、神閉諸玄宮、物通諸胃府、燥噓噏諸鼻竅、水受瀉諸膀胱、於胃則則假物主也、無假物則混淪之體斃、於心則眞氣主也、無眞氣則鬱浡之神熄、是以心活能使其翼摩盪、以能自立、胃物化翼之絪縕、以扶其活、

水燥

蓋據靈臺者神也、以神也而無所把捉、神者與軀對、對以成人者也、故天氣地賦、一歸軀中外來之物、既歸軀中之物、故營衞雖爲界、氣質兩管、相合于上、肮肛二道、相並于下、地賦上貫膈膜、而扶摩盪、天氣下徹膈膜、而助絪縕、於是肺之資天、偶于肝之資地、天眞之神、對地假之物、

一非二則不立、二非一則不成、是以咽赴胃、喉赴肺、兩管同膜、爲衞中之腑、穀歸腸、水歸脬、兩穢相類、爲營中之腑、所偶而不分、觀之於胃、趾經脈自下輸心、心資此氣液而立、心給此氣液而外文、以成偶而成用、觀之於心、趾、心趾資給、而營養衞護調焉、胃下絪脈、胃上經脈質則徹其接、氣則絪縕相貫、經脈資氣液之精於新、壓其故於絪脈、咽喉資息食之麁於新、歸其陳於腸脬、升降成一絪縕、自麁觀之、其連者而連、斷者而斷、自精觀之、焉知黃河一直而流、水南溢於滎矣哉、於是絪脈潛其用、經脈用事於表、蓋水者氣之之質也、燥者質之之氣也、燥者溫而燥、水者冷潤、血性不冷者、由動之生立乎溫、與植之氣活于冷不同、其天地焉、是以氣入衞入營、徹水

喉脬

穀輻輳之處、假營養之奉、質出營出衛融噓噏充塞之處、賁衛護之保。氣質同賁之於溫死獸之肺。容管吹之須臾溫復。溫復可疑。得非假人氣息之溫乎。恐不足爲徵。溫之本。氣管可徵也。於是息亦與食同徹胃中。從絪縕布雲雨於一身。蒸蒸達皮間。乃油然之雲也。眼津口液。皆其餘澤。津津歸谽呀之空洞者。乃是沛然之雨也。直腸雖在竅中。可以努勢役之。則精力可到之地。與膀胱之自外爲洞。其勢相類。

上有喉、氣以無形遊散一身、下有脬受遊散之之水者。故喉脬雖中斷。而其化則相接。故質之於條理。知喉脬之同氣器。水既成質。何以謂之氣。水爲氣之初之質。故未爲其形。未爲其色。地上分水燥。各開己之境。成造化於其中。是以喉脬徵之於魚腹。彼無肺脬。以其在水中。無用於噓噏。故開鼻而開鰓。以出納水。代納氣出水。口換鼻、鰓換肮、鯨魚閉鰓。開噴水孔於背。所以不

賁道

用肺脬也。然則彼用質而不用氣邪。何爲其然。閉鼻者閉氣。咽後隔薄膜。有一空竅。封氣於其中。閉外出之門。可以充鳥獸之膜上。此知胃中之質。雖有潤液。而無肺氣則不化。水不化。水則無用于受水。然則以咽後之空竅。換獸之肺脬。可知也。鳥則徵飲專啄。飲纔足滋嗉中之物。然有鼻已收氣膜下不化溺。則以氣相通於是。魚鳥同闕脬。而魚者前門通水。不用隔膜。鳥者前後通氣。乃用隔膜。魚者閉氣。閉氣之處。即衞中。鳥則通氣。營衞鼻肛同用氣。容管吹肛門。氣直入膨于項頸。此前後互通氣也。前門既氣。後門亦氣。即知到下下化水仍舊氣也。鳥肺大龕。氣直通一身。以吹管弄之翼尾。猶有翥翔之勢。氣息既閉。則無所用膈膜。上下隔氣。則有膈膜之分。以觀水燥之反焉。賁門之上。質道常閉。如蓄質涌溢。則泝至口。病之事也。逼幽門。則變食之

穢。無復反顧之勢。世有病吐不潔之譚。難
信矣。縱有亦萬億之一奇。非所以爲例矣。
質道依險而設關。物來則關門開通。過則
鎖鑰閉秘。胃之瀉口。迺是清腸之上頭。蛔
蟲之巢穴。膽脈自肝中下著之處。屈曲爲
濁腸。終盡于肛。脝本腸之析。與咽喉上下
相比。唯脝形短圓不用數名。而足。腸者窄
長。以煩數名。腸上部不畜質。是以曰清。下
部常停其滓。是以曰濁。雖曰清乎。滓垢比
之於咽。自有天地之別。剝諸獸。未嘗見飲
哺在清中。豈新羞下喉時。乃麁陳過清腸
之頭乎。是以濁腸之於清腸。猶胃之於咽。
古人不別其名。概謂之腸。醫家分之於大
小。西洋分之於原薄。越人亦曰赤腸白腸。
廣腸廻腸直腸。並大腸之別稱也。河子遠
之所度。小腸長二丈一尺。大腸五尺八寸。
云。今爲條理。擇腡字以對腸。腡本俗字。其
實指大腸。今改以腸屬濁。以腡屬清。立其

脘　十二指腸　闌門

義。曰腡。洞也。異于腸之塡塞也。腡腸畢竟
一物。擧此對脝。故通清濁謂之腸。今分曰
腡腸。條理之譚。徵之於物而言。若規規求
諸典故。唯得之於古訓。將失於實。故條理
自有條理之言。弗認殺人之曾參。爲弗殺
人之曾參。脘。古之言經絡者。分上中下命
穴處。逆其意察之。似上下之二脘。以當受
瀉之二口。中脘以當胃之正中。然胃形橫
心下。受口在左向上。瀉口在右向後。而兩
口大概持衡。則宜求之於左右幽門之邊。
幽門本賁門之對名。於穴處則不分左右。
幽門之下。膽著蛔處之地。西人謂之十二
指腸。蓋容指十二之間云。闌門之一關。內
面有辨。能使化物不返。若獸則其形各不
同。鼠頓爲寬腸。如與胃相抗。野猪則自清
漸赴濁。兔出一枝。雉出二枝。其枝頗長。中
盛屎。如一往不可復者。唯天巧有不盡之
妙。必具活轉之機。思之輸送之勢。可略知

也。內臟別體、脈以維之、內腑通體。皮能相續。於是臟系、在膜上前居、在膜下則下後、腑體在膜上後居、在膜下則前蟠。內體、蟠屈繚繞、不定左右。外體左右整齊、不爲蟠繚而蟠屈。則腑形繚繞、則系形臟近表者。系出外者、竟齊左右。肝脾經脈左右反物而合用焉。心形之斜側、肺形之不同襞積。兩腎之異高低、以其猶在內也。

夫艸木者、觀升降於榮枯、鳥獸者觀噓喩於膨脹。動物含神、植物發英。動植本一生。反類成二。故外彼之所內、下此之所上。文彼之所素。輕此之所重。是以植發其文章於外、以冷止含其意。動內植之根實、以溫動用其意。植外動之心肺、成華葉。動內植之根實、成肝腎。導脈觀之。內臟一貫。唯脾系之接稍微。一貫中。心爲華、肺爲葉、肝爲根、腎爲實。植則盡發之於外。代謝不足以輕重其生。艸木之稱子。自資母氣之臍點中析爲兩片、宛如葉。從此

出芽。肝脾一根。根向地而刺、芽望天而抽。根資地滋、以給之於標。神者、資始之眞也。物者。資繼之物也。天地以立焉。噓喩食燥飮哺。食地、動則以植之外者內之。雖內之、亦自外來。故胃剝而攤之、則外也。剝至心坎、則與表斷路。表路隔絕。資始之神、鬱浡而活。故營衛二府、肺資天而繼、肝資地而繼。於是神奉於天氣地體而活。物保於天氣地體而立。保奉則成於營養衛護。營養衛護之府、膈膜隔之。在衛之臟腑者共虛、在營之臟腑者共實。雖不戻於臟、藏氣、腑容物之條理、而在衛中之心、翼趾皆虛。在營中之胃、翼趾皆實。膈膜之所以上下分天地也。既已分天地、衛膜以覆腹。氣質兩管。既入胸中而質管直貫膈膜入腹、氣管則繫肺而終。營中者地府、包而狹、衛中者天府、包而廣矣。質有形體、飮哺之所至易見。氣無形體、噓喩之所及難窺。胃中畜外質、經練漉而充營中、肺表畜外氣、經練漉而充

之眞府中則假于地之物。衞中則資外來之天氣、摩盪以護宮中之神、餘力扶肝脾之營養。營中則資外來之地質、絪縕以化府中之物、餘力助兩肺之衞護。是以其天氣地賦、待練漉奉資始之氣焉。神靈據其宮、以役精力、飲哺在其府、以調營衞。心頭有兩耳、如鳥之戢翼。左者小而下覆、右者大而上仰。左者唯倚側、右者專盡後玄宮之用、專在出系資天地之精而給之於全身。奚系則經脈。經脈各分資給。資者、挽致之於己、給者、推致之於佗。夫背者疊骨而陽氣充焉、腹者聚肉而陰液盈焉。脈資液、經資氣。蓋胃者人之地球。其位當肋骨盡處脊之出筋。自此以上、上而維肩、自此以下、下而走足。脈之自肝者、躡胃而上、蔓延于表、會經之來者。脈之自脾者、緣胃而下、纒繞于裏、伴綱之委者。而其兩脈如斷而枝椏相屬。於是網脈地下屈、而經脈天中伸焉。宛然如樹根貫地、杪向天者也。脈則資於

胃而起於肝焉。而經則艱於察其所資所起也。尋之於人及獸之在胎。胞衣中點之一帶。包經脈兩兩貫臍而入。其脈系一雙。並直屬肝。經系一雙。抱腸入經幹之下頭。此幹也。乃循脊伴脈者也。兒之猶在胎。口鼻閉用。母之養。自臍帶入。既已出胎。此系漸澌。口鼻資乳息。我凝思於此、以獲其說。觀夫臍帶之脈直著肝、而肝脈之根、猶餘蒙茸於著處之下。臍帶之經、迂著經幹、而經幹之根、猶餘蒙茸於著處之外。則其事可比焉。唯以脈根太短、內依地賦、無所容疑。若反之足以知經根之太長、外依天氣。資短給長、與資長給短、復何疑焉。脈之所標、乃經之所本也。推脈觀經、經顚倒本末。然臍經之著本經、其勢分明。爲向心而泝、則經之自後上、與脈之自前上、比焉。於是繹其條貫、以得理析、其大要。咽喉兩管。咽資質於物、直置之於胃之地底、而後脈輸之於心。喉資氣於天、直徹之於骨之天際、而後

經輸之於心。經設根廣。脈爲根狹。天地之分也。蓋人身之表。腠理與外氣遊。化血爲液。而氣之直入者於鼻竅。於是地賦自口入。天氣自鼻入。脈者在內資液之系。從內體之蟠屈、繚繞入心焉。出心則會資經之入心者。而離給經之入顱者。經者在外資精之系。從外體之剖析整齊而入心焉。出心則不顧資經之入心者直入顱中。給經之岐。發耳目鼻舌。給脈之枝。注手足陰乳。經形以其本由外。大抵整齊。脈形以其本由內。過半繚繞。觀彼給脈之不伴給經。資脈之不伴資經。則知肺摩盪天氣。使經資骨精肝絪縕地質。使脈資物精。液者營中之渙。氣者衞表之散。營府無表。表則衞表。是以其境狹焉。衞府在表。表抱營府。是以其境廣焉。境狹則敷根者短。在內則不得不繚繞。境廣則敷根者長。在外則不得不整齊。是以資脈資物精。發其液以入心。出以著資經。而給外臓。資經資骨精。收其氣以入

心。出以離資脈。而給外臟。給脈之枝。挺然抽幹。漸而繁其枝。給經之岐。出心既岐。漸而左右六條。既而禿其標。大者如歸鼻舌。小者中岐之耳目。耳者可導。目者沒腦。腦中再出系。以繫瞳子。腦體雖脆輭。盤旋迂邪。經脈來纏。其活用雖不可得而窮。爲司視聽聞味者夫在茲乎。意自衞中及肌膚之液分。皆肺氣之所充。衞之分也。於是經之蒙茸。蔓延一身。肺之摩盪。散氣於一身。而經能收其散。何以徵之。人之噏而腹張。噓而腹枵。噓噏往來之常也。若將盛努氣。則氣息迸出。而其腹膨膨心收。氣則氣息內歸。而其腹枵然。咳而氣升時。下氣卻漏。觀猶犬被毆擊將死也。噏氣將到任縫。任縫已無受運之力。則入者激。出者駛。人之將死。亦營衞先絕。衞氣猶存者。亦如是。人謂爲入氣既絕。唯有出氣。者察之未審也。方是之時。氣之將入。引四支之末。與噏共內。攣。豈非從息之內入四支之表氣。亦引內哉。

氣液反物。經脈不相通路故截脈插管、向心吹之仰耳起動右坎氣滿而此氣不達左坎、截經插管。向心吹之俯耳起動左坎氣滿而此氣不達右坎。資經給脈傍脊爲幹。順逆相伴。脈地胃而起。上而過膜歸心。出而爲給脈。先纏肺。其枝。初節上面。二節入左右手。本幹向後循脊骨而下。脊骨上頭。小枝入肋。腰骨半邊。分入足。之爲第三節。上之二節亦爲歧者也。脊架一肋。則筋亦架一條。筋骨既架。則經脈之枝亦相從。既言給脈之所之資經之所來可知也。三節之後。別椏與筋相會抵前陰。入手者。自腋下注臑內。生歧散于手指、入足者。自股內注膕中。生歧入足指。資經之本幹。就給脈之前而上。漸入膈中。脈著脊。經離脊而向心。故審其條理。則脈無資於背、經無資於腹。經不至腹、脈不下胃。於是胃下之網脈。補經脈之所不及。唯網不自骨來。而親脂膜。宜乎其柔脆。經脈之不伴於網脈、根與標異其性也、咽腸之不通於喉。脬實與虛異其物也。而兩肺者、摩盪之一偶、其態雖同、而左右隔膜而居。肝脾者。絪緼之一偶其狀雖異。而上下同膜而居。心分經脈於上、胃分網脈於下。網者、爲帶於胃。狀如魚網之委地。脈者爲束於腸。狀如網裳。繫墜蒙茸焉如海蘿著石。蓋腸者皮也。皮又待脈之滋養。理同於臟之繫于肝脈。以受其養焉。其大抵。肝脈領臟脾脈領腑。

肝脾共胃翼。同謂之脈根。以脾脈爲根。猶樹根入地。生枝椏刺地。以肝脈爲根。猶樹幹出地生華葉入天。

脾脈。解體新書。譯曰門脈。其狀曰。其所起所終。其微細而數支。質如血脈。而無瓣支之入幹。與血脈微細者交。所起如枝所終如根。全形恰似樹之倒懸矣。支別細路。入肝而蔓延。支別之大者二。左行屬脾。右行屬腸網。其血帶淡苦汁。蓋其爲起者則所著腸、其爲終者。

摩盪

則所著脾也。然肝脾據胃而起。則上者根下、下者根上。宜哉顚倒本末。似樹之倒懸焉。宜哉肝脾二脈之枝椏。如斷而有聯者焉。言之於樹。則猶根幹各出枝椏。指天指地也。剝狗鼠觀之。脈系到脾而不斷。大幹纏腸胃。而後與經之大系合髖骨。剝猪鹿觀之。如新書所言者。蓋其所因物異。乃如松檜幹根通其理而通其氣。萊菔午蒡幹根分其理、與氣歟。

經脈之標本猶葱之本末。自閉其竅而有水土雨暘之氣於其內。雖資肺肝之養。雖供摩盪絪縕而不設其門矣。故經脈練漉息食之精。以歸於心。自心則資脈比汲水之繘。資經比喩氣之管。液資無骨之處。氣資有骨之處。經脈二者同居不同志。心既具繘管。坎屬左耳者、圓而在中。屬右耳者。如缺月而在右。而精白摩盪絪縕資。」

小獸剝外皮。則薄膜玲瓏。洞見內景。貫管於喉中。噏之、則肺縮而衝中虛。吹之則肺膨而衝中塡。胸下則腹。腹中之薄膜。受吹氣則自脊及傍。向任縫其氣脩脩而起。胸以肋骨之檢束。吹氣壓脹于腹。故任縫者。衝氣之窮處。以爲營氣之所起。靜坐水中。察氣急之處。唯覺在此地。故氣息。噏則自脊中、左右披、而極任縫。噓則自任縫。左右推。而出鼻竅。於是腎肝亦從其摩盪。營衛兩氣以迭推盪。故知奔豘上衝。鬱滯飄盪于氣膜間。胃進營中焉。任縫之左右。腹筋竪立。是皆毒之著處。千貌萬形皆瘕之狀也。摩盪之狀。大獸者厚膜。無由洞見傷膜則氣漏。失摩盪之狀。解屍篇曰。膈膜之原。生第十三第十四椎肉中。上行包羅胃以下諸臟。下至小腹。沒脂肥中。左右隆起如鷹肩。蔂髑骬。入季肋。由是觀之。膈膜亦幾干不太下於肋骨。膨不至腰脊前。則抵曲骨。則氣息之所注。髣髴可識也。

肝脾

肝脾膈胃。榨地賦。肝俯覆胃右上前、脾仰奉胃左下後。脾體粗而近受口、木火烹飪、得鼎之用、肝體密而近瀉口、風水外養、得井之象。脾雖在下、而用事則先、肝雖在上、而用事則後。胃隔兩臟、兩臟分雲外雨降之用、資胃各出脈焉。胃中有水穀、脾聚脂膏、以爲烹飪之化、結網散脈、循腸爲下推之功、肝釀膩液、爲外養之精、資氣起脈、維臟遂上輸之事、其事則別、其功則均。恍見其絪縕。

鹿腹。鬲骱兩邊。肝脾並垂爲對。脾則形大色黲、在左擁前、扁圓而薄、肝則形小色赤、在右擁後、扁圓而厚、而肝運精於上、脈系繫胃之瀉方、脾推麁於下、織網著胃之受方、物類之分。比中有反。羊鹿屬馬隊、猪屬牛隊、猪脾尖長、在胃下、鹿脾扁圓繫胃上。猪脾脆輭而小、腸厚堅而大、絪縕之功似臟讓腑、鹿肝脾厚堅而大、胴腸脆輭而小。絪縕之功似腑讓臟。是條理之態也。今鳥獸比之於餘生、餘生則愈乏于神氣、乏于神氣者、愈長于本氣。今如鳥獸神燼則支體無所用。如龜蛇、解分臟、與腑、腑體則勇壯。不知與鱗類之離水活動速止者爲對歟。

筋系

胎生之初、自母胎雙雙入兒胎者、經脈也。母子分天地、則經脈亦各自爲用。脈者資飲食之精於膽、以爲營養之元、經者資噓噏之精於臍、以爲衛護之極。故臍膽者、營衛之要器。非臟、非腑。古人未識分臟腑、以繫臟系者爲腑。可笑焉。古人好配當曰膽者中正之官。決斷出焉。後世因有膽氣膽略等之語。實之以姜維之膽。然此畢竟剛而不畏懼者、名以膽而已。與肝間之膽何與。內體繚繞、異于外體整齊。是以經脈之繚繞、之表則從其整齊、以聯絡內外。筋系者外物左右整齊。而其維形譬若天下之治。有帝城有藩鎭江河溪谷之委曲山壑丘陵之險夷。其際道路舟梁。以繫

活運

帶之能致渾一筋系蔓延通暢氣血則其形
隨其理觀之於艸木皮理者筋也、衝出水土、
肉理者䘑也。綻生華葉而筋者一膏一血、綴
骨纏皮、系者一氣一液。綴臟纏肉。心具號令
控製之用。以奉其神。故神與臟自古同稱之
心。心者天眞之神明依精液之精英根據此
氣血之華隧氣血之華隧。以奉神靈神靈既
活。經䘑爲無意之用。以用事於營衞。衞護以

息食

天氣求骨精、營養以地質奉內液於是神靈
既運。筋骨奔有意之命。以用事於精力。夫息
食之養人。雖反而比焉。故咽喉氣質合管。及
爲便溺又相並而出。飲食畜胃。精氣自此上
騰、麁質自此下墜。細觀口取地質之精、以瀉
其麁、而推知鼻取天氣之新以噴其故觀食
質化爲氣、而知息氣結爲水焉觀食爲營養
之本、而知息爲衞護之本。觀食質實胃內、充

本根精英

營中、而知息氣充肺表散衞表。艸木鳥獸同
有本根精英盡反其本根精英本者己成之
氣、根者成己之物、己之天地也、精者爲己之
精英者己爲之神乃己之精神也。是以本也
者、狗也則所狗、雞也則所雞之氣、根也者狗
也則所狗雞也則所雞之物混言則其體皆
根、其氣皆本粲言則本發收其精、徹上徹下、
根發收其英開華結子精英者神也、假保奉
於器、本根者物也。見運爲於氣、今導觀其序。
髣髴得本根精英於臟肝資胃而占根於營
中引入衞中而開華葉。屈曲結實於營中觀
之於大物精英則日影、本根則天地天地即
核子也。而循環者。存舊體於見體、鱗比者。換
舊體於見體大物則根外無實、小物則根外
有實植曰苗、動曰子通謂之子以爲將來生
生之原。故腎之用。異于心肺肝脾爲當今之
事與外器相得。而種子結焉。女子爲受器男
子爲授器。受器生兩耳、授器垂睾丸一沒一
露。相待而用成焉。爲換新體。約精歸種子葉
者、爲發收於春秋、肺者用發收於噓噏。華亦

開閉天地

用發收於春秋、心則用發收於晝夜。於是肺葉華心、同有發收之精英、肝根腎實。同收氣物之本根。故葉春而發。會氣之噏則謝。華發其中實結華中。以託後來之根。此間謂核。曰小根。最有埋致。華之外發。結實於其中。玩之艸木。觀之日地。而後知動物惜生護身思偶愛子之情。精華之又給根。生生之具相依。是以根實一物。子母一體。以鱗比換體。其物有剖。」

動植並立天地之間。同生而異類焉。同生、故同事焉、異類、故反物焉。是以共有氣液骨肉而有溫動冷止之反。動植各有根葉華實。植曰根葉華實、動曰心肺肝腎。植發之於外皮而上向、動收之於膜中而下垂。內收外發。雖反意之有無。而同用精華於性情。

兒先託胎於母。母既分身於子。資始成于胎中、資繼成于天地。是以母者已開之天地、而

仙宮

子者猶閉之天地也。根實相分。華葉競成。陸生之艸木根取水地、達之於上、葉取天燥、徹之於下。於是標頭有華。華結實。動則反植、回表爲裏。動植同爲鱗比之種。而母中含結閉之天地。

我之天地。卒功之標。有腎含將來之天地。經脈並繫雙丸。隧道相伴。赴仙宮之窈窕。腎本生生之種子。卒當今之功。創來生之業者。並蔕著子。乃一陰陽。如肺之垂雙葉。條理之道。左右並者、同形用、而同其名。前後並者、類形用而異其名。今肺腎各雙雙。合其用。但肺雖一其摩盪。左片鼓、經右片鼓脈。腎者混具陰陽。一同絪縕。直赴仙宮。繚繞之間。臟用好左右偶、腑用好前後居。肝脾已爲腑之翼。反肺之左右並、以爲前後重。故其名既異。形容亦不同也。蓋艸木之苗。指天之標、剌地之末。成於兩甲析中。發生之感。則成於仙宮窈窕之中。亦見其

髣髴。金丹固非可窺者。若誤墜人間。則化如屎尿。

於是心爲本。資始之元氣存此。含華爲神明之舍。執六馬之轡。以罄以控。肝爲根。營養之所原也。斂租稅以供官用。百官之美宮室之富。於是乎成。肺爲葉。衞護之闕門也。噏以衞內。噓以拂滯。若怠防嚴。異賊襲來。腎爲實。奉持之主也。有守成之任。將以開萬世相傳之業。系執役於無意。筋執役於有意。水穀通暢。命令宣布天下。渾一之功成矣。夫人身之所有。中者其裏虛。端者其裏實。外臟上歧而其物相背。唯舌實爲一。外腑下分而其物相接。唯陰虛爲一。外臟自標以精麤序。外腑自上以親疏序。內臟心居中。而肺系肝腎分。內腑胃居中。而咽喉腸脬分。鼻息口哺愛精新。肮溺肛矢送麤陳。鼻口古人謂之天門地戶。是以肮肛亦謝麤陳之天門地戶也。雖視聽勝于氣。聞味勝于質。而要皆氣之用也。雖握步勝于氣。交字勝于質。而要皆質之用也。耳目二其物。而一視聽之用。同於鼻舌中位之奇偶。爲聞味之用。而其物並而不交。以屬背部。觀自一分二之體。手足二其物。而一握步之用。同於陰乳迫中之奇偶。爲交字之用。而其物並而相交。以屬腹部。觀自二合一之體。夫身中一道通竅。氣質爲一對之用。故上部通竅之用。在息食之通。而外臟之氣用在臭味之覺。下部通竅之用在溺矢之通。而外腑之質用在精乳之感。然而於上。則息食與息味。合其所入。於下則精乳與屎尿。分其所出。雖合而口與舌異其器。雖分而精與尿結其路。內景繚繞之狀。腎肺相並。咽胃胴腸相重。肝脾分其形。在並重之間。心別經脈而循脊者如糾纏。胃受瀉分左右。胴腸屈曲。不擇左右。是所反外形之整齊也。而耳目鼻舌。外交彩聲臭味。心肺肝腎。內用神本天地。手足陰乳。外接配子器地。咽喉腸脬。內用息食便溺。以

生育

神本二氣言之本氣、外衞寒暑燥溼、內營息食使溺、神氣外應彩聲臭味、內感情慾意智、臟多文於內、腑多文於外、腑形大於臟、故臟抱乎腑臟、氣神於腑、故腑役於臟、是以外臟對外腑、精注視聽聞味握步交字、內臟對內腑、天眞之宮、活其神、地假之府、立其物、咽喉腸胃、異名與用、則一中分、耳目手足、一名與用、則二中合、毀卵觀之、轂之將成、先自頭目生、子之將結、感必在尾、始終之事可觀矣、是以動植之道、繼生生於種子、先後換體、其感植在華實、動在牝牡、而鳥淺于感、獸深于感、腎下雙系、下抱肛門、維睾丸、並出溺道上、與溺口合、一闔一闢、一授一受、一氣感應、精化其中、非必有器盛精、時發泄之也、理與目感而淚、鼻悲而涕、身勞而汗、生育之養感而漟漲一也、外肉低胸助之上、向前爲房、漟釀其中、以繼生生、故男子不足于乳形、女子不足于陰形、陰乳者、爲生生之器、闕于鳥而具于獸也、是以鳥淺于氣感則無陰、無陰則無乳、

活存

精者、男子資始爲子、漟者女子資繼成子、我聞解人者之說、首斷之後、剖腹、心之兩耳、其動頗久、又觀解鼈寸寸截斷、心之蹶蹶久而不已、意人之新就死、不啻兩耳、心臟能動焉、諸鳥獸及蛙蛇龜鼈、鮮者其心不與諸臟同、肺機早絕、鰓與心者互鼓不已、故知非肺能鼓天氣以活心、心活能使肺鼓之、是以混淪之立、依息食之假、

生因

兩伯陽橋窻茶話曰、宮形割去勢、勢者睾丸也、非截男根、馬曰騸馬、朝鮮所送養於官廐、比常馬稍大、不能交、由是我知腎之與睾丸相偶、內外絪縕、以成焉、婦人無鬚、牝獸皆有鬚、牝獸不見經、人則見經水、豈繇此乎、並考靈樞及馬玄臺注意、宦者陰器既傷而鬚獨不生、士人之有傷陰器者、其鬚自若、而天宦者、未嘗被傷脫血、然其鬚獨不生、至說其故、未能使人解頤、橫類陰乳

骨肉之分

筋系

隣其居。唯豎類乳在胸上。豎者不能俯而乳之。故然。造物之設亦奇。

筋骨第二

骨肉得處於內外標本以成物。骨分筋骨肉分皮肉外皮盡表、人之天殼也、內皮極內人之地核也。殼包自成之骨、核包假地之物。核上有經脈、殼裏有筋絡。筋者骨之偶、以維骨、以維肉、皮者肉之偶、以包肉、以包骨。骨以頂爲本、以肢爲標。筋者依骨者也。故其流派從骨而成。偶骨肉者爲氣。氣液生爲生、骨肉爲身、行氣液者爲經脈。經探骨間而資天精、脈求肉間而資地賦。筋自頂下而盡地、絡自肢上而至天。而筋與經同膏體、絡與脈同血體。以觀內外之物同性。而相親昵焉。表之膏血、猶裏之氣液。肉潛皮內、皮見肉外。總曰皮肉。分曰臟腑。內有經脈、達活於外、外有筋絡、成立於中。經脈者其別、總謂之系。筋絡者其別、總謂之筋。筋爲內筋、絡爲外筋。絡非經絡之絡。唯假義於纏絡焉。駕脈之血、營養一身之餘、走於絡以束表焉。有骨之精、活立一身之餘、歸經以奉神焉。氣者溫動也、液者膏血也。膏爲陽液、血爲陰液。筋體實內、而膏溢其外、絡體虛內、而血湛其中。膏之融者、在骨爲髓、在皮爲脂。血之渙者、在裏爲血、在表爲液。於是外而筋膏絡血、內而經氣脈液、以蔓延檢束一身。經者膏體、內畜氣、脈者液體、外駕血。氣液相得、而爲無意之用。筋者資膏於外散之脂、絡者資血於外駕之血。膏血相得、而爲有意之用。其相交相持。筋自膏維肉、絡自液維皮。經資髓入心、脈資液接皮。顱腦者、神之外朝。有精而聽萬機之政。筋骨者、神之使令。有力而奔凡百之命。故筋骨之以精力用意。猶臟腑之以營衞用氣。是以內機以橐籥奉所活之神、外機以銜轡用所立之精。雖有肉、而無骨不立。雖有神、而無精不用。氣液之奉神。猶油心之奉火。外體有身首。首以氣領耳

目鼻舌、身以質領手足陰乳、上出下垂、以成本氣之文、其界乃頸也、內體有營衞、衞中主心、營中主胃、各用其翼趾。上虛下實、以成本氣之物也。其界乃膈膜也。而頸分前後、兼上下、膈膜分內外、兼上下、外骨蓄腦髓、內臟有氣液、以筋綴骨、以絡通血、猶以脈綴臟、以經通氣、內體、外通氣質、爲營衞、外體內閉氣質爲精力、絡者血也。脈亦血也。以脈絡同體而知絡血之有資於脈血。筋者膏也、經亦膏也以筋經同體而察經氣之有資於骨精。見其彼此所相應。知筋脈經絡之不他矣。於是觀內者通外、外者閉內焉。使視聽聰明者、腦之清也、使手足輕健者、髓之足也。故毒如胃氣血犯腦髓、則病其聰明輕健焉。於是髓畜骨內、脂敷筋外、液畜脈中、氣充經外、蓋外體者神伸之地。筋骨合精力爲其用焉。合則精力混一、分則筋力骨精。骨者首爲本、脊爲幹、手足爲枝。齒爪爲葉。首骨爲顱、與頷骨相重、載外臟以居軀上、自顱爲枝者手也、在首下而實、軀骨爲脊與曲骨相重、抱內臟以居首下自脊爲枝者足也、在軀下而實。熟玩其骨度標本自具經緯。顱脊爲本骨、手足爲標骨。其立其經。顱兩斷、顱以竪、顧以横肩胛缺盆上横、腰髖曲骨下拄。脊枝下者至短、上者至長。長者爲肋骨。共持其緯而綴之者爲筋。筋包骨包肉者、如薄紙、名謂赫遞筋、綴骨綴肉者似亂麻、名謂亂麻筋、塊骨攣肉、則爲赫遞所包、標骨餘肉、則爲亂麻所維。而其前下者猶類肉與背面維骨者不同焉。

一條之竹。節間能伸、伸則結節能止。止則養伸者、伸力漸乏。結節再養、塊骨者節也

筋相聚標骨者。節間筋能伸。

自頭顱下耳前者。挾喉嚨維柱骨上頭、作同心結之狀、下結于髃骬。自缺盆骨横出者、爲腋下之前梁而著臑。自臑來者、交錯著肋髃骬之兩邊。起兩肋下者、架腹直維曲骨。如浮

梁絶河。醫典謂陽明胃經者當之。如護任縫者也。夫原筋者宜先正筋之條理而後以論其徵。首骨爲蓋。散筋於下體。脊骨爲棟。施筋於宇下。人者合兩宇縫任中。而架腹者柔和肉。其理直也。出脊者剛分肉而其理横也。經筋在胃以上。入肋之外。其大者。見行肋上。歸肩胛骨。與自盆下者相接。細筋在胃以下。入腹之外。其大者。潜入臏前。歸曲骨。與自舌本下者相接。是以筋入四肢之餘。此潜聚陰器。故陰器之謂宗筋。是以病禍于此。則皆有事于筋。故難經見氣絶則舌本與筋引縮爲筋聚於陰器。而絡舌本者。似而非者也。夫大椎。諸筋之原。畜髓多矣。是以爲骨翹然。大椎之上有七節。爲項骨。稍潜入顱中。顱後發大筋二條。架項骨上。以維大椎。大椎下十二節爲肋骨本骨七。不合前者五曰副骨。夾脊隆肉爲脊。醫家爲太陽膀胱經者。當之。隔皮按之。如肩腰一貫。雖然。脊中者。肋既盡。腰骨初拄

之處。胸腹之界。出脊而維肉之筋。上入胛骨下。歸腋下之後。梁以著臑。自臑來者。交錯著肋脊。與前梁幷力而控掣屈伸。與經脈相伴而適。自肩髃出者。別與架腋之筋因緣。而外分焉。外者。歸臂爲赫蹏。内者。架肘爲亂麻結臂。自臂之一雙。上下分焉。下者。分於腕前。維四指之表。上者。轉腕上。維母指之表。此主手之伸焉。自肘之一雙。結臑上下分焉。下者分於腕前。維四指之裏。上者向腕前維母指之裏。此主手之屈焉。脊中以下所出之筋。直下入臏骨内。爲股内之梁。以下股。自股來者。交錯著曲骨。雙筋幷力而控掣屈伸。與經脈相伴而適。自髁跳出者。別與架股之筋因緣。内外分焉。外者。歸臏爲赫蹏。内者。架膕亂麻結䯒。自臏之一雙。前後分焉。後者分於趺上。維四指之表。前者轉趺上。維母指之表。此主足之伸焉。内者。自膕之一雙。前後分焉。前者下踝後。維母指之裏。後者。自踝後前維四指之

精力

裏。此主足之屈焉。而架臑肋之二梁、各往來、雙筋交錯、與跗股架膕交錯之狀似。而架曲骨及股者、爲一繩索之狀。與架臑臂者似。其大抵身首各有腹背。手足亦各有腹背。筋雖主背而其在腹者入手足之腹、維背者亦入手足之背。邐迤屈曲不濫其部分。本骨者、持身者也。虛而容物。標骨者、爲肢者也。實而入物。赫蹏亂麻。唯從標本之骨。筋能維骨、秩然持素、急于精力之用。絡唯維肉、漫然見青。無奔命之用。是以骨能畜精、筋能有力。睚脣之開闔。肮肛之縱括。及耳聽鼻聞手握足步。旋轉之用。莫往不由骨輸精筋有力焉。是以赫蹏纏外之處、髓能爲養、亂麻叢聚之處、精能取力。腋下股内。臑内腓腸皆其處也。交感之器。發生相感。則勃焉起。世唯觀之於此。不察於佗。今此精也。注手使手壯。注足使足堅。注肛門能壓大便。注膀胱能輸小便。可以注腹。可以注頸。有筋之地、莫所不可注。而注則勃勃起焉。若不注之、筋骨雖強、而猶蔓艸纏枯枝。豈獨歸之陰哉。唯其精之不可注。則內臟腑也。然至內腑逼表者、得相及也。夫筋以綴骨之磊磊、則脈以綴臟之巒巒。內外相得。以奉一神。所奉之神。雖合二成一。因生和性。因神成心。則亦觀剖析於其中焉。對燈觀膏之消、勞力觀汗之漏。推之知溫動之資於髓、精力之資於液。內脈一性於絡血、外筋一氣於

絡血

內經。絡者非生血者。但駕脈之血卒功之餘。託絡於此。以絡其皮焉。絡在神用精之地。獨不供奔命之用。以之知經居精閑事之地。以爲奔命之用焉。故血者營養之靈液。筋雖取天成之精而養必資血。相得而後天地和焉。其游溢者歸絡。使肉不柔緩頗類婦胎釀成之經。是以動輙瘀於絡中。今悉血之爲物。則知經之爲物。血在內脈外絡。不受神之使令。精注外筋內經奉神之使令。精常外運、內入則失痕、血常潛藏。表浮則歸淸。若暴發路開。

則事繫神明之安危。可不愼哉。

衇液與絡液形狀相似。是以人多混焉。然衇液者、血之駕者、經氣之偶、主動而盛於內也。絡血者血之老者、筋膏之偶、主靜而盛於標也。駕衇之血營養之餘。以絡爲大壑。壑無尾閭。毒有注則鬱滯涌溢。爲意外之變。卒厥之證。似多屬之焉。但鍼之開出路可以救之焉。郭右陶痧之一症。恐是。

一液之所分。膏而膩于筋與經。血而液干衇與絡。然而精力歸筋骨、營衞歸經衇。筋之爲物。能知勞倦。爲緩急生寒戰咬牙。筋之出骨也。資本於髓。髓充則筋壯。其幹生枝條纖纖下垂。維骨維肉。維處甚窄。觀之於齒之將脫未脫之際也。其下頂亂麻纖垂。近節則合勢緊相冐矣。既而爲赫虒以束肉。欝欝相隔。剝不勞刀刄。故手足肉欝。從赫虒之多少。欝欝相糾。如組條然。至其精者。或在肉中爲理。而其理人目弗及。若欲審察之。則宜檢諸死胎之肌外。求諸剝獸之肉理。蓋諸動中。唯人獨竪立。竪立之狀。由峙上下。而混前後。猶鰈之轉左右而混上下。故含靈之紀。頂爲上。鼻爲前。條理之正也。而人以竪立頂前歸前。頭髮自旋毛四垂。與諸動之羽毛。自鼻後靡異也。髓最畜顱中。是之謂腦。顱中有腦。猶腹中有臟。醫典謂之髓海。道家謂之泥丸宮。

魚子鳥殼獸胎之屬。鼻目頭腦。最爲先成。至手足尾。則最後成者。故人推祖先之始。稱鼻祖。兒初出胎。頭大腹小。手足輭弱。首爲先、身爲後。首有腦、猶身有臟。腦之骨精、成於資始、靈樞經衇亦云。人之始生先成精。精成而腦髓生。臟之液膩。成於資繼。是以眉間鼻頭最爲要害。誤撞著。卒倒絕神異於下身之重傷大疵。猶持其神焉。

脊骨上面有鬣骨。形如人字。跨脊骨上。故我謂之跨脊骨。脊載鬣。鬣跨脊之際。有孔通一條髓系。而脊骨亦能生細筋。爲皮肉經衇之

親睦肋骨下走足之大筋。獸則餘筋分爲尾而盡。船無舵則前不能得所向。向前之轉旋。全在舵焉。魚沒手足而游水。鳥屈脚披翼而御氣。向前轉旋之用。專在尾焉。魚鳥之於尾。其用大也。故鶏雉之類。長尾卻不能御氣。四脚而立者用尾。雙脚而立者去尾。蓋約注尾之精力。歸之於足。以利其用也。人身外臟腑之界。雖以頸分。而筋骨之分。手屬首枝。足屬身枝。故上身有顱。猶下身有脊。下身有足。猶上身有手。頷骨如曲骨。腰髖如肩胛。腋股臂臏。察上身之機關。則知下身之開闔。自有所比焉。觀其所步。則右足前、左足後之時。左手前。右手後。左足前之時亦準之。手背向外。手腹向內。脚背向前。脚腹向後。胛骨離脊。臏骨著脊。兩手其本相隔。其末離合執事。兩足其本相合。其末參爲用。自有所反焉。是以顱有腦。如腹有臟。皮之包骨。如膜之畜液。筋者秩然其理直也。絡者漫然其理斜也。筋骨生歧。

筋餘　骨餘

皮理　肉理

其末至指。其餘未已。突然外露者。獸分首肢。牙角爪蹏。鳥通首肢。觜爪同形。自骨來焉。鬱然外挺者。獸而毛鬚鬣尾。禽而羽毳翮尾。自筋來焉。獸或被髮。禽或垂尾。獸或戴角。禽或持距。禽趾或爲蹼。獸爪或爲蹏。共筋骨發露之文也。夫骨肉者。得膏血而成。膏血者。得骨肉而立。故內豐四脂百骸。依筋著骨。以理運氣。腹則闕骨肉。而皮以護之。外皮則皮。內皮則膜。腹部無骨之分。氣入則膨然而張。猶肺之含氣。任縫一線。胃居髑骬之下。胎著曲骨之上。肉理爲竪。皮理爲橫。橫斜交錯。如見椶櫚皮。腹氣背脊。安則漠無兆朕。病一著難即融。形跡所著。以思平時之跡焉。著營養者易據腹。著衞護者易據背。背則以肩腰爲巢窟。因緣脊筋而張勢。腹則以胸肚爲根據。升降浮梁以爲寇病。情無常。廣索之於四方。肩脊。則有物可徵。腹肚之間。無物之可徵。試使人仰臥。按其曲骨上。使其正擡頭。其道急縮如

絃。細按之。有自氣衝入腹者。有架腰肋者。因緣任縫浮梁者殊多。病著。致拘攣。致築動。此道固有之物。守內乂安。寂沒兆朕。遇喪亂。則依險塞要路。其與病相搏。如糾纏。如組條。如結網。如亂麻。如畫田疇。如撫錯薪。如乘蹊車。如捉游魚。如有蛇蟠。如有株立。或輕如瓢。或堅如石。或整齊。或錯綜。是皮。是肉。是筋。是脈。是癖。是瘕。是水。是瘀。是蛔。是癰。是腸。是妊。就其病識其常。識其常。察其病。觀物之法也。腹貴臍上和柔臍下和剛。有力穩靜也。皮理則皺文易見。肉理則邃乎難見。未見皮肉之理。則不能知氣血脂膜之狀。至輭者氣也。至堅者骨也。氣分溫動。液分膏血。血居肉則赤。出肉則清。著地上天之故也。膏居骨則髓。出骨則脂。入密居疏之別也。骨有髓奉精。肉有血奉神。精英親天。本根親地。人以中和。而膏血融還。於是。資精於骨髓以役身。養神於血肉以活己。脂融皮中。背而肩。腹而肚。爲濃厚。髓融骨中。上而顱。下而脊。爲濃厚。膏融也。與血混居。唯血則液。死則化焉。所以奉神也。脂則膏。死則凝焉。所以立骨也。剝獸觀之。滿顱腦髓。下塡脊骨。遂注散骨表。則膏爲政。裏則液爲政。故無臟無腑。外者資精於骨。內者資精於氣。故腑雖親膏。而內腑則爲水穀所用。臟雖親液。而外臟則爲腦髓所奉。而水穀之液、腦髓之精。相合全。精注手足之裏。則屈。注手足之表。則伸。注肮肛之標。則禁便溺。注肮肛之本。則促便溺。思惟謀慮。運於精之所注。行止語默。成於精之所注。故雖有神靈。不以精力控掣之。則如瞽之欲視。聾之欲聽。眼精之所原。耳聽之所託。鼻聞之所依。舌覺之所辨。舞蹈便溺。皆精之所致。以此推之。知舌根喉嚨之所以具小骨。耳鼻兩竅之所以邃乎依骨。目之所以居骨食髓。與獸類勢尾。或具骨形之故也。血者。人身之陰液。神靈於是立。膏者。人身之陽液。精力於是有。

氣液第三

篇次

軀中分身生。生爲氣液、存則鬱浡而活、亡則倡神而失、身爲骨肉、存則混淪而立、亡則迸神而留骨偶筋骨、肉析皮肉。含靈之文章。舉具皮肉。是以第一篇言臟腑者。標其文章。以立其基。次言筋骨者。示其隱然者。以要其備焉。此言氣液以對二篇。氣液雖混然能得粲然之文章而駕。今讓文章於前篇。特論所駕。

活機

天眞之活機。氣中溫於寒熱、質和液於燥溼。營養衞護。以膺天祉、夫資始天眞。活其主、動其物。物動則氣溫、主活則機變。機變不測。之爲神。爲若斷此機。冷止代而死事成矣。息脈其資者爲天、氣地賦。其門爲鼻口。其後門爲朊肛。其臟爲肺肝。其用爲摩盪絪縕。其系爲經脈。實之者爲氣液。駕之者爲氣血。其所成曰營養衞護。其府爲營中衞中。其外郭爲胸腹。其所給爲水燥心臟閉天眞。活機太壯。雖死末輒輟焉。知活機寓此宮。活機已寓。肺之

理駕

摩盪。肝之絪縕。並爲主人執役。血駕脈而行、神駕經而運。經脈者理也。駕而運者活也。充實無罅隙矣。理。玉石曰理。艸木曰文。鳥獸曰經脈。山曰防。水曰脈。雲雨曰矩。日月曰規。華葉之微。爪髮之末。理到之處。營衞自駕形體以成。理者猶絃。駕理者。猶聲。故水者從脈而敷潤於脈外。山者從防而敷豐於防外。雲雨從直而敷溼於上下。日月從圓而敷明於天地。爰審文章之粲立。察氣血之融盪。以知營衞之體無所遺矣。天眞地假本龕物。龕給親資。二以爲一。神者活之精英。出入無門。駕經役筋力。韓子有言。曰。龍噓氣爲雲。雲固弗靈於龍也。然龍乘此氣。茫洋窮乎玄間。龍之靈。非雲之所能使爲靈也。然龍弗得雲無以神其靈矣也。含靈者動物。溫動以活氣血。氣者

血液

龍也。血者雲也。既已謂氣則血從焉。神駕氣、氣駕經、液駕血。血駕脈。液者氣之之質也。血液乃淸濁之分。及皮則淸而液、居肉則濁而

血眼中之白仁。有絡鬱然。以在清分畜液養明。一且邪寓血。猖獗犯清液絡理血侵。文理鮮紅。歷歷可見也。血液雖由皮肉出入異。其清濁而其實自有別。試受出血於器。移時見之。血自血。液自液。始不相混。骨肉留于冷止。氣液不宿于冷止。於是溫動求諸氣血。無不動者。而動歸息脈。無不溫者。而溫歸營衞。息脈動質。營衞得溫。溫動保氣血。神靈賴奉。若分之。動者神之機。而溫在氣。滋在液。臍者。胞帶之所繫。生機之原。息徹此則徹周身。臓者。地膩之所釀。血液之原。脈本此而施一身。獸雖沒臍痕沒中。不能無之。試使有力者緊抱其腹。氣不得徹臍。噓噏逼迫。病者息不能運腹部。則氣急于心下。或其息以肩。皆由噏者不能徹臍也。怔忡驚悸。惕惕覺乏于中氣者。脈不能輸心也。天地定位。日影代令。植取無意之冷止。動取有意之溫動。天有寒熱。我合寒熱而成中。於溫。地有燥溼。我化燥溼而成

中和

澤於和。乃一身之太平。獲之於資始。竢之於資繼。資始之活機。於肺爲槖籥。於胸以生衞護。於肝爲釜甑。於腹以生營養。繼依資於氣液。氣液之功。成於營衞。譬有二人並立。我以我中。爲中。以佗中爲偏。則佗亦以其中爲中。以我中爲偏。故火不自知其熱。水不自知其寒。動自有動之中和。植自有植之中和。若平觀之。溫之與冷。各居偏。然溫中于動。冷中于植。蠙和于其溼。蜂和于其乾。故種穋適于水之勝。黍稷適于燥之勝。魚鼈適于水之冷。鳥獸適于燥之溫。持中之造化。水燥分境。燥生水生。各和于其所成。是以人適其燥。不適其水。寒熱更旺之境。艸木者直當此焉。鳥獸者。蟄避巢窟。唯求其適焉。故鬱熱雖苦。而泉寒則畏浴。冱寒雖烈。而湯熱則憚盥。指之遇寒而龜也。血之凍也。腕之遇暑而懈也。膏之渙也。此溫鬱則釀熱。達則發寒。故病寒熱往來者。由不能適中之溫也。與病癥者不瀉則秘

燥溼

同趣。寒熱以更旺、當彼當此、水燥以分居、就一離一其事。則水生吞吐于水、燥生噓噏于氣、鳥者以前後通氣微飲而不用脬。魚者。以閉氣不飲水。而不用肺脬。獸類而後息飲具。肺脬足。息飲水燥。扶翼眞假。於是機關滑澤。動作得宜以得燥溼之和。若失此也。弗乾燥則潤溢。熒熒致瘵。水溢於目則淚。於鼻則涕。於口則涎。於耳則聹。於腠則汗。於胃則飲。於肉則膿。於肌則水。燥乾。於目則澀。於鼻則焦。於舌則胎。於耳則鳴。於肌則皺。於胃則渴。於肉則枯。故寒而重綿、非好熱、欲屏寒而適中也、暑而浴泉非愛寒。思消熱而適中也、熱而求汗、豈欲枯燥哉、渴而引飲。焉冀涌溢也。故枯燥、液之盡也、涌溢液之漲也。夫觀于粲粲者、泥于混混、泥于混混者。誤于粲粲。

混成

天地造化。雲行雨施。理路分明。文章粲然。駕之者。而洋洋滾滾以成混。西人之機巧。纖毫弗遺。自膀胱之溺路。至目淚。舌津。乳汁。陰精。歷歷說其道。夫黃赤有線日月駕此光容遍滿。溪澗之衇、水駕而潤達原野、丘陵之防。土駕而豐注汚下。是以經衇筋絡之理。宜悉力而窮。氣血之油然無所弗到。非機巧目力之所能及也。縱曰可及。而神之駕。淚之涕之。手之足之者。孰尋其踪跡。艸木之資臭穢發色香。孰析其混然。示蒙茸於掌。若謂溺飲有所受。有所注而然。如夫雲蒸雨施之造化何。血在肉則濁、出皮則淸。是表天裏地之條理。一一決其所路。泝流溯源。則源盡而涓涓滴滴。星宿海之滾沸。如何著手。汗之自腠理來。毛毛泡泡離明輪巧其技竟窮。是以噓噏槖籥一身、以保其生、滋液雲雨一身。以營其身。

息食

息絕則假物非我、食絕則天眞不住。或疑。噓噏窒塞。死不旋踵。不飲食十數日。猶保其生。如此則其力有不均乎。是亦未思焉爾。飲食囊在胃內。於口則斷。於胃則在。今醫家之用吐瀉。雖好快吐利。令胃中掃盡地膩。理與斷天

養賊　生慣

氣者同、何其力之不均。雖然劔丸洞心者卽死、洞腹者不卽死、亦自有眞假之分。觀諸褻殆不過三。噓噏則重數萬而弗已。思過半矣。難者領焉。絪縕之氣充持中、人噓噏其所充、絪縕不正、則有害衞護、飮哺之膩滿地上、人飮食其所滿。飮哺非宜、則有賊營養。故地假之資繼。噓噏不可擇、飮哺有所天、魚鷹魚狗、資繼於魚、馬牛資繼於艸、蠶資桑、伏翼資蚊。人者、富于智之運爲、物者乏于智之運爲。乏于智之運爲者、有常其所資、富于智之運爲者、嗜好好尙變化千萬、不同于一定其資繼者。故雖飮滋食實充之於腹則同、而其所慣爲懸隔。今之人、水穀鹽蔬禽獸魚介之品、皆待於水火之調熟、不察素絲之於靑黃。以此爲天。雖然、茹毛飮血、今猶見諸蝦夷北邊之俗。則腸胃之生慣、猶天然。今其謂不服水土、未得親於腸胃之謂也。是以外國珍羞、不可施之於此間人口。故今鹽穀必不可欠之物。

營衞　神活

而修道者、屛之弗用。烟酒生慣之間、苦快更別。然則靑牛先生、服芫華至百餘歲、雖非常例、亦不可以必無斷之。故息食者天也。而養與賊亦天也。人而不消息進退、將弗全其天焉。息食成功、在營養衞護。萬物雖其態則變、而其用則比。今一粒之粟、稃以護米、米以養稃。相得則相全、相失則相傷。二之所以成一也。觀諸大物、天轉攝保外、地持營養內。鬱浡以通其二矣。故皮者衞護之外郛、肉者營養之本原。營衞以全我天地。夫身生之分、身者、粲然立其文章、生者混然駕其文章。營衞混成、神・活其中。

氣息

氣息者活之所存、貴其流利。氣息流利之活、起則急促、寢則緩長、是其常也。爲咳爲嘔、爲欠、爲噎、爲嚏、爲噦、皆變其常、而見窒滯蹶躓之狀也。夫人寐足則覺。覺則神氣用事。神氣運爲、則本氣執役。加之慍憤激怒、疾走勞動、則其氣愈急也。意迚漸殺、則

鼾

欠嚏

本氣代爲政。本氣爲政。則意連復休。於是寐則氣息緩長。意運則精擧。筋骨肌肉之重。精能擧之。是以道路豁開。氣息快通。反之則擧者重。通者不快。是以氣息犯重衝窒。噓噏緩長。犯衝愈艱。則鼻孔鼓顙。忽然爲鼾。是以鼾者熟睡之狀。痱之爲鼾。雖由病成。而其理則一也。欠與嚏者。共滯于內者。去其滯而得快也。蓋噓噏之態。噓者故氣。而噏者新氣也。是以故氣有滯。將去之。則勢不得不大迎其來氣。故其去故氣有假外援。外援大來。內滯大去。是以欠嚏之出。先大噏外氣。而其別。欠去下體之滯。嚏去上體之滯。風寒之輕感。先入鼻而徹顱注脊。及衞中至營中。故邪擁鼻竅。其氣閉焉。迎外氣而逐其滯。嚏之狀也。鼻氣有閉。不辨香臭。與目盲不辨明暗一也。上體者皆氣器。氣器惡質。條理之道也。是以有埃入目則痛。有物入耳則苦。食觸氣管則嗆。

欠屁

嘔噎

噫

物觸鼻竅則嚏。鼻者天門。氣之道路。是以日光射目之不快。其鬱伸於鼻而嚏。意有闌。體有倦則其滯欲伸。滯氣不能自去。亦迎外氣而逐滯。意闌則欠。體倦則伸。闌倦并促。則欠伸兼發。腹中以胃分上下。胃上之滯、以欠而伸、胃下之滯。以氣而達。地者噏質者也。噏質者能噴氣焉。胃者我之地。噏質噴氣。噴者與噓者不同焉。胃實之爲氣液者。不能化則發而噴。於是上滯迎外氣而伸、下體爲內質壓而達。是二者其滯輕矣。是以皆得其達則快。嘔者有事於胃實也。胃者容假質以爲養己之實。肝脾之氤氳消化胃實。消化有病。或病于升。或病于降。降病二、瀉也、秘也、外病二。嘔也。惡食也。噎之於嘔。其證則異也。其狀則不佗焉。消化既病。瀉口不行。轉輸之令則胃實無所歸。是以此證多任縫爲急絃之狀。噫者嘔之類。奔豚將定之時。噴氣連發。乃噫之

狀也。胃實之噴氣、如酒釀之涌氣。胃實有壓激排而上。是以食鬱之噫、則帶饐餲之氣。奔豚之噫。則無饐餲之氣。嘔者專氣而上、吐者牽物而上。呟者氣道之窒滯、帶物則痰、嘔者質道之戾逆帶物則胃實、咳憂憂于喉間者。粘膩聚于此也。粘脆則會厭能截之。粘痼則會厭不能截。嚱者營中之故氣。欲達噴於其外。是以噓噏流利之中。別突然躍出。當咽喉同膜之地、與氣息流利、相爭而躓。猶姦人欲唐突而出、被室人怪有事于其戶焉。由一時之閉塞者、得其達則已。成于營氣與衞氣否者危焉。

神本二氣

身淫熱

贅語三

身生帙上之末

日本　鎮西　三浦晉　安貞　著

神舍第四

孔子曰。操則存。舍則亡。出入無時。莫知其鄉。惟心之謂與。謹按。動之神曰心。舍之之臟亦曰心。又曰方寸。曰神舍。曰靈臺。而以心探心。未得其所住。禪家號爲無位眞人。然而此物不能知水穀之轉輸。息脈之鼓動。而能役視聽舞蹈者。於是觀神本二氣。互相給資爲其用。何則外者神氣用事之地、而內者本氣用事之地也。本氣旺則能奉神氣、神氣旺則能用本氣。利泰西以動覺屬頭腦。其說載物理小識曰。人身淫熱而已。熱恒消淫。無以資養則膚焦而身燬矣。故血者資養之料也。血以行脈。脈有總曰絡。絡自肝出者二。一上一下。各漸分小脈。至細微。凡內而臟腑。外而膚肉。

動覺之氣

無不貫串莫定其數。脈之狀似機。其順者因血勢而利導之。斜者留血毋退。横者送血使進也。脈之力。又能存血。不令敗壞。血合于痰。乃克順流。合于膽。乃免凝凍。合于體性之氣。乃啓厥竅導之道。無閉塞也。從心出者亦有二大絡。一上一下。分細周身。悉與肝絡同。所不同者。彼行血存血。此專導引熱勢及生養氣之路耳。心以噓噏。進新氣。退舊氣。直合周身之脈。與之應。少間不應。輒生寒熱諸症。醫者必從三部躍動之勢。揣知病源。蓋以此也。

按太西之意。其曰痰者。液也。曰溼者。血也。曰熱者。經中之氣也。曰絡者。條理所謂經脈之二系也。經經爲從心出。脈爲從肝出。彼以依肝系者爲溼。以在心系者爲熱。經脈本一。正一變。資給相反。而謂心絡。分細周身。悉與肝絡周者。大同于條理。

腦散動覺之氣。厥用在筋。第腦距身遠。不及引筋以達百肢。復得頸節脊髓。連腦爲一。因

三貴

心腦肝

偏及焉。腦之皮。分內外層。內柔而外堅。既以保存身氣。又以肇始諸筋。筋自腦出者六偶。獨一偶踰頸至胸下。垂胃口之前。餘悉存頂內。導氣于五官。或令之動。或令之覺。又從脊髓出筋三十偶。各有細脈旁分。無膚不及。其與膚接處。稍變似膚。始緣以引氣入膚。充滿遍身。無所弗達矣。

按其意謂。頭中畜腦。腦者藏能動能覺之靈。其靈之用。注筋以達表體。腦中動覺筋骨奔其命。是言耳目手足在表者。用神氣之由也。

筋之體。瓤其裏。皮其表。類于腦。以爲腦與周身連結之要約。即心與肝所發之脈絡。亦肖其體。因以傳本體之情于周身。蓋心腦與肝三者。體有定限。必藉筋脈之勢。乃克與身相維相貫以彈其職。不則七尺之軀。彼三者何由營之衞之使生養動覺。各效靈哉。

按太西之說。比之於古醫典則稍善。以心

腦肝爲貴者。自腦出筋。自肝出脈。自心出經。以盡周身之故也。然不知條理。從見數之。故觀出蔓於周身者爲三。其曰從心肝出淫熱之絡者。臟中氣液之偶系而外則有筋絡二條。以膏維骨。以血纏皮。以偶於內之經脈。氣液爲營衞。筋骨爲精力覺動則占居於靈臺。發其明於外。猶著油心者。未覺明。離油心火始發明也。於是內臟腑任本氣之用事。外臟腑任神氣之用事。而書。身內三貴之論曰。熱以爲生。血以爲養。氣以爲動覺。其在身內。心肝腦爲貴。而除待命焉。血所由成。必賴食。化食先歷齒刀次歷胃釜。而粗細悉歸大絡矣。細者可以升至肝腦。成血。粗者爲滓。于此之際。存細分粗者脾。包收諸物害身之苦者膽。髣髴可聞矣。粗細則精麁之謂也。至曰吸藏末化者腎。脾也。膽也。腎也。雖皆成血之器。然不如肝獨變結之。更生體性之氣。故肝貴

血之生處

也。心則成內熱與生養之氣。腦生細微動覺之氣。故並貴也。則大誤于腎膽脾。其曰體性之氣。曰生養之氣者。曰肝以竅體內收半變之糧。漸從本力全變爲血。而血之精分。更變爲血露。所謂體性之氣也。此氣最細。能通百脈。啓百竅。引血周行遍體。又本血一分。由大絡入心。先入右竅。次移左竅。漸入細微。半變爲露。所謂生養之氣也。是氣能引細血周身。以存原熱。又此露一二分。從大絡升入腦中。又變而愈細愈精。以爲動覺之氣。乃令五官四體動覺得其分矣。其謂露者。終謂之氣。則是言肝脈大絡之血。其精遂爲氣。然猶自屬朦朧。

方以智曰。人之智愚。係腦之淸濁。古語云。沐則心復。心復則圖反。以此推之。蓋其有故。是以動覺而言。讀近譯解體新書。以頭爲神舍。曰。頭者圓而居一身之上。意識府也。以心爲統血之臟。曰。心者主運行血也。血者其原奇

縷之成者也。奇縷化血運行而歸心之右方。其血上行而轉入兩肺。其血又下心之左方。再上行。而入動脈大幹。届其支別微細之所。周流一身。而無不届。其血所届與血脈合。經其支別微細之所會。血脈大幹更而又下心之右方。如循環無端矣。心縮則血在心之耳。此時心瓣閉而脈瓣開。血入動脈大幹。心脹則脈瓣閉而心瓣開。是時其耳所受之血。所貯之液。共納心矣。動脈起心之左方。主受血于心而傳支別細路。以養一身焉。血脈輭而無動。自一身動脈盡處起。所起微細能交動脈微細者。而受其血也。所終者大幹大會其血。送入心之右方。蓋動脈者順行。血脈者逆行。主受血於其絡脈微細之所。會其大幹。以納之於心右方。我探體中。得經脈。索於經脈。得氣液。探肌肉。得血液。氣液之液。血液之液。同言之液。一則反氣知其主。一則反血知其主。反經氣者。脈中之液。乃血之駕周流一身

腦

者。反血者皮表之液。對沈裏色濃。言浮表色淡。以飲食之液與噓噏之氣配。則其液乃陰也。以清于皮之液。與沈于肉之血配。則其液乃陽也。條理之道。或粲然析之於毫髮。或混然合之於宇宙。故氣者無形體。合有形體之物而混成。是以其溫燥之活不可繹。唯觀清濁之血液。管噓噏獸肺須臾而溫復。知脈之溫動。自經氣來。液性潤濁。因是知經氣之清燥。以溫動合血液。肌液肉血活中見其分。血死吐液。死中見其分。死則溫動兼血液而失。以見其混成。是以氣駕經。血駕脈。混淪之體立焉。而今瑣瑣。空推其原。曰血生於心。曰生於肝。曰生於奇縷。噫人縱有機巧。不能玉其肌肉。胡玲瓏洞觀其內景焉。於是血之生。飲食氣之資噓噏。無復佗矣。其謂腦。曰動覺之氣。指顱爲意識之府。皆猶言神舍。和漢梵歸之於胸中。然黃庭經。曰腦神精根字泥丸。曰一面之神宗泥丸。則道家既爲之兆。以我心。

尋其所在、終弗能窮之。亦奇也。以我所見言之。神者出令之主、精者奔命之臣也。水穀之轉輸、息脈之鼓動、其在內者、心不能使令之。耳目之視聽、手足之舞蹈、其在外者、從心之所欲焉。動物之在胎。頭頸漸大。身形猶小。由是觀之。神舍如在頭。點燭。製簣。作菽乳。造藍靛。各有根據。而精華上浮。而癲也。癇也。悸也。思也。懊也。魘也。譫也。皆賊犯靈臺之狀。苟知此狀。則知神明被幽閉之地。豈不與火之據油。心放光耀於表類哉。彼此有根據。精英發外。心顱者物也。神本者氣也。神固無形。根有所據。而神有所及。收之藏無何有。放之充六合。以氣之非物也。然則方寸之靈臺。神之所立。而外體則其遊戲之場也。素問亦謂精明之府。故心臟則經脈之所資給。不復妨于神之所據也。今試之。視聽聞味之用。全在顱。而手足陰乳又受視聽聞味之役。以首爲意識之府。亦似矣。然其思未也。蓋心者得天眞。其

表裏之稱

爲氣最精。頭顱之文。耳目鼻舌。各各開門。通各各之氣。心者深閉其宮。其赴視聽聞味。握步交字。門戶不隔。出入自在。神爲妙運。不眞玄宮靈臺哉。此間自古以面稱表。以心稱裏。表裏蓋就隱見而言。於是觀給者能體。資者能用。運營雖在裏。而運養全在表。胃府之佗物。以維心坎之活。氣血運神。骨髓畜精。精華之充外。本根培中也。筋能檢束。系能開路。而心不居號令控掣之要路。何以使四肢百骸奔命焉。由是觀之。首則在上而臨下。心則在中而用外。心則營意。首則用意。自有出令奔命之別。資繼之氣。助營衛。資始之氣。運情智。此之謂天眞。天眞達宇內。藩籬爲用。故心者神明之本府。首者神明之外廳。就隱見而立表裏之目。命名之意深矣。

宮室牆壁。與馬杖屨。既供而主人徜徉於其中。然不可以宮室牆壁與馬杖屨認主人。主人則神明。天眞之精華。今求之於靈

給資

臺。求之於泥丸。支離尋於肝魂脾意腎志膽謀。猶求主人於宮室輿馬。又求於牆壁杖屨。可笑矣。

左右第五

陽縕陰絪、大給小資。天地者大也、萬物者小也。剖析則大散小、對待則一偶一。是以天地覆載。水火絪縕以化動之、與植。植則無意、動則有意。蓋物之資于給。資則應于給者。雖應而麁小反精。大達反則智開、執反則目眯。姑擧一二言之。大物、本一止一行、止也質乘中、行也氣循外。小物亦一止一行、止也身居宅行也足蹈地。一氣本一絪一縕。縕也陽感陰。絪也陰應陽。小物亦一絪一縕。縕也牡感牝。絪也牝應牡。繹之於洪曠杪忽、無所不有焉。

植者止物。以著地爲居。以榮時發枯時收。爲行。孤體無雌雄。以華而感、以實而應。

此故內外上下大物之位。而我亦得而位之。得之於我。則內外者、皮肉之分、上下者腹背

竝重　左右

之位。人有前後左右。猶地有東西南北。衡從之所以分也。是以人之體不竝則重、不重則竝。重者下相對、竝者衡從相對。左右衡也、前後從也。內虛居中而合二、竝者內實居端而分一。分一則虛之形、以此爲實。合二則實之形。以此爲虛。分一之道、以左右竝者、形同用同、名亦同矣。耳目手足腎肺皆然。是左右之所以應南北也。以前後竝者形似用類名相屬矣。腹背咽喉腸脬胱肛皆然。是前後之所以應東西也。世之言陰陽於左右者、皆陽左陰右。是蓋由樞紐懸北極。午日中南天。其設尊者之居、負北而面南焉。己負北而面南焉。左爲東右爲西。日東出西入。以東爲陽、以西爲陰。左陽右陰之說之所由起也。蓋人見半天地而不見全天地。知身有前後左右。而不知天以規矩。以地在天中。自地心而觀之。莫所不外。莫所不上。矩則南北定、規則東西轉。人立地上。以半天地爲全天地。從其見界。

定四方焉。是雖能正見界之條理、忘規矩之眞久矣。人身有中界。以分左右。同于地之中線。以分南北。地體南北同。用彼寒則此暑。彼動則此止。人身左右同形。左持則右運。右行則左止。地南北同。而有迭互之序。人左右同。而有迭互之用。地之南北。可以中線分。而人之左右。可以中界分。人唯立半天地。故以日自東出。爲陽之方。以向西沒。爲陰之方。雖然。正之於條理。則日之陽。自地陰發。轉之陰。自天陽達。以天氣陽。西行爲陽。以地物陰。東行爲陰。今十字衡從。陽東陰西。由將迎日立之。其事固當然。其意則弗同。從條理言之。其東之爲陽者。以漸于西也。西之爲陰者。以漸于東也。夫人之生。裏在前。表在後。表固陽而裏固陰也。而前陽而後陰。則若可轉裏爲陽。轉表爲陰。何哉。蓋動物皆横生。唯人能爲竪從。横生觀之。裏則向下。表則向上。於是尾爲後。首爲前。人則不横而立。不伏而臥。鳥獸之體。

伏則前後左右上下正矣。我獨變其所立。猶鰈之以側換伏。而以左右混腹背。今人以鰈側爲變。不以人立爲變者。由所慣爲其常也。條理之道。以多爲正。以寡爲變。不私於人而矯條理。

素問曰。言人之陰陽。則外爲陽。内爲陰。言人身之陰陽。背爲陽。腹爲陰。言臟腑之陰陽。則臟爲陰。腑爲陽。於言臟腑之陰陽。則未得焉。於言内外腹背。則此言不可陽也。

或曰。南面而立。則東西南可見。而北獨不可見。取之一身。則左右前可見。而獨不可見。於是背爲陰腹爲陽者。當是亦自以南面爲正成也。蝙蝠常好倒懸。如自蝙蝠觀之。則物皆爲倒狀。比目左右腹背。如自比目觀之。則以物爲腹背左右。夫人居人之境。以人爲正。以萬物爲皆受偏氣而生。故立準於萬中之一。欲以其一例其萬。然天地之生物也。不必私人。鳥獸之分。四部

八隊。豎部。人與寓二隊。寓隊則被毛垂尾。雖立亦横走。至人隊始能立焉。故八隊之内。人居其一。觀其七隊之形。知我獨變其狀而立。自諸獸至鳥魚蟹龜鼈蛇之類。皆爲横形。故我斷以横形爲正。以豎形爲人之所私。諸生任督爲界。前頭起鼻。後終肛門。於是諸生耳目鼻舌在首。而鼻舌最在前頭。屬任部。耳目雖在前。而追屬督部。猶手足陰乳在身。陰乳著任部。手足屬督部。然而彩聲臭味氣之用。皆屬首。配子器地。質之用。皆屬身。蓋人自開己境。自正爲天寵。我私我。以前後左右。合東西南北。是以。後人有背爲陰。腹爲陽之疑。然解諸獸窺肺狀。如無前後之別。含煙吹肺管。煙氣蒸蒸於後面。而前面尤稀疏。陽氣之親背面。瞭然可見矣。唯豎立正横行偏之見。痼於人萬國一同。則我所言。弗遽信於人。雖然達觀天地者。宜先去此膠泥一一之分。偏偏合全。自全者而觀之正又合偏近言之。如男與女。如夏與冬。如夜與晝。如聖與愚。故天之散萬物。偏偏合而全焉。人長于神氣。物長于本氣。物偏于横。人偏于豎。鳥飛魚潛。分則走偏。故正者偏之對。全者偏之合。就人言之。不寛。不猛。不欹。不傾。就天地言之。不動不靜。不天不地。天地間。豈有如此者哉。

動植本麁小之陰物。以其陰也好向陽。日者地陽之宗。而爲天陽之陰。以地陽合天陰。陰猶陽。陽猶陰。故日而向西朝宗天陽也。動植同好向陽。猶日朝宗天陽矣。故尊者南面。卑者北向。古之制也。若應於天地。前西者之來。後東者之往。則右應於南。左應於北。故日自東漸而向東者艱。人向前歩。而卻後者艱。其已分也則各方位各自成焉。小本資于大則方位彼此相應。故南面之方位。以人定之。非就條理言者。據南海寄歸傳。五天之俗。名

東方爲前。南爲右。似朝於朝日之義。於是知。舍、條理而斷諸人。斷出胸臆。彼此弗同。南前東左。可施諸漢人。而不可推于梵地。人好推在我者於天。故象前後左右。定四方。取頭腳立上下。以六合之。以爲盡天地焉。是不知全天之數者之爲也。且夫地之南北相同。而人之左不及右者。何邪。蓋我以半天地。爲全天地。又分中線。各居兩邊。故北人、偏身於赤道之北、以偏北、爲其正中、南人偏身於赤道之南、以偏南、爲其正中。今以北人執事。右先左承。右運左持。安知南人執事不反之哉。然吾徒北產。未及知南廣。探以徵於天地者。有未足焉。且右陽左陰之義。外形已具。內體繚繞之分。則自有參差者而存。膈者衞中、氣道本陽近腹、經系亦陽居左、腹者營中。食腑本陰近背。脈系亦陰蔓右。是繚繞中又以上下爲對歟。古人不知條理之所在。推轍於軌外。造天不足西北。地不滿東南之妄語。說人之左

內體左右

右。適足以噴飯。而人生之繁。便于左手者。左右偕便者亦有之。猶有草木或榮于秋冬。或榮于秋冬之交者。乃一一之所以無窮也。蓋人身之外貌。能同左右。而內體則異此。粗舉而言之。鼻竅一雙。氣息更路乎一孔。乳房兩垂。虛里之動。獨屬左方。心頭之兩系。左系則經、向外臟、右系則脈、維內臟。左右之肺、雖摩盪則同、而左鼓經、右鼓脈、右肝左脾。雖絪縕則合而上推精。下壓瓮。心能左歛。胃能右瀉。於是腸之屈曲。左右不能同焉。蓋同外貌者、全于己之相、在筋骨、異內體者。居隻之偏。在臟腑。

鼻舌第六

混然成體者、一生一身、各分陰陽、二生二身、陰陽各分、而成八生八身、粲然成體者。一臟一腑。各分內外。二臟二腑。內外各分。而成八臟八腑。八生者、營衞息脈、血液脂髓、八身者皮肉臟腑。筋絡齒骨。八臟者、耳目鼻舌、心肺

肝腎、八腑者、咽胃胴腸。手足陰乳。內臟者、一脈之所繫、內腑者、一皮之所連。蓋臟腑之體外臟、則其交精者、在顱中而分左右、交龕者。在前面而緣中竅、外腑、則其接疏者、自督位分而居偏位、接親者、從任位而合中位、而鼻歧舌合、乳歧陰合。如內者、腑形塊然、臟形歧然、數其數、則脈繫心肺肝腎、皮連咽胃胴腸。而其成體、則與外體異也。內體之所成、錯綜而立。蓋外體、則界身首分臟腑、內體、則界胸腹偶翼趾、胸爲衞中氣之分也、咽喉與心肺相居、腹爲營中質之分也。腸胃與肝腎相居。心胃者奇體、而兩肺肝脾者偶形。兩肺爲心翼、肝脾爲胃翼。經脈蔓延以爲心趾、隔地偶網脈、咽腸伸幹以爲胃趾。分器合喉脝。然後心胃各具翼趾、以全其用焉。蓋人身一肉團。中通一竅。通竅一對、本竅洞然不隔。側者上下有竅。中則斷焉。似並立無節有節之雙管。無節之管、受物於口、其滓以後門出。有節之管、受氣於鼻。結露自前門滴。質之通無節之管、其氣游騰于上、如雲霧之升。氣之入有節之管、其質結注于下、如雨露之降。通管、上頭爲口、下頭爲肛。塞管、上頭爲鼻、下頭爲朊。息食者資繼之不可須臾無者。我天地之所以立也。而有意之文章繫此道者。有辨臭者有覺味者。有爲授受者。辨臭者、覺之神也。其用在氣、而通息者、其用在通虛也。辨味者、覺之神也。其用在質、而通食者、其用在塞虛也。通噓噏者、鼻竅之用也。辨香臭者、鼻覺之神也。顱中畜腦爲清靜之府、鼻竅隱然通顱中。有犯其中者、則必逐之。嚏者逐其氣。涕者逐其質。衂者逐腦外之驕血。最通眼室。故目迎日光、則嚔。稭鍼鼻中、則漏目熱。上邊有鼓氣之關、能辨香臭、鼓鼾聲靈樞指此地曰頏顙。

授受之器。男曰勢、女曰宮。男繫睪丸、女著宮耳。其系原出于腎。而女則潛其形、男則露其

形。而授受之道終合肮。肮本肛之偶名。肛自膓來、肮自脬來。査滓之後門也。精道則雙系、出溺道上、溺道則一條。在精道下。就精道曰陰、陰以偶乳、就溺道曰肮。肮以偶肛。於是肮肛與鼻口爲氣質二管出入之對門。而鼻舌者與耳目爲交氣之物焉。交道繋前門以牝牡爲對者也。雖然其體既別。其用自殊。唯世無講條理者觀結者則以結一之觀離者則以離分之。不知剖析之數。從見數之唯使辨雄者勝焉。

不辨大體。則由離著而迷條理焉。口之達肛。鼻之達肮一肉團中。一對通竅也。其用在通氣質焉。而鼻舌者外臟而著上竅。陰乳者外腑而一著一離於下竅。觀下體之一著一離。而知上體之雙著。亦與離著同。而臟腑與通竅元別焉

因顧念往時。少壯之時。知識蒙昧百事總疑。萬卷同窺簽。身無辨物之精。依樣之胡盧。亦弗成。如醉如睡。憒憒幾日。覺醒纔解。日向崦嵫結猶深。而黼已禿矣。金聲雖自我。玉振竢之於後進。諸家固不知條理。就中冥搜杜撰。醫卜爲甚也。今考醫家數千載。傳以爲成式者。本經十二奇經。八除任督之外。最爲怪亂如臟腑相配則猶在腹爲鄰。如經配陰陽。何又遠焉。如曰經曰脈。既獲其名。未知其物矣。膽繋臟系。而取屬腑。脾在胃下。擧以措上。肝居右移以措左。肝脾爲偶。分脾合胃。取膽配肝。至說造化。歸之於五行。五行獨二其火。曰君火。曰相火。君火者想像神靈也。相火者見我分取植物之溫蘊則釀熱者而言。或歸腎之右片。或歸包絡。或歸肝木。或歸三焦。包絡者。脂膜之包絡物者。包絡衛中。包絡營中。包絡咽喉。包絡心臟。正中一條。亦竪相隔左右。腎一雙丸子。越人以來。左爲腎。右爲命門。命門則爲男子所藏精。女子所繋胞。眼裏認華。醉中譚夢。讕讕然未辨喻與譫也。命門之說。

張介賓類經附翼意謂内經所言之命門則非腦心則十四椎中也。未有言及右腎者。獨黄庭經曰。上有黄庭下有關元。後有幽闕前有命門。又曰。丹田之中精氣微。玉房之中神門戸。梁丘子註曰。男以藏精女以約血元陽子命門者下丹田精氣出飛之處也。即男女交會之際。男施由此門而出。女攝由此門而入。於是腎命門爲前後之對名焉。孫一奎赤水玄珠。則曰。二五之精。妙合而凝。男女未分。先生二腎如菓實出土時兩瓣分開而中間所生之根蔕。内含一點眞氣以爲生生不息之機。近檢正字通其說最詳。曰。方書。曰。父母構精未有形象先結河車。中間透起一莖。如蓮蘂初生乃臍蔕也。蘂中一點爲生身之原。即命門也。自此天一生水先結兩腎。命處乎中。腎左右開闔。如門中棖闑。故曰命門。蓋一陽處二陰之間。所以位乎北成坎也。如此則命門可以屬經之大幹。亦一說也。本命門腧在十四椎節下而言。雖如愈越人之支離而於屬冥搜則一也。腸。於腹爲最長。隨處變形。形變則用亦轉矣。雖形用有曲折於歸用于輸査與膀胱同。蓋腸之曲遠。自幽門邐迤至肛門。灘峽湖潭。命名多矣。雖多而約之。清濁合歸。腸膀胱脬之一名。畢竟表之一空洞。直腸者。腸赴外之餘勢。近表則筋力可到。努勢可用。長本短之偶。理與脬同。於是肛可以比言。脬短腸長。雖名有多少。那妨相偶焉。故以體分之。則腸也。脬也。肮肛屬之。以用分之。則腸也肛也。脬肮屬之。蓋以脬者以盛臭穢合腸。肮者以瀉臭穢合肛也。故曰腸脬。曰肮肛。者。對前後並者而分上下。重者也。曰腸肛。曰脬肮者。對上下重者而分前後並者也。命名不正。使學者眩目久矣。

（便溺之道）

便溺第七

腸者便室也。脬者溺室也。脬之狀。如倒瓶子。然。胃者上受咽下至腸。審之則經清腸過闌

便溺諸說

門。度濁腸。達肛門。水穀者入咽而留胃。下胃。則穀爲便、水爲溺。便與溺。所下之狀不同焉。腸者通府也。脬者別府也。便者質蒸騰其氣。卒事而自腸下。溺則氣絪縕其質。結物而自脬下。蓋溺諸說不同。素問云。飲入于胃。遊溢精氣。上輸於脾。脾氣散精。上歸於肺。通調水道。下輸膀胱。靈樞云。水穀者。常并居胃中。成糟粕。而俱下于大腸。而成下焦。滲而俱下。濟泌別汁。循下焦而滲入膀胱焉。王冰云。水液自回腸泌別汁。滲入膀胱之中。胞氣化之。而爲溺以泄出也。楊介云。水穀自小腸盛受於闌門。以分別也。其水則滲灌入於膀胱上口。而爲溲便。王安道以爲膀胱上有胞。胞則有上口。而無下口。胞下則膀胱。水受于胞。而滲膀胱。膀胱則有下口。而無上口。頃又聞一說曰。滴器無上口。則下口不泄水。無下口。則上口不受水。故膀胱必有兩口。靈樞以爲水自下焦滲膀胱。王冰以爲回腸別汁滲膀胱。其

諸說之辨

謂胞者蓋膀胱焉。楊介以爲自闌門滲膀胱。蓋其說位也。曰大腸當臍而回。說經也。曰臍上一寸便水分穴。西洋則能解屍驗實。見膀胱粘清腸之下。其上有細系絡。謂水接此授此。是非漢人之鑿空。雖然。大意皆以爲飲水注入膀胱。說以爲如水寬瀉槽之狀。特素問爲飲入于胃。遊溢精氣。上輸于脾。脾氣散精。上歸於肺。通調水道。下輸膀胱。比諸說則爲優。雖然。亦五十步與百步之差耳矣。請嘗辨之。夫人之脾者。狀如馬蹄。在胃之左之後之下。五家之說。以順則相生。以逆則相尅。脾爲土。肺爲金。膀胱爲水。是以歸于脾。歸于肺。歸于膀胱耳矣。而謂飲之精氣。而不及食之精氣。亦闕。夫人生于男女之交感。而一旦出胎。則乳哺水穀之養。不可一日闕。然則一身之天地。有所不足。而待水穀之用也明。一身之天地。何以有所不足。而待用於水穀。則天地之間。靡物弗生化。生化之爲一氣之通。通者

彼此相資也。故雨資於雲。火資於薪。人亦資噓噏於天。氣資水穀於地。賦天氣從外來、橐籥于肺、橐籥之運、向內噏其新、向外噓其故、地質從外來、輻輳于胃。輻輳之物。向下推其查。向上奉其精。氣滲漉而換其故。質噏取以去其麁。故胃化水穀。成一地。滋游溢胃表。以能養營氣資其給。以渟渟于一身。哺實有定。體。故順送其質於下。道水質距氣未遠。故水穀之和氣蒸蒸充身。天地之間地有燥氣水。質。質不能升。氣蒸則爲溼。溼爲雲霧。復雨下。土。人亦一天地。造化相應。地之絪縕者、天之摩盪者。觀彼雲雨而知此雲雨。胃者人之地也。水穀此畜爲雲雨之本。雲雨敷天地而生生之用成。由是考之。則胃中之水穀。和于氣。而爲氣液。以爲一身之用。滿腔之血液膏膩。激而爲汗。爲淚。爲涕。爲溼。爲精。皆人之液。而資本於水。非所飲之水。直爲諸液。絪縕變化之爲也。雖經絪縕變化之爲。而資本於水

則明也。故氣血者人之雲雨也。雲雨滋養一身之查穢。收之於膀胱。此故溺者水也。膀胱者。收流於蒸騰。水土之雲霧。結雨而歸地之溝澮也。輸送之路。精能設開而啓閉。以節其行止。而造化運轉。雲行雨施。蓋皮表者。天之分。滋液至此則澄。澄者卒其功。終赴大壑。古人之論溺。唯觀其質而不見其化。故有上之諸說。是坐爲水直以其質灌膀胱。故不能不說受灌之地。以生曲說。晉數剝獸腹見之。不見上口與王子所謂胞者。噫若使膀胱有受口。腸中亦當有瀉口。飮若可直至膀胱。則不可無受授之兩口。水者氣類也。故脬腸之偶于下。猶咽喉之偶于上。知絪縕摩盪之相依。雲結爲雨。天間將結雨地下水涸。蒸騰融散者。爲雲爲霧。終結其質。以歸地。然則不可謂不資之於地水。雖然天雨非川澤之水。以煩造化之絪縕。以是推之。我天地雖小。奚異於是。請復言以悉其蘊。蓋息食入鼻口。而鼻息

徹衛護則其故氣換新而去者之化焉口哺徹營養則其化滓待新而辭者去我焉於是營衛共迎其新送其故唯飲食之滋經絪緼摩盪分別結溺者游溢之氣氣又之質於是下有溺口以比上有氣管故王安道者不知而言者也楊介嘗親觀眞形奚以致此鹵莽或有疑取脬吹之氣不泄溺龕質而卻滲之者予曉之曰須先辨死活之分焉之勞也其汗淋漓而其革不泄水且水穀之於咽胃便溺之於腸脬子之託身於子宮皆置之於身之外也故溺之滲入脬中理一於汗之漉出皮外醴泉之出末見其孔舌頭嗆氣死塞其路若其以涵器論上下口可謂不知譬矣涵器之質或陶或金或木或竹皆堅質也故剛强不墊陷焉是以水去則腹空也空處不得氣則不立故引氣於一孔而塡無水處水入則腹實腹實則氣不居故逐氣於一孔招水於一孔膀胱者革囊也水去囊縮水充囊脹如弄布袋於水中已噫合膀胱有上口何以盡絪緼變化之妙或曰水穀之出入同其量乎曰造化之道不可如此算有者不減水焉得乾觀乾而後知有者之可減溼者水之徵

散結

無之漸生也天之方雨雖雲霧蒸騰資始於水溼其滂湃者化天間者也故原泉衰衰不能使海盈蜂蠆螫人須臾腫起散則已矣不散則膿生是腫非血非水毒結而化也人物死而有間亦能腫脹是亦非血非水病大渴而少溺謂之爲消渴如穀亦然嘗記我鄰鄉有一少女便閉百日飲食起居自若腹亦輭也衆技不効就吾而謀曰予無技豈能治之哉無已則有所試是蓋以胃間結氣既消其穀又消其藥此氣解而散則已因折桂柯和酒糟作湯使之浴此注則出醒則浴於是便乃通五日復常由是觀之造化之態髣髴可獲也」

聲色臭味

外臟耳目鼻舌以交佗之聲色臭味而運

尋眞

而佗之聲色臭味。己以收之。而己素有聲色臭味。己之聲臭用之於發。而不用之於收。色味最無所用。聲臭則其自發者。可自聞焉。聲者上竅之聲音。下竅之臭。風喉間之戞戞。腹中之漉漉。其可以己之神交佗者。唯在言辭。是以言獨偶行。臭者。人之所內有以厭外發。臭之發。腋臭口過。噯氣矢氣便溺是也。因思生之故。生本畜氣肉與外來之物。以爲摩盪絪縕。常取其新鮮。託舊來之退氣於陳謝之腹實。或鬱釀開出路於口腋。故便溺之氣。非饐非腐。以觀託退氣於陳謝。於味無所用于己。色爲臟赤腑白。唯毛髮自黙。然變黃白者。有同樹葉之感於秋氣歟。

參考第八

予少壯不知身生之所以然。是時世未有驗屍之擧。西洋之圖書。未傳世間。獨就素難以下書求之。愈讀愈曚。竟求之鳥獸。若有小得

察形體道

者。惟恨不聞實詣之說。既而山東洋。始剝人於京師。爾來不絕。各有圖說。符予之所思。繼有翻西洋驗屍書。上木者。讀之而後正識西人之於人身。嘗積若于星霜。重若于人精神智力。驗若于男女老幼之屍。或靡爛其鮮屍。至肉爛筋露。筋盡骨露而已。然猶於部分有專攻之者。有所親試。而後其圖書始成。非一朝一夕。艸艸卒其業者焉。然無由條理剖析之者。則未免於襟懷憒憒。因求諸鳥獸。參諸典籍以正於反比之間。又擧得於典籍者。補不足以竢佗日之備。夫察形體之道。剖之於一中。對之於二上。察反於所資。觀應於所給。故自天地。至艸木鳥獸之微。相視融之生類。分動與植。植則冷止無意。動則溫動有意。動則形理一定。植則形理萬變。是以艸木之枝極、箇箇變理、鳥獸之支絡類類同理。雖然。同異同室則其體一。定者亦變。萬變者亦定。故艸木雖箇箇不同其形。楊則恒仰。柳則恒俯。

人雖各各同其形、虞舜重瞳、夏禹跛脚、孔子圩頂、晉文駢脇、有駢拇者、有欲脣者、有不女有不男、有兩癈者、有兩用者、其狀千萬而不盡也。外形已如是。內形豈特若印圖章相照哉。試照觀近來諸家剝體之書、山東洋之所剝肺狀右襞二左襞一、明和中古河侯侍醫河口子所剝二屍、一屍同之、一屍左襞三右襞二、又嘗得長門栗山獻臣者、明和中與山東洋書讀之所剝女子、右襞一而左襞二也。謂之男女之異、然同是男子亦不同其狀、又有魚際之脈道、卻出高骨之後者、醫人謂之反觀、我鄰村一男子、腕前腕後絕無脈動、按喉傍趺上則不異乎人、由是觀之、同類亦有小異、異類亦有大同、若彼此竝觀臍痕之有無、乳房之多寡、重髮垂尾變倮被毛、內則獺肝多葉、鹿脾在胃上、鼠膽如豆、兔腸有歧之類、而獺肝逐月益獮猴、猴則無脾等之說、非經親試之言矣。然則艸木之寡文、鳥獸之異

鮮陳

形、於知造化則相得而通、故參考之道廣矣。廣以歸之於己之所求、予所識有善割鮮者、故嘗聞鮮陳之辨、其說曰、鮮之與陳、其狀弗同、諸生之鮮、血脈盈腸膪、經宿者、脈絡不易導、若重日、若無維脈者、然至鮮之體、膈膜中位太高、如覆盌、於是肝懸膈中、隱於髑骬、剝腹只見腸胃與脾之一邊、死而少間、肝早已稍露、隨經時垂稍長矣、經脈兩條經難導於脈、其鮮脈系紅紫、經系玲瓏、歷歷可愛、死未輸時者、其白系就心頸斷之、容管吹之、小樞之微動猶隱然見之、肺隨噓噏膨脹、膨則心藏脂則心見、心動甚雄壯、屈縮伸脹似諸脈依此微動、肝能微動、膽則恬靜、白系出心之中、心脈系出心之邊際、其言可據。

鼻竅

鼻竅之狀、行餘醫言曰、鼻之聞知香臭者、以有其竅也。是竅上通于腦中、通于心、故薰蕕觸鼻竅、靡不別審、俗人謂入咽喉者、不知之誤也、若然、則假令以物塡塞鼻中、不通氣息、則口息雖

咽喉

始無所妨而不聞香臭此其竅之所以在鼻梁兩旁而香臭非入咽喉也咽喉之狀解屍編曰胃管上口較廣其兩傍出於肺管之外半抱肺管故雖喉居前喉居後刺吭者或有泄水飲而不泄氣者或有泄氣息而不泄飲者

懸壅

懸壅之狀行餘醫言說結毒鼻音曰結毒鼻音者毒瘡爛蝕懸壅之故也蓋懸壅者口鼻音聲之所分故閉口則懸壅前移喉息皆出于鼻開口則懸壅後遮喉息悉出于口此皆賴懸壅之爲屏障而隔分口鼻兩路之限也今也伏毒結于懸壅懸壅糜爛漸漸刓缺短盡而止故無口鼻兩路之隔而喉息自滃出于鼻所以成鼻音也凡平人鼻聲者多是天性懸壅短小故耳乃知喉息分出于鼻也是又因說病而說懸壅之用自洞朗

心

心之狀解屍編曰心懸肺間斜倚膈膜上而左欹白脂包之兩耳如舌挺出包外鮮紫赤色蹶蹶悸動又聞之麻剛立剛立聞之親剝屍者此蹶蹶之動雖死且經時猶且弗已云

肋

肋骨之狀物理小識曰肋骨二十有四起于脊上十四環至胸前直接刀骨以護心肺下十較短不合其前寬脾胃之居解屍編曰左右各十二上六肋左右齊湊蔽骨自第七肋以下漸退肋著肋如雁陳鉤出於背面十二肋復湊著脊骨其形如曲鉤第一肋上有威骨卽欲盆骨也其端抵臑骨上如乙字樣蔽骨盡處爲鳩尾其頭如會厭藏志則曰九肋以圖按之蓋不數季之三肋不至胸者已

脊骨

脊骨之狀云骨節歷歷可數者一十九其下一片版骨卽臗骨而藏志則爲十七節栗山子書則曰女子脊骨狀如尺八上直下曲所謂上次中下髎各有節合二十有一節也男子則上髎以下至尾骨一枚板骨無節是爲異耳矣脊骨面有鰭如魚者細視之鰭之下面有三稜口含肉脊骨與鰭之間有一條小骨長與脊骨始終其內竅空脊骨如尺八者想以當姙

娠保胎之時。小腹不寬濶。則不能容也。産論亦曰。婦人之腰形必拗曲而其内宏。蓋是天設受胎之地。故與男子之腰形陗直。内無容受者不同。其鰭下三稜。口含肉者。今試諸獸。試諸鱗類。是一條之髓系。有畜以維養骨也。京師嘗有根來東叔者。享保壬子之歳。見烙刑之屍。筋肉既盡者。作連骨眞形圖。意是此間眞驗之權輿歟。說露背骨曰。古來無背骨之名。即背上督脈之露骨也。余名之曰露背骨。凡二十三。似魚背骨。隱蔽脊骨。根岐如琴雁。接脊骨及左右肋骨。其尖向後斜低。一掩二。二掩三。以次相重。自初椎至二十三椎。積續於腰監骨。其岐間則如穴。上下相貫又通裏面節骨之節側。内含脂膏。是說其狀最明。其露背骨。我所謂跨脊骨也。脊骨自項骨及腰骨。節節生枝。肋爲長條。他自矮短。又曰肋骨二十三。左右共四十六。自脊骨之初椎至二十三椎。附著於節間之兩側。而不接下椎。當節及下椎。有欲穴。腹背相貫。亦出脂膏。其脇肋十二。稍長曲。後向前。至脇斜低。但項尚五骨短而微低。長肋下五骨短而不曲。是亦稱肋骨者。宜謂脊枝骨。而肋骨專屬長枝骨。又考西洋圖。數節骨不同。其法若杉田氏所譯解體約圖。以爲二十九節。曰項骨七。脊骨十二。腰骨五。髎骨一。骶骨四。蓋其分之者。脊骨十二。其含肋者也。以上七節幹于頸而持顱者。以下五節出板骨而幹于腹者。板骨不可分之。爲一骨。將終板骨爲小四節。於是大段上頭持顱。其次持脇。其次持腹。其次持腰而終矣。然而肥木下氏分合圖。多髎骨以下之一節。物理小識以爲三十四。恐非矣。

膀胱

膀胱之狀。解屍編曰。有脂膜附著大小腸分界之處。至外腎下廉。隱于横骨裏而不見。折骨始見。

臍

臍之狀曰。剜臍見之。底止脂膜間而不達于内。容管吹之。肝臟起脹。探之有白膜。自肉中聯於肝臟。又有膜一條。兩岐下通於兩髀。

臍帶

同書荻子曰、嘗見紅夷書臍帶內聯圖。其所通之膜、與今所賑合、而別有通脾胃位膜。蓋應有此。今難窮也。

腹

又閱西圖、腹皮層層。其理橫斜如織。而當中一路直理、自上徹下。古人所謂任脈者。世人以臍爲長物。雖然、絕後有生意者灸此。有囘生者。是資于母而保于我者。神闕之名。古人蓋有深意。

肝脾

肝脾之狀。麻剛立曰。肝者、外面密而麁肉也、脾者。外面麁而密肉也。肝屬于本系、脾維于散絡。死而久者。散絡難見。若脈不維然。而腸胃間。所相連之膏膩。皆著脾。最爲難離。如脾爲其本。可謂細心觀臟腑者也。由是觀之。肝脾之爲偶。可徵矣。夫膏膩者陽水、液于表、而津血者陰水。液于裏矣。背則骨之位、前則氣之位。骨親膏、氣親液。造化之用、於是成哉。

子宮

子宮之狀。栗山子曰。膀胱之後。有如蝦蟆伏者。長四寸餘。廣三寸許。黃赤花。有兩朶。左朶有三小亞。右朶有二小椏。有二絡通兩腎。下口出陰戶。剖之裏、面有火灼瘢痕者。有白膩出。

胎孕

胎孕之狀。俗有左胎屬男。右胎屬女之說。按僧泊如谷響集曰。修道行地經。爲男在左脇。背外而面在內。女在右脇。背母而面向外。瑜伽論以爲女在左脇。倚背向腹。男在右脇。倚腹向背。兩說雖參差。俗說之所本歟。而胎正在臍下正中。任之爲娠不誣。張介賓類經不言左右。曰。女胎背母而懷。故母腹輭。男胎面母而懷。故母腹鞕。王宇泰準繩云。佛說。胎相見大集經。此雖似不預吾醫。而又不可不知。按大集經第二十五卷。虛空自分中聖目品曰。父母和合初。受意誠。歌羅羅時。其身猶如葶藶子許。是時未有出入氣息。亦不覺知苦之與樂。歌羅羅時。住六七日。轉名頞浮陀。是時形色猶如小棗。住七七日。轉名伽那。是時形色如胡桃蘂。住八七日。轉名閉尸。形色猶如頓婆羅果。是時身邊。有五疱出。謂頭手脚。十三七日。始有腸相。二十七日。男女根別。二十一七日。始生

經候

骨節乃至三十六七日。中其身具足內血毛根三十八七日具足身枝四日四夜住在腹中臭穢之處。此言初七至三十八七日之略也。未知五王經所說細密詳悉矣。此不復贅。當於梵藏中查之。子玄子產論曰。古來論胎孕皆以爲子頭向上。及將生則轉身而下。又閱紅夷圖。一同其說。彌月之胎。其大幾何。子宮之中。其廣幾何。信使回轉。理當破裂。今唯據實如法按之。當自知彼非是大抵五月之後。腹中胎大如瓜。必背面而倒首。其頂當橫骨上際。胞衣蓋胎之尻上。而當母鳩尾之下。解體新書曰。和蘭之書所圖未分明。諳厄利亞國產科書。其圖從受胎至臨產。無不倒居者。其否者則皆難產之狀也。吾無實見剖鼠腹觀之。彼雖累累。如所云爾者。書以竢他日徵熟焉。經候。諸獸無之。或云。狙有月事。天仙子北山醫話云。諸獸之類。猿鹿之外。未聞有經行也。如鹿。未驗其有經水。但猿。余親就畜

孿生

男女正傀

猿者問之曰。牝猿數歲而方經來矣。猿鹿經行。見月令廣義。按本邦產狙不產猿。天仙子所說。以其同類經候亦同有之。混言之乎。抑參考有所不至邪。漫意婦人運營血於生生。逐月充胞中。充則一掃理與溺同。子玄子曰。婦人受孕。輕畢後十日之間。爲其候矣。由是思之。受孕非婦胎畜血包精於其中。唯其營氣爲血則經也。不爲血則爲胎。而後贏餘月積者。能養胎若瘀而畜則妨礙胎。孿生。以周一母四乳。皆男子爲奇。然產論中有言。曰余所識家。每歲孕而孿生。又必一男一女。凡五產皆然。本綱舉明天順時。一產五男。皆生育。魏書則曰。延興三年秋。秀容郡婦人一產四男。四產十六男。復益怪矣。且人之託胎爲男女。爲正皆天工神機。非人之所得而窺。而各自作曲說。以爭是非。不足論矣。

本艸綱目曰。齋司徒褚澄言。血先至裹精。則生男。精先至裹血。則生女。陰陽均至。非

男非女之身。精血散分駢胎品胎之兆。道藏經言。月水止後。一三五日成男。二四六日成女。東垣李果言。血海始淨。一二日成男。三四五日成女。聖濟經言。因氣而左動。陽資之則成男。因氣而右動。陰資之則成女。丹溪朱震亨。乃非褚氏而是東垣。主聖濟左右之說而立論歸于子宮左右之系。

又有不男不女二形。總謂之人偲。史載。一頭二身。二首一身。種種變態往往而有。或曰亂氣。或曰駁氣。亂駁以不純正而言也。然是非人獨然。雞鴨豬羊。馬牛烏龜萬之動植皆見其偲。人之營作。有誤失不類其物有矣。類佗物有矣。雖天造亦然。如二身一頭。二頭一身。雙生欲成未全。雙焉單生欲成有餘于單。如二形亦然。觀之柿茄花並蔕而逼發。其子或兩頭一蔕。或合頭分蔕。畢竟造物之差誤。老夫亦刻鵠類鶩。畫虎類狗。不以此供胡盧說妖祥。說報應皆以有意望天之失也。

異産

世又有産異物之說。多是鑿井獲人之言。幻惑衆耳。終上詞人之筆。又有男子産子之說。不知造物作後門技胞之傀乎。造物雖巧。不能生無宮之子矣。

男産

初生

産論說初生之狀曰。初生落地。其肌極冷。其色甚白。撫之如水。纔擧一聲。則四體卽溫。肌色成赤。愈冷愈健。若未啼時。其肌已溫者。率不踰三日而死。噫吾人好空推。百般思之。空推豈知生子之冷哉。椿庵遺稿則曰。命帶清白者。其兒強。命帶灰白者。其兒弱。屢試屢然。孫氏痘疹心印論。兒生口含穢血。後下黑糞。曰兒之胞胎在腹。猶瓜菓然。瓜菓賴藤樹滋灌。汁從蔕入。日能肥大成熟。兒在胞胎。藉母之湮。從胞蔕而灌入臍中。十月充塞胞分而出。口中之穢。間或有之實分娩之時。胞中之餘穢惡露也。大便黑糞。如瓜菓之汁水。耳出胎之後。陽昇者。啼聲上出也。陰降者。大便下行也。意心者供於有已。胃

者供於假物宜矣。其溺自然之穢也。赤水玄珠緒餘曰、胎在母腹中被驚而死、其胎下繫紫黑色、血蔭軟弱。若生下腹外死者、其屍繫淡紅赤色、極易驗也。記其所出曰洗冤錄。是亦折獄者時有照奸之用也。癥之狀、栗山子曰、胃下腸外有積塊、色黃赤、大如拳、粘著腸外。或曰、癥之頑凝、當茶毘火不能融之者、折接骨木插之、化爲灰矣。本綱云、男生而覆、女生而仰、弱水亦然。聞之於人、必然云焉。不識奚以男子其重在前、女子其重在後焉。褚氏遺書分其重處曰、陽氣聚面、故男子面重、溺死者必伏。陰氣聚背、故女子背重、溺死者必仰。走獸溺死者俯仰皆然。以俯仰歸輕重、則其言可聞也。而男何以陽之所聚重、女何以陰之所聚重、我未解其謂也。以予之所意、異於是也。蓋動植雖本末異、上下各以其本爲重。而動本親天、植本親地。植者孤生、以花實自偶。動者偶生、以牝牡相偶。男者受天化、女者受地化。是以男自然有覆、女自然有仰。似天覆地載之道、不能不然焉。由是察男女之天稟、男剛女順。男則鬚髮早殞、而髭鬚長矣。女則髭鬚不長、而鬢髮不脱。其形則可見、其故則不可知也。男則有餘于陰形、女則有餘于乳形。男之授也、目開、手足指伸。女之受也、目閉、手足指縮。鳥之羽毛則多美于雄、人之容華則勝于嶋。以上聞之於人者、參以管見。若謂之道聽塗說、亦聽於其人之所想。

圖第九

眞驗之圖既布世、蠶絲牛毛無所遺。而今又何有事于其圖。蓋舊圖盡於蠶絲牛毛、而蒙於條理之分也。故是圖讓形象之似、脈絡之纖悉於世間、正條理於剖析。圖總九焉。第一圖示人以神軀之二成。以下措神、示軀中渾淪之狀。第二圖一合、示軀中混粲氣體之所剖析。第三圖一合、示混氣體粲氣體之剖析。第四圖示四臟四腑、心胃主胸腹、翼趾收其

散第五圖示以趾者枝也有剖而相偶第六圖明翼趾之形狀示腎之孤臟而內與授受之器對外雌雄爲偶第七圖一合。示氣物之上仰、質物之下垂第八圖一合。世不能分臟腑迷陰陽之故因剖析條理示諸臟歸脈之一聯、諸腑歸皮之一貫第九圖示質道關門之所設焉。

配當第十

周禮曰。以五味五穀五藥養其病以五氣五聲五色眡其死生。又曰。以五毒攻之。以五氣養之。以五藥療之以五味節之。又曰。凡和春多酸。夏多苦。秋多辛。冬多鹹。調以滑甘。久矣配當之興也。然於臟腑則未之聞也。故曰兩之以九竅之變參之以九臟之動意是時未分臟腑與五臟之目。見管子而未有與六腑相配之事。五六相配者。素靈其祖乎。噫未知條理從見數之何數不可言焉。天下非無聰明。爲五行痼于胸臆無一繹條理者。悲夫。醫

家之說臟腑專歸重於五臟腑以爲之配餘則以其屬條列託原於五臟播派於六經。夫臟腑之在物鳥獸艸木自異而其理則一也。臟固在內養外而腑亦自外保內莫有先後輕重觀稃米內外相養以成生殖而可見也。果如舊說則五臟先生支體後成支體剝盡五臟後死。今粗擧其配言之其說曰。肝者木也。其色青。其臭臊。其味酸。其聲嘑。其液泣。其腑膽。其神魂。其竅目。其體筋。心者火也。其色赤。其臭焦。其味苦。其聲言。其液汗。其腑小腸。其神神。其竅舌。其體血。脾者。土也。其色黃。其臭香。其味甘。其聲歌。其液涎。其腑胃。其神意智。其竅脣。其體肉。肺者。金也。其色白。其臭腥。其味辛。其聲笑。其液涕。其腑大腸。其神魄。其竅鼻。其體皮。腎者。水也。其色黑。其臭腐。其味鹹。其聲呻。其液唾。其腑膀胱。其神精志。其竅耳。其體骨。是定說也。於其異者則管子水地篇曰。酸主脾。鹹主肺。辛主腎。苦主肝。甘主心。

五臓已具而後生肉。脾生膈、肺生骨、腎生腦、肝生革、心生肉、五肉已具而後發爲九竅、脾發爲鼻、肝發爲目、腎發爲耳、肺發爲竅、靈樞金匱眞言論曰、心開竅於耳、脾開竅於口、腎開竅於二陰、淮南子曰、肺主目、腎主鼻、膽主口、肝主耳、邵子觀物篇曰、心主目、脾主鼻、淳屠氏說曰、土屬身、水屬口、火屬眼、風屬耳、又如心臓說文則爲土藏在身之中、而今不取、夫臓者、繫氣管、腑者、成質管、故自咽至脬、皆腑也、親膏、其色白矣、自肺達腎、皆臓也、親血、其色赤矣、條理之分也、臓固腑之對也、心肺肝腎、居皮內、咽胃腸脬、包肉外、醫家則一一相配焉、噫臓者、內肉也、依血而成、內實色赤、是其質之陰也、腑者、外肉也、以膏而成、內虛色白、是其質之陽也、陰質者、必陽氣矣、陽質者必陰氣矣、醫家徒以臓爲陰、以腑爲陽、未達乎分陰陽之道、蓋臓實爲氣舍、腑虛爲質室、是以心肝藏氣而上居、其用恒升、腸胃容質而下居、其用恒降、於是臓陽而腑陰也、外臓外腑、亦其理一也、內臓內腑、氣質兩管也、氣環一道、爲噓噏、出入同竅、上轉者、圓道也、而依氣管之直體、質走一道、爲出納、出入異竅、下行者、直道也、而依質管之屈體、是故氣管雖接肮、噓噏之道、不下於膈、質管雖開于上、便溺之質、不上于胃、是臓腑之分也、故擧其數則心肺肝腎之四臓、咽胃腸脬之四腑、約之則氣質兩條而已、古人言臓腑辨不及此、以膽爲腑、而同之於腸胃、蓋腑者、容物之稱、由膽亦盛精而誤者也、雖然臓腑分皮肉、其系負別、膽豈得獨達條理、繫臓系哉、況他腑能納能出、膽何獨無出納乎、膽者盛精以營養一身、乃瓶之根也、若目中有水珠、惟親覯內景者而知其與臓腑不類、已非臓、又非腑、何以配爲、難者曰、鳥無肮則無乳、魚有膽何爲無臍、曰臍則無焉、任則有焉、若夫獸之無臍、只沒胞著之痕而已、又奚疑焉、蓋腸有

清濁。不稱之清濁。而曰大小。命名欠瑩。今以條理。清曰胴。濁曰腸。淸下有闌門。濁下有肛門。共爲出納之關鍵。其色通大小腸而白。膀胱亦同色。左回右回無其驗。我未視豬腹。解屍編曰。肺之六葉兩耳。二十四孔。及肝之七葉。豬腹粗似。然則彼間以常屠豬狗。以豬說人。脾上肝右。豬狗亦不能合。鹵莽已甚。唯釋名曰。脾。裨也。在胃下。裨助胃氣。主化穀也者正矣。心運神而腎持本。是故兩兩相對。則心肺肝腎。咽胃胴腸。分之則肺肝者。營衞之具。心腎者。神本之舍。資以活已者。咽胃者。水穀之室。胴腸者。便溺之舍。假以立已者。故大腸配肺上下之位亂。小腸配心臟腑之色戾。且膈膜之下。胃雖在中。而質左畜右通。是故肝。正中當胃。兩口之中。覆胃之右邊。脾離擁胃左後。以能接氣營身。其功不可專屬之於脾。人且有言脾胃如磨如齒。上下相摩能化矣。惟口以齒嚼物。胃以氣化物。氣質之分也。今

欲以口之嚼物。喩營養之道。猶並觀餻與粥。而曰鼎猶磨矣。不知氣質之分也。況於脾胃非相重者乎。胃之盛水穀而下。漸於腸中化。腸已屈曲而下。又上就脊下爲肛。脬在之前。圓而開口於下。此故胃混水穀。而腸脬分便溺。則腸脬雖二。而一物之分也。與肮肛之二而一者偶。故觀彼鳥之飲而不溺。無脬而少肮。則脬者腸偶。與腎不相與。心在膜上。位中而奇。腎在膜下。在端而偶。猶耳目手腳並有。而左右無異矣。難經分之。左爲腎。右爲命門。乃於命門曰。男子以藏精。女子以繫胞。男子之精。已藏命門。女子之精。將藏何處。女子之有門。猶男子之有器。門向內而虛。器向外而實。天地相合。兩精相應。解獸視腹。胞脬相接如一物。而兩囊共無用則縮小。有用則張大。經脈承自兩腎下入股間者。高提小腹。若人獨繫胞於命門。豈無偏墜之患哉。不稽甚矣。舊籍雖主張五行。亦能譚三。故言脈。則寸關

尺。寸關尺。分之三候。曰浮中沈。是屬手太陰肺經。其說曰。人一噓。脈行三寸。一噏。脈行三寸。一息之間。脈行六寸。八之經脈。十六丈二尺。息數晝夜。一萬三千五百息。息脈相得。脈行五十丈。漏下百刻。而行陽二十五度。行陰二十五度。又會於手太陰。是不知經脈者之言也。夫脈者。收地液於胃。輸營養於一身。經者。資天氣於肺。致活運於一身。已不知經脈之分。又不知本末之理。唯爲周旋流注。滾滾滔滔。往復無首尾。以爲轉環。若果然。何用平旦而會。何用其度爲。息數脈行。果如其說乎。若使息數差分。則安保不失其平。夫日月有盈縮。盈不得縮。則不復平。縮不得盈。則不復平。盈縮相得紀必常矣。既已有定度。焉得有不過于定度之數。逮于定度之遲乎。既以過期。或以不逮于期。焉得不愆平旦之期。既已愆期矣。以得其平焉。又使愆期者無病。非妄而何。若使其言不妄。則病數過度者。當得不

眞經脈

及于度之遲。而後病始愈。病遲失度者。當得過于度之數。而後病始愈。世豈有此事哉。況人之噓噏。臥則長遲。起則短促。而起臥無常乎。蓋古之著書者。未知脈是何狀。經脈混淆。至其道所流注。譬如取老絲瓜。不察皮裏多少之蒙茸。使小兒執筆。靑赤白黑。隨意畫縱橫環回之文。因此設種種之目。說絲瓜之造化。若一剝外皮。則表面之朱墨環回。兒戲不揜也。經脈之義。雖前篇論之。請又言終餘義。夫心之爲物。占地於膈上肋裏。肺向前擁之。猶芙蓉半開。抱蓮房。有膜包之。而薄膜間中。左右相隔。心中二坎。左坎微畜紅血。右坎溢紫液。左者占中。右者居邊。左坎以經塞其外出之路。右坎以脈塞其外出之路。心頭有兩耳。如爲經脈之蓋者。右耳上仰。左耳下覆。蓋驗屍之道。觀臟非難。肉理是難。肉理非難。道經脈爲至難。枝而椏。子孫仍雲。如海蘿纏石。脈以畜液。猶可見焉。經以盛氣。曖昧難辨。只

用管一術頗窺活意心頭經脈相繋之處最繚亂試截脈之上頭内管吹心左蓋努起氣入心坎心亦努矣努勢下溢入肝自肝歧維腸胃之脈皆爲橐籥其吹上頭努勢達本幹枝椏盡應焉又截經之上頭吹心右蓋努起其與脈相伴相分者皆受其鼓動活意見於散絡吹其上頭經之沿脊與脈相伴之間一肋一經脈之腎之陰之足歷歷可見焉是以脈始于肝刺地之一支走腸胃本系維心肺二支上面二支入手本系下脊二支入陰本系之末兩分入兩足注體之陰分見肉而伏見骨而見經者循脊赴心者即資系以爲本幹脈者出心循脊者即給系以爲本幹天地合精順逆相會如絢索如解條千條萬派相會者爲勢以爲滋煦以能輸之非循環也而魚腹下一一配臟腑之各位欲辨涇渭於黃河衮流中後世不疑奉以爲金科玉條亦怪哉臟腑之脈位左爲陽心肝腎右爲陰肺脾

命門蓋自寸順下而數宋時所得於古冢之齊褚澄遺書則始于左而自寸順下爲心肝腎肺脾命門者以爲男子之脈位右手之尺乃受命之根自土相生上至心於左寸女子則反之命根在左寸脾土位左關自土相生至心於右尺其說則反於無徵則一也夫人有病則營衞有事息脈失常是可以察營衞之調不調豈有此臟病而見此脈此腑病而發此脈之理哉故脈議每瞭瞭于几案之上而罔焉于按診之日又按素問上部候之於面中部候之於手下部候之於足則似可以得大綱至就魚腹下之一條以求其詳悉則誣亦甚矣夫表裏者身之分營衞者生之本故息脈不偏立和則平焉戾則病焉今診脈之道醫人以我之息參他之脈然息者天氣之動脈者地賦之動不參之於其人之天地而以甲之天參乙之地者何邪至若七表八裏九道之目五代高陽生竊叔和之名以立

三焦

之云。所竊者猶不足恃。況其竊者乎。表七而裏八。外表裏而有九道。不知此數自何。天得焉。三部六經之妄。親察經脈之眞者。豈受其欺哉。肺者病於噓噏。心者病於意。連肝脾者病於消化。腎者病於斲喪。本自瞭然。而配當生克之設。蓁莽葛藤。使人蒙其目裹其足。悲夫。浮屠氏之術。搆世界於曖昧之中。以驅愚盲。古醫典之道亦然。設人智不可及論於幽穆之際。以欺人焉。不然。則脈行一息六寸。何以徵之。行陽行陰。各二十五度。何以徵之。寸口平旦終始之會。何以徵之。人身內體變左右。外體齊左右。唯虛里之伏于右。見于左。偶如有反觀之脈。則非其常也。右之耳目不如左者沒其徵。唯左之手足不如右者見其徵。是人之所應南北也。然末足爲左見心肝腎。右見脾肺命門之徵焉。胸腹膈膜以界于氣質。故腔子之分。不過此二。而三之。曰三焦。三焦乃軀殼之謂也。故不主其體。說其氣焉。因

六經

以充之一腑。曰元氣之別使也。臟之五。不可配腑之六。故割隻腎。以配三焦。又求三焦之腑。而不得。終爲無形有名。宋時擧士徐遁。見齊饑。群丐相臠而食之。餘右腎下有脂膜。如手大。正與膀胱對。有二白脈。自其中出。夾脊而上貫腦。陳無擇信之。以立三焦有形之說。無擇不親見臟腑。信徐遁之妄誕。後何一陽。從師征南。驗賊腹。而知無擇之受誣。靈樞發微。圖焦膂並著左右腎下。可笑矣。蓋動體外溫而內頗熱矣。今試飲水。其冷徹腹。湯在口不勝熱。忍飯之過咽。則不覺其熱。於是知營衞之溫。不與外面同也。以此能化生冷硬腥之物。觀此氣於髣髴。說三焦。說相火而已。又引其在內者。於外也。則六經分爲十二經。左右併爲二十四經。於是又不剖腎而剖心。或曰脂之著心者。謂之心包絡。或曰膜之纏心者。謂之包絡。是實三焦之偶也。蓋腹內薄皮之包多。何得獨歸之於心。以略他臟。韓詩外

營衛

傳則不言三焦幷咽喉以充一腑大勝醫家說且内之諸臟皆繫脈系。脈系循脊而下。舊說曰。諸臟皆附著脊髓不稽亦甚矣。至言度量於臟腑。殆兒戲。古人設營衛之名。猶無所歸著也。苟有知己資營衞於天地運本神於經脈。則六經八脈之妄。可辨之於掌矣。

配當

夫配當之說。果是乎。六氣多火。八方多土。胡目之不青。耳之不黑。膽汁之不酸。鼻涕之不辛。骨之不黑。爪之不青。目系之不繫于肝。耳系之不繫于腎。鐵之不辛。土之不甘。氣質爲物。則物又爲天地而生。化其天地間者。毛髮爲植。蟣蝨爲動。齒骨爲石。肌膚爲土。聲無歌哭。發于喉中。思無憂歡。成于心矣。筋者外維肉。内纒骨。肉者表爲皮肉。裏爲臟腑。一氣混成。各體有立。而認無徵之金於肺。配不驗之木於肝。以爲造化之妙用。異矣哉。

六經

且立六氣於天。配之於人。以爲六經。曰太陰。曰少陰。曰厥陰。曰太陽。曰少陽。曰陽明。太陰爲溼土。經屬脾肺。少陰爲君火。經屬心腎。厥陰爲風木。經屬肝心主。太陽爲寒水。經屬膀胱小腸。少陽爲相火。經屬三焦膽。陽明爲燥火。經屬大腸胃。以條理正之。則水爲陰。火爲陽。姑以水爲太陽。則當以火爲太陰。如以火爲少陰。則當以水爲少陽。今陰陽各有太少。而間又置厥陰陽明。依條理。則何用太少之間。

素問至眞要大論曰。陽明者。兩陽合明也。厥陰者兩陰交盡也。又兩陰交盡。故曰幽。兩陽合明。故曰明。宋王逵萬物造化論曰。陽明於太少之間。故爲陽明。乃二陽相交以爲明。厥陰居太少之後。故爲厥陰。厥者。極盡之謂也。是雖素問之本義。於陽則置之於太少之中。於陰則置之於太少之後。於理不通。不及說陽者唯言太少陰陽遠矣。按醫家以厥對逆。逆甚也。厥微也。恐此義近矣。然以條理剖之。則不用其中者。

本以木爲陽。而曰厥陰。以金爲陰。而曰陽明。

司天六氣、在泉五行。數不合則不可配也。固矣。而配之故在泉之行。不得不獨多火矣。於是有君相之火。天地之間則有火。人身豈可有火哉。畢竟影像神本之二氣。而夢中譚夢也。夫徵物於實者。有其說則其書可據。其說亡。則復驗之於天地之物。而可復興。是其符不在其書。而在物也。是以觀於天地者。不合符於物。合之於書者。不取也。今如彼經脈之說。只可以書傳。不可以驗推。且人之肌膚亦自有陰陽。陽背也、肉赤而厚、筋骨之分也、陰。腹也。肉白而薄。氣液之分也。故首身者腹在前。背在後。手者、腹向內。足者。背向前。故陽分。自頭。達背腰臂腕臏跗。至指甲。陰分自面。至胸腹腋肘股膕手足之心。赤白分。腹背之色。徵獸胎。考之於人。兒之在胎。手合頤下。以跪胞中。今試合兩手於頤下。跪而蹲焉則肌肉之背。盡表見。肌肉之腹盡裏隱。萬毛盡垂。是肌膚之陰陽也。

草木中有蔓。而植之本形。則竪也。禽獸中有人。而動之本形。則橫也。蓋草木之生。開華葉而上仰。鳥獸之生。藏華葉而下俯。古人言前後於龜背者。以首尾爲前後於是。腹背一于上下也。豈翅龜焉哉。鳥獸蟲魚皆然。言人爲倮而非倮也。淺毛而竪立焉。獸中之異形與鼯鼠蝙蝠之倒懸反正似矣。人以己之竪立。視橫生爲偏。故惑于上下前後之紀。於是。人不惑于鰈之以左右。混于腹背。眯于我之以前後混于上下者。惟在慣與不慣也。人已以前後混于上下。混乃我常也。雖然。不可就鰈正左右之條理。不可就蝙蝠正上下之條理。則亦不可就人以正前後之條理也。故知竪立仰臥。動中之變也。諸動首部。鼻口在陰部。耳目在陽部。身部陰乳在陰部。手脚在陽部。鼻最前而尾最後也。貓犬鷄鶩。人家常有者。試見其面。羽毛自鼻端。左右分靡。一齊向

後而垂、如魚鱗、亦然。只人以爲堅類。毛自旋、毛分靡、以多推寡、上下前後之理甚明。有人猶疑。人具意智之神明、以爲萬物之靈、以物爲本形、以己爲變形、似甚無謂矣。於乎人之所長乃物之所短、物之所長乃人之所短。人有聖哲、物無聖哲。是似人勝然比之於物。繳鳥穽獸、釣魚於水底、捕鼈於深淵、芟刈草木、醯醬蟲介、猶尚不足利害之所至。不避其類、及兄弟、及父、及君。繼以兵革、百萬一時亡。不知動物之間除人之外、亦有若此慘怛暴惡者乎。人閉玉戸、垂繡帳、坐錦茵之上、食山海之珍美。則美也。惟美于人也。以一人有此美、故衆有凍餒之患。物以不有此美、凍餒亦不到矣。故人之有聖哲、乃人之所以不美也。物之頑冥、害之所播亦小也。是以人之以聖哲誇于造物、使造物有意、必爲捧腹。

夫經內者經脈、蔓及外、經外者筋絡、入至內。是以筋絡之大抵、筋自首至四支之末、絡自四支之末至首。而古醫典、大抵以心肝脾肺腎、配天之五行、爲五臟、以小腸膽胃大腸膀胱及三焦、合之爲六腑、手足之五指、剖陰陽之六經、爲臟腑之應驗、爲乎之三陰從臟走手、三陽從手走頭、足之三陽從頭走足、三陰從足走腹、而以此十二經脈、比彼十二經水。與地之人、皆具此經脈、何取應於蕞爾一方之地。天無五行、自建五行、說其應、是皆窺竊之妄說。若有眼精徹眞者、豈不知其罅漏焉哉。

贅語三身生帙上之末

贅語三身生帙目次

神本二氣

贅語三

身生帙下之本

日本　鎭西　三浦晉　安貞　著

神氣第一

神鬱浡而活、物混淪而立。立者本氣、活者神氣。神氣活于混淪之立、本氣立于鬱浡之活。立者本根、剖之爲氣液骨肉、活者精英、剖之爲神靈情慾。本神之氣者、資始者、而天地之氣者、資繼者也。神靈情慾者性、其才以知通感應而運、氣液骨肉者體、其用以保持奉役而行。體用合性才、以能全其一、一一之態異道同居。動植雖反而並立。同資諸大物、大物之所有、絪縕以給、則小物之所成。仰以相應。保持奉役。知通感應、反態分給。是以天地本神。小物與大物同有之、而動與植反其態於小物中。是以本氣以身生體、心性神氣以心性用身生。於是神軀成人焉。本氣一竭、神氣

四病

隨滅。故神、以使本氣、本以保神氣絪縕給資。資于我。而保奉感通成于物。於是神本有病。身生受苦。病者其變、正者其常。正病者保奉感通之間也。變在營衞、之爲本氣之病、變在情智、之爲神氣之病。剖析有條理、四病粲立、混成無罅縫。一身通病爲變者爲邪、被變者爲病。於神氣之邪曰妄、於本氣之邪曰毒。以分名察其異、以被變觀其同。是故愛憎欲惡正、而思慮知辨眞也、則身安國治、反之則邪妄。身危國亂。是正邪眞妄之成於心者也。眞爲邪、智之病也、病之者、爲邪人、妄爲邪、情之病也、病之者爲妄人。邪外侵則衞護病焉、毒內結則營養病焉。病者。生之變也。情病者、變愛憎欲惡、智病者變思慮知辨。營病變于營養、衞病變于衞護。神氣之病、君設學禮政刑、本氣之病、醫設服浴鍼焫。故天下之擾亂、一身之痛苦。大觀則彼此通其病。本氣者、生之本根。神氣者。身之精英。精英不失守之謂眞、

眞妄之辨

精英失守之謂妄。情正則眞、氣邪則妄。故病邪者。必憎可愛、愛可憎。樂可憂、憂可樂。病妄者。必聽聲於漠中、視色於空裏。妄則智惑焉。妄惑之所在。人不得其正。未知妄惑之故。對妄惑而誤眞。是以氣正則有有、無無、美美、醜醜。於是其所視聽言想亦正。所愛憎欲惡亦正。妄惑爲病。其用倒矣。視不正物空空物、聽不正喧漠漠喧。鼻舌之於臭味。心體之於寒熱憂樂。事皆同然。唯神氣爲邪所擁。而變亂錯謬。之爲妄出其智者、顚倒是非、出其思者。變亂思想。於是。邪能變正視聽言想皆妄動。今夫飮酒而醉者。氣血亂行。則氣麁舌卷。見少爲多。坐靜爲動。責是爲非。以害爲利。先後無顧。思慮不辨。酒力盡。神氣復。則自愧自咎。雖愧且咎而醉則故態復發。故邪畜于內。則視聽言想皆妄也。是故病者。開目視物於空中。開口接語於漠中。手摸足踏。若接物然。是鬼神之説之所以興也。夫目者。人之鏡也。玲

瓏洞徹。萬象來而映之。精神接而辨之。耳者。聲之鏡也。舌者。味之鏡也。而心者。知覺感應之鏡也。此能守精執得而逃。營衛病、則妄知覺、情智困。則妄思想。病痁者、以暑爲寒、是非天地之寒、衛病爲妄也、宿熱者、以鹹爲苦。是非鹽醤之苦。舌覺爲妄也。是以精神之病也。妄視妄聽。妄思妄言。其鬼實來邪。吾人各懸靈鏡。以收萬象。而惟病者視聽。不病者不視聽。可見果非從外焉。從妄視聽者之言。正視聽者信之。是視聽不病。而聰明病也。今病瘧與瘟者。最能視鬼。於是愚俗皆意瘧瘟各有鬼而爲。故迎巫覡。祭其神。病復則設奠送其神。然其證輕者。不能見鬼。可

神氣之致妄者。邪之所爲。邪去則妄愈。神之病妄。之爲癲。癲人所知解妄也。於是思慮妄也。其妄知解。妄思慮者。亦有剛有柔。剛者。則毒衝心舍主。人潛匿。客邪下號令。狂走喧呼。指揮失序。柔者。則心志有惑。念想轉亂。隱默沈思。悒邑有

一男子。性沈厚。幼失怙恃。壹鬱自處。後養爲佗家子。兢兢常恐不得父母之心。忽自意。我不能事其父母。閭閻訟罪罪案已成。延及本生兄弟伯叔宗族鄉黨。於是慘然默坐。與人不接。醫禱諫誘。萬方不得者三年。欲自裁者數。忽又自意延至三年之久。疏者必免。經數月又意。延至此久。伯叔兄弟亦免。罪正歸一身。一死輕於毛。於是百悶皆解。精神始爽。無與常異。惟自得罪者。確然固執。千諭不聽。又經一年。稍覺其妄。卒復故。是惑疾也。閲世此類亦太多焉。然或遂其死。或終其病。此男幸而愈。以審惑疾之症。謝上蔡問沈魂滯魄於程子。程子曰。張亢郡君化去。嘗來附語亢所知事。皆能言之。亢一日方與道士碁。又自外來。道士將一把子。令將去問之。張不知其數。鬼亦不得道。滑伯仁嘗治。仁孝廟廟祝。楊天成一女。暮遊廟廡。見黄衣神。覺心動。是夕夢與之交而腹漸大。伯仁曰。鬼胎也。與藥下如

科斗魚目者。遂安虞天民云。鬼胎僞胎也。此女年長無夫。思想無窮。所願不遂。感爲鬼胎。非神之惑女。乃女之惑於神耳。有人嘗來語曰。某邑有一老嫗。喪子。從此失神。求其子而呼。沿水入山。陋巷廟社。求之弗已。念至則不避深要風雨。又聞。一僧坐禪。結念數年。忽得一悟。喜而發癲。舉之以禪。其辨懸河。問之以平常。妄言倒置。聚此數事。照其理。則皆病妄人也。是以。古有認弓影爲蛇。以致沈疾。有蹈瓜皮爲蠹。夢入地獄。人之爲妄視聽妄言想者。人以爲祟魅。不惟人以爲祟魅。病者亦以爲祟魅。人之信鬼神。皆意。神功佛力可能救之。於是。祈禳通惑。愈者間有。猶還蛇於弓影。復蠹於瓜皮。妄病妄苦頓瘳。通惑以惑。聖人之術也。唐呉元禛治一婦人。誤食一蟲。因疑致疾。呉揣知其情。當以藥探吐。令奉盆盂者言蝦蟆出。其疾終除。亦還蛇於弓影之術也。恨奸人乘虚欺人。設術攘貨。達者以此。深嫉

痛絶噎。非無憤寃鬱怒之感。老精邪魅之毒。射而冐人。是猶火氣入水。沸騰蒸熱。皆水而非火、油精入火。焔煙光耀。皆火而非油焉。入者。火也。水也。受用之者。從己之情性而動也。如痘瘟。唯一時之結邪。當其襲人。則爲厲。示種種之智技情態。如酒非能舞踏者。而人飲則舞踏僊僊。故憤寃鬱怒之結。老精邪魅之氣。以衝人。彼豈損己之體。獨脱精神。假人之形體。而逐人之神氣。以自代之哉。能達此則百怪千奇。不足動人。鎭西多川童形如獮猴。云。隱水艸沮洳之間。最魅女子。女子之被魅者。有時絶倒。恍惚之間。見豔童美士。是亦其邪著人。與懷春之念。會爲妄也。已且病患之間。有說罪者。是未能明幽明之分。思想結念爲妄視聽。爲妄知覺。漢田蚡陷魏其後。如呼服稱罪。使巫視鬼者視之。魏其之鬼云。田蚡陷魏其之不快于心者。平生内積。一旦氣衰。而見妄像。巫者見其狀。而說其事。彼焉得明

幽哉。王介甫退居鍾山。恍惚視其子雱荷枷杻。乃施所居半山園宅。以薦其福。蓋此老稱識。盡天下理。而猶抱疑惑於幽冥。此念與雱之所爲平生心咎者。相會生此妄。可笑矣。是蓋在精神睒動之人。而不在精爽剛正之人。前所舉我邑之男子。自言。當其祈咒之時。巫僧使言祟魅之狀。不言。則錫杖獨鈷連下。香煙咒水撲面。以實告之。則兄弟伯叔捉之。巫僧之呵責。不可如之何。言而不當巫者之意。苦楚不已。於是乎信口而言。策在免苦。巫僧抗然矜其能。親戚皆悅。以爲邪魅始服。病者懷冤。無所訴其非矣。巫僧之姦可嫉。而病者之意可愍。夫人寤而神役氣。則視聽言想正矣。寐而氣役神。則各氣妄動。以爲夢矣。覺爲眞。夢爲妄。夢不惟寐而後有之。思想著佛者。見佛於恍惚。思想著色者。値色於髣髴。見者信之。聽者亦信之。感應通知。覺得驗如合符節者。亦或有之。併其有驗與無驗。皆妄之爲

狐狸川童

生死之厲

病也。夫鬼神之爲靈感應體物而弗遺也。而妄人妄意。幽冥之間。有物具意念情態。或現形或沒形。恒事與人酬醋。昇天入地。倏忽來去。以奪我神。換我精。於知鬼神之情狀遠矣。若以鬼神。別爲一物。則體離神而存。神離體而立。是天地之所不能。況於在天地間者乎。若夫狐狸川童。使其神離身憑物。牛馬雞犬。皆可憑矣。特人爾。然牛馬雞犬。不見祟魅之狀。則愈知。我知識念想。以自惑者焉。其神果離體邪。狐狸之憑人。必傍有失神之狐狸。己傍無失神之狐狸。則祟魅之爲心疾可知也。關尹子曰。心蔽吉凶者。靈鬼攝之。心蔽男女者。淫鬼攝之。心蔽幽憂者。沈鬼攝之。心蔽放逸者。狂鬼攝之。心蔽盟詛者。奇鬼攝之。心蔽藥餌者。物鬼攝之。說厲鬼。是說爲長禪家所謂爲佛魔攝也。是時豈求鬼於心外哉。今世神疾中。有生厲者。有死厲者。死厲。死而爲厲之目。生厲。生而爲厲之目。惟其惑者。見生之

蘇長公　依立

厲。其主、則不能自知生人且不自知死者安得知之焉。蘇長公居閶闔門外白家巷中。一夕次子迨之婦。產後發狂。曰。吾姓王。名靜奴。滯襄見豕。呂后逢犬。夢覺雖異。同一病也。噫。制法率下者。君也。以學誨人者。師也。而君師有智愚。智者、病于聰明、愚者病于瞽聾。風尚艸偃。率誨者弄妄。服從者呼眞。難乎世之免于妄矣。

本氣第二

人有元氣。能活其鬱浡之神。能立其混淪之物。故心腎、以此運持之。肺肝、以此營衞之。所往皆然。此乃資之於大物。雖然。既異給資。豈可混之哉。何。則容諸小物。囿於生化自侘。放諸大物。生化自侘被有。是故人資諸大物。立斯天地。而斯天地。有闔闢。有代謝。有旺衰。有病健。其龐可識矣。雖龐也。於己則精。故一而有神本。神本已分。粲粲可數。神氣者、精華也、本氣者。本根也。本根保精。神華其中。以位。則君上爲尊、衆庶爲卑。以序。則衆庶爲基。君上爲標。人者。元氣也。胎蒴自保。神浡浡活其中。己之本氣也。胎者。父母之絪縕。而人者。造化之所成也。故物之生。本來無病。而其胎既係父母之絪縕。則容貌以肖。宿疾以傳。其根蔕已久矣。而外來之病。觀之於艸木。自非叢生而密。磽确而瘠。數移而瘵。水旱風霜之勞。蠹賊蛣蝠之乘。腐朽。斧斤野火之爲戕賊。則能保其天。有意之類。疾病惟於人多者。何。以神氣之長。本氣之短。交接最廣也。持者。持於此元氣。運者。運於此元氣。營者。營於此元氣。衞者。衞於此元氣。蓋與物竝立。則有相依。已成其物。則有自立。持運者自立。營衞者有依。衞者。依天於噓噏。而防外襲之邪。營者。依地於飮食。而驅外來之浡。故戕害之物。侵營衞。轉營衞之良民。爲艸竊姦宄。攻入神舍。智覺擾亂。進拔持氣。己與此殪。是以資物而立正。是之謂養。假物而救正。是之謂治。病有離著。體

離著　旺衰

有虚實離著。先輩未嘗講之。請嘗言之。著者。病之來也。離者。病之去也。蓋人於絪縕之間微有釁。邪氣隱然乘之。既已乘之。病著之跡顯也。故著之一字。歸天工。以歸天工。而人不得而窺言之。於物。林下艸莽之內。雨暘氣交。忽生菌寓。其氣無所著。安生此物。其氣之所著。明者不能視之。巧者不能推之。是以病有至者。有致者。皆乘營衛之釁而著之也。著則滋育培養。終固壘自守。出兵相鬭。旗鼓一張。勝敗不可知也。人既受病。則其候有旺衰。醫家以虚實而言。熟考之。虚實字。未如旺衰之字之穩。何則實者本足之意。而虚者不足之意。醫典則曰。五實死。五虚死。曰。邪氣盛則實。

氣奪則虚。曰。實則瀉之。虚則補之。曰。實者

邪氣之鬼在此久矣。公慰喩曰。明夕當用仙家功德之法。婦合爪而謝。繼而疾愈。乳媼又發狂。曰。賊來。形瘦而黑。衣以青衣。索之無有。媼忽變聲色而怒。公往而視。媼厲聲曰。瘦黑

夢妄

而青衣者我。出此媼。以作巫。公曰。使之死。而不可得。求少功德。不許。請少酒食。不許。請紙。不許。媼窘迫請一杯水。許。飮畢仆地。既而蘇。乳因之而枯。噫非此公。則此事終于怪。此公之胸襟弗憒憒。可見焉。公又嘗罷官於鳳翔。來京師。道由華嶽。隨行一兵發狂。自褫衣巾。不已。束縛之。衣巾自墜。人以爲嶽神怒焉。公謁祠曰。神不加怒於强有力之奸慝。而於一卒小人不足煩威靈。一小官人。一人病。一事闕神願恕之。出廟則旋風震天地。人馬辟易。公曰。神怒。吾行矣。無復別事。夫方風起而卷沙拔木。當風已恬焉無事。是故風恬同一氣。水波同一物。意智有惑。念頭起風波。風波一轉。月明潭底。閱正宗回春。載有夢爲城隍殿

漸醒而其痕青紫。焮腫疼痛者。名以陰毒。蓋本於金匱。陰毒之爲病。面目青。身痛。如被杖。此其實夢之會。疼者。赤水醫案載。妊婦夢見亡過祖母揮拳打背。胎動血下。是夢之會胎

寒熱
溢涸

動也。是所謂馬齕枯萁、喧午枕夢成風雨浪飜江也。城隍何與祖母何與齊實虛者　氣之虛、則實者有餘之意。而虛者不足之謂也。既有餘也。故曰旺。既不足也。故曰衰。邪氣雖旺、形體雖衰、而元氣未闕。謂之實而可也。不可謂之旺焉。可瀉可補。邪氣之盛、　氣之微。謂旺衰者可也。故　氣實者、雖邪勢太甚、有良援兵、則突出夾擊。可以勝敵。如不得良援、則張巡終死睢陽。故謂之閉證。雖邪勢既退、而　氣既虛者、主將尫弱、軍士偸墮、無復恢復之勢。故謂之脫證。衛病之大綱、寒也、熱也、營病之大綱、溢也、涸也。肌之生寒熱者、不得溫之中也。生溢涸者、不得液之和也。中而和焉。之爲大健。不中則偏、不和則戾。偏戾失常。受病於營衛。涸則饑渇、枯瘠爲貌。溢則痰液、腫滿爲貌。寒、則衛氣之厥、寒塞其衛溫則死、熱則衛氣之鬱。熱藏其滋潤則死。夫其外來者。邪也。毒也。所溢涸寒熱非外來焉。故何則

治處

病渇者、善飮而不腫、被蜂蠆之螫者、雖不飮而腫。浴湯脫衛溫、則不迎風而冷、挾纊鬱衛溫、則不向爐而溫。故溢涸者、失滋煦之和者、而寒熱者、失冷溫之中者也。今考醫家之所見、求姦宄於良民之外、火熱灌水、氷寒和湯。水溢倩禹、旱乾借湯。故藥性配寒熱乾潤、按圖求驥。雖然積艸之熱、疏散則已、麴糵之冷、閉之則溫。由是考之、醫典之言、猶不免冥搜。後生未有所適從。吾未能辨藥石之才、隔靴搔痒、以俟後世起從我言者矣。故神氣之病、察之於正眞。本氣之病、探之於中和。讀史察天下之禍亂、未嘗有一朝一夕而致焉者也。某縣殺吏、某郡殺守、或同惡爲聲援、而終至海內瓦解。人之於疾病亦然。絪縕之間病有所著、或保聚一處、或走散多方、又且同慾相求、以窺神器。其著也、必有所以著者。而或不可知也。故靖亂之謀、就亂之起處、有按撫攻戰之事。今之謀治者、求病患在何經、由經求

之於臟腑、由臟腑求之於藥之氣味色性。其說則詳、其處置則迂。」

禱祠第三

察其始而本無生。芒芴之間氣以之生。生又之死。是相與爲春秋冬夏四時行也。此人未有。誰其憂之。偃然寢於牀也。乃與向無此人之時同。何以噭噭然隨而哭之。有損生者、無益死者。此論豈否焉哉。即以此養心、以此道人。人將相食。夫人之爲生情慾意智也。意智之明雖能照理、而情慾之心弗可奪也。既已弗可奪也、豈可弗養哉。夫人勞苦倦極而呼天、疾痛慘怛而呼父母。天鬼胡省于我情。屈于人、將伸之於天。知不足于人、將知之於天。詩曰、悠悠蒼天、是何人哉。孔子曰、知我者其天乎。將伸之知之而無道、裁之瀆神誣天。是聖人之所以設神道而教天下也。感應者造化之能。天人不隔、奚在誣矣。人情見人之患、願除之、見人之難、願救之。雖知不可如之何、而不能安于不可如之何矣。故誄曰、禱爾于上下神祇。禮曰、復盡愛之道也。有禱祠之心焉。望反於幽、求諸鬼神之道也。人死不反。決諸智、判理斷、則何飯用米貝、何賵用衣衾。惟此弗忍。故既殯、瞿瞿如有求而弗得。既葬、皇皇如有望而弗至。始死、脯醢之奠、將行、遣而行之、既葬而食之、未見其饗之者也。而上世以來、未之有舍也。乃成于其弗忍焉。以無饗之者、廢之乎、致死之、忍也哉。爲有饗之者、祭之乎、致生之惑也哉。纊已屬、而人鬼隔矣。然猶望之生、若疑若待。人之情也。況君父兄長。病在牀蓐、孰不爲之熱中。孰快于曰命盡而拱手於是。禱之祠之、精誠惻怛、欲已弗能者也。惟事褻瀆、傾產致媚、期必於所求、不亦惑乎。靄然愬乎、優游情慾、裁制禮義、盡於人、望於天、人之道也。藥餌盡於人、禱祠望於天。力盡矣、情竭矣、臣子之情、冀可纔慰。治水者、能伸水之情、治人者、能伸人之情。人情者、聖王

醫禱

之田。禮耕。義種。學耨。仁聚。樂安。措人情而務意智。非先王之道也。」夫醫禱者。感應之事。盡心於天人。以望其生。而感應者。神之所不測。非可必也。故其相得。醫禱共應。其相背。醫禱共失。惟禱祠之誠慤。感應微也。醫藥之効否。功過顯矣。自天地觀之。醫禱出同情。切恐彼姦巫薦工。欺害斯民也。人情之弗已者。天弗廢之。古者巫醫竝稱。蓋疏弊通情。聖人之設。可謂曲盡人情矣。」

醫藥第四

病由

生幼老死。生之常也。疾痛横夭。生之變也。詩曰。神之來思。不可測思。人之爲病。彼此交接之間感應爲種。釀病百出。絪縕有和戾。稟受有厚薄。外而寒暑燥溼。內而飲食男女。心交則喜怒憂歡起。技接則殺活予奪出。且人以智多慮深。情濃慾厚。不能如佗蠢蠢動息得節。交接能時。以本氣之至弱。居疲勞之途。於是乎。疾病。寡于植而多于動。寡于物。而多于人。」病者。絪縕交接之間。淫淫釀成。客以禍主。所釀爲因。所見爲證。因者。神也。釀之機也。證者。天也。釀之遂也。釀際難求。得證溯因。以因辨證。證可見。因不可見。雖不可見者。不可冥捜。而概忽略之。如皮相何。是故。人生爲其地。病爲之客。循生之常。則健。値客之變。則病。民之疾病。與民偕生。則醫禱之道。亦不得不與民偕生。

醫祖

太古尚矣。無得而傳其始傳名者。我稱大己貴少彥名。彼稱神農黃帝。大己貴少彥名。與神農黃帝。策傳其名。不傳其道。則醫之無可傳述者。和漢一也。醫事初見說命。梗概具周禮。然未知論說方法如何。宇內廣矣。我不能悉通其志。姑就梵漢之書。以說其緣起乎。梵則曰。地水火風。各生百一之病。漢則曰。五運六氣。終淫七情之感。皆手不至痒處。

禍原

爰探漢說之禍原。周季技能之士。以口舌馳鶩天下。譚醫家。欲以其佞與百家馳騁。託名黃岐。以立說。於是天地之道。陰陽之分。寒暑

常變

之運。晝夜之行。臟腑經絡。飲食起居。括囊置諸其中。然要其歸。則五行配當。窺窬杜譔。可玩之於典籍。弗可徵之於實際。素靈之後。祖述之者。世有稱扁鵲所著八十一難者。其佗。王叔和。皇甫謐。皆推衍增益。使問道者。皆左陷大澤。既已陷大澤。猶且執旗鼓。驕於杏壇。矣。後有厭其醜態者。偏取其辭。終棄其因。皆相爭墮一隅。夫生幼老死者。非變。疾痛横夭者。非常。雖然。變者由常。常者爲變。則變化錯綜。出于條理齊整之中。故神本之二氣。神活。情智。本居營衞。是以其變亦或變于情智。或變于營衞。故氣和而就養則常。戾而賊衞則病。以賊衞。曰邪。以害養。曰毒。隔則爲二。融則通一。大而天下之治亂。小而一身之病健。亦惟常變之間也。人身之條理。出于天地之自然。醫藥之感應。成于醫人之技術。遊感應技術之中者。未知天地之條理。譬如舟子未知風波之理。而能使風波。由其所使。以自窺窬。

五家治方

傍人觀其巧。而併其窺窬信之。夫儒士任以三才。然於人身。無所發明。偶有語及此者。亦就方技家書。甘其陳腐。於是五家執牛耳。號令天下。稱立言垂範者。亦唯餔其糟。歠其醨。蓋身生病健。天地之條理。禱祠治療。人情之不可已者。以期其感應。乃巫醫之事也。攻病之法。外有浴蒸按撫。鍼焫貼擦之方。內有湯液服餌。安心檢情之事。其途非一。而今歸重於湯液家。其所推尊。在漢張仲景氏。閱其書。方則美矣。法則仍舊五行六經。撰次亦出後人之手。難悉信從。於是乎醫家無正經。立標道人之徒。措其實徵。徒求於洛誦之孫。各以其所見立法。觀其治。則入幽出明。起死回生似與造化爭機。審察之則獨擧合其意者。而措不合者。於是。其謂陰不足陽有餘者。亦奏効。其謂陽不足陰有餘者。亦奏効。夷考之。則各失天地之條理。阿所好。而衒其技矣。安在與造化爭機。晋耕孖山之田。汲孖溪之流。文

淺識陋。亦奚言焉。雖然。千古之豪傑。偶遺天地之條理。俟晉言之。不可委之於技家之私說而止。醫樂之方無佗。在審感應於病情藥性。不宜聞趙括父子之譚兵。以逆覩勝敗也。今技家之於病藥。或有專奉古醫典諸本草。以爲規矩者。或有各立所見病情藥性彼此爲氷炭者。皆能得鳴世何哉。蓋古之學書者。有聞江聲而進者。有觀劍舞而得者。意有所注。則由所觸而達。修禪者。念念在禪。故棒亦悟。喝亦悟。彈指亦悟。舞踏亦悟。悟在我。不在物。故念在藥石之感應。於素靈亦得。廢素靈亦得。所得則在我所求。得於所求者。未必得其所不求。故所觀則江也劍也。所悟則書也。未悟江與劍也。噫素靈以下大本既誤。則失徵於事物。冥搜暗證。辨雄者勝。技在感應事分條理。感應之驗。不可沒。而條理之道。無明之者。於是。誣感應之所驗於窺窬之議論。故黃子厚讀易。得于天行健。灸百會。治久瀉。其

驗已在。雖然。天行恒健。而瀉療弗盡頂門之一火。病目者。望五色重輪於燈。病耳者。聽蟬聲瀑布於虛。被酒則見寡爲多。座靜爲動。怯夜則見石爲人。遇木爲鬼。視聽思慮既正。則豈爲佗眩。今取醫典讀之。不能以天爲天。指以爲金。不能以東爲東。指以爲木。噫腎何火焉。腎何水焉。天天金金。東東木木。而後事物正焉。今變濫名物。意盡天地之秘。窮陰陽之奧。奚與病耳目患酲怯者異焉。五行者。治邦家之至寶。支干者。計日月之數目。而以爲造化運氣之樞紐。爲形體疾病之根據。皆見空認花。畫蛇添足。睡者語之。醉人聽。縱技再起。齊桓三蘇號子。於其論辨。則吾不取焉。倭姬曰。左物不移右。右物不移左。左左右右可以砭醫家之痼。見其觀既正。欲易左右得哉。左右不易謬誤。無所撿。病情藥性。余未能究其感應。而條理則有信焉。由基之客。雖弗勝射。說能伸於基。疎於治者。亦何禁焉。夫養生者。

水穀鹽蔬。攻病者。藥石鍼焫。養生。則以天保天也。攻病。則以人濟人也。是以治衆者。以運爲格人之感應治病者。以感應致氣之運用。故欲治亂。則須知人情而疏害格感欲治病。則須察病情而疏邪救正。知人情而未辨疏害格感之方。察病情而未辨疏邪救正之具。共徒爾者也。持生者。曰正。賊正者。曰邪。繼生者。曰養。害養者。曰毒。持繼生之事也。賊害病之事也。正邪養毒。氣交之態。鬼神感應。事分向背。故藥毒無常。用活而動。夫人以平立。病以偏釀。故飲食助平。藥石濟偏。助平者。其感亦平。濟偏者。其感亦偏。以偏攻偏。復平而已。毒藥之所以通名也。故無故而施藥石鍼焫。猶有故而不施藥石鍼焫。已以偏濟偏。一旦謬治。可無實實虛虛乎。夫物之入胃。油然爲雲雨於一身。饑渴勢頃。飲食致平。觀之於酒。氣之入腸。洋溢一身。其證昇降吐瀉。目眩舌卷。心酣足痿。何所不徹。而今分藥氣論。十二

經絡之通路。可謂鑿矣。一堂之絲竹。甲泣乙歡。一罇之酒。趙醉李醒。夫孕而經閉。婦人之常也。然盛胎者。按月行經而胎長。漏胎者。孕中血下而胎保。且晉亦親見平生無經。孕而見經者。孕不孕。偕無經者。人事既如斯。本艸方法。奚一感應。藥食性能。豈可膠柱。故數易天下之鳴技。不愈。樵叟漂媼。應手愈之。堯舜未爲盡人情。扁倉爭能極病情。此故感應之妙。非智之可盡。技家衒巧於情之所應。拚拙於見之所不至。執一効。舍一不効。雖有所長。亦有所短。英雄之欺人也。蓋古之稱聖人者。非謂無所不知。無所不通。萬技不遺者。能長于知其才。用之者也。此故古之聖人。有醫之用。無醫之説。素靈之作在周季。周季燕齊方士。以長生不死。誑人主矣。拜考醫仙之説。同時而成。故素問本艸。醫仙之道混。醫者民生日用之急務。仙者迂濶無徵之空譚。醫方之災二。曰。配當生克。曰。神仙服食。苟有志方技

知覺眞妄

者須祛此惑而徵諸條理驗諸感應病天也醫。人也感應天也。運爲人也。不可舍天而責人。亦不可舍人而委天

知覺第五

神者、運感應知通而爲用、物者、資水燥土石以成體。資則氣液託臟、骨肉託腑、而感應交於外。知通運於內。知解分辨、思惟謀慮、運於有意。知覺省悟。保運化持、運於無意。知覺者。神見於交接。其始圓兮漠兮。淡淡焉。已一交接。如風觸水面。雖微而無所遺焉。故人持淡淡之素。則知覺眞也。毒邪染素。知覺爲妄。是故知覺非貴。得眞爲貴。見色知色、觸氣知氣、我取淡素。以知其眞、食甘爲苦。以苦爲快。我素既染。其知覺妄也。是以今措其眞。以有言於妄焉。

目妄

色具衆彩。而目取其眞。神如病妄妖象幻現。變大小正邪。誤遠近有無。今試之於鏡。鏡凸則影小、凹則影大、頗則爲邪曲。目本一水珠中。容一顆小烏珠。映於水珠者。取鑑之於烏珠。烏珠失營養不能致其正。以致此妄也。目有津液。蘊鬱粘滯則爲眵。熱蓄血肉。侵入眼中。蒙茸淸絡。引血攻水珠。雲霧四起。若無郤敵之術。至進奪明。望燭則燭光熒熒。懸于一圓彩虹之中。是無佗方邪之掩明。而掩者猶薄。不能掩熒熒。退居欲昏之際。理同於雨餘之虹霓。精有疲而空華亂墜。明生翳而浮雲爭飛。知一烏珠之精容奸於其中焉。金陳吉老治一男子視正爲斜者。曰。閃倒肝之一葉。搭于肺上之所致。是非老瞽欺衆盲。則記者傳妄誕也。市中賣鏡。琉璃玲瓏。磨留一稜。隔之望物。物皆發虹彩。又有一鏡。其面如龜甲文。隔之望物。恍惚一箇爲六七。玩之則得其理於髣髴。是故鏡色至淸。假色於佗物。若前無所當者。認物於眼中。非目之罪也。神之妄也。

耳妄

耳亦玲瓏洞徹。爲鏡於聲。妄能遮眞。寫神語鬼譚於其鏡。是又神之爲妄者。非耳之罪焉。耳而病妄。煇煇鏘鏘。如烈火鳴鼓

鼻舌之妄

如水涌蟬鳴。夫耳者好疏通、聾於窒塞。今以手掩耳。則有轟轟然者。成于其塞。道家謂爲天鼓。已以無聲爲有聲。故不辨有聲於無聲。瞽者之以明爲晦。聾者之以喧爲漠。其事同焉。鼻淡辨臭、舌淡辨味。滋液運轉之間。病釀染素。而自覺妄臭。自作妄味。鼻舌之用。本在覺自外者。而今舍外來之臭味。自發妄臭味。豈得非内有所釀而然哉。胃者積水穀。以供營養。其權在上肝下脾。其絪縕能化養身者。而不能化賊身者。故食新好而調和生熟得節則養人。若食饐而餲。魚餒肉敗。或堅硬。或過量。皆能妨消化絪縕之力。不能釀可布之津液。翻敗壞之。遂溢胃表。爲惡心。爲嘔逆。釀酸釀甘。靈泉失常。若夫嘈雜。所欲布之津液。爲鬱熱煎熬所閉。致此辛酸。澹泊無味者。疲于消化。而不能受飲食之覺也。烝熱熬肌。則接鹹覺苦。猶目中生彩虹浮雲。耳底起蟬鳴波響。鼻覺爲腥羶諸臭於所無也。自咽至腸。

饑渴飽悶

涸溢寒熱

職傳道轉輸。伸縮爲勢。其勢咽者如壓。胃者畜而待肝脾之營養。事畢輸其査。待其新。待新而不至。其覺爲饑渴。胴中不停物。以歸之於腸。腸受而不漫發。以持關鍵之柄。故營氣有疲。不能消化胃裏之膩。爲絪縕。爲津液。則胃實住而無用之者。或不能消化。或費日月。而後纔供營氣之用。故飽悶之覺者。營氣不勝胃裏之積也。胃中之養。惡過與不及。有事於此。可十人辨者。令七人辨。則困而疲焉。可七人辨者。令十人辨。力猶有餘。饑飽之理察之。思過半焉。夫膈上者。衞氣中。膈下者。營氣和。故雖水飲滿腹。營養有閑。不能引滋潤布四標。則乾田求潤。空引水漿。雖引不能潤其乾者。堤決而水不能注溝渠也。若營養不能制濫水。溢胃表。雖雲霧滿天間。不能結雨而布澤。溝澮徒設。空望雲霓。水溢肌膚。營氣爲之所逼。體腫息喘。衞護之間。鬱達偏走。開閉不常則祁寒流汗。盛熱發戰。營衞之妄也。夫

知解之妄

痛痒麻羞

病癲病狂。皆轉眞知解爲妄知解也。蓋天地。見露而不見沒。見麁而不見精。人提己而窺非己者。視鬼神之跡。泥於其爲物。苟不以反觀滌洗腸胃。膏肓難醫焉。視聽聞味之覺。成于外臟之粲文。痛痒麻羞之覺。成于肌膚之平淡。審之神本各具之。以其反。其體異也。是以惻怛悲哀者。神之痛也。憤恥羞惡者。神之羞也。技癢切齒者。神之痒也。癡態冒證者。神之麻也。乃神之舍平淡。而走于偏之覺也。夫一身之以皮肉筋骨立也。資天地以成營衞之滋煦。其滋煦得適。氣血和平。身內無事。天地與我一也。飱饔之於口腹。聲色之於耳目。雖是人之常。己有意。不與天地一焉。雖然此則人之常事。被害於養。而後病之事也。痛者痛傷也。憂悲之意。痒者快傷也。憤鬱之意。故痛成于血傷。痒成于液鬱。血者以活爲神。傷則痛焉。此雖或於頭。或於胸。或於腹。於腰。於肢。於耳目鼻舌。於筋骨爪牙。雖於外感。於內傷。於打撲瘡瘍。於氷霜湯火。共是血傷。故棰杖之下。輕則早和。痛去而無痕矣。重則血死。痛留而肉疻矣。人死後有皮膚黯然疻者。血之敗死也。痛在血分。痒則皮表。皮表則血歷練漉而既淸之地。有腠理。常爲開閉。開而不閉、生氣之脫覺寒。閉而不開。生氣之鬱覺熱。痒亦熱之類。而寒熱徹血分。痒羞者在液分。故痒處爬搔則見液裁入裏。則血從痒者搔而求傷破、痛者摩而主愛護。故痛徹裏。痒不到裏。蟣蝨蚊蚋之螫、毒鬱皮表、其快在漏氣、蜂蠆蛇蝎之螫。毒侵血分。其愛在不觸。故疥癬患淺。癰疔痛深。至其錯綜。胼胝無患。痘痒致死。猶春生秋收之際。牟麥菘葸之秋生夏老。而不戻四時之條理。因察血液受患輕重。痛痒者、知于氣血之運、麻羞者。知于筋骨之精。羞者在表而不染人。故觸者過。則其害去矣。麻者入精分。而不在血分。故患不在其活運。而在精力。今人坐久倚久。運通窒塞。既而

開運通之關鍵。氣血逆通。其覺如刺如羞。是活運之盛。復初之勢也。筋緩而精不注。骨失養而力不生。雖有其物。而疲頓不執其役。筋骨既受患。而氣血之運仍舊。肌肉不腐。爪髮長矣。筋骨皮肉之分可知焉。夫麻木之爲症。精力疲而知覺亦廢也。今就其微者曰麻。其甚者曰木。於鼻舌則不知臭味。於手足則不解握步。陰陽本一氣。一氣剖析。神本分矣。神氣影本。氣知其不佗矣。惻隱即心之痛。羞惡即心之羞。凝者心闕運用。麻者氣闕運用。心痒者齒切。身痒者手搔。心身偕惡其羞。是以斥陰事。則心羞。摸陰肌。則身羞。目之有明。遇勝己之明。則羞而閉。鼻之惡質。會物之摸之。則羞而嚔。以刀輕刮竹。則耳羞。輭滑入口則舌羞。人觀文之隨地而殊。不能一貫之。目則曰羞明。肌則曰怕癢。非條理之言也。蓋麻不厭物之觸。已羞厭物之觸。已而麻重於體。羞重於心。故身死于麻。心死于辱。蓋人之立。神

睡厭　饑飽　內狀

活。精奉飲食以繼營養。是故睡者神運不給之覺。厭者精奉不給之覺。水穀乏于給。覺饑渴。腹肚過于分。覺飽悶。

饑飽者成于給賓之間者也。饑固害生。飽亦害生。貧賤常受饑害。富貴常受飽害。口舌之嗜味。猶君上之嗜宴樂。腸胃之爲運輸。猶下民之務徭役。口舌唯知肥甘之可嗜。而不知腸胃之勞運輸。運輸既憊。或閉食念。或催瀉閉。若早知民庶之騷擾。宜哀痛之詔。以回民心。若覺之晚。則大事既去焉。夫人之內景。肋下有膜。以隔上下。膜之正中高褰。如曝網狀。外望以爲膈部者。乃中褰高舉之地。內景則圍於衞膜。受摩盪之化。生機之欲也。褰者降低。肝脅露於肋下。生時見爲胸脇之患者。多是膈膜以下之事也。胃之上頭則咽。乃氣之分。姑以通飲食。咽之下頭。則胃乃質之分。常以盛飲食。是以賁門即氣質之界。而關防不如幽

氣感意通

門之一過。不可復踰之嚴。是以飽則氣溢賁門、饑則食不塡賁門。氣溢賁門上、則待其消而平也、食不足賁門下、則待其塡而平也。易謂頤。愼言語、節飮食。飮食之節。法文王使民如傷。則太平可保焉。彼爽口快飮之徒。常以地濁之膩厚。突賁門之上。邪在君側。安得令君安起居焉。筋骨勞動則摩盪疾。摩盪疾則賁膩液之給急。膩液快通精力益盛。一身快活動作得節。雖氣溢賁門而斯須消化。能照此理則絪縕摩盪之狀。視之於掌。

唯人通其智解、塞其氣感。故鳥獸則哺辨毒藥、人則饌不辨鴆砒。故以我所通凌物之所塞。非天地平觀之眼。物之作止從氣感、人之作止殉情慾。情慾役意智、求快意於一時。人之多災患。職此之由。若不自省將招以人而不如鳥之誚。

鳥獸終日就其食。不逢其毒。氣感明於意

動植本末

智焉。鳥獸之孳尾。感至而交。既無情意之內煩。是以無復產乳之艱。觀之於馬牛。一受胎之後。牡逼輒蹄。謂之護胎。人以意智長乎物。而爲長者擾釀成百災患。平觀天地者。豈不作一長大息矣哉。

運爲第六

有意運爲於思行、無意運爲於營衞。蓋渾圓之體、以中外成、半圓之截以本末立。而萬物皆資天地者也。天地定上下、人物定本末。天氣淸而華焉、地質濁而液焉。淸華之氣好昇、濁液之質好降。資諸天地、則不得不相應。分諸天地則不得不相判。動植同資而同中相分。於是艸木本在下、禽獸本在上。雖本末異上下、精華同上浮。艸木以不用意、闕在內之文。故取養在下而自表、禽獸以有意、曲在內之文。故取養在上而自裏。故諸動養入口。占所住於胃。四肢之標歸地。是以植末含精華而推於天、動末以麁質而壓於地。是動物之

精力

氣血
筋骨

所以噓噏擁氣而升、飲食有質而降也。是以營衛之事。要在升降。顚脊立中、衆筋根之。質自口入、氣自胃運。水穀爲尿屎、而走下竅。精氣爲息脈、而向表體。唯邪毒有淫活動受病。此生。以資始者爲主。而非資繼者不能長之持之。筋骨有精力。受衛養於天氣地賦。營衛之用在本、精力之用在神。故精力在外、受主之命、則其精注所命。營衛在內。其用不在主之指揮。精之所注神鍾、力之所注氣勵。此勵也雖如由噓噏。悉之膜亦赫䟣筋、則亦氣注皮膜而然也。筋本根乎骨。而雖無骨之處無不至焉。夫胸腹者。受天氣而爲膨脹。今欲注力於筋骨手足。二便之用。先停噓噏而勵。不受天氣而精力溢漲。腹氣怒而力至於所注。心悸怔忡。脈疲及於精力者也。骨立筋維而皮肉成體焉。氣煦液滋、神運其中、精注力至。令行其中。故一身之屈伸卷舒。機關全在筋脈。而筋脈依氣血之滋煦。弛張得宜。

胎中
胎後

兒之託胎。父授母受。其體全成于母。已出母胎、則天氣地賦自資。營衛行其中。此時耳目鼻舌。未能施其技。雖有手足。無其用。天氣地賦之養。日月稍足。耳目肢體稍可用也。蓋初生之時。息食之技已成。而筋骨脆弱。於是知。臟腑營衛之氣、則在胎中而成。筋骨精力之氣、則出胎之後。受天氣地賦之養而始調。筋骨精力足之候。乃我精神亦始全。既而年老。耳目肢體之技先衰。天氣地賦之養終殲焉。於是知。營衛成于母氣。精力假于大物。皮肉先備。筋骨依養。不足于內也、致縮急。有餘于外也、致散緩。手足懈怠者、筋緩也。手指龜者、血凝也。是以營血不活。脈攣則舌卷目吊。營血遊墮脈緩則言語不辨。精力失養。筋急則指屈肢急、頸強腹攣、筋緩則手足不收。要領不持。氣血好活達流利。惡鬱塞滯礙。鬱塞滯礙。在臟痰飲癥瘕、在肌瘿瘤瘡癰。鬱塞拒活達流利。別開造

出血

化則於腑蚘蟯、於膚蛆蝨。及其變、如蠐螬者、如龜蛇者、如玉石者生矣。肉頑而癭瘤結、液腐而瘡癰潰、滋液結痰飲、氣質見癥痂。何與彼水之滯結泡沫、若糊若石、淤之生藺雞子子異焉。結則別開造化、纔一身者、輸之於賊之陳營。資始乏于所給、賊軍富糧。痰涎愈涌、津液日乏。塊瘤愈大、肌肉月消。特路糧道絕彼開此而已。蓋臟腑脂膜、雖固密隔體乎。運活之不礙、猶火氣隔鍋而升、聲音隔壁而徹。故氣血之運輸、固有道路、而至遊散充實、則混然無迹矣。若其失道也、氣致鬱塞、血致沸騰。

沸騰或發口鼻、或下肬肛、或依瘡口、或依傷破。按其証、衂與下血、未爲危証。至吐血、其害大酷。以知所由來之不同。我意心坎畜無上之仙露、脈資地賦之絪緼於胃。其有病也、血失輸脈之道、輸道既閉、新釀之血液、閉所進。而無再歸之路。後軍競進、終猛突迸躍而出、脈道受敗、不滋玄宮、傍流成熟路。雖有混混之源、直向尾閭而去、經氣失偶、鬱熱侵筋骨、脈液無所灌、肌肉瘦削以待其斃焉。如佗之出血、縱致大漏、其源不涸、將有補之之日。平生無病之人、或會大憂、或中酷毒、須臾嘔血而斃、憂患之動、成于心之拂戾、中毒之動、成于營養之擾亂。由是察之、如嘔紫黑血、屯塞之際、君主有權、以逐跋扈于我者。或事可成焉。若縱其奸邪強梁、以相賊元氣、則事未可識也。或曰、腹裏皮膜重疊、何以爲此沸騰走崩。曰、眼中未見一鍼孔、泣則涕淚滂沱、膀胱無上口、液融則滲漏滿內、經水之聚胞亦同矣。然則吐血之不知所由而來者、由不假門戶、吐如豚肝。恐一踰險、以爲凝狀、與而歸之於爛傷擦破、或其然、或有不然者焉。

感應

夫運爲者、神之態也。然而其神亦因地異物。

蓋病者。以已之神。會邪毒之神。方其求愈。假醫禱之運爲。運爲之間。感應見焉。醫療者。見物與病之感應。禱祝者。見氣與病之感應。世之醫者。譚及禱祠厭咒。笑且排焉。是亦未深思而已。我見刻期拔骨鯁者。見徙癬於樹皮。樹皮瘇。而其患除者。瘧者。暑邪傷人之衞也。浴水灌水者。醫之刧也。其愈亦不足怪。齊桓康之畫像。五季朱瑾之墓。士亦敬畏之所存。或有感通者。虬鬚似太宗。色映塞外。春正與盧扁爭技。亦奇也。至封蜘蛛縛艸木。以能瘳。則藥餌之所不及。兒戲以除之。無影迹之可窺焉。病之最怪者。運爲之最奇者。是以世有瘧癘之稱。愈知造化之巧。運爲之妙。不可得而測也。理窟之人。至此其辨窮。惑神之人。至此其惑痼。於不知造化。則一也。世有管輅者流者。以不測之爲。混之於不揜之誠。欺人爲與鬼神酬醋之態。託神攘穰焉。惑之甚者。患未除。而家已蕭索。周宣三驗。於占夢。畢竟奇捷與事會。衆認此妄。誤彼眞。從巫祝指揮。當感應相會。以此認鬼神之情態。則非矣。是故人有意智情慾之運爲。有病意智情慾之運爲。有氣液骨肉之運爲。有病氣液骨肉之運爲。有質。病寓其質。有文。病寓其文。言之於財貨。深藏之有腐爛蟫鼠之慮。不藏之致風雨盜火之難。故病之變化無窮。治之之道。亦在應其變。故抱怖畏之人。符璽能安其心。惑鬼神之人。祟咎能病其人。假而治之。如灌水截瘧。怒人止噦。謂之醫之術。亦可也。唐許胤宗曰。醫言意也。思慮精則得之。吾意所解。口不能宣也。古之上醫。病與藥値。唯以一物。今人以情度病。多其物以幸有功。譬獵不知兔。廣絡原野。冀一人之獲。是好議論。冀今之技者。能洞見人身神物之條理。熟疾病常變之態。能慣藥餌鍼焫。撫摩熨浴。百之處。置取本艸方法。爲之筌蹄。則將庶幾於使生者生之道。不然。則趙括之談兵也。雖辨奚爲。又重思之。

致至　交接　正氣

疾病之運。爲亦自有天人。人者、自致也、天者。自至也。至者、不可如之何。致者。機有可如之何者。先輩曰。大風先倒無根樹。傷寒偏死下虚人。不獨疾病家之箴矣。

交接第七

經通緯塞、天覆地載。寒熱代旺、明晦相換。雲騰雨墜、燥煦水滋。是絪縕之沐浴我者也。艸木土石。鳥獸魚鼈。皆我之與而外之。宮室衣服、輿馬使令、內之男女親子。飲食思慮。並養護我者也。絪縕之態。雖無聲臭機氣之可窺。觸爲養賊。變化不測。猶內外養護之物。各有利害毒藥。古人病立風寒暑溼之目。風寒暑溼。本天地間氣。而人所常浴也。古人未講條理。非可以條理責之。雖然條理無古今。則不得不以條理辨之。其四者寒以對暑。則風以對溼。溼以兼水。則風以兼燥。寒暑燥溼者常有之物。無可避之地。已失養護。爲其所傷。其所傷之病。目爲風。爲寒。爲暑。爲溼。如疫氣非

人立　邪毒　井毒

天地絪縕之常。故古人謂之癘。癘者中人不祥之氣也。曰氛曰祲。有災人之說。未聞中人之說。彼望氛視祲。其說雖舊乎。而穆而窈矣。而瘴癘有南北之有無。痘癜有古今之轉旋。漠然之中。觸而爲跡。慘舒自殊其途。夫動之與植。同類並立天地之間。資氣於天、資質於地。動開己之天地。爲隻於植中。溫於寒熱。和液於水燥。資地於植。資天於息。是以夏氣之鬱燠、冬氣之栗烈。燥氣之煦、水質之滋。能造我。能化我。持我有元氣。保我有本氣。無事則生少老死以序行。有事則營衛情智取次出。絪縕有正邪。飲食有養毒。邪之爲病。之爲癘。癘本鬼災。以相通稱。時氣稱疫癘。方氣稱瘴癘。分則有別、合則一邪。如彼習井金井臭味無跡。毒結殺人。

天明癸卯月日。豐大分郡。成松邨。邨長有女。年二十。夙興臨井。將引綆轆轤纔轉。身已墜井底。家人驚愕。一健奴脫衣直入。援

女浮水面大噓而沒。又有一人從入從沒。家人畏怖。不知所爲。又有一壯夫。曰豈可坐視三人之死。又赴井。將至水。大噓求救。傍人引出。纔得不死。於是。家衆下鉤探擧三屍。屍皆紫黑。腫滿數圍。後壯夫。懊惱煩悶。十餘日而復常。施治之醫。亦怏怏數日而已。聞之鄉人。是水本不美。供浣漱。而不用煎煮矣。不知井底有砒。其毒得罅隙暴發乎。抑一時有結者然乎。爾後此井覆石不啓焉」

和戾

觀鼠之死於礜石。蛇之斃於蛞蝓。知有反戾於我者也。是故雖同是邪毒。其性之不同。猶同是音而有金石絲竹之異。同是味。而有辛甘苦酸之別也。氣氣分物。感應變用。變化之所以出也。性性和則能養。氣氣戾則能賊。養者和氣也。賊者戾氣也。故和則能生育、戾則爲戕賊。是所以植有豐儉。人有禁好也。是以性之所異。感應不同。故君子愛小人之所嫉、小人嫉君子之所愛。鹽能藏魚鳥。而爛水蛭。藁能藏橘柚。而敗沙噀、是以。其所戾于甲。不必戾于乙。和于丙者。不必和于丁。廣試之於物。禾黍菽麥。瓜茄菘蒜。凡百之生。參差觀豐于甲。儉于乙。榮于丙。悴於丁。蓋植者腐朽瘤蠱。痛苦之知覺。動則爲知覺所惱。致百苦楚。唯神氣之所病、姦邪妄惑、本氣之所病。痛痒苦患賊邪之感。應之則病。應有向背深淺。而病否輕重分。我歷年所閱。傳染感應之所成。見貍一時斃。見狗一時猘。見甲蟲紛飛食松杉。見蟋蟀群聚食黍稷。見竹品結實而盡枯。享保中。見關西穜稑。數日之間腐爛生蛾。至幷數頃放火燒之。又聞之於故老。百年前。牛盡疫死。存者百一。闔國絕牛耕。而貍疫狗猘。其毒不染佗獸。穜稑之朽腐。不及萑菽。浴與所浴。其態可觀矣」

地變

天者定常之宅、地者變化之藪。寒暑發收雖粗定矣、絪緼摩盪以盡其變。是以聚散鬱達。昇降和激。變化百出。以致

持氣

地震。砂飛。島涌。山陷。火出。水發。疾風大雨。飛雹迅雷。皆變戾有激而然。夫人之交氣。全在衞護之保。寒熱燥溼。本不隔病健老幼。所應則各異。猶春風一至。而卉蒴樹榮。牟麥死。稻粱長也。動作之勞逸。飮食之饑飽。稟受之强弱。所患之深淺。以百不同。應參差絪緼。故被戕賊於絪緼之正。而病寒病暍者。乃自侮而人侮之也。遇絪緼之戾。染瘟染疹。乃无妄之災也。時氣則其經。方氣則其緯。

邪氣

瘴者南方之病也。未審其狀矣。病源候論云。嶺南之瘴。猶嶺北之傷寒。從仲春訖仲夏。行青艸瘴。季夏訖孟冬。行黃茅瘴。然則青艸黃茅。猶北地之溫熱。想是由日行之近遠。絪緼微變。證候浸異爾。謂有瘴母。如彈丸。從空墜。四散中人。遠方傳聞。未可固信。又有沙病之說。短狐含沙射人影。中則病云。實其中邪。抑瘴之似然歟。未審其實焉。蠏耕錄載。湖南益陽州有沙壓。夜中同寢。無故相打。醒後數月猶醉。亦似方氣。

轉旋

雖然其獨爲夢顚有事于胸膈者。宜有之。衆而同顚。氣之最怪者。明正德庚辰。寧邸宸濠將作亂。南昌城中街巷軍民。夜寐發顚。至江棹舟。以行數十里。知爲夢而還。宸濠舉事之次夜。一軍亦然。絪緼亦奇也。我坂東之地。有時疾風撲人。風過見創。如刀截。創深者死。里人曰鎌鼬。可以屬方氣。痘明孫一奎曰。上古未之論。列自東漢建武中。南陽征虜。傳流中國。時謂虜瘡。自宋錢仲陽而下。以痘疹爲言。此間則天平中。自鎭西起。入京畿。見續日本紀。而壒囊抄則曰。築紫漁舟。逢風到新羅。得此疾而還。其書不揭本據。不知行譽自何得此說。若結毒於氣液。則傳染於體接。瘵癩自胎。疥黴在體。檢正字通。緬人畜淫婦誘人。犯之必死。謂之人瘴。人瘴之名亦奇。不知黴乎有酷於黴者乎。抑彼所謂髑髏神者之類乎。黴。黴瘡秘錄曰。常午會之末。起嶺南。蔓延通國。此間足利氏之季世。自蠻舶交通。耶

所接

蘇濫世起是一方之癘氣著人相傳。雖有交接之別。亦可以厲疫。夫悠久之天壤推遷之間。爲轉移去來乎。有始者必有終。此毒亦得無盡期乎。有古無而今有者。則必有古有而今無者。典籍以來才三千年。倏忽過隙之駟。孰日暮數千萬載以語推遷之變革書以寓感慨。寒熱燥溼。飲食男女本非賊人者。戾則釀病夭戾之爲害。豈翅病之一端哉。水火者。炊爨之必用。銜之致焚溺舟車者。載泛之要器。忽諸爲失墜。其釁在己。異于彼結毒。以其氣浴人雖同浴之感應之淺深。爲狀不一。以觀鬼神之態焉。唯人淫慾自棄。以得于天者爲戕賊之具。悲夫。

贅語身生帙下之本

贅語三

身生帙下之末

日本　鎮西　三浦晋　安貞　著

四限第八

胎繭于絪縕之閒。胞化於子宮之中。獸則胞鳥則卵。鳥坌之而出。出後假伏之力。人獸脫之而出。出直就乳息之養。而蟲魚者餘生卵不假伏化焉。蓋人胎之長。月信止而爲養胎之資。及既娩。又變化字兒之乳。乳汁稍減。月信稍長。既而母子並立。同食息于天地。蓋人在世之間。大率有四限。曰幼壯衰老。猶謂春夏秋冬。謂朔望二弦。謂旦暮晝夜。

中限以前。其氣盛。言之於陽則如泰卦。以天氣降地氣昇而雖勞動。而其氣不喘。中限以後。其氣衰。言之於陽。則如否卦。以天氣昇。地氣降而有勞動。則其氣陽喘。中限以前。發氣於外。富其精力。肌體溫肥文章

發生。中限以後收氣於內。熟其思慮。肌體冷瘦。文彩零落。」

人命長短參差。無一定之期。姑以大概言之。古人以三十為壯。以四十為强。謂七十為老。謂八十九十為耄。謂百為期。耄者夫聰明之稱。期猶極。謂長壽之極也。驗之於今日。亦復符矣。故七十稱古稀。今試檢閱之。八十者拔於數百人。九十者拔於千人。百歲者萬中不得一。過百者數十萬中。僅有。於是知。人壽大概期七十。故假為限。曰。初生至十六七。為幼段。為初限。十七八至三十五六。為壯段。為二限。三十五六至五十左右。為衰段。為三限。五十至七十。為老段。為四限。不及此者。似不盡天壽。過之者。似得天幸焉。四十傳曰强。素問則為起居衰。靈樞天年篇詳之曰人四十藏腑經脈大盛平定。腠理始疎。榮華頹落。髮頗斑白。俗則稱初老。出衆人之所見。彼此相照。則三四十之中。猶日之午。月之望。為盛滿。故姑以月譬之。初生為朔。七十為晦。盛滿三十五六。折之於前後。準上下之弦。初限之始。始就養於天氣地賦。官司漸開。筋力漸强。手足可用。營衛精力既足。而知慧發焉。鬚髮滑澤。洿下艸生。顴骨漸露。眞牙正生。女子則月信通。男子則髭鬚長。花開而欲結子之情動焉。漸而月向望。人道無不足焉。氣血轉進。智慧益長。故人雖保百歲。而至四十。則光彩漸減。膂力既衰。下弦期迫。齒搖髮變。皮皺筋露。女子則月信留。而不復結子。故初限則氣血勇進。如蘆錐之出水。如竹笋之離地。雖其質柔脆。而其氣沛然。過午及昳。雖筋骨猶壯。而沛然漸殺。望後之海潮。雖奔騰不減。而給者已歟。初限之後。終限之前。窺之於男女情竇之開。與婦人經候之斷。朔望二弦。自有其應。故幼老嗜好之異。壯長思慮之殊。皆由氣血精力之旺衰。幼時氣血長進之時。其體柔脆。而神氣猶閉。骨肉將長。而其氣壯銳。風寒不畏。

寒雪群弄。春水爭浴。老體强剛。而其氣衰乏。溫暖之愛。見雪縮首。見水縮足。幼兒喜旋轉動搖。老人喜安靜鎭恬。壯者好新花妖艷之容。急于子將結之氣。其遊戲好角力勞筋衰者惱妖冶自憐之態。只想苗之愛護。其動作務客筋膂骨。能辨此四限。而後幼者可慈老者可安。修養治療。可以立其基矣。是故望前事在暢達其氣。宜不以抑鬱滯礙害其長進。古人不禁其啼曰。兒哭則兒歌。不哭不僂儸。欲其氣之達也。小兒之啼曰呱。大人之啼曰泣。其狀雖一。而其情則不同焉。大人憂悲鬱結。假之以漏也。小兒則不然。生下則呱。欲睡則呱。覺則呱。皆達其氣也。但其有求有訴者。以呱代言。亦求其達也。大人之泣。亦雖求之達。而大人則解憂患之鬱也。小兒之呱。則欲伸將長之氣也。觀之於鳥雛獸子亦然。此故其噭咷讙嘑。環舞跳踉。其氣之求達也。老則惡之者。其氣之憚脫也。禮曰。童子不衣裘裳。

古之作者。豈制禮於嗇財。以戕賊人之子哉。宜矣哉。張戴人養子之法。兒未坐時臥赤地。天寒不與厚衣。及坐則與物弄水中。而育兒之家。縕絮之重厚。以閉其生發。肥甘之粘滯。以鬱其絪縕。支體之安逸。怠其鍛錬。飮食之節制乏於所資。過與不及。前後相攻。結癖化蛔。屈其伸。涎其津。運轉氣隨。筋脈縮攣。支體相廢。竟促命期矣。猶田畔之藩樹。數經牛踐馬嚙。爲人摧折。而結瘤塊。又如肥壤之桃杏。生意不伸。終爲脂爲蠹。葉縮幹鬣。以至倒。又如方生之華卉。愛護過度。斷風日之氣。灌培之養焉。使千里馬。進不得就善水艸。退不得足石粟。骨稜稽。毛縮卷。是之謂疳。是上弦以前之病也。蓋兒之出胎。長往之勢。質柔脆。而氣含千里。嬰兒無智識。寒溫饑飽。總在人以望後之所適察之於望前之生。我欲眠而默。則兒則呱呱。我欲就靜。則兒待其敲。以我所好者施之反于我者。不亦左乎。既而光陰

荏苒向望。冠笄時至。欲結子之感內動人間之事、故總聚心頭情慾思辨。多抑遏鬱結舊來之蜖癖。新侵之寒暑。酒食之浸淫世事之齟齬官私之乖戾。蘊結屈心肺腐壞致爛蝕氣血萎苶心神燠惱。骨髓無所資骨蒸蒸蒸衞護失精寢則液漏腠理咳喘兀兀衇數便滑。皆營衞困衰之所致或新釀出之或再變宿疳以爲瘵。其腐爛之毒引子孫薰傍人圃中有茄其沃若一朝見肅散色不終日而液涸精盡。如大灸者抽見其根撲撲生粉黴以致黴焉。人之患瘵亦如斯我聞西洋之人。遇異疾不起解其屍視之瘵人之腹。後則奇纓。崩則肺根腐壞爛蝕以盡驗之於十數人。皆同其狀此說大合鄙衷蓋疳瘵同一病。抑遏蘊結。弗得暢達猶牟麥稻粱之苗糞壤過分苗不勝其涌溢養者釀毒。致腐爛生蛙蠹。唯三因方中曰。其根多有蟲囓其心肺是似不待西人之驗雖然爛蝕之勢。意如癬瘡之蝕肌。舌疽之蝕舌而已陳無擇。謂之蟲囓恐由瘵五臟各有蟲之妄誕爲此杜譔焉。蓋瘵之爲病。自疳。自瘧自痢自產蓐自吐血自結核漏證自外感荏苒久咳弗已自所思不遂。咿嚘積內。自衄血瘀塊妨礙運化之氣自縱慾斲喪自父母遺毒所因雖不同一身漸勞憊。營養不運。衞護解嚴。鬱熱腐壞患著衞絀以侵淫骨髓則一也。故其漸曰勞所因不同已成曰瘵病證歸一勞則得援兵守戰不失恢復可謀也。瘵則賊入子城主將就擒四面絕救路雖藩鎭有勤王之志末如之何而已、自古謂之爲虛者。由一臥難起畢竟是有餘之氣鬱屈致蘊鬱腐黴成爛蝕焉耳想衞中之狀衇輸而行其滋經運而達其溫今毒釀衞中蘊鬱不運腐爛爲蝕胃膩之絪縕不化血液曰致羸瘦粘滯爲咳爲痰沫衞中以闕活達之津液經氣之鬱侵淫于筋骨手足倦怠。熱蒸骨間毒蝕衞中猶外體爲癰血失所歸。

突出咽喉則爲吐血不結血則偏爲痰涎腐蝕既著物痰涎中稍稍雜血兼膿兼臭肺已疲則氣息亦乏脈不得胃給則不得不細數鬱熱徹外則觀頰紅澤世謂桃花蛙桃花外開蛙食其根夫人既生幼壯衰老終歸盡矣故死者人之常資繼已絕則薪盡火熸焉謂之衰亦可也謂之非病亦可也蘊鬱釀得成病營養失源精氣不足非獨痼瘵然百患皆然君相者監之於邦家醫者察之於身體幼失之於傍人之愛護壯誤之於己之奉養我僻在寒鄉一郁男女四百于于佪佪知紡績而衣知耕作而食兒之病痼者或見之病瘵者我齒向古稀未見一人鄰邑亦同焉兒則保持在人傍人之愛易過壯強則稼穡無暇思想不結筋骨之勞動流水不腐戶樞不蠹是以望前之苗稼糞壤愛護不使勝苗之氣水溢疏之久旱灌之芟妨之之芒秀則足以保其天焉若望之潮勢雖持故而非有推進

之者漸過下弦則發生之氣感既殺筋力以衰勇銳奮迅銷行擇路坐擇地之慮生焉故筋骨奔走之氣旺于壯強心思謀慮則熟于衰老至耄至耋精力思慮兩衰焉是所以七十爲人壽之期也老境營氣衰則飲食易飽由布津液之不廣而溺道頻數衛護衰則寒暑易犯由運皮表之無力而噓噏易喘宜少其慮遠其惟幕滋味以助其營養綿絜以愼其衛護不可勞動以傷筋骨也年長不記幼稚之事推畏風寒喜溫熱者施之好惡反者制勞動務檢束抑方伸之氣折漸長之勢非在長者是以修養之道宜知人亦有春夏秋冬以隨時攝生似其至衰痼瘵既往癱瘓發背方來筋骨長于生後之養脂髓足于營衛之調精力於是全矣精力既全神靈運用神靈資于營衛使分精力於是筋骨之精力以奔于人之命內外之分內則衛於膜上營於膜下經脈運輸以達四標外則氣用事於顱

質用事於身。至其用事。則不在營衛。而全在
精力。精力奔于其所。令異於營衛之運輸有
常度焉。然而人身外。則筋骨左右同形。精力
並用內則臟腑蟠屈繚繞氣液一貫。同形者
中界設關。一貫者左右混成。內體。天氣地膩
之精。供之於心。以達四標。故心資營衛無意
之用。神靈立焉。驅使精力。以注所向焉。精力
之寓筋骨。以資營衛也。動作則腹實頓減。液
涸而渴胃虛而饑寒而惡風熱而畏火。乃精
力知營衛之不足也。筋骨勞動則思臥思寐。
又知其資營衛。於是以觀營衛精力。內外光
後之故。唯條理不分。明化工之妙機。千歲無
窺之者。灘換者。四支不舉之證。古人謂之風。
雖有止頭手顫搖。口眼歪斜者。以半身不隨
者恒居多焉。譬之邊冠來襲不能踰關。左氏
傳風淫末疾。正謂此也。古人謂風亦謂氣。玉
機眞言論曰。風者。百病之長也。至眞要大論
曰百病之生也。皆生於風寒暑溼燥火。靈樞

順氣一日篇。百病之所始生者。必起於燥溼
寒暑風雨陰陽喜怒飲食居處。中藏經論風
中曰厥。皆由四時不從之氣。古人以氣爲風。
可觀焉。然則許叔微以中風爲中氣者是邪。
然彼以氣爲喜怒憂愁。則非中也。自此生也。
與劉河間之熱。李東垣之氣。米彥修之溼。以
爲伯仲焉。風症之風。元是外氣。風寒之外。求
之於外。襲此患。風爲統名。分則曰偏枯。曰風
懿。曰風痱。曰風痺。今斥爲中風者。痱也。偏枯
也。發有漸暴。有輕重。雖其證不一。而筋骨緩
柔。主令不行。群盜塞路。衛護擁塞。營氣無由
啓行。而其患多爲重於一方。若左右一時發。
則雖引噓噏於暫時。而命唯在且暮。是蓋毒
著四支之末。侵筋骨。不知此毒果是何物。暗
滋潛長由於衛氣擁塞。營氣鬱發。而其毒實
著筋焉。營食之爲氣。奔然突然。如弩之待機
發。觀之於金創出血之怒勢。潰肚纔得罅。胴
腸激怒迸出。如內有推之者矣。常以此勇銳

能運氣輸液運輸之猛銳卒窒塞要路。不能化氣液。而化涎沫。不能爲嘘噏。而爲鼾睡。治世之良臣。亂世之奸賊。多年書寫之大乘經。一旦間向之於魔道。於是幽主於靈臺。驅臣庶。行暴虐。然內氣猶末絕。營衞稍通。肌肉猶完。爪髮猶長。筋骨精力雖脫。然不奉命焉。遺澤不盡。大勢幸存。收散卒。爲中興。雖大不如祖宗之草創。亦可稱小康焉。欲和其病在肌肉。在筋骨之分。頭顫手戰。口眼攣急。手足不舉。非筋骨失精力乎。爪髮長。肌肉不變。非皮肉猶守其職乎。風者。毒自四肢之末。著筋骨。而改至督任之界者。我於風證取末疾之字。非颯颯入簾戶者之謂也。蓋病有自有其名者。曰疳。曰瘵。曰膈。曰瘀。曰癲。曰癇。曰疫。曰痢。曰癃。曰痘。曰痳。曰疥。曰癬。曰癰。曰疽。曰癩之類。是也。有就物而言者。曰癥。曰瘕。曰蛔。曰痰。曰飲之類。是也。有就證而言者。曰勞。曰咳。曰吐。曰瀉。曰噎。曰噦。曰暈。曰悸。曰忘。曰痿。曰某々痛之類。是也。推因而言者。曰風。曰寒。曰暑。曰溼。曰水之類。是也。寒亦古名也。周禮曰。瘧寒疾。孟子曰。寒疾不可風。故以病則寒即對暍。暍即暑病也。爾來逐次序。而溫熱亦歸病矣。風寒暑溼。重加傷中之字。以爲病名。則傷在我。而風寒暑溼。宛然舊物。似異於孟子曰寒疾。肉經腫曰水。由是考之。古人似以風寒暑溼爲病名。今察腫病。其所見水也。以其因或因傷食。或因瘧。或因痢。或因產蓐。有種々之因。非皆必水也。是以風非必風雨之風而已。故漢太倉公說迵風之因曰病得之酒。又曰得飽食而疾走。說風蹶之因曰得之汗出狀地。孫眞人以脚氣爲風毒。說其因曰風毒之氣起地之寒暑風溼作蒸氣。伊藤東厓以爲大風。腸風。胃風。癜風。幼之驚風。長之心風。心風者神靈之錯亂。大風者。氣血之錯亂。禪家。風子風癲之稱。唐書之風疾使酒。皆可氣字易之。我有取此說。風淫末疾。淫者。以病發

知有所淫。如以風爲風寒之風則皆繫類中
而終失眞中焉。人身督分任合四肢之標。毒
著筋骨浸淫漸積衞護解嚴解營養運憊賊
乘虛闌入溯至任督中界有關不可得而踰
焉。此事徵於初覺不快於四肢之末病發岑
々上行至中界而止發作多待飽悶湯浴矣。
蓋肌膚豐養筋骨懈隳則毒淫標末不誣矣。
儒門事親曰左傳謂風淫末疾豈不知風暑
燥溼火寒六氣皆能爲四末之疾也哉。則張
戴人已於中風之風字兼六氣而戴人則不
謂偏枯懿痱痺而曰風痺痿厥此稱最可也。
其謂可者非我所見合戴人我唯愛其風痺
痿厥之目合條理我意此證病之著筋者也。
蓋厥之一證以後世之脇氣合之而角弓反
張合風以予觀之則角弓反張者痓之病證。
而筋急之狀痓脚氣可共歸厥々者病著筋
而自下上其氣甚駛風病攣急歪斜者以受
病之方其筋緩漫而無患之筋引致之於己

而已而厥者筋急之病痿者筋緩之病風者
不知痛之病痺者知痛之病共著筋之疾。見
此四症其因則闕如于不可知名則不求於
風寒之風若使此毒在肌肉何限中界限中
果則著筋之徵也。夫富貴奉養好色市朝之
人平生不慣風寒雨露霜雪炎風如不經鍜
鍊之鐵以當玉石寧保無刓缺不慣而偶觸
冐之不識不如染之醉飽饑渴男女起臥有
不節焉毒待釁而進日又一日年又一年其
勢終大也田夫夏畦風寒雨露霜雪炎風素
慣之猶戴盔擐甲而赴敵大異于紈袴子弟。
不嘗辛酸者之數受敗焉我與田父夏畦雜
處患此疾者數百人中僅遇一二豈非鍜不
鍜之故哉痼之發頗與之類癱以筋骨受敗。
恢復艱難癇癥蛔占窟聚散徘徊時時犯闕。
病發無年序如疽之一證自非至弱結毒之
人不發於望前是毒不淫筋骨之末而著背
肌肉著處無活運者援兵乏糧顧望不前蓋

少壯之氣血。如降雨滂沱。溪谷溢漲。以疏以通。堤防得全。則灌漑自得其宜焉。其及衰年也。沛然之勢。漸殺。設堰守閘。而停畜之布潤於畎畝。今毒食肌肉。外軍坐視。無進攻之鋭。唯欲退散。故若衰老之人一嬰此疾。氣血既弱不能逐其毒。肉陷而腐。血敗而瘀。幸藥餌給糧。兵勢有振。鍼焫拔毒。道其出路。可或得全焉。天刑癱瘓皆有風稱。而癱瘓自外襲。天刑自初生。自肌肉侵淫筋骨。與自筋骨及營衞。是其異也。癱瘓終奪精神。天刑災不到精神。皮肉不知痛痒。指墮筋沒。是慘毒之尤者其血瘀肉腐與疽類不同其證焉。

以愚觀之厥者。風痺痿厥之總稱。而風痺痿厥者。厥之區別。別則不同。總則不佗也。厥素問作厥。史記作蹷。韓詩外傳作厥。素問說其因曰。從五指而上於膝。說其證曰。腹滿暴不知人。史記曰。虢太子暴蹷而死。韓詩外傳曰。人主之病二十。其一曰厥。無

使小民饑寒。則癥不作。字書蹷爲僵。又爲機發礮石。蓋諸瘰蹷強之勢。苟犯靈臺。輙幽其主。幽之爲狀。其目揜々。其耳肅々。朝曦夕朏。茫不辨焉。神明受幽。外狀與死似。幽中受弒。則其死成。生氣得覺。主脫狴犴。則有以蘇。外證如死。內有復機。遊魂浮動幽中。則怪夢爲幻。故其曰暴蹷而死。蹷便主被幽之名。而死則幽之外證也。其死果眞。不可復起。死者而蘇。豈眞死哉。由是考之。厥者。病起於足入腹。竟鎖神明於靈臺。致卒仆氣絶者。輕者望闕而按兵。重者鳩主於幽中。變之起於不意。若礮石之發機末疾。得名於左氏。而考徵於天地。蓋厥者受幽之證。倉卒幽主。多起於末疾。顚仆撲損。內素無所病。經脈之活通流利。就其處窒塞之。心失營養之給。忽致昏冒。拳法死人。其理同矣。於是卒絶之證。關於經脈窒塞也的矣。心者天眞之所在。活動本茲。神

明依茲內滋路於脈外氣路於經營衞之路達四表賑恤由之而行姦賊由之而入衞敗之於肌膚營敗之於腸胃人率覺之四末之感人難覺然巴豆等之毒物製藥握之於乎卒然瀉下豈得以四末之感輕侮之哉風雨寒暑之外霜雪烟火鹽鹵土泥艸莽藥毒魚鼈蟲豸無不觸者絪縕感應薰染有著潛匿肌膚因緣經脈侵淫筋骨萠於九淵之下者遂達於九天之上或著則露痕跡或如柳絮之點擔上不知不識之間大患既釀伺釁待援卒然如疾風驟雨之起亦一團賊氣從觸處傷之謂飛尸鬼擊者似不必四支之末焉亦可合厥張景岳曰厥者逆也氣逆則亂忽爲眩仆脫絕輕則漸甦重則死說得入肯綮仲景所謂中風者傷寒之偶名素問所謂中風者外受之賊氣元自有別如以痱痺求之於風寒之風北轅之越也故末疾淺淺者

胼胝疥臁腨腳轉筋其抱奸者漸而奔豚短氣腳弱癱瘓至卒厥下蘇而極腳弱少于古而自典午氏南渡衣纓士人多遭之意是異於虜瘡之自南入少于古而多于今者晉家之衣冠以寓客地病之者多爾今我　江都此患最多雲聚霧合皆四方之客多因不慣水土南渡之事可想像焉痱痺痿痙雖因證有區別可歸末疾矣捨名筌入眞際探厥之狀而後可以有所區別香川秀菴曰痛風風毒鶴膝腳氣手氣皆爲痺中之別最得要領千金例中亦曰以歷爲腳氣眩聲主者規規求因證於風不求四末絪縕之染西洋之人治卒倒焇硝灶走心是亦知求之於腳末疾之影迹繋影捕風若求玄珠於赤水唯罔象能知之

疫疾第九

賊衞護是謂邪賊營養之謂毒條理之言也若推歸之則營養衞護共是一生於是乎邪

毒通稱歸一之言也。蓋寒暑水燥之化生。水穀鹽蔬之養生。苟致乖戾於絪縕之際。則瘴厲鴆砒奚隔。雖不隔。而其因既異則具病亦不可混焉。故邪者絪縕之戾毒者滋養之賊是以今受傷於四時推遷之正也。葛伯之討於湯也。遇病於天地乖戾之邪也。文王之幽於羑里也。蓋營病受害於眞毒者少。衞病引災於眞邪者多。何則人焉肝則避。而食色則淫。時氣則防。而絪縕則浴。傷於暑曰暍。傷於寒曰寒。而受邪於絪縕摩盪之釀者。則疫。而疫之大段。爲瘟爲疹。而寒瘟之證。大抵相類。蓋自表徹裏之門。鼻竅爲大腠理爲要。是以寒之襲人。鼻涕咽痛頭疼背寒。兼咳嗽。漸而胸脇苦滿。嘔吐引飲。終結循環運轉者。鬱蒸釀熱。津液煎熬。屎燥尿澁。脣焦齒枯。其神狂。其語亂。實者則閉。虛者則脫。然推遷之正賊人也寡。絪縕之邪毒人也多。於是瘟之毒猛。故牽無嚏噴咳嗽鼻涕咽痛等之漸。寒戰鬱熱。頭疼目眩。大悶大苦。賊直犯闕。或單身入臥內取兵符。而後衞兵騷擾。如斯者。未顯外證。言行勃卒。精神朦昏。於是見瘟毒表裏透徹。異于寒疾之以漸入。瘟疸共疫直入衞中。精神困於外冠之際。知覺失神。見種々之鬼怪。古無條理之辨。不知寒即暍之對。自素問熱論仲景傷寒論。混疫毒而不能辨焉。臥內兵符之所在之爲衞中也。又可。所謂募原者亦指胸膈而已。

營之與衞。本分表裏。寒暍亦表病。邪閉表而蒸裏。遭閉而蒸。則裏氣窘焉。裏有營衞之二中。衞中親天氣。營中親地質。二中受邪之重圍困狀萬變。其煩渴者。表熱煎津液。而胃涸求給於水也。求飲不求食者。津液涸則無所受食餌之養。而屬無用也。胃者。人之地。以飲食而立。潤實枯涸則不旋踵而斃。豈待燥屎。故古人謂胃中有燥屎者。非也。不止胃中無燥屎。腸中亦未至乾

燥其潤澤。直腸最逼表。々熱煎熬。終爲燥黒。其徵觀秘既啓。繼者不如初。頭噎於胃中。奪其津液。使之如銖丸。執轉出之。言之以明邪熱表裏之分也。

夫絪縕者。氣之動推遷之間者。而本非邪毒也。但推遷者行天時之正。絪縕者爲地運之變。已反正爲變。故或爲變。或爲毒病。亦地運。時時不一。然大綱不出瘟疹。瘟者無形之疫瘟痢之類也。疹者有形之疫痘痲之屬也。其變不可見于絪縕。而觀之於慘舒寬急輕重。是以其復也。或纔感即解。或由和汗而散。或待班疹而解。或復聚綿綿。如遠曰之瘧。或六七日輙至死。蝦蟆瘟。瓜瓤頭瘟。瘧痢。風眼。痘。痲。水痘。痧子。癬疥。而不窮焉。皆外襲爲疹痛其眼者。識酒醴醪酢出一醞。其佗潰爛而散者。多非疫毒焉。」

明吳又可溫疫論曰。或時發頤。或時頭面浮腫。俗名大頭瘟。或時衆人咽痛。或時音啞。俗名蝦蟆瘟。或時衆人瘧痢。或爲痺氣。或爲痘瘡。或爲斑疹。或爲瘡疥疔瘇。或時衆人目赤腫痛。或時衆人嘔血暴下。俗名瓜瓤瘟。探頭瘟。或時衆人癭痎。俗名疙瘩瘟。清郭右陶痧脹玉衡曰。清初燕都疫病大作。胸腹稍滿。生白毛如羊。曰羊毛瘟。又有刺螯瘟。壯熱煩悶。如螯所傷。其變種種。難以枚舉。大約病偏于一方。延門合戸。衆人相同。是知氣之不一。孫一奎痘疹心印曰。沙之形如粟。一般尖圓而硬。中含清水。夾痘而出。題注云。亦痲類。粒頭瑣碎。吳地嘑爲沙子。其狀如夏月膚膝之痱子。試之痘行之時。時々見之。病家遇之。誤爲出痘。相繼出眞痘。或與痘競出。爲稠密之象。令人魂飛。而後沙隱沒。痘高起。又按沙或作痧。而本艸經疏。謂痧疹。麻疹精要謂痧子瘄子者。其指痲疹。而精要別舉腫行粱疹。子曰極似痘。最難看。然痘則有頂盤。疹雖

有漿。而頭粒必不堅根盤必有紅暈。若此則實雖與痘辨安。永庚子之歲。天下病之。不論男女老稚。自序熱至起復。不出三日。世嘑三日麻。出齊則隱沒。不藥而愈。與痘兼出者駭人。重按麻自以麻爲正名。實爲痘之對證。沙子畢竟麻類之輕毒。猶水痘之於痘。故今不依經疏精要之說。以沙子爲三日痲之稱。如腫行漿疹子最是俗稱。於是沙痲之名陽混清郭右陶曰麻在他方名唐子名蚤疹。在檇李名痧子而痧脹亦名爲痧。不可不辨。予未知痧毒。讀玉衡熟思之右陶則以爲絪縕之間。釀此一團之邪爲脹。然其說以爲埋首沒尾於諸病中無所不在焉。見青紫筋放之刮之。不愈則以藥治之。是異於痘毒之轉自他方者。以予觀之則外筋之血瘀無路於漏猶甘露之變起於倉卒。圭終以憂而沒。此症自古有之。世未覺之。西洋已知之刺外筋以得奇効意絡者諸血之大壑。諸病淫此。則無由得出路。卒然報變。故予讀玉衡以痧爲絡中之毒血痘痲與瘟痢同是疫疾。先輩於痘痲有慾火胎毒之說。然時有險陽因又謂停之曰慾火胎毒。觸時氣而發。蓋天地之道。以條理行。善惡治亂。窮達病健。靡往不有偶焉。是以病健之所成。於神氣則善惡眞妄之間。於本氣則正邪藥毒之間也。疫者釀毒於絪縕以賊人者也。夫寒疾之感人。方自表侵裏。本氣覺而防之。其增寒壯熱煩渴胸滿。本氣與賊氣相戰也。本氣戰敗。則關門不守。賊入子城。津涸神昏。

自張長沙有傷寒論。世以傷寒爲大病。以佗病屬雜病。予竊有疑。蓋其謂大病以病之雖治而言。則有瘵痱癎癩。以施治之難言之。有瘟痘瘧痢之險。若謂佗病之方治具此。其方則貴焉。而設言則茫茫。蓋古人之立名瘟亦屬傷寒之一症。故難經云傷寒五中風傷寒溼溫熱病溫病溫即疫也。

千金例中亦曰傷寒中風熱病溫疫通曰傷寒。瘟疫已在傷寒中。而傷寒者少而多輕。病疫者多而多重。胡不以寒屬瘟焉推遷之正觸之病者怠在己。是以不染衆絪緼之邪觸之染者毒在彼是以庭壯同病然則爲方以統諸病。猶可也。爲論以統諸病則非也。天地之條理二而四。後藤椿庵分深淺閉脫。槃盡其態。噫漢地之醫說。周禮以下無一出配當之外者。上世無方書仲景始彙古方後世稱爲醫聖以予觀之則其方則或然其論則素難之糟粕吾不能知其所以爲聖焉我冀世之讀傷寒論者。不於傷寒論中得傷寒。於傷寒中得傷寒矣。皇甫謐曰。仲景垂妙於定方。長沙蓋古之能定方者。」

痘之爲毒。與之異矣。其一觸之浸淫潛匿。直入子城。本氣始覺有賊。且戰且驅。故其發熱之候。吐瀉搐搦。狂走妄言。目吊筋攣。其意。惕惕然若有人捕己。慌慌焉似有物爲幻。恍惚視聽不辨。趙高在側。二世迷鹿馬。甚則弄殺其主。彭寵窘迫。命在蒼頭之手。皆邪在君側之象也。於是子城倉卒之變。近侍之臣。短兵相接。勝敗期不過四五日。本氣與賊。且戰且驅。本邪相分。鬱熱漸散。主安其位。則毒得疱而保。本氣自固以守肉。毒氣勢縮。則疱高起而出肉上。本氣勢盛。則氣血進圍痘。攻之急。而分界分明也。本氣能遂毒於外。神得恢復之功。四境靜肅。毒熾則爲疱稠密。本氣困迫。身體益苦。子城中。正邪相爭。正氣受敗。則不能緊圍疱中之毒。痛攻之。毒暗侵血分。故雖見點而不能出。雖出而不能高起。雖起而忽陷。雖不陷而潰散。雖不潰散。而不成膿。皆氣血受傷也。緊圍而急攻則毒愈保疱中。緩守而怠攻。則敵瞰間反擊。賊無隙可瞰。則枯死疱中。而結痂。是以痘之稠稀。係毒之膿淡。而命之存亡。在正邪之勝敗。蓋攻毒之日。肌肉

怒脹。賊勢專向外也。於是賊雖一且力竭請降。餘黨猶在巢窟。兵衞不可解矣。當是之時。醫奉閫外之任。兵糧足則進伐。壘危士弱援兵以糧資從。非老練之將。見機保安也難矣。按病期大槩六七日爲病進之候。醫家立每三日之程期。若觀其輕重。時其緩急。刻舟求劍之類焉。

管櫆保赤全書曰。熱蒸三日。放標三日。起脹三日。貫膿三日。收靨三日。輕者不拘常數。重者出常數之外。熱蒸又曰發熱。曰序熱。放標。又曰見點。漸而有出齊之目。起脹。又曰起發。貫膿又作灌膿。又曰行漿。收靨又曰結靨。又有始熱。放苗。發秀。成實。結靨之目。由爲以痘似豆也。

痘。痳。水痘。痧子。本一毒之分。水痧輕毒。痘痳深毒。深中有雌雄。亦有表裏之分。痘者。神驚鬼見。目吊筋攣。毒出枯于肌肉之外。痳者。咳嗽嚔噴。鼻涕眼涙。毒終消于身體之內。於是。痘觀毒之自內退外。痳觀毒之自外內消。則痘毒慘於痳。以變則痳毒亦烈於痘。蓋痘痳之爲偶。猶世已知之。而其言唯分之於臟腑。然蒸熱發疹。逐毒起脹。幷口舌無所不出。而最稠出面部。則同淫臟腑之毒。何有其別。唯自內肇事。麈之於外。與自外起事。化之於內爲偶而已。蓋痘者。肌肉之病也。肌肉之所在。莫所不破毒。而始于子城。終于疱。保而攢聚于口眼之邊。及手足。稀疏于腹背之部。則先侵臟。次及腑也可觀矣。此病若他瘡。唯表病而裏無病矣。則何其死生如斯之急焉。蓋體中。血在內爲營養。氣在外爲衞護。血進浮衞分。必満之。謂液。痘之事。起于子城。爭于血分。終浮于液分。以成于液中。毒以化膿。若以血入疱。則液溺之狀。此時本欲血液之分明。毒浮液分。血自內逐。毒既出血分。事在液分。液者氣之類也。病在血分則痛。在液分則痒。血液幷病則痛痒兼發。血與毒爲猖獗。則液孤

擔其恙。痒者在他病爲輕症。唯於此病爲忌者。由血之爲膿與液之爲膿之難易也。此毒也無所不有焉。是以其結者。或於目。或於衞元。或發癰。或啞聲。皆毒之入疱而沸盡者。武庚祿父挾管蔡以叛周也。

出痘之時。眼中之白肉。擁赤而腫者。痘之出於目也。諸痘收。則此亦收。收靨之頃。血毓之餘邪。無所散。則或結于腹背而築動。或結于舌根而聲啞。或結于肌肉而發癰或結于目而奪門。而亦謂痘出目。非其實也。

是故痘者。表裏洞徹之病。天地之慘毒也。或曰。慾火胎毒見其內發則似有慾火胎毒者。見流行相染則似係外感者。何以專屬之疫。曰。兪。晉持兩端久矣。熟觀其病。探其情。決非胎毒矣矣。以目前徵之。南邨百而死一。北邨十而存八。甲邑二十亡八九。乙邑半百不失一。其飮食起居。風雨燠寒非有異也或係醫家之巧拙乎。若豐之鄙人不屬諸醫藥。誦呪忌穢。以任其天。則其死生也非人焉。且吾之東隣。有雙生者。一惡疱滿面。一顏色如玉。且或一時重。或一時輕。若人在胎所受之毒。則何有南北之異。何用發息之時。何相傳染。何雙生異。夫天地之生生物。宜專於生氣。今其立說也。曰稟毒於胎元。曰根於精血之初。其所謂胎毒慾火。言偶有父母釀毒於絪緼之際而然。則有焉。豈有使夫人盡含毒於有生之初之理哉。隋巢元方。唐孫思邈。直收諸傷寒中。良有以也。蓋胡國無痘。其人入漢則病。漢地有痘。其人如胡則不病。胡則北。如我八丈島。偏南之地。而無痘患。由是觀之。方氣之使然。氣運之轉遷。雖未可知而豈胎毒然哉。聶久吾。論胡人之不出痘。曰。故人之胎毒。當爲佗病散。當之一字。可謂暗徵。明者不信焉。肥之天艸郡者。海中之一島也。其俗拒痘。若偶有出痘者。移之深山。扉背病痘者。看病死

生不相通發痘之家。環屋藩之。吉凶患難。隣並不通。其里設關禁往來。故其俗不病痘者。居十之七八。晋嘗西遊留肥之大郡數日。大郡之拒痘。亦與之同。晋有故得親見移痘者之地。其地在深山松林之中。茅廬蕭索。不蔽風日。連屋痘人相枕席。呻吟可悲矣。又聞南海豫土之邊境。拒痘如此。由是考之。拒則不病。胎毒豈可拒哉。雖拒或病。豈非疫哉。或曰。此患專在小兒。一患不再發者何。後藤椿菴艾灸通說。所載近世丹波有再痘之鄕。如何。曰。椿菴子必不胡亂下說。天地大也。造物巧也。絪縕之釀。不可測焉。則偶有此變乎。亦不可知焉。若病之機軸。變於天地。至再至四。亦不可知也。又設諭曰。燒酒放火則然。再之不復然。彼雖感。而我無應者也。胎毒之說之所以起也。無于古而有于今。胎毒之說之所以塞也。世以爲兒疾者。以其數行。長者已經。其感焉爾。若未經者則奚以其年限。故痘之初與天平九年四月。參議民部卿正三位。藤房前薨。年五十七。七月。兵部卿從三位。麻呂薨。年四十三。同月正一位。左大臣。武智麻呂薨。年五十八。八月。參議式部卿。太宰師。正三位。宇合薨。年四十四。皆青史之所載。當今戴白男女。間善染之。若痳毒其行。率過二十稔則愈知屬絪縕之毒。

痰飮第十

夫人之在胚胎。母氣能營之。是以胚胎以元氣自保。已出胎。則乳飮之質噓噏之氣相繼養之。譬如得火於金石。既已成火。則火有一己之元氣。以自持焉。特者不能自立。以絜能任其持。發燭引就之油心之養。於是其體食其養。養者與食者。合異爲一。雖內用食養。而外又假籠封之衞護。籠封之設。雖外衞風雨。又忌外氣之塞。然則絜之於火。猶飮乳之養幼。油心之養火。猶水穀之繼持。而籠封之防風雨。而不致窒塞。猶裘褐節寒熱。噓噏通營

衛。是以火雖由金石之戞擊而生。所持則元氣。而資贍者乃油心。得保者乃籠封。故人由父母感應以得身。而出胎則息于天食于地以保其天。於是營用水穀衛用噓噏息食之養資新去故。是以。元氣之持。資繼於佗之氣液。而其天者。氣能溫動液能滋養。天氣入肺化氣代兩鼻。地質入胃沓滓遞兩竅。精液釀氣血。滾滾滔滔。奉其活者保其立者。蓋營衛二中。滋養溫動。專好活達流利。切惡窒塞障礙。觀之於燈火。升散不塞則照物食質化而無痕。籠封閉之則烟氣鬱塞煤炲著物。觀之於流水。順下無滯則潤土膩稼化而無痕。有物障之則回旋停滯泡沫相結烟煤泡沫者。水火之垢也。津液窒滯則生垢。內景。咽腸爲一大通路。咽以偶喉爲收納之用。腸以偶脬爲輸送之用。同立于滋養溫動之中。纔欠活達流利。則逕垢粘滯。胃以上則肝脈掌其活達流利。腸以下則脾脈掌其活達流利。活達流利之所病。乃結垢焉。其垢雖同出滯。從所居而異其物。殊其患。故結其上流者爲痰飲。結下流者。爲逕垢。腸脬分水穀。逕於脬澁於溺垢於腸滯於便咽喉分息食。滯於肺疼於喉滯於胃飲於咽故胃下之逕垢猶胃上之痰飲。飲者在胃口疼者。在肺上。營衛蔽塞生斯粘膩。見之於目病生眵。目眵粘滯眼精不得縱其明。以飲在咽胃障礙營養。或麴蘖水穀以發黃壅塞。滋滋液以成腫。泥滯升降以釀百端之疾。若支于胸腹之內。氣管逼窄。徵見于短息。以疼結氣分。障礙衛護。關鎖本氣以發癇。窒錮精神。以釀胃。窒塞循環。以致百端之災。若閉于胸背之表。氣管液粘。徵見于喉喘。噓噏者以氣衛護其內者也。以外有所衛護而營養能立功於內。飲食者以質營養其外者也。以內有所營養而衛護能伸能於外。今人之感塞。嚏噴鼻涕。惡寒咳嗽。壅塞衛護之狀見焉。一知衛護擁塞之狀。則知病乃

爲衛護之受賊。衛護失其職。營養氣憊。滋液粘滯。擁塞肺表。肺有細眼。爲衛氣活達之道路。粘滯在細眼。咳嗽喘哮。困于活達流利。物理小識引潛艸曰。肺乘細眼噏氣。火鬱生痰于細眼內。則難出。故氣管中咯。是言最是。唯火字未脫舊當之舊習。不如刪之愈也。肺之細眼。目明之所不及。入管於肺口吹之。本孔生枝椏。竟爲細眼。氣之從噓噏而往來一身。其用要在細眼。亦猶舌下釀津之路。自內通而難見。而氣自衛中再貫膈膜。脩然張于腹皮。雖有精粗。而其理則一。痰者氣管中之粘津。得憂憂而湊會。壓會厭召上之。截之於憂憂。脆者見截。而外粘者燕吐相妨。

是以宿痰者遇暑候。衛氣疏通。滋液融動。冷氣纔侵。衛氣滯滯。咳嗽復動。由是觀之。有其起發不由寒暑者。而於衛氣不得運。肺孔壅塞則一也。胃用消化。與腐似而不同。言之於酒醴。其將成也。化米性。成酒醴。其將腐也。敗米性。爲臭穢。於是胃好化而惡腐。好運轉而惡滯礙。飲食癥瘕。內鬱外襲。有一障碍於此。化氣液於上。輸便溺於下之間。停滯爲瘀。以胃爲巢窟。終至關路梗塞。津梁不通。良民不安業。國家動搖。見其所涌泄。或如米泔水。或如稀米糊。或如爛魚腸。或如膠飴。或如黑漆。又如屋漏水。飲食之化氣液。無所不至。是以障碍之爲災。亦無所不至。是故飲食本噓噏之偶。營養衛護。資繼元氣。液粘喉而爲痰。滋滯胃而爲飲。

古人不言痰。香川秀菴後藤椿菴論之精覈可聞也。傷風約言曰。素問有咳喘嘔沫。傷寒論稱喘沫。不用痰字。金匱已出痰飲二字。全爲腸間畜水。非近世所謂稀淸爲飲。稠濁爲痰者。晉時淡痰通用。不爲炎上之義。至宋漸指口中所吐者。通雅曰。古醫方淡飲之疾。今俗作痰飲。則似以痰飮爲

俗字。今按素問評熱病論曰。咳出青黃涕。其狀如膿。從口中若鼻中。然古則稱痰爲涕可觀矣。行餘醫言曰。素問靈樞。八十一難傷寒論絕無痰字。醫和醫緩扁鵲倉公。張機華佗郭玉之徒。絕無痰之說。或言喘。或言欬。言沫。言唾。言涎。言液。言飮。此中兼痰意而言。言痰者。始於神農本草。痰自晉代言之。意神農本草。晉時始出。疑是葛洪所作也。自巢元方疼飮之稱廣。至朱震亨。專主痰。金匱方論。有痰飮者。誤淡飮字也。徵之於王叔和脈經。其文曰淡飮。懸飮。溢飮。支飮。又曰。其人素盛。水走腸間。瀝々有聲。謂之淡飮。飮後水流在脇下。欬唾引痛。謂之懸飮。飮水流行。歸于四肢。當汗出而不汗出。身體疼重。謂之溢飮。欬逆倚息。短氣不得臥。其形如腫。謂之支飮。其元飮物。游以成。故以飮噓。以走腸有水聲。謂淡飮。在脇如懸引痛謂懸飮。溢周身欲腫謂溢飮。支柱心下。短息。謂支飮。總謂之留飮。支溢懸淡。連飮上之虛字。可謂的切矣。今也以虛字爲實字。客轉爲主。晉人造痰字。而飮又混痰中。人爲自有得失。條理則一定。痰飮乃咽喉之二恙。試之於今日。胃間畜游之災。最多痰在氣道。爲喘。爲哮。爲咳。爲短氣。其顯然者盛於飮焉。於是人專稱痰不稱飮失。

名有古今之有無。字有虛實之遷轉。唯其粘滯而妨於肺胃之活達流利。則其物實存舍醫典之悶悶。就條理斷之。痰者衛液之粘滯飮者營滋之粘滯。衛滯通鼻而爲涕。營滯涌口而爲涎。而其涕者自能溢鼻爲痰則索而後獲之。其涎者自能涌口爲飮則索而後獲之。於是觀涕涎則釀之輕淡。而痰飮則釀之重濃焉。是故衛者衛護一身。寓槖籥之機於肺。營者營養一身。活消化之神於胃。古以營衛配氣血。剖析稍適。而未得條理之精焉。人

身之釀痾。莫非結礙活達流利。曰癥。曰痰。曰飮。曰云云。唯是結滯。從所著。其釀不同焉爾。痰飮者。津液之結滯。津液滯者。成於氣之窒塞。滯粘已成物。終失舊物焉。今痰粘于肺飮粘于胃粘又病氣以生百災。醫家不知其別。漫混痰飮。以我觀之。痰滯氣道。飮滯質道。醫人不知痰是何物。漫揚聲曰。吐痰下痰。曰。痰爲核。痰爲腫。痰不在質道。豈涌泄之所及哉。痰爲物於衞中。豈屯聚肌膚血肉間之物焉哉。至謂太陰溼土。其迂不足論矣。飮者。胃中之停游閉其活達。壅塞汨濫逼迫衞中。其災最多。雖然其所居。湯液之道路。可以吐。可以下。掃除可及也。是以同是一垢。從條理分之。痰飮涎垢爲分明。以其窒塞之同。道聲援。則亦並起作寇。下有腸脬如上有咽喉。咽喉釀痰飮。則腸脬釀涎垢。癃成于脬涎痢成于腸垢。以鬱礙逼迫。爲種種苦惱。飮垢相搏。上下窒塞。關格而死。

胃以上肝脈之所管。胃以下脾脈之所管。故痰飮係肝脈之分。涎垢係脾脈之分。瘧痢者。暑候之患。異於瘟之不拘四時。然其有時大行者由絪縕之釀。瘟之感在上。痢之感在下。瘧之感自衞痢之感自營。在上者掠略上而後下淫脾脈分內。在下者掠略下而後上侵肝脈分內。身內而半邊受寇。救援足持。兩邊受敵。豈可不恐而愼矣哉。

窒塞礙滯之爲患。豈翅如此焉哉。氣血筋肉之間。閉滋養溫動活達流利。則毒瞰其釁。而著之。著則結焉。結焉則氣血退走。走而敗焉。則元氣燼矣。氣血盛焉。而追毒則釀膿而潰。痘痲疥癬。丹疔之屬雖釀成弗同。事在氣血與毒之勝敗。氣血追緩。肉不釀膿。或不紅不痛。平漫不爲高起。潰則泄漏。氣血無力收瘡口。則翻花淫於筋。則瘰癧結核。其頭爲珠。其根布亂痲。其極縮筋朽骨。削肉賊氣。今不言

毒之所著以歸之於痰噎喉間之粘滯何以與此事是皆坐以痰爲氣滯之別名爲百病皆生於此也痰飲者在體外膿瘀者在肉中瘀者血之死膿者血之腐是以滋液粘滯著目則眵著耳則聹著尿道則澁滯爲臭穢著尿道則淋瀝爲汚濁婦人則又滲帶下痰飲結滯一轉機關窒其要路營養之氣液須臾爲叛賊涎沫塵盛卒倒不省般民倒戈反攻其主見留飲涌盛之狀知有事于胃間其發復有時者痼發而難起者風風者外氣之邪侵淫爲癱瘓機關一轉氣液爲痰飲若依名求因得因臨證則北轅適越也飲結胃中癥結胃外痰滯上體疝滯下體寒熱燥溼淫則傷衞穀肉菓菜淫則傷營此是外來之毒憂悲鬱悶發生之氣感此則自內致損夫人之精神者一身之君主依保奉而安衞者不保營者不奉則其神燼矣是以滯礙者妨活達流利則壅閉神舍猶花將拆而蛛絲粘之於是或恍惚不省事或朦朧如夢寐或惕惕如人將捉之或搖搖如在舟上如駕奔馬善忘善驚善泣善笑苟然犀於此百怪何遁

癥蝠第十一

動之活也立于得于天者依于與于我者得于天者居內與于我者居外胃者飲哺之海營養之資畜此故人擧曰胃氣胃氣其所謂胃氣者飲食取與物而運轉消化爲營養者其權專在肝脾之絪緼也肝脾胃之兩翼以爲一偶若依古說膽即腑而與肝偶脾在上而與胃偶肝膽爲謀慮決斷之官消化運輸專屬諸脾胃然考之於條理察之於內景以知其不然矣夫胃者居中而爲一身之地上脈據此此脈伴經纏臟而輸精下脈據此此脈伴絅纏腑而壓危肝體淸而精脾體濁而粗以濁而脂膏濃厚人見脂膏濃厚不知脂膏濃厚之故余觀蛇腹有省於此有解蛇說記不憚冗錄其全文其記曰天明丁未秋八

月九日當掃除艸莽一蛇含鼠有一小奚氣壯手捕之槌碎其頭剝其皮不知鼠兒之既逸欲割腹以救余故態忽發就而觀之自首至尾脊椎兩傍之枝骨長而曲如鉤鉤比之於肋骨其末不包腹故外皮既剝任縫判然而分蓋以有用于寬濶也心肝肺皆在包絡中包絡洞徹如隔水見底心動壯而緩脈之自下衝其勢急促撮兩動數之脈得五六動而後心得一動隔包絡分明見脈先心後之狀於是影之於蛇以觀人噓噏定息脈四五至之狀解體新書之動脈者我所謂之經而其血脈則我所謂之脈也而其說血脈爲無動矣今觀蛇腹之既剝兩活者脈動最疾經動最緩彼魚際人迎非血脈之動哉於是乎我惑其說焉氣質兩管吹之寬虛其可容鼠雀肺在心下肝背鮮紅色裏面細眼疏而泄氣肝二枝甚長如並豇豆之莢成而未實者上頭小末頭大作垂露樣黯紫色長尺許肝盡而胃愈大又尺餘胃將終而脂膏相擁狀如頭腦膏中有如豆者二枚一枚盛黑汁者膽其汁味苦一枚內實小頭如綠豆大其色淺紫下頭如扁豆大其色白矣頗如羅漢松子可以充脾獸膽繫肝蛇膽親脾我玩索得其故獸蛇之脾共在胃下獸蛇之肝共在胃上而蛇肝以胃之長不臨胃畢事之地獸脾以胃之短而橫不屆胃畢事之地彼此相照則獸肝接胃之瀉口蛇脾接胃之瀉口膽汁苦味蓋掌消化胃實焉是以其居不論翼之上下向胃將畢化處居膽之用可知也鼠兒既逸胃中無物玲瓏如玉胃盡胴接其竅頓窄胃實不得不於是消焉胴腸亦殆尺不屈曲脂膜卷纏埋腸粗如腸形子細觀之非腸矣腸色黃褐有小斑點文最下脂膜中見至白者二枚如萊菔莢而繫經者可以充腎腸雖較濁亦玲瓏渣滓點點若活東在胎囊者焉奚奴以無胃實其意不滿不日而捕腹滿

者而解。佗無異狀。胃囊玲瓏之中。容蜥蜴數頭。近瀉口寸許。鮮物頓如泥。其爲泥處。外皮漸厚。脂膜濃重。膽脾相圍。於是愈悉人身脾擁網與脂膜爲消化。膽畢其功焉。蛇體臟腑與骨肉既分。心動蹶蹶久而不已。其餘則生意斷。剝皮之肉。蜿蜒而卷。如生者。以知本氣之壯。不可以同而知者。攻異察之。條理之道也。今蛇所呑不經齒刀。直赴胃釜。釜中唯見其鮮。幽門分寸之地。頓如泥。齒刀胃釜之用。一處成。鼎實之熟。由鼎下之薪火。脂膏者陽物其氣可充鼎下之火。脾者絪縕之一片。可充鼎下之薪。膽豈非收鼎實調熟之精者哉。胃實之化。取於養身脂膏之功。在變鮮赴之於養。膽之功。在取所化者而成養。觀諸幽門。識脂膏之用。觀膽之依肝。依脾。識養者資於調熟。噫天地間。不有胃形長而堅者。安得攻之於短而橫者焉。故胃畜外物。網脈擁脂蒸於胃下。膽脈取精蒸於胃上。是兩翼絪縕之

所成。謀慮決斷。我不知焉。腔中臟腑塡塞。無餘地之釁隙。分則保運化持。保運相衞化持相營。唯肺間胃中。招資繼於己。於是外物輻輳乎胃中。脂網隔胃。釀飲食。化氣液。以培筋骨。給精力。化之於蜂之采花粉。釀窠中。化蜜以自養。亦可也。鼎上者水。鼎下者火。水不下泄。火不上炎者。以死物也。然而皮肉則活物精守則禁。守懈則泄。各味在胃中。兩翼絪縕和。雲雨布澤。噓噏相合。翕如純如。以保太和。一失其和。釁隙正開。水濕滲其間。鬱熱釀其中。毒據釁隙。猙獰相聚。不煎熬津液。則汎濫水潦。消化氣憊。卻惡飲食。輸送令停。吐瀉竝起。水液地膩。徒通其道。絪縕無所用。雖飲旋渴。雖食旋瘦。衞護資天氣。鼻爲之門。鼻覺觸氣。不寒于慄烈。不熱于鬱燠。是以知人氣之和于寒熱。勢有所傾。脣生寒熱。寒暑者天地之時令。瘴疫者。絪縕之結邪。衞護失守。邊陲有事。故風寒之感。及鼻則嚏而涕。及目則泗。

及喉則咳。及耳則聾。頭腦背脊。手足之末。倦怠疼痛。窒塞衛中之津液。釀成痰喘涎沫。終侵犯營中。掎捔攻神舍。關門不守。神不安舍。妖怪役視聽。人認邪祟。不語絕倒。縱幸不死。爲狂爲癡。如夢如幻。鼻息之態。臥則勢緩。起則勢急。噓噏緩則衛護解嚴。噓噏急則衛護警嚴。故晝之衣裳。敵夜之被衾。爰知衛護在氣息。氣息通腠理。睡覺者。神本之所代。精力從神。營衛從本身生之活立。營衛爲重。今病而困者。運轉消化之氣勞。是以其覺不欲飲食。若病于營而不病于衛。則筋骨皮肉則無事。若病于衛而不病于營。則飲食便溺。則自若。若有困于營養。氣息不作用於內。噏者少而噓者多矣。於是噏氣不運于營中。纔取天氣於衛中而出。於是假肩而息者。觀營衛共不勝其役。腔中和營衛則人各全其天。戾而不和。則不化氣液。而生涎濁。絪縕不運于正。而運于邪。氣液罷於所資。奸邪貪於所資粘滯在上爲痰飲。在下爲涎垢。在皮間爲疝。在腸外爲癥。是邪竊資繼之資。攀援其主而立。非氣非液。非肉非骨。以釀痰飲涎垢。膿瘀蛔癥。猶艸木之流脂結瘣。生蠹出菌。是天稟之外魔爲障礙。癥瘕相類。蛔蛆相似。猶痰飲膿瘀之各有類焉。蓋痰者衛中之滯。癥者營中之結。痰在衛中而飲則下在胃中。癥在營中而疝則外在皮中。

癥瘕實相濟。而癥之在腸間。猶痰之在肺間。占居於膜中則無路於勾出。瘕之在膜外。猶飲之在胃內。居近表面。則有術於鍼灸吐下也。瘕者氣而結。聚乎腹肚。結乎頸肩腹。而著筋者。疝爲氣者痞瘕。而成形殆與癥混。腹者皮爲表。膜爲裏。皮膜中間。則任縫之外。浮梁左右之兩筋。出兩肋入曲骨。皮膜之間。受噏氣於膈膜後邊。毒動輙爲根據。肩背之毒易下注腹肚之姦易上衝。氣之上衝心胸者。爲奔豚。金匱曰。奔豚

病從少腹起上衝咽喉發作欲死復還止。又曰奔豚氣上衝胸腹痛是皆皮裏膜外之證。絪縕之變化見疝見痞見皷見奔豚。皆不過一部之證配當腎積之說不足用也。

膿者化毒於肉瘀者作穢於液蛔者化動於腸蛆者化動於肉癥瘕是腹疾痃癖積聚亦其異名。立名轉增。至仍至雲。終混親疎。後世之弊也。香川秀菴以癥對疝。并積癖於癥。歸聚瘕於疝。不以男女分疝瘕。最爲痛快。若追所變以命其名。名何限焉。若以所統紀之癥瘕而足。結得礨於肺胃而居則痰飲得礨於腸外皮裏而居則癥癥者積也有物積營膜中瘕者聚也有氣聚營膜外故癥者腸外之結塊瘕者皮裏之滯氣瘕之大段痞與疝也。在皮裏者。疝則毒著筋脈痞則毒聚皮膜任縱有動依神闕而立。平穩微動者健之狀拘攣激築者病之狀是由與正氣相搏輕按腹皮有如有物包瓜浮水者。有上下拘急如按弓弦者。摸之則有掌內如得肉鬱者有腹面爲區畫如溝澮在其間者。輕撫之有微泥手者。皆聚之狀也。向腹裏按之有堅如石者。有轉奔不定處者。有發則露大塊已則不知其處者。或如蝦蟆伏或如長蛇蟠皆癥之狀也。

又有腸中之實便有子宮之血塊有腰骨之隆突有妊娠者易與癥混焉。皆同惡相濟互爲聲援。病礨蔚腹背。蠶食筋骨脂膏。是以腔中即營衛造化有機關。精神之舍。津液之原。營中持而化矣衛中保而運矣自本至標莫有所遺。流利有所壅遏則病著其處靜觀造化之爲石結于天間醯雞生於瓶甕故牛而黃狗而寶。馬而墨鹿而玉。於天地則石也於人則癥也。本綱引程氏遺書曰。閩中波斯人發古塚。棺內俱盡。唯心堅如石鋸開之山水如畫。中有一女凭欄又引宋潛溪文集曰。臨川浮屠。死後火焚。唯心不化。出五色火佛像

三寸。非骨非肉。嗚呼心一肉團焉。得不乎闓中所得者。或其葬所從者。亦不可知也。不然則腹塊。與臨川僧腹中之佛像同。狗寶馬墨之類已。如出五色之光。則當大著纏癥者。若投銅器於火中然也。蓋佛徒能結念。結得爲佛像。爲眞骨。造化之陶冶。有使爾焉。豐太閤時。其臣丹羽長秀患癥。不勝其苦。卒自潰腹而死。腹中有物。如鼈。公奇之。以賜醫。出于羅山子豐臣家譜。筑前一士火焚見塊髣髴肖其人。出于益軒大和本艸。夫奉瞿曇氏之敎者。荼毘得舍利者。不遑擧也。於是毒之結與念之結。亦復如此。蓋腹中之患二。蛔蟲也。癥塊也。塊者堅生植之種類。蟲者徐生動之部分。蛔以總腹蟲。癥以總腹塊。是以蛔雖非一形。不外氣類。或肖氣類。不過寓似。蛔形奇者雖具手脚。而大概類蚯蚓。而短者不盈寸。曰蟯。長者踰十丈。曰寸白。其佗非尋常物焉。蛔以盲腸爲巢窟。吐下出者。不安其處也。絪緼

之化機。自古所無者。或忽焉有矣。今新得者。不可復見也。華佗下蛔。半猶魚膾。文伯吐蛔。化水留一髮。或謂龍託爪間。或謂蛭滋腹中。物雖變化相之之事。不誣而留舊體。而之佗。物出我天地。託佗天地。恐無此理。內者臟之所在。外者腑之所在。腑接質。臟交氣。臟腑之條理也。而謂五臟各生蟲。又嚼其本臟。皆乘人不知。行此無稽之言。不用喋喋辨之。行餘醫言。謂蟲生沍鬱幽滯而蒸熱也。小兒元氣猶未壯。故飽食則元氣奔命於胃。而腸間鬱滯蒸熱。蟲乃生而下出。若水穀連入腸中。元氣奔命於腸胃中。鬱滯蒸。蟲乃生。而吐出。腸胃上下。蟲之生出。其化機俱同。此止蟲之生出。而無患害。以元氣尋乃健運也。乳兒大人亦不異云云。夫元氣也者何謂。幼壯衰老。莫非元氣。如消化運轉。則營中之絪緼而已。故人之幼稚。體氣雖脆弱。其元氣則月恒日昇。既曰元氣。不識奔孰命邪。其辭似害意。苟如

此言、蟲窺元氣之去而生、無有常處、驗獸蛔皆居盲腸、意人亦然焉爾、世俗言曰、蛔必與主共生、與主共死、古人又有八萬戶蟲與人俱生、若無則不立之說、恐是佛典之餘說、佛家八萬四千、畢竟衆多之稱、與人俱生之說、雖如可信、而我友麻剛立屢驗獸腹、嘗語予曰、蛔居胃瀉口之下、膽下下維之後、鮮未及踰膽系易見者、蛔亦衆焉、愈久則遂無焉、至禽魚、多少有無、無一定焉、嘗一狗產子、其明母死、其子亦從殪、剝見之、蛔蟲六十三條、長者贏二寸、短者僅一寸、若非胎中畜蛔生下一日、何爲如此多、人狗雖異、造化同工、古諺未可遽非、神異經有言、人腹中蚘蟲狀如蚓、此消穀蟲也、多則傷人、少則穀不消、荒誕之中、亦有此奇說、其或有所試乎、鸕鷀呑生魚、胃中有蟲群聚、刺化其魚、是爲鸕鷀腹之消化者也、能出人腹中蛇、後人華飾之言焉爾、我嘗見鼠蛔、長尺餘、首似海馬、口目不可見、過頸稍小、唯如絲髮、至尾微大、通身有橫文、以爲節、相距可分、其節至頸甚促、如細絲密卷者、無手足、其色淡白、可謂鼠之寸白、蛔者蟲之在內者、蛆者蟲之在外者、蛔者成于絪縕造化之內、蛆者生于肌肉敗壞之餘、故蛔居活體、蛆生敗肉、我嘗觀一寡婦病將死、淸中下天漿子數頭、是蓋腸中造化之氣已弗行、以淸己如在缸中、致此怪爾、是以蛆化於病成之後、蛔爲病成之因、是故蛔之災人、爲疳、爲瘵、發喘致渴、爲吐爲瀉、爲寒熱、爲癡態、爲腹脹、爲腹痛、妨飮食、奪色澤、變化萬狀、不可窮盡、觀諸木之生蠹、生養之氣、反育于蠹、攣卷屈曲、枯瘁腐朽、癰瘣癭瘤、我始嘗疑、彼自爲彼之生、何以又爲人之害、觀之於農圃、而後知其說、夫灌培之於苗、專資繼者於此、是以苗莠竝立田圃之中、則各爭資貪其灌培之養、苗資則莠餒、莠資則苗餒、如鷸蚌相持、利害互異、是以滿腔之造化、不給養於

其主。卻以供其賊。賊徒據糧以窘其主。主死國亡。姦賊無所託身。世多言。疳成甘旨瘵成斲喪。然植之布華實動之偶牝牡鱗比之不可已者。亦男女之道也。唯鳥獸能時天地之發收。人則多智情慾橫動以致斲喪。可憫矣

兵喩第十二

造化之態。從剖析則其派愈變。合對待則其原歸一。世態不出治亂之二。人身不出病健之二。用養病用治。養失則病。病則有用于治。病者敵也。醫者我之將也。草木金石。水火百物。皆攻守之具也。其敵則姦雄老鍊。能覗其間。常謀傾覆於則良民失業。上下不能立焉。故衞生乃治安之策。治療乃攻守之事。攻守者何。敵在前。與亡繫此。彼攻我守。我攻彼守。是故病之徵。衞生不懈。則邪不勝正。彼自潰散。己無良策之制。敵亦無援兵之救。我而待勝敗於天。是爲中策。如漢主厄榮陽。楚軍勢盛。韓信按兵。持兩端。則事不可識矣。醫家以爲金科玉條者。曰五行六氣。曰臟腑經絡。曰寒熱虛實。是然從條理觀之。末足立。亦械寒熱以上。前已論之。請論虛實。蓋虛實之本訓。足不足之義也。醫家以充旺衰之義。夫生之所立。上噓噏天氣。下飮食地質。今人不飮食數日。得於天之神。則贍資繼之氣則餒。於是肌肉枯衰。是之謂不足。飮食之養。無所停滯。肌肉活澤。津液滋潤。筋骨以強。精力以完。是之謂足。足者非謂有餘之待漏得平者矣。飮食者資繼之物。藥餌者攻病之具。故正之受敵也。仰平於其援兵者凶器。藥者毒物。醫人者握兵符。部下有利鋒破堅挫銳賴韓彭之才。夫弱卒怯長。將良則足以制敵也。而弱卒怯長。進退易御。驍勇剛悍。御失其道。子胥奔吳。楚國墟焉。今兩軍相對。旗鼓各張。其示弱。弱否不可識焉。示強。強否不可識矣。病志說病乃敵中反間之策。本艸說性。亦左右月旦之評。苟主將知敵情於簡書之外。拔人才於

驪黃之表。則談笑靖難矣。何以謂醫典是反間之策。以生克爲造化。以配當佐陰陽。以經絡導臟腑。以五六說造化。以種種之感說。使人其目不視。其耳不聽。蚩尤放霧於涿鹿之野。貔貅不知所向。苟非車之指南。則皆斃于帳帳之中。本艸所記。未盡其性情。猶用人於月旦之評。月旦之評不一。主將無識鑒。則按圖求驥。夫卻病之道。或於心。於身。於火。於水。於湯液。於膏油。於鍼砭。於導引。筋骨之閃挫。分挽之繫縛。苟非技・術。安解其厄。還其戾。氣有所鬱。毒有所淫。氣血有厄。活達。膿瘀無門出。走門戶既開。嘯聚者退散。內外攻守。爲將者宜竭思也。夫人之活而立。神氣也本氣也情慾自本氣來。意智自神氣成。情慾之所感應。終蟲意智之思辨。於是意求其壽。爲促其壽。意求其安。爲致其危。營營汲汲。顚倒其念。瞋恚鬱怒。猜忌偏好。一切懊惱。自不養心來。梵教謂爲火宅。謂爲佛界。使人思之焉爾。故

養生在養心。心得養則見正。正正而思行歸一。既已歸一。豈以促壽者求壽。以致災者索安。以瞋恚鬱怒。猜忌偏好。懊惱之事。冀其樂哉。既得所安而安之。無物不作己焉。不幸遇逆境。入水入火。亦安矣。心者易勞。以養之於逸身者易逸。以養之於勞。天賜手爲己奴。賜足爲己輿。賜腸胃爲繼生之府庫。千金之子。頤使堂上。以人易手足。府庫還畜鴆砒。終使手軟足躄。籃縷之兒。順天役其所賜之奴。乘其所賜之輿。而府庫・無毒物。心如行雲流水。身如野鳥走獸。終能勝寒暑。以盡天壽。養生者。平生保生之事。治療者。臨時除冠之術。蓋敵堅城壘。以爲冠掠。攻之之術。慰諭安撫。使之歸正。則舞于羽。有苗格。其佗則攻據壘之賊。開出路逐之。或假口鼻逐之。或假肮肛逐之。或假腠理逐之。欲逐而閉門。欲殺而給糧。猖獗愈益熾矣。方其無出路。鍼灸水湯。亦能開其路。窺其巢窟。以誘敵。見之於鍼之引膿。見

鍼之引膿。而知其引血。見其引血。知其引氣。見其引氣。而又知水湯灸焫之拔所患。故涌泄者。藥自內逐之於門。水火者啓門自外引之。吐下者世之所知。水攻與汗法。火攻與鍼術。同其理。中藏經病腑病。分水法火法。非實詣之言。水攻素問有水漬。漢倉公搚菑川王之蹶。晉葛洪淋於卒發之狂。南齊徐嗣冬灌百瓶於積年之冷病。元葛乾孫捽浸傷寒之發狂。元張子和灌於瘟陷內喘。共取汗以解痼熱焉。近世良山之門。開飛泉懸水之術。頭痛肩塞。赤目痼寒。發狂之徒。多受其賜焉。是取用於其寒也。溫泉者。要氣血乘其和。逐其冠。取却於硫礬之氣者。毒還淫肌膚。不愼則將有倒戈之變。香川秀菴曰。大概以極熱發瘡者爲佳。微溫者爲患。是元氣得其助援。擴充健運。排出惡血瘀汁。悉成瘡膿而出。火攻者灼艾類鍼之拔毒氣滯血瘀。不開之出路。則坐待良肉之腐爛。是其顯然者也。蓋絡者。

受一身游溢之血。以連絡肉者也。內外絪縕。所釀之毒。淫其內。患成於不測。醫者悉其毒之所在。以刺之。其毒迸出而已。灸之治病。亦與之同。夫水火者比也。水性者收斂。火性者發散。水灌則以其寒肅收斂猖獗之痼熱。開出路於腠理。以激出於外。火灼則以其發散之性。誘拔血液之痼毒。故水攻之用。專在解痼。其次在下氣。火攻之用。專在拔毒。其次在送陽氣。助其活達。蓋水火之爲比者。以相親而善相容。以相容而善相滅。以滅觀其相親。故火氣能入水。水質能入火。取紅炭入其半於水。水泝至其頂。以觀火之吸水。以吸水觀灼拔血液之毒。毒則混處骨肉氣血。水撲滾動一身之患。火灼拔病於著處。賊潛藏身內。無逃出之門。火開其路。則毒伴之而出。竄賊之巢窟。攻之出將之指揮。夫火能吸液。液與毒赴火。而火氣融結滯。結滯既融。火力可發汗。可催瀉。可達氣。可解痼。無病用治。則動兵

於無冠有冠拱手。則使孫策坐大遂并江東。
吉東曰。人身無一不可灸之穴無一不可刺
之經是言是也。因思。瞳子一點可刺而不可
灸也。無病則一身禁穴。有病則無不可攻之
地。唯君側之社鼠。愼於去之。今瞳子非可刺
之地。毒釀則取膿雲破白日中天瞳子之一
刺。此理可以擴於佗矣。今六經八脈。三百六
十之孫絡。猶日月旺相。血忌人神。習慣已久。
以錮人之聰明。毒之可以漸拔者。宜小灶頑
而堅者。宜大灼。有激發之勢者。可延之於傍。
宜鎭壓者。可攻頂門。頑肉拘攣癥塊死血。苟
可拔而取。則平衡繩直。則其正偏頗參差。則
其奇螢火亂點。蛇行迂曲。雁行貫索。悉山川
之險隘。度敵軍之情實。以布我陣紙上之六
花八陣。何足臨敵焉。一擔之水。不救一車薪
之火者。非處置之失焉由無王翦請六十萬
之策也。故灶無定矩。唱凱歌而罷。水性者冷
火性者熱水火之攻別也。至如溫湯洗熨。則

水火合力。攻我寇。策合其機。必有奇効。水火
者表治也涌泄者裏治也。而患在表裏治或
難及者患在裏表治或難及者亦各有其所
長。表治可以徹裏裏治可以徹表而後可以
通其事焉。故灼浴熨貼治在表湯液服餌治
在裏是其所以二也內和則外調外調則內
和是其所以一也。吐下者。蕩滌之法。推去陳
滯汚穢。有上下順逆之別。張子和。以汗吐下
鍼灸為瀉。今之人以五味之養為補古人鍼
言補瀉。中古專歸藥。今則言於藥治與味養。
補以助正瀉以逐邪。補瀉畢竟攻守之道。氣
血可益而補。則不死可致也。有攻無守。黷武
之弊臻焉。攻者。撰驍騎悍卒。皷噪而進。守者。
足資糧募兵士有待于賊勢之疲。意有進攻
之才者。其氣在驅除向外。衛虛營疲。賊勢正
張。無軍士應召募宜高壘深池。務布德化已
有攻術者。豈無守具哉。世唯言補瀉後世必
有言攻守者焉。是故病者奸賊起伏變化不

可端倪。況人陷反間策中哉。今獨斷于月旦評外。韓彭之兵。隨陸之辨。蕭曹之略。張陳之智。所置不失。開漢家之功業。非將將之才全九之道難矣。

醫典第十三

余著敢語。作君臣篇。後得東都伊東藍田湯武放伐論。讀之。其立義同矣。著贅語。作醫典篇。得京師香川秀庵行餘醫言。讀之。又出同轍。以勤說爲嫌。則焚之亦可也。喜先獲我心者。存之亦可也。其醫典篇曰。說靈素則稱軒岐。說難經則稱盧扁。素問程子以爲韓諸公子之作。邵氏以爲先秦之文。二子何以有此說。漢書藝文志稱黃帝之書者。甚多道家曰。黃帝四經四篇。黃帝銘六篇。黃帝君臣十篇。班固自註曰。起六國時。次陰陽家曰。黃帝泰素二十篇。又自註曰。六國時韓諸公子所作。師古曰。劉向別錄云。或言韓諸公孫之所作也。言陰陽五行。以爲黃帝之道也。故曰泰素。於小說家黃帝說。下註曰。迂怪依託。以下不復逐件辨。程邵之說蓋原于此也。如靈樞。按文獻通考。以爲漢志黃帝內經十八卷之九者。王砅也。一說則以爲好事者。於皇甫謐所集。內經倉公論中抄出之。則疑於素問。且其書爵稱王公大人。官稱將軍。豈古焉哉。黃帝請道曰。歃血而受。不敢妄泄。何言之陋然。素問稱經曰者多靈樞之語。則靈樞之作先於素問邪。是亦可　焉。難經。淳于意稱傳黃帝扁鵲書。蓋此邪。而不聞其目。藝文志。扁鵲內經九卷。外經十二卷。亦未見難經名。難經始出於仲景傷寒論序。而世疑其序者多。文獻通考云。隋志始有難經。唐志遂屬之於越人。何其書之不顯于古。沈埋于魏晉宋齊梁陳。饒是出盧扁。條理弗可誣。且夫史記敘扁鵲事涉荒誕。時世牴牾。請試辨之。趙簡子之夢。蓋當晉昭公時。昭公頃公之父。立六年卒。頃公在位十四年。定公在位三十七年。簡子

專國。在頃定時。不在昭公時。蓋簡子立六十年卒。子襄子嗣。襄子立三十三年卒。而有視齊桓侯疾事。蓋齊有二桓公。而無桓侯。前桓公妻氏小白也。後桓公氏午也。爲小白則先簡子百數十年。爲田午則後襄子數十年。韓非子以爲蔡桓公。而蔡桓與魯隱同時。相距又益遠焉。而序虢太子。周有東西二虢。東虢鄭幷之爲邑。莊公時武姜所請制邑是也。見左傳隱元年。西虢晉獻公假道於虞滅之。見僖五年。其佗燕北境有虢。虢者昭七年齊侯伐燕所次。而未聞有君矣。然則扁鵲時無虢。索隱以郭實之。亦無據矣。況郭亦齊桓時已亡矣。出管子。故春秋胡氏傳以莊二十四年。郭公字爲郭亡引之。足徵矣。公羊傳戰國策。以虢爲郭者。以音近相濫耳。且同書有見秦武主病事。蔡桓至秦武。凡幾百年。時與人已如斯。猶足信其巧哉。蓋戰國技能之士。以口舌馳騖天下。遊說之士。逞其說。弗省事實。伊尹負鼎俎。百里鬻羊皮。苟有所便。信口而說。不便則掩。與後世記事不同。岐伯扁鵲何足徵焉。是蓋太史公。摭彼出辨士口者。立傳焉爾。至華佗則世已降焉。然猶有刳破腹背。湔洗腸胃之誕。史亦不足恃矣。或問華佗之事於龐安常。安常曰。是非人所能爲也。而後之說。安常者曰。安常見一婦之艱產。知兒之已出胞。手執母腸不脫。隔腹刺兒手之虎口。噫安常縱識兒手之所在。既已出胞。豈得執腸哉。初學將研窮其道。惟恃其書。其書還爲幻怪。揜人之耳目。欲一披雲霧覩白日。何得哉。悲夫。

醫行第十四

人運神氣之靈。以治國家。持本氣之幹。以立身體。神靈失運。爲則國家擾。本幹疲。持立則身體困。故情智亦曰正邪。營衛亦曰正邪。自天地觀之。則情智與營衛。不以正。則同爲病。故本氣之所病營也衞也。神氣之所病情也

智也。雖四者同一病。神氣所生屬諸君師本氣所生屬諸醫人。故醫和之言曰。上醫治國。其次治病。已同病也已同施治焉。於國家。亦醫之大者焉爾。是以後賢有達則爲良相。不達則爲良醫之言。然醫之事貴矣。故烈山有熊。身處至尊。猶春春用意於此。病焉而治之。實莫非醫之事。而醫國者世貴之。醫人者世賤之。何乎。醫人者。其事鄙猥其役瑣小。雖涉人於溱洧。非爲徒杠興梁者。於是不能與醫國者並立。退與巫覡伍。烈山有熊世已久矣。且於經無所見。則是非未可知焉。雖然聖人之於天下。盡心於利物安民。故周官有疾醫。掌民疾病。然則爲政之暇。當宜時講其道邇以衞生。遐以濟衆。是以謂上古之聖神。專攻其術。則吾不識焉。謂與其臣時講之。旁通其道。其然濟民之札瘥夭昏者豈可廢乎是以歷代憂民之憂之主。能使任事之臣。覈核古書。摘集藥方。而頒之於遐邇。又遣使採擇其土地所產之草木金石。禽獸魚鼈。菌寓蟲豸。敎其良否。使民知養病焉。是亦君于人者職分。猶使重黎掌天地。宗伯掌鬼神。是皆非人主必專攻之。亦能常講求其道。以施天下。醫事惟二。衞生也。治病也。治病。藥石也。衞生。修養也。素問曰。聖人不治已病。治未病。不治已亂。治未亂。病已成而後藥之。亂已成而後治之。譬猶渴而穿井。鬭而鑄兵。難經曰。上工治未病。中工治已病。故藥石鍼焫。落第二義。履霜之戒。全在未病。故揖讓之治。干戈不興。矍鑠之狀。非藥石之力。醫之事雖周禮有十全爲上之語。難經曰全九爲上。全八爲中者。爲是。史記扁鵲傳載。扁鵲聞天下以己爲能生死人曰。越人非能生死人也。此自當生者。越人能使之起耳。人不能奪天工。死者不可生。百中一失亦不得稱全雖有神技。豈視垣一方人哉。故我斷曰。全十之工。非人所能。全九亦恐乏于其人。苟竢其人平生河淸不啻然

則人家之値疾病。宜正直以禱之於神。宜擇良工託病。己盡之於天。盡之於人而已。如其不可如之何者。何已。築壇任閫外。從數奪其兵符。雖有奇策。庸詎伸其能。謀事在人。成事在天。盡心爲之而猶及蹉躓。謂之命可也。孟子曰。行法以俟命。此之謂也。夫衞生者守成之業。治病者撥亂之事。或高壘堅守。或破釜沈船。宋眞宗澶淵之役。虜騎已逼。王陳皆勸帝避地。寇萊公獨勸帝渡河。契丹遠退北地。終安。雖有保社稷之功。不保無孤注之譖。無分寸之功者。其說還伸凱旋之後。不亦悲哉。然則必以進取爲利乎。昔晉楚邲之戰。知莊子逞其勇。試其武。怯荀隨之不欲戰。終忿其意。晉軍敗績。是趙充國之所以按兵不出。屯田致穀。坐得必勝。嚄唶劍客。焉知萬全之策。於是裘葛不廢。隨特之宜。無適無莫。義之與比。明永樂中。東宮妃經閉腹大。衆醫以爲妊。盛寅獨執以爲破其瘀黜之。而病勢益急。無

術可施。終鎖寅於禁中。投其藥。於下數斗。其病從愈。上賜之曰。壓驚。是寅之澶淵之役也。噫孤註其主者。先孤註其身。而後孤注其主。若不孤注其身與主。則奚盡敵於一擲中也。邦俗謂之十死一生之戰。己弱敵彊。己寡敵衆。用孤注則十死有一生。不戰則坐待其斃焉。我於孤注之事。深有感焉。故淮陰背水之陣。非得已而不已也。不得已而不已也。故其立非常之功者。有其技。有其膽。正能成其事。有其技而無其膽。有其膽而無其技。其不成事。於是充國屯田之策非安。淮陰背水之陣非危。安危在事。時機相當。然屯田之策。不怍人耳。背水之陣。栗人之股。投時機則兩可用。失時機則共致亡。不然則子莫之中而已。通觀古今。醫人多口誦仁術。意求其糈。其眼不高。其行不競。若孫思邈陶貞白之徒。亦不多得焉。是以世上悠悠。鮮其衣裳。令其言辭。取容悅以進枝。頗類賣婚者綺羅之飾。嬌媚之

態。治容以冀可憐。可媿矣。甚矣醫人之無競其行。明陸仲遠曰。醫家之書。近於仁。醫家之事。近於利。可不愼哉。而今貪天功以自有。取偶中以欺人。丈夫不爲。元世祖有疾。許國禎進藥。世祖苦其味不服。國禎曰。良藥苦口利於病。忠言逆耳利於行。已而疾再作。召國禎曰。不聽汝言。果至此。國禎曰。良藥苦口。已知之矣。忠言逆耳。願留意焉。帝悅其言。賜之七寶馬鞍。重思之士之得志者。多不居方技。其事方技。多在轗軻流落之人。是以在山林者。猶全幽趣。在市朝者。或舍靈龜於朶頤。若使其志行若國禎。則內保其君體。外補其國家。豈屑彼山林種杏之徒哉。若國禎。我必謂之國手。願世之人君。以之延醫。醫以之事人主。

贅語身生帙下之末

駐

瘡瘍者外發病之總稱。多內含膿瘀。大段分之於二。曰癰。曰疽。雖於其血淤肉腐則同而浮居肉曰癰。沈陷骨曰疽。是靈樞之意。與條理合。鑾說曰。癰爲陽、疽爲難。癰者溼、疽者乾。癰者張、疽者陷。癰者紅潤、疽者紫黑。漫游雜記 故氣血之分。交會分明、毒聚而高突者、癰之輕者也、交會漫然、毒陷而塌入者。疽之重者也。分之於痘。漿滿脚正者痘之癰也。脚亂漿陷者痘之疽也。夫人身之條理。臟內潛、腑外伸。故臟無瘡瘍之患。腑不論內外有瘡瘍。臟中但肺少壯之盛氣有抑鬱。則被爛蝕。以爲瘵焉。有吐瘀汁者。有吐涎沫者。吐瘀汁者。世謂之肺癰。他臟不見有瘡瘍蟲蛔之患。腑者以屬表不免此患。而內者不可見。外者可見。於是主外。外者皮肉。皮以液守、肉以血守、血液抑鬱。肉必腐爛。浸淫以及筋及骨。故有淫必結。有結必著。著則其物可數。液者氣也表也、液之厚如紙、肉者血也裏也。其深窮底。液者淸、其覺爲痒、其汁爲瘀、血者赤、其覺

爲痛。其汁爲膿。於是此患。爲液結。爲血結。浸淫而成者。爲筋結。爲骨結。白屑癜風尤在表。豌痘水痘。爲液於液。疥癬班疹。頭瘡。月蝕。臁瘡灸瘡。至眼胞之癢。腎風陰癢。皆毒之結于液者。其覺癢。其汁瘀。其痂散漫不收者。皆是也。至其毒甚。液陷血退。肉失血守。液毒徹底。曰漏瘀汁。罅隙內開。內神無所守。終促命期。是液毒之疽也。血結者。其覺爲痛。與液共病者。痛癢相兼。不兼液者但偏痛。打撲閃挫。至痙瘛諸癰疽。毒淺則近表。毒深則入筋骨。爲痛爲膿。正氣不能修篩。癰縱其行止。則流注如白虎之嚙。留滯似鶴膝之腫。以爲種種之患。是毒結於血肉也。其結筋也。瘰癧馬刀結核多滯頸項之間。其能爲漏爲瘀而不收。緣於筋。瘤於肉者。爲癭瘤。癭能突起、瘤能內陷。則其內自分癰疽。筋既緣骨。骨被其禍。筋爲收斂急迫。不能伸暢。骨日爲高起之勢。輪

囷離奇。屈曲瘣瘤。終爲不治之症。在四肢爲附骨多骨之疽。筋結之一種。宗筋之處。最能結。著天刑之一種。亦兼兩症。氣肉腐爛。臭穢不可近者。結在血肉。外狀不變。氣肉瘦削。十指或攣拳。或縮沒者。謂雞爪。見沈入筋骨也。亦癩中之癰疽也。按天仙子北山醫話云。雞爪風。言風症指節强直。不屈。狀似雞爪。故名焉。然又有人生而無指節者。亦名雞爪。按孫君孚談圃云。藝祖從世宗征淮南。有徐氏世以酒坊爲業。上每訪其家。必進美酒。奉事甚謹。以屬異日。計上曰。汝輩來吾何以驗之。徐氏曰。某全家人手指節不全。不過存中節。世謂徐雞爪云云。老學菴筆記云。曾子宣丞相家。男女手指皆少指端一節。外甥亦或然。由此則渾家血脉一路皆雞爪者。亦有之。似癩之一種。孫眞人曰。發背。外皮薄爲癰。外皮厚爲疽。又曰。凡腫。根廣一寸已下名癤。一寸

已上名小癰。如豆粒大者名皰子。癰疽之字義可知也

贅語四死生帙目次

贅語四

死生帙上

日本　鎭西　三浦晉安貞　著

不自天地觀己。自己觀天地。徒私一身。以此窺物。窮極聰明。終成一己之私。以其所成之私。呼稚誘庸。死生之故無佗。惟造化之通焉爾。公有意之私於無意。通死生之故於造化。則知情慾累己。意智惑己。徒客一己之神識。不還之於造化也。天地設位。陰陽交氣。一生二類。四部八隊。並立相依之中。長短缺具。萬才發露。而我關人境而居。不探己是爲何物。不知己資之於何。茫茫而立。悠悠而行。直取途於前者之呼危矣。是故達觀天地通造化之故。智之事也。保合大和。生順死安。行之事也。潭底月澄。汲者自盪其影。

死生訓

物混淪而立。神鬱浡而活。立則體性具。活則才用運。夫天地者物之大者也。雖大有於宇宙。宇處也。緯而爲物之宅。宙時也。經而爲神之路。時袞袞而不用闔闢。日影刻時而晝夜冬夏成。處坱坱而不爲際涯。天地定處而東西南北成。蓋大物之用。有氣物營養。養者則大給小資。營者則陰絪陽縕。絪縕即造化之所生也。沒而轉持。露而天地。日月運轉于上。雲雨昇降于下。以運絪縕之活。活能絪縕。物能營養。於是物遭絪縕。資大成小矣。一氣鬱浡而活。則我亦資神於其活。大物混淪而立。則我亦資物於其立。氣液骨肉。自水燥土石給。意智情慾。自神靈情欲給。居身天地。追彼日月。生也起而追之。滅也不及而已。蓋通中有往來。來而爲。乃活用機。往而成。乃化收跡。於是自前來者。當今而生。過今而化。自後追者。迎今而活。閉今而盡。是故莫不以其緯居

萬物　物分　循環　鱗比

散結中者、則天地萬物、皆散結其中、莫不以其經行生化中者、則天地萬物、皆生化其中。曰造化。曰生化。曰死生。從物變其稱而已。以體成天地者、分于虛實、以氣成天地者、分于轉持。轉在虛體之中、其氣東運西轉、日象明、影氣暗。持在實體之中、其氣上昇下降。水質潤燥氣燥。而後萬物。被賴絪縕。塡盈天地。在轉中者、星辰也、其體虛焉、以明暗分物、以經緯分行。在持中者。動植也、其體實焉、以燥溼分物。以浮沉分居。在轉中者、一體不變、循環無端、在持中者。先後換體鱗比相接。夫轉中、則清淨之府、其爲物也、乾燥光明、持中、則濁穢之室。其爲物也。潤溼暗淡。火者、生於乾、而滅于潤、水者。生於潤而滅於乾。天地生生之類可知也。是以。燥煦水滋。以讓此生。一生二類。四部八隊。終成萬神物。於是。我在我境。仰觀俯察。天容地載。陰絪陽縕。時率我而行。物容我而居。山壑開形。水陸異居。動與植爲偶。

入動植　小物生化　說入水火

同居水燥。水燥分天地。動植變體性。陸爲鳥獸艸木。水爲魚龍藻樹。夫鬱涔之活。則神氣也。混淪之立。則本氣也。於是。物立。則神氣具。神活。則本氣具。併有物成其中。動富神氣。是以。有意而動。植富本氣。是以。無意而止。雖富乏相分。本一之分。一爲隻隻。有依以立。有依以立者何。植食水土而立、動食動植而立。自天地觀之。有意無意。本一偶。因絪縕而解結、以往來而生化。生也者、其起而追衰衰也、化也者。其追衰衰不及而已也。人不察之。不自造化觀己、自己觀造化。主客顚倒。於死生泥。爰撫生化之小者。以啓蒙士。夫物遊經通。無不以生化者。唯其生化之態。沒痕於精、露跡於麁。天地猶精。水火漸麁。我則與植鱗比。解結最露跡。水也、生于天、而化于海、火也。生于地而化于天。生則化焉、故水不溢于海、火不充于天。化則生焉。故衰衰不涸、炎炎無盡。夫日之發、以陰能收也、陰如不收、則陽何以發、

通塞

説通

影之散以陽能聚也陽如不聚則陰何以散故姑還散陰於不散則失散與陰還聚陽於不聚則失聚與陽既已還之何所端倪是以水者火之宅火者水之神相依相有莫有窮盡是乃生化之事也若有窮盡天地當故天地不故與物生化氣以精莫所不充體以麁莫所不容是故天地者大物之塞也生化者一氣之通也氣以通體以塞是以氣塞則物盡猶置燭於密器中物通則氣不宿猶置燭於烈風間天生化于東西地生化于升降雲雨聚散倏忽金石成壞攸久而動植者生化最露跡植以華實生動以牝牡成植存于水土發收動存于飲食噓噏物失其所存則亡存亡相繫物物不隔是以地之所生播麥則通麥種菘則通菘樹之所長存幹則通幹伐幹則通蘖是以穀播之於地則茁藏之於倉則蛘是動植相通也一燈之油照多則涸早照少則涸晚一溪之魚漁多則生衆漁少則

生亦寡彼是通氣也一氣爲體於天地運用於鬼神氣質迺體之塞生化乃用之通有氣有物無物無氣氣聚物結物解氣散所以火盡而明滅水盡而冷去故生之前氣未聚體未結唯其如此之後體已解氣已散亦唯如此是以動植同生之類也以意之有無反跡彼豐我所儉我見彼所隱知其所以然則見神本本一彼此各有給資爲一生化混成夫人目藏明耳藏聰智載意智之神體畜動靜之機聰明神機存於耳目智體耳目智體有聰明神機去根無華焉引神無窮物成於氣而復於氣焉同於氷雪成於水而復於水泥塊成於土而復於土故死者生之反生事之已也若夜之於晝日月聚焉土石結焉跡精者生化沒痕草木生焉鳥獸產焉跡麁者生化露跡雖精有聚則散解則結之塞體雖麁有逝則繼枯則生之通氣於是精麁不隔與大物化天地從其通塞盻忽焉得違之衰

衰之態。來而當者見、往而過者廢、見者之機、向將而活、廢者之跡。從既而化。此、故擾擾之物。能通于衰衰之中。而衰衰、則化走于既之地、生向于將之方、擾擾。則生始于既之地。化期于將之方。故生化之機微。間不容髮。認麁不見精。識我心之麁。執始于既之生、吝期于將之化。見我荏苒向于將、不覺彼駸駸走于既。固執七尺之身。囿生化於此中。尋幽明於質、索有無於氣。翻無意爲有意。轉死爲生。亦窺窬之爲祟也。提心擴之。心遍天地。舍心化之。心一天地。

造化第一

天成天地、神爲造化。成者定常、爲者變化。倏忽之齡。曖昧之智。欲極絪縕之濤流難矣。化工之痕。有常于他。而不慣于我者。有推移而行改者。有感應之爲不測者。正誕眞妄。非並信。則共棄焉。聰明之所病也。蓋天地體立、陰陽性見。體能成物、性能見氣。性不得體則不立、體不得性則不活。天地布體、水火運性。而雖陽華在天、陰液在地。而日影相偶、而月景析、水燥相偶。而溼火析。天雖遠、而可望而知、地雖近而見聞難達。夫水火者、陰陽之見象、造化者。絪縕之漏態。感應入機。其妙不測。人慣天成之常。提固泥之惑。局促之理。區區之故。不可以通。則託之於鬼神之不測。是以世能仰鬼神之名。惑於鬼神之情狀。既惑於鬼神之情狀。何以窺造化之絪縕。蓋天不徒穹隆居上。地不徒磅礴居下。能絪縕摩盪。爲常爲變。天則定常、而置變於常中、地則變化而置常於變中。然則何安其所慣。怪所不慣。天地之爲物。立中於心、成外於天。反氣出層層而愈精、知質入重重而益實。故天陽地陰而陰氣自陽天之無邊際收、陽氣自陰地之無內中發。其間日月景影上旋、水火溼燥下立。上物星辰、下物動植。天者、定常之府、人竭心力、而極其變。地者。變化之藪。耳目晝而泥其

變地中堅實重沈。近表漸粗麁。水火土石擾擾然。精氣漠然、麁氣著痕。痕有著而後人始窺之。天中氣象之行、旋轉迂邪、地上氣質之行、外降吐納、質之所通、陸則川谷繚繞、氣之所通、水則其隧如蜂窠菌瓣、徵於石之防。玉之理。草木之文。人身之經絡、可知也。」定常之府。其行可豫量也。惟推遷之變。人不能窮。猶夏蟲之不知氷霜也。其餘則彗孛客德而已。如彼日月之競光變色。地事而非天也。

晉書。愍帝建興二年正月辛未辰時。有三日相承。出於西方而東行。是似在轉中。唐史。貞觀初。突厥有五日並照者。似惟突厥見之。其他曰兩日相鬬。曰日相盪。游火之所爲。或密雲深圍、日光銜其噓之類。漢書五行志。成帝建始元年八月戊午。晨漏未盡三刻。有兩日重見。南史。梁武帝。太清二年正月癸己朔。兩月相承如鈎。見于西方。宋史天文志。天禧四年四月乙酉。西南方兩月重見。是皆游火。意不太高焉。日色有曰青者。有曰赤者。漢成帝河平元年二月癸未者。日月共赤。晉書穆帝永和八年者。日暴赤如火。中有三足烏形。見分明。五日乃止。亦似蒙氣在轉中。

地事則水燥之摩盪。燥鬱則火、水結則氷肅收鬱發相動而風恬水波開境。天間疏雨、地間漏燥。水開通路於川谷、燥開通路於海窖。川谷者、陸中之水脈、猶有洑流潛地者、海窖者。水中之氣脈。猶有空洞見陸者。

天經或問。探珠者。入海底間遇潮。則水湧而下虛焉。以水則虛、以氣則實。采珠者中其氣則病。

物不能以一而成。則條理之態也。故地之成合水土。推此驗之於日月。彼猶此也。而地體水廣陸狹。南北定處、東西轉位。西洋觀天地。横竪爲五帶三際。

天經或問。赤道之下。南北二十三度半之

地一圈。春秋二分。太陽正過其天頂。日中無影。過春分則影在南。過秋分則影在北。名為煖帶。南北二十三度半以外。截至六十六度半之地。此地太陽不經其天頂。而不近不遠。此南北二圈。為正帶。不甚冷熱。南北之二方。自六十六度半。各抵其極。為冷帶。有日太陽繞其地恆見。有日太陽繞其地恆隱。隱見之候。或至數月。或至半年。三際既見上。煖帶或曰熱帶。

五帶以便其指示人。為之聊可者也。三際實出于摸索。未得條理者也。陽旺之地。陰能收焉。陰旺之地。陽能發焉。故極地則寒燥而風激。中線則潤熱而雨淫。如經之則五月以日北近而淫雨大起。十一月以日南遠而風颷怒號。是以知陽能噏水使之湧。陰能搾氣使之激。經緯無異焉。然晴雨之倂。其地之絪縕。不復一焉。

物理小識論。南方近日之地多雨。北方遠日之處多風。且曰。閩中春月恒雨。夏月日出則酷暑。旋復有雨。如滿剌伽國。處赤道下。四時皆裸。賴日日有雨。以解其蘊隆。又引馬觀瀛涯勝覽曰。葛蘭國諺云。半年有雨。半年晴。七月小霽。八月望後大晴。三月又雨。又引周達觀眞臘記云。四時常如五六月。不識雪霜。半年有雨。半年絕無。九月每日下雨。午後方下。又曰。從大西洋。至大明海。四十五度以南。其風常有定候。至四十五度以北。風則變亂。又曰。利未亞海。近赤道下。常若無風。天氣酷熱。食物俱壞。諸海無氷。北海則氷堆成氷山。哥阿之地無雨。常晴。至三十六年。德墨多則多雨。北海少雨。夏月有雨。淫土而止。則遠日風高也。且考梵曆。則正月至五月。為熱時。五月至九月。為雨時。九月至正月。為寒時。參考諸說。其大概足見日近則氣恬雨多。日遠則氣動雨少之故。

水化天間、得川谷爲之道路、以自天來其性淡、日近而溢、日遠而涸、氣鬱地中、得海窖爲之窟宅、釀畜水以爲鹹。近月而屈、遠月而伸、水性好降。氣入則爲潮汐、而潮氣出則復本性而下。是潮汐之正候也。雖然、月之高低、窖之大小。地勢之屈曲、海氣之鬱發。其所以然難窺。而其所然可見矣。

物理小識曰。元吳彥壽答起崖書曰、月與水陰類相應。古洲曰。朔後三日、明出潮壯。望後三日。魄見而汐湧。每歲仲春。月落水生而汐微。仲秋月明水落而潮倍。減于大寒、極陰而凝、弱于大暑、畏陽而縮、陰陽消長。不失其時。故曰潮信。即潮汛也。每月十三二十七日。曰水起。是爲大汛。各七日。初五二十日。曰下崖。是爲小汛。亦各七日。久晴雖大汛、亦不長。凡潮生則水長。潮之大小隨月。月高潮小、月低潮大。瓊館志。江浙欽廉之潮。皆有定候。半月東流。半月西流。

潮之大小。隨長短星。不繫月之盛衰。明州潮月如子午則長。泰西曰。月爲陰精。與水同物。凡溼潤陰寒。皆月主之。既爲同物。勢當相就。如呼吸然。潮長之時。江河以及盆盎。無處不長。長則氣入。水爲之輕。潮降氣出。水復故重。今人以瓶盛水。每日權之。輕重不等。亦此故耳。獨小水之處。昇降甚微。人所不覺也。水族之物。皆望盈晦縮。熟考大壑之勢。上受百川之流。而繼其源。下畜海窖之鬱。而成其釀。海底之形狀。大嶕小嶕、如陸之丘陵、大窖小窖。如陸之溪谷。窖之噴氣、猶陸之出水。而海水隨月。是其常。氣之鬱發。地之迂曲不同其事焉。海水粘之處、則海不爲波、海氣激之地、則湍渦噴雪。而其間有長流如川者。不復逐月行來去。由是觀之。海之有文章。猶陸之有文章焉。

地上游者。水燥溼火。與天之氣象相化。絪緼

摩盪。從其地讓出常與異。陽氣鬱則爲火、陰氣結則爲水、而水火之生各二。或生天間、或生地中。以大概言之。水結天間則雨、結地中則水、火發地中則火、發天間則雷。以其分言之。雨雪霜露、雨而析焉、雷霆流隕火而析焉。水火。其物則不相容、其氣則能相親。人徒見不容之物不察相親之氣。是以徒二其二。不通神爲之故。均是水也。而其性不一。均是火也。而其性不一。同於艸木鳥獸千萬其形性也。西海之山。有弱水。委靡墊弱。不能負一羽。亞刺比亞有死海。水鹹性凝。不能生波浪。生水族。漳州有溪。黑染人肌。以有烏脚之稱。南印度西有海。赤而如血。因獲紅海之名。甘露結甘。海水結鹹。人火由燧而起。見水而滅。燐火田暗而出。得雨而熾。其遊天間也。或有留繫而與日月爭暉。或有走散與星火相混。或鬱發爲雷電。或下墜如星

雨。而雷霆多燒物、有火之用。星雨不燒物。無火之用。又聞。西川之火井、水甚冷。刳竹對鍋。竹不燒。而水即滾沸。是有火之用。無火之象。我越州。人家地中出火。通竹取火。竹不燒而火即昭明。是有火之象。無火之用。可觀水火者統名。而變極其中。是故硫黃者。地之膏膩。火著而燃。若會水之過則爲溫泉。不會水則爲火山。瑯邪代醉曰。長江縣北。伏龍山下。地窪若池。名曰火井。以火引之則聲隱隱然發於地中。少頃熾焰。夏日積潦停水。則焔生水上。水爲之沸。而寒如故。水涸則土上有焔。觀者至焚裾。是相居而不容。與溫泉反。與玄奘西域傳載。北印度尼波羅國。水火都之阿耆波瀰水。渟濘湛然。投以家火則徧地火起。烟焰數尺。以水灑之。火更增熾。碎土以投則火即燃盡。架釜水上煮食。立熟者同矣。或有田水釀火燒禾者。游子六曰。當夏火不能疏

越。逼入禾葉。急去田水下面冷滅。火氣疏越而不燒也。是則陽火。陰火之變。春夏之夜。有火光幽幽。數點聯珠。人逐則退。人去復逐者。天經或問。辨其故曰。氣滿在人前。則氣拒而前。在人後。則後氣急塡行逐之。則風噓。故退。反則風吸。故復依人。世稱聖燈者。大明一統志。陝西西安府聖燈崖在鎮安縣。遇良夜輙見一燈。俄散作七八。復合爲一燈。四川順慶府蓬州燈現凡五處。初三四點。漸數十點。高下相應。離合不常。本邦筑紫之不知火。丹後之龍燈。如此者不遑數也。物理小識曰。唐劉餗曰。江寧有晉長明燈。青而不熱。彼陝西西安府有苦川。我東奥有醋川。共以味名者也。同書曰。庭州有金鐵皆漏之泉。德化有煮鐵爲銅之水。鄜延之川有日夜流脂者。西齊里亞有沸泉如醋。物入便黑者。翁加里亞有噴出地即凝石者。有冬月流而夏氷者。有投鞭成泥。再鎔成銅者。有色綠而凍成綠石者。勿里諾山有物陷半日。便生石皮周裹其物者。鯔島無雨。漏天常雨。絪縕之變。造化之巧。不可窮詰。舉一二例千萬矣。若夫水而發火。火而求水。水能隔火體。火氣能入水。乃水火之常態。今火氣不煦水。其象直衝而出。火之精乎。勢之烈乎。其爲性不同于膏油之親火。還類乎燒酒之引火。又與溫泉託性於水而不見火象者反。以能盡火之變也。

澤燥相兼者。雲霧之類也。變化則野馬陽焰。虹霓靄暈。天開海市。

野馬遊絲也。陽焰。澤中之陽氣。我室屋島。古時有此氣。今則斷云。物理小識。有陽燄水影旱浪之說。曰燕趙齊魯之郊。春夏間。野望曠遠處。如江河白水盪漾。近之則復不見。土人稱爲陽燄。引晉符堅載記曰。建元十七年。長安有水影。遠觀如水。視地則

見。人至則止。亦謂之地鏡。陵友仁曰。宋寶祐六年四月。常州晋陵之黄泥岸。亦有此異。相傳呼爲旱浪。愚者曰。日中。野馬飛星燁然者。陽燄之端也。奇者爲水影旱浪。寶則凡光生燄。燄自屬陽。凡光似鏡。鏡能吸影。光與光吸。常見他處之影于此處。雲分衢路。日射回薄。其氣平者爲陽燄旱浪。其氣厚者。爲山市海市矣。晋按唐書神龍二年三月壬子。洛陽城東七里。地色如水。樹木車馬。歴歴見影。漸移至都。月餘乃滅。是又旱浪也。夫水者。收萬象成色於己者也。故望艸露於朝暉。瞻虹霓於晴雨。照翳正斜。爲此燦爛。我嘗見月虹。如素練。又見月暈竝結若連環。人曰。虹霓當午不見。至冬收象。無佗。午時無斜影。冬時少細雨也。我居孖山之陽。北極出地三十三度餘。數見冬至午時之虹。以細雨在北。午日南低也。隱見何有常焉。史中數見貫日之虹。其虹

爲白。意是直貫日體之義也。虹形本與日相望。而是則爲貫日之象。決是非虹也。意是雲氣臭臭。日之所射使然乎。望之前後。斜月之微雨難得。則月虹難有也。瀑布奔騰。噴沫如霧。旭影之所射。五色動搖。愚俗膜拜。稱如來影降。史記天官書曰。海旁蜃氣象樓臺。曠野氣成宮闕。人就蜃字生杜撰蜃。陳藏器以爲大蛤。李時珍以爲蛟屬。並曰。其物能吐氣爲樓臺。或謂。其脂和臘爲燭。烟中能見樓臺。不知脂烟何以致樓臺夜間偶然。天上有紅白大光。燄異非常。或見兵馬樓臺。俗謂之天開。游子六曰。或有晝見兵馬戈戟。行空者。或見樓臺宮室森然者。若倒映水面。即蜃樓是也。意其天開亦似有陰陽之二氣。蜃樓又曰海市。彼登州海上。春夏能見。梵曰乾闥婆城。我越之魚津。藝之嚴島。亦時見之。稱曰野狐林。曰喜見城。蓋海旁曠野氣無別。讀物理小

識能盡其象。曰泰山之市因霧而成。或月一見嘗于霧中見城闕旌旗絃歌之聲。最爲奇。又登州鎭。太平樓臨海對島。海市之起。必由于玆。每春秋之際。天色微陰則見。頃刻變幻。島下先湧白氣。狀如奔潮。河亭水榭。應目而具。一次則中島化爲蓮座。左島立竿懸幡。右島化爲平臺。稍焉三島爲城堞。幡爲赤幟。又睢陽袁可立爲撫軍時飮樓上。忽艨艟數十揚帆來。各立介士甲光耀日。朱旆蔽天。相顧錯愕。急罷酒料理城守。而船將抵岸。忽然不見。乃知是海市林景熙蜃說曰。予避寇海濱。登聚遠樓見奇峰疊巘城郭臺榭。中有浮屠老子宮。詭異千狀。近晡而滅。葛晅曰。氣映而物見。霧氣自湧。即水氣上昇也。水能照物。故其氣清明。上昇者亦能照物。氣變幻則所照之形亦變幻。晅邑近南關內。有一小池。一日近晡。見有一騎。倒影西浙水中。北馳而過。此所謂空中一大鏡。水漏窗隙。則轉映之小鏡也。地上人物。空中無時不有。特氣聚則顯耳。故不論山海都地悉得見之。方中通曰。空氣之攝影。自下而上。池水之攝影。自上而下。故影皆倒。山海之氣。橫攝市影。故影皆順。葛晅曰倒影亦轉攝則順。晉按。諸說相具觀之。其態可知也。子宣空中大鏡之諭。足以盡其情。空中氣清。能收萬狀數鏡相寫。其或收遠影乎。抑收畫圖塑像乎。艨艟介士。何由得之。若夫絃歌之聲。此氣之所發。亦雷之類乎。如三島變化。乃似霧氣而非影焉。然則海市之氣。亦有二氣邪。凍之暫結。石之深閉。亦能作物像。造化之巧。實未易測也。

火能昇焉。而經有星隕如雨之文。水能下焉。而傳載穀洛鬪之語。

物理小識曰。左傳魯襄公時。穀洛鬪。紹興中。田水直行平地數尺。程氏井溢。二水相

闖。徐禎卿異林云。弘治戊午。蘇杭湖池。水忽騰沸。高三尺。久乃復。張元長言。東西洞庭相闖。氣湧水波千里喊沸。而濱湖一館中。硯池亦應之。其水陡然立起。楊大權言。萬曆壬午七月。大風雨。楊扇湖水東吼壁立如城垣。湖西頓涸。居人亂走其上。得古器古錢甚多。久之風止。湖水汩汩而下。無倒瀉狀。愚者曰。老父記萬曆戊午。馬湖靑羊二江合湧。逆上岷江。水立數十丈。周勒卣言。花瓶水溢。其井亦溢。蓋氣起相應也。臥子言。萬曆三十年冬。松江大風。瞰之若漫天雪。且爲氷山高五丈許。又武宗時。覇州文安縣。一夕大風。河水僵立。高起二丈餘。凍成氷柱。中多空隙。沿河七八十里皆然。亡何流寇至。男婦數十萬盡匿其中。竟以免難。

天之所雨。則雨雪。雹爲夏雪。與冬雷偶。地之所起。則雲霧。烟爲春靄。與秋淸對。而地或發光。人歸諸寶氣。天又雨物。世擬諸地物。以說其來由。提人以窺造化者也。是以如天雨菽穀諸物。猶可言焉。至天雨毛地亦生毛。天雨肉地亦生肉之類。不得不歸諸造化不測也。如海市收遠影。理猶可言焉。至凍結華艸獅鳳之文。雷爲槌楔墨斧之形類。非造物而孰辨之。似變非變者。其唯水影石理邪。水本無定色。故收佗色以爲己色。石本無定形。故假佗形以爲己形。

以條理推之。天者一散輭虛。地者一結堅實。可識矣。地面土石。粗輭生化之物。粗中分堅輭。肉土骨石。石中分堅輭。而金石分焉。石見擊則碎。金被燒則融。其非堅可識焉。擊之而碎。燒之而融。見其化而知其生焉。地體之堅密。有根于石。丹綠黝堊。有華于石。金石者。堅輭之分。火攻之見陰陽之分焉。萬物有定形。石獨爲異。蓋不持己之形。爲形類佗形。猶水不持己之色。遇物取

其色也。勢之所至。不得不然。是以。如峯。如淵。如船。如杜。如鼓。如枰。如鏡。如室。如僧。如女。如龍。如龜。如牛。如狗。而不盡。彼瓊州雲霧山。所出之石。如橄欖而有孔。我土州產爺石孃石。自然具老男女之形。香牛山親目擊云。又彼鳳翔府所出之魚石。狀如鮹鯽鱗鬣俱備。我豐玖珠郡。所出者。雖鱗鬣不具。琢之。自首至尾。分爲兩片。裏面骨形盡具。又酉陽雜俎載。衡陽湘鄉縣。石魚山之石。魚。燒之作魚腥。又曰。夷道縣釜瀨有石。大者如釜。小者如斗。形色亂眞。唯中實耳。梨春採藥使記曰。江州見上山石。大小皆如烏帽子。色有赤白黑云。爲畫者。明一統志。岳州府慈利縣。武口寨石成堆心牡丹枝葉繚繞。雖精于畫者。無能及云。鞏昌府。延平府。所出之花石。並山水樹木人物禽魚。樓臺日月相具。琅邪代醉曰。汴京天津橋上石自然爲華夷之圖。山青水綠。河黃路白。貝原益軒曰。壹岐長者原。海岸之石。成人物禽獸蟲魚艸木之圖。井澤蟠龍子曰。肥後菊池郡有石。理具軍器。雲根志曰。山州稻荷神之祠。有石屛。石面自然成日月星辰山林溪淵。前有一狐。仰蹲。實如畫然。物理小識曰。平陽府侯馬驛。澮河兩岸石。土上皆手跡。或掌或拳。若印。削去之。其中復然。又一統志。潯州府龍影山。成五色彩畫之龍。麗江軍民府華馬山。成五色斑爛之馬。慶陽府寧州山石。成戰馬之狀。其成字者。平樂府。富川縣。南巖洞上。石甋爲廣陽洞三字云。如此類。豈可數盡哉。天下昇平既久。好事家盛畜石。其自然者。物之化者。人人能辨。鰕蟹螺蛤。艸木鳥獸。凡百器物。爲石者亦多焉。不灰似木。鉐鎰似金。珷玞似玉。我和州金峰山之一窟。鍾乳之滴爲菊。是以。人曰菊窟。琅邪代醉。新安王喬洞。木化石。而復產枝葉。都元敬見而駭

焉。有使人謂予。予安能信。今以語人。人以爲妄之語。意此類乎。其佗之奇者。物理小識。大同山中。有人骨在山腰。上下五六十丈。皆石。惟中一帶四五丈高。皆髑髏脛節齱齱然。關中山亦有之。是亦石。猶倪朱謨過晉蜀山谷。訪龍骨。巖石稜峭。谿徑墳衍。隨地堀之。得礧礧如龍鱗。隱隱若爪牙者。坤輿外紀載。納多理亞國人。鑿一石穴。獲化石人無算。木内氏雲根志曰。筑後上妻郡之一洞。有石。形體不異生人。頭目鮮明。與二程全書。南中采石者。遇石陷閉穴穴中久食石膏。値人來采石。引而出穴。風化爲石者同譚。不知其果然乎。蓋海中所生鐵樹。石芝。珊瑚樹。石闌干之類。是石之漸植者也。我豐產石闌干。與酉陽雜俎所說合。其變化錯綜。以金體之堅。之汞如水。以石性之重。之浮石如木。石本冷質。而有熱石。石本不長。而有息石。亦其異者也。不知熱石客氣之所寓。溫泉之類乎。抑稟性然乎。未能審之。相由井濱。出人肌石。輭而溫如人之肌。則熱者當有。息石。本邦亦往往有之。曰生子石。梨春採藥使記曰。相州三浦莊。有孕石邨。邨有一石。歲產二子。邨以是獲名。又曰。奧州銀山之隣鄉。中島村。文祿中。村人於紀州熊野。拾一石而歸。今而二百年。其石漸大。及一拱半。子孫落落二千餘云。明和中。豐前山中亦出之。中津侯移之江戸之邸。太平廣記。南嶽岣嶁峰。有響石。呼喚則應。如人共語。而不可解也。南州南河縣。東南丹溪。有獨石。人呼之應。笑亦應之。我勢鸚鵡石者是也。坤輿外記載諳厄利亞聾石。隔石發大銃。不之聞云。蓋氣閉而結。則輭物亦爲堅。氣通而散。則堅物亦變輭。故松入康于河。爲石。見輟耕錄。延安修城。堀地得竹竿已化爲石。見萬物造化論。書隱叢說。說化石多。其末載。砥柱石

中之鐵鏵。夏侯孜。堅石中。得金釵半股。濤陽石中。得王逸少書。頭陀方碑版。觀音寺石中。函魚骨一具。首尾皆全。是皆埋沒既久。土或變石。如琥珀内蚊蠅。水晶内桃杏。耳。夫物之親土者。朽敗則化爲土。堅凝則化爲石。理固然也。至于漢陽山民。破石而得白龜。王文秉破石而得金蠶。杜綰破石而得活魚。崔元亮。破石而得飛鳥。本邦亦往往有此事。則所不解者也。是雖未可盡徵。亦足以察造化之巧。且石中得飛鳥。長崎石工。亦値此異。見西川子所著怪異辨。斷。或往時方地裂岸崩。生物埋地中。會石之結。氣閉不能化。經年未久。未能化石。遭拆開而然乎。必有其由焉。博書以備考。望夫之石。本寓似之象。圯上老人。截諸竹帛。千載不曉者。子房之智也。是故漢高之興。大澤出龍。芒碭動氣。留侯之老。從赤松子。祭黃石公。孰知與徵不出於其手。是賊知賊。按圖者。不得驥焉。

是以造化之巧。則鬼神之所爲。以人疑天。亦致不通。

石之類佗物。是其常也。而豈止石類物哉。物理小識。載歐陽宗衡說曰。固石距雩百餘里。溪中有洲。白砂平鋪。水痕能爲鳥跡魚文。卦列飛符。蜃閣海市。枯木寒鴉。無不畢具。錯綜變化。前後見者。各出機軸。無有重復。沙浪猶動物。冰亦能摸物形。格致艸曰。崇禎壬申臘月。余樓簷瓦。凍爲華艸獅鳳之形。夢溪筆談亦曰。瓦上之霜。渠中之冰。又能成花菓林木之畫。又我天慶四年正月下旬。雲州自島根郡。至楯縫郡。海濱結冰塔。高三丈。周回七八尺。見著聞集。東坡詩曰。斷蓬飛葉卷黃沙。祇有千林鬖鬆花。是蓋齊魯地寒。夜氣如霧。凝於木上。平旦如雪。日出飄如花。曰鬖鬆花。天地廣矣。化工妙矣。不翅天巧之肖。幷人巧肖之。著

意泥解通放意觀之彼象此與此象彼與。造物無客主。變化無定形。貓蚘與飯粒天槳子與萊菔莢互相似焉。

動植者。因陰陽之絪縕生化於天地之間者也。古曰。木石之怪曰夔罔圓。水之怪曰龍罔象。夔龍圓象。吾不得而審之。物能萃精與感應會則發爲奇怪。至淫祠寃魂狐狸貓狗蛇鼠百物。倏露忽沒。感應之駁者。疑惑念結。推置情慾意智於彼。於是認酬醋技巧之疑於物。惑矣。蓋山水之怪。此間所稱。水說川童山說天狗川童一曰河太郎。出沒水際。好食魚介。近衞帝。仁平癸酉。黑胜犯帝座。源賴政射以鎭之。世謂之鵺。世傳其狀猿首蛇尾四肢如虎。意宋黑胜之類而已。宋元豐之末。黑胜見宮中。大如席。始夜見寢殿上。而神宗崩。元符末又見。而哲宗崩。至大觀間。漸晝見宮掖。時及內殿。政和以來大作。得人聲則出。聲如倒屋。其形丈餘。彷彿如電。黑氣蒙之。如人。如驢。晝夜出無時。人後習以爲常。至宣和中浸消。蓋大觀後無禍徵。

明成化丙申七月。京師見黑胜。時坊郭細民家男子。夜夢露宿。忽有物。負黑氣一片而來。其疾如風。雖密室無不至。至則人皆昏迷。或手足身面被傷。出黃水數日。徧城驚擾。暮夜持刄張燈自防。見黑氣來輙鳴鼓以逐之。有見者云。黑而小。金睛脩尾。狀類犬貍。一日帝御奉天門視朝。侍衞忽驚擾。帝欲起。太監懷恩按之。頃之乃定。壼簪錄曰。東山信州諸國。春夏之間。盲風颸沙。人偶觸之。當時不覺其所傷。忽成刀斧痕。或云。有一物。乘風觸。呼曰鎌鼬。亦胜之類乎。

似氣類非氣類。非雲物雷電之類。非蜃樓山市之類。著意運慮。最滯解通放意觀之。一結駁氣爲妖。前見遇二帝之晏駕。後見何爲無禍徵也。豈爲造物有命。酬醋宋室哉。世所謂

天狗。我不知其狀。不知深山幽谷。精物有結。如彼黑眚而惱人。人以爲天狗乎。而其殿堂門廡。與王祠爭豐。我豐國東。六鄉之山。綿亙數十里。雖無岱華衡恆之峻。絕巘重嶂。深邃幽杳間有稱魔處者。狗所棲云。其中有一刹。號文殊薩埵。所居巖爭峙。樹交鎖。例八月季五夜。遠近詣聚守夜。里中一女子在其中。忽然失所在。探索不得。所著衣帶或懸樹杪。或在絕崖。經日不獲。以歸之於狗。或曰。狗邪非邪。晉對曰。豈特斯事焉爾哉。往年某寺留客。朝失所在。搜索得其屍於高崖喬木之梢。至今歸之於狗。狗狗寃哉。何弗發爾神通。雪粉其人。雪爾寃。夫鈴鹿山之鬼。只罵賊之稱。元興寺之怪。充於止嬰兒之啼。則可也。惡上之於丈夫之口舌。世譚狗。攫人者。皆由曖昧幽暗。彼果一搏千里。弧矢弗能及。何憚避白日衆觀。鄭子產駕車出。聞哭聲。撫僕手。察其寃死。喬木之懸屍。絕巘之衣。如使子產在。則焉知不撫僕手哉。經數旬奸發。乃人勾之去也。蓋天地廣矣。造物巧矣。天不可揜。神不可測。是以物。其所生可說。生者不測。不可說。則遺于條理。可測則非神之變化。故典籍之所載。

山出地沒。

采覽異言。亞細亞部曰。萬里石塘。嶠在瓊州南海之中。東西二三百里。南北七八百里。蓋古之時。此處有國。大地既陷。今唯見其山岳岡巒頂耳。此事遠聞。未知實否。按著聞集。雲州秋鹿郡之北海。有小島曰黑島。天慶三年十二月上旬。俄然而沒。其跡猶存大石。日本紀。　天武十三年壬辰。大地震。山崩河漏。伊豫溫泉沒而不出。土左田苑五十餘萬頃沒爲海。是夕有鳴聲如鼓。伊豆島西北自然增益三百餘丈。更爲一島。

金玉發光。器物相擊。妖魅變幻。至誠感應。事不可測。又不可必。能使人泥意解焉。古昔

桓武天皇之遷都於平安、鑄戎衣金人、埋之於郊。號爲將軍塚。以鎭皇都。爾來有時作鳴動。同是一封土。精氣之所華、能致其靈。是以石軀金人。木石斂貨。精神感應。時有非常之事。然在彼本無意。人推我之情意。望酬醋於彼。終淆意之有無。條理以窒塞焉。齊桓公出見紫衣之神。還病。管仲曰。澤神也。霸者見之。公病繼愈。公蠱於神。管仲以神解。其智也。是故晉平之二豎。玄宗之虛耗。皆夢焉爾。物何有此有意之態。酗人拔劍自刺。刺者人也。使刺之者酒也。酒能爲之。而酒弗與也。故曰。性體立條理之整齊、變化成事物之錯綜。

物類第二

言類則曰羽。曰毛。曰鱗。曰介。曰蟲而盡。言生則曰胎。曰卵。曰化。曰溼而盡。是孟浪從見而言者。非條理之言也。條理之法。觀其理析之、以見其粲立、悉其所反合之。以見其混成。蓋生。類分動植、動植分堅輭、而部各二。曰堅動。曰輭動。曰堅植。曰輭植。生隔天地於水陸。則四者爲八。而水陸反其天地。故活于彼者、死于此、活于此者。死于彼。水陸雖反天地。而水物皆影于陸。是故陸之羽毛。水以鱗倮而影。陸之艸木。水以藻樹而影。於是水陸各四部。部各分隊。堅植堅動者閉、故嗇其品、輭動輭植者開。故富其文。故陸動之隊、有鳥獸水動之隊。有魚龍。陸植之隊、有艸木、水植之隊。有藻樹。堅部者通水陸。植曰金石土鹵、動曰螺蛤龜介。生氣不盡于此猶餘蟲豸菌苔於水陸。堅植之分。止于金石土鹵。堅動之分。止于螺蛤龜介。陸植則艸木、猶有苞蔓卉樹之小隊、陸動則鳥獸。猶有立伏悍黠之小隊。今夫人以眇然生。以撮爾居。以聞見之所及。序物類之無窮。如理絲棼然。然聞見之所不及。以其所及之條理推。無所遁髣髴也。物有多寡者。天之數也。識有狹博者。人之分也。諸生之剖析。以玄語未盡。獨擧獸類。要他反三隅。故

唯剖條理、非敢務博也。夫獸之爲生、與鳥同
中反而就養有動植之分、就養於植者、鈍其
齒爪、就養於動者、銳其齒爪、就植者、其脊强
梁、就動者、其脊柔輭、就植二隊、一立一伏、就
動二隊、一悍一黠、蓋天地立體、陰陽交氣、乃
是成具、綑縕能化、小物、小物者、散體也、大物
者統體也、小物散而結乎統、中以散爲其萬、
乃天之給也、以結爲其一、乃物之資也、資者
資統之給、故其性體萬剖析、給者給散之資、
是以其神物同活、立給者廣而資者結一觀、
諸牝牡之合結子、華實之合結苗、故其動植
資橫竪、雌雄資剛柔、艸木資大小、鳥獸資輕
重、隨顯數之而已。統者無不有、散者無不資。
則諸對皆結於散中、故立伏亦自橫竪得、悍
黠亦自剛柔得。立中分人寓、伏中分牛馬、悍
中分豺虎、黠中分兔鼠、而取獸玩鳥、鶴鷺影
人寓、鷄雉影牛馬、鷹鳶影豺虎、鴿雀影兔鼠、
惟其就養、頗有別也。夫動者歧然之體。內有

噓喻飲食之用、外有守禦營作之技。人不知
己與萬物並立、偕資其所給、反反錯綜、迭有
沒露隱見人之觀物、以己爲正、以物爲偏、苟
欲醫此痼見、則宜捨己之所有、而立天地、以
反觀己於萬物中、於是通此達技、彼有偏則
此亦有偏、唯己所有之智技、能足制物、所以
自勝上之也。姑以其有智技爲天與正者乎。
夫世之惡虎狼者何故。無佗惡其縱殺於無
辜也。數罟之設、陷穽之襲、筌蹄之欺、炮炙之
慘、于禽于獸、于鱗介于蟲豸、莫所不至也。天
同賜此天地、並立而何辜、侵其境域、覆其巢
窟、寡其雌、割其子、猶尚不已、以人啖人、狗之
不食狗之不似也。物偏而人正、則何以虐無
辜之至此。鹿之呦呦、食野之苹高、是與其類
偕化育也。麟亦如此而已。然則彼此旁觀、孰
仁孰暴。我唯見人以智技勝也。斯言也、可爲
自天地觀者言之、難爲以人自尊者說也。是
以人亦毛中之一。其歧然之文、通之於彼此。

而觀達天地。於是噓噏之用。陸動同有之。而水族代鼻於腮。去噓噏。作吞吐。蟄蟲之族。夏則吞嚼。冬則閉氣。而其養內。有吞•有噏。而鳥則爲啄。故以嘴代脣齒。獸則爲嚼。故以脣齒代嘴。今就條理觀之。有蹏者能戴角含牙。其所謂牙者。挺然抽前後齒間。人之所以斷絲者其位也。蹏類有角則無牙。有牙則無角。故此牙也。所以與角相有無者。沒噬咬之用。爲守禦之具。夫齒之爲物。口中之露骨。總謂之齒。分謂之齒牙。前齒曰板齒。後齒譯西洋語者。曰齝齒。齝本齧齒。以如臼假之。前齒如板、蚤生而毀、再生者爲用、其根特生焉、是皆見脣間者、後齒如臼。晚生不毀。用不竢再生、其根歧生焉。是皆隱頰中者、前齒以斷絲齒畢故斷絲齒最後生、後齒以眞牙畢。故眞牙最後生。眞牙出素問。斷絲齒此間獸曰勾齒。西洋曰犬牙眼牙。此齒於人寓居閑地。於蹏類與角有無。於悍類銳其鋒以爲鬭具。於黠類

沒寓用於板齒。於是就植之種、齒爪沒銳、就動之種。齒爪露銳。雖齒爪沒銳則同。而立伏態異也。蓋其形已立、手足前居用事之地、首郤居無事之地、其形已伏。首前居用事之地。四肢郤居無事之地。四肢前用事、故能歧指、取守禦營作之技於此、首前用事。故蹏其指沒守禦營作之技於此。其技在首。於是。耳可振焉。口可嚼焉。牙可鬭焉。角可觸焉。是以。牛用技於舌。馬用於吻。象用於鼻。夫獸除人寓則皆伏。何蹏類獨謂之伏。雖然豺虎兎鼠皆有跳梁之才。而此種獨四蹏事蹴踏。重蹏伏行。而立品性潁、以智勝、伏品性愚。以力勝。就動之種。制物養己。故常抱鬭志。竦身以瞰物。而悍品大而剛、黠品小而柔。悍品小其齒、而尖其牙、黠品尖其齒而小其牙。就動之種、上脣露縫、就植之種、上脣沒縫。雖同餬口於植、伏品好根葉、立品好種實。雖同充腹於動。悍品嗜禽獸。黠品嗜魚鳥蟲豸。莫小於黠品。莫

大於伏品。故大小結黠伏悍品最疾、伏品漸遲於是遲疾結悍伏。天地以所有盡給之於散者。散者得之於其中。故水陸堅輭之種。本生及餘生。莫所不有。以觀天地之德。蓋人寓以倮毛分。倮爲人、毛爲寓。人雖大槩相似。不無小異。猶艸木同一種。由其所產異其形狀氣味。故北人則高鼻深目。縮髮紫髯。顏師古注漢書云。烏孫之產。異于佗國。蓋如此之類歟。近熱帶則黧黑而醜。如齊狠一島。形瘦而小。髮亦而卷。脣絳眼白。其色亦黑。故西人呼爲黑人云。蓋古以爲崑崙。亦轉其音呼古龍者是也。明和中。筑州韓泊浦之舟子。遇大風。至其地。其人最猙獰無賴云。乃今和蘭携來供役使者。方巾以纏頭。身穿窄袖衣。脛著袴。初唐義淨南海寄歸傳曰。爲掘倫。初至交廣。總呼崑崙國。唯此崑崙。頭捲色黑。自餘諸國。與神州不殊。貝原益軒曰。朱彧可談載。廣之鬼奴。力負數百斤。嗜慾不通。性惇不逃徙。色

黑髮黃。脣絳齒白。生海外山中。食生物。探與之火食。累日洞泄。或病死。若不死。即可畜。能曉人言。而不能自言。有一種近海者。入水不貶。謂之崑崙奴。據文按之。亦與古龍之民別種。一夕話曰。暹邏蝙璢有狁焉。其面目形性。人也。圓目黃睛。矮小精悍。專愍不二。第不識金帛。不解火食。語咿嚶不可辨。若猿猱然。山間爲巢。擧族棲焉。夷獠諳其性者。常馴擾備驅使。是亦一種也。南壤境阻炎海。探索不窮。和蘭嘗語源在中曰。當我天和中。嘗探其域。其人形貌醜怪。情性語言不相通。捕其人歸。敎導多方。竟弗可馴。亦狁之屬與。南壤之產如此乎。抑一境有斯種乎。弗可識矣。釆覽異言。南亞墨利加部曰。巴大溫。在伯西兒之西南。伯西兒即屠人炙食之國。坤輿圖說曰。巴大溫。即長人國。此國人長不過一丈。男女以各色畫面爲飾。美問之。和蘭人對曰。昔有我人。始至此海口。唯望其地荒濶。而岸上有一

艸屋。登嶠視之。規制高大。中有燒火之所。沙上人跡。比之於常人。長大二倍。船中水乏。欲取水。數人駕艇。泝河而入。待之二日。竟不還。衆心怖畏。發船而去。未見其人。其載圖説。異邦之人。不解我字。後人附會亦至此。又曰。我邦東南距巴大溫西南。可二萬五千里。而其中靡有寸土尺壤。阻爲間隔。東海耆老言。元和中。一大木槨。漂至金浦。其制如船。長十餘丈。土人斧斫開之。内有一長婦人屍。身被紺布。其鐺用鉛。又曰。寛文初。南部海濱漁人。網得一臂。其指骨節長四寸。記竣搜索之備。傳託孔子之言曰。焦僥氏三尺。長者十之。列子所謂龍伯之國。是邪。抑上古有至其境者邪。而我未聞有至焦僥氏之國者。然世間矮小長大。固有相懸絶者。亦狄僑如長人巨無霸。是常人中獲此非常人。又家語防風氏之骨。大專車。豈得非大同山中人骨之類哉。白氏文集。詠道州民詩曰。道州民多侏儒長者不過三尺餘。市爲矮奴年進送。號爲道州任土貢。云云。是雖詩。記實者也。物理小識曰。異花載。張仲師長二尺二寸。又引王世懋二酉委譚曰。徐方伯時在甘州。張大參在涼州。破土得小棺二三尺。啓視鬚鬢老人。多紗帽紅袍者。衆喧然。以祭文掩之。二君皆目擊。可信人也。記廣異聞。至若神異經。長至二千里。短不滿數寸之類。及穿胸飛頭。飛肩牛蹏。可以供看病者之警睡焉。禺者禺似人也。此間有猴無猿。考栁栁州所記。曰。猿居相愛。食相先。行有列。飲有序。不幸乖離。則其鳴哀。而猴則反之。狨其長毛者也。蜼其長尾者也。文祿二年。蠻舶漂著土之桂濱。中載生麝十。長尾生猿十。蓋蜼與。蜼爲狖。爲果然。畫爲宗彝者。洛人嘗獲之於津輕而歸。白毛豐尾。臥必尾掩鼻。見東厓壺簪錄。栁栁州所謂猿。時珍以爲此物。按李肇國史補曰。劍南人之采猓然者。獲一則數十可獲矣。其性仁。不忍傷類。見被獲

者聚族而嗁。雖殺不去。與標州之所言合則。時珍之說可從也。世傳萬萬能笑猩猩能言。但以彼間不產。諸家之說。闕分曉。蒙頌獼猴亦此間所無者。至野女山丈。木客山都。猶此間說鬼及天狗。梵說夜叉羅刹。或曰夜叉羅刹。本西國之名。其產醜相可畏。因以比論。恐是杜撰。俗善譚鬼與天狗。又善圖其形象。又非彼所謂鬼與天狗。鬼者似夜叉之圖。又類獄卒者狀。含牙戴角。被髮人立。手足三指。而有鉤爪。天狗者長鼻深目。肘後有翅。亦手足鉤爪。飛行自在。隱見不常。能攫人能啖人云。世有瞞瞞之間。遇其擊攫。受諸苦楚者。眼裏著病。空華亂墜。可以怖畏癡人怯夫。夫條理之所在。含牙奪其角。予翅奪其手。有牙角之類。必奪其指。今已並與其牙角。又遺其指。並與手足。又遺其翅。造物雖巧。豈產物於條理之外哉。幽明錄曰。水蝹裸形人身。長三五尺。大小不一。頭戴盆受水。只得水勇猛。失水無力。

此所謂川童是也。海人載坤與外紀者三。一曰海女。上體如女。下體爲魚。其骨爲念珠魚骨中上品。其一。通體皆人。鬚眉畢具。特手指略相連。如鳧爪。不嘗飲食。又西洋喝蘭達地。所獲者女人。與食。輒食。亦肯爲人役使。但不能言。身有肉皮。上垂至地。海女。是本綱載謝仲玉者之所見。又引徂異記曰。查道奉使高麗。見海沙中一婦人。肘後有紅鬣。問之則曰人魚。崔豹古今注載人馬。曰。有鱗甲。如大鯉魚。但手足耳目鼻與人不異。查道所見人魚是歟。艸木子曰。南海時有海人。如僧而小。時登舟而坐。至則戒舟人不動。少頃復沒水。鎭西亦海國。舟人間見之。能尾舟而逐云。史載。推古天皇二十七年。攝之漁父。沈罟於堀江。有物入罟。其形如兒。非魚非人。不知所名。壺齊錄載鬼哭灘事。引明顧玠海槎餘錄曰。鬼哭灘舟至則波頭隻手獨足。煙禿鬼。百十群來趕舟。人以米飯頻頻投之則止。未聞有害人

者。不知造物之工。亦爲此奇異邪。非邪。若有則海人之類而已。不知爾雅所謂。比肩之民者。無于陸而有于水與。由是觀之。人類之漸水者亦多種。然是又類形於人者也。雖有性幾人者。彿怪焉。西洋星圖。有號魚將軍者。按揆日候星紀要。魚將軍者。其地所產魚名。其性好人。聞人歌樂。即來聽。呼其名漸來就。人溺水。載之岸。人取魚彼領衆魚至。呼之彼先躍過網。衆魚則羅網矣。南壤之人。人其形。而精神不接。魚將軍。魚其形不矜其醜。還欲親人。造化之設物。亦奇也。伏品愚而大焉。特守禦於頭。其品各分。剖析之則也。故馬蹏圓。牛蹏坼。馬病臥。牛病立。馬起先前。牛起先後。旋犛之屬皆牛。而騾驢之類皆馬也。小小相對。又有果下牛。有果下馬。漸水則有海驢。有海牛。然而牛品多產南地。馬品多產北地。家豕野豬。屬牛品。家羊野鹿。屬馬品。家豕野豬。乏于其品又有稱懶婦者。懶婦豈非野豬哉。抑

有如麞類鹿者乎。羊鹿之品。曰羚。曰羱。曰麈。曰麝。又聞。羊之出臨洮者如驢。出涼州者如駝。此間以牛羊豬狗不供食品。無復羊豕之種。唯海舶載來遺種。散在僅有。駝出北方。馬品而有兩肉峰。犎出南方。牛品而有一肉峰。驨則馬體而一角。兕則牛體而一角。犀象亦此屬。郭璞犀之贊云。犀之爲狀。形兼牛豕。犀則大腹卑腳。隻角而鼻頭又出角。有蹏而三岐。象則腫體大腳。雙牙長大。作用在鼻。雖有五爪而無指。其蹏之類也。紹述文集云。享保巳酉。廣南獻象。其體腲腇。如皮袋包物。四腳如柱。運動不便。一彎長鼻。伸縮自由。左右掉轉。其端有爪以挾物。以剔其牙。以抓其痒。細尾鉅牙。蓋豬彘之類。是目擊以記其實者。自古言瑞者。有騶虞麒麟。騶虞始見召南毛公曰。白虎黑文。不食生物。賈誼先辨其非獸。明焦竑引周禮左傳等。曰騶者司車之官。虞者。司獸之官。故騶虞唯樂章之名。猶謂關睢然。

毛公以下誤為獸。其義不通。終為仁獸以僅通矣。而猶不能接上豝豵之句。爾雅者。釋六經名物言辭之書也。而不載騶虞賈焦之說益可信矣。王懋野客叢書引用諸書。辨騶虞之為獸實之曰。昔安帝時新野有騶虞見。不知其所見何以識騶虞。蓋有獸見之則白虎而黑文。故名騶虞也已。今按騶虞之見豈翅此焉哉。南齊書祥瑞志曰。昇平二年。騶虞見安東縣五界山。獅頭而虎身龍腳。騶虞之象。說者皆云。白虎黑文。獅頭而虎身龍腳。何以謂之騶虞。且其謂見遙望之意。事屬茫昧。唯明永樂初周王直獲騶虞于鈞州獻之於成祖云。意是黑文之白虎已。又按書大傳文王之囚於牖里。散宜生閎夭之徒。取怪獸大不避虎狼間尾倍其身於於陵氏。獻紂。其名曰虞。鄭康成以為騶虞。此併安東獅頭龍腳者。非毛公所說者也。噫夫天地之大。造物之巧。莫物不有矣。取異物言妖祥窺窬之事也。古

昔　皇治之日。出瑞之地。免之租調。獻瑞之人進之爵位。於是人爭獻珍怪異物輻輳。就中奇者。和銅八年。八月丁丑。左京職獻龜。長七寸。濶六寸。左眼白。右眼赤。頸著三臺。脊負七星。前腳並有離卦。後腳並有一爻。腹下赤白兩點。相次八字。繼神龜六年六月。左京職獻龜。龜背有天王貴平知百年之字。因改元天平。南齊書中亦有腹下有巽兌之卦。腹下有萬歡之字等之龜。天地大焉。造物巧焉。戴九履一之龜亦有焉。雖有而不足證河圖之妄。白質黑文之虎亦有焉。雖有而不足解騶虞之謬。爾雅無麟字。而有麐字。曰麕身牛尾一角。又無麒字。而有麠字。曰大麃牛尾一角。註以麃為麐。說文以麐為麕。則麐即麟。而麠與麒同義。而說文麒作麋身牛尾一角。又於麐曰牝麒也。於麟曰大牝鹿也。獸經曰麒牡麐牝。則麒之與麟。本牝牡之別。其物與鹿不遠可識矣。左氏穀梁。不言麟之狀。公羊傳曰。

有麐而角者。說苑則曰麐身牛尾圓頂一角。京房易傳圓頂作狼額。增五彩而腹下黃之字。詩鄭箋爲角末有肉。蓋依孔叢子麐身肉角之說。陸璣疏則言馬足黃色圓蹄。漢儒多杜撰。後人因以修飾焉。仲尼以前麟象未聞其說。而魯之所獲。如麐而角。漢武所獲一角五趾。如麐色白。色與足爲異也。孝宣之時。九眞所獻者。如麐而兩角。又同世見者曰如鹿。不詳其所異。是又不同。體之大小角之奇偶。種中有異乎。爾雅疏曰。今幷州界有麟大小如鹿。非瑞麟也。同書說麢曰。如馬而一角。不角者騏。注今深山中人時或見之。亦有無角者。麢驎亦可難鑒定。史載元魏太祖登國六年。獵親獲者。高祖太和三年神龜元年。肆州徐州並獻者。共言一角鹿。蓋是乎。其佗謂一角獸者。未說其形。未可遽以是非。斷旣已麟也。忌爲魯狩之麟。於是加瑞字。始安由祥瑞之惑。痼膏肓。韓退之作獲麟解。謂麟者不常

有者。其形不類。非非聖者之可得而識者。坐同一病矣。歐陽永叔論五代祥瑞曰。麟鳳龜龍。王者之瑞。而出于五代之際。又皆萃於蜀。吾固知非祥也。昔漢武獲麟。班馬書曰獲一角獸。蓋麟云。蓋之爲言。疑之也。夫獸而一角。固麟矣。何疑焉。豈求之武帝而未見所以致麟者。乃以麟爲祥。二子非疑之。蓋陋之也。麟本一角之鹿。非瑞。非不祥。燕慕容皝。少子麟。以河間麟出。以爲己之瑞。謀亂被誅。坐爲瑞之惑。終爲不祥之物。今觀畫聖像者。其麟異形。或畫麟。先儒之所未言也。按宋至和中。交趾獻以爲麟者。如牛而大首一角。通身生鱗。朝廷無知者。當時以爲山犀。沈存中以爲天祿。其說曰。漢靈帝中平三年。所鑄平門外。鄧州南陽縣。宗資碑。傍所鐫。謂之天祿。角鬣大鱗云。圖者取此歟。南齊書。記龍翼者。亦此類歟。其佗獸之一角者。書典所見犀兕。麢麈。獬豸角端。亦牛鹿之種。謂之麟何不可麟。

司馬相如上林賦、椎蜚廉、弄解豸。漢書音義、解豸似鹿而一角、人君刑罪得中、則生於朝廷、主觸不直者。後漢輿服志、法冠一曰柱後、執法者服之、或謂之獬豸冠。獬豸神羊、能別曲直。續資治通鑑曰、蒙古主西征次于忻都國鐵門關、侍衛見一獸、鹿形馬尾、綠色而獨角、能爲人言、謂之曰、汝君宜早回。蒙古主怪問耶律楚材、對曰、此獸名角端、解四夷語、是惡殺之象。今大軍征西四年、蓋上天惡殺、遣之告陛下、願承天心、宥此數國人命。元主於是而還。廣義曰、角端考之經典、質之子史、雖無其實、楚材以是而諫、亦可謂因事納忠也。今考此二獸、如所說、則何讓麒麟之德、而不出聖人之時。意此二獸皆世人之所不見焉。見角端者、元主之侍衛、知角端者楚材。其實未可識焉。歐陽子之論正當。故後世之麟、乃仲尼以前之麟、魯麟豈果非犴麟哉。氣化形化、其種固別。天不爲聖人化麟鳳、亦未爲不肖者奪其有。緯書漫言、星宿之精、又言五行之精。又言不履生蟲、不踐生草、不入陷穽、不羅羅網。又曰、王者不刳胎剖卵、則此物至郊。此物果不踐履生蟲草乎、不離斥鹵之地、不入陷穽羅羅網乎、不死鉏商之手乎。王者不刳胎剖卵、則至郊乎。何至屠牛羊之邦。故麟亦常有者、迷惑至不常有之邦、乃是鹿類。有則何難知之有。若不然而言、聖人之德、能化此物、將以麟鳳比蝨蛆、使人燦然、然歸其化於諸曜五行、尊之之至也。及見謝肇淛五雜組、反曰、龍與家交生象、與牛交生麟、以人爲祥瑞者、爲褻瀆不祥之物。怪亦甚矣。

悍品

悍品者豺虎貓屬虎品、狗屬豺品、猶豬屬牛品、羊屬馬品。悍黠之二種、脊骨柔韌、反轉自由、有跳梁之才、狻麑爾雅云、如虦貓。然輟耕錄曰、身才短長絕類人家所畜金毛猱狗、則分明是狗類。於是猊與狗、猶虎與貓、識狹而物廣矣。雖不能竄諸

萬國分其品類如貓狗馬牛羊豕而熊羆自虎品猨狐貍貉自豺品唐高宗時伽毘耶國獻天鐵熊能擒獅象則西國更有猛獸周穆王時西旅獻獒獒犬之大者也爾雅載贙注爲出西海大秦國多力獷惡之狗後世弗識。蝃耕錄曰。高麗之北名連五城其地極寒海自八月合氷四五月方解人行其上如履平地官過此用站車每車以四狗挽之明一統志亦曰女直以此引車又曰野人狗至多耕田供養皆用之蓋贙與其種漸水則有水獺海狗海豹等小類則兎鼠鼬貂其大者鼠鼷其小者兎之與鼷爲異品並寡種爾雅不收兎於鼠類蓋失類焉宋沈存中使胡契丹之北境見其形兎而前足數寸後足一尺行則跳。止則蹶然仆地捕數頭而歸曰跳兎以爲爾雅所謂蹶近兎者又沈氏筆譚中載狄人所嗜貔貍者穴居食菓穀嗜肉者謂如鼠而大則兎鼠之間也兎此間唯有白黑二種

而已豪豬有指而無蹏利在齒而不在牙因知豪豬本彙之偶而彙者鼠類豪豬者兎類也鼠在家者鼷在野者黃穿土求食者二種鼹鼠似豬。鼩鼱似鼠栗鼠豐中未有瓊浦有香鼠蓋自海舶移來者以有麝臭土人稱麝鼠貓食則病豹文者鼮光武所問竇攸所對者也又聞隴西有鳥鼠山其鳥爲鵌其鼠爲鼵。共爲同穴云。又聞北荒積氷之下有氷鼠西域野火之中有火鼠未知然否鼠類輕捷輕之極。生膜於指間以爲翅與鳥爭技倒懸而睡。而鸓鼠則類鼬伏翼則類鼠漸水之種水鼠在溪澗食魚蝦海鼠者其在海者豐之東北有島曰姬島寛延中漁人擧網得鼠既而鼠群而來島田圃林野牆壁庭巷無所不鼠大爲人患久而失之弗知其所在或水底有巣窟而蟄乎有爲群往來乎不可知也夫剖部分隊有條理之可依若欲得瑣瑣窮之以寡狹之量測汪渺之藪求得却失焉今以

聞見之所及觀之。禽品多於獸。魚品多於禽。介甲最寡品。雀多品而鼠寡品。獸中牛多品。而馬寡品矣。豕豬寡品而羊鹿多品也。熠耀之明。不盡大澤。一生二類。四部八隊。隊中剖析。而弗見其所盡焉。禽獸本同一類。分隊同氣焉。故其爲物。同中反焉。故獸則手握足行、鳥則翼行足握。獸交感深、鳥交感淺。獸肺向前而抱心、鳥肺離心而向後。獸胞爲胎。前居、鳥胞爲卵。後居。鳥以觜換牙、獸去距戴角。鳥親飲啄於初生、則無陰乳之器、人闕羽毛之美。則贍思慮之神。獸之形性貌態。推之於鳥。鶴鷺之於人。寓鷹鸇之於虎狼。雞雉之於馬牛。兎鼠之於鳩雀。髣髴相彭矣。分之於艸木。有苞蔓卉樹。觀之於水中。亦影出其物。水族不止於鱗倮龍鼈。則鳥獸漸水之種多矣。是以其所錯綜。可以卷之。可以放之。擴而充之。知其分。知其合焉。難者曰。人與禽獸。自古嚴其分。今子以人列獸中。獲罪名敎。孰大焉。子盍思諸。予曰。否。夫人之爲生。上弗能翔天。下弗能潛水。無爪牙之爲守禦。無羽毛之勝寒暑。本氣乏者。神氣有餘。高則梯之。深則航之。砥金激火。利制悍猛。馴者役之。害者殺之。養蠶績麻。巧禦寒熱。用神氣之有餘。補本氣之不足。意智卽神。意智有所思辨。不敢徑行情慾。必立其道。是爲禮義也。禽獸有餘本氣。而乏意智之思辨。今夫禽獸豈無雌雄子母兄弟。有而無倫。所以終禽獸也。孟子曰。人之所以異於禽獸者幾希。庶民去之。君子存之。非古人嚴人與禽獸之類。嚴人與禽獸之道也。今有人於此。上弗知敬君父。下弗爲愛臣子。頑然極欲。而無所羞惡分別。人必斥之曰。禽獸也。然則其分不在類而在道也。是以人苟惡其爲禽獸。則宜審親疏尊卑之倫。從事于聖人之敎也。不知是之務。徒委類之分。駸駸然亦禽獸焉已。

贅語四　死生帙上

贅語第四

死生帙下

日本　鎭西　三浦晋安貞　著

倫類　第三

舜命位愼徽五典。又以契爲司徒。敬敷五教。而五典五教經無明文。孔安國曰。五典五常之教。父義。母慈。兄友。弟恭。子孝。又曰。五教者。五常之教也。此蓋據左傳季孫行父之說而言。蔡沈曰。五典五常也。父子有親。君臣有義。夫婦有別。長幼有康。朋友有信。是也。又曰。五教者。其教也。此蓋本孟子而言焉。謹按。五典者。舜之所徽。五教者。契之所敷。何可同焉。典。常也。古之所謂五常者。水火木金土。以洪範先五行考之。五典爲五行明矣。而司徒職在教人。則五教爲倫理之事。宜然也。而今以君臣父子夫婦昆弟朋友。謂之五倫。稽之於古。其說倫理者不止此也。文王世子以父子之道。君臣之義。長幼之節。爲三善。哀公問以夫婦之別。父子之親。君臣之嚴。爲三正。衛石碏以君義。臣行。父慈。子孝。兄愛。弟敬。爲六順。禮運則以父慈。子孝。兄良。弟弟。夫義。婦聽。長惠。幼順。君仁。臣忠。爲十義。晏子以君令。臣忠。父慈。子孝。兄愛。弟敬。夫和。妻柔。姑慈。婦聽。爲禮。王制以父子。兄弟。夫婦。君臣。長幼。朋友。賓客。爲七教。子產則曰。君臣。夫婦。父子。兄弟。姑姊。甥舅。昏媾姻亞。白虎通以君臣父子夫婦之三爲綱。諸父之敬。諸舅之義。兄弟之序。族人之親。師長之尊。朋友之舊。以此六者爲紀。君臣。父子。昆弟。朋友。夫婦。呂覽數之爲十。中庸數之爲五達道。孟子則於此五。以長幼換昆弟。以親義別序信爲五教。周禮師氏之三行。孝友順。注以爲父母賢良師長。鄉之六行。忠孝友睦婣任恤。注爲父母兄弟九族外親友賓。惟從其所見數之。未有正其條理者。夫人倫之分。親疏尊卑也。親者。同族也。疏者。異

族也。男女之事也。尊者自我而上。卑者自我而下。父子之事也。親以之疏。疏以之親。故夫婦者。感應之本。兄弟者。離析之始。男女相感。自疏之親。兄弟離析。自親之疏。疏之親而婚姻之睦生。親之疏。而無服之遠成。夫婦親之始也。親子。親之至也。兄弟。疏之始也。無服。疏之成也。父自尊。子自卑。男自尊。女自卑。故親疏尊卑者。自然之條理。聖人修人紀。殺之四等。上殺下殺。旁殺而親盡。已上則父母。父母上祖父母。祖父母上曾祖父母。曾祖父母上高祖父母。於是服盡。已下則子。子下則孫。孫下則曾孫。曾孫下則玄孫。於是服盡。與高祖父同行者。自高祖父之父分則無服之族也。高祖父之子。與曾祖父同行者。族曾祖父也。其子與祖父同行者。族祖父也。其子與父同行者。其子與我同行者。族兄弟也。過之則親絕。曾祖父之子。與祖父同行者。從祖祖父也。其子與父同行者。從祖父也。其子與我同行者。從祖兄弟也。其子。與我子同行者。從父姪也。其子與我孫同行者。從父姪孫也。過之則親絕。父之子。與我同行者。兄弟也。其子與我子同行者。姪也。其子。與我孫同行者。姪孫也其子與我曾孫同行者。曾姪孫也。過之則親絕。上下之殺者。由我不及而殺。左右之殺者。數之所至。自然我行皆以兄弟姊妹而稱。父之行者。皆以父而稱。祖父以上。各其例也。子之行者皆以姪而稱。姪以下。各從孫之稱。父以上。室之者皆有母之稱。父以上之姉妹。皆以姑而稱。姑之家者。爾雅闕其名。爾雅。男子。謂姉妹之子。爲出。女子。謂昆弟之子。爲姪。今以出爲姪。從女子之所稱。男子之於我兄弟之子。爾雅闕名。北齋顏之推曰。爾雅。喪服經。左傳。姪名雖通男女。並是對姑之稱。晉世以來。始呼叔姪。明丘瓊山曰。古謂同祖兄弟。爲從兄弟。謂母之姉妹。爲從母。則當稱從子爲是。由是推是。兄弟之裔。宜稱從子從孫從

曾孫自子之室下。皆有婦之稱。則自女之家下。當有壻之名。故至親謂之同姓。合疏屬爲異姓之親。異同相合。婚姻相親。婚姻之至近。母妻婦壻之四黨。爲父子兄弟之睦。而服裁母妻二黨。弗及婦壻二黨。是故一親一疏。常相居。一尊一卑。常相從。家之道也。親疏者。男女之交也。重別尊卑者。上下之位也。愼分。故家有父子。朝有君臣。學有師弟。鄉有長幼。尊卑之倫也。男子以疏致親。女子離親之疏。親疏合而爲夫婦。夫婦感而爲親子。列子女而爲兄弟。擴親子而爲叔姪。人倫之大者也。夫婦遽噓。其父母爲舅姑。婦以夫黨爲內。夫以妻黨爲外。惟兄弟之稱。姑之子稱外。舅之子稱內。與此異也。夫群醜之擾擾。無上下之分。男女之別。無親之相愛。疏之相敬。則必相殺相食。與禽獸何遠。故伊訓曰。立愛惟親。立敬惟長。始于家邦。終于四海。若非愛敬。雖有治具。而何施。家者親以合。國者疏以合。疏心不可以處親。況於疏乎。故天下者。家之大者。而家者。天下之小者也。故君者。民之父母也。民者。君之赤子也。四海者。我兄弟也。孔子曰。愛敬盡於事親。而德敎加於百姓。刑于四海。故親者。人倫之本。百行之始也。父子推之於上下。兄弟推之於四海。故曾子有言。曰。孝者。衆之本敎。樂自順此生。刑自反此作。親則愛克敬。疏則敬克愛。疏合者。義不合則去。親合者。無義可去。故家國雖同。而道有所宜。一視同仁。四海未成一家。仁者可安。一之者。愛敬也。二之者。惰慢也。惰慢一出。父子相離。況非父子者乎。行上於我者。父之等也。下於我者。子之等也。等於我者。兄弟之等也。父道慈也。煦嘔榧杖。皆慈也。子道孝也。溫淸觀諫。皆孝也。故君者。父母于四海。而保赤子。民者。奉一人。而仰于父母。慈孝之間也。以道善兄弟。謂之友。分之則悌愛也。以其友推之。靡贍非兄弟也。故師弟者。道之父子也。同僚者。宦之兄弟也。

舅姑壻婦之親。賓主長幼之嚴。舅甥姑姪姻婭妯娌。皆以親疏尊卑。爲父子兄弟之交者也。其交也以善處之。謂之道。道以德發。德以道成。夫身者一也。於父爲子。於子爲父。於弟爲兄。於兄爲弟。爲子爲父爲兄爲弟。云云同斯身也。而父子兄弟者。人之倫也。身雖一也。倫不可亂也。是故德本一。接父爲孝。接子爲慈。接兄爲悌。接弟爲愛。是故父云。子云。兄云。弟云。雖所接異也。同是斯德也。雖德則一也。孝慈弟愛。道各有所宜也。夫人情之感應。淫則濫矣。人心之運用。放則滔矣。運用修擇。感應自正。修擇之具。謂之禮義。義以制之。裁之。禮以序之。防之。善之者。仁知之者。學盡之曰忠。實之曰信。而鼓舞之者感應也。故夫上之待下。下之奉上。父子相愛。夫婦相睦。何非感應焉。是故能運用者。鼓舞感應。昔者吳起吮瘡。不病瘡者奮。越王投醪。不飮醪者激。啓我之誠。沃佗之腹。鼓之舞之。四海掌運。鼓舞之柄。亦惟悅怨之間也。

倫理 第四

夫人之倫。有合與交。父子兄弟者。天合也。君臣夫婦者。人合也。自夫婦之合。而異戚相交。自君臣之合。而同隊相交。自父子兄弟之合。叔姪宗族相交。父子兄弟。以天合。則有合而無絕。君臣夫婦。以人合。則可合可離。惟義之與比。古曰。忠臣不事二君。烈女不更二夫。故臣婦之義。死生不易守。苦歡不改操。是以其於君夫。以禮合。以義離。可離而離。可合而合未爲不臣不婦。上下之分。男女之別。禮之爲防至矣。聖人之殺。類四等而絕。殷制六世而通婚。親絕也。周制百世不相通。貴宗也。周者正矣。殷者宜矣。我其從宜焉。夫納幣親迎。已醮廟見。婦道豈有佗哉。噫夫人情孰不願保其常。天命弗猶。事與所願違。婦雖賢乎。弗獲乎舅姑。則出。失其所歡。則出。蓋人情見出婦。思蚤有家。不止他人然。其父母兄弟亦然。不

止父母兄弟然。其爲舅姑夫婿者亦復然矣。不止常人之情然。君子之情亦然。禮本非自天降。非自地出。惟自人情出。衆情欲之。而非者未之有也。故古人有言。曰。絶友使可交。出婦使可嫁。於是乎。婦之出。臣之去。與貳殊矣。去就有道而存也。去就則有道。雖然。君夫天也。臣婦地也。尊卑之分。豈得濫焉哉。伊尹復太甲。霍光廢昌邑。爲社稷民人。爲不得已之舉而已。則守舊位。然而湯擧放桀。武擧殺紂。是及天下嫉其暴而棄奉戴之意。懷其惠而成推擧之勢。二王之業之成。蓋勢也。晉公子重耳曰。保君父之命。而享其生祿。於是乎得人。有人而校。罪莫大焉。蒲城之事。雖事不同。而其語則可移也。夫割其地。授其爵。而受其爵。居其地。斥其君曰非君。斥其臣曰非臣。誣也。世入戰國。周室微也。秦晉齊楚。狠窺天下。孟子生是時。以爲勢去王室。業弗可復爲。天下壓暴亂久矣。若有行仁政者。湯武之功。可收矣。故眷眷於齊梁之間。言王業之可成。於是。抑桓文。揚湯武。然後管仲價賤。孟軻價貴。其價爲貴賤者。由分王霸也。夫王也者。有天下者之稱。霸也者。長諸侯者之稱。王者有道。則霸統諸侯。各供其職。王室勢衰。則有力者。以力而崇君制下。治亂持危。衰世主弱臣恣。有力之臣。爲之禦侮。勢也。故孔子許其仁。許其功。屬讀明。郝民談經。有言。曰。尊周二字。齊小白之陰符也。甚矣哉。人之好尚之弗同。以孔氏之所許。至爲陰符。故公侯將相。不幸而當衰世。奉天子號令四海。此一時也。賢不肖。惟在其所爲若何而已。故雖詐而有天下者。王也。雖正而長諸侯者。霸也。文王之治周。周召之分陝。何在爲王也。故桓文之道。不純于臣節者。可間然也。非爲霸之非也。湯武之道。惠愛之深。可美也。非爲王之美也。故殷受非霸。周文非王。以文王爲王者。周家之言也。紂暴而天下棄奉載之意。是以爲獨夫。獨夫則

獨夫也。獨夫豈非君哉。宋高宗嘗問尹焞曰。紂亦君也。孟子何以謂之獨夫。焞對曰。此非孟子之言。武王誓師之言也。獨夫受。洪惟作威。高宗曰。君視臣如草芥。臣何遽視君如寇仇乎。曰。此亦非孟子之言。書曰。撫我則后。虐我則仇。世以爲美對。何以美之。美其淵源于經也。嗚呼尹子之對。雖探其源則然。而如并其淵源而非也。何。蓋是時武王張旗鼓與紂爭勝敗。故其言激。如是時。高宗曰。既已獨夫也。既已仇也。大明詩。何以曰。天位殷適。使不挾四方。書多士。何以曰。在今後嗣王。誕罔顯于天。不知尹焞何以對帝。夫衆心以爲常人之言。則未察是非。而議爲出聖賢。則概而信之。由感湯武之惠。而美逼於勢行醜者。是執經之失也。堯舜之揖讓。猶不易繼。湯武之擧。豈可法焉哉。漢高祖爲義帝入關中。及項羽殺義帝。爲之發喪。告諸侯曰。願從諸侯王擊楚之殺義帝者。漢祖非羽臣。尚謂之楚之弑

義帝者。雖漢高非周武之倫。泰誓其無慚色其辭哉。明徐達驅元主至沙漠。追而不追。以反命。明祖問之曰。彼曾爲天子。執以歸。陛下將何如處於是。尚父之類。豈得不泚於中山哉。夫管子志匡勉王室。成業於匡合諸侯。尊周室焉。故數抑桓公對禪之擧。固辭周室上卿之待。可謂明於上下之分矣。故三歸反坫之譏。責備也。孟子開口便說仁義。言必稱堯舜伯夷伊尹。非其所願。何況管晏之徒乎。雖然。口津津于王。雖遇滕文宋牼。猶言王不已。意與管仲反。噫以湯武遇桀紂。故民急水火之難。眩君臣之義。故其興勃焉。是以周所謂頑民。殷之思君者也。爲周倒戈者。殷之反民也。孟子嘗曰。所願學孔子也。子路嘗問孔子。爲衞政奚先。孔子乃先以正名。夫孔子以羈旅之臣。何爲其正名於衞。與子貢問伯夷叔齊者相照。則孔子卽有爲必也正名。名不可正。則其不爲可識矣。孟子又稱孔子曰。可以仕

則仕。可以止則止。當孟子之時。周雖衰。而非有桀紂之暴。諸雄雖强。而非有湯武之君。其所勸。則不過曰。可堯舜。可湯武矣。噫。假令湯武當夏商衰弱之日。則乘勢奪其有與。抑享屯扶顚與我聞。伊呂事其君。而討桀紂。未聞于非其君。以虐非桀紂。由是觀之。孔子可以爲則爲。不可以爲則不爲。孟子欲有爲於不可爲之際。謂之學孔子。則我弗信矣。由是觀之。管子雖有所失。而其得也大矣。孔子於是有微管之歎。當時雖非無戎狄猾夏。非有蒙古韃靼之强。向使微管仲。豈至元淸之變哉。然則孔子曰被髮左衽者。非曰失君臣上下之道哉。故孟子雖多所正。而於大倫則亂。孟子之說果是邪。三分天下有其二。以服事殷。者。非邪。縱誘曰。孟子之時。然。安如文王與紂之際會之可爲焉。噫。弑其君者。下又倣其尤。竊人之寶者。人亦覗其藏。故周武之殺紂。藉口於殷湯。晉武之受禪。履武於魏文。按湯武

之誓師也。舍桀紂。己自稱王。以晉觀之。史臣之詞。勢不得不然焉。後儒若干名分。故作受命之說。巧回護之。受命之說。蓋俶於大傳。雖然天之於命。非諄諄然有聲音。若謂之以人心卜其絕不絕。亳衆何憂湯之不恤。南巢何容其獨夫。伯夷何叩武王之馬。太公何義伯夷之諫。而成湯何慙德。周公之相武王伐奄。何至三年之久。滅國何至五十之多。金仁山作通鑑前編。調停仲虺徯予后后來其蘇之語與商衆我后不恤我衆。舍我穡事。割正夏之言曰。亳衆如在春風。如在慈母。不知天下之有暴亂。夏衆如水已溺。如火將焚。不識亳之赤子。何以視慈母。夏臺之囚。不懷履霜之懼。而晏然坐春風之中焉。故雖謂之湯武不可以爲非。自立矣。雖然考其年數。大抵成湯一百歲。周武八十有四。湯克夏。僅贏十年。武克商。猶不充十年。如是則二王放伐之時。齡共踰八十。然則方正學所謂。牧野之兵非

武王之志聖人之不幸也。果是而推挽之勢。不得不然者。其志實可憫焉。故雖無武王命商臣以禮葬紂之經文。三射斬首。懸之於太白者。實齊東之野語焉已。然則後世之藉口者。何不知其類之甚。故自天地觀之。雖湯武亦所謂逆取順守者。謂不行一不義。不殺一不辜。則吾不信焉。本朝自古。嚴于君臣之分。源頼朝乘諸平之亂。終移皇家之權。開霸府於相以控制天下。從此權歸幕府。桓文之治肇矣。霸主勞政于下。天子垂拱于上。大柄雖移。奉一人者謹。職總幕府。爵下皇朝。慶元建櫜昇平向二百年。絃歌盈耳。可謂至治矣。可不仰頌其德乎。於戲能奉其君者。御其下之長策。而不竊人之寶者。保己之器之良圖也。故臣之於君。有義不合而去。有爲社稷。易其君。豈可殺而自代哉。弊冠加頭。鮮履在足。自我觀彼。夷哉夷哉。慣讀七篇。過信尙書者。恐以孟軻勸王爲善道。以湯武誓師爲美辭。然則伯夷叩馬之諫。終不可易。孟軻無君之譏。不必在楊。明韓邦靖。五歲讀論語。至文王至德。掩卷若有思者。父問其故。對曰。即如是。武王非矣。白紛老師。不及五歲小兒。何邪。

懷孕　第五

物靡不生化者。而生化之道。以物而異。彼日影之明暗。土石之堅輭。不露聚散解結之跡。雲雨之昇降。水火之發收。顯露聚散解結之跡。而金石自結。螺蛤不交。植生華實。動生牝牡。而又有氣化形化。動中生鳥獸。獸胎生。鳥伏而哺。獸乳而育。而水物雖有胎生。最富卵生。卵之殼。猶胎之胞。胎之胞。猶卵之殼。保生生之神者也。水物一胎數萬。不伏不乳。如黍稷稻粱之種。然陸植著土。結子甚多。多是形化。水植著石。結子甚少。如氣化。然自子而苗。自胎而子。鱗比之態同矣。植之結子。蚤晩不一。動之爲胎。久近各異。蓋人之爲胎。大抵經閉九月。爲分娩之期。梵書。則謂三十八七日

而胎成。過四日而生。則以三十日爲一月。正當九月。爲厥期焉。九月二百七十日。則與漢人爲曆月十月者亦合焉。當今京師有江人賀川子玄者。憫姙婦難產。無人救之。精思有獲。終探虎穴獲虎子。大以其術鳴。其書曰。婦人受孕。經畢後。十日之間。爲其候矣。過此巳往。後經復動。不能作孕也。其免之期。初孕者。滿三百日。即免。如經產者。二百七十五日。折衷其旬而計之。可以不失其大要焉。彼非副墨洛誦者。其言若宜據然。書以竢識者之斷。夫天地絪縕。男女構精生生同一。精麁異態。欲相得而生生。彼此感應。是以夫婦之道者。感應也。其乏神氣者。缺意智之運用。故感應生育。有時相隨。惟人則神動氣。氣動神。感應無常期矣。聲音耳盪。紅粉目醉。神授魂與。意桃心招。豈不知禮義之爲美。而甘醜辱。運用感應之異也。朱子有詩。曰。世上莫如人慾險。幾人到此誤平生。是故。聖人建禮制防未然。

於是尤嚴也。蓋男女之相感。惟在遂所欲。無意于求子。而懷孕應矣。此發生之氣感。資之於本根。以結子者。可見矣。故彼淫人斲喪。求氣於本根。本根不能給。枯瘦而死。醫人按五行。曰。水虛火動。隔靴搔痒。夫人情樂有子。名教惡絕嗣。世之病無子者。求嗣於祈呪藥餌。姙娠者。絪縕之遂。男女相感。子應其間。是以艸木之屯。上待春感。春令之感。下待萌蘖。種病。則春氣無益。春令不感。萌蘖何爲。鳥之伏卵。不伏則生不遂。生意病。則伏不成。彼此相得。卵孚轂化。祈呪以會感應。藥餌以除疾病。因以成胎。則有祈呪藥餌。豈爲子哉。故妻妾以居。然猶無子。命也。鄧伯道無子。蜚廉之後帝天豈有意於斷續哉。故以祀之斷續言其人淑慝者。雖其說尚矣。不免寃焉。由是思之。古者以無後爲不孝者。或失配偶之常。或有觸刑辟。輕絕祖先之祀也。故絕後不孝也。無後天也。人將如之何焉。蓋祈呪之道。自古有之。

禋祀求子。得則謂天子。謂神授。且夫婦人不能自記娠之時日。經候以爲驗。玄鳥之詩曰。天命玄鳥。降而生商。蓋帝嚳之次妃有娀氏之女簡狄。以春分玄鳥至之時。與帝祈于郊禖。而生契。毛說然。蓋本爲天所命。若自天焉已。至鄭氏。則曰。鳦下遺卵。簡狄吞之而生契。毛則以降爲至。鄭則以降爲下。明吳廷翰甕記。引夏小正。曰。二月來降。燕乃睇。九月陟玄鳥蟄。夫玄鳥之去爲陟。來爲降。小正之作。在商頌之前。降本此。毛說益可據。鄭說蓋出遷史。乃含神霧。生民之詩曰。厥初生民。時維姜嫄。生民如何。克禋克祀。以弗無子。履帝武敏歆。攸介攸止。載震載夙。載生載育。時維后稷。是有邰氏之女姜嫄。爲帝嚳之元妃。帝求子。從帝而禋祀。遂生育后稷也。履帝武。從帝之後也。歆。毛傳云。饗也。而司馬遷作史記曰。姜嫄踐巨人之蹟。心歆然如孕。沂求之。列子。有后稷生乎巨跡。伊尹生乎空桑之語。其謬久矣。及后稷生。寘之隘巷。牛羊字之。寘之寒氷。鳥覆之。世豈有憂無子。禋祀之。及有而試諸牛羊踏蹂之巷。氷霜凝凍之中者哉。后稷雖聖。亦人也。牛羊飛鳥。豈復知聖哉。周人追頌后稷。一至于此。溢辭之弊也。據列女傳。則姜嫄無夫。由履巨人之跡。故卜筮禋祀。求無子。以求子。爲求無子。雖棄之於隘巷寒氷則通。然不經甚矣

上古渺茫之口傳。後世上之於簡策。苟欲絲分縷析。指之於掌。則非也。請嘗論之。記堯祖則黃帝。少昊。橋極。帝嚳。而堯。禹則黃帝。昌意。顓頊。鯀。而禹。堯。禹則黃帝四世之裔。而舜則經昌意。顓頊。窮蟬。敬康。句望。橋手。瞽叟云。是非混入他人。則名號有混乎。抑國語所謂虞幕。而世系有失乎。且傳爲出于帝嚳者。其序曰。元妃有邰氏之女姜嫄。生棄。次妃有娀氏之女簡狄。生契。三妃陳鋒氏之女慶都。生堯。四妃娶訾氏之女

常儀。生摯。摯之母其序則四。而其德則不良。踰三賢長。而襲父之位。有內臣挾權擅廢立乎。抑有所偏愛。而顧命有遏乎。后妃之序。傳失其眞乎。元妃次妃之生稷契。最後。堯摯乎。不然。稷契已賢。何失允恭克讓於斯。據通鑑前篇。堯十有六歲。入踐天子之位。在位七十有餘載。稷契與禹就務。古人雖非如後世之苟偸就安。而稷契之齒。亦當前後于百載。同書論此事。曰。按史記稱。姜嫄帝嚳元妃。而稷果其子。何爲舍嫡不立。而別立摯。立堯。周祀姜嫄。何爲舍祖而獨祀妃。命禹治水時。堯已七十餘。而禹猶曁稷。嚳之遺嫡。何其少。堯之嫡兄弟。何其賢勞也。堯有嫡兄弟。不能立。又不能擧。待舜而後擧之。則堯何足以爲堯乎。鄭康成謂。姜嫄爲高辛氏世胄之妃。抑以世胄之妃生子。又何嫌而棄之哉。可謂能鍼盲膏矣。今按。稷契列女傳。則爲當堯之時。而生者。年序宜如此焉。而世系則不可知焉。故往古之事。難自今論。或其稱氏者。非一世之謂也。黃帝至堯舜。頗有歷世邪。是以。其世次大概言之而可也。惟爲同其所自出之遠兄弟。則不失焉。若欲指之於掌。則非也。古人有言。曰。三皇之事。若存若亡。五帝之事。若覺若夢。

爾來申呂降嶽。傳說爲別星。或星下地。日入懷。比比不絕矣。胡古女子之記孕。弗與今同哉。夫男女者固感物也。感應成于求嗣之時。傳曰。叔梁紇。祈尼丘。獲仲尼。乃祠禖之遺意。事與之會也。尼丘非紇之嗣陽矣。又世有託胎之說。悉達太子。自都率內院。降託胎於淨飯王宮。是爲始焉。而春秋傳鄭燕姞。夢伯儵。而生穆公蘭之事。彷彿于是。其最怪者。南嶽慧思。再誕于我。爲上宮太子。太子已生。慧思猶在世。

夫人之嗣續。不可濫之。故其不幸無子。求

其嗣於同宗。亦事之宜也。晉因思之。蓋人之繼續。有子與嗣之別。子可以爲嗣。嗣不必子。子嗣之辨不明。繼續之際。有難義也。夫人之有嗣。大人即一國賴之。小人即一家恃之。賴有子之可嗣。勿論矣。不幸無子。求之於宗族而可也。求之於宗族而不得。求之於他族亦可也。何以其可也。夫國家而無主。其人皆罹無告流離之憂。雖名正。於生事則害。漢俗無子則絕。雖有女子。無之敢續。雖非無贅。俗常鄙之。故王公之無子也。其國際。士庶其家絕。我俗則不然。無可嗣者。必求可嗣者。不得其人於宗族。又求之於他族。有女子者。得其婿育子孫。同之於血脈相續。專勵心於其國家民人父母臣妾之安危。惟以不辨嗣與子之別。是以養他人之子。以我女妻之者。嫌於子之與子爲婚。若子嗣有辨。何有此嫌。嗣之所生。則我孫也。故嗣義同於子。父子嗣者。義

即父也。故眞父子者道之常。嗣父子則道之變。故雖即嗣而非嗣即子矣。故雖在我兄弟。弟繼則嗣季。仲繼則嗣仲。使他子繼。則他嗣子也。物子曰。無子。夫之所滅。國宜除。熊澤子曰。人盡天地之子也。繼不可絕。天自無意。先宜盡人事。若弗獲已。將取於熊澤氏之達。謹考之。嗣之以同宗。事之正也。今諸侯以下。不得之同宗。則求於他族。處變之道也。養他族之說。不經見。不可養他族。亦不經見。傳家之所由。春秋襄六年。莒人滅鄫之說。左氏爲鄫人恃魯慢莒。莒人滅之。穀梁爲鄫子立異姓。蒞祭祀。公羊爲取後乎莒。其取後乎莒爲莒女。有爲鄫夫人者。蓋立其出也。何休以爲。時夫子有女。還嫁之于莒。有外孫。鄫子無男子。立其外孫。惟晉賈充死無嗣。妻郭槐以外孫韓謐爲嗣。曹軫以禮無異姓爲後之文。諫。槐上表以爲充之遺意。及太常議論。秦秀曰。

充悖禮溺情。以亂大倫。昔鄫養外孫莒公子。爲後。春秋書莒人滅鄫。絕父祖之血食。開朝廷之亂原。情論荒。由是觀是。聖經無養他之是非。嚴非之。則本于公穀。成于秦秀之議。後儒據之。雖然。與使其鰥寡癈疾。宗殺臣妾離散饑渴。寧取他姓安之。縱於彼間爲不是。於本邦必可行。

保生第六

有始則有終。我既已生矣。死固我之所竢也。雖死固我之所竢也。身則先人之遺體。祭祀於我存。君父有在。妻孥天我。禮義之所在。愛敬之所存。榮辱繫矣。智愚分矣。死豈苟焉哉。周季燕齊怪迂苟合之徒。謬傳鄒行之道。以海中有不死之藥。欺威宣燕昭。餘波及秦漢。而始皇漢武。惑溺于此。於乎黃帝之葬於橋山也。太史之所考也。孰攀鼎湖之龍哉。西王母之爲西荒之山。爾雅之所記。終爲瑤池之女矣。穆天子傳。曰西王母之邦。曰賓于西王母。竹書紀年。曰見西王母。曰西王母來朝。西夷之名也。蓋依山得其名。與山海經曰。蓬髮虎牙。而狀如人。莊子以爲得道者之名。漢武內傳。曰容顏絕世。而終成仙女。是之不察焉。縱服金石。毒發身喪。喪則曰。尸解而去。比之浮屠氏。死往極樂世界者。則拙甚。黃帝逝矣。老聃猶存其書。列子亦載楊子之言。曰。百年猶厭多。況久生之苦也乎。以是觀之。兒孫大不肖父祖。夫修養者保生之道。豈爲貪生哉。爽口縱慾者。悖德狠人。至遺父母之憂。忘君長之奉。故節情慾。愼起居。顧言語。防外患者。忠臣孝子之徒也。修養所以保生。愚者妄意。延年益壽於紀限之外者。是惑也。夫人身逸則氣血滯。心勞則精神疲。皓齒蛾眉。以伐其性。甘脆肥讓。以腐其腸。甘餐毒藥。戲猛獸之爪牙。而希補綴於藥餌鍼焫。可滌其病。胡永人之天年。是卻步逐北也。單豹養內。食外於虎。張毅衞外。攻內於熱。虎而不被皮。熱而不燔肌。常瞰其間焉。故能養生者。若牧羊然。視其後者鞭之。湯藥無汗。慚愧顙泚。終夕思餐。一驚遺食。由是觀之。

內而喜怒哀樂。外而寒熱饑渴。戕賊人。則一也。昔者稽康養生論及此而其接鐘會也不謹。終遭單豹之虎。詩曰夙興夜寐。無忝爾所生。使當死者不死。之謂活。使當生者不生。之謂殺。君子惡死。是以不殺。君子樂生。是以好活。一視同仁。君子之事也。見利思辱。見惡思詬。嗜慾思恥。忿怒思患。戰戰競競。如臨深淵。如履薄氷。曾子之子。之所能孝也。若其所惡。有甚於死者。則視死如歸。所樂有甚於生者。則舍生如屣。故梟然不畏死。謂之亂民。逡巡畏死。謂之怯人。古有言。曰感激赴死易。從容順道難。能伸者屈。能死者生。不能生故死無益。不能死故免無恥。生之與死。孰重。義之與從嗜慾內求。榮辱外競。刑辟上繫。寒暑下侵。以之。遺憂於君父。失怙於妻帑。是孰之過乎。死生自天。殺活自人。明王之治。使民男有餘粟。女有餘布。然後庠序禮樂之敎立。孝弟廉恥之心生。故不陷刑辟。不淫僭奢。是活之大

者。而君之賜也。民凍餒將死。問之曰。死與生孰樂。彼將曰。死樂。竊與禮孰愈。彼將曰。竊愈。苟如此。則民輕生不畏死。舍禮而行竊。緊獄相繼。鞭朴湯大。不能制之。小則桎梏以殺之。大則師旅以誅之。是殺之大者。亦君之所賜也。內人於陷穽。不自責。歸咎於天與人。可畏哉。活。美事也。人之所同好也。殺。醜事也。人之所同惡也。然養苗者。不得不除莠。救蠹者。不得不逐蛇。古人曰蝮蛇螫手。壯士解腕。將救大於腕者。是以君子。雖好不苟。雖惡不廢。宋襄泥義。殺宗族於泓。梁武病殺。盡股肱於臺城。是以不殺行殺也。然則當殺者。不可活矣。活之則其當生者死。然而其殺與不殺。孰能辨其當。徵焉哉。噫彼殺忠臣孝子者。矣以忠孝殺矣。以不當刑。由姦賢已分。得失已定。觀之邪正分明也。當時不以爲殺忠孝。事去則有殺忠孝之名。以邪爲正。弗若思者屏。弗若言者疑。於是正邪陽稱。賢姦辨窮。人之憤冤

怨枉。哀死慘殺。何與自家異。宜反覆思之。殺活重事。豈得不慎哉。蟣蝨猶惜死。况非蟣蝨者乎。殺者出於不得止。可已而不已忍人哉。今之肥後侯。稱盛德第一。民生祀之。曾聞侯之斷獄。特殺人者而死。有令。禁婦人首飾瑇瑁。民間胥謂。曰水牛角似瑇瑁。幷禽水牛角。雖刑寬而令行如此。於是益知峻法之非焉。夫好生者。澤及昆蟲。及者情以恕之禮以行之。故古之君子。開蟄不殺。方長不折。詩曰。敦彼行葦。牛羊勿踐履。行葦猶愛。况生之類乎。觀梵漢之祭儀。漢專主犧牲。梵最忌腥羶。我意。生者天地之大德也。同生天地之間。宜同樂生育之熙熙。今若有祠用人以爲邪神厲。之彼爲良民。誅盜賊。爲苗稼。驅雉兔。爲生産。結罔罟。不得止則爲。若可已則莫若已矣。苟嫉物之用人。人之用物。亦類也已。彼禽獸雖恢恢者群則欣欣然。離則嗷嗷焉。牝牡相親。子母相護。智愚相隔。情致固無佗。祭奠之法

二。一用肉。漢之法也。一去肉。梵之法也。染其習。守其戶。是非不了。自天地觀之。我知太羹玄酒之貴於牛羊醪醴。毛類二種。平齒者多不食肉。而人則莫所不食。由智技之勝。嗜好之多。人有此意技。以天地爲己之有。害己之苗稼則殺。入己之器用則殺。豈啻就養焉哉。至其就養。則茹毛飲血。終歸粒食。調膳之用。肉僅助草木之滋。故物之殺生。只在就養。人之殺生。其求廣矣。求廣而技巧焉。故爲暴爲慘。莫酷於人。是以苦暴苦慘。亦人爲最。天地之大德曰生。惟神武不殺。豈持人焉哉。思及鳥獸。德之盛也。故人之行殺。惟在不得已。本邦古昔用牛馬祭用猪鹿。天武之朝。詔禁食牛犬猿雞。聖武之朝。復詔禁殺馬牛。牛馬雞犬皆德于人。以殺報之。於情義失。民化其德。至今去之。可謂餘澤及物矣。習俗忌毛類。以爲觸穢。故害稼之凶藥餌之品。漁獵爲業之外可已則已爲愈。一僧對士人。說不殺生。士

人曰。是浮屠氏之事。僧奮然曰。行不踏一蟲者。豈不能執戈先登哉。此僧反知君子之勇。元魏延興中。有司告歲所用之牲。七萬五千五百。顯祖愍之。郊天地宗廟社稷之外禁之。惟用酒脯。於是梁武豈可深非哉。今也。王公下及士庶。祭薦去腥羶。惟好漢法者。得鱗介薦。見者不慣。見以爲怪。噫羶之與潔。神俱不食。潔之與羶。誠可同存。易曰。東鄰殺牛。不如西鄰之禴祭。實受其福。人苟存誠敬。溪澗沼沚之毛。蘩蘋蘊藻之菜。可以薦鬼神。雖日用三牲。苟失其誠。將如感格何。然則挽其觳餗。行慘怛。孰與馥郁芳菲之潔。漢人以華自誇。睥睨四國。曰夷夷焉。牛羊豚犬。自畜自啖。何忍之甚矣。已荒怵惕惻隱之情。得隴望蜀饑則人啖人。其爲君者。會民之罪辜。湯鑊刀鋸。搜其陰器。斷之。穢德亦甚。至其行刑。雖親戚大臣。繫獄棄市。不亦薄禮乎。逞其暴。則醢其肉。夷其族。逞其威。則併數千萬坑之。夫君之

於民。禮樂以化。賞罰以御。非賞無報功勸善。非罰無酬懲惡。故書曰。明于五刑。以弼五敎。唐虞之盛世。不廢罰矣。然而五刑之目紛紛。周禮大司寇所言。野刑。軍刑。鄉刑。官刑。國刑。司刑所言。則墨劓剕宮大辟。家語所言。則姦邪靡法。妄行之獄。不孝之獄。殺上之獄。鬪變之獄。淫亂之獄。畢竟不可以說虞刑。注家取墨劓剕宮大辟。然呂刑曰。苗民殺戮無辜。爰始淫爲劓刵椓黥。皇帝哀矜庶戮之不辜。報虐以威。遏絶苗民。無世在下。則苗民之所爲。唐虞之所惡也。豈曰用之哉。致堂胡氏以象以曲刑。鞭作官刑。朴作敎刑。金作贖刑。帖終賊刑。其言亦如支離。雖然無可徵者。則姑可從此說。族刑。呂刑已曰。虐威庶戮。湯誓亦曰。孥戮。然則苗民之所爲。夏商稍用之。卒逮商受。罪人以族。再至秦文。慘及三族。實當周平王二十五年。逮漢誅王溫舒。連及五族。逮明殺方孝孺。焚其先人墓。磔其身。至九族八

百四十七人之外。明友門生復死者數百人。而極天地古今之慘矣。唐虞之隆。曰。罰弗及嗣。賞延於世。夏商學苗。釀此慘毒。周克亂之始。勢未能除。後世忍人以之藉口。斧質不足。以磔。以轘。以湯。以火。以咼。以謂法不峻。不足懲姦。昔孔子爲魯大司寇。有父子訟者。夫子同狴執之。三月不別。其父請止。夫子赦之焉。季孫不悅。曰。司寇欺余。曩告余曰。國家必先以孝。余今戮一不孝。以教民孝。而赦。何哉。子聞之。曰。上失其道。而殺其下。非理也。不教以孝。而聽其獄。是殺不辜也。書曰。義刑義殺。勿庸以即汝心。惟曰。未有愼事。言必教而後刑也。古曰。神武不殺。自魏李悝作法經。商鞅以是相秦。至漢蕭何作律九章。自此忍人慾畏懼以止惡。見知故縱。深文羅織。禁網益密。于定國爲廷尉。所集法律。凡九百六十卷。大辟四百九十條。千八百八十二事。死罪決比。凡三千四百七十二條。諸斷罪當用者。合二萬六千二百七十二條。網如此密。將開太平乎。不過姦吏弄法。傳生議。予死比因緣成市。釀成騷擾耳。殺戮之慘之相繼于史。如刈草菅。每讀。令人悚然。自隋唐立笞杖徒流死法。寢近人情。隋唐以來。除去前代慘刻之刑。死罪唯有絞斬而無絞。惡逆之極者。有淩遲。則古之咼。唐時安祿山咼常山大守顏早卿。是唯祿山一時逞私忿者。非常法。至元興此法。明因之。明律曰。凡謀反大逆。皆淩遲處死。淩遲者。先斷其四體。次斷其吭。皇朝始用此。武治以來不用之。終復淳古之風。自古至今。市不鬻踊。門不置閽。不見族醢鼎鑊之慘。非無金革之警。非無悖逆之事。若比治日。我多彼矣。峻法之非明矣。范曄漢書。論我國風曰。罪重者滅門族。彼自言也。保元之難。欲誅其亂臣。廷議以自弘仁庚寅誅藤仲成。至此三百四十八年。不舉刑。朝臣惜之。藤信西不可。爾後喪亂不已。乾綱終解。天下贒贒四百餘年。不亦悲乎。幸東照公勃起東表。文王朝廷。至尊垂拱。幕府馭下。於是貫革之射莫所用。淫殺之風改矣。草莽竊冀。天子聖明公侯好

生。恩洽天地。不傚彼夷風之慘。

幽冥第七

人之情。不能以亡為亡。人之智不能不以生病死。君子以如在。小人以為在。後世豪傑。惡為在之愚。沒如在之情。為在不智也。不在不仁也。夫以明窺幽。以生觀死。天下之通見也。人無親見死後者。而各有疑死後之意矣。其疑死後之心。則持生之心也。以持生之心。而窺死焉。不能不以生說死。以生說死之說。投於不能以亡為亡之情。不能不以生病死之意。於是天下風靡矣。世人知天堂地獄之說出浮屠。未知出人情。夫人已有此情意。惡得無此說。梵曰佛。漢曰帝。梵曰閻羅王。漢曰泰山令。梵曰那落。漢曰泉下。人寒則不待黃帝而衣。饑則不待神農而耕。雖彼此異設。而其事則一也。如盤庚述祖先之靈。及詩曰文王陟降。在帝左右。申生之鬼。簡氏之夢。皆與彌陀閻羅何異。以苦樂投之於通見。樂樂於今。

苦苦于今通見與此合。而若草上之風。蓋佛之法。有麁細。以方便接佗。其學在心。故其言曰。三界唯一心。萬法唯一識。立佛為標識。衆生存其中。故其言。雖變化百出。入冥入幻。歸爾亘寓。以智廓之。以情感之。不可認其語把捉其於造化。惟以識為大識與五蘊四大。因緣和合為此假。故生之為新諸根之起。死之為諸受根之滅。生滅不已。輪轉六趣。於是死去翻為往生。夫神識者。氣之精華。氣病則神識病。氣散則神識滅。彼以神識為不壞。故劫壞而神不壞。於是以流轉者生滅。涅槃者生滅滅。惟生者而滅。不生者而不滅矣。雖謂之假。明不存火後。冷不存水後。故雖生滅滅盡而生死即涅槃。則溪聲廣長舌。山色清淨身。若謂之不然。教外直指是何物。佛則覺也。為眞正見解。立此標識。為病設藥。病去藥亦長物。隨馳求之地。認空拳之黃葉。永擔枷鎖。昔之三車。化為前途之葛藤。故古德云。向裏向

外逢著便殺。逢佛殺佛。逢祖殺祖。終殺羅漢。父母親眷。始得解脱。天下衲子。不能殺之。多少爲野狐精所魅。日造地獄業。可憫矣。有己以觀心爲本。捨己遊于物。物與我麁底著痕。猶啻其神識延之於久遠無量劫。是於機爲天成之間。窺窬因果。若謂之徹底面目。能仁未斷三界之習氣。然則謂之菩提。謂之涅槃。共自門入之珍。金屑雖貴。落眼成翳。若誤爲佛魔攝。墮在彼畜生道。爲觸鼻羊。靈犀照怪。歷歷孤明。千仭岸上。得一線路。放身自在行。衆生聾啞。其學之者。亦擔頭穵帶他人之書。神識麁氣。由麁體以活。是以生者。氣之自無之有也。化者。物之自有之無也。化則不可收。可收則化云哉。夫天地容萬物。有意無意。居其中。有意之中。有善惡。故善惡者。造化中一神遊之態而已。彼謂善惡之業因緣。以爲天堂。以爲地獄。以爲餓鬼。以爲畜生。以爲修羅。以爲人。於是造化翻在善惡中。惹人私一身

而客神識。繹諸久遠。引諸杳冥。本根不可私。則精華亦不可客矣。起滅邊際。其法塵。千古萬物。生前弄智之事也。既不以神識私之。結而生矣。解而滅矣。惟惡之者。不疏天下之情。欲塞而湮之。好之者。不知生化之故。扇揚僞誕。死也漸矣。鬼也歸矣。逝者不可收。來者日新矣。故鬼神者。感應也。執有無而望之。焉知死生。古稱忘死生者之言曰。以生爲附贅縣疣。以死爲決瘋潰癰。爲附贅縣疣。決疣潰癰。噫奚不以死爲附。以生爲附贅縣疣。決疣潰癰。致此勞擾。奚在忘死生。子路問事鬼神。子曰。未能事人。焉能事鬼。敢問死。曰。未知生。焉知死。蓋不知始者。弗知終也。不知明者。弗知幽也。孔子使子路務知生與人。豈有能知生與人。而不知死與鬼者哉。是易傳所謂原始反終。故知死生之說者也。孔子不隱乎子路。誨莫切焉。夫人之性。父子相親。夫婦相愛。其所親愛。死則棄之中野。情不忍見其腐爛潰

壞。故有莖埋之事。大樸之世。衣之以薪。藏之罨穸。墓而不墳。祭於廟。而不祭於墓。夫我已衣。我已室。我已食。不忍以薪藏之。飲食不供。故衣之室之薦之祭之。是即報本反始之本心。有虞氏之瓦棺。之夏之堲周。堲周之殷之棺槨。棺槨之周之牆翣。世之所以彌文。廟者。祭其神。墓者藏其體。是皆人情之不可以已者也。東匡壺簪錄曰。夢餘錄云。儒者多執古不墓祭之說。然周禮已有冢人。凡祭墓則以爲尸。豈得謂之非古也耶。且孝子於故衾遺履。尚當起敬。形骸所在。禮不爲過。縱使上古所無。當以義起。況周公之文明。而可棄之以昭於薄哉。此說最是。余謂。墓祭不持證之周禮。孟子中已有明據。東郭乞餘。當時墓祭可知也。夫所葬者。死者也。葬之者。生者也。是故。葬者。以生者之心。慮死者也。今忘慮死者。務生者之觀。慮避螻蟻。終致盜賊。厚葬之失也。厚葬之義。古不傳焉。權輿于宋文。盛于秦始。苟使其中有可欲。龍蛇蟄內。虎狼守外。人百計取之。若無所求。孰好發腐爛之穢。故秦始之修陵。送徒七十萬。錮三泉。而爲槨。伏弩將射其犯者。工之和其事者。殺而不出。可謂固矣。項羽入關。不日毀之。漢光武之作壽陵。曰。古者帝王之葬。皆陶人瓦器。木車茅馬。使後世不知其處。太宗識終始之義。景帝能述遵孝道。遭天下反覆。而霸陵獨完。今所制地不過二三頃。無爲山陵陂池。使迭興之後。與丘隴同體。可謂達矣。是以葬之事。有毋過禮。亡歛手足而足。而不知所懲毖。不知所稽考。奉暴與辱。貽我所親愛禮敬。不亦左乎。故埋成財於地。廢生事於時。墨子之言。不可不察。今考墨家之法。棺三寸。衣三領。足以朽骨肉。堀地之深。無菹漏于下。無發泄於上。壟足以朝其處。意孔子亦如是而已。何則夫子之於防墓。封之四尺。季子之葬其子。亦深不至泉云。豈楊王孫之流焉哉。今讀墨子。觀孟子之論。非孟子激。則徐子背師說也。我俗之淳厚。古猶有此弊。故孝德天皇。有令無以珠玉衣無施珠襦玉柙之詔。而年代久遠。無事可以徵。壺簪錄有丹州獲石槨屍蒙

珠衣之事。古史所傳不誣焉。今也昇平久矣。雖人稍競靡。知其所止。若比之於彼。則如薄也。雖然。封土不動。骸骨得所而化。不亦善乎。葢送死之禮。塗事芻靈。必不以人器。然則偶以鏡劍從身。非聖人之意。民間以錢六文從葬。曰。供六道。佛說之所無。或倣紙錢之遺意乎。有令而禁。宜哉。夫天下一日死者幾千萬。人以一錢自從。其費不亦大乎。與布帛逐年長者。有別也。故棺外設槨。雖是周孔之共所用。先達猶有腐爛之後。壙中不牢之慮。若徒多衣衾。豈謂爲化者慮哉。故晉則謂爲化者與天下慮。不如不作無益。害有益。又重思之。以生窺死之弊。至殉而極。孰無妻子。孰不樂生惜死。惴惴臨穴。豈忍見之哉。惟以生觀死者。出同見。成同態。彼是不期而同。於彼則始于秦武公。實周僖王之四年也。我史有垂仁孝德禁之之事。其來葢久矣。足利氏之覇世事戰鬪。講學不行。以就死爲義。以不死爲怯。

管領細川常久。惠愛得士心。及其卒。其臣三島外記。感其恩義。悲奮自裁。實爲明德三年春三月。自是人臣之蒙殊遇者。以自裁殉君爲第一節。舊弊復興。寛文中。有令痛絕。爾來百有餘霜。天下蒙其澤。不趨好生之德厚于民心。令人瞭然死生之故。本邦上古無殉。而神武御宇內之後有殉。不知始何時。垂仁天皇三十二年。野見宿禰作俑代殉。至明德三年庚子。一千三百九十年。三島之子再始此事。靈元天皇寛文戊申。嚴有公在職。有嚴令禁絕。三島子之毒流天下。二百七十七年。　檀弓季武子成寢。杜氏之葬。在西階之下。請合葬。武子曰。合葬非古也。自周公以來。未之有改。舜葬蒼梧之野。葢二妃未之從也。季武子曰。周公葢祔。漢建武二十七年。壽張侯樊宏卒。遺令以爲棺柩一藏。不宜復見。如有腐敗。傷孝子之心。使與夫人同墳異藏。帝善其令。以書示百官。因曰。今不順壽張侯之意。無以彰其德。且吾萬歲後。可爲千古之成式矣。謝惠連祭古冢文曰。一槨既啓。雙棺在茲。合葬之法。宜如是焉。葢葬之日月。彼

則緩之我則促之。夷考之。人朝不慮夕。加有暑熱之鬱蒸水火之暴烈。世態之變故。不如速暦兆之善也。彼司馬晋已來。風水之說盛。以禍福弄屍。數葬不舉。終歸烏有棺槨散亂。化爲塵埃。悲夫。佛氏以空爲眞。故以此身爲四大和合之假。爲革囊臭穢。故葬埋之道。水漂火焚土埋施林。心之所欲之從。蓋漂焚施林。雖生者之爲情。則是契乎死者之於智。則廓如。故修道於無爲者。同化於天地。亦達也。文王之治岐。行於野。見枯骨。曰。有天下者天下之主。有一國者一國之主。吾則其主。以棺衾葬之。天下稱曰。澤及枯骨。以生者待死者。宜養不忍之情。今佛氏之葬。亦不聞水漂施林。人情之所同然也。荼毘一法。延及平民。猶是可也。今其徒之惑者。認妄爲眞。假四大穢天地。生投其身於水火。求其所謂眞。惑良民之視聽。大有害於世敎。父母于民者。嚴懲之可也。荼毘於我道昭爲始。風水下踰海而東。於我爲幸。孔子曰。之死而致死之。不仁而不可爲也。之死而致生之。不知而不可爲也。是故。竹不爲用。瓦不爲味。木不爲斲。其曰明器者。神明之也。荼毘致死之殉。致生之器具而不用。聖人之道然。至哉言也。何以尙焉。

鬼怪第八

或曰。左氏記事實乎。曰。左氏直記所傳宜信宜不信。曰。若申生之靈逢狐突。伯有之厲殺帶段。欲信之則以死爲生。欲不信之。則世又不爲不有類之者。如何。曰。是世俗之所惑也。夫被酒者。視聽言想皆妄。此妄雖得于酒。而酒不與也。夫氣者以物而立。故火氣之入物。舍火體而存。香氣之著物。舍香體而住。人以怨憤不平而死。衆以怨憤不平而居。彼氣屈而不伸。鬱而不散。同氣相感。變怪托物矣。狐突雖得之而申生何與。若言不然。則申生之操。何恭于生前。戾于死後。鄭人殺伯有。伯有之厲殺帶段。鄭人殺子晳。子晳之靈何終不

見奚伯有獨靈而子晳之不靈也夫感應之態有焉無焉存焉亡焉若以一定事理斷之假有人曰窮天地之理惡知一株腐木寸間生菌尺間不生菌之感應哉惡知一莖艸葉一葉生蠹百葉不生蠹之感應哉故一出一沒以是例鬼神非識變化者也故龍陽之泣前魚思積于我淚在前魚故魚不與也宋岳武穆爲秦檜冤殺而於其廟鑄檜縛門蓋其實檜伸岳屈而衆情憤憤是以伸岳於廟屈秦於門以通疏衆情也憤憤之冤未散憤憤之人承之於是恍惚之間人或見賊檜之事冤者無意智承者有好惡應者已倦歲月既久其跡漸消宋時李三者死而爲厲鄉曲凡有祭祀心設此鬼一分若不之設則齊食盡爲所汚時有人放爆竹焚其所依之樹自此遂絕氣有所依則或傳無所依則不存感應則鬼神或有或無且心惑則神妄妄則魅成妄魅以爲鬼事孰辨眞假焉曰妖厲其然魏武子之妾父結艸報恩豈自怨憤哉曰怨憤感激結心一也夫感應者一氣之用氣用則神通若曰死者各有靈能知思讐懷愛惜以酬醋黜陟則滿堂塡塗多於生人何以億兆匱得一二億兆得一二以是爲例豈曰能取讐哉億兆匱得一二愈知世間鬼怪偶爾出於感應風俗通載陳國張漢直到南陽讀左氏傳行後數月女弟病漢直之鬼言我痛死喪左陌上常苦饑因說家事盡有驗父母諸弟衰經到來迎喪數里遇漢直漢直怪其家家疑漢直以爲鬼噫此時使漢直既死孰辨其不與漢直若有人強辨之人以爲誣明祖嘗微行至朝天宮前一婦人衣衰麻大笑太祖問故曰夫爲國死爲忠臣子爲父死爲孝子以之而笑太祖曰已葬乎婦人指示明日中使行視乃下壺之壙也漢直之怪非漢直壺婦之怪果壺婦焉哉又宋時有人平生不識一字一日病作念一部杜詩又有人渡江

其妻流水。夫以爲死。過金山寺。作佛事。婢子言亡妻所在。蓋如溺妻依之。而後有漁人救之者。携還之。一有之之事。無意相通。一則無之之事。妄意以相感。豫讓之且刺襄子。能使襄子動心。而襄子之寬。不感讓焉。鉏麑之且殺趙盾。不使趙盾動心。而趙盾之忠。使麑死矣。是以感應。愚人。認跡而爲常。達者。知常而達變。感應起滅。不與虛實矣。昔一客。途暮野宿。蚤起見之。草棘莽莽。古墓荒凉。客惕然去。歸途又値暮。不得已而宿此。大鬼小鬼。徹夜呻吟。感鬼得鬼。鬼何與焉。夫人寐則神休。精爽釋守。而客氣妄動。譚鬼而厭。抱畏而啼。念注感格。事雖奇。而莫足怪焉。吾所識僧。深疑前生。祈佛七日。夢佛告之曰。汝前身牛也。勿疑。以爾鼻有通拳竅爲驗。及覺果然。僧又作此念。我身牛也。何因緣。今受人身。又夢其身一比丘。德亦高矣。闔國大仰。因有自慢心。由是自悟。前身比丘。以慢故。墮畜生。業報已盡。

比丘功德其深。故今又得出家。此僧知有輪廻。切求前身。弗得則不已。空竅雖不自知。而氣血之所注。神識到。疑念與空竅會。而成牛夢。夢而不已。故比丘也。比丘而不已。豈無可見之夢哉。又世有氣絕還蘇。歷歷說幽冥事者。彼蘇者。元氣猶完。神識未散。念頭之視聽。從我所淫。其所視。與夢何別焉。元氣散。神識化。然後死矣。死則復不起矣。可起則非死矣。間際筆記。載有馬僧石文。氣絕十九日而蘇。人問之則曰。我昨遊湖中。心賞不忘。冥中惟在湖山絕景中而已。日臧氣絕之地獄。石文氣絕遊湖山。可見所視聽。則從念之所淫矣。且病邪攻內。則視聽皆忘。思念凝神。則遇其所淫。不必以睡而後有之。明初內中。嘗失金缾蓋。謂執事內竪竊之。命斬于市。既而得蓋。追免之。竪自言。入市時。覺身坐屋簷。臨市井。見反縛一人。將就戮。頃之聞報。我乃下屋簷而還。是亦夢也。非神離身。然則路窮十萬八

千身至三島十洲。不足證實矣。夢妄也。覺眞也。夢昧矣。覺明矣。舍明取昧。舍眞取妄。千百之一驗。何異兒女之鵶占矣。夢如可以爲證。則駕鳳昇天。騎鯨入海。亦有矣。閉口能言。斷足能走。亦有矣。客聞之曰。子之說感應。似可聞矣。如再生者。如何。曰。湖州司馬何須問。金粟如來是後身。前世德雲今我是。依稀猶見妙香臺。詩興所至。滑稽弄人。傳說自人爲星。太白自星爲人。或自嶽降爲人。或望夫以化石。有異類相通之談。豈惟樹穴探環哉。曰大湖掬水。舍之復掬。洋洋大湖。前掬非後掬。後掬非非前椈。掬得前掬。亦大湖也。掬失前掬。亦大湖也。千萬掬之。後掬得前掬。而千萬掬之者。不必得前掬於後掬。孰曰後掬外前掬。勿舍前掬疑後掬焉。

夢覺第九

人之神氣。晝明夜昏。正治病亂。神居身之爲生。身喪神之爲死。神役氣之爲覺。氣役神之爲夢哉。神執權則正。失權則狂。守精則直。失精則妄。而古之說夢者多。曰。武丁恭默思道。夢帝賚良弼。乃審厥象。俾以形旁求于天下。已得而爲舟楫霖雨。泰誓曰。朕夢協朕卜。襲于休祥。戎商必克。蓋夢占古與蓍龜竝。故周禮。大卜掌三兆三陽三夢之法。三夢。一曰致夢。二曰觭夢。三曰咸夢。其經運十。其別九十。鄭玄曰。致夢夏后氏作焉。觭夢周人作焉。咸夢殷人作焉。此術今亡。詩云。維熊維羆。男子之祥。維虺維蛇。女子之祥。衆維魚矣。實維豐年。旐維旟矣。室家溱溱。漢書藝文志所載。有黃帝甘德占夢書。昔在晉殺趙氏。大厲見於晉侯夢。曰。殺余孫不義。余得請于帝矣。漢靈廢宋皇后。桓帝見靈帝夢曰。宋皇后何罪過。聽用邪孽。使絕其命。宋氏訴於天。上帝震怒。是著於經史。其尤昭昭者也。蓋聖人之御世。不以是非先於天下。疏人情於俗習。化之於禮樂。驅於仁義。苟不達此義。則六經弗可讀

焉人其孰不好吉惡凶。夢畏懼憂患則意不伸。夢慶賀榮達則意適。人之情也。君子行禮。不求變俗。祭祀之禮。居喪之服。者事之大者也。猶如其國之故。謹修其法而審行之。是故俗信占夢。官有占夢。周禮占夢。掌其歲時。觀天地之會。辨陰陽之氣。以日月星辰。占六夢之吉凶。季冬聘王夢。獻吉凶于王。王拜面受之。乃舍萌于四方。以贈惡夢。遂令始難毆疫。蓋古有以夢與世事相參。以辨吉凶之法。意如卜筮而已。若不然。則亦兒戲耳矣。今天下。弗惑于茲。故廢久矣。雖有作者。奚擧之爲。夫擧人任之。天下之重事。故堯任舜。舜任禹。試後方任。周文豈獨特夢焉哉。秦誓者武王將伐商。誓衆之辭也。故屢擧紂之惡言。其可伐。重言夢卜。亦襲休祥。餘事及茲。主意不在此。故尉繚子答梁惠王曰。武王克商。無祥異也。今世將考孤虛。占咸池。合龜兆。視吉凶。觀星辰風雲之變。欲以成勝立功。臣以爲難。是故

叔孫夢牛。牛則中。曰助之者。失漢文夢黃門。黃門則是。昇天則非也。是以梁武殪於中原。以地降之夢。汝愚死於負白龍昇天之夢。晉漢二主已心畜不快。不快爲夢。播之於憒憒之人心。夢者以實記之。傳夢者。欲實之。趙鬼桓魂。何見於晉漢之主。晉漢之主。夢見趙鬼桓魂也。已若以之曰夢之道。然則奚用占爲。世誠有爲艱澁謎語。解其事奇中者。是人之機捷。偶與事會而已。世信千失之一會。可謂不知譬矣。是故辟如周宣占人不夢之夢。亦三發而三中。雖三發三中。而機捷之偶與事會者。天地間豈有掌能收得將來之機而入之於夢者哉。周禮六夢。曰器。思。正。寤。喜。懼。列子八徵。故。爲。得。喪。哀。樂。生。死。王符夢列曰。直。象。精。想。人。感。時。反。病。性。皆隨有而分。善見律曰。四大不知。醫書曰。五藏所致。皆以配當立說。要爲魯衛之政。已。道家謂夢爲魄妖。猶可也。至謂三尸所爲。則可笑。夢妄也。變化紛擾。

以跡分之何止之詩曰占彼古老訊之占夢具曰予聖誰知烏之雌雄

立事第十

智者思學以致天下之明是以無拘泥偏黨之陋仁者思行以適天下之情是以有安樂愛慕之驗於是其智無所不通其仁無所不安是以不致其明則其智餒焉不致其安則其德愧焉不能知天則無以知人不能安人則無以奉天故仁對智則主行對義則主情猶同是一身對父成孝對子成慈一主兩呼各有所當也蓋人之立于天地以生死為始終克始終則人之事畢矣是以訓說天地之通以入造化之網緇次區別諸生之擾擾序倫類辨倫理以標其道懷孕說其本保生言修養幽冥鬼怪夢寐之事明有所不照終起涿鹿之霧苟無指南之車者迷惑倀倀不知所歸夫智放之於六合而約於知道仁施之於天下而歸於安衆先聖之所建後聖之所述布在方策思子弟之親體之我讀曾子立事信之久矣階基既立上堂入室其書存矣又爲弟作禁曰勿以待人者自處勿以律身者責人勿以我好尚加諸人勿以小人伶俐侮他敦樸智極其高明行勉之於踐履曾子立事曰君子攻其惡求其過彊其所不能去私慾從事於義可謂學矣君子愛日以學及時以行難者弗辟陽者弗從惟義所在日旦就業夕而自省思以歿其身亦可謂守業矣君子學必由其業問必以其序問而不決承間觀色而復之雖不說亦不彊爭也君子既學之患其不博也既博之患其不習也既習之患其不知也既知之患其不能行也既能行之貴其能讓也君子之學致此五者而已矣君子博學而守孱之微言而篤行之行必先人言必後人君子終身守是悒悒行無求數有名身言之後人揚之身行之後人秉之君子終身守此憚憚君子不絕小不殄微也

不微人。人知之則願也。人不知。苟吾自知也。吾子終身守之勿勿也。君子禍之爲患。辱之爲畏。見善恐不得與焉。見不善者。恐其及己焉。是故疑以終身。君子見利思辱。見惡思詬。嗜慾思恥。忿怒思患。君子終身守此戰戰也。君子慮勝氣。思而後動。論而後行。行必思言之。言之必思復之。思復之必思無悔言。亦可謂愼矣。人信其言。從之以行。從之以復。宜其類。類宜其年。亦可謂外內合矣。君子疑則不言。未問則不言。兩問則不行其難者。君子患難除之。財色遠之。流言滅之。禍之所依生。自纖纖也。是故君子夙絕之。君子己善。亦樂人之善也。己能亦樂人之能也。己雖不能。亦不以援人。君子好人之爲善。而弗趣也。惡人之爲不善。而弗疾也。疾其過而不補也。飾其美而不伐也。伐則不益。補則不改矣。君子不先人以惡。不疑人以不信。不說人之過。成人之美。存往者。在來者。朝有過。夕改則與之。夕有過。朝改則與之。君子義則有常。善則有鄰。見其一。冀其二。見其小。冀其大。苟有德焉。亦不求盈於人也。君子不絕人之歡。不盡人之禮。來者不豫。往者不愼也。去之不謗。就之不賂。亦可謂忠矣。君子恭而不難。安而不舒。遜而不諂。寬而不縱。惠而不儉。直而不徑。亦可謂知矣。君子入人之國。不稱其諱。不犯其禁。不服華色之服。不稱懼惕言。故曰與其奢也。寧儉。與其倨也。寧句。可言而不信。寧無言也。君子終日言。不在尤之中。小人一言。終身爲罪。君子亂言而弗殖。神言弗致也。道遠日益。公衆信弗主。靈言弗與。人言不信。不和。君子不唱流言。不折辭。不陳人以其所能。言必有主。行必有法。親人必有方。多知而無親。博學而無方。好多而無定者。君子弗與也。君子多知而擇焉。博學而算焉。多言而愼焉。博學而無行。進給而不讓。好直而徑。儉而好傹者。君子弗與也。夸而無恥。强而無憚。好勇而忍人者。

君子弗與也。亟達而無守、好名而無體、忿怒
而爲惡、足恭而口聖、而無常位者、君子弗與
也。巧言令色、能小行而篤、難於仁矣。嗜酤酒、
好記歌、巷遊而鄉居者乎、吾無望焉耳。出入
不時、言語不序、安易而樂暴、懼之而不恐、說
之而不聽、雖有聖人、亦無若何矣。臨事而不
敬、居喪而不哀、祭祀而不畏、朝廷而不恭、則
吾無由知之矣。三十四十之間而無藝、五十
而不以善聞矣。七十而無德、雖有微過、亦不
以勉矣。其少不諷誦、其壯不論議、其老不教
誨、亦可謂無業之人矣。少稱不弟焉、恥也。壯
稱無德焉、辱也。老稱無禮焉、罪也。過而不能
改、倦也。行而不能遂、恥也。壯稱無德焉、辱也。
老稱無禮焉、罪也。過而不能改、倦也。行而不
能遂、恥也。慕善人而不與焉、辱也。弗知而不
問焉、固也。說而不能窮也。喜怒異慮、惑也。不
能行而言之、誣也。非其事而居之、矯也。道言
而飾其辭、虛也。無益而厚受祿、竊也。好言

煩言、亂也。殺人而不戚焉、賊也。人言不善而
不違、近於說其言、說其言、殆於以身近之也。
殆於以身近之、殆於身之矣。人言善而色葸
焉、近於不說其言、不說其言、殆於以身近之
也。殆於以身近之、殆於身之矣。故曰者心之
浮也。言者行之指也。作於中則播於外也。故
曰以其見者占其隱者。故曰聽其言也、可以
知其所好矣。觀說之流、可以知其術也。久而
復之、可以知其信矣。觀其所愛親、可以知其
人矣。臨而懼之而觀其不恐也。怒之而觀其
不惛也。喜之而觀其不誣也。近諸色而觀其
不踰也。飲食之而觀其有常也。利之而觀其
能讓也。居哀而觀其貞也。居約而觀其不營
也。勤勞之而觀其不擾人也。君子之於不善
也、身勿爲可能也。色勿爲不可能也。色也勿
爲可能也。心思勿爲不可能也。太上樂善、其
次安之、其下亦能自彊。仁者樂道、智者利道、
愚者從、弱者畏。不愚不弱、執誣以彊、亦可謂

棄民矣太上不生惡其次而能夙絶之也其下復而能改也復而不改殞身覆家大者傾覆社稷是故君子出言以鄂鄂行身以戰戰亦殆免於罪矣是故君子爲小由爲大也居由仕也備則末爲備也而勿慮存焉事父可以事君事兄可以事師長使子猶使臣也使弟猶使承嗣也能取朋友者亦能取所予從政者矣賜與其宮室亦猶慶賞於國也忿怒其臣妾亦猶用刑罰於萬民也是故爲善必自內始也內人怨之雖外人亦不能立也居上位而不淫臨事而慄者鮮不濟矣先憂事者後樂事先樂事者後憂事昔者天子日旦思其四海之內戰戰惟恐不能又諸侯日旦思其四封之內戰戰惟恐失損之大夫日旦思其官戰戰惟恐不能勝庶人日旦思其事戰戰惟恐刑罰之至也是故臨事而慄者鮮不濟矣君子之於子也愛而勿面也使而勿遨也導之以道而勿强也宮中雍雍外焉肅肅兄弟憘憘朋友切切遠者以貌近者以情友以立其所能而遠其所不能苟無失其所守亦可與修身矣

贅語第四帙　畢

贅語五善惡帙目次

贅語五

善惡帙上

日本　鎭西　三浦晋　安貞　著

物之並立于天地才各有長短而以人比物其所短在本氣所長在神氣以神長而意智牽情慾之感而運。是以人之爲性能相結焉。不結則鬪爭擾亂成。本氣短則生不自立。能略萬物而立。其所略已多。所結已廣。於是夫婦合焉。父子親焉。君臣序焉。朋友和焉。天下致一而已。異於禽獸之群而不結。不結而不亂者。不亂者取物有分。亂者取物而盡。取物之間。爲結解。以觀才之巧拙。巧拙觀意智之運。情慾巧于結者爲賢。拙于結者爲愚。是乃悅怨羞感之不可已者。成善惡是非。己抱悅怨羞感。且有事於本氣之不足。於是結之樂踰物。解之苦踰

物條理之故未立于世人唯逐其末天人之分不明人物之故不辨。不知道德之修。以素爲瑩。還以瑩歸素矣爰作此編與同志之人語。

善惡訓

人亦一性一體性氣也。故沒體體物也故露性蓋人之氣體以粲而爲以混而成於是粲混氣體分氣體之混然者用成于通氣體之粲然者用成于隔隔則耳目鼻舌手足陰乳各有官司而彼此不通通則氣液骨肉情慾意智全用一身而彼此不隔故身生之體用意爲之性才有所融而官司全用之體中氣以爲生之天物以爲身之地性中性以成意之天才以爲爲之神推成者於所爲則天地即本根天神即精英以成其一焉體之以用而行猶才之自性而運於是天地用體造化運性一則莫不融通二則莫不感應是以混物成粲氣混氣役粲物意有心性爲開爲技心性爲于混氣爲技成于粲體混氣運于內粲體接于物蓋性者生也以本而素也心者神也以華而文也是以情慾素而意智文也

情慾
意智

情慾者感應之氣也意智者知運之神也是故情者神之動氣也慾者氣之動神也故情牽於外而愛憎感慾求於內而欲惡應意者思惟謀慮之神智者知覺分辨之靈爲以運用技以言動交接之間善惡是非于運爲虛實守禦于言動以一而意智運爲以二而情慾感應感應見性運爲見才然而運爲作感應感應作運爲感應苟無智覺之辨別則將混禽獸也愛憎情也欲惡慾也愛欲謂好憎惡謂惡好惡未經思辨混然于善惡是非好惡者感應之性悅怨于衆心而善惡分思辨者運爲之心當否于事宜而是非成悅怨未截然于分辨當否何貼然于感應禽獸之所以異人者徑行感應之情慾而拙于思辨之運爲也故彼拙于神氣之所運我短于本氣

之所立感應者、性之所自然、故不教而好之、不學而惡之、運爲者心之所使然、故思而得之學而能之、悅怨成安危、自情慾起、當否致榮辱、自意智出、情疏而通之、則能保感應、意思且學焉、則能盡運爲、蓋天下之態彼我反用、逸我則勞人、利我則害人、此取則彼失、此美則彼醜、我欲逸、故苛刻與我惡、害故利事萠、此欲取、故不慮他之失、此羞醜、故妒人之美、若弗之思辨、則豈不罔然從所好哉、思此慮彼、知此辨彼、他之好惡、猶我之好惡、思辨措于事之宜、善惡是非之所以分也、性者我之天、牽爾而感、心者我之神、思惟而應、故耳目口體身也、視聽食作氣也、耳之欲聲、目之欲色、舌之欲味、體之欲安、生之適否也、欲辨不善、惡察不惡、轉惡使善、變是使非、神之運爲也、是故人之爲性、善亦欲之、利亦欲之、惡亦惡之、害亦惡之、故思辨利害之心、即思辨善惡之心也、是以爲孝、爲忠、爲悖、爲逆、其嗜膏粱、安茵席、甘糟糠、安湯火。無他、意智役情慾、與情慾役意智之間也、利之害之、得之失之、神爲往來之狀、以吉以凶以美以醜、天成收跡之貌、利得吉美、不教而好之、失害凶醜。不學而惡之、然其所好不必是善、其所惡不必是惡、思而後辨之、學而後能之、疏通保感應之道也、擇修宜運爲之法也、修而疏矣、惡沒而善立、非消而是成、是以言行不得不重于擬議也、故愛憎欲惡、非分善惡是非而動焉。分動則有善惡是非、而存故情慾爲主、則擇修成于得失利害之私、終喪思辨之正、意智爲主、則好惡成于取舍辨別之公、終克情慾之邪、於是擇修和好惡、適于衆心。達于天下。故君子使性聽命於思辨之明、小人使心聽命於好惡之感、感應已與運爲別、則所好不能專、所惡不得廢、是以雖適人情、或病于是、雖當事宜、或病于善、善不病于是、而仁成于天下、是不病于善。而義通于四方、非學莫

道德同異

知之、非禮莫行之。是以學務通天人、禮在履威儀。故其則曰師天友人、與時通塞、與處行止、與天下偕適、與天下偕當。是故學禮者、仁義之修、其由之則修、舍之則荒。裸者忌燭、沐者彈冠。好惡雖一、修荒換思。夫寒欲衣、饑欲食、人之天也。寒謀衣、饑營食、人之神也。故雖不衣則凍、安之于不衣。雖不食則饑、安之于不食。是運爲有所分辨、而氣聽命也。謂之有所擇。意智之明也。心者動於所觸者也。以動於所觸者、修之於所擇。是以學擇其術、處擇其里、口擇其言、身擇其動。蓋物有有于內者、有行于外者。有于內者德也、行于外者道也。人得道德於天、而未之修、爲得于天、而猶未得之於人。人之將修之、各國異俗、意匠千態。請嘗通諸天地而說。茫茫八紘、大海環繞、而壤地曼衍于其中。而人之居其間、或山海隔絕、或風土負別。因地制產、各自成俗。人之性情、非有他也。獨意匠之設施異焉耳。勢之所

天人

至、不能如禽鳥之爲群。夫人心鬱達、有治亂榮辱之事。而各壤產人傑、立道立法、以納其民於斯中、愛養保護。雖同其志、立言垂範、異途而馳矣。是以修德不齊、行道自別。其稱先覺者、雖開眼於物表、薰蒸爲葛藤、習慣如自然。降此則各設窠窟、據門戶、務守禦、以其一許符於天。遂議他之不合天。是不歸其素於天、而爭玄黃於人也。故爲學者、須通天人。若以制於人之道、成于己之德、爲成于天下之仁、通于四方之義、則未也。謂之師天友人之則、則未也。夫人類有親疏、等有尊卑、列之爲父子、爲兄弟、爲君臣、爲夫婦。機含殺活、態抱治亂。悅怨榮辱、起伏其中。誠僞千態、當遇萬狀。若取一途、御多方、則焉得不致鬩爭。故學唯通天人、功能安人。是故心性者得乎天、修荒者成于人。得乎天之道德、無竢修爲、成于人之道德、有待修爲。己已居人、奉得于天者、而修成乎人。是故古之人傑、能貴德修道。要

不過修心治人二途。已入其境。成其趣。桃紅李白綻春風。蘆華楓葉媚秋霜。自其本原觀其末弊。則烹熟之火延廬舍。灌漑之水致陷溺。唯爲天下立安衆之功者。益其所利。損其所害。君者爲衆拯其焚溺者也。師者爲愚爲其嚮道者也。人之爲人。立道。忌荒。取修。夫成者自然。修者有擇。擇修之道。如采藥耘苗。采藥者抽良於離離。耘苗者除莠於蓬蓬。以天下觀天下之心。猶望離離於山。見蓬蓬於田。皆其而天也。擇而人也。故善惡之在人而反心。與毒藥苗莠之在生而反物同焉。君擧賢使能。則民向善矣。用邪任奸。則民化惡矣。舜者古之聖人也。善與人同。舍己取人。樂取於人以爲善。好善惡惡者。天下之同情。擧人之所同欲者。行之於同欲之人。察人之所同惡者。懲之於同惡之人。於是好惡不與人違。故令則行。禁則止。唱則和焉。道則從焉。讓亦悅之。取亦悅之。是之謂大同。雖然不學則無術。

學

所貴乎智者。學也。學毀其蔀。明通四方。若末達天人。仍舊眯其目。學有諸家之分。有古今之異。諸家之態。則畫區域。事護詰。古之學者。不纒文字。今之學者牢貼章句。開明由茲。局才由茲。故學師天友人。師天則能順之。友人則莫所局促。得之於大同。不責之於各好尙。故其治人也。能爲運用。能保感應。趣舍嗜好者。衆之私意也。人各有其意。則各有所向。所向不同。則所見不同。所見不同。則所養不同。所養不同。則所是非不同。所是非不同。則所守禦異也。所守禦異也。則道路反目矣。是謂各異。何其大同。何其各異。生之別也。若不通于此。則或不知其子之惡。或置赤子於愛外。故以同誣異者。非也。以異疑同者。惑也。議論紛若。則是非熾而善惡藏。人情疏通。則善惡適而是非公。

性習第一

論衡曰。世子作養書一篇。宓子賤漆雕開公

孫尼子之徒亦論情性。皆言性有善有惡。然則言性於善惡也久矣。孔子以爲近。莊子以爲僞。孟子以爲善。荀子以爲惡。孟子蓋謂惻隱羞惡恭敬是非之心人皆有之。是乃仁義禮智之端也。仁義禮智我固有之。非自外鑠也。牛山之木不美者。非山之性焉。斧斤伐之也。五穀不如荑稗者。非穀之性焉。養之失也。養而不害。擴而充之。仁義之心不可勝用。女何其弗勉焉。荀子非之。謂性者天之就也。感而自然。不學而能者也。故好利惡害。好聲色。好愉快。是生而所有者也。順是故爭奪殘賊。淫亂驕奢自生焉。聖人爲之立禮義道德。誘正禁邪。故性惡也。善者。聖人之僞也。若爲不然則試使天下無禮義之化。去法正之治。無刑罰之禁。彊者害弱。衆者暴寡。木未直受繩則直。金未利就礪則利。女勿恃性以日孳孳焉。董仲舒以情性配陰陽。以陰陽配善惡。故其意謂性者陽而善。孟子之所說也。情者陰而惡。荀子之所說也。劉子政則以性爲不發爲陰。以情爲形出爲陽。則善惡屬情。告子則爲性無分善惡。楊子則爲性善惡混。王充則謂性定有善有惡。善漸於惡。惡漸於善。成爲性行。故初生意於善。終以善。初生意於惡。終以惡。故性之善可變爲惡。性之惡可變爲善。蓋分性行之善惡而言。於是論孟荀楊之說曰。孟之所說者。中人以上者也。荀之所說者。中人以下者也。楊之所說者中人也。然非三子者之意矣。韓子又兼三者曰。性也者與生俱生也。情也者。接於物而生也。性有上中下。其所以爲性者。有仁義禮智信。情有上中下。其所以爲情者。有喜怒哀懼愛惡欲。性之上者善矣。中者可道而上下也。下者惡矣。上者之於五。主於一。而行於四。中者之於五。一不少有焉則少反焉。其於四也混。下者之於五反於一而悖於四。情之上者之於七。動而處其中。中者之於七。有所甚有所亡。然而求合

其中者也。下者之於七亡與甚。直情而行者也。宋儒涑水是楊說。其他專據孟說。而其說亦各不同。胡子以性善之善。爲贊嘆之辭。故別有對惡之善。亦非孟子之意矣。蘇子則曰。性善猶火之熟物。性惡猶火之焚物。是亦苦善之難。專言。而補綴二說。亦非孟荀之意矣。程朱則曰。性理也。氣有惡混於是。有本然氣質之辨。夫有之於無。動之於靜。去之於來。生之於化。廢一則不存一。故目竝存開闔。鼻竝存噓噏。是天地之條理。陰陽之勢也。故以性專歸善。則不得不別占置惡之地矣。雖既以氣質占置惡之地。而苦於除性中之惡。是以程子亦曰。善固性也。然惡亦不得不謂之性焉。朱子亦答張敬夫曰。性不可以善惡名。蓋善者無惡之名。夫其所以有好有惡者。特以好善而惡惡耳。初安有不善哉。氣質已有善惡。性有善而無惡。豈天地之條理哉。如使善無惡之名。則惡必以無善之名爲對。又與胡

心性

子以善爲贊辭。相伯仲。可知其說之苦矣。蓋言善者、以意智所有之明、爲主、言惡者、以情慾所有之私、爲主、未知心性條理之分者也。伊尹曰。習與性成。孔子曰。性相近也。習相遠也。夫性者民之素。習者君之敎化。其說主敎化。重在習矣。敎化之道荒。而議論與人以口舌。務勝。欲以言論移人於善。故言性善者、憂言性惡、則人自棄、言性惡者、憂言性善、則人自恃。不知其自勵者、以善喩之則愈勸、以惡喩之則力矯、其自棄者、以惡喩之則歸罪於天、以善喩之則任善於自然。性爲文之素、心成素之文。然而情慾、自然之氣、意智、使然之神。故情也者、感物而動愛憎者也、慾也者、應物而欲惡之作者也。是故男女之於色、怨讎之於憤、耳目之於聲色、口體之於服色、感應以觀情慾矣。意者、心之靈、其事則思惟謀慮、智者、心之神、其事則知覺分辨、由所觸而喜怒應、由所遇而哀樂感、而意智有明暗、情慾

有厚薄、性也、明以之暗、暗以之明、厚以之薄、薄以之厚、心也、故徇情慾、則意智爲役、而思辨成於情慾、從意智、情慾奉命而好惡成於意智、是以人之於色、美則悅之、接則足焉、於飮食、美則旨之、食則飽矣、淫奔親迎、擇於色者也、獻酬紾臂、擇於食者也、若不擇之於意智、則情慾何嫌、禮淫恭不恭焉、孺子之將入井、亦隱孩兒之就苦楚、亦隱人之害人之善、亦惡人之妨己之慾、亦惡不容不擇焉、故從容而樂者、不以糟糠易膏粱、感激而死者、不以湯鑊易茵席、此豈性之所欲哉、故怒於讎者、即感於恩者、而對局爭行者、即在射揖讓者也、性者自然者、習則成自然、故古人不言之於性而言於習、今其以善惡爭性者、猶以毒藥論生、雖生不外毒藥、毒藥非生矣、生惟生焉分、所以生者、則毒藥自分、若執論之則偏言毒、偏言藥、或混言之、或分言之、各不乏、於其證、惟生存毒藥、思分毒藥事異、則機之

所觸不同、所觸之機出於自然、處事則成於思辨、若曰、隱出于性、忍不出于性、讓出于性、奪不出于性、豈理哉、且雖隱讓似美德、亦各竝存善惡是非、則不擇之隱讓、不足爲善也、然則聖之所具、不外於情慾、愚之所有、不外於意智、故情慾勝、則小人也、意智勝、則君子也、矯情懲慾、能養意智者、志士也、任情縱慾、悔於所擇者、棄人也、學則能知、修則能至者、聖也、教而不化、道而不進者、愚也、雖頗知所取舍、未能勝其私、情慾與意智相爭、是爲心戰之、人機在勝敗、思辨薰蒸於見聞、而已智長於此中、以爲堯舜之民、以爲盗跖之徒、以爲儒以爲佛、是爲風化之人、故仁智者、好惡思辨之美、禮義者、擇修措置之方、亦道德之散名、非性之名焉、道與德不相離、故孔門說仁、非慈愛忠恕、則志行禮樂也、夫先王之於禮樂、由人情爲之、豈曰自外鑠哉、先王之於禮義、將矯枉防淫、豈曰不兵之利自礪、木之

直自矩哉。金之利。雖不自外鑠礪之磨自外來。木之直。雖不自外鑠矩之直。自外來。詩曰。令儀令色。小心翼翼。橫目豎鼻大同也。美醜長短各異也。同而不同。異而不異。猶如其面焉。故合其所異。則人情不適。分其所同。則天下壞亂。夫意者忌偏。智者貴融。偏則隔焉。融則通焉。習有所染。見有所向。思有所注。智有所蔽。抑揚過快。護訐依黨。未能不謬于天地。故學將學正也。而學以爲偏。習將習正也而習以爲偏。蔽有好尙。自斷是非。思注於所見。反目而欲悲。夫禮樂者。教化之道。習之正者也。仁義者。彝倫之教學之正者也。兼有其德位者。則以教化爲陶治。故使天下移情慾。變意智。而不自知焉。周公其人也。有其德而無其位者。不能施才於一時。負荷道德。使百世知所向而振起焉。仲尼其人也。夫以教化陶治人者。能負道德。以道德振起人者。以學禮立所向矣。勢然。學習譬之於苗則耘耔灌培之事也。耘耔灌培則長。不耘耔灌培則不長。耘耔灌培則長者。亦苗之性也。不耘耔灌培則不長者。亦苗之性也。學習之於民大矣。古人不恃性而愼習。阿衡尼父之言然。晏子送曾子曰。蘭之本三年湛之以漉醢。既成噉之。則易之匹馬。非蘭之本性也。所以湛之者美也。願子詳其所湛者。孔子聞之稱以君子。故詩曰。爾之遠矣。民胥然矣。爾之教矣。民胥傚矣。宋儒以理爲性。故以孟子之所言。爲本然以伊孔之所言。爲氣質。於是言性歧。子曰。與聖人居。如入芝蘭之室。久而不聞其香。即與之化矣。與不善人居。如入鮑魚之肆。久而不聞其臭。亦與之化矣。今他邦之俗。畜牛羊犬豕而長之。忍其觳觫。屠而食之。甘其味。以饗諸上客。貴其肉。以薦諸鬼神。今如我俗以此爲穢。啗之者。不得與祭祀。乞者骨立而不食。婦女語及此。則多致嘔噦。習之移人如此。孰辨習與性。且今之俗於烟酒也。用同飲食。其

議論

未慣于服也。今目眩咽塞。既已慣之。雖不關
饑渴而與饑渴何異。故水穀人之天性也。烟
酒習之與性成也。人生必慣。故難見其素焉。
未見其素。則奚知其薰蒸者焉。風習之入人。
猶油膩之於櫛。紅藍之於帛。薰染不自知。以
之爭其素。宜乎百家之紛紛也。風習者治亂
之始。民心之所成。不正也。邪僻之倣。不重也。
輕薄之染。置之於王治。皡皡如。移之於霸世。
驩虞如。置於山野。則敦愨。置之於市鄽。則奸
巧。孔子曰。少成則若性也。習慣若自然也。若
謂之其素。則桀紂不能率禹湯之民爲暴。湯
武不能率桀紂之民爲治。凡人心。無古今南
北。風化則有古今南北。見其俗。而疑其性。執
其化而論其天。譬猶取泥塑人曰土有面目。
飮酒醴曰米醉人焉。故不見其本然。則立敎
也差。不知與性成者。則施敎也謬。君爲陶冶。
師爲模範。而民爲土鐵。曲直利鈍。皆在其術
中。敎失政謬。咎將歸誰。夫孩提之兒。不見母

王道

則泣。抱于父則笑。予則悅焉。奪則怒焉。夷貊
胡越。一也。其至已椎髻辮髮。文身衣冠。靑其
袍。緇其衣。則漁者走水。獵者走山。日成趣於
所向。月視疵於所去。甲是則乙非。彼善則此
惡。稱誠稱僞。稱虛稱實。稱有稱無。愚者眩目。
能者攘臂。以其所好。意天下莫美焉。願以之
易天下。以怒以憂。夫一人之所見。則一人之
見也。一人之所能。則一人之能也。今以己之
見能。技癢望天下同于己。各主張其道。攻向
于外者。於是百家競起。是非愈多。道愈小矣。
是故王者之治民。有害則疏。苟無害者。不强
一律於我所向。是非惡歸于一。而爾爲能知
衆情也。夫好惡者。天下之同情。見趣者。百家
之各議。人病於是非。而因於好惡。未能以敎
化陶冶人。未能負荷道德。振起世。譊譊而爭。
各有是非而存。雖可供之於芻蕘。抑末也。君
者風也。使民東西。師者表也。使人曲直。君師
使之薰染浹洽。則民日移而不知。天下同然。

一其好惡。是非自時王之禮制出。君之美也。取天地之善。屏天地之非。先大立正。師之良也。書曰。無偏無陂。遵王之義。無有作好。遵王之道。無有作惡。遵王之路。無偏無黨。王道蕩蕩。無黨無偏。王道平平。無反無側。王道正直。會其有極。歸其有極。

生性第二

有生則有身、有性則有心。心有性。亦猶身有生焉。水燥土石。精靈感運。在我。氣液骨肉。心性爲技也。生者、身之氣也。故生與性成、身者。生之物也。故心與身具。身者、耳目鼻舌也。生者。視聽嗅味也。性者、其好惡也。心者。其運爲也。是以有牛之生。則有牛之性。有牛之身。則有牛之心。有犬之生。則有犬之性。有犬之身。則有犬之心。人亦爲然。但人之心性。以他物之心性比之。則猶以他物之身生。比之於人之身生。類不同。則氣不同矣。其理灼也。且夫物有同異之辨。聚蚌蛤觀之顆顆彷彿。比大小方長短參差不合。入山觀木。樹樹依稀。分疏密撰曲直。千貌萬形。故禽獸與我同血氣之類也。故同具情慾意智。草木不與我同類。故情慾意智。不與我同焉。我與他同類。是以不得大異焉。雖同類而別生。是以不得盡同矣。是以橫目豎鼻。不得大異焉。美醜長短。不得盡同矣。好善惡惡。不得大異焉。趨舍嗜好。不得盡同矣。子產曰。人心之不同。如其面焉。然而人心之不異。亦如其面焉。故西施毛嬙之美。不必出一貌矣。無鹽嫫母之醜。不必出同姿矣。譬之是猶衆歌者。宮商同出一律。而聲音各自異矣。其所同亦此性也。自孟子以善之所發見說性。荀子以所不學而好惡駁之。是以善惡爭性者也。楊子摸稜之。韓子支離之。是亦以善惡爭性者也。列仁義禮智信之五而數性。列喜怒哀懼愛惡慾之七而數情。非條理之言焉。善惡本分於擇有而發者。故性之於善惡。未經思辨。則混然于善惡

是非矣。非謂善惡混也。告子曰。生之謂性。其言未遠。至孟子羽白雪白之問。失對。故至犬牛同性。其辨窮焉。噫其白羽之白者。白羽之白也。白雪之白者。白雪之白也。羽雪同白。則同言白。是物之所以大同也。羽雪而白則言羽之白。雪而白。則言雪之白。是物之所以各異也。生與身偶。性與心偶。氣形以之分。犬有犬之身生。亦有犬之心性。牛有牛之身生。亦有牛之心性。犬之性。則犬之性也。牛之性。則牛之性也。

人道第三

上焉。君父兄長。中焉朋友宗族。下焉。妻孥臣僕。行此際者。謂之人道。王者行之於朝。匹夫行之於身。師教士正。禮序樂和。棄之。則王公國辱。輿儓喪身。賢不可離。而愚可使知焉。從事於斯。雖才有長短。智有小大。見有向背。皆聖人之民也。自是上之。天地之道。造化之故。禮樂之文。經濟之業。攻守之術。博學溫故。致廣大。盡精微。士之能也。可使上者知之。而未可使下者知之也。而善惡無定方。伊尹廢主。周公討兄。王莽下士。田氏施民。可假善以爲惡。可由醜以爲美。有著簑雨行者。于此。甲順之。乙倒之。順則簑芒低而禦雨。倒則簑芒揚而受雨。一簑二用。反跡如斯。苟情之適否。事之當否。弗意通智燭。則不免失宜。孟子曰。可以取。可以無取。取傷廉。可以與。可以無與。與傷惠。可以死。可以無死。死傷勇。所以曰中。曰權。曰時。曰宜也。是以志未之善。無益于口舌之爭。心苟未自得。則雖辨可聽。雖儀可觀。亦亂正賊道。若達此。殺奪凶窮。皆善也。不則活予吉達。皆惡也。衆情適。而知其善。事宜當。而知其是。乃聖者之事。極天不墜。後世莫尚者也。惡與善偶。毀與譽偶。歸惡於己。推善於人。是皆善也。受毀於己。讓譽於人。是分毀也。辨別非人情感應之事。好惡非意智辨別之事。故是非皦皦。未適人情。善惡憒憒。難斷是

非、憒憒淆是非、皦皦賊善惡。修之於參差之間、而不誤難矣。孔子譏微生曰乞醋於其鄰。曾子出妻曰蒸藜不熟。晏子使魯而反。景公起大臺之役。晏子入諫、公不聽。晏子出而不言。遂如大臺、執卜鞭不務者。國人怨晏子歸。君罷役。是豈皦皦之道、而人情適矣。是故親醜見者子之罪也。君惡聞者臣之過也。好人之善、惡人之不善、天下同情也。好人之善則自務、惡人之不善則自懲、思得正者也。欲我之美、惡人之不美、天下通態也。欲我之美則掩他、惡人之不美則訐之、思之邪者也。人其孰無公私、通之於衆、則善惡是非、公也。獨之於己、則善惡是非、私也。惡人之勝己、則妒生、欲人之從己、則怨作。故論佗、則感應不接、而專由辨別、所以好惡正、而善惡分也。處身則感應先交、而私擾辨別、所以愛憎偏、而是非淆也。故美宜譽、譽則生佗之妒、醜宜毀、毀則起人之怨、於是毀譽不與美醜並行。殺活予奪之機動焉。後漢諸賢、欲使善善同其流、惡惡同其汙。於是善奮惡激、分黨亡類。豈善道哉。抑諸君子之罪也。齊鮑叔之不可爲政者、管仲恐其好善惡惡之甚也。吳張溫之見放時、諸葛論其淸濁太明、善惡太分矣。宋韓魏公以不太分善惡、維持朝廷。叔度汪汪、澄之不淸、淆之不濁。是其賢也。豈謂之鄉愿哉。故後世所謂賢者。非行之不潔、非道之不直、非言之不危、非節之不高。惟截然皦然成名、則有於從容安國步於艱難、保社稷於險危、鮮矣。故善者不可以一德言之、不可以一道概之。

爵德第四

物有有乎內者、則必有行乎外者焉。有者則行者之根、行者則有者之表。道德之天也。而人之所以爲道德者。擇其美修之、而後命之者也。修者荒之偶也。人之道也。何以謂之人之道。修荒在人、而不在天也。是以流水不腐。

爵尊

草木不垢。人苟施技。則井則淤焉。苗則荒焉。淤以待濬。荒以待修。是以鳥羽之文。獸毛之彩。終年不濯。如斯其鮮。如人一朝廢梳靧。則髮鬖鬖而面含煤。此故人道廢于荒。而成于修矣。道德本天之有。以克給物。給則無弗資者。故其得于天者未貴。修于人。而後能貴。猶穀之得粟於天。而成精於人焉。古曰。達尊三。曰爵德齒。禮本三。曰君父師。爵者。君臣之所以分。齒者。父子之所以序。德者。師弟之所以立。通之則貴者尊。而尊者貴矣。分之則尊偶乎卑。貴偶乎賤。就條理言之。人有尊卑之等。立于父子。有親疏之分。分于男女。而達三尊於天下者。其尊齒也。老老之道。立孝道也。非爵則莫鎮天下之憤憤。非德則莫解天下之憤憤。而爵由君而立。德以師而成。蓋人之於禽獸。同其情慾。異其意智。禽獸乏于意智。則喜怒止于己。人巧于意智。則悅怨結勢。故無鎮壓者。則弗勝糜沸。無諧和者。則莫那瓦解。

德尊

彝倫之條理。親疏以合。尊卑以立。是以父子兄弟者親族。君臣男女者疏族。處之者愛敬。疏則敬克、親則愛克。愛敬一德。由所向異其道。是故。愛敬則親之道。親不可以疏處。疏豈可以疏處哉。古曰。報本反始。報本反始。愛敬之至。如失此心。人道滅焉。今孝于親。忠于君。事天神。奉人鬼。爲恩使爲義。死皆由此心也。復讎報怨。反其惡聲。亦無佗。倒用此心也。是故愛敬不失大和。德之所貴也。人己有情慾。又能有意智。意智萬變。薰蕕錯雜。賢正欲自治。姦邪以動搖。民不能自防其暴。不能自折其訟。於是仰之於君。上君上不能自衣食。奉養以資之於下。於是上則爲下勞心於事。下則爲上役力於奉。自天觀之。亦各執其役。各各自爲。各使己親受其安逸。下不爲上執役。上設刑戮之。上不爲下執役。下與亂病上。自人言之。君有四海之人。下仰上一人。上以敬下爲禮。下以奉上爲義。故爵定而等級序。分

定而天淵隔、僭則貶焉、犯則誅焉、故上安其位治其下、下知其分。勸其役、苟己如是。猶視聽戒手足、手足護身首、故蚩蚩之民。安眠鼓腹。比隣相親。擊柝重關。暴客遯藏。農工商賈通其力、各厚其生、是爵之貴也。夫爵之貴。貴能號令控掣衆庶、以予奪殺活之謂之權柄。上而失權之柄、勢與匹夫等。奉其權、蓋有道也。據德之謂也。請嘗論之。夫人具愛憎之心、持殺活之技。故愛也煦而育焉、惡則殺而屠焉。是爵之所依。而非所以立焉。立者德也。失德則失其權藉使卑且小。而據此德者。人不得不尊親、已尊親之。愛及屋上之烏、於是桀紂之貴。不得比身於牛醫之子。德之尊也。德也者、道之內有者、道也者、德之外發者。道雖千萬一以貫之。夫親子尊卑之天、君臣貴賤之人共是天序粲然。弗可濫矣。是以臣無貳君之道、子無畔父之理。上下之分也。禮義之節也。然人情勃窒。憤恚激猜。加以智技之狡

黠、於是衆巧巧於君。衆勢猛於君、於是雖天序粲然、分定義分。無貳道畔理。勢蔑亂天序犯分犯義、畔道戾理。乘車墜載。駕馬噬人。名分之定。法令之嚴。不能制。土崩瓦解。恩惠合衆。歡下者踰越。雖於義不慊。人猶許其南面。是以德能合天人、匹夫可以爲百世之師。何所羨。而引涎於彼作威作福、以玉食者、故高士欲分一豆之芹而富貴唉而斥之、其極爲獺人見憐。由不知德之尊於爵、竟幷爵失。是豈人君焉哉。爲人之下者、惟見爵不見德。至白首。始知上蔡逐兎之樂、雖知而晚。昔者以天子之尊、猶且設大學之儀。取子弟之禮。北面磬折。養老乞言。而後之有爵位者。不知本此。莅下而倨事上而諂。珍重權柄。欲以此壓人伸己。忤則誅之、陵則罰之。控掣在手致此悶悶。於是有道之士。搏而去焉。潛而藏焉。病而臥焉。剛者觸而斃焉。懦者畏而隨焉。至愈下則恚而格焉。竊而弄焉。奪而取焉。極

矣。道者粲然。發之於德之混然。於履而行之。則接天神地示處君臣父子夫婦兄弟吉凶軍賓行藏語默。有天之則有人之誼。建諸天地。質諸鬼神。學以知之。禮以行之。雖有犯之者。而弗校。故其人可陵可侮可屈可殺。惟義不可辱矣。樂順境苦逆境。賢愚何隔。然而其寓樂也。小人於情慾。達者於意智。縱情慾則侵漁於色。壟斷於利。朶頤乎勢貴。睚眦乎怨讎。達者隨其所寓而樂。動而無咎。顧而無悔。不以趙孟之所貴賤以自貴賤焉。雖千乘之貴。不以義則未有所自屈。監于前。戒于後。愧于行。思于言。甕牖繩樞以爲廣居大廈。生以順焉。死以安焉。若得之據爵。則四海通脈絡。疲癃殘疾。仁恕相及。是以祖先歆其饗。子孫保其祚。故有德者雖無爵。可以榮于千古。雖有爵。而無德則災及其身。辱延後昆。夫人有癈痼之疾。不請醫求治。而苟且優游。及四肢不擧。上下關格。氣欲絕。呼伯輔我。雖有盧扁無如之何。是欲求安而求安之道左也。故人貴奉德。奉德則知所懼。古人曰。知天下之不可先。故後之。知人之不可上。故下之。自天觀之。則莫有而非德。自人觀之。修而後德也。修者先知。知在學。修在禮。學知禮修。知求之於典刑文物。而忽察之於人情。以理斷。以義斷。以爲人情之宜。則於君師之慮。末也。握殺活之柄。臨無告之民。曰起則起。曰坐則坐。隨己之所欲。避上之所諱。居千仞之高。臨不測之淵。弗專意索之。察人情也難。唯其知情。知機勢者。而後知其馭急於巫峽之水。其險甚於大行之途。夫學醫者。不知病情。投藥起痾者。豈有之哉。然則欲調和天下。不諳人情。徒執銜轡。敎步驟。恐下畜騾沸之情。有土崩之變。故處世者當知人情之非理非禮。悶悶憒憒。難摹寫者而後馭之也。而不爲愼其機。察其勢。徒稱規矩準繩。數墨於故紙上。加之民人。方枘圓鑿。安能相容。又通其意。曰。無好奪之情。則

胡美擇讓、無欲貴之慾、則胡美取謙。修之於外也、處乎人有此情慾、修之於內也、處乎己。有是情慾、情慾無思辨之明、而索之於意智之運爲、而意智有通塞蔽悟、蔽塞不自知其蔽塞、傍觀則公道見焉。故運爲之巧、人人弗同、立言垂範、其態千萬、是猶草木之區而別也。盡區別其分、索發華收子、同受其雨露者。故雖同其所同、各各有好尙、故使其運爲出一轍、造化猶不能焉。而規規求諸君父臣子、師化弟子、我惑之。西施毛嬙、天下同稱其美、若使二人對立、不知其容貌如鏡前之人、對鏡裏之影哉。若終不能如鏡前之人對鏡裏之影、則雖美則美、亦不一其美。然則其說之髮析、毛分質諸天地鬼神、不謬者蓋鮮矣。天地不言、鬼神不語、而人則立康莊之衢、達者勸懲世於大同、不問好尙於各態、知者當號令風靡四方環共之時、深探糜沸之情。土崩之勢、務苞桑愼履霜。是以我後處人之

聖治

欲、先之心、我下處人之欲上之心也。有爵據權之柄、有仰者抑之、有前者挽之、有不奉令者誅。懷德者否。人仰則我俯、人前則我後。人不奉則反求諸躬。爵之爲尊、猶嶽、衆皆仰焉、有不仰者、則失其高也、德之爲尊、猶壑、衆皆歸焉、有不歸者、則失其卑也。故修其德者、無求于爵、欲保爵者、有求于德。自古抱德之士、高尙其事、好德之君、屈貴於賢、喜其卑、而峻其勢、終致潰崩、喜其卑而下其德、其德愈大。是故以德、雖臣而或師也、以爵、雖師必臣也。爵德幷行、而君師之道不悖。是以周武齊戒端冕、東面受丹書於尙父、漢明祖割醬饋南面、抱經於辟雍。

諸子第五

儒者稱爲聖人者、適古之王者也。王者、爲治天下者也。故其道則治天下之道也。衆之所共由、功期濟物、夏殷尙矣。文獻之所徵、唯周之治也已。此乃周公之所建、孔子之所述也。

周孔逝矣。道隆譚十八以胸臆想像聖人各道其道以張是非蓋人之立天地其所倫則君臣父子。其所民則士農工賈。其所材則金木土穀。其所事則吉凶守禦。聖人欲正其德以利其用厚其生使保其天和是故有禮敎政刑禮敎政刑雖弗可廢思以禮敎化人不樂以政刑率人故設學敎人所學者詩書禮樂周之治也是以王制曰順先王之詩書禮樂以造士周禮曰使之修德學道德已修道已成出也可從政處也可裕身故從事於詩書禮樂者可謂士矣可謂學者矣是以學者造士之地詩書禮樂者敎化之本也講論四者大較詩有大義四。一曰樂章二曰誦獻其古之禮也。三曰賦詩達意四曰斷章取義其禮之後興者也夫古之詩者雅頌之正。二南豳六十餘篇耳矣。而雅頌者自朝所播風者自國所擧也詩雖發性情其實樂章也樂聲於器。詩聲於人。相和以成。分則彼以律呂節奏此以文辭性情合以用於宗廟房中以用賓客飲射程大昌詩議曰。南雅頌樂詩。風者徒詩。二南豳。蓋自徒詩上樂與召穆公曰。爲民者。宣之使言。故天子聽政使公卿至於列士獻詩。晉范文子曰。古之王者政德既成又聽於民使工誦諫於朝在列者獻。使勿兜。卷阿詩曰。豈弟君子來游來歌以矢其音烝民詩曰吉甫作誦穆如淸風崧高詩曰。吉甫作誦其詩孔碩。其風肆好以贈申伯桑柔詩曰。聽言則對誦言如醉民勞詩曰。王欲玉女。是以大諫。板詩曰。猶之未遠是以大諫。誦獻之禮也。蓋不出于勃窣理窟而通乎優游諷咏之間焉而王制則曰。天子五年一巡狩命太師陳詩以觀國風今考二南多詠文王而豳多在周公則是制作之日所學者。候國之所陳宜在成康間然無其徵焉。王制若可疑然變雅止於幽則爲之誦獻亦足變風多在東周難具諸陳觀詩者在太師者也。故正考

甫得商頌十二篇者於周太師也。而孔子時。
亡七篇。則廢墜可知也。是以。其反魯樂正。雅
頌各得其所者。修其存也。王德荒而變雅陳。
王室衰而變風出。十二國風。非周公之舊典。
陳觀之義。益可疑矣。變風詩人之諷詠。非東
周巡狩之舊物。誦獻之餘。風擇收諸瞽師。故
春秋士大夫之所賦。季札之所聽於魯。皆同
於今。而逸詩僅存。則周季三百餘篇。瞽師粗
有其數。家語稱孔子曰。刪詩定禮。曰制作春
秋。夫制作者。開國之擧・語所謂作者七人。說
者以爲堯舜禹湯文武周公。刪定制作。非夫
子之任。史遷繼曰。詩三千。孔子刪爲三百。孔
子者周人。述其任而作非其任。唯一注意於
與周。而弗可復爲悵周公之道將泯滅於是。
取其詩書禮樂。修傳來學。王風不上于雅。魯
頌不刪于商前。何在刪作。故孔子嘗自稱三
百。不曰三千。夫詩者。言人情者也。情感於中。
咏嘆爲聲。王者之業。在治人。治病弗識病情。

治人弗識人情。何以爲之。曰厭浥行露。豈不
夙夜。謂行多露者。以觀貞女之裁情於禮義。
曰期我乎桑中。要我乎上宮者。以觀淫人之
直情。無所顧慮。禮義歸於意智之正。而情慾
之機藏焉。執政柄者。求意智之正於下。以屈
人情。則豈不致怫鬱焉。是以曰。民之失德。乾
餱以愆。苟且于此。不愼一豆之羹。足以覆三
軍。曰子惠思我。蹇裳涉溱。子不我思。豈無他
人。其呢甘偕老同穴。一且釁生。向背相異。愼
微於此詩。則匹夫匹婦人愛惡。足監湯武桀
紂之事也。誦之於朝。風之於野。可以興起善
心。可以觀視人情。可以羣怨。可以事君父。有
得乎情也。而不言於斯。唯曰。今之三百。非孔
子之舊。變詩宜放。不宜講。果然則衣錦褧衣。
亦鄭衛之音也。詩序曰。以一國之事。繫一人
之本。謂之風。言天下之事。形四方之風。謂之
雅。故雅者。王者之詩也。風者。諸侯之詩也。而
杞宋。玉者之後。周不以爲臣。魯雖爲諸侯。許

廟食文王。將比盛於二王之後。是樂師之所不取風於三國乎。頌者美盛德贊成功告之於神明者。周之外惟商魯有。而商僅得五篇。則杞之不存可識矣。蓋魯之有頌。季孫行父所請而作。列在周頌後。宋魯且無風。何王而有風。蓋朝廷陳獻之詩已亡。而徒歌之風興于下也。孟子曰。王者之迹熄而詩亡。詩亡春秋作。意王者之迹熄而詩亡者。言宗周滅而誦獻之道微也。春秋之法。周公之制。侯國各存其儀。赴告猶有。王室因茲維持。是以孔子修之以繼東周以前之治。其謂之作。猶謂就爾。竹書紀年。本魏王冢中物。通東西周書之。策書謂之周公之制。不修春秋。宜若紀年然焉。考紀年之書法。至幽王元年皆書即位。至東遷之後不復書即位。詩曰。赫赫宗周。褒姒滅之。蓋宗周爲墟。東周勢與諸侯等。時人以爲一大變革時。雅停風起。有故而然。周詩雖降于風。而猶以王稱。春秋雖以隱元年。而猶

序書　禮　禮樂

係之於王。一觀其衰廢。一觀其名分。周禮之存者也。雖世及春秋。而揖讓之間。辭命微言。宛轉于賦詩中。非後世之勃窣。是賦詩達意也。詩義本一。至變化活用。其義無極。夫子之可以言詩者在此。而不在本義。是斷章取義也。皆孔子之所周旋。所謂禮之後興者。所以爲義之府也。詩曰。殷監不遠。在夏后之世。苟欲治邦家者。非多畜已往之治亂以爲懲毖。則不能焉。書者。虞夏商周之往轍。勸懲之龜鑑。隆汚失得。史弗可掩。故謂孔子序書者。得其實。謂芟煩亂剪浮辭者。推量之言已。夫稼不修則不登。穀不修則不食。吹毛之利成于淬礪。照乘之光生于琢磨。垢面被髮。國色失天豔。箕踞搔痒。高貴致狎侮。故君子之視聽言動。莫所不修焉。禮者修道也。仁義道德雖貴。而非修弗成。君子之道。無往非禮者。先王之所以治天下也。故玉帛鐘鼓禮樂也。能序能和禮樂也。人之倫已序。人之情已和。和樂

末世

以耽。如鼓琴瑟。未有如是而邦家不治者。能序能和。踽踽焉。洋洋焉。閭里鄕巷。優游諷詠。宗廟朝宴。穆穆相和。樂者治之成功。以暢於聲音容貌。若不然而求諸宮商之末。縱致竹嶰谷。伐桐嶧陽。伶倫調之。夔和之。豈能令人樂之乎。樂家多溢辭。初學宜汰其溢焉。夫哀樂者人之情也。樂易淫。哀易傷。情之常也。樂而不淫。哀而不傷。心之節也。故樂者使哀樂之聲。和之平之。若其聲淫。則游蕩感激。使聽者泣焉慕焉。散焉荒焉。其弊亂閨門。延女謁覆國家而已。是雅樂之所以正性情。淫樂之以荒情志也。周之置官。曰禮敎政刑。誠廢一不得者也。然而周公將陶冶之於禮樂。而寛政刑。孔子不爲政。是以其所敎文行忠信。及周之衰。人觀寛之弊。而未觀急之弊。商鞅用之。逞於一時。韓非以慘刻之性。著書立敎。始皇用之。終有天下。今稿目思之。制作之業。始于聖人。而終于始皇。降王新稱皇帝。廢文敎壯國威。罷封建。起阡陌。廢詩書。行律令。疏骨肉之情。嚴君臣之分。服御稱號。大非三代之舊。於是造士之法。廢於詩書。仕進之途。開於律令。是以後世雖有治之君。以始皇之禮臨下。雖抱經之士。由始皇之儀事上。千歲莫之能改。可謂絕世之豪傑。雖然其德不及亂。其威裁沒其身。則先王之道。巍然存其間。先王知天下之情慾。不可鬱屈。又不可放恣焉。是以貴寛恕。賤慘酷。似齒之不能與舌爭久焉。無齒者猶能飮食。無舌者不可立矣。是人道之所以不可廢也。然而人道忌荒。就修於是禮樂以文之。忠信以行義。仁之事也。是以禮苟合義。則雖先王未有之。而可起也。如是則居也成德。達也化國。沿革損益者。有義而存。自挾書之律設。是古之法行。而籩豆揖讓廢焉。漢興。后倉捃摭之於焚餘。純駁共存而異同錯見。可以觀考之。可以法行之。欲觀而法之者。不知其世移物換。不能學柳下惠。優孟

儒

其治具遺典。次配四時。並當五行。加以己之意見。建之模範。欲驅其悶悶者。分銖絲毫、不差之於是堯舜禹湯文武周孔之道。墜儒家之手。棊散瓦碎。衆官失相。故當今日之世者。唯在有大同之德。行大同之道。佛之名。由說佛而得道之名。以說道而成儒之名。以何得之。周禮天官以九兩繫邦國之民。一曰牧。以地得民。二曰長。以貴得民。三曰師。以賢得民。四曰儒。以道得民。五曰宗。以族得民。六曰主。以利得民。七曰吏。以治得民。八曰友。以任得民。九曰藪。以富得民。民者衆也。得民猶統衆。然則儒者九兩之一。以道統人者也。周衰而官失其守。士之誦詩書講禮樂者。遂負儒名。道歸儒而治與道離焉。治與道離焉而先王之道歸副墨洛誦。於是其人誦典籍。據文墨。修身守法。以先王之道而傳來學。以竢後之作者。故儒者所傳者。先王之道也。而先王之道。則非儒者之道矣。由是觀之。儒之爲名尚

墨

老子

矣。而稱爲儒者。自墨者分立興。蓋先王之道。容是非而馭國人。後儒之道。立是非而爭衆人。是非雖當而非馭衆者之所宜爲心。先王之道。非後王之道也。本禮敎而正政刑者。乃先王之道也、末禮敎而執政刑者。後王之道也。是故王者以天下爲心。千情萬態。疏裁爲禮物。陶冶之道大也。不以所見異。置赤子於愛外。道與治離。是非上口舌。周時始抗儒者。墨子爲魁。雖楊朱並稱。楊者實雌。今讀墨之書。其意在交相愛。兼相利。以欲薄葬短喪。惡時之厚葬久喪。費財僞哀。相妨愛利。極口訾孔子。訾而弗置。誣之調之。孟子學孔子者也。激彼誣調。欲痛攻大挫。故於愛利務排之。非薄葬短喪之二本無親。一調一激。其非其平。以非平者爲平論矣。是爲英雄所欺也。荀子亦孔徒。引堯舜禹湯文武。加之儒名固矣。老子之時。治未與道離。身爲柱史。最知禮。而識禮之弊。煩文失擾苛。意在易簡。而其意幽遠。

韓子

其言奇激。是以其道不道世之所道。子思傷其廢禮教失常道。言道之出天。行乎彝倫。又言天道之誠明。敵彼之虛無。其以與老抗衡。其言高遠也。雖然其道共在天下。猶雖綸綱異。其意各在魚。而比之於後世。其爭也君子。老子猶龍。幽遠之意。不易窺。奇激之言難見實。是以不能讀其書者。以疎傲簡慢為眞。以禮貌修飾為僞。莊列亦老之徒也。見趣不已遠。已而燕齊之士。雜以鄒學。漢賊加以風角。既而長生作家。禱祀為業。別製衣冠。為佛之對偶。於戲老子。莊列祖之。申韓祖之。黃冠祖之。淸譚祖之。似霍光之不得其子。以覆宗社。立言奇激之所致。其責有不可辭者。韓非術倣商鞅。津津數萬言。唯在强君弱臣。威柄在上。宋賞罰運天下。故其法棄灰於街亦誅。在下者。不挾是非。不分賢愚。願使之從。韓非挾之入秦。始皇殺之。今讀韓子。則始皇能用韓術。韓非何不甘心於地下。人情如水。爭保之於臨

佛

深履薄。土崩瓦解。勢之所至也。賈誼譬之以鞭狎狗。信哉。古之君臣。陵夷于寬。秦之上下。土崩于嚴。君臣之間。宜寬宜嚴。非秦制之偏非也。唯不置嚴於優游和樂。而驅之於畏懼肅殺。以觀不如古之遠焉。漢之君臣。粗窺老子之意。寬簡以收。有所懲也。雖然其君臣之嚴也。襲秦制。百代不革。佛者身毒修為之法。悉達太子之前。固已有焉。將不用賞罰黜陟。而教各自求善厭惡。遂脫屣萬乘。以入無為。其所謂外道。猶孟子之於楊墨。於是梵漢之法。其撰大異。故漢教以解褐事經濟。為其本志。梵教以棄恩入無為。為其本志。夫天下之事。有利則害從。有損則益從。勢不得不然焉。佛之於教化。百端欲以厭為惡之心。以向乎為善。故方便之法。奇幻百出。餌情慾鼓感慨。已能收人心。而引學之於覺地。已而身立覺地。如飾櫝賣玉者矣。甲獲玉還櫝。乙弄櫝失玉。偕不失為善焉。覺現威容。居尊於人君

之上。設賞罰於冥冥。信之甚於親受之。於是奉覺之威容。持冥之賞罰。以爲糊口之業。以開一世界。不織而衣。不耕而食。高山之巓。綠水之洲。金殿瓊樓。玉樹瑤花。攢簇彩霞。縹渺于紫雲之間。仙童弄笙。天女供食。衆情唯欲佞佛而得其憐。投金而買其福。衆盲隨前導之呼。拮据之財貨。花苒移其中。諸子雖有議論。而皆在一王之中。在一賞罰之中。論事。唯人主之外。別握賞罰之權。隱爲一敵國。動拒王命者。唯佛爲然。蓋其道之入震旦。雖於漢明。哀帝時。有伊存口傳浮屠經事。溯此武帝時。漢得休屠祭天金人。宋王懋悉之於野客叢書。其徒則以列子中。孔子說西方聖人爲徵。猶尙不已。曰所謂彼蒼頡之臺。乃迦葉三會之道場。殷末周初已垂化。是廼撫弄聾啞之餘術。延至兒孫。唯佛之道。有覺之一字。未得覺之一字。沈溺生死苦海。沈溺爲資。自莊嚴其極樂世界焉。儒者學士之稱。其教者仁

智禮義。故孔子居魯。衣縫掖。居宋。冠章甫。千言萬事。惟君臣父子。男女長幼之間也。及分意見。學在筆墨。趣成識見。剖析錙銖。而守戸護門。和同見吠異聲。蓋議論者流、汰同於異、愈汰、其境愈小、馭衆之道。和異於同。愈和其境愈大。唯異之難和。于同者。汰之於畔。大同於是有予奪黜陟。豪傑之徒。取己之所抱技獲於御衆。法家主政刑。迂禮樂之寬裕。墨者本愛利。厭禮樂之煩費。古曰。興治同道。罔不興。與亂同事。罔不亡。譚士以所見之向背。各不相容。欲出是非於一途。猶求狗亦唱曉。鷄亦守盜。夫馭衆之道。名分位序。禮文制度。監之於古。有損有益。準繩已立。從其名分。由其位序。馳驅有範。假使老墨申韓立一朝。各藏其好尙。以伸其能。若違時王之禮制。則各有其罪焉。於是道士釋子亦遊其中。優人妓倡亦遊其中。況各抱其才。有濟衆之志者乎。故趨舍嗜好之殊。識見取舍之異。安背繩墨。以

亂馭衆之道。此故先王之治。非言行出一轍。嗜好歸同途。君子樂其樂。小人利其利也。敎化荒而議論熾。我有所得。則思以之回天下之視聽。羣雌孤雄。孤雄欺雌。主與我德近者。推與我好同者。故李耳宗軒轅。許行稱神農。堯舜之道。墜儒者之手。老佛之敎。爲道士之俗。以其好尙。歧分派別。彼言我避。甲護乙訐。或張異立門。或汲流糊口。共非王者之務。故尊佛者。則將高其堂。修其法。以祈冥福。濟衆生。信儒者。將火彼像。廬彼室。復周官。歌韶武。互相抵排。各鬬空言。使辨雄者勝。譬之是猶有一醫療一病。人論其因。列其方。分經絡。辨生剋。其言鑿鑿。如可聞焉。由悅其說。服其藥。煩悶彌篤。於是始知前鑿鑿者之妄。召衆工議之。衆工讙然論前治之謬。言後治之可施。吐下攻補。衆論不合。各有可聞者。然此中必有善者。善者未施。焉勝不善者。不善者未見跡。焉服善者。當是之時。不使病者巧於醫。難

乎免。是以我之所趣。託於古言。我之所撰。委於古人。好則誣諸先聖。惡則削諸舊典。訐也洗垢求瘢。護也鑽皮出毛。先王之道雖衰。而後王之守也。後儒之學雖美。而議論者流也。堯堯禹湯文武之舊章。世不之擧。行儒者誦而傳焉。於是敎化隱。編帙議。論務守禦。孔子其衰矣。故箕子老聃者。武王孔子之所貴也。今取其書讀之。未全與武孔一焉。蓋古之人。厚取人之長。而寬責人之異。故人以盡盡其言。身以受其益。百家之議者。各好尙也。天下之情者。同感應也。譬之。天地容萬物。不求其異於同。萬物統於天地。不厭其同於異。上而日月星辰。風雨霜雪。下而山野湖海。艸木鳥獸。雜然而相遊。千義萬義。聖人不能齊之。天地之大同萬是非。不能違之物之情也。故擧世以爲是而有未是者。擧世以爲非有未非者。而又有擧世以爲是。而不行於世者。有擧世以爲非而不廢於世者。故惟達者不爲擧世

之所是、改其操、不以擧世之所非失衆情、擧世之所是非、尙然。況各好尙哉。始皇队於偶語之禁、子產興於鄕校之議。不議則何辨。欲辨張是非、孰以善告。是以善宜擇矣、非爲惡也、是宜取矣、非爲非、非也。故其盡才也。非責人之不及其修身也。非尤人之不修見有向背。才有能否。奚期之於一轍。惟身修則君子之徒也、荒則小人之類也。是故智愚聖凡。才也。邪正善惡。修荒之間也。由可治千乘之賦・亦可與賓客言。子夏跛及。子騫俯就。依性而勉。依才而用。故或黽勉王事。或高尙其事。陳力就列。不能則罷。車之難水。舟之難陸。所以車之能陸。舟之能水也。是以大德無所不容、大道無所不行、聖人之治也。然而各家之議論・足監得失、則馭衆之所考在慈。制作不取於此。則將何取焉。管子曰。智者知之。愚者不知。不可以敎民。巧者能之。拙者不能。不可以敎民。非一令而民服之也。不可以爲大。善。非夫人能之也。不可以爲大。巧。聖人復起。不易是言。

贅語五善惡帙上

贅語五

善惡帙下

日本　鎭西　三浦晉　安貞　著

誠僞第六

誠僞

老子曰。智慧出。有大僞。荀子曰。聖人化性而起僞。蓋老子貴淸淨。故厭儒者煩苛修飾。而欲易之於無爲者也。荀子則與思孟抗衡。故非彼言誠。言性善者。以爲檃栝繩墨。矯木之性。飾木之眞。禮義法度。矯人之性。飾人之眞。言僞之旨各不同。今依條理。分天人。則天道者誠也、人道者僞也。是以天者以成、人者以

爲僞於文爲人爲。於是人爲對天成。以常訓言之。僞者矯飾也。不誠也。爲惡德焉。其聲則共誠僞。一分天人配之。一就人爲之運分。故對天成之人爲。則衆爲而非惡德焉。天之所成、則物常事成、常而不可撿、人之所成、則神變智轉變而不可測。故天必蕡生麻藕開蓮、人以怒呈笑、以親致疏。聖凡同然焉。不常而定、則不能成物、不變而易、則不足爲神。爲善在茲。爲惡在茲。故條理之分。人爲則天成之對。人已畜情慾之悅怨。具意智之思辨。不修出之。則不能滿于人之情欲。於是不可以不修獻人。修以修爲文。人爲之僞也。假修飾外。不可欺人之思辨。於是不可以外飾待人。去飾行實。人爲之誠也。或修以出之。或實以行之。共歸之於修。人爲之宜也。非言僞者之非也。以天人誠僞。混人修之誠僞。甲乙各坐。不辨條理矣。人不以人道、則不能爲人、我之所以貴修也。人不順天道、則不能成人。道之所

以貴于人也。故其曰忠、曰實、曰眞、曰諒、皆盡誠而則天也。曰禮、曰文、曰敎、曰學、皆以修而爲人也。是以禮文以修人、誠實以成人。垂髮垢面。人之自然。而沐浴衣冠。人之矯飾哉。唯修荒之間也。故周禮地官以五禮防萬民之僞而敎之中。以六樂防萬民之情而敎之和。書曰。恭儉維德。無載爾僞。荀子不辨天人之誠僞。以孟子之說爲不然。取性屬僞。要之荀孟同不辨修荒。使後者迷其路。其實由條理之不明也。老子言曰。聖人不仁以百姓爲芻狗。又曰。治天下若烹小鮮。是言煩苛擾亂之害治也。舜命契曰。敬敷五敎在寬。皐陶讚舜曰。臨下以簡。御衆以寬。易傳曰。乾以易知、坤以簡能。易則易知。簡則易從。易知則有親。易從則有功。有親則可久。有功則可大。可久則賢人之業。可大則賢人之德。雍之簡。孔子爲可南面。蓋禮敎之弊。必煩苛擾亂。人多不易從者。故曰寬。曰易簡。所以救禮敎之弊也。老

子傷。夫文煩儀冗。徒失實害。治國瘁民苦。而衆悦小惠。安小康。世衰風壞。而人譽小德。稱小讓。故曰。大道廢有仁義。知慧出有大僞。絶仁棄義。民復孝慈。絶巧棄利。盜賊無有。嗚呼水棄則下。人棄則荒。苟無教之以道。之禮之以維之。法之以禁之。則猶奪匠之繩墨而責其巧於是乎。老子意激言病焉。噫。情慾意智者。人之天性也。雖太古之民。豈不具情慾乎。既具情慾。豈無智巧。淳澆巧質。雖有異焉。于于偊偊。無德無怨。則雖太古。無此理矣。老子不如斯之癡矣。故讀書者。宜置身於其地。知其情。有激。有溢。有矯。有諱。有避。有抑。有揚。有訐。有護。有誇。有淫。而後知其意之所在焉。不然讀書。與丱角之唔咿奚擇。故老子之言僞。出激。荀子之言僞。成矯。鼠璞亂眞。曾母投杼。同聲而異主。辭豈可膠哉。人意萬態。不語不一。故聽人之言者。在探其眞。詰論其意。以舉之。蓋言之爲道。思之所發。與行爲偶。是故世

先有可言之事。而發之於言。故言者後也。意之客也。是以。世之有言。皆先得可言之事。而後發之而言之者。思可言之事於己。得於己而託之於言也。故後之聞先輩之言者。先察所言之事於天。求所思之意於其人。而後其言可聽矣。而後之聽言者。先從事於其言。而定所思於己。立所言之言於天。是以雖非言則事不可狀。然亦事由言而差。何則在天者一。思之者。則意匠變態。而文章之於言。亦其巧千態。其瑣者姑置。立言垂範。以道唱人者。下語之道。各家有態。故求意於其人者。須能知其人之思之態。能知其人之言之態。於今人之言於古人之書。不明於此。則不得如取之於我之胸臆。故如欲讀佛氏之典者。則宜察佛氏所言之事於天。求佛氏所思之意於己。悉佛氏下言之態。會其眞矣。欲讀老子之書者。則宜察老子所言之事於天。求老子所思之意於己。悉老子下言之態。而後會其眞

矣。聽言之道。無往不然也。其大者。儒佛老之三。儒家之易。佛家之禪。老家之莊列。各不同焉。儒家則直寫。而易家則寓之於物。佛家則方便譬喩。所言非所思。禪家則用九方皐相馬之術。老子則用抑揚之法。莊列一掃其言。其意別立。譬之於兵。則儒用正。諸家則用奇。是故。敎家贊嘆。禪家罵詈。於是老莊之戲調。或同于儒家之昵語。自天觀之。春風之起。萬花各呈其彩。秋飇之落。萬籟各異其曲。天能發其聲彩。以其聲彩認天則差。

云爲第七

置之於一箇。則曰生化。通之於天地。則曰造化。天地爲緯。造化爲經。以觀造化之巧。生者。迎其來。而活機。化者。送其往。而成跡。故自天地觀之。惟既者皆化。而將者皆生也。生乃化育也。夫人之立天地之間也。曰惟靡天地生生之物。以供我七尺之身。其爲罪也重。其靡天地生生之材。而不足動輙殘害己之類。其罪愈深。人人迭殘害己之類。各不能自安焉。故有衆則有君臣。以爲統督。勢之所至。不得不然焉。是以君之任。在能節天地生生之材。而不徒靡之。道殘害己之類者。和而變之。政敎之所在也。故敎也者。使衆和而安之者也。故主其德焉。政也者。使衆守而據之者也。故主其方焉。孟子所謂。德慧術智也。有德而無其術。雖可自修其身。而於施之於衆。則不足。有其術。而無其德。雖可姑合其衆。而不可維民心於土崩。是故君者爲天。安民者。民者償直於安我者也。君爲天。安民。故據仁。民償直於安我者。故據義。而臣僚者。君安民之輔。使令者。受君動作之役。若不知之。則君以其臣民材貨爲己之奉養。猥殺天之輔贊化育者。靡天之奉養萬民者。臣忘贊化之任。獻媚冀憐。又靡萬民之養。爲敎者據託幽冥之不可知。而纏不蠶之衣。飽不種之穀。富商依其勢榷古米穀財貨。塞彼以通己之用。游民巧成

奇技淫巧。以糜天下之財。於是萬民失其養。迷惑而擾。猶蜜之蠢生。其窠相齧相竭。故莫民之擾亂釀之者。全由上忘天職。貪天物。爲己之奉養。殲下於誅求。或首伏誅者。由倡亂叛上。故釀成之責。上不得不任。故治國者以德爲本。以方爲主。是故臣進言於君。君采言於臣。言者各述其所見於君前。采者納其善者。措其不善者。君誤于采。臣誤于進。藉令無拒諫欺上之意。傍人必就其跡。而尤其志焉。居今論古。熟看成敗之跡已定。得失之徵已分。賢姦之情已見者。且無愛憎之累於情慾。思慮之逼於危急。論何爲不易焉。當其事者。擇在於成敗未定。得失未分。賢姦未見之前。而好惡擾其中。利害奪其外。豈保無過哉。故引古今。而證諸經史。坐辨論之。則人人皆不在伊呂之下。當其事。則以堯之明。猶躓于用人。孰謂之易乎。人譚古能辨臧否。觀其失過。而笑其愚。自意。我必不爾矣。故不遇于世者。多有不我知之歎。不知使其遇世。則果有所爲乎。故言不易言。歎不易歎。先王之道載在方冊。既解之讀。孰不能誦之。衆集論碁。一座皆稱。勢宜張。子宜連。舍小取大。自固擊敵。要最在著先。既而臨局履言者少。食言者多。嗚呼言而履之。固爲難焉。同稱同辭。分其是非。愈難矣。自古稱識鑒。皮相之不足恃也。是以齊桓信羨子之堅。是以孟孫識放麑之臣。

聖人第八

有客問曰。古昔稱聖人者。其行不齊。而其名同者何也。曰。多方曰。惟聖罔念作狂。惟狂克念作聖。此就聰明而言者也。齊桓公與管仲。謀伐莒。未發。而東郭牙知之。管仲曰。聖人也。淳于髡見梁惠王。竟無所言。以知王之志之所在。惠王曰。聖人也。此亦與多方所言者同也。子貢曰。學不厭者。智也。教不倦者。仁也。仁且智。夫子既聖也。此以仁智言者也。子曰。若聖與仁。則吾豈敢。周禮曰。智仁聖義中和。此

分仁聖言者也。子曰。何事於仁。必也聖乎。此聖在仁上。道家。曰賢人。曰聖人。曰眞人。聖人在眞人之下。儒者。曰賢人。曰聖人。聖人在賢人之上。而孟子曰。伯夷聖也。伊尹聖也。孔子聖也。柳下惠聖也。是聖等賢也。宰予曰。以予觀夫子。賢於堯舜遠矣。是賢等聖也。而詩書所謂齊聖。彥聖。未必極其至而言者也。樂記以聖對明。辨述作曰。作者之謂聖。述者之謂明。中庸以爲上善之稱。故曰。天之所覆。地之所載。日月之所照。霜露之所墜。凡有血氣者。莫不尊親。謹按。作者至善。可以聖通稱古今者也。論語曰。作者七人。堯舜至周公。蓋七人。雖其德不同。而後世皆言之聖者。而堯舜禹湯文武周公。聖人也。至周爲至善之稱。故孔子聖人也。作者必有德。有德不必作。雖不作。而詩書禮樂之敎。於是存。則孔子之功。不在作者之下。是以同稱之聖。而不能無軒輊也。夫勢者重矣。沛然而走。不可挽而駐。智愚聖凡。各處此

湯武

中。故仁者以仁處之。智者以智處之。權者以權。愚者以愚。是以湯之放桀。武之伐紂。皆非美事。雖聖者所行。豈得贊爲美哉。般湯之慙德。不自以爲美也。若恬然不之慙。則湯云哉。愛憎欲惡者。天下之性。取舍辨別者。天下之心。故天下皆好善惡惡。愛美憎醜。天下皆欲逸惡勞。欲寬惡苛。欲利惡害。欲樂惡苦。憎則欲除。愛則欲就。欲除則願其亡。欲就則願其達。天下之通態也。既善矣。美矣。逸矣。寬矣。利矣。樂矣。天下歸此。既惡矣。醜矣。勞矣。苛矣。害矣。苦矣。天下棄此。譬如避水者上陵。避火者出家。以湯武遇桀紂之世。不可阿其意。以爲暴。不可殺身滅國。以貽患於民人。夫憂失喜得。畏危求安。人之通情也。於是。勢不得使桀紂之人。不患湯武。湯武之人。不圖桀紂。由是觀之。則湯武伊周之放伐廢殺。勢之事。而其人之不幸也。然而醜事也。彼廢而害弭。此興而利生。昨也。道路呻吟。今也室廬絃歌。在

唐宋

彼、則子悖弟怍、在此則家親友睦其苟如斯則人不許其不行醜雖有規規皎皎取義守節者亦未如之何也已。後世唐太宗宋太祖類之太宗首創其事專幹其蠱制敵者。其算也懷醜者。其德也。神堯嘗語之曰。破家亡軀。亦由汝。化家爲國。亦由汝。其重也如此。天下憧憧爲之軀。爲之死。前者挽之。後者推之。太宗弗能自禦矣。升六五曰。貞吉。升階。惜夫建成。不能觀此戒守其位。又不能爲太伯。欲以子立。當沛然之勢。以太宗之果。猶區區龜卜。沈吟隱憂。勢實難如之何也。宋祖將兵次陳橋驛。黎明軍士叩寢門。宋祖起被衣輒相與扶出。被以黃袍。羅拜呼萬歲。擁上馬南行。不以得拒之。是皆雖以正律之。不能使人不欲然然英雄之不幸。而顰蹙行醜者也。後世姦賊。縱爲殺奪。藉口於古人。彼與此。利害相等。勞逸相似。然而以大義則乖。以名分則濫。人情怫鬱。口排曰怒。詐謀欺誣。醜不可言。內

則父子相惡。兄弟相疑。外則壯士罵詈。怯士於邑。岌岌乎四民不安焉。狗鼠豺狼貪肉求食。折膝擺尾。則意氣揚揚。自意聖人之舉矣。是豈勢之不可已矣哉。欲之不能制也。曰。然則君子從勢變道與。曰。深則厲。淺則揭。所處勢也。雖然以子犯父。以臣代君。行義者不爲也。夫夏殷自禹湯相繼。世爲天子。四海受其賜幾百年。桀紂之不道。雖天下同棄之勢爲獨夫。受其茅土。據其爵位者。謂之非君。非也。殷湯之慙德。伯夷之叩馬。建諸天地弗繆之義也。泰誓引古諺曰。撫我則君。虐我則讎。何其言之薄。武王之志荒矣。世之信聖人。直以爲。放伐廢殺。莫舉非教焉。於是以其舉爲美舉。故曰。桀紂非君。伯夷狷隘。不亦誤乎。禮。君子居其國。不議其大夫。爲湯武之臣者。護其君於厄。以除讎我君者。其君則仁而惠也。其所除則暴而虐矣。何捨懷我父母。從虐我之父母妻子之人。既有不從之人。苦水火之人

皆響應。湯武至唐大宗宋太祖。皆慈惠得衆驩之君也。故天下皆響應。推之不去。避之不能。人執戈矛而前驅。衆齎車轂而後推。敵國棄其君。謂我予后。是以爲非我伐之。天命誅之也。爲非我罰之。底天之罰也。於是其意謂天不予其君於君。不予其臣於臣。是受天之命也。仲虺之誥曰。帝用不臧。式商受命。太誓曰。天其以予乂民。其意謂彼失君於人。我受君於天。多士曰。維天不畀。不明厥德。蓋殷周與國臣子之取義。不得不如斯。故謂之通天下之公情則可也。謂之通天下之大義則非也。若謂天福善禍惡之意實使然。何以不顧關龍逢比干之死。忍於伯叔齊之餓。奚以漢予曹丕。以明授燕王。天已能襃惡之術。奚不能絕惡之術。天已能榮善之術。奚不能不困善之術。是以立道於條理。尊卑自尊卑。善惡自善惡。比其類言之。君者、國之火母也、民者。國之子也。君者、元首也、臣者。股肱也。不可以子逐父母。不可以股肱易元首。是以子以弑父。臣以代君。則有焉。子弑父之善。臣代君之道者。轉化天地於鑪中。不能生是條理。是以殷湯周武以作者稱之聖。則有以至善則遠矣。曰。易革彖傳曰。天地革而四時成。湯武革命。順乎天而應乎人。順天應人。猶四時之更成。何子之言之戾。曰。以驩得衆之應人則有。以臣代君之順天。則吾弗知矣。又不傳云乎。革水火相息。二女同居。其志不相得。澤非火之處。順乎天之字。豈得無非自兌傳謨入者哉。夫征討者。天子之重柄。雖謂之天。天則不言。無所受而動干戈於天下。豈得謂順天哉。昔魯陽文君。攻鄭。曰。鄭人三世殺其父。天加誅焉。使三年不全。我將助天誅。墨翟曰。三年不全。天誅足矣。又擧兵。曰。順天之志。譬有不孝子於此。其父笞之。鄰人亦擊之。曰。吾順其父之志。豈不悖哉。無所受而竊大父之重柄。劫大父。曰順天。雖慈惠服人。於義則陷然。唐

大巳貴　少彦名

高定年七歳。讀書至牧誓。問父曰。奈何以臣伐君。父曰。應天順人。曰用命賞於祖。不用命戮於社。豈是順人。幼兒之疑義。可以暢於千歳。故天德者無意、天道者成、人德者有意。人道者作。故天有其條理。神爲天成。爲者能變。成者不撿。是以天之所不可不敬者、不撿而誠成於其中也、神之所不可不愼者。不測而機爲於其中也。今以神之變化。誣天之條理。有益於爲勸善之具。則無驗於爲懲惡之用。古者以　太神在天。素尊之子大巳貴。平大八洲。與少彦名。戮力一心。經營天下。乃謂少彦名曰。吾所造之國。謂善成之乎。少彦名曰。有所成。有所不成。遂行。適常世之郷。於是大巳貴摧伏强暴。天下歸矣。頗有天下莫巳若者之意。　太神欲降　皇孫杵尊。治中國。使者皆恐。無反命者。經津武甕槌壯士也。以告大巳貴。大巳貴謀之其子事代主。事代主曰。天神有命。我父宜避。我先之入海。大巳貴曰。我御闔國。御我避。孰敢不順。授平國廣矛。而隱。當是之時。以其神武仁惠。據八百萬之衆。聽　天神之命。棄天下。如脫弊屣。少彦名經營未成之日。不潔大巳貴有自矜之意。泯跡而去。噫若而人。充棟之漢典。遂不之見。宜哉廟食於數千載之後。子孫與皇家共傳無窮。仲尼桴海。仲由從之。我何愧彼焉。客曰。唯唯。湯武之擧。君臣之分。我得聽命。敢問文武德均乎。曰。孔子常稱文王。湯武德均乎。曰。湯王慙德。

孔子稱文王。三分天下有其二。服事殷。曰至德。稱武王。壹戎衣而有天下。曰不失顯名。殷湯則放桀於南巣。而恐來世以爲口實。周武則殺紂於牧野。而有虐我則讎之語。彼此相比觀之。則豈得謂其揆一也哉。

立準第九

立準之道。不可不愼。準一立矣。人心依此。人心之所依。是非可易。故爲天下立準者。宜慨

皇統

惻萬世洞視萬國。以監舊弊。思後害也。雖稽古勿論。規規因循。亦難成其功矣。今之學者。目濡心染于漢典。唯慣其是非。與當局者偕迷。無復旁觀之得。漢之爲地。幅員已廣。西南之徼。東北之塞。其守實難焉。軒轅已前弗可識。軒轅以還。延覃舜禹。擇親讓德。自湯伐而代。在德不在族。代代興者假之以藉口。又終有受命之說。興國之臣子。不得不若言。是亦勢也。茫茫禹跡。今則沒胡。康熙帝曰。歷代帝王莫正於我。是言也於漢土則爲不滿。旁觀則實勝夫居其地而篡其位者遠矣。　本邦據山爲城。臨海爲池。渺瀰險絕。無外顧之患。帝統不知其始。

神武天皇以祖宗之禮議之。則是宗。非開國之祖。是以世不以皇胤爲人種之想焉。偶有頑嚚抱不軌者。衆心不容。一敗塗地。如今雖垂　拱九重。環共不改。莫所用湯武孟軻氏之議。建諸天地。質諸鬼神。而弗謬之義也。想

幕府

夫大己貴之古。躳以素尊之冑。掌握天下。一聞　天孫之臨。解兵權而去。如脫弊屣。皇統之固。臣節之恭。後世之準。於是乎立。淫漢典之士。以土地之大。人物之秀。而誇焉。名山大澤。人才物珍。鬱然多者。廣輿之所致。其輿已廣。南慮北顧。雖欲固守自治。而不得焉。賢才之衆雖可羨。姦凶之寡。亦足以自慰焉。漢俗之美。於我搢紳常言。我俗之美。於彼搢紳不考。胡旁觀者之迷。世態之變化。人情之險艱。非彼此無比較。數千載。不如彼之數數以自苦也。立準之失居半焉。在彼可厭者。人人可爲天子。刑之慘。律之煩。此事之最大者也。宋人問我風俗於藤木吉。吉曰。春風二三月。和氣桃李春。此語實不彼欺焉。當今之世。

天子垂　拱。　幕府攝政。淫漢典者竊懷天有二日之疑。胡弗思之甚。漢典廼堯舜周孔之典。何以流派之漫漶。本源之清。古有冢宰。後有盟主。從世之隆汚。維持皇紐。故齊桓一

正天下。然周室之勢。能令盟主有天威不違
顏咫尺之愼。何嫌於二日。仲尼之門五尺之
童。愧言桓文之事者。荀子之言也。仲尼之徒。
無言桓文之事者。孟子之言也。今孔子之所
親筆削者。春秋也。與門弟子講論者。論語也。
家語也。春秋爲書。半齊桓晉文之事也。二語
數及管仲。雖有斥其瑕疵。而許其仁大其功。
言管仲者。廼言齊桓者也。何二子誣孔子之
至此。周室衰弱。不能自奮號令諸侯。諸侯縱
肆。而不知所尊奉。若於此時非齊桓之舉。不
知如何處之。將入周告卿士。正其典禮。振其
紀綱乎。豈有非其人而能成其事者哉。然則
退在諸侯之位。日長其僭亂。拱手視周室之
顚乎。將觀周室衰弱。諸侯縱恣。爲奇貨可居
哉。是三者已不可爲。則唯以己之力。抑僭亂
討不廷。以尊王室而已。已而解權天下復亂。
拘者譏手援嫂之溺曰。何不揖讓援之若悅
其言之美。託之其人。屍已歸海。儒士以迂被

兩國風習

俗士侮。良有以也。故桓文之事。衰世不得已
之事。何嫌二日。本邦天子一姓。公卿大夫至
諸士農官。巫醫曲藝。亦多世其家焉。是以廢
立進退。最爲重事。雖世家乏人才。流風典故。
以此而存。且以杜窺望之心。風之美者也。讀
彼漢史。入主朝納后妃。外家夕跋扈。其害及
于上下。至有欲立其子則殺其母以防禍者。
悲夫。今也
王宮　在京。　幕府居東。結昏京師。與
國幾二百年。不見外家顚沛之變。於是知
東照公洞視後世。杜微未然。垂準萬世。天下
不知不識。沐浴恩澤。且觀兩國之風習。彼長
于敢諫。我長于敢死。彼人犯顏直言。無所顧
忌。殺戮接踵。視死如歸。我風大讓之。雖然以
係累爲辱。直諫不可已。則自裁報國家之恩。
或姦佞在君側。將擾國事。忠志之士。奮然不
忍視其傾覆。手及其賊。直自裁以償犯法之
罪。比彼直言罵詈其賊。以受誅。死而無益。則

勝遠矣。彼雖長于敢諫。忍垢亦甚矣。以我風習。則人雖有醜行奸凶于其躬。而稠人廣坐。誼不受其惡聲。是以勢面辱不行。不能忍垢。教多鈌鈌之行。爲君子所卑。蓋觀彼之古風俗敦厚。以恥爲大。周衰而法律興。終係累大臣。囹圄親戚。再起之。則繕衣冠以從事。如我士風。一旦遇大辱。雖死義不立人之朝。本邦中古傚彼用律。然風習敦厚。保合大和。彼也、古封建而今郡縣、我也、古郡縣而今封建、封建之治、雖急猶寬厚、郡縣之治、雖寬自急迫。又勢也。我居封建廢律地。思郡縣用律地大不願其地焉。墨劓剕宮。苗氏之所設。歷世不已。漢文已來。漸而已矣。可以爲美焉。然後人猶有肉刑可復之論。有有苗氏之徒也。宮刑雖有苗不施之於無罪。後之王者。既淫其刑。而愍其無以生。使墨者守門。劓者守關。宮者守內。刖者守積。意盛世常人之所司。若有刑人。雜用之而已。齊桓好內。豎刀自宮以進。以

亂。齊及漢武游宴後廷。始置宦官。禍釁一開。石顯流禍。經東漢及唐明。賢智方正。皆受其災。刑本懲有罪。其弊終執無辜之民。搜其陰器斷之。既而稱刑餘。視如非人。士流不齒。上刑無辜之民。士惡無罪之人。相嫉相激。崑岡之火。玉石幷灼。其憂豈啻內外焉哉。本邦從古。老嫗監宮中。老臣守宮外。官有內外。人無內外。左右卽士大夫之子弟。於是左右之臣。可出以爲將相。將相之子。可入以侍左右。故外臣可以知君之起居。外臣可以慣君前之儀。豈尚得惡之。何得賤之。天地全生之。已毀用之。自釀半身不隨之病。違天之罪。禍至顚國家。而不悟。立準之非。猶不改其舊風。悲夫。蜻蜓之一洲。雖一小壤。天險不可踰。則國無邊徼之警。上戴無始之帝統。則塗無深文之網羅。治日常多。亂日常少。而猶沾沾曰華華。且前數事。若無于彼而有于佗。則彼必彈指曰夷夷。是以我愛此日出之處。曰君子之所

利害勞逸

居而仲尼欲梓子路欲從者非此壤其孰與樂土樂土我得其處

治亂第十

天下皆欲治惡亂而治難興亂難已何邪凡事有利害有勞逸利逸者人之所欲勞害者人之所惡欲惡與愛憎隨此人之所以歸德避暴也過逸則荒弛生焉長利則爭奪興焉是所以好人之德而自荒德避人之暴而自行暴也治亂均是情慾之感應也情慾可以和不可以傷可以疏不可以塞不和而傷之不疏而塞之何以得天下之心焉和也悅傷也怨順也喜忤也怒悅怨者情也喜怒者意也和順不由道雖取悅於人之私生怨於天下之公是故以道順人以德和人德莫大於安天下利莫大於利物欲安避危欲利除害惟欲自安者危人欲自利者害物是謂之私虞書曰罔違道以干百姓之譽罔咈百姓以從己之欲天下之情好同于我而用與我反

情慾意智

也我所好人亦好之我所惡人亦惡之我遂所好人失所好我推所好人遂所欲是以己好貨財人不棄貨財而和於己還以此爭己好聲色人不棄聲色而奉於己還以此爭故令天下見利於干戈則天下執干戈而起令天下見害於仁義則天下舍仁義而走或曰治國以禮放於利而行多怨苟以德爲政則如衆星之共北辰而弗之講利害之言士則不喜曰人之在天地情慾意智已修而用之爰有仁義禮樂仁義禮樂之於情慾意智猶精粲之於粟糲粟糲未始美修理而後美雖美自粟糲而爲美惡勞害欲逸利天下之通情也知天下之情而養天下之情今去民之所欲惡疇仁之慕疇義之榮疇賞之進疇罰之畏仁不仁者善惡之事得之於情慾之適否悅怨爲主安衆則獲乎衆未聞不仁者而獲乎衆是非君子之取悅於人矣人之悅之也非遠怨怨不生也義不義者是非之事得

之於意智之分辨。榮辱爲主。棄於世則辱。未聞義而辱於衆者。是非君子之求榮於人矣。人之榮之也。非避辱。辱不至也。利之不以義。逸之不以道。惟可欺碌碌而未能易榮辱焉。故榮辱之道。未可以悦怨決之。是意智情慾之別。悦怨榮辱之分也。孔子屢稱智。夫人孰無智。智有明暗邪正。智而明正。君子之智也。智以生義。由義制禮。情以生仁。由仁作樂。禮之序。樂之和。百行之美。統之則仁義而已。若除利害欲惡。別求仁義。將棄粗糲而求精粲。利用安民。萬世之所賴。利以利天下。業莫大焉。慾以安衆。志莫美焉。仁義禮樂。大業美志之具也。業能安衆。德能濟物。利害勞逸。以爲之地。芮良夫曰。夫利。百物之所生也。天地之所載也。王人者。將導利而布之上下者也。不布利而專利。周厲之所以亡也。子適衞。冉有僕。子曰。庶矣哉。冉有曰。既庶矣。又何加焉。曰富之。曰。既富矣。又何加焉。曰。教之。哀公問政於孔子。孔子對曰。政之急者。莫大乎使民富且壽也。子貢問政。子曰。足食。足兵。民信之矣。冉有之言。志使足民。欲俟禮樂於君子。故詩曰。飲之食之。教之誨之。今經生言利則忌。言慾則笑。利以利己。慾以欲私。是爲小人。利以利物。慾以欲道。堯舜亦如之而已。楚王失弓。楚人得弓。孔子猶惜其私。仁者以濟物。豈仁者害物損用者哉。孟子謂仁曰。老者衣帛食肉。黎民不飢不凍。養生喪死無憾。故曰。民無恒產。因無恒心。苟無恒心。放辟邪侈無不爲也。管子亦曰。倉廩實而知禮節。衣食足而知榮辱。勢自利害勞逸動。故租税重則民去農桑。玩好競。則民走淫技。於是國家貧矣。上之於下。猶手之於指矣。可以亂。可以治。可以爲善。可以爲惡。詩曰。執轡如組。兩驂如舞。是之謂也。故除天下之害以利之。弛天下之勞以逸之。而後勸之於善。懲之於惡。逸而不勞。利而不害。則民安樂溫飽。民安樂溫飽。則竊盜

敎化

欺詐之心彊則廉恥慈惠之心生。然而民安樂溫飽則恭敬戒懼之心怠。恭敬戒懼之心怠則奢汰放恣之心萌養厥生而厥萌。敎化之道也。湯誥曰。若有恒性。克綏厥道惟后。故道之以德。齊之以禮。賞罰以佐之。夫人窮必甘死。苦則不厭辱利害爲勢也。於是縣賞以勸善。人不方善。縣罰以懲民。民不畏罰。是不養民情之弊也。故傳曰。禮先王以承天之道。以治人之情。今禁民之所欲閉民之所樂。契敷敎。皐陶作士。奚爲今不知仁義禮樂之所由而生。言利害得失則排。徒下令責忠孝廉恥。欲奉生喪死。是乃聚餒者。敎之讓食。呼凍者。勸之解衣。強不樂者笑。促不哀者哭也。子不見彼溺水者乎。自溺者。不顧父母。情無餘也。依升擧者。雖貓犬不睨而過。有餘于情也。雖有有餘不足于情。情豈異哉。勢不同也。均是水也。或不動壓。或崩岸。均是矢也。或不穿縞。或透札。勢也。故人之好

士衆之別

治好亂。好仁好暴。情同而勢異也。是故仁者。令人遂愛慾之正。是以獲乎衆。不仁者。遂愛慾之情於己。是以怨乎衆。智者。道衆之明於天下之意智。是以榮于道。愚者掩衆之明於天下之意智。是以辱乎道。是故欲國祚之長。欲天下之平。欲子之孝。欲臣之忠。湯武桀紂一也。其相反如此者。聖狂賢愚所謀之道弗同也。且士之於天地之間。仁以爲己之宅。義以爲己之道。然則繫馬千駟。非其所安。簞食瓢飮。非其所辭。是以子罕言利。故知命者。不以利害勞逸自謀也。是士之行也。是故學將夫人與士之行者也。非以士之行責之於凡庸者。政將夫人爲士之風者也。非以士之心望衆者。是以貧而樂道。富而好禮。遺逸不憾。厄窮不憫者。惟士能之。以士之能。求之於天下。非馭衆之道矣。故行之不修者。吾人之恥也。以士望衆者。上者之不智也。是以治之始。省費除冗。抑奢制分。斷賄賂。務民業。伸屈達

鬱遠怨宅安。絶者接焉。困者振焉。窮者通焉。獨者合焉。疾者養焉。孤者育焉。幼者慈焉。老者敬焉。而其功成于舉賢用能。於是揖讓之風可行焉。絃歌之聲可聞焉。士風可興焉。是固國基也。是結人心也。是建大命也。是永天命也。是之謂仁義。天下孰肯捨仁義而好亂。

仁義第十一

治苗之道。耘耔灌培。耘耔灌培。由生枯茂瘁之故。得之。治人之道。仁義學禮。仁義學禮。由情慾意智之故。得之。好惡主情慾、思辨主意智。好惡生善惡、善惡者、悅怨之成也、思辨生是非、是非者、榮辱之本也。修善則仁、修是則義。善是者、其璞、仁義者、其修。故孔子謂善人不踐迹。亦不入於室。已將修之。將奚以修之。由學知之、以禮行之。蓋天下之事。莫不有則。隨則用器。智之能也。或曰。人之道通世皆曰。仁義禮智信。而子謂爲仁義學禮。似自造其言。如何。曰。善哉子之問。余待子以暢我懷。夫

以條理剖析天地者。不能拘成說。故其謂仁義。亦資天地而言。不合天地。則皆負罪。苟合天地。其佗不遑參考。且如仁義禮智信。亦非先聖之定目。畢竟五行家之末造而已。五行本民生日用之具。故曰五常。非德之目也。甘誓曰。威侮五常。泰誓曰。狎侮五常。樂記曰。道五常之行。及莊子素問等連出。虞書有五言之目。孔安國以爲仁義禮智信。無據。惟陸賈新語曰。天道調四時。人道治五常。董仲舒曰。仁義禮智信。五常之道。漢初已爲定目。既已爲定目。其佗道德。勢皆不得不統。此中亦非古意也。意五行者。流本于孟子四端說。補之以信焉。爾來班固白虎通。鄭玄中庸解。劉劭人物志。五臟五行。配當之言。雖然莊子曰。多方乎仁義而用之者。列於五臟。則戰國時既有是陋歟。韓子之徒。廼以爲人之性。蓋本之於孟子。雖然孟子則止仁義禮智。仁義禮智之目。又見喪服四制。曰。以恩理節權制。此說

仁義

未知與孟子孰先後。雖然。孟子亦或有所承焉。仁義連稱。於詩書論語。未嘗見之。蓋周以前道德之目未立。專奉天而不自肆矣。故尊之爲帝。以所成。爲所受。呼之曰命。故賞罰與廢。一繫之於天。於是曰執中。曰建極。降之曰仁智。曰仁義。曰禮義。曰智仁勇。漸曰仁義禮智。漢以來定目於仁義禮智信。擬四時土用。擬四方中央。古之學。目相比列。或曰道德仁義。或曰道德仁義禮。或曰孝仁禮義。或曰仁義禮智聖。或曰智仁聖義忠和。我曰仁義禮智聖樂。若此道條理一定。如春夏秋冬。如晨昏晝夜。則有定乎上古。難動于輓近。而仁義之字。定於孔子以後。而今不可移易。猶天地圓形。定乎後世而不可動焉。東厓或譬諸醫之對病處方。最爲痛快。於是知導衆則曰。孝弟忠信。敎弟子則曰。文行忠信。於樂則曰。中和祇庸孝友。其數之更僕不盡。是皆對證之藥方。故管子治國。則以禮義廉恥勵之。孫子治軍則以智信仁勇嚴御之。中庸序君臣。父子。夫婦。兄弟。朋友。曰智仁勇。孟子序父子。君臣。夫婦。長幼。朋友。曰親義別序信。古人之活套可觀矣。仁義相連。易翼爲始。今仁義之字。自條理索之於善惡是非中。獲之於是仁義外無佗物。非學不能知仁義。非禮不能行仁義。學知之於天人。禮修之於言行。學卽智之事。則以學解智亦通。雖然舊套之合否。條理不與一任旁觀之人。如論語通篇言仁必連智。禮傳言禮必本義。冠義冠禮。昏義昏禮。鄕飮酒義鄕飮酒禮。鄕射義鄕射禮可觀矣。故傳曰。禮之所尊。尊其義也。智者。本心之靈。具邪正而有之。與仁禮義三物異。惟學而得其正。始以配仁。配仁而後。由智而慮正。由義而事當。嗚呼人悅怨榮辱之心。不可廢。則是道宜有所擇。宜有所修。故依天地之條理。從心性之故。修我道德。以爲仁義。學者。知之之設也。禮者。行之之設也。智本情之偶。賢愚利鈍

學禮

各有情者自然之性。智者使然之心。使然者。能修其自然者。情修有仁之名。智慮有義之名。孔子數稱仁智者。仁之德。智之性。君子所以君子。在此也。以予觀之。連智曰仁。對義曰仁。其主不同。連智之仁。主行而言。對義之仁。主善而言。子思承孔子。加之勇者。爲智仁勸其勉勵也。故中庸生知學知困知歸之知。安行利行勉行歸之行。而曰。好學近乎知。力行近乎仁。好學力行。非其至者。故不直以爲仁智也。後人配當之病。痼乎內焉。是以仁義禮智同於春夏秋冬。是以各思想按排所爲仁義禮智者。以建其道。若探諸天地。而求於條理。則智者情之偶。而義者仁之對也。仁者情之修也。義者智之修也。非禮弗行。不學弗知。弗知則何行。知而行之。仁也。故知以學。行以禮。匠之爲方圓。必製規矩用之。君子之爲仁義。必設學禮用之。學教之於始。禮修之於後。子貢曰。學不厭。智也。智不可用璞。學之所有

也。情不可徑行。禮之所有也。夫智者兼思。周公思兼三王。施四事。其有不合者。仰而思之。夜以繼日。管子曰。思之思之。又重思之。思之而不通。鬼神將通之。是思之有益于人者也。惟思而不學。思無益。故孔子曰。吾嘗終日不食。終夜不寢。以思無益。不如學也。故雖好仁也。雖好智也。雖好信直勇剛也。不學則蔽。夫欲生欲安者。人之本情。謀生謀安者。人之本慮。非必賢愚異思焉。惟愚者不知安之所在。以危自安。不知生之所在。以死自生。智者知安者而安之。知生者而生之。是非謀之異也。學不學之間也。不知安之所在。故貪生求利。不知生之所在。故畏死避害。情慾之性。實也。質也。自然也。不教而爲。不學而能。意智之神。華也。文也。使然也。教則益。學則進。故君子不貴性而貴學。學者道之所在。性者心之所存。人子有孝心。故有孝道。人臣有忠心。故有忠道。從孝心。則未能全孝矣。從孝道。則其孝遂

焉、是修孝也、從忠心、則未能全忠矣。從忠道、則其忠得焉。是修忠也。愛憎慾惡。殺活予奪。修則皆可用。不修則皆不可用。說命云。典于學。其德修罔覺。非學無以修聰明。聰明已修。故觀則正。觀則正。故常變由禮。禮已修。莫往不適。故學禮者、情智之修具。仁義者。善是之修名也。夫情慾意智。禽獸與我同有之。同有之中。有無于彼而有于我者。是人之與物之所以異也。好惡同有之。而善惡則我有之。思辭同有之。而是非則我有之。善惡感應、而悅怨出、是非運爲。而榮辱成。情苦于惡、智苦于辱。夫善惡悅怨者、情也、禮以修物則仁也、是非榮辱者。智也。學以循則則義也。義者。常而持正。變而從宜。由義知禮。以禮修情。夫禮者。自人情出。以義裁之。敬以居之。文以行之。以讓爲主。以和爲本。正名定分。防未然。其有所不及。法令以正之。夫人情不修則荒。荒則淫。淫則亂。道者。所治亂者也。治亂之道。在修之。

禮法

禮者修具也。故總言之。刑政樂學。皆禮也。分則有節目。夫人情者。在感應而不在思辨。思之辨之。則喜怒愛憎哀樂欲惡之間。不可徑行矣。義以裁之。故或引情之所不及而伸之。或抑情之所有餘而斷之。於是。或舍身。或加服。或殺恩。或制愛。以從宜。毋不敬。則其爲也誠。文或飾之。或節之。於是行。則煥乎成章。止則有限不踰。凡人情。好生。好安。好利。好勝。好譽。好美。推生於人者。愛也。推安於人者。勞也。推利於人者。廉也。推勝於人者。謙也。推譽於人者。恭也。推美於人者。巽也。盡誠推之之謂忠。自慮體人之謂恕。不推則爭。爭則亂。推則讓。讓則和。和而不同。雖久奚弊。正其主。而其名正矣。名正而分定矣。下窺上。幼凌長。由名分之不明焉。故禮者防患於未然。向有一先生。其論喪引法令。論犯喪禮之刑。孔子曰。道之以政。齊之以刑。民免而無恥。道之以德。齊之以禮。有恥且格。我聞有喪制。未聞有喪刑。

禮之所不及。立法刑之。犯法者見罪。法之設也、棄禮者蒙辱。禮之設也。故禮曰制。法曰立。法之所立、犯之者有罪。是非有所恥而不爲、有畏而避也。禮之所制、棄之者非人。是非畏而避矣、有所恥而不爲也。禮之入人深矣。變禮制爲法令。後世之所以刑繁而無恥也。以法令說禮。固矣。學者所以長智也。苟無意智以思慮分辨。則我必欲生。欲安。欲勝。欲利。欲譽。欲美。直情徑行。無所顧焉。而衆怨興。欲人之悅。而不思辨之。則活不可活者。安不可安者。勝不可勝者。利不可利者。譽不可譽者。美不可美者。姦曲邪佞。足恭諂諛。自是生矣。既爾不可爾者。則又不爾可爾者。雖如姑適其情。而不平於通天下之心也。智愚者人之天性也。智者、知安而安。知生而生。愚者不知安而危。不知生而死。先聖爲之興學。啓其智而辨可否。制禮。修其情。以中適否。賢者安。不肖者亦安。智者生。愚者亦生。故道非强才之所不及。而學勉智之所可進。於是曰詩。曰書。曰禮。曰樂。皆仁義之事也。故仁義雖由心性之故。成于學禮之修也。學以知之、禮以履之。愛憎欲惡。殺活予奪。於是乎修。匠之道必據規矩。以規矩爲器。纔有失其正。則不持規矩者。皆見其不正。雖見不正。無規矩者。無知其不正之所在。學禮仁義者。道之規矩也。故學禮仁義。聖人琢璞爲玉。世爭道德之出天出人久矣。夫直圓者、天也。規矩者。人也。由直圓以製規矩。由規矩以徇直圓。詩曰。天生烝民。有物有則。民之秉彝。好是懿德。故義者、可寬、可猛、可愛、可敬、可進、可退、可取、可予、仁者。寬適。猛適。愛適。敬適。進退適。取予適。故自可不可而觀之、仁乃義也、自適不適而觀之。義乃仁也、知之者學、行之者禮。是故孔門問仁。所答各異旨。而皆仁也。猶問孝所答不同。而皆孝也。後世欲以仁義禮智信截然而說。各由其目。作其詁。不能不致支離也。顏子問仁。孔子

答以克己復禮。問仁答禮。不亦似違乎。仲弓問仁。孔子答以大賓大祭之事。賓祭非禮而何。仁者善也。人情之所適。以禮行之。孔子何罕言仁。罕言仁者。以雅言詩書執禮也。後世教化荒而禮不行。遺經相傳。義理相繹。於是漢儒之詁。宋儒之理。勢之所至。各有所長。各有所短。伯夷潔身遁世。管仲甘辱立功。微子則去。箕子則奴。比干則死。孔子同謂之仁。學不厭。教不倦。又以仁智稱。於是詁與理。不能不病其支離焉。蓋仁非一德。禮非一道也。是故自人情適否之境、善惡之分、而觀之、莫重於仁、自事宜當否之境。是非之別。而觀之。莫重於義。學乃其門、禮乃其路。入不由其門者、非居人之室者、行不履其路者。非爲人之伍者。雖有偉材奇能。而奚爲。而仁弊于柔。義弊于俠。禮弊于煩。學弊于爭。是故古之學也、將益其智、今之學也、將鬭其智。是以人之學以益智。以修身、以馭人。馭人之道、難按圖求驥、修身之道。難從意之所適。得之於學、行之於禮。修于身而身安。修于國而國治。故以禮謂之先王之禮。猶可也。以義謂之先王之義。過於好古。失徵於天地。吾寧失於好古。勿失諸天地。

贅語五善惡帙下

贅語六天人帙目次

贅語六

天人帙上

日本　鎭西　三浦晉　安貞　著

以思以學、智之事也、由禮由義、行之事也。吉凶得失。無非天人之事者焉。苟不明天人、則罔於鬼神感應。罔於鬼神感應、則失於禍福報應。失於禍福報應、則有以得乎行。而於智則未也。天無形象之可認、而人有窺窬之爲城郭。條理之分。不明于世。魑魅伏于曖昧之窟。曖昧之窟不可塞。則魑魅亦可共天地罔極。雖魑魅共罔極。而天幸假明。得照魑魅之窟者。宜得其可疏者疏之。得其可啓者啓之。是率衆者之道也。故學者智欲於宇宙無弗盡焉。行欲於人事無弗慊矣。然後天命可語也。孔子曰。不知命。無以爲君子也。

天人訓

天神　人境

精沒爲天、飽露爲地。沒者活焉、露者立焉。活則鬱浡乎、立則混淪焉。於是天能成神、地能沒天。活立不二、神本合物、爲成開一。天神反態。蓋天者有者、神者開者。天有於緯、而成於經焉。神開於緯、而爲於經焉。緯者乃德、經者乃道。有而開、則見天神於德、爲而成、則見天神於道。是故有、則能成宅而居、而其爲宅、閉其室於幽、開其戶於明、開則能爲路而上、而其爲路、變其機於妙、定其跡於誠。蓋其於露體立天地、性見陰陽。天地給資、陰陽絪縕、生化生於其中。分動分植、雖以相有、各成其一、而以相開、各立其二。故植、資于本氣、而成于無意、動、資于神氣、而成于有意。是以人者、萬物中之一物、意者、萬神中之一神。自天觀之、不過大倉之一粟焉。雖然、我己開我境宇天席地。盡取萬物、以具我之用、則天地遂入我之器。其以既入我之器、迷者以爲供我。苟駕

天人　人物

此以往子子我。則必意水爲子子生盜賊我。則必意苗爲盜賊有。故雖父母生我、我非父母、雖天地有我、我非天地。於是天人分境。彼此張勢。故天神活於天地、物居于天、意遊于神。己開己之天地。則給資絪縕。爲成有開。有于彼者。有于我。而有于我者。反于彼焉。於是天德無意、人德有意。天道成焉、人道作焉。故天、則公而誠焉、人則私而僞焉。人懷其私、故公之法天、含其僞、故誠之法天。然而其公私誠僞。非自天觀人者。則聽之譊譊焉。有意、則觸而向焉、有作。則謀而營焉。無意則不用向、是以、莫所不向矣、有成則不用作。是以莫所不爲矣。有向者、不能不遺所不向矣、有作者。不能不餘所不作矣。不察其所反。以在我者窺天。譬猶曰夜猶晝。夏猶冬也。是故有己而觀反於己者。則以知非己者。舍己而體反於己者。而反觀己。則以知己也。禽獸魚鼈、亦有意而作、人之屬也、然意無神靈之用、作無

禍福

鼓舞之巧、所以如此蠢然也、艸木土石、亦無意而成、亦天之屬也、然各私其體、是以止於己矣、所以如此頑然也、是乃物之天人也、有意不能自贍、取物以自給、哺餌之養、巢窟之營、禽獸與我同有之、人者有意之長、神靈其用、鼓舞其巧、是故山海藪澤、禽獸艸木、水火金石、糞壤臭穢、隨有而取以自奉、有之則富貴、失之則貧賤、故有主制之、有臣承之、是乃我之所以異於禽獸也、有意之目四、曰情、曰慾、曰意、曰智、以此爲其愛憎欲惡殺活予奪、禽獸與我同有之、人者意精于慮、智明于辨、情有所節、慾有所文、是我之所以與禽獸不爲伍也、情有愛憎、慾有欲惡、思爲喜怒、慮爲憂樂、愛欲喜樂、意觸而順也、憎惡怒憂、意觸而忤也、然而天有死生通塞、人有殺活予奪、順則思之生、思之通、謀活之、謀予之、逆則反之、然而死生通塞之命者、天成、殺活予奪之命者、人制、是事之天命也、生通活予者吉、遇

有意
無意

吉曰福、死塞殺奪者凶、遇凶曰禍、人莫不爲天莫不成、故爲成相遇、或吉或凶、若市人之迭面、夫人好善、同情也、愛己、各情也、是故欲福於己者、人之各情也、欲福於善者、人之同情也、於是欲惡有主客、而公私分焉、是以福善禍惡、出人之同情、禍善福惡、出人之各情、善之福、惡之禍、遇順于人意也、善之禍、惡之福、遇忤于人意也、是故福會于意之所觸而順、則以爲當然、會于所觸而忤、則以爲命、然則理以福人、命以禍人乎、天以無意分、人以有意分、故我之所欲、天之所成、不必同行矣、天無意于吉凶、人有意于邪正、正遇吉、邪遇凶、是與理合、故曰理、正遇凶、邪遇吉、是與理背、故委天、是故善惡可講、吉凶難預、是以君子不以易險改行、不以窮達變守、夫人己各私其體、視聽思念、各有所向、趨舍嗜好、豈同焉哉、既己不同焉、豈使人人見己之所見、思己之所思哉、是以甲愛則乙妒、丙憂則丁喜、

是所以各體有各用。各用有各情也。是以天其果有意歟。善降之祥、惡降之殃而已、人其果同情與善皆向之、惡皆背之而已、故以無意爲有意、則有怨于天、是之謂惑、以各情欲令同之、則有尤于人、是之謂誣、使天有意、則謂之人可也、使人有成、則謂之天可也、以人說天、以人觀天、是以、此合彼乖、彼快此憾、天以死生通塞、成其所爲、人以殺活予奪、爲其所成、是天人之存于禍福也。意有向背、爲有得失、故向善則忘不善、向惡則忘善、意將利之爲更害之、意將害之爲更利之、爲出意外。善惡利害。反我所向。是天人之存于意爲也。是以爲善無意于善、之謂忘、爲非無意于非。之謂過。有意于惡、而掩惡、之謂慝、有意于善。而怠善。之謂棄。

主宰第一

或曰。條理之言。不知有稽之於古乎。未然乎。晉曰。條理之言。徵之於天地。於稽則通之於古今四方。曰。然則子將通聖凡一之與。曰。觀于天地者。其設意不可如是。請嘗言之。夫天地大矣。古今悠矣。蓋世人爲學。非就漢典講。則從梵文修。雖有區而別者。不過斯二途。故今之所謂古也者。漢土之古也。故觀于天地者。須無首丘之戀于漢典。無左祖之心于梵文。觀于二教未到之地。立列聖未出之前。通智愚考聖凡。條理之觀。不執一以廢一。何則其所謂聖也者。以有凡而立。猶有負者而後勝之名立。故勝之道。考之於負。聖之道。察之於凡。故既曰稽之。必通之於古今。故觀于天地之則。反觀合一。依徵於正。上師天地下友聖賢。觀天地以至人。不自人泝觀天地。忘守禦護訐之態。人雖睿聖。既已人也。則不及天。故我師天地。人雖聖賢。既已人也。則與我爲徒。故我得友之。凡則與我爲羣。乃我等之人也。聖則拔萃出羣。今我與凡相羣。與凡同居。於是知聖之所聖於凡。知凡之所凡於聖。則

於講稽奚隔。友之終不能及。磬折事之用魯男子學下惠之法。不貴如奴婢守主人之顧使。故雖日在其函丈。自天位觀其位於友。有天地而有人。故觀天地而至人。至人而講人。是以不得不與世之先遇先覺。講其耳目。自其圍中。觀天地者異焉。是觀天地之則也。觀天地之則。則姑置焉。世之以聖爲聖之意。與我同與。亦不可識矣。不知子之以聖爲聖。豈得非以聽莫所不聽。明莫所不視。睿莫所不通。智莫所不知。不思而中。不勉而至者哉。若如斯。有與我所望聖人不同者矣。是以車骨土羊。不知之。亦無害于聖。曰籩豆之事。有司存矣。亦何傷焉。唯視之以天下。聽之以天下。於是視聽達矣。愛之以衆。惡之以衆。於是愛惡正矣。非不思而中也。聖於思之也。非不勉而至也。聖於勉之也。故不自保無過。明於改過。非使衆皆善。能使善人進善。惡人不肆惡。是聖之所以聖也。至推諸一物一事之上。義

和垂夔。何必讓于堯舜。是故聖人非必能自盡天下之聽明焉。能用天下之視聽也。非必能手分毫釐。目察秒忽焉。能正律度量衡也。一正律度量衡。而天下之宮・商長短多少輕重皆得之。一用聽明。而天下之夷險憂樂利害得失皆得之。衆人之智。以己凌人。以利手巧目矜之。以能察博辨衒之。雖鈎奇入幽。安能通之於天下。昔者舜稱堯德。曰稽于衆。舍己從人。若使堯無不知。無不通。滿朝出其下。則是舍所踰人而從不若己者也。堯雖聖。過於四凶。孔子雖聖。躓於三都。子曰聽訟吾猶人也。必也使無訟乎。樊遲問稼。子曰我不如老農。孔子不長於聽訟。而長於使無訟焉。稼不及于老農。長於治人。千金之裘。非一狐皮。先王之能。非一人才。雖聖所以取芻蕘也。是以我之立言也。徵諸天地。通之古今。聖人雖貴而人也。如奴隷奔走主人之顧使。不用魯男子學柳下惠之法。謂之達未也。是以觀于

學態

天地者。其稽也通之于古今。蓋世之學者之態。始染目於書册後推人於天地。稍發己之見。粘諸古聖賢。既立則招其說之侶己之意。占張本之地。牽拘附會。而爲我乃得聖人之意。雖然同異不相撿。以稽古爲誣古。吾之所

徵天

徵則天地。未全粘之於古。故一出一入。通觀古今四方。吾豈敢陵聖侮古。我惟徵諸天地。直言所見。不以我臆誣古聖。若有聖者興于世。以供之於芻蕘之言而已。聖人修道德。制禮樂。立法度。叙彝倫。不知不識。民受陶冶。熙熙焉雍雍焉。君子樂其樂。小人利其利。天下孰不敢尊親之。是乃聖人之稽于衆。取于人之所致也。若曰一事一物。無所遺。則恐非人之所及。若求聖於斯。是古非今。取于聖。不察于凡。不徵于天地。不講于條理。古之所不言則斥。佗家之所講則避。非目窺全豹者矣。噫隸文非蒼頡之舊。牛耕非神農之制。而無害于爲聖人。無害于異聖作。如通之於四方。則立教於一方。稱聖於其國者。亦不一。其道各知解之聚訟。亦不同。其見異同本同居。通于天地而取者。不以門戶爲取捨。舍斯道孰從。

天帝

客曰。唯。敢問。書稱上帝神后。詩曰小心翼翼。以事上帝。程子曰。天專言之則道也。以形體謂之天。以主宰謂之帝。以功用謂之鬼神。以妙用謂之神。以性情謂之乾。又道家之言曰。天非自天。有爲天者。地非自地。有爲地者。浮屠之說曰。佛身金剛能空一切相。成萬法智。而不能即滅定業。併考則諸家雖異旨。各有存主宰意。易傳曰。時乘六龍以御天。又曰帝出乎震。詩稱婦人之美。曰胡然而天也。胡然而帝也。動靜聚散。吉凶窮達。人不爲之爲之者。非主宰而何。曰神爲天成。見爲成。而爲有主宰焉。窺窬之事也。乾坤者卦之名也。準之於天地。則乾爲天。坤爲地。自是而萬物皆象之。易本書之名。自太戴禮曰易生人。後轉相傳以爲天地。於是不以乾坤專屬卦。終有以

窺窬

性情謂乾等之說。非古也。帝出乎震。齊乎巽。相見乎離。致役乎坤。說言乎兌。戰乎乾。勞乎坎。成言乎艮者。易家以八卦。定位八方。震爲春。兌爲秋。然則離夏坎冬。可推也。是言四時之令。令者。自帝出之故也已。天成而不搉。人作而不測。雖不測。而不能爭於成。故尊之曰帝。曰神。敬之。畏之。事之。帝名。考禮典。天王崩。措之廟。立之主。曰帝。故夏殷以前之稱帝。多爲王者之鬼之名也。故帝堯帝舜。非在位之日之稱。周制謚而後帝名廢焉。自秦齊之君。以此名勝王。始皇不稽。終爲在世之名。蓋古人。尊神如天。以天如神。故天亦稱帝。帝亦稱天。爾雅所謂。天帝皇王后辟公侯。皆君也。於是詩書之上帝。禮之皇天上帝。一也。書正義曰。帝者。天之一名。其義同矣。是以如在之於是。存殺活予奪之意。於彼天。敢自肆。蓋人之觀物。不能舍己。於是乎窺窬。窺窬者何。君子忠於君。則小人以爲將奪羣僚之寵。孝於親。

主宰

則以爲將衒鄉曲之譽。節用則意將積財。好施則意有所爲。大負於君子之所本焉。小人者何。反君子之名也。小人以所有于己者求諸反於己者。奚不差焉。如不舍小人之有外小人之行。則千推萬度。無益于知君子矣。今推人之有者。窺窬非人者。是乃推水度火。推夏想冬也。古人曰道。曰理。曰空。曰氣。未知條理之所剖析。從拈出而說。弗識孰父祖。孰兒孫。孰兄弟。孰夫婦。不亦麁乎。道與德偶。理與故偶。氣充於天中。空空於形外。故理者天中之理。非理中之天。道者天中之道。非道中之天矣。夫天人之別。有意無意之間也。天者以無意而運萬物於一中。人者以有意而制萬物於一外。是所以人用統紀控制。而天不用之也。於是人不能無主。有主則前後左右。殺活予奪。以控制之。乃人也。人情不能以其力賞罰其所愛憎。則意假在天之死生存亡報之。於是懸黜陟賞罰者。於冥冥中。是出人之

通情。非天之本然也。天德不遺、天道不揜、神莫不爲、天莫不成、人向背愛憎任己、而爲成則不能任己。故禍福不必與愛憎從。人觀常成不揜、與變爲不竊、而不能分明條理歸禍福報應於主宰。混兮粲兮、冥兮昭兮、充宇宙體事物。舍則能存、取則還亡。無轉持之而能轉持、無生化之而能生化。一乃然也。主宰者。位貴體尊、統之御之、制之役之、二之態也。己露二則可之貴、可之賤焉。一則呼之爲天地萬物之主、而不加尊爲瓦礫糞壤、而不加賤。美名不能贊之、醜聲不能貶之。故以宰制言天。以有意窺無意也。自卑望尊也。非天之事也。徐幹有言。事莫貴乎有驗、言莫棄乎無徵。徵者何。徵溺於水、徵焚於火也。吾言縱出入於古。徵則有矣。聖人之治。不易其俗、而疏其弊、以通其情矣。其物則禮樂也。禮以序之、樂以和之。賢智由之、愚不肖由之。其道莫尚也。而其事則馭衆之方也。是上帝之所以立也。

若從文生意。則天帝之狀、揚且晳焉。時乘六龍以御天。以此描其貌、則與龍頭觀音侶。其出乎震、戰乎乾。若以此指其方、則與金神遊行等。漢武時、亳人謬忌奏祠泰一方。曰天神貴者泰一。泰一佐曰五帝。武帝因立其祠長安城東南郊。是道家說泰一之始也。老子曰。不知誰之子。象帝之先。列子曰。有生者有生生者。有形者有形形者。有聲者有聲聲者。有色者有色色者。有味者有味味者。生之所生者死矣。而生生者。未嘗終。形之所形者實矣。而形形者。未嘗有。聲之所聲者聞矣。而聲聲者。未嘗發。色之所色者彰矣。而色色者。未嘗顯。味之所味者嘗矣。而味味者。未嘗呈。由是觀之、老列未言之。謬忌之杜譔明矣。釋氏之因果、見誠之不可揜、而屬諸有意而已。故彼亦以解脱爲上乘焉。曰。然則何以事物有紀如斯整齊。曰。主也者。有意之司。雖有控掣之權、衆之一隻。故若成者。二之天也。若爲者。二

報應

之神也。使然者二之力也。不得不然者二之勢也。所以然者二之故也。當然者二之理也。其體定、謂之天地。其用變、謂之鬼神。天地以鬼神活、鬼神以天地跡。如是而已。曰、然則擧善惡而無報應。昏昏倜倜而後已乎。曰、報者有意、應者無意。善惡者有意之事。禍福者天人之會。善則善、惡則惡、禍則禍、福則福、是應也。天之所不揜也。以喜感則以吉報、以惡往則以凶來、是報也。人之所不已也。譬如衡之持物、輕則輕應、重則重應、輕則以增報、重則以減報。天無意于輕重、故任輕重。人有意于輕重、故思增減。晏子曰、行者常至、爲者常成。故爲善則善成、非吉成也。爲惡則惡成、非凶成也。猶食蒜而臭、飲酒而酡。天之事也。積善之感、衆愛應焉。積惡之機、衆怨動矣。愛則衆向之、怨則衆背之。是天道之行于人者也。大禹所謂滿招損、謙受益、是乃天道。是之謂也。一善以一福報、一惡以一禍報、是銖銖小丈

天命

夫之爲也。以斯道望之乎天、誤矣。氣爲神也、天成誠也。觀神之跡、而不知神、故病鬼神。觀誠之成、而不知誠、故罔天人。曰、然則如何。曰、昊天曰明、及爾出王。昊天曰旦、及爾遊衍。請益。遂言曰、一者本然、二剖而一沒、二一中、是以擧足則一運一持、行則沒運持之間。物如此立、神如此運。未得其本然、竊窺天命。己擧足、則一運一持、執運說行、與執持說行、失偏於行、則一也。以天歸主宰者、執於使然、以天歸無識者、執於自然。同弗獲本然也。是以天地之分、以質之有無。天人之分、以意之有無。天神之分、以爲成。天命之分、以當遇。天命。詩書多謂天之命。孔子多謂天與命。孟子曰、無爲而爲者、天也。無致而至者、命也。夫人莫不爲、天無不成。所爲則殺活予奪、所成則死生通塞。神爲於成中、天成於爲中。譬如人之行塗。行者、行止急徐、遇者、雨暘燠寒。雨暘燠寒非我。故天也。行止急徐非天。故人也。行止急徐、

不能不遇于雨暘燠寒。雨暘燠寒。不在行止急徐之外。來則不能不當、行則不能不遇。參差其會。此故天者成人。命者。人之遇天也。天能自然、神能使然。非使然、則不能自然。非自然、則不能使然。是以。或意、自生自化、自動自止、或意。生之化之。動之止之。故爲天道自會、天道自運、者、則措其使然、宿因證果者。措其自然。終不獲其本然。今懸禍福於天。託賞罰於冥冥。以湯武桀紂則有驗、而執使者信、以夷齊孔顏則無驗。而執自者得。於是因果於不記之前。果因於不見之後。轉不驗以爲驗。亦執使然者也。殺活予奪之權。移于天下之好惡積久而人不覺其高。取久而人不覺其卑。雖人不覺高卑。而天則不揜焉。是以殺活予奪之於死生通塞。以天人之隔。或伴或離。故人不果於成所謀而爲、天無意于揜所謀而爲。夫醫者。愈病者也。人也。病愈者。天也。非醫也。是以。使醫期於愈病。則以人無天也。舍醫恃病愈於天。則以天誤人也。故醫雖能愈病。而病愈天也。託病愈於天。而絕藥餌則天不揜絕藥餌者。天無意于死生通塞。而成死生通塞。人有意于殺活予奪。而不成于殺活予奪。故以天爲理、即於非理而塞、以天爲有意則於無意而窮。以命爲自然則傲、弑父弑君、將不畏矣、以命爲使然則縮。見義不爲。見非不正。天下之事。果自然乎、應自治自亂、自生自化、奚以孳孳兢兢爲、果使然乎。擧賢黜姦。活人殺人。亦有使之奚以毀譽褒貶爲。噫。使天有意牽下、則信賞必罰、善榮惡敗、使天惟理之從。則善宜達。惡宜窮。若夫如是。樂天安命、不必待君子、修德行道。必在壟斷之人。天人之反。窺窬執偏。雖巧而非本然也。蓋先王之道、則馭衆之道、中人以下、不可以語上、故以禮樂而主如在、而與天命竝言者同歸、孔子之道。則敎學之道。中人以上。可以語上。故講天命也詳。而與如在者。其歸同焉。蓋天

知命

命者。爲成之會違也。無論于有無。而墨子任之於人。有無命之說。駁孔子者也。王充所持。謂壽夭貴賤。定于有生之初。故子胥屈原之死。適當宰嚭子蘭之讒。桀紂之命盡。適會湯武之當興。頗類浮屠論宿報者。僭墜自使之偏。是故其未得也。左則大澤。右則荊棘。若得之則左右之宜。爲者則機。成者則跡。不容意於機跡。遇天命之本然。於是昊天曰明。及爾出王。昊天曰旦。及爾游衍。

天命第二

按闕里誌。魯定公五年。孔子年四十七。初仕爲中都宰。定公七年。孔子年四十九。進位於司空。定公九年。孔子年五十一。爲魯司寇。同十年。孔子年五十二。齊魯會於夾谷。齊人歸汶陽龜陰之田。同十二年。孔子年五十四。齊人歸女樂。夫子去魯。由是觀之。孔子五十知天命之語。亦可識矣。蓋孔子。十有五而志於學。三十而立於其所學。四十而不惑於其所學。五十而有所試。而其所學不行。齒亦老矣。於是自知其天命也。後人不察。爲孔子天命之工夫熟此。若以此爲然。則後人不可企而及之事。天命之說。絕望閉口。弗講而可也。雖然。孔子曰。不知命。無以爲君子。又曰。小人不知天命而不畏也。夫命之知否。君子小人之所分。最爲學者之急務。豈可弗講哉。夫爲不爲者、在己者也、成不成者。在天者也。天者、無意而成命者。無致而至。

在厄

仲尼嘗在厄陳蔡。乃召子路而問焉曰。詩曰。匪兕匪虎。率彼曠野。吾道非乎。奚爲至於此。子路云。君子無所困。意者夫子未仁與。人之弗吾信也。意者夫子未智與。人之弗吾行也。且由也。昔者聞諸夫子曰。爲善者。天報之以福。爲不善者。天報之以禍。今夫子積德懷義。行之久矣。奚居之窮也。子曰。由未之識也。吾語汝。汝以仁者爲必信也。則伯夷叔齊不餓死首陽。汝以智者爲必用也。則王子比干不見剖心。汝以忠者爲

必報也。則關龍逢不見刑。汝以諫者為必聽
也。則伍子胥不見殺。夫遇不遇者。時也。賢不
肖者。才也。君子博學深謀而不遇時者衆矣。
何獨丘哉。且芝蘭生於深林。不以無人而不
芳。君子之學。非為通也。為窮而不困。憂而意
不衰也。知禍福終始。而心不惑也。夫賢不肖
者。才也。為不為者。人也。遇不遇者。時也。死生
者。命也。今有其人。不遇其時。雖賢其能行乎。
苟遇其時。何難之有。故君子博學深謀。修身
端行。以俟其時。子路出。召子貢而問焉。曰。詩
云。匪兕匪虎。率彼曠野。吾道非乎。奚為至於
此。子貢曰。夫子之道至大。故天下莫能容。夫
子盍少貶焉。子曰。賜。良農能稼。不必能穡。良
工能巧。不能為順。君子能修其道。綱而紀之。
不必能容。今不修其道。而求其容。賜。爾志不
廣矣。思不遠矣。子貢出。顏回入。問亦如之。顏
回曰。夫子之道至大。天下莫能容。雖然。夫子
推而行之。不容何病。不容然後見君子。夫道

不修也。是吾醜也。夫道已大修。而不用。有國
者之醜也。不容何病。不容然後見君子。孔子
欣然歎曰。有是哉。顏氏之子。吾亦使爾多財。
吾為爾宰。是孔門論命之最詳者也。是時孔
子窮。故曰。是乎非乎。卑語引弟子。子路信所
前聞。而未通。故以禍福報應。驗人之德焉。子
貢欲依窮達。而詭遇在天者。禍福報應。可驗
人之德。則有致而至也。窮達可以詭遇。則有
意而成也。二子者言命。顏子者不言命。務在
己者。是孔子之所欣然也。由是觀之。則君子
居易而俟命之意。夭壽不貳。修身而俟命之
義。夫子罕言命之旨。可識矣。湯誥曰。天道福
善禍淫。伊訓曰。惟上帝不常。作善降之百祥。
作不善降之百殃。咸有一德曰。惟天降災祥。
在德。是應我吉凶也。乃與前之為善者。天報
之以福。為不善者。天報之以禍者同矣。禍福
不自我。故曰降。高宗肜日曰。降年有永。有不
永。非天夭民。民中絕命。盤庚曰。我迓續乃命

于天。民絕。則曰降其不永。續則曰降其永。降果自人言焉。天何意焉。詩曰。下民之孽。匪降自天。是之謂也。遇有吉凶。分之則毀譽榮辱、死生通塞、爲有是非。分之則是非邪正。殺活予奪。遇者、天也、爲者。人也。爲而遇者、命也、成而當者。天也。夫人善則愛焉、美則悅焉、惡則憎焉。醜則厭焉。我不能遂所愛、則思佗之愛之、我不能遂所憎則欲佗之憎之。我不能賞之、則欲佗之賞之、我不能罰之。則欲佗之罰之、天下之同情也。是以。人以此心。望之乎天。於是。雖假賞罰愛憎於天以自慰。非命之本然也。詩曰。視天夢夢。既克有定。靡人弗勝。有皇上帝。伊誰云憎。誠之謂也。今有二人于此。甲擧善之得福、淫之得禍者、以證其說、乙擧善之得禍淫之得福者。以證其說。各有其驗而存。譬之是猶一曰人之生、屬噓噏、一曰人之生。屬飲食。其驗則各有矣。失諸偏則一也。天人之道。每不同矣。喜怒愛憎、黜陟賞罰、人之意爲也、死生存亡。窮達得失、天之爲成也。喜怒愛憎、有乎內、殺活予奪。行乎外。殺之則死、治之則生、予之則達、奪之則窮、殺之不死、活之不生。予之不達。奪之不窮。是天人之所以錯綜也。衆憎不許其惡、積愛不棄其善。於是。賞罰之權。則不獨君於臣僕。下亦有之。廢桀紂、奉湯武。是衆之賞罰也。然而衆望歸仁、衆怨積惡。天之成也。衆情推善、然勢不可擧衆情憎惡。然力不可勝。是人爲之不可抗天也。禍福無門。吉凶相居。不求而至者、天也、自取者。人也。吉可遇。則凶亦不可避矣。痛快之後。痛苦從。積慶之後。積哀應。是故福莫福於無事。禍莫禍於痛快。好無事者、動而無求、居而自適、從其處而樂、無所不安焉、而猶遇禍、仰不怍天、俯不愧人、不亦美乎、好痛快者。異於是矣。害人自利、危人自安、故其利者反害。其安者反危。至其取禍敗也。驚悔而不及矣。假令幸而免。惕若于畏途。故小人、行險徼幸、

成也辱身、敗也取笑、君子修己俟命。吉則榮身、凶則榮名。故禍福各有善惡、善惡各有禍福。故自我致者、禍福之人也、自外至者、禍福之天也。荀子曰。能爲可貴、不能使人必貴己。能爲可信。不能使人必信己。能爲可用。不能使人必用己。故君子恥不修。不恥見汚。恥不信。不恥不見信。恥不能。不恥不見用。是以不誘於譽。不恐於誹。天無意而爲、無作而成、故天不假修爲、人有意而爲、以作而爲。故不修不足觀。是以古曰修德。曰修道。曰修禮。曰修善。曰修身。曰修辭。垂髮垢面而箕踞。則西子不足美矣。鹵莽滅裂而耕稼。則沃土不得登矣。刀以礪利。玉以磨光。木以繩直。人以修正。善惡兼有。邪正竝發。不修則安得正。荒則孰得美。故古人喜則修喜。哀則修哀。言則修言。行則修行。文質彬彬。然後君子也。冠昏喪祭之義。衣裳堂室之制。應對辭令之際。進退升降之儀。禮義之從。多見闕疑。多聞闕殆。愼言行其餘。不及則企之。過則俯就。見賢思齊。見不善內自訟。是修之事。學以爲門。禮以爲室。詩曰。如切如磋。如琢如磨。是之謂也。是以子修則父悅、弟修則兄悅、是謂衆之所同好、子荒則一鄕惡。臣荒則滿朝惡。是謂衆之所同惡。孔子曰。君子之道四。丘未能一焉。所求乎子以事父。未能也。所求乎臣以事君。未能也。所求乎弟以事兄。未能也。所求乎朋友先施之。未能也。庸德之行。庸言之謹。是通天下之道也。子夏曰。事父母能竭其力。事君能致其身。與朋友交。言而信。則雖曰未學。而我必曰之學矣。曾子曰。君子攻其惡。求其過。彊其所不能。去私慾。從事於義。可謂學矣。古人之所謂學者。重在修身。可知矣。故大學之敎。以修身爲本。是以君子修己而不言命。其方在困厄。不問於彼。惟曰命也。故語曰。罕言命。非命以難言罕言之也。夫學者。求爲君子者也。求爲君子而弗講所爲君子者。則斷君子之道於

來者也。或曰。子貢曰。夫子之文章。可得而聞也。夫子之言性與天道。不可得而聞也者。何哉。孔子曰。性相近也。習相遠也。魯哀公問天道於孔子。孔子對曰。貴其不已。如日月西東相從而不已也。是天道也。不閉其久。是天道也。無為物成。是天道也。已成而明。是天道也。文章者。詩書禮樂也。孔子不任之性。而任學。不任之天。而務己。故其文章可得而聞也。言性與天道。不可得而聞也。子貢悦偶有夫子之語及性與天道。發此嘆也。後儒自誤解中庸以性與天道。為聖門第一義。以為以子貢之賢。猶難聞之矣。子貢猶難聞焉。而後生以為家常茶飯者何。

意為第三

往聖常敬天。曰。天。戒。曰天畏。詩曰。皇矣上帝。臨下有赫。監觀四方。求民之莫。書曰。天監其德。用集大命。是以視而言。書曰。無辜籲天。穢德彰聞。是以聽而言。上帝監民。罔有馨香德。刑發聞惟腥。是以聞而言。詩曰。帝謂文王。無然畔援。無然歆羨。是以言而言。詩曰。敬天之怒。無敢戲豫。書曰。皇天震怒。命我文考。肅將天威。是以怒而言。詩曰。上帝耆之。憎其式廓。是以憎而言。湯曰。爾有善。朕弗敢蔽。罪當朕躬。弗敢自赦。惟簡在上帝之心。又曰。克享天心。受天明命。易曰。反復其道。七日來復。天行也。利有所往。剛長也。復其視天地之心乎。是以心而言。孔子曰。莫我知也夫。子貢曰。何為其莫知子也。子曰。不怨天。不尤人。下學而上達。知我者。其天乎。是以知而言。子畏於匡曰。文王既沒。文不在茲乎。天之將喪斯文也。後死者。不得與斯文也。天之未喪斯文也。匡人其如予何。司馬桓魋欲殺孔子。子曰。天生德於予。桓魋其如予何。顏淵死。子曰。噫天喪予。詩曰。天保定爾。亦孔之固。又曰。神之弔矣。詒爾多福。是以酬酢而言。是如在之也。何以敬之於如在天。不言。四時行焉。百物生焉。無意

而爲。無爲而成。爲而不營。成而不揜。故奉之若之。曰奉天若天。蓋古仁義之名未立。專奉天。故其天命者。天之命也。故曰奉天命。曰墜天命。是以天字自帶公意。如多士所謂爾不克敬。爾不啻不有爾土。予亦致天之罰于爾躬。可觀矣。詩曰。維天之命。於穆不已。故君子則之。與一心專念無量壽佛。其撰素殊。衞靈公與夫人夜坐。聞車聲至闕而止。過闕復有聲。使人視之。遽伯玉也。伯玉蓋不以暗昧廢下公門。式路馬之禮。司馬溫公嘗云。平生所爲。未嘗有不可對人言者。是皆敬天者也。小人不敬天。故閒居爲不善。其不善不可揜。而欲揜之顯不爲之善矣。是慢天也。天不可慢。還自欺也。故大學所謂誠意亦不外于敬天。故奉此道者。戰戰兢兢。如臨深淵。如履薄氷。詩云。小心翼翼。以事上帝。是之謂也。泰誓擧紂之弗敬上天。曰。沈湎冒色。敢行暴虐。罪人以族。官人以世。惟宮室臺榭。陂池侈服。以殘害于爾萬姓。焚炙忠良。刳剔孕婦。其下續之曰。皇天震怒。肅將天威。敬不敬之間。如此而已。郊禘之禮者。報生覆持載之功。祭祖先之靈也。非爲上帝嚴然在上。與我喜怒酬醋矣。故其喜怒安危。以人而言。豈同於神將來。有風肅然者哉。書曰。舜受終于文祖。受終者禮也。文祖豈命舜哉。泰誓曰。天矜于民。民之所欲。天必從之。又曰。天聰明。自我民聰明。天明畏。自我民明畏。是以告伐紂於文王廟。而謂之受命。文考其意可見焉。啓伐有扈。夏人之怒也。鯀不得九疇。虞之不錫也。歸之於天者。不自私也。喜怒愛憎。人也。不之揜者。天也。以衆心之所向爲天。以誠言之者也。且帝之心簡湯邪。抑衆心歸湯邪。帝之心。怒桀邪。抑衆心棄桀邪。天地之心者。天地之心也。未嘗言若人心矣。書有言。天矜民。惠民。若隨文生意。當轗軻伶俜。呼天者。寧非邪。天若有善惡。有爲於酬醋黜陟乎。何奪顏淵於孔子乎。何

使鄧伯道無子乎。何使蜚廉後有天下乎。以言解意。於理乎戾。匡人圍孔子。孔子以顏淵爲死。則其狼狽可知矣。孔子曰。文王既沒。文不在茲乎。仁齋曰。文者先王之遺文。道之所寓也。天將喪斯文也。予不與斯道。既與斯道。予之生死。當從先生之道。匡人豈如予何。後死者。文王既沒。我將死。故曰後死者。若註家說。則死字無用。曰予。曰後人。亦可也。天也者。不以人爲者也。人以有意窺天。故以將爲欲傳者曰。孔子微服過宋。講禮於大樹下。桓魋欲殺孔子。拔其樹。蓋桓魋惡孔子。欲亂其講禮而笑其狼狽。故鳴殺孔子之聲。以試之。故曰。天生德於予。則彼豈亂予哉。是歸不憂不懼。綽有餘裕之德於天。而不自伐者也。不然則豈有欲殺大樹下人而拔其樹之癡人哉。解者以爲天賦德於夫子。故不能違天而害之。苟如此。則傍觀之言也。聖人者負德恃天。爲是不恭之言焉。何與彼陳蔡之厄。與二

三子論命者矛盾哉。或曰。孔子以不能自廢以自寬。昔西伯戡黎。祖伊恐諫紂。紂曰。嗚呼我生不有命在天。漢兵攻王莽。莽避火宣室前殿。旋席隨斗柄而坐。曰天生德於予。漢兵其如予何。是自寬。恃天者也。世咲紂莽之無德而恃天。而不知有德者亦不自爲有德以恃天也。顏淵死。孔子深傷之。自言是非天之喪回。卽喪我也。君子修己俟命。以其不出于人事者。歸之於天。若爲不然。則天亦行不慈於孔子。匡之畏。桓魋之畏。何知天之果護之哉。子曰。道之將行也與。命也。道之將廢也與。命也。天以有意命之。何將使道爲廢焉。故知我者。其天乎者。孔子由人之莫知而自明也。非天爲孔子作鍾期之謂焉。孟子過臧倉止平公。曰。行或使之。止或尼之。行止非人所能也。吾不遇魯侯。天也。臧氏之子。焉能使予不遇哉。是雖以人之不能爲天。以天爲使然。比之無爲而爲者天也。語意激言病。非孔子之

舊矣。彼讀詩書者。若隨言生意。是秦宓之論天也。

贅語六天人帙上

贅語六

天人帙下

日本　鎭西　三浦晋　安貞　著

作俑第四

仲尼曰。始作俑者。其無後乎。爲其象人而用之也。是孟子所載也。意夫子由語作俑者之無後。而宜其無後。而言象人用之之不仁矣。非始見作俑者。以爲將來無後。此蓋非聖人之至言。或以爲君子口無擇言。豈有至不至乎。是聖言之所昧也。割雞用牛刀。孔子賞彼之戲言。不忮不求。孔子有何足之語。爲善者。天報之以福。爲不善者。天報之以禍。夫子不重辨。孰知非至言焉。未辨其義。漫信聖言。其失與不信聖言或幾。越人臛蛇與鯉饗諸秦客。謂蛇曰鯉。謂鯉曰蛇。秦客乃舍鯉食蛇焉。是不知實。而以名漫信也。惟知至言而信至言。知聖言而信聖言。故士當愧不能爲風胡伯樂。故不逢名劍駿馬矣。不當自負風胡伯樂。恨不値名劍駿馬矣。昔在有子聞孔子喪欲速貧。死欲速朽之語於曾子。徵之於其制中都。四寸之棺。五寸之槨。其去魯之荊。從子夏冉有。不信爲夫子之言。有子之不信。是其所以深知聖人也。後世漫信仲尼。此豈眞知者。作俑之言。非夫子之至言焉。曰。有子固有徵。子何以徵之。曰。我徵之於天地。俑者象人用之。終開殉端。故天絶之。噫天之監下如是。吾何言。若以之徵天地。秦文初作三族之刑。秦武始用殉葬。言其瓜葛。齊桓晋文不能儔。

終有六國。而王四海。武文之罪。孰與作俑者。縱以作俑者。姑畏天。又以作刑殉者。大侮天。成季與共仲。功罪如何。而有後于魯。則同焉。故知是非聖人之至言矣。天之所以天者。其唯誠乎。言及禍福。非命之本然焉。謹按禮檀弓曰。孔子謂爲芻靈者。善。謂爲俑者不仁。不始於用人乎哉。不知同言而記者不同乎。抑有所爲而所言不同乎。檀弓所記。其至矣。

儒佛第五

識見之趣。好尙之別。並人面之美醜長短。何日同之。猶望並以一之。欲能造化之所不能於己。夸父追日。精衞塡海。自疲而已。人自奉其宗旨。致鬩爭於康衢。甚則欲擠大父膝上之子。入之於淵。夫天地者大矣。牛馬羊豕之馴擾。虎兕豺狼之暴戾。魚雁之肥。蛇蝎之毒。竝育。遂其生。世雖有小鬩。大端則儒佛之二焉耳。我意二家本無可爭者。夫儒者。後世誦聖人之道。而傳者之稱。其道則先王治天下之道。天下者。賢愚邪正。利鈍巧拙。聰明聾瞽。疲癃殘疾。艸竊姦宄。盡天下所有。而有之者也。王者子于天。宜以繼承其父。爲道。王者。子于天而父母于民。父母我者。不得非我之子。父母之於子。雖在規誨敎諭。而遊戲玩嬉。從其所好。人間有一種之道。能取人之感應。是以人爭歸之。則爲父母于民者。宜矯其弊疏其情。焉得撲滅之。苟謂聖人之道方正。無取斯。彼占贈夢。儺毆疫。人死則復。年旱則雩。大喪則方相氏。入壙毆方良。日食。則擊鼓而救日。置庭氏。射天鳥。置蟈氏。去鼃黽之類。豈開示正理。道民歸之於至當。於是乎。先王之治民。大似父母之育子女。天下之態。愚衆哲寡。欲以哲之耳目。易愚不肖之視聽。無轉造化之機軸之術。則不能焉。緇衣黃冠。非均是天子之赤子。而同遊戲其膝上者乎。何劃同一愛於赤子。若謂彼道蔑棄彝倫之故也。盍講明彝倫。示諸天下。彼爲修其道。絕俗累。彼何

敎不孝不順。故知黃蘗義渡之則。大名敎之罪案也。彼曰。非汝之所知。愈重其罪案。王者。爲蒼生治病之毉也。爲天下守財。以爲賑乏焉。是故有病天下之人者。除之。有靡天下之財者。制之。非以聰明道人。歸各好尙者。疏而通焉。佛本印度之道。抖藪人事。專修其心。因果爲張本。涅槃爲極致。貪則其所禁。嗔則其所戒。故佛於娑羅雙樹間。將滅。誡諸弟子曰。尊重珍敬波羅提木叉。曰。不得販賣貿易。安置田宅。畜養人民奴婢畜生。曰。一切種植財寶。遠離如避火坑。曰。不得斬伐艸木。墾土掘地。合和湯藥。占相吉凶。仰觀星宿。推步盈虛。曆數算計。曰。不得參預政事。通致使命。咒術。仙藥。結好貴人。親厚媟嫚。曰。不得包藏瑕疵。顯異惑衆。曰。如牧牛之人。執杖視之。不令縱逸犯人苗稼。曰。受諸飲食。勿生增減。趣得支身。以除饑渴。如蜂採華。但取其味。不損色香。曰。受人供養。趣自除惱。無得多求壞其善心。

如智者籌量牛力所堪。不令過分以竭其力。曰。若有人來。節節支解。無令瞋恨。勿出惡言。曰。不能歡喜忍受惡罵之毒。如飲寒露者。不名入道智慧人也。曰。汝等比丘。當自摩頭。以捨飾好。著壞色衣。執持應器。以乞自活。自見如是。若起憍慢。當疾滅之。其敎誡其徒此如。何其周密。若不如此者。已畔彼道。雖然。其敎漸廣。其徒漸衆。廣居大厦自居。錦繡輿馬相從其徒自有父子兄弟之倫。其等自爲尊卑品秩之位。占山川土田。非無爲出離之境。雖圓頂方袍。人間中之人也。一時之豪傑。或以果毅之質。掃滅之者。如逐飯上之蠅。其手一去。還聚如故。不過爲天下勞擾。自造化觀之。雖以聖人之化。不能絕亂臣賊子於將來。況乎。人情之所趣。爲城爲郭。抱畏怖心者。以畏怖心而化。有歡喜心者。以歡喜心而化。迷者。由迷而歸。悟者。由悟而居。彼本以空人我之相爲觀。以不諍爲德。欲報國王之恩。欲報父母

之恩。欲報施主之恩。亦天下之良民也。然彼
一時也。此一時也。若謂汝是苾蒭。宜著糞雜
衣。持應量器。在樹下石上。修道。土田財貨。非
所宜有。我逐爾。爾何生恚心。我殺爾。爾曷弗
忍受之。則欲使之爲其道之良人。己先爲堯
舜之罪人。父母謂褻。保子者。當暑宜易其絺
綌。是故今之處佛者。欲撲滅之。可謂無策。僧
徒雖自高大。己捨釋迦文之所教戒。受其地。
食其粟。依其階位。高爽室廬。畜僕從。同是王
臣。而人間之人也。模範之於王法。宜擇空人
我之相。有不爭之德。知報恩之所有。兼通人
間之道者。有所取捨于呲尼。安之於今之俗
蠱惑愚蒙。動搖人心。貪財貨。修飾己廬。拓封
界。害生民之產者。於我棄民也。於彼法賊也。
宜沙汰之。彼亦知所勸懲。若謂聖人之道。以
安衆治天子爲任。彼則厭棄人倫。別立無上
道。是修心之事也。修心者。安衆者。天地間應
有者也。謂不耕而食。不織而衣。以蠹良民。宜

善其所置保之。不可爲不能之舉。困膝上赤
子。佛誡墾土掘地。禪用劃頭事。以今之僧之
俗觀之。事宜然焉。亦是農之人也。若以識見
之殊隔之。同汲洙泗之流者。亦塗轍各異。使
天下之人。同其所向。一其所見。造化猶不能
焉。以造化猶不能者。欲行之於天下。我不知
其可焉。觀之於華。桃紅李白。楓葉蘆華。雖不
同其色。各可愛。觀之於味。梅酸梨甘。姜苦椒
辣。以異其性。爲其用。天地之生人。生信佛者。
生信儒者。則天地未棄之。天地不棄。而欲棄
之於己之所惡。見其量之隘。守門戶者。有護
訏之態。故以吾觀之。孟子譏楊墨。爲無君父
亦護訏之態也。譏禪者。以不立文字。爲話柄。
以吾言之。不立文字。豈惟禪家之一法焉哉。
彼不曰不用文字。曰不立文字。今夫兵家。務
讀孫武司馬法。其執金鼓臨敵。或犯忌取勝。
變幻出沒。不泥章句。故醫之對病閱方。讀其
能否。處方者。非良醫矣。故佛曰不立文字。猶

傳曰離經。我注心於天地。自幼至白首。世之學。雖多岐。皆提人觀物。於是造化在人中。反觀未得門。條理無所析。而實測未熟。唯依所見。佛氏。雖家學爲葛藤。至本來面目。唯彼家知之。本來面目者何。亦彼家言也。一元之氣。玄也。謂之玄。背焉。謂之不玄。觸焉。山青水綠。言之鳶飛魚躍。遲矣。若自三界唯一心中來。焉得還向條理上辨天人。若還向條理上辨天人。彼家學爲葛藤者。不辨而自解。自守門戶者。觀之。必曰有所黨。若達觀之。彝倫之道。有聖人。天地之實測。有西學。至見所然。唯有禪。我嘗有詩。曰。試傾天地捨是非。不覺鶻鵃與糢糊。是之謂也。今也四海泰平。澤及鰥寡。浮屠以瘞埋驗屍鑑異敎爲職。以餬其口。雖高其道。其所餬賤矣。　國家之法。可謂得養人之方。王者能處之。不糜財用。不作濫妨。宜置之優游之中。若以呲尼束縛譴訶之。亦惡佛之爲也。老子曰。治民如煮小鮮。治體然焉。故居僧綱率其衆者。導之也。宜警策之。期一跳而至保之也。宜存慈母含飴之思也。故造物之巧。雖識見之趣。好尙之偏。幷人面之美醜長短不同之。而好善惡惡之情。贊美辱醜之別。橫目竪鼻之面。人人不能異焉。彼曰各好尙。此曰大同。故王者之道。在大同。若析蠶絲。剖牛毛。規規尤人之不同于己。大不知造化也。

占兆第六

邾隱公朝于魯。邾子執玉高。其容仰。定公執玉卑。其容俯。子貢曰。以禮觀之。二君者。將有死亡焉。而魯公卒。邾子奔。孔子謂之曰。不幸而言中。是使賜多言。蓋周諸子。相人之死生存亡。是類最多。豈得無非所謂多言者哉。有射者于此。十發中一二。其中猶不中。人忘不中者。信中者。何足爲驗哉。昔與人適越。入其境。遇數眇人。不至而還。語鄉人曰。越人皆眇。我惡之。聽者皆笑。世之言占。言兆。率類此。卜

者。龜之兆也。筮者。蓍之數也。有事則卜筮並命。唐唐已然。夫卜筮之用。在決疑。故易非再筮。今卜筮並命。理與再筮同。以易辭斷之。則雖古難以爲是。是故晉獻欲立驪姬。卜凶筮吉。與不占同。於是獻公從其所好。卜筮不神可觀。卜筮已然。況讖緯祿命。風水相術。及妖祥乎。窺竊生疑。疑惑無所不爲焉。營營憧憧。壓禱賽祭。中爲術者之巧。不中爲主人之不信。以日月言窮達壽夭者。是邪。命繫日月。以墳墓言窮達壽夭者。是邪。命繫墳墓。壓禱者。是邪。命非前定。前定者。是邪。壓禱奚爲。惑者不覺其術之矛盾。東奔西走。唐德宗與李泌語。以術士預請城奉天。歸建中之亂於天命。泌曰。君相所以造命也。若言命。則禮樂政刑。皆無所用矣。可謂宰相之言矣。以全天地觀之。東家之西。乃西家之東。而武王興之日。乃殷受亡之日也。裴晉公曰。雞豬魚蒜。逢著則喫。生老病死。時至則行。可謂知矣。明謝肇淛五雜俎云。宋時一軍校。與趙韓王同年月日時生。韓王有大遷除。軍校則有一大責罰。小遷轉。則軍校微有譴訶。蔡魯公以慶曆丁亥。壬寅之月。壬辰之日。辛亥之時。而生。位極人臣。大觀改元丁亥。東都順天門內。貨粉鄭氏者。生一子。日月時。適與魯公合。及長鬬雞走犬。年十八。溺水而死。故祿命以軍校證之。則有鄭氏之子。明祖已登極。求與己同祿命者於天下。既得一郵卒。問之則云。養蜜十三窠。以自贍。於是遣之。昔者齊田嬰。以端午生之子長與戶齊。將不利父母。疑孟嘗君。孟嘗君曰。受命於天。君何憂焉。受命於戶。高其戶而嬰之多子。顯其父者獨文也。圖讖成於漢哀平際。因果浮屠所攜至。雖術異也。同歸諸前定者也。嗚呼。守節死義。前定則其忠不足賞。甘辱苟免。前定則其醜不足辱。仁義禮樂。盡爲廢物焉。宜哉。數之與道相乖。妖祥之說。自古有之。自人之通見成。非事之本然矣。箕子

述洪範曰。休徵。肅時雨若。乂時暘若。哲時燠若。謀時寒若。聖時風若。咎徵。狂恒雨若。僭恒暘若。豫恒燠若。急恒寒若。蒙恒風若。周官置眡祲。以觀妖祥辨吉凶。詩曰。燁燁震電。不寧不令。百川沸騰。山冢崒崩。高岸爲谷。深谷爲陵。哀今之人。胡憯莫懲。中庸曰。國家將興。必有禎祥。國家將亡。必有妖孽。故高宗之肜。雉雊鼎耳。周公之東。風拔大木。共所經見也。夫洪範庶徵。雨暘燠寒風。一極備凶。一極無凶。雖坐九重之深邃。審雨暘燠寒風之備無。徵之則豐險饑寒。可明知矣。故曰念用庶徵。而箕子以休咎。粘之於五事。而徵上之潤下炎上。下之星好風雨。皆同態。大開後世之禍。昔帝辛由瑞介雀而亡。大戊以妖生桑而興。由是觀之。將亡有禎祥。將興有妖孽也。若曰妖祥以人轉。則果人也。雀與桑。天何容意於禎孽。故禎孽人也。然則中庸之辭。亦溢於贊誠。更發人之惑。或問。荀卿曰。雩而雨。何也。荀卿曰。

無何也。猶不雩而雨也。故高宗之雊雉。猶野之雊雉。周公之風雨。何別於常風雨。雊雉風雨。事起於此。祖己格王。成王發書。所關大也。書者。史也。欲記其事。不可不敘其所由來。若歸之於天之有意。爲休咎之徵焉。何堯有九年之水。而紂無七年之旱。箕子之言。果不徵。發金縢之事。果出通態。故我則鳴鳥不聞者。周公之婉辭也。是故武王之伐紂。至汜而汜。至共頭而山墜。霍叔懼。周公曰。刳比干。而囚箕子。飛廉惡來。知其政。夫惡有不可焉。選馬而進。至牧野。遇雷雨。旗鼓毀折。散宜生欲卜。太公曰。腐艸枯骨。無足問。以臣伐君。豈可再乎。遂戰殺紂。由是觀之。洚水儆予者。舜之自責也。風雷必變者。孔子之盡敬也。不然則何一漢武而一出麟。一決河。何一黄霸。而或來鳳或生蝗。詩者。上出宗廟朝廷。下至田畯紅女。歌謠諷詠。優游厭飫。或比或風。或賦或興。古今一也。與記事不同焉。故彼麟鳳嶽神乙

鳥之類。粘之於實事。泥矣哉。夫日月交而食。山川鬱而震。草木結精而甘露生。駁氣凝形而異物出。氣氣之變化。豈有窮哉。災祥之說盛。而風雲雨雷之變。木石禽獸之異。盡爲天下之應徵。驛傳置郵。徒費民力而已。能主受空責。庸主承虛譽。多言雖或中。而不勝不中者之多焉。　國家不貴瑞物。珍禽奇獸。異木怪艸。籃籠自攜。爲市場之遊觀。可謂得體矣。或聞之曰。唉。如信子之說。六經猶可議而後用之邪。曰。於傳有之曰。擬之而後言。議之而後動。擬議而後可語變化矣。天下之事。必有理故。人之生。必有意智。非意智。不能以照理故。天下之物。必有感應。感應以觀理故。未可以理故觀感應也。凡觀物。在明物理。理不明。觀物誤矣。理者由故。繹故明理。萬物紛糅雜擾。不足以眩目焉。惟人情感應。不必順理行。若順理行之。則子行孝。臣行忠。臣子正宜忠孝。而未必能忠孝。於是觀理者氣中之理。而氣不理中之氣焉。人之爲神。情慾意智也。情慾以感應爲好惡。意智以明暗爲蔽悟。好惡在蔽悟之中。必有通見通態。出通見者。卓見也。出通態者。獨操也。卓見獨操。能知通見通態。能知通見通態者。不必以卓見獨操。誣之於衆。由通見通態。修飾治天下之道然。世之以聰明任者。多依理斷事。以理處物。以理斷事猶可也。以理處物。理得而人情戾。以戾人情者讀治人書。宜矣其不通。於是不回護則排棄春秋不爲五行志。則爲斷爛朝報。周禮。不瀆亂不經之說。則爲六國陰謀之作。請論一二。春秋二百四十二年。日食僅三十六。是曆官之失也。孔子修舊史。非正曆也。曆官之失。奚足病孔子。奚害春秋之美。詩曰。日月告凶。不用其行。彼月而食。則維其常。此日而食。于何不臧。是食術未審也。非日月不用行矣。亦奚病詩人。奚用回護。曾子曰。籩豆之事。則有司存。有司之事。及此可也。不及亦不傷。是

偏通

以日之食瞽奏鼓、嗇夫馳。時之相代變火以救時失、方相氏之索室毆疫人之始死上屋而復。豈可以理斷哉。可觀聖人不以聰明先天下、從通態以修之。曲禮曰、君子行禮。不求變俗。是也。故董仲舒雩設土龍以欲招雨、非先王之用心。是故今之俗。重陽則飲黃菊之酒、端午則食角黍之餅。豈獨信費仙屍鬼者爾爲。是以物不修則五穀不若荑稗。修用之則鳥啄人言足以除沈痾。全在用者之巧拙。是以人之好惡薇悟千古一也。周之禮由周之俗修。非以理裁之。以情治人也。達此而後六經可議。周公之擧可爲也。損益之道可識矣。故理不可不明。以理讀治人書於理弗蕊。若曰不然。無尸則祖先不可祭。不釁則宮室不可居。

鬼神第七

混淪者體也、體能具性、鬱渟者用也。性能運才、性己運才。有以知。有以通。名知者爲靈名通者爲神。己知己通。一一立也。一一己立。一感一應。感體曰神、應體曰鬼。蓋性者一也、體立一一、彼此相隔、體者二也。用運一一、彼此相通、神能發機、故變化不測、天能收跡。故定常不拚。混淪之間。天體動而變焉、其期定而常也、地體止而定焉。其期動而變矣。感應者、神通之事、天命者。天成之事。夫天成定常之宅、地爲變化之藪。自一感一應而觀之。則造化亦絪縕于其中。故一噓一噏日體南北。一南一北。地氣發收。發收之間水火動植。擾擾紛紛。變其物。變其態。其氣往來。感應無常。於是鬼神之用。大也。人遊于天神之間所成於天之誠、所爲於神之妙。洋洋滾滾。惟其間也」是以有人之域。無不設神道。雖設則設。而其撰則各異也。人巧之異也。同設之者。情感之一也。不能無者。體物不遺也。正與不正作者之巧拙也。蓋人以有意之作。望天神擬一物於冥漠。期酬醋黜陟之態於此。於是神亦人

神道

也。通天下皆然也。蓋神者。沒其物能體萬物。未能隨條理探之。以意索之。於是諸說。正非混淆。庸人惑焉。神之目三。天神地祇。人鬼。其設久矣。是乃所自人建者。非自條理來者矣。若自條理言之。則一鬼一神。莫所遺矣。夫人之所長於萬物者。以有仁義也。是以無報本反始之心。非人也。失廉恥之心。非人也。人之事君父。奉祭祀。謝恩感義。莫非報本反始之心焉。告之者。敬而不敢恣也。祈禳者。求于人而不得。望之於天也。自天地。曁人物。無往非感應焉。而其感應之態則從物而異。於是神與祇。一而二也。人之感應。鬼神存于活中。於是其活爲人。其死爲鬼。其義亦別也。天神地祇。人鬼。由人之所奉事而建目。若自天地言之。奉與不奉。無損益于感應。若自人言之。尊天奉神。報本反始。人之道也。神道之所貴也。

名義

古來稱神者。斥不測而言者。其正訓也。故斥不揜曰神。非其正訓矣。贅不測之態。曰妙。贅不揜之態。曰誠。斥靈處。曰神者。就其智而言。對人鬼曰神者。就非人而言。又有兼神鬼祇言神者焉。稱鬼者。對感而謂應者。其正訓也。對生而謂死者。亦其一義。斥怪物而言者。亦其一義也。故天神者。天地之誠妙。鬼神者。陰陽之感應也。易繫辭曰。陰陽不測。之謂神。說卦曰。神也者。妙萬物而爲言者也。是與天神之神合。管子曰。流行於天地之間。謂之鬼神。是傳所謂。鬼神之德。體物不遺者。程子爲二氣之良能。邵子爲無形有用。朱子爲陰陽之靈也。朱子所謂靈者。兼妙而言。天以不可揜、

祭祀

莫貴於誠、神以不可測。莫妙於神。不示人以聲色。使齊明盛服事之。異巧同情。天下皆然。夫人情。一飯思報之。況生育我。覆載我乎。況容而不揜。事公然。定其中乎。故報之以簠簋爼豆。事之以忠信誠慤。事父母而孝。事君長而忠。奉祭祀而誠慤。人之不可已者也。是故。舜攝政而類于上帝。禋于六宗。徧于羣神。望

體用

秩于山川。湯克夏。用玄牡。告于上天神后。武受命文考。類于上帝。宜于冢土。虞有秩宗。周有太宗伯。太宗伯所典。天神地祇人鬼之禮云。周禮官府之六職。曰。禮職。以和邦國。以諧萬民。以事鬼神。太祝掌事鬼神示。祈福祥。求永貞。帝也者。古後嗣王。斥先王之言。尙書可徵矣。終爲天之稱。故傳所謂郊社之禮。事上帝。宗廟之禮。祀其先。亦人鬼天神之謂也。蓋聖人之設敎。由鬼神以立人之道。夫鬼神之爲德。視之弗見。聽之弗聞。體物而不可遺。聖人能知其情狀。故其接鬼神。專盡人事。故祭祀祈禳。以人望天。非以天臨人。故樂記曰。明則有禮樂。幽則有鬼神。其所謂幽也者。隱見之地。明也者。所謂人事也。是故。物之可視也。可聽也。可測也。其明也。神之不可見矣。不可聞矣。不可測矣。其幽也。非條理所建。閉室之幽。開戶之明。蓋一之所成。性體也。性立體。而體用才。以體用之目。弗經見。儒先有排之者。

是以儒爲藩圍者也。目體用視。耳體用聽。水能濡。火能燒。日以照。影以蔽。觀於天地而有徵。那須彼此之藩圍。是故。物必有體。必有用。用則體之用。體則用之體。人以此神。用此軀。彼此隔體。愛憎欲惡。喜怒憂樂。或感或應。通酬酢黜陟。殺活予奪之用。若曰。除此而別有物。能視聽愛憎。以酬酢黜陟。其形狀若云云。則人豈不爲贅哉。此故天地者。所爲體。鬼神者。所爲用。鬼神體天地。天地用鬼神。此故。自設神道。而分天神人鬼。而其實則不同焉。

人鬼

蓋謂之鬼神。雖不待死而有者也。謂之人鬼。隔生之稱也。生化之道。雖有精麁。其事一也。精則一體不變。麁則鱗次換體。雖鱗次換體。雖一體不變。活自前來。化過前去。去也天收。來也神發。如徹底知造化。往者不起於來方。夫通天下之情。不以無其物。忍於致死之。追其物。想其靈。設其几筵。陳其俎豆。爲宮室安之。懸鐘鼓樂之。已朽之身。已化之神。雖有宮室

天

世惑

之美。凡案之安。爼豆之奉。鐘鼓之聲。非鬼之所用。人之盡心也。是以文王之於祭也。事死如事生。思死如不欲生。故其謂祭也。曰。如在。其謂之如者。如有物臨之。敬之至也。古人處鬼神之道也。是故古人之於鬼神。專修之於人事。序昭穆。分親疏。辨貴賤。分賢愚。序齒逮賤。是所謂幽則鬼神。明則禮樂也。於是。其於皇天后土。日月山川。至門戸井竈猫虎之類。以報本反始之心。惟禮之修。以求于人而不得。望之於天之心。祈禳之修。是傳所謂明乎郊社之禮。禘嘗之義。治國如示諸掌乎。而其事皆明。而世俗所謂。天神人鬼則不然。其意謂。冥漠中有物如人。或天神也。或人鬼也。思量計較如人。喜怒愛憎如人。而能與我酬酢。持禍福之柄。執死生之權。亦能察隱瞰微焉。而其物。有慈愛惻怛者。有嚴厲方正者。有淫邪凶惡者。於是斷然意。天帝肅然上居。堅牢嶷乎下捧。山神一足。澤神紫衣。風神扇。雷公

辨

鼓。三尸夜走告過差。閻羅日握鐵札記淑慝。於是說幽祭然明。說用歷然物也。是以其求神。告訴祈禳厭詛與聖人之設異。噫夫一氣一物。一感一應。有物則有氣。有體則有用。不竢至而至。不用知而知。若使天地失之則壞。而壞亦其用也。若使人失之則死。而死亦其用也。隔濁氣望日。日色如臙脂。宿邪熱啜羹。羹味如茶。色味何嘗變。以己所有。而誤他之正也。人宿喜怒愛憎之情。行酬酢黜陟之爲。是以雖人能通。而其通則以塞而偶之通也。雖人能知。而其知則以感而偶之知也。人推人求非人者。是以。以人望神。以明窺幽者。天下之通見也。畏禍求福者。天下之通慾也。哲寡愚衆者。天下之通態也。以同態唱同惑。以同見鼓同慾。宜哉人鬼天神。望諸冥漠之中。夫聲者、成于桴感鼓應、影者成于物感鏡應。於是聲影之用。不存物於鼓鏡之外。爲于不測成于不撿。詩天命無常者。謂其不測諺所

謂天口壁耳者。謂其不揜是以。無智無愚同居不測不揜之中。而觀其不揜不測以爲冥漠中有物。其意念情態。與我酬酢黜陟。是乃以濁氣染日於紅。以宿熱變鹹於苦也。於是乎。其觀鬼神。不過禍福報應。而想像人鬼在今日持生之心。達者知此。於是治人情若治水。然夫水之爲物。塞之則決、湮之則濫。逆之則激、舍之則放。是以順勢疏之。入溝澮者。能灌漑。入壑瀆者。能達勢。人情亦然。惟可順而疏。切忌塞湮逆舍矣。古者少昊之衰。九黎亂德。民神雜擾。不可方物。家爲巫史。郊祠無度。顓頊命重黎。分神人。亡相侵黷。堯時苗民亂之。堯復命重黎。絕地天通。罔有降格。蓋其絕地天通者。謂使人神不擾。各得其序。殷人之王。以敬教民。敬之弊。失之於鬼。盤庚之諭民。諄諄于祖先之靈。武丁之擧說。託于帝之賚良弼。以高宗之賢。猶豐于昵。故傳說言事神之難。然則殷季之俗。可知也。若夫周官。晳族氏。蟈氏。壺涿氏。庭氏之類。殷季之所深染。不可禁則疏。至詩書禮樂之敎已熟。漸顧其事。人自知其惑。聖者繼興。則又有損益。周公又作。何存彼晳族壺涿云云者。以累人哉。蓋周公制作于周。人情疏於其中。天子祭天地四方山川。諸侯祭其疆內山川。大夫五祀。士庶人祖考而已。各有典禮。而淫祀有禁。重黎之事也。何火。佛老之書。家佛老之廬。而後治天下。爲魏文侯時。西門豹治鄴。鄴俗爲河伯娶婦。三老廷掾。與祝巫。取人家女好者。投之於河。不然則水來漂沒。溺其人民云。豹往觀之曰。河伯婦不好。將更求大巫嫗入報。使吏卒抱投河。有頃曰。巫嫗何久也。復投弟子。有頃曰。何久也。復投一弟子。西門豹曰。女子不能白事。復投三老。終及廷掾豪長者。皆叩頭破頟。豹遣之。鄴吏民從是不復言爲河伯娶婦。漢時。太原俗以介推焚骸之故。每冬一月寒食。老少多死者。周擧刺史到州。乃作弔書以

報本

置子推之廟。言盛冬去火、殘損民命、非賢者之意。以宣示於民、使還溫食。於是衆惑稍解。風俗從革。供人於河伯、利害甚急。故西門豹之御之、不暇于左顧右囘、以利害之切身者矯之。如疾風驅雲。太原之病、其勢甚緩、非可以刦劑得驗者焉。於是納約自牖。豹擧共國手緩急兩得處。蓋西河之民、有畏而割愛、一旦惑解、宿疾可除。如太原之民結惑也深。雖太原之民亦人也。豈樂老少之死、以爾爲哉。當其成俗也、禍福吉凶、皆歸之河伯、不苦人而人苦於河伯。子推不苦民、而民苦於子推。惑之甚、不能以親子爲之死革。假使周擧强下令禁之、而衆惑愈固。待擧之去、事復復舊。周擧達此。故靈其所靈、疏其所害、人情適而害亦除。害除惑解。下令欲復禁火之俗、亦弗可得矣。如周擧、可謂深得聖人疏人情之意矣。是以聖人之設教、於神道、務在禮樂。是以、其祭也如在。答事鬼則以事人。其設教者何。

使之能報本反始、使之能正倫理、用誠敬。使之能尊其靈、防其淫。故祭之法、日月星辰、民之所瞻仰。山林川谷、民之所取財用。故我之上下旁殺之間、恩情之所深。其人已無焉、雖無焉而不能無之。於是恩情之所及、報本反始、惟誠惟敬、務在如在、謹意報本反始之道廣矣。豈止天地之神祇焉哉。哉豈止所親之鬼焉哉。故至有功德者、雖非其鬼、祭之。故法施於民、死以勤事、勞以定國、能以禦大菑、捍大患之類、皆在祀典。豈止人鬼焉哉。門戶井竈至猫虎之屬、有功德則祀。使人不忘報本反始之心。豈止祭祀焉哉。出門如見大賓、使民如承大祭、用誠敬於人也。世以司馬溫公吾平生所爲未嘗有不可對人言者之語爲美談者、服其誠也。世以不知恩者禽獸之者。亡報本反始之心也。於是以報本反始之心誠敬務如在神人一也。惟世人不知鬼神、以爲冥漠中之一物、其意念情態與我酬酢黜

佛敎

陟。故惟媚之瀆之。祈福禳禍。甚則至呪詛調伏人而已。故孔子答樊遲問知曰。務民之義。敬鬼神而遠之。　本邦自古奉神之道最謹。故人呼爲神國。配　始祖於天。配　太祖於日。大事不出諸己。政自　祖廟下。不敢以褻瀆神。與支那之古者。亦不遠焉。佛敎本天篤之神道。自古有之。悉達太子。出修之。脫屣萬乘。終成正覺。覺道齟齬者。目爲外道。蓋梵說之大概。不持政刑之權柄。將舍其忘想。自證其心。以解脫取眞果。爲衆情之難度。欲以其本所惑。爲勸懲之具。故其設敎也。合人鬼與天神。直勝而上之。於是佛境最高。諸天諸神。皆出其下。因果報應。三世十界。卑自所惑誘。高自所覺安。道雖異聖人。而爲衆挾術。一也。蓋衆情愚惑。漆桶掃箒。目不能視全象。或則認指爲月。長弄泥塑木偶。輪轉六趣。於是擲天下之寶貨。盡天下之筋力。抗壯麗於帝居。將以其媚消滅見在祈冥福。佛居則僧居也。佛物則僧物也。及其徒愈衆。以此立生產之業。謀兒孫之榮。願居之壯麗。求服之美好。欲藏貨財。畜妻妾。以衆愚之惑。爲千里之沃野。侵漁其利。傾其財產。然尙不省其貪吝。謂爲國家民人建福利。所患既致。地天相通。民神雜擾。豪傑之士。好痛快。故毀廟燒像。將幷滅神道。然感應之道。不可滅。天下之情慾。不可塞。則不致汎濫決潰者幾希矣。是鯀之所以不能治水也。亦不得周擧之術也。噫夫惡鬼神之人。若能轉造化之機。使夫人得豪傑。則其法或行焉。雖然天下之態。聰明恒寡。聾瞽恒衆。其火撲而愈熾。其水塞而愈濫。故治衆者。疏其弊。能通其情。疏水用龍鍤。疏人用禮樂。禮樂若輿。縉衣黃冠。不難乎爲禮物也。故知好一時之痛快者。實搔痒之快。非愈病之道矣。

感應

天地之用。莫非感應。感應相向。則勃乎起。感應相背。則恍乎失。向之與背。同一感應也。感應不揜。以觀其天。感應不測。以觀其神。

乃一氣之用也。燈火光中。病目者觀暈。夏氣蒸中。抱痁人發戰。同一感應。差別如此。由體物弗遺觀之。向背順逆。莫非天地之用。由禍福報應認之。死生存亡。莫非禍福報應之物。聰明聾瞽。惟病不病之間也。以體用同居、用不居體外、以體用相反用與體別。人之觀物。既此得其物。舍其物而又求用於他之一物。是猶求影於鏡外。索聲於鼓外。故見祭禱夢寢。感應相得。倏忽起滅者。以爲有一物盡精力。費財賄。徼倖佛時。仔肩甚者。攘雞攫金。賽神佞佛。故孔子於鬼神言。智者多矣。夫米無酸。麴無酸。米麴感應。酸成其中。金無火。燧無火。金石感應。火成其中。米麴已雜。金燧已接。感應相背。則酸不成。火不成。是以天地之於雲雨。夫婦之於子女。成否以機。感應變化不可以聲臭窺之。機觸則跡成。亦不可揜也。於是感應與不感應同。一感應也。未知不感應之爲感應。則未知感應之爲鬼神。千古既往。

其人與事共去。然當譚其事。或攘臂而怒。或扼腕而怨。或潸然垂泣。或胡盧捧腹。或惕惕不寢。或恍恍夢見。其事則既往。其感應則勃起。故鯛陽奉鮑魚。則鮑魚亦祟。狄仁傑毀祠。祠亦不靈。同駕一葉之舟。甲則樂焉。乙則注焉。同聽一曲之琴。憂者則泣。歡者則笑。方亡弗視其潛處。逮起充天地。昔者漢時。有巫能咒人。其方咒董仲舒。仲舒不斃。巫則斃。唐時僧之詛傳奕亦然。然則其斃也時乎。時則屬偶然。眞斃也咒詛之力乎。然則其感應於彼乎。於此乎。弗可知也。弗可知。則無益于所思也。是以雖有精物。如不之應。則魅莫所施。雖枯木朽株。可之感。則其技者神。是故冤魂惡氣凝而不融。亦就物爲怪。猶火氣著鏡。鏡似火。香氣薰衣。衣爲香。若無物之可著。事之可感。則孰得成之。是故。神祠厲鬼。佛軀山精。起滅不測。感應使然。故其爲道也。向背變化。於氣於物。於自於佗。於有意於無意。豈謂別有

譸誣

一物使之然哉。是以天地萬物同感應矣。感應不測。故能變化焉。是故厭之者見以爲無鬼神。噫若使天地無鬼神則豈生說無鬼神之人哉。淫之者見以爲冥漠中一物。是以直意。目有視。耳有聽。足走手持。以喜怒愛憎之念與人能酬酢黜陟者也。噫若有物如此則其物亦人也。豈可謂之魂神哉。持此以往。曰無者亦窮。曰有者亦窮。或摸稜不曰有無者亦窮其於不知鬼神則一也。若又曰除天地萬物別有鬼神者是物能斡轉日月扶持山岳起雷電降霜雪執禍福之柄持死生之權抱喜怒愛憎爲酬酢黜陟則斯獨活物。而天地萬物皆死器焉。觀物爲徒二於氣物之故。體用之分失遠矣。鬼神之事。曖昧難知。姦人知其難知。乘曖昧施機巧襲其不測譸誣人託諸鬼神。恣其欲世間鬼事十八九事繫此。伊洛淵源錄曰。南山僧舍有石佛。歲傳其首放光遠近男女聚觀。爲政者畏其神莫敢禁止。明道始至戒其僧曰。俟復現必先白。吾職事不能往。當取其首就觀之。自是不復有光矣。賴有明道照其姦其不逢明道者復多。仁壽中。藤高房爲美濃介。欲修堤防。土人傳曰。彼渠有神不欲遏水。逆之者死。故前司廢之。高房慨然曰。苟利其民死何恨。驅民修之。民被其利。亦席田郡有妖巫。其靈轉行暗噉心。一種滋蔓。民被毒害。古來長吏皆懷恐怖不敢入其部。高房單騎入部。追捕其類一時酷罰。終絕噉心之毒。學者宜以此爲一公案。且夫鬼神者。有爲禍之稱而無禍淫之實。有爲福之稱則瀆之、故遠之、無禍淫之實則褻之、故敬之。褻與瀆者。碌碌之通態。敬與遠者褻瀆之防也。信者物之故。欲褻瀆之不信者。無之故。欲撲滅之。同見而同惑。同求而同趨。於是。祿祿則疏而通之。滔滔則防以達之。古者保民。如保赤子。雖赤子也。教之者義方也。而保之者有術。故死亡不可已。窺窬不可絕。則

陶冶

窺幽之見、正可與天地共傳、災患不斷。疑惑不盡。占禱之情。更可與有生久焉。故可疏不可塞。可修。不可荒。所謂保赤子之道也。是以。日移月變。不知不覺優然在禮樂之中。既已居禮樂之中。故事上而忠。事親而孝。大哉聖人之業。以此治國。如示諸掌焉。故郊社之禮。禘嘗之義。至門戶井竈禮之序整然。使之不得踰越褻瀆舊弊之移。人情之疏。回民之耳目。以陶冶人焉。周公逝矣。孔子不得位。以竢千載之重黎焉。

今歲安永乙未。玄語二十三換稿卒業。顧贅語寶曆癸未之艸。而多不穩者。因繕寫焉。蓋換稿自寶曆丙子起艸。丁丑四。戊寅二。己卯一。庚辰一。癸未一。是歲一。通十有一。十有四萬餘言。事物洪曠。於意欲然猶引殘喘於世。將以有所改革。冬十有二月既望。識於梅園之三島閣。

贅語六天人帙下　大尾

附錄

復高伯起書

鎮西三浦晉謹復書平安葛陂先生。晉本窮鄉一農。何幸受顧於大邦君子。三四捧讀。慚喜交至。長俊卿者。我友善者也。久受嘔喩。以侍函丈。請益之暇。妄譚及晉。雖晉之幸也。亦以辱長者之聽。俊卿有罪。且俊卿以晉所著敢語。敢進之左右。左右不察。叨加稱諭。慚喜復增甚。先是左右聞晉好物產。遠惠奇品數種。藏之於櫝。永以爲野人之榮。嗚呼東西之地。海隔山疊。未接其紫宇。奉其謦咳。則邈焉遜焉。雖然。有俊卿能先後左右之。其交雖生。而其情已熟。自此往。將起居之候。因思士之相與。不各知其所持。則將鄉里之相善者之不若。雖然。人之所持。父不能以諭其子。君不能以命其臣。天下雖廣。人衆雖多。其不同。將如其面。何能得若己者。而後相與。然則已乎。

何爲其可已也。譬之服食。綾羅錦繡。弗同其品。均取之於蔽身。穀肉酒果。弗同其物。均取之於養性。然則雖不同其所持。而其於志善蓋一。其所謂善者何。言忠信。行篤敬。入則孝焉。出則弟焉。退能修己。進能安人。於是移其不同如面者。將不異亦如其面也。今天下之士。執己之所持。欲以尚彼之所持。聚訟紛紛。驅其黨。襲持己之所不持者。於是乎。或儒也。或佛也。下則諸子百家也。猶尚不已。儒相鬩于儒中。佛相毀于佛中。諸子百家。相鬪于諸子百家之中。是猶執一簞之食。非羽毛鱗介之不同味於此。執一豆之羹。惡湯液醪醴之不同滋於此。雖然。世又有我亦嗜醴人亦嗜醴。我亦嗜酒。人亦嗜酒者則同與不同。亦如其面然。則雖長者所嗜。薑與昌歜與膾炙與。羊棗與。其末可知也。亦何傷焉。晉生長乎僻地。以定省無人。家累埤益。不能游觀質問之於四方。三餘偶讀一二典籍。無復所請益。於是勢不得不是其自得者。而今也。犬馬之齒。五十過四。自是者痼。弗可復醫。晉垂髫未知讀書之前。懷疑於天地造化。有時廢寢食。既而知讀書。求諸書。得接人。探諸人。疑塊弗融。年過弱冠。始得天地之形體於西學而喜。雖形體有所徵。亦不過言地體如此。天行如此。則唯依樣畫胡蘆。向所喜者。無益於所疑。歲二十有九。始有觀于氣。漸知天地有條理。於是覺世之說天地。說陰陽。皆隔痒於靴。嘗由與人譚之不盡意。爲著玄語。起草於寶曆癸酉。唯求諸天地。不違於援古。覽者不察。執舊套轉責。竟有事于頬舌之爲贅語。擬于寶曆丙子。唯才駑事廣。玄者換稿二十有三。贅者至十有一。於今不成矣。敢則長者己寓目。乃贅語之餘意。考彝倫之所叙。不自量。竊有竢後世作者之意。斯肇寶曆庚辰。四換稿。至癸未成。幷爲梅園三語。蓋繹條理有法。其法則反觀合一。依徵於正也。其既得之。自一剖析。

一綱萬目。有條不紊。溯流合派。猶周之子孫。其麗不億。歸諸一后稷。夫條理者。一一也。一一之爲陰陽。一一者。陰陽之末有各名也。陰陽者。一一之各有定名也。一一本一、一即一一。合無罅縫。分有條理。而其態也。同居異道、均力反跡。羣兒聚庭弄獨樂。就此觀之。莫遺此態。夫獨樂之動。同居於一轉中、分道於來去。去者不能尙諸來者、來者不能尙諸去者。而至其顚倒。去與來同已。其分有條理、合無罅縫者。非邪。雖世不乏穎悟。不爲以此合符於天地。欲執得於其隱者。推之於天地人之異於天地。即如人之於天地。苟推水欲識火。推冬欲識夏。亦智之拙也。禪徒有言曰。隔山看烟早知是火。隔牆看角早知是牛。是雖捷。亦推之術也。苟反觀之。則其望烟也。可知水矣。見角也。足知馬矣。請試擧一一例之。蓋以月對日。以木對金。古今之定議也。雖然非條理之正。對有反比。反爲正、比爲傍。蓋日者、聚于天之陽物也。反之則觀散于地之陰氣。其陽麗天而充地。則其陰就地而充天。日之所照。有物蔽之則影矣。影乃其物也唯人未推之於天。瞻彼蒼者。終歸之於天。莊子或疑遠之所致。西洋之學。以天文地理。獨步四海。乘人之不知。紿之曰。月下水氣。積爲靑。至日天。則火氣爲赭。嗚呼西人。雖有奇巧。豈作羽翼。凌彼蒼蒼。以至日邊哉。瞎人騎驢。不見其驢。侮其不見。謂之曰駝。豈其可焉哉。日以物發明、影以氣收暗。日力所盡。暗散圍之。以醲彼穹隆之靑。醲靑者。近取言之於水。水色本淡。以淡徹底。維石維魚。歷歷可辨。積而又積。黿鼉鰲與龍鼈藏與。深碧不見底。蓋水雖淡也。積厚則勢遮明焉。明之所遮。乃暗之所畜。相得爲靑。猶靑黃醲綠。靑紅醲紫。今嘗擧對問人曰。反於陽象繋天、能照地上、使晝者之狀、如何。孰豈得不言陰氣就地。能蔽天下。使夜者哉。於是乎。日與影偶。是以雖月於日有水

火之分。已比象比行。同周天而照地。斯焉能爲夜焉。木者艸之偶。幷艸木爲植。與彼幷鳥獸爲動者對。是以。動者。有意有作。氣溫。體動。離地而橫旋焉。植者。無意無作。氣冷體止。著地而竪立焉。於是。動則上本下末。分肢而下垂。所下垂者。其數有定。植則下本上末。分枝而上抑。所上仰者。其數無定。動則內虛。故取飮食之養於內。植則內實。故取水土之養於外。而其取也。動則自上降。植則自下升。動則牝牡相感。託子於內。植則獨立有應。結子於上頭。若日眩於擾擾。霄壤之間。物弗可紀極矣。若以條理推之。天地立體。水火成性。性體絪縕。唯化一動一植。天地亦簡矣哉。唯水陸分居。魚龍藻樹。與鳥獸艸木分立。反此內骨者。觀外骨者於龜蟹。反此岐然者。得塊然者於螺蚌。反陸植之生著土。觀水植之生著石。夫天者。虛而動焉。地者。實而上焉。實止之體。分堅輭於土石。土體輭而脆。其黏者爲埴。石體堅而脆。其黏者爲金。天者。氣也。地者。物也。氣沒其體。物露其體。人觀其沒體者。生空無之見。案上賴有水注。苟留意玩之。此一頑物。可爲我以解惑。水注之製。必鑿二孔。一孔通氣。一孔通水。水入則氣出焉。氣入則水出焉。己與水並立。各爭其居。出有門。居有室。空無其然焉乎。今沒體斥曰無。露體斥曰有。是猶不察明則能通地彩。而蔽天象。暗則能通天象而蔽地彩。徒曰明能見物。暗弗能見物矣。思之不精也。沒而虛矣。露而實矣。幷虛實之體。大物正成。近取言之於人。其體。立于飮食地質。其神活于噓噏天氣。夫魚雖游潛跳躍極于水。而其技盡于水。若措己之水。舍己之魚。反之出水。乃知水外有斯天地。今使鳥入水則死。使魚出水則死。我之所活。施之於彼則死。彼之所活。施之於此則死。則正對者。可反觀之也。不可推擴之也。故人推在己者於人。乃執柯伐柯之事。乃接人之道也。推在己

者于天。乃緣木求魚之術。非知天之道也。螢之腹。入夜則耿耿、日出見之般矣。攜夜之所視。欲施之於晝。雖是于夜也。於晝則非也。故人以人之神。用人之物。提己適非己之地。終不得非己者。有人於斯。其手秉燭、其意索暗。豈可得哉。是故死者生之反。不提生而往死何難知。而不介爾爲淑慝憂虞。相攜而去。弗見泰山令。必爲閻羅王。念頭畜之䀮䀮之間。生種種之奇怪。生者眼裡之華。化者何與焉。人者有意也。天者無意也。天者無意而成。人者有作而不成。天而能容人、人而能居天。天而能給人、人而能資天。未辨天人。無益于智。天非人則天能反人。人資天則人能應天。以應而有于天者。具于人。以反而有于我者。殊於彼。是以天以神而活。人亦以神而活。爲則神之道、成則天之道。成而弗撿、天道誠也。爲而弗測、神道神也。神且誠。洋洋乎日臨我焉。有意想像其弗撿。弗測洋洋乎日臨我者。以人

得之見。彼小兒所弄家鼠嫁娶之圖。其舅姑夫妻。朋友僕從。鼠其首尾手足。人其衣帶裳服。屋宅器械。自納幣親迎。至獻酬之禮。歌舞之歡。莫非人者矣。斯圖固可笑矣。雖然。人提人以往。於是人魅於人。亦與斯圖似。是故推擴人至天地。天地皆爲人。自造化約至人。人居造化。蓋物者立焉。神者活焉。神者。沒體於物、而見用於氣、一感一應。鬼神之情狀也。而人不以神爲神。推人觀神。故風者。風而風也。雷者。雷而雷也。而不能物其物。雷公提槌。風伯負囊。日則天子。龍則龍王。不纏天衣則垂衣裳。或乃醜狀可畏。或乃和煦美好。於是天地山海。至禍福死生之爲。人其容貌。人其情態。泥槊木偶。人事之天人混久矣。猶五家不以春爲春。還爲木。不以秋爲秋。還爲金。禮之謂火。信之謂土。窺窬失徵於正也。頗與怯人之夜行。認芒華藤蔓爲滯醜山鬼者類。嗚呼長于胡者。不得不胡語。長于越者。不得不越

語、宜乎儒佛及諸子百家薰染乎所習。其以爲素者、未在其素焉。故夫人攜己之所習而適非己者、雖自誇曰我獨賢也、不能如何彼亦自誇曰我獨賢也、辨而弗勝。曰唯在自得。彼亦曰唯在自得。故天地者、容水火容動植。生聖賢生愚不肖、生醴泉生砒石、運發收之氣、行瘴癘之毒。於是豎立之人、橫走之獸、潛水之鱗、御風之翼、倒立之螺、傍行之蟹、同容而成其天地、人容身於此間、以其意智之長、大用天地萬物、業已用天地萬物、於是天地萬物皆爲我之有、以故曆象日月星辰、區畫山川河海、灌漑其水、燔灼其火、土木鳥獸莫不入己之用者、唯以我長于有意情慾之感應、意智之思辨、殺活予奪、動于此而安危治亂與此從。於是心之所運爲、有善惡之可悅怨、智之所分辨、有是非可榮辱。於是聖人奉性立敎、道德之所修、仁義之所生也。故配偶中之男女、而成夫婦序、生生之尊卑、而成父子、分統屬、而立君臣、由敎學而成師弟、往來有賓主、交際有朋友。苟不如此、則不能安其間、有物有則、人之奉天也、天唯無意、一一並立、人自有意、偏以濟偏、天給我以其神、反我以意之有無。是以治亦斯天地也、亂亦斯天地也。修之從人、荒之從人。唯天以神轉機、以誠收跡。是以、人之爲道、考于天、擇于人、學于古、行于今、退以修己、進以安人。修己則安己。安人則修人。於是其善之奉、其惡之屏、其是之榮、其非之辱、勢然也。是以其爲世立敎之人、其意同在修己安人、而其設則意匠不同。好尚或異、各家相分。各守其是非、雖己孽蠥曰彼非也。彼之視己、猶我於彼、而岐生岐派分派、取之於己之臆、妄引古人、兄弟鬩牆、室家反目。修安之道、如訟庭、卒各爲怨家。譬之、是猶斯嗜味之人、欲尚己之所嗜於人。各忘自家之炮炙、然則晋無所嗜好乎。我己有己。與人分立、則我亦猶人焉。何爲獨無嗜好。唯

不以自家鼎鼐之物。強之於傍人。爾若有人欲染指。亦何惜其一豆之羹。晉之生于孖溪之上。乃天之所賜晉也。晉之老于孖溪之上。乃亦天之所賜晉也。其自知其量之弗人若。而安蹇劣。乃己之分也。日出而作。日入而息。華吐則對華。實結則咀實。樂失天命。附身於造物。詩有之曰。昊天曰明。及尒出往。昊天曰旦。及尒遊衍。今茲喋喋言。煩左右者。非質諸左右。亦非冀爲左右所是。唯業己忝存問。但欲通晉是何物。千里相報。聊以娛餘年。長者如無擯斥。晉之幸至矣。且晉非不好産物。意唯在條理。非不好地理。亦求在全輿地。南大洋中土壤。晉未審其界域。不知蠻人近探索者有諸。寶暦癸未冬十月。筑前韓伯浦之舟子孫太郎。與衆海運之陸奥仙臺洋中。會西北之風暴起。連日不已。駛度東洋。容與西洋。身囚于崑崙。卒賣于閣婆。辛苦艱酸。以明和辛卯夏六月而歸。去時二十人。生還唯一人。

是以以下至記也恐當在上全輿地下

由阿蘭賈舶贖之來。地球不爲小。躬親一周之。不亦奇乎。唯之子腹中無物。遭一大奇事。弗能盡奇觀。故其說無足徵者。最爲可恨。肅愼靺鞨。古昔人蹟之所通。今則不聞漂流之海舶到彼來此。意韓接蝦夷。不復甚遠。不知其風景嘗有所考乎。且聞源君美氏。著蝦夷志。渴望久矣。帳中豈無有藏此乎。有則許一涉獵。是以。地理産物。玄贅二語之外。無所記也。且書尾語及玄語上木。天地大矣。造化之蹟。未易輕窺矣。日暮塗遠。書之成。未可知矣。況其書加贅。且三十萬言。饒成。無資償工。饒有資償工。必不世售。第藏之敝簏。將罈之供。瑣瑣小言。實遼東之豕。引獻之於左右。多見其弗自知矣。芭蕉布一端。聊代獻芹。敢語一本。亦充覆醬。安永丙申夏四月朏

附錄　終

敢語序

一氣流形、爲物爲人、仰觀俯察、惟人爲靈、儔諸庶物、惟此有意、擇諸有意、孰靈於人、夫天地無私、奚獨人靈、蓋各有所長矣、靈者、神之靈、情欲意智、以運用營施、情欲意智、含靈各具之、而我長于玆、彼短于玆、長則明矣、短則罔矣、情欲、感應也、意智、知運也、感應者、愛憎欲惡也、知運者、思慮知辨也、惟物者、罔于所思慮知辨、而徑行其所感應焉、雖徑行其所感應、而不宿諸思慮之念、不得諸知辨之運頑然處、冥然行、禽獸之所禽獸也、人者、宿諸情辨諸智、蓋宿諸情則好惡推擴而感應愈廣、辨諸智、則思辨計按、而運爲益明、有所推擴、則感甲念乙、故愛好擴之爲善、憎惡肆之爲惡、有所計按、則擇一舍一、處置得宜之爲是、處置失當之爲非、思得善惡辨得是非、此心惟人有之、人之貴也、故思之隱、以種仁辨之差、以生義、苟無所隱羞、禽獸奚擇、故隱忍之所應、爲悅怨、悅怨者、善惡之所成于情也、感笑之所運、爲榮辱、榮辱者、是非之所分于智也、榮辱分矣、悅怨宿矣、故徑行情欲、則非惡積於天下、殺活予奪、倒施死生通塞之際、故內序父子兄弟、外正君臣男女、而後貴賤長幼相敬、夫婦婚姻相親、具意智之知辨、畜情欲之感應、勢不得不然矣、故思裁情欲、妄徑情欲、人之與物之分也、思得所隱于人、則人悅而安矣、善也、辨知所恥于己、則事當而宜矣、是也、善是之際、智有蔽悟、不學則不得其正、行有過不及、非禮則失其中、故知之於學、修之於禮、仁義立焉、夫是非由智而分、善惡由情而成、情欲之感應、非思辨矣、思辨之運、爲非情欲矣、夫衆情者、厚于子、厚于色、好利、好安、而意者、惡薄于親、惡薄于德、不潔于利、不慊于安、故仁者、不禁所厚所好、令之適厚適好、智者、分辨之求、故引情於所宜厚、勵

意於所宜、是故情宜引于所不及、而義宜裁于所有餘、熟觀世之說道者、由專說意智之明、情慾失宅、惟勇往奮不顧者、千萬中之一、敢能之、雖非能者之不美焉、而非衆之所能矣、悠悠天壤、坦坦大道、我其遊于情、裁于義、義有所宜裁、而裁而情則隱、義有所宜絕而絕、而情則思、雖且隱、雖且思、以裁之、以絕之、然則意智之辨、豈在情之愬然哉、舍而懷之、置而不忘、喜而不寐、憤而忘食、耿耿焉、惕惕焉、繾綣宿之、咿嚘苦之、惟意智有所辨、則懷而舍之、不忘而置之、耿耿之不問、惕惕之不動、斷于繾綣而宿中、悅于咿嚘而苦中、是以義裁情也、不則怒棄百年之恩厚、怨成一朝之睚眦、切齒、則以忍甘心、反目、則以賊快意、是以教親之于可親、教貴之于可貴、而後使親者無失其爲親也、貴者無失其爲貴也、是以義引情也、情者易徑、智者易蔽、一旦肆然于此、則禽獸矣、若蔽則罔矣、徑則濫矣、故道有處人、有自處、自處者、意智能分辨、而裁情慾、處人者、能疏情慾、而不厚責意智、自處者、修身、處人者、馭人、處人者、先修身、未有不自修、而能處人者也、故彼罔而罔思、責人於意智、身徑情慾、於是其馭人自修、未嘗有二、先聖治天下之道、後王不修、典刑禮樂、爲儒者物矣、先王之道、疏人於情慾、後儒則審是非於分辨、而後之謀治者、據儒、故知審是非於分辨、而罔于疏情慾於感應、夫儒者之道、是是非非、正矣、明矣、開口爲法、擧足爲度、轉之爲規、立之爲矩、苟不如此、則不足講義理、謀進退、分臧否、決嫌疑、蓋是者、人之所願也、而所願非衆之所全、好非者、人之所嫌也、而所嫌非衆之所全廢、故以是非、律天下之好惡、分辨雖當、而人情病焉、未有病人情以得衆驩者也、殷湯周武者、病是非者也、猶得衆驩、能安天下、故處人者、在使人得其驩心、使人得其驩心、非遺肆其情慾、情慾肆、則怨怒作、

怨怒焉在平天下矣、故處人者、考之於義理、而節文人情、重數聖人、而其道立、知之者學、行之者禮、近以自修、遠以馭衆、而道行之久、終生弊、學者弊蔽、禮者弊煩、不病于弊、調和天下、燮理之手也、是故使之易從、則其敎行、使之易親、則其驩得、敎行則天下化、驩得則天下不違、儒者何哉、士之傳道者之名也、老墨申韓立道、而與儒相分、道分各家而勢相禦焉、不能一視同仁、惜夫、抑勢也、雖然其爲道、孑然於諸家之表、與日月爭輝者、堯舜周孔之道在玆、而彝倫之敎存玆、惜哉、眩堯舜湯武之名、不察其擧、回護迂曲、君臣之大分、千古蓁塞、俯仰之間、私心惻、所關孰大焉、歛獻流涕、竊抱杞國之憂、傳道者之辜也、非道之辜、作君臣第一、秦李斯力學、意感觀鼠、齊陳恒厚施、求在簒國、故志不善、則善亦等不善、狼瞫怒、而秦師敗、景公豫、而齊民咏、故志善、則不善亦幾善、雖幾則幾、學不講、則善不

經濟　晉書石苞傳、苞雖細行不足、而有經國才略、夫貞廉之士、未必――世務、

明、善不明、則有意于爲善、行則爲非、此故未得道、則取于左右、無所逢原、道立、則左右是宜、是伯夷叔齊之不降志、不辱身、下惠少連之降志辱身、所同歸賢也、而人者、莫尊於君父、莫近於兄弟、講道自此始、作明善第二、女之有夫、猶臣之有君、今臣道寬、婦道嚴、嚴雖美、而以之律天下、其驗使天下多怨曠而已、雖美難從、非馭衆之道矣、作臣婦第三、夫後生之所斗山、孔子也、而尊崇至矣、莫以尙焉、雖然信夫子之爲夫子、不知夫子之所爲夫子、信之違不信、幾希、作孔子第四、愼終追遠、人事之切者也、雖然、喪紀之嚴、葬事之汰、如張鵠於渺遠之地、使之射焉、擧天下不可及之道也、道與情離、作喪葬第五、利害者、天下之大柄、安危之樞機、義理之說愈高、而利事廢、利事廢、乃道愈峻、終使自修馭他、經濟與禮樂離、作利害第六、古曰、天地之大德之謂生、而殺亦不可廢、不可廢、則殺活同有道、殺

吠聲　晉書傳、成傳、一犬吠形、群犬吠聲

活不由道、怨怒作、周禮之義久隱、人無所取裁、作殺活第七、人事以勢與情爲重、行藏語默之義、由勢而成、治亂存亡之機、由情而轉、要人之觀勢察情、作觀察第八、蓋人之處世、厚于望衆、薄于自修、通患也、故省躬、在望衆之厚、與自修之薄、古君子之所諄諄也、苟不忘此、縱有疵瑕、身不失令名、作望修第九、傳曰、知禮樂之情者、能作、識禮樂之文者、能述、樂者、天地之和也、禮者、天地之序也、和、故百物皆化、序、故群物皆別、過制則亂、過作則暴、故人功之極、在安天下、安天下者、禮樂也、禮者、其事業、樂者、其成功、故當述作之任者、在知禮樂之情文、在愼過制過作、此故達此者、一治一革、一損一益、非拘非放、不愆不忘、莫所不宜也、晉者、蒭蕘之徒也、愚者言、而智者擇焉、所希、後世作者有興、則得顧於萬分之一、死且不朽也、何憂感於彼吠聲之嗷嗷、故人之所憚于言、而我敢之、故名曰敢、

鎭西　續日本紀、元明天皇和銅十四年十二月始置筑紫鎭西府

皇和明和丁亥冬十月辛未西海三浦晉識

敢語

日本　鎭西　三浦晉　安貞　著

君臣第一

禮者、所以序物也、義者、所以制宜也、分、由序而定、變、由宜而處、昔者、堯措其子而讓舜、舜亦措其子而讓禹、夏桀至暴、國人皆怨、曰、時日害喪、予及女偕亡、而紂之惡勝之、於是、天下願弛肩於湯武、故桀紂之徒、思除湯武以自安、湯武之臣、思伐桀紂以安君、勢之所至、難兩立也、方武王伐紂、伯夷叔齊、叩馬而諫、武王克殷、伯夷叔齊羞之、隱于首陽山、臨死作歌、其辭曰、登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣、蓋夷齊之意謂、殷紂則以君暴其下、武王則以臣虐其君、是

通鑑前編黄帝子二十五人外紀曰帝元妃西陵氏之女曰嫘祖生昌意玄囂龍苗次二妃方雷氏之女曰節生休及清三妃彤魚氏之女生揮及夷彭四妃曰嫫母貌惡德充生蒼林禺陽其嫁姿之子十六人別爲十二姓曰祁己滕箴任荀僖姞儇依二曹二酉及有虞氏有天下封帝舜之後伯爵十有九

以暴易暴、而不知其非者也、思往古揖讓之日、而弗可及、將死而休、重嘆大命之歸犯上之人、以明采薇於首陽之意焉、非怨、蓋後人意堯舜爲天下、採人材於民間、非也、夫堯舜禹者、共自黄帝出、雖各異姓、而其實則後世之族也、故其曰祁、曰姚、曰姒、殆若魯曰臧、曰孟、曰季、自夏而前、以德讓親、受土、則有姓氏、易世、則易制度禮樂、自夏而後、子孫相承、承者、守祖之姓氏、制度禮樂循襲、按所傳見、黄帝之子、二十五人、其得姓者、十四人、而玄囂蒼林、同姬、青陽夷鼓、同己、於是、姬酉祁己滕箴任荀僖姞嬛依之十二姓也、晉司空季子、以同姓、爲同德、以異姓、爲異德、德之異同、未免鑿空、亦季子有爲之言也、蓋兄弟各別姓、由各賜土也、其同姓、或繼嗣相及也、無姓者、蓋無封者也、而其帝位相易、以世爲代、制度禮樂、有損益改革、由是觀之、金天、高陽、高辛、唐虞之異代、猶後世、漢昭崩、而昌邑立、昌邑廢、

而宣帝立也、故祭法曰、有虞氏、禘黄帝而郊嚳、祖顓頊而宗堯、夏后氏、禘黄帝而郊鯀、祖顓頊而宗禹、殷人禘嚳而郊冥、祖契而宗湯、周人、禘嚳而郊稷、祖文王而宗武王、由夏殷周皆以開國之主爲宗、觀之、舜之於堯、猶啓之於禹、成之於武、使之如秦漢異代他族、虞焉得以堯爲宗、已以堯爲宗、陶唐有虞之異號、猶後世之一代、周家自制諡、而不斥其先王而稱帝、自嚴姓、而分出其後者而爲族、於是、帝爲天稱、姓非同出之名、古之人、何知周家之制、故若舜禹者、正宜爲君者、而擧朝素屬望之人也、由書曰側陋、曰在下、又世有讓許之說、後世不察也、蓋博采才於下、任之於事者、將相以下之事也、以姓爲胡越、非古也、湯武亦同所出於陶唐、則殆如後世宗室、人心由茲、有所許邪、抑勢邪、噫東征西夷怨、南征北狄怨者、仲虺贊湯之辭也、不然、則湯之有衆、何曰我后不恤我衆、舍我穡事、而割正

夏、商罪貫盈、天命誅之者、武王歸罪紂之辭也、不然、何自言、太王基王迹、王季勤王家、文王成其勳、予小子承其志、如此、則南巢以叛書、牧野以殺書之議、不任蘇軾之言之失、縱令人心有所許、夏殷之士之寥寥大義、則不可揜焉、唯夷齊、決然不爲勢移、高踏遠擧、正君臣之分於千載、噫微期人、吾其獸焉、孟子曰、堯崩、三年之喪畢、舜避堯之子、於南河之南、天下之朝覲訟獄謳歌者、皆不之堯之子、而之舜、然後之中國、踐天子位焉、禹之於舜之子亦然、以晉觀之、殆不然、夫堯舜者、聖人也、意餘澤之在下、必深焉、舜之讓之是、則滿朝臣無一人之思君之子、滿朝終無一人之思君之子、豈謂之餘澤深及人心哉、若滿朝歸舜者、是邪、南河之避、不當之擧也、蓋五帝之繼承、雖不分曉、粗可言焉、黃帝崩、少昊立、少昊崩、黃帝之子昌意、而其子顓頊立、顓頊崩、黃帝之子玄囂、其子蟜極、而其子帝嚳立、

是其子孫之相與讓德也、歷歷可觀矣、帝嚳之子、有稷契及堯摯、摯立而崩、而堯之德、踰稷契、蓋是以統歸堯也、然而舜禹、顓頊之裔、則堯措子讓德、有所由來、謹考、虞書、堯謂四岳、曰朕在位七十載、汝能庸命、巽朕位、岳曰、否德忝帝位、曰、明明、揚側陋、師錫帝曰、有鰥在下、曰虞舜、舜曰、格汝禹、朕宅帝位、三十有三載、耄期倦于勤、汝惟不怠、總朕師、禹曰、朕德罔克、民不依、皐陶邁種德、德乃降、黎民懷之、舜遂曰、汝惟不矜、天下莫與汝爭能、汝惟不伐、天下莫與汝爭功、予懋乃德、嘉乃丕績、天之曆數、在汝躬、汝終陟元后、由是觀之、堯之所始讓者、四岳也、師不薦丹朱、而擧舜、舜之所讓者、禹也、禹不薦商鈞、而讓皐陶、按、四岳、曰炎帝出、姜姓、於周爲齊許、而炎帝黃帝、共少典娶于有嬌氏所生、出國語、然則兄弟何以竝稱帝、據賈誼新書、則言黃帝炎帝、各有天下之半、堯舜去黃帝未遠、則四岳亦堯

之遠兄弟也、皐陶亦八愷之一、則高陽氏之
裔也、故其所讓、皆兄弟、義當受之人也、書有
舜讓于德弗嗣之文、無讓于丹朱避地之事、
故於舜、言正月上日、受終于文祖、於禹、言正
月朔旦、受命于神宗、舜不以生之日讓丹朱、
禹不以生之日讓商均、倶待其斃、讓諸其子、
不亦詐乎、蓋此時之義、在撰親讓德、殷周、則
取義於民心之奉棄、且夫舜禹、非居堯舜之
宮、而責堯舜之子、受讓定生前也、何以曰、受
讓定生前、舜典曰、堯謂舜曰、汝陟帝位、而曰
受終、禹謨曰、舜謂禹曰、汝終陟元后、而曰受
命、夫孔子之雅言、不過詩書藝禮、何孟軻氏
之惟取武成二三策、廢書之至此、故求之側
陋者、非指庶姓言也、於是、師之所擧、舜也、禹
也、大義之宜君者、而群臣之不宜負者也、舜
受堯之終、於堯不崩之前、禹受舜之命、於舜
不崩之前、當是之時、堯舜頗類後世之太上
皇、繼承豫定生前、身後無復議嗣之慮、準謨

善也、雖未正立其位、而既受其終、類湮巡狩、
朝覲群后、非天子之事而何、漢季佞人、阿王
莽、由周官禮緯、造九命之錫、威柄以遷人主、
自是議九錫、爲簒國者之常典、舜若無受終
之事、以爲此事、實過王莽遠矣、自禹而後、父
沒子嗣、雖儲嗣豫定、根本未固、兄弟叔季、婦
寺姦賊、乘動搖窺神器、三代之間、惟夏不降
遜位於弟扃、抑且法堯舜乎、若夫孟子說、至
堯舜崩、儲嗣未定也、百歲老天子、奚爲天下
慮之緩也、舜避堯之子、天下之朝覲訟獄謳
歌者、饒棄丹朱、而何忘堯之遽、故撰賢才登
庸者、將相以下之事也、非君之事也、夷齊之
意不明、堯舜之讓不辨、可勝悲哉、天下有二
尊、曰君、曰父、故臣於人者、不幸而遇變、則宜
諫而死、可遜而隱、可忍而補、猶弗獲已、則可
廢而易之、子於人者、不幸而遇變、則宜諫、宜
誘、宜禦務於外、宜號泣而從、猶弗獲已、則可
以爭之、君父臣子、自有定分、其位不可顚倒、

史記列傳曰、莊子者蒙人也、名周、周嘗爲蒙漆園吏、

詩曰、投我以木瓜、報之以瓊琚、君父假士芥臣子、臣子豈可寇讎君父哉、堯舜之揖讓、猶弗易則、湯武之擧、豈可講哉、可臣以弑君、嗚呼如禮何、雖曰可如禮何、則是非可易也、是非可易、奚不可爲之有、儒者是是非非言行爲法則者也、分別是非、猶肢人倫之大義、悲夫、莊子有言、曰、竊鉤者誅、竊國者爲諸侯、諸侯之門、而仁義存焉、漆園之感深矣、能引古今、回護其說、修理豈可濫哉、

明善第二

已生我、親豈得不尊哉、已有我、君豈得不尊哉、故天下之至尊、君與父也、故子之奉父、臣之奉君、天地之定分、而不可以易者也、人之於君父、安則竭力、危則致身、如此而已、雖然、有民人焉、有社稷焉、維持之者、不以規規爲節、晏子之所以不就死也、傳曰、大義滅親、何以大義滅親、有君也、周公之所以討兄也、石碏之所以殺子也、唯邦而君、家而親、身可死、人可殺、無滅之之道、石奢之所以自就戮也、夫人之於變、莫慘於君父之難、處事、莫難於君父之難、伍員爲父覆楚、棄疾爲君棄父、其愆義者也、親者、特奉於子、君者、特奉於衆、徐庶之所去蜀也、徐庶去蜀、不顯名於魏、其所賢邪、有民人焉、有社稷焉、不可以私恩辱國命、趙苞之所嘔血而死也、晉讀論語、至曰泰伯其可謂至德也已矣、三以天下讓、民無得而稱焉、未嘗不廢卷嗟歎也、夫數千載之久、無典籍之可稽、由孔子之言、考之事勢、則世傳可疑也、傳者曰、太王之子、太伯、仲雍、季歷、季歷生昌、昌有聖德、太王有讓昌之志、太伯仲雍、覺而之吳、斷髮文身而不還、夫爲人之親之情、雖有所偏愛于子、而豈有爲愛季、而絕信於伯仲、藐焉弗省、陶然而慊者哉、爲人之子之情、豈有廢棄晨昏之奉於絕域、藐焉弗省、陶然而慊者哉、爲人之弟之情、豈有坐視伯仲之遯避、安居大位、藐焉弗省、陶然而

慊者哉、夫世家之位、自非至不肖、則適庶不可濫焉、太伯不賢、而不可爲太王之嗣邪、孔子何以稱之爲至德、其德也至、雖文王莫尙焉、仲雍雖降身中淸、廢中權、太王賢邪、何廢二賢、季歷賢邪、何不得爲叔齊、由是觀之、太伯豈得非無申生之難哉、書曰、太王肇基王迹、王季勤王家、詩稱、太王始翦商、太伯豈得非無伯夷之介哉、夫子嘗稱閔子、曰、人不間於其父母昆弟之言、太伯烝烝于艱難、竟採藥於東吳、申生者、狷者也、以無違、使父陷不慈、以曾子耘瓜之事觀之、不可掩也、申生之行愈恭、而獻公之惡益顯、太伯鴻飛冥冥、人不間於其父母兄弟之言、商勢已傾、太王翦商、太伯不以自潔、固以天下遜、愉婉泯跡、民之不得而稱也、或曰、否、皇矣詩曰、帝作邦作對、自太伯王季、維此王季、因心則友、則友其兄、則篤其慶、何子之言之戾、曰、愉、千載事逝、實今不可繹、雖然、由孔子之言、考諸事勢、則

不能無說于詩、蓋自太伯王季者、自太伯遜、王季嗣也、王季之友于兄、言因心、則不得言身也、詩人誦其祖先之美、固宜然也、故受祿無喪、奄有四方者、太王王季之志、而太伯之遜在此、不然、則何由言以天下讓、晉按、太王翦商者、詩之言也、太伯不從、是以不嗣者、宮之奇之言也、意太伯之在家、以所不自潔、不能從之于意于言、必深遜于王季、遜猶難處、以遂犇荊蠻、事出不得已矣、三讓、朱子以爲固遜、當矣、夫嫡長代父、事之常也、故不幸方廢立之變、直臣執常、事君者之道也、雖然、爲子之道、宜唯命之聽、弗可引誕其位、夫人之親愛、莫過父子、雖然、衆口鑠金、積毀銷骨、袵席之言、其甘如蔗、市虎衣蜂、曾母猶投杼、爲子於人者之情、莫痛於陷父乎不慈、浸潤膚受、機一轉、事弗可測矣、苟貪其位、則勢身不死則不已、故兄弟之難、莫難於廢立、易曰、君子見機而作、太伯其庶幾乎、身死猶可忍、豈

忍陷父乎、不慈哉、故戰戰兢兢、當恐身之難保、何遑其佗、況父有嗣子、其子何慮、噎身爲嫡長、其危如此、弟庶誤獲父寵、臨廢立之機、不幸莫大焉、事成則悖人也、不成則萁煮豆、史佚有言、曰、德莫若讓、讓則不爭、奪則犯矣、子路之言不讓、夫子猶哂爲國不以禮、言之不讓、猶哂於孔子、我知彼伐而代者、不許於孔子、往昔

大鷦鷯尊、與菟道稚郎子、讓帝位者三年、太弟薨、而後踐祚、可謂千古龜鑑矣、惜哉稚郎子、不避而就死、似俠、抑勢有不得不然者邪、燕噲、以祖宗之社稷、與之於子之、猶偸官物、私臣妾、蒼梧嬈、娶妻而美、讓與其兄、志則出愛、事則亂倫、動弗求義、戾道則一也、

臣婦第三

臣者、專奉君者也、婦者、專奉夫者也、之死矢靡佗者也、此故、事君、則闕奉於定省、以獻其身、奉夫、則殺服於父母、以加舅姑、然風習、臣道以寬、婦道以嚴、蓋嚴于別姓、寬于娶女者、周公之制也、嚴于婦道、寬于臣道者、非古之制也、故司徒、敎官也、周公猶置媒氏、司男女、無夫家者而會之、故管仲合獨之法、周公之遺制也、非所謂霸術也、以是非律之、豈無歒然哉、保人情之道、不如此則弗通、夫婦人、一與人齊、終身不改、禮之節也、稱無夫家、稱獨、則可否有時之宜而存、蓋淫與亂者、禮法之所屛、不爾而啓行去就、配偶可成、苟峻其義、以待人、則其說愈美、而愈將多怨曠焉、或曰、世難于其人者、風化之衰也、使天下嗜義理、如芻豢、則使夫人咏關雎、賦行露、此說非也、德其孰盛於堯舜周孔、而堯之朝、而有共工驩兜鯀三苗、舜之家、而有頑父嚚母傲弟、周公之討管蔡、不化于周公之德也、孔子之出妻、不率孔氏之敎也、國遠於家、豈得曰家人不化、而國人可化哉、然則彼或說、峻其義、以强情也、蓋周季、義變爲俠、田光死、侯嬴刎、男

禮以合義以離 禮、曾子問曰、昏禮既納幣、有吉日、女之父母死、則如之何、孔子曰、壻使人弔、如壻之父母死、則女之家、亦使人弔、父喪稱父、母喪稱母、父母不在、則稱伯父世母、壻已葬、壻之伯父致命女氏曰、某之子有父母之喪、不得嗣爲兄弟、使某致命、女氏許諾、而弗敢嫁、禮也、壻免喪、女之父母、使人請、

子之俠也、宋共姬焚、秋胡婦溺、女子之俠也、夫君者、臣之所天、夫者、婦之所天、然則臣婦之於君夫、其道一也、臣之去就在義、則婦之去就、亦宜在義、義弗可虧、則逼之以衆、劫之以兵、見死不更其守、燕人伐齊、劫王燭、燭曰、忠臣不事二君、烈女不更二夫、是燭之言、義不受辱也、夫君臣夫妻、禮以合、義以離、離而有合、何戾王燭之義、故晏平仲曰、一心可以事百君、二心不可以事一人、是之義也、故再仕之臣、可以死于君、再醮之婦、可以死于夫、敎之所廣也、昏姻之義、周之道、則繫之以姓而弗別、綴之以食而弗殊、故雖百世昏姻不通、般之道、則以爲四世而緦、服之窮也、五世而袒免、殺同姓也、六世親屬竭矣、其庶姓別於上、而戚單於下、故昏姻可通、謹按古者姓氏同賜、周語曰、帝嘉禹德、賜姓曰姒、氏曰有夏、胙四岳國、賜姓曰姜、氏曰有呂、衆仲對魯隱公曰、天子建德、因生以賜姓、胙之土而命

壻弗取、而後嫁之、禮也、女之父母死、壻亦如之、注云、女之父母死、則伯父致命於男氏曰、某之子有父母之喪、不得嗣爲兄弟、使某致命、男子許諾而不敢娶、故表壻之父母使人請、女家不許、壻然後別娶、孔子曰、三月而廟見、稱來婦也、擇日而祭於禰、成婦之義也、曾子問曰、女未廟見而死、則如之何、孔子曰、不遷於祖、不祔於皇姑、壻不杖、不菲、不次、歸葬于女氏之黨、示未成婦也、

之氏、諸侯以字爲謚、因以爲族、官有世功、則有官族、邑亦如之、杜云、建有德以爲諸侯、由其所由生以賜姓、謂若舜由嬀汭、故陳爲嬀姓、諸侯位卑、不得賜姓、故其臣因氏其王父字、或爲謚、因以爲族、雖然周之建國、唯賜胡公滿姓嬀之外、晉鄭魯衞、皆繫而弗別、則分姓匪周焉、故古之姓者、以生氏者、爲有國土也、故軒轅氏、陶唐氏、有虞氏、有夏氏、皆有國之號也、猶後世之曰周曰漢、如胡公滿賜姓嬀、命氏陳、亦一徵也、古者、黃帝姓姬、而其子或同姓、或異姓、或無姓、而姓由所出而賜、氏由胙土而賜、則姓氏同有之、而賜之則有、不賜則無、如爵位、然後世以之爲世繫、於是以自其所出傳者爲姓、故人之於姓、猶木之於幹、以所別其後者爲氏、故人之於氏、猶木之於枝、轉環觀之、本亦元所別、而別亦所爲本、姓亦猶氏、氏亦猶姓、於是致姓氏相通焉、於是姓氏之設、古今名同、而事異也、故以世繫

曾子問曰、取女有吉日而女死、如之何、孔子曰、壻齊衰而弔、既葬而除之、夫死亦如之

胙　正字通、倉故切、音祚、祭福肉也、左傳、天子有事于文武、賜伯舅胙、又祀社稷、道曰胙、左傳、胙之土而命之氏、齊謚反胙于經、註、賜也、賈逵曰、胙位也、昔侯失其胙、位復之于謚

言之、堯之祁、舜之姚、夏之姒、殷周之子姫、是時猶無後世氏族之氏、皆骨肉之遠兄弟、與昏之曰臧曰孟曰季似矣、故堯舜之日之氏者、猶後世之國號、堯舜之日之姓者、殆類周之氏族、然則周公之立制、周已前別者、爲姓、以通昏姻、周已後別者、爲族、不以通昏、虞夏同禘黃帝、殷周同禘帝嚳、百世不通者、終古之通義乎、子姫不可以通昏矣、世遠則可以許乎、殷制豈可謂之不異於禽獸哉、夫人服盡則親盡、親盡則情不逮、情不逮、則喜不慶、憂不弔、慶弔不接、親猶佗矣、同繫祖於黃帝、子姫可通、則百世不昏者、周道然也、蓋古人、損益於禮、雖條理一定、而習俗事勢、弗能無沿革也、後世取法於周、以爲極天無易、果然乎、舜天地之一罪人爾、吾聞舜之娶娣、不合周公之制、未知舜之獲罪於天地、舜不獲罪於天地、則親絕之後、昏可通矣、噫昏雖百世不通同姓之正而嚴也、於娶女則以姪娣從、

不亦嚴乎、同姓、而疏于異姓乎、丈夫不宜聚麀、則女子亦不宜聚牡、姉妹可聚夫乎、兄弟宜聚婦、娣猶同行也、姪者、子之行也、豈得正於條理哉、意周之開國、以故習尙難除、而存之、待後之損益者乎、善讀周禮者、而後知之焉、唯不知禮有損益、同之于非聖人之言、故今曰親絕通昏、亦宜也、將以周公責我、曰姪娣相從、非宜也、將曰、禮者自聖人出、聖人之制禮、洞視古今、制之中、一嚴一寬、弛張有所宜、欲自勝上之、非聖佛經、若使之可議、孔子議之、豈竢女哉、孔子周人也、豈議周禮哉、孔子未得志乎制作、則夏時殷輅周冕韶舞之外、盡循守周禮與否、晉則未能知之也、質之於條理、措之於人情、而未得之、宜陳力贊天地之化育、宜陳芻蕘之邇言、竢後世之作者、不宜有隱、不宜以所不信、曲從、獻諛詩曰、善戲謔兮、不爲虐兮、記曰、張而不弛、文武弗能也、弛而不張、文武弗爲也、是一寬一嚴、弛張

有宜也、豈在嫁娶百世不通、娣姪從之哉、故婦無子去、周之禮也、非今之所宜、夫臣之於君、婦之於夫、以身奉之、則臨變守節、其定分也、由義去就、時之宜也、故霜肅露和、天地有時、觀元明之治、從夫死者、旌表門閭、故其跡比比相接、蓋婦于人之道、貞順可以事夫、不幸失偶、須盡力事舅姑、宜使舅姑意、婦在子猶生、宜使舅姑不爲鰥寡、宜使撫育子女、承祭祀、不宜使父母重憂慮、作無益、害有益德之賊也、不幸上無舅姑父母、下無子女乎、宜灑掃墳墓、奉祭祀、死而後已、之謂能事地下之人、婦之事夫、吾聞以貞順、未聞以殉矣、子曰、過猶不及、匹夫稱之、猶可恨之、況治天下者、而旌表之、殺人之道也、孟子曰、可以死、可以無死、死傷勇也、故臣婦之殺身、以凶暴不能守身也、古人有言、死或重於太山、或輕於鴻毛、重之與輕、唯義之從、殺人殺身、共非美事、非美事、故事出于不得已、得已而不已、不得已而已、失義則同、赴死如歸、護生全身、從義則一也、臣婦于人者、勿失身於俠、勿存生於苟免、故殷受之亡、倒戈以北者、雖由受之暴虐、武之恩惠、實殷臣之恥也、唯無義以處宜、何用義爲、爲義至俠、道之賊也、

孔子第四

孔子蚤作、負手曳杖、消搖於門、歌曰、泰山其頽乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎、既歌而入、當戸而坐、子貢聞之、曰、泰山其頽、則吾將安仰、梁木其壞、哲人其萎、則吾將安放、夫子殆將病也、遂趨而入、夫子曰、賜爾來何遲也、夏后氏殯於東階之上、則猶在阼也、殷人殯於兩階之間、則與賓主夾之也、周人殯於西階之上、則猶賓之也、而丘也殷人也、予疇昔之夜、夢坐奠於兩楹之間、夫明王不興、而天下其孰能宗予、予殆將死也、蓋寢疾七日而沒、吾讀檀弓、毎嘆後儒之不分曉此章、蓋孔子嘗言、危邦不入、亂邦不居、天下有道則見、無道

大雅大明、牧野洋洋。檀車煌煌。駟騵彭彭。維師尚父、時維鷹揚。涼彼武王、肆伐大商、會朝淸明、

則隱、又嘗言、親於其身、爲不善者、君子不入也、又言、用之則行、舍之則藏、昔者、太公釣渭上、老遇文王、舍也、藏于釣魚、用也、行于鷹揚、與孔子之所言符矣、而孔子則不然、當時諸侯之國、何邦不危、何邦不亂、何國用之、何國有道、然猶周流不已、曰、苟有用我者、朞月而已、可也、三年有成、望于世如此、其栖栖爲佞者乎、爲人見疑、楚狂接輿、歌而過孔子、曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而、接輿其知孔子者與、愛而危之、望卷而懷之、孔子又曰、賢者辟世、當危亂、諷辟世、非桀溺之意、全非也、是以孔子憮然曰、鳥獸不可與同羣、辨非辟人之士也、吾非斯人之徒與、又辨不辟人也、而誰與、汝之辟世、無與之者、則斯辟人之在汝也、天下有道、丘不與易者、孔子志在救時也、荷蓧丈人、意許行之徒、而果隱者也、非其四體不勤、五穀不分、及止子路宿、出其二子見之、及至而不遇、子路曰、不仕無義、長幼之節、不可廢也、君臣之義、如之何其廢之、欲潔其身、而亂大倫、君子之仕也、行其義也、道之不行、已知之矣、意是夜丈人諷孔子之求仕也、故曰、必於不仕者、無義也、猶孟子無父無君之無也、彼二子長幼之節、不可廢也、則此君臣出處之義、如之何其廢之、爲欲潔身、廢仕之道、棄義亂大倫也、故曰、君子之仕也、行其義也、然而觀接輿荷蕢沮溺、及此丈人之徒、雖操守不同、而皆一時之英、皆遠危亂、憂君子之不遠引高擧歎、曰、道之不行、已知之矣、後人以名信之、不考其言行、隨章生義、不問彼此矛盾、見議聖人者、一例非之、非翅不識議夫子者、終不識夫子也、佛肸以中牟畔召、子欲往、子路以夫子之所言、怪之、夫子無明辨、但言磨涅不磷緇、不磷緇、豈在義之可否哉、當是之時、孔子有所困而感乎、遂言、吾豈匏瓜哉、焉能繫而不食、何言之窮、豈待善價

之謂哉、子之欲往、蓋乘桴浮海之意、激而戲言、是也、公山弗擾、以費畔、召、子欲往、子路不悅、子曰、夫召我者、而豈徒哉、如有用我者、吾其爲東周乎、二子同畔、夫子同欲往、子路同不欲、而答不同者、聘意不同也、蓋弗擾之聘、以周室爲辭、於是孔子感于諸侯之無志周室、亦乘桴浮海之意、非必之之言、故欲往者、望爲東周、其不往者、意同子路、陽貨欲見孔子、孔子且不見、季孫受女樂、孔子且去魯、孔子何獨眷眷夫二子、覥然以敎乎無道、夫子之志、可知矣、蓋夫子生于衰周、傷周道塗炭、王綱不振、禮樂日喪、僭僞年長、上下相賊、骨肉相鬩、故有夷狄之有君、不如諸夏之亡也、之歎、於是深欲興周道於東周、然周公弗可得、東遷已來、唯管仲能相桓公、九合諸侯、不以兵車、使諸侯知貴周屏僭、故曰、如其仁、如其仁、又曰、一匡天下、民到于今、受其賜、微管仲、吾其被髮左衽矣、管仲嘗與召忽同仕公子糺、欲立之、不成、及糺之殺、召忽死之、管仲不死、糺兄也、小白弟也、召忽之節、豈不愈管仲遠哉、是由賜之所疑也、而孔子曰、豈若匹夫匹婦之爲諒也、自經溝瀆、而莫之知也、召忽之死、當矣、甚哉、子之抑忽、當是之時、雖非無戎狄之難、而非有蒙古韃子之强、向微管仲、豈至被髮左衽哉、其抑忽也甚、揚管亦甚、抑揚如此、夫子之憤激、可知也、故孔子周流四方、冀諸侯之一匡天下、興周道於東周、而君君臣臣、安老者、懷少者、辟土地、朝秦楚、莅中國、而撫四夷、則非孔子之所期也、何以其徵之、蓋孔子至文王之德、曰三分天下、有其二、以服事殷、使孔子得志相諸侯、豈不期至德哉、轍環天下、身老于行、曰、道其不行矣夫、又曰、甚矣吾衰也、久矣吾不復夢見周公、又曰、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫、於是乎、欲浮海、欲居九夷、方孔子嘗使二三子各言其

志、其所言、其政教禮樂之事、而孔子無所間然、哲獨無彼二三子或知我之意、由時春氣和、春服亦成、思童冠相携、優游風咏乎林泉、蓋樻玉價不至、忘沽之者、乃阿衡樂有莘、尙父安渭濱之日之氣象也、雖爲東周乎之權、則似遊而無道則隱之常、則有符矣、蓋是孔子道不行之日、點有從容時行藏之言、焉得不發夫子喟然之嘆哉、夫魯者、周公之所邦、周禮存魯、故曰、我觀周道、幽厲傷之、吾舍魯何適矣、後終修詩書禮樂、傳周公之典於後世、所以與點乎、夫神力耗衰將死、常人猶有覺之者、孔子已衰、蓋自覺將病、且有感于坐奠之夢、泰山梁木、嘆周魯之道、往頹壞矣、哲人之萎、嘆明王賢相、不復作矣、鳳鳥不至之意也、子貢聞以爲不祥、遂趨而入、夫夢者、妄也、孔子恃夢哉、蓋人情之感應、聖凡一也、夢之吉凶、豈無感于情耶、果無感于情乎、不夢見周公、亦何傷、因衰謝而感於夢、人情之所

酳明鄒京山談經云、既飯而以酒曰酳、酳者亂也、盪絹之也、鄭謂酳之言演也、演安也、演其所食也

同然也、夫學者、天子曰辟雍、諸侯曰泮宮、人君養老於此以乞言、禮也、雖天子而祖而割牲、執醬而饋、執爵而酳、冕而摠干、王制曰、七十養於學、達於諸侯、學記曰、大學之禮、雖詔於天子無北面、所以尊師也、故兩其占曰、明王不興、而天下孰學斯禮、尊宗於我所學是非此兆、必死而殯於兩楹之間耳矣、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫者、嘆身不見盛世矣夫也、明王不興、而天下其孰能宗予者、傷其所學不行也、夫人有遇、有不遇、有才、有不才、有時、有義、出處行藏、不必同轍而行、若直以不仕爲無義、亂大倫、顏曾之謂何、使太公死不遇文王之前、則爲無義耶、將爲獨善耶、不通之論也、孔子蓋有求于興周道、是所偏然、如喪家之狗也、非不思接輿之徒之憂愛、非不厭危亂之不可處、唯懇懇周道、不能果於已、斃而後休、嗚呼、雖終不得志於當時、後之述作者、皆取法於斯、則功不在周公之下、

喪葬第五

使天下多好人、孰與使天下多罪人、使禮易從、孰與使禮易犯、蓋先王之制禮、由人情而節文之、考義理而制之中者也、其弊、節文煩、義理峻、節文煩、則易犯、義理峻、則難從、以難從之禮、强于易犯之人、所好人寡、而罪人多也、曰寛、曰易、曰簡、自古爲治人之要、人情之感應、可疏而通之、未可峻其義、以强其所不能焉、夫喪者、生者之所報死者、而親疏之序、以之分、愼終追遠、古人之所尤盡心也、蓋人、意智之察、有榮辱于議是以顧其厚、恥其薄、是此説之所愈厚、愈嚴也、雖是非之心慊此、而若人情之不及何、以子張之賢、尚跂而及之、以是高世者少連、大連、孟獻子、高子皐之徒、僅僅可數、以通千古、僅可數之道、爲通諸天下而行、不亦難乎、禮之設、不宜使天下多罪人焉、墨子曰、厚葬久喪、非古也、厚葬、固非古也、故唐太宗詔曰、仲尼、孝子也、防墓不墳、延陵、慈父也、嬴博可隱、考妣之喪三年者、出舜典説命、孔子曰、三年之喪、天下之通喪也、由而來者、久矣、以晉觀之、喪之久也、非害其嚴將多罪、而葬之過厚、所遺害也、夫人生三年、然後免於父母之懷、孰無三年之愛于父母、欲報之德、其天罔極、斯喪之所三年也、雖然、通天下之所不及、君子弗强之、憂服在身、日月稍徂、業可漸執、内可漸弛、宴不坐、慶不與、優游于慨然廓爾之中、而後可以通焉、蓋天下之通態、賢少不肖多、雖法以嚴外情弗勝於内、反將啓醜路、古者、貴賤皆杖、叔孫武叔朝、見輪人以其杖關轂而轉輪者、於是、有爵而后杖、杖猶如可行然、然猶至分尊卑、今欲通喪於天下、業不執、内不弛、醜豈關轂而已哉、故雖志士可之行、而通之天下則難矣、周之後、喪禮之不行者、不獨風俗之澆焉、煩苛使然也、故可使厚者俯就、薄者跂及、則不如以坦坦通天下之無害也、不如閟醜路

於易從之少罪也、且三年之喪、斬衰于父、齊衰于母、方喪于君、心喪于師、其佗、親之於嫡、婦之於夫、承重之於祖、三年者若干、自期至緦麻、愈降愈多、夫喪者、以義引情於不足者也、故方喪于君、心喪于師、亦義也、婦之加隆於舅姑、亦義也、而子之殺母於父在、親之殺女於已嫁、亦義也、非情、是以父母三年之喪、雖發中情、其引不及、則義也、何者、情者不待敎、不待勉、欲已而不能者也、夫父母之育子、雖暴不仁、亦不須勉強而能之、子之喪父母、雖至厚、而未嘗敢不勉、夫義之於情、或裁之於有餘、或引之於不足、情之所感、有餘於子、而不足於親、有餘於男女、而不足於君臣、意之所辨、安于厚於親、而薄於子、安于厚於君臣、而薄於男女、故三年之喪者、哀別愼終、情意之不可已者也、雖其義煩、而其節苦矣、蓋人之情、不久者能久、久者不堪、故如水漿三日、不入於口、杖而后能起、則雖哀之飾也、非難矣、如言而不語、對而不問、廬堊室之中、不與人坐焉、在堊室之中、非時見乎母也、不入門、保三年之久、則雖情之隱也、人所不易能也、三年猶未也、不幸重喪、積將幾年、夫喪者、每節而退、憂服在身、日月稍徂、業可漸執、內可漸弛、宴不坐、慶不與、父母之外、三年者、不愈寛、則情義愈不適、是以君親之外、宜以情義、裁制從其宜、三父、八母、祖先、子孫、師弟、姑婿、母妻之黨、兄弟之屬、不幸者、將終身不脫喪服、終身不脫喪服、將多廢事、雖厚而非可行矣、若有作者、裁制之道、情義當適宜、而後伸優游於憂患間、憂樂之情、將適其中、夫愼終、追遠、固重、治國家、奉祖先、亦重、故天子至庶人、業不可廢、古之人、君薨、百官總己、以聽於冢宰三年、嗚呼、世常君有託孤之監、臣有寄命之德、則美也、然君有賢愚、臣有忠姦、苟自非轉造化之機、雖聖者、弗能保之於後來、以姦據國柄、於三年之久、久假而不反、岌岌乎

殆哉、國祚轉薄、宗廟將危、安在爲孝焉、總己聽於冢宰、其冢宰、則先君之臣也、而先君、有賢、有不肖、有幼、有耄、後嗣、有賢、有不肖、有幼、不幸遇君弱臣姦、禍將始此、彼將曰、君弱臣姦、世自亂焉、何在聽於冢宰之非、雖然、事出於慮之所不及者、天也、如之何、失在慮中、何不盡心、是故、爲萬世立法者、須以濟屯蹇爲法、不須以處賢君臣賢子孫爲主、故君子業廢、則姦凶窺隙、小人業廢、則老幼將困、是以、晉則冀天下以易從難犯之禮、與人同爲善、不以高行潔名、爲通天下之道、弛意智之所辨、從情宜之所適、宜而不害、情而不荒、指諸天地、莫所不通、意智之所欣賞、雖美而自非苦節激勵之士、不保無蹉跌、夫哀則修哀、喜則修喜、飲則修飲、食則修食、禮之所防未然也、修爲人之不可及、是之過是、而爲害也、仁者、弊愛、學者弊偏、義者弊俠、禮者弊煩、可不敢言哉、今晉敢言于人之所憚言、知衆之諱責晉、晉不辭受責、使責晉者、不踐晉之所言、彼焉保哉、假修飾外、無羞于省私哉、是晉之所言而不自顧也、蓋古者、有名無字、人生則不能無名、名者、父之所命、冠而字之、人貴父之所命、呼字易名、是避名於生前也、周之禮也、周公作諡易名、名者君父自稱者、死而諡之、卒哭乃諱、而後世奉之、是諱名於沒後也、祭義曰、文王之祭也、稱諱如見親、若信此言、制諡在殷代歟、抑傳者誤之歟、蓋諡法、有堯舜禹湯桀紂等之稱、可由有堯舜禹湯桀紂而設之、蓋湯、名爲履、爲天乙、則竝湯爲三名、紂、名爲辛、爲受、則又有三名、皐陶、爲庭堅、則有二名之類、有焉、受紂、蓋由音相近也、受巳見泰誓、則非諡明矣、辛由殷人以十干爲名之例、則名也、湯、蔡沈以爲號、未得其徵、不能全信、庭堅、杜預以爲皐陶之字、冠字、死諡、周道也、則是古人有有數名者爾、諡者、所表其德、行出於己、名生於人、而妍强不揜矣、所以

誘後世於德也、秦始除諡、曰、太古、有號毋諡、中古、有號、死而以行爲諡、如此、則子議父、臣議君也甚無謂、朕弗取焉、噫身行無道、欲傳之無窮者、愚也、非臣子議君父者、當矣、夫子請諡於君、而美惡出於君、則子當奉之、臣之事君、生也、當竭力盡志、不宜爲社稷民人、面從以有隱也、沒也、宜補其過、揚其美、而後臣子之心、正始安焉、吾聞、君子、成人之美、不成人之惡、惡諡、成君父之惡者也、衞孔圉之行、孔子猶不開謂之文、則孔子之意、可知也、夫臣子於人、豈忍于自于佗、朝夕口於君父之醜名哉、雖謂之公議也、非所以訓臣子也、秦始之弗取義似長矣、　本邦、中古以來、奉諡以美稱而準其德、　雄略、　武烈、得其跡於彷彿、足以長爲國典矣、且人之行、或相同、或相千萬、若同、則父子同諡乎、千萬、則豈數百十之間哉、故古、生亦堯也、舜也、死亦堯也、舜也、於周、則生則昌也、發也、沒則文也、武也、而

其諱名不嚴、且死生不同、禮經可考、後世則不然、不問生前沒後之別、嫌諱、二諱、詩書諱、臨文諱、廟中諱、內諱諱、此而不已、至父名樂、乃終身絕酒、父名岳、沒身不聞樂、比之於過而舉君之諱則起、與君之諱同則稱字、則刻哉、後世無名諱之辨、名諱雖一、而其設固別、諱對諡、死者之事也、名對字、生者之事也、此故、不稱字而稱名、之爲無禮、猶對孔子呼丘、對伯魚呼鯉、是也、是以春秋、書陳侯午、而不諱襄公之午、書同盟、而不諱莊公之同、舉諱之爲失禮、猶對伯魚稱丘垤丘壑、對子思稱鰸鯉鯪鯉、是也、雝者、周禘太祖詩也、曰假哉皇考、綏予孝子、宣哲維人、文武維后、燕及皇天克昌厥後、綏我眉壽、介以繁祉、既右烈考、亦右文母、毛公、以皇考爲文王、以烈考爲武王、則成王之詩也、朱子、竝烈考皇考、爲文王、則武王之詩也、諱者、不觸爲禮也、武王而言昌、非廟中不諱之義、按曲禮曰、逮事父母、

則諱王父母、不逮事父母、則不諱王父母、此武王崩、而成王不逮事之也、不逮事、故不諱也、武王末受命、必是成于成王者也、檀弓曰、卒哭而諱、又曰、既卒哭、宰夫執木鐸、以命于官、曰、舍故而諱新、舍故、便不諱王父母也、宋陳澔註戴禮、以之爲庶人之禮、噫禮不下庶人、刑不上大夫、陳澔誤也、今不辨名與諱唯嚴之務、非古也、蓋生者送死者、以思慕之無窮、臨哀痛之切、財貨何惜厚葬慰意、雖然以無窮思慕、用有限生産、不可無所節矣、葬禮之重、蓋自周、墨子說儉儒者過矯、加以奢靡之風、空地上、充地下、發丘摸金、公行乎世、死而不受戮者、幾希、厚葬之非、禮之弊、至此而極、慘哉、冀後世作者、使天下易從事於禮、得優游於憂患之中、悽愴嚴肅之中、正有一團之和氣矣、

利害第六

大矣哉、舜之爲德、被袗衣、鼓琴、正南面、垂拱而天下治焉、何以其然、於書有之、曰、詢于四岳、闢四門、明四目、達四聰、蓋常人之智、取聰明於己、君子之智、取聰明於人、取聰明於己者、與人鬪聰明、取聰明於人者、用人之聰明、與人鬪聰明、故各張其是非、於是、訐人之短、以害其長、華己之是、而蔽其非、用人之聰明者、不以短害長、不以是蔽非、天下之聰明歸矣、人雖聰明、處舟、不若舟子、處車、不若御者、故鄕之得失、鄕議、市之得失、市議、問漁於水、問獵於山、議定而用長者、所動而不獲罪也、人雖聰明、而一人之耳目、有所盡、以所盡者、欲馭無窮者、用聰明者之非也、唯不用聰明、是以莫不聰明焉、孔子雖聖而不獲其位、不過與門弟子、講禮譚道、終取詩書易春秋、修傳之後世而已、自是而後、天下之譚士、接踵技能無所施、各提是非而相攻、所以儒墨刑名之分也、是以、雖孔子、而勢不得不與諸子爲伍、蓋天下之譚士、其張是非、爭其得失、非

無得失矣、或非治之急也、夫天地者、大也、容而不擾、以成物、百家提我之一是非、而攻他之一是非、於是、喜同怒異、護此訐彼、憂喜在其黨、而不在通情矣、唯其是、足以爲榮、其非、足以爲辱、是王者之是非也、其善、可以安人、其惡、可以賊人、是王者之善惡也、修善、謂之仁、修是、謂之義、仁者、能安人、義者、能裁宜、夫天下何好、好利、天下何惡、惡害、利之、則樂、而安、害之、則苦而危、故馭衆者、博利、利之者、驅害、害除而利興、天下何危之不安、故善莫大於利人、惡莫慘於害人、舍利而施善、謂之徒善、無害而唯非、謂之徒非、宥人之徒非而播濟衆之利、其善不徒、天地之德也、孟子見梁惠王、王曰、叟不遠千里而來、亦將有以利吾國乎、孟子對曰、王何必曰利、亦有仁義而已、王曰、何以利吾國、大夫曰、何以利吾家、士庶人曰、何以利吾身、上下交征利而國危矣、蓋當周之時、以道率弟子者、莫盛於孔墨、迄孟子時、天下之譚道者、孔墨之徒爲熾、而孟子守孔、而闢楊墨、楊子、姑置之、若墨子、其書猶存、其術專在兼愛交利、孟子者、與墨抗衡者也、故於愛利、極力闢之、闢其愛、曰、二本無父、豈保勸王之非、二本無君哉、闢其利、曰、上下交征利、而國危矣、自是而後、義利之辨嚴也、義以正己、利以箴身、不亦善乎、聖人復起、立身如此而已、學者眩此、忌言利、利已而道亦瘁矣、孔子曰、道不遠人、人之爲道、遠人、不可以爲道、人之所好、莫若利焉、舍利道人、何以得之、君子利德、小人利私、君子之利者、廣矣、大矣、久矣、此故、君子者、以義爲利、小人者、以利爲利、是故、君子而後能利、小人唯害之爲、豈爲利哉、禮運曰、講信修睦、謂之人利、爭奪相殺、謂之人患、不遺親、不後君、而後君親利矣、天下豈有以國危君弑、爲利者哉、此故、行仁義者、大以利國、小以利身、蓋孟子取仁義之是者、與利之非者而言、苟不揣其

本而齊其末、方寸之木、可使高於岑樓、今取義之是者、與利之非者、而比之、奚翅利非、利有非利之利、猶義有非義之義、苟其非、則利與仁義、不可用一也、苟其是、則利豈可廢哉、利義辨嚴、而學者忌之、是所道之愈峻、愈不行也、好色好財、皆足蓄身、苟與百姓同、於王亦不難云、何獨利之不可施哉、是急于攻墨勤王、而不能自護也、縉紳將唯義之從、故口及利害、其色赧然、將義之從志士之所執、孰獨不然、夫義無定體、取舍予奪、有所宜而存、雖賢者、賞則富貴、罰則殘害、是故財者、天下之至用、自家至國、以之爲用、欲發無廩粟、雖有仁者、不能賑民、欲養無衣食、雖有孝子、何以盡志、故古人不廢德於勤儉、勤則財生、儉則用足、唯小人則從事於忍吝、故能積、積而不能散、唯利之貪、君子則用于通用、故易貧、貧而不戚戚、非潔貧也、故非利之可嫉、有得失于從事、故擇是非、不可獨外利害也、若

夫兩軍相對于茲、用正、則危宗廟社稷、宗族臣子、用奇、則安之、於是雖孔子、不能不好謀、好謀、有隱忍義否、正譎之所成也、故取仁義之善、斥利之所醜、則孟子之所言、是也、舉利之美言之、孟子言病焉、夫人之性、以好惡而運用、好惡之際、利害之事切也、苟無利害好惡者于人、則善惡何立、勸懲何行、仁義道德、何用之、故利害者、好惡之弗可已者、仁義之所由成也、今說仁義、而舍所爲仁義者、徒善徒是焉耳矣、傳曰、人情者、聖王之田也、舍田說農、不可以爲用、故衆利而未知方矣、尚保其國是非徒設、而其民瘁焉、安有其民、故馭衆之務、在利人、利人者、足之、敎之、足也利外、敎也利內、人利則安焉、安則驕焉、未有衆驕而犯之者、未有上利下、下奉上、而禮義失者也、大矣哉、利之爲用、豈可厭哉、自用而遺人、自是而外人、其道、縱義、縱高、譚士之義也、非王者之道也、唯彼小人、覰身而不覰人、孳孳

汲汲、自利之務、自利、則勢不得不害人、暴下犯上、妒甲碍乙、出乎爾者、反乎爾、身賊國危、利之不利者也、是孟子之所箴、可不深省哉、利衆者、君子之心、自利者、小人之私、惡小人之所爲、而棄天下之所安、墨子不服、

殺活第七

按身而痛、推之以知人之不欲痛、推諸物以知物亦不欲之、痛尚弗欲、況死乎、以物我之所不欲者、欲齊物我、難矣、商鞅秦始、試之於前、身裂國亡、其徵不竢喋喋、故生者、天地之大德、好生者、天下之大德、此故、古先聖王、治專在以禮敎化人、不欲以刑齊人、以禮敎人、則其失禮、足以取辱、以刑律人、則其犯刑、足以致死、故刑法能殺其犯者、禮制能辱其失者、故王者竝用之、而刑則措焉、子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥、道之以德、齊之以禮、有恥且格、是之謂也、夫民命者、至重、而殺者、醜事也、故周禮、小司寇之爲職、聽獄訟、求之民情、求而已獲之、猶議親之辟、議故之辟、議賢之辟、議能之辟、議功之辟、議貴之辟、議勤之辟、議賓之辟、而猶三刺、又有司刺、以三刺、三宥、三赦之法、贊司寇、壹刺、訊群臣、再刺、訊群吏、三刺、訊萬民、壹宥不識、再宥過失、三宥遺忘、壹赦幼弱、再赦老旄、三赦惷愚、以此三法者、求民情、斷民中、而施上服下服之罪、然後刑殺、然猶至有司告之、君曰宥之、三傳者曰、孔子爲魯司寇、朝政七日、戮少正卯於兩觀之下、子貢以卯之爲聞人、疑而問之、孔子曰、心達而險、羊傳曰、父不受誅、子復讐可也、韓愈曰、不受誅者、罪不當誅也、誅者、上施於下之辭、非百姓之相殺者也、是不知道者言也、如伍胥、當耶、伍胥、豪傑也、見殺所奉之君、與父兄、怨徹骨入髓、以爲如日暮塗遠、倒行逆施、何暇問步之正非、竟覆楚國之宗社、鞭平王之屍、直情快意、噫人有尊、君與父也、平王雖暴、父于建、而君于奢、雖怨入骨髓、如

名分何、況宗廟社稷乎、其欲報怨、豈不有費無忌屍在哉、在昔、雄略天皇、殺忍齒皇子、馬槽之、及顯宗天皇即位、怨之、將毀其陵、意祁命、帝兄也、自請行、除陵傍土一抔反命曰、雄略雖可怨也、而從父于陛下天子于天下、若快意、何以示後、焉今已毀之、此辱足以遺後世、可謂以禮制心矣、故晉於伍胥、哀其志、惜其直、 情晉王褒、痛父之死、三徵七辟、而不起、身終不向晉而坐、可謂從容處變矣、史記叙禹、曰、舜巡狩、視鯀之治水無狀、乃殛鯀於羽山以死、擧子禹、而使繼其業、禹傷先人受誅、勞身焦思、以告成功、於是舜薦禹爲嗣、吾讀之、疑禹者久矣、今悟史遷誤解殛字、謹考舜典曰、殛鯀於羽山、洪範曰、鯀則殛死、禹則嗣興、祭法曰、鯀鄣鴻水而殛死、禹能脩鯀之功、皆似以殛爲殺者、蓋伯夷叔齊、辟周、而餓于首陽、而死于首陽、遂言之餓死、

通鑑周威烈王二十三年集覽、坊記大夫不成君恐民之惑也、注大夫自臣者稱之曰主、不言君、辟諸侯也、左傳史墨對趙簡子日主所知也

鯀亦殛于禹山、而死于禹山而已、孔蔡註書、共不爲死、大戴禮曰、殛鯀於羽山以變東夷、左氏曰、舜臣堯、流四凶厲、以禦螭魅、竹書紀年曰、黜崇伯鯀、雖說不一、而殛非殺、可徵矣、禹者、孔子之所不間然、殛果死乎、舜縱無私而殺鯀、爲鯀之子者、豈得驩然于舜哉、縱不竊負遯海濱、而豈勝爲之驅馳哉、縱爲之驅馳、而豈忍受之讓哉、若攀援殺己父者、以與身、則不及王褒遠矣、周禮有調人、掌司萬民之難、而諧和之、凡過而殺傷人者、以民成之、鳥獸亦如之、凡和難、父之讐、辟諸海外、兄弟之讐、辟諸千里之外、從父兄弟之讐、不同國、君之讐、眂父、師長之讐、眂兄弟、主友之讐、眂從父兄弟、弗辟、則與之瑞節、而以執之、凡殺人、有反殺者、使邦國交讐之、凡殺人而義者、不同國、令勿讐、讐之則死、凡有鬪怒者、成之、不可成者、則書之、先動者、誅之、蓋殺人者、當死、雖然、於殺人中審之、有義、有不義、有過、

書圖史補曰、衢州余氏子名長安、父叔二人爲同郡方全所殺、長安自誓十七乃亦讎、大理斷死、刺史元錫奏言、臣伏見余氏一家遭横禍、死者實二乎、人蒙斷者乃一孝子、又引公羊傳、父不受誅、子得讎之義、請下百僚集議其可否、詞甚哀切、時裴中○拍爲圖、李刑部鄘司刑事、覺不行、有孝論、薛伯高遺錫書曰、

殺人不義者、服法、非調人所與、殺人而義、與過、調人之所和也、過者、辟之於遠、義者、使不同國、然則除義、無殺人之道、鄭游眅將歸晉、遭逆妻者、奪之以館于邑、其夫攻殺之、以其妻行、子展爲政、求亡妻者、使復其所、使游氏勿怨、曰、無昭惡也、猶有周禮之遺意、義以立法、由義從法、禮之所行也、禮法以處怨讐、君子之所不踰制也、唯讐而上不以法處之、下求不之得、是絕憤無所洩矣、而身深任其責、當死而後已者也、後世此義不講、處讐者、無所取裁、於是、彼復此報、無已、秦漢以下、禮廢律興、唐天后之時、有同州下邽人徐爽、爲縣尉趙師韞所殺、其子元慶、卒能手刃父讐、束身歸罪、陳子昂建議誅之、而旌其閭、請編之於令、永爲國典、柳子厚駁曰、臣聞禮之大本、以防亂也、若曰無爲賊虐、凡爲子者、殺無赦、刑之大本、亦以防亂也、若曰無爲賊虐、凡爲治者、殺無赦、其本則合、其用則異、旌

大司冠是佐吏、辭政病、乃小生余氏子、宜其死矣

北溪翁斥子昂之議宜[illegible]

與誅、莫得而並焉、誅其可旌、茲謂濫、黷刑甚矣、旌其可誅、茲謂僭、壞禮甚矣、果以是示于天下、傳于後代、趨義者、不知所向、違害者、不知所立、以是爲典、可乎、蓋聖人之制、窮理以定賞罰、本情以定褒貶、統於一而已矣、嚮使刺讞其誠僞、考正其曲直、原始而求其端、則刑禮之用、判然離矣、何者、若元慶之父、不陷於公罪、師韞之誅、獨以其私怨、奮其吏氣、虐于非辜、州牧不知罪、刑官不知問、上下蒙冒、籲號不聞、而元慶能以戴天爲大恥、枕戈爲得禮、處心積慮以衝讐人胸、介然自克、即死無憾、是守禮而行義也、執事者、宜有慚色、將謝之不暇、而又何誅焉、其或元慶之父、不免於罪、師韞之誅、不愆於法、是非死於吏也、是死於法也、法其可讐乎、讐天子之法、而戕奉公之吏、是悖驁而凌上也、執而誅之、所以正邦典、而又何旌焉、且其議曰、人必有子、子必有親、親親相讐、其亂誰救、是惑於禮也、甚矣、

寔字句斷、今字屬下句

禮之所謂讐者、蓋以寃抑沈痛、而號無告也、非謂抵罪觸法、陷于大戮、而曰彼殺之、我乃殺之、不議曲直、暴寡脅弱而已、其非經背聖、不亦甚哉、周禮、調人、掌司萬人之讐、凡殺人而義者、令勿讐、讐之則死、有反殺者、邦國交讐之、又安得親親相讐也、春秋公羊傳曰、父不受誅、子復讐、可也、父受誅、子復讐、此推刃之道、復讐不除害、今若取此以斷、兩下相殺、則合於禮矣、且夫不忘讐、孝也、不愛死、義也、元慶能不越於禮、服孝死義、是必達理、而聞道者也、夫達理聞道之人、豈其以王法爲敵讐者哉、議者反以爲戮、黷刑壞禮、其不可以爲典、明矣、請下臣議、附于令、有斷斯獄者、不宜以前議從事、謹議、夫殺活者、王者之威柄、禮義之關係、民之所勸懲、治亂此由、後之君于人者、略之而不考於古、爲闕典大也、子厚之議、太明矣、不略而載之、且婦人淫去、禮也、今也殺之、官亦不問、蓋戰國之餘習未除也、

觀察第八

勢、不可弗知也、情、不可弗察也、觀其勢、而察其情、而后以禮義處之、未能觀其勢、察其情、直擧禮法義理、尙之於人、雖美、猶斷岸絕壁、蓋人之爲道、將以人治人、人之爲道而使人不可及、雖美奚爲、觀勢者、智也、察情者、恕也、夫理者、天下之衡也、不可以人曲直、勢者、天下之態也、不可以賢愚有異、而勢與情、亦不必竝行、理與行、不能必一、於是以成于勢者、責情之所本、以成于行者、尤之於理之所當、是所是非之不適、而人情之不伸也、殷湯周武、下而討上、說者猶謂、是理、是道、其君也非君、其下也非下、蓋天下莫貴於君父、雖不善乎、生我者、不能不父、雖不善乎、有我者、不能不君、苟道之有無、可以易之、謂之市道、亦可也、蓋暴虐者、衆之所厭而棄、仁惠者、世之所慕而奉、厭棄、排斥之勢成、慕奉、奉戴之勢成、

說苑善說、臣未嘗見稷狐見攻社鼠見燻也

勢已成矣、故前者牽轅、後者推轂、民之望之、如旱霓、使我不得不行、醜其人之不幸也、慕奉者陜、厭棄者廢、主換代革、而猶衆欣欣驩焉、未敢覺其非者、唯在避水火耳矣、故宋祖陳橋之變、殷湯攻亳之師、雖其德弗同、而事則一也、而謂之殷湯、則頌、謂之宋祖則議、噫以下換上者、天下之定非、詎須多辨、唯於非中察仁暴、則新莽魏丕之意、可嫉、而殷湯宋祖之情、可憫矣、鄭莊負友於弟、李陵失節於漢、比諸太伯之高蹈、蘇武之苦節、天壤不啻、雖然、置身於其地、考其勢、則其情亦可憫焉、鄭莊以武姜之頑嚚、逢叔段之跋扈、不誨弟之非乎、虞舜未能化驕象、不諫母之非乎、伯奇未能回母之志、奚不欲全水魚之親、無謀于社鼠以殺、見稱其志、鄭莊豈不欷歔哉、李陵驅之於絶漠之地、厄之於無援之險、不借于空拳之勇、欠一死之責遽至、假抱曹沫償敗之志、豈忍王褒背晉之痛哉、雖與衛律並用、而李緒爲兵之謀、不爲也、彼豈甘氈酪、而忘桑梓哉、怨望憤激、望絶於漢耳、其使不死者、終不死、不還者、終不還者、是孰與、熟察其勢與情、悵乎自失、故勢與情、不並行、理與行、有時反、夫通塞窮達之勢、悅怨和戾之情、聖凡利鈍、皆遊于此中、故行事之美醜、不參觀之於勢情、則論說雖正、褒貶雖當、而未能使其人中心感悅、以服其罪矣、吾豈好拗、但至特衡於天地、則不借于彼、不廢于此、夫觀勢而察情者、情莫所遁、情莫所遁、而邪正之所本、自照於是、正諸禮義、律諸法制、孰不感服、蓋正人之道、無寃則人服、寃則焉服、寃不寃之間、情屈伸矣、孔子謂曾子曰、參乎、我道一以貫之、曾子唯、門人問之、曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣、夫貫道者、德也、列德者、道也、蓋自郊社之禮、禘嘗之義、內而父兄男女、外而君臣長幼、冠昏喪祭之儀、尊卑親疏之等、宮室衣冠之制、玉帛鐘鼓、進退揖讓、列之則各

道也、貫之者、則一德也、故老萊子之奉親、著五色斑斕之衣、弄雛於親側、若以斯道事君、則諛也、汲黯之事君、以嚴見憚、帝之望黯、不冠、必避之帷中、若以斯道事親、則嚴也、傳曰、事親、有隱而無犯、無方服勤、事君、有犯而無隱、有方服勤、事師、無犯而無隱、無方服勤、是道之有各所宜也、故有言、曰、忠臣求於孝子之門、是以、以行敬於賓主者、能盡愛於妻帑、以戰兢持身者、能踏白及、就湯火、是德之所不二也、及門人問其一、曾子以忠恕解而已、恕也者、盡而無佗之辭也、忠者、盡己之心也、恕者、以身體之也、以身體之者、以身處其地、以己度其情矣、所謂以人之心、爲心也、道者、學以知之、禮以行之、其事雖博、約之則一於此也、陶靖節、爲彭澤令、送一力給其子、曰、此亦人子也、可善遇之、實有德之言也乎、是之謂恕、人其孰不知人之爲人之子、若知之、則宜以親之心遇之、不能以親之心遇之則未能

以其身處其地也、今夫女子、雖不學養子而嫁、而心誠求之、雖不中、不遠矣、治天下國家者、視民爲此亦人子也、庶民、豈不母慕之哉、已母慕之、雖未至道、何失爲子產焉、詩曰、伐柯伐柯、其則不遠、雖未學道、苟以此心求之、則豈負仁人之心哉、遇人之自觀場還晉問、優人何爲、曰淫奔竊盜、曰、淫之與竊、偕可嫉矣、人之所同然也、不知其方轗軻伶俜感憤忼慨之時、好惡如何、客憮然間之、曰、異哉、觀物之情、愛憎換思、其方感人、憒憒然、難爲情、如有信、如有義、咨嗟呻吟、駸駸乎、念入邪路、雖見負孤犢、忘倚門、絕嚴師友、棄故賢妻、欺人、誑人、但覺出于進退不得已、但覺佗之擾事、不啻我獨然、滿場同然、不知是何心哉、曰、是無佗、內之也、內之則淫醜忘臭、外之、則藥石厭苦、若留思於此、則知所以觀己觀人、其爲非者、愚者也、不體愚、則焉知愚者之情、責非者、明者也、以明者之所見、責愚者之所

爲、雖善、而若不及何、猶越人怒胡人之不能舟、尙貪責野嫗之不能烹、於是乎、可求諸情、豈專責諸是非哉、故事上者、莫切於以上之心爲心、使下者、莫切於以下之心爲心、賢愚利鈍、皆以此推之、是以、人皆讀史、同憾彼拒諫者、憾拒諫者、實是也、憾拒諫者、果能納諫乎、吾未能之知也、處身於其地、察其情、世之所謂拒諫者、豈自以拒諫哉、是自執一是非、聽佗之一是非、於是、擧我所是者、辨彼所是者、得失已分、權衡已定、而後遂爲拒諫者、此故、欲不得拒諫之名者、須不張我是非、虛心以容言、若己有之、是之謂取於人以爲善、失之、則訑訑距人於千里也、觀其勢、察其情、而後諭以禮義、御以榮辱、易曰、聖人感人心、而天下和平、或曰、勢則觀之、情則察之、如之而已與、勢者、可觀也、難如之何、然有力者、善回之、情者、可察也、難律諸是非、然有德者能保之、曰、如之則處人也、自處如何、以道御情、以操處勢、

望修第九

馭衆者、不望是於衆心、而圖疏情於通態、不絕非於衆心、而思保慾於通感、天下之情疏、天下之慾保、而後天下之驩得矣、天下之情塞、天下之慾潰、而後天下之怨積焉、獲衆在茲、失衆在茲、是非者、各好尙也、出于意智之分辨焉、非人情之感應矣、故爭是非者、非謂其是非不當、或非悅怨之急、以非悅怨之急、終爲寇讐之思、於是、鬪是非、賊彼人之子、非所以天地之容物焉、娼妓俳優、業不正者也、漁獵釣弋、業不仁者也、而亦終弗可廢矣、於是、娼妓俳優、得君子于娼妓俳優中、漁獵釣弋、得君子于漁獵釣戈中、抑天地之所竝育萬物邪、鑿井葺屋、立身於危、販繒鬻牛、射利於肆、不易其地、而爲君子、敎之所廣也、馭衆者之道也、非獨馭衆之道、然處世者、不以此心處人、則終致鬩爭、此故、父母于天地、

養赤子者、不以我所不是者、置諸愛外、故使釋子、修身於釋中、君子于釋中、使道士、修身於道中、君子于道中、而孝悌忠信、禮義廉恥、自可行其中、推之于方、不得從衆、悖慢爲害、天下之所棄也、我捨人捨、謂之天下之所棄、則未矣、且人有德、有才、才德兼備者、莫尙焉、必不世出、其佗才德必不並有、故觀其德、察其才、觀其才、察其德、必有不捨矣、唯才則才之用、德則德之親、苟不責備於人、易大傳曰、乾道成男、坤道成女、乾知大始、坤作成物、乾以易知、坤以簡能、易則易知、簡則易從、易知則有親、易從則有功、有親則可久、有功則可大、可久則賢人之德、可大則賢人之業、易簡而天下之理得矣、天下之理得、而成位乎其中矣、至哉言也、易親衆之所歸驩也、又曰、悅以先民、民忘其勞、以悅犯難、民忘其死、故衆驩則立之斯立、道之斯行、其設在禮義、其得在易簡、噫、爲道失衆驩、謂之何、後世不以此

心讀經、以是非病人情、道之所昧也、苟知通意智之蔽悟、疏情慾之感應、以予馭福、以奪馭貧、不忮不求、稽之聖績、則禮樂可作、揖讓可復、異端小道、風習俗態、可疏而通、可修而用、故漉之煮之、大洋之怒濤、可和飲食、鑿之引之、懸崖之奔水、可灌稻稼、依山爲城、依壑爲池、獲雞司晨、畜狗守盜、砒之毒、蝮之螫、苟適皆爲其用、用而不中、則宮室輿馬之可安身、穀肉酒漿之可養生、父子之可親、夫婦之可思、並起爲害、非物之長短、用者之工拙也、若以各好尙、欲馭衆、以君子之所能、望諸衆人、我恐得諸議論、而失　諸治績、唯以望衆者、自處、故忘是非之所榮辱、趨情慾之感應、以修身者、望衆、故尤是非於嗷嗷、責感應於意智、君以求諸臣、子以憾諸父、不執柯以伐柯、悲夫、故自修者、不以衆自處、決然高立、篤學深思、博問謹行、禮以爲室、義以爲路、不爲聲利動心、不爲夷險改操、豈屑彼利害安

危哉苟不如斯奚足以爲士焉

敢語畢

題敢語後

豐之東北。地之盡處有山。周數四百餘里蟠廻於一郡。總此曰六明山。其聳而居尊者之爲孖山。峨眉。鷲巢。補陀落。猪群。諸峰羅列而爲之兒孫。魏然臨於海表者。眞非我杵築之一仙區耶。其山靈所託。石室廟然。號曰洞天。有水從其巖間而灑出。南至紅葉浦。入于海之湄。孖溪。吾東川先生居此。退耕之暇。唯學是耽。自幼至今。四十餘年于此矣。遠近士庶皆來。就而學焉。其學專務之於事物。闖條理於天地。反觀合一。據徵於正。大異于先達之撰。著書以自娛。諸侯有辟者。則謝曰。朝飮孖溪之水。夕臥孖山之雲。於我乎足。其所著。玄也贅也。換草二十。而未置。敢語者其緒餘也。予以先世通家。受教于先生。已而游于京師者。八年于今矣。玆舊友山周禎。携敢語而至。曰。有美玉於斯。韞匵而藏諸。求善賈而沽諸。

予曰。沽之哉沽之哉。恐難得善賈耳。難得善賈者。亦所以爲先生之高也。遂擇此以贈之諸友矣。同學綾仲善。亦來寓于京師。共議而成此擧云爾。

安永甲子春三月三日門人豐後淸章謹識于平安寓舍

梅園三語跋

馮兮。翼兮。紛兮。若兮。仰崑崙。俯旁礴。日月交錯。風雷摩盪。山海羅前。品物眩目。以熠燿之耿耿。炤大澤之滃沆。難矣。天地者。我之所居。陰陽者。我之所立。居而不知所居。立而不知所立。罔焉哉。猶中夜失路乎。中夜失路。倀倀之間。苟有呼者。淖邪潦邪叢邪壠邪。不辨而走之。苟僅有可安者。則容身而憩焉。呼者誰也。亦立乎淖。立乎潦。立乎叢。立乎壠。同未得其坦。坦而履者也。故仰崑崙。俯旁礴。觀事物之紛若焉。無之有之。空之假之。物之理之神之。人之影像焉。窺窬焉。支離焉。荒唐焉。先生困茲。于淖于潦。于叢彼壠。求而弗得。髮爲之短。齒爲之豁。既而知陰陽之爲一一。天地之爲氣物。合之條理粲然。分之罅縫沒跡。遂役筆硯。爰以艸玄。彼東西斡旋。春秋輪轉。晝夜寒熱。日月山川。江海之吐納潮汐。虛廓之聚散雲雨。天命之機。鬼神之蹟。天人之殊。禍福之歸。心性之運用。死生之變化。艸木鳥獸菌寓蟲豸。混然之不可分者。粲然而不可亂也。若網在綱。有條而不紊。而觀其取活而通。則夷兮。希兮。捨之則髣髴在手。取之則洪蕩無垠。鳶飛戾天。魚躍于淵。大不可爲外。小不可爲內。弗可獲而端倪矣。於是。觀擧合卦爻。含歸天地。數萬言間。無片言隻句。以襲古人言新而事廣。辭約而意微。口之者。舐糠。目之。

若望洋。故聽以舊見聞者糊讀以古訓詁者泥。不得其言而融其意者。咲焉排焉驚焉怪焉。缺而闕之。雖然已立之也。已居之也。寧罔焉者哉。祇糠及米知其服之無數。望洋得山。信一葦杭之。而終知曩呼者之與見呼者。其在淖。在潦。在叢。在墟。僅容身而憩者。未攬轡於坦坦之中。一一者。條理也。條理之於天地。猶錦之於經緯。錦之在機。雖華卉鬱郁鸞鳳翔舞。波湧霓搖。榮爛乎奪目。知一經一緯。井井有所由而來。知一經一緯。井井有所由而來。故雖華卉鬱郁。鸞鳳翔舞。波湧霓搖。巧婦之意匠。無所得而遁。以知先生所髮爲之短。齒爲之豁。又由典籍。尋繹論辨。著贅語十餘萬言。肇于天地陰陽。中于身生死生。終于善惡天人。申論堯舜禹湯文武周孔。敢語世之所弊。又不可不竝讀。恕曰。往者與吾友子粲。同載酒於梅園。嗚呼子粲。溫良篤實。而純務于學矣。孜孜以惜日。汲汲以窮年。及長于經。

于史。于歷。黽勉之繹。深服先生之學。卒天不假之年。不見其優入古人之域。僅過弱冠奄爲異物。子粲。姓矢野。名直。一字雖愚。嘗將跋三語。才起艸而身已不起。吾悲其人若斯。與艸木偕朽。爲拾於朱墨模糊之間。以成其志。吾後進也。復何言。明和丁亥南至。弓崎恕謹識。

通語目次

安永戊戌正月十八日草

通語

日本　鎮西　三浦晋　安貞　著

天人

觀乎天地者、觀之乎天地、而後及人、觀乎人者、觀之乎人、而後及天地、觀之乎人、而後及天地、天人混久矣、故學雖善、而所學痼于己、沒身於其藩圍、故學莫善於觀之乎天地、而後及人、能辨其天人、識人之所爲、與天之所爲、而後奉天順人也、是以觀乎天地者、先須立身於無開物成務之古、游心於不接立道爲敎之人之外、而索之乎舟楫之所通、聲聞之所逮、審察萬國之風習好尚、觀其所爲敎、所爲道、知意匠之巧、世之學者、不從事于斯、自所目染耳慣、引不言之天、與之於己、與人閱諸康莊之衢、謂之達則難矣、夫天者無意而爲、無爲而成、人者、有意而作、作而不成、以我之有意之作、作而不成之技、窺無意而爲、無爲而成之天、宜矣天人之混、無意之爲則神妙是以不測、贊之謂神、無

爲之成則誠、是以不揜、贊之謂天、今人之齊明盛服、所事者是也、羽籥醪醴、所祠者是也、行雲施雨、釀地膩、生養我者是也、生我育我、立我居我、老我終我、是也、我將馳驅、則取範於斯、我將伐斲、則取準繩於斯、唯儒者見爲天、老者見爲道、佛者見爲佛、天不爲見者之異裂、地不爲所想之殊析、天不裂、地不折、唯人裂折、果在意匠之殊、而不在天矣、言之於容、猶行敬於人、我跪彼起、梵則偏袒右肩、合掌稱南膜、蓋世之立教者、非儒則佛、各目染耳慣于其所習、術自門入之家珍、人不能自立、上特君父下特臣子、不能自存、以教育而存、是以君乎人之明哲、爲人立道、今也開口則曰仁義、古專奉天、我聞洪範者、堯舜以來治天下之大法、而其皇極即正直、其所謂無偏無陂、遵王之義、無有作好、遵王之道、無有作惡、遵王之路、無偏無黨、王道蕩蕩、無黨無偏、王道平平、無反無側、王道正直、會其有極、歸其有極、是乃正直、剛克之、歸是極也、柔克之、歸是極也、而後盛唱仁智禮義、古聖相傳之法隱焉、故今之從師受教者、自刻鏤雕幾、泝抵其素、非自其素、順流而下、觀刻鏤雕幾、萬意匠於梓人之肆者、是以乎多闃于學、天地莫所不容、人有所不容、是以天地生斯善惡是非之人、授斯善惡是非之心、我有斯善惡是非之心、好其善是、惡其非惡、天同生是草木、不一其形狀、同生是鳥獸、不一其性情、故一尺之面、橫目竪鼻雖同、而美醜長短則參差、故雖古聖同濟美、猶西施毛嬙之妍、必不同長短肥瘠、是以六經各有立意、後之襲取者、勢不得不以我之眼見物、模象謂之漆桶掃帚、亦勢英雄不得不欺人、是以自天地觀之、鳶飛魚躍、同遊天地、水濡火焚、由反伸拔、是以舍砥礱、恃蘯蓍者、非良醫矣、是故開眼不可依典籍焉、人事不可委天、天命不可求人、

爵德

物必有有乎內者、必有行乎外者焉、有者行者之根、行者有者之表、道德之天也、而人之所謂爲道德者、擇其美修之而後命之者也、修者、荒之偶也、

人之道也、何以謂之人之道、修荒在人而不在天也、是以流水不腐、草木不垢、人已施技、則井則游焉、苗則荒焉、游以待濬、荒以待修、是以鳥羽之○、獸毛之綵、終年不加洗濯、不易其鮮明、人廢梳則髮欲蓬、廢灑則面含煤、此故人道者廢于荒、成于修、道德本天之有、以能給物給則無不資者、故其得于天者未尊、修于人而能尊、猶穀之得粟於天、而成精於人焉、古曰達尊三、曰爵德齒、禮本三、曰君父師、爵者、君臣之所序、齒者、父子之所散、德者、師弟之所立、摘要舉之者也、通言之則貴亦尊也、分言之則尊者卑之偶、由德而言、貴者賤之偶、由爵而言、德由師而得、爵由君而得、就條理言之、齒本父子尊卑之等也、類本男女親疏之分也、而爵之貴、德之尊、亦可以相配焉、蓋人與禽獸、同其情慾、而其意智則不同焉、禽獸乏于意智、喜怒在己而不在他人、則長于意智、是以一夫抱憤、萬人和之、不以一人控掣億兆、則勢不勝糜沸、是以爵之勢以壓、德之和以保、是以人之間、不能不序彝倫、

施道德亦勢、而人以此分乎禽獸、彝倫之條理、親疏以合、尊卑以立、是以、父子兄弟者親族、君臣男女者疏族、處之者愛敬、疏則敬克、親則愛克、敬愛一德、由行異其道、是故、愛敬則親之道、親不可以疏處、疏豈可以疏處哉、人有愛敬之心、是以有報本反始之心、孝于親、忠于君、順天事神、報本反始、之順者也、天下之事、利害無他由、用之順逆、猶毒之可以殺人可以起痾、是以倒其用、則讎人者、人亦讎于己、是故愛敬各用四海一家、以保大和、尊齒之教之所立也、人已有情慾、又能有意智、意爲萬變、薰蕕錯雜、賢者欲自治、而惡者好亂、民不能自防其暴、不能自折其訟、故仰之於君上、君上不能自衣食奉養、故資之於下、於是、上爲下、勞心於事、下爲上、勞力於役、故自天觀之、各執其役、各使已親愛其安逸則各執其役亦各自爲也、若不下爲上執役、則上役刑戮之若不上爲下執○則水能覆舟上一人、上以敬下爲禮、下以奉上爲義、故爵定而等級序、分定而天淵隔、僭則貶焉、犯則誅

焉、故上安其位、治其下、下知其分、務其役、苟已如是、則一身之脈絡貫通、視聽戒手足之所危、手足護首身之所困、故蠢蠢之民、方境艾安、比隣相親擊柝重關、暴客遯滅、農工商賈、通其力、各厚其生、各保其生、是爵定等級、各務其分、爵之尊也、是天人之合、親疏尊卑之條理也、夫爵之貴、貴能號令控掣衆庶、能得殺活予奪衆庶、謂之權柄、人主而失權之柄、勢與匹夫等、奉其權蓋有道、必據德之尊焉、雖爵位已立、階級已序、分有所守、職有所務、其據是德、苟失是德、憂辱至死亡而極、請嘗論之、夫人具善惡之心、抱殺活之技、其態喜怒愛憎、奮怨感激、愛則煦而育之、惡則殺而屠之、爵欲尊而失之則不奉之、爵雖卑、而齒雖少、據是德者、人尊親之、愛及屋上之烏、是以桀紂不得比身於顏閔、德之尊也、德也者、道之內有者、道也者、德之外發者、其道千萬、一以貫之、夫親子之天、君臣之人、階級粲然、不可濫矣、是以無臣貳君之道、無子畔父之理、上下之分、禮義之節然、人苟守其分、安其節、則泰山之安也、雖然人情之憤怒感激、加以智技之變巧、於是衆巧巧於君、衆勢强於君、於是雖有君父之尊、苟失其德、則泛舟之水、能覆舟、養人之食、以毒人、是故、君父之位雖貴、而名分雖定、而法令雖嚴、而雖條理不可濫焉、而土崩瓦解、上者顚墜、下者踰越、是以德能合衆驩、人許其南面、德能合天人則雖匹夫、可以爲百世之師、於是情態爲勢、壓理壓義、是以、大學之始教、自屈萬乘之尊、取子弟之禮北面磬折、養老乞言、唯德之尊也、久矣哉、世之不尊德、唯欲以爵伸于人、以壓人、世之觀爵之尊者、唯爵之視、德之弗視、强梁其爵、不能以下道是以其臨下也倨、事上也諂、故尙德者必能下賢、尙爵者難下賢、是以保其爵者鮮矣、爵者必以權爲柄、故忤之則誅、陵之則罰、故通天下知其貴、下若竊其賢弄之、則悔吝必臻、道者、德之文章、接天神地示、處君臣父子夫婦兄弟、吉凶軍賓、百之應接、有天之則、有人之誼、建諸天地、質諸鬼神、學以知之、禮以行之、故有德者、犯之而弗校、見道

而行、故其人、可陵、可侮、可屈、可殺、唯義不可辱焉、人各具情慾意智、其所樂在順境、而世之爲樂、人人弗同也、小人者、寓樂於情慾、達士者、寓樂於意智、寓樂於情慾、故據勢利、以名譽網利、寓樂於意智、故樂動而無咎往而無悔、簞食豆羹、不易匹馬、是以窮居野處、不以趙孟之所貴賤、自貴賤焉、雖萬乘之尊、不有所自屈也、情慾意智之樂、何爲其如是異也、其思惟謀慮、智解分辨而出者、有所監于前、有所戒于後、有所愧于行、有所思于言、故生順死安、於是持之者、蓬茨之下、有坦途、有廣居、若以之據爵則四海通脈絡、疲癃殘疾、皆切身也、祖先歆其饗、子孫保其祚、上子育之、則下母慕之、億兆熙熙、坐春風之中、彼昡爵棄德、身辱國危、甚則身弑國簒、故雖無爵而有德則可榮于千古、雖有爵而無德、則不能保其危、是以、非德則貴弗保其貴、安弗保其安、故人之於德、猶病之於藥、人已抱痾、屈膝求活於醫、身之於安危失得、有甚於病之於醫、抱痾惡醫、及四肢不擧、上下關格、氣息欲絕、呼伯輔我、雖有盧扁、無如之何、是以人莫不欲樂者、求樂之岐、左則陷大澤、故人須知尊德、知尊德、則知所懼、古人曰、知天下之不可先、故後之、知人之不可上、故下之、故莫有非德、修而後其德美也、修者先知、知則學之事、修則禮之事、知、世知求之於典刑文物、忽于察之於人情、以理斷、以義斷、以禮斷、取以爲人情、則非也、握殺活之柄、臨無告之民、曰起則起、曰坐則曰坐、於是察人情難、唯與我群于同黨、或仰之於己之上、而後知人情之急似巫峽之水、嶮於大行之路、知人間行路之難、不知病情、投藥起病者不有也、然則欲調和天下、外人情、克之、自古未有也、故處世之道、先須熟人情非理非義非禮、倥倥蒙蒙、憤怨輕侮、有難摹寫者、古哲之垂教、本爲有斯沈痼、設此禮義、苟不熟此難摹寫之情慾、考之於天則人彝、修其德、由其道、徒數墨於故紙上、是古非今、置之於人情、則我恐有方柄圓鑿、不相容之患焉、又申言其意通之歟、夫人情不好奪、則胡美其讓、不好貴、則胡美其謙、修

之於外者、以人有是情慾也、修之於內者、以己有是情慾也、情慾無思惟分辨之明、而索之於意智之運爲、而意知有通塞做悟、徹塞者、不自知其做塞、唯傍觀者識之、而運爲之技巧、人人弗同、立言垂範、終爲千萬之態、是猶草木之區而別也、宜觀諸天地、以知同異之態、聚蛤蜊觀之、顆顆一樣、謂之大同、同不離異而居、剖蛤蜊片片混雜、以合之、偏斜長短、終不合焉、唯得舊偶而合、謂之各異、故觀異於同外者、未知天地者也、是以、人有各好尙、亦有大同、意技之運爲、使出之於一轍、造化猶不能也、而欲之君令臣、父令子、師導弟子、豈可能哉、天地之道、同異不同居、西施毛嬙並立、則果其容貌如鏡前之人、對鏡裏之影、西施毛嬙、終不能如鏡前之人、對鏡裏之影、則雖美則美、美亦不一其美、然則桀之與紂、惡態不一、堯之與舜、善態詎同、故達者、勸懲世於大同、不問好尙於各態、是以、衆情有所忌、有所憚、有所惡、有所忤、有所爭、有所反之、知其夷、知其險、事理有宜、事勢有當、是以其我後者、和人之好先之心也、其我下者、和人之欲上之心也、是以、有爵而據權之柄、有仰者抑之、有前者挽之、有不奉令者誅、人仰則我伏、人前則我後、人不奉、則反求諸躬、是以、爵之爲尊、猶嶽、衆皆仰之、若不仰之則厭、德之爲尊猶壑、居下衆皆歸之、若不歸之、淤而腐、故修其德者、無求于爵、欲保爵者、有求于德、是故自古抱德之不屈膝於萬乘之尊、而萬乘之尊、惓惓于抱德之士、是以、惟慣人之仰之、而不解俯而趨德、嶽潰將乎、欲高尙其德、假爵之貴臨之、觀其不滿于德、是以、以德言之、雖天子而弟子也、以爵言之、雖師而臣也、雖天子父則父雖子弟而天子則天子也、是以漢明取經立弟子之列何妨于南面而朝百官皆欲以爵之貴與他競、是以杆格抵拄皆由不知條理之分焉

立準

立準之道、不可弗愼、準立之久、人慣而不覺、成城郭於人心、於是國是可易矣、憫惻萬世、爲天下立準者、不洞視萬國、察其利病、毀成城郭於心、者、而

規、于因循、則成非常之功則難、今之搢紳、目涵心
染于漢典、唯慣其是非、謂之於詩、則所謂潮聲偏
恐初來客、海味徒甘舊住人歟、觀漢之爲地、幅員
已廣、西南之徼、東北之塞、其守實難、軒轅已來弗
可知焉、延至舜禹、親中讓德、自湯伐而代、在德不
在族、以之藉口、後儒終作受命之說、興國之臣、不
得不若言、是亦勢也今也淸自北地來有之、康熈
帝詔曰、歷代帝王、莫正於我、雖不平于漢土之士、
陟觀則實勝于夫居其地、受其爵、食其粟、而命之
爲獨夫、或伐或簒、以代之者、遠矣、　本邦據山爲
城、以海爲池、無外顧之患、帝統不知其所始、神武
以祖宗之法、則實是宗、中興之主爾、是以、其統之
所由來、歷數不可知焉、是以不以皇胤爲人種之
想、暴戾偶抱不規、衆心不肯、雖至孱弱、不絕如縷、
至尊之位不改莫所用湯武孟軻氏之議、建諸天
地質諸鬼神、而弗謬之義也、想大已貴之古、躬以
素尊之貴、已有大八洲、據八百萬之衆、一聞天孫
之下、脫屣天下、世間未曾有、皇統之固、臣節之恭、
於是乎立後世之準、讀漢典之人、以土地之美、人
物之秀誇、如人物、則以土廣人稠、實多於我、賢勝
于我則不肖之才、亦勝于我、土地已廣、則名山大
澤、珍品希貨、實多也、然論其要害則弗及我遠矣、
風俗之最不美者人人可天子者、郡縣之法立、而
封縣之制廢者、律盛而大臣貴戚、係累棄市、慘不
可言者、好漢典之人、必舉我有者比之、噫數千載
之間、慘怛酷烈、非必無焉、我披兩國之史、讀之、慘
怛酷烈、若取比之、則何得十而一二、宋人問我之
風俗於滕木吉、吉對曰、春風二三月、和氣桃李春、
此言實當、如腐刑、最爲穢、是本刑之一、取之爲宮
中之使令、猶臏者以爲守門、後世謹宮中內外之
濫、刑無罪之人、以充之、而士流賤之、以爲非人、於
是相懀相激、其害豈內外之濫焉哉、而內外之濫
亦比比不絕、本邦自古不用肉刑、宮中老媼、宮外
老臣監之、弗見甚於彼、而官有內外、人無內外、是
以左右之臣、出則從其才可爲將相、外廷之臣、入
則可在左右、是以貴族之子弟、能候左右習君前

之事、自我觀彼、只如半身不隨之人、外形則如同、內則活運弗通、噫君子天下有探人之器之醜哉、此事如無于彼、而在佗國、則彼必指曰夷、天地全生之、已毀之而用、達天之罪、禍至此而弗悟、悲夫、當今之世、　天子垂拱于九重、　幕府聞政於一人、猶古之冢宰、後之盟主、慣讀漢典者、以爲天有二日、何弗思之甚、　天子垂拱、大臣勞職上下之道明矣、且　柳營亦王官、世結昏於王官、是以與國已例、夫人多自王官入、是以、無外戚之患是亦以皇宗存而王官皇家通婚、是以國家與來、無外戚之患、柳營雖有天下之富、有天威不違顏咫尺之義、至今存大巳貴之遺風、神祖之慮深矣、非區區腐儒之所知焉、且觀兩國之風習、彼風長于敢諫、我風長于敢死、彼人不憚犯顏敢諫見殺者接踵、我風怯于此、雖然觀爲國家不坐視其賊之恣睢、必能手及而自負自犯法憲之罪、以自裁償其罪、且彼國之風、雖長于敢諫、忍垢亦勝于我、以我國之士風言之、已雖有暴厲、於列中遇面辱、立其列、則雖至儒之人不敢、是以勢面辱不行焉、彼人能忍垢、身爲大臣、在囹圄、上起之則亦能立朝、本邦之人、則死不負辱以立人之朝、本邦中古巳來、雖倣彼朝廷用律法、風習素淳厚、終保合大和嗚呼、本邦之美、國據要害之地、無邊徼之警、上戴無子之帝統、途無深文之網、染亂日常鮮、治日常多之化、行無虎狼之野、猶沾沾冀漢士之風、我則愛此日出處曰、渺兮東洋、雖衣冠虎狼之說則誤、君子之國除此壞孰與、君子之所居仲尼桴焉子路欲從、樂土樂土我得其處

古處

詩曰、日居月諸、照臨下土、乃如是人、胡不古處、難古處、自古然也、其所謂古也者、不識古何時、夫古者、古之今、而今亦後之古也、蓋稱古者謂古之至今有所美也、故其言必含贊意、是以其稱今之難及也世之滔滔、逝而不歸、人之呿呿吁吁、情態好尚、與世推遷、過則與物化、謂之時流、志士不欲與時流苟合、忼慨苦節、譬如黃鶴之摩天、不在鷄群

同蟲豕、是以志士之行、動輒與時流違、是非激于時流之所爲、好索隱行怪、彼則視便而爲、是則見義而動、彼則詭遇徼倖、此則範我馳驅、故其不投時好、不占便宜、動而得謗、亦有焉、是以、雖古而時流之徒不古處、雖今而有志之士必古處、舉一事例之、昔者田敬仲、宴齊桓公、既日暮矣、欲以燭繼、敬中曰、臣卜曰、未卜夜、終已、是敬中古處、桓公亦古處、若從時流、則身卑饗尊貴、客請夜、主人謝辱、弁側屢舞、極歡而歸、主人若有此言賓必拂衣而去、賓主索然後來必將勞輔頰舌、信陵君、魏公子、而其食客三千、盛貴可識矣、而侯嬴者、夷門之抱關、未有奇節之見乎世、而公子棄其盛季、下守門之人、而守門之人不省其顧、而公子竢之門升、執轡愈恭、公子縱始古處、不終其古處必也其色怫然唐太宗、將納女魏徵入而諫、終諫、納女元陰事、人之最所難言、如時流則言、是宮中之秘事、忌諱不可觸也、帝者亦假無言、必終遠之、是亦其能古處者、唯不能古處、是以與時流浮沈、與時流浮沈、是以身沒無事之可稱述者、今之好文辭者、考其行則亦唯平常之士、以文辭睥睨天下、駕之以託名、壯夫不爲焉、是以自棄之人則已、苟發憤、則胡其不古處、

寓意

鎮西　三浦晉　安貞　著

反觀合一、依徵於正、物獻其則、身具其符、同視分意、匠各思用、殊喙天則、人義紛爲聚訟、訟者之目、白黑不定、訟者之辭、變化無常、薄變吾喙、以作寓意、

生不識父、及遇諸塗、長揖而過、聞諸東隣之子、亦能譚父、人生虖天、亦能譚天、聞諸東隣之子邪、非邪、天門之鎖鑰、不漫假於人、人苟獲之、開戹、有厥宅、反顧來路、想驪姬之泣於驪、鎖鑰鎖鑰、雖不漫假於人、亦不肯啇於人、毋譚獲於東隣之子者、長揖過其父、

苟獲其主、虎與於菟、奚擇其聲、病於口舌者、其耳焞焞、讞者苟知意之所寓、訟庭之辭折、若荅是邪非邪、賴有天門之鎖鑰、

天洞于人、則天若人、胡彼若彼、我若我、推小人之腸、容諸君子之腹、我知其不然、穆穆天門、以牡合牝、彼以闔焉、我以闢焉、觀水之疏於魚、親於火、然猶曰魚親、我視眯之著童子、

排天門、履帝所、混兮淪兮、鬱兮渟兮、纙經絡緯、伉儷自適、子孫雲仍、億兆不啻、比長算壽、識與我儔、挨性捏情、觀弗我異、而能能我之所不能、能不能我之所能、我攘吾臂、彼成嬰兒、彼橐我囊、解括探底、彼餌其誠、饋僞於我、彼奪其公、啗私於我、肆知其不及、磬控縱送、唯命之聽、僂家之子癡、嫚兒之不習射御、

其顏如何、唯其然也、是以其然也、問諸獵史、爾暨如暨、若暨然、同主、加字釋之、如是若斯、意同、子际其象虖、然之於閴則閴然、之於喧則喧然、如之於何則如何、如之於是則如是、故自之而自然、使之而使然、我有奇疾、去南則就北、抱奇不爲奇、徒好聚訟、惡覩彼貌、貌且弗覩、豈能冀玄哉、造玄有大澤、動能陷人、曰混沌之野、曰冥蒙之瀦、有二鬼魅人、曰癡含糊、曰妙睆睆、出其如

此、入其如此、立虛此、以省其躬、髣髴肖囊曾望之者、玄虛玄也、唯晰其然、黠兒善弄智、玄以勾一元之氣於虛烏去而丸墜矣、

前客曰、如何是一元氣、曰、問者誰、後客曰、如何是一元氣、曰捨如何是來問、

瞻天則天也、胡弗觀天天之、瞰地則地也、胡弗觀地地之、故徵火於火、徵水於水、學之事畢矣、眼華耳聾咀嚼終日、何益而學、

超天越地、肆充天地於大倉之一粟、蔑視天秩放浪於形骸之外、亦好勝者、以誕誇人也、不則奚以乃大倉局蹐于其一粟、

道有大小、有夷險、雖若有大小夷險、可借衆則借、而老與幼、與瞽與跛、與駕車馬、與躬負擔、任彼所適、慎其蹶躓、唯賣轎者衒轎、賣馬者衒馬、宜矣哉、轎夫活於轎、馬子餬於馬、

垂髻女子、裁解鍼線縫也則兩幅合一、一線露於表、一線沒於裏、露則俯入、沒則仰出、垂髻之女、台背之老、胥遊造化之中、顓之與癡、不阻造化之蘊、詩曰、不識不知、順帝之則

入神之祠、望神之像、穆然垂幃、奏假夷希、風颾神見泥埭木偶金像畫形、有欣欣然者、有曄曄然者、或人也、或非也、或禽也、或獸也、其居壯麗、殆勝帝所、奉之者、弗織而衣、弗耕而食、事之者、疏疏于有無、懇懇于酬酢、疏之與懇神之資也、非神之眞也、於虛己謂之神、我從神之、式仰其誠、式欽其神、觀雲行雨施、以養報本反始之心、倘問之誰家之子、竝立咸道、余是乃家之翁、

天無意而成、人有意而爲、無意則公、有意則私、成則誠焉、爲則僞焉、故天無修荒、人有修荒、井游水酸璞琢光出、人之道也、僞之事也、人能照人之暗、人能救人之溺、非天之公也、僞於文爲人爲、蒼頡未傳、副墨之子吐否、

璞則鼠焉、鼠不似璞矣、故人以意匠之巧、弄智弄辭、以喪其主、意匠雖異也、智辭雖不同也、同噓喻於碧琉璃之天、同起臥於彈丸之地、故甲曰誠、乙曰帝、丙曰日監、丁曰天網、戊曰天命、已曰

因果、庚曰冥加、猶取一稻實爲飯、爲糜爲酒爲醴、爲酢、爲餲、故徒璞之名、是以造璞之說、徒執鼠之名、是以造鼠之說、造酒酒成、載酒之淫、釀酢酢成、載酢之淫、同視分意、匠各思用殊喙、觀天地之破碎、雖有補之者、亦非鼇足則五色之石、

以鐵爲門限、鬼見拍掌笑故曰監在茲、夙夜匪懈小心翼翼、不愧屋漏、是以克事天者、不竢鞠躬磬折、伸其敬矣、既已克事天、其事人也易易

若俾仁者種之、蟊何食其稼、何以不食其稼、以恒克禱天也、於是知、俾水旱災於民者、拙於御神、也我已御神、民之欲逸而逃、分諸一豆之羹、以蹈水火焉、拙人嗇一笑之顧驅母慕我者、入諸隣人之懷、故鬼神可役、而顛倒役於鬼神、以主爲客、觀將之不習于戰、

主翁魅子、咎之狐貍、狐狸將訴冤於天、麴蘗魅人、鉛華魅人、人亦魅人、髑髏亦魅人、髑髏之魅、精憑毛穎之孫、其毒最慘、而張李同病魅、相調曰、

彼也喫魅、

提生說死、其說譊譊、盍索暗於徹燭、執己待人、人多違言、要在詢之於射家之子、

衆猶椎矣、嬉戲不已、故弄芻靈、躓蒺藜、彼矯者而立衆則藤葛、唯蕈而倚、相夫矯立之士、不事經綸、則煉丹於鑪、倚者奚辜、靡于立者之搖、我爲鬼則見鬼、我爲魅則見魅、既觀其矯、又觀其杕、而猶有首丘之戀者何、於戲達也難矣、

分岐執己之所行、畫地守己之所居、於是各揆夫不言者、徵諸己之所好、所好弗同、破碎天地、惡破碎、欲一之、混而淆之、鼇足彩石、惡克以補、愈觀天傾西北、地不盈東南、淆者不一之、一之者不淆、動之與植反、反則遐淆、雖反而同、同則遐分、故剖之有道、沿條理而下、合之有道、并對待而溯、於是合陰陽於體、并天地於物、而一男女於人、就體觀性、以物知氣、紅女取機杼、經綸其糸、麒麟狻猊、手觸則出、

天地生材人能糜焉、糜而弗殖、謂之蟊賊、是以於

贊天地之化育、無貴賤一也、而不爾爲、使人注精竭力、架不覆人之屋、織不暖人之帛、穡不飽人之粟、奏不樂人之樂、誘不安人之道、余信世有怪物、

男女分親疏之類、父子序尊卑之等、國家則父子即君臣、家國則四海皆同胞、欲安已而害人、觀抱薪赴火、安固無佗道、培其愛敬、灌其廉恥、故學道者靡瞻匪父、靡瞻匪子、好訟者則曰無父無子、

爵尊矣、德尊矣、以尊尊之、古之制也、尊齒事父之道也、順之敎也、爵之尊、山也、躬莅人仰、德之尊、水也、已降物歸、山而無水、嗚嘑少焉佳斯、

不執天門之鎖鑰者、不辨水火、況菽與麥虖、之子也、嘗鳩之與砒、冀長生、盥泥之與游、恚不潔、若此之徒、懇思報主之恩、肆擠主於陷穽、及陷胥以擁手而泣、遠謀愛子之利、投之以蛇蝎方螫直恐之於旁人、

有而弗遺、罔以貪之、眞富人之子也、故第以春煦焉、以秋肅焉、子即認恤與慘、子夜關閉、且待雞鳴、子之與我、同將取物、截知其背弗克有物、故目取色、耳取聲、鼻取天、口取地、而我欲取、子欲取、不爲穽、則我設機焉、機發穽陷、我不復見子、初則割我之肝、接子之腸、今則以子之牙、觸我之吭、悔我殺園之李、不讓子一顆、

天予我私、俾刑其德、天予我僞、俾奉其道、故天地好生、人情好安、仁以安人、義以安己、反之則取危殆、能危人之與身、猶謂之私、未識天之所予、汰金曰、沙不自天、蓋人之爲器也、小不能以容惡、推不能容惡之器、冀天之黨虖己、人之私予私也、私者貴矣、私予私者非、

盥手不盡水、炊飯不盡薪、謀諸市井之子、唯知薪之價、翁之布粟、積諸昆季之家、不還之乃翁增減換思、故取者宜取於力、守者宜守於分、不守於分得隴望蜀、不取於力乞之於人、不已則偸、不已則奪、不已則殺、余望其人於塗鬢鬚已美

獵者舍其弧矢、理網罟、漁者亦舍網罟、譚弧矢、昏

夜遁臓白日驕人、愼旃、愼旃辱燭於背、禍巢於
睫、
敝冠破帽、終不可履、珠履綺約、安加之於首、知渴
索水井深繘短、縄以續繘、不醫渴不已、知與不
知、不知與不知、或將爲魯衞之政
禽獸慕厥母不慕其父、戀厥偶忘于同胞不辨敬
慢榮辱、無體隱分安之推、無報本反始之感居
此則獸、汰之則人
君子之所貴虖智、將羽翼其德妒者嫉術字、德之
施窄、所貴乎義將爲其利議者擯利聲、道之用
險
空色不映水、秋聲多在山、誦此詩知物皆自取、謙
能藏山於地、厚能泛舟於水、故懲僞思誠、去私
就公以殺施活、爲利適義、權衡在手、毒藥從用、
或以乘車、或以荷簦、或以被髮、或以冠帶、始則觀
其大不同焉、結宇而處、鑿井而飲、我笑彼笑我
泣彼泣、今則觀與我同焉、是以各羊棗之嗜、同
膾炙之味、一簞之食、可以飽天下之腹
天明則起、天暮則息、天春則啓、天秋則閉、行人之
道、安天之命、天容我、地立我、父生我、君育我友
朋輔德、妻孥執役、安步之車、晩食之肉爲腹不
爲目、上而日月星辰、下而水火土木、偕作其用
已苟布其誠、報本反始、天神歆其饗上下安其
奉闔戶造車、出門合軌、
天明三年癸卯秋七月

寓意 畢

垂綸子

三浦晉　著

垂綸子曰機者神也爲觸之始不知所由而來不測所觸而變可陰可陽可天可地可有可無可動可靜可生可化可水可火可合可離可消可長可善可惡可亂可治可殺可活可君子可小人不可識不可測玄乎玄是以機之前則混混機之後則粲粲時時是機前後相伴前則玄也後則跡也混混粲粲無往非一元氣然而機之前則玄也惟機可觀不深達此機安視其玄機者觸之始也譬如執鳥右手未有意於殺活時非殺非活思則觸也殺活其跡也機乃可陰可陽可動可靜且夫一元氣不可以有對言之非可不以有對言之無影像蹤跡之可端倪而能具事物機觸則陰也陽也既有陰陽其跡可知可知而下其跡相對始舉剛柔之跡謂之柔者不能剛剛者不能柔能柔能剛舉而不遺者一元氣也乎此氣也轉天不已持地不息不亦剛乎不蔽目之明不隔耳之聰寒暑相通升降不礙不亦柔乎惟以其非剛柔能盡剛柔之用然而其剛其柔不可端倪宜由其顯而察其微觀其機而思其玄也有對者機之後也故明者不能暗暗者不能明有者不能無無者不能者能然能使然者一元氣也或曰火生於無然而能明滅復暗然則非能明能暗者乎曰火未生之前不可指之謂火滅後不可指之謂火既爲火也斯須不能暗也諸對皆然不知此機怨過於己求備於人責柔以剛責剛以柔大賢達才將者不勝其責況其餘乎故日致日之用夜致夜之用上下叙陰陽和日作夜之用夜作日之用上下擾陰陽失甚則責日以夜責夜以日天地如何不否塞焉

其粲粲之跡混混乎其混混之玄粲粲然是故觸則陰也陽也天也地也有也無也動也靜也生也

化也水也火也合也離也消也長也善也惡也亂也治也殺也活也君子也小人也不違於天機眞於人機不求諸在人之機愼諸在己之機不爲在人之機悞己不以在己之機悞人非混混非槩槩而能混焉槩焉通則神也聖之事也故發機安則敗事遲則不及乎事見機差則悞事遲則取辱二儀由此機而轉持四時由此機而往來萬物由此機而生化世由此機而治亂人由此機而君子也小人也所由而來之玄所從而成之跡唯其機之神乎神者天也神之者人也故機之神者能陽能天能地能生能化能消能長神其機者使陰使陽使天使地使生使化使消使長鼓之舞之感之動之建之措之謀則成戰則克天人無二機也人誠處乎混混應乎槩槩用之無盡數槩槩而不見混混智力將窮見混混而不知槩槩踏虛駕空捕影繫風贅瘤事物土魂彝倫見槩槩而不知混混惑死生隔物我

己有不能使人能己之能也己有不達則使人達己之達也己有不能則護其不能嫉人之能焉得護其不能己有不達則惡其不達妨人之達焉得己之達物我相通如兩手相護物我相隔如痿人自厭

不知事之相依

死源于生失萌于得事物同然遭一鄕有火家家扶老携幼蓬累負荷而奔有一貧者借他室居亦無妻子熟視火之起徐起緩避塗見一壺之遺因飲之頽然醉恬然見此人初不積慶賀福澤此日無憂與失是日大憂之人他日大歡之人也是日少失之人他日少得之人也故得而欲不失生而欲不死非愚則妄也知而厭之出吉凶得失之境高踏不顧亦與世異知而不惑能處其間可謂得之吉凶相依禍福相根事之常也以辱之道榮以損之道益以死之道生以危之道安哲人之所畏世人之所履

不察誠之不可揜其見或偏其學或黨是己非彼爲之分界區畫爲分界區畫者不遑察人之是非

是以語不能量其意聽不能知其情使令不盡其能好惡不得其正

有其所得而有行其所由而行故彼爲彼分己爲己分爲分者爲之區畫爲分界區畫者狹也狹則與人爭爭則鬪鬪者見彼之非不知彼之是是非不中則彼不服不服則足愈狹己之分彼攻我是非不中彼亦自狹其分愈攻愈叛愈廣愈狹

或設兩可之言或作混合之說

善惡邪正自有分界區畫爲無分界區畫者吾不知也爲分界區畫者不然其於己也可者衒之不可者護之其於人也可者遺之不可者拾之自古嘉言難求善行不易得其可者取之其不可者舍之何隔彼是何爲分界

未通於混混之玄未知粲粲之跡徒一徒二之病未能從天之機而愼人之機惡知機之神

垂綸子曰天地日月山海草木水火人物皆布形於各各也其布形於各各也氣亦各各也其形各各也其氣各各統之曰物雖氣不先乎物物不先乎氣物者氣之所結氣者物之所成也然而物生氣氣生物莫有窮已氣不可見焉依物見之然以物之氣作一元氣則瑣瑣不統其一者則冥冥乎惟視於物不偏於物於一元氣之玄庶希乎猶人之一氣生氣血長爪髮能視聽能思慮於所以然者不自知也一元氣不可端倪有蹤跡象形者而各有其氣

非有一元氣而後有天地萬物焉不見其首不見其尾來者生往者化

相得而感不相得而背感必應背則不接感者應之先也應者感之後也然而審之背亦感也故所不呼則不應惡則畏者所愛則親呼則應者也然則感而應者感之順也感于合也背而不接者感之逆也感于背也

苗得水土而榮人得芻豢而肥海參得藁而流蛞蝓得鹽而爛得與不得感之事也

聲色臭味者耳目鼻口之感也是故風霆同行於

大塊歌哭齊出於一口

動者氣之使然也靜者質之自然也氣不能靜依質而靜質不能動待氣而動物激氣氣激於物發而爲聲聲屬氣物屬質是故隱隱然有餘韻者懸空之聲也憂憂乎無餘韻者○地之聲也是故物相激皆可爲聲獨爲土最難爲聲

憂怒變顏榮枯異色香臭隨處而變苦甘逐時而轉萬物皆然感之事也其感也有勝氣者

雖聲色臭味均是氣也以寒熱升降相引相動相生相養相剋相背之類對聲色臭味而言然而聲臭有氣多矣故能離質色味有質多矣故難離質

有勝聲者有勝色者有勝臭者有勝味者是爲各各元氣氤氳萬物生焉無此氣物不能生無此氣不能有生

無則不生之氣者所之質之氣也無則不有生之氣者所有質之氣也分而言之上氣者元氣也下氣者各各之氣也合而言之皆一元氣也

故離形而氣不能立有形而氣不能不有氣一于天形同于地所謂氣之各各者自天地之轉持日烝之明暗人有人氣物有物氣有氣必有感焉是故寒暑者其氣之感己之氣也寒之執之己之氣之應其氣也聲色臭味者物之氣之感己之氣也視聽聞味者己之氣之應物之氣也是以感也人之爲甚

何以人之爲甚有知覺也是故人者以有心而感物者以無心而感

寒暑溫涼體之感也喜怒愛憎心之感也

見色而心引見讎而心怒形未相接氣既動矣引而接之則相合怒而接之則相傷然則背何隔於感

磁引鐵琥珀拾芥不竢理不竢故但自相感物之感也狙肉之微腥貓兒先知盛夏之熱蒸痁人不覺以不與我感豈得謂無此氣哉磁引鐵而不引芥琥珀引芥而不引鐵其氣之不相感也雖不感豈瞬彼感者是以不感者不應不應者不感故其

氣之與人感者人得而知之與物感者人得而畀之以不知與不見者可委之無乎鼠大見貓兒而奔蛇長見蜥蜴而縮若不謂其氣而以其形老鼠是蛇恐彼貓兒蜥蜴哉將而礎濕欲霽釜墨燒彼豈有知覺然後知陰晴哉感則相應如耳之於律呂目之於明暗鼻之於香臭口之於苦甘

聽凶而悸見威而栗聞臭而吐食毒而死亦類也

不感則不應如耳目之於香臭苦甘鼻口之於律呂明暗鐘鼓以陰晴清濁不同諸肉依鮮腐腥臭各別吳藍未紅醋未紅吳藍得醋始紅穀未酸麴未酸麴穀相得始酸此聲色臭味孰有之孰與之自我耳目鼻口之相感而觀之聲也臭味如一定者爾使他觸之亦未可知之當耳於空甕聞之若波浪之湧若蚊虻之鳴此聲不在甕中不在耳中霹靂震地聾者自若耳其可特哉人見于晝梟見于夜西人指蝃蝀東邊不知日之射草露步步轉彩目其可特哉人逢不潔掩鼻而避蠅則逐群而聚臭人不自知外人不堪鼻其可特哉嗜苦人不勝甘嗜甘人不勝苦幼與老不同嗜病與常異味火不可食而有食火之鳥風不可愈餒而有食風之禽口其可特哉梟雁以暖去昆蟲以寒熱蛇無足而行蟻無翼而飛體其可特哉

感之道也大也通之事也天地感應猶且不與我隔況物乎況人乎執慣據一是之謂隔賢愚之所分向背之所決也人而隔人猶海而拒川澤謂之徒一謂之徒一

與人隔之甚者衒己妨人立此倒彼其次厚己薄人其次專己忘人君子無專專孝者不友于兄弟專忠者不良于同僚專功近害專惠相疑是故君子善且不專況其不善者乎是不通於彼故徒一也彼與我並立不通故徒二也隔不隔者感應之道起伏之所依向背之所決垂位授命孰使之然患難不隔切於己也切齒相刺孰使之然喜感不通異於己也唯有己者隔不

有已者不隔
得而感不得而背見得而不知不得見感而疑背
焉知物之爲物焉知感通之道

垂綸子曰聚生散化聚散生化者天地之用也
聚散氣也生化質也氣陽也質陰也聚者陽之
之陰也散者陰之之陽也氣無象質有形生者
無之之有也化者有之之無也聚陰也生陽也
散陽也化陰也陰陽不可端倪一元氣也
生而不化天地將塞化而不生天地將盡生生化
化莫有窮已

日月水土之類雖如常有而不與生化者常能
生生化化不見其端而已山發水而生生不息
海結潮而化化不已燭光宛然不動者油氣之
自下生生也其遂不大者向外化化也如妝賊
陶冶金石土木以製器絕生生者固所持者生
不繼則化隨之故或尭或刓或敗或壞終歸於
盡雖化而生則不盡雖生而化則不大是之曰
常常生生常化化者如不與生化者惟生氣不
繼者化氣恣也持氣厚則持久持氣薄則廢早
由是可知天地亦生生化化而不已天地如不
生生化化天地間者何獨生化天地如不生生
化化古之天地正新而今之天地正故人皆曰
氣盡而化化氣者無盡生者氣也化者氣也生氣
盡焉則化氣至焉

譬如樹長子結子落樹生樹中不有子子中不有
樹而露不有之水土不有之似自無生無如可生
物腐種能拆枯樹亦榮謂有則不竢生而有
無者無也有者有也有無者忽然生生之頤玄

○無如可有天地塞化化之道微也有如可無
天地滅無者不能生有者不能變有無非天地
之道非鬼神之跡

生者益化者損生不繼而枯持絕而化大之則爲
烟爲焔爲光爲熱消散而盡餘灰一爐風吹雨濕
終不見其所歸孰能化之孰能長之孰能消之爲
卉木之多山不加高爲沙石之逝海不加淺是故
一元氣有二儀轉持在四時往來在萬物生化譬

如諸味之在鼎中其熱無不貫徹而能成各各之味天地日月山海草木水火金石毛羽鱗介

動之生多依牝牡植之生多不待牝牡皆與我在一鼎之中所薰蒸者也然而作用各異者猶鼎中之諸味各成其味不知則天地天地物我物我知則天地相通物我不隔

以車喩之車之有輪轂猶物之有天地車無輪轂不可行物無天地不可立車之有御者猶物之有氣無御則車不作用無氣則物不可立

一元氣無聲臭之可求焉散爲事物也無窮

天地日月山海草木毛羽鱗介皆物也轉持推遷聚散生化皆事也以人之天地則心者人之一元氣也以喜怒哀樂之無痕于心而應對無窮可知此無窮

物或氣化或形化子孑之生於水虱之生於膚氣結而形生然而相形化雖形化生之初也氣之化也

惟非謂形化之始則氣化也如男女構精其氣相感則身不感則不身然則雖形化氣之感而耳矣

結爲物者氣之聚也聚則形布形布則其氣有矣聚者必散散者必解解者必化聚生曰生散化曰死不知生者不知死不知死生者不通事物

人者鐘天地之秀何其隔死生不通事物唯因有己而已已以其生爲己之有死是誰分已以其身己有之彼身誰有之死生恝然物我並立似隔牆見人

生化姑言之得諸一元氣歸諸一元氣

食芻豢者其人也肥培糞壤者其苗也大芻豢非人之肌膚糞壤非苗之枝幹雖然分明見此之之彼說幽明混同者觀此一端也人死物化亦不可收說死生恝然者觀此一端也氣依物而作用聚則生焉散則化矣言無者惡知死生氣不依物則不作用未有無耳目而視聽無胸臆而思慮者言有者惡知死生或曰所歸之氣即所得之氣歟曰聚生一元氣也散化一元氣

也無所得無所歸姑以物之所生化觀之如得如歸且怯者畏死巔者不畏死高者一死生生前不問死後之疑其難於通者職此之由

垂綸子曰

連下篇而說命此篇合正命非命而言下篇分正命非命而言

曰陰曰陽統之曰一元氣曰寒曰暑統之曰歲曰男曰女統之曰人曰善曰惡統之曰心曰命曰非命統之曰如何對非命曰正命然則統之謂命亦可也命者自使然也其自使然者有可如之何者曰配命曰永命是也有不可如之何者曰有命曰俟命是也故死生榮辱治亂興廢之見於事者無往非命者死生榮辱治亂興廢自然也爲死生榮辱治亂興廢者使然也善惡自然也爲善惡者使然也自使然者誠之事也謂自然謂使然豈誠之云哉

天無意也無意猶無欲非無心之謂也天轉地持非有欲轉持之苟有欲之者有時乎已轉之不已持之不撓無爲而爲不爲而成誠者天之道也就爲謂天就成謂誠非有二也斐然成章於天地粲然爲跡於往來奚不其然以無意謂之自然以爲謂之使然然而其自然者使然使然者自然無爲者爲爲者無爲棄涓滴於海謂海水爲之增則人其信哉謂海水不爲之增則其自信哉冥冥者難見昭昭者易知日月之明纖毫不容暗焉是以穿鍼之隙莫不通其明造化之行須臾無休息之間是以彈指之頃不駐逝者宇宙萬分芥子之一亡誠焉則天地將爲之盡藁不捐藁蕕不捐蕕充宇宙而無不足入忽微無餘不知誠者焉知命之說爲善盡有福利者先爲之爲不善盡有禍怯者先避之何待君子而爲爲不善多福爲善多禍世人將何適天無意于愛憎無意于酬酢雖然人者天地之心也人有意于愛憎有意于酬酢善者人之所同欲也不善者人之所同惡也所同欲者衆歸

之所同惡者衆棄之邪終不勝正積惡終不勝積善人心之所赴有不期然而然雖不善者積者不得不富雖善者散者不得不貧雖暴厲强者力有難敵雖方正覆者勢有難支事難兩全勢難持乎事勢之所歸有不得不使然者也人心之然者事勢之使然者無意而爲自然而使然不容一髮之私是以君子見誠焉而樂命焉竊鈎之人得竊鈎之禍分飯之人得分飯之福雖有司之察察者猶不勝之縱令察察而能勝之有德有之所愉焉乎哉人之有德猶且不爲而況天乎行一善而求一報見一不善而指一報天豈以交易爲道哉於纖毫之善不善不省之以其大者禍福之則以苟安爲謀也天豈以苟安爲謀哉然而一毫之善惡遂不可揜之不得不然不得不使然無意之爲也不爲之成也猶千鈞之衡增減錙銖雖如人未覺衡未移冥冥而移者終乃昭昭不知者以爲冥冥知者以爲昭昭是以有力者進而移權無力者退而移

權禍福非敎喩之道謂則惑人義利爲分辨之
急聞則有與起

若然則不及人之臨機應變也遠矣物之縄縄一以貫之然而物莫靈於人且夫天地以人爲心
天無所不容經常變故皆然然而莫有遁于誠者心無所不具善惡愛憎皆然然而莫有違于所同欲者

擧千萬人而同焉之心擧千萬人而不同焉之心天不違之同爲公不同爲私同欲曰善獨欲曰惡惑衆曰邪正衆曰正善惡惡曰與衆同欲者也能爲善善惡惡使之與衆同者也其所獨善其所獨惡自獨欲者也爲其所獨善爲其所獨惡使之獨欲者也故不違衆之所同欲者善人也從己之所獨欲者惡人也以衆之所同欲者道人者正人也以己之所獨欲誘人者邪人也舍己之所欲從衆之所欲勲也舍衆之所欲從己之所欲肆也故善人者能養自然者愼使然者心者人之一元氣也或曰人之一元氣即心乎曰性情志氣念慮知

識心之目也魂魄夢覺視聽痛痒氣之目也心雖知覺未能專氣血之消長肌膚之肥瘠老壯之代謝爪髮之榮枯寢則不相守寤而始克復然則雖心者人之一元氣也人之一元氣豈即心焉哉

善惡者心之機也養與愼者機之事也養愼其機者能也不能養愼其機者不能也其機也微其事也大且夫愛憎不同時機難預事難兩全勢難持乎

以弓喩之弛張事也不得不弛張者勢也可弛張不可弛張者時也可弛張可不弛張者機也是故機之觸而時者哲者不能預事變之所以無窮也事之隨勢而赴者庸人必察事理之所以無二也時機不可知事勢終不可奈何故權時而動見機而作者不辱其身隨勢而上下臨事而揣摩者將辱其身故哲者愼機有力者回勢

死生榮辱治亂興廢之所以無窮也姦邪得志方正失意勢有不得不然者賢老夭不肖者壽稟受有不得不然者利者富廉者貧聚散有不得不然者非自然非使然暗取算子擲之三五奇偶參差整齊欲奇得偶欲儞得偶奇偶自然也得不得使然也然而欲不欲私也奇偶非爲己之欲而來非違己之欲而不來其自使然者與己之所欲者有會有違於是乎益足觀誠之不可揜是故不知自使然則有怨有尤否則委命委數委前定而已見而爲自然者不畏天不信道豪蕩而肆也見而爲使然者役於鬼神陷於因果局促而病矣故愼其機者養善長之推惡消之事難兩全勢難持乎善長則惡消惡長則善消善惡之所以分也善惡者好惡之本也好惡者榮辱治亂之始也善惡治亂本自然也則汲汲爲政敎者非也善惡治亂有使然則孳孳爲仁義者愚也

人難以自赴善焉然可驅而赴善矣人難以自知焉然可使之知焉是政敎之所以有之也惡可以勸善亂可以致治是仁義之所以有之也

其自使然者其惟機之神乎
是故政教者爲命於人焉得不黽黽勉勉戰戰兢兢哉政在德教由道而功莫大於成物欲成物而欲齊之猶爲不肖
齊猶同一尺之面不同億兆之才焉得齊哉雖不同而横目竪鼻之面也雖不齊而善善惡惡之心也豈相異哉政教者非二事也政以闢其道教以成其才徒政者不足闢其道徒教者不能成其才政教得而立道成物是故政教者人主之柄不可偏廢上失馭而終成二途於是乎舞文弄法之人皆執私智以鞭韃人政刑律全期以育之狹書抱才之徒各執其所見以教人其教也或未察衆之同者欲遺同己之欲者然而其學之者各生枝葉又徒之者不身之而口之言有輕聽者不信不圖乎其不容不直乎其同教立弊立從事之勢也矯此反彼失正則一也人不能無獨者不無同欲者雖獨欲者有可怨者雖同欲者有才之長短雖天地不能遣事物齊雖不齊天地莫不成者金石之爲物雖貴賤利鈍不齊各成其才依其成才有各各之用長者以長成之短者以短成之焉得執己責人東家之女肥而美西隣之婦瘠而豔苟成美則足欲其肥瘠之相同欲長短之相齊將擧世無容者故執政教而欲齊之欲同之者未有能成物不成物則孰將被其澤培養修治固也而物成於汪洋之中切磋琢磨固也而才成於寬容之中

君子固不忍不以衆之所同者及之於人故不得不以勸善戒惡而自任是以其道人也雖多術使人爲善不爲惡焉耳矣使人爲善不爲惡之心切矣至矣雖然後之君子德其所得而有道所由而行是以或依一箇之聰明或依一時之利害或急迫或迂濶或未得術或未審損益欲喩之惑之欲道之迷之欲切之迂之未可爲得天地之全噫難矣哉教之難邪抑道之難知邪其人各戴天履地之人也其形各圓顱方趾之形也其倫各君臣父

子夫婦昆弟朋友之倫也其食各火食水飲之食也其事外動作往來吉凶之事也其心各善善惡惡之心也然則舉天地間之人其所同欲者可知其所同惡者可知可得而有者可知由而行者可知

得德也行道也行者德之發得者行之實得而有者渾然不可名由而行者粲然可目由名而論者易失實由實而行者不妄失名故君子尊得者愼行者所得而有者尊則所由而行者正矣忠以事君孝以事父所由而行之目也事君則忠事父則孝得而有者之不可目也非目焉載此道非德焉總此目得者有善惡行者有邪正得其可得者之爲尊行其可行者之爲正名載實實有名故君子有實而不失名奉名而依實

天地之間豈有彼彼己己爲之分界區畫之道哉

多棄材非良工牛溲馬勃良醫尺其能

以天下之耳目視聽之以天下之心慮斟酌之有不曉者則彼之愚也未通彼言未忖彼意豈得遽非之哉

斷而聽者不能通其言忖其意聽而斷者能通能忖斷而聽者如權衡定而量物聽而斷者如隨量而移權讀書折獄最爲要

是非損益莫敎不有之擇是非審損益無偏與黨而不爲分界區畫於天地其背邪敎喩多而惑亦深命何謬人人自謬焉惟自使然也不須起波於無風故君子守可如之何之命不如何不如之何之命

垂編子曰命有可如之何者孝弟親於父兄忠信信於君上身修人從德施福隨故曰配命曰永命命之順者事之當然者人之所愉者也命有不可如之何者孝弟不親於父兄忠信不信於君上身修人悖德施禍結故曰有命曰俟命命之逆者事之不當然者人之不平者也死生榮辱於君子則謂之命於小人未可謂之命焉均是死生榮辱也或謂之命或謂之非命何邪爲可爲不爲不可爲

之外無命也
或曰爲可爲不爲不可爲者即是命乎曰否種之曰稼斂之曰穡雖稼外無穡不可以稼爲穡也農之於田種植不後於時糞壤耨耕以力之然而可望穡之多於農之可爲而爲之雖然其多寡猶有不可預者若惡獲之寡而種植不以時糞壤耨耕不力之然而望穡之多雖有獲幸也故良農者不以穡之寡改稼之事惰農倦稼之事而望穡之多

命可以俟也不可以謀也可以俟也者孝弟而遂忠信而繫自外至者我其如之何俟者非乎期之謂焉從容承之之謂也不可以謀也者不可爲不可爲而求安也足恭阿順使之幸而免則笑彼忠信孝悌不容於世者不容於世者命也苟免者幸也足恭阿順可以免焉君子豈忍爲之哉孝弟忠信不容於世君子豈忍不爲之哉故命可以俟也不可以謀也謀者不俟命而謀苟免也謀則爲不可爲也爲不可爲則非命也由是觀之君子之於死生榮辱也命也小人之於死生榮辱也有非命者有人於此餐飯而死其一人呑鴆而不死人將舍飯呑鴆乎我其雖死餐飯舍鴆知命之不可如之何也不知命之不可如之何則於不可如之何而欲如之何焉於不可如之何而如之何則爲不可爲也即是非命見危而避見利而走僥倖之求安知命之說哉貧賤不安富貴不足僅不適意則曰善不足爲命不足言天無報惡可縱設如斯而作謀幸而爲不知禍之所伏不顧辱之所隨頑然動敖然無畏設如斯而已則天其體乎君子豈惡富貴而就貧賤厭安逸而從艱難哉可爲而爲不可爲而不爲走者當之去者不追失身而致非命者好立危之地焉與義而致非命者好就利之所在也好立危之地者於可如之何者不如之何也好就利之所在者於不可如之何者如之何也

强者暴虎馮河怯者避難走利得喪存亡雖不同致非命則一也或曰水火兵歲之災人也兼千萬人而一時竭矣命固如斯乎曰命也非不

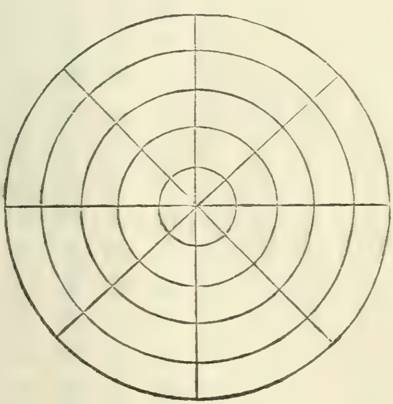
修己之所致非知而可預防不可如之何者也視水之漲而涉視火之燃而往招寇而來不耕而餒如斯命之云哉死役亦然在部下其分也不可如之何也在主將豈得委諸命哉饑餓亦然於國人命也爲牧者豈得委諸命哉

已盡自己者而不求自外者謂之有命自外者乃事之自使然也自己者機之可愼者也

可爲不可爲者在己可如之何不可如之何者在己

可爲而爲不可爲而不爲然而有事勢之自使然者謂之俟命其爲何爲讀聖賢之書忖聖賢之心辨時之宜不宜審事之損益察衆之所好惡考百家之所是非推諸事物而不謬試諸天地而不差得其可得者有之由其可行者行之偏之與黨知之末通也爲分界區畫者戰之末勝也

戴天履地之人以圓顱方趾之形食火飮水依動作往來吉凶之事以善善惡惡之心行之於君臣父子夫婦昆弟朋友之間其所同欲者可知其所同惡者可知可得而有者可知可由而行者可知先聖之所立後聖之所述○士之所發明衆人之所同欲載在典籍盡出人情○舍損益在學之人何須○、唯世之所病者有己之所得而有行己之所由行非偏則黨不殺兩可之辭則爲分界區畫戰勝不爲分界區畫知通無偏與黨與僅芻蕘爲來告善於我諸子百家爲來輔我不及



無窮象

圖解

以下之諸圖惟推擴此象而已

冥焉昭焉混焉粲焉不可端倪强名曰一元氣昭昭爲用冥冥爲體其用可見其體不可見混混爲機粲粲從機爲機者玄也從機者跡也以用爲用以跡爲跡是爲不可見以用體之從跡觀其機是爲可見從其跡而觀之則地直天圓爲此無窮窮猶盡不無窮則不足以爲天地經宇緯宙孰執無窮之機杼其自有已者而觀之則物皆歸於盡其自不有已而觀之則無物可盡謂之無窮無窮者舉窮者而不遺是以直也引之不見標本圓也轉之無端緒

有始者有終無始者無終直不見標本圓無端緒說天地之始終者未達於直圓之道若說始終則將以始之前終之後置何處乎

圓統直分奇偶相依具無數含無量之象乃爲無窮之事或絡繹往來或倏忽出沒或布置整齊或參互錯綜或懸而列之或舒而羅之常而不窮變而神也觀象於直圓

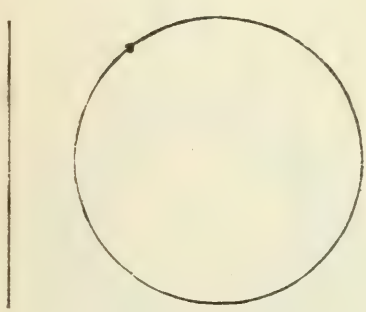
剖至不可見而不可盡焉推至不可極而不可盡焉是故無數爲一一爲二二者分也一者統也統者無數分者有數無處不此無窮是事物之所以無窮也

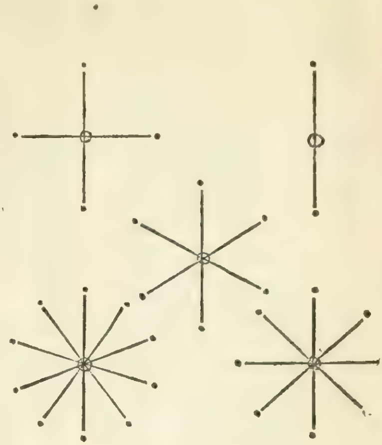
偶者分奇奇者統偶不混不離陰陽相依其一也對二則如奇十則如偶一也者統奇偶之諸數而不遺之其象亦不可求惟如一圓象之無不具者圓無數之可指點無數之遺者若冥冥乎似混混然亦不可以奇偶目直粲然無數之不可數者雖無不可數者其數無數是以無奇偶之遺者昭昭焉粲粲然是爲不可數

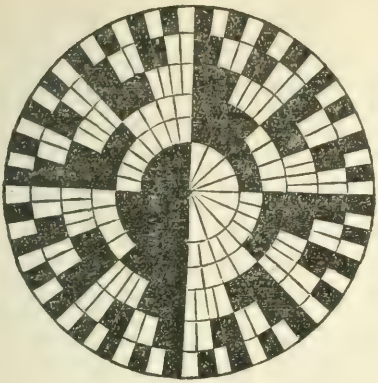
觀諸直與圓

圓含數直成數

圓統直分圓不相離直不相混







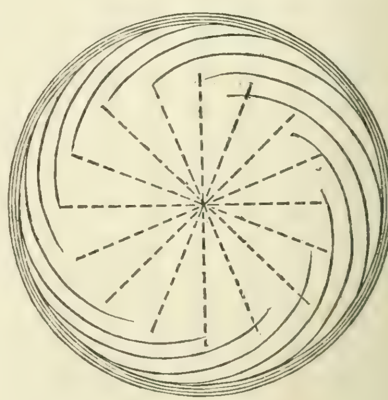
直圓不見跡變化爲神
圓含直直成圓無數含數數成無數雖不數混然不可數雖不可數粲然皆有數圓無定位直有定位故其兩端之可指者二也求之中則三也
點以指偶　圈以指奇
二三之數約之則一也橫竪之則四也求之中則五也四五之數約之則二也一竪一橫一立之則六也求之中則七也六七之數約之則三也八九約之則四也十十一約之則五也
往終可數之數還始可數之數可數者其以生一也昭昭粲粲於直乎觀之倍蓰什佰不可數毫釐抄忽不可見增之不可數剖之不可見雖不可數者能具之雖不可見者能有之冥冥混混於圓乎觀之
數極生一極者不損生者不益
益者豈不益哉雖益不爲其益損者豈不損哉
雖損不爲其損
混混粲粲惟觀此數生化之頤可以語是以古聖

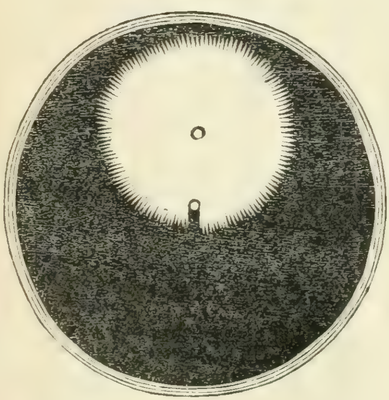
人見龜背馬文猶觀天地之全易之所以作也易象之於天地至矣其象直圓其道無窮道豈他焉哉奇之不盡偶之無窮觀理於奇偶之圖易之象分而言之圓者者直者粲粲統而言之直與圓均跡也

天地以直圓而立諸曜以直圓而照物以直圓而成

各各者之氣亦圓也鼓鐘於此東西聞一里則南北亦一里各々皆然偶不爾者風撓之物隔之普者圓也徹者直也人自有人氣而不自知物自有物氣相接則見人之當夜恐怖者人氣不勝夜氣也與人偕則不恐怖者氣之相持也不怖之人其氣之定也

然而物天地為大事動靜為微天陽也地陰也其陽亦平分陰陽其陰亦平分陰陽何則其陽亦一元氣也其陰亦一元氣也微至於不可見而不可混大至於無窮不可分天以此平分陰陽而動地以此平分陰陽而靜陽對陰陰對陽地不得不中





天不得不外在中者不得不靜在外者不得不動地在裡天在表以覆載萬物日在左烝在右以生化萬物天圓之中日聚半邊熙散半邊相追相隨爲此晝夜觀諸轉持明暗之二圓

或曰由圓觀之明之分少而暗之分多曰物皆半分陰陽一日不勝所圍之烝是衆星之所以不能無也

是故分天地以謂之於地曰氣曰質於天曰氣曰象象猶質其於地也氣者能升質者能降降者疾升者遲直之道也其於天也象者能右氣者能左左若疾右者遲圓之道也氣者動冷靜溫質者靜冷動熱象者猶幾於質是以動而爲熱之象曜也動而爲冷之氣烝也動質而之氣之靜者爲火動氣而之質之靜者爲水以左右之二成圓以升降之二成直直依圓圓依直其玄也不可見其機也不易察

或曰子動輒曰玄人皆不知而子獨知則玄云哉子知而人可皆知蓋玄云哉人之所與知則不是玄焉子之所獨知則子之私玄也玄待子而玄玄不足言玄不待子豈有子之玄哉玄如不玄不可謂玄玄如玄不須謂玄垂綸子對曰故玄

後序

人固不能無蔽蔽必成於習習必成於衆之啾啾而咻我者其蔽於俗習者學可以闢之蔽於學習者何以闢之其學也因循薰蒸猶臭人之不臭其臭屠人之不腥其腥然其立言垂教析髮簡毛非不精微超天越地非不廣大惟各執其所見而不融德其所得而有道其所由而行拾隋珠而遺和璧惡燕石而擲崑玉是非紛紛玄黃不分各依其門各守其戶或相睨視或相仇讎是非學之蔽而何其人各戴天履地其形各圓顱方趾其倫各君臣父子夫婦昆弟賓主朋友其心各各善善惡惡其可得而有者其可由而行者其可立者其可措豈有外焉哉惟所由而行者有邪正所得而有者有善惡自非聖人孰無軒輊是非擇而不審將以

紫亂朱惡而不學若瞽而忌相學之不黨思之不鑿見之不爲分界區畫取舍損益之不偏得其可得而有者行其可由而行者有不待齊之而成物則於天地其肯邪雖不可企而及志士之所期也晋自垂髫大而覆載微而動靜雖事物章著于宇宙雖是非剖析毫髮未有釋不肯之疑者

人謂火陽也故熱水者陰也故寒予則以爲陽者奚爲熱陰者奚爲寒人謂陽輕而升陰重而降予則以爲陽者何其輕而升陰者何其重而降人之思也於是而已予之疑也於是而甚隆然而凸者何爲視淵乎而深者何爲聽目何爲不聽耳何爲不見人之思也至是而闕予之疑也於是不能措之不得已之所得而有而有之者非之不由己之所由而行而行之者外之人則於是恝然予則於是乎惑人聞諸古得諸書則言予則於是猶狐疑久而似有少得者竊不自量漫爲杜譔之說以爲以跡之相對謂之陰陽以質之有無謂之天地二之道也其二者一乎二乎不可端倪其機不可測混焉粲焉其道無窮直也圓也雖動靜可知天地雖氣質可語生化或荒唐散漫而說或恍惚曖昧而疑爲二者不知一執一者不通於二終日言而不言徵謂之不稽不稽之言君子不取事物日夜與我相接我自塞焉彼焉廋哉語而無驗夢寐之語也思而偏者無權之衡也不執不隔觸而通將有玲瓏者

思之思之思之不措其積也久矣所得而行者遠也所見而察者似有小窺雖懶且病焉無稽乎古其於事物也未爲全無稽所希則將察衆之嗷嗷者質是非於天地竟著其梗槩自爲之解申之以圖與同志者偕論此玄云讀之之人若有可者則以取之不可者則以舍之是晋之夙志也

寶曆癸酉秋八月晦

豐　三浦晋識

元凞論目次

元熙論

三浦晋　著

一元氣

名づけやすからざる者あり嘗かつて一元氣といふ一元氣宇宙に充滿して秋毫の末をものこさずよくわかちよくあはせ生々化々して端倪をみず天外をつゝみ地內にやすんず然して兆朕をみざるの始より万像森羅たるにいたぞ迄混然としてたりともなくかもなきより粲然としでみつべくきくべきにいたる迄行として對あるは自然の理也必對あるものは自然なり曰天地曰男女曰生死曰禍福行として此對なのがるゝものなし天は極て大にして地は至て小也地天に比すれは一微塵なりといへども天地相依てたつ地は天の正中に在て、、、、す動かす天は地をつゝんで暫くも、、、、する事をやめず是誰かなす處ぞや今人形聲臭味をみざるを以て多くは察せず今人さして空といふも是氣の塞れる也氣のみつべきものは空間に充塞する氣也しかれど

も氣の全體にあらず一元氣は天地萬物を有質無質をあげてのこすことなし魚水中に生じて水をしらず人氣中に生じて氣をしらず人水中に手を入れば自然肌と水との隔ろを覺ふ又氣中に默座して察するに空間と我肌膚との隔るを覺へず唯肌膚の衣帶のふるゝ處手足の物に接する處と目にてらされ風にふかれて始て彼と我との隔る事を覺ふよつて人氣中に生じて氣をしらざる事をしるべし

空

氣古來氣をいふこと同じからず元氣をさしていふ事有陰陽にいふ事有進退升降明暗によつていふ事有香臭をいふ事有血に配していふ事有運動するものによつていふ事有此書にいふ處も亦おなじからず一元氣はをく唯氣とさしていふものは空間の氣也是をもつて一元氣の全體となさばあやまりおはらん又香臭をさしていふ事有聲臭色味をかねていふ事有日に對してくらく冷なる物をさしていふ事有質に對していふことあり人に於ては心性情慾をかねていふ事あり見がたきものは眼にさへぎらず夜氣眼をさへぎり晝氣明を通ず實はみるべからざるにあらず耳に應せず聲は自形なし形あるものに觸て聲をなす氣動けば風と成風物にふるれば聲あり笛をふき鼓をうつゝくその氣激動して觸れば聲あり全く聲なきものにあらず身に覺へず手久しく擧てだるく動かせば風を生ず實は覺へざるにあらずその察すべきものは氣の動くなりうごくを以て全體をさつせよ是を以て是を空といへどもよくみるときは氣充滿して髮を置の間も空處をみず蚊行喙息蠉飛

蠉動みな食によりて命をたもつ食の命をたもつものは食よく物を生養するの氣をふくむゆへに食よく腹中に入その氣升降生化して陽にして衛氣と成陰にして營血と成よく物を養ふ食も此氣なくんばいかでか物を養はん草木に水を灌ぐがごとし此水直に入て枝葉華實と成にあらねども水氣養へば枝葉茂く華實なるといへども唯呼吸有を以てなり食の物を養ふは各々具足の氣なり人の呼吸する物は天地の氣なり食の氣獨生をたもたしむる事能はず天地の氣ひとり生をたもたしむる事能はず水上糞壤、、、、養ふは各々具足の氣なり寒暑陰暗の養ふは天地、、、、、糞壤の氣ひとり草木を養ふ事能はす寒暑陰晴の、、ひとり草木を養ふ事能はす、、、、、いてのこさゞるものは一元氣なり呼は此氣をすひ吸は此氣をはくすふ時此氣一身にわたり四支百骸骨髓の中爪髮のすへいたり養はざる事なし此氣しかく身にうくといへども來るものは往く暫くもとゞむべからず此氣を吐て天地と同じからしむ此氣をはくといへども往ものは來る暫くも此氣なふして此生をたもつべからず又此氣をすふ此ゆへに大に嘯んとする時は先大に氣をすひ蓄へて始て嘯く事を得大に嘯くのゝちは從て大に氣をすふ息入時腹ふくるゝものは氣內にみつる也息出る時腹ほそるものは氣出て空處あるべからざれば也此氣よく運轉すれば各生成し

てその壽をたもつ此氣よく運轉せざれば凝滯窒塞してその病をかもし其氣つくれば即死すさして空といひさして氣といふ試に一面の團扇を地に置一面の團扇を上よりかさねて急にきびしく手をあぐれば下なる團扇上なる團扇につきて上り間ありて離る始あがるものは二面の間に氣入事能はざれば也間有て離るゝものは此間に氣入ば也又水入を製するに二孔をうがつ器に水なき時氣器にみつ一勺の水入ば一勺の氣出水入盡せば氣出つくす水出つくせば氣内にみつ睫を、、、のひまも空處なし故に一孔を閉て水を入れんとするに入ざるものは氣内にみつれば也一孔を閉て水を出さんとするに出ざる者は氣入事を得ざれば也（杓をとりて水面に俯け水中に入んとするにいらずすこし斜になす時氣出る事聲有て杓水に入）盾板樣のもの眞面にかざして行に行なやむものは盾の面の廣ふして氣をひらく事の遲ければ也斜に側れば行事やすきものは氣をひらく事の易ければ也鏑矢のをそく鋒矢のときも氣をひらくの難易也然らば空も豈徒に空ならんや

天地

天（或は形質ありといひ或は形質なしといふ此間天に有無をとくり其いはれなきに似たりといへども天は積氣なり豈形あらんや質有ものは地につき質なきものは天に歸す塵埃目も見るべからざるがごとしといへどもすこしも質をなす時は一旦氣の爲に動かされても飄場すといへども終には地に歸す明鏡淨几久しふして塵をつむを見てしるべし質なきものは地におらず雲のごとく煙のごとし質有ものは天に歸せず雨のごとく露のごとし是によつて察する時は日の明なるも月のくらきも形質ある事儼然として珠をかけたるがごとくならんや今是を疑はんとならば燐火龍燈のをこるその蹤跡をみずといへども依然として光あり況火木につひてもゆといへども又その質なし日已にかくの如し月體も亦しからん日月已にかくのごとくんば天豈形質あらんや）地の氣即陰陽の氣なり象形よりして天地の氣といひ往來進退よりして陰陽の氣といふ天氣運遷してやまず地氣靜にして持す地中を守つて動かず天外に轉してやまずその中間常に靜なりその中間つねに靜なりといへども四方上下（天地の全體をしろものは四方上下をみず今四方といひ上下といふものは

かりに吾なる處よりしていふもし上下といはゞ地心即下なり吾いたゞく處即上なり上下は行處に從つて轉す我下とする處地心を過れば又上なり北極をいたゞく人よりしていへば南極をいたゞく人はさか立がごとく赤道をいたゞく人はそはたつがごとし天よりしていへば中間の氣よく地を持する事車の輪外にめぐつて幅外に散ずる事能はず盡軸にむかひ軸又偏倚する事能ざるがごとし地よりしていへば中間の氣天をのする事車の軸幅をうけて外にめぐる處の輪陷り整ると能はざるがごとし

の氣盡地にむかひつくがごとし質あるものを以てみれば地氣正中より物を吸がごとく天氣運遷する處の天氣に非ず唯上の氣といふがごとし外より推がごとし今試に一條の繩をとりて提なんに此繩自正しく地に下りむかふ此繩上よりをすにあらず下よりひくにあらず是質有物の氣地にひき地質あるものをひかずんば是を仰ひで立ん時繩自竪横ざまになさん時自横たはらん又質な



きものよりしてみれば天氣是をすひ地氣是をおすがごとし雲のごとく煙のごとし得てとゞめんと慾すとも得べけんや已に氣有事かくのごとし徒に是を空と謂てやまんや中間常に靜なる處の氣升降相碍ずして靜此靜の字尋常に首過すべからずなる時は質ある物直に下り質なきもの直に上る其氣うごく時は靜なる時はさして空といひ動く時はさして風といふ升る物升る事能はず雲煙横ざまにとび降るもの降る事あたはず雨雪斜に降る天體圓なり然して地體も圓なり唯山海あつてずこしき凹凸あるのみ質あるもの下らざる事を得ず質なきもの上らざる事を得ず分つていへば上るものは氣也下るものは質也すべていへば升降一元氣の作用也鳥のとんで天に入や氣なり久しふして地にくだらざる事能ざるものは質あれば也人のたつて用をなすや氣の動くも也故に兩脚相扶けて危からず頭たち手周旋して耳目鼻口各その用をなす眠るや此氣の攝せざる也故に兩脚有といへども相持する事能はず首かたむき手たれて耳目鼻口各その用をなさす動は氣の然らしむる也靜は質の自然なり氣のしからしむるものと質の自然とを合て用をなすものは一元氣の作用なり天地圓にして上下なき時はいづくをか下とさしい

づくをか側とせん天地の全形目を以てみるべからず心を以て推べし上下四方なきゆへによく轉じよく持しよく升りよく降るもし上下四方有はいかでか此妙をつくす事あらん上下四方あらずんばいかでか此妙をみることあらん四方上下人の強て按排するものにあらずなしとするものは今日の作用をしらずありとするものは元氣の妙用に通せず天地は圓なりその理は直しその理は直しとは日月回曲の處を照さず日月の食のごとき寸分をいつわる事を得ず眼回曲の處を見ず一圓中に直をくして地も偏倚する事能はず日月も私照する事能はず故に準繩以て天地を察すべしたとへば眼物をみるがごとき矢の直に行く回顧せざるがごとし眸子のさす處一線直に透つて萬里の遠きも一分をまくる事を得ず又眸子物をみる處とみざる所との界四方つねに分明ならず唯茫々然たるのみ唯玲瓏として一分物をみる處は一圓中の一點なるのみ今方圓縱横一分をゆがむれば規矩を以てせずして日先しろものは此直と正とあれば也規矩準繩の方圓をしるも我眼の圓と直とを具すれば也我眼の圓と直とは天地の圓と直と也故に智圓ならざれば天地をしらず事物に通せず物我を隔て百家の說にまどふ行直からざればこゝになづみかしこに躓く智直からざれば姦邪放辟にして顧るをしらず行圓ならざれば人の爲に好惡せられ跡なきにいたる事を得ず

陰陽

陰陽は一元氣の用をなす處也陽氣は熱して明なり陰氣は寒してくらし二氣つねに往來進退してやまず陽氣はその光を日に寓するものなり故に日纔に地底を離るればその影こゝにてりその暖こゝに在日と地上と相距事數千萬里その光をこゝに運び其熱をこゝに運ぶとならば日出て久しふして始て明に久して始て熱すべし天日出れば即てり天日入は即寒ししかれば光と熱とは日に寓するや唯日よく熱と光とを畜へて是をはなつとならば實に來往の跡あらん此陽天に在ては日と成地に在ては火と成日の光と熱と火の光と熱と各々の氣なり故に寓すといふ寓するものは有す木をもんで熱あつまる熱あつまつてひかるひかるものをさして火といふ是陽熱と火とに寓するや火出て又よく熱しよく光る是寓するに因て有するや本是寓する處の氣有する處の氣と隔ざれば也もし寓する

處の氣なふしてよく有する處の氣用をなすとならば往來進退なき事能はじもし往來進退ありとならば火を擧る事久して一室てり目をひらく事久しふして日月をみん火いたつて物をてらすにあらず物むかへて火にてらさるゝにあらず目至て物をみるにあらず物來て目にみらるゝにあらず此氣よく隔たるゆへに來往ある事なし又陰氣は暗ふして塞したとへば一室の内窓を開けば玲瓏として明なり閉れば即漫々として黑しひらく時の明外より來るとならば吾いまだ外の明の滅するをみず外の明來らずとならば閉るにのぞんで此暗何の處より來るぞやもし此明外より來るとならばひらく時その暗何の處に潜まりとづる時その明何の處にかさる表をたつれば表影地に有り質有ものは陰なり陰氣の寓する處寓すれば有りするがごとし其氣の隔ざればなり質有ものは影隨ふ又來往ある事なし此影表もとより有するか有するとならば此影日の爲に短長横斜せられじ有せずとならば此氣いづれの處より來るぞや此故に陽一分を進れば陰一分を退く陰一分を退れば陽一分をすゝむ進退來往して間斷ある事なし其玲瓏として

明なる時晝也晝といはざるものは陰陽二氣の作用をとけば也萬里の遠きもみつへし秋毫の微も察すべしかくみつべき察すべきものは陽氣の通ずるか眼力の透るか眼力の透るものは眼は陽氣の寓する處故に陽氣と德を同ふし眼通と透と又隔なし眼閉て物をみず天くれて物をみず天あけ目ひらひて萬物玲瓏たりよつて陽氣の作用をしろべし日力よく通ずといはゞ目を閉ればなんぞみざる眼力よく透るといはゞ暗中なんぞ物をみざる陽こと〲く陽の用をつくす始て陽の全き物といふべし今日よく物を照して人をして物を見せしむる事能はずよく照さしめよくみせしむるものをかれて陽の全き物といふべしよつてしるべし日も又場中の一物目も又場中の一物たる事な大山前に峙ち洪河前に横れども見る事能はざるものは豈眸子の明ふならんや陰氣の滓々としてふかくさへぎれば也日は明を通して盲者をして見せしむる事能はず夜は暗く塞て明者をして見せしむる事能はず作用各異なり是を以て日は陽の寓する處といひ氣は陰なりといふ後面の注を相照すべしいはゆる明玲瓏として通ずるものをもて本然といはゞ黑滓々として遮るものは何ものぞ黑滓々としてさへぎるものをもて本然といはゞ明玲瓏として通ずるも

のは何ものそ暗ふしてさへぎるものも一氣也明にして通ずる物も一氣也徒に日のみ明なりとおもふ人はくらきを本然とし明を客とす徒に夜色は地影の行處とのみおもふ人は明を本然とし暗を客とす明日にあらず暗地影の行處にあらずといふにあらず或は暗を主とし或は明と主なすら未見透さゞるなりみな一元氣の作用をしらず明ざれば暗おひ暗されは明追ふ何れをか客とし何れをか主とせん故に明絶せば暗つきん暗つきば明絶せん夫明ば發揚の氣あり暗は發揚の氣なし陽氣はつれにすゝむがごとく陰氣はつれに退くがごとし暗中に火を點ずるや明すゝんで四方をてらす暗退ひて四邊にさくるがごとし暗はすゝんで明の分に入事能はず明はすゝんで暗の分に入しかれども明一分を減すれば暗一分をます豈よく全すゝまざるものなからんや發揚の氣なきときは其明をして宣布する事能はず海水燐火魚鱗草木も皆明を含む海水燐火魚鱗草木の光はみな陰分に得るがゆへに物をてらす事能はず明を含んて物をてらさゞるものは發揚の氣なければなり炭は發揚の氣少し物をてらす事明ならず燄は發揚の氣多し物をてらす事明也豈明なるものみなよく物を照すといはんやよつて思ふべし日は陽氣の寓するもの也日明なるがゆへにてらすといふにあらず此處いひがたし日明ならすといふにあらず日のよく發揚の氣を寓する事をいはんと也能てらし能明なるもの日に寓する也日影の至らざる處くらし日遠ふして寒冬也し陰の氣と色とをしるべし日の至る處明なり日近ふして夏也熱す陽の氣といろとをしるべし或人の曰日は現に象あり故によく其光を天地にしく今予がいわゆる陰氣なるもの其滓々として黑きはみつべしといへども其さす處をみず予是に答へて曰くらければ眼に其くらきをみるくらふして其外にくらきを見は是をくらしといふべけんやその上天地の間對なきものなし跡あれば對あり夫日月星辰の天度における整齊して一毫をたがへず然れば風雨陰霽のその間における錯雜して變態を盡すべし況十里風を同ふせず百里雨を同ふせず五運六氣豈よく世の變態をつくさんや象有ものは象なきものに對す陽象あり陰もし象あらば豈陽に配すべけんや古來月をさして日の敵對とす故に日を太陽と稱し月を

太陰と云大は小に對し夜出るは晝出るに對し高きはひきゝに對すしかれば月を日の對とせんも亦可也しかれども日は陽氣の充滿する處よく天下を晝ならしむるものやよく天下をして晝ならしむるものはよく天下をして夜ならしむるものに對す月は五星の屬なり五星つれに日を環つて進退す月も亦日に隨つてよく轉す然して最下にあり最下にありて地體にちかきがゆへにその體くらし天にあるがゆへによく明なかる已に象あり象あるものに對すべからず況全く夜を以て出る事能はず天下をして夜ならしむる事能はずその體くらしといへども猶よく明なかる明なるものに對すべからず日はよく熱して月は寒する事能はず太陰の名實に失せり太陽と配して太陰といふべきは唯この陰氣は日はよくてらし此氣はよくくらからしむ日はよく熱し此氣はよく寒からしむ日はよく象あり此氣は象なし

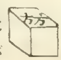
又曰對なきもの子何を以てか是に對せん曰對あるもの有て配す豈我配するをまつべけんや唯一元氣とは有無動靜明暗方圓にあらず總に有無動靜明暗直圓

古來方圓といつて直圓といはず方は造作にわたる直は自然なり直中に方を具し圓を具す方圓の相對するは日月の相對するがごとし直圓の相對するは日と氣と相對するがごとしいかんとなれば圓は形象有天地日月のごとし天地日月の圓なるのみにあらず露形水紋火煙水圓ことごとく圓形を具す唯物によつて横斜長短あるのみ直横たゆれば平傾れば斜端と端とを合すれば圓是を折れば三角なるべく四角なるべく五角なるべく千萬角なるべし又一直の物を以て一周轉すれば圓なる事を得又一直物を以て四に配すれば四方を得上下にをけば六合を得故に直は自然也方は有意也其說いかんとなれば圓は自然の形なり故に上より臨み下より望て側て見傾けみれども唯圓也轉輾欹側すれ共圓を失せず又自然にあらずや方は扁にして方ならば四隅四隅なるものは二面二面四隅いかんぞ自然といはん方にして方ならば八隅六面自然のものにあらず唯一直四隅八角六面

扁方

四隅二面二　面は表裡

は面あけてそなへざる事なし唯一直上下左右より望んで其直を失せず目に準繩ありて物をみる事一毫をたがへざるがごとし



元來圓は自然の形直は自然の理直繞かたちをなせば本末あり是が形をなさゞれば一直本末なし方となせば角あり角あればつくる事ありつきば陰陽をかたるにたらず故に圓は無意の形方は有意の形直は無形の理也眼の直と圓とを具する事前に已に是をいふ有意といへ共自然なるものは直中に是を有すれば也圓は端なし方は端あり圓は轉じ方は轉ぜすといはゞ端あり轉ぜざるもの直中に有す圓も亦端あり圓も又轉せす方も又轉じ方も亦端なしよく心を潜すんにいかでか得る事あらん

直可二

圓圖一



直可二方圖二

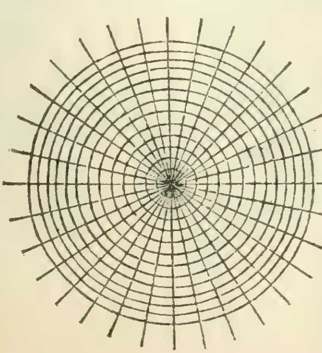








よくおもへ方中の圓々中の方天地をつくす事能はざる事をもし圓中の方お中の圓各ありといは



此條引而長

此圖引而重之

ど粲々然たるものゝ混々然たるにいづる事をしらざるに似たり一元氣は元來無窮故に天地無窮故に萬物無窮故に圓一畫を限れば圓の全體にあらず唯圓也分界をたつるものはしばらく數をいふが爲にまふくるのみたとへば地まどか也その上つれに靜なる處も亦圓也月天も圓也日天も圓也衆星天も圓也宗動天も圓なりしかれば其外よりして外千萬億此圖つくべからず此圖つくべからざれば此直つくべからず故こゝに無窮の圖を顯してしめすもし此圖つくべしといはば此外にひたすらに圓をそへひたすらに直をそへよいかんかおしてつくさん縱此圖や縱横轉動をして極る事能はず然して本あり末より以て無窮の妙用をしめすにたれり方は造作にわたらざる事を得ずは唯一直一圓實に進分區畫を以てつくすべからず又造作にわたらず〕といへば陰陽なりしも有無動靜方圓の外といはゞ又予がしる處にあらず人々自意解ずべしいかんぞ喋々として口舌を以て論ずべけんや問者點頭す

寒暑

熱唯日より來るといはゞ寒何れよりきたるぞや寒暑は陰陽の氣也もし日唯熱すといはゞ夏至熱し冬至寒すべきに今夏至を過て熱すゝみ冬至を過て寒すゝむ春秋二分溫涼ひとしかるべきに秋分暑にたへず春分寒にたへず〔正帶よりしていふ〕是自寒暑の氣の進退する有唯日のみ熱するにあらざる事をしるべし夏夜時として晝より熱し冬日時として夜より寒し變化參差たるものは陰陽錯雜する也陽氣すゝむ時陰氣退く陰氣すゝむ時陽氣退く此氣〔寒暑往來の氣〕はつねに日に後れて往來す故に日退ひて暑すゝみ日すゝむて寒又すゝむ寒熱の往來するや地上寒して溫地下に欝す夏は地上熱して冷地下に聚る盛夏金をとかし石を焦すといへども其陰をして失はしむる事能はず盛冬地を裂水を凝すといへどもその陽をしてつきしむる事能はず〔盛冬器中に水をたくわふるに氷る事甚しければ器わるその氣の收斂する事をしるべし夏日器中に物を貯ふるに腐爛して器を敗るその氣舒散することをしるべし〕

水火

水火豈別物ならんや此氣ふるゝ事陰にして水と成ふるゝ事陽にして火と成しらざるものは見て別物とししる者はみて一物とす〔今こ

ヽにもゆる火薪をはみつくせば火隨て消ゆ此火きへてその熱その物何れに歸りおさまるや今こヽに蓄ふる水日に照されて上に入て終に涸る此水つきて此寒此温いづれにか歸りおさまるや火きへ水つきて始てその始をおもふべし火を以て水を煮る火きへて猶その熱を水に寓す水の冷退ひて那の一方にさるや久しふして舊きに依て冷や此冷那の一方より來るや水の冷陽のわくに從つてつきさらば長に熱すべししかれども此湯をして長く熱せしむる事能ざるものは冷又つくべからざれば也影像聲臭のもとむべきなきふかく此機に達せずんばいかにしてか一元氣の作用をしらん地に火水有は人に悲歡あるがごとし悲歡豈他あらんや吉にふれて歡ひ凶にふれてかなしむ今かなしめる心即さきに歡へる心也悲歡他心なしといへどもその已に發して歡となるや歡轉して悲となすべからず已に發して悲と成や悲轉して歡となすべからず元是一氣の用といへども火又水となるべからず水又火となるべからず五行家の説五行生尅を以て作用をとく千事萬物みな然なりしかれども生尅は物々みな始終を相なす唯一陰一陽相往來して生々化々するのみ水よく火にかつ火又水をからす火金にかつ金又火を隔つ金木にかつ木又金を刻しむ木土にかつ土又木を腐しむ水よく木を生ず木中又水ありよく火を生ず木又暖氣をかつて生ず火よく土を生ず土中又火あり土よく金を生ず金さひて又土と成水よく金を生す水中金あり地上形をあ

らはすものは木火土金水と含異のみしからば六といはんも可也含異のもの五行を有すといはゞ五行も又五行を具すといはんしかれども五行は非情のもの含異は有情のもの五行と云も是也又五行を四方中央に配することも纔に北極以南赤道以北にいふべきのみ南極以北赤道以南又配すべし唯水火位をことにするのみ亦道をいたゞくの人はいかゞ配し得ん故に又配も又なすむべからず五行は是也生尅はなつむべからず未發以前は混沌然たり發して後は粲々然たその粲々然たるもの各生化して又混沌然たりその粲々然たるの間も亦混沌然たり其の混沌然たるの間も亦粲々然たり人誠に混沌然たるに居て粲々然たるに應せは是を用ひてつくる事なけん粲々然たるを見て混沌然たるをしらずんば知力恐らくは窮する事あらん混沌然たるに處て粲々然たるをしらず故に虛をふみ空に駕して歸る事をしらず人倫を土塊のごとくにして以て自得たりとす粲々然たるに處て混沌然たるをしらず故に死生に恐懼し物我をへだて禍福の相隣る事をしらず死の源は生るゝ日にあり禍のみなもとは福なるの日にあり財をつむの家は財散する事あり財をつまざるの家は財散せず子なき

の人は子の憂なし財をつむの日の歡喜は財散する日の悲をなす子にわかるゝの憂子をうむの喜になるひきゝにおつる人は高きにのぼれる人なり一郷火あり家々財を出し老をたすけ幼を携へ紛々然として或はなき或はさけぶ一貧者あり妻子なし人の家をかりておれり火のおこるをみておもむろに出静かにさけ塗に一樽のすてたるをみてよつてのみ恬然として人の奔走するをみる此人は始て種々の慶賀福澤をつまざる人也故に此日に至つて失することもなくかなしむ事もなし此日大に憂る人はさきに大に樂める人也此日すこしき失する人はさきにすこしき得たる人也こゝにくらき人は積て散せず生れ死なざらん事を欲す妄も又甚し又しつていとふ人は吉凶得失のさかひを出高くふんでかへりみず又世と異なりよくしげよく處ずる人に至て始て得たりといふべきのみ

造化のわたくしなきを察せず道をとく事同じからず學も又專門あり己を己とし彼を彼とすれば各涯分あり各涯分あれば人の是非をきくに暇あらず人の是非をきくに暇あらざれば語て其心を忖る事能はず訟を聞て其情を察する事能はずつかふて其材をつくさしめず惡んでそのよきをしらず愛してその惡をしらず學をおさめて其意を得ず

道をとく事同じからず故に彼々が分を有し己々が分を有す各その分を有すれば涯分なき事能はず涯分あればせまからざる事能はず涯分せまければ人と戰ざる事能はず戰へども彼が非をならしかれが善をとる事能はずとる事能はざれば獨己が分をせばむるにたれり故に彼我是非をせめて是非あたらず戰をして服せしむる事あたはず我渠が是非をせめて是非あたらず渠をして我にふくせしむる事能はずこゝに於て旗をとつて壇に上り三軍を指揮し天下をして了然としその是非をしらしめその能をつくさしめ其費を省しめよくその禮を損益せん事必予三教中の人に待事能はず

しからざれば兩可の言を設けあるひは渾合の說をなす悲夫

物氣

其既に形をしくや天地日月山河草木人物各形あるもの也

形は象と質とをかれていふ

已に形を各々になせば氣も亦各々也一元氣の未動ざるやはかる事なし動けば則形あり

動ざるとは動に對して靜といふべからず纔に動靜と說ば靜も亦しかるべし又一元氣あつて然してのち天地万物ありといふにあらず一元氣は天地万物と同じく始をみず終をみず動靜つれに行れ生化同じく行る

形あれば聲臭色味なき事あたはず聲臭色味も又氣なり

臭は香臭をかれて云臭氣をば人さして氣といふ聲色味は人未さして氣といはずされどもみな氣なり唯察せざるのみ光彩も色なり形摸而可知色等口可談耳可聽目可見聲色臭味〇形手可摸而可寫口可談耳可聽目可見聲色臭味不然待耳目鼻口始可知耳譬間人書云其黑如何其白如何其苦如何其甘如何其香臭如何其清濁如何口不能談摸寫不親接其氣不可如之何如形容摸寫可知暗中

可知視而可知聽而可知天地の氣激すれば風と成風物に觸れば鳴動す人の氣激すればよく言語歌哭す万物みな然り但氣激すといへども物によらざれば聲ある事能はず但物によらざれば聲有事能はざるのみにあらず物によらざればば氣激せず氣よく物を生じ物よく氣を激し氣よく物を激す又端なきのみ已に纔に形をなせば聲なき事能はず已に纔に形をなせば臭なき事能はず已に纔に形をなせば色なき事能はず已に纔に形をなせば味なき事能はず物誠に聲臭色味なき事能はずといへどもその物によつて聲にかつもの有臭にかつものあり色にかつもの有味に勝もの有聲臭色味は各々の氣也元氣氤氳して萬物を生ず此氣なければこのものを生ずる事能はず此氣は賦與する處の氣此氣なければ此世をたもつ事能はず此氣は各々の氣也元氣物に賦與して各々の氣となる各々の氣元氣に外ならずといへども已に各持する處あれば火氣水氣相隔るがごとし故に形をはなれて聲臭色

味立事能はず形有て聲臭色味なき事能はず聲臭色味は天氣に屬し形は地體に屬すいはゆる各々の氣とは天地の轉持日月の明暗より人は人の氣あり物は物の氣あり聲臭色味寒温升降みなかれいふ磁石鐵をすひ琥珀塵をすふがごとし磁石と鐵と相さる事數寸鐵自より磁石自ひく此間豈目と思慮とを以て察すべけんや鐵は自感するのみ鐵なき時磁石鐵をひくの氣をやめんや肉の器にある人は未その腥を齅すといへども猫兒はしる事有盛夏のあつきも痁を病る人は戰栗す已其氣に接せざるを以て豈この氣なしといふべけんや磁石よく鐵を引て藁をひく事能ざるものは磁石の氣塵と相接せざれば也琥珀よく塵を引て鐵を引事能はざるは琥珀の氣鐵と接せざれば也磁石と琥珀と塵と鐵とを一處に於て琥珀磁石の氣をまげず磁石琥珀の氣をさへず玄なるかな磁石塵をひかざるを見琥珀鐵をひかざるをみて豈その氣なしといふべけんや故に其氣よ

く人と感ずるものは人その氣をしる人と接せざるものは人しらず鼠は大なれども猫兒を見てわしる蛇は長けれども蛞蝓をみてさくもし其形の優劣をしていはしめば老鼠長蛇かの猫兒と蛞蝓とを恐れんや草木水を得て榮へ人物食を得ていく其氣相あへば生令行る海參藁を見て流れ蛞蝓鹽にあふてむなし其氣相背けば化令行る雨ふらんと欲して礎濕ひ霧なんとして鳩雌をよぶ彼豈知覺分別して然して後陰霧をしらんや此氣感ずれば相挽磁石と鐵との類相動かす雷聲地を動かし鐘音屋をうごかすの類日を見雪を見て目明をはつ聲よく物をうごかすのみならず色も又よく物を動かす臭味も亦しかり耳の宮商に於てし目の明暗に於てし鼻の香臭に於てし口の苦甘に於てするがごとし色を見て心動き雛を見て心いかる形未相近づかず氣は早く相感ず此氣接せざれば鼻の明暗に於てし目の香臭に於てし口の宮商に於てし耳の苦甘に於てするがごとし紅未紅ならず醋未酸からず醋を得て始て紅に麴を得て始て酸し此紅此酸何より來るや盖氣得て色をなし氣得て味をなすや肉未甚腥からず火又腥氣なし火肉相得て腥も亦甚し是氣々相得て臭をなすや鐘鼓霧なんとして聲亮雨ふらんとして音濁る氣の聲をなすにあらずんば豈此聲をしてよく變せしめんや聲色臭味一定なるもののごとしいふ心はにがきは一定して苦し甘きは一定してあまし赤きは一定してあかし黒きは一定してくろししかれども此聲色臭味は人の相接し相感ずるよりして此聲色臭味あるのみ此聲色臭味他の物をして見せしめば豈又一定なるべけんや人の夜氣に接する物をみる事能はずして梟はよくみる人の晝氣に接するやよく物を見て梟はみる事能はず綠と黃との日に映ずるや綠は綠にして黃は黃也燭の光に映ずるや綠は青きがごとく黃は白きがごとし日此色をもち來る歟燭此色を奪ひ去るか色日と燭とに因て轉ずるか目又よく轉ずるか日暮東邊に虹をみるがごとき西人はみて東人はみず何ぞ裡面は淡して表面

はこき中間の露日に映じて五色粲然たりもし日によつて在といはゞ日の轉ずるに隨つて色も又異なり日此色をなすといはゞ日陰つて其色を失ふ水上に月影を弄するも其處に隨つて異りしからば色も一定すべけんや嗜酒の人は酒を旨しといひ酒を嗜まざる人はさして苦といふ煙草を嗜むの人その辛をしらず嗜まざる人は其辛にたへず同じく人として尚其味こと成物の聲ある聰者はきゝ聾者はきかず同じく人として尚その聲ことなりしからば聲も豈一定とすべけんや人は寒にたへず鳧は水寒をこのむ人を以てみれば水中すむべからず魚を以てみれば氣中居べからず蠶は礬石を見てこへ鼠は礬石を食て死す鹽は茶菓を藏めてくちず衣帛に入は腐爛す感ずれば得接せざればそむく背くをみて感ずるをしらず感ずるを見てそむくをしらず豈聲色臭味の說をしらんや各々の氣も亦圓なりたとへばこゝに鐘を皷す東にきく事一里なれば西南北も亦一里上も又一里地遮らずんは下も亦一里香臭寒熱みなしかなり偶かくの如くならざるは風之をたはまくせば也人は自人の

物

氣あり自しらざるものは腋臭の人自その臭をしらざるがごとし物自物の氣有物々相接すればみろべし接せざればみるべからず人夜はをそるゝものは夜氣にかたざればなり相伴へば小見といへども安んずるものは氣相持すれば也偶をそれざる人はその氣のよくたればなり

機

ゆくとして一元氣にあらざる事なふして一元氣の機に動以前一元氣は誠に思議し安からず思議すべきは唯機かその機ふかく察せずんばいかでかよく其玄を見ん機は發動の機也たとへば鳥をとらへて手にあるがごとし末殺活に意なき時は是を殺といふべからず又活といふべからず纔に殺さんとをもふ殺の機纔かに活さんとをもふ則活の機巳に殺し已に活すものは機以後の事即跡也殺活に意なき時豈思議すべけんや思議すれば機うごく故に一元氣は思議し安からず思議すべきは機なり機は陰たるべく陽たるべきの機やもの機を一元氣の外にもとめば轅を北にして越に行一元氣は明暗有無動靜故此ゆへに一元氣の機をしらざれば人をせむるに其そなはらん事をもとむ又よく此機をしる人は剛者をば剛につかひ柔者をば柔にもちひ牛溲馬勃もその能をつくす事を得なんの棄物かこれおらん況や剛者に柔をせめ柔者に剛をせむるをや秀才大賢もその力をつくす事を得ずなんぞその餘をや此ゆへによく此機をしる人は晝々の用をなし夜々の用をなす故に陰陽みだれず天地位すしらざれば晝夜の用をなし夜ひろの用をなす故に陰陽みだれ天地位せずまとへる時は晝をみて夜をせめ夜を

以て書をせむいかんぞ天地も否塞せざらん○對有ものは皆機以後也故に明なるものは暗き事能はずくらきものは明なき事あたはず有ものは無事能はず無ものは有事能はず動静直圓みなしかなりよくくらからしめよく明かならしめよく有しめよくなからしめよく動かしめよく静ならしめよく直ならしめよく圓ならしむるものは一元氣也物誠にしからしむるもの有てしかるがごとしある人の曰火無より生じてよくもゆ燃る時明也きへて又くらししかればよく明ならしめよくくらからしむるにあらずや曰否是をいふにあらず火未生ぜざる前さして是を火といふべけんや火きへてのち又これを火といふべけんや已に是火暫時もくらきことあたはず有無動静直圓をあげてみなしかり

直圓にもあらず又豈これが外ならん聲臭蹤跡の端倪すべきなふしてよく事物を具足す機已に動此動非二動静之動一けば陰あり陽あり已に陰陽あれば形あり可知覺自可知覺以上形は相對せざる事能はず故に形あれば或は剛或は柔或は高或は下剛柔をなす事あたはずよく剛ならしめよく柔ならしめ高ならしめ柔ならしめつくさしむるものは一元氣也此氣や天を運轉してやすまず地を維持してたゆまずよく剛なり日の明を隔てず耳の聰を隔てず香臭よく通じ升降よく阻てず四體のふるるにさゝへずよく柔也静なれば紙窓を透さず剛ければ大木をぬく是を剛柔を以ていふべからず天地の大なるも此氣充塞するものは至大なり一微蟲といへどもよく其氣を具足するものは至小也蜘蛛の子のはじめて巣を出るやその細比類なしかれどもよく耳目手脚を具足し一段の知覺運動あり人みればこそあれ蚊の睫にすくふむしなからんや一元氣の作用その大みるべからずその小みるべからず其剛しるべからずその柔しるべからず剛柔にあらざるが故に剛柔の妙用をつくす大小にあらざるがゆへによく大小の妙用をつくす有無動静を諸象をあげて皆しか也よく其顯によつてその微を察しその機をみて其玄をおもへ

數

數は無數に生じて無數になる其說いかんとなれば一を積で十百千萬相倍し相什し終に其終る處を見ずその終る處を見ざるに至て數なしとせば可ならんや一を分つて三となす毫釐秒忽目みる事能はず術推事能はず終にその盡る處をみずその盡る處をみざるに

至てなしといはゞ何を積て一をなすや故に數は無數に生じて無數になる無數即數也故に一よりおこし得て九に至る十又一也百又一也千万億も亦一也此故に數は九にとゞまるといへども唯天地をかたるべきものは一歟一ははじめてなれるもの也二は一と一とにして一に對するもの也故に三は二と一と四は二と二と五は一一一一一と六は二の三なるもの六八十に至て二をかさねてなる七九一の數によらざればならず五人あるひは五の數を自然といふ五の數を自然といはゞ三四も自然なり六七八九も自然なり故に一元氣の用や陰陽也陰陽は二なり二なるものは即一と一と也故に陽こと〴〵く陽なる事あたはず陽中陰あり陰こと〴〵く陰なる事能はず陰中陽あり今試に五つの指を數ふるに母指を以て一とすれば食指は二也中指は三也無名指は四也小指は五也小指より數れば小指一無名指二中指三食指四巨擘五食指よりかぞへ中指よりかぞへ無名指よりかぞへ又定らず唯二とは前の一をかへりみて二といふ三はまへの二をかへりみて三といふ前を顧ざれば二も一三も一四も一五も一故に十とは一一一一一一一一一一もし九をとめて九とし八をとめて八となさば又執着してそのもとをしらじよく一をしつて十をしらば二三四五六七八九みな自然なる事をしらん數實に推べきものは一よりして九推べからざるものは一以前十以上今數をいふ人此窮をしらず唯に己が智力を以てつくさんとす唯しるべきは其大數のみ今圓にして圓なるものゝごとき實は術數の及べきにあらずすて一以前十以上によつておもはゞ得る事あらんふかく此數理に達せば將に得る事あらんとす父の父を祖父といふ祖父のちゝを曾祖父といふその父を高祖父といふその父よりして父是をまへに推してしるべからず子の子を孫とす孫の孫を玄孫とす來昆仍雲是をしりへに推てしるべからず天外又外地中又中是を内外に推てしるべからず西面の左は東

面の右是を左右にをしてしるべからず是を前後左右に推して知べからず是を終始内外に推てしるべからずよく一の數をしる人始て得てん是をしらざるゆへに天地をもうたがふ死生をもうたがふつゝしんで思ざらんや始なきものは終なし天地の説をみるべし始あるものは終あり死生の説をみるべし

生化

聚れば生ず散すれば化す聚散生化は一元氣の用をなす處にして天地の常也生じて化せずんば天地も塞らん化して生せずんば天地もつきん生々化々して窮りやむ事ある事なしあるは大地或は日月あるは海水等のごとき常に有て生化にあづからざるがごとしといへどもつねによく生々化々す唯その端を見ざるのみ水の源を山に發し淡々として生じてやまざるものは生々してやまざる也海に入てみたざるものは化々してやまざる也井をほつて井をうづむその土たらざるものは化する也自然に其凹塞るものは生ずる也又一點の燈のごとき其光宛然として動かずといへども油氣をかるものは下より生々する也然してその火大ならざるものは化々する也たとへば木金土の類を以て器を制するやその物をきりその性をたちなし得たり故に生ずるの氣なし唯これを持するの氣あるのみ故に漸々に或は禿或冠れ或は敗或は壞終につくるに歸す

是生の氣繼ずして化唯化するにまかすにば也化すといへども生ずればつきず々の氣たゆれば化の氣いたる唯持するの氣あつきものは久しく持の氣うすきものは短し是によつて天地も生々化々してやまざる事を知べし天地も生々化々せずんば天地間のものなんぞ生化せんやたとへばこゝに一樹あり花を開き子を結ぶ此樹もとよりこの花實を有せず實にしからしむるもの有此子地に落て自然雨露寒暑の氣をうけて枝葉根幹と成る又此子この枝葉根幹を具するに非ずよく生々して生々のうちにも化々行る實熟し葉落るの類化中生あり此子又木を生ず大木をなす今顯に此大樹ありといへども本來この木なし又その子も本來なきもの也且此子この枝葉根幹を具せず雨露寒暑も又枝葉根幹を具せず是一元氣の作用にあらずしてなんぞ然してその薪となるやその氣あるひは煙と成光と成焔と成熱と成消散し盡して纔に一爐の灰を餘すその灰と成ものゝ久しふして風吹雨濕して終にその歸する處をみずもと是氣むすんで形をなす形とけ氣散じて又跡なし万物みなし

かなり土地山水もつれに生化すその端微にして見がたきのみ草木の榮枯器物の成廢人物の死生その跡顯にしてみつべしもし一箇一家の私よりしてみれば生即生化即化生即生廢即廢榮即榮枯即枯然れども大に觀る時は山はつれに老樹新樹あり器も又つれに新古あり人亦つれに老あり弱あり古よりして今今よりして將來長につれのごとしたとひ此木火にやかずといへども生ずる處の氣つくれば生ずる處の氣は水の源より發するがごとくつれに相つぐもの有枯る持する處の氣つくれば持する者は生々相つぐもののなふして纔に化せすして相持するのみ生氣つくれば持氣ありといへども實に化すでに有人の生や生々の氣相つく也死して形猶あるものは持氣也持氣の內化氣行る化すれば形つく形つく艸木多きが爲に山たかきをまさず沙石ゆくがゆへに海淺きをくわへず物誠に氣化有形化あり此化は化生の化生化の化と相反す孑孓の水中に生じ虱の人の身に生ずるがごとしもと此物なく又此種なしといへども氣をむすべば形をなす形化といへども生の初は氣化にことならず唯形化のものその始は氣化なりといふのみあらす男女搆精してよく胎をなす物は此氣也此故に夫婦遇といへども子ある事あたはず子あるはよく氣血相たり同氣相感じてよく子有又氣化にあらすや此ゆへに一元氣天地に在ては升降し四時に在て進退し万物

に在ては各各の氣ありたとへば諸味の鼎の中にあつて其熱こと〴〵く徹表徹裡融通せざる事なく然として各各の味を成すがごとし万物をあげて此一元氣の貫徹せざるものなし故によく眼をひらひて是をみれば天地日月山河草木毛羽鱗介みな我と一鼎の内に在て同じく薫蒸せらるゝもののゝごとし然して作用各ことなるものは鼎中の諸味各各味を異にするがごとししらざる時は天地は自天地物我は自物我しる時は天地己と氣を通じ物我我と氣を同ふす一元氣聲臭の求むべきなし散じて事物をなすや天地日月草木山河毛羽鱗介みな物物なり天地の推移變態人物の喜怒吉凶みな事也人また無量喜怒哀樂の心に跡なきによつて心は人の一元氣事忽相わするゝがごときいづくんかさるや記する時何の邊より來るや事事みなしかなり一元氣の物に應ずる妙用をしるべし一元氣の外に心なし心は一元氣の得て人に寓するもの心性情慾知覺運動みな氣也此氣の結んで人をなすや是人のみにあらずといへども人をあげて餘をしらん事をおもふ聚れるやあつまるがゆ

へに此形なる此形なるがゆへ此氣ありこのゆへ壯少の人は壯少の心あり老大の人は老大の心あり此氣散ずるがゆへに此形化すその聚りてなれるを生といひ散じて化するを死といふ生をしらざれば死を疑ふ死にくらくば何んぞ生をしらん死生をしらざれば天地をしらず天地死生をしらず況一元氣の妙用をや此氣結んで人をなす散じては此氣也死して其神をなしとする者はいづくんぞ天地をしらん耳目なきものは見聞する事能ず胸なきものはおもふ事能はず其神を有とする者いづくんぞ天地をしらんや　死生暫くいふ時は得諸一元氣歸諸一元氣よくこゝに於て了然たらばよく道にすゝまん通とは君臣父子夫婦兄弟朋友に處するの道也もし此外に別に一路をもとめざらば天をいたゞき地をふむの人にあらず

自然而使然

曰陰曰陽統之者曰一元氣也曰寒曰暑統之著曰歲曰男曰女統之曰人曰善曰惡統之曰心曰命曰非命統之何曰對非命曰正命然則統非命正命又謂之命亦可也曰天曰命猶曰命曰令如何可以謂命自然而使然謂之命自然而使然者猶可如之何者有不可如之何者　有事物みな自然にして使然もの也人善をこのみ惡をにくむの心は則自然也善をこのみ惡をにくむは使然るなり死生榮枯は則自然也死生榮枯するは使然也富貴榮達貧賤窮辱則自然也富貴榮達し貧賤窮するは使然也たとへば水是自然水も又自然にしてしからしむるものよりして此水ありといへども今暫く設けいふひきゝにつき高きにほとばしり方圓長短自然にしてしからしむるもの也善惡剛柔則自然也善惡剛柔をするは使然也是をわかつて心性情慾意思念慮氣力運動といひろ〳〵の名あれども唯あらわるゝ處に隨つて正中にたてる人東人はさしてむかふといひ南人はさしてそむくといふがごとし唯心のみ也このゆへに心は善惡剛柔具せざる事なしふれてうごけば同じき事を得ずこのゆへには又名も異らざる事を得ず人心性情慾なき事あたはず心性情慾をしてよく善よく惡よく剛よく柔するは使然也この故に君子は自然なるものをよく養つて使然なるにつゝしむ此ゆへに善をこのみ惡をにくむ事天下の人を舉て同じき心也しかれども利ひき私動き好惡たゞしき事あたはず善をこのみ惡をにくむ自然にしからざる事を得ず利にひき私動くも自然にしからざる事を得ず好惡同じからざれば衆思一なる事あたはず衆思一ならざれば千差萬別千差

萬別なれば相愛し相にくむその變極むべからずその變きはむべからざれば賢者失意不肖者得意賢者失意不肖者得意すれば禍害自をこるしかれども善を愛し惡をにくむの心をして失なわしむる事能はず失はすれば善を愛し惡をにくむ善を愛し惡をにくめば賢者得意不肖者失意不肖者失意すれば祥慶自いたる是物有てしからしむるにあらず又我才力の及ぶ處にあらず自然にしてしからしむる者也とる者は減ず添るものはます自然の數なりとりて減じ添てますはしからしむる也されば愚不肖は利をうしなひ寵を失はん事をのみおもふて他を顧みるにいとまなし他をかへりみざれば誣謗諂諛いたらざる處なしそしればまとひ隔つればうとむしからざる事を得ず上くらく下へつらへばみだれ上明かに下直ければまとはずしかりといへども君の明暗臣の邪直人又いかんともすべからず算子をとつて地に擲つがごとき三三五五參差整齊有意無意を以て得ず自然にしからしむるもの也己三を得ん事を欲して五を得三は我欲する處といへども自然にして使然ものしかる事を得ず或は三を欲して三を得己が欲するものと自然にして使然ものゝあふや三を欲するものは己が私なり三を得るものは自然の使然也豈己が欲するが爲にしてきたらんや五を得るものも自然の使然也豈己がこのむにもとつてきたらんやこゝに於て實に一毫の私を入べからすつゝしんで自然にしからしむるものをうくべしこのゆへに自然にして使然事をしらざれば己が私をもつて天をうらみ人をとがめ三を欲して五を得たり己が私を以て神を敬ひ人をよろこぶ三を欲して三を得したり此ゆへにみて自然とする人は天を恐れず神を敬せず豪蕩として自放いまゝ也使然とする人は鬼神に役せられ因果におち入局促焉たる事轅下の狗のごとし此ゆへに君子は

よく自然なる物に養ひ使然ものをつゝしむ箇自然にふく時の五音六律を具す是をして或は宮或羽ならしむるはその人也人各善惡の心を有すよく其善心を引て長せしむれば善のびて惡ちゞまる久しふして惡つき善あつまるその惡心を引て長せしむれば惡のびて善しゞまる久して善うせ惡みつもし善惡治亂自然といはゞ豈この敎をもちひんやもし善惡治亂使然もの有といはゞなんぞ孳々としてつとむる事をせんや君子は天下の同じき心を得たるもの也よつてこの德化を人にをし及すを以て自任せざる事を得ずこのゆへに敎をつゝしむ唯よく天下の善心を長じ惡心を縮るものは君子の任也しかれども君子なる人至らざる事なれば一己に得たる處の聰明智識を以て敎ゆ故に敎も又異らざる事を得ずその敎る所の君子は各何とぞ海内の人をして善にすゝみ惡にこりしめんと

也しかれども其敎る處の術ことなれば是非なき事能はずその君子已に是非を取捨せず敎らるゝ所の人豈是非にまとはざらんや實にしる敎なくんば人道のすたれん事を然して人の敎るのかたきやかくの如し敎やすしといはゞなんぞ各一道を以て敎ざる一道を以て敎ざる者は各みる所同じからざる也みる事同じからざるものは己に處すると人の敎ることのかたきによる豈是非なからんや是非あれば人をあやまたざる事を得ず敎るのかたきのみならず敎へをうくるもかたひかな是にひかるれば是長ず非にひかるれば非長ずる師の敎るやかたく弟子の學ぶやまたかたし自然にしてしからしむる物をさして命といふいかんとなれば父子兄弟各溫柔なるは自然也溫柔なれば和するものは使然也君臣も又然なりしかるに忠にして不信邪にしてもちいらる此君や此臣や人の按排するにあらざれば自然也自然に君不德善をして伸しめず臣不德善をなさしめざるがごとき使然也故に君子は自然のしからしむるものに於て已が私をもちひず外にあるものをもとめ

ずして内にあるものをもとむ遇も不遇もよくうけてよくやすんずよく自然の使然にしる事あるがゆへ妄意に平地に波をおこさずたとへば白刄の下の人のごとし手をひけばいく手を下せば死す死するは我ころす也いくるは我いかす也死するをも命といひいくるをも命といひ死するをも前定といひいくるをも前定といふ唯命といひ前定といふみな平地に波をおこす也手をひきたればいきたり手を下たればいきたり死生悲歡みなしか也この故に死生苦樂もみななし得ればあり唯天地は一毫の私をいれずあるまゝ成もの也天地日月草木山河亦一元氣是を貫通す然して　含靈のうち人を貴しとす人は好憎よろしきを得是非よくわかつ唯一人の心は利により私により天下の公をつくす事能はず千萬人を擧げて同じき心は則天地の心也この故に國の治亂はつねに人心のつくとはなるゝとに有人心の悦ぶ處天別に違はんや人心のいかる處天私にたすけんやこの人心の外ならざれば也然して人を以て心とする故に衆人みないかるは天の怒也衆人みな悦ぶは天の歡也自が德をおさむるや天の私なきにかなへば天地したがひ人心したがふ人心したがへばかれ人をころさず己をおさむかず是われよりして得たり豈命と前定とにすべけんやもし前定とせば力をつくして忠孝をするも已をほしひまゝに悪をなすも前程ならばとがむべからず唯恒はつれのまゝにうけ變は變のまゝにうく是命也命とは孳々として道の通りにおこなふて幸をうれば幸變をうればう外なるものをもとめずこゝに於て命いかんともすべき命を守ていかんともすべからざる命をいかんともせず

命

自然にして使然もの事なるの跡なりいかんともすべきといかんともすべからざるとを事なるをうくるの跡也自然にして使然いかんともすべくいかんともすべからざるものは唯そのまゝ成ものなりいかんともすべきものとは事にふれ物に應じ各當然の則あり此則あれば是事觸物應じ當然而然に應ずるもの有いわゆる其己を正しふすれば人のりとし德化及せば人自したがふのごときこのゆへに身をおさめ德を施し人に信じられ則とせらる此ゆへ道達し身達しその福を得故に命を長ふすといふ命をいのるともいふ所謂命の順なるもの也このいかんともすべきものに於てよく己をつくして行ふや命誠有不可如何いかんともすべからずとは孝悌にして父兄にしたしまれず忠信にして上に信せられず已すでに己をつくすの外自然にしてし

かるものかくのごとし誠にいかんともすべからざるや所謂命の逆なるもの也故に死生榮辱も君子に於ては是を命といふ小人に於ては是を命といふ事を得ずひとしく死生榮辱にして或は命といひ或は不命といふものは命はきたるまゝにしてうくべし豈はかるべけんや孝悌にして逐れ忠信にして繫がるゝは己はすでにつくしぬ外よりきたる禍はつくせるうへはさくるに道なし安んじてうけざらんや禍は福と隣る常は變と表裡す死は生と相とものふ見て別とする人は至るに及で大に驚くみて常とする人は豫するがゆへに驚かず人はかるとは足恭阿順して身を達し己をまげ道にもとり幸をねがふ或は幸にしてよくまぬかるれば孝悌忠信にして世に容られざるものをみては唖して笑わん孝子忠臣にして世に容られざるは命也足恭阿順して禍なきは幸なりたとへおもねりへつらひてまぬかるべくとも君子するに忍んやたとひ孝悌忠信にして世にいれられずとも君子豈せざるに忍びんやこゝに人あらんに一人は飯を食て死し一人は鴆を飲でしなず是を見て飯をすてゝ鴆をのまんや我は夫たとひ死すとも飯を食て鴆をすてん命のいかんともすべきものをしらざればいかんともすべからざるに於ていかんともせんとす飯をうたがつて鴆をはまんとすたとへば大道の遠きをいとひ棘をわかち茅をかるがごとし猶雷をさけんとて牆をこへ床をうつすがごとしかくのごとくしてまぬかれたりともかきをこへ床を下るの功といふべからず端坐してうたれたりとも牆をこへ床をうつさゞるを以てとがめんや利をみればおもむき危をみればさけ僥倖をのみもとむ是を命をはかるといふ貧賤自安んぜず富貴たる事をしらずわづかに意にもとる事あれば我善をなすといへども天なんぞ報なき天もたのむにたらず善もするにたらず彼惡をなすといへども

かくのごとし命いふにたらず悪も恐るゝにたらず（利をみてなすいかんぞ善をなし得ん倖をみてうごくいづくんぞ邪路におもむかざる事を得ん故に可をみてなし不可をみてやむ人は禍福ともいはず因果ともいはず唯なすべきをなし榮をもうけ辱をもうく）まとへる事の甚しきかな君子人情に外ならず豈こと様の道を設け富貴をにくみ貧賤につかんや可をなし不可をなさず然して來るものはうく來らざるものはもとめず是を命をつゝしみ命をうくといふ命をつゝしむものは危きにのぞんで虎を暴にし河を馮りするの危をおもひ安きに居て巖牆桎梏の難をおもふ命をつゝしまずして非命を致さん事を恐れてや是を命をおしむといわんや利を見て進んでとり難をみていやしくもまぬかる是をいかんともすべからざるものを我に於ていかんともすといふある人の曰水火兵戈の人に災するや千萬人をかねて一時につく命かくのごとくなるか曰命とは己をおさめていたるもの也己をおさめずしていたるものは命にあらず兵難に死すや士卒に在ては命也主將に在ては命に委してやむべけんや水火も又豫ふせぐべき道有をすてば豈命ならんや其道なふして得ば又命也水漲をみてわたり火の揚るをみて往あだを招ひて難にあふ命としもいはんや命又他事なし唯孳々として己をつくさんのみ己をつくすの道他なし君臣父子夫婦昆弟朋友によく處するのみよく處するの道古聖人に從ひ諸賢に取捨し偏になづまずよく一をとらんのみ

死生譚目次

死生譚

三浦晋　著

晋ひそかに自ら非に坐して天をかたり蠡をもて海をはかる謗をはからず玄語數万言を著して天人の故をつくさんとす贅語數萬言猶縷々として事物を包羅しつくさんとす十數回草をかへて稿を脱するを得ず今年丁丑の夏一客偶來て話死生の故に及ぶ事既に玄草中にありといへども國字數篇となし竹間暑を消すの具となして又問遊の人に示す

生化

物にあれば生化といひ人にあれば死生といふ物と我とおなじく天地の間にありて生化すれば其名同じからずと雖其事は一也このゆへに死生をしらんとならば生化の故をしるべし生化は泛くいふの言葉にして死生は專にいふの言也天地の間に生化せぬものな

し源泉を發して夜となく晝となく流れて絶ざるものは生々也海一日川の流をうけて長に盈ざる物は化々也生とは出來て物をなし化とはきえ失せて形を失ふ也一盞の燈その光宛然としていつもかわらずみゆれどももと下に油ありて生々するものをつく事ありもゆる火は絶ゆるひまなく外にむかひて消えゆくなりきゆれども生じ生ずれども消ゆる時は其かたち大ならず小ならず常住の形をなす天地の間もし生ずるのみにて化せずば一盞の燈も天にみつべし化するのみにて生せずば大海の水も涸渇すべし化すれば生じ生ずれば化す是を一氣の通と云ふそのゆへいかにとなればその燈の上にしばらく空器を覆ひて其氣もれて化せざれば下につぐべき油はあれど化する氣に乏しき故無手消する也其理はなほ油つき心つきて其の氣たえて化するに殊なることなししかれば天地

と雖生々化々間斷なく日月上に繫りて常恒不變の象あれども河海の常恒にして實は生々化々のやむことなきが如しもし天地生化にあらずと云はゞ昔の天地は新らしく今の天地は故からん天地に新故なきものは生化一氣の通ずる所にして水火のかたちに異ならず近くこれを身にとりて譬ふるに氣集れば形むすび氣散ずれば形化すその形むすびて未とけざるの間も出る息をもて化し入る息をもて生ず筋骨皮膚爪髮此氣を以て榮枯をなす草木を擧て是を云ふときは蔦の生を木末によせ蛆の形を肉中になすがごときその種あるにはあらねども氣の氤氳する所は物をなすこれを氣化と云ふ動物は雌雄あつて子をなし植物は華穀あつて苗をなす形の感ずる處に物をなすこれを形化と云ふ化の字に二義あり生化の化は生に對していへばきえうせる也化生の化は變化してなる故に

生の意をかねて云ふ氣化形化と云の類是なりさればその形化といへるも相感ずる所の徵を尋ればこれ氣化也其故いかにとなれば草木の種子をとりてこれを地にうふるに此種のうち枝葉花實あるにあらず含めるものは一團の生氣なりその生氣水土糞壤雨露燠寒の氣相和して芽を生じ枝をわかち葉をしき花をひらく木のうちに花實なく子のうちに枝葉あらず時節いたつて其形をなすこと忽然たるがごとしさらば此ものをもて水土よりなれるとせんか雨露よりなれるとせんか種子よりなれるとせんかいづれとも定まりがたくいづれをも捨かたし一元氣跡を陰陽にわかち位を天地にさだめ形氣陰陽交錯氤氲として水土雨露草木人物をなゝ一元氣よりこれをみれば水土雨露草物人物一用にして他物にあらざるがごとし水は水の形にして水を有し土は土の形にして土の氣を有すこれを各形各氣といふその各各なるものをかねて有するものを一元氣といふたとへば目の質はみる氣を有し耳の質はきく氣を有し口は味氣を有し鼻はかぐ氣を有するこれ一身の各形各氣にして耳目鼻口の各形氣は我一元氣のかね有する所なるが如しこれをもて耳より入るもの口より出で目より入るもの手にてなすもし唯耳は耳にして目は目ならばいかで一身の用をなすべき各各のものありといへども一元氣のたまふは同一用也このゆへに水は火を生じ火を消し火は水を生じ水を消すみな天地の一用をなす種子の巧にもあらず水土の巧にもあらず雨露の巧にもあらず種子は水土の氣に託し水土は雨露に相和して枝葉花實をなすこと是を一元氣の用といふもと萬物は氣より生ずるものにして水火の氣形をかりて生ずる故に氣物なり天は形なし地は形あり地の体は土

也天の体は空也この故に土の一種はきえずその余はみな氣にかへるなり氷はとけて水にかへる土塊は砕けて土となるしからば氣よりなるもののみいかでかひとり氣にかへらざらん草木の種實はその根幹の氣より結び苗の枝葉は種子の氣より生ず胚胎は其精液の氣より結びその骨肉は胚胎の氣より

　水は氷と結びても泡ととけても同じ水也土は塊となりても埃となりても同じ土也形を結ぶときは暫く人となり物となれども解れば同じ氣なり或はとけ或は結ぶは一氣の用なれども結ぶが爲に氣生せず解るが爲めに死

　各形につく所の氣形に従て化す目のみる氣耳のみる氣鼻のかく氣口の味ふ氣胷臆の思慮の氣手足の動作の氣これ化する所の者也猶火の暖氣氷の寒氣の火に従ひておこり火に従つて消え氷るに従ひてきびしく解くるに従ひて散つるが如しその水

となり火となる所の氣は水火の爲めに生化せず其故は玉をもちて火をとるに陰氣の影きびしく逼れば陽氣中に聚りて火を起し餅を煥め柔ぐるに陽氣せまりて内濕ふ此火と水と一氣を種として生ずされば火に水をそそげば又もとの一氣となる水を火ににれば又もとの一氣となる先儒これを觀て一元氣死なずと云ふ仏子これを見て不生不滅といふ世俗に云人死して魂は冥溟の間に遊び形は土となるとその魂とは智覺思慮の氣にして或はよろこび或はかなしみ或は愛し或はにくむ所の心也これは胷臆の形に従つて消ゆるもの也その形とは氣にかへるものにして土となるべきものなしされば古塚に土なしとかやそれ萬物の形たる水火にあらざるものなしそれ五行家の説に火生土といひて火物を焼ば土となると云ふ是みる所の麁なるなりたとへば大木をきりて是を爐中にた

くに其ひかりとか烟とか熱とかに〇〇わづゐにその査滓の殘れるもの數車の薪もわづゐに一爐の灰となるそれも終には風に化し雨にきえて跡かたもなくなりゆく也人も天地の間の生化の一物なれば終ゝは皮肉は早く化し齒骨はおそくくちていつしかもとの烏有となるなりもしまた生ずる者の化して土とかとならばおちば山を高くし鱗海をうづめ日をなで月を攀んも覺束なしよつて萬物生化の故を知る時は我死生の故を知る也

死生

天地のあいだ唯ゐたちあるものと形なきものとのふたつのみ形なきものは目に遮らず手にとられずよつて虛ともいひ無ともいへども是氣にして空虛なし此氣あつまれば形をなし散ずれば形をとくむすぶるものは氣の魂なりとくるものは氣の融なり唯氣物にふるること同じからざればその形を結ぶもおなじゐらずたとへば地は發生の氣をふくむ故にそのゐふ所をゑらまず草なれば草を發生し木なれば木を發生するがことし又ここに一株にして兩枝の木あらんに左の枝をきる時は右の枝いよいよ榮ふ又ここに一本の草あらんに葉をつめば根ゝみつ左に行されば右ゝさゐえ葉に行ゐざれば根ゝみついづくべもひとつ生々の氣たゝふる所にうたぶひ託する所ゝより同じからず是を一氣の通といふ氣機の微うかがひたしといへども其通はみつべしたとへば一溪の魚川をかたむけて漁れば生ずるもの多く漁らざれども益ざるものはこの氣生化する所にして通ずることあるにあらずや又米麥の類これを地に播けば苗となりおさむる時はとなとなるこれ機のふるる所に通ずるにあらずや此ゆゑに機のふるるに隨ひその物ことなりといへども一氣の氤氳する所ことなること

なしこれをもて此氣天にあれば轉り地にあればたもち時にあれば往來し物にあれば生化すこれゝよりて形ゝ有無あり生ずとは形のなきよりあるに始まるなり化とは形のあるよりなきに終るなり唯氣とは元來形あるにあらず聚りても氣なり散じても氣なり然ども其氣に幽明の跡ありて同じからず明とは形なしといへども其跡のあるなり幽とは形もなく跡もなきなりあととはさむきにあたちはなけれども寒ければ寒きの跡ありあつきにかたちなけれどもあつければあつきの跡あるが如し目み耳きき肢体うごき心にはさまざまの喜怒愛憎迷悟利鈍跡をなす所あれば是を明といふされば形あれば氣明なり形なければ氣幽なり幽なりとは氣なしといふにあらず形と跡とのなきなり氣あつまりて物を生ずれば物結びて又その氣を生ず水のひややかゝ火のあつきより蘭かふわし

く蔘きく鳥啄人をころし參蓍人をおぎなふも各その氣の跡あるなり目はみる氣を具し耳はきく氣を具し口はいふ氣を具し肢体の手足は動作の氣を具す胷臆の具する處これを心と云ふ耳目肢体の形なれば視聽言動の氣なきこと能はず目肢体の形解れば視聽言動のことこと能はず猶ひかりの燈にさたぶつて消ゆるがごとし胷臆に心ある事耳目に視聽あるがごとし來るには去あつて偶し明なるには暗あつて偶し上には下あつて偶し有には無あつて偶するをされば天地の數は二つ　出し偶するものは反對をなす去とは來るに反するもの也暗とは明に反する者也下とは上に反するものなりさあれば死とは生にあらず幽とは明にあらざるものなり生の時の心をもて死後のことをはかり生の時のことをもて死後のことをいとなむそれ心は胷臆に有するの氣ゝして人の一氣の精華

一身の主となるものなりよつて痛痒あればさとり利害あればしり是非あればわかち事あればおもひ物あれば察すその甚聰明神靈なる者は一氣の精華なればなりしかれども死は生に反し心は氣の精華なることをしらず生をもて死をみる死しても心に喜怒愛憎あり體に苦樂勞逸あり且又よく視聽するとならば是生といふものにして死と云ふものにあらず暗とは明の對にして明なると反するものなり明なることをもて暗ことをおしはからばついに暗をしることを能はざるべしくらきをはかりしらんとならば明なることをすて明なるとたぶふものをおもふべし暗がりを尋ねんとて燈をかゝげて炙や暗なるかしこやくらきとよもすがら尋ねたりとも終に暗き處には得ゆふし手にもてる燈をけしなば直にそのところやみとなるべしひたすらにいまのいとなみをもて死後の事をおもふ事燭をとりて暗を尋ぬるがごとし寒は暑にことなるもの末は本にことなるものひとり死のみ生とおなじといふたとひその言を大にしてこれを天地の外といふともあに此理あらんや目の明耳の總口体の言動をすて胸臆のおもひをすてては死後これ一氣即生前の一氣なることをしるべし若し燭をかゝげて暗をたづね瓜をくひて苦きを察するがごとし智者といへどもいかでか其解を得んある時客ありて予に死後のことをとふ予これをさとして易に原反終之故知幽之故といへる是なりけふの晝にしてさよひのことをしらんとならばゆふべのことをおもふべし死後は生前のごとし生前のことをしれば死後是なりといひければ客言下に發明しされりむかし子路死を孔子にとふ孔子こたへて未知生焉知死とのたまへり是孔子の子路を　へたまふにあらずよく生をしれば死

をしる生をゑらざる故に死をしらざるなりこの故に死後の天堂地獄は妄誕なりこのゆへに唐のそれ　天堂なくばやんなん云々まどへる人の爲にいへば可なり君といへども實見なきのことば也ゑかるをその妄誕にまどひて忠ょもあらず義ょもあらず死後の榮利をいとなむとて火に入り水におぼれ食をたて淵に投じ身命をすつること愚なるの至とは云ながらそのみなもとを尋れば悉達太子その責をまぬゐれず

求嗣

求嗣の術あり咒を誦し禳をなし服餌にもとめ鬼神ょいのるゑかれども物の生ずるや氣に感應して胎をなす感應は一氣の用ょして感應の道ふたつあるにあらず感とは應の先する者なり應とは感の出ずるゝのなり草木の地ょある時に下ょ發生を感ずれども徐寒上ょとぢ春令上に應せざれば芽をぬきんずること能はずうゑに春暖の應あつて發生を催せども地中の種子いたみかじけて感せざれば生ずることあたわず唯感應相得て芽甲ひらけ芽出で葉ゑき花ひらく鳥の卵をむすもさのごとく卵の中ょ一盃の生意みちて感ずれども牝鳥抱伏の應なければ孚ず牝鳥よくいだくといへども中の生意やんで感せざれば　人もさのごとく氣血さかんかといへども感應二つながら相得ざれば胎育をなさず況や虚弱の稟受をや偶巫をめし神に賽　する時にいたりてはじめる事あれば是を祈禱の巧とおもひもしいひもすれども是偶然といふものなり事に偶然的然あり的然とは揚由基が弓いるごとく百歩を退て揚の葉をうがつに百度はなちて百たびあつ千たびはなちて千度あつこれを的然と云ふ偶然とは拙工の弓いるがごとし百歩を退て揚の葉をうがつに又幸にして矢ごろ

をあやまたず其矢たとひあたりたりともつくべきわざなき時は是偶然なりもし求嗣の法あつて百發百中することを揚由基が射のごとくならば其術ありとせんもし中るもの半中らざるもの中ならば姙娠と祈禱と相會するの偶然にして術者の巧ゝあらず感應のなす處むかしは孔子を尼丘山にいのりて得たりしとかや孔子は聖人なり孔子の父は聖人にあらず祈りしこともさもあるべしいのりたる故に生れたまふと思はゞ誤るべしその外太白夢に入て李白むまれ日輪懐に入て秀吉生るゝの類みな英雄の徒其氣甚だ盛んなれば吉夢をみたることはあるべし謫仙星にあらず秀吉また日にあらず米子の日子の有と無とは天命なり此詞まことに是なり感嗣のなきを歎き妄りに鬼神を瀆さんは愚なることなり孟子のいわゆる求むべからざる者なり

長生

人は稟受ことなれば賦命も亦同じからず賦命といへばとて天ゝ有司ありてそれはいくつと限あるゝはあらねどその稟受によりて長短ひとしからず況や月寒暑濕外をせめ喜怒悲　内をやぶり飲色食肉ゝもとめ刑禍上ゝかゝるをや稟受とはたとへば一盞のともし火のごとし盞ゝ大小あり油に多少あり心に長短あり盞大ゝ油多く心長きは長壽の稟なり或盞大なれども油少く或油みてれども盞小く或は油盞備れども心みじかきは天受の短かき所なり天ゝあるものは人の力の及所ゝあらず世に身を愛養せずして長壽久しきあり保護をつとめ短命の人あるはこのゆへなり油つき心つくるは火の命のつくる處なりよく稟受の命を奉じて化ゝ歸するは長短ともに命ゝ歸す左あつて右なきものなし端ありて中なきものなし世豈始あつて終な

くむまれて死ざるものあらんやむかし秦始皇漢武帝强を制し堅を挫き天下を掌のうちに運し驕きわめざることなく欲とげざることなしひとり死の事心ゝ任さず時に迂怪妄誕方士等海外に仙山あつて不死の藥を生ずと云尚多怪の說をまふけ其主をたぶらかす二帝ついゝ心を動し天下の財をかたぶけ或は舟船をよそほひ樓客をおこし長生不死を願れしかども唯徐福少翁等の利をなめ始皇は沙丘ゝ崩じ漢武帝は　　に崩ず我きく仙術尤情慾を禁ずと人かぎりある身をもちて究なき欲にゑたぶふ時精血のみなもの下ゝかれ無根の火上ゝうおいて少壯忽老衰の相をあらわすこのゆへに色を伐性の酒は慓悍ゝして氣血を走して肉は重濁ゝして濕をうおかす況や美味は飽ざればやまずついゝ脾胃をして其任ゝたえず終に腸胃をやぶるよつてこれを腸をくさらすのもとい

と云內色食をつゝしむ外禍根をさくれば各その天命をたもつかく短命なるは本より賦命のみじかき也孔子の伯牛の病をとふらひて是を命とのたまひゑかれば部子が三十の壽も短命とは云ふべし非命とは謂べからずゑかるを兒女の稟受の虛弱を問はずして長短を以て　このゆへに養生は長壽をたもち以て大なりとす長生不死とは妄誕なり欲を縱ゝして死をおそれ手をいかんとして服食をこのみ幸をゑんとして神をけがすひとり萩菖蒲茯苓の壽をのぶると云ふは唯その巧をほむるの辞ゝして　其事はなしこれみな油あり心あれどもこれを風前におくが如し或風ゝふかれ飛蛾にけされても消ゆべき時節なりといふは命をゑらざる人の言也このゆへに賦命をたもつは養生の故なり養生とはあながちに針灸服餌の法ゝあらず夫田野の人は体ゑばらくも逸せ

ずして心は學に逸す飲食味をつくさざれば飽食の愁なしこの故冬は風意の内にあり夏は暑の内に居るといへども多くは其氣おかされず長命病すくなし貴人は常に毒薬を察し寒暑にすれどもいろいろの病をたくわへて長命すくなし酒にふけりては長夜の飲をなし[illegible]にめでゝは花月に心を惱し心を勞して心肝を刻し危に居ては骨肉をやぶり是等を天命をちゞむるとはいふなりそれ養生におくれたるに鞭つと云ふ事あり後たるにむちうつとは羊を牧するに後れたるには むちうちさきに及しむるなり魯の單豹嵓居水飲して其内を養ひしかども外のまもりをわすれて虎のためにくうわし張毅は門を高く薄をかけて外の衛をなせしかども内を養ふことをしらず内熱の病を發して死せりこれみな後れたるものゝために身を亡せりこの故に孟子も命をしるものは巖牆のもとにたゝずといへども身は父母の遺体なりつゝしまずんばあるべからずかの義に臨みて命をすて危をみて命をさずくるがごときは義外に命なければ私の爲に身を破るとは同日の事にあらず淺しくのがれかくれて命いきたりとも天にすてられ人にすてられ天地の間にたつとはいひがたかるべし我天命をあなどり身をそこなひて災にあひ危急にのぞみ俄に此事の出來る樣に心得驚きさわぎ神にいのり佛にたのみしるしなければ天をうらむうらめりとてそれ何の益あらん火に心をましばしばかかげて明を一時に快し外風の災をふせぶす火のきゆるに臨みてかたわらの人をうらむとも誰か其責にあたるべきまことに賦命のあるしらずして長生をこひ願ふも非なりわが壽をたもたず天命を戕賊するも非なり

殺活

死なんとするものをすくふを活と云生べきものをそこなふを殺と云ふ是死生の我にあるものなりそれ人の君たるもの民をして常の産あらしめ夫にあまんの粟あり女にあまんの布あらしむれば民に凍食のことなからん然して孝悌廉耻をもつて是をひきゆれば下分をしり道を尊みて刑辟をおかすものなし下うえずこゞえず刑辟ををかさされば各天壽をたもつ是活の大なるものなり民をしてつねの産なく男は耕にうえ女はをるにこゞえしむれば孝悌廉耻をもて敎ふといへどもしたがわず凍食してしなざれば刑辟におちいるその非をなすもの本心に出るにあらず已ことをえざれば也その已ことをえざるに出るものをかりて是をころせばころすもの多しておかすもの愈多しこれ殺の大なるものなり殺は美事にあらずといへどもこれまたなくんばあるべからず死をすくふを活と云ふされば殺をそだつるには莠をかる蜜を養ふものは蜂をころす蚤虱蚊蠅は膚を害し猪鹿雉兎は苗稼を害す虎狼は人を害す害あつてかれを殺さゞればわれこれが爲に害せられんとすころす所あればいかす所ありこれ殺活の道なり一齒むしくふ事あれば衆齒を安せざる故にその齒をぬいて衆齒をやすんずされば敵と陣を對するがごとき敵をいとふとき味方を亡す宋襄公桀の義をまもりて我兵をやぶる世あに我に忠あるものを殺してよしとするの道あらんとするや東坡かへつてこれを王の師と云ふは何ぞや孔子仁をきくこと我猶人とのたまへり兩陣各相のぞみしのぎをけづるにあたりては敵の害をいとはず身方のきづつかざることをもとむ仁者の心なり惡にしてころさざれば衆を安んづること能はず唯かの仁柔にながるゝの徒害をのぞくの道を知らずたとへば蛔蟲を

養ひ得て一身を亡すがごとし因果の說愚にして暴をなすの心をしずむるに似たりと雖又愚にして柔なるものゝ禍をかもす

蘇生

世に蘇生と云ふ事あり或は病甚しき時氣已にし体猶ひへず或は時をうつし或は日をうつしいき出で魂復しさて其間のことをかたるに或は天堂にいたり或は閻羅の廳にいたり或は叫喚無間の有樣をつぶさに見ることことごとく擧るにいとまあらず是佛を信ずる人のみ此事あるにあらず昔晉の趙管子やんで人をしらざる事七日天帝の所にゆき百神と鈞天にあそび廣樂を聞くといへりそれ心は人の一氣の精華にしてやめばみだれ復すれば正し夜は漠然としてひそまり晝は粲然としてひらく然して心はつく所ヿそみふるゝ所に動きて心は一心の主宰として視聽言動の氣を指揮してつかふ者なり主宰もし視聽言動の氣の爲にみだるゝ時妄動妄見す或は平日の念をそゝぐ處にいで或は不意不測のことをなす生涯の念をそゝがんにいかでか彷彿の夢なからん夢に見るものをもて是を實事の證となさば或は身をちゞみて穴に入り足を擧て空をしのがんも其證となすべし也予がしれる所の僧かつてかたりし自過去の事をしらんと欲して仏前にいのること七日佛是につぐ汝前生は牛なりもし疑はゞ自汝の鼻をさぐるべし鼻べりの穴あらんと覺て鼻をさぐるに果して孔あり小よりを貫すべし又僧かつかたりかつ言ふなり前生牛なり何の因緣あつて今人身をうけたると佛前にいのる時に其身一大地の比丘にして諸人是を尊む事いふべからず然して自ほこるの心ある事を覺ゆ覺てよつておもふ其さき比丘驕心あるを以て牛となれヿ猶僧となれるの德を以て今又僧となれりと是一

念を輪廻のうゑにそゝひてもとめてやまず一身のあな自しらざるがごとしといへども氣血のめぐる處神暗にこれをしる疑念空竅と相會して夢をなすこと牛也牛にして猶うたがふ故に又比丘也比丘にして猶うたがはゞ豈又夢のみるべきなからんや是疑念輪廻の夢をなすものにして輪廻前生の夢をなすにあらずと云ふ生の事のやむ也神識のつくる也かの死して蘇るものは氣血猶あつて神識未散せざれば廿寐と同じきのみしかれば吾　往て天堂地獄にあそぶにあらず念天堂地獄をなすもの也又氣　の間の事をとふに世のつねの事をみるものもあり偶天堂地獄の事にわたれば人手をうつて其證となす

予が閑際筆記にのす有馬山清涼院僧石文なるもの死して十九日にして蘇る人冥途の事を問石文の曰只湖山の間にあつて風景の好に對するのみ因てこれをおもふに我むかし庐山に上り湖水を見大に心目を悦すそのゝち敢て忘す時に往復て見んと欲す冥途にみる所是かといへりこれまことに禪人の語也これを筆窟の曰芦を夢に比すればその胸中の雲泥おもひやらる蘇とは氣　の復するにして死者の再たびたつにてはなし

再生

晋の羊祜五歳の時乳母をして弄ぶところの金環をとり來しむかれもとより金環なかりければ乳母いぶかりけるを示自隣家李氏なるものゝ東垣にいたり桑の木の中より一つの金環をさぐり得てかへりけり主人驚きて是わが亡兒の失ふ所のものなりと云ければ乳母具にその內をかたりて世に李氏は羊祜の前身といひしとかや此時佛教いまだ盛ならずといへども已に此說あり佛教已にさかんなりしより其譚かぞふるにいとまあらずそれ一氣は生化をなす所の氣にして一氣に

は死生なし死するにあらず生ずるにあらず取れどもつきず取ざれどもまさざるものは一氣の氣むすびて生るれども一氣に氣散して解れども一氣なりたとへば大海の水をくみてそのまゝ海にかへし又此海をくむに此水さきにくめる水なりといはゞいつわりさきの水にあらずといはゞしゆるなりされば生化は一氣の通ずる所なれば生々の氣みつれば自生ず鄙しき諺に兒うまれて其まゝ死するものは足のうらよりかへるとて程なくはらめる者多し又その子よくそだつ時は多くはしばらくを隔つることあり是を先の子のかへるといはゞ又くむ水さきのひさごの内の水なりと云がごとしこれ別に相むすぶといはゞ今くむ水さきの水と異なりと云がごとし　然たる一氣秋毫もみたざる所なし聚るものは聚氣なり散ずるものは散氣なり生ずるものは生氣なり化するものは化氣なり其の兒のよくそだつ時母のくらふ穀を分て乳飲し母の自保の所の氣をかりて自長すれば生々の氣にとぼしきによりて息することすくなしくらふ所の穀分だづして身を養ひ自たもつ所の氣わかたずして己を養ふ時は生々の氣みちやすふして胎をなすことも亦やすしたとへば木のはじめて生ずる時幹(カラ)もをきれば横(ヒコ)はへさかんに幹ある時は横はへ壯ならざるがごとし是かのもてる所の氣かへりてひこはへとなるにあらず又幹を長ずる所の氣と別なるものあるにあらず只生々の氣あるものは自發せざればやまざる故なり偶氣凝て融せず神識さんずるに及はず又胎をかることも千万中のあるまじきにもあらざれども決して通例のことにあらず千萬中の一つなるものをあげて千萬の通例となすは陸機が犬千里の信をつたえつれば犬は書信をなすべし曹操烏啄を食て死ざれば烏

啄は人の毒にあらずと云がごとしこれをナ驗と云てそのことありといへども智者は證とせざることあり碁子の奩にある時唯碁子にして勝負死活の事あるにあらず唯盤上相鬪にいたつて勝負死活正奇窮達をなす又奩にいる時は勝負死活もなしもと石なり最前の城征今の　活にもあらず最前の活をもち來て今の死となるにもあらずまことに生化は一氣の通ずる處是より彼にゆくべしたとへば糞壤培ふ時は苗さかんにして枝葉茂し膏粱をくらふ時は人こへて毛髮うるはしゝかれば糞壤の形は消て枝葉の形にゆき膏粱の形は消えて皮肉の形にゆく事一氣の通なることをみつべしゝかりとて糞壤は枝葉にあらず膏粱は皮肉にあらず楠正成湊川にて腹きりていきかわり死かわり尊氏に仇せんと云しは正成の言とも覺えず筆者憤をもうすの言なるべし守屋化して啄木禽となり菅

公薨じて雷となるが如き一は守屋はにくむより附人し一は菅家を憤るより杜撰是肉の化して蛆となり　蟾のもぬけて蟬となるに似て同じからざる者なり肇法師が本にあらざれば以跡をたるゝ事なく迹にあらざれば以て本を顯すことなし是に本づきて西天の佛を本地としわが中　國の神を垂跡にしこれを水と月とに譬ふるも前生後身と一術なりたとひ因果轉展是を再生と呼といふともその形むかしの形にあらずその心むかしの心にあらず其神識むかしの神識にあらざれば宿と云ふものは何者ぞやもと一氣をもていふとならば再生不再生の言を煩すにたらずある僧一人の獵人を度して汝殺生する事なりき佛といへども木槍の果をさくること能はず况や汝凡夫宿緣償ざるべけんや汝今物のいのちをたつといふとも來世の報應いかでかまぬがれんといひければかりうどき

ゝて來世今のわざ身を覺　やらんと問ければ否とこたへけるかりうどわれ今の事をゑらずば我あづかることにあらずと答ける此者心得ていひけるにや放佚にてやありけんゑらねども其詞理致あり無益にして物のいのちをたつは仁人にあらず害あつて物をたすくるは智者のことにあらず是君子の道輪回のごとく相あづかるにあらず

就死

君子通にゑたぶひて行ふ死して然してやむ君子死にいたる迄　んとしておこたらず曾子病あつし曾子の　樂正子春曾子の子曹元曾申等病に侍しけるに燭をとる童子隅に居て燭を執せしが曾子の簀華て睆なり斯季孫の賜なり元にたつてかへよと云ければその病革也　なるをうれゑあしたをまちて易んと請ける曾子汝は我を愛すること童子にしかず吾正を得てたをれんこれのみとてすなわち扶けあげて易けるに席にかへりて未安まれず　に沒しける生は父母の遺体にして上に父母下に妻子皆我に養をまつものなればいづれにとりても苟しくもしがたき者なりしかれども義正にいくべからざる時は生をすてゝ死をとることこれ死のつねの習也生としいけるものいづれか生をおしみ死をかなしまざらん臨終の事をもて一生の善惡をこゝろむるが如きは　也君子の人にして病おもきもの其症により苦痛するものあり小人にして何事なく終をとる人あり是は其人の稟受と病の厚薄とにあるのみ大凡うき世の事をかんがふるに兒孫に無益の遺言などしたる欲あとの害となる事多しさり迚よき事をのこさゞるも不善なりよくよくつゝしむべき事なり

死後

死後の天堂地獄あつて善をなすものは佛果

を得悪をなすものは地獄にゆくとは愚夫愚婦のほしいまゝなるを制せんために賞罰も幽冥の中にあげてまのあたりなる闘爭　に誅罰等を死後になして非をなすの心を沮め善をなすの道をひらく佛の方便なり胡越さかひをへだつといへども人の識見遠からざれば見解のあやまる所も亦遠からずされば天竺にては死後に閻羅十王あつて賞罰をたゞすといふ　思ふにこれ悉達太子の説より始れるにあらず古傳の説なるべしもろこしの　もおなじきにや詩にも文王陟降在帝左右といへる其名は佛と云帝といひおなじからねども死後の　をとく事は遠からずその後世人死して魂は泰山にあつまるといひつたへてそのつかさを泰山令といへる事ありこれ名はことなれども則天竺の閻羅王なり魏土を考ふるに沃沮國の俗その國中に赤山といへる山あつて人死すればその靈ことごとく赤山に行きて　道のいとなみして道にて悪鬼におかされざるごとく咒を誦してこれを野におくるとかやこれまたもろこしの泰山なり我越の立山に地獄あつて闔國の罪人こゝに集るといふも同日の譚なりみる處近ければ其謬説も遠からずされども氣集りておとなり散じて氣にかへる物となるの間も又一氣なりたとへば水の風に逢ば波をなしさかまく時は沫をなし圓器にくめば圓にして方器に入ば　なれども同じく一盤の水なるが如し沫なれば沫の用あり波なれば波の用ありといへども水なることは唯水なり唯よく此理をしる時は死後の説多しといへども皆倍慮にいてゞたのむにたらざることをしるべし体ありて痛苦をしる体なければ痛苦なし耳目ありてみきゝす耳目なければみきかず犴卒ありとも可責をほどこす處あらんや

殉死

死を以て死をうかゞふの費殉死にいたつて極る氣聚て形むすび形解ては氣散ず神識散せずして幽明のうちあまたの人間世のごとき事あるにあらず葬の禮は塗車芻虚とて車は土にしてのがれず供奉はわらにん形にて目はなともなし器皿は内に物いらざる樣にすることは人を死たりとするに忍ざれば生時のそなへとし生たりとせざれば器用に立ざる樣にするなり中古にわら人形をかへて木人形となし目はなまで人の樣になし夫より殉死もをこれりとぞ孔子ふかくこれをにくみたまひはじめて俑をつくるものは後なからんとのたまへり生前深く恩顧をこふぶりしものは野邊の供相したがひて風をなし秦穆公のごとき賢君だも黄鳥のそしりをのこせり是みな死後を生前のごとしとおもふよりしてなり殉死の事も人情自この感一轍に出るゆへ北狄にも此事あり日本にも此事ありてけり土師宿禰の遠つをや土人形をもろこしの俑とは事ことにして人を人形にかへたりそれより久敷事　えたりしが細川頼之より再たび事おこりて其後學道たへ人義理にくらく感激を義とし各一命を擲ち是を忠とすいくばくか英雄豪傑を地下に埋けん今にいたる迄痛心流涕すべし寛文の頃幕府かたく此事を禁じたまふ是より天下世々その賜をうくるもの幾ばくぞや好世の德下民にあまねくとは此事なるべし立花道雪高良卒去の時薦野　介殉死をとゞめ宇喜田秀家卒去の時老臣の諫藤堂高虎殉死をとふて敢死の士を得たるがごときみな豪傑の眼あり

幽靈

人死して後魂魄散せずさまざまの事ある由いへり傳にみえたるものは鄭の伯有晉の中生なり近來にては伊與矢部清兵衞の靈等分

明にその跡あり　されば死後の事其靈ありと稱しなしと稱す是を有無に論ず未感應の理をしらざるなり人死して魂魄の遺る事火きえて暖氣あり藥つきて香のこるがごとし暫く有といへども終には散じつくる也其内感激憤　して死するごときは其氣尤つよければ一團の凝氣をなして物に託し種々の變怪をなす事もさも有べしありといふものはなきにまよひなしといふものは有にふさぶり感應とは是感じかれ應ずる也たとへば優人の戲場に集りて古今の盛衰をなすがごとし或義にせまり悲にのぞんでは一座の人同じく見おなじくきくといへども各應ずるものに違あれば涙をながして聲にむせびひそかになきをぬすむものもありすこしきうれふるもあり何とも思はぬ人もあり是感ずるものは同じといへども應ずるもの同じからざれば感ずる事も殊なり夫より轉じて惡を

亡し　をやぶるに至りては一座思を改めてなきしものはわらひ眉をしばめし人はおとがひをとく是應ずるものはさきのなげきを催し應あれども感ずるもの〻殊なれば應ずるもの〻殊にして感應の跡殊なるがごとし生饌わらにあへばながれなめくじり塩をみればとく琥珀はちりをすい磁石は鐵をひくわら生饌をみず塩てんゆにあはず琥珀ちりをみず磁石鐵をみざる時其氣をやむるにはあらねども應ずるものなければ其氣なきがごとし磁石針にあひ琥珀ちりにあふ時始て感應の用を施す人或は穢氣のかたはらに食をはむ穢と應ずれば吐す應せざれば吐せずしかれば穢氣は人をして吐かしむる者といふも非なり穢氣人をして吐せしめずといふも非なり唯感應相得れば遊魂未散せざるの問題と感應をなすの間種々の變怪も有べし琥珀のちりにあひ磁石の鐵にあふがごとし

寃氣いまだ散せずとも應ずるものなくば徒にやむべし故に幽冥の鬼神は感應の事にして有無の事にあらず千百万の内氣に相感應して一だんの變怪をなすを見て世をなべてみなかくのごとしとおもふは非なりたとへば千百万のうち一異人ありといへども是を通例にはをしがたし通例は形とけ氣散ず箇様の類は變といふものなりそこの神かしこの佛の奇瑞靈驗といふは氣々の感應する處魚陽の鮑魚のごとし又多くは　たる内に十に六七はうそにして二三は狐狸の類或は心の迷より生ずるもの多しそれ眼は一身の精華にして森羅萬象の影うつりて眼に映ずうつりて映ずるもの其神うけて接す形あるもの眼にのがれず種々の聲音耳に來り感ずれば應じて其聲聞接すれば聲あるものは耳にのがれず唯目をやむの人は外に眞の物なしといへども或は空花亂墜し或は胡蝶飛揚し

耳やむものは外に其物なしといへども或波濤の音をなし或は蟬雀の聲をなす是誠に花ひらけ波おどり蝶とび雀さわぐにはあらず唯耳目やむ時病のなす處なりもしたとひ妖怪ありとも　の目にさへぎらず　の耳にいらずして唯その者一人の目にかゝり耳にいるばかりなるは心神みだれて妄動妄見す夫夢は一身の休する處心神の接するものなければ不測の夢をなす心神みだれぬる時はいねざれども夢なり心神恍惚なる時はいかなる事をもみきくべししる時は疑なししらざる時は癡人前の夢　むかしそれの人遊學してかへらず家人夢に其人死たりと夢む其さきの有さまあとの事ども殘　事甚確にして其驗ありしかば家人いたみなげきけるにしばらくありて事故なくかへり來けり千百万の夢のうちあふもあるべしあはざるもあるべしあひたりとて不思議にあらず下手

の矢とてもあたるものなりもし衆人の耳目にさへぎり妖怪をなすものあらば是ぞ妖怪にあらずまことの妖怪なるべし狐狸の類の人をたぶらかすもその人のみだれたるよりつけ入るものなり實驗の人には決してなき事なり

葬

浮屠氏の葬に水葬埋葬火葬等有皆人情に近からずこれ體を假とみるよりなるべしもろこしの葬は多く厚きに過いろいろの重寶を地中にうづめこれによりて亂世には盜人おこりて多く塚をあばく其うゑ雲母を以て人をうづむる時は世を經てくちずその故に體骨などを引ちらして愧をさらす是聖人のこゝろにあらず宋桓魋石郭をつくりて三年にしてならず孔子是をみて死しては速にくつるがまされるにはしかじとのたまへり本邦のごときは必重寶をしたがへず此ゆゑにたまたま暴厲の者ありて塚をあばくものなき事は内求なければなり其實を要すれば石郭よりもかたしもろこしにては土を封じて塚となす後世墓道に石碑あり壙中に誌あり土は終にくづれ平なれば世うつり時かわりて牛羊丘にのぼるの嘆あり我朝今日のごときは塔をもつて壙上におくそれ士の墓と姓名をしるす簡易なりといへども人情に適ふ珍敷馬鬣封などまふけんによきに似たりとも稀なる事なれども後來必石碑をもて墓となせば骸骨の下は又足ちりの下とちりを受けん天草の賊ほろびて後宗旨の禁いよいよ嚴なり結束して他にいづるものそれの宗明ならざれは　逼せず店宿せず國家下を御するの大柄也いやしくも其國にむまれ其法にしたがわざるは亂民なり往々儒を　ぶの徒是をいとふてひそかに己がこゝろにしたがひあらはに彼にしたがふ事なり制なきの品

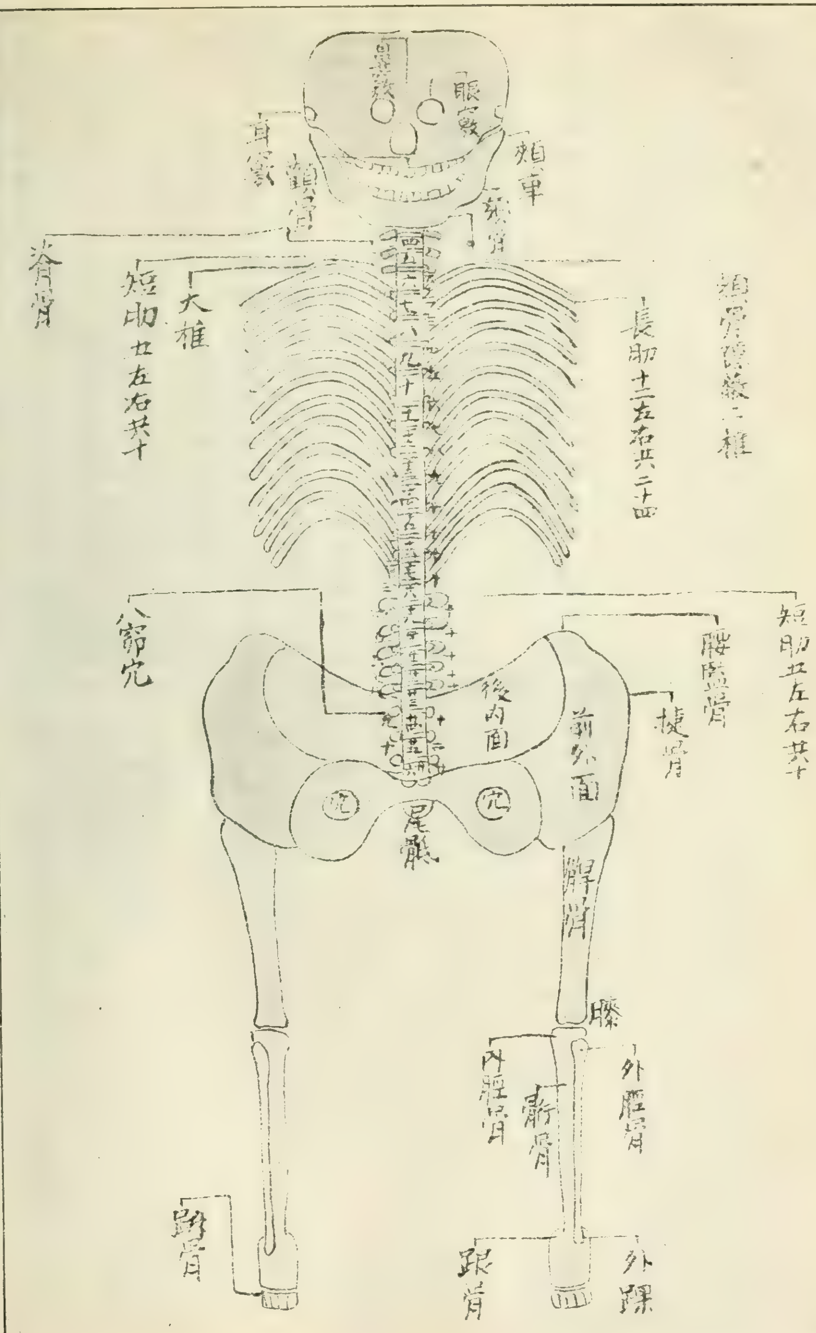
は時宜を斟酌して用るも可なり制あつて制にそふかは是聖を學ぶの人にあらず傳に無其位不制禮是位なふして禮を制するなり名敎の罪人なり律令時王の制にしたがふ制なきの事は時宜を斟酌して古にしたがふべし

造物餘譚

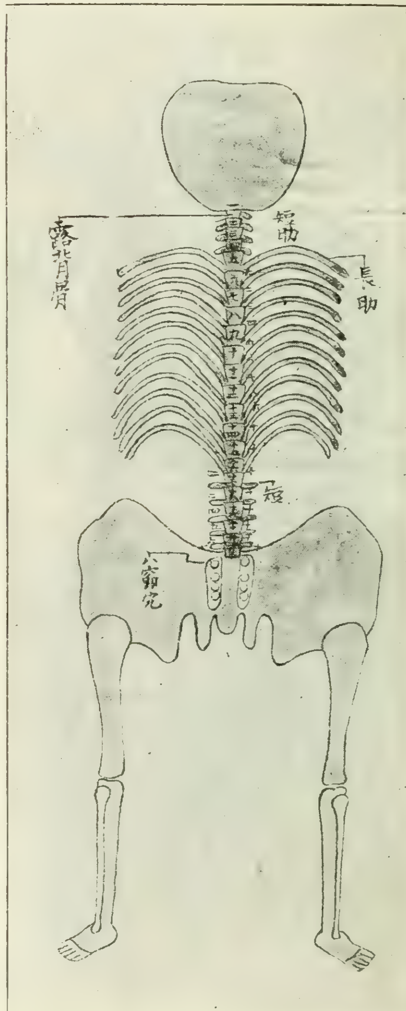
嘗得平安根來子連骨圖、意是近來驗屍之先驅、因以寫之。世雖有驗屍之擧、多是男子。櫃中久藏長州栗山子說婦人內景之書、亦併書之。人之與獸、本同一機關。觀被鑑此、回光反照之功可收。於書牘中、抄麻田剛立解獸之文。其意謂、是皆諸子所極精竭神以索者、安歸之於烏有。時積雨連日、柴門晝閉。抄餘有暇、意觸筆走、漫爾書之。非搆思設藁者。於是乎異彼三子者極精竭神之撰。已成不可無名、題曰造物餘譚。

安永辛丑夏四月　豐二子山　三浦　晉　識

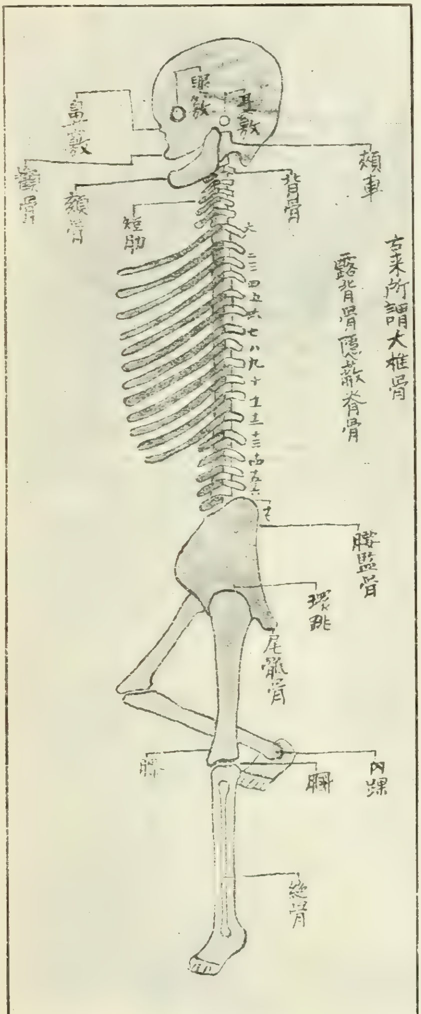
正面圖

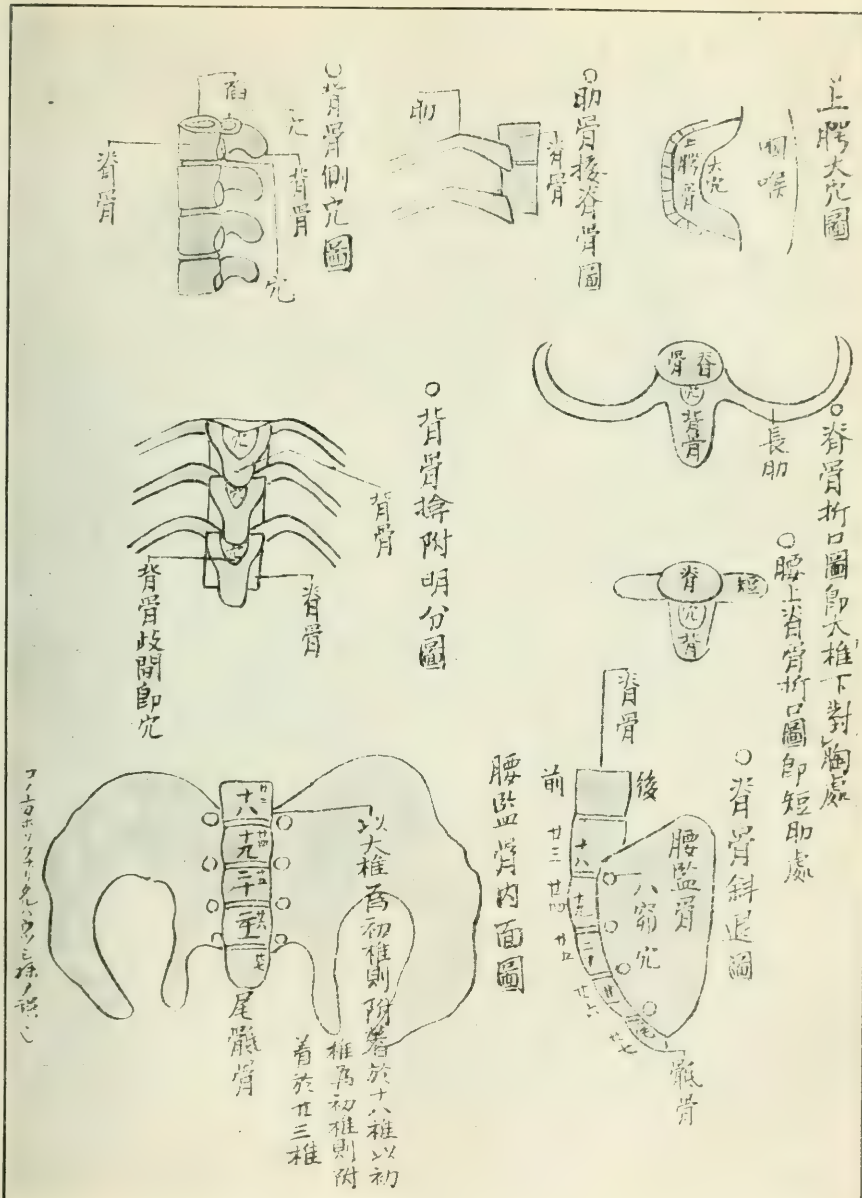

眼窩
頬車
大椎
短助廿左右共十
長助十二左右共二十四
八節穴
短助廿左右共十
後内面
前外面
穴
穴
尾骶
髀骨
膝
内脛骨
外脛骨
跟骨
外踝

背面圖



側面圖




上膈大穴圖
咽喉
上膈骨
大穴
肋骨接脊骨圖
肋
脊骨
背骨側穴圖
穴
背骨
穴
脊骨
脊骨折口圖即大椎下對胸處
脊骨
穴
背骨
長肋
腰上脊骨折口圖即短肋處
脊
短
穴
背
背骨撿附明分圖
穴
背骨
背骨歧間即穴
脊骨
脊骨斜退圖
背骨
前
後
腰監骨
八窌穴
骶骨
腰監骨内面圖
以大椎爲初椎則附着於十八椎以初椎爲初椎則附着於廿三椎
尾骶骨

人身連骨眞形圖之右

頭骨、古來所傳之圖、其形相同、

眼竅二穴、鼻竅一穴、共通口內之上腭、上腭有一大穴、此大穴與眼鼻之三穴相貫、即懸壅所懸之處也。

耳竅通腦骨中、獨不通口內。

上齒接顴骨、下齒接頰骨、前齒獨根、槽牙歧根、齦肉已去、牙齒自若。

頰車、顴骨、頰骨、接於耳竅之前。即是頰車、頗似諸獸之頰車、以手動之則能叩齒。

脊骨、古來著脊骨圖、狀如弓形、而露於背、此乃背骨、而非脊骨。脊骨者、內實形直、如柱、直立於背腹之半、猶屋有大中柱、又似魚脊骨在身之中間。凡二十七節、節亦似魚脊骨及野猪脊骨、而脊間有空、如凹字、含微脂、上接頭骨、下接腰監骨、上細下巨、至廿二三椎而量之、如圍兩食指之大弱。廿三椎下之四推、漸細漸偏、形如竹篦、隨腰監骨、斜退至穀道之後、而盡矣、稱尾骶骨者此骨尖也。

露背骨、古來無背骨之名、即背上督脉之露骨也。余名之曰露背骨。凡二十三、似魚背骨、隱蔽脊骨根歧如琴雁、接脊骨及左右肋骨、其尖向後斜垂、一掩二、二掩三。以次相重。自初椎至二十三椎、積續於腰監骨。其歧間則如穴、上下相貫、又通裏面脊骨節之側、內含脂膏湧出節側。

肋骨二十三、左右共四十六、自脊骨之初椎至廿三椎、附著於節間之兩側、而不節下椎。當節及下椎有缺穴、腹背相貫、亦出脂膏。每椎如此。其脇肋十二、稍長曲後向前、至脇斜垂、胸前諸骨、猨犬食去不見之也。但項間五骨、短而微垂、長肋下五骨、短而不曲耳。

腰監骨、一大片骨、自二十三節至二十七節、掩附於脊骨、頗似龜甲之附著於脊骨。又形似抱物。上甚厚下漸薄、狹背中行、有長陷。陷中有四穴、左右共八穴、上穴濶、下穴狹、背腹相貫、即八窌穴。

人身連骨眞形圖之左

交骨、左右接腰監骨、中行有二小陷、左右相對又

稍相去有二大穴。

股骨、上接腰髖骨、下接脛骨、大倍於脛骨。

膝膕股骨、脛骨、相接處、指爲膝膕、古來有膝蓋骨之說、今見之無、有不知果有否。余竊意、股骨之起頭甚大、有膝蓋之形、因以爲有別骨乎、髀樞踝骨之類亦皆骨端之起頭也。

脛骨、二骨內外並立、而內脛骨大、外脛骨小、上接股骨、下接跟骨、內外踝骨即內外脛骨之起頭也。絕骨則外脛骨之外稜、跟骨、後圓、前方、上接脛骨、前接蹠骨。

蹠骨、有指骨形、而不如指分、後接跟骨、前接指骨、蹠跟之間有斷紋、即衝陽各之間。

享保壬子歲、處於烙刑者二人、月餘不瘞遺體、余偶視之、肌肉腐化、臟腑爛脫、兩手戶骨、亦隨落焉。然大骨連續、卓爾如生、以手操之、則頰車闔闢、脊骨仰俯、膝膕屈伸、及諸節之接續、猶未失機樞也。而二人相同、如合節節、至若人身之起坐、或偃臥、或正立、或直行、仰則胸肋張、俯則背骨出、齒之齧而耐堅、肩之擔而致遠、腹皮舒縮、隨飢飽之類、亦皆在此機樞焉、而其神奇工巧、可謂造化之自然者也。余一見之頓覺蒙開塞決胸次豁然、誠可作醫門之一大法繩也。古來名家未見眞骨、妄認露背骨、而爲脊椎骨、或不知項間腰上有短肋、而爲之圖、爲之說、傳誤於千歲、千歲之人亦茫乎遂不見眞、予幸見之、而不忍不有斯圖、因而寫其所見、以爲一圖、但至機樞、則畫力之所不及也。庶令一開圖而初注目焉、尙於信古疑今者、則余之所不得而强也。

寬保改元秋九月之望南京醫工根來東叔、在原行忠、書于洛陽操神堂。

安永辛丑之春、晉遊中津、逢藩之侍醫根來東麟、東麟即東叔之子也。出此圖示晉曰、此事在享保壬子三月二十六日、其二人者、一曰金柑長兵衞、一曰中衆茂兵衞、因記其言、以實其事云、孖山三浦晉識。

山贈東洋書

久不奉尺一候起居、小人之罪謂何乎。每姬秀伯書到、則言先生解攣起躄之妙、盛稱其美、若己有之、而輕視吾黨田舍生矣。茲知先生平安、諄乎誘人也。小人糊口之業、日繁一日、日夜奔走、唯日弗給、琴書生塵、交游日疎。二三同盟子、相會一堂上者、亦背盟約者數矣、可謂困憊之極也。以故不覺蒙罪於先生、先生幸恕焉。啓者。去府城三十里、何上郁農夫久右衛門之妻阿美濃、歳十七、與他夫通、久右衛門責之、不聽、遂以斧截久右衛門頭顱殆決、不知人事半日、縣吏廼捕美濃繫獄、議罪當磔。吾黨諸子、請執事曰、去年得賜盜吉右衛門之屍、質正千歳之闕疑、可謂國恩哉。而未得視婦人之藏、是爲恨耳。庶幾得減磔罪一等、而供諸刀圭家之用、則仁恩謂何邪。執事相議曰、美濃之虐雖在不可宥、而醫官之請、事關濟生、則從輕奚傷乎。遂允其請、乃斬美濃於南郊、實六月廿一日也。刑畢而後吾黨者行法場觀者如堵。醫生不期來會者百許人。紛紛錯雜不可如何也。於是押牢使柵

其側、劊子叱退雜人、而後吾黨者入柵中、使穢子徐徐奏刀。初撮乳頭、斷房下、仰之觀、則有白脂肉、詳視之、則有若干細孔、想乳汁所通、白肉亦乳汁耳。而後剝胸皮視之、無筋絡通乳房者。肋骨、直骨、氣道、穀道、與男子無異。右肺一襞、右肺二襞、土黃色而黯黑、有大小長短赤點、皆孔也。而後剝腹皮、胃腸肝膽、脾腎胞胱、位直所配、無一異男子也。脾形如蛤、無縐紋。膽綠青色、裂膜則青汁出、穢子曰、甚若、乾則如熊膽、能治膈噎癇症、嘗貯三十許、野狐好食之、爲其被奪、今藏十許。後就穢子而得之。瘵膈噎不功驗。胞胱之後有如蝦蟆伏者、長四寸餘、廣三寸許、黃赤色有兩朶、左朶有三小椏、右朶有二小椏、有二絡、通于兩腎下口、出于陰戶、則知子宮也。剖之、裏面有如火灼瘢痕者、有白膩出。而後出九藏、剖而視之、唯心藏、比之男子、色不甚華、內面白糸密網。腎藏中有白油膩如子宮中。乃證、去年瀧鶴臺所見不差云。脊骨裏面、有絡附著。上通于腦于兩手、中連于兩腎、下走于兩足。手者、外

面有五筋。裏面亦有五筋。至于肘上。爲一條大筋。足者、蹠上有通于拇指一筋。而四指各有筋至踝骨之下。合爲一條。通拇指者、至絶骨之後。亦與之合。與上自脊骨內面走四肢者。連爲一條。手肩所屈伸。足膝所運動。唯此一絡耳。脊骨、狀如尺八。上直下狂。所謂上次中下髎。各有節。合廿有一節也。男子則上髎以下至尾骨。一枚板骨無節。是爲異耳。脊骨面、有鰭如魚者。細視之。鰭之下面有三稜。口含肉。脊骨與鰭之間。有一條小骨。長與脊骨始終。其內竅空。脊骨如尺八者。想以當妊娠保胎之時。小腹不寬濶則不能容也。婦人細腰者少。亦此由也耳。最後剖判腸胃。胃中穀與水也。腸中有蚘蟲。大小百許。胃腸裏面有縐紋。伸縮自在。粘腸內者。如餺飥。或黄色。或青黄色。或黯黑色。所謂腸垢穢物也。屎在腸尾。蚘居腸頭。胃下腸外有積塊。色黄赤。大如拳。裏面點點如灸瘡者。有孔十數。粘著腸膜。不易剝離焉。想是孫思邈所謂裏膿血腸胃之外類也。顧問穢子。此女有宿疾否。曰、繋獄以來不聞有病。但曰四月來不經也。不知其餘云。吾黨更疑三月衃者。而子宮中無有凝血也。蓋其捕縣繫獄。心魂顚倒。氣血不運。故致不經也耳。由是思。是人身血氣水一物。而水凝氣塞。氣塞水凝。水與氣凝塞。而後諸病鋒生也。所謂諸病氣也。諸病水也者。非無其謂也。逐水則降氣也。降氣則逐水也。先生謂之何邪。小人嘗游崎陽。時携田英仙者歸。渠頗善瘍醫。見穢子不能。技癢不禁。叱而退之。鼓刀而進。其於游刀。恢恢乎無滯礙。以故寸剸分剝。無所不至。纖悉無遺焉。小人頃羅邪風。寒熱頭痛。不能執刀圭。今日小間。草草走筆。記所親見。如之。蓋沿脊骨上下一節。剮剥男子而未視有之。茫然省。過乎。將獨在婦人耳乎。請先生徵之將來矣。圖紙一號併上。如嚮所告秀伯。如見北海之若者。小人大喜之。此子謹守先生之道。勿失先生之教。小人之願。無過之者。庶幾先生爲意。聞玄俔君。治瘵大晉。不勝欣躍。又聞道函氏能起痾。小人四年前投社中時。謂此子槃散不成事。未嘗與共語刀

圭之業、及聞斯語、大有愧於道函氏。時下風霜日重、爲道保護。千萬斯祈。謹奉東洋山脇先生梧右。

門生長門栗山獻臣頓首再拜十月十五日。

麻田剛立剝獸狀

明和九年十二月十五日麻田剛立自浪華寄書、言解諸禽獸之事、剝之法曰、阪之市、犬貓甚多、間有喪家者、人惡輙殺之。吾黨竊請其決死者生剝之。其法、始設四楹、爲縛附手足之地、次鐵梃梃其頸矣、絕也速縛焉、乘其未蘇以利刀剝腹皮、而後急斷肋根、撥之。既而蘇則破喉、不然叫聲不忍聞焉。奏刀禁破脉、以湧血失其本色也。

曰諸獸見易カラザル者莫苦精道、腎絡モ脬ニ至テ散ズ。心白系莫所不至也。其向脬莖者多枝散蒙茸焉。唯睾丸ノ外ニ沿フ膏結ノ內ヨリ出ル一絡分明ニ莖ノ三口ノ其二トナルニ似タリ朝鮮ノ馬其陰囊ヲ去又長崎ノ猪其陰囊ヲ去皆使其陰痿之法ト云官者後ニ其精達スル者有レバ宦官モ亦囊ヲ去事アルカ。

諸獸藏狀大同小異ナル者肝ヨリ脉系ノ出ル三支其一支上膈膜而貫キ上テ心ニ入心中ヨリ四脉系出テ二ハ肺ヲ維シ一ハ直ニ下リ左右數椏ヲ生ジ肋間ヲ維シ下膈膜ニ至リ散ズ一ハ直ニ上リ頸下ニ至テ四トナル二ハ左右ノ手ニ走リ二ハ頰下ニテ又兩兩トナリ口ノ上下ヲ挾ミ分散ス一支胃ノ後ニ出、脊骨ノ裏面ヲ下リ腎ヲ維シ又下リ四椏トナル其二上ナル者ハ兩股ノ內ニ入リ足ニ走ル其二下ナル者ハ股ノ外ニ出足ニ走ル一支胃ノ前ニ出腸ヲ維シ其屈曲ニ循テ其餘小椏ノ散分、皮肉腑臟莫所不至。其未死者ハ脉中血盈テ紅紫色。小支散分者分明可見肺ハ呼吸ニ隨テ膨脳ス膨レバ心包マレテ不見脳レバ心現ル心ノ動甚勇壯屈縮伸脹諸脉依之微動スルニ似タリ肝膽ニ動キナク唯肝ハ心動ニ依テ微動スト雖膽ニ至テハ淸淨トメ微動ノ氣味モ見エズ魚類ノ如キモ心動耳也鰻鱉鯉鮒皆然リ魚モ

心肝脾腎アリ脾ハ腸ノ屈曲中ニ附テ黒血ノ如シ煮テ其味ヲ試ルニ血ニ非ス禽獸魚鱉膽ハ綠青色肝ノ前葉ニ附着ス其根綠色細系可レ愛肝ノ中位ニ上リ反析メ直ニ下リ黃膩ニ包マレ下腸ノ首胃ノ瀉口ノ稍下ニ附著ス黃膩ヲ去レバ綠色猶可レ見其附著スル處ハ腸色モ亦綠色如レ獸ハ破リテ見レバ蚘蟲六七十ヨリ百餘ニ至ル諸獸不レ同二其數一其末レ死者或ハ死シテ時ヲ越ザル者蚘多ク膽系モ見安ク時ヲ越日ヲ經ル者蚘少ク或ハ無ク膽系失二其本色一不レ易レ導也禽魚ノ蚘或多或少或無或有莫レ得二其一定一膽味始ニ甘キヲ覺テ小辛ヲ帶ブ咽ニ入ニ及ンデ大苦ヲ知ル故ニ諸膽微少ヲ嘗テ大苦味ヲ覺ル者ハ眞ノ膽味ニ非ズ禽膽ノ苦味獸膽ニ勝ツ魚膽ノ苦味禽膽ニ勝ツ禽中烏鵲ノ膽甚苦メ不レ劣二于魚膽一也其大苦膽トイヘ𪜈口ニ入テ甘味可レ愛ハ諸膽同一味

諸末レ死者脈血滿二于腸胕一テ脹ル死スル者反レ之死メ一日ヲ經ル者ハ脈絡不レ易レ導

胕ハ胃ノ受口ノ下ヲ卷ク脈ノ小極散ズル者來テ之ヲ維シ其散ズル者又胃ニ著シ維ス死メ經レ日者ノ如キハ如レ無二維脈一者上甚不レ似二諸臟之屬系一

腸胃間相連膏膩皆胕ニ著者尤離難シ胕其本ヲナスガ如シ

兩腎中位背面ヨリ淡紫絡（兎スレバ黃白）各一條出テ胕ノ瀉口ノ上ニ至リ左右ニ相隔並ンデ附著シ皮ト交テ散ズ又兩腎ノ下半面、各包膜有、相聚テ各一條ノ絡ト成リ下睾丸ノ上端ニ附著ス牝ナル者ハ此絡即胞ナリ睾丸ノ外ニ一端ニ有二如レ膏者一附著ス此下端ヨリ一自絡出デ睾丸上端ノ絡ト伴ヒ上ル（白膜包レ之絡之上レ之）如二胕之中位ニ至リ白膜ヲ破テ反折シ下リ胕ノ瀉口ニ至リ相並ンデ下莖ニ至リ溺口ト三ニナル似レ應二精道一者上子宮ハ下口在二陰之深底溺道之後一胕ノ背ヲ上リ胕ノ上位ニ當テ左右ニ分レテ二ト

ナル上テ腎ノ下邊ノ膜ニ著ス三子ヲ產スル母犬ヲ見ルニ胞中左ニ三處右ニ二處皮堅ク痘痂ニ類ス破テ其內ヲ見レバ黑血少アリ其間ハ黃白汁粘著スル耳。心中ヨリ白管系二ヲ出ス一ハ大ニメ一ハ小其小ナル者上ニ至テ數樞ヲ生ズ或ハ手ニ走リ眼ニ着キ耳ニ附キ舌根ヲ維シ莫所不至大者脊骨ノ裏面ニ沿テ下リ腎ヲ維シ下ニ至テ大系四トナリ上下兩兩股中ニ入者猶脉入股中也小樞無數左右ノ肋間ニ走リ腸ニ走リ脬及睪丸ニ走ル其腸脬及陰邊ニ至ル者ハ微小文ニテ不易導唯未死者稍見ルヿ易シ死スル者モ不越時者心頭ニテ斷之以小管吹之小樞ノ微動モ亦隱然トメ見之耳。其未死者管ニ氣盈テ色白ク可愛脊骨ヲ上下スル者ハ脉ト伴ヒ衇在前管在背至于腎下四系トナレバ反テ脉背ニ在テ管前ニアリ其股中ニ入者腸ニ走ル者及頭ト手ニ至ル等ノ如キ或ハ脉ト伴ヒ或ハ不伴

胃ハ受口左ノ後ニ在瀉口右ノ前ニアリ肝瀉口ノ上ヲ盖ヒ脾受口ノ下ヲ抱クニ似タリ肝ハ外面密ニメ麁肉也脾ハ外面麁ニメ密肉也心腎脾ヨリ又密也其未死者膈膜中位甚高ク鍋ヲフセタル如シ故ニ肝ハ膈中ニ在テ鳩尾骨ノ上ニアリ腹皮ヲ剝テ見レバ唯腸胃ト脾ノ一邊ヲ見ル而已ニメ肝ノ如キハ少モ不見死スル者稍見ヱ死テ經日者愈現ル膈膜ノ中位心ノ下邊包膜ニ著ス間有不附著者

脬ハ狸獺狐ハ薄皮、管吹之透明可見內也猫狗ハ厚皮管吹ニ不敢膨也

肺葉其數不分明或多或少或ハ同或不同

闌門ト云ベキ者直腸ノ頭ニアリ胃ノ背ニ當ル是又不一定

陰莖狸獺狐ニハ中ヨリ頭ニ至テ骨アリ猫狗ニナシ

睪丸ハ淡紅黃白色肉切レバ白汁出

耳ハ骨壺也

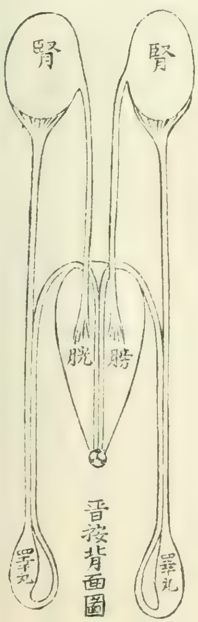
眼ハ膜珠中水ニメ卵白ノ如シ眞中其水稍凝玲瓏無レ可レ比也

乳ハ腹肉ノ外ニ着シテ猶二ノ除皮絲瓜ヲ並タル如シ孔無數トイヘモ肺ト似ズ首尾ニ脉ノ通ズル有耳

諸筋足ニ至ル者脊ヨリ出ズ手ニ至ル者ハ脊骨ト膈竪骨トヨリ出ズ

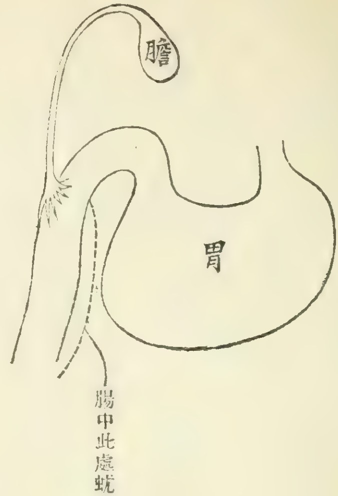
一狗子ヲ產ス其次日母狗死ス其子無レ乳メ餓死ス剥テ見ルニ腸頭瀉口ノ下蚘蟲六十三條アリ腸中ニ塞居ス長キ者二寸餘短者不レ下二八分一乳飲不レ滿二二日一如レ是然レバ蚘ハ素ヨリ不レ能レ無者乎。





晉按背面圖





○安永二年三月朔同人ヨリ來ル書如左
此コロ山脇東洋ノ門人河野大學ト云者ニ逢
去去年京都ニテ婦人觀臓ノ時居ヲナス人也
其女年三十二
肝餘程大也右葉長ク左葉短シ膜ヲ去テ見レ
バ小葉イクツモアリ
肺、外見四葉膜ヲ去レバ小葉イクツモアリ
子宮、徑三寸バカリ兩ニ耳アリ耳ヨリ腎ニ至
ル絡アリ耳内精汁澤山ニアリ男子ノ陰精ヨ
リサラサラトアリ脊骨ニ鰭アリト東洋云シ
ハ所見麁也只節節ニ小骨小指ノ如キ者アリ
胃ノ受口後ニアリ瀉口前ニアリ
直腸餘程高シ胃ノ背ノ下ヨリ下ル
脾ハ大概圓ク少シク長シ卵ノ如ニメ皺アリ
腎藏志ノ通胃ニ懸ル
心ノ上頭耳ノ如キ贅アリ朝五ヨリ内斬死ノ
者四ツ時ニ見シニ兩ノ贅末少宛動キシ由
脬小便ヲ押出シ陰ノ門外溺口ヨリ管ニテ吹

ケバ脬脹滿ス門内深底ニ管ヲ指シ吹バ子宮少シ動ケドモ不張皮厚キ故カ子宮中血ナシ腸ニ支アリキセルラウ位四五寸許ノ物アリ紅夷圖ノ蟲腸ノ類カ

以上大學説又同書ニ云

此ゴロサガリタル牝猫ヲ見ルサガレバ牝ノ陰肉滿肥ス其陰門ノ兩邊滿肥肉中、睾丸ノ如ク楕ニメ卵ノ如キ者アリ腎ヨリ絡來テ附シ又此肉ヨリ一絡ヲ出シ腎ヨリ來ル絡ト伴ヒ上リ脬ノ上邊ヨリ反折メ二絡相並ンデ脬口ニ至ル牡睾丸ノ系ト異ラズサガラザル者ハ見難シ

諸獸皆陰門ノ深底ニ子宮ノ口ト溺口ト相並居ル人ノ溺口門外ニアル者ト大ニ不同

狐ニゲールクヮト云如キモノアリ

又ノ書

古河ノ河口氏解屍編、心斜倚膈膜上ニ而左欹トゴザソロ。ヨク氣ヲツケ申ソロ。諸獸皆右ノ通リニゴザソロ。先達ヨリ段段心附候處、此度解屍編並ニ新圖蠻圖皆左ニ欹チソロ。其耳ト申者モ右ノ前ト左ノ背トニ在テ尖リハ皆左ニ向ヒ申ソロ、是ハ獸ニテ見トメ申ソロ。

又ノ書

舊冬娠狗八ニテイハヾ四五ヶ月位ノ胎ナルヲ解申ソロ胞左右ノ上頭膈膜ニ屬シ申ソロ腎ヨリ通ズル系ハ無シ腎ノ下大脈兩系ヨリ支出胞ヲ維シ申ソロ胞中濁水アリ水中ニ卵ノ如キ者アリ破レバ清水アリテ出ヅ其内ニ又卵ノ如キ者アリ又破レバ又清水アリ此水中ニ狗兒カガマリ居ル臍帶卵ニ連リ外ニ出其外ノ卵ニ連ル外ノ卵ヨリ胞ニ通ズル系ナシ五子胎ノ處左胞ニ二ツ一牝一牡頭皆上ニ向フ右胞三ツ二牝一牡頭皆下ニ向フ此狗娠故カ白系中ノ血甚滿ツ僅ニ破レバ大ニ瀉出ス後ニ心肝肺脾ヲ連ネナガラ脈ノ上下頭ヲヨククヽリ血ノ不出樣ニシテセイロウニテ

蒸シ候ヘドモ血何程ニモ堅マリ不レ申候又鍋ニ入煮候テ段段幾枚ニモ切リヘギ候ヘバ肝膽系ナド分明ニ見ヘ申ソロ心中空處數多ク思ハレ候所ニ分明ニ二ツニテ二ツノ交互スル者ニテ白系ノ血淵ト紫系ノ血淵ト斷然トシテ二也毛モ通スル穴ナシ勿論白系中悉血滿テ有レ之候膽系肝ノ中心ニ至リ反折シテ下リ腸頭ニ屬シ申ソロ悉シク圖シ置ソロ間近日何トゾ寫サセ入二御覽一可レ申ソロ一狗ノ開臟ニ此度ハ三晝夜懸リ申ソロ

〇間記

所レ號レ爲二間記一者、乘レ間而記、隨二意緒之所一レ抽、非二敢立一藁、豈顧二其倫次一哉。

予形體醫典ニ合セザルヲ以テ屢諸獸ヲ剝シ禽魚介蟲ニ及ブ或曰禽獸人ト異リ何ゾ人ニ於テ益アラント予之ヲ喩シテ曰陰陽ノ道一ニヲ合ミ二開レ一故ニ物其道ヲ異ニストイヘドモ其居同ジキ者也故ニ同ハ異ヲ離レテ居ル者ニアラズ異ハ同ヲ離レテ居ル者ニアラズサル程ニ魚ハ水ニ生キテ氣ニ死シ禽ハ氣ニ生キテ水ニ死シ魚生ルニハ沈ミ死スルニハ浮ミ鳥生ルニハ上リ死スルニハ落ル所ハ異レドモ同ジク其處ニ生キ其處ニ非ザルニ死シ其・死反ニ生之居ニ至テハ異ラズ水車ノ一半ハ去テ遠ザカリ一半ハ來テ近ヅクノ道ハ異ナレ圧居ハ只一轉ノ内ニアルニミヨ故ニ其異ル方ヨリ見レバ人心不レ同其面ノ如シト云モ其同キ方ヨリ見レバ人心不レ異其面ノ如キナリ是ヲ以テ異ナル方ヨリ觀レバ猫ハ猫犬ハ犬物每ニ同ジカラズ同キ方ヨリ觀レバ猫犬ノ目ノ見ユル理モ、人ノ目ノ見ユル理モ猫犬ノ鼻ノ嘘噏ヲ通ズル理モ人ノ鼻ノ嘘噏ヲ通ズル理モ細工ノ違コソアラメ其理ニ相違ハアラジ其異ル所ヨリシテ猫トモ犬トモ鳶トモ鳥トモ分レ其同ジキヨリシテ鳥トモ獸トモ合シ鳥獸又一動トモ合スル也觀物ノ

法異ルニ反觀ノ道アリ比スルニ推觀ノ道アリ天下ノ物千象萬貌トイヘモ反比ノ態ヲ識ル時ハ草木ノ殊形モ同一生ニ歸シ天地ノ已ト體ヲ同フセザルモ給資ノ道ト云者有テ相應ズル事アリ然レバ唐ノ山ノアナタニ立雲ハココニタク火ノ煙也梟ニテ諸獸ノ形體其異ル所ニテ猫ヲ知リ犬ヲ知リ其同ジキ所ニテ目ノ視ル所ヲ知リ耳ノ聽所ヲ知リ朊ノ溺スル故ヲ知リ屎ノ肛スル故ヲ知ラン

膍胵、康熙字典、膍、頻脂、功、胵、處脂、功、廣韻、膍胵、鳥藏、博雅、百葉謂之膍胵、膍、下曰、說文牛百葉也。一曰、鳥膍胵、韻會、百葉、牛肚也。膍胵、鳥之腸胃也。胵音鴟、一曰五藏總名、博雅、百葉謂之膍、正字通、李時珍曰、膍言其有比列也。牛羊食百草、與他獸異、故其胃有脾有蜂窠亦與他獸異也。ト人ノ腹內ハ臟腑ノ分、自分明也。臟者藏氣腑者納質然レドモ周禮ニ九藏ト云ハ臟腑ヲ總テイフ也。實ハ其名當ラズ今膍胵鳥ノ腸胃トスレバ何レ

腸ニシテ何レ胃ナルヤ且腸トスレバ腑ノ名ナリ廣韻ニ鳥ノ臟ト云說ト反ス且イツテ五藏ノ總名トスル類膍胵ノ二字ヲ得テ臟ノ一義ヲナセバ膀胱ト云テ脬ノ一義ヲナスガ如キカ又膍胵臟腑ノ別有トスレバ何レヲ臟ト定メ何ヲ腑ト定メン然レバ畢竟濫名也臟腑ヲ以テ禽獸ニ通ズルニ如ズ百葉ノ注是又別義本綱ヲ見ルニ膍一名百葉トシテ時珍曰膍音毗言其有比列也牛羊食百草與他獸異也故ニ其胃有胵有胘有蜂窠亦與他獸異也胘即胃之厚處トアリ胘字典ニ胡田切音賢玉篇ニ牛百葉廣韻肚胘類篇ニ服虔說有角曰胘無角曰肚一曰胃之厚肉爲胘又博雅胃謂之胘又肚字下ニ廣韻腹肚集韻胃也正字通俗呼曰肚博雅胃謂之肚胃ハ胃ノ字也胃ハ本穀府ナルニヨリ口ノ內ニ米ノアル形也㐫ハ米ノ字ヲ横タヘテ書タル也予未牛羊ノ內景ヲ見ズ此注ヲ讀ンデ徒ニ茫然ヲマス而已又同書ニ正韻膍

通作脾引周禮醢人脾析註脾析牛百葉也是膍與脾通用トアレバ百葉ハ牛ノ脾ニテアルニヤ又同書ニ音甕廣韻膍臍人臍也急就篇膍腎五藏膍臍乳トアリ是自別義也

本草綱目獼猴腹無脾以行消食トアリ我獼猴ヲ解テコレヲ見ルニ脾アリ諸獸ノ脾ハ形竹篦ノ如シ獼猴ノ脾ハ形如馬蹄ニメ其色紫也依テ思フニ人ノ脾モ馬蹄ノ形ノ如ナレバ立行スルモノノ脾ハ圓ナルニヤサレドモ多ク試ザレバ實ニ其歸ヲ知ザル也

鹿ノ腹內諸獸ト大ニ異リ腸胃ノ皮最薄メ柔ナリ飲食ニ堪ザラントスル者ノ如シ胃ハ諸獸ヨリ大ニメ腸ハ諸獸ヨリ甚小也屈曲ノ體モ大ニ異リ心肺ハ格別ノ違無ナシ野猪腸胃ハ青黑ヲ帶鹿ハ白シ肝脾諸獸紫色也鹿ハ其ニ青黑色脾ハ諸獸胃ノ左ノ後ノ下ヨリ胃ヲ上ニウク鹿ハ肝脾色ノ別アリトイヘドモ其ニ青黑色肝脾共ニ厚クメ堅シ肝ニ枚枚ノ襞アリ脾ハ一枚トイヘドモ大形イヅレモ圓ニメ鏡ノ餻ノ如シ肝ハ右肋ノ下ニ懸リ脾ハ左肋ノ下ニ懸リ豚膈膜下ニシツカリト維ス肝脾胃ノ左右ニ下リ垂ルル事大抵相同ジ鎧ノ兩袖ヲ見ルニ似タリ

魚水中ニアレバ噓噏ヲ用ヒズ故ニ肺ナシ腹ヲサクニ其脊骨ニ傍フノ兩邊皮ヲ隔テテ氣ヲ蓄ル處アリ又鯉ハヱノ類風袋トテ氣ヲ蓄ル者アリ水陸ノ物氣ヲ有スル事ハ一ナリ鼻ヲ用ユルモノハ氣ヲ通ジ鼻ヲ用ヒザル者ハ氣ヲ閉ヅ氣ヲ閉ヅル者ハ水ヲ呑吐ス氣ヲ通ズル者ハ水ヲ閉ヅ水ヲ閉ヅル者ハ水中ニ入テ水ヲ通ズルノ竅ナキニヨリ氣ヲ給セズメ死ス氣ヲ閉ル者ハ氣中ニ來テ氣ヲ通ズルノ竅ナキニヨリ水ヲ給セズシテ死ス

龜鼈ノ類ハ陸上レバ氣ヲ通ジ水ニ入レバ能ク氣ヲ閉ルノ自在アリトミヘタリ

蛤類其屈膝(テウツガヒ)ノ處督ノ位ニメ脣ノ處任ノ位也

鳥獸ノ類督道ヨリ羽毛左右ニ分レ下リ任道ニテ合スル也螺類ハキリ〳〵ノメグリノ脊筋督道ニシテ蓋ヲ閉ヅ鰒ハ蓋ナシ石ヲ假テ自護ス

蛤類ニ其肉中二ツノ管ヲ並ベ抽ンヅ俗目ト云細カニ觀ルニ一ハ食ヲ受ルノ孔也一ハ食ヲ出スノ孔也

動物ハムマルル者也植物ハハユル者也然ルニ牡蠣石蜐ハ動物ニテハユル者ナリ海邊潮ノ落タル時石ヲ見ルニナラノカラナドノ樣ニテ靑キ柔ナル細葉ナルアリ水植カト思ヒ指ニテ當レバ葉ヲ縮テ閉ヅ

我國東郡北海ノ濱ニ長崎ト云崎アリ奇絶ノ地ナリアル年七月望後舟ニ乘リテ遊ビシニ水中白キ物潮ノ動ニツレテヒラ〳〵ト動クトラシメテ見レバ菌也

蛇蟾蜍ハ物ヲ呑ンデ食ハズ鼬ハ吸テ食ハズツラ〳〵諸鳥獸ヲ見ルニ草木ノミ食ツテ生ヲ食ザル者寡シ但蟲豸ヲ除イテ鳥獸ヲ嗜ム者ハ鳥ニテハ鷹鸇ノ種類獸ニテハ虎狼ノ種類鷹鸇ノ類ハ觜爪曲ツテ尖シ虎狼ノ類ハ牙爪尖メ鋭シ猫犬狐狸皆虎狼ノ類ナリ牛馬ノ種類ハ皆蹄也猪羊犀象皆類也含牙戴角此種類ヨリ外ニハアラズ此種類スベテ鳥獸ヲ捕ルコトヲセズ蟲豸ヲ食フ者モ稀ナリ野猪ハ螻蛄(ケラ)ナドホリテ食フトイヘリ故ニ力强ク牙角アリトイヘドモ勢逼ルニ非レバ物ヲ害セズ天地ヨリシテ觀ル時ハ動中ノ君子也草木ノミヲ食フ故ニ苗稼ヲ損ヒテ人ノ怨敵トナル

麒麟モ麕身牛尾一角圓蹄ナドイヘバ牛馬類ト見エタリ不レ履二生蟲一不レ踐二生草一トイヘリ生蟲ヲ履ザルハサモアルベシ生草ヲ屣ズンバ大道バカリ行ナルベシ

鼠ノ闔門ハ圓ニメ囊ヲナス胃ト相對スルガ如シ兎ノ闔門ハ歧アリ甚ダ長シ野猪鹿ノ類

ハ强テ關門ト云程ノ事モナシ
鼠ノ膽他獸ノ膽ト大ニ異リ本綱ニトク所ノ如シ
牛馬ノ類ハ含牙戴角ニメ蹄也虎狼ノ類ハ尖牙利爪鼠ノ類ハ利齒(ムカバ)ニアリ兎ノ如キ其齒ヲ見テ鼠ノ類ナルヲ知ル
國東郡ノ北海ニ姫島ト云アリ寛保元年酉ノ歳鼠妖アリコレヲ島長古城安右衛門ナル者ニ問テ其悉ナル事ヲ左ニ記ス其歳七月初旬ヨリ鼠出來リ日ヲ逐テ漸ク多クナリ人家ハ勿論園圃林叢其數ヲ知ラズ人ニ逢テ恐レズ八月ニ至ル民人胡麻ヲ刈テ積置タルニ群鼠聚リテ切リトル因テ棒ヲ以テ直ニ敲キ殺スヿ夥シ鼠土藏ニテ穀類ヲ食フ故ニ穀ヲ土藏ヨリ出シ家ニ置キ晝夜鼠ヲ逐フ十月ノ頃島長土藏ニ餘リ多キ故ニ戸板落シヲ仕懸ケ二度落メ三十三頭得タリ島長鷗鷺ヲ獲テ居門ノ柱ニ懸置キ朝起テ見タルニ鼠ニ食レテ臀バカリ有リトカク餓タリト見エテ家ゴトニ然リ霜月ノ比ヨリ次第ニ少クナリ歳越ノ頃ハ常ヨリモ靜也キ定メテ地ノ方ニ行シニヤト又島長古老ニ聞シハ其二十年前漁人網ヲ下シケルニ夥ク鼠懸レリ而メ島ノ觀音ノ濱ニ死鼠大分打上ゲタリト云ヘリ本綱ニイヘル水鼠トハ別種ト見エタリ其形狀常鼠ト異リシ樣ヲモ聞ズ直海元周ノ廣和本草ノ海鼠ナル者是ト同ジキニヤ其文ニ曰海鼠俗名イナアラシ常ノ鼠ヨリハ首稍尖リテ尾短シ元文年中能州ノ海ニ近キ里ヘ出テ稻黍ヲ害スル事最甚シ後ハ山中ヘ入リテ木皮ヲ食シ山林ヲ害ス年ヲ越テ翌年群集シテ又海中ヘ去ト云云著聞集ニ黑島ノ鼠ノ事アリ黑島ハ伊豫國矢野保ノ內一里バカリ離レタル地ノ由此處ニ昔カツラハザマノ大工ト云網人魚ヲ引ント伺ヒアリキケルニ魚ノアル處ハ光リテ見ユル者ナルガ磯近クニ夥敷光ル所アリ

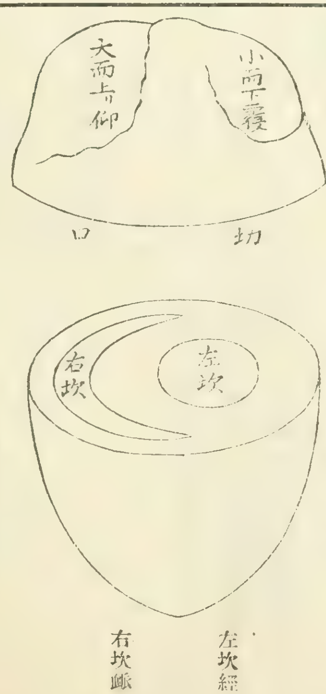
悦ビ網ヲ下シケルニ魚ニハアラデソコバクノ鼠ヲ引揚ゲ陸ニ上ルト鼠ハチリ〴〵ニ遁失セタリソレヨリ此島ニ鼠多クナリテ耕作スル事ナシトイヘリ陸鼠ハ水クグルベキ者トモ見エズ怪シキ事也陸鼠モ災ハナス者トミエテ郊牛ノ角ヲ食ル事魯史ニモ見エ平清盛ノ馬ノ尾ニ巣ヲモ懸シト云傳ヘタリ大友興廢記ニ天正十九年豐後野津院ノ内ニ鼠群リ集リ一夜ノ内ニ大木ヲ食倒セシ事ヲ記セリ是ハ陸鼠ナルベシ晉書ニハ太康四年會稽ノ彭蜞及蟹皆化爲鼠甚衆復大食稻爲災ト云コト見エタリ

諸國里人談ニ攝津川邊郡昆陽池ノ鯉鮒小魚皆片目也トアリ

姫嶋長又曰寛延改元戊辰六月島ノ濱邊ニイガ大分打寄タリ長サ一寸本太ク末針ノ如シ踏メバ足ヲ刺ス指ニテ捏レバ摧ク色白シテ微ニ腥氣アリ海邊雪ノ如シ二十日バカリニシテ消失タリ其年九月二日大風島民謂テ風徽トス

經ト脈ト古典分曉ノ説ナシ十二經ハ脈ノ如キ孟浪ノ語徽トスルニ足ラズ心臟左右ニ耳アリ左ナル者脈ノ維スル處ヲ蓋フ右ナル者經ノ維スル所ヲ蓋フ予諸獸ニ於テ牛馬猪羊狗ヲ未見其他ノ獸ニテ見ルモノ

観ル者ノ右



観ル者ノ左

大概如此蓋人身ノ立ヤ資始者アリ儒家ニ所謂先天者也資繼者アリ儒家ニ所謂後天者也資始者トハ外ノ養ニ由テ存セザル者也資繼

者トハ外ノ養ヲ用ヒテ存スル者也人ノ始テ胎ヲナシ生ルヽ迄ハ嘘噏モセズ飲哺モセズシテ人ノ人タル者已ニ備ハル是資始者唯是ヲ生涯持居クル事也已ニ母ノ胎ヲ出レバ母ノ天ヲ離ルヽ故我自天地ニ資リテ母ノ天ニ得タル者ヲ養フ是資繼者也資繼者ハ天氣ヲ嘘噏ニ資ル故ニ鼻ヲ天門ト云地質ヲ飲食ニ資ル故ニ口ヲ地ノ戸ト云天地資繼ノ養ヲ斷時ハ資始者立事能ハズ天氣地質ハ常ニアレド胎中ニ具ハル者已ニ盡レバ養ニ益ナシコヽニ於テ嘘噏飲食ハ外ヨリ養フ者ナレバ皆外ニ通ル門アリ資始者ハ天ニ得ル者ナレバ內ニ閉テ外ニ通ゼズ是ヲ以テヨク其天ヲ保ツ故ニ嘘噏飲食外ニ養ヒ經氣脈經內ニ活ス經ハ左坎ニ通ズ天ニ得ル處ノ氣養ヲ嘘噏ニ資テ立ツ者也脈ハ右坎ニ通ズ天ニ得ル處ノ液養ヲ飲食ニ資テ立者也コレヲ分合圖ニハ心ノ大經虛ノ大經ト譯シ解體新書ニハ動脈

血脈ト譯シ太西ノ利瑪竇ハ從肝出之絡從心出之絡トス漢典ニハ渾テ其沙汰ナシ利瑪竇從肝出者ヲ血ニ屬シ從心出者ヲ熱ニ屬ス動脈血脈其名ノ如シ分合圖ハ總テ經ト稱シ新書ハ總テ脈ト稱シ利瑪竇ハ總テ絡ト云絡ハ本脈ノ標ナリ晉條理ヲ以テコレヲ分チ左坎ニ通ズル者ヲ經トシ資始氣之道トシ右坎ニ通ズル者ヲ脈トシ資始液之道トス本幹脊ニ沿ヒ支別相分レ散ジテ蒙茸焉トシテ到ラザル所ナシ西洋ノ說ニハ氣ヲ有スル者ハ標ヨリ本ニ氣ヲ輸スルトシ液ヲ有スル者ハ本ヨリ液ヲ標ニ輸ストス氣液絪縕シテ神ヲ其上ニ奉ズト見エタリ是ヲ辨ジテ人身資始資繼ノ故辨ズベシ

菓蔕朶ニ在ルノ間養ヲ本幹ニ取ル菓已ニ枝ヲ辭スレバ本幹ノ餘蔕ニ斷ツ故ニ自天ニ資リ地ニ資ル人ノ臍帶即菓ノ蔕ト其故同ジ

鳥卵在後獸胎在前獸肺在前鳥肺在後鳥肝隻

獸肝偏鳥以脣爲齒以距爲角髓ヲ解ヲ見シニ形狀ハ大ニ異レドモ臟、腑全人ノ如シ而陰尾頭ニアリ

獸無嗉鳥無脬鳥缺智於思慮則盡美於羽毛獸缺美於羽毛則多智於思慮

魚ニ耳ナシ然レトモ池魚ノ游ブ聲ヲ聞バ必沈ム我聞鯔、目封スル時聽コト疾シ聽事重キ時視ル事疾シ

衆草木多ク花ヲ開キ花蘂ノ正中實ヲ結ブ蓮ハ花實一時ニナル菰ハ實ノ頭ニ花房アリ薯蕷ト杉トニハ花ニモアラズ實ニモ非ザル者ヲ結ブ棣棠水仙ハ花有テ實ナシ欸冬蓮ノ類以根爲幹畢竟蔓類

人以人之所有爲常故觀滯於他物宜觀之於萬物融其滯蝦向後而跳、蟹以傍而行、鳥以脚而摑以手而飛、獸以翅而攫以足而歩、猿猴足亦手、牛馬手亦足、蛇以腹而歩以首定所向、魚以鰭而游以尾定所向、馬之以脣爲用、猶牛之以舌爲用、而象之用鼻猶牛馬之用口

望潮無首、水母無腸、螺能倒行、蝙蝠能倒懸、蜂則滿面皆目、蛛則滿身皆腹、蚊蠅則長舌以喙、蜂螽則横口以食、

諸動眉ニ用ナシ蟻類ノ行先以眉物ヲ窺去就ヲナス兒童其眉ヲ去テ相向シムレバ相觸テ互ニ相嚙ム。動、鬚ニ用無シ蛸ノ類以鬚爲手足今呼ンデ蛸ノ手トスル者細ニ觀レバ鬚也其首トスル者腹也口肛處ヲ同スル故腹却テ首ノ如シ手ナル者口ヲ環テアリ然シテ目鬚ノ外ニアリ目ト口トヲ定メテ鬚ナル事ヲ知ル其手ヨク物ヲ喙ヘバ鼻ノ用ココニ在

我聞鶍鶍ハ反踵、果然仰鼻

人知鰈以左右爲上下而不知己以上下爲前後

蓋物ハ徵ヲ衆ニ取テ變ヲ孤ニ觀ルベシ萬生皆腹地ニ向ヒ背天ニ向フ鼻頭前トナリ尾後トナル唯人ノミ前ヲ上トスル故ニ下トナル所ノ腹却テ前ニナル是ニ因テ終ニ是ヲ正ト

シ横生ヲ偏トスルハ人ノ境ヨリイヘル言ナリ横生ニテ觀ル時ハ督道上ニアリ任道下ニアリ地質ヲ通ズルノ口ハ地ニ屬シ天氣ヲ通ズルノ鼻ハ天ニ屬シ萬毛萬羽皆鼻ヨリ後ニ向フ總テ天地ニ達觀セントナラバ人ヲ棄テ人ヲモ萬物ヲモ同シフニ傍觀シテ而後人ニ得ベシ天地ニ私ノ覆載ナク日月ニ私ノ照シ無シ物ニ各長ズル處アリ虎狼ハ猛ニ長ジ猿猴ハ輕捷ニ長ジ魚鳥ハ飛潛ニ長ズ是人ノ短カキ處也鳥ノ卵ヲ伏スル時殼ヲ破ル事早ケレバ生育セズ晩ケレバ死スヨク其時ヲ違ヘザルヲ啐啄同時ト云人巧ミナリトイフトモ此時鳥ニ及ブ事能ハズ總テ物ニ長ズル所ハ人ニ奪フ人ニ長ズル所ハ物ニ奪フ人ハ知慮技巧ニ長ズル者也我ニ長ズル者ヲ以テ物ノ奪ハル、所ニ施ス是ヲ以テ我勝テ直チニ上ル也人虎狼トテ惡シキ者トイヘドモ虎狼人ヲ食フ事多キカ人虎狼ヲ殺スコト多キカ物ヲ殺ス事人ヨリ多キハ無シ人ハ鳥獸魚鼈蛤螺蟲豸物トシテ殺サザルナシ狗狗ヲ食ズ人ハ人ヲ食ム己ガ類ヲ殺ス事人ノ如キ者他物ニアラズ其生モ人程ムサキ物ハ無シ其故ハ修飾ニ怠レバ垢穢臭ヲ生ズ他物雨ニヌレ土ニ伏シテモ濯濯タル者ト同ジカラズ故ニ人ノ貴キニハ非能修飾シテ道ニ循ヒ慈愛ヲ以テ義理ヲ正シ天地間ニ長タル可シ若人ニシテ人ヲ食バ猫犬ニ及バズトスルモ天地ニ於テハ負ケジ

麻ハ花サク者實ノラズ實ノルモノ花サカズ

蒜開花於葉頭蘘荷開花於莖外

花瓣ヲ數ルニ天南星虎掌ノ類ハ一出虎耳ハ二出燕子故胡蝶ノ類ハ三出萊菔蕓薹ノ類ハ四出櫻梅桃李皆五出水仙射干皆六出鐵仙七出芙蓉八出臘梅九出雀舌十出

草木ヲ合シテ植ト云鳥獸ヲ合シテ動ト云動植ハ一生ノ分天地ノ間水火アリ天地位ヲ設

ケ水火其間ニ絪縕シ此動ト植トノ生アリ天地之間如此擾擾タルガ如シトイヘドモ天地也水火也動植立于其間可謂簡矣

物活運ノ路アリ人ニ於テ脈ト云天ノ東西線玉石ノ理草木ノ文皆脈也山水ニハ直ニ脈ト云詩文草ニモコレナケレバ章ヲナサズ故ニ其相接スル處ヲ過脈ト云一扁成就スルヲ脈絡貫通ト云

植則冷止無意、動則溫動有意、動成天物、植成地物、動專神氣植專本氣、動能行天植能立地、動則横行柔輭、植則竪立堅剛、植則本下標上、動則本上標下植以質實取物於外、受養於下體、動以虛質取物於內、受養於上體、植結子於上表、動託胎於下裏、是條理ヲ能合シテ動植一之分二者ナルヲ知ベシ其詳有玄贅二語在

安永辛丑夏四月二十日二子山三浦晋漫記

自生餘譚目次

癸未抄冬起草
甲申正月換草

自生餘譚

三浦晋　著

醫說

天地者、一氣一形也、氣形、於人爲身生、氣形、之分爲氣液骨肉也、氣分溫動、而溫外爲衛、內爲營、動外爲息、內爲脈、液分膏血、而膏外爲脂、內爲髓、血外爲津、內爲血、骨分筋骨、而筋外爲外筋、內爲內筋、肉分臟腑、而臟外爲外臟、內爲內臟、腑外爲外腑、內爲內腑、蓋動○各有爲生生而具動別有用意之器蓋天地○○○有聲色臭味故有視聽聞味以用之人之事有善醜酬酢故有意智技巧以用之故氣液骨肉爲用意爲文分之、則耳目鼻舌心肺肝腎之臟、手足胱彖咽胃腸膵之腑、有內外上下前後左右以紀之、擧而貫之者、本氣也、運而用之者、神氣也、神有心性、蓋性者以耳目肢體之生而成者也、心者身之精英、役使耳目肢體者也、故性分情慾、情慾爲愛憎慾惡、心分意智、意智爲

思慮知辨、而本氣者營衛息食以爲此之本根也、死生盛衰者、人之常也、疾痛横夭者、人之變也、心有喜怒憂歎、事有殺活予奪、氣有寒暑燥濕、身有勞逸饑飽、易以爲不平矣、且天人氤氳之間、氣結爲毒、以浸淫于人如此者有戾生養之和氣則駭駭卒遽以發痒疾苦、闘蓋感應者鬼神也、詩曰神之來思不可測思今疾病醸于感應之間、當其呻吟之間原感應之所因或可就其跡窺其因或難以窺窬說其故今技家或歷歷辨其所因或一概模糊塗抹其說恐未可爲得焉、伏案病者人之變也、變者非無常之謂也、病雖變也、受病者此身也、此身則骨肉也、此生則神本也、神氣有情智、本氣、有營衛、故受病之地有神本之二神有情智本有營衛所分爲四也、能戾和氣而害生養者謂之邪、大而天下之治亂、小而一身之病徤、皆不出此四焉、能察氣形、而適條理則胡越奚隔未得其故冥搜暗索謹按、氣形之分辨者、天地之條理也、醫療之感應者、醫者之技術也、遊于感應之技中者、未知天地之條理、譬如舟師之能使風使波、未知風波奚正觀風波、由其所使、以自窺窬、觀其所使而併窺窬而信之、夫人之有病、與生偕生、則醫禱之道、亦不得與生偕生焉、大古久矣、無得而傳焉、其始傳名者、我稱大已貴少彦名、彼稱神農黄帝、大已貴少彦名、與神農黄帝、唯傳其名、不傳其道、則醫之無可傳述者、和漢一也、醫事於記命、初見、於周禮具梗槩、然未知論說方法如何焉、周季技能之士、以口舌、馳鶩天下、於是譚醫家、欲以其佞、與百家驅騁、託名於黄岐以立說、於是天地之道、陰陽之分、寒暑之運、晝夜之行、臟腑經絡、莫所不言焉、然要其歸、則五行配當、窺窬杜撰可玩之於典冊之上、而不可推之於實徵、黄岐素靈之後、述之者、有世稱扁鵲所著八十一難者、爾後王叔和皇甫謐、皆推衍增益使問道者、皆左赴大澤、爾後號稱豪傑者無一出其藩園者則其事可知矣而唯謂活者、諸家推漢張仲景氏、而世不傳其全本、則醫家無全經、尙矣今其立言垂範者、由其書、觀其

治、則入幽出明、起死回生、似與造化爭機、審察則獨擧合其意者、捨其不合者、於是其謂陰不足易有餘者、亦奏効、謂易不足陰有餘者、奏効乎考之則各失天地之條理、阿所好而衒其技矣、惡在與造化爭機、晉耕孖山之田、汲孖溪之流、文淺藏陋、況不能精意外醫技感應之間、則猶陸人論舟、雖然千古豪傑之士、偶遺天地之條理、俟晉使言之雖不慣技也、其條理則可言矣、由條理說物、則雖成說豈可阿從哉、蓋醫之技不在他言、在病情與藥情、而能察其感應、今技家其說病情與論藥性、往往相氷炭而以其技工鳴世、則相同者何哉、蓋古之學書者、有聽江聲而進者、有觀劍舞而得者、蓋意有所注、由所觸而達、學禪者念念在禪、故棒亦悟、喝亦悟、彈指亦悟、舞踏亦悟、悟在我、不在物、故念在技醫、則於素靈亦治、廢素靈亦治、所悟、則在我所求、悟於所求者、未必悟其所不求、故所觀則江也、劍也、所悟則書也、未悟江與劍矣、噫素靈以下本已誤、則沒徵於事物、冥搜暗證、辨雄者勝、

技成感應事分條理感應之驗、不可沒、而條理之道無明者於是誣感應之所驗、於窺斎之議論故黃子厚○易至天行○灸百會、以治久瀉、是由易得其治、雖然瀉治豈可以灸百會盡哉、夫病目者、見燈爲五色重論、病耳者、聽虛爲泉聲瀑布、被酒則以一爲數、坐靜爲動、怯夜則見石爲人見木爲思、視聽思慮正則不可以他濫實、醫家之說乃然、觀天不能爲天、指之爲金、觀東不能爲東指之爲木、噫心何火焉、腎何水焉、天天金金東東木木而後事物正矣、今變濫名物意盡天地之秘窮陰陽之奧何病耳目患醒怯者異焉、夫五行者王者治天下之至寶、支干者歷家計日月之數目也、○以爲造化運氣之樞紐、爲形體疾病之故、皆觀空認下地、畫蛇添足、睡者語之、醉人聽之、縱令其技能再起齊桓三蘇貌子其論辨、與杞人奚擇、夫夫條理之道、不可以私意枉、倭姬有言曰、左物不移右、右物不移左、左左右右善哉言也、可砭醫家之痼見、其翻物也正、豈用易左右哉、左右不易、則謬誤

無所拚矣、精理博物、吾豈敢、條理則吾信、病情藥性、吾豈知、條理則吾信、昔者楊由基之客、未聞以射勝基其說以伸於基、則不知治者亦宜有其說、蓋人常正也病邪也、養正者、水穀壚蔬、攻邪者藥石砭鍼、傷人者爲毒、治病者爲藥、雖然毒與藥不遠、蓋邪之結氣也偏藥有氣也、偏以偏攻偏、復平而已、故毒藥通用、以是故乎、故以毒攻毒、所以爲藥也、蓋物之入胃、油然爲○○於一身、饑則一身疲、食則一身平、渴則一身苦、飲則一身平、是以知氣○無所不至者也、酒氣入腹循環一身、然而其所能則或升或降、或吐、或瀉、或云云然而潔古已來、報經引使、殆觀造化隘焉、一堂之絲竹、甲唏乙樂、一樽之酒、左醉右醒、所有同意之辨也、故食性藥能感應亦難膠柱、○○今孕而經閉婦人之常也、以晉親見有平生無經、孕而見經者、有孕不孕借無經者、醫典有、盛胎按月行經而胎長、云有漏胎孕中下血而胎不墮、云證與飲食如斯、則本草方法大概而已至感應之所活、非人之所盡矣、蓋靈素之作在周季、周季齊燕方士、以長生不死、誑人主焉、並考、醫僊之說一時也、故素問之起語、本草之論藥、其說混焉、醫術者、民生日用之急、僊道者、迂濶無徵之譚、醫方之災二、曰五行生剋、曰神僊服食、苟將學醫者、冀去此二惑、求諸條理、驗諸感應、勿眩此二惑矣、

神氣說

一氣一形一天一神事物之條理也、於人言之身生者我之氣形也、天神者我心性也、所爲身生者我○氣○所爲心性者神氣○營之衞之者本氣之所立也、情之智之者神氣之所成也、故○者以本氣生本氣者、以神氣用本氣一去、則神去身死、神者所使本氣者也、本者所活形體者也、故本神之二氣、有病而形體以容病人之所以常者正而眞也、其所以變之者邪也、邪爲變於營衞情智之間謂之病矣在營衞者爲本氣病分之則營病也衞病也、在情智者爲神氣病分之則情病也智病也、愛憎慾惡止而思慮知辨眞也則身○○○○

○○惡邪而思慮知辨妄則身危○亂是正邪眞妄之成於心者也、蓋病者氣之結者也、輕曰滯重曰結一也、情病者邪結于愛憎欲惡智病○邪結于思慮分辨營病者病營養衛病者病于衛○心病則君治之學禮政刑其設也、身病則醫治之湯液鍼焫其設也、天下之治亂、一身之痛苦、爲病則一也故邪結神氣則爲病於世、邪結本氣則爲病於身、本氣者、生之本根而神氣者人之精英也、氣之精英、不失守、之謂眞、氣之精英失守、之謂妄、氣正則眞、氣邪則妄故邪人必憎可喜、喜可憎、樂可憂、憂可樂、非妄而何、人病、必聽聲於漠中、視物於空裏、非妄而何、情妄智惑、妄惑之所在、人不得其正、未知妄惑之故、則對妄惑而誤眞、是以氣正則有有無無、美美醜醜、於是其所愛憎欲惡、亦正矣、所視聽言想亦正矣、妄惑爲病、則其用倒焉、視不能正、物空空物、聽不能正、喧漠漠喧、鼻舌之於聲臭心體之於寒熱、憂樂、皆然唯神氣爲邪見擁而變亂錯謬、之爲妄、出其智者、顚倒是非、出其思者、變亂思想、出其病者、視聽言想、皆妄動、今夫飲酒而醉者、氣血亂行、則氣麁舌卷、見一爲數、坐靜爲動、責是爲非、以害爲利、先後無顧、思慮不辨、酒力盡、神氣復、則自愧自咎、雖愧且咎而醉則故態又發、故邪畜于內、則視聽言想、皆妄也、是故病者開目視物於空中、開口接語於漠然、手摸足踏、若接物然、是鬼神之說之所興也、夫目者、人之鏡也、鏡之爲色虛而明也、埍埃之象、無所遁焉、目者玲瓏洞徹、萬象來映之、精神接而辨之、耳者、聲之鏡也、舌者、味之鏡也、而心者、感應知覺之鏡也、此守精、孰得而遁焉、營衛病則妄知覺、精神病則妄言動病痁者以暑爲寒是非天地之寒衛病而爲妄也病執者甘鹹爲苦是非鹽醬之苦舌覺之爲妄也是以目病則見亂花於空中、耳病則聞蟬鳴於漠中、精神病、則妄思妄言、實其鬼來邪各懸靈鏡收萬象我與人偕見、今唯病者視聽、不病者不視聽、可觀果非從外焉、從妄視聽者之言、正視聽者信之、是視聽不病而聰明病也、今病瘂與瘟者、尤能

見鬼、於是愚俗皆意、痘瘟各有鬼而爲、故迎巫覡、祭其神、病復則送其神、然其輕者、不能見鬼、可觀神氣之致妄者、邪之所爲、邪去則妄愈、神之病、妄之爲癲、癲人所知解妄也、故思慮妄也、其妄知解、妄思慮者、亦有剛柔之二症、剛者、狂走喧呼、柔者、隱默沈思、晋邑、隔溪有一男子、性沈厚、幼失枯、持壹欝自處、後養爲他家子、兢兢常恐不得父母之心、忽自意、我不能事其父母、閻閻訟罪、罪案已成、其罪延及本生之伯叔兄弟宗族鄉黨、於是慘然默坐與人不接、醫禱諫誘、萬方不得者三年、欲自裁者數、忽自意、延至三年之久、疏者必免罪、又經數月以意、延至此久、伯叔兄弟、亦免罪、罪唯歸一身、一死輕於鴻毛、於是百悶皆解、精神始爽與常無異、唯自得罪者、確然固執千諭不聽、又經一年、稍々其妄、以復故、是惑疾也、閱世、此類頗多、而或遂其死、或終其病、此男幸而愈、以審惑疾之症、謝上蔡問沈魂滯魄、程子曰、張亢郡君、化去、嘗來附語、亢所知事、皆能言之、亢一日、方與道士棊、又自外來、道士將一把棊子、令將去問之、張不知數、使道不得、滑伯仁嘗治、仁孝廟廟祝楊天成一女、暮遊廟廡、見黃衣神、覺心動、是夕夢與之交、腹漸大如孕、伯仁曰、鬼胎也、與藥下如科斗魚目者、二升餘、遂安、虞天民云、鬼胎僞胎也、此女年長無夫、思想無窮、所願不遂、感爲鬼胎、非神之感女、乃女之惑於神耳、有人嘗來語曰、某地某邑、有一老嫗、喪子、自是失神、求其子而呼、沿溪入林、陋巷廟社、求之弗已、念至則不避深更風雨、又聞一僧坐禪、結念數年、忽得一悟、喜而發癲、舉之以禪、其辨懸河、問之以平常、妄言倒置、集此數事、照其理、則皆病妄人也、此故人之病者、妄視聽、妄言想、多屬祟與魅、人以爲祟、魅病者亦爲祟魅、人之信鬼神、皆意神功佛力可能救之、於是祈禳能通其惑、而愈元多矣、惑者自惑而通、聖人之術也、噫憤寃欝怒之感、老精邪物之魅非無此事、雖然火氣入水、則其氣沸騰烝濕、皆水而非火、油粹入火、則焔光燿燿皆火而非油、雖入者火也、油也、而受而用之者、從

己之情性、而動、如瘟邪瘟毒、唯一片之毒氣而已、非有意念情態、當毒襲人、則爲鬼、示種種之智技情態、如非酒能舞踏者、人飲則舞踏焉、故怨憤忿怒之結、老精邪物之精、銜人、彼豈捐己之體、獨脫其精神借人之形體、而逐人之神氣、以自代之、哉、能達之則百怪千奇不可動人焉、鎭西多川童、形如獮猴、隱水石沮洳之間、尤魅婦人、婦人之見魅者、有時絕倒、恍惚之間、見蠱童美士、是亦其毒就人、人病此妄也、且病患之間、有說罪者、是未能明幽冥之分、思想結念、爲妄視聽、爲妄言想、田蚡陷魏其後如呼服稱罪、使巫視鬼者視之、魏其之鬼云、田蚡陷魏其之不屑于心者、平生內積、一旦氣衰而見妄像巫者、見其狀而說其事、巫者焉得與幽鬼接哉、王介甫退居鍾山、恍忽之間、視其子雱荷枷桎施所居半山園宅爲寺以薦其福、蓋此老稱識盡天下理、而未通于理、故抱疑惑於幽明、平生與雱所爲而心咎者、爲惑而生此妄、可笑焉、當巫者祈禳、有自言其狀者、是蓋在在精神倏動之人、而不在精爽剛正之人、我邑隔溪之男子自言、當其祈咒之時、巫覡使言祟魅之狀、不言則錫杖獨鉆頻下、香烟咒水撲人、以實告之、則兄弟伯叔捉之、巫覡之呵責不可如何、言而不當、巫者之意、苦楚不息、於是乎、信口而語、策在免苦、於是巫者抗然矜其能、親戚皆悅以爲、邪魅初服、病者懷寃、無所訴其非矣、巫者之姦、可嫉、而病者之意、可愍、夫人晝而神役氣、則視聽言想正矣、寢而氣役神、則各氣妄動、而其事爲夢、覺爲眞、夢爲妄、夢唯寢而後有之、覺中亦有、思想著佛、則見佛於恍惚、思想著色、則值色於彷彿、見者信之、而聽者亦信之、皆妄之爲病也、夫鬼神者、感應體物而不遺焉、妄人妄意、幽冥之間、具意念情態、或現形、或沒形、與人酬酢、倏忽來去奪神換精、豈謂知鬼神之狀哉、若以鬼神爲物、則形離神而存、神離形而立、天地猶不能然況在天地間哉若夫狐狸川童、神離形而依物、牛馬犬豕、皆可依奚翅於人、然牛馬犬豕、不見祟魅之狀則愈知我知識念想之以自惑者

焉、神果其離形歟、狐狸之依人、必傍有失神之狐狸、傍無失神之狐狸、則祟魅者、神疾也、譬如滿地起風、卷砂拔木、風止則恬無事、風與恬同一氣、不知者、以爲風去恬來、妄者即眞、眞者即妄、於是邪祟狂惑、如水之波、如恬之風、若能照之、則雲盡而月白矣

疫說

動植同類並立天地之間、故資氣於天、資質於地、以全其生也、氣之爲物泱泱然無聲臭形象之可窺、雖無聲臭形象之可窺、亦爲各各故夏氣鬱蒸、冬寒慄烈、燥氣自燥、混氣自混、如彼智井金穴、其氣不通毒結殺人、蓋寒暑者、天氣也、燥混者、地氣也、其爲造化之用者也、非邪、唯其間、氣以結毒則其中物也、病、然而其毒之性不同猶同是音而有金石絲竹之異、同是味而有辛甘苦酸之異、氣氣分物、感應爲用、感應之妙、謂之鬼神、物各有性、感者與應者、兩性不同、變化之所出也、性和養物、性毒賊物、養和氣而賊戾氣也、是故氣和則物能生長、氣戾則物見戕賊、是所植有豐儉、人有疫否、蓋性不同、則感應亦不同、譬如鹽能藏海物而爛蚰蜒、藁能藏柑梨而傷生䕺、是以其所戾干甲者、不必戾干乙、和干丙者、不必和干丁、熟觀水陸之所產、如海糠記月蛤蜊牡蠣如禾黍稻麥瓜茄松蒜、皆有豐儉、或夫其氣有不能相全者、儉干此、而豐干彼、豐干此、而儉干彼乎、或夫戾干此者、和干彼、戾干彼者、和干此邪、觀戾氣之賊物、或稻麥病、或菜蔬蠧、嘗見貍一般病、狗一般猘、且享保中、關西種稼數日之間腐爛生蛾、甚者至放火燒稼餓莩充途、俗謂之雲蛾之災、又聞諸故老、百年前牛盡疾死、存者僅百一、闔國絕牛耕、世謂之牛倒亂、故一般受賊、物之所疫也、唯其氣足賊人者、人應之則病、應有向背淺深、而輕重病否分焉、疫類二、曰瘟曰疹、瘟輕者有欬嗽頭痛寒熱、數日而復、世謂之風、重者有增寒壯熱狂走譫妄舌焦便秘、死生相半、世謂之疫、又有寒熱而兩頰豐腫者、謂之蝦蟆瘟、又有寒熱而便臭穢者、古曰帶下腸澼、今痢、曰、

有寒熱往來頭痛咽痛、發疹如麻者、名爲麻、有發熱吐利驚搐盲亂、結疱如豆者、名爲豆、有發寒熱、結水疱者、名爲水痘、又有體氣相受而傳染者、曰疥、曰黴、此二者、不以氣相感矣、由質相感、則其病可避、可防、故雖不可謂之疫、亦疫類也、是皆天地戾氣、能賊人者之使然也、其外寒暑風雨陰晴之間乖戾之毒、感應必爲病、夫寒暑風雨、非毒人者、寒暑風雨之毒、能賊人、感應之證、雖萬變、大綱不出此二、天地間結毒於氤氳摩蕩之間、其機無測、由發憶其機、且有時氣之感應、淫毒於人者、曰痁曰混曰暍曰寒、方氣之毒、淫于一方者、坂東之地、疾風撲人、風過生瘢、如刀瘢、名曰鎌鼬、彼聞嶺南一種、病名曰砂、能爲寒熱、砂俗爲砂蟲之毒云、畯耕錄載、湖南益陽州、夜中同寢之人、無故忽自相

○毒毒有之名曰沙魘、土人熟此、不以爲異、醒後然猶二三月猶醉、是皆方氣之毒也、正宗回春曰、一人夜夢、城隍拘見責打、醒後其受刑處楸腫作疼、青紫急脹以爲陰毒、其城隍見拘責者、所謂馬齕枯萁喧午枕、夢成風雨浪飜江也、故時氣與方氣結毒之淫人其能釀病、

痘說

人之感瘟也、其毒、自表入裏、其方自表入裏、本氣覺而防之、其增寒壯熱煩渴胸滿、本氣與賊氣相戰也、氣、戰破、則關門不守、毒氣入子城、津竭神盲、痘之爲毒、與之異矣、方毒之感人、浸淫潛匿、直入子城、已入子城、本氣始覺有賊、且戰且驅、故其發熱之候、吐瀉搐搦、狂走妄言、目吊筋引、甚則死矣、其勝敗、期不過二三日、本氣與賊且戰且驅、本邪相分、則毒得疱而居、本氣守肉、於是毒氣勢縮、則疱高起而出肉上、本氣勢盛則氣血進圍痘、攻之急、而分界分明也、本氣能逐毒於外、神得處而爽、毒熾則爲疱稠密、其衆多矣、本氣無所處、而身體愈困、唯毒之多少、係痘之稠稀、其方子城中、本邪相爭、本氣受傷、則不能緊圍疱中之毒、而痛攻之、毒氣暗侵氣血之分、故雖見點、而不能出、雖出不能高起、雖起、而忽陷、雖不陷而潰散、雖不潰散、而

不成膿、皆氣血之受傷也、緊圍而急攻、則毒愈保疱中、緩守攻怠、則敵瞰間反擊、賊無隙之可瞰、則枯死保中、而爲痂、是以雖毒之多少繁稠稀而人之安危成氣血之勝敗矣、蓋攻毒之日、肌肉怒脹以與賊張威、本氣不張威、則爲賊侮、死生之所決也、又重思之、痘者、肉之病也、故臟腑內外、無所不病痘、以咽喉鼻舌眼（痘兒出痘之時、白仁擁赤瞳者、痘之出目也、醫時必收、收醫之頭血脈之餘毒無所散、則發于目而盲、謂之痘出目、謂痘入目、共非的論矣、）耳、莫所不至焉、而知之、噫夫唯皮表出痘、而內不出痘、則死生何其如斯甚矣、毒莫所不有、故毒或發目、或結衛元、或發癰、皆毒之入疱而不盡者之所致也、是故痘者表裏洞徹之病、天地之慘毒也、或曰、古人多以痘爲胎毒、予○○之於疫、奚以爲徵、曰、然哉晋持兩端於此久矣、○○其病、探其情、決非胎毒矣、以近事徵之、出痘南郁、百而死一、北郁、十而殺二、甲邑、十而四五亡、乙邑半百而不失一、考其飲食起居風雨燠寒之所在、不見所異欲擬之於技者之巧拙、如此鄉、不屬之於醫藥、神咒忌穢而任其天、則其死生也、非人焉、且晋之東隣有雙生者、一痘痕滿面、一顏色如玉、且或一時痘重、或一時痘輕、若人在胎所受毒、則何有南北之異、而何用發息之時、何可相傳染、何可雙生異、蓋此病從漢馬援伐五溪蠻、入漢云、本邦天平中、自鎮西起、入京畿、胡地不出痘、胡人入漢、則出痘、漢地出痘、漢人入胡、則不出痘、如我八丈島、亦偏南之地、而無痘患、由是觀是、方氣使然乎氣運遷乎、雖是未可知、而豈胎毒而然哉、活幼心法以爲胎毒、其論胡人不出痘、曰胡人之胎毒、當爲他病散、○之字、謂之暗徵、明者不信焉、豐者與肥接境、豐之○○○○年年往來、而熟其事、肥之天草郡者、海中○○○○○拒痘、若有偶出痘者、舁其兒移之深山、○○○○○痘者、看病、死生不相通、移兒之家、環屋○○○○○難並戶不相通、發痘之郁、設關禁往來、○○○○痘者十之七八、予嘗西遊、留肥之大郁、○○大郁之拒痘、與之同、予有故得親見移痘兒之○其地在深山松林之中、茅廬蕭索、不蔽風

日、連屋瘟人相枕席、呻吟可哀、由是考之、拒則不病、胎毒豈可拒乎、雖拒或病、豈非疫哉、曰此患專在小兒、一患而不再發者何、曰一感而不再發、其氣有然多在小兒者、以不再發也、若有未感者、雖七十八十亦病可觀非獨兒童之所病焉、

痰說

夫人之在胚胎、母氣能養之、故一己之氣、以元氣保之、已出胎、則飲乳之質、呼吸之氣、相繼養之、譬如得火於金石之中、金石之氣、雖以元氣保火、發于金石之感應、而絮能留是火、發燭引而傳油心、否則火不能○而滅、雖油心能留之、密封其外、而不通其氣、則復○絮之養火、猶飲乳之養兒、油心之留火、猶水穀之持生、其通氣於外、猶呼吸、夫火雖由金石之摩蕩而生、以元氣而立、所贍之氣、則有資油心、是以雖人以父母感應、待此身出胎則資繼於呼吸飲乳、故水穀自下而繼生生呼吸向外而爲化化、蓋人之一身者、氣液而已、氣能溫動、液能滋養、水穀入胃、其查滓歸　溺、精液成氣血、滋養溫動之間、功忌蔽塞障碍、觀彼溝間流水、順流無滯、則養稼歸海、而無其跡、若有物障之、則水回旋停滯、而泡沫相結焉、今人感時氣、則衞氣病焉、則衞氣病、則營養之滋液、不得達、而痰飲內沸、又彼常病痰者、遇暑候、衞氣疏通、液自不結焉、冷氣纔侵則衞氣澀塞、痰涎復沸、其障碍閉塞、或或由時氣、或由飲食、或由情思、雖證亦不同、而衞氣不循、而營滋之結者、則一也、此障碍閉塞、成于皮肉、則癰瘡生而爲膿、故痰膿雖不同其理、其形亦相似矣、氣液凝滯、結痰、痰又能窒氣矣、蓋水穀不能布散精液、則精液粘滯于咽胃之間、粘滯○欝而涌、則卒倒不知人、其痰喘壅盛、卒倒不知人、有發作有時者、癇也發而難起者胃也、中古名曰風、由名眩實、於是又爲諸家之紛紛、又見癇冒、爲胡越看、皆屬不知痰之來由、夫人之精神、由氣液安、則痰之窒塞、氣液精神失運用、而本氣保舍、於是或恍惚不省事、或朦朧如夢寐、爲忘、爲驚、爲悸、爲癡、若燃犀於此、百怪不遁、

溺説

溺室謂之脬、又謂之膀胱、膀胱之狀、如倒瓶子、胃者、上受咽、下至腸、以通肛門、水穀者、入咽而畜胃、下胃、則穀爲便、水爲溺、便與溺、所下之狀不同、便者、隨穀之消化而自腸下、脬者、別腑也、元不與胃通道、而溺則自脬下、蓋溺諸説不同、素問云、飲入于胃遊溢精氣、上輸於脾、脾氣散精、上歸於肺、通調水道、下輸膀胱、靈樞云、水穀者、常幷居胃中、成糟粕而俱下于大腸、而成下焦、滲而俱下、濟泌（シタミワカレ）別汁、循下焦而滲入膀胱焉、王冰云水液自回腸、泌別汁、滲入膀胱之中、胞氣化之、而爲溺、以泄出也、楊介云、水穀自小腸、盛受於闌門、以分別也、其水則滲灌入於膀胱上口、而爲溲便、王安道以爲、膀胱上有胞、胞則有上口、而無下口、胞下則膀胱、水受于胞、而滲膀胱、膀胱則有下口、而無上口、頃又聞一説云、滴器無上口則下口不泄水、無下口、則上口不受水、故膀胱決有兩孔、靈樞以爲水自下焦、滲膀胱、王冰以爲、回腸別汁滲膀胱、其謂胞者、蓋膀胱焉、楊介以爲、自闌門、滲膀胱、説臟則云、大腸當臍而回、故至説任脈穴、臍上一寸、有水分穴、大意皆以爲飲水滲入膀胱、説口者、似瀉水爲相接者、獨素問爲飲入于胃、遊溢精氣、上輸於脾、脾氣散精、上歸於肺、通調水道、下輸膀胱、比請説爲優、雖然亦以五十步與百步之違耳、矣、請試辨之、夫人之脾者、狀如馬蹄、在胃力左之後之下、未必在胃上、五家説、以順則相生、以逆則相剋、脾爲土、肺爲金、膀胱爲水、故歸于脾、歸于肺、歸于膀胱耳矣、而謂飲之精氣、而不及食之精氣、亦闕也、夫人之一氣生男女感應、而一且出胎、則乳哺水穀之養、不可一日欠、然則一身之天地、有所不足、而待用於水穀也明、一身之天地、何以有所不足、而待用於水穀、則夫天地之間、無物不生化、生化之爲一氣之通、通者、彼此相資、故而資於雲、火資於薪、故人之元氣、亦資呼吸於天氣、資水穀於質氣、水穀畜胃、其氣氤游溢于胃外、一身無所不到、然而穀質有定體者也、故順送其質於下道、水者雖有

體、距氣猶不遠焉、故合水穀、而其氣液者、蒸騰充身、夫天地之間、地有燥氣水質、質者不能升、氣引則爲溼、溼爲雲霧、又雨下土、雖人而其爲造化者、無與此異者、故觀彼雲雨、而知此雲雨、胃者、人之地也、水穀畜此、爲雲雨之本、雲雨敷天地而生生之用成、由是考之、則胃中之水穀、和于氣、而爲氣液、爲一身之用、滿腔之血液膏膩、激而爲汗、爲淚爲涕、爲乳、爲精、皆人之液而資本於水、非所飲之水直爲其諸液、經氤氳變化之爲也、雖經氤氳變化之爲、而資本於水則明也、故氣液者、人之雲霧也、滋養一身之餘、終結雨而歸膀胱、此故膀胱者、受滋養一身者之查滓、感應爲雨而歸地之溝澮也、古人之論溺、唯觀其質、而不見其化、故有以上之諸說、是生爲水直以其質灌膀胱、故不能不說受灌之地以爲曲說也、昔屢剝獸腹見之、不見有上口、不見王安道所謂胞者、噫若使膀胱有受口、則腸中亦當有瀉口、飲若可直至膀胱、則不可無授受之兩口、於是觀彼天地、將雨則地下之受氣融散蒸騰、爲雲爲霧、以必礎溼井涸、雨而遊于天間者、感應運爲之間、結雨而濺地、噫濺地之雨、豈可謂是直地中之水也、雖然此雨不可謂不資本於地水、以是推之、人奚異之、揚介賓親觀眞形、奚以爲上口之說、王安道、不知而言者也、以滴器論上下口、似是而非也、夫滴器之質、或陶、或金或木或竹皆堅質也、故剛强不墊陷焉、是以水去則腹空也、空處不得氣則不立、故引氣於一孔、而實無水處水入則腹實、實處不出氣則不成、故逐氣於一孔、占水之處、膀胱者革囊也、水去囊縮水充、囊稍脹、如弃布袋於水中已、噫介膀胱有上口、何以盡氤氳變化之妙、

味說

舌之接物、應辨其味、舌本無味、所以辨味也、雖然病爲災、則津液爲生味、不然則過濇而失味、傷食方將先吐、酸水滿口、夫傷食者、飲食入胃不能消化傳導、而升降失路者也、夫胃者以溫動營養一身、能化養身者、而不能化賊身者、食新好而調和

生熟得節則養人、若食饐而餲、魚餒、肉敗、或堅剛、或過量、皆能煩消化、簞食豆羹、腐爛則多爲酸、穀肉在腸胃、爲屎者、消化也、非腐爛矣、胃者、消化之地也、不能消化、則傳導者亦病、故胃氣不能消化之、而饐腐之、口液者、水穀之化也、水穀不消化、而饐、饐氣生酸、而口津皆酸、蓋水穀造釀之間、辛酸苦甘、皆成其間口津之爲其味水穀不得其平之所致也夫胃以受水穀營氣消化傳導之氣病則疲於所消化故其接味澹泊而不欲飲食困於所傳導故腸胃不和或瀉或痞己以口爲辛酸苦甘臭饐者飲食之所爲也接味澹泊不欲食者營養之所病也饐雜而吐吐酸苦者胸間之滯氣似窒津液而然諸熱之接鹹爲衞氣釀熱而變感應之知覺也苦猶病目者之爲五色金輪於燈病耳者爲蟬鳴爲鼓聲漠中也能達此則五家之支離不可捡矣

肌羞說

人心有羞、人知心有羞、而不知身有羞、所謂心之羞者、惡己之醜之名也、身之羞者、惡身之羞之名也、今人指人之陰私則羞、手模人之陰私、則羞、人指己之陰私、則己羞、人笑、手摸人之陰私則肌羞氣笑、故羞非獨肌有焉、目雖明、而逢勝己之明、則目羞、鼻之靜、物以摸、則鼻羞而嚏以刀刮竹則耳羞、軟滑方舌、則舌羞、耳目鼻舌之羞、與肌羞心羞一也、

丙午封事

丙午封事

三浦晋　草

御入國以來下下御仁愛の思召末末迄傳承難有感戴仕　龍溪院樣御再來被遊候樣に奉存唯　御長壽千萬歲と奉祈他國迄も　御德義を稱賛仕候纔數箇月の間箇樣に歸服仕義御盛德兎角可申上樣無御座奉感心候一乍憚當時の御急務と奉存候は人心を御收被遊候事言路を御開き被遊候事下情を御通し被下候事其上次第に御手當も可有御座歟人心を御收被遊候事最早大方行渡り候樣に覺候言路未開候得ば下情塞り申候下情塞り候得ば　御照し被遊候處　御辛勞奉恐察候依之而不顧憚左の通固陋申上候淺淺敷義奉煩　御聞候事誠に奉恐入候

一郡方之義郡奉行より代官大庄屋小庄屋辨差其外山奉行目付山之鄕■猶萬端所監の爲鄕

足輕被指添五軒に壹人の組頭を以て人數を統へ違亂無之候樣に　御代代被成下無殘處御義に奉存候享保十六亥年古法三十五箇條御斟酌十三ヶ條猶御郡所壁書御出し大庄屋小庄屋小門にも高橋忠兵衞綾部進平より心得の義書付相わたり候得ども年久敷推移り自然と及懈怠只面面慣來る形に相依り以才覺務來候故實は銘銘之職掌未慥標的と仕る者無御座無調法の者ともに御座候得ど申上候事取はからひ候道間違も可有之候半と恐多奉存候依之而世の成行御所務取立候と上より御下知立はしり仕はかり候樣に心得罷在候仰願くば郡奉行以下銘銘之職掌　御書付頂戴仕候て各壁書に仕主務先後をも存依之而萬端取はからひ仕度奉存候

一封國の富は山澤に有山澤の要は田地に在田地をつくらしむる爲に多く百姓をたくはへ百姓すくなく候得ば農業手後れ年年不熟と成國用足不申大國も小國と成申候依之而免合を以て土地の位を見檢見を以て下下衣食農業可仕程を殘し御入をつもりて諸入用を定め　御知行相應じ御內證を定め被遊度候　御先祖の御功により　公義より　御城を御預け被下是によりて御家人も其　御恩澤に浴し候事に候へば御家人は一體分身にて城郭土地人民は何より大切の義に御座候是を以て國用と申は城郭土地人民の事にして乍憚其外は　御私用と奉存候左候へば士民の　御撫育は　御公務に御座候因て土地の肥磽を御考免に非ありや無やを御照し民力强弱を　御考御所務被遊度候是を以て御檢見は大切之御用免合に無理御座候へば其所及困窮候御免の義前年御所務の次第に依て當年の免御定め當年御所務の次第に依て來年の御免春の頃每年被仰付候民力ひとしからず水旱不同候故民力の强弱前年の損失

を考候て申付候故免奉行三名有之候畢竟免はろくをはかり候物故定まり候義無御座故春免と號し候て毎春及御沙汰候然處只今は村村先年のかたを以て被仰付候故非免も出來春免三名に相かね申候

一國を治め候事は利用の二字古來肝心と仕候上下の分下は財貨を生じ上に貢するものにて上は是にて國用を被辨候下たる者上の賜物にて賑候事は無御座候唯上よりの御惠は用を利し被遣候事に御座候尤御恩賜と申事も御座候へども是は下を御勸め被下候一事にて御座候當世天下の風賣人の道を以て治國の道と仕候故諸方ともに國本次第に薄く相成候賣人の道は家僕とかけ碁うち候に似候隨分むかふの邪魔をかへりみず一石にても打取候を手柄と仕候得ども家僕財盡き候日は家事立はしり候用も辨じがたく候治國の道は親の子をそだつるにひとしく候唯子のやせ疲れざる様に生育て我老候ても子壯健に御座候へば老も養はれ候賣人の道を用候へば上下怨敵と相成親子のしたしみを失ひ候是を以て利用の道賣買に落候へば聚歛起り候聚歛起り候へば百姓は農業に怠り賣人は商業をほそめ職人は數減じ細工あしく相なり候是國家困窮の基に御座候たとへば邊陲天草様の事有之又は城うけ取他所立のき百姓等萬一御座候節御家人のそなへも足り民間米錢の儲も有之候はば一國の君何と心遣可有之哉是直に國君の御富にて御座候聚歛行はれ候へば士庶只饑寒のいとなみのみ仕候まさかの時上に御たくはへ御座候とも大事辨じがたかるべく候儉を主とし奢をやめ候ば肝心の事に候へどもしばらく人の志改まり制度を用候上の義に御座候無術にてひたおさへにては決して事行はれがたく覺候故略し候

一國を治め候と天下を治め候と差別可有御座候天下の事は國を治め候人の力の及ざる事に御座候へば此義無據候それに就て工夫をめぐらし度たとへば當時天下の用金銀おもく相成候類徒黨嗷訴逃散手嚴敷被　仰付候類國守の力の所及に御座なく候金銀の用おもく相成候に就ては此備をなし徒黨嗷訴逃散手嚴敷被　仰付候に就ては民間和順のはからひ一段可入念類に御座候此徒黨嗷訴逃散の御制禁不心得の地頭領主代官は心よき御法とも可存候へども已に先年島原騷動にも及候へば領主松倉氏も御仕置に被　仰付候左候へば有國者には却て御心遣ひの御事と奉存候とかく民間和順不仕候ては御辛勞相多く候民間和順不仕候も大かた國用不足より起り申候さて一國切の路道は我領地を中くぼにし外のうるほひは流れ込みこなたの潤は出ざる樣專要に候もし術惡候へば國中のうるほひ他國に流散仕候是困窮の基にて御座候　御領內米穀竹木魚鹽の利も相應に御座候處にて御座候御仕向け次第國用も自然とは足り可申事に御座候小利を見候ては事何分出來不仕候前にも申上候通上より物被下置候樣にては下事足り候事は無御座候只利用の御仕向け十廿箇年も立候はば餘程しるし相見へ三十ヶ年も過候はば手あつく相成可申候先第一　御領內當時萬端の御入にて國用を被辨偖其外地理未盡處を以て民間の潤澤と思召封し被召置候處　御所置を以て利路を御開被下候はば自然と國中御免下り候心持に相成可申候　御領內山林海邊相定り候御入の外御取立の結構は兼て非分と被思召被　御仰付間敷御底意と乍憚奉汲雖有り義に奉存候左候へば御政事の大本已に相立候と奉存下下迄風を奉望候當時田畑は無殘處手屆き候へども山林川澤の利は

いまだ地力を盡し候とも覺不申候永綠年中大友改易の砌豐後北四郡大閤より宮部善祥坊法印を遣され檢地御座候處以前は六尺五寸竿三百六十坪壹段を一統に六尺三寸三百坪と相成候處法印慈愛の心ふかく候ひしにや六尺五寸にて檢地御座候因て此邊にて長き事を法印竿と申に今其餘澤を蒙り候此隣境

公料島原延岡領一圓此竿を用ひ候

當御領は寬文の頃津田小左衛門はからひとして六尺三寸を用ひ村役人入替うたせ候故檢地無違算御帳面に入候て三萬貳千石の處五萬石近く相成候六尺三寸公法には御座候へ共隣境にくらべ候へば壹反に付十九步半程違ひ　御領内にては此間際ばかりも千四五百石も現米違ひ可申かと覺申候故老の者の咄傳へに承候に津田小左衛門三川新田仕

御金大分費し積程出來不申候故御席にて無興に御座候し時此費程の事は何にても償

ひ可申と申て退き其後小原手永の內手野村田地の入組御座候時右の義思立檢地可仕前かた試みして一村へ他村の役人差遣し竿を入其後自分罷越見分仕候處猶竿廿く有之候因て此役人を仕置に申付　御領内ことごとく役人入替竿うたせ候故皆身の毛よだち遠慮會釋もなく打つめ候尤田はあせ壹尺五寸を置き其内より竿をおこし候をあせ外よりうたせ後壹尺五寸を引候と申傳へ候此事手野より起り候故手野へ來候役人ヶ樣の御領內をくるしめる事を始め候村なりとて憤り竿を嚴敷仕候迚百姓作り心畝前には苦敷覺候處も多き由に御座候其外にも右竿役人臆病なる者むかひ候處は畝前苦敷所も處處有之趣に御座候箇樣なる義歎き出不申故は村中相ならし候得ば塚を取り岸を除き候類の鍬先餘畝も有之候へば相ならじ候處改めがたきわけ御座候乍去鍬先持候者と非竿持候

者と別人に御座候故下方苦申事多く御座候箇樣のわけにや又別段に子細有事にや一村二村の間には一二箇所四五ヶ所も難澁物の地有之人に讓り可申にも人うけ不申其者くるしみ或は村にてわきまへ候樣の處も有之候何とぞ仕方は御座あるまじきやと奉存候箇樣の子細により折節御憐愍の筋御座候ても何分御未進さしつどひ候事是等のわけにて御座候此處よく御照し被下猶國中の利害得失御考被下御封じ被召置候地利を諸民に被下是によつて其餘計を以て下下出精仕生財相まし人口相くはゝり職人等御仕立器物等他國にもとめず商人一盃の商買仕他國迄も手を伸し候樣に相成候はゞ是即免御下げ被下候と同理に落軍國の御用も被辨可申候前段申上候通り民は上よりの賜物にて立申物にては無御座只御仕向けをなし被下下の務むる處を御妨不被下候へば自有付物に御座候定額の御所務物は公然の道理其他の煩敷義下々御志の行屆候樣に御座候へば御改道は立候在中の役人どもを御考被下候事一目瞭然の法御立御照し被遊候者處處の有付不有付も役人世話不世話の義も下方申上るに不及相分り可申候

一、御家人被召遣候義は御目鑑を以て役義被仰付候へば事無滯候鄉中大庄屋以下代代役義被仰付候へば賢愚利鈍打雜り候然らばとて一代切と仕候ては諸失墜民間より出候故下下大混亂と相成候間いづれ代代と不仕候ては事濟不申候代代相つとめ候へば賢愚利鈍打雜り候人を一同に御遣ひ其風俗をよく被爲成候事に御座候此段御手入なく候て出來可申樣御座なく候此御手入鄉役人ども一同には悅申間敷候其故は正道に叶ひ不申役人は苦敷覺可申候間不便利と可存候正敷役人は其功顯れ可申間悅可申候然る間一同は

仕たしく候一同不仕候處良法と御定め候事は御明德より出不申候ては事行れ申間敷候萬端の義下より申上候義も銘銘臆見より出候得ば一同難仕候先大抵衆評に及ばず得失損益徵とすべき所を御胸中に御たゝみ込被遊隨て群議御聞屆ヶ御取捨被遊候て是非得失分明たるべく候

一、御檢見方の義古法新法の義衆議不一統候是は古法十年の平均を新法十年の平均と御照し被遊猶委敷被遊候ば又十年宛の平均を御覽被下候はゞ御所務の多少了然と相分り可申候且去ぬる寅の秋も享保子年巳來の饑饉にて御座候へば年並と御所務との釣合御照被遊衆評をまたず御察し被下候近年ならし免の沙汰も每度有之候とくと御勘辨被下候はゞ御賢慮に過まじく候其故は近年切れも御座候て今のごとく百姓未遂出來候其末逐出來候免を惡年御用捨なしに受させ是非御取立被下候はゞ家僕とかけ碁をうつの譬にて治國の道と申がたかるべく候處處不一同候へばわり合宜敷所も可有御座候定めの益は根付取揚げはかどり免より上を作り上げ可申と出精つよく御座候是等の義衆評以前御照し置き被下度候偖六手永の作も土地山川甲乙の次第相分ち夫より御所置被下纔百數十村の義にて御座候へば一一御點檢被下候迚も纔成義に御座候因て點檢目錄と申を被仰付年年の帳面御照し御考被遊候はば大庄屋小庄屋の出精不出精利鈍の處も自然と備はり可申候年年御所務の節切れ米の多少もまた十年目相つみ候へば奉行檢見の强弱も相わかり可申候地免强き處は切れ米多く地面つりあひ候處は切米少く候ば處の豐凶にあらず候只その年年の切を以て得失を論じ候事は御領內の御免甲乙なきと見候この事に御座候へば時論的中不仕候八坂內大

概免も居り合候次に安岐内居り合候處も多く小原兩子尤居り合不申覺候故老中傳候は先年手島太兵衞地免の不同を相考へ御領内免盛り仕懸追追役義被召上半途にしてやみ候とも承候夫故か太兵衞義をば今以百姓共遺愛を申傳へ候ヶ樣成處御照し手永手永の地合得失御考猶小村を四等程に御分ち

四等は並の村渡世難義の村零落村稼村是也渡世難義の村とは當時の有付不有付を論せず或は山林馬草場なく山中猿猪多く津出し遠く秋已後かはき不申類又は水田勝或は免合不釣合など色色零落村平生の渡世難義不難義にかかはらず當時の零落の地稼村は格別農業出精の處稼村は大かた有付宜敷免合も居り合居申候

其上點檢目錄御考被下度候目錄仕立の法後條に申述候さて斯樣なる義はそれぞれの役人相立候へば御直に被勞御心候義にては無御座樣にも御座候へどもとくと下方の義御照し猶良吏被爲得候上にて無座御候ては奉行共取はからひ思召に相叶可申程甚無覺束奉存候何れ下情とくと御照し被下度候

一、公義より一城御預け被置候は國家靜謐萬民安堵まさかの時の軍國人數までかねて被仰出置候得ば城主の御務大小分に應じ此義御油斷に及候ては御不忠の至御先祖に被對候ては御不孝の御義忠孝の道立不申候ては一國の御成敗も行はれがたく候半然れば御家人御扶助人民御撫育は國君御忠孝の御事甚御急務に御座候當時諸國及困窮天下の勢賣人の道を以て國用を辨じ候樣に推移候故一統利倍にはしり農務を離れ候さるに因て本をつとむる人年年減少末を追ふ人年年多く相成候三都をはじめ都會の地は金銀の爲米穀貨財天下の民作り出せる程其年中悉く

相集り郡縣は金銀の爲に財穀地を拂て盡候故纔一年の凶饑凌ぎかた無御座相成候是天下の大勢にして是をかへす大力量の人無御座末覺束なく御座候されば都會には一年の財穀盡取集候へば郡縣は源にて御座候へども餘財無御座有合候米穀は奸商しめ込候故都會の民も同じく饑に及び去ぬる卯辰の春郡縣財つき都會源なく却て郡縣よりも餓死多く相成候是も天下の一變にて御座候畢竟本を務むる人少く末を追ふ人多く金銀の働きつよく相成候一徹にて有國の人御心つけられ米穀國に相殘り候事賢人の道より見候得ば損にして治國の道には專要の義金銀の貯は是に決し可申候當時にては米穀のたくはへ甚かたき事に御座候農人は急にせめられ賈人は利を見候へば米穀國にとゞまり候道は只上御壹人の御手置御思惟不被下候ては國本立申間敷候此事尤急務とは乍申暫日月懸け不申候ては出來申間敷候享保子已前の人數近年の人數御くらべ御覽被遊候て辨説をまたず相分れ可申候尤當時金銀の勢盛に相成候故在中も賈人居候處は大かた相まし可申候

一、賢愚利鈍一齊に御遣ひ被遊候事上に立候役人淸白廉潔を主とし大體をしり下司の情民間の情を辨へ賞罰仕度候賞罰は國家の大柄にて罰は恐れ懲り賞は勇みすゝむるの道にて近年諸國ともに罰の義のみ承候て賞の義不承候善にすゝむ道ひらけず候ては惡にこるゝ事をしらず候是恥をしらざる故に候罰の方は郡奉行ども申上候上御裁斷被下善事は目付共より申上善事御賞玩威をふるひ慾を恣にする役人博奕盜賊等の百姓無之樣の風に改り候樣に御心がけ被下度候

一、代官大庄屋の立はしり支配の役人賢愚利鈍相まじり候へばよくよく村方小門の事を

存じ目立候者をば善悪共に、是をしり緩き所には強き力をくはへ一村一村其年の甲乙相考へ或は疱瘡麻疹瘟疫痢病或は牛馬流行病等の災難等を考へ水旱等の義は勿論力を入れ彼是相はからひろくを心がけ猶案に落ざる處は言上をとげ片落無之様支配内を一家と存庄屋は一村を一家と心得役用等の類其故を以て抜さしいたし片落の様にても片痛なき様博奕盗人なくおとなしく成候様に一村をはからひ可申事立はしり宜敷と申べき也

人心を收め言路をひらき下情を達する事

附　點検目錄

一、最初に申上候通り人心を御收め被遊候事御天性の御徳感戴仕候追追此段も年を追ひ　御憐恤の　御仁政も深く人心に入候はば下下父母のおもひをなし可申上候

龍溪院様　御平生下のにくむ所を　御嫌ひ下のこのむ所を　御好み被遊候と承り候聖人の道も此通と社奉存候

一、衆評の時正席の人申出候事は是非仕がたく又故來の面面左様と申候へば末席は左右をかへりみてとかく不申候退て人人の意見を承り候へば其席一同の通りに存ずるにても無御座候夫故衆評と申も言路未ひらけず候へば猶別段にききつくろひ入不申候ては詮なき事に御座候末席たりとも存念を申候ものは器量者に御座候其理だに適ひ候はば其直を賞し候様にかねて　御さとし被下度候一番鑓仕候得ば二番鑓は出申者に御座候悪敷と見候ても正席に従ひ候は當時の風佞媚のならはしにて御座候否應不申さも不存顔色にて默し候者は一理ひかへ此方の問をまつものにて御座候是等の趣奉行どもより代官大庄屋にもさとし候様に御道引被下度

候
一、下情中途にふさがりやすき段　御存じ被遊候前の義に御座候下情ふさがり候へば下の情と中の情と別別に相なり候下情だに相達候はば明鏡を以て物をてらすごとく　御所置間違中まじく候下情を達し候道三つ一に點檢目錄二に目安筒三に目付是にて足り可申候目安入物箱に仕候へば中途にてひらき候患有之候故燒物を用候例もみへ候へ共むつかしく候只大竹の筒口を少しあけ置開候節打破候樣尤可爲簡便候
一、目安は中途の塞りを御達し被下候物に候へばもとより御直たるべきかに候此筒二つと定め度候古來無名目安は御取上無之物に御座候へども是又被　召置可然かとも奉存候依て一方は無名目安封の上手永村名相しるし候樣に被　仰付一方は急度所書名相しるし入候樣に被　仰付候無名目安は　御開封無之其村違亂有之節御開封被下候て　御吟味の一つにても可有之歟又一村騷ぎとも相成候義は一村連名を以て名入の目安筒に入れ可申事に候尤一應再應役人に不申達候て目安指上或は胡亂の義申出候類は越訴の越度法例嚴然候義かねて目安指出し候心得の義は以　御書付を目安筒に　御添被下度候左樣に御座候へば前後をかへり見麁末の目安は指出し申間敷候尤各頭役人には申出がたくして下情欝し候事も可有之候此段は　御工夫を以てよろしく御所置可被下候
一村連名或は一手永連名など申は大事の御事に候二度も入候を　御待目付がたよりつなぎを御入其上無據趣に御座候ば奉行へ吟味被　仰付度候ヶ樣なる義　上より御破被遊候方宜敷覺候下より破れ候へば咎人大勢出來申候奉行より吟味にかゝり候へば咎人すくなく御

座候ヶ樣の節奉行寬弘の心得第一に御座候

一、下情相達しがたき子細は首長は上民庶は下にて御座候へば下として上に對し已に一分上を犯し候非御座候故おとな敷者大概不申候却て道理わきまへざる者申事多く御座候ヶ樣の類は頭たる者ひしぎおさへ不申候ては村治り不申候又是は理と存候ても始終其支配に罷在ものに候へば後來の義を考へ又人を相手に公事を申候者後來の爲子孫の爲怨を結び災難を生じ候と心得相ひかへ又時の勢を考へ申出候て理分を得まじき事をはかりひかへ申候是によつて一村或は一人にても難澁不及是非頸引を仕覺悟相極め候上之義に御座候左無御座ば理にくらきうつけものに御座候是等の人ある事を御照し置御聽斷被下度候又申上候通一村一人にても頸引仕覺悟に申出候類は大事の義に御座候一村騷ぎ候も村にいたづら者御座候て或は役義を心がけ或は意趣をさしはさみ村中をまどはし候も有之又實に其故あるも御座候依て左樣の節は先村中違亂に不及樣に御吟味被　仰付　御取捌被下候ば百姓もいたみに不及役人も罪輕く相成候樣の義目安の一得にも候半歟偖前前より鄕足輕被指出候へども當時格別の用も無御座候鄕足輕は奉行家の案內大庄屋代官の心得を察し農務山方山林の樣子川堤の修復等立はしり仕候者本分の義に御座候今日の義願くは狼藉者別戶博奕盜賊方の示專務に仕度候務分以　御書付被　仰付度候畢竟人の風俗よろしからざるは博奕行はれ候故に御座候猶博奕の本條に申述候因て足輕は非常をいましめ喧嘩口論等の類承とどけ不忠不孝の類村かたにては人情にてつつみ候物に御座候へども村方の害をなし候類承出し候は庄屋と懸

合取捌き猶入組候者代官大庄屋にも屆候様に有之度候兼て何事によらず見及び聞付候事は不限虚實早速可申出と被　仰出候得ども平生は村かたの宜敷はたらきを見出し郡方にも申達し格別大變ともみへ候事は不捨置言上仕一家の不和博奕盜賊富等時宜により一應再應足輕の了見を以て取はからひ不及是非候上大庄屋にも庄屋と懸合相屆け其外瑣細の惡事決て不申出樣に心得させ申度候左候へば其任も不輕候大事小事の取捨相分り候樣の人御撰被　指出度候人御撰み不被下候ては却て災を生じ可申候偖點檢目錄目安筒目附の三つにて下情は達し可申候其目付と申候は平生入候事にても無御座候是又正にして穩便を存候物に巧者なる者御撰み被遊度候小事をあばき候へば毛を吹て疵を求候大事をかくし候へば及大破候目付の義人も恐れ其儀も難義に存じ候事通例に御

座候其子細は目付の役惡事をさがし求候樣に遣ひ候故に御座候目付の大意太平をはかり候爲に御座候勸善懲惡は聖賢の道に御座候惡をこらす事は寬に善をすゝむる事は急に候事是又聖賢の意に候左候へば目付たる者諸民を大切に存慈愛の心つよくなく候ては叶はざる事に候因て目付たる者村かた立はしり世話よく甲乙出來ざる旨を存じ潔白にして取立宜敷類の者百姓に功ある品を見わけ言上仕隨て所の孝子淳民力田の類よく承繕ひ申上惡事は大概見すて只大變にも可及候と存ずる事のみ申上候樣に仕候者其身も本意に存じ諸民も悅び可申候此目付は三月頃一度にてすみ可申候三月目付の言上と目錄目安と　御考合せ被遊候は一國中掌をみるごとく可有之候隨て手柄成義とも又年勞の者共三年に一度宛御賞玩被下度候難打捨不埒の義共御座候は奉行共より可申出候

間以事宜被　仰付度候
一、或は下より申出候義實に下の願ふ所なりや勢にひかれ候や其外下方へ御とひはからひ度思召御座候節は郡奉行よりにても御近習よりにても其子細下へ御觸流し返答目安筒に入れ候様に被　仰付候へば是又相わかり可申候有名目安は相手を取候事故猥に下より申出まじく候無名目安は　御開封無御座候然れば此御尋の一事のみ尤目安筒の重寶と奉存候其外國益等の義申出候事御免被下度候
一、點檢目錄は先　御領内六手永土の肥磽水旱の煩ひ山野の有無免の當不當城下並に津出しの遠近稼の有無御照置
たとへば山中水ある處は旱をこのみ海邊風うけなき處は風を恐れ尤旱損場水の有無に付廿日位三十日位と小異御座候旱年畑は大概一統の樣に御座候へ共夏の潤ひは處處にて不同候山中は常に根をつけ候事は遲く寒氣早く候へば取揚げを仕事は熟するに及かね候冬分霜つよく候へば中うち小屋しなりかね大雪の年は一二月も地の面みざる年も有之海邊遠く候へば津出し遠く竹木御座候ても稼に成不申候餘手永も山付は同樣の義に御座候へども兩子手永は一面左樣にて御座候海うけ候處は風損強く御座候大風大かた東角の風故東角の表をうけ候は小原手永第一に御座候小原表は東南にあたり風をさへぎる嶋も樹木も無御座候水田多き所は麥作無御座山林なき所は薪にくるしみ草なき處は牛馬養ひがたし商人多き處は農にはます候故人數多く田なき所はわらなく津遠き所は鹽に手つかへ候類
隨て村村の次第御考置被遊度候右目錄仕立

様

何手永點検目錄

何村　並或は渡世難義或は零落或は稼四
等の内見立次第
城下より何の方道のり何程
何浦のはかり藏まで道のり何程
東西何程　南北何程　但海邊或は山
付
水損場　何十日位の旱損場　風損場
雪霜早き場　山林野の有無
免幾つ　士のまはり幾程
一、毛附田何程　高何程
右物成何程
但水田何程或は池がかり　此池村普請何ヶ村寄合手永普請
井手幾つ　但井手懸或は村中或は何ヶ村がゝり
七島田何程
免幾つ士のまはり何

一、畑何程　高何程
右物成何程
田畑物成合て何程　當年引ヶ米何程實
數何程
但現米納何程
大豆納何程
小豆納何程
胡麻納何程
買立受合何程
尤右の内他村の出高何程此物成何程
他村より入高何程此物成何程
一、出米何程
一、十年ならしの切れ米一年分何程
一、人數何程　但男何程女何程　男女共に十三才已下六十五才以上をのぞき他村より入込候奉公人加へ働き相成候分何程村の奉公人數るに不及他村より入込の分
一、本門何程　但受取門何程
右小屋灰屋惣家數何程

但商人酒屋等有之場は其わけ相しるし

右皆濟受取何程　無高物成何程

但幾門何人

此とし山上り何軒　つぶれ門何程

まし門何程

内死人何程　但流行病不時の災難其譯相しるし

生れ子何程

出奔人罪人何程

鰥寡孤獨癈疾困窮術計つき候者何程

一まし地何程

一荒地何程

一牛何程

一馬何程

右牛馬目錄の義年年指上候得ども御用に無之故多年實算不仕今迄の目錄甚不揃候若此帳面被　仰付候はばしらべ別段に被　仰付宗門帳の例にて持主までしるさせ印形仕只今迄の牛馬目錄にかへ此點檢目錄は惣數ばかりしるし候樣に無御座候ては用立不申候さて宗門帳一同にさし上候帳面は目付御差出しの節御渡村村にて二三ヶ所宛も引合せ候樣に被仰付度候

人は大柢高壹石に一人あたりを並と見過候所を有付候方と考へ不足の處を不有付と相考へ牛は受取一つに牛一疋を並と見馬は餘分と見申度候尤牛海邊は飼草少く津出しもちかくすき田かへしのしかたも心やすく候故すくなく山中は御年貢藏所遠くすき田かへしもむづかしく飼草も多く御座候故に數多く御座候

外

一神社佛閣何程但家數何程寄附山林田畑何程寺社堂塔門樓隱居所色色の家數何程

猶小社小菴の數間數石のほこら、かやぶき、かわら葺等のわけ猶且那何程氏子何程池井手より是等にいたる迄夫力の費を監る處なり夫は人數よせし下にて男子十三歳以上老人六十五歳已下の人數にて夫力の出る處をしるす尤寺且那は他村に散在仕候へば見難かるべく候

一、僧何程　社人は本帳に入候得ば記すに及ばず

右村村書終り手永中十三より六十五歳迄の男子の惣數十三より六十五迄の夫

惣高何ほど

右之通の目錄年年被仰付段段前年の目錄と　御照し合せられ候得ば大抵相わかり夫力　御遣ひ社寺役人へ御かし被下候夫力も樣子相わかり可申候隨て目付へ　御渡被遊候帳仕立

何手永何村　上中下の等をしるし

一、新宅　本屋何程　小屋類何程

一、葺替　本屋何ほど　小屋何ほど

一、屋根破れ壁落候家何程　但名相しるし

一、あき屋何程　但本主相しるし

一、用水遲速善惡

一、道橋　上中下

一、民家糧有や無や一向無之家何程

一、百性農業に本づき候やいひら葛根のいとなみ仕居候や門に葛根かず多きや少きや

一、博奕富其外不埒者入込居候や賊難に逢候家多きや鄕足輕庄屋是等のしめし致候哉

一、山林立候や不立候や材木年年種付出精致候や怠り候や

一、作所邪魔に成候竹木切拂不申處多候や作道難義なる處有之や村民によく穗拔等聞相しるし可申事

一、役人其外沙汰宜敷人物諸藝すすみ候者有之候や

一、牛馬之數無間違や　（但是は家ごとに改め候には不及牛馬目錄と通りかけの處五軒三軒引合せ可申）

一、富ばくち酒行はれざるか行はれ候か

右相改候手永何ヶ村之內宜敷村並之村惡敷村三等

上　何村何村〆て何ヶ村

中　同斷

下　同斷

是等よくよく被　仰聞村役所には用事無之候はば不及立寄宿入用は　上より被下置偖其他も其者働き次第に承合せ帳面封し指上可申候此三つを　御照し合せ奉行共へ其意見を御聞被下候はば了然として分明に可有御座候左候て　上に良村を　御目利被下格別心得違候役人も御座候はば奉行共心をつけ急度申付候となりともさとし候と成とも仕年年　御改隔年　御在城の年にあたり三四月の間點檢目錄目安目付の帳面　御覽奉行共意見　御聞被下出精の役人其外孝子淳民力田相應に　御褒賞被下べく猶格別手際なる義も御座候は隨て　御賞美被下且盜人博奕の者ども　御いましめ被下候は代官大庄屋小庄屋もしまり付我儘なる事をば恐れ手際成義ははげみ萬民欝塞の患なく御恩澤に浴し可申候是古人考課の遺法とも可申候是等の事無御座候へば村方世話仕候ものも私曲我儘成者も同樣に打過候て下民其苦をうけ候賢愚利鈍を打ませ　御遣ひ被遊候　御法は左樣にては御座有間敷候右御考の內未進方は相なり申間敷候因て省之候其故は未進之かり立百姓相對かり有之其村役人かり有之大庄屋本に出候ても手永手永の作略不一、同候間此員數　御考の爲と難相成候

一、郡奉行は國替有之節は土地人民　御郡代

より御引渡被下又　御郡代へ指上候へば表立候役義に御座候然處如此目錄備　御覽年年凋弊の樣子ともに御座候ては尸位素餐奉恐入候儀に御座候

一、手永幷に村天下一同大小御座候故物入夫遣ひ下に懸り候物不一樣候たとへば庄屋表向きつとめ候儀は一同に御座候處千石村の庄屋は給米三石取申候五拾石村の庄屋は壹分五升取申候庄屋本開番給貳石千石村は二石を千石に割り五拾石村は貳石を五十石にわり申候手永の大小も此心にて御座候さるに依て小村小手永は下の勞つよく御座候是等の義もかねて　御存知被下度候普請事夫手間等も準之候平均の道も御座候や不奉存候

一、當御領地は大庄屋小庄屋取候物他領に比し候得ば少分に御座候庄屋給延寶の頃迄は漸千石に一斗五升に御座候處此處御察し被

下候や當時相まし候て三斗に御座候此故に根付草手普請取繕の人夫繩萱等先規より村かた合力仕候　上にも相しれ候事と奉存候左無御座候ては相立不申候別して辨差一向取候者無御座夫役つとめ不申かはりに立はしり相つとめ申候其上取上ヶ最中に相見と申他村へ罷越逗留仕候せめて居村に居候はば急敷時分に御座候へば朝夕の取始末牛を飼候位の義にても相成可申候山の口は夫米御免辨差は夫米　御免不被下候因て高小き者は役目仕るよりは農業を廢し往往及困窮候相見之事當時にては省き候ても相すみ候事に御座候何とぞせめては省略仕遣申度義に御座候組頭は役目仕候役目の外に村方出入の時分は隙を缺申候

御定帳には大庄屋小庄屋山之口辨差肝煎作り高夫役御赦免夫米は大庄屋小庄屋山之口大庄屋親嫡子迄御免にて辨差

肝煎は御免無御座候尤肝煎は繁務の者ゆへ相應に村方より給米遣し候へば是にて事足り申候辨差は百姓の役目仕より高ほそき者は難義仕候　八三郎樣御内は近來麥一俵宛被下候島原御領は先年より米五斗宛被下候組頭義大勢故一同に役目相つとめ候出入有之候時は役目の外數日隙を缺辛勞仕候是等は村かたにて役目に立遣申度奉存候組頭はちと働き有之者を見立遣ひ候方可然かとも奉存候左候て三年か五年かに入替の時を相極め申度候左無御座候ては不首尾にて退候樣に相聞へ申候

一、山之口以前は大かた兩村一人宛にて御座候然處一節山方嚴敷被　仰付候時村村へ相立候其後山も山付は餘程請ヶ山と相成申候請山と相成候ては山之口先規の通にて相すみ可申候是又役目高ひけ候へば百姓休息仕候請ヶ山多き所先規の通にては如何と奉存候

一、庄屋旦那寺不勝手に御座候て大に村中難義に御座候何卒取繼候樣に諸民希之候島原御領ヶ樣の處御考にて御座候や大庄屋小庄屋の類難義の砌は增高とて高を相應に被下候年を切り被下候も有之一年被下候も有之候　御領内右之通に御座候故村民相應じ夫手間等は苦にも存不申候旦那寺庄屋等普請願出候節は寺は檀那の都合庄屋は村に應じ　御制限をなし被下農隙を以て夫力御かし可被下候尤其過分の義に御座候者數年の力に被　仰付度候寺は人の師表に御座候不如法の徒は本寺より示し良民の害をなさざる樣に有之度候庄屋は一村の長に御座候へば農業出精百姓に指圖仕村をはげまし候事第一の義に御座候是等の不運零落は御憐愍奉願候

庄屋勝手宜敷ば村かたの仕合に御座候其内次第も可有御座候農業出精仕候て勝手宜敷と父祖以來宜敷くらし來り候も有之私を狹み村民をくるしめ宜敷も有之困窮わけ有之不及是非も有之淫色博奕遊興にて家を潰し候も有之候又宜敷とみへ候内俗に猿打と申候て私慾にては御座なく只釣合よく見へ候者も有之候綾部文右衛門かねて申候一村零落其身さまで家業もつとめず俄に勝手宜敷相成候は入念度と申候

一、右申上候通小村の庄屋は給米甚微少に御座候されども立交り萬端相つとめ候處大村に相かはり候事御座候何卒二百石以下の庄屋多くも無御座義に御座候願くば一列に取繼候樣に　御憐愍被下度候

年勞考課

一、下を禦し候道年勞考課之役無御座候ては勸懲之法無御座候年勞は律義に役義數十年相つとめ其外遠方近所にかぎらず不時の立はしり居村隣村庄屋後見等いろいろの勞道之を　御賞玩になり考課は享保十六年高橋忠兵衛綾部進平郡奉行之節庄屋小門五年毎に相改可申出との申付に御座候庄屋下役人によらず御取立道橋川池山林種植等の働民間の風俗奢をおさへ盜賊博奕の制或は村中流行病の節の世話荒地を廢し新地をつもり老幼をいたはり窮民を救ひ他領へ流落し候民を招き返し他所ものを有付稼の道をつもり出し村中和睦し相助けあひ村かた甲乙なき樣の作略など　御吟味を以て隔年に　御賞玩少分心得違ひ候樣の事は代官大庄屋は郡奉行さとし庄屋は代官大庄屋さとしもしやむ事を得ざる事あらば奉行共取はからひ可申候左候はば人人いましむる所をしりす

すむ所をしり自然と人すすみ可申候相考候に現米五六十石社御褒賞に入可申候是も隔年の義に御座候へば一年二三十石宛の義と奉存候猶御國用とも敷御座候は四年一度と被遊候ても可然候若　御褒賞被成下候ば何何によつて被下置候樣に有之度奉存候子細は妬み猜み候者は其人越度の節　上の御目達候樣に申候へば　御君德を汚し候樣にも相きこへ可申候段恐入奉存候一人の身にても善は善悪は悪にて候へば賞罰ならべ下る事君德益明に可奉仰之候此法相立候は賢愚利鈍各才を盡し功を立度相成可申候

一、孝子貞婦淳民力田を御賞玩被下候者有國者の常典にて御座候其外非常の義同樣に御座候竹田津内野田村とうり堂と申に先年了玄と申道心居申候至て親に孝行に御座候て無慾に御座候き平生只道橋の悪敷所を己が鉢の實を出し修理仕候里人これに化し力を合せ候故往還の外岨道までよく相成候ヶ樣の類は人事に有益の僧にて御座候此者今は故人に御座候ヶ樣の類御座候はば　御賞玩被下度候

一、大庄屋小庄屋　御褒美は清白を第一と被遊度候罪も貪汚おもかるべく候風俗をみだり候事は酒色博奕を好むに可有御座候當時庄屋にも清白の聞へのもの可有御座候

軍國之用

一、右文左武は天下を治るの器にて御座候人久敷太平に慣れ文と申も記章辭藻に落軍國の備も諸國怠り候樣にみへ申候先年島原騷動其外近年も毎毎處處百姓騷動御座候或は一村の騷も處處御座候何れも事起り候て甚急變にて迅雷耳を掩ふに及ばずと申樣に御座候人に司たるものは大小によらず只下よく下知に従ふと存候内變は醸しなし候必油斷すべからざる事に御座候よくよく恐れ愼

むべき義に御座候此事あらかじめ知れ候事に御座候は其ふせぎも可有御座候へども變は甚俄なるものにて只夕立と被思召上被下候我我平生恐懼仕候は只只此義に御座候

一、士農工商はひとつも缺べからず候士農工商一盃の精力をつくし候樣は唯利用の二字に御座候利とは刀のよくきれ候樣の場にて用事すらすら滯り不申候樣に有之候得ば國家不自由無御座候國家不自由に無御座候はば是安國にて御座候已に　一城御預り被遊候へば軍國の義は　御先務にて御座候何とぞ少しく御力を被爲得士人御撫育の御手筋奉願候依之て兵馬の御供城池の御修覆軍金軍糧は勿論　御城下近邊竹木少く相見へ候何卒竹木御仕立そろそろ大木出來候樣に仕度候ヶ樣に手薄く相成候ては千一の御時可爲御難義候且　御要害とみへ候山も皆はげ山にて御座候遠き所には竹木御座候とも急御用辨じかね可申候たとひ辨じ候とも失力大に費可申候

　御仕立の思召御座候て後來邪魔に相成候處を除かせ所監を御定め思召の木植付まさかの御用の段被　仰付枝葉勝手次第に猶間引切も見分の上札　御渡し所監の者稼に被　仰付樣に御座候て自然とそだち可申か春は野を燒申物故所監定まらずしては防ぎの力不守候

一、馬場尾遊民に御座候得ども國用には尤重寶に覺申候其故は他領の食をたべ他領の銀錢を取込妻子ども農業も怠らず相つとめ候是等は九州中國四國其外迄も徘徊仕候此內人柄よろしく作略有之者　御撰他領政事のしかた地理の險夷動靜治亂稼穡種植の道或は細工等相伺ひ候類是に過たる者有之間敷候彼等式の者に御座候へば年に一度も樣子御きかせ被遊候節小樽にても被　下置候は

ば難有奉存寸忠盡し可申上候まさかの節は
御取立案内をも可被　仰付候
一、御城下駄賃馬相立座へども少分の義に御座候御領内馬すくなく御座候御備の馬御無用心に奉存候馬望候ものには時時拜借被
仰付候はば下下休息仕小荷駄の御用も辨じ可申候
一、すべて軍備の義はかねて其旨被　仰付置候はず候ては俄事の樣に奉存うろたへ可申候
一、駈出し足輕御覺悟奥に申上候
一、中間株御時節も御座候はゞ　御仕立置被遊候はば郷中無餘義駈り出しに罷出候樣の義すくなく相成可申候江戸行助給大事故別して在中これに難義仕候先株五十に候はば五十石の御費入可申候是は百姓の無田地或は子供あまた有之類年中に唯壹石被下御城下に罷在銘銘勝手次第に日傭取可申候日傭取候ものの一石の餘計御座候得ば勝手宜敷御座候故頂戴仕勝手次第の渡世仕御供御用の節定まり候給米にて被　召連候は下方も休息可仕かに候此者在所に這入度節又世話持にも罷成候節は代りを見立引代り候樣に仕候はば是又御間缺中間敷候さて御普請かたがたの節日傭取御やとひ被遊候節是等日傭被下御遣ひ可被下候郷中よりの事多き節御城下御用ひ事は郷中よりやとひ入て勝手宜敷筋も段段可有御座候尤獨身壯健之者御撰み株の斷絶不仕樣に被遊被召置候は在中も家業をやめ罷出候樣の難澁も有之間敷まさかの節の　御用も　御手間御候あるまじく候
一、内色にすさみ外禽にすさむは古よりの大戒にて御座候然處　御入國已來猪狩被爲用
御心夫力御費し不被下候段百姓共歡喜仕候禮の通の御猪狩等も御座候者御家人隊伍坐作進退の道も拜見可仕　國民　御慰み御

遊獵にて無御座段承知仕候はば下下勞を忘れ壯觀と可奉存進退の心得も可存候平生猪鹿害をなし候は獵師どもへ被　仰付候良策にて御座候

一、民間に兼幷の家有之事は古來忌候樣に申傳へ候得ども當時は治亂ともに御用の者に御座候百姓と申者は至て無甲斐ものに御座候へばいかほど聚斂有之候ても金銀　御用立候ほどの義無御座候今の兼幷家は皆賣人にて御座候兼並家なく候てはまさかの御用は不辨候百姓有付候　御しむけ被遊候得ば自然と田地は百姓にかへり申候百姓の有付御しむけ無御座候ては無理に百姓に御返し候ても又又兼並の家に歸し候さるに依て田地大家にかたむき候はそのまゝに被　召置百姓　御有付被下度候町人共には何とぞ十分手を伸し大家出來他領の財貨も流込格別の大家にも相成候へば　御沙汰無御座候ても　御用に相立申度心生じ候て願出候樣にも相成候町人は百姓と違ひ常常の租稅無御座平生休息仕居候へば軍國の御用はかねて相心得居可申義役人共兼て申聞け置度候右の通りまさかの　御用は彼等にてなく候ては辨不申候間存分の商賣爲仕度候存分を不仕候事は下に疑の心を生じ候故に御座候疑心は平生　御いじりつき候より仕度存念も相やめ商賣ちぢけ申候　御領内に世間に聞へ候ほどの大家出來候はば　國守の御面目にて御座候何卒職人　御仕立町人はたらき出し候者他領の金銀内にむかひ可申候是有國者の富と可申候職人の義下條に申置候

檢見

一、民に取るに制あるは古の制にて御座候取まじき道に御座候得ば一毫といへどもとらざる事は匹夫といへども志を立る者は不仕候衆民たらず候へば子を賣り妻をうり辛苦

艱難の膏血も相雜り候へば仁暴のふたつは民にとるの是非に御座候

一、檢見は最も國家の大事百姓の有付と凋弊とは全くここに有之候郡奉行は公義より民引渡をうけ候者に御座候へば撫育の道怠り候ては恐多き義に御座候此段郡奉行心得の第一かと奉存候年の豐凶にしたがひ檢見宜敷を不得候へば小民及困窮却て御厄介と罷成候何とぞ下痛み候方位に有之候は下の爲と申ばかりにては無御座　御上の御爲にも可然奉存候綾部文右衞門得失を考へ申上候に付　御試として今の法行はれ候此事も銘銘意見により群議さまざまに申候是又諸說　御聞繕ひに不及古法の十年ならし二通りも新法の十年平均二通りも被　仰付　御照し被合候へば忽相わかれ候義に御座候いづれ上に御益と奉存候上に御益に相成候へば小民は利益之筈に候へども下下申分これなきは免一盃迄は上に指上候筈免に合不申分御用捨被下候處正敷古法のよく作り候て越をはかり候難御座なき故漸く免に作り合せ候得ば內證の不足は可申上樣無御座被成方正敷御座候段奉畏御免に合候は勿論少少不足と見候ても早く刈取候てわらをとり時雨日和にならざる內麥根付仕麥にて損取かへし可申覺悟にて相勵申候古法は甲の方作り損じ候を乙のよく作り候方より免の上を御取始終の不足を上の御損と被成候今の御法ははげみ候て作り越の分は百姓のはげみの德免にやうやく合候位は下は百姓の損越ははからせまじきとの被成方にて御座候さて役人共有のまゝに見候へば小門の手まへ壹人前にておもきは貳石も三石も越をはかり候左候樣にては小門大難義仕候故村役人ども過分の越を仕せまじきと苦勞つよく私慾ならずして私慾の罪に落入候事御座候きよ

つて古法は上はとらんとし下はとられじと仕候故上下志さもしく相成候左候へば今の御法良法と相見へ候猶又近き例にて申候へば去ぬる寅の秋天下一統の大悪年卯の春は上にも　御苦勞に思召候程の事に御座候申出は不仕候へど貧苦の餘り鹽味を離れ草根木の皮に數日命をつなぎ候者の病死と申候は全く天命ばかりに歸しがたき者も可多相考候左樣の年にても御所務格別の御損毛も立申さず候古法にて御座候はば是にては居り合申間敷候さて古來は檢見出鄕の人數も小人數にて相すみ候處近年いやましに相成候是より大勢罷出候へば鄕役人打つどひ大込に罷成候

手島太兵衛時分までは纔の小勢に御座候處只今にては鄕付並に御勘定方代官等罷出候故四十人にちかく相成候泊休みの物入並に馬日傭かたがた一日三百目位にも相成候也荷送り夫宿拵賄等三百五六拾も入可申候此費十六七日に及候此時節は農務最中下方甚手入候時節女にても日傭籾貳升も取候頃に御座候古格の通にも御座候者下方休息可仕候百姓分願を察し夫力を省き事の簡約に隨へとは壁書の趣に御座候故申上候

蜜を養ひ候者切取り候節冬春養ひ足り申程をとくと見はからひ切取不申候得ば陽氣迄の粮たり不申候て翌年は手を空敷仕候儲御新法拔見見付に被仰出鬮と御定め被下候鬮と申物は何かたに落可申程もしれ不申候へば下見仕候ものわだかまり候義仕がたく候因て一村鬮三つとか五つとか相定めわく入れ右のわく數のならしを以て合付過不及申付候へば上下ともに少しも人の私をくはへずきれ候ても天に任せこし候ても天に任せ候へばいかに越候ても下より怨無御座天道を

相手の檢見尤正敷義に御座候文右衛門本意にて御座候然處近年野帳の面面にて數十點を加へ片闕より相改甘き處を見定めわく入候てそれに上りをかけ候故又越をはかり候事出來難義の至に御座候越をいとひ私をいれざる爲に文右衛門存立候法にて御座候又天の誠を用ひず私を用ひ越をはかり候事大に此法の本意にそむき候本免にて合不申故奉行を受越をはかり候事下方嘆息仕事に御座候越の次第　御尋被下候ば下より可申上候夫より下方の者ども内内の沙汰ひそかに承り候處當時御檢見の法正敷御座候へば天道を合手に候奉行は三歳の小兒にても役人小勢にても相すみ可申御仕向畢竟巧者不巧者も入申ましき樣の義に御座候此闔の正敷所に御座候然處數十ヶ處を點せられ御目利を以て甘き處を御覽被下わく御入上り御かけ被仰付候事如何御目利を以て奉行より甘き所へわく被仰付候はば百姓かたより辛き所を申上わく御入御ならし被下候歟いづれ甘き所を見定め被仰付候義闔の本意を失ひ候と申候是又無餘義事に御座候兼て壁書にも秋毛檢見下見正敷申付見分の上廉直に可相究と御座候闔にて御座候へば猶相改候事數ヶ所に及ばざるを廉直と可申かに候壁書に對し此段乍憚申上候見付の義天道を相手に候へば正敷闔に仕候へば色色の心遣無御座尤も簡便なる義に御座候もし下見の者共甘きをよきと心得毎年左樣に候はば其村は年年越をはかり其村難儀と相成可申間百姓とも可及愁訴に段理勢の當然に御座候此闔正道の位をこし　御所務を心がけ候者天道にそむき聚斂沙汰たるべく候　御明斷の上御檢見之節國家長久の術下かた莫大の費相立不申候樣に被　仰付度奉存候

一、定めの義是又難事にて御座候下宜敷程に

は難被　仰付候上宜敷様は下難義仕候十年二十年の平均先有體の様に御座候へども是にても格別の年　御撿見被下候ては下方難義と相成候半と相考候其故は近年は御撿見しまり宜敷御座候故御撿見を受候て年年御未遂出來候しかれば今日平均の處下方不足と相見へ候定免と相成候ては未進出來不申候様に無御座候ては相立がたく候誠の公然の道理にて申候はば十年の撿見きれに十年の間に出來候未進の元米とを相くわへ可申義に御座候十年に出來候未進の元是撿見切れの届かざる處に御座候此分撿見切れの外に御引其上にて定免不被　仰付候ては　上より　御心遣不被下候様にはなき道理に御座候是下宜敷程には難被　仰付と申處にて御座候因て民の有付思召候て定免の義　御念可入候事かと奉存候たとへばひたすら苛政行はれ候地御座候はば本免たりとも定免うけ可申候是本免よりも撿見うけ候方物入つよく候へば勢のいたる處に御座候すべて定免と申物は奉行引受不仕早早刈取根付仕候を得分と仕事に御座候ちかき寅の御物成にて　上御取稼勝候へば下未進過分是を合して誠の平均只撿見切れの平均は下方難義の處御察し被下度候尤是も處により下かた願候處も可有御座候

一、六年已前畑はかり引分け定免に被仰付候此義下方御受申候意味は以前は畑かたの御所務　御撿見相すみ惣勘定の場所にて有無相考奉行相極め　御伺と成相すみ申候然處近年國用多く被成御座候故奉行引取　御評議物と成候故作毛と鈞合不申候て次第につよく相覺へ成行の處を恐れ千石不足の處二三百石とも可相成勢かと推察二十年のならしに仕候て申上候處　御領分にては六百石相まし候て被　仰付候是又其已前とは平均

の處も相まし候右の通に御座候へば只今の畑かたの定免は年年六百石の御得分と相見へ候近利誠に當分の御益には御座候へども近年未遂重さ高に相成候故取立を仕役人共無據手いたく取かた付田地作らせ不申候樣に仕候村役人も不便を不存にては無御座候へども仕かた無御座見すて申候鰥寡孤獨廢疾の類御惠み被下候は上たる人の御つとめに御座候困窮者の子孫又急度御爲にもなり候とかく御領内人すくなく候此上及減少候ては荒地等も彌出來可仕段無覺束奉存候何とぞ民庶生育の　御憐愍奉仰希候

一、民力なく候ては土地一盃の作出來申さず候其故は牛馬すくなくなり候へばすき田かへし荷もち草切り糞をふみ候事出來不申冬春は其日其日の渡世仕候故作方の修理に後れ候民力出來候へばヶ樣の患なく候故作毛宜敷御座候百姓の手前七つ免の處は八つ三つ免の處は四つ五つの毛性出來不申候ては渡世相成不申候然處民力窮し候へば七つの處は六つ三つの處は二つにも屆き不申候故年年不作仕候へは其損上に歸し申候春免の毛性にては百性合申さざる譯たとへば七つ成の處

一、上之田壹段　高一石六斗
　籾三石三斗六升　是七つ一盃の作
　此米一石六斗八升
一、一石三斗二升　物成
一、六升七合二勺　六之口
一、一升五合　種子利
一、八升　出來大概
一、二升八合　藏出て遠近によつて不同有
一、二升八合　口米
一、五升　翌年の種子籾
　一斗分
〆一石三斗八升八合二勺
殘て二斗九升一合八勺

一、中田一段　高一石三斗
籾二石七斗三升
此米一石三斗六升五合
一、九斗一升　物成
一、五升四合六勺　六之口
一、一升五合　種子利
一、六升五合　出來
一、二升三合　藏出
一、二升三合　口米
一、五升　種子
〆一石一斗四升一合六勺
殘て二斗二升三合
一、下田一段　高九斗
籾一石八斗九升
此米九斗四升五合
一、六斗三升　物成
一、三升七合八勺　六之口
一、一升五合　種子利

一、四升四合　出來
一、一升六合　藏出
一、一升六合　口米
一、五升　種子
〆八斗九合八勺
殘て一斗三升五合二勺
又三つ成之處
一、盃之作
一、上之田一段　高一石六斗
籾一石四斗四升
此米七斗二升
一、四斗八升　物成
一、二升八合八勺　六之口
一、一升五合　種子利
一、八升　出來
一、一升二合　藏出
一、一升二合　口米
一、五升　種子

〆六斗七升七合八勺
殘て四升貳合貳勺
一、中田　　高一石三斗
籾一石一斗七升
此米五斗八升五合
一、三斗九升　物成
一、二升三合四勺　六之口
一、一升五合　種子利
一、六升五合　出來
一、九合八勺　藏出
一、九合八勺　口米
一、五升　種子
〆五斗五升三合
殘二升二合
一、下之田一段　高九斗
籾八斗一升
此米四斗五合
一、二斗七升　物成
一、一升六合二勺　六之口
一、一升五合　種子利
一、四升四合　出來
一、六合八勺　藏出
一、六合八勺　口米
一、五升　種子
〆四斗八合八勺
不足三合八勺

郷中の藏より　御城下へ小廻し仕候得ば遠近により一樣ならず候安岐より竹田津にいたり段々苦勞相增し寒風に相成難義仕候水揚げ夫罷出候義風次第つめかはりと相成候事每每有之餘り難義に御座候故只今にては杵築は大かたやとひ人と相成候是等も出來の一にて御座候右記し候通本免ほどの作り足にては或は間合ひ或は不足仕候何れ其餘分を以て牛馬を求め鋤鍬鎌まぐわ蓑笠根付の粮米を仕入其外にて父母妻子をはごくみ

家財衣服等仕葬祭嫁娶家の取繕ひも仕候是も田地無之者は此上に利米を納め候へば唯わらと麥とを心がけ候然共年廻りあしく候へばそれにもあひ不申候不便なる義に御座候偖一統上よりの御法は三分の内二分上に納まり一分百姓に被下候と立候物に御座候へども右之通りの算用に御座候へば有のまゝにては百姓立べき樣御座なく候さるに依て何とぞ出精仕御免の上を作り出し猶くろはし一鍬にてもいじり出不申候ては渡世難仕候さるに依て鍬先餘畝と申はなくてかなはざる物に御座候此故に御免程よく候へば民力出來渡世も被仕候安岐内鹽屋村免合過候故松原善太郎庄屋仕候節御願申上御下被下候直にして烈敷氣象故村民をはげましすゝめ民力も合候樣に罷成出精他村に超え根付の頃は糞等夜陰に運び朝は行燈にて朝飯被下相働七島莚も格別宜敷候故年年皆濟村方有付左候へば他村へ罷出候節の衣類も皆皆相應の覺悟有之猶又おしへ方宜敷相みへ人も律義風をなし候箇程には御座なく候共この風にうつし度物に御座候とかく力合不申内は只怠り申候

一、出來相場別段に御立其後・折折上方の相場にしたがひ毎毎狂ひ申候取立の者及混雜難義仕候可相成義に御座候は米の直段一通にて上方初相場にて前廣に御定め被下銀納の相場高直に御座候はば代官大庄屋働を以て他領米買入を御免被下下直に御座候はば銀納都合にて增割を被　仰付候は如何と奉存候出米物等同樣に御座候或は少分の事に御座候はば翌年にくり越又賣出の年と相和し候事も可有之候無左候はば翌年の出米に入れ可申候いづれ左樣にきまりつき候はば大庄屋本米價の間際も分明に可有御座候且御政法簡便にも相成候はば出米も減じ可申

候出來減じ候は百姓の潤澤にて御座候米直段何とぞ只一通に被　仰付度候米初相場より引上げ候年有之候へば又引下げ候年御座候平均の處は格別の御損徳も御座有まじく候一定の米相場上に相立候へば大庄屋本勘定早く相定まり取立よく御座候米下直なればば買置高直なれば賣候樣の事は賣人の道にて御座候治國者の道は古より下直の時は貯置高直なれは下直に賣候を道と仕候樣に承候
　他所穀百姓勝手の筋代官大庄屋以作略買入候義は願　御聞屆被下度候庄屋大庄屋手代自分之働に仕候義は無用たるべき事に御座候米相場一通に被　仰付候はば米相場高下の間際は急度勘定の本目たるべき事に候其間際しれ不申候てはうしろくらきと申樣にきこへ可申候

一、他の御領地は畑は大小豆田は米と年貢御定めにて御座候畑は畑の出來相應になれ居候故田畑相應に納り候　當御領地は畑も米定めにて大豆を入れ候へば三割小豆を入れ候へば一割增にて御取立被成候夫故大豆に三割を籠候ても米一石の代に不屆年は大小豆よく納り候大豆相場宜敷御座候へば何とぞ一粒にても御年貢へし申度存じ候ゆへ大小豆出無甲斐候左樣なる年は上より大豆をはかり候樣に御沙汰御座候乍去畑もかねて米にて御定め被下候へば米の價にて納候へば苦かるまじく相聞へ候畢竟內證は上に奉納べき爲にて御座候小民纔の間際も　御免不被下候ては未進猶重さ高に相成候別て兩子手永は土地あしく胡麻も出來不申位にて御座候夫故大小豆にて畑年貢を納とり候事は出來不申候兩子手永未進と申候は大かた畑より生じ申候是等の實徵　御覽可被遊候はば大小豆下直の年の納り辻　御照し被下

度候畑は右之通の土地故貧民田を離れ候者は畑ばかりと相成畑作り候へば無程零落仕候他手永も出付は此類多く御座候
島原御領などの様に畑は大豆御取立と御定め被下候事は當御領地にてはさしつかへ可申候其故は兩子手永様の類の處はいづれ畑年貢ほど大豆作り候事は十年に一度も御座なく候それを直段宜敷時現大豆さし出候様に被　仰付候はば今よりも難儀可仕候公料は畑年貢は銀納にて下直に被　仰付候此通も　上大豆御用にもさしつかへ御不益と奉存候胡麻同前に御うけこみ賣直段を以て米に御直し被下候ては如何と奉存候

一、水田在所の地免無變分相者へ相定め候物にて可有之候左候はゞ水田在所の御檢見は無變心得奉行用心可仕事には御座あるまじきや

一、民間種子利の高利に苦み申候隣境島原御領は元たね上より被下候へども利は御取無御座候立石御領は一割五歩にて御座候只日出御領竿たね利當御領内と同じく六尺三寸三割にて御座候　御領内巳前は民間のかし引穀物三割銀錢二割にて通用仕候處寛延年中穀物は二割五分銀錢は一割八分に被　仰付候種子利は始終かく居へに被遊候物故巳前の通三割と被　仰候民間にて少少取かへ仕候には丈夫に利拂ひ仕る口はかく居への方利ばそに仕候先達て御逼迫の節元たね指上可申やと伺候へども御免不被下候民間甚難義に奉存候か様困窮の時節に御座候へども元たね御取立被下候と御座候へば無程百姓とも相寄合指上申勢に御座候

島原舊領の節御家風甚正敷賄賂行れず役人出郷のせつ決して酒にてもすすめ候義不相成又役人替り候ても清白同様

に御座候き是人御撰みは勿論にて御座あるべく候へども數十年御家風衰へ不申候事は御法よく相立候故と奉存候御勝手甚宜敷御座候故御愛惠の御政事しばしばに御座候故隣國にならひなく宇都宮へ御國かへの沙汰諸民承り殊の外惜み中百姓ども江府へ罷越何卒島原へ御在城の段を公訴仕候然ども一旦被仰出候義故東國へ御引うつり近年又又及御歸城候毎度の御國替にてか御勝手も已前とは違ひ御家風もゆるみ候風聞に御座候然ども今以御餘風御座候て御檢見方等大分御丁寧に相見申候御考の爲あらまし申上候先爰許は上五段にて御座候島原御領は下下の下三下三下被下一毛御座候元種子御渡し被下候て利御取立不被下庄屋給百石に付一石此給は村の大小により多少御座候其外に村の大小によらず一石宛被下候是に近年御不如意に付庄屋中願候て指上候へは御受納御座候組頭爰元にて中辨に差にて御座候米五斗宛開き地御改め御座候分新切と申候新切の分は本地とは免ひきく屋敷おこし候は屋床起しと申候て又免ひきく被下一毛又免ひきく御座候因て　御朱印前は今以て荒地引は御座候てやはり荒地と書出し御朱印少も國初に違ひ不申新切已下は段段下免故是非ともに帳面混じ不申檢見に定合と申物を御立候爰許にて申つき合候といふよりはふとく御定めにて御座候先兩子隣境田濫組蕗村と申を以て申上候蕗村免八つ石盛左の通石盛と申は爰元の斗代の事に御座候

上上、一石一斗五升

上、一石一斗

中、九斗

下、八斗
下、下五斗五升
三、下四斗
一、毛三斗
定合
上、上一升二合　つき合候升九合二勺
上、一升一合　つき合候處八合八勺
中、九合五勺　つき合候處七合二勺
下、八合五勺　つき合候處六合四勺
下々七合　つき合候處四合四勺
三下、五合五勺　つき合せ候へば三合二勺

此方には定合と申もの御座なく候つき合候と申は斗代に免をかけ候て得る處にて此つき合候上は免に越し候米御座候故見可申樣なく候て見不申候あの方は御憐愍を以てつき合候よりは引上げ定合といふを御出し置きつき合候にかかはらず定合に屆かず候へば檢見に入候此故に此方の法にては上上に九合二勺上に八合八勺御座候へば見申事なり不申候あの方にては九合二勺迄みられ候得ば此方と二合八勺の間際御座候上にて八合八勺迄みられ候得ば二合二勺の間際御座候此意を相考候に法の通りに屆ざる分は不作故なきに依て御とり不被成分つき合と定合との間は百姓此間際なくしては生活の道なきと御覽しての義かと奉存候此間迄を檢見引と申候さん檢見前困窮者何軒何人高何程と申書付を御とり被成候檢見すみ候て奉行見はからひ村中に高何程と申を引遣候是を用捨引と申別段に其上に困窮者に高を引遣され候是を增引と申候偖大庄屋村役人其外故ある者の困窮には增高と申を取立の爲に被下候其高分の所

務を共もの拜領仕事に御座候たとへば露村上田一段一畝三歩と仕檢見を仕候にわく付仕候處籾五合御座候へば此方の法にては五斗五升五合の御所務と相見へ候島原の檢見の法に候へばわく付の籾五合上田一升一合の升にて引候へば六合きれ申候一段一畝三歩を田の法にてわれば三百三拾三歩と成是に六合のきれをかくれば一九九八を得候是を定合一一にてわれば十八一六零四と成是を田の法三にてわれば六畝一歩六厘と成この六畝一歩六厘皆無なり殘る五畝春免の作と見て是に八をかけ候へば四斗四升の德米にて御座候是に旱損風損水損等の用捨引を被下猶窮民にまし引を被下候麥出來候節割付御座候て百姓より大小麥を納め申候是用水夫扶持の御才覺にて御座候用水とは平生の井出溝等迄とみへ候御年貢納候節大麥は二升小麥は一升五合を米一升の御定にて年貢に御繼被下候さん極月窮民の書付御とり右の麥を用水の前渡しの心にて越年夫食とて御渡しにて御座候去ぬる安永申の年奉行何がし露村にてわくこし候時庄屋をよび申候は其方ども檢見を如何心得候や檢見は其年の作毛を我我見屆け候事なりしかるを越させ候ては百姓難義すべきぞと叱られ候と承候今以餘風猶香敷覺候右奉行は西田市右衛門と申候

一、免ふとく御座候ても土ほそくまはり候へば御年貢ほそく同じ高にも土ふとくまはり候へば御年貢ふとく御座候畑年貢な古法は取大豆と申畑畝の土地なりし免をくはへ候て三割をまし取立申候たとへば七つ免の處土二段と相わかち見候に

上、村畑畝拾町此高七拾石
高のならし一段に付七斗也七つをかけ米四斗九升なり三わりをまし六斗三升七合の大豆なり

下、村畑畝拾町此高四拾石
高のならし一段に付四斗也七つをかけ米二斗八升なり三わりをまし三斗六升四合の大豆なり

是畑年貢免を以て定め候ては土地とあひ不申平均をまち候近來の定免歩あたりにて相極まり候取大豆の法により候へば高免村にて畑年貢少きも有之下免村にてふときも有之候畑かた未平均を得ずくるしみ候處御座候古今御考被下度奉存候

返號借

一、其已前は未進春越に相成猶出來不申候へば　御用捨も被下入手形とも相成居申候然處近年上には　御取定に相なり候故小庄屋手に合不申分は大庄屋へ頼申候春越出來不申候故又春迄も利相加はり申候殊更近年凶饑相つゞき俄に大未進と相なり大庄屋共銀主の樣に罷成迷惑仕候千一手屆き不申日如何相成べきや安心不仕候もはや返號崩れも處處有之銀主も損仕候故にかり入れ方は一入嚴敷相成候儲近年米高直に御座候へば米のかり入れ一向出來不申夫故米下直に相成候へば利過分に相成米高直の時に御座候へば新借を生じ候いづれにも仕かたなく罷成候夫故銘銘とかく仕候者は高利を恐れ内證がりに仕候へども貧民はかり出し不申候て庄屋に頼み庄屋才覺出來不申分は大庄屋に頼み申候かし候者は高直の米かし候て翌年下直に候へば元に不屆と見候故米かし無御座無據錢をかり申候百姓の手前内分は取立候品無御座候ても是非其年の間合不申候得ばやむ事を得ずかり入庄屋もなし方無御座

村まとひにも難仕末進無之百姓には末進を相そへ田地をはり付候此者共も餘分無之候へば又其末進にくるしみ同樣に相成候も有之共上に仕方無御座候へば村まとひと相成惣困難と相成候纔一二石三四石も作り候位の百姓は借入一二斗も出來候得ば踏直し候事甚かたく其上人の家は病難生死牛馬盜賊臨時の物入出來微力の者少し弱み出候と追追及困窮候其上高直の銀を翌年米にて拂候節たとへば前年百目直段にて一石かゝり取翌年米五拾不仕候得ば元米一倍と相成それに利加はり申候是によつて近年米格別に下り不申候ても三わりの外に出申候下直より高直になり候節は利ほそなる事も御座候へども其年は凶年故多くは末進年にて御座候誠に不便の義に御座候　御盛德を以て百姓有付の義始終を　御はかり被下度候格別之義は我等式短智の所及に無御座候以愚案申上候義左之通

御目通にも罷出候代官大庄屋町人の類へ民間困窮不便に被　思召上候得とも時節柄　御手屆せられず相救ひ候手段御賴みの　御意とも御座候は　御志感心仕退いて庄屋其外有力の者共にも申きかせ作略可仕候下小民は利にきそひ申ものに御座候間奉行共取はからひ仕度候子細は右出精に輕重可有御座候因て次第相考へ或は苗字或は門或は脇指袴或は兩羽織或は絹帶袖口他所付合の節の細或は傘等一代切の御免御褒賞被下候は難有奉存候て年年出精可仕候千一拔群の出精も仕者有之候はば御家人にも被　仰付候樣にも御座候て自然と米出來可仕候是を直段の高下にかかはらず利ほそに米かしに被　仰付猶年年出精の人と利分相加へ次第に相長じ若

年順に來り過分にも相成候はゞ幸郷中種子藏村村に御座候へば修覆被　仰付御積置時時　御つめかへ被　仰付候へば利分は彌ほそく萬民凶年の備も事足り千一の節は　御軍糧の御手あてとも相成可申候初の頃は被爲用　御心候はば御檢見の節にても小民ゆくゆく御救料として少分宛御加へ被下候て數年の力にて成就可仕候左候はゞ少分づつにても小民高利にくられ候くるしみかろく相成可申候此弊相やみ不申候得ば窮民有付の義は出來不申候且出精の者御家人にも被　成下候義肥後御領には前前より有之候其樣は其人は士籍に加へ世悴にても兄弟にても其家の名前を持候

一、軍國の御人數も薄く相みへ申候郷中にても達者力あり氣光なる類少分救民の才覺とも仕願候類御座候はゞ其人柄御見立御軍用の節の驅出し足輕に被　仰付軍役の段被　仰聞勿論一代切　御驅出しの節は扶持切米被下置平生は村役人の支配をうけ末席に罷出　御用之節罷出候樣に被遊候はゞ如何と奉存候有体望候者は丈夫にして筋力有之をとなしき者にて無御座候ては不宜べきか猶左樣の者出來候はゞ鐵砲或は棒にてもふり廻し候義かねて心がけ候樣に被　仰付候はば在在のしまりも可宜かに候

今に民間に申傳へ候は已前島原騷動の時分郷中人夫被　仰付候節鬮取いろいろ人相極めがたく甚難義仕候由に御座候後來の御備に毎毎御撰み御用立ものに其段被　仰付御憐愍筋の義被　仰付置候はゞまさかの節違亂に及不申　御用立候者共相つとめ可申上候

因循して費下に流るる事

一、やむ事を得ずして一時に行はれ候事自然

と歳月を經候ては例の樣に相成上たる人も御存じなく下には苦み候事古來有之候事に御座候先年乳持　御用の節も何分御勝手に應じ候女無之終には　御領內宗門帳を以てくり役人罷出或は小兒持候女は庄屋醫者類の妻迄　御城下へ被　召呼候女之義に御座候得ば一人も罷出得不申其夫相そひ遠方は夜を隔て役人も困窮仕しかた無之助給を鄉中より指出やうやうやとひ入候樣に相成申候此助給と申も先例は無御座候へども一時是にて行はれ候

一、當時御年貢納候節之口米之義御定帳には欠米百姓出し候へば出目の義は百姓取べき筈ゆゑ百姓に被下候但其出を拔候へば俵くつろぎ候へば大阪にて賣拂候節如何と有之其儘爲置度由大庄屋斷に任せ候と有之候へば兼て三の口の外は壹石切にて出目は大阪拂の上御かへし被下候と相みへ候其上御念入石物受取候割無依怙贔負可仕事と被　仰出候左候へば延寶年中迄は一俵四斗切にて口米と申名目も御座なき物と相みへ候然處四斗の欠をいとひ候故一俵五合の出をかねと仕候延寶の頃の出目にて御座候出目と申名目は過米と申と同樣に聞へ申候偖此口米の事藏藏にて手段はかはり候或は斗升の上壹粒のりと仕候處も有之かき切にて壹舛添候處も有之候是又同樣のわりとみへ候左候へば百姓の手前は壹石に付五升餘も入申候然處鄉藏より御城下へ相廻り候ては改を受候節五合に出候へば何程にても其儘に納り五合に不足の分はつみかへり船頭に辯へに被　仰付候依怙贔負なきの御定めも潰れ申歟に候此米御家中に相渡り候時は四斗に五合の出御座候へば四斗五合の出にて御渡しに相成候勿論米と申ものは取惱み候度にこぼれ捨り又米の美惡改候にもへり候へば欠米も

なくては不叶義に御座候へども彼是さしつかへ難義仕候畢竟改候節過と不及と相ならし平分の上の沙汰可正奉存候

郷中藏藏に納り居候米の義御城下御入用の外は酒屋わたし等に被　仰付其外大阪拂へ其所所の船へ被　仰付候はば大に百姓の休息と可奉存候其故は　杵築へ相納候迄は百姓上納相濟不申心得ゆへ海上風波の難を恐れ候一つ回船につみ候へば積候節五石に付一人宛の夫入又　御城下へ廻り水揚げ夫其通りに相立候在中より追追水揚げ夫指立候ても船回り不申候へば翌日は相まち翌翌朝は罷歸り代り候夫罷越候猶又天氣加減にてまはり不申候へば又夫代りに相立候此義甚難義に付近來は大かた日庸やとひ申候一つ猶又運賃遠方程相まし候三の口俵の時の口米の外の入目にて御座候一つ其上欠米相立候へば船頭の難澁と相成候一つ下役人上乘仕候へば天氣合にては餘程隙取候て獨身者等は根付時分時節を取失ひ候一つ以上四つの難澁御座候若大阪まはしと相成候へば郷藏にて百姓の手前相すみ安堵仕候一つ上のり水揚夫運賃船頭まとひ等無御座段一つ大阪まはしに相成候へば欠米無御座俵損し不申候故見分宜敷うりよく御座候是一つ郷方の休息不大方候殊更竹田津手永は遠境海上もまはり候故寒天風つよく格別難義仕候夫ゆゑ船頭ども運賃にてはあひ不申役目にてつみ可申候何卒此義は御用の外は大阪拂に仕度候

一、島原御領年貢出しの義は俵切にて納候百姓手前は村にてはかり子相定め壹俵宛はかり分け半下の分は半合せを仕

村中にて半俵壹俵出來申候是は組合の隣村と申合せ相互に合せ候故手永に半俵壹俵と相成候さて右之通內證にて米はかり置藏出しの日は宰領を相そへはかり申候馬有之者は俵に拵へ馬にて出し馬なき者はさきにて俵に仕藏方へ渡し申候藏かたはかけ廻しにて受取はゑ候てまはしを三俵入過不及をならし不足御座候へば百姓より不足をたして相納候延岡御領大概同方にて御座候左仕候故うけ取候藏も物靜かにはかり子も入不申費も立不申候此御領內も左樣に仕候へば簡便にして費すくなく可有御座候かけまはしに相成候へば藏改候節より外には欠立不申家中受取候手前も心よく可有御座候其仕樣は役人共相考へ承合せ候は宜敷出來可仕候今の法はかり子入其上半俵夥敷民間難義仕候その上俵のまはし三俵の過不及ならしを以て口を足し候事是又宜敷御座候

一、反別麥と申候は鄉中用水池川或は道橋とりつくろひの爲田畑一反につき貳升宛相納置右の品願出候節村役人相改め大庄屋見分にて普請仕候處近年は御念入奉行とも見分と相成間敷相改め申付候纔二百三百の夫遣ひ奉行引受候事夫力賄村中物入つよく自然と申出さる樣に相成候御定は夫扶持大麥二升小麥一升五合にて御座候處其後一升と相成當時七合五勺と相成候たとへば三百人遣候と仕あら麥貳石貳斗五升の義是に準じ候て願おろし候扶持の義に候へば物入甚難義仕候願くば以前の樣に大庄屋改め猶御安神なき候樣子に候はは郡手代共にても相濟し申度候左候はば用水も相應に物入少く候て出來可申候畢竟奉行共被指出候義上下共に不益と相見へ候用水近年自然と怠り候事上

下の大損にて御座候繕無御座候へば池水は早く盡き溝は水もれ川端は水かかり年年の御損不覺過分の義　上に御不益に御座候へばそれを作り候て渡世仕百姓は彌及渇命候何卒反別麥の員數ほとは年年用水被　仰付猶大唐米の類　御出し修覆被　仰付度候此義役人共毎度嘆息仕事に御座候夫扶持あら麥一升と申は扶持には屆き申事にてはなく候七合五勺に御座候得はあらし子晝食料にも屆き不申候

近來普請等に罷出候人夫自然と怠り付はり取かね候是は大庄屋どもよく心得小庄屋に得心致させ村村くつきやうの宰領をゑらみ他組とにらみ合をつけ旗にてもたてすすみ候方を賞し後れ候方に荷をかけ候樣に仕候はば思ひの外はか取道も御座あるべく候

一、元來藏本の備用聞一人に聞番兩人づつつめさせ諸手永ともに用事辯じ候然處御郡所御附人御やめに相成候故聞番よりこれを務申候郡手代出部屋に相詰候も寄合飯たき召置候處先年一人に成候節藏本へ頼申候已來出米がたがたにて是又聞番より相つとめ候只今は是等の義本務の樣に相成手永手永の狀繼等は事足り不申日庸取毎毎やとひ候故出米も重さ高に相成候　御用狀の義時切れ候て不相叶之外寺社奉行御普請方御勘定場御船手郡所は勿論諸役所ともに八つ時を限りと相定め郡所へ相とどけ郡所より所所の飛脚さし立候樣に藏本に申付候はば甚易簡に可有御座候此限御無御座候故　御用狀の度ことに人指立候左候へは臨時の御用の外は右之通にて御間も欠き申まじく候

一、鄕中の義繁冗に付省略仕候はば下方休息可仕候と奉存候條條左の通

一、藏返しは無御座候ても相すみ可申事

一、封奉行は御年貢初納よりつみ立相すむ迄にては如何

一、返號勘定むかしの例を引き夏の頃御城下へ罷出相詰候是等も御所務辻相極まり候上御勘定所へ一切の根方出來候間すべて通立に仕繼物の類は秋免狀の節相渡り候書付物を差出し右之通にうつし付現穀物は御藏通にうつし付銀納物は銀通にうつし付御勘定所押切判出來候はゞ夫にて勘定相すみ可申候其頃鄕手代一人通帳携へ右之日に引合せ相すみ可申候代官大庄屋屋をはじめ數日藏本へ相詰へば賄夫猶雜用旁費甚多く御座候何卒易簡仕たく奉存候

一、撿見惣勘定前渡しの通藏本にて仕晝賄鄕中より仕候ては如何

一、御勘定所御郡所は尤大切の御役所にて御座候御勘定方は御役所相立御郡方は御役所無御座候御郡所も御勘定所のごとく御役所御設被下候はゞ當時鄕かた難義御救ひ被下候一筋とも相成可申候右つもり方左の通

御郡方役所一ヶ處御設け脇に部屋をしつらひ鄕中より被召出候郡手代共居り候處と定め役所付中間貳人御付役所掃除小吏手代共飯をたき諸用を承り候はば間合ひ可申候左相成候はゞ藏本過分の省略出來可申候當時藏本別別に家を立て六藏御用聞六人聞番拾貳人扶持切米はかりも七拾八石入申候薪準之候修覆是又大義に御座候小倉領の仕向け三十餘の手永を東組西組と二つにわけ是を郡屋と名付各造りつゞけ長屋となし手永手永をへりきり東西の郡屋に郡屋番と申者一人宛各聞番を召置只兩人にて十五萬石の鄕用辨じ候此例にならひ

六手永を長屋一軒と定め各間取を大庄屋どもにつもらせ六つにへりきり外に用聞居候處を設け助役一人小走兩三人召置一人宛月番奉行の方へ相つめ是にて萬事相つとめ一切御用狀日庸に仕度候日庸過分の様に相聞へ申候得ども當時六手永の日庸壹貫目も可有之候今一圖にやとひ候とも仕方を以て一貫匁位にては出來可申候左候へば藏本大に省略出來申候其上藏本少少の菜園場も出來候はば是又藏に出候者野菜もとゝのへ不申相立可申候左様はば兼てわら飼葉等かねて　今引ヶ目を御定め置き其日をよけ御馬屋方に直納に仕候得ば藏本靜かに罷成候來浦小原竹田津の邊は藏本拂にては聞番に左少の心付も仕來り候左様の煩も有之間敷相成可申候

一、御手廻り御減少に付　御城下近邊にて相やとひ候是又八坂ばかりにて可勤様も無御座御領内わきまへに仕候是は事馴れ候者に無御座候ては御間に合ひ不申候故先に御奉公相つとめ候者どもをやとひ候故日庸も並には仕かたく候

是等魚の店あたりにて達者に物馴たる者ども御極め被召置候義は相成申間敷や　上御手傳へにて下より仕候ども此方可然奉存候

一、郷足輕郷目付として前前より御指出しにて御座候處さし當り立はしりの役も無御座奉行等業内仕候毎毎村めぐりも百姓の勞煩をいとひ差扣候ことも有之安閑として在中に罷在候當時百姓の間に遊民と罷成博奕を業とし廻り害をなす者有之又富をうりていとなみとし害をなす者有之候博奕盜人等の宿を仕者御座候御年貢を納めずかゝり物を拂はず人をおとし我儘を申村役人の手に合ざ

る者御座候本間の盜人と申程にはいたらず一村中にて小民たくはへ候麥稈かまけ俵布木綿五尺一端とり候者或は稻を結ひ穗をつみ鍬鎌類盜候て大に村民の害をなす者御座候公事喧嘩をこのむ者御座候牛馬を商ひ候博勞の內大に人をだまし民家をたをし候樣の者御座候村役人も人情にひかれ村民も申出候へば大事に罷成其者の末をも不便に存じ且村の騷動厄介とも成候事をいとひ其儘のさし置候得ば惡事次第に長じ患をなし候又方外の不孝不人柄醉狂短氣にて大事に及候も有之候村役人共ケ樣の義不申出候義不埒にては無御座候申出候へは代官大庄屋もすて置がたく大變と相成‥村の厄介無限候故先さしひかへ無據大破或は他村懸合に罷成候節は申出候右の通のいたづら者共鄕足輕支配に被　仰付村かたよりも事によりひそかに沙汰仕或は足輕よりも手寄を以て承り出し村役人に及相談道橋等の修理事の輕重に從ひ急度申付足輕切にて相すまし再三相犯し候上代官大庄屋にも沙汰仕或は鄕足輕手を下しがたき義は穢多共にも申付他手永と懸合候義は他手永鄕足輕と懸合盜人博奕御領內無殘處遂吟味仕候樣に仕度候左候は奉行所も事少く村方も不及大事鄕足輕も務分肝要と相成可申候箇樣にも御遣ひ被下候ば餘程物なれたる人御撰み其者任にたへたる者に御座候はば年數にはかゝはり申間敷且足輕の內にても用立候才も顯れ可申候

牛盜人古來おもき御法にて御座候直に大庄屋本に訴へ可申候此盜賊諸難大變は先例にしたがひ直ちに相達可申義時宜可有之事に御座候

一、惡黨並に宿ぬすみ物しれかね可申候鄕足輕帳面認置惡黨ととらへ候はば其節前前之義方方の惡事書とめ置き吟味を

とげ其せつ惡黨の處名宿の處名をつけおき已來詮義の手がかりとなし申べく候此帳はあとの鄕足輕にゆづり可申事に御座候

下方の義不知召哉と奉存候事

一、御入國已來仁怒之　御德瑣細の事迄行屆せられ鄕中、夫役少く下方難有奉存候舊例にしたがひ下條申上候

一、御用向き山芋、しか、わらび等の類向付候て急に被　仰付候ては藏本より臨時の飛脚相立大庄屋本より村村へ申付候義も急　御用に御座候へば　御間に合ひ不申候ては相すみ不申候故村村には別別に飛脚相立小勢にても無覺束大勢さし出し候故纔の小　御用にても前以承候義とは格別夫手間相まし候此外何によらず前廣に承り候へば大に便利の筋と申事に御座候

一、下目付鳥見藏の米見梅見材木御買上げの見立等すべて右類鄕中へ御指出しの節休み泊り賄かた入目上より御渡し被下候や其人より出候や村賄に候や　御定法不承候故取まどひ申と申事に御座候

御定帳には　御用に付出奉行下郡郡手代鄕足輕御指足輕の杖突並に足輕下横目下勘定人船手の者普請かたの者一宿に二人居候はば薪一束三人居候はば一束半に極る事其外　御用に付誰人にても差遣候節は御用番さし紙にて相達し可申事飯たきの義は宿主歟又は人足相達候歟百姓勝手次第の事と御座候すべて御用に付奉行以下鄕中に被差出候節賄薪等　御定御座候て扶持は大庄屋ばかり一宿一升三合村賄に　御定御座候是を鄕扶持と申候

一、小門　御法をそむき候者他領徘徊御さしとめの一條御座候此事第一御年貢納所他村

に有之又他村つとめの役目相ならず農業渡世山林田畑他村に御座候處も有之又農具鹽相とのへ七島莚賣に罷出候類自分の用は勿論村中役人も難義仕候尤其身幷に村方にも此難義御見せしめの故とは奉存候へども畢竟村役人も御年貢催促等に迷惑仕候指閊不申道は有之間敷候や

肥後御領罪により眉をそり餘人と混せざる様に仕　御城近邊の役目相つとめ少分の日傭賃被下其内半分は上に御預り罪御免の節は渡し被下候様に承候

御領内格別の罪にも無御座或は種子藏入追込又は右類罪の輕重に隨ひ道橋の修理被　仰付候はば其處の益ともなり其身もおもひあたり可申候もし番にても入候類は番人どもに作り様或は腰縄付候ても漢土の例は相みへ候様に承り候肥後の法古の徒罪に相當り候と相みへ候是等の處如何道橋つくらせ候事猶

下條博奕の處にも申述候

一、水旱風とめ疫よけ等願くは村民相寄合各其所守護の神御座候へば神樂鹽波通夜踊相撲操など力一盃に仕度候村民と申ものは手ひろく通じ候ものにては無御座其上旱を好み候處も有之雨を好み候處も有之うるほひつづきよき處も有之候然れば一村一村の父老存念次第にて事たり申候一手永を申合せ候事は庄屋の事にて御座候然れば一村のいのり百姓の本意と相みへ候一村立願の上又手永に結候事村民つもりのもの外の物入に御座候　御領分一同に申合せ候事庄屋共存外の物入にて御座候右申上候通風土不同土地一様の願可有之様無之又村民等申合せ可申様無御座候是又手永願の上の物入村民ひそかに歎き申候代官大庄屋支配の難義をいたみ候はば代官大庄屋祈り可申候御領分を

氣遣ひ申候はば郡奉行とも祈り可申候民をくるしめ候祈は背本意候義と奉存候

一、不時の御用は格別の義に御座候其外竹木萱繩御馬屋わら飼葉等大積りを以て年中の御用手永手永へかねて被　仰付候へば晦の節才覺仕或は幸便海邊に相集め仕立置き或は便船等相運び役所役所に相納候へば大に得便利候　御用向付候ては小　御用にても一人相立候一年の大積り相しれ候へば不時の御用の外は村役人共かねて心組仕候俄御用には其品の詮議かたがた用意も手うすく御座候へば手間候事多く御座候

御法行れざる事

一、法は重き物にて御座候へば毎度變改御座候ては下方心得違ひ覺へず罪を犯し候事有之候乍去害と相見へ候事はすみやかに御改め被下度候依て法を出す事千慮萬慮の上の事歟さるに依て法は箇條すくなきにしかず候　御國にては延寶七年民間に三十五箇條を以て被　仰付候然處年數推移り當時相用ひがたき條目も御座候迚享保十六年に十三ヶ條に御約し被　仰付候然れば十三ヶ條を以て役人ども可申付候處猶下方暗三十五箇條とのみ覺へ候て又十三ヶ條相加へ四十八箇條の樣にも心得申候大切の御法に御座候得ば用ひがたき御箇條混雜仕候へばよき御箇條も行ひがたく相成候時代推移り用ひがたきと申候は札請の外殺生停止酒賣買他領など申類混雜仕候故下かたにて取捨すべき事にもあらず自然と怠り申候時宜に從ひ御改と奉存候へば十三箇條　御覽被遊思召を以て一樣に御寄被下度奉存候其外古き形により通用仕候は其通の義に御座候猶やむ事を得ざる義御座候はば被　仰出度候時代推移り候へば事勢も推うつり因て古に宜敷事今無用なる義も段段出來仕候其上手ふれ

慣れ來り候事は人多く貪着不仕候　御高札處處に懸り居り候へ共只今にては立どまりよむ人とても御座なく候彼是諸法度も年年御さらへ無御座候ては大様になりやすく御座候降て相考候に　御仁德の義とかく可申上様御座なく候得は何とぞ古今御斟酌被下鄉中の義役人職掌幷に御定帳是又御改定被下度候當時の御定帳は延寶八年申五月田中與左衞門大原平左衞門下枝杢之助より郡奉行梗並喜兵衞宮內新四郎へ相あたり候當時より良法も有之當時に合不申事も有之候仰願くば役人職掌より鄉中諸法度　御施行被下候はば萬事是により取はからひ申候はば我我無調法の者どもも事あきらかに取まどひ少く役人私曲も出來中間敷利用の尤も大なるものと奉存候御法相立候上は年年讀きかせ候様にと申候てもいつとなく怠り候て末末おぼへず　御法を犯し候事有之候あいだ毎年わざと鄉足輕にてもその爲に村村あい廻り村中をよせ讀きかせ候を見屆け猶其わけを申聞せ候様に仕度奉存候

一、從公義之御法度御高札の外毎毎御觸流し御座候新敷庄屋共も多く御座候へば存知不申者も可有御座候上の御扣を以て一卷と被成下村村庄屋共へうつしとめ候様に被　仰付已來の御觸流し次第に書續き庄屋代代に相渡り候様に仕度候

一、古來有來る所の神社佛閣可致尊敬修覆造替の節は役所指圖をうけ其所の分限をこゑ候結構致すへからずたとへ小社小庵たりとも無　御免許不可有建立祭禮佛事新規の興行かたく御制禁の趣に相みへ申候然れども佛神の義は冥福をいのり作佛を願ひ候様の人心にまどひ有之佛神につかへ候者はひたすらに建立を願ひすすむる者すすめらるる者いづれも國害たる事を不存候無上の功德

善根の第一と覺候故色々の拵事設け願ひ出候是正直にそむき妄語を申佛神の道にそむき候事を不存一旦願ひかゝり候ては年數をつみ是非願ひ叶へ候左候て氏子壇那に不相應の建立無壇の寺院無氏子の小社共立ならべ行行所の患を遺し候又寺院小社等造立仕者は田地を買ひ付置祭禮佛事新規の興行財物を糜爛し候是又民間の患にて御座候僧徒社人等存念御座候へば其司たる者へ前以贈り物仕支配へ世話たのみ門なき所にも門を立鳥非なき所にも鳥非をまふけ色色の建立仕畢竟信心と申物ともみへず壯麗を好み名聞をもとめ冥福を金銀にて求め候間の事にて御座候且又相對の勸化　御免是又下方の爲には人情にひかれ候物ゆへ民間却て難澁仕候且又正月の頃は寺社建立として村民共夜念佛と號し十八十五人相催し鉦をたゝき晝夜を分たずかけめぐり幾組ともなく米を

貰ひ廻り申候相應に暮し候者は左も無御座候へども年を越候とて壹升二升買もとめ候類は少分の志も大義に御座候當時百姓いたみ候時節纔のおさなかひを仕樣に仕度候

肥後御領は神社佛閣堂塔小屋の數間數境内の間數盡相改め帳面上に納り此帳面より弘め候樣の義新造かたく停止に被　仰出候と承候分限を超候結構致すべからず候と申義肝心の義と奉存候神社佛閣の義は尤御念御入被下度候

一、鰥寡孤獨相たすけ五人組合吉凶患難相互に力を合候義小門同志かつかつに相成行屆きがたく御座候いづれ大庄屋より小庄屋へよく申きけヶ樣の處は役目も過分に候はば大庄屋作略を以て他村にも讓り庄屋も村にて用捨致遣し根なとつけそらし候樣の義は申立　御魚をも申受度候其子細は條目の趣を以て申きかせ難義を村中にて寄合仕箸の

義に御座候三十五ヶ條に根付かり揭げの時分獨身また耕作成かね又手前ならざる者作業後れの者先其ものへ助成せしむべき旨十三ヶ條にも其意籠り候へども古條目尤詳に御座候庄屋共一統に此旨とくと呑込申度候

一、萬事奢致すべからず屋作衣服飮食に及迄儉約を可相守候　公儀より被　仰出候大庄屋小庄屋百姓共其身不相應の家作不可致とは三十五ヶ條の趣に御座候十三箇條の內には農民の風俗かざりなきを以てよしとせり近來治平の風にならひ結構古代に超へたり是分を忘れ身を失ふ處なり尤いましめつつしむべし一村の風儀は庄屋の下知に本づく事顯然たり尤麁食麁服を用ひ質素の風俗をなさしむべしと有之富民の居宅甚美麗なり嚴に禁じとどむべし神社佛宇のごときも所にこゑて結構甚し一且猥りに造り始むといへども末々修覆の力及難し其信ずる所をして終にいとひさくるにいたる是愚民遠く謀らざるの故なり今より後かくの如きの費なからしむべしとは　龍溪院樣の　御いましめにて御座候すべて普請造作美麗を好み候は人情の常にて御座候制度無御座無術にておさへとどめ候半事は事出來申間敷候壇那と申も氏子と申も支配下と申も同じ百姓農務を置て務候事に御座候愚民は不覺其苦をうけ奸徒は私の爲めにこれを誘ひ候此段よくよく御心をつくされ度奉存候大庄屋小庄屋にいたり此御箇條とくと味ひ衣服調度居宅節儉に從ひ申度候寺社在役所財と夫力の出る處を考へ此已來制限御立被下候はば不勝手の所も修覆出來勝手宜敷所も過分の物入夫遣ひも出來申間敷候

一、年期奉公十年已上は　御法度に御座候然とも世困窮に及候得ばたとへば六七八歲と申類十年期にては漸十六七に相成候位召置

がたく御座候貧民子供大勢御座候は其位の時分尤も人にも預け度頃に御座候左様成は召置候ものも先七八九年も養ひ立其上の年數を目當に養ひ申候夫故内内無據　御定めの年限をもこし候是等は何年を生育と極め生育濟候上十年期と相極め證文仕候はば御法にも不相背貧民子供を預け候勝手に可宜候

年期者自分働き相成候へば一類とも隙を願ひ或は其者虚病をかまへすねまはり主人にあかれ是非隙を取候樣に仕近年年期をつとめ終り候者多く無御座候ヶ様なる我儘者は年限の内は召置候者の方へ給銀相立候樣に仕度候

一、毎毎御觸の御條目そのままにて行はれざる事多く御座候其一二を申候に在中奉公人高直に相成候に依て直段　上より御極め候事又呉服類相用候事是等御尤之義に御座候へども奉公人高直に相成候は當時米穀布毛綿茶鹽に至る迄高直に相成候前度五拾匁取候者は五拾目にて年貢米買納仕候今九拾目取候者は九拾目にて壹石買納候已前拾五匁にて古手買候者は當時貳拾五匁にて古手買申候奉公仕候者高直に御座候迚も勝手に相成候にても無御座候夫故奉公稼ぎ仕候者及難義奉公をやめ日傭取と相成奉公人彌すくなく相成候庄屋は法を行ふ者にて御座候村より出候奉公人を先我方に御定めにて無據召置候ても甚心よからず奉公人も出精不仕樣相成候左候得ば人人の存念次第急度御法の通に遣候も有之又何となく出入候節心づかひ仕候者も有之候小門は奉公人手に入不申候得ば御田地あれ候故無據表向きと内證出來申候無左候ては御田地をあらし候樣に相成候是勢を御考不被下候樣に奉存候是は勢と申物にて畢竟不及是非事暫く其まゝにて成行をみるより外無御座候近年凶饑打つ

づきちと奉公人もみへ候只今にては奉公人米一石と相納候樣の義は出來不申候又豐年二三年も相つゞき候はゞ又奉公人に世話仕候畢竟は民間人少く遊民多く相成候故に御座候

女子は二十男子は三十の頃を配偶の時節と申候世困窮に及候へば配偶仕候ものも無據とり分れ俗語にわんぎと申候女子は望でも有之男子は養子の口御座候ても未進有之者は村役人さしとめ候て奉公爲仕申候家内に世話入度候ても貧敷候へば入候事叶はず候是困窮民間の人の繁昌の道を斷候故に御座候當時天下の勢商買或は遊民渡世仕よく農業の渡世尤難義に御座候故皆商買遊民におもむき候何とぞ遊民商賣より農業の方渡世仕よく覺候はゞ人農業にかへり可申候農間心よく相成候へば嫁娶も時を得人繁息仕候百姓多く相成候へば職人も多く相なり奉公人も多く相なり候

奉公人少きもとしなみ宜敷計りにも無御座候根元は農間人減候故に御座候

只箇樣の義本を　御照し　御法令出候ても勢行はれずと　御覽被遊候はゞ成行に任て時宜御考本を　御立置し被下度候呉服類紬口にも不仕候義國初より時々被　仰聞候義御尤に奉存候一節急度被　仰付候へども是又それ切御貪着無御座候故一時の法令のみにて御座候當時の成行世間一統内分には紬口位さし笠一本位は民間にも有之且御家中にも召遣ひ候女等紬位着候故引込候て別段に仕不得無據用候も有之候俄に　御吟味御座候はゞ夥敷犯罪出來可申候當時の成行御考先務あり不急あり候處穩に被　仰出候はゞ可難有候不被行御法は下却て及勞働御法始に咎められ候者のみ不仕合と相成候

御法令とくと御勘辨其よつて來る所を御糺し法令一度立候上は嚴重たるべく候因て御法令御出し被遊候事いたつて大事の御事と奉存候

一、御定帳相考候處古代田畑損毛の時改人見分の上種子一倍迄は皆損に　御立種子米捨りに被　仰付候是元種子は御座候へども百姓年中辛勞仕手を空敷することを不便に被　思召候故かと奉存候新田地木免に相成候迄の年限の內左樣の惡年有之候へば年限御のべ被下候是又同前の　御憐愍と奉存候

一、下下衣服等の義も每每被　仰付候へども心得違候樣の義も有之候乍去當時の事宜を以て相考候に他の事今少し行屆き候上の御事かども奉存候其內穢多平人と混雜仕候て每度間違候義ども有之かに候是等はちと目じるし有之度義に奉存候

一、民間不自由なる節は田地の證文を質にて米錢借用仕候村により田地證文は故有之庄屋存知の上入れ不申內證相對の質には申事有之節庄屋取上げ不申候是等良法と被存候　以來御領內一統に左樣に被　仰付度候

一、田地賣買年年御座候物故年に一度庄屋本に百姓寄畝高の出入相改候然共不圖地主共失念にて兩方不覺數年或は數十年打過候て見出しやかましく申事まゝ御座候年かさね候ては一人にて償ひがたく相成大に難澁仕候畢竟兩方不念にて御座候へば今更不及是非事に御座候是また以　御明斷一統の御觸被　仰付度奉存候

　畝高入替のせつ村中惱に出入無之と印形爲仕度候その上の間ちがひは無念に候へば取遣無之物かとも奉存候

一、歌舞妓正月の頃三四人宛組合出申候夏秋の頃一人宛麥もらひに出候物もらひの義且御領內の者に御座候得ば左も可有之候組合

候て出候義已前は御座候得ども近年は御座なく候今の通にて入込不申樣に仕度候先年入込候節若き者ども錢遣強く御座候き操は左平太六左衞門夏末初秋の頃願成就などの次手六數名染にて少少逗留仕候村にて勝手よろしき者は一夜づつもとめ老人小兒にみせ申候一節八月期日切と御觸御座候へども追追崩れ申候

一、制度御出し不被遊候ては奢をおさへ費を省き候義は出來不申候制度立候ては嚴重に無之重て立不申路をつめ不申候得ば崩れ申候因て制度は急務にして急務にあらず候敎ざる民に信を施さず俄かに嚴重の法立候ては下方大に苦み可申候因て制度は繫無之さしつかへ無之罪人多く出來不申候　御工夫にも暫く御隙入可申候敎を御ほどこししばらく御待、上の御事は被　仰出候ては慮事無之段を下下信じ奉り候上の御事かに候因て急務にして急務にあらずしばらく信を御立敎を御施し　御制度の御工夫被遊度奉存候

國害

一、苗をそだて候に草しげり候へば苗かじけ候下下御仁政御座候ても國害除かずしては施下に及かね申候國害と可申は

一、役人の私曲奢侈權威にほこり候事

一、村中公事を好み喧嘩口論を好み候者

一、盜賊博奕

一、遊民多き事

すべて在鄉の風は萬端いなかめき文たらず髮形衣服にいたり城下の人には咲はれ候樣に有たく候夫故都鄙の文字は文質の義をそなへ候在中酒宴遊興三味淨瑠璃遊女野郎の類行はれ候へばいつしか農業に怠り候たとひ上より仁政行はれ候ても下遊民有て民をまどはし候へば費生じ候て民富み不申候佛徒一時壯觀の爲奉加このみ寺院堂塔立なら

べ候も民生の害に候浦邊の延岡領むかしの掉前にて土地も甚くつろぎ其上肥境の地にて尤もすみよき所にて御座候へども城下遠く教無之故操歌舞妓入込候へば一村に幾夜ともなく逗留地下踊など申事を企て或は曲馬をのり習ひ參宮仕候得ば過分の酒取上げ給候故格別の有付も出來不申候依て郡奉行とも申合せあしき役人をばさしかへ村々無賴の輩をばぬきさり制限相立候はばたとひ艱阻の國たりとも相應の安堵は出來可申候點檢目錄を以て一禮　御照し目付にて役人の働　御考賞すべき所を奉行共に御尋ね奉行共鄉足輕より無據惡黨相しらべ代官大庄屋共吟味申上候上賞を主とし罰をもすてず被　成下候はば賢愚利鈍打まじへたる人も進む所避る所を存じ村民の風をも正し候心生じ申べく候前にも申候通り村方小盜人上へ申達す程にも無御座捨置候得ば大に民害を爲す類博奕を好み若輩者おろか者どもを欺き打かけを仕後は其家に來りゆすり申候そのまけ候者は申出候はば公邊すむまじき事を恐れ家産抛ちわきまへ候故惡黨共彌横行仕候又盜賊博奕の宿を業とする者最にくむべき者に御座候ケ樣なるもの御いましめ被下候事源をたち候事にて御座候

ひそかに相考へ候に博奕の禁實は盤上にてもかけを恥候風俗に推移り候はでは風をうつすと申程の事は出來申間敷候先蒭をさり候故以前申上候通鄉足輕此任に相當り盜人博奕の宿はみなもと博奕を業とし盜を業とする者は張本人にて御座候これを手いたく吟味仕一應再應は道橋の修理ちとこまり候程申付あやまちを改め候樣にさとし猶相やまず候はば代官大庄屋に斷り可申候又博奕を業とする者に若輩者愚者謀に落し

入られ難義に及候はば是又足輕に可申出候郷足輕より若手永遣候はば他手永の郷足輕に樣子申遣し先元の役人に懸合取込候銀とり上げ闕所銀の列に入れ先元の道橋作らせ歟かれ候者は相應に道つくらせ其人を帳面につけとめ宿黨類を詮議仕つけとめさせ此方にもひかへ再犯三犯に至り候はば是又大庄屋にとどけ可申候富博奕は遊民生じ盜人の本となり在中困窮の基にて御座候兼て村村へ高札御出し博奕仕る者他領より領内へ入まじく候若お露顯は所相しれ候者は其地へ相とどけ相渡し領地しれざる者は穢多へ相渡し申由　御示し有之候者餘程しまりつき可申候

一、正月に穴市賓引かるたなど錢かけ事を仕候惡敷風俗にて御座候何ぞ是にかへ候遊びを行ひ申度事に御座候利路一度ひらけ候ては收りがたく候

一、辻市に源兵衞と申もの出候て錢かけ仕候是又大分損德御座候ものにて上氣者ども難義仕候是又御領内法度に被仰付度候市には無之候ては市立不申と申者御座候是市に有益の市無益の市有之事を辨へざるより申かと覺候

一、市に有益の市無益の市御座候市の本意にかなひ候は八月若宮の放生會の市同二十五日文殊の市などにて御座候其故は其日箕ふるひ鎌鍬ふろわらむしろ色色の物持出し百姓共罷出用事相調べ歸り申候無之候ては大に指閊候續て十月若宮牛馬の交易なくて相叶不申物に御座候其外遊女を集め芝居を設け博奕打を集め盜人どもをよせ若輩者おろか者の金銀をうしなひ家督をたたみ候類損有て益を見ず識者の嘆を發すべく候

たとひ商人に利を得候とても是又半は他國の商人にて御座候得る所纔に失ふ所多く御座候有はなきに劣り候近來願ひ出候へば處處芝居御免にて御座候是又運上と同樣にてうけ候ものと小商人懸り合候ものゝ少少得を仕候のみにて其一在所は皆其害を蒙り候唯わかき男女或は子ども悅候迄にて近邊は臨時の客を得色色の物入市中の日月家業に怠り若き者博奕を見ならひ盜人徘徊過分に錢つかひこし候者出來種種の惡さも生じ火無用心其外鎖細の失は申つくし難く候畢竟國家衰弱の一端にて御座候上下一體と見候得ば下の費即上の費なり上下相わかれ候へば上に御損なくして下賑敷と見候故なり先中津小笠原侯の末年所所芝居發向仕候ひしが無程亡國に及候すべて民間は隙を生じ候事金銀費候事寄合飮食仕事人情みなたのしむ事にて心よき樣に覺へ終の害をなし候因てヶ樣の處は政事に預かる者心をつけ事增ざる樣に仕度事に御座候君の民を治めさせられ候は親の子を生育候と同樣にて子どもにむまきものをたべうつくしき着物をき水にひたり泥に入損の立事をば不存候下民當然の心よきにたのしみ候ては終の患をはからず只この患は民に父母たる人のみ御存知にて御座候

一、富を賣候物は存不申候小倉御領は露顯仕候へば髮をそり申候ばくちとちがひあたり候へばよくしれ候ものに御座候是等御取あげ困窮者に被下度候

一、其外御領内に入込邪魔なる者熊膽賣猿引熊膽賣は先年御停止の後不來候猿引も村かたにて制し候故すくなくは候へども猶入込

候日野富山等まことの賣藥商人にて御座候其外賣藥と號し或は療治を仕長崎或は大坂などと號し大分の金銀を奪ひさり候又小間物等賣候商人年中入込候てかし付置麥大豆米錢等を取立候節は甚手づよく仕候津町も御座候へば民間の用は辨じ候入込かし付候へば覺へず買懸り又女子ども下人の類主人存せざる樣に買物仕候是又所の衰微と相成候海邊にて盜人ども船をつけ盜仕候海邊念入申度候三四年已前迄は夜押入參候て脇指をぬき人をおさへ取候義も御座候き箇樣の義は人命に預り候義嚴敷御吟味有度候

一、御定帳を以て相考へ候へば國初の運上と申は今の御免札の事とみへ候今の運上は小買かつがつに利を取候を大買一人にて其利をしめ度存候へども人服し不申候故己が利分の內少分さし上げ諸人の利を一人にて收め申主意にて御座候へば小買は渡世をうしなひ大買は一人ならではなり不申と存候へば其品却て惡敷相成又ひそかにあきなひ候者有之候へば訴へ出事繁多に相成候尤他國より參り込渡世仕候者は格別の義にて御座候

一、酒屋以前は今市村久右衞門田深村吉左衞門富來浦五郞右衞門安岐浦左次右衞門四人にて御座候然處近來御分地相くわへ十五六軒に及候畢竟其處の害と覺候もはや御領內是にて事足り可申候相まし不申方可然かに候

一、ちと年柄宜敷御座候へば參宮吉野參四國西國行夥しく有之候是國中の正銀錢過分に出候尤寺方出世社家補任商人賣用醫者稽古病人療用等無據義の外大概制限有之度候薩摩は近年迄は國禁にて一向叶ひ不申と承候き

一、御上下の節賣船御用の時浦浦の船一圓御

指とめにて其上御用船相極まりそろそろと御免御座候船持は船のはこびを願ひ候事に御座候願くば前以御吟味被下猶　御用心船も入候はば二艘も三艘も前廣にとく其旨被仰付　御供船のみ被　仰付其餘は勝手次第に御免被下候はば此頃もはや費用多き時節船持大分得便利可申候且ぬけ船も有之かと上よりも　御吟味の御煩も御座有まじく候大坂にても　御用心に貢船御とめ次第に御かへし被下候事御尤に奉存候是も便利の道は御座有まじきや御供船用心にも被　召置候船を商荷をつませ枠築にて御待申候を大坂にて　御待申上候ては如何可御座有やと奉存候

一、御所務時分農貢鹽貢の外商人御停止の義　御尤の御事に御座候　御城下口屋かたく米出入被禁候　御城下には多くは他領の米入込場所にて御座候　御領内は八坂と安岐少少の義に御座候左候へば口屋御貪着なく候はば他所の米過分に入込町人共飯料下直に買取酒屋も利分多く猶過分にも御座候はば百姓ども御年貢の買入も可仕繁昌の基と奉察候君民二體と見候へば他所米入不申がよき様にも可申候

御年貢上納目録差出候へば現米の員數相違無御座候左候へば目錄指出し候手永は口屋早く御免被下候事國益と奉存候

一、御領内在胡殘穀類端端他領よりも入込買申候是は此段可然候他所の口とめ候へば下直に相成小民難義と奉存候先年七島莚　御領内下直の節他所へ持出し候事きびしく御禁制にて御座候き是等も未進出來候一事にて御座候

一、すいほうと申者はもと博奕仕候ものにて盗人に懇意仕盗人難義の節はかねをかしだ

だすみなき時はとゞめはだかに成候へばきものを脱ぎ遣し不便を加へ候盗人は良民の間にたゝずみがたく候得ば是又彼を手より不申候てはたちがたく候夫故自然とすひほうの手下の樣に相成候尤無賴の徒に御座候良民賊難にあひ候へば是をたのみ取出し候すいほう共よきほど金とり候て出させ申候政事明なる日は入用無之者に御座候盗人詮義は正敷成被下出不申候へば不及是非と仕度候在中盗人の義鄕足輕に被　仰付盗人にあひ候者共品衣類に候はば染模樣紋ちらし等の樣子委敷可申出候左候はば御領内鄕足輕以回狀しめし國中の村役人どもに申觸質屋表吟味仕させて穢多共も、もよりもより吟味可仕候こゝにおゐて博奕盗人並に宿等白狀させ白狀の度ごとに其輩に吟味を申付出不申候得ば相應の過料をかけ損仕ものに返し候樣に仕候て二三年の内　御領内惡黨共の名

ことごとく鄕足輕の帳面にのり可申候其内改候者は證人相立誓紙にても仕候上　御免被下候左候ばとり不申盗人共も吟味につめられ迷惑仕見こり仕猶精一盃吟味を可仕候猶願くば隣境他領ともに被　仰合相　に役人共申合せ吟味成候樣に御座候はば相互に勝手可宜義に御座候すいほうに賴み候事言甲斐なき義に御座候只今にては盗人にあひ候者すいほう穢多非人類をたのみ詮議仕候出不申候ても相應に挨拶入申候て難に難をかさね候　公儀に盗賊かた御立被成候例にて鄕足輕に是等の類被仰付候はば其役を以て吟味仕惡黨並に宿等白狀に任せ穢多共下知をうけ御領内一時に吟味を仕しれざる日は帳面の面面に過料申付其上奉行所には申出候迄は構ひ不申候樣に仕候は事穩かに一國中は小民物入なく事相わかれ申候大坂町の義承り候に盗人にあひ候者穩便を存じ沙

汰不仕候て後日顯はれ候せつ六ヶ敷御座候因て難に逢候者町奉行盜賊がたの口に斷り出候左候へば段段其類御吟味の次手捕へ候て口問拷問品物出候上其人を召出候品品御見せ目覺次第に申受候私領は盜賊かた無御座候故きまり付不申只唯內證にて世話仕候故出不申候ても挨拶遣しとらせ出申候へば其受銀を出し申候　公義の通に御座候得ば其役人立候故盜まれ候上にも猶物入候樣の難義無御座候此例にて　御吟味被　仰付出不申とは誠に出不申と心得させ猶かさねて盜人捕候節は不捨置帳面にて段段しらべ候はば時節を過候て出候事も可有御座候何とぞ難にあひ候者かさねて損不仕候樣に仕度候

一、寺院農業を仕候者惡敷義にては無御座候折角左樣にも仕度候しかしながら出家本分の務にては無御座候左候得ば寺院御寄附地の外役人同前に役目等除候先例も相みへ不申大高もち候寺は別て村かた難義に相みへ申候

左樣成義も無覺束候嚴に御禁被下度候猶又信心の輩より寄附仕候分は百姓作り候と同樣たるべく候へば時に從ひ賣買も可有御座候　御寄附と格別たるべき事と奉存候

一、往還に限らず作道往來の小道牛馬往來に苦しみ候處は吟味仕漸漸難義無之樣に被仰付度奉存候尤奸民田地を作り候に路はばをほそめ川はたをよせ或は上に有之田畑の下をいじり崩し往來の妨をなし候事まま御座候村役人の大樣なる所は大に後日の邪魔をなししばらく歲月を經候へば本田の上と號し彌通行不自由に相成候是等は村役人に急度被　仰付猶鄉足輕共も氣をつけ以來無之樣に仕度候已前たりとも古きかた相殘り候處は道をむかしの通りに相改候樣に仕度

候作道等の義は其もよりもよりより訴へ出可然奉存候ヶ樣なる處不吟味におしうつり候へば後日道をつくり候節御田地を引候樣にも相なり可申候其外道の義は村役人相心得世話仕樣に仕度候

一、大概いづれの村にも一二ヶ所二三ヶ所或惡田或は畝つまり人に讓り申さんにも受取もの無御座役人仕かた無御座或は村まどひに相成候も有之候是等格別の大事は不存代官大庄屋等に被　仰付庄屋共に少少の鍬先の方にて或は土をさけ或は畝をへし候樣に仕かたも可有之義かと奉存候

一、ぬすみ物質屋へとり候はば不念の咎相しれ候方に唯にかへし可申かに候時質とり申間敷段は質屋かねて心得可申事に御座候質屋ならずしてぬすみ物かこひおき或は質にとり候類は盜人宿同然たるべきかに候

富國の術

一、上を損し候得ば下益し根盛なれば葉茂るの道理にて聚斂は下民凋弊のもとひたる事御存知被遊候御事にて御座候當御領內五萬石にちかく猶市鄽山林船七島いろいろの御入も多く御座候何卒是にて國用被辨候へかしと奉存候　御封境の御入にて　御間合不申候得ば國用辨じ候日は有之間敷候左候へば　御入を　御考　御用　御辨じ可被遊也左候はば其外の働は農商の存分に　御任せ敎諭の道御施被遊候はば自然と國富み可申候每每已前より楮桐杉等　御世話被下候へどもとかくそだち不申候其故はうへ付出來候はば上へ是程下へ是程と被　仰付候故小民後日田畑の邪魔と相成候て租稅相增可申處恐れ候故得心不仕一つとして用立不申候箇樣の義　御定額の外に候へば少しにても此利潤出來候はば小民の爲め免下りたる心にも相成上納なしよき筋にも相成候へかし

との思召にて御座候はばいつとなく廣まり可申候島原舊領の時節より杉桐は御用にて帳付と相成候ゆへ彼領地杉桐つき申候肥後御領桑御世話有之追追少少宛綿出來候へば受取所をまふけ多少によらず御受取御年貢の入に被成候故無程絹類も出來候樣に相成候と承り候　御領内田畑はすみずみまで行わたり候へども人民凋弊故荒地のみ年年出來申候此荒地に下民甚くるしみ申候荒地多くは畑にて御座候荒畑の義窮民のみ持候にも無御座勝手宜敷民も各有之候勝手宜敷民何故あらし候かと申候にとかく根付修理の入目ほど作得御座なく候故つくらざる方算用宜敷あらし申候されども勝手宜敷者どもは餘の作德を以て是を辨じ候窮民はわきまへ方無御座年年追埋み流落仕候民力次第につきあしき地かかり物ふとく猿鹿多く候はば猶荒地出來可申也無覺束奉存候右の通りに御座候へば田地もはや增さずと　御覽被下度候左候てもはや地力盡候と申にてもなく候へば此地力をつくし候道を民に　御道引被下候はば自然と免下り候心持と相成可申候　御領内猶山野空地ひろく御座候此力をつくし度候

つくし方淵大池には鯉鮒川にはますゐの類江口には白魚もそだつと承候又蜆蛤かきの類池澤にははすひし菰蓴菜溝にはみぞ貝水ひたりの處よし麻廣河骨木賊水田の處藺ふとゐ泥有之處くわゐ水芋海中にも海藻なく石ども有之處は石なから取て海藻をはなち候例も承候野廣き處はかりやす等も種子か苗もとめうゑ申度候竹木は邪魔になり少分宛の空地も御座候處はときはをうゑ山の潤有之處には杉檜岸谷間には楮畑のくろにははじ屋敷垣まはりには桐樒柑九年母

柚橙梅柿澁柿なしつげとちげず口なしうるしゆろなつめ其外にはけやきまき肉桂黄柏先年　御領内はりの木被仰付植候と承候是は年年又ばへよく生じ溝くろの空地へうゑ候得ばよき物と承り候今はあまりみゑず候御城近邊薪拂底の處には可宜か蠶養候處桑は勿論銘銘心得罷在候さて當時材木御仕立の思召に御座候はば　御帳付と申事被遊間敷候　御帳付と相成候へば田畑ちかく候ても枝をうち候事も難仕後日の夫手間も恐れ木有付不申候　御領内澤山に出來候竹木見分の者被　指出宜敷木御きり又格別の材御座候は　御禁木に被仰付度候是材木繁植の道にて御座候

一、所所寺社の境内楠檜杉松の類場所を廣め神木同前に御仕立置被遊度候尤海邊近邊夫手間費不申　御用の節甚重寶と奉存候

一、當時　御領内良材つき申候ちと宜敷家仕候へば甚不自由に御座候毎毎他領より入込楠欅杉桐買取申候今少し材木生じ候までは　御とめ可然かとも奉存候

左候は何となく民の稼とも相成可申候是又役人被　指出候ては庶民の勞動に御座候代官大庄屋どもにとくと合點爲致左樣なる義心得候ものと及相談　上、よりは　御催促ばかりにて下方承知ちと夫手間も入候處は庄屋世話仕そろそろと年數をかさね成就可仕候且三月目付被　指出候節植立何ほど出來候處見屆け一向貪着無之村手永相改め勸懲之御沙汰有之度候國初には御領内大かた平原にて今の松も　御植立にて出來申候古例にて正月十一日松うゑと申植初

仕候是も今は佳例のみに相成候松は正月植時に御座候へども他木は陽氣をまち候是をのべ候て二三月時分雨降候已後に杉檜等仕立候様に仕夫もかけ實事となし申度候猶役人の作略にて良材を買とゝのへそだて度候さて考課の節ヶ様なる義その外存付次第國益仕候をば御賞玩被下候はば十五年廿年の内小民其利を得可申候是一朝一夕に成就仕義にては無御座候稼の事莚不仕様の處には仕立候楮を集め役人ども世話仕紙すきを呼び其紙漉に數年致させ申度候左候はば　御領内少少宛植付候楮もうれ口出來可申候民間冬春は農隙にて御座候へば小民とも見ならひ利不利を考へ宜敷覺候はば仕習ひ可申候宜からず存候はば他所のもの可仕候是等にて勝手相しれ候へば楮は紙在所より買取候是

非紙をすき覺へ様にも御座候ては出來不申候又他の紙漉勝手に相成候へば自然と逗留も仕候左候へば又一民をまし候にて御座候楮の仕立かた始錢になり不申候故作の邪魔と存不仕候楮の皮出來候はゞ大庄屋本に少分にても納め一口に相なり候はば紙うりにうり立少少にても御年貢のたすけにも相成候様に仕候はば自然とうゑ立可申候紙漉有之候はば　御領内の反故　御領内にて紙になり候ても國益にて御座候日出御領は紙漉稼仕候所にても無御座候へどもいづみと申在所には　御用の奉書出來候て被辨國用候何によらず最初仕立候品は利微に御座候其纔の處にても上納の助ともなり候事存候へば年年相まし候因て最初は大庄屋取集め世話可仕事に御座候

一、竹田領山中にてほくそ土陰地猪多き所専川芎を作り申候豐後川芎と申大坂にても大分うり申候此邊少少仕候ても作り方不案内故か出來かね候一兩年彼地へ一人遣しとくと作りかた見とらせ　御領内山陰ほくそ地猪猿多き所にうゑさせ申度候庭など菜園の端芎藥心がけ植候得ば是又當時直段宜敷物に御座候是等又大庄屋本にうけこみ取集め五分一匁宛にても上納の爲に成候道存じ候はば追追出來可申候少民手前にては少分の義は用立不申候げず口なし類も左樣に仕候はば小民其利を可存候肥後御領藥種類御仕立國中の用を辨じ候程の藥品は餘多出來呉茱萸など國中用事の外五千斤ほども上り候と承り候朝鮮種の人參も阿蘇山に出來候て國中にては日光參よりは性合宜敷とて賞玩仕候大國の樣の義は出來申間敷候へども相應の義は其道可有之や是等は其人を見立候事に御座候

一、豐後梅當國の土產殊更献上の品にて御座候然處時節推移り持傳への木も過半かれ申候年年梅見被　指出　御吟味一本に梅幾つと梅見より亭主へ申付又相改其後參り取て指上候故賄夫梅主世話かたがた勞煩つよく候故うゑ繼不仕繼に土產土地に產せざる樣に相成甚事宜に適ひ不申且他領へ人御差出し被成候處他領の者は被　仰付候故大切の御用と存番をつけ置候など歎き候も有之參り候ものも挨拶にこまり候趣に御座候

是は上より被仰付當年より或は二十年相立候上村の廣狹次第一村何十宛觸出し候節役人共吟味仕以人夫可指出之候是によつて庄屋共世話仕村の事缺ざる樣に梅仕立置くべく候油斷仕仕立不申候はゞ其村より買求め可指出候と　御觸付猶又毎年宗門改候節是より十九年

十八年と御沙汰有之候はゞ無程梅澤山
に出可申候
よく被　仰付　御領内澤山出來候はゞ内分
に仕銘銘他所取合の土産の品も出來過分に
候はゞ民家鹽共もとめ候便とも相成猶過分
にも相成候はゞ上せ物共にも可相成事歴然
て候
一、古代は流民共相成候には悲田院施藥院を
設け御養被下候とも承候小民等難義も至極
に及候へば大庄屋小庄屋も手届不申日は無
據見捨候事甚心外なる義に御座候何とぞ
御憐愍を以て餓死流亡をまぬかれ候節は御
座あるまじきや或衰老或は病身或は從類多
く作り仕候へば未進と相成り無是非田地取
あげ其上屋下も多くは御年貢かかり候へば
家をも立のかせ不申候ては相叶不申候壯健
なる者にてもむごき事に御座候まして衰老
病身足手まどひ等御座候者不便千萬の義に
御座候近來あれ畑等多く御座候も猪ばかり
にても御座なく民力日日におとろへ其上流
民と相成人少く相成候ゆへに御座候荒畑の
義實に難澁物にて御座候民の有付の義被
思召下候はゞ御捨被下候にしかず候前條に
も申上候通有力無力ともになきものを納候
其内無力の者の納候事役人ども仕かた無御
座候有力の者も不勝手に及候へば其節は是
又同樣の義に御座候利害　御明斷被下度候
前に申候通島原は地下下の下に三下と申御
座候三下の下に一毛御座候一毛とは一毛つ
くりにて年年の有無は下方申出るにまかせ
候當御領内見取と申かの方一毛の類にて御
座候兼て一段三升と御定めにて御座候見取
の例にて御取立は有無に從ひ未進出來ざる
樣に悲田院御立被下候と思召流亡に及不申
候樣たゝすみ場と被遊被下度奉存候むかし
より御免相定まり候へば其土にあい不申位

の處は開き申義仕かたく御封じ切にて打過候封じ切に仕候者おしき義に御座候一向見取御所務は有無に御まかせ山野を開き居候はば屋敷下も其儘に被　召置無高同前の百姓勝手次第に　御免被下候はば今流亡に及候類渡世を仕る樣にも相なり可申候半か畢竟土地にあはざる地つくらせ末進のみ仕百姓は庄屋共手段には土地屋敷取上より外仕かた無御座苦苦敷奉存候

見取百姓仕立の道　御領內空地水御座候ところ役人どもへ被　仕付見取屋敷等は村役人にて爲仕候さて當分有付の糧米農具の類被下置村役人にも見はからひ少少宛の力を合せ候樣に御さとさせ代官大庄屋作略をくはへ荒畑或は野地をひらきそろそろ竹木をも仕立先作德の上　御憐愍を御くはへ候はば拾年拾五年の內やうやう住なれ可申候又水なども有之所は見取田位はひらかれ候處も可有御座候もと御年貢有無に從ひ候處にて御座候へば今より御年貢御とり不被遊候ても御座なく人まし候分は　御德にて御座候僧徒の類一院建立存立候へば追追田畠も出來竹本も生じ無擅地も渡世相なり候はば衆生力を合せ候と　上より其他を御捨被下候とにて御座候百姓をも左樣になし被下候はばそろそろ有付可申候有付申候上は豐年には少少の見取も可有御座候有付候上見取百姓は人數にて處相應にすすきかやしかわらびこもわらび繩、わら繩笘類の物租税に仕候はば百姓あたり物かるみ可申候得ば是又百姓免下り候心に可相成候流民空地御かし被下是にて生涯を送り候はば路頭に立不申難有次第に御座候さて山野ひろく御座候へども土

地皆所監の主御座候へば上より不被
仰付候はでは下ばかりにては居合不申
候
一、他所より余り候ても歸余のるひにても有付候て朝暮の烟擧候様は大概にては出來不申いづれ拾五年以上も懸り不申候ては出來申間敷候其故は左様の者は惰弱者か病身或は厄介多きものかに候偖其村に入込候てわり渡し申節宜敷田地は相渡不申候元より其處の者と名染もうすく御座候御定めは移り百姓居屋庭屋馬屋こゑ屋課役を以て百姓望の通作り遣し不依男女十歳以上の者は一ヶ月一人に付大麥一斗小麥五升宛扶持利なしに御かし付ありつき候迄は何十年にても　御赦免被下候右百姓欠落にても仕候へばかし付はすたりに被　仰付候是等開發五年は作り取拾年は壹つ成拾一年より目はからひと御定め置被下又一年作りのけづり畑つくり取に被
仰付候古例　御考被下度候
一、御定帳　御領內住宅侍窄人自分開發の地田畑ともに作り取尤も高の外也檢地帳を除き諸役懸り物ともに可被差除事と御座候御家人先祖も故あり數代勤功有之類無據御暇被下置候類難有御法と奉存候世移り今はその設もいかほどに御座候や不詳候兩子內には山路柳之上など以　御慈悲今に　御恩澤に浴し申候
よきも惡敷も皆　御膝下の赤子に御座候へばたとひ御邪魔に相成候とも以御慈悲土地をはなれず被　成下候はば廣大の御德と可奉仰候當時　御封じ被召置候土地水邊は土堤を拵へ山邊は水を道引新田出來候處も可有之候是等は富家にて無御座候ては難叶候

へばかねて　御才覺かたがた出精仕候富家どもへかねての見取百姓御仕立の邪魔にならざる處は新地被　仰付御所務見取などに被準流民被召置富家とも相應にかゐき上米共とらせ上には右あたりの物の類を貢し候はば富家永永の富を考へ出精可仕候左候はば　上にもかねて出精の者共へ御恩賞も出來富家是によつて行行富をもたもち猶豪家ども相成候はば是又上の御寶にて御座候ケ樣に利道ひらけ候はば國中に人多く財生じ可申候人多く候ても御高まさず候へば無益の樣に存じ候人も御座候へども軍國の用は全く大勢に御座あるべく候ひとり軍國の用のみにも無御座今日地下奉公人職人等すくなく荒地出來候類皆人すくなき故に御座候

荒畑引捨候へば又あらし候半又ふるき荒地をさし出し候半かなど御不審も御座候はばあれ地願ひ出し候節地あらし候過料としてあれ畑には柳を盡そだて候樣に被　仰付度候柳はさしてよくつくものにてきれば跡に早速枝生じ薪に重寶なる物に御座候左候はば村民ゆくゆく薪を取候益とも相成可申柳枝はかり根は堀候事は願出開發の外停止に被　仰付山之口村役人時の吟味仕鄉足輕も見出し候處は村役人に斷り可申候處により一窪もあれ候處手まはり不申處は大小によらず畑一枚に一二本うゑ付柳無御座地は御年貢御かけ被下候樣に御座候はば役人冬春は野火のふせぎも仕枯れ候をば無油斷植繼せ折おこし候處は願出可申候起き候は當分御年貢御免被下追追三下見取の間御年貢の御取はからひにも及可申かに候

一人増候へば小國大國の用をなし候人少く候得ば大國小國に同じく候職人精

巧なる者出來候へば他國の財貨國に歸し候商人手を伸し候へば他領に出見世を出し他領を我領となし同じく他國の財貨入こみ候百姓に空閑の地を下し置れ候へば流民國にとどまり候小原内糸原村海邊用立不申田地御座候ひしに一人此處にうつり捨候同前の地をつくり出精仕候處其地物出來候樣に相成有付申候田地は人ちかく候へば作り出來人居不申候へば出來不申候　御領内大庄屋ども小庄屋と心を合せ見立候はば山野海邊隨分用立候處も可多候御見立させ被遊候はば　御領地廣まり人相まし候　御手段も可有之かと奉存候御定帳拜見仕候へば小原次郎丸黑津興導寺北江堅來富來姬島みな鹽濱御座候と相みへ候唯今は小原姬島のみに御座候尤も御田地と相なり候處も御座候よしに御座候又海邊の形勢違ひ候處も可有之候いづれ鹽利場所無之や又海邊新田場山中新池場等或は人をうつし候場有之候得ば居候處本地となり候樣の處金礦の有無かたがたよく御つもら　せ御胸中に御たくはへ置き被遊度奉存候

一、農務出精不仕候ては上下及困窮候出精の本ちと農業の利に喰付不申候ては力合不申候此處は全く　上の御引立に相より候竹田御領及大困難候處只今の當職よく道引大分出精仕樣子に承り候村かた拍子木をうち仕事をはげむと承り候其所農業出精巧者の者を一村そのさし圖をうけ候ほどに仕度候何とぞ春の頃土取る日を定め　御領内一同に或は土芝海邊は砂池かわき候はゝ池のこみにてもおもひおもひに取あげ申度候是を極まり候節のごとく仕度候いづれ二三日もかゝり不申候ては用立申程には有之間敷候田

地には土芝ほど宜敷物無御座候さて當時うゑ候物の類にては尤も得分多きものは唐芋木綿唐はじと承候高田方角より豐前にかけ唐はじ持候者は二十目三十目五百匁七百匁富家は一貫目已上にいたり代物取こみ申候乍去すこし植付候ては年數こみ候數年の後の成行ははからひがたく御座候是も　御領內澤山に御座候へば所にて蠟をとり蠟燭鬢付も外に金出不申候木綿豐前まではよく作り申候民間日用の物に御座候殊に近年高直に御座候おし渡し出精仕他所の綿買不申程に相成候はば御領內の金過分に國に殘り申勘定と相成申候是等も仕合の始はうゐうゐ敷物に御座候一斤二斤宛にても唐はじ大庄屋本に取あつめ御年貢銀納のたすけに相成候樣に被　成下候はば無程過分に相成候はば大庄屋本世話をまち中間敷候綿の義先年はさねわた行れ候處近年簡便を好み候風俗故にやいつとなく篠綿と相なり候篠綿はあしきわたにて仕候故もめん弱くつや惡敷御座候されどもしのわた行はれ候ては在中にはわたうち無御旌罷成候故少少作り候ても所を隔候所まで持運び候故退屈仕候何とぞ在中木綿出精作り立國中の用大概地綿にて相すみ申候はば過分の義に御座候一面に出來不申候とも土地にあひ候處出精仕候て金銀外に出不申候はば一廉の國益にて御座候左樣なる働御座候はば一廉御賞玩被下候者追追きそひ興る者出來可申候唐芋民糧には是より德なるものなく候海邊暖なる處折角道引申度候山中寒き所猪多き處作りがたく御座候是等も上の御世話にて一所に作り大垣ゆひまはしかはるがはる番仕候はば出來可仕候

一、御領內職人少く無據他所へ金銀出申候職人少き事治亂ともに御不益の御事に奉存候

治國の道農工商ひとつも缺ぐべからず候職人大概事足り候程有之候上は精巧を専要と可仕事に御座候精巧の細工國に出來候へば他國の財貨招かずして國に入込候我我務分の場所にて無御座候へば恐奉存候へども御參府の節年年御召連被遊候御家人足輕類相應の職事稽古被　仰付候はば武器等の御修覆も　御城下にて出來可申候軍國の用は他國は賴みがたく御座候其外在中町かた鍛冶大工桶屋さくはん疊屋ひものしいものしいろいろの末技迄皆一用をそなへ候へばいづれも有度物に御座候又單羽織の紐團扇類は女子供も出來候事に御座候前度院内に筆出來申候青竹の軸にて化粧もなく鹿毛にてゆひ立候見分惡敷候へどもよく書けつよく候故はやり申候　御領内遣ひ候鎌は大分郡高田鎌を専用ひ申候然處國崎郡高田近所のうべゝと申所に鎌出來申候强て張出し不申候故大分は不仕候へども出來次第人懇望仕候價もちと高直に御座候線香箱纔の小細工にて御座候得共至て精巧に御座候故臼杵の香合長崎の珠數濱脇の線香箱九州の三つ道具とて出家賞玩仕候此國土產物無御座候精巧に御座候へば小倉の小糸木綿大道火打日出かんざしなど申候へば精巧故土產と成申候日出は長澤釆女菅沼權右衞門など申家老の節心を合せ輕き奉公人どもへ武器の細工稽古申付國にて事足り候樣に相成候近來はちと怠り候樣に承候

　穢多共皮細工宜敷仕習ひ用立候皮物
　御國にて辨じ候樣に仕度候

一、近來の難義金銀拂底より人心も賤敷相成聚斂も起り責家の心の樣に推移り申候ひそかに奉　仰候處　御德業昭明　御讀書の功相つみ愚昧我等式とかく可申上樣奉恐入候しかし愚者言つて智者撰むと申候へば蒙昧

をかへりみず職分の義故淵底不淺申上候
御裁斷奉仰希候以上
天明六年丙午二月

價原引

今之俗、人家買貧民之失産者爲奴婢焉。有周期者、有半期者、有更日者、有累歲者、出人之候各地有其風、總謂之奉公。蓋近年儉歲則不雇、而多不得以就食者。豐年則直遽騰貴、而多不得以買奴者。且若今年、若以麥價量之、則健奴則上十石、雖至疲弱者而不減四三石。然而考其人、則傭之勤、終不能償其直也。上田君怪焉、乃者辱下問。嗚呼晉也細人、量腹而食、稱身而衣、豈知其他焉哉。雖然區區之心、竊以爲關係不小、因不自量、探其原而及其派矣、以爲一冊子、命以價原、以答來意。雖似有漆室倚柱之嘆、而實同杞國憂天之愚。惟茲燕石、胡能補天。一看置之於廡下、不然將有比子於宋人者。

安永癸巳四月壬辰　　三浦晉

價原

豐　二子山人　三浦晉　著

禹謨ニ德惟善政、政在養民、水火木金土穀惟修、正德利用厚生惟和、トイヘリ水火木金土穀コレヲ六府ト云正德利用厚生コレヲ三事ト云後世之治、千術萬法有トイヘドモ此六府三事ニ出ズ禹謨ニ水火木金土穀トイヘルヲ其後ハ穀ヲ土ニ合シテ五行トモ五材トモイヘリ天下ノ至寶トイフ者ハ此六府ナリ禹謨ノ後洪範ニ是ヲ五行ト謂テ箕子ノ所述始メテ禹謨ニ違ヒテ後世五行家ノ禍胎トハナレリ已ニ尚書ニ出タレバ後世ノ人コレヲ左右動スコトナラデ其後ノ歷歷方モ色色ノ曲說ヲ設ケテ調停セリサレド天地ノ條理ヲ取テ禹謨ト相照シテ是ヲ觀レバ箕子ノ誤傳掩フベカラズ古ノ聖人ト云者ハ天下ヲ有スル人ナリコレヲ王者ト云王者ノ材トスル所ハ水火木金

土穀ナリ城郭橋梁屋壁舟車耒耜釜甑刀劍陶瓦百ノ器械烹熟煨炙衣服飲食何レカ五行ノ外ニ出ル是天下ノ至寶ニシテ得ヤスク塞ヤスク足リ易キ者ニシテ必得難キ者ニアラズ得難キ寶ハ寶ニアラズタトヒ連城ノ璧十二乘ヲ照ストモ燈火ノ千家萬家ニ滿テ照スノ功ニ比スレバ對用スベキニアラズ此故ニ得難キノ寶ハ得ズシテモスム者ナリ得ヤスキノ寶ハ民生須臾モ離ルベカラザル者也ムカシ人質撲ニシテ奢靡文飾ニ走ラザリシ世ハ足ニテ用足リタリ世移リ俗變ジテ次第ニ移リ飾ル世ニナリテ得易ク塞易キ者ノ財タルヲ忘レ謾ニ得難ク給難キ者ヲ求メテ至寶ト思ヘリ其至寶ハ無用ノ者ニシテ王者ノ寶ハ有用ノ者也我國ハ漢土ニ比スレバヲソク闢ケタル故風俗モ最淳撲ニシテ立ケリサレバ銀ハ人皇四十代　天武天皇白鳳三年對馬ヨリ出シ銅ハ四十三代　元明天皇和銅元年武藏ノ國ヨリ出シ金ハ四十五代　聖武天皇天平二十一年陸奥ノ國ヨリ貢ズトイヘドモ然マデ多キニモアラズ錢ノ通用モ白鳳以來有リシカドモ今ノ樣ナル事ニハアラズ博多ニモロコシ船來リシ頃ハ宋錢ヲ以テ物ヲ辨ジ近ク室町殿ノ頃アデモ明朝永樂錢ニテ事スミヌ東山殿ハ國用乏シトテ三度マデ明ヘ錢乞レシ中ニモ大明ノ頃乞レシニハ十萬貫ヲ賜ラバ國用足ント歎キ申サレキ十萬貫幾バクゾヤ今ノ富人一　ノ產トスルニダモ足ラズ然レバ今錢幣ノ多キコト辨ゼズシテ知ベシカク迄財貨ニ富ル世ヲ金銀少キ樣ニ心得タルハ僻事ナリ一通リニ考レバ金銀少ケレバ世ノ中貧シク金銀多ケレバ世ノ中ユタカナル者カト思ヘドモ然ニアラズココニテ得ト天下ノ至寶ハ六府ニ過ザル事ヲ察スベシ東坡イヘル如ク使天而雨珠、寒者不得以爲襦。使天雨玉、飢者不得以爲粟。ニテ金銀瑠璃硨磲碼

磁琥珀ナド云テ世ニハ賞玩スレドモ民用ニ何ノ益モナケレバ王者コレヲ寶トセズ是故ニ古ノ王者ハ五官トテ水火木金土ニ各其長ヲ置テ治メラレシナリ金トハ五金ノ總名也分ツテイヘバ金銀銅鉛鐵合セテイヘバ皆金也五金ノ内ニテハ鐵ヲ至寶トス銅コレニツグ鉛コレニツグ如何トナレバ鐵ハ其價廉ニシテ其用廣シ民生一日モ無ンバ有ルベカラズ銅ハ器物ノ用アリ鉛ハ軍中ノ用アリ金銀ハ有バ有ル處ノ用アレドモ無テモ先スム者也サル程ニ餘ノ金ハ此方ニハヲソク見エ得レドモ鐵ハ神代ノ昔ヨリ有リシト見エタリ金銀ハ諸貨ニ易ヘテ用ユルヲ以テ其用トス金銀並ニ錢コレヲ幣ト云珍ニシテ小也諸貨ノ重大ニシテ移シ難キニハコビヲツクル者ナレバ其用舟車ニ近キ者ナリ金銀ハ貴重ナリ能大物ヲ運ブ錢ハ賤シフシテ衆シ能小物ヲ運ブ貴賤輕重アルヲ以テ銀以テ金ヲ分ツベク錢以テ銀ヲ分ツベシ此故ニ是ヲ金銀トイヘバ錢モ亦其内ニアリ先天下ノ勢ヲ慮ル人ハ能財ノ有用無用ヲ辨知スベシ譬ヘバ海内ニ如此澤山ニ充ル所ノ金銀今悉ク盡キ果テタリトモ他ノ五材アラマシカバ民生立ヌト云事ノ有ルベキヤ葢金銀ハ處ジ處出ル所有リトイヘドモ佐渡ノ山天下ニ甲タリ上杉鎌信佐渡ヲ攻取金ヲ取レシカバ國用饒ニ有シ由豐臣太閤知給ヒテ公料トナシ金ヲ採レシカドモ出ズ慶長五年關ガ原事畢リテ後銀ヲ出スコト夥シ銀ヤンデ金ヲ出ス今ニ至テ絶ズ有然錢ハ白鳳以來元明ノ和銅開珍 孝謙ノ萬年通寶ヨリ絶ズ鑄給ヒシカドモ甚少キ事ニヤト思ハル異國世世ノ錢ハ京錢ト云キ是ハ小田原氏康東國ヲ領セラレシニ時ノ勢永樂錢貴クシテ他錢四五文ヲ以テ其一文ニ充シカバ他錢ヲ禁ゼラレシ程ニ關東ハ專永樂錢行ハレテ他錢ヲハビタトテイヤシミ京

錢ニハ他錢盛ンニシテコレヲ京錢ト稱シキ慶長ノ比錢鑄ケルト見エテ稀ニ慶長通寶ヲ見ルコトアリ輪郭字樣頗ル明錢ニ似タリ開元乾元之錢ハ異國千年ノ故物ナレドモ得難カラズシテ慶長通寶ハ得難ケレバ幾程モ鑄ザリシト覺ユ慶長十三年永樂ヲ禁ジ京錢ヲ用ヒシヨリ永樂多クハツブシニ成テ世ニ隱レヌ寬永十三年　献廟江戸ト近江坂本ノ二處ニテ寬永通寶を鑄サシメ給ヒシヨリ財用世ニ饒ニナリ諸貨ノ通利自在ナリシカバ諸貨ヲ賤シミ金錢ヲ貴ム風トハナレリ金銀貴クシテ六府賤シ六府賤シクシテ國本薄シ姑其故ヲ說クベシ譬バココニ一島アリ土地人民足リ米粟布帛魚鹽他島ヲ假ラズ一切事足リ唯金銀ノミ無ランニ民粟ヲ以テ器械庸作ニ易ヘテ金銀ノ貴キヲモ知ラデ立ザル事ヤハアルベキ追追ニ錢一萬ヲ入レテ他ノ用ヲ通ゼンニ一萬ノ錢其一島ノ用ヲ足ラシムベシ是ヨリ增シテ十萬ニ至ラバ十萬ノ錢其一島ノ用トツリ合ヲナシテ一萬ノ錢決シテ一島ノ用ヲ辨ゼジ其初ハ島ノ諸用一萬ノ錢トツリ合ヲナシ米一石五百錢ニ當ラバ其五百錢以テ一奴ヲ買ベシ又入レテ十萬ニ至ル日ハ一石ノ米五千錢ニツリ合ベシ此時五百ノ錢纔ニ數十日ノ人ヲ雇フニ過ジ然レバ前ノ五百錢モテルト後ノ五千錢モテルト數ハ一倍スレドモ用ハ異ナルコトナシ乃至增シテ千萬億ナリトモ一島ニ出ス所ノ米粟布帛多キヲ增サジ米粟布帛多キヲマサズシテ獨金銀ノミマサンニ多キト少キトカハル事ハナク多ケレバ多キ程頻シキヲ增シソノ多キ金銀ニ就テ游手ヲ增シ天地ヨリ生ズル財ヲ費ス者次第ニ出來ルベシ我國ノ昔モ幣ハナクテ立シナリ和銅ノ比大宰府及播磨ヨリ始テ銅錢ヲ獻ゼシニコレヲ民間ニシキ民ニ交關セシメシ時ハ穀六升ニ付一文ナリシトカヤ

蝦夷ナドハ今ニソノ土地ノ産物ヲ出シテ我米穀烟酒ヲカエテ錢ヲ用ヒズトナリ此故ニ金銀多ケレバ物價貴シ金錢少ケレバ物價賤シ物價賤キハ金銀ノ貴キ也物價貴キハ金銀ノ賤キ也諸工ノ造リ出ス所ノ者ヲ見ルニ古代ノ物ハ精巧ニシテ今ノ者ハ粗悪也是其用ノ廣キヨリ起ルトイヘドモ半ハ金銀ノ賤シウシテ物價ノ貴キニ係レリサレバ漢ノ初天下ニ縦シテ恣ニ錢ヲ鑄サシメシカバ米一石五千錢ニ至リシナリ漢ノ一石ト云ハ今ノ京升ニテハ大概一斗程ノ事ナリ其後幣ノ勢ヲ抑ヘ段々人ヲ農ニカヘシ趙過ナド云人出デ農ノ道ヲ敎ヘ耕ヲスヽメ代田ヲ復シ後ニハ一石ノ價五錢ニ至リシナリ天下ノ勢ヲトル事ヲ權柄トイヘリ權トハ稱(ハカリ)ノ錘(ヲモリ)ナリ柄トハ其錘ヲ自在ニヨクツリ合ハスルナリ今衡ハ持スレドモ懸ル者ノ輕重ヲ稱錘ヲモテ自由ニスル事アタハズンバ權柄ヲ何ニカセン稱錘ハ重キヲマサズ輕キヲ加ヘズ輕ケレバ輕キニ從ヒ重ケレバ重キニ從ヒツリ合ヲツケテ平ヲ持スモシ權柄ヲ執ル人米粟布帛百ノ器財費用ト金銀ト其ツリ合ヲ見テ多少其宜シキヲ得セシメバ增減ニ從ツテ平ヲ得ベシ此故ニ稱錘ヲカヘヨトニハアラズ輕重ニ從ヒテツリ合ヲトル事ナリコレヲ執權柄トイフ也然レバ金銀ノ多少ハ強テ有國者ノ患トスベキニアラズ唯金銀ノ用ハ何物ゾ米粟布帛百ノ器財庸作ノ用ハ何物ゾト察スレバ金銀ノ盛ニ行ルヽノ有益無益知ルベキナリ今金銀ノ通用ヲ好ムコト獨日本ノミナラズ萬國同ジク然リ萬國同ジク金銀ヲ好ムトイヘドモ金銀ノ多キ事我國ノ如キハ稀ナリ其徵ニハ海舶ノ長崎ニテ交易スル者價太ダ廉ナリ商買ノ手ニ入リ賣買スル日和物ノ價ト相比スレバ海外直(アタヒ)廉ナル事知ルベシ金銀少ケレバ少キニテツリ合ヒ多ケレバ多キ程ノツ

リ合ヒニナル者ナリサレバ國家ノ始ハ米價一石二三四五六斗金一兩ニ當リシ時ハ江府諸物ノ價モ廉ニシテ士庶ノ苦ム沙汰モナシ元祿十二年己卯八月十五日ノ大風ニ依テ一兩纔ニ七斗ヲ糴フ是ヨリ歲荐リニ登ラズ工商ノ營、食ニ給スルニ足ラズ都下餓莩多シコレ憲廟職ニ在セシ日也ソレヨリ　憲廟ノ世ヲ終ヘ　文廟職ニツカセ給ヒ正德元年辛卯ノ秋米價ヤヤ賤クナリテ壬辰ノ春ニ至リテハ九斗一兩ニ相當レリ　章廟ノ時乾金ノ沙汰アリ　有廟ノ時西國ノ苗稼悉腐ルニ逢テ享保辛丑ノ夏一兩纔ニ米六斗餘ヲ糴フ元祿ノ頃糴價ニ貴トカリシニハ餓莩多カリシカドモ二十餘年コレニ慣レタレバ治生ノ道コレニ居リ合ヒ出來リタレバコレガ常トナリヌ元祿巳前米價賤シフシテ士庶苦シマズ元祿ノ始米價貴フシテ士人ハ利ヲ得工商ハ飢ユ以來米價依然トシテ工商ハ苦シマズ士人ハ餒ユモシ今日米價元祿ノ舊ニ復セバ士人手足ヲ措ク地ナケン是居リ合フト居リ合ハザルトノ間ニシテ權ノ入リ用若カカ有ル時ノ事ナルベシ

是春臺經濟錄ニヨル江府ノ米價也又東匡盍簪錄ヲ讀ニ先　元明天皇民ニ幣財交通ノ道ヲ教給ヒシ始和銅三年ノ詔ヲ引テ曰諸國之地、江山遐阻、負擔之輩、久苦ニ行役一、宜上時ニ一囊錢一作上、タリ此時錢貴フシテ銀賤シ二十文以テ銀一錢ニ當ル新銀出テ八十文以テ銀一錢ヲ買フ然レバ正德中脫粟米（クロゴメ）二百錢ト云モ四貫文ナリ油九錢（モンメ）ト云モ百八十文ナリ今ヨリシテ觀レバ世豈如此廉價ノ物アランヤ今文ノ字銀元文元年發行ノ時十五貫目ヲ以テ亨保銀十貫目ヲ收レバ錢五十文上下以テ銀一錢ニ替タリ然ルニ今三幣愈麁惡、金黃ナラズ銀白カラズ新鑄ノ錢鐵ヲ用フ若痛ク擲テバ碎ク物價歲歲ニ增

ス賤人其勢ノ止ル所ヲ知ラズ
安永壬寅十月追加シテ曰予コノ書ヲ著スル時猶銀一錢、錢六七十文ニ當ル今ハ已ニ百ヲ過グ而シテ米價京師浪華百錢ニ充ツト傳フ春來猶價ヲ增スベシ

夫金玉ハモト土石ノ精英ニシテ得難ク朽難シ是ヲ以テ至小以テ大ニ對スベク米粟布帛諸貨ノ擁塞ヲ通ズベシ神農日中爲市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所而貨通、トイヘバ其由テ來ルコト最遠シ然シテ諸貨ノ能スル所ハ金銀ノ能セザル所ニシテ金銀ノ能スル所ハ諸貨ノ能セザル所アリ是ヲ以テ諸貨ハ物大ニシテ數積ム運漕甚難シ夫金銀ノ用トスル所ハ則鎭西ノ米粟舟車ヲ假ラズシテ關東ニシテ炊グベシ北陸ノ布帛牛馬ニ駄セズシテ南海ニシテ衣ルベシ此故ニ行旅ノ人萬里糧ヲ裹マズ腰纏ノ用車馬ト敵スルコトヲ得諸貨ノ如キハ通利惡シキ程ニ米ハ衣ト成難ク衣ハ薪ト成難ク金銀銅錢ノ小物ハ分ツテ用ユベク大物ハ聚メテ償フベキノ自在ニ如ザル事遠シ是天下之靡然トシテコレニ向フ所ナリ蓋金銀銅ノ三幣金ハ大用有テ瑣碎ニ用ヒ難ク錢ハ小碎ニ便ニシテ大用ニ便ナラズ銀ハ中間ニアルモノニシテ三幣ノ代ル代ル用ヲナストコロナリ昔ハ人質撲ニシテ金ハ砂金銀ハ炭吹樣ノモノ多ク通ジタリ天正ノ頃ヨリ大判小判丁銀ナド始リ慶長四年始テ一分判出來慶長六年ノ後大判小判一分判丁銀豆板等改ラルコレ國家ノ造幣ニシテ巳來元祿享保元文近來ニ到テ三幣色色ノ製トモ出來リシ也夫金銀ハ幣ノ用ヲ主トス民用ニ於テハ鐵ヲ主トス然シテ銅ハ幣器兼用ル者ナリ金銀若シ幣ノ用ヲ除ケバ刀ノ緣頭（フチカシラ）佛殿ノ裝嚴漆匠ノ描金（マキエ）ナド玩物ニ過ズ藥用モ有レドモ要藥ニハアラズサレバ近來ハ費多クナリテ然（サ）マデニ多キ金銀猶給ス

ル事能ハズ楮鈔大ニ世ニ行ル金銀ノ用ハ唯諸貨運輸ノ用バカリナレバ楮鈔ニテモ飛錢ニテモスム者也餘貨ノ如キハ寒ヲ凌グコトハ布帛ニアラザレバ能ハズ飢ヲ愈スコハ米粟ニ非ザレバ能ハザルニテ金銀本來ノ面目ヲ知ルベシ此故ニ天下ノ權ヲ執テ經濟ニ心ヲ用ユル人ハ有用ノ貨ヲ日日ニ生殖シ無用ノ貨ヲ貴バヌ樣ニ致スベキ事ナリ金銀ヲ以テ天下ノ豐儉ヲ病ム人ハ回天ノ功ハ有難カルベシ大學ニ財ヲ生ズル大道ヲ生之者衆、食之者少、爲之者疾、用之者舒、則財恒足矣トイヘリ是則禹謨ノ利用ノ工夫也有國者常ニ此語ヲ體認セバ天下將ニ指掌ニ在ントス然ルヲ今ノ世ハ何ニモナラヌ金銀ヲ何ニモカエヌ至寶ト思フヨリ只上モ下モ寐テモ寤テモ金銀ヲ聚ル工夫ノ外他事ナシ人ハ四民トテ士農工商ノ四ニ過ズ士ハ上ニ事ヘ下ヲ敎エ禮義ヲ道トシ政刑ヲ權トシ社稷ヲ守リ國土ヲ安ンズル者ナリ農ハ黍稻桑麻ヲ作リ出シテ自他ヲ養ヒ、筋力ヲ以テ傜役ヲ務メ餘算ヲ得テ工商ト相通ズル者也工ハ天下ニハ色色ノ器財ナクテカナハヌ者故ニ朝夕其道ヲ鍛錬シ百ノ器物ヲ造リ出シ民生ノ用ニ不自由ナキ樣ニスル者也商ハ農ノツクリ出セル米麥布帛工ノ造リ出セル百ノ器械コナタニ餘リカナタニ足ラズ此ニアリ彼ニナキヲ通用サセテ天下ノ用ヲ成ス者ナリ此四ツノ者ハ一ツモ闕テハ天下ノ用ヲ成シガタシ是ヲ以テ人タル者士農工商ノ本業ニ本ヅキ各職分ヲ務メテ怠ラザルヲ敬テ天ニ事フルトスルナリ此外ニ遊ビテ民ノ用ヲナサズ天下ノ物財ヲ費ス者ヲ遊民ト云テ國家ノ蠧トスルナリ是ヲ以テ金銀ハ四民共ニ有無ヲ通ズルノ要物ナレドモ專交易ヲ事トスル者ナル故ニ金銀ノ運ビヲ假ルコト專要ナリ頼朝府ヲ鎌倉ニ開カレシヨリ足利織田豐臣繼興ルトイヘ

ドモ唯馬上ヲ以テ天下ヲ治メント欲シテ民ヲ軌物ニ入ルルノ擧ナク實ノ太平ト云事ハ無カリシニ國家興リシヨリ德妖氛ヲ消シ治封建ニナラヒ百六十年來四海波ヲ揚ゲズ吾儕小人ニ至ルマデ綏帶鼓腹早ク寢ネ旰(ヒタケ)テ食フコトヲ得ルモ何レカ恩波ノ及ベル所ニアラザランヤ蓋國初藤堂高虎足利ノ先轍ヲ鑑ミ自ラ夫人公子ヲ東都ノ邸ニ入レラレテヨリ諸侯後ルル者ナク身封國ニ就クトイヘドモ家東都ニアリ隔年朝覲ノ禮有テ割據虎視ノ勢變ジテ四海一家ノ化トナリ戸トザサヌ御世トナリ侍リヌ此故ニ今日諸侯費用朝覲ヲ主トス次ニ公事屬役ノ事アリ然リトイヘドモ是ハコレ主盟控製ノ權ノアル所コレヲ戰爭ノ難ニ比スレバ九牛ガ一毛ナリ謹デ財ヲ節セバ國用ハ定メテ足ルノ道アルベシ人久シク太平ノ化ニ浴シ安樂ニ慣レ安ンジ奉養ノ道日ヲ追テ華靡ニ走ル是故ニ飲食ハ人生ヲ養フノ用ヲ外ニシテ遠味珍品烹熟ノ道調和ノ品日暮レ夜明ルニ連ル衣服ハ寒暑ヲ防グノ用ヲ外ニシテ巧ヲ衒ヒ奇ヲ競ヒ月ヲ重ネテ一端ノ帛ヲ繡ニシ時ヲ踰テ一匹ノ錦ヲ織出ス燕安ノ屋宅隨身ノ調度彫幾刻鏤ヲ窮メ財ヲ生ズルノ道日日ニ疎ク巧ヲ費ヤスノコト歳歳ニ多シココニ於テ人巧ヲ費スノ道ヲ日日ニ求メテ金銀ヲ運ブノ巧漸ニナル博奕富ナト云樣ノコトヲ興行シ富ム者ハ貯ヘテ其息ヲトリ富ザルモノハ營營トシテ東ニ走リ西ニ走リ天地生生ノ財ヲ唯飲潰シ食潰シ日ヲ終ヘ年ヲ終フ終ニハ圍棊象戲俳諧樣ノ物マデモ賭ニナリ侍リテ殺風景甚シサレバ金銀ノ用貴ケレバ其權重シ重フシテ貴ケレバ人能クコレヲ積ム積ム者多ケレバ乏シキ者多シ然レバ今ノ多債ニ困窮スルコトハ金銀多キノ致ス所ナリ金銀ハ無情ノ物ナレバ人ヲ苦シメン樣ナシ唯所置宜シキヲ失スレ

バ權傾クノ致ス所ナリ噫昔ハ天下國家ヲ有スルヲコソ富貴トハ申シ侍レ然ルニ今ノ有國者ハ媚ヲ素封ノ家ニ求メ陶朱猗頓ガ徒齊魯ノ如キ國ヲ見テモ己ガ家内ノ出納ノ如ク思フ程ニ貴キ者ハ貧シク賤シキ者ハ富ミテ富貴胡越ヲ隔テタリ是ヲ以テ今先金銀ニ餒ル者ハ諸侯也廉耻ノ風ヲ導ント欲ストモ倉廩實テ禮節ヲ知ル民ナレバイカデカ是ヲ導キ得ン金銀既ニ多ク費用既ニ廣シ債ノ多キ所ナリ古ヲ稽ヘ今ヲ察スルニ金銀當今ヲ盛ナリトス然シテ金銀ニ窮スルモ今ノ如キハナシ故ニ人人相アヘバ唯金銀ノナキヲ語ル天下ニ通ジテ然リ天下ニ通ジテ人皆金銀ノナキヲ語ラバ何レノ處ニ隱ルルトスル試ニ今金銀ノアル處ヲ索ルニ諸侯ノ國ヨリシテ士農工共ニ金ヲ畜ヘズ然ラバ則商賈ニアルコト知ルベシ商賈一同ナラズトイヘ共其能巨萬ヲ積ムモノ他ニアラズ商賈已ニ素封ノ富ヲ有スレバ千里控掣ノ權半ハ已ニ其手ニ歸ス蘇秦張儀者流會計ノ道ヲ以テ往往六國ノ印ヲ帶ブココニ於テ其徒身公門ニ鞠躬ストイヘドモ心實ニ千乘ヲ呑ム其心農工ヲ見ルコト奴隷ノ如シ唯彼見テ奴隷ノ如クスルノミナラズ農工モ亦彼ヲ仰グコト主君ノ如シココニ於テ四民唯金銀ノミヲ見テ是レニ走ルコト水ノ下ニ赴クガ如シ當今建櫜ノ世ナレバ兵馬ノ功ハ立ツベキ樣ナク寰宇艾安ナレバ修文ノ業モ施ス所ナク屯ヲ亨シ蹇ヲ濟フノ用文武ノ德ニモマサル故ニ金銀ニダニ富ル人ハ無藝無能ニテモ不禮不德ニテモ上下ニ渇仰セラルレバ最興ジ難キハ廉耻ノ風ナリココニ於テ是ヲ借ルモノハ年年息ヲ出シコレヲ貸ス者ハ年年息ヲ收ム貸セバ金銀世ニ散ル樣ナレドモ實ハ本錢ヲ囮ニシテ以テ天下ノ金銀ヲ羅ス富家ノ息年ヲ逐テ增セバ國家ノ用年ヲ逐テ乏シ乏シケレバ上ノ人

下ニ求メザルコトヲ得ズ上ノ人下ニ求ムレバ下乃上ニ給ス豐臣太閤以來租稅之法三分之二地領取之三分之一耕民之ヲ取ル昔戰鬪ノ世ニサヘ是ニテ事足リシナリ今ヲ以テ國初ニ比スレバ人多ク田野闢ケタリ租稅侯國皆昔ヨリ多シサレ𪜈費用昔ニマサルヲ以テ百計聚斂ノ道興ル聚斂興ツテコレヲ受ル者ハ農也農事本艱ナリコレニ加フルニ百ノ徵求アリ終ニ生ヲ遂ルコト能ハザレバ民本務ヲ捨テテ工商庸作百ノ技術水ニ走リ山ヲ分チ百計シテ財ヲ求ム已ニ多技ニ走レバ本產ニ怠ラザル事能ハズ深ク耕シ厚ク培ント欲スレドモ得ズ肥タル地ハ瘠セ廣キ地ハ狹ク終ニ本產ニ放レ流亡シテ游民トナル者數フベカラズ今水ニ走リ山ヲ分チ百計シテ財ヲ求ムレドモ此亦聊饑渴ヲ救フニモアラデ半ハ侯家ニ輸スル也受テ納ル樣ナレドモコレモ償ノ爲ナレバ其實ハ侯家モ農工モ畢竟富

家役ヲトルモノナリサレバ戰國ノ頃ハ日夜鬪爭ヤムコト無カリシカバ手ヲ拱イテ人ニ命ヲ授クベキ樣モナケレバ人防禦ヲ主トシテ僧モ俗モ農モ商モ其實ハ武士ナリキ今ヤ昇平ノ世ノ中ニシテ唯苦シムコトハ金銀ナレバ上下ヲシナベテ唯一心專念金銀ニアリコヽニ於テ其形ハサマザマカハレドモ心ハ何レカ乾沒ニ在ラザラン一得一失ノ理勢誠ニイカントモスベカラザルモノナルベシサレバ今天下ノ事勢ヲ聞クニ何方ヲ尋ネテモ郡縣ノ人ハ年年ニ減リ都會ノ人ハ年年ニ增ス由也是衡ヲトル人ノ最眼ヲ着クベキ所ナリ夫天下國家ヲ有スル人ノ豐饒ト云ハ全ク金銀ノ上ニアラズ金銀ヲ有シテ豐饒トスルハ商賈ノコトナリ此故ニ今ハ上下交利ヲ射テ錙銖ヲ爭フ程ニ惡ク心得タル人ハ政ヲ執ル身ニモ商賈ノ術ヲ以テ國ヲ治メントスル人モアリ乾沒ト經濟ト同ジク利ヲ求ムル

者ナリ其差別商賈ハ利ヲ以テ利トス經濟ハ義ヲ以テ利トス昔鄒穆公鳧雁ノ類ヲ畜レシニ粟ヲバ用ヒズ常ニ粃ヲ用ヒラレシニ折フシ粃竭キタリ有司コレヲ民間ニ求メシニ民粃一石ヲ以テ粟二石ニカヘント云有司コレヲ損也トシテ粟ヲ以テ鳥ニ畜ント請フ穆公否爾ガシルトコロニ非ズ夫百姓ノ手ヲ煦シテ耕シ背ヲ曝シテ耘ルコト豈鳥獸ノ爲ニセンヤ粟米ハ是民ノ上食ナリ何トテ鳥ニハカフベキゾ汝小計ヲ知ツテ大會ヲ知ラズ周ノ諺ニモ囊漏貯中ト云リ夫君ハ民ノ父母ナリ倉ノ粟ヲトリテ民ニ移ス民ニ有テモ我粟ナリ鳥モシ鄒ノ粃ヲハマバ是我粃ヲ食ムナリ何ゾ鄒ノ粟ヲ害ハント有シカバ是ヨリ下ニ至ル迄上ノコトニ思ヒツキテ上下一體ノ思ヒヲナシケリ國家ヲ有スル人ハ國家ヲ一身ト見ル時ハ民ニアルト我ニアルトノ隔ナシ商賈ハ人ニ有セラルヽヲ損トシ自有スルヲ得トス君其民ヲ外ニスレバ民ノ物ヲ己ニ得テ得トシ民ニ散ジテ損ト思フ是ヲ以テ百計千慮聚斂ニ在リ詩ニ彼ニ有遺秉此有滯穗伊寡婦之利トイヘリ政ヲ執テ利ヲ下ニ遺ス一視同仁人ニ君タル者ノ利ナリ誠ニ田地ヲハシバシマデモ籍スレバ水難多シ幣ヲ鑄ルニ物ヲ雜ユレバ盜鑄多シ租稅重ク上ニトレバ凶年ニハ庶民凍餒シテ大ニ府庫倉廩ヲ費シ民疲レテ又急ニ農ニ力ヲ盡スコトヲ得ズ孝悌ヲ誘ヒ禮讓ヲ勸メン暇モ無レバ上ニ內難多ク下ニ獄訟繁ク財ヲ費シ人ヲ損ス是有國者細民ノ利ヲ以テ利トシ民ト利ヲ爭フノ幣也コレ治國者ノ利商賈ノ利ト同ジカラザル所ナリ是故ニ庫ノ財ヲ費シテ國ノ風俗ヲ勵シ農ヲ勸メ工ヲ利シ財貨ヲ國人ニ積マシムベシ是等ヲ費ト見ル程ニ勘定ヲ入レテ元ニ合ハヌコトヲバ損トテセズ是ヲ市井ノ心ト云是故ニ財ヲ生ズル大道生レ之者衆シトハ天

下ノ財日日地ヨリ出デテ民生ノ用ヲナス物ナリ其品ハ水穀魚鹽ヲ始トシ麻絮竹木等ノ類ヨリ工人ノ造リ出セル物ナリ夫權ヲ執ル人ハ輕重己カ手ニ從フムカシ亂世武猛ノ俗モ今ハ昇平游惰ノ民トナレリ是ニ由テ思ヘバ今タトヒ權金銀ニ歸シタリトモ大有力ヲシテ衡ヲ持セシメバ終ニ其錘ヲ移シ人儉勤ニ復リ廉耻禮讓ノ風興ルモナドカ難カラン輕重ニ從ツテ權ヲ移ス人ハ其病根ヲシルニアリモシ其本ニ本ヅカズ唯金銀ヲ增減シテ其平ヲ持セントナラバ懸ル者ノ重キヲ見テ錘ヲ重クシ輕キヲ見テ錘ヲ輕クスルノ道ニシテ無術ト謂ツベシ宋ノ頭錢ヒタスラニ增ス程ニ後ハ小ク輕クナリテ綖環錢トテ縷ニ貫キ水ニ入ルレバ縷ニ引レテ沈ミヤラヌ程ニナリ物ノ價シキリニ貴クナリテ後ニハ一斗ノ米價一萬錢ニイタリシトカヤ近年錢ハ鐵トナリ銀ハ鈔トナル程物價騰躍スル者縦

環錢ト同意ニテ衡傾キシ故ナルベシモシ其柄ヲ正サズシテ其低昂ニ從ントナラバ金銀愈多クシテ富家ハ則愈金ヲ積ミ貧家ハ則愈債ヲ重ネン惡幣盛ンニ世ニ行ハルレバ精金皆隱ル夫富家大ナル者ハ巨萬ヲ儲ヘ小ナル者ハ數金ヲ儲ヘ小家ハ數金ノ家ニカリ大家ハ巨萬ノ家ニカル借ル者ハ本錢ニシテ收ル者ハ息ヲ幷ス小民ノ數金大人ノ數萬其勢侔（ヒトシ）クシテ同ク富家ノ爲ニ金銀ヲ敺（カル）者ナリソレ叢ニハ雀聚リ淵ニハ魚聚ル叢ニ雀ノ聚ルモノハ鸇外ヨリコレヲ敺レバナリ淵ニ魚ノ聚ルハ獺ノ瀬ヨリコレヲ敺レバナリ淵叢ノ力ニテ魚雀ハ聚ラザレドモ鸇ト獺トノ魚ト雀トヲ好ム故ニ却テ淵叢ニ聚ルナリ金銀モ其如ク富家ノ力ニテハ中中聚ル者ニ非ズ債家コレヲ敺ル故ニ倍蓰什佰巨萬ニ至ル抑債家何故ニコレヲ敺ルゾナレバ歲計ノ常ニ足ラザルヨリ成ル歲計ノ足ラザルハ奢侈賄賂皆

ニ倍シテ制度未立ズ節儉ノ道行ハレザレバナリサレバ　神君三河ニマシマセシ頃ハ知行トレル人ノ妻迎ヘニモ負木(チヒギ)ト云モノアリテ婦ニハ被(カヅギ)カヅカセ負木ニ腰懸サセテ迎ヘシ由ナリサル故ニ慶長十一年丙午江城修造マシマシテ次第ニ人民聚リ會ヒ蕃昌斜ナラザリシカドモ竹輿トテモ武家願ヒ達シテ用ヒ町家ナドノ用ニハアラズ橋本甚三郎ト云シハ上ノ御用ヲモ達スル大家ニテ後髮剃テ深入ト云ヒシガ珍シク澀張リノ竹輿ヲ免サレ不案内ナレバ下乘場ニ乘コシ日附ニ糺サレ難義ニ及ケルヲ朽木民部少輔殿見テ

橋本ニ下ルベキ物ガノリ物デ
深入ヲシテ咎メラレケリ

ト戯ニ挨拶有テスミシ由ナリ是等モ其類ナキヨリカカル過ハアリシナリ唐モ大和モ昔ハ馬ナリシガイツシカ轎(ノリモノ)盛ニナリ今ハ下下マデ用ル樣ニナレリ馬ハ人ノ乘ルモノニシテ人ハ人ノ乘ル者ニアラズト古人コレヲ畏レキ心アラン人ハ愼ムベキコトナリコノ比ハ三絃(サミセン)ナド云者ハ男子ハモトヨリ士商ノ婦女ニ至リテ自奏デル樣ノコトハナカリシ由ナリ何事モ國初ハコレニヒトシカリシカバ財用ノ費モサマデ無リシナルベシ今諸侯ノ家何レカ節儉ノ令ナカラン唯滔滔ノ勢カヘ難ク且經濟ニ掣肘多ク或ハ任ズル所其人ニアラズ任ゼラルヽ者其才ヲ伸ルコトヲ得ザレバナリ是ヲ以テ人君ハヨク識鑒ヲ貴ムヨク其人ヲ目利シテ擧テコレニ任ジテハ其一盃ノ才ヲ竭サシムベシ掣肘トハ人ニ物ヲ書セテ後ヨリ肘ヲ掣ナリ如何ナル能書ニテモ後ヨリ肘ヲ時時掣カレテハ書度ニ書損ジアリ書損ジサセテ其過ヲ怒ラルヽコト筆取ノ難澁ナリ是ヲモテ人主ハ人ヲ得ルニ勞シテ政ヲスルニハ逸スルモノナリ事兩ナガラ全フシ難ケレバ廉耻ノ風荒メバ人賄賂ヲ好ム

禮讓ノ敎至ラザレバ人爭奪ヲ好ム制度立コトナケレバ華奢等ヲ躐ユ今其好ムヲ好ムニ任セ躐ルヲ躐ルニ任セ限ナキ人ノ慾ヲ極リ有ル財寶ニテ償ンコトヲ求メバ天下ノ大山高岳ヲシテ盡ク金ヲ出サシムルトモ米粟布帛ノ至寶ヲ生ズル者ヲシテ其業ヲ棄シメ衣食器械ニモナラザル物ニ人巧ヲ費サシムルニスギズ是ヲ以テ今タトヒ金銀ヲシテ天下ノ米粟布帛ノ如ク多カラシムトモ世唯債數ノ多クナルマデニテ至寶ノ生路ハ日々ニ薄ク人ノ賑フコトハ有ルマジキナリ但シカクカタムキシ勢ニ處スルニハ金持テルヨリヨキハナシ金ヲ持ツベキ樣ハ乾沒ニシクハナシ此故ニ今ノ富人ハ十ニ九ハ商賈ナリ其一ツモ外面ハ異ナル樣ニテモ其實皆廢居ヲツトムコレニ繼テ世ヲ渡ルニ易キハ游手也士農工ハ貧シキ者也利ヲ見テ趨リ害ヲ見テ避ルハ天下通態ナリ故ニ今ノ士農ハ本業ヲウタテニ思ヒナシ十ニ二三ハ工商ニウツリ十ニ三四ハ遊手ニ移ル移レバ從前ヨリハ生モ遂ゲ易キ程ニ日ヲ逐ヒ年ヲ逐ヒ農ヲ去ノ勢ヤマズ農減ズレバ財減ズ財減ズレバ國本薄シ是郡縣ノ籍年ヲ逐テ減ジ市肆ノ人日ニ隨テ増ス所ナリ我見聞スル所ヲ以テコレヲ云ニ此アタリニテモ七八十年以前ハ京畿大阪ノ邊ヨリ兒女ヲツレ下リ家ニツカヒテ近キ頃迄モ多カリキ今其子孫猶幾モ有リ今ハコレヨリ只管ニ上ルヿバカリニテ下ルヿハナシ事小ナルニ似タリトイヘドモ時勢ノ變見ツベシ財貨控禦ノ權已ニ商賈ニ處スレバ米粟布帛魚鹽百品生ズルヲヲソシト皆都會ノ地ニ向テ輸ス輸スルアトハ貧家ハ初ヨリ衣食ニ足ラズ富家ハ纔ニ其年衣食ノ料ヲ留メテ賣ル程ニ農家ノ餘計地ヲ拂ツテ空シ輸スルムカフハ財寶四方ヨリ輻湊スル程ニ諸貨常ニ餘計ヲ貯ヘ其糶ヲ停ムレバ國郡食ニ乏シ

羅ヲ拒ム日ハ郡縣金銀ヲ仰グ所ナシコレヲ以テ郡縣餘計ナケレバ惟是ヲ都會ニ恃ム都會又之ヲ巨商ニ恃ム郡縣已ニ財寶ニ餘計ナキ程ニ貧民皆本業ヲ捨テ、金銀ヲ營ム營ミ得テ穀郡縣ニカヘル時價前ヨリ貴ク量前ヨリ減ズコレニ加フルニ送迎ノ費又幾ゾヤ都會ハカク財寶ニ富ル地ナリ游手トモ日日夜夜ニ聚リ會ヒ文彩刻鏤音聲技巧人ノ目ヲ奪ヒ心ヲ蕩カスヿヲ巧ミ衒ヒテ良民力ヲ盡シテ生出スル者ヲ費シ人ノ嚢中ノ物ヲ鈎リ出スコ、ニ於テ鈎ル者ト鈎ラル、者ト同ジク民ノ膏血ヲ貪リ費ス然レバ金アレバ成ザルヿナシト金ヲ悅ブ心ハ吾儕小人一身ヲ安ンズルノ計ニシテ天下國家ヲ有スル人ノ悅ビトスルヿニアラズ金銀ノ通用ハ天地ヨリシテ觀ル時ハ左ノ物ヲ右ニ移シ右ノ物ヲ左ニ移スニ過ズシテ布粟器械昨日マデナキモノノ今日ハ天地ノ間ニ出來テ造化ノ功ヲ贊ケ饑渴ヲ愈ヤシ寒暑ヲ禦グノ功ニ何ゾタクラブベキ然レバ此至寶ヲ少シニテモ天地ノ間ニ生殖シ少シニテモ天地ノ間ニ存シ民生生生ノ用ヲ助クル程天ニ事フル務ハアラジ唯勢偏ニシテ郡縣ニ來歲凶饑ノ備ナク都會ニハ游手貪リ費スノ煩ヒ有テ之ヲ傷ムノ人ニ乏シ故ニ民ノ風ニ梳リ雨ニ沐ヒ星ニ耕シ露ニ耘リシ膏血ヲ文彩刻鏤音聲技巧ノ用ニ貪リ盡シ其生ズル者ヲシテ悶ヂ其費ス者ヲシテ播サシム意アル者豈藥目シテ憂ザルベケンヤ若コレヲ憂フル人アラバ一郡一縣ヲ治ンニモ何トゾ人ヲ一人ニテモ農ニカヘシ一人ニテモ游手ヲ本業ニ本ヅカシメ財貨他ヨリ入ルノ路ヲ開キ器械他ニ求メザルベキコソ肝要ナレ一國ヲ治ムル人ハ他國ヲ以テ壑トセザルヿヲ得ズ白圭ト禹ト勢同ジカラザルコトアリサテ人ノ農ニ就キ工ニ務メ士上ニ廉耻禮讓ノ風ヲ誘ヒ民下ニ華靡淫奔ノ俗

ヲ改メバ游手ハイツシカ少クナルベシ是ヲ生之者衆、食之者寡、爲之者疾、用之者舒ト云乃利用ノコトナリ用ヲ利スル者ハ其生ヲ厚フセンガ爲也論語ニ富之ト云モノ乃厚生ナリ今市肆ノ日日ニ榮ヘ人ノ彌増ヲ蕃昌トハイヘドモ郡縣ノ人モ増シ市肆ノ人モ増サバ實ノ蕃昌ナルベキニ郡縣ノ人ハ次第ニ減ジ市肆ノ人ノミ次第ニ増シ侍ランニハ豈感慨ノ一ツナラズヤ王制有國ノ道ヲ說テ國無九年之蓄曰不足、無六年之蓄曰急、無三年之蓄曰國非其國也、ト謂ヘリ當今ノ世ハ控製ノ權金銀ニアリコレヲ以テタトヒ人家餘ンノ布、餘ンノ粟、有テモコレヲ蓄ヘントスル人ハナシ是貯ヘザル人ノ罪ニアラズ金銀ノ便利他貨ニ勝レバナリ便利已ニ他貨ニ勝ル誰カ重高ク運惡ク息ヲ生ゼザル他貨ヲ貯ヘンヤコノ故ニ民擧テ他貨ヲ賣リ貧者ハ富家ノ舊債ヲ償ヒ富者ハ貧者ノ求メヲ待ツ吾儕小人勢シカラザルコトヲ得ズ吾儕小人ノ利トスルトコロ有國者ノ利トスル所ニアラズ其故如何ントナレバ國中ノ米粟布帛金銀ニ發エテ都會ニ輸ス然シテ其發ル所ノ金銀細民ノ手ニトゞマラザレバ凶饑軍國ノ慮何ヲ以テカ之ニ供センサルニヨリ今ノ世ハ一年立ト云者ナリ一年立ト云コトハ一年ニ生ズル地上ノ財ヲ一年ニ費シ盡スナリモシ天下永安ノ爲ニコレヲ憂フル人有ラバ金銀ヲ只彼方此方ヘ處替ヘサスルコトヲ省キ米粟布帛生植畜藏ノ道ヲ謀ルベシ其年ニ生ズル者ヲ空シク輸シ盡シ都會游手ノ娛樂ニ供スルコト惜ムベキノ甚シキナリ古人ハ三年ノ蓄ナキヲダニ國非其國ト云シナリ然ルヲ稻登ル時ハ麥民間ニ盡キ麥熟スル時ハ粟民間ニ竭ク民イカデカ荒歲ヲ凌グコトヲ得ン誠ニ一得一失ノ理ニテ昔金銀少カリシ世ハ諸貨ノ通利アシカリシカバコレヲ運ビ盡サズシテ凶饑諸災

ノ備モ有キ今金銀多ク諸貨ノ通利自由ニナリシカバコレヲ都會ニ運ビ盡シテ舊穀新穀ニ及ブコト能ハズ故ニ今控掣ノ權ヲトル者ハ有金ノ家之ヲ斂聚スレバ上下財盡ク竭クコレヲ以テ名ハ諸侯米粟ヲ有スル者ニシテ其實ハ富商ニ幷セラレテ纔ノ臣民ヲ扶助スルニ難ズ米粟ハモトヨリ滿易キ者ニシテモシ一年豐熟スル時ハ穀ハ食料ニ贏ルモノナリ贏ル所ヲ畜レバ凶年ニ備フベシ是ヲ賣リ盡スニ至リテハ豐年ノ後ノ年凶年ノ後ノ年ニ異ナルコトナシ是天下ノ良民金銀ノ爲ニ游手ノ奴隷トナル所ナリ布帛米粟ハ諸貨交易ニ便ナラズ便ナラザルヲ以テ金銀ノ用廣シ是ヲ以テ金銀ノ用ハ急ニシテ布粟ノ用ハ緩シ緩キヲ置テ急ナルヲ先ンズル勢然ラザルコトヲ得ズ故ニ布粟ニハコト足レドモ金銀タラヌ故布粟ヲ貯ルヲバ損ト見テ足ルモ足ラザルモ布粟ハ家ニトドメヌ故金銀ニ富ル人モ米粟ニ餘リナキ事ハ相似タリ用多ケレバ借人多シ借ル人多ケレバ錢神足無フシテ飛ブ用少ケレバ借人少シ借入少ケレバ錢權衰エテ飛騰ノ用殺グ錢權衰フレバ布粟畜フベシ布粟畜ルコトヲ得テ今年ノ熟以テ來年ノ饑ヲ禦グベク今年ノ布以テ來年ノ寒ヲ禦グベシ有國ノ人ハ強ニ己カ府庫ニ物ヲ積マヌトテ貧シキトハ云難シ昔亂國ノ頃ハ下民モ農桑ノ暇無カリシカドモソコノ籠城コヽノ對陣ト云ニ相應ノ兵糧ハ有リシトナリ今ハ昇平ノ世ニシテ纔ニ朝覲扈役ノミナレドモ其臣僚ノ扶持ニダニ乏シ萬一邊陲ノ警モアラバ何ヲ以テ、祖宗ノ意ニ答ヘ國家百年ノ恩ニ報ゼン遠キ慮ナケレバ必近キ憂アリ有國者ノ急務何レカ是ヨリ先ナラン四民ハ之ヲ有國者ニ仰グ有國者ハ是ヲ有天下ノ人ニ仰グ天下ノ勢ハ有天下ノ人ノナス所ニシテ有國者ノ力ノ及ブ所ニアラズ一國ノ勢ハ

一國ヲ有スル人ノナス所ニシテ士民ノ力ノ及ブ處ニアラズヨク權ヲトル人ハ能勢ヲツカフ勢ヲツカフハ譬バ砂ヲ盆中ニ淘ルガ如シ左ニ走ラシメンモ右ニ走ラシメンモ皆手中ニアリ然ラバ文ニ走ラシメンモ質ニ走ラシメンモ利ニ赴カシメンモ義ニ赴カシメンモ金銀ヲ貴クスルモ布粟ヲ貴クスルモ良民多カラシムルモ游手多カラシムルモナスニ從フ者ナリ天下一年立ノ勢ハ有國者ノ回ラスベキニ非ラザレドモ一國ノ勢ハ豈一國ノ勢アラザランヤ其術卽生之者衆クコレヲ食ム者少ク之ヲ爲ル者疾ク之ヲ用ル者舒ナルニアリ今ハ天下太平ニシテ恩澤天ノ如クナレバ何故カヽル安樂ニ耽ルゾト思ヒ回ラスコトモナク貴キモ賤シキモ衣服飮食居處交際只日日ニ華靡ニ走リ有司モ俸祿ノ外賄ヲ恃ミテ事ヲ辨ズル故田地ノ租稅モ重カラザルコト能ハズ臣僚ノ俸粟モ減ゼザルコトヲ得ズ故ニ農ニ餘利ヲ見セテ人ヲ農ニカヘシ工ニ力ヲソヘテ游手ヲ力ニ食シメ財貨他國ニ出ザル樣ニト思フナリモシ其病根ヲ見ズシテ末ヲ追ヒ令ヲ下シテ賄賂ヲ禁ジ奢侈ヲヤメント欲ストモ禮樂講ゼズ制度立ズ民用ノ足ランコトヲ求ムトモ綱ヲ結バズシテ魚ヲ羨ム類ナルベシ先大勢ヲ治メンニハ大積リヲ知ルベキコトナリ蓋十人ノ耕スヲ一人ニテ食シ盡シ十人ノ織ルヲ一人ニテ著盡サバ九人ハ饑寒ヲ免レザルベシ此故ニ一夫耕シ耘ツテ其妻子ヲ養フベク一婦蠶シ繅ツテ夫子ニ衣スベシ飮食コレヨリ美ニスギ衣服コレヨリ麗ニ過レバ其人ニハ贏アレドモ天下ニ通ジテハ足ラザルベシ有力ノ人ハ匹夫ト同ジカルベキニハアラザレドモ細民ノ爲ニ慮ルニ於テハ察セズンバ有ルベカラズ爽口ハ數金ヲ盡スニアラザレバ一饗ニ供スルニ足ラズ美服ハ數月ノ力ヲ用ユルニアラザ

レバ一衣トナスニ足ラズモシ齊民ノ風俗自然ト此積リノ外ニ出デバ爭カ饑寒ニ免レンソレ民ヲ治ルノ道ハ赤子ヲ保スルガ如シト云ヘリ昔上ハ父母ニシテ民ハ則子ナリ子ハ甘旨膏膩ノ病ヲ醸スヲモ泥土雨露ノ衣服ヲ損フヲモ知ラズ有ルニマカセテ用ヒ仕マフ者ナリ民モソノ如クチト耕シテ餘資有レバ色色ノコトヲ思ヒ出シテ企テ僧巫ノ徒緣ヲ慕リ游技ノ菴間ヲ覗ヒ工人結構ヲナシ國ノ富ム方ニ心ノツク者ニアラズ故ニ何程ノ仁政ヲ行ハレテモ湯ヲ以テ雪ニ沃グガ如ク財貨ハトドマル者ニアラズ故ニ子ノ爲ニ甘旨膏膩ヲヒカヱ雨露泥土ニ衣服ノヌレザル樣ニ節制ヲ加エザレバ給スル者ハ暇ナク用ユル者ハ災ヲナス災ヲ身ニ受クトイヘドモ節制ヲ加ユル日ハ父母ヲ怨ミ泣キ號ブナリ細民ハ己一身當前ノコトノミヲ見テ大勢ヲ見ザル者ナレバ或ハ一己ニ不便利或ハ情慾ニ伸ビザレバ嬰兒ノ父母ヲ怨ムル如ク左ヤ右與ジテ人心ヲ動搖サスル者ナリ小利ヲ謂テ大利ヲ害スル者ナリ此時英斷ノ君ニアラザレバ其臣ニ任ズルコトアタハズ剛毅ノ臣ニアラザレバ其業ヲナス事能ハズ是ヲ以テ政ニ制度ヲ立ルコト甚ダ要ニシテ廣タユマズ目逃ガザル人ニアラザレバナシ得ルコトニ非ズ又制度ニ過ツコトアレバ物ヲ害スルコト限ナケレバ假初ニモ立易キコトニモ非ズ鄭ノ子産政ヲセシニ都鄙有章、上下有服、田有封洫、廬井有伍、大人之忠儉者、從而與之、泰侈者、因斃之、カバ輿人之ヲ誦シテ取我衣冠而褚之、取我田疇而伍之、孰殺子産、吾其與之ト云シガ三年ヲ經テハ皆誦シテ我ニ有子弟、子産誨之、我有田疇、子産殖之、子産而死、誰其嗣之ト云子産死スルニ及ンデハ人皆慈母ヲ失フガ如クニ思ヒシトナリ唯上ニモ目前ニテ人ニヨキ人ト謂レンコトヲハカル人ハ非常ノ功ヲバ

立得ヌ者也非常ノ功ヲ立ル者ハ非常ノ才ヲ抱ク非常ノ才ヲ知ル人ハ非常ノ君ナリ君才ヲ用ル日譽ル者半、謗ル者半、利モ又半、不利モ亦半也苟識明ニ斷果ナルニ非ザレバ事ヲ擾リ人ヲ損フニ過ズ故ニ古ヨリ君臣ノ値遇ヲ以テ難シトスルコト故アル哉故ニ制度ヲ立テザレバ仁惠モ益ナシ夫レ產自ラ養フニ足ラズ或ハ餘計ニ迸散ノ路アラバ有餘不足ノ相去ルコト近シ王制ニ量入以爲出トハ上王公大人ヨリ下輿儓臧隷ニ至ルマデ經紀ノ要語ト知ルベキナリサテ天下一年餘計ノ布粟ハ皆富商ニ歸シ富商コレヲ都會ニ輸スココニ於テ郡縣空乏ナリ凶饑全ク都會ニ仰グ都會空乏ノ變アラバ郡縣給スル所ナカラン都會ノ物ヲ畜ル常平倉ニ非ザレバ本郡縣ニ給スル爲ニモアラズ畢竟游手ドモノ餞餘ナリ此故ニ郡縣布粟ニ餘計ナク都會積聚ニ蠹蟲アリ穀ハ滿易シテ減リ易シサルニヨッテ一年年登レバ天下ニ穀滿ツ一年年儉ナレバ郡縣穀盡ク滿レバ人人糧乏シカラヌ程ニ各職ニ就テ本業ニ歸センコトヲ思フ盡レバ糧ニ仰グ所ナキ程ニ壯者ハ傭作ニ餬（クチモラ）ヒ弱者ハ乞丐ニ餬フ本業ヲ捨テテ餘業ニ餬フハ勢ノ已ムコトヲ得ザルニ出デテ其本心ニアラズ故ニ年登ルヲ見レバ遠客ノ歸舟ニ逢フガ如ク餘業ヲ捨テテ本業ニ歸ラントスル程ニ傭作スル者希ニシテ餘業ヲ務ル者怠ルココニ於テ諸價皆騰貴ス然フシテ一年穀熟セザレバ雨後潦水忽涸ルルガ如ク又本業ヲステテ餘業ニ走ルココニ於テ諸價又賤シ畢竟民一年立ニナリテ定レル業ノ餬フニ足ル者ナケレバ也夫人情誰レカ本業ニ歸シ安キニ就クコトヲ願ハザル者アランヤ是郡縣ニ凶饑ノ備ナク一度ハ本業ニツキ一度ハ本業ヲ離ルレバナリモシ眞ノ太平ヲ得ントナラバ金銀ノ通利ヲ貴バズ餘布餘粟民家ニ畜ヘシムベシ

タトヒ惡年ニアフトモミダリニ本業ヲバ失フマジ本業ヲ失ハザレバ價ニ貴賤ナキコト能ハズトモ又格別ノコトモアラジ是故ニ國家ノ乏シキト云者ハ金銀通利ノ快キニ布粟ヲツムノ人ナケレバナリ布粟ヲ積ム人ナキ者ハ金銀ヲ借ル人多クシテ金銀ノ利布粟ニ倍スレバナリ利布粟ニ倍シテ運輸畜藏布粟ヨリ便リナリタトヒ嚴刑ヲ以テコレニ臨ムトモコノ勢ニアタルベカラズ今ノ世ノ態ヲミルニ庸作ヲハジメ其他ノ營ニツケテモ多クハ皆其人ノ本業ニアラズ困苦ノ爲ニ金銀ニセメラレテ已コトヲ得ズシテ姑クココニ雨ヤドリヲシ雨ノ晴間ヲ待ツナリ空少ク晴レ行ケバヤガテフルベキ空トテモイカデ久シク其木陰ニハ留ルベキサル程ニ少シク衣食ニ休息アレバ女子ハ嫁シ男子ハ本業ヲ求メ其務メニ服センコトヲ願フナリ其務メニ服センコトヲ願ヘドモ程ナク年ノ荒ルルニ赴キ餬フノ營ミニ懸ルコトモトノ木陰ヲ立出デサキノ木陰ニ雨ヲ凌グノ心ナリ人ニ貧富ノ隔テコソアラメ豈人情ニ異ランヤ已ニ人情ニ異ナケレバ老タル親、馴來シ妻子ニハ朝ナ夕ナミモシミエモシ打語ラヒ親シキ友ドチトヒ問ハンコトヲ願ハザル者アランヤシカラバ孰カ其本業ヲ棄テテ餘業ニツキ歡娛ヲ厭フテ勞苦ヲ好ム者アラン身ヲ賣テ人ノ奴隷トナルコトハ勢ヤムコトヲ得ザレバナリ然レバ世ヲ平觀スル時ハ庸作ノ人ハ本業ヲ求メテカヘル程悅バシキコトハナシ治國ヲ以テ任トスル人ハ庸作ノ徒ノ本業ニツクガ本懷ナリ今貧民ノ田ハ富家ニ幷セラレ貧家ハ富家ノ賃田ヲ耕ス程ニ富家他手ヲ假ラザルコトアタハズ貧家他主ヲ恃マザルコトアタハズモシ陰陽變理ノ手ヲ經テ經界平ニ歸シテ穀祿郡縣ニ三五年ヲサヽユルコト得富家兼幷セズ貧民本業ニ歸シ游手勤ムル

所アリ餘夫ヨク良民ニ左右シテ餘事ニ務ムル所アラバ本業他業ヲ交交トラズ物價高下アリトモ粗定準ノ有ルベキアランスベテ物ニハ居リ合ヒト云者アリ今ノ癖ツキタルヨリミレバ海内皆富マバ奴婢ノ買フベキ無ク傭作ノ人ナクシテ却テ難義ナルベク思ヘドモ其居リ合ヒヲ見ヌ故ナリ今ノ貧民一年ハ本業ニ走リ一年ハ餘業ニ赴ク故ニ物價餘動シテ定ラズ本業人アリ餘業ツトムル所アラバ四海富ンデ人苦ムノコトアランヤ古仁德天皇ノ朝ニハ三年マデミツギヲユルサセ給ヒシカド宮牆アレタルバカリノ沙汰アツテ其外サハレルコトモ聞ズ今ノ世ノ心ヲモテ觀レバ怪シキ程ニ思ハルレド漢ノ文帝ノ時鼂錯ガ計ニ從ヒ給ヒ民ニ十二年租稅ノ半ヲ給ヒ明年終ニ民田ノ租稅ヲ除キ給ヒシモ猶大倉ノ粟ハ陳陳相ヨリシトナリ和漢古今ノ相違ハアレド地物ヲ出スコト依然トシテ人ノ身ノ長モ縮ラズ腹ノ量モカハラネバ陰陽變理ノ手ヲカラバ人人六府ノ眞貨タルヲ覺リ九年ノ水七年ノ旱トモ終ニササフル道ナカランヤ今ハ唯六府ノ運トナルベキ金銀還テ主トナリ平準立チ難ク豐年ニハ豐年ニ苦ミ凶年ニハ凶年ニ苦ム仁人位ニ在ルコト有テ豈豐年ヲ苦ムコトアランヤ稱錘平ヲ得ザル日ハ重キ物ヲ懸クレバ錘サキヘスベリ輕キ物ヲ懸クレバ錘アトヘ隕ルナリ今奴婢諸物價ノ貴賤事微ナリトイヘドモ關係小ニアラズ國家ノ權ヲ執レル人最心ヲ注グベキ事ナリ庸作ノ人ノ遽ニ價ヲ增スコトハ吾儕身ノ爲ニ憂フルコトニシテ有國者ノ說ブベキコトナリ其故ハ此機ニ乘リ小民ヲシテ本業ニ歸ラシメ兼幷ノ道ヲ察シ農ヲシテ專力ヲ耕耘ニ歸セシメ荒タルヲ闢キ堤防ヲ脩シ彼寒苦ノ細民ヲシテ老タル親、馴來シ妻子ト優游セシメ同ジク太平ノ餘澤ニ浴セシムベ

キ機アレバナリ其說ブベキヲ憂ルハ衡ノ持シ難キニ苦シメバナリカクシテ人本業ニカヘルコトヲ得バ民力專農桑ニ歸シ地力盡スコトヲ得テ地ノ物ヲ生ズルコトマスマス多クシテ男女餘布餘粟有リ金銀偏重ノ勢ナク各其力ヲ以テ金銀ヲ蓄ヘ然シテ暇日孝悌忠信ノ教ヲ施セバ人米粟布帛ノ貴キヲ知リ金銀通利ノ物タルヲ知リ廉恥禮讓ノ風興スベシ慈愛惻隱ノ情養フベシ夫人人足ル所アレバ食マレズ衣ラレザル金銀ヲ誰アツテ息ヲ出シ借ル者アラン借ル者ナケレバ金銀ヲ貯ル人モ游手トナリテ產業ニ成難キ故コレモ各四民ノ務ニ本ヅクナリ金銀通利ノ上ヨリ觀レバ有金ノ人ハ最有用ノ人ニシテ造化ヲ賛クル上ヨリ觀レバ頗ル游手ト相類ス造化ノ功ヲ賛クルニ士ノ太平ヲ守ルト農工ノ物ヲ造リ出スト商賈ノ有無ヲ通ズル外皆游手ナリ游子勝テバ四民ノ業ツカル四民ノ業ツカ

ルレバ國本終ニ弱シ今天下ノ勢末ヲ追テ金銀ノ便利ヲ知リ其息ヲ積ンデ游手トナランコトヲ冀ヒ米粟布帛ヲ賤ンデ餘分ヲ家ニ蓄ルノ道ヲ知ラザル程ニ上下市井ノ心ニナリテ久安ノ計ニ暇ナクココニ於テ僧ハ佛ヲ賣リ巫ハ神ヲ賣リ學者ハ道ヲ賣リ醫ハ藥ヲ賣リ形ハサマザマカハレドモ心ハ商賈ニ非ラザルハナシカクマデ久シク人ノ心ニ染タル金銀ナレバタトヒ聖人出タリトモ一朝一夕ニ金銀ノ輕ク六府ノ重キヲバ知シメ難カルベシ然リトテ金銀ヲ一切ニ除キ去テ治ヲナセトニハアラズ何トゾ費用多キ所ノ故如何トタヅネ借ルベキ天下ノ源ヲ塞ギ有金ノ家ヲシテ天下ノ百貨ヲ網スルコトヲ得ザラシメテ諸侯ノ國小康ヲ得四民其業ヲ樂ムコトヲ得ベシ是平準ノ要領ナリ金銀モト美物國家ヲ有スル人ハ布粟金銀府庫ニ滿チ下ヲシテ兼幷偏重ノ勢ナカラシメバ用ヲ通ズルノ

能マコトニ諸貨ノ及ブトコロニアラズ軍中ノ捷利民間ノ必用有國者ノカグベキ者ニアラズソレ金ノ山ニアル土石ノ精英ニシテ至テ得難シ至美至重萬國皆望ヲコレニ屬ス然レバコレヲ得ンモノ土石ノ如ク思ハンコト下人巧ノ勞疲ヲ察セズ上造化ノ精英ヲ貪リ國ヲ有スル者ハ國ヲ傾ケ家ヲ有スル者ハ家ヲ破ル且各國其境界アリ界ヲ出ル者ハ再タビカヘラズ最愼マザルベケンヤ五事略ニ載セタル所ヲ考ルニ長崎一所、官ヨリ海外ヘ出ヅル所、正保五年ヨリ寶永五年マデ六十一年ノ間金二百三十九萬七千六百兩餘ニシテ銀三十七萬二千二百九貫目餘銅寛文三年ヨリ寶永五年マデ三十六年ノ間一億一萬一千百四十九萬八千七百斤餘此計ノ外ナル者其幾ト云コトヲ知ラズ大概コレニ三倍シテ我國現在ニ遺ル者三分ノ一ト云ヘリ今狡黠ノ商賈一身ノ利ヲハカルガ爲ニシバシバ金銀ヲ

海外ヘ洩スコト疾ムベキノ甚シキナリ嗚呼金銀世ノ害ヲナス者ナランヤ人ノ金銀ヲシテ害ヲナサシムル也夫良醫ハ烏喙砒石ヲ用ヒテモヨク病ヲ癒ス增シテ諸貨運輸ノ能船ヨリモトク車ヨリモ速ヤカナルヲヤ然レバ則金銀ハ多クバ多キ程猶ヨカルベシ是ヲ以テ衡ヲ持スル人權柄ヲ得ザル時ハ多ケレバ多キニ傾キ少ケレバ少キニ傾キテ同ジク人ヲ苦シマシムモシ權柄ヲ得ル時ハ多少共ニ平ヲ得ルナリ其故ハ六府ノ用ニ達シ兼幷偏重ノ煩ナケレバナリコレニ就テ世ノ費用ヲ考フルニ古ハナクテスミシ物ノ今ハ去リ難キ物其數ヲシラズ浮屠家ノ敎ハ最久シ裳瘡ナドモ昔ハナカリシトカヤ有益無益ニツキアラアラコレヲ數ヅフルニ天文地理ノ學西洋ヲ精シトス癰疽金瘡ノ治又相亞グ木綿火器望遠鏡自鳴鐘ノ類最重寶ヲナス天敎、黴瘡、最疾ムベシ然シテ天敎ハ已ニ根ヲ絕ツ黴瘡

ハ世ニ蔓衍ス蔫（タバコ）ハ二百年ノ物茶ハ千年ノ物人家日用ノ具トナル髪膏（ビンツケ）又古ニ見エズ然フシテ今ヤ太平百六十年酒食技巧淫靡ノ風古ニアラズ妓樂博奕人ヲ誤ル者數ヲ知ラズ若上古質樸ノ世ニ比セバ民生日用ノ費ト半セントス豈畏レザルベケンヤ

天文地理ノ學梵最粗ナリ漢ハ寢精シ然レドモ思量模索ニ出デテ實測ニウトシ西洋ハ器ヲ制シ舟ニ駕シ足跡至ラザルノ地ナシココニ於テ天地ヲ見ルコト掌菓ノ如シ實ニ千載ノ大愉快ナリ西洋ノ醫治內ヲ略シテ外ニ詳ナリ大ニ漢人藩闑ノ外ニ出ヅ漢人ノ治ハムカシノ人五運六氣五臟六腑ナド云コトヲ云始メシヨリ終ニコレニ誤ラレテ實測ニ暇アラズ西人ハ意ヲ實測ニ用ユ故ニ人ノ臟腑筋骨ノ如キモ數剝シテ眞ニ試ム故ニ最精詳ヲ盡ス蓋天地ニ條理アリ未條理ヲ得ザレバ實測アリトイヘドモ是ヲ彷彿ニ得テ猶眞ニ遠シ故ニ造化ヲ說ニ至テハ漢ニ木火土金水ト云梵ニ地水火風ト云西洋ニ水火土氣ト云共ニ伯仲ノ說ナリ木綿ハ

桓武天皇ノ頃崑崙國ノ人持來リシガ殖セズ文祿年中ヨリ廣マリテ民生ニ益アルコト五穀ニツギ桑麻ノ上ニ出ヅ鐵砲ハ

後奈良帝天文癸卯八月薩州種子ガ島ノ主時堯コレヲ蠻人武良叔舍（ムラシュクシャ）並ニ喜利志多陀孟太（キリシタダマウタ）ト云二人ヨリ傳ヘ泉州堺橋屋又三郎ト云者鍛錬ノ法ヲ委シク傳ヘ今ニタエズ豐後ニハコレニ先達ツコト二年辛丑ニ當ツテフランスクスサベイト云者來リタリ是ハ西洋波羅多伽兒（ホルトガル）ト云國ノ者ニテ後天竺ニテ死シタリ唐ノ書ニハ佛來釋古者（フランスクス）トイヘリ石火矢モコレガ豐後ニ傳ヘタリ始テウチシ時衆皆潰エナダレテ肝ヲケシタリ因テ國崩シト名付タリ武良叔舍、佛來釋

古倉ハ皆一人ニテフランスクスノ轉音ナルヨシ白石先生ノ說ナリ尤據トスベシサテ人コレヲ大友亡國ノ兆トイヘリ昔ヨリ銀漢ナドハ水精ナド云テ唯氣ノ樣ニ思ヒタリ近頃望遠鏡渡リテ皆星ナルヿヲ知レリ蓋混地ノ體圓ニシテ海水コレニ湛フ其内大壤二ツアリ一ツハ北ニ在テ東西ニ長シ一ハ中ニ當ツテ南北ニ長シ北ニアル壤ヲ三大洲トス西ヲ歐邏巴和人エロツパトモ云即西洋也喎蘭(テランド)地ナドモ其中ナリ東ヲ亞細亞唐日本天竺ナド其内也東西ノ中間ナルヲ漢人利未亞(リビア)ト云西洋ノ人ハアフリアト云中ニ當ル壤ヲ二大洲トス南ヲ南亞墨利加洲ト云北ヲ北亞墨利加洲トス又南大海ノ中墨瓦臘尼加(メカラニカ)ト云地アリ昔西洋ノ人見ツケテコレヲ加ヘテ六大洲ト云シガ追追尋ネ見シ所殊ノ外ノ小島トモイヘリ因テ大洲五トス亞墨利加ノ地ハ大槩此國ノ下ニ當レリ北亞墨利加ノ内新伊斯把儞亞ト云國有リコレハ西洋ノ伊斯把儞亞トリテ此名ヲ加ヘタルナリ慶長十五年ノ秋コノ新伊斯把儞亞ノ商船風ニ放タレテ我國ニ漂ヒ着キタリ官ヨリ其船ヲ修理シ資糧ヲ具シ放チ還サシメ給ヒシガ同ジキ十七年ノ夏其國ヨリ使船ヲ遣ハシテ恩ヲ謝シタリ其時ノ禮物トシテ自鳴鍾ヲ獻ジタリコレ自鳴鐘ノ始メナリ是等ノ類ハ傳ヘテ重寶トスル所ナリ天主教西洋ノ人ハキリステアント云和人ハ切死丹ト云漢ニハ明ノ隆慶萬曆ノ頃泰西ノ利瑪竇ト云者明ヘワタリ浙江府ノ内ニテ荒地ノ有リケルニ一宇ヲ作リ學文シ書ナド著シ人ヲ誑シケルニ追追龐廸我ト云者又來リ金銀ナド授テススメケル故次第ニ其道廣マレリ此方ニテハ佛來釋古者等豐後ニテ其道ヲススメシヨリ起リテ其流ヲ汲ム如漏法師、因

果居士、無遍ナド云者專此道ヲ以テ大友義鎮ヲ諄カズ大友深ク之ヲ信ジテ筑紫ノ神祠、佛院コノ時多ク毀廢ニ及ブ此事大樹光源院義輝ニ聞エ如漏法師ヲ召シ織田信長ヲシテ其法義ヲ糺サシム信長淀ノ屋鋪ニ於テ廐ノ口ニテ其狀ヲ聞キ直ニ樫ノ棒ニテコレヲ撃殺シ其首ヲ梟セラル義鎮大ニ怖レ大德寺ヨリ眞齊和尚ヲ招キ祝髮シテ休菴宗麟ト號シタリサレドモ其流波タヘズ秀吉其民ヲ惑ハスヲ忿リ文祿ノ頃伴天連六人伴類二十餘人ヲ召捕リ肥州長崎ニ於テコレヲ磔ニス因テ海外ノ市舶ヲ停メントアリケレドモ長崎ノ民歎キ請ニ因テ其事ヤミニキサレド其道ヲ誘フ者タヘズ寛永十四年凶徒肥前島原ニ聚リテ官命ヲ拒ム翌十五年春凶徒誅ニ服シヌ其後天教ヲ奉ズル諸國ノ市舶通ズル事ヲ許サズ禁ヲ冒シテ戮ニ陷ル者前後ニ通ジテ二十八萬人其法終ニ絕タリ徵瘡相思同ジク西洋ヨリ入テ今ニタエズカルタナドモ其國ノ物ナリ蓋煙草ノ其始ハ南亞墨利加ノ內亞勒利西那ト云地アリ其海中ニ十八ノ島アリ總ジテコレヲマリカランダト云其內ノ一島セントヘンセントト云コノ島ヨリ創メテ作リ出セル草也我國ニハ天正ノ初ノ頃トモ又慶長ノ十年ニ渡リシトモ云リウエ始メタル事ハ肥ノ長崎櫻馬場ニ作リソメシヨリ廣マル由西川子ハイヘリ酒色ノ二ツハ古人ノ訓戒ソナハレバ今更改メ云ニ及バズ煙草ハ酒ナドノ樣ニ人ノ心ヲ蕩カス者ニハ非ラザレドモ其味辛ク其氣臭クコレヲ服スル者ハ口氣甚惡シ一能ヲ見ズ男女婬奔ノ媒ヲナシ動モスレバ火ヲ失シテ大ナル者ハ數千家ニ至ル然シテ今ノ失火半ハ烟火ニ屬ス土地ヲ費シ糞壤ヲ食ミ金帛技巧費用甚廣シ國家其失ヲ監ミ給

ヒ慶長十三年令ヲ下シテ禁ジ給ヒシカドモヤマズ元和二年ニハ烟草畠ニツクルコトヲ許サズ禁ヲ犯ス者ハ牢舍其處ノ代官過料五貫文其村中ノ百姓一人ニツキ過料百文宛ト命ゼラレシカドモヤマズ終ニハ高貴ノ玩トナリヌ黴瘡烟草誠ニ天主ノ遺毒最ニクムベキ者也茶ハ烟草ニ比スレバ雅物ナリ害モ亦淺キニ似タリ茶ハ嵯峨ノ天皇弘仁六年畿内及丹波播磨等ニ頒チ植シメ給ヒシ由ナレドモ僧ノ榮西歸朝ノ節種子ヲ携エテ栂尾ノ明慧上人ニ贈ラレシヨリ幽人清賞ノ具トナリヌ足利ノ公方慈照院義政ハ天下ノ政治ニ倦ミ職ヲ其子義尚ニ讓リ東山東求堂ニ閑居シ銀閣ヲ作リテ鹿苑公ノ金閣ニ比シ猿樂ヲ修シ茶禮ヲ玩バレシヨリ其道次第ニ世ニ廣マリ其道ノ名人輩出セリ中ニ太閤秀吉ノ比堺千利休其譽レアリ古器ノ價ナド定メシニ後ニ

ハ私慾出來リテ己ト親疏好惡ニヨリ新シキヲモ舊シトシ贋ヲモ眞トナシ心ノママニフルマヒシカバ太閤怒ラセ給ヒカラメテコレヲ誅セラレヌ其道ニトリテハ奇代ノ人ト稱スレドモ名教中ヨリコレヲ觀レバ大ニ間然スベキ人ナリ此時二條院ノ御陵洛北舟岡山ニアリケリ然ルヲ利休ソノ御塔石ヲトリヨセテ茶亭ノカザリトシ餘レル石ヲ以テ手水鉢ナドニ用ヒシガ如何思ヒシニヤ踏石ニマデハセザリシ由ナリ昔周室衰エタリシ時楚子鼎ノ輕重ヲ問シダニ清議コレヲ許サズイカニ朝家ノ權武家ニ歸シタリトテ天ツ日嗣ハ末地ニ墜ズ宗易ガ茶天下ノ觀ヲ極ムトモ伯夷ハ酌ジト覺エ侍ル文王ハ土中ノ枯骨ヲ得給ヒテモ深クコレヲ埋メ給ヒキ王者ノ政ハ孟春ノ月ニハ掩骼埋胔事、恩枯骨ニ及ブ也加藤清正ハ身武人タリト云ヘドモ南面シテ孤

ト稱スル人ノ仰ギ瞻テ法ヲトル所也然ルニ山科元慶寺ニ有シ僧正遍照ノ塔ヲ本國寺勸持院ニ引テ燈籠トナシ喫茶ノ興ヲ助スケシトゾ悖逆ヲ論ズレバ利休ノ下ニツクトイヘドモ其任ヲ論ズレバ其身君師ノ責アリ國祚ノ長カラザルモ故アルコトニヤト思ハル茶義政ニ成リテ利休ニ至ル其人ヲ見テ其道ヲ思フベシ高貴茶ヲ賞シテヨリ終ニ天下日用ノ具トナル精麁品ヲ同ジフセズトイヘドモ終ニ一日モスツベカラザル者トナル近來髮ニ膏ヲ用ルト神祠ニ燈籠ヲ點ズルト同ジク廢シガタキノ品トナル猿樂ハ昔ハ唯怪シクヲカシキコトナリシヲ義政修シテ觀世觀阿彌作リ出シ能ト云者ニナリヌ武家古樂ヲ廢セシカバ今ハ武家ノ樂トナリヌ然レバ當時小笠原ノ禮ト聊禮樂ニ備フベシサテ三絃ハ本ノ小山ノ詞ニ三絃玉指雙鉤手、小字題贈玉娥兒、

トアレバ元ノ頃ヨリアルヨシ貝原イヘリサレドワガ豐中ニ傳ル所ハ永祿六年大友氏ヨリ石松檢校ヲ朝鮮ニ使セシニ洋中風ニアヒ漂流シテ琉球ニ至レリ其俗蛇ヲ避ルトテ常ニ鼓弓ヲ人ゴトニ彈ズ石松コレヲナラヒ豐後ニカヘリ此器ヲ制シ組ナド云手ヲツケテ玩ビケルニ廣マレリトモイヘリ淨瑠璃ハ小野ノ於通太閤ヨリ昔紫式部淸少納言各文ヲ著セリ　是ニ習ヒ一書ヲ奉ルベキヨシ承リ退ヒテ自思フニハ何レ古人ノ筆ニハ儔フベカラズトテ義經東下リ矢矯ガ宿ノ淨瑠璃御前ト云女ニ懸想シテ通ヒケルコトヲ面白フ作リナシテ秀吉ニ奉リシカバ御感ニ入リ殊ニ時ノ人モモテハヤシケルヨリ後ニハ節ナドツケ色色ニ昔ノコトヲ作リ出シ西ノ宮傀儡師ト一ツニナリ操ト云者ニナリ又俳優コレト並ビ起リテ偶ヲナセリ俳優ココニ歌

舞妓ト云妓ハ女ノ稱ニシテ今ノ歌舞妓ハ男子也慶長以前人僧衣ヲ著テ鉦ヲタタキ佛號ヲ唱ヘテ念佛躍ト云者アリシニ同十九年ノ頃名古屋山三郎ト云者出雲ノ巫女國ト云者ニ密通シテ國ニ刀ヲサヽセ頭ヲツヽンデ早歌ヲ敎エテ舞セケルニ倣ヒテ終ニ男子女ノ装ヲナシ且舞且婬ヲ賣ルコトニナリヌ寛永ノ頃遊妓ノ禁有シヨリ殊ニ盛ニシテ往々女子ニ混ジテ事ヲ過ツヨツテ官頂髮ヲサラシム因テ紫華巾ヲ製シテ首飾トス亦宛然トシテ婦人也今復稍ク髮ヲ長シテ昔ニ復シヌ躍歌舞妓名ハ猶昔ニシテ物ハ昔ニアラズカフヤウノ物ハ其大ナル物ニシテ其小ナル物ハ擧テ數フベキニアラズサリトテ人情ノ赴ク所ヤムベキニハアラザレドモ人ハ上一人ヨリ下億兆ニ至ルマデ天ヲ敬シ天ニ事ユルコトヲ忘ルベカラズ上ノ施ス所ノ者ハ廣フシテ

下ノ施ス所ノ者ハ狹シ廣狹施シ異ナリトイヘドモ分ニ從ツテ天ニ事ルニ於テハ異ルナシ天地之大德ヲ生トイヘバ生ニ悖ルヲ不德トス故ニ天地ニ生生スル物ヲ戕賊スル事最天ニ畏レザルベケンヤ書ニ無益ヲナシテ有益ヲ害スルコトナカレト聖人モ警メ給ヘリ今ノ人ノ弄ビ半ハ無益ニシテ有益ヲ害ス天地生生ノ德ニ悖ル事也

最國初ニ比スレバ田野闢ケタルモ多カルベケレドモソレハ又人モ增シタリ今ノ世ニ居テ古ヲ思ヘバ今節儉ヲ盡ストモ猶古ノ侈レルニ齊シカルベシ然ルヲマシテ遊惰ニシテ奢侈ナルヲヤ畏レテモ猶畏ルベキコトナリ然レバ今日庶人ノ厚生ヲ謀ラントナラバ唯儉勤廉耻ノ風ナルベシ儉勤廉耻ノ風與ラザルハ制度ノ立ザルヨリナリ制度ハ則禮樂ノ制度ナリ制度立ザレバ禮樂モ施ス所ナシ後世ノ風俗ニ染ミ唯利ノミコレニ慣ヒタル人

ハ禮樂ノ道ヲ說ケバ迂濶也トテ笑フナリサレドモ國家長久永世平安ノ道禮樂制度ニ非レバ立コト能ハズサレバ漢ノ高祖身匹夫ヨリ興リ秦ヲ亡シ楚ヲ斃シ一時ノ豪傑ヲ役使スルコト嬰兒ヲ掌上ニ弄スルガ如クナリシカドモ禮制立ザリシカバ宴ヲ賜フ折節ナドハ群臣功ヲ爭ヒ劍ヲ拔キ柱ヲ擊チ狼籍如何トモスベカラズ叔孫通コレガ爲ニ弟子ト禮ヲ肆(ナラ)ハシ終ニ朝議ヲ引シカバ一朝肅然トシテ震恐シ大ニ敬ヒ謹シメリ高祖大ニ說ンデ吾迺今日皇帝ノ貴トスルヲシルトアリシナリ高祖ハ昔ノ高祖也秦楚ヲ挫キシ勢ニモ及バヌ所ヲ治ルハ斯文ノ德也禮敎ハ人ヲ未然ニ治ル者ニシテ政刑ハ罪ヲ已然ニ戒ムル者也已ニ然ルヲ戒ムレバ民免カレテ恥ルコトナシ未然ヲ治レバ耻有テ且格シ廉耻禮讓ノ風興ラザレバイカデカ利用厚生ノ道行レン噫孔子ノ聖ヲ以テダニ行レザリシコトナレバトカク人ノ請合ヌモ尤也周公ハ禮樂ヲ制作シテ周家八百年ノ基業ヲ開キ王莽ハ禮樂ヲ制作シテ其身ヲダニ保タザリケリ禮ハ其人ヲ待テ行ハルル者ニシテ其人ニ非ラザレバ事ヲ擾ルモ知ルベカラズタトヒ事ヲ擾ルトモ擾ルハ其人ノ罪ニシテ禮敎ノ罪ニアラズ詩ニモ飮之食之敎之誨之ト云論語ニモ既ニ富ムコレヲ敎エント云孟子ニモ有恒產者必有恒心無恒產者必無恒心トモイヘリ誠ニ兒ハ饑タルニ啼キ妻ハ凍エタルニ號ハバ人夷齊ニ非ザルヨリハ孰カ廉耻ノ操ヲ保タン晋嘗テ正シク聞キキ去ヌル荒年小民飢ユル者ドモ多カリシ中ニ某ノ所ノ一民飢ノ忍ビ難クテヤ有ケン人ノ圃ナル蕪拔ケルヲ其主見咎メケレバ最耻カシク思ヒ衣打カヅキテ臥ヌルガ終ニ食ヲ絕テ死シケルトゾ若バカリ狷介ノ人ニテモ饑寒ニハ操ヲアヤマツナリ此處ヲヨクヨク考レバ罪ハ人人己ガ造ル樣ナレ

ドモ民ニ上タル人ノ德ヨリ起ルコトナリ然レバ人主ヲ始トシテコレニ羽翼タル輩自身ヲ責ザルコトヲ得ンヤ此故ニ政ハ生ヲ厚フスルニ在リ生ヲ厚フスルガ爲ニ用ヲ利ス生薄ケレバ貪ラザルコトヲ得ズ生厚ケレバ貪ル心ウスログタトヘバ溺ヲ救フガ如シ自水ニ溺ルル時ハ子溺ルルトイヘドモ顧ズ自舟中ニ安ンズレバ猫犬ノ溺ルルモ見テ打過ル人ハナシ唯勢ノ足ルト足ラザルトノアイダナリ故ニ民生厚フシテ然シテ後禮讓廉恥ノ風唱フベシ民生厚シトイヘドモ禮讓廉恥ノ風興ラザレバ華奢放恣ニ赴ク華奢放恣ナレバ用足ラズ用足ラザレバ又貪ル故ニ賄賂爭奪興ルナリ夫君ハ臣ノ表也臣ハ君ノ影也表正シケレバ影直シ表傾ケバ影斜也君ニシテ身正シカラザレバ令ストイヘドモ行ハレズサル程ニ國家ニ長トシテ社稷ヲ守ルノ人ハ國家ハ祖宗ノ國家ニシテ社稷ハ民生ノ社稷

其一身ヲ奉ズルガ爲ニ非ザルヲ知ベシ天地ノ大德ヲ生ト云生ノ德ヲ害スル者乃天地ニ悖ルモノナリ此故ニ漢書ニ背ㇾ本而趨ㇾ末、食者甚衆、是天下之大殘也、淫侈之俗、日日以長、是天下之大賊也、トアリ人貴賤ノ隔アレドモ齊シク天地ノ子ナレバ大人モ小人モ天ニ敬シミ事ルニハ隔ナシ天地ノ大德ヲ害スルハ最恐ルベキ事ナリ然レバ各其分ニ應ジ殘ヲフセギ賊ヲイマシムベキコトナリ其事乃經濟也、廼利用厚生正德ナリサレバ利用厚生ニ何程ヨキ道ヲ得テモ己德ヲ正サザレバ令スル所好ム所ニ反スレバ民從ハザル習ニテ禮讓廉恥ノ風ヲコラスイカナル良圖善謀アリテモコレヲ起スニ從ヒテ下吏諸有司金設ケノ趣向トナリコレヲ餌トシテ惡徒財ヲツリ人ヲ虐タゲ今マデアラヌ害ナド引出シ功ナラザルノミカ世ノ笑トハナリ侍ル此故三事利用ヲ初トシ厚生ヲ本トシ正德ヲ主トス德正シ

キ時ハ人感化ス其指揮水ノ窪ニヲモムクガ如シ何レノコトカナラザラン君ハスナハチ陶冶也下ハ則土鐵也ソノ器ヲナシ用ヲナサンコトハ全ク陶冶ノ手中ニアリ

予此書成テ後桂秋齋ノ閒語ヲ得テ讀ムニ足利ノ比ノ物價ヲ載セタリ曰室町殿日記に云一、中間衆の木錦三十五疋買取御役船彥三に上せ申候可有御受取候こつまもめんは今程一疋に付壹匁六分二厘の賣買にて候是もこつまにおとらぬ木錦にて候壹匁三分宛にて候間其御心得可有之候一、御局衆　た衆切米拾貳石うりはらひ可申由被仰越候此比兵庫の賣買壹石に付六匁三分出しの由すいたや新左工門申候其御心得可有之候

十二月二日　林甚五郎

岡村忠左衛門殿

佐野權助殿

飯尾五左衛門殿

予ガ言ノ妄ナラザルヲ徵スルニ足レリ故ニコレヲノセテ見ン人ノ考證ニ供フ

價原畢

豊後跡考

三浦晋 著

豊後は地僻にして王化の日車馬冠蓋の跡稀也故に人才奇事多しといへども只磨滅して世に傳へず野老の諺に千百を一二に爲す名山絶境有といへども末世に廣からずつゝしんで按ずるに元明天皇風土記を詔してその業醍醐帝の朝に終ふ世の變故多きにあひて風土記すでに烏有となる然れ共幸に豊後風土記のこる事を得てその梗槩を拜する事を得たるも幸といふべし頼朝鎌倉に覇業をおこしてより大友能直此國による事を得て爾來四百年一都會と成親世探題の職を賜りてより九州の諸士轅を引輿を攬て豊府にむかはざる事なし唐船蠻舶海につなぎ雲臺高城彩をあらそひいにしへの大宰府のごとしされど人文學にうとく家乘のこらず盛衰概見すべしといへ共半は遺滅して傳へず寺社の記錄は宗麟の耶蘇をたつとびて燒はてしより今殘れるもの稀なり況や予不才淺見あへて此事にあたるべきにあらねどせめてきける事のみをもともといとまに書侍るされど大友治亂興廢のごとき共書あり諸名將の如き不朽の名をたれたるをばしげきにつきもらし侍る謹んで風土記を按ずるに豊後郡八所郷三十里一百十驛九所烽五所寺貳所もと豊前と一國たり纒向日代宮御宇大足彦天皇後に追諡して景行天皇と申し奉る帝豊國直等祖兎名手に詔して豊國を遣し治しむ往て豊前中津郡中臣村にいたり日くれて宿せしにそのあけがた忽白鳥有北のかたより飛來り此村にかけり集りけり兎名手僕者を遣し見せしめしに此とり忽化して餅となり片時の間に芋數千許りと成る冬さかへけり兎名手みてよろこび至徳の感乾伸の瑞なりとし

て朝廷に奏聞しければ天皇大によろこび給ひ兎名手に勅して天の瑞物地の豐草汝のおさむる國は豐國といふべしかさねて姓をたまひて豐國直といふのちにわかれて前後となれり今の速見は速津媛の國大分は碩田の國とてむかしは國なりけりまことに其事あやしといへ共古往の說はすべて是に類する類なり今風土記によりて郡名の解をのす

日田郡

日田は鄉伍所驛一所むかし景行天皇球磨を征伐し凱旋の時筑後生葉の行宮を發し此郡に幸し給ふ神あり名づけて久津媛といふ化して人と成來りむかへ國の消息を申けりよつて久津媛の郡といふ今は訛りて日田郡といふ

玖珠郡

玖珠は鄉三所驛一所むかし此村に洪なる樟樹有しによりて玖珠郡といへり

直入郡

直入郡は鄉四所驛一所むかし郡の東垂水村に桑あり其高き事極めて隋に枝幹直く美なり俗直桑村といふ後に改て直入郡といへり

大野郡

鄉四所驛二所烽一所此郡の所部皆原野なりよつて名つけて大野郡といへり

海部郡

鄉肆所驛一所烽二所此郡は海邊白水郎を業とするによりて海部郡といへり

大分郡

鄉九所驛一所烽一所寺二ツむかし景行天皇豐前京郡の行宮より此郡に幸し地形を遊覽し咲して大なるかな此江やよろし九碩田國と名づくべしとの給へり今大分といふは斯その縁なり

速見郡

鄉伍所驛二所烽一所むかし景行天皇玖珠磨

呂を誅せんと欲して筑紫に行幸し周防國佐婆津より船を發し海邊の宮浦に泊し給ふ時この村に女あり速津媛といふその處の長たり天皇の行幸をきゝ自むかへ奉り奏して申けるは此に大盤窟あり鼠の盤屋といふ土蜘蛛二人これに住すその名を青白といふ又直入郡禰疑野に土蜘蛛三人あり名を打猿八田國摩呂といふこの五人ならびに人となり强暴にして聚類亦多しみな皇命にしたがはずしひてよばゞ兵を興して君をふせぎ奉らんこゝにおいて天皇兵を遣し要害をさへぎりことごとく誅滅し給ひよつてこれを速津媛の國といふ後の人改めて速見郡といふ今ひそかにこれをかんがふるに速津媛はのちをこゝにうつせしにや

國崎郡

郷六所景行天皇御船周防佐婆川よりこなたに來り給ふ海上にてはるかに此國をみそなはし勅してかれに見ゆる處は國の崎のごとしとの給ひしより國崎といへりとぞ今は國東とかけり

しかるに今豐前中津郡に中臣村なく下毛郡中川に中殿村しかれば中川の事なるべきにや

大友系圖

能直　幼名一法師　左近將監豐前守　建久四年賜豐後守護職　豐州能公禪定門　贈三品
- 親實　戢島之祖
- 師貞　出家
- 師俊　三池之祖
- 親家　門司之祖
- 仲能　田村立石之祖
- 親秀　利根四郎大炊介　母高山四郎女　法名寂秀出雲路殿

能秀　託摩別當　託摩坂井迫之祖

時直　帶刀衞門母同前 號二久保一　得永平井之祖

有直　元吉四郎母白柏子

景直　太和太郎左衞門 母親秀同前　一万田之祖

能郷　八郎入道眞寂同前　志賀朝倉之祖

能基　九郎入道明心母同前 簗井左衞門養子

泰廣　左近藏人母傾城　田原之祖

賴泰　式部大輔出羽守又號二兵庫頭一 常樂寺院殿忍公

重秀　左衞門基佛阿　戸次之祖

能泰　修理亮藏人母冷泉房道善

直重　大炊四郎母阿波藤内左衞門女　狹間之祖

賴宗　改號二野津親直一

親重　母賴泰同　木付之祖

親泰　母同前　田北之祖

親時　因幡守 法名因州道德

秀顯　兵庫助　入田之祖

師親　藏人佐　今野津之祖

貞親　藏人左近將監 出羽守 萬壽寺殿玉山道溫居士　應永戰亂云牛糞松野之祖

貞宗　藏人左近將監近江守 直菴具簡公

貞順　近江守爲二南朝一死

貞載　左近將監建武三年戰二死于京一

宗匡　左近將監參河守　立花之祖

氏泰　式部大輔法界菴主獨峰法山魏公 尊氏賜二游姓一

氏行　兵部大輔後改二行宗一 以レ與二南朝一爲二弟氏時一見レ滅

氏時　起レ兵使二尊氏東征一無子

氏鑑　左近將監

氏世　右馬頭

氏繼　修理大輔係太郎 不二菴殿福州授公居士

親世　修理大輔瑞光寺殿勝幢祐公 討二平菊地一應永七年上洛賜二九州探題職一自レ是至二義統一世探題

親著 式部大輔 大恩寺殿玉菴道瑛公

持直 中務大輔 觀音寺殿玄乾理公

親隆 出羽守

孝親 大膳大輔

親綱 小名花市丸 左京大夫 大聖院殿耀光君公菴主

親直 大和守

親雄 常陸守

親繁 豐後守 心源寺殿源道法公菴主

師能

直祐 十郎於二筑前香春一戰歿

永泉

能賢 筑後守

政親 豐前司 海藏寺殿從四位下侍兼三州太守珠山意公菴主

義右 修理大夫 大智寺殿前匠作大監兼二州大守傳芳親公居士

親治 備前守 見友院殿梅屋友公大居士

親勝 七郎 一本作二親胤一

義長 修理大輔 大雄院殿大眞昭公大居士

義鑑 修理大夫 到明寺殿松山紹康大居士 或曰前匠作六州大守松山義鑑大居士墓曰杵野津院到明寺

義鎮 左衛門督 休菴宗麟

八郎 逢二內亂一見レ弑

義長 內左京大夫 繼二大內家一爲二毛利一見レ滅

女子 土佐一條康政室

義統 左兵衛督朝鮮役國亡文祿二年也母大內義興女自二建久四年一至二文祿二年一四百一年二十二世其後經二七年一有二石垣原役一慶長五年也

親盛 田原與兵衛紹忍養子 居二豐前妙見岳城一

大友略傳

大友の祖從位左近將監豐前守藤原能直は源賴朝蛭小島にましませし時賴朝の舊臣大友一曰波多野四郎經家とて上野國利根の郡主なりしが其女子をして賴朝にまいらせけるこれを利根の局といへりいく程なく身唯ならず成ぬ御臺嫉妬ふかゝりければこれを齊院次官親能にたまふ大政大臣道長のすへなり承安二年を以て生る幼名は一法師生て穎悟なり九才より賴朝に近侍し富士野の夜討に金言をすゝめ奥州泰衡征伐の時使を奉じかつ戰功あり時に年十八そのゝち豐後守護職緒方三郎惟義かまくらの命にしたがはざりしかばついに上野沼田に配流有よつて建久四年豐後豐前の守護職として入國あり緒方は族大野九郎泰基をせめほろぼし一國平均す貞應二年十一月廿七日に逝去有二代親秀三代兵庫頭賴康四代親時五代貞親六代貞宗のちに入道して具簡と號す元亨建武の亂或は官軍に屬しあるひは鎌倉に味方しあるひは將軍に心をよせ反覆常ならず勢次第に强大なり七代氏泰專忠を尊氏につくす因て尊氏より源の姓を賜り氏泰の兄貞順南朝に屬して戰死す弟兵部少輔氏行も新田楠へかねて志を通じければ其弟氏時終に是を亡ぼしぬ八代の屋形となる此時尊氏職利なうして筑紫に下り給ひしかども菊池いたく拒ぎ戰ひしかば將軍既に危かりしを氏時二豐の兵をおこし菊池を追かへし田北孫太郎親通といへるものを筑後黑木の城へおさへとし兵船を催し終に兵庫湊川において楠正成を討とり將軍の覇業をなさしめたり氏時子なきを以て氏泰の子修理大夫氏繼をして家をつがしむ此時菊池武光將軍のみやをかしづき奉り已に九州を併呑せんとす氏繼屢戰ふといへども勢敵する事能はず和を請けり武光已

に卒し武政相續いで武威をふるひしかば將軍より今川了俊を九州の探題とし大内介義弘を副將とし大友もろとも力を合せ戰ふといへども終に勝事あたはず是によつて應安七年將軍義滿自御馬をむけられ終に和睦に成けり氏繼多病なるを以て弟親世家をつぐ親世人となり穎悟にして右の股に七十二の黑子有自高祖といふこの時菊地武政屢兵を豐後に遣て寇しけるに武政の鋒するどうして是が爲に窘しめらるゝ事年有其後武政死しその子武朝家をつぐ親世是と屢戰て終に菊地を討從へ九州二島を掌に入應永七年上洛しければ將軍北山殿御感あり終に九州の探題職に任せられ大に大友の家をおこせり親世子多しといへども順義の志ふかく氏繼の子親著にゆづる十一代式部大輔親著の嫡子大膳大夫孝親暴戾にして無賴の徒をあつめ驕恣なりしかば戶次釆女といへるもの顏を犯して諫けるに孝親憤にたへず人を遣て是をうたしむ折ふし親著こゝを通られ制せんとしけるをあへなく馬より斬おとしぬ孝親もさすがに罪の遁るまじき事をしりて自殺しぬ是を應永十三年とす二男花市丸この事をうく思ひ出奔しけるを漸くにして尋ね出せしかども末年いとけなきを以て親世の嫡男中務大輔持直弟出羽守親隆と心を合せ孝親の殘黨をほろぼし八年を經て永享五年家督を左京大夫親綱にゆづる親綱は花市丸也此頃播磨赤松滿祐謀反して九州中國にも反黨多かりしかども親綱將軍義勝の命を奉じ終に九州靜謐し先祖家名をはづかしめず寶德三年又國を叔父親隆に讓り親隆寬正六年又親綱の弟豐後守親繁に讓るこの歲筑後黑木三池小代豐後の下知をそむきけれども親繁馬をむけられければ刄に血ぬるに及ばず黑木等みな降參してけり應仁三年豐前城

井長野そむきけれども嫡子政親の一戰に城井首をさづけ又平均しけり文明五年政親家をついで同十六年義右家を繼し明年內亂あつて父子ともにほろびぬ政親の弟親治弟七郞親勝小原四郞左衞門右並が內亂の餘黨たるを以て是等を亡ぼし家をつぎ嫡子修理大夫義長に世をゆづるそれより修理大夫義監にいたる義監いとけなきを以て親治後見たりしが大永四年に卒す親世よりこのかた大友九州の探題としてみな其下知をそむくものもなかりしがこの頃中國大內勢大にして九州をうかゞひ其將陶なるもの兵を筑前に遣しければ二筑の間是にくみするもの多して漸騷動に及ければ義監諸將に命じ陶を中國に追かへし殘黨を攻なびけぬ享祿三年春府內の諸士氏性を論じて大に爭鬪ありこの夏南蠻の船來り始て鐵砲を獻ずそののち又石火矢を獻ずこれを邦鐵砲の權輿なりつひに四位少將に任じ無事をたもたれしに嫡子義鎭の驕奢なるをにくみてや有けん又は次子八郞を寵しけるにや嫡を廢し八郞をたてんとしけるに計密ならず其臣津久見田口等の爲に夫婦父子皆弑せらる世に是を大友の二階崩とす天文十九年也よつて義鎭其あとをふむ事を得たり是二十一代の屋形なり後には薙髮して宗麟といふ此時に當つて毛利元就中國を打したがへ兵を出して屢九州をおかす義鎭のひとゝなり自もちゐる事をこのんで驕奢なり讒を信じて人をあはれまず故に幕下志一ならず秋月高橋筑紫みな專心を中國に通ず、此時豐府豪傑尤多し故にむかふ處破らずといふ事なしといへども終に靜謐をなす事あたはず肥に龍造寺おこり薩に島津おこり日日に九州を蠶食す宗麟恬然として驚かず初は禪をこのみ終に天竺宗に歸し神祉佛閣を破壞燒亡し色を好んでは夫を

ころして妻を奪ひ茶器を愛しては弟を見殺し唐船を爭うては無用の兵を起し鷹を愛しては隣國とうらみをかまへのちには諸國の治がたきにあきて臼杵の丹生島に隱居し義統に世をゆづりしかども唯名のみにして實はみな宗麟の指揮なりしかのみならず義統柔弱にして事にたへず權柄盡嬖臣田原紹忍が手にあり豐府の諸臣英雄濟々たり其中戸次道雪のごときは智勇節義かねそなへたり宗麟猶威名をうしなはざるものは道雪の力なり高橋紹運吉岡宗觀吉弘齋藤幕下には肥の相良義陽甲斐宗運まことに是をよく撫育し專心を治道にすくゝせば天下といふもおさむるに足なん況九州二島をや是等の諸士或は憤激して戰死しあるひは老て死しければ府中の諸士各離心を抱き今は豐後一國だにたもちかね大閤秀吉の威武をかり纔に一國をたもつ事を得たり薩兵の來る時薩の諸將豐の諸城をぬく事あたはず義統臼杵に父宗麟ありせめて城下の一戰にも及ばず一番に龍王城にはしりぬされば朝鮮の役にも鳳山に在て明兵二十萬小西をかこむ事急なりときいて聞にげをせしにより文祿二年終に大閤國を召上られ久敷毛利輝元にあづけられけるが石田にはかられて恢復をはかられしかども寒灰もえがたく石垣原の一戰敗北に及び黑田如水のとらはれと成のちに常陸に配流せられ慶長十年をもつて配所に終へ四百年の勳業つひにむなしく成はてぬ

黑嶽

俗に傳ふ此山仙都ありむかし樵夫ふかく山にわけ入しに老叟の相むかひて碁をかこむを見るこの人をみてこゝは汝等の來るべき所にあらず早くさるべしといひしかども歸らん道を忘れければ仙人米の淅(カシミヅ)を流して此水のながれんかたにされとおしへければこ

れにしたがひてさとへかへりけるが其後終に處を知ず今にその流とて白水の流あり直入部に嵯峨天皇の宮と言傳へて大社あり毎年十月十五日神保會とて祭禮あり此みやに大友家より代々神馬を獻じけるに政親の時に獻せし馬はなれうせける義鑑の時現れ出人を食ひ牛馬をくらひける大友の勇士大久保藏人城後因幡夜ひそかに忍出此山にいたり終に是をころしぬ世に是を馬鬼といふ大常の馬を二つ合せたるばかりにして眼ひかり鬣の長地を拂ひし口ひろくして鼻のうちの赤き事朱を注ぎたるがごとしのちに是を一社といはひて塔の原といふ處に在とぞ黑嶽の頂男池女池ありむかし龍あつてすめりと

熊群山

黑嶽山にとなる山の神を熊群大權現といふ其說にむかし安部宗任戰まけてとらわれと成豐後に流されけるが其末子安部三郎實任獵漁をこのみ此山に入熊の群るを見る實任あやしみて其あとを見て佛像を得たり是より此山を開けり山は權現なるを佛といふもあやし宗麟の時田北大和入道紹鐵田原右馬頭親實のうつ手をいなみて暫く此山に引籠りしを府內の諸將攻けるに紹鐵こゝを落て日田松原村にてうたれぬあとは燒拂へとの下知なりしかどもこの山は天狗のすむよしにて在陣の間も或は暴風をこり天狗倒しなどいふ事しければやかずしてありしかども誰經營する人もなくて打過ぬ

莊山萬壽寺　大分

大友貞親在鎌倉の時平貞時禪を崇まれしが大友殿には定めて出家を馳走せらるべしと有しかば取あへず筑前博多天寺直翁和尚をまねき百餘人の僧を供養するよしこたへ申されければ貞親をことにふかく思はれける

が貞親うそいひて心安からずいそぎかへり吉弘美濃守といふものを吏とし德治元年直翁を招きこの寺をひらく是を佛印禪師といふ元龜元年宗麟の近習工藤帶刀罪をおかして此寺にかくれ居しかば宗麟橋本五右衛門清田因幡に貳百餘人をあたへ是を燒はらはしむ俗說に傳ふるは嵯峨天皇の時百合若大臣といへる人あり勅を奉じて賊を追うち筑前玄界が嶋に登る其臣別府兄弟百合若の熟睡するをうかがひ纜をとき國にかへり其御臺を殺さんとす家督(カド)翁おのれが娘萬壽姫をころして御臺を助け奉りけり其後百合若歸國あり別府兄弟を亡し姫の菩提をとむらひて此靈場をひらけりしかれども百合若國史にのせず大臣の號殊更いぶかしある人の曰かりに大臣を賜ふと力つようしてよく鐵弓をひく今備前酒折宮にその弓をおさむといふその墓府內にあり別府兄弟の墓にありむかしは四方八町の境內にして十刹の一也十境有青雲橋豐嶺鐘鬼氏爐萬年松白蓮池文殊刹七步橋上原茗霜竹松雪是也今の萬壽寺の西にありと佛印元亨二年四月十六日寂下野足利宮內少輔泰氏の息なりとぞ

寶陀山淨水寺　玖珠

俗につたふ日羅のひらく處と敏達天皇の時豐後に二人の長者有田野朝日の長者三重眞野長者といへり田野の長者一千餘町の田有眞野の長者は久しく富さかへけるが田野は早くほろびけり田野ひとりの娘ありて男子なし鍾愛淺からずむことをとりてけるが正月破魔弓の遊に興のあまり鏡の餠(モチヒ)を投て是をいさしめんとしけるに此もち白鷺と化し飛で大分郡阿南の庄內にとどまる長者は白鳥明神を尊敬して玖珠郡に祭りけり白鳥大明神は日本武尊東夷征伐の時近江千の松原にて失給ひしが其靈白鳥と化し河內國にと

どまり父紀伊國名草郡に飛行し尾張國松子島に行その後此國にとどまり給といひ傳へたりそれよりやうやくおところへ跡なくなれりとぞ今に田野の七不思議とて千町無田とて野の薄各さかひありて早稲晩稲などいろいろの穂色を同くせず是一長者のかひし鶴とて雙鶴あり夏冬ともにこゝにすみてまさずへらず是一青梅とてことに根の木有てそのもとをもとむれば梅のごとき物有

淨水寺は即朝日長者の念じ佛なり宗麟の時戸次山城守田北紹鐵をせめてかへるさ戸次に與力しける奴留湯左馬助といふもの由布院にて大身のものなりしが流行の天主教に歸し佛をいみにくみ手勢三百餘騎をもつて燒拂ひけり

由原山

八幡宮鎭座まします豐後の一の宮也西寒ッ田神祭日神三座神功皇后應仁天皇武内宿禰賀來の社ともいへり由原又柞原につくる大宮司は賀來氏なり社家百餘家社僧十四坊延暦寺金龜和尚豐前宇佐へ一千日參籠し妙奠秘法を勤行しければ淳和天皇天長四年八の白幡賀來の庄楠にとどまれりよつて阿南の庄より材木を運び神殿造營あり同年十月夜倉木山に星あまた降り粲爛として二葉山より倉木山につらなれりその星のふれるを星嶽といひ星を神體として星岳高岡山妙見といはひまつりけり夘酉の年を大神保會とて三處の神輿星岳に御幸一宿して還幸なり其處を幸野といふ傳ふ倉木山において速見大分の郡界に異國降伏の鉾をたて給ふこのゆへに此山を鉾の山といへり貞觀十一年三月廿二日無位西寒田神に從五位下を授くと類聚國史にもみえたり三十三年一度の造營有六月廿九日祭禮あり神輿を生石の濱に出し奉り其日還御あり八月十四日放生會あり同日晝

生石の濱に御幸有七日浡殿にとゞまり二十日に還御あり此時生石の濱に市を立諸方の商賈或は船にして來り馬にしていたりさもにぎはしき市なり宗麟寺領神領沒取の時國中の神人法師等宗麟を呪咀するの由そのきこえ有ればいよいよきびしく申付られけりみな追放しけりこの年例にしたがひ三所の神輿を御幸なしまいらせけるに風雨大におこりかかりの御殿をはじめ屋形よりかまへける三十六間の棧敷をはじめ近きあたりの民屋まで殘らず波につれて海に引入けり神輿は道の半にして俄におもくなりければはなれ木の坂より還幸なしけり世に是は神の怒也といへり

石井郷 日田郡ノ西

むかし此處に土蜘蛛あり土蜘蛛とは賊の惣名なるべし此處に堡をきづきしに石を用ひず土を以てしければ無石堡（イシナシ）といへり今石井郷と云るは訛なりその郷の川を阿蘇川といふ肥後阿蘇郡少國の峰よりながれ玖珠川に入日田川といふながれと西海に入年魚（アユ）多し

鏡坂 同

景行天皇此坂の上に登り給ひ國の形を御覧じ地かゞみの面に似たるかなとの給へりよつて鏡坂といへり

禰疑野（ネギ） 直入

景行天皇行幸のとき此野に三の土蜘蛛あり打猿（ウチサル）八田國磨侶といふ天皇此賊を伐んとてこの野にてあまねく兵衆を勞ひ給ひしゆへ禰疑野といふ柏原野の南にあり柏原郷は郡の南にありむかしは柏の木多かりし故名づけしとぞ

蹶石野 同

柏原郷のうちに在天皇土蜘蛛をうち給はんとて柏峽（カシハオ）の大野に幸し給ひ其野に大なる石あり長さ六尺廣さ壹尺厚さ三尺天皇これに

いのりて朕今まさに此賊をほろぼさんとす當に此石をけるべし譬へば柏の葉のごとくにして擧れとの給ひて是を蹶給ふにはたして騰る事柏の葉のごとく成しかばよつて蹶石野といへり

球覃郷(クタシノ)　同郡の北

景行帝行幸の時奉服の人御飯(ミケ)に擬(アテガツ)て泉をくまんとしけるに蛇靇あり於箇魚といふこゝにおいて帝將に象あらんとす汲用しむる事なかれとの給ひしにより臭水(クサシミツ)といひし後に訛りて球覃といへり今は朽網と書今燧(ヒウチ)を出す球覃燧とて名物なり朽網三河入道宗歷さつまに志を通じけるゆへ三佐にて大閤よりころされ知行は大友家を齋藤道歷に賜はりける島津兵庫頭義弘くたみに陣す

宮處野

球覃郷にあり景行天皇土蜘蛛征伐の時此野に行宮を立給ひしかば宮處野といへり

球覃峰　同郡西

此峰の頂に大垣繚の基無數(カヅ)の川あり名づけて神川といふ又二つの湯川ありながれて神川に入

海石榴市　血田　並に大野郡の南

景行天皇球覃の行宮にましまし鼠ノ石窟(イハヤ)の土蜘蛛を征し給はんとて群臣に詔し海石榴(ツバキ)の樹をきりとり椎(ツチ)となし猛卒を簡び石窟の土蜘蛛を襲ひ悉くうちころしければ血ながれて踝(ツブナキ)を沒しけりよつてその椎をつくる處を海石榴市といひ血をながす處を血田といふ

頸峰　速見郡柚富峰西南にあり

此峰の下に水田あり宅田といふ此田の苗を鹿つねに出てくひければ田主柵をかまへてうかゞひまちけるに其夜も鹿の出て己が頸を柵の間に入て苗をくひけるを田主とらへて頸をきらんとしけるに鹿人のごとく物いひて我今まさに誓を立なん死をまぬがれしめよもし大恩をたれ死をゆるさば我子孫に告てながく苗をはましめじといひしかば田

主大にあやしみおそれてゆるしけるこれより鹿その田のなへをはまずよつて頸田とよびしゆへ峰の名をも頸峰と呼しとぞ

伊美　國東郡北

景行天皇此村にましまして此國は路遙かに遠く山川隔り往還も踈稀に此國をみる事を得たりとの給ひしにより國見村といひしを訛りて後には伊美村といへり

寄邊(ヨルベ)池　同山香郷

いつの頃にやある郷相こゝに配流せられ此池のほとりに一宿し給ひ夜もすがらかはづの鳴ければ

終夜眞砂を聲の數として寄邊の池に蛙なくなり

とよみ給ひしがそののち此池の蛙つひに鳴ず近き頃ある行脚法師の來りて

いにしへのあとによるべの名はありて荒のみまさる池の草村

姫島　國崎郡北海中

津の國に在ともいへれども豐後を是とす萬葉ニ姫島ノ松原見ニ娘子ノ屍ヲ作歌河邊宮人

妹が名は千代に流さむひめしまの小松がうへに苔おふる迄

とあり河邊は豐前の地名也山形あるひは伸あるひはしじまり石きよきものは玉のごとく工なるものは木のごとく眺望他にこと成里俗いひつとふ用明帝眞野長者の女玉依姫をひきゐて都にかへり給ふとて暫く船をこゝに繋ぎ給ひ玉依姫歯をそめ給ひし處とて歯黒井あり鐵醬谷とて水ながれ出その谷の石あかくさびてあたかも鐵醬のごとしその筆をさし給ひしがつひに柳と生けりとて處の名物とす好事の者島柳とて甚賞する事になん侍る又柏子水とて手をたゝけばこれに應じて出る水あり眞野長者の事さかんに世につたへて國史古書にみへず歯をそめ眉をぬ

くことは鳥羽院の朝にはじまれりといへば用明帝の時にあらん樣なしその谷の水の鐵醬に似たるにていへるにぞ此類多し守屋が啄木（ケラツツキ）となり平家の蟹となりしの類や是を附會といふその鳥その蟹のあるによりよき趣向なればとりあはせたるやされば こそ平氏ほろびし地にては平家蟹とよび武文死したる時にては武文蟹とよび島村死したる處にては島村蟹とよぶからのふみにひがしの國をのせて黑齒國といふ有徂徠物氏は今の羽黑の地なるべしといへり齒ぐろの地の名もあればむかしより有けんかもしらず

宇智山

三重宇智山の觀音は眞野長者の念せし佛也といひ傳へたり長者一女有玉依姬といふたへなる美女にてぞ有ける此よし都にきこへてその時用明帝いまだ東宮にましましけるが此事をきゝ給ひめせども長者わかれをかなしみとかく辭じければ太子ひそかに都を忍出給ひ名を山路とあらため長者が家の草かり童となり給ひけるされどなれぬ手業なればせんすべもなかりけり山路笛をよく吹給ひければよの草かりども笛きかせてよ草かりてんとてつねに山路は牛背にまたがりて笛ふきて其わざにかへ給ひしとぞ長者山路の常人ならざる事をあやしみ物かやしてて太子なる事をしり大におそれ驚き姬を供し都におくり奉りけると此事かまびすしく人口につたふ國史諱んてのせざるかあるひは風流業平ごときの卿相ありて此事ありしか今其あとありて嚴然として存せり

四極山　大分　笠ゆひの島

古今しはつ山ふり
しは川山打出て見ればかさゆひの島こぎかへるたなかしを舟

沈墮瀧

瀧二つあり雄沈墮雌沈墮といふ近衛信尹公
布引を廿ばかりはかさぬともふもとにな
らめ豐國のたき

石川丈山

峰巒一派掛長虹　亂溜散漫烟霧中
欻白銀河波底出　白龍倒下碧雲宮

又

竦傑嚴涯不測泗　驚端急硤眼如眩
高源漲落飛氷雪　萬馬千雷吼磵川

和　　杏菴堀正意

飛流如雪又如虹　人骨清冷一望中
高直明明奇施處　却疑素練落天宮

又

飛瀑落來沈墮淵　淵深巖嶮忽爲眩
古今此處號男女　盟久千年山與川

是むかしの血田にや

海藏寺

臼杵海藏寺は豐前守政親の墳寺なり宗麟始は禪に歸し其後蠻舶の來るにより田原紹忍ふかく心を天主の敎にそめ無遍如露法師因果居士などいへる專邪義を勸めけり始は大德寺より眞叔和尚をまねき參じられしがのちには何となく出入人もなく成ければ眞叔和尚退院して日向のかたへと志されしを盜人きゝてかね奪はんとて殺しけり是より自然と敗壞に及びぬ

住吉社　大分

六月に祓會(ハラヘ)には神輿を小舟にのせ奉り十二人の神樂男管絃を奏し八人の舞姬袂をひるがへし邯鄲の湊をこぎまはるしはつ山こぎ出てみればよめるひなぶりは是なり永祿十年の夏山森紹庵といふもの屋形の下知なりとて神社をうち敗り火をはなつて燒すてけり義統いかり逆徒を罪に行ふべき沙汰ありしかども紹忍さまざまに申て其事はやみぬ紹庵も三七日過ずして身まかりけり

木付　速見

木付檢非違使別當從五位下親重始大炊六郎豐前八郎とも稱しのち木付大炊介肥前守左衞門尉とも稱す速見郡の武者所たり能直の孫親秀の六男なり母は三浦肥前前司家連の女建長の頃北條重時に從ひ賴嗣公に謁し鴨川に住し木田村臺山城草創有親重あくまで和漢の文に達す宗尊親王に侍して文話に及び應對ながるゝがごとし親王感じ給ひ卿がごときは實に和漢將軍なりとの給ひしより世に是れを和漢將軍とよんで欣賞せり四代大炊六郎賴直（後美濃守大炊介）應安七年將軍義滿菊池征伐の時田原直平と同じく先鋒たり世に戰功多し十五代大炊介鎭秀法名宗虎の時に當て田原右馬頭親貫謀反の時親貫は鞍懸の城にあり安岐も又同敷かりければ鎭秀奈多大宮司奈多左衞門鎭基とうつて安岐の城を攻て戰死其後薩摩府內を陷れしときも十六代中務少輔鎭直いたく拒んで入ず是によつて薩兵國崎に入事あたはず宗麟義統其功を大なりとして吉弘嘉兵衞を以て感牒を賜ふその子三郎左衞門統直文祿二年義統朝鮮にて國沒收せられし時門司の浦にて入水し其計音いたりければ統直夫婦生害ありて國斷絕す親重より統直にいたつて十七代建長元年より文祿二年迄三百六十一年文祿二年宮部挂俊きたり國郡を改め文祿四年より前田德善院僧正玄以に賜りて代官を使として國を治む――慶長元年杉原伯耆守平長房近江坂下より轉じて木付の城主たりそののち細川越中守忠興に賜ひて松井佐渡守康之有吉四郎左衞門尉立行慶長五年木付の城を守り是は石田三成亂をはからんとして細川忠興の羽翼をそぐの計とぞきこへし此頃黑田如水中津にありひそかに小船にのり富來安岐の城をうかがひ木付の城に入如水松井有吉に

かたられけるは今越中守殿へこの地の物領は三成異志あり越中專志を內府へ屬せらるれば越州の勢をわかたんとやされども兩國みな敵となり如水これにはたらかんに木付助力せば誠に大なるたすけなるべし內府には此事をはかり給ひてぞとかたられば松井有吉大に驚き內府越中守へかたり給ふ事御ことばに違はずとて感賞しけり義統より宗像掃部を將としてせめしかども松井有吉かたく守て拒ければかつ井上九郎右衞門援兵として如水よりさしむけらる由きこへしかば引はらひてさりぬ寛永九年小笠原松平壹岐守忠知木付にうつる四萬石を領す正保二年そのゝち松原東市正丹後守重賴高田を轉じて木付にうつる是七松平一野見也實は小笠原兵部大夫秀政の子正德年中松平豐前守重休二年壬辰八月十四日木付を杵築と改む按ずるに出雲杵築有出雲はづを濁聲とし豐後はつを清聲とす

鞍懸城 國崎

佐野村の後の山に在田原氏是による義統の時田原右馬頭親貫異志をふくみ筑前高橋秋月等と計をあわせ府內をはからんとす立花道雪此事をしり急に書を以て鞍懸をせめん事をすゝむよつて宗像掃部大鶴河內に二千餘騎をあたへてせめしむ田原の家臣秋月高橋の援兵八千餘かなこへに打出畑統景が城を攻むる事急也宗像大鶴大に戰て田原がたを敗る時豐兵千五百かけつけ共に終に城を敗る親貫自殺す親貫の妻は義統の妹なり城おちいり自害ありけり時故鄉に贈られしふみに

露とのみちり行花の木すへには名ばかり
殘す木木の嵐(ヤマカゼ)

諸書には義統の妹を親貫に嫁せんとしけるにある人議して親貫をさかしらしければ其

事やみしを憤りて異志有といへり宗麟の妹とかけるも有非なり西州記には義統の妹と有いづれが是なるにや

馬城　國崎

田染にあり牧の城大友の時古庄黨これによる

田原　國崎

能直十一男中務少輔左近藏人恭廣田原別府安岐を領し田原に城をきづき田原と稱す後安岐に城を築き兩田原と成其後田原直平あり義滿兩征の日木付賴直と共に先鋒たり今の寶陀寺その菩提寺なり直平の墳今尙あり

安岐　同

六郷山緣記には秋と在此浦を紅葉が浦ともいへり此水足曳山より流れて秋のすへに落るといふ事とぞ大友豐後沒收の後大閤より熊谷内藏丞丹治直陳一萬五千石始名半次をおかる石田三成に與して關が原に戰死す一族熊谷外記留守たり如水石垣原の戰に打かち歸て此城をかこむ城中兵すくなく勢孤にして支る事あたはずつひには扱と成て城を明わたしぬ如水降れるをうけて一人をころさず平塚孫大夫といふものを城番に入富來の城にむかはれけり今の實際寺田原氏の菩提寺也

富來　同

富來の城は大友の家從富來氏これによる義統改易の後筧和泉守家純二萬石諸書に垣見とも出たりに大閤より此城を賜ふ關が原の役石田に與し在陣す一族筧利左衛門城を守る小城なりといへどもいたくふせぎけり時泉州にて戰死の訃音來りてよつて開城あり石垣原安岐富來の役は慶長五年庚子の年なり

高田　同

建久七年能直入部の時鎮守府將軍武藏守源滿政九代の裔高田掃部助重定といへる人從

ひ來り名字の地なればとてこゝを賜ひ文祿年中高田伊賀守正孝迄十七代その年竹中源助重信（一萬三千石後號伊豆守）城守たり如水まさに豐後を征伐あらんとして高田を通られけるに使を以て只今東表へはたらき候間いそぎ人數を出され候へと有ければ今少し用意相とゝのへ候まゝあとより勢を出候はんと返事しければ敵とも味かたともしれぬ人の後より勢を出さんといへるをそのまゝに打置べきにあらずとて勢を高田の城へ立なほしければ城中より家老不破三太夫といふものいそぎはせ來りいろ／＼とわびして息釆女正に人數を付東征にしたがへしむ其年伊豆守府内に轉じしばらく敗城と成三十九年を經て寛永十六年松平丹後守重直豐前龍王城を轉じて再造す息東市正重賴正保二年木付に轉じ城ながく廢す（親繁の時應仁三年豐前城井右衞門佐長野壹岐守謀反の時嫡子政親兵五千を卒して高田に陣しすゝんで城井をほろぼす）

日出　速見

日出は大神城主常陸介源鎮正入道の弟大神河七郎鎮氏の食邑なり慶長六年木下右衞門大夫豐臣延俊日出にて三萬石拜領あり細川忠興の縄張にて富來の大手の扉を日出の裡門のとびらに用ふ文人は暘城といふ毛利兵橋大江重政（後號豐後守）大閤の時こゝに在（延俊は秀秋の兄忠興の妹聟も と姫路の城主）

臼杵　海部

永祿六年大友宗麟これをきつて薩兵府内を陷れし日も宗麟これを守りて落す丹生鄕丹生島也風土記に昔時の人此山の沙をとりて朱砂をなせし故に丹生鄕といふと見へたり豐後改易の後太田飛彈守（三萬五千石）これに居る今は稻葉右京亮これに居る尤要害の地なり

淨土寺　大分

天正十四年讚岐國主仙石權兵衞上使としてこゝに陣す

瑞光寺　同

同長曾我部土佐守こゝに陣す親世の寺

三重

三重の城主麻生常陸入道紹和さつまに內通してさつま勢を引入たる張本也のちは日向にはしる

鶴城

島津中務少輔昌久戸次の內利光鶴城をかこむ城中七百餘寄手壹萬五千數十日をへておとす事あたはず是戸次道雪の城なり道雪の餘風ありてや利光伊豫佐藤美作德丸傳八加藤兵庫介などいふ者戰爭甚つとむ此城の援兵として仙石長曾我部等敗軍しぬ

高崎

天正七年燒亡して後修復なし府內陷るの時義統こゝに退がれしは先祖刑部大輔氏時菊池肥後守と合戰の時籠城ありて運をひらかれし例を引れし也されど兵粮の運漕も自由ならねばとて田原紹忍が居城豐前龍王城へ退かれけり

栂牟禮

佐伯惟定が城なり惟定は大身のものなれば先あつかひてみよとて島津義弘より使を立られけれどもおもひもよらずとて承引せず島津勢押よせんとしけるを伊藤三位入道が家臣なりし山田土佐入道匡政といふものはかり事をすゝめ堅田といふところに大に薩兵を破り無事に城をもちたりけり太閤秀吉御感ありて兩通まで感を賜ひけるとなり

津野牟禮　玖珠

新納武藏守六千餘騎にて此城によせけるこれには森帆足小田長野などこもりける要害よければのちは遠巻に巻ほぐしにぞしける

田北　大分

田北平介統員が城なり統員龍王にあり老母家人松牟禮の城にこもるよつて新納武藏守

が弟右衛門佐久將四千餘騎を率ひて此城をとる

船げ尾

齋藤將監風早因幡等此城を守りていたくふせぎしかども城中風早因幡かへり忠して城を焼たてしかば終に右衛門佐久將に恐られぬ

辻臺城

武宮氏是による

鳥げ鼻城

橋爪氏是による

松ゲ尾城

大津留河内守鎮益が城也新納久將ぬく事あたはず

權現山城

狹間の城主鎮秀がこもれる城也久將ぬく事あたはず

玄鳥(ツバメ)が城

新納久將權現山の城をせむるとて古き城をとり服へて與力の兵をこめ置けると也

鶴崎城

吉岡氏是による吉岡宗觀は宗麟につかへて大に軍功有嫡子掃部介戰死しその子甚吉龍王にあり掃部介後室林左京亮が娘なりしかば尼となりて妙林といへりかたく此城を守り晝夜をこたらず薩將伊集院美作守野村備中守白濱周防守等が三千餘騎を敵として屢戰て屢かつのちあつかひと成て下城しそののちいたく薩將をもてなしけるが大閤西征の時さつまへ歸らんとしける時伏兵をまふけ白濱野村をうちとりぬ大閤ふかく此事を感じ給び召出し對面あり恩賞も行はるべしと沙汰ありしかども固辭していでず

岡城

竹田の城ともいへり能直入國の時志賀八郎こゝに居せしより志賀湖左衛門親善にいた

る湖左衛門が父道益はさつまに志を通じぬ湖左衛門かたく岡の城を守て敵これが爲にくるしめらる文祿二年湖左衛門も朝鮮に入りけるが家斷絶して爾來中川修理大夫秀征これに居るさつま平均の時道益切腹あとを湖左衛門に賜ひし也修理亮は瀨々所の孫右衛門太夫の子也右衛門太夫朝鮮にて卒すよつて修理亮にたまひ大友の舊臣田原紹忍京像掃部を與力として付をかれけるが義統下向の時中川より臼杵をせむべきとて出せし兵を立石に押むけ宗像はいさぎよくうち死しけるが如水は石垣の軍やぶれしかば又取てかへし臼杵にむかひしが太田飛驒守が手のものにうたれけるときこへぬ

立石村　速見

大友能直はじめて豐後入國の時先こゝにとゞまり給ひし先蹤とて義統もこゝに陣せられしが一戰に討まけぬしかれば立石は大友始ておこり終に滅するの地なり

石垣原

石垣村の西にあり慶長五年九月大友義統黑田如水こゝに戰ひ義統つひに擒となる此戰人口に膾炙するを以てこゝに略す

天主

豐後には如漏法師因果居士無遍などいふものさかんに天主敎をいざなふ宗麟紹忍甚これをこのむ義鎭上洛の時將軍義昭この事をなじり問れしかば海藏寺をたて禪を尊むのよしこたへらるかさねて如漏法師をめされ信長をして宗の事を政しめられ邪法ならば罪に行ひ正法ならば建立あるべしと也信長淀の邸にめし馬屋の口にてことばをきゝ樫の棒にてうち殺し首を梟すよつて義鎭俄に大德寺より眞叔和尚といふをまねき自も薙髪して休菴宗麟と號し紹忍等を始として入道とするもの多かりしが程なく眞叔和尚を

も追出しぬ吉弘内藏助といふ者に命じて國中の佛像を日々に五駄三駄づゝとりよせてやきうしなひけり

瓢簞茶入

陶全姜其主大内義隆を弑し國をうばひけれども國人さらに服せざりしかば宗麟の弟三郎をこひ大内の家をつがしめ大内左京大夫義長とぞいひける毛利元就陶をうちほろぼし義長を谷の長福寺といへるにかこみ豐後へ使をつかはし御弟の事に候へば助けまいらすべく候へばむかへに人を遣し給へと言おこしければ義鎭芳情はさる事ながら不悌のものに候へばそこにてよろしくはからい給へ大内家瓢簞の茶入つつがなくば年來の望也と返事しける是によつて元就義長に自害させ瓢簞の茶入をば豐後にをくられける元就の心のうちいかばかりかおもはれけん

唐船

亨祿三年南蠻の船はじめて府内に來り交易す義鑑に鐵砲を献ず其後宗麟植田玄佐を明に使すもろこしにて死す天文十年七月二十七日明の肅宗皇帝の勅使來府人數貳百八十人同十二年八月七日唐船五艘來る同十五年又いたるもと博多にこそもろこし船はつきしを永祿二年より豐府につかせける此ころ毛利大どもと不和なりければ門字の關を唐船二三艘過けるを無理に兵船を出し赤門に引つけゝれば宗麟いかり斜ならず豐筑肥の士に命じ壹岐對馬平戸に番船を出し津津浦浦に兵船を出し豐府にをくりけり其費夥しかりけり天正三年虎四疋象一疋をきたり獻ず同じき四年南蠻のふね大石火矢を獻ず是を國崩と名づけられけり亡國の瑞なりと人いへり

檢地

文祿二年義統改易の時肥前名護屋にて大閤秀吉宮部善祥坊中務卿法印桂俊藥師家の末裔因州鳥取

（にて八萬石を領す）山口玄馬頭正張（周大内の末裔）に命じて豐後を點檢せしむ六月八日法印木付につき國東速見玖珠日田を改む正張府内見拂山淨土寺に在大分海部大野直入を改む豐後を鎌倉右大將より四百年來不易にして三百六十坪を以て一反とせしが此時より三百坪を一反とすこの年七月より來年三月に至て終ふ此ゆへに北四郡にては法印竿といひ南四郡にては山口竿といふ野津甚九郎黑岩甚太郎河北藤平といふものの法印の檢地奉行たり大庄屋小庄屋山口辨添使をさだめ置かる但辨添使といへるは右大將の時よりといへり

鬼目

鬼の目は何れも節分の夜なるを大友の家例には正月六日酉の刻御臺所奉行士烏帽子短刀素襖にて鬼の目をうつ座敷諸士候す今も豐後の俗は六日の夜に打いづれの屋形にや上洛の後節分を船中にして過され六日に歸府ありて鬼の目をうたれし家例ともいへり

鮑腸

豐後の俗麪粉を溫飩のごとく拵へ菜蔬をくはへ味噌にて羹となし鮑腸とすこれもいづれの屋形にてや有けん鮑をこのまれけるに折ふし久敷日和あしくしてなかりしかば鮑に似たるものをとて庖人に申付られしにかく調てすゝめける故鮑腸といふといへり

豐後梅

大梅豐後の產をよろしとす又肥後梅ともいふからの文には黟梅とかけり

柴石

玖珠郡に柴石を出す石をわりてこれを見るに中に燦然として木葉あり筑前宗像大宮司のあとにもありといへり

鬼會

六郷山の寺はみな敎寺なり正月初旬鬼會といふ事有としの內より勤業ありてその夜に

いたれば僧鬼と號しかきのきものをきき藤かづらにて身をまき炬と斧とを持人を追この夜人みな詳り集り鬼儺の遺風にやむかしはかゝる事多かりしにや筑前住吉などにもむかしは正月の頃鬼平の祭とて其日通る人をとらへて鬼とし是を追うち終には石の柱にしばり付をく事ありしとかやみなひとつならはしなるべし豐前彦山の鬼會はことに人の群集する事也

樂

豐後の俗に樂といふもの有大なる太鼓をむねにかけこしに木皮の裳をまきうしろに旗をさし鉦笛を和し是をたつる事軍法になぞらふそこそこの神祭には專これを奏す其調清家木付吉弘富來等ありむかし屋形の時諸將各城によりし時始めしとかや又岩戸神樂といふもの有太神天の岩戸にこもり給ふ事をなす其事甚あやし簠簋金烏玉兎集といふものを見侍りしに此説をあげたり

杏葉

大友家の紋なり大友の一族はみな杏葉をつけるゆゑ御紋衆といへり大友龍造寺と合戰の時大友八郎親貞今山に陣しけるを鍋島直茂夜ひそかに今山の營に忍いりみてければ帷幕のうちに燭をかゝげ幕に付たる杏葉の紋觧に映じければ心に此度軍にうちかたば長く家の紋とせんと思ひて其夜夜うちして八郎を討取幕をとり鍋島家の紋とせり

氏姓

大友の家中に三のわかちあり大友の一族を御紋衆といふ九州の四姓とて大神丹部宇留島宇佐氏の族を國衆といふ能直初入の時したがひ來りしを下りといふ互にその族をよしみつのる事にありけるに享祿三年義鑑の時の事なりしに大友の居城諸士の席それぞれ次第の名字をしるし置けるにその帳の面

に紋衆の名に墨を引けるより事をこりて清田越後守といふもの貳百ばかりをひきひ本庄但馬守中村左衛門佐といふを攻ほろぼし翌日は千五百餘を以て賀來左衛門大輔へおしよせけるに橋爪丹波守といふもの三百餘騎にて清田を追ちらしけりされど私の意趣なれば橋爪は伊豫へ難をさけけり

其一族六十二家とは

大部　得永　俣見　坂井迫　次郷　吉岡
松岡　利根　宗像帯刀　詫磨　大野　日差
城後　岩屋　成松　冬田　奴留湯　別當
木村　志賀　長小野　小津留　久土智
椎原　海邊　一萬田　豐饒　朝倉　入田
藤北　原　石合　久保　吉弘　直入　利
光　田口戸次　竹迫波津久　日田竹中　臼杵津守　國東
平井　大神　狹間　清田　龜山　上尾戸上
荒瀨　田原　速見　高崎　御久里　片加
瀨　立花　田北　鹽手

竹田の城主志賀黨田染馬牧城主能直古庄重吉を重臣として建久七年豐後に下る古庄黨みな同紋なり又能直下向の供十二筋目杏葉ゆるされけり首藤衛藤舞林高山甲斐瀨矢野等也緒方の一族三十七家とは

佐伯　雄城　小原　田尻　下部　眞玉
田次　小深田　敷戸　木上　東家　長野
由布　賀來　德丸　堅田　夏足　都甲
秋岡　高城　上野　陳　阿南　安藤　材
原　森迫植口　世利　芦刈　胡磨　津留　稙田
小井寺大津留　深田　橋爪　神志部　奈須

これ太古惟基が裔にして太神氏鱗形を紋とす

諸氏百五十家

竈門　右田　齋藤　志月　櫛來　古庄
馬場　永富　藤井　鶴成　下城　帆足
原尻　曾根崎　森　針　市川　中島　今
村　山下　田奈貝　佐保　林　寒田　森

下　壇　波多　岐部　富來袋　板折　姫島
大田　中村　京部　牧　吉良　賀來　御
手洗　軸丸　石垣　雰渡　疋田　荒木
小田原　差原　野上　倉成　永村　魚返
原田　何松　古後　光永　谷川　大佐井
津久見　白仁　朽網　長野　葛原　井上
河原　卜野　菊池　鹿島　小田　本庄
志平　松木　廣瀨　國部　堀　北崎　幸
野　岡部　恒富　安藤　伊美　惠良　小
川內　江戶　木田　善　廣門　落　竹田
津　玉田　重吉　小代　若林　田深　捥
所　中尾　橋本　立石　坂梨子　內田
志村　松竹　三代　高山　江　進士　風
早　久和良　長正　天江　野尻　井伊
闢　深柄　二代　五部　定惠坊　合澤
澳津　志土知　江中　平林　松崎　生野
二宮　神山　龍德　首藤　宇都宮　深江
田中　澁谷　藥師寺　小佐井　能一　長

梶原　渡部　羽田方　矢野　如法寺
泉原　岡尾　木田　丹生津　野隈　武宮
猪野　梅木　沓懸　宮迫　高田

是當國他國より來りつかへし家也新參　と
いふ

三絃

永祿六年宗麟より石松檢校といへる盲僧を百濟國に遣せしに海中にして大風にあひ琉球につく琉球の俗よく胡弓を鼓す琉球は蛇多くして此聲よく蛇をさくるといへり石松胡弓の聲をよくおぼへ豐後にかへり其制をかへて三絃をつくり數曲を制しけるとぞ

妖怪

天正五年宗麟しばらく病にぞみいられしに天井に血のつきたる太なる足あとあり宗麟もとよりかゝる事を事ともせぬ人なればやがてわれさりたちなんといへり其後座敷の塀より小松おひ出るみへしが俄に大木と

なり枝をたれ花ふをならべ人々奇異のおもひをなしける次第にほそくなりて幻のごとく消うせけりある時はたたみの間より六七尺ばかりの屏風出て消ける事もありしとぞ

名山

宗麟の秘藏の鷹に名山となづけて無雙の逸物有豐後鷹峯にて得たればかくは名づけしとなんある時此鷹はなれて日向宮崎にいたりけり其處の主久保山治部といふものすへとりて島津義久に獻じけり宗麟これをきゝ大にいかり軍勢を遣し久保山をめしとり本庄帶刀にあづけられけり義久是をきき鷹を豐後にかへし此たかを大友屋形の秘藏とかねて承らばいかで義久もとめ置べきいかで久保山も義久におくるべき久保山がつみはまげて義久に免せられ候へとねんごろに言おくりけれども宗麟いかりとけず鷹はまさしく名山鈴板いかでなかるべきとて島津には何の咎もなく久保山をばきりてすてけりこれも豐薩鉾盾の一件なるべし

作鞍

耳川の役宗麟紹忍がはかり事にしたがひて諸將の諫をもちひずよつて毛利新介をはじめ歷歷の諸將憤徹してみなうち死をぞしたりける大友家のながく武威を失せしはこの一戰也中に吉弘左近大夫鑑理は齋藤鎭實が陣屋に人を遣して明日川を渡さんにはいひ合せて社　　く辰の刻ならば諸軍にふれ送らんといひければ鎭實菜はいまだ時とてもきはめず御邊の渡さるべき折からかさねて人を給はり候へと返事しければ鑑理はつひとがめてかさねて人を遣し樣子をうかゞはせければ鎭實作の鞍をわりて薪とし酒をあたため手のものにたうべさせける近習のもの是は御秘藏の鞍なるをといひければ鎭實わらつて命あらん時こそ作の鞍も入べけれ

とて酒も半の時かたりけるは凡河をこす軍にはのり入場よりむかひの上る場をみるべしあがり場あしければ犬死するぞ川より前にて馬の足なみをはやめ其勢に乘入べし敵陣川端より五町三町引退き備を立る事は川をこしたる勢のとめがたければわが川をわたり備の未備らぬをかけ崩さんため也川を渡上る時かたき急にかゝるともうごかず堅固にさゝへて押行べし川を渡す合戰は泥障をとひて力革にゆひつけよ腹帶を馬氈の上に引出し前輪に引上しかとしめ手づなを左に取右に槍長刀の類を手綱にとり添へて手づなをつよく引ば馬あをむけにかへす也馬は四足のとゞかぬ所にては竿立になり後足ばかりにてわたるあと足もとゞかぬ時はつとしづんでやがてうかび上るもの也のりて無案内なれば馬のかしらを出す時策うつ事もあり馬はかしらばかりを出しておよぐぞもしのり手すはだならば鞍を口にくはへ我も共におよぎ馬の足たつとみば鞍壺にのり直れ馬をつからかさじと也綿馬氈は水しみておもし板馬氈を用ゆべし明日の軍には手柄も無益一騎なりともかけ通り義久と勝負を決せよと下知しければ吉弘さればこそ也十一月十日夜いまだあけざるに耳川の上瀬のわたしければ鎮實も下の瀬をわたり各おもふまゝに働きてうち死しぬ臼杵鑑速吉岡宗觀等がいきてあるか戶次道雪國にあらばかゝる淺ましき敗軍はあるまじといひき西國太平記には角隈入道石宗といへる軍師をのせたりされど大友家の記錄にはみへず西國太平記には豐後のことは不案內なりしにや此軍をはじめ大に齟齬する事多し

裸體

道雪筑前にありし時家中の士四五人打まはりに出けるがあまりあつかりければ皆水を

あみけり草野かたのものみて藪かげにかゞまり皆水に居るをまち喧とおめいてかかりけり十時傳右衛門氣早き男にも下帶もとるに及ばず直ちにやり追取二人まで突ふせたりそのひまに池邊龍右衛門かたひらきてかかりけるに各支度して突てかかりければ敵も引けり敵もあまりおかしさに社引つつと大わらひをぞしたりけり

太閤より上使として仙石權兵衛を豐後へ下されけるに野呂傳左衛門といふものを薩摩へ和睦の爲つかはされけるにさつまにて召こめ置けるが拾月の初切てすつべきとて行水をさせ預り人刀をひつさげ湯殿へ入けるを野呂心得て盥を取てこの男に投かけあをむけに打倒し塀をのりこへ赤はだかにして走る事十餘里こゝへて堪がたかりければ川に飛こみ水をあみ敵地をのがれ出終に豐後にかへりけり

石見灘

國東の東なる洋を石見灘といひ北のかたを周防灘といひ南を邯鄲といふ關か原軍散じて島川がた女中をのせたる船此灘を過けるに折から如水富來の城せめにて野島黨船の手へ居たりしが是を見て姫島のまへより佐賀の關の前まで追うち船をやき崩しぬ此時さつま船よりあき樽に降來と書付古がさを流しけり船軍の法に敵に降を乞時かく器を流すとぞ其例有とかや野島黨是をしりてやせめけんしらずてや戰けんと沙汰しけるとぞ

吉弘村　國崎

貞親の時已に吉弘美濃守あれば其遠き事しるべし吉弘加兵衛といへるは數代の名なり吉弘加兵衛鎮信日向耳川にて一族吉弘左近大夫等とうち死しぬ其子加兵衛は高橋紹運の兄也さて入道して宗甚といふその子吉弘

加兵衛統幸（又行ニ作）義統につかふ薩摩豐後をおかす時上使仙石權兵衛長曾我部信親敗軍の時も薩勢にぐるを追かけしは吉弘が三百餘騎にてあとにひかへけるを見て兵を引入ぬそれより手勢三百餘騎を以て義統に從ひ龍王城に入是よりまへ鞍懸の城攻めにも群にぬきんづるの大功あり文祿の頃義統にしたがひ朝鮮に入義統豐後改易ののち立花左近將監統虎は紹運の子にして統幸がいとこなりければこれに寄食して柳川に居けり義統豐後沒取の時義統の嫡子義延をば內府公あづかり給ひ關東へ御供申けるをしたひて大坂迄上りけり折柄義統石田三成に兵馬を授けられ國にいらんとするにあひ此度のみだれは石田が姦計にして天下の形勢相見え候其上御子義延關東にましまし候へば大坂へ御心を合せられん事しかるべからずとていろいろ諫ければ義統我配慮にして毛利輝元の獻上をうけ今更いなむべきにあらずとて同心なければ今は諫かねて我は義延をもりたてまいらせんとて祉統虎へもいとま申つれよしさらばあづまへ下り申さんとてわかれけるがさすがに行もやらで後より船にて追かけ傳法にて追つき程なく上の關に着けるに豐前中津より黑田如水軒より使して此度豐後入國のよししからば中津へ御越候へよきにはからいまいらせんと有しを統幸も從て是をたすけけれども太閤の厚恩もだしがたければとて使をばかへされけり統幸は事の已にならざる事をしりて討死とはおもいきはめけりやがて濱わきにつき立石に屯せられければ程なく馳あつまる者三千餘此時如水先手の將井上九郎右衛門等長駈して陣を石垣原に對す統幸はけふをかぎりとおもひ定めければ其の日六度のかけ合に一度もはづれず屢敵を追なびけ暫し息をつぎけ

るを義統使をしてつかれたる兵を以て荒手にあたらん事覺束なししばらくひけと有けれども覺悟仕候とてひかずさらば統幸うたすなとて惣がかりにかかりける井上は物見して小高き處に出けるが兩方の戰つかれてやすらひけるを見て頃はよし敵はかち武者也されど吉弘は物なれたり心にくし各かち立と成やりの鵜の首のをるる程に突合すはいかで勝利あるべきとて馬よりおりすすんでむかふかたきを打やぶりけるが吉弘が一隊は靜まりかへつて居たりける井上是をみてかれが陣戰をもてり吾かからずばかれよりかからんと待ければ吉弘やがて突來りあらめづらしや井上殿吉弘加兵衛にて候名護屋にてはわりなく申つるにかく成候もののふの習に候へばとて吉弘は朱柄の槍井上は十文字にて戰ひしが井上は長ひきく力おとり吉弘は長たかく力强かりければ井上ふせぎかねてみへけるがされど吉弘はけさより手いたく働敵二十二騎きつておとし已も數ヶ處手おひけるにや井上はかたはらつかれ吉弘は頰さきをかまにかけられ甲の緒きれて目に打覆ひければめくらうちにうちはらひ引手を井上すかさず左のわきをつきければ郎等どもはせより肩にかけて行けるを後藤左門が家人小栗治右衛門首うちけり是において義統力つきて降來ありけりされば吉弘は慈愛ふかき人にて手の者八十三騎雜兵二百九十七人みな其場をさらずして打死しぬおもふに大友重恩の人なればはるばる東行をおもひたちしもいかにもして大友恢復のはかりごとをなさんとなるべし時豐臣の勢かたむき邪臣權を弄び既に海内望を神君に屬する機をみけるなるべしかつ義統にしたがはず東にゆかんとせしもみるところありてやしかるを義統に大坂に邂逅すとい

へども義統毛利の小信をおもひ石田が姦計をしらず忠臣いたづらにくちぬれば我はあづまへ下りてんと引わかれしもいさめかねてのいさめなるべしまのあたり父の義統をみすて義延にしたがはんは吉弘いかで心に心よからんされど義統のたのみおもはるるは宗像吉弘也もし此人人等しばらくささへ有なば大友恩顧舊交豐筑肥に多ければ恢復こそなくとも黑田もゆゆ敷手をばくだかるべししかるを各死を一途におもひ唯一戰にかくなりしはいかにぞやされば楠正成南朝の指摩道をうしなひ姦臣事をもちゆるを憤り終に望を興復にたちて討死しけるも述懷とこそおもはれ侍れ吉弘もすすむるばかり事のいく度もいひ甲斐なければ今は本意なくよしやながらへて賴なき述懷いつ迄かすべきと憤激するにぞ有けん吉弘ながらへたりとて天下の勢さりぬれば力の及ぶ處にはあらじ虎も用ざれば鼠となれるといふにおなじ宗甚は統幸戰死ののち如水豐前に招き井上が領におかれ念頃にいたはられけるが後は柳川にておはられけり

恒淸村 國崎

西迎寺といへり禪刹あり今はやうやく其後とてほそき庵あり其さとの說に鎭西八郎保元の軍散じて伊豆の大島に流されけるに其後つくしにのがれ下られける由都にほのきこへ有ければ爲朝の御臺したひてここ迄來り鎭西八郎もうたれ給ふに極れりとききてここに庵をむすび寺をたて尼と成て景一といへり今尙其像あり

寶曆五年八月八日至十四日草了

五月雨抄序

五月雨のふりつゞきとひ來る人も稀なるまゝ窓の前にかな文引ちらし讀けるに世の中の人の心はいとのごとく染るにかはりちまたのごとく行くにしたがひ習により敎につれてさとるもありまどふもありまどふよりしては非をとめて是としくるしみをかへてたのしみとなしおほやけの罪にかかりて猶自よしとなせしはかなし事ども哀と書とめけるをかたへなるわらはへ是は世にいましめていはぬ事には侍らずやといひけるに答ける樣まことに古人これも一時かれも一時といふ事ありあらかじめ其奸をしらば誰か其とがめにならはん知ざるより迷ふ道なれば前車のくつがへるをしめすは後車のいましめにあらずや西洋の敎は今世にたえ侍れども術をさしはさみ人をたぶらかす類はまま世に聞侍るみな其故知にならふ也むかしの跡しり侍らばいかでかかる淺ましき計に落入べきわれきく西洋の人のひとの國をとらんとするや干戈をうごかすをつたなしとするにより其國を奪んとすれば先金銀穀帛を以て寡弱をたすけ貧窮をにぎはし醫藥を以て「疾病をすくひ奇巧を以て人の耳目をまどはし終に天主三世の說を以て人の心をうごかし君にも親にもかへざるものとおもいこませ人心の已にうつるをみて兵を以てこれに從ふれば一擧してその功を收むとかやされぱもろこしのみなみにあたつて海中塔伽沙谷(タカサゴ)といふ島あり阿蘭陀人とりてありしが明末鄭成功に逐れて後南のかた咬𠺕吧(カラパア)といふ島にわたり地子を出しぬす人ふせぐ爲とて城廓をきづきその土の人に財寶をあたへ其餌に上るをまち終に其本國呱哇(ジャア)までをとりこれより諸國に往來す又寬永の比よ

うすといへる蠻人一公につたへけるはむかし西洋より呂宋といへる島をとらんとて其宗門をひろめ何事なく手に入たり日本は金銀寶物多き國ゆへ彼よりのぞみをかくる事久しと申すにつきようすには屋敷をたまはり是日本一洲の大敵なり根をたち葉をからすべしとて屬託金を高札にかけ置れ終に四海を淸め給へりわれ瓊浦に遊びし時吉雄耕牛かつてかたりし西洋此術を以て近ごろ蝦夷の北邊の地を收めたり　國家まさに北のおもんばかり有べきとぞ我國耶蘇のさわぎもともに同一術なり已に數十萬の殺戮にいたるといへども其國恬然としてあづからずそのたくみしるべし鎭西はこれにまどひ中原は信長一旦のあやまりにより禍をひく事數十年幸に太閤秀吉始に其奸をてらし神君後にその弊をのぞき蒼生の耳目ふたゝび明なる事を得たり此故に其國はさらなりもろこしより渡れる文もわずかに其名あればすみぬりやきすてになりぬしかるに

有德院殿の御時司天監より天文推歩の爲に願出けるに噂名目ゆるされ西洋の書もひもどきはじめ天文地理草木臟腑等の類は飜して梓にちりばむる世となりぬ神祖のあつくいましめ給ひしも有廟の禁書をゆるし給しも一張一弛の道にしてともに其澤を蒙る事に侍る其上　神君も愚民のまどひてつみに落入事をなげき給ひ南禪寺の　崇傳長老に命ぜられ正邪の別を文にあらはし天下にしめし給ひ禪人鈴木正三の破吉利支丹でうす問答のごときも其後ゆるされて木に上し世に行れ侍れば五月雨の淋しさ慰む筆の後誰見よとゞむるにもあらざれば衣魚にあたへんひま何かくるしかるべきもしもみん人のこりてつゝしむ端ともならば何か是にまさるべきとおしまづきにさし置ぬ天明甲

辰五月日二子山八三浦すゝむ

五月雨抄上

三浦晉　著

天地はまどかなる物なりさるにより手まりのごとき地に五大洲とて五の大壤ありからやまと天竺だつたんなどいへるは亞細亞といへる大壤の內なり夫より西に利未亞といふあり又其西に歐羅巴といふ有又西にゆけば南北に横れる大壤あり南亞墨利加北亞墨利加といへり大様は亞細亞の下にあたりて是れを過れば又其國の東に出るなり歐羅巴の地又西洋ともいふこれより我國は萬餘里をへだつればまことに風の音信もなき國なりしかるにかの國は智巧ことに勝れ天文地理に達し日月星辰のある處を測りて自の船のある處をしり羅經を以て鍼路をさだめ萬里の大洋を掌中に置き自在にひとの國にかよひ利を以て啗し教を以てまどはしひまをうかゞつて人の國をうばふさる程にたよりなる地を得て出張をかまへ財貨をはこびたくはへ諸國に交易するほどに今は南海の諸島みな西洋の有となれり南蠻とは天竺南邊海上の諸島にてみな亞細亞に屬す亞細亞は孔子釋迦の教を奉ずる國なり歐羅巴には中むかし耶蘇といふもの出て教をたてたりかの國にて聖人といふは是なりそれにやうどといふものあり耶蘇と其道をあらそひ後にはやそやうどにころされしかども其教は次第にひろまれり彼地の教三つありきりすてあんといふ有耶蘇の教にしてここにきりしたんといふものなり一つはまあごめたんといへりこれ莫臥兒の法にして今ひとつは

へいてんともいひせんていうともいふこれは二法さかんにして今はおとろへけるとなん又亞細亞の西にあたりて天方國といふあり天方の東に回回(フイフイ)といふ國有唐の時回鶻(クワイコツ)といひし國なり此國また一法あり回回(フイフイ)敎といふ佛敎もかの國にもあれどもさかんならず儒敎をばかの國にてはこんふうよじすとよび其徒みづからはあていゐすといふよし寶永中邏馬(ロウマ)のはつていすたが儒敎のことを新井筑後守に對し己が敎の大なるにほこり此敎もかなたに久しくありといへども支那もと東南の一隅其化猶域中に行ふ事能はず何ぞ敢て他に及ばんかくのごとき小數ありといへどもなきがごとし天下の敎とするにたらずと大言せし事采覽異言にみへたり我國の害をなし數十萬の生命をあやまちしは此きりすてあんの事なり今字に吉利支丹とは音をかるや切死丹とは調伏の言なり公に是を用ゆもろこしの事は武德大成記にいにしへは此法なかりしに明の隆慶萬曆の比泰西(タイサイ)の利瑪竇(リメトウ)といふもの來り浙江(セツコウ)府の內荒地のありけるに一宇をまうけ學文し終に彼の國の言を漢語に譯(ヤク)し天主實義畸人十書友論などいふ書をつくり人をすゝめ誑(タブラカ)しける年月を經て其法を信ずるもの多くなりけるをきき龐迪我(ホウテキガ)といふものその徒數十人をしたがへ利瑪竇に從ひ七克書などいふ書をつくり愚なる民に金銀をさづけたぶらかしける故いよいよその法を信仰す畢竟世世を經て國奪はんはかり事なりといへりとあり武德大成記は貞享三年　台命により阿部豐後守正武を奉行とし林春常、人見友元、木下順庵をして撰ばしむと序にあり

一、耶蘇の亂禁網つよくして三十四種の禁書といふ有その外名目にても出たる書は入られずその名目

天主　耶蘇　西洋　歐羅巴　利瑪竇　利
太西　利山人　陽瑪若　湯若望　游藝―
字子六　景教　彝學夷　西學

三十四種禁書目

天文初函　畸人　西學記
辨學遺牘　幾河原本　天文略
代疑篇　三山論學記　三論學記
唐景教碑附　天主實義　天主續編
職方外記　同文算指　圜容較義
勾股義　萬物眞源　滌平儀記
計開　十慰　交友論
七克　彌撒祭義　泰西水法
表度說　敎要解略　聖記百言
二十五言　靈言蠡句　況義
渾蓋通憲圖說　測量法義　簡平儀記
滌罪正記

この外にも禁にふれて焚塗にあふもの多し
禁書と異る事なし

貞享年中燒却之書目

寰有詮　一部六本
貞享二年乙丑拾五番船持來官命燒レ之又記云是ハ耶蘇宗門ノ書ニ紛無レ之ニツキ一艘向キ商賣不レ被二仰付一御返ナサレソロ

地緯　一部二本
貞享三年寅五月燒却是ハ世界ノ圖ニ吉利支丹國ヲ贊シ其上一兩所耶蘇宗門ノ事有レ之故燒却但敎化ノ書ニテ無レ之故書目判形サシ上ソロ

福建通志　一部六本
貞享三年寅六月燒却是ハ圖ノ内天主有レ之

有學集　是ハ貞享三年奉行所ヘトドマル

方程論　一部四本六卷
梅文鼎所レ著序中餘論利泰西ノ號及禁書ノ目ヲ載ス別記ニ元祿十四年四十二番持來トス

西堂全集　一部二十六本
右詩集ノ內外國竹枝詞ニ歐羅巴ノ詩二首ヲノス別記ニ寶永三年丙戌五十五番持來トス

其外
天經或問後集　游子六著
帝京景物略　八本
通鑑明記全載　一部八本十六卷
定例成案
新例　一部十六本三十卷
本朝側例類編　一部四本十二卷
增定廣輿記　二十四卷　蔡九霞先生增定
增補山海經廣註　仁和吳任臣注　六本十八卷
檜雪齊集　十二本四十卷
性理大中　一部十二本二十八卷
譚友夏合集　六本二十三卷
三才發秘

願學集　十本八卷　鄒元標著
西湖志　八本　志八卷　志餘十八卷　田汝成輯　姚靖增補
西湖志後集
禪眞逸史
名家詩觀　康熙戊午漢鄧儀選清詩
蘇州府志　一部四套三十六卷
仁和縣志
丹徒縣志
瓊山縣志
縉雲縣志
新鄉縣志
諸羅縣志
南成縣志
延平縣志
疑耀
明史藁　一套六本

是等みな貞享元祿寶永の頃焚棄塗抹の書なれば學者もてあそぶべきものにあらず其查(ギンミノ)

法二途名目噂と教化なり禁網嚴なりし世はたとへば蘇州府志には教化なしといへども清世祖章皇帝の碍銘尊敬信仰の文句あり名家詩觀には贈太西洋湯若望詩あり方程論には西學算法の題名蠻徒の名禁書の題號をのせたる類わづかにも名目噂にもあづかれば塗抹若教化にあづかれば燒却し侍りしかるに司天監より西洋の學は天文地理に深ければ推歩家有益の書はみることを得んことを願しかば享保二年噂と名目とは免許あり教化の禁のみふるきによれりさるほどに禁書目中にても天文略、交友論、幾河原本、泰西水法、職方外記、同文算指、圜容較義、渾蓋通憲圖説、測量法義等　免許あり其外增定廣輿記、名家詩觀等も世に行ふべくなりぬ長崎吟味かたよりの書付うつし一通左にのせ侍る

申上覺

帝京景物略　一部八本廿八卷

右之書籍の内第四卷目第五卷目天主堂利瑪竇墳之義相記御座候天主堂の内耶蘇儀事堂之建樣等幷耶蘇生卒之義書記御座候利瑪竇墳之處には始て蠻國より中國へ來候義其時分之天子利瑪竇を御用被遊候義幷死去葬禮等の義書付御座候

乍去景物略一部之主意はもと北京の風景土地の勝槩などを記し置申候書籍故兩卷の外に耶蘇之義無御座候

右兩篇の文體之内人に教を施し人を其道に勸入候樣成義辭面に曾て無御座候併詩人之詩抔謝し御座候には其學術德功之事を嘆美仕御座候迄に相みへ申候其段は大意書被仰付候節辭面一通書付指上申候通に御座候已上

元祿八年乙亥三月十九日　春德寺

岩永元當

片山元正

一、その國國にて習はし異なり先土着行國といふありから日本のごときは土着とて人民その土に安んじ室屋城郭をかまへて居る類也行國とはきつと我居所をさだめず時にしたがひ宜しきをみて處るからやまとの類は自の封境をかぎりてまもる其外をもとむるをば遠略をつとむとて非とする也西洋の諸國は海内を一視して萬里を遠しとせず己が属國として交易の利をむさぼるひとの國を奪はんとすれば先利を以て人の心をうつす我國耶蘇の一亂も彼この術を用ひたり

一、伊吹もぐさといふことは藝州廣島城下柴谷吉左衛門といふもの剃髪して西心と號し回國して江州伊吹山ちかき柏原といふさとの教信寺といふに得たりとあり其大略に曰信長江州安土にあり長崎へ外國より異様の人來るときき見まほしく思されけれど肥前は隆造寺の所領なればとて將軍義昭の命を矯り佐三郎谷（サフリヤ）源内といふものを遣してこひける隆造寺即一人を登せけりこれも歐羅巴の地の人なり南蠻をへて來るゆへこなたにては南蠻といへり來るものゝ名はうるがんばてれんといへりばてれんとは師たる人の名にして弟子たるをいるまんといふ由なり永祿十一年九月信長に謁す詳詞を以て其來る故を問へば日本に佛道を弘めん爲といへり實は彼國より我國を奪はん爲に渡せしなり信長ことと様なるにめでとどめて其道をひろめ見ばやと有しを儒臣天敬院法橋道仙其禮法衣服神にあらず佛にあらず後日の禍を釀さんもはかりがたし早くかへすにしかじと申せしかば他臣も是に同じけりされど信長むかし我國になかりし佛の教もひとの國よりぞ傳へたるゆるして彼がなすわざ見ばやとて菅谷九右衛門長秀に仰せて京都四條防門に四町四方の地を賜りそのなすわざをま

かせけるもとよりかれはかの國より我國に金銀多きをしり國を奪はん爲に來りつればかの王よりいろ〳〵の財寶は心のまゝにわたしける望遠鏡顯微鏡も信長に謁するとき捧げしものの品なりさてうるがん國より財寶おもふまゝに取よせ善つくし美つくし堂塔ひかりかがやくばかり結構せりよつてその院を永祿寺と號せり年號を以て寺號とする事比叡山延暦寺の外例なし　平城天皇大同中に大和の國片岡山に大同寺といふを勅許ありしかども叡山より其額うち破りすてしたためしどもいひて嗷訴に及びければ　正親町院廣正を勅使にて此事を信長に告給へば信長みことのりいなみがたくて南蠻寺と呼び江州甲賀部にて五百貫の地寄附あり弘法の爲また其徒招くべきよしなりしかば又ふらてんばてれんといふをよびけるふらてん、げりごり、やりいすといふくすしの上手ふたりともなひたからあまたもち來り若狹小濱につき南蠻寺に行妙法寺にて信長に謁しけりさて四人の者のはかりごとは貧苦病弱のものをすくひ人心歸向するに隨ひ三世の說に術をかり世の人をたぶらかし他なくおもひつかせ軍兵をひそめおそひ奪はんとなりさる程に金銀財寶多分にとりよせ藥園を願ひ江州伊吹山に五十町餘方を開き異草珍木とりよせうゑける今の伊吹よもぎといへるもその時かの地より來れる一種なりとかや

かくとだにえやはいぶきのさしもぐさと云事も侍れば伊吹のもぐさは其昔より名高きとみゆ又一種うゑ擴めしにもありしや

寺には天をまつるゆへ本尊はなし七寶の瓔珞錦の天蓋などかざりてまつる事にして珍しき事なれば諸國の人來りつどひてみる事

になりぬかの徒これにかまはず方方に人を出して巷にいね橋の下などにふしたる乞食非人世に捨られし病さらぼへるともがらを尋あつめむさき身を湯あみさせ宜しき食品あらため衣あたらしくいぬる處もよきにつくろひたうときくすりども用ひあつく介抱する程に多くは心よくなり死せるをばあつくとり納め貧しきものにはうつくしきあざやかなる魚鳥衣食をあたへ風呂をわかしかれをすすぎかねどもあたへてかへすゆへまことに現在ありがたき事は佛よりも悦べりやうやく人の歸向するをみてとけるは我國は天主といふものを敬ひ念ずる故其國まづしきものなし我國王ふかく諸國の此教をしらずして貧苦病患にしづめる事をなげきわれわれを遣してこれをすくひ給ふなり此天主を各うやまはば富貴は自在なるべし愚民天主をうやまふ道を知ざる故汝天のにくみをうけ貧苦にせめられ邪慾おこる邪慾又にくみをうけ長くうき世のくるしみをうく、さる故にわれわれ國王の慈悲天主のあはれみを以て汝等今生のくるしみをすくふといへども過去の罪あれば未來の果たすかりがたし疑はば其しるしみよとて三世のかがみといふを出してみせける愚民等これに臨み見るにうつる顔の牛や馬あらぬ鬼畜様のあさましく恐しきかたちのあらはれ出る程に肝魂も身にそはずなり誠にかの國王天主の慈悲には現在の病をまぬがるといへども到來かかるくるしみにあはん事のかなしさよとて皆涙を流し何とぞ此くるしみをすくひ給はれといふにぞさらば其法に歸せよとて四十二顆の珠數ごんだつといふをさづけとなへ言をおしへ七日精進してその文となへ又鏡にむかはしむるにこの頃に引かへ柔和端嚴の菩薩などいふべき相を顯はしけるばて

れん等その機のうごくを見わづか七日の精進だにしかり生涯此道を修せんには福德かぎりあるべからずさるからに今天主をおがませ侍らん一度天主を拜するものは此世にたとひ張つけ火あぶり獄門水ぜめ火ぜめ牛裂（サキ）車裂（サキ）にあふとても是一旦の事にて未來は安樂にすくふなりこれに心をうごかさずおもはば拜ませ申さんといへば皆唯唯（イ）として是をもとむよりて先くるすといふものを出す其製黃金にてさきに二寸ほどに二尺ばかりの柄をつけかたがたわさびおろしのごとく針をうゑならべたるを出し右のものどもに肌（ハダ）をぬがせ背中をかきむしるに甚いたみて血流れ出其流るる血を手にぬり左右の手を合せおがませ此天主の爲にはかかる苦をうくるとも露いとふまじきぞ未來を救ひ給へとちかひてむかはしむれば其繪は美女の幼兒に乳をのましむるの形なり此主汝等の愚なるを此兒のごとく救ひとるぞ有がたく思へとて繪を收れは愚民等いよいよ有がたく皆其門徒になりにける其內加賀の僧惠俊和泉吳服屋安左衞門同國黑手村百姓善五郎高足にて入門の後惠俊をばはびやん安左衞門をばごうすまう善五郎をばしゆもんとよび專ら愚民を引入けり是より人群聚をなし其徒に歸する事老弱男女をいはず金一分づつをあたへけるほどに皆人思をかたむけけり又門徒たるは每日人ごとに米壹升銀八分をあたへける天正二年五月信長京師にいたり其樣くわしくきき安土に歸り給ひ大に此事をくひ諸臣に對しさきに我此事を議せし時文敬院我をいさめしかど我用ひず今かの徒の所行をみるに金銀財寶を惜まず人心をまどはし收む必定我國をうかがふの所爲とおもはる今は南蠻寺こぼちすてまくおもふはいかにと有ける前田德善院申さるるは南

蠻寺いまにては手のびになり此勢をかへさん事手を以て大海をささふるに似たり此座の御家人はいざしらずその他の大名小名ただ其門に心をかたむくもしこれも亡さんとならば恐らくは禍蕭牆の内におこらん只事やむにしかじと有ければ信長いよ〳〵くやみいかがして此患をひるがへさんやと沈思し給ひし頃攝津國荒木攝津守村重そむくよし早馬きたり猶干戈の沙汰世に多くおしうつりぬ天正六年高山右近敵方にくみしたる聞へあり信長彼ばてれんに高山をみかたに入よさなくば宗旨立まじきよし仰ありければばてれんすすめてこなたに歸向せしめ其事も穩になりぬ

肥島戰記には天正六年四月信長毛利輝元と取あひあり毛利より山中鹿之介こもれる三ヶ月の城を攻亡し大坂にては本願寺是と一味し荒木攝津守村重は池田花熊伊丹に城を築き高槻の城に高山右近友祥茨木に中川瀬兵衛敵の色をあらはし毛利右馬頭中國十三州の勢を卒し播州をきり從へ勢已に攝をのめり信長羽柴筑前守秀吉を以てささへらるといへども孤軍敵しがたく信長の出馬をこふといへどもとかくに其事も滯り世には信長一生の卑怯と沙汰せり信長ふかくおもんばかり耶蘇を信ずるをしり伴天連をよび高山右近にくみする事不忠の至りなり汝が宗門正を守るとならばかれもとより汝が宗門を信ずる事なれば說て身かたに歸せしむべし此義あたはずとならば無益の宗門破りてすつべしと有ければ伴天連恐をなし高山に說けるに我信ずるかたよりなればすみやかに信長に歸降し中川もみかたに屬しけるほどに本願寺も石山の城を退き毛利の勢もしづまりける信長もこの功を以てむか

しのままにしていろはせられざりしほど
に其教いよいよ世には廣れりといへり
同十年六月には信長も亡び給ひ秀吉兵馬の
權をとり給ひぬここにおいて其徒の奸を照
され同十三年此寺を亡し給ふ永祿十一年よ
り都合十八年の間なり其内天下に四十二ヶ
の本寺末寺その數をしらずとなり其故は秀
吉淀の城にましませし頃中井半兵衞といへ
るよき大工(タクミ)あり太閤の氣に應じ修理大夫と
改め天下のたくみの棟梁として時めきしを
奸徒これを引入れんとてかのはびやんを遣
して中井はつとめのいとまなかりしかばか
れが母をすすめける母は念佛三昧の人にて
うけがはざりしかば僧を招きて論議せんも
事ゆかずば耻なるべしとおもひ四條通柳馬
場に白應とて居士の有けるを招きはびてん
と論をはじめけるはびてん佛の教をそしり
我宗門にたうとむはでいうすといへる佛に

て天地の間未物あらざる先に出日月人物鳥
獸草木大凡の品にいたるまでつくり出し世
の中をたて世の人をすくへり故にこの佛を
たのめばたすけ給はざるはなし今この法に
て佛といひ神といふは皆むかしの人なる釋
迦は淨飯王の子なり彌陀は法藏比丘なり
天照太神といふも八幡菩薩といふも皆人な
り人が人をすくふべきや其言は皆妄語なり
うたがはしくは是みよと自携の箱より三部
經法花經を出し是各尊む所なりとて取出
しづたづたに引さき鼻をかみ押もみなげ出
し踏ちらしいばりしかけ實に貴き物ならば
我に罰あたるべし罰なければ人をたぶらか
すの反故なりなどさんざんに惡口しける白
應は始終頭うなだれて聞居けるがはびやん
がおもふ程言終るをまち其方のいふ事はそ
れにてでいうすの法もその通りにやさあら
はでいうすの法も埓明ぬ佛かなさほど天地

の始に居て萬物をつくり出せるほどならば何故邪佞奸惡貧苦疾患の人をばつくり出せるぞそも何の爲につくり出せるぞとせめかけ問ければはびやん當詔につまりて緣なき衆生は度しがたしとてたたんとするを自應衣の裾をとらへ今の言は我佛の言ぞにくしとてあたまをたたきければ狼狽してにげさりぬ中井興ある事におもひ淀に出仕して物がたりの次手この事どもいひ出けるに太閤われ信長の前にてききて知れり信長時のいたづかはしきにつきてそのままにすておかれたり長くたつべき宗にあらずとて增田太衞門長束大藏大夫に三千餘兵をあたへ南蠻寺へ遣しうるがんふらてんげりごりやりゐすをとらへ阿蘭陀船に託して外國に送り其黨を亡しぬはびやんは其後肥前島原に下りごうすもうは堺に市橋庄作と名を變じしゆもんは島田淸庵とて各醫療などして堺にかくれ居けりまぼろしの術によきにより秀吉きき給ひめしていろいろの事させて見給しに最後に秀吉かつて寵せし妾の幽靈彷彿として花園をつたひ來る樣を顯しける秀吉天主の餘類なるをさとり直にからめとり拷問有けるにごうすまうしゆもんに極りければ天正十六年九月十九日粟田口にてはりつけにかけられける

武德編年天正十五年の下に曰く是年迄肥前長崎は大村民部少輔忠張入道理專か領知也蠻夷の謀計ある事をさとらず耶蘇宗門の僧俗を居住せしむる事を秀吉いかり給ひこれを沒收して公料となし被宗門の徒の渡海を停止せらる伴天連六人伴類二十人を捕へ京大阪を引渡し長崎に送り磔にし且鍋島加賀守直茂に長崎を預けらるる處堺長崎の商賈其利を失ふ由訴る故西戎南蠻の商船入津は許し耶蘇の乘來るこ

とを停止せらる事嚴密なり
慶長十六年肥後宇土八代の二郡に其徒嘯聚すといへども追追にしてしづまれり其後餘黨まぼろしの術をしかがみを見せ人をたぶらかすものある由きこえていたく吟味あり其餘黨をとらへ俵に入五十俵づつつみあぐれば下なるものの苦にたへず改宗せんといふをばこれをころぶといひてゆるして猶先非をくひざるをば燒ころしてすて給ひぬそのころべるものの己が望の宗に歸らしめ檀那の契約ありて我旦那ぞと劵（テガタ）をとりて渡す寺うけ狀のはじめ也其頃遠州富士郡すみたけといふに此宗門をこるごうすもうが餘類なりといへり程なくしづまりぬ此ときころばざる輩京都大阪處處にて火あぶりさかばりつけいきはりつけ中さきなど數數ありそののち寛永十四年十月肥前島原に餘黨おこり十五年寅二月十八日に事治りぬ永祿十一年より寛永十四年にいたり七十年の間信長一旦の思ひあやまりにて毒天下に流れ人をころす事いくばくぞあやまるに毫釐を以てすればたがふに千里を以てすと古人の金言有人を治るものいたくこりざるべけんや

一、長崎緣記を案ずるに享祿三年庚寅南蠻ぶね始て豐後府内に來り大友宗麟に鐵砲二挺を献じたりそれより廿二年をへて天文二十辛亥のとし來りて石火矢を献せりこの時長崎は木村理專といへる大友幕下の士のしれる所なる故みなとよしとて此所に黑船入べきよしにて十七年へて永祿十年丁卯八月廿三日はじめて長崎に入れり此とき世みだれたる時なれば誰制する人もなく異國船おもふ樣に來り元龜三年辛未には町も出來ける爾來南蠻より耶蘇の徒入り來り愚民に金銀をあたへいろいろのあやしき術どもしめしてまどはしけるほどに元龜末より又十一年

を經て天正九年の頃はその敎次第にひろまりてひとりも殘らず切死丹となりぬさるにより奇觀とて彼徒の寺十一ヶ所をむすびばてれんの居處としていよいよ法をひろめける此頃耶蘇の法海内に行はれて大名にもこれを信ずるもの多く太閤南蠻寺破却の評議も伊吹もぐさには石田治部少輔小西攝津守高山右近等二十三人門徒ありて早くかの寺へ告げるとあり高山右近はばてれんにすすめられ信長に歸せしがいく程なく信長も明智にうたれぬこの時右近太閤とともに剃髮して南之坊と號し山崎のたたかひに軍忠をはげまし終に明智を亡しける故攝州高槻にて七萬石を賜はり從四位侍從にて猶尾州小牧樂田羽黑相州小田原朝鮮のたたかひしばしば戰功ありし人なり太閤切死丹破却の時初心を改めざるをにくみ加賀大納言に御あづけありしが加賀より三萬石を扶助してありけり連歌茶なども達人なりしかども耶蘇の法にふかくそみ猶大久保石見守と密謀あるよしきこへて慶長十九年三月二十日妻娘乳母下人西洋國に追放なり又内藤飛驒守忠俊といへるは　東照宮につかへ軍忠をはげましける一萬七千二百石を領し志州鳥羽の城主なりしが南之坊とともに耶蘇に歸しけるを每度此事改むべきよしの　鈞命を用ひず此時おなじく追放にあひぬ其外右の類のもの百餘人に及べりとぞ忠俊は呂宋國にて久しがらずして死し南之坊は長命にして日本より渡海の船にあひむかしをくやみ茶饗し連歌などしたりといへり

武德編年を按ずるに慶長中信長高山等をみかたに歸してより安土の城に寺塔をたて其敎日日に盛なりしが　神君の御時一人の伴天連かへり忠して申けるは畢竟かの敎は國土をかたむくべき謀の趣　上聽

に達し　制禁嚴にして同十九年三月加賀利當朝臣より伴天連高山右近友祥入道南之坊内藤飛彈守如安等を禁錮して京に送る細川忠興より加加山隼人をとらへ遣すかれこれ耶徒百七十餘人禁獄せらる板倉伊賀守勝重山口但馬守雅朝と談じ東に訴る所間宮權左衛門伊治をさしよせられ彼等を長崎に遣し殘黨七拾餘人は奥州津輕（ツガル）外濱（ソトカ）に謫せらる同十月長崎より奉行長谷川左兵衛藤廣羽書をささげ高山内藤其妻子ともに獄舍に入置猶謀をめぐらし鎭西の伴天連をとらへおなじく禁錮せしむ時に高山が娘は加州の長臣横山山城守長知が妻なりけるを父しきりにこふとて是も長崎に送り獄に下れり彼の宗門の法には死を專とし未來の冥福をもとむる故なり此旨亞媽港（アマカハ）に聞へしかば亞媽港より迎として百餘人長崎に入津せり因て藤廣かの

船にのせて放ちやりぬ平戸の松浦肥前守隆信が士卒を以て長崎表高來郡有馬邊の耶蘇の徒の民屋を破り其畫像を證據としあつく信仰するをばとらへて獄に下し信うすきをばさとして佛に歸らしめ松浦をとどめて長崎を守らしむる由言上す同年十二月には關東大阪和睦なり同二十日藤廣肥前耶蘇の徒靜謐のよし告來り人彌太平の思ひをなしけれ（按ずるに緣記には呂宋とあり編年には亞媽港とあり編年是なるべし）さる程に大樣は耶蘇の徒此時にたえぬる樣なれども遺奸多く折折國憲の妨をなしけりさて大友宗麟は兼六州の太守と稱し九州の探題として勢甚盛なりしが西洋の船の往來にかの法に歸し其臣田原照忍最これを尊みける

按ずるに九州記には大友宗麟西洋の法を無邊如露法師因果居士などいふにすすめ

られしと有肥島戰には宗麟始無邊如露因果に歸し後には耶蘇に歸すとあり因果居士は天正七年安土にて淨土日蓮宗論の時に出たるよし信長家譜にみへたり武德編年に慶長十七年七月晦日京師より駿府へ因果居士といふ異人來りける　神君かねてしり給ふ故めして年を問給ひければ八十八歲のよし答ふこれを駿府にとどめ給ひ古事を談話あり翌八月十九日の夜日野唯心叟傳張老と　神君に侍せし事みえたり此居士宗麟の時の居士と一ならば肥島戰記の說是なるべし

又一書に大友義鎭耶蘇に歸し筑紫の神社佛字多く毀廢に及ぶ事大樹光源院にきこへ如漏法師をめし信長をして其法義を糺さしむるに信長淀の屋敷に於て廐の口にて其狀をきき直に樫の棒にて打殺し其首を梟せらる義鎭大に恐をなし大德寺より眞齊和尙を招き祝髮して宗麟と號したりとあれば如漏は天主の徒たるに相違なしいづれ二記ともに誤あるに似たり

よりて海藏寺をつぶし住僧眞寂をころし住吉の社をやき橋本五右衞門淸田因幡守に二百餘の兵をそへ萬壽寺をやき是元龜元年正月それより吉弘內藏助といふに命じ豐後國中の佛像をあつめ薪にせよとて日日五駄十駄づつあつめうちわりやき天正四年淸田阿波守鎭忠上野權守鎭俊に四千三百餘の兵をあたへ彥山の諸堂坊舍をやきけりこれを愁ひて宗麟紹忍を調服するよしきこえければ宗麟彌いかり神道佛道に推のるものをば一一誅すべしとぞいかられける此紹忍の徒に森部といへるめくら法師ありもと紹忍の一族にして田原源藏といふものなりしがのち座頭となり諸國に耶蘇をすすめ長崎にありしが元和二年たちまち心をひるがへし長崎の奉行

長谷川權六に訴へ出自のあやまちを悔ける權六江戸に此旨訴へしかばこれを耶蘇徒の目あかしと定め給ひけるほどに程なく伴天連伊留滿の棟梁ともしれ來りてみなとられけり此森部ころびの始めなり即この元和二年宗旨帳といふをはじめてみなみな戸戸に所隷の寺いで來りけり是　台德院殿の御時なりされど内分には其ともがらあるよしにて寛永六年公より竹中采女正重信豐後高田城主松倉豐後守重正をつかはされ吟味有ける薰犹のふかくてころぶまじきといふものは肥前の溫泉山に遣しせなをさき熱湯をそそぎ種種に呵責しころぶべしといふものをばゆるし猶ころぶまじといふをば八萬地獄といふ第一の熱湯にいれ又長崎西坂にて穴にうづめ又罪人をあつめ燒ころしなどしける故ややうやう寛永六年七月にはのこらずころびける故今までたうとみし像をふませけるこれ繪踏の起りなり抑かく亂に及べる事外國と通せしに起れりから朝鮮に通せしは尤ふるき事なり外國と通せし初を考れば長崎白山嘉左衞門といふもの有薩摩にゆき京泊といふ處にて船をつくり跤趾(カウチ)に行き南蠻の諸國をめぐりしに始まり元和年中御奉書下され堺京都どもよりも思ひ思ひに安南暹邏(シヤム)東埔塞(カボチヤ)占城(チヤンハン)(ヨテンバイ)に行けり　公此弊をかんがみ寛永十一年甲戌外國出船を御停止ありかねて日本より外國に居けるものも歸國をゆるさせ給はず寛永十二年より外國船のみなと長崎一所とさだめられ諸國人津はかたくいましめられ寛永十三年に出島をきづき南蠻人をいれ國人と混せざらしむこれより外國人の種をさがしだし貳百八十七八を得て各その國へかへし給ふ寛永十四年天草島原に益田四郎大夫時貞奸徒をあつめ　公にそむくゝあけの春其首とも三萬餘長崎出島の前に梟し蠻

人に示さる今の首塚是なり此年南蠻船入津停止となりぬ又來る卯の春南蠻種子吟味ありてかへさる翌寛永十七辰の年呂宋船壹艘來れり江戸に訴へしに上使加賀瓜民部少輔忠澄下り其人を船より上られ牢に入れ翌日引出し西坂にて六拾壹人首を刎其船をやきしづめ十三人のこしかへしかさねて渡海すまじきよし申含めらるその塚南蠻島といふ永祿よりここにいたり災をひく事七十餘載といへり後正保四亥のとし亞媽港より船貳艘來れり各廿餘間の船に石火矢二十餘挺しかけたり我國の法令なれば先石火矢玉藥渡すべきよし時の奉行馬場三郎左衛門より申渡されしに本國より交易の成否うけ給るまでの船なれば渡すまじきと用心の體にみへけり此よし江戸に訴へ其間に近國の大名或は小身相集り八代海口に大綱あまたはり船もれざる様にもかけ上使松平隱岐守定行六千三百餘人船九十三艘細川肥後守光利一萬三百餘船二百餘鍋島信濃守勝茂一萬三百餘船百七十餘松平美作守千二百餘船八十立花左近將監忠茂三千八百七十船三十三小笠原信濃守忠次千六百餘船六十五黑田右衛門佐忠之一萬七百餘船二百餘大村丹後守二千六百船三十其外の大小名山野にみちて堅めける程に蠻人膽をおとし先非をくいける故に事なく歸國許されける是太平已後の戰馬あつまりし事ときこゆ

長崎夜話草を按ずるにくろぶね入津の初は元龜元年庚午津の外西浦福田といへるに漂ひ來り交易し今の長崎を見立て來年よりここに來らんと約しそれより絕ず來る事になりぬその頃は異國の船も心ままに來り我國の船も思ふかたに行通ひけるが　國家此亂に懲り寛永十二年乙亥異國船停止異國へ何事もとどめ給ひぬ我國の

かよひなれたるは東京交趾塔伽沙谷呂宋亞媽港東埔塞暹邏等の國なりもろこしは我戰國の頃海賊どもをしわたりて侵しかすめしほどに大内義隆の勘合船より外はいれず入津停止の國は亞媽港

采覽異言曰阿媽港在廣東西洋商船所泊之私澳也

呂宋

同曰、羅呼ろくそん和呼るこまや、國在東南州中、其地頗大、古時有王、及後國亂、遂隷西蕃其主及將領、蓋伊斯把儞亞人、亦有日本流寓分其東地而居、嚴設關防、不令過界、其人被服帶仗、不變本俗、今孶衍至三千、其流寓者、此方敎門之徒、放諸海外也、

伊斯杷儞亞

同曰和呼いすばんや、歐邏巴西方大國也、其役屬者凡十八國、民物豐饒、俗善貨殖、歷市海外、因得北亞墨利加地、新開其國、爲新伊斯波儞亞、遂併有南海呂宋國、君民一皆崇信天敎尊敬其徒、上下悉依敎門而行云、慶長之初、始通於此、自是不絕、其後官沮之、以其挾天敎之徒而來故也、寛永元年春、遣使來請貢市、官移告却之、是後終絕

漢又剌亞

和呼いんげらんと意呼ゑんげるていら、波呼あんぎりや、又云あんげりや歐邏巴西北海中有二大島、此國與思可齊亞相分一島地其一則喜百泥亞也、國有海中、俗能操舟、人亦勇悍最習水戰、亦善作劍、爲天下名器、西南諸國皆畏、其人以爲海賊、王惡聞其名、即下令禁市舶、不聽國人闌出外洋、其國素習天敎、敎門十戒、他犯莫大焉、及王廢其妃、以妾爲妃、邏馬敎主、以爲捨戒、乃與諸國共謝絕矣、慶長五年春此國人與和蘭人、各駕一大船、其到泉州堺浦、世傳和蘭始附此人、得通海外、或其然也、及十八年秋、其王贈書通聘、明年復遣使來、延寶

元年夏、來求開市、不聽、同書曰、西洋諸蕃、盤據古俚麻剌加、爪哇、呂宋等國、皆以利誘之也、洋舫載貨、啗以珍奇、請置權場於要地、以通互市、夷中岡安于無法、而關防不嚴、因託以盜賊水火、願築土牆以護貨物、旣而築保壁、分兵屯戍、隱若敵國矣、夫利之所有、權之所歸、富者爲之貨殖、貧者籍之衣食、恩與威行、皆其私人、攘臂聲四起、客轉而爲主、反掌而已、南方之俗、古稱簡易、利孔一開、姦訴百出、眞是七日而混沌死矣

華夷通商考日本よりの里數をあげていふ

呂宋八百餘里亞媽港九百餘里諳厄利亞一萬千七百餘里いすぱにや一萬二千四里

寬永十三丙子のとし蠻人の子孫この國にありしを貳百八十七人阿媽港にかへさる其法父を本とし母にかまひなしたとへば母日本の種子にて父蠻人なれば勿論父日本にて母蠻人なれば母のみかへされ子はとゞまれり同十六年紅毛の種子拾壹人を探つてこれを咬𠺕吧に放さる右のごとく蠻船停止の處翌十七年阿媽港船來りて交易を願ふ　縣官國禁をかろんずる事をにくみ給ひ其衆七十餘人の內吟味あり欺かれて來るもの拾三人をたすけ六十一人首をはねその船をやき捨唐人のり捨船給はり國にかへさる然るに十二年を經て正保十二年又亞媽港より軍船つくり二艘兵粮武具のみつめるとみへたり入來れり筑前肥前の兩侯長崎奉行馬場氏と會談あり兵備嚴重前にのべたるごとく蠻人恐れ只他事なく先年の一艘罪を犯し來れる事國王の心にあらずよつて其事を陳謝し前例のごとく交易を願ふのみと訴る故兵備をとき國へかへさるそれより貳拾八年を過て貞享二年乙丑亞媽港船伊勢國渡會郡神領村のもの漂流してかの國にいたりける

を送り來りぬ　公にも復來の罪を許されかさねて漂流の者ありとも送り來るまじきよし　嚴命あり　國家猶我國をうかゞふ機あるかと察し給ふなるべし

阿蘭陀は西洋の一國なり寛永の頃阿蘭陀と南蠻呂宋の番島に炮戰して南蠻船和蘭陀に逐はれ肥後佐志城の浦に追こまれしを奉行長谷川權六はからひて阿蘭陀をば平戶に置き南蠻をば長崎に入れ炮戰なき樣にはからひける寛永十七年より南蠻は停止ありて阿蘭陀長崎に入津せり我長崎に遊びし時吉雄耕牛にきけり西洋諸國のうち阿蘭陀のみ入津赦免は諸國動靜治亂を偵報すべきによつて交易をゆるされけるよしなりさるほどに本職は我國のものみなり

五月雨抄上　終

五月雨抄下

三浦晋　著

帝統一百八代　後陽成院天正十八年　東照宮江戶に入給ひしよりことし天明四年甲辰にいたつて一百九十五年猶朝鮮の役どもありて世も靜ならざりしが慶長三年太閤秀吉薨御同五年庚子關原の戰石田等誅せられしより兵戈をみざる事十五年慶長十九年元和元年大坂冬夏の兩陣あり是より天下一統今に一百七十年鼓腹して太平の化を樂しむしかるに鎭西は島原の亂あり寛永十四年丁丑より翌寅の春にいたる是元和元年より二十三年今をさる事百四十八年なり島原一亂の諸記を考るに此時將軍　家光公の御治世にて肥前高來郡島原の城主は松倉長門守重次六萬石を領し其息を右近といへり同國唐津の城主寺澤兵庫頭忠高八萬石に肥後天草島

四萬石を合せ拾貳萬石を領せり此高來郡のあたりは耶蘇の舊染ふかく慶長の頃原の城主有馬左衞門佐康純に日州縣の城に引移るべきよし　命下りしかども僕徒多く耶蘇の徒故國をうつる事難澁の告ありしかば山口但馬守間宮權左衞門に命じ泉州堺の浦より原の城に下り邪徒吟味彼勢盛ならば各國の諸將を催し誅戮すべしとなりよつて山口高木郡の邪徒をとらへ長崎に送りて西坂にてこれを戮し其骸を封じて京觀をつくり鍋島寺澤大村有馬康純等が士卒を發し耶蘇の寺一一やきすて長谷川藤廣吟味をとげぬ此康純といへるは父を有馬修理太夫直純といへり高木郡有馬の城主なりしが交趾へ奇楠(キャラ)もとめに船つかはしけるを阿媽港人其を奪ひ船のもの五十人をみな殺しけり慶長十四年阿媽港人二百餘人長崎へ來りしが此ものどもの右の噂せしを聞人ありて直純に告ければ直純憤にたへず公に訴へ加毘丹をとらへ推問しとがある者を殺さんとしけるが蠻人此事を早くさとり船を出してにぐるを追かけて火をかけことごとく燒つくしぬ此時本多上野介正純の與力岡本大八といふものあり直純親しかりしが直純を欺きさりし頃蠻船やきうちの功賞あるべきおもむき其旨上野介沙汰せらるといひければ直純よろこび大八に莫大の金など遣し首尾をつくろはせけるされどももと大八か詐謀なりしかば此事露顯して獄屋に下り阿倍川原にて首を刎らる大八獄中より直純長谷川藤廣を殺さんとせし密謀を訴ふ是より有馬耶蘇宗門たる事しれ甲州都留郡において死を賜ひける長男左衞門康純十五才なりしが久しく　台德院殿に給事し耶蘇に染ざる事を照し給ひ新に四萬石を賜はり封を有馬につぎ耶蘇の徒を糺されけり又長門守事は父松倉豐後守重政

とてもと筒井順慶につかへかくれなき勇士にて大坂夏陣の一番首の功により島原にて五萬石を給はりぬ彼地は耶蘇の徒散在する間よく此亂を靜むべしとて江戸の諸役御免なり重政封につき吟味あり日日五人拾人づつからめとり或はきりすて或は火あぶり竹鋸引等勢猛にとりさばき其徒程なくつきけり重政武をこのみ驍勇の士を扶助し兵粮澤山にたくはへ家人吉岡九左衛門木村權之丞などいふものを商客となし呂宋に遣しかの國の樣子をよくうかがひ江戸に願ひけるは西洋より呂宋を支配し呂宋より南蠻をくみし是より日本をうかがふ故ややもすれば我國動搖の機あり願くは御ゆるしあらば手勢を以て呂宋を攻とり呂宋にて外患を拒がんと申けれどもとかくの報なき内其身もはて重次跡をつぎしに重次酒食に沈緬し諸士を憐まずよつて寛永十二年には家士四十八人立退けりかかるほどなりしかば國民もうとみにくみ此亂を醸しなせり此時小西攝津守行長が家臣に益田甚兵衛好次といふもの有小西沒落の後肥後の國に漂泊して有けるが士民の間に沈淪するを無念におもひ何とぞ家を起さんとおもひけるが人心を歸向せしめ黨をたてん事切死丹にしくはなしと心ざし天草高來のあたりを往來して愚民をたぶらかし彼これと人をすすめけり是より又鄕民ひそかに其像をかけ禮拜讃嘆しけるが人の大勢集る事なればかくるべきにもあらずある時左志來左衛門といふもののかたに老壯集り像をかけ讃嘆しけるを代官ききつけ其處にいたり大にいかり國禁をそむく事をののしり其畫像をとつて引さきふみちらしけるを鄕民いかり忽代官をうちころしそれより所所の代官をうちころし高來天草の奸黨一時におこり戰しばしば利を得しかば天

草富岡の城高來島原の城をせめけるこれ寛永十四年丁丑の冬なり魁首甚兵衛が子に四郎といふあり奸雄にして謀有すこしは書をもよみ覺へ居けるを四郎太夫時貞と稱しける本姓益田なりしかども世には天ノ四郎と唱ふ此宗旨天を尊む故に此徒たらんものは天の恵あつく生死ともにすて給ふことなし二十餘年前の伴天連今の時にいたりて天より使を下し給ひ此宗世にひろまるべしとの未來記ありこの四郎即それなりとてかの徒はこれを天使と稱し大將としけるがもとより不敵の奸賊なれば飛鳥をよんで手に入れ卵をうまするなどいろ／＼人の目をくらます樣の事どもしてまどはしけるほどに愚民は誠に天に通ずる樣に仰ぎ尊み其徒數萬に及ぶ此事關東に聞ゑしかば代官として板倉內膳正目附として石谷十藏をさし下さる奸徒これをきき有馬の廢城を修造しことごとくこれにとり籠りぬ板倉九州の諸將を召ししばしば戰ひしかどもかたずよつてかさねて松平伊豆守信綱戶田左衛門氏繼さし下さるるの沙汰きこえしかば板倉は口おしく思はれあくる正月元日無二無三に戰ひ討死をとげらる信綱諸卒の命をそこなはんことをいたみ數萬數月の籠城糧のつきん事をはかり軍令を嚴にしてまたれしに果して二月廿七日落城し首魁時貞をば細川越中守忠利の手にて陣佐左衛門なるもの討取殘黨三萬餘こと／＼く誅戮せられ再度太平の化に浴しけるよつて寺澤兵庫頭は天草四萬石を召上られ長門守は領地沒收作州森內記にあづけられ下屋敷にて死を賜はり其子右近は保科肥後守家臣に下されしかばこれを面目なしと思ひ自殺してうせぬ松倉の佞臣岡田作右衛門大町權之介金地院にて首を刎らる

長崎夜話草には大將大江四郎太夫は長崎

所生のものなればこらしめに首を長崎大波士にて一七日獄門にかけられ籠城の惡徒二萬人の首皆一同に西坂といふ所にうづみたり今の有馬塚これなり
四郞大江とも稱せしにや又本姓大江なりしにや
三河後風土記を案ずるに關が原敗軍の後小西攝津守行長は伊吹山の東糟賀郡の寺院にかくれ居けるが主人の僧にかたりけるは我は小西行長とて今度のさわぎの張本なりとても運をひらくべき身にもあらず石田といふ不覺ものにかたらはれ無下の敗軍口おしき次第也今死しても有べき事なれども我は年來耶蘇の宗門をたうとみ侍り天帝の法に御僧の志忘れがたし早く我をからめとり德川殿にまいらせよとてとらはれにつきしとぞ石田ももめんの垢つきたるをきてかがみけるを捜し出されける　神君の給ひけるは此輩皆匹夫にあらず今身の置處なきままにつづれをまとひ身をやつし武名をうしなふに似たれども將の盛衰は塞翁が馬なり勾踐吳王のいばりをなめたるをも世に耻とせず互に干戈をかまふるは武將の習戰利なきは時の運なり大志あるもの命をみだりにすてざるは將の心とする所なりしかるを其ままに引渡さばわが耻辱なるべしとて衣服を給ひけるよししるせりおもふに石田も耶蘇の徒なりしかば小西と同じ心にても有けん其身もとより秀吉の恩顧あつくそぞろに天下の　東照宮に歸するを見て感激して王陵が節を志し猶恢復の思ひを抱きし事　宮の照し給ふ通りにてや有けん
一、肥島戰記に筑前大島にてとらへたる伴天連伊留滿同宿等白狀のうつし書をのせたり其辭に曰

いたかやうまといふ處に切死丹宗門頭はつわといふ者あり國國へ伴天連を遣し宗門をひろめはつわに隨ひてはやうはやう奉行を遣ししおきを致候のびすぱんは呂宋なり外國を多く貪りとれり日本は中中軍にてはなりがたき故後生の宗門を廣むる爲の伴天連をわたすべきとの義なり一人は黑川壽庵と申候年來日本へわたり可申よし物がたり申候其外日本人の子五六人呂宋にて只今學文致させ亞媽港にても日本人の子十二人學文致させいづれも伴天連にとり立日本人に致可申由承り候伴天連多く方方の國見仕立置申候此者共連連日本に渡可申由にて切死丹ひろまりし時分日本の出家へ金銀を出し切死丹宗門に致し其外日本いるまん同宿を諸寺諸山に遣し學文を致させ佛法神道の極意を習ひはつわの方に遣し南蠻口に引直し板におこし國國の伴天連どもへ遣し學文致させ申候いづれも法をひろめ已に從へんとのたくみにて候事

未九月八日このもの忠節申上候とて屋敷扶持まで賜ると有又をくに　大猷院殿の御時井上筑後守切死丹の案内者たるよし　台聽に達し切死丹改奉行になされける此時長崎奉行竹中釆女正なりしが黑船來り伴天連三人日本より先年追放たれたるものを案内者として來りしが推問きびしく白狀しける故伴天連死罪をゆるされ江戶飯田町に屋敷を給はり扶持し給ひけるほどに終には國恩を感じ禪宗に歸し記請文を捧げける日本の案內者は皆死罪に行はれ獄門にかけられ其船は燒捨になりぬ飯田町の屋敷は石垣一丈二尺の高さにして一丈の屏を四方にめぐらし忍びがへしの釘さきを內にむかせ晝夜の番嚴重なり世に是を切支丹屋敷といふとなり

上の事と一事にや別事にやしらず
一、肥島戰記に曰切死丹制禁の由來は秀吉の時諸宗の僧侶よりかの徒發興し堂搭寺院破滅に及ぶ事を歎きけるより文祿四年乙未秀吉ことごとく制禁の令有しかどもさのみ吟味といふほどの事はなくて過ぬ　東照宮ふかくかの奸をてらし給ひ本多佐渡守正信同上野介正純奉行として大久保相摸守忠憐上京して奸賊を正し諸國の家士民間までくわしく禁あり其内黑田主水有馬修理太夫家士にかの徒多きよし本宗にかへらしむべき内意ありて各佛宗に歸しめ慶長六年板倉伊賀守勝重京都の所司代として都のあたり探りもとめ伴天連の徒を本宗に歸せしめもし本宗にかへらざるもの異國人はその國にかへし彼寺院ことごとく燒はらひその黨の者ことごとくからめとり俵にまき五條の橋の邊につみかさね鐵杖を以てうちたたきころべころべとせめさいなみ猶屈せざるをば長崎に送りて刑しけるころぶとは切死丹より本宗にかへる事なりその時の狂歌に

　ころび吹尺八竹を切死丹俵にまかれこも僧になる

武德編年にもこの事をのせて慶長十八年十二月耶蘇の徒京師に散在するよし聞召大久保相模守忠憐上京しこれをはらひすつべきよし命せられよつて忠憐都に上りあくる正月洛陽大阪堺の耶蘇をとらへ長崎に下し糺明ありよつて西京四條兩寺の僧侶等鎭西に下りしかば切死丹寺ことごとくやき拂ひけるとあり

一、此頃は耶蘇の敎行わたりて貴賤なべて其毒に沈めり蒲生家の鋭士佃又右衞門といふ有後福嶋正則につかへしが是もその毒にそみぬ　神君勇武を惜みしばしば敎訓なし給ひしかども其醉さめず終に誅に服しぬこれ

慶長十九年の事也その頃原主水といふものありもとより耶蘇にそみ一旦とらはれしかどものがれ出跡をかくしけるが坂東よりさがし出され十の指をきられ額に燒印をし此者愛育するものは曲事に行ふべきとの制策を負はせ放逐せらる此もの岡越前守貞綱が子平内といふものかくし置し事顯はれ吟味の處貞綱ゆめゆめしらず平内かねて浮田家の浪客明石掃部全登が聟にして（浮田秀家關原にて敗軍の時明石掃部いさめて我所領備前岡山にしりぞき天下の勢を引受心よく討死せんとていさめかへりし人なり秀家げにもとて國にかへりける留守共早立退き郷民町人等城中にたくはへたるもの共うばひさりける程に秀家芦森に立のき掃部秀頼より招かれ後藤又兵衛等と籠城しけると落穗集にみへたり）明石原岡ともに耶蘇宗の交ふかかりし故となりよつて貞綱は免許を得平内は改易せらる駿府槙（マキ）谷耕雲寺にもしばらく主水をとどめける事あらはれ住僧罪をうけぬ主水かねて　神君の侍女と通じけるが彼女主水が重科にあはんとするをみてひそかに惡逆をはかりけるが是も事あらはれて死刑に行はる程なく大坂に戰おこりしに越前守主水が弟忠兵衛この事をうらみけるにや籠城をとげ落城の時父子兄弟ともに戮につき長く家門を亡しけるその頃何の清安といふもの耶蘇の徒にて牢舍しけるが獄中にて罪人をふたりかの宗門に引入けるよつて是又主水が如く十の指をきり額に燒印をあて追放たる是等の事武徳編年にみへたり

一、采覽異言を按ずるに西洋は歐羅巴の地なり南蠻といふものは西洋の船の來る道を呂宋にとる故也くろ船とよぶものは瀝青（マツヤニ）にて船をぬれる故いへる也天文十年辛丑はじめ

て豐後に來る(按ずるに長崎緣起の說と年數異)是波羅多伽兒のふらんすくすさべいうす名だかき彼國の教師なりからの書には佛來釋古者とあり同十二年さつま種子ヶ島に來る南浦文集むらしゆくしやといふも此人なり豐後より天正十二年春植田玄佐といふを遣せりもと此ものは美濃齊藤の氏族なり其子を携へてかの國にゆきしが邏馬國にて死けり今に其墓ありとも邏馬のよろんはつていすたしろんといへるが新井筑後守に其像を出て示しけるとなり天正十五年大閤つくしに下り給ひし時彼教師の禮なきをいかり驅て境を出さしめ給ひしかども通市はもとのごとくにして貪るものは利を追ひ愚なるものは教にまどひ終には前後戮に陷るもの二十八萬人に及べりはつていすたが言にこのふらんすくもと加西蠟の王族天下を周流して方に隨つて行化し我國に來り都にも入り西に歸らんとして臥亞にて死せり是を金棺に葬りて今猶いけるがごとしそれがしこゝに來るにも其塔を禮拜せりとなり筑後守この事を和蘭陀にとはれしに其棺四牆玻瓈の板を嵌せり就て見れば瞑目趺座毛髮かぞふべし是は大西に孛羅國といふ國に巴爾婆摩といふ木あり此木の汁をぬり置ばくちず傷れず如德亞の妖人ども是を以て人をたぶらかす事多しとなりさんこの國禁つよくなりても來りし人多し西齊里亞といふ島よりこんはにやよんせうといふもの其徒にてありしが才辨あり著書三卷有しとかや是は官より衣食など給はり岡本三右衛門と稱して年七十餘延寶中に死しき寛永己卯波羅泥亞の人かくれて居けるを有司とらへて斬るこれその國王の侄あるへるといへり年二十餘又那勿蠟といふ國の王まかせいろといへる人ふかく天教を尊び自あまねく四方にこの

道をひろめんとちかひ呂宋より長崎に來り寛永丙子のとし戮につけりさてこのはつていすたといふもの寛永戊子のとしさつまの海上に一大船數日みへつかくれつせしが程なく西をさしてさりけり此日屋久嶋にてかたちは我國の人のごとくにして言語さとすべからざるおのこを得たり島人あやしみこれを長崎に送る此とき　文廟新に職につかせ給ひ新井筑後守をめして事の由を問しめ給ひけるにむかしの寃を訴へ我國の禁をひらき貢市をもとめん爲なりしとぞ此筑後守即白石先生なり此者博識にして地理にくわし白石の釆覽異言は此人の說を主とし取れり耶蘇の法を弘めん爲に來れる故江戸にて刑につけり白石の五事略にみへたり

一、呂宋は西洋歐邏巴の地方伊西把儞亞(イスパニア)より治む慶長の頃書を奉り物を賜りし事どもあれども呂宋國王にはあらず伊西把儞亞の官人のする所なり臥亞(ゴア)は歐邏巴の內波羅多伽兒(ホルトガル)より官人を遣し置亞媽港は臥亞より兼帶す咬𠺕吧は阿蘭陀に屬す其外南蠻中新阿蘭陀(ノブアオランダ)といふありこれ阿蘭陀よりとりたりとみへたり我邦の下に亞墨利加(アメリカ)といふあり歐邏巴のうち伊西把儞亞(イスパニア)より此內一方をとりて今新伊西把儞亞(ノブァイスパニア)といへりかくのごとく其國の備なきをうかがひ金銀酒食衣服を以て人の國を奪ひとる我國東照宮の明よくここをてらし幸にして蒼生この日月を戴く事を得たり伊西把儞亞も寛永元年使を奉じて來り貢す其三百人これ天主の徒たるを以て其聘をしりぞけ給へり事皆五事略にみへたり阿蘭陀などいたつて小國なりその與國七つもし無道の人あれば相議して其主をかふ右七國の主より合て大船を作り咬𠺕吧のあたりに官人を置き諸國に遣し交易す十五年に一度總勘定をして其利をわかちとるときけり

伊吹もぐさに外國我國をはかる事を擧たる一段は異國に不案内なるより街衢愚陋のうはさを書とめたりとみへたり信ずべからず地理事故によつて考ふるに伊西把爾亞波羅多伽兒のあたりより奸を我國にいれそれより其他の國よりも我國を伺ひしとみへたり和漢の人干戈をうごかし人を威服すると其術大に同じからず有國の人ふかく其奸をしらざるべけんや

一、先あらましをかんがふるに其教師は僧の様なるものにて天主といふものを造物者の位に置て三世をときて人をすゝむるとみへたり其故は破吉利支丹にきりしたんの教にでうすといふ佛天地の主にして天地萬物の作者なり畜類にはまことの魂をあたへざるゆへ此身死すれば靈もともに死す人にはでうすまことの靈をあとふる故身死しても靈死せず今生善惡の業により苦樂をうく善業の者をばはらひざうとて樂つきぬ世界をつくりて遣し惡業のものをばいぬへるぬとて苦界をつくりて是へおとす日本にて日月を敬ふ是はでうす世の中の行燈(アン)につくりたるものとことくよしきけりとあり白石先生釆覽異言邏(ロ)馬(マン)國の下に其國王教化の主にして法衣るりちよとて西竺の僧伽梨のごとしとありかれこれ考へあはすれば衣服別に其制をわかち天主といふ本尊をたて三世をたて極樂地獄をわかてば其教大に聖人の道にことなる事しるべし聖人の教は天を畏れつつしむといへども専人倫の教なりしばらくたとへをとりていはんに儒者の尊む所は孔子なり今もし暴君ありて聖堂をこぼち聖像をやぶり學校を廢せんとせば其任にあたらん人力をつくしなげきいさむべし猶用ひずして其志を行はば儒を以て守るもの或は機を見てたつべし或は屍を以ていさむべし我奉ずる

所のあだなりとて其主に弓ひくものはあるまじ又異國より周公孔子の像をさきにたて襲ひ來る事あらば儒を業とするもの鎗先をそろへさんざんにふせぎ戰ふべし其故は聖人の教は其君を君とし其父を父とするの教にして君父を外にして別に尊むものなければなり外教のごときは愛利をかりて人を慾に道びき幽冥の內に苦樂賞罰をまうけて畏樂の心をつくし君よりも父よりも尊きものをこしらへ慾心のくらきより冥途に香餌をまうけ人のまどひをかたうし我一身の爲に君をうしろにし奉る心をやしなはせ其機をうかがひ國をうばふの計をなすなるべし我いとけなきより天地にうたがひありて寢食を廢するばかりなりしが天地に條理ある事をしりて死生幽冥の事も疑網とごとくとけたり西洋は奇巧すぐれたる國にて天文地理によく達する樣なれども唯麁體のみをしりて造物といふ物をしらずとみへたり其故は天主は造物の位なり造物のさかひ此說によらば沒交涉（モツケウセウ）（テツテモツ）といひつべし三世の報應を立るも樂界苦界をわかつも皆觀物の法をしらず天地よりして人を見ず人より天地を見るのあやまりなりまことに世に至尊と稱すべき物は天にまされるはなしといへども泥塑木偶を以てかたどるべきにあらず生じて德とせず殺して罪とせずとかとみてもたかきをくはへずいやしみても卑きをまさず身かたせんとて身かたすべき主もなく仇せんとて仇すべき體もなし故に我天を奉ずるの道は天の威を畏るべし天の則に順ふべし天の命をまつべし故に臣としては忠に死し子としては孝に死し婦としては貞に死す此外に苟擔する一物あつて是が爲に君父を後にする道なしもし君父夫の變にあはゞ我身死してやむより外他なし君を尊め親を尊めと敎ふ

るむかしの聖はたうとしといへども是を奉ずるとて君父に弓をひく時は是聖人にそむく也このさかひをよくしるべしかつ邏馬人の儒教域中を出ずといひてさみせしは聖人の教も耶蘇などの樣にひろめくらべする樣なるものとする故なり聖人の道とはむかし王者の天下をおさめ給ひし道なり故にひろむる事も黨を立る事もなし君を君とし父を父とし彜倫日用の間に過ざれば只あるものをある通に行ふなり天地の間に父子君臣夫婦兄弟なきの國なければその樂に相善する道あらば我道をかれにひろむるにもあらず彼と我と同じく其則にしたがふなり禮樂文物のごときはその國國の宜敷にしたがふもとより聖人の敎なり君子の道義といふものを重んずる故に我身いか樣のたのしみ有とてもすて鑊湯爐炭にもいるなり異教の道は我身死後の樂をせんとては上にして君父下にして妻子をもすて是を無上と心得侍るいたむべきかな生ては我生の身を有し死しては此生をすてて化することをしらず死して後も生て居るとおもふ愚癡より死後冥冥無用の福をもとめんとて生前不義に身を落し百年の性命をそこなふされば益田が身天使と稱し障眼（テツマ）の小術に造物もその其指揮に從ふ樣にいひふらし鳥をとらへてみせたり卵をうませてみせたり弓箭もあたらずなどいひしも首陣氏が手にいり其徒噍類なくなり屍の上に奸賊の臭名を蒙らしめし事小妖術只しばらく人の目をまどはすのみにして人事の正にかたざる事顯然なり聖人の道は君臣父子夫婦兄弟朋友を五達道といひて智仁勇の三達德を以て此五達道を行ふ事なれば雲行雨施すの天命より外にさしはさむべき術もなしたとひ天地を動し雲雷を鼓する術ありとても何かなるべき邪徒は人の思議

に落がたき事をなして人を欺くされども是又造物をつかふ事もならずみな機巧をまうけてなす事なり蠻人初來の日自鳴鐘望遠鏡などもち渡りて人を驚かせしが今は人もなれて常の器とおもふなり西域の人もろこしに來り刀をのみ火をはき人を驚かせし事有法苑珠林に火をはく事は其しかけあるよし說りしかるに今は蠻國よりゑれてざるとて人の身にあて火を出す器も來り皆人これを知れり刀をのみ針をのむ樣の事は今は六文出せば何方の市に行てもみる事なり不思議奇妙といふ事も皆しな玉の手目を見せぬなり又邪徒の夜陰人なき地にてなき魂にあはせ又かが見に鬼畜のかたち又柔和の相をみせ人をたぶらかす樣の事は今もときとしてはきく樣なりそれにつけてこの頃おかしき咄きけり某の處の婢女あけくれに隙さへあれば鏡を出して自照し自愛するもの有けり

わかきもの是をしり女の出ける隙其鏡をとり出したてに力をいれておしまげしらぬふりして有ける婢女しらずして又例のごとく鏡とり出してむかひければ横はせまくなり只たてに長き顏のうつりける程に驚きて鏡をなげうちいかなれば我はかくはなりはてけるぞと泣きけるとかや鏡の術みな是にたくみをくわへたるなりかくあさましき事なれども衆智はおろかなるものにて一犬虛を吠て萬犬虛に傳ふる習なればなきことをありし樣に唱ふるが世の樣なり我かく常に虛說を破すれども世に我いつの頃は大風吹べし地震すべしなどいひしとしば〳〵噂せらる書籍傳記にのせたればとて具眼の人の迷ふべきにはあらざれども神通自在といふ名目をかりて人をたぶらかし奸人財を奪ふの謀をなすむかし舜の臣に夔といひて樂に達せし人あり夔一足とて夔は足一つなりと世

につたへたり實は夔は樂の名人ゆゑ夔は一人にして足れりといふ事にて有けり又宋人井をほりて人を得たりといふ沙汰世にいひはやせり行て是をきけばかねては水遠く水汲みひとりやとひしかども井をほりて後は人を一人得たりといふ事なりしとぞ又ある處に回國に出ける人あり暫ありて其回國は鬼に成たりと故里にきこえけり妻子なげきにたへずかれこれと問けるにそれは誰こそたしかに逢たりといふしるしに其人を尋ねて問ければいなさにはあらず何の國にて其人に逢ひしに我故里にては病がちに月日を送りしが旅におもむき侍りて一日もやめる事もなく今は鬼に成たりぞといひ笑ひて別れ侍るとかたりしにぞ妻子も心やすらに成てかへりしとや今伊綱の法などいふはなしにそれの席にては波を湧かしかれの處にては牛をのみしなどいへども畢竟誰見たる人もなしたまたま見たる人は大かたは頼まれぬ人なり今の世にあやしき事をなして幽冥の間にまどはせば其おぼろおぼろの心よりそれに沈淪し目にもあやしきかたちを見夢にもあやしき事を夢見彌眼花耳聾にまどはされ醉生夢死してやむのみか大に世の騒亂をいだすあなかしこ君父たとへいかなる僻事ありても君父にそむくといふ事は聖人の道にはなき事なれば別に我奉ずる處をたて君父と爭ひ拒ぐ様の事あるべき様なし國家を有する君はつとめてこの境をよく教へ道引給ふべき事なり尙書に地天の通をたつといふはこの事なり勿論聖人の道といふものは仁義といふ物あり義にあたらざる事あれば君の命を奉ぜざる事ありやむ事を得ざればいさめて死する事はあり君にそむくの道はあらず其いさむるといふは不義に随て君を不君に陥らしめざるが爲なり君父の外に

ひとつの尊きものをたて極刑にあひても君にそむきても我死後のむまき樂にはかへじといふ樣なる教はあらず故に聖人の道は義を以て我身の苦樂にかへず異教のごときは義といふもののなき故かかる世のさばきをなし侍るしかれば後世世に君たらん人此事にこり人の耳目をあきらかになし給はば必ずかかる憂はあらじ其耳目を明にする道は詩書の教を施すにあらんか

五月雨抄下 終

東遊草

豐國東　三浦　安貞　草

ことし寛延三年庚午はからずも東遊の興を催して睦月もやや過ぬ如月十一日佳辰なれば逆旅装しぬ

二月十一日　富永より高田迄　五里

此日天晴風朗なり貞右衛門といへる男をともなひてうかれ出ぬ吾里なりけるほとりの山迄人人見をくり夫よりぞ雲よ霞と立わかれぬ其夜は高田に因の銅野貞右衛門といふ人の許に宿しそのほとり兩德屋龜右衛門丸屋五兵衛などいへる人人打あつまり四方山の物語などしてやや五更になんなんとして枕につく

十二日　高田より大貞に出中津迄　八里

あした丸屋のあるじ朝餉たべよとて招きければ遠路ながらいなみがたくて日はやや四なるべしわらじの紐結びぬ折から故郷の甥專助家君のいひのこしけるとて文などつたへて是は外に友あり彦の祭に詣づ逢事も有べけれど是もはかり難ければ恙なく歸國の面をなどいひて別れけり銅氏が別をおしみて明壽教寺のうしろなわてを西にをくりける爰は肥州島原の舊領地なりしが去年島原侯不祿し給ひ嗣君宇津宮戸田能州と所がへありけふ關東の諸士匹馬に策をくわへて通られけるにあふ是より宇佐にまふでいと口原の古蹟をながめ新左衛門佛は日本の佛なるべし橋坊主にやすらひ大貞一の宮を拜し御池の波に五湖をしじめ曾遊も指ををればみとせのあとの月の頃なりしに光陰うつろひやすく常盤の松も緣ふかく尙古郷より伴ひける彥詣の客なども一盃の美味をかたぶけ行行ひとつまちは過ぬ牛かみ村忠左衛門といふを主としける

十三日　中津よりはね木　六里半

日すでに出ければ友どち中津の町へ出ける賣酒壚にやすみ寺町を見甥などもおなじく來りてけるを引連爰かしこ知音などとひてはりまやのあるじを尋れば酒よ肴ともてなしひとりの男をそへて天仲寺へ案内をしける高瀬川に棹したが爲におるはたものの如水の女の廟を過天中寺へ詣ける是は先代小笠原侯の廟ながら勳業一旦ちりとなる香爐などは側ちて霧常住の烟をたき燈籠苔むして月五更のひかりをかかぐる歟花鳥はそれとなう客をよび人に嬌て時をうつすを忘れけり扉を開て内を拜し山を下りて案内の男に辭し彥の高根にこころざす人人も同じく此路にして手をわかち小犬丸の西に出なを向といへるに中津小倉の分界堠子を立たり、くつ川、はちや、しやうゑ、湊、椎田をへて新田原といへる松原にかかりぬ其長さ壹里ばかりかへりみおもふにむかし西遊せし頃生の松原いきて見し事などおもひ出しあわれそのかみ宮古びとのへし跡にもあらば今少しやさしき名も有べきにと獨嘆じでめてのかたの山をとへばのぞき山と云日ははね木村の西のかたに落しかば直にこの村の仁右衞門と云男に宿かりけり

十四日　小倉迄　五里半　海上　三里

家の老尼に朝餉はやくしたためよとたのみければしののめにはたちぬ春ながら尙霜もふかく鵲の橋にはあらでおはしの宿も行過ぬ沖のかたを望めば雨も久しくたへぬればみの島山も甲斐なくてよばるの松原に暫くやすらひ狸山の路にも迷はず名は何とやいふ一里もやや遠き土手をへて海の面の馬島や、かぶとましまなど云める青螺をかぞへ松原をすこしめぐり足立山のふもとに一の蘭若あり雨をかくせる龍鱗琴を奏る風の音峰

よりつゞく松にして門に第一關の字を懸だしたり先なる門には卽非の墨蹟として廣壽名山福壽禪寺とあり内には不二門の三字を榜せり水殿雲房みめぐりて本堂の後に一の苔の徑あり掃除する僧にとへば此上は御廟所のみ見るべき所なしといふされど木しげく苔濃にしておもしろう覺ければ勞を忘れやや暫くのぼりけるに小き精舍などもみえ廟前石の鳥居を立たり靜かにここを下り小倉の町に出船長のいぶせく呼るも力にて小きわたし船にのりぬ是は城門の前の江にして所の名さへ橋下とて衣冠の士橋のうへに履をならし我ごとき旅客は船にのりぬ櫓うごき岸轉じて壹丁ばかり番所ありここにて往來改ける長崎の順禮大阪の商人筑前の遊僧豐後の道者藥うりとおぼしきおのこはたんすをかたへに大事と形付虛無僧は天蓋ふかく引かづきて物も得いはず僧有老あり女

ありあるは舷をたたきあるは掌をうつて今樣をうたひけり船子をすかして名所のかたをとへば名所灸壺かたりきかせんと戲てゆけば右の濱を長濱とをしへける是よりや天の河原につづくらん星かとみゆる企救の高濱とは是なり清經の世をうき事におもひ月おもしろうすみけるに夜ふけてひとりふなばたに出、腰よりようてうぬき出し數曲を吹て身を投じ柳の浦は波あれて大里は白かべの墟などみえたりこれつくしの諸侯船にのるの所なり九重の内戀しくば柳の御所を立よりてとよみしは爰かとゝへども答へず藤松の山は花挿頭山に連れり大閤秀吉の鷁舟已に覆らんとせし與次兵衛瀨は石くろくして與次兵衛が塔のみうへに白くたてりめかりの宮豐にあるを今はやともの神といひて前にふたおひの島あり戰國の餘習尙盛なりしとき佐々木がんりう宮本武藏と劍を論じ

てうたれたるがんりう島の右を過田の首島はその名の拙きには似ずおもしろく興じてとかくする內關につきぬ城(ジャウ)のこしさかひや五兵衞といふ人を尋て故鄕への文などたのみ赤馬町いとや喜兵衞といふ旅やに杖をやすめけりいなり町の躍にばかされ渡部橋供養といへる狂言見て家にかへればあるじ已に枕につかんといへるここは西國第一の湊にして幾船にか天涯萬里の愁をのせていかりを波にしづむらん町二里になん〳〵として所の繁昌大かたならず

十五日　關より船木迄　九里

夜をこめて立けるに長崎より山口にかへる客を伴ひける夜も深かりければ阿彌陀寺のとざしもいまだ開ざればそのままに打過ぬこの頃長府のさる禪院日向の古月和尚を請じ說法あるのよしにて關よりこなた男女打つどひ參りける潮壇の浦に漲て壽永の戰鼓の音に似たり山陽西海の山相對してそびえその間甚ちかしかなたのかたはやともの神のいます所豐の尤長門にせまる處にして餘所目にはその間七八町ばかりとも見へし盛衰記にあるさふらひ泳ひで筑紫へわたりしとはこの所にあらずや龜山の神をとへば跡になしぬはやともかめ山是いはゆるいにしへのめかりの神なりめかりの神は彦火火出見命といひ或は火闌降神命ともいふひとりの老人是も古月の說法きかんとて行けるにともなひ左にたかき山をみて過けるにその山をとへばむかしこの山檜木多く中頃火出自燒たりよつてひの山と號すいにしへこたん中將この山に城をきづくとぞかたりけるこたん中將なる人を道行人にとへばいろ〳〵の物語しけれども齊東の野語にしてしるしとするにたるものなし一たび山陽の地に入れば山こと〴〵く兀て童なり住吉の神は山

のうしろを拝し長府の町に出この沖滿珠干珠の二島有て神功皇后のあとをとゞむくらまの里はくらからで吉田川をのぼるとて毛利讃州の士にあふ此川に漁するをとへば白魚とるよし是より互の口ほころびとり〲の雜談して最前のおのこのいひけるこたん中將といふをとへばこの國の故老かたりつたへたるのみにしてその正説をしらず琳章太子いまだ歸化せざるむかしの事ならんひの山その古城なり後毛利幕下の臣内藤何がし再たびこの地に城をきづくなどかたる内吉田の驛に入しかばかれは北吾はひがしと立わかれひとつの坂にのぞむ山はげて沙白く宛雪中の山をみるがごとし岾に陟て父母を瞻望する古き詩もおもひ出られそこはかとなく攀のぼるに隱玄の流を汲る僧かと覺しき山を下るにあひ坂の名をとへば蓮臺坂といふ上に蓮臺寺ありといふ山は八分なるべし左に道あり白峰山蓮臺寺といふ勞れければ詣でず山めぐり道轉じのぼる事遠く下る事ふかし麓なるひとつの家に立より邯鄲の旅店にはあらねど黃粱一睡の夢をむすび友人に驚され立けるにいかにしけん左の足をいためける此路すがら宇津宮の諸士驛馬にまたがり駕籠につかれ見もせぬかたと故鄕と志し通るものすくなからず定て恩愛のわかれをさきすみふりしかたも戀しかるべし厚狹川はわたし守の船にゆられて船木の町に宿かるにきのふ關のわたしを船を同してわたりけふもあとやさきと道ふみし府内の道者さきに宿かりけりあるじ客も多ければいかがといへるをさすが同國のよしみありてくるしかるまじといふにさらばともかくも辿表ににじりあがりぬあるじは櫛屋甚兵衞櫛を以て生業とす風呂屋を尋ていためる足などあたため宿の嫡子新千代といふに

山中までの馬たのみ貞右衛門とひとつ床に屈りふしぬこのわたりは吾國とはちがひはにふの小屋は疊なくわらむしろのいとおそろしきにふるき琉球むしろ一枚しきたりゆかの簀子はをれて夜きるべき一重もなく二人して夜すがらふるひけり家のあるじのかたりしむかし神功皇后この地にして楠をきり船をつくるよつて船木といふその根地に入て石となるよくもゆとて圍爐裡にたきけりその臭甚惡し吾つくし豐前筑前にも是を出す

十六日　船木より周防山口まで　八里

豐府の客ほ我に先だち又めぐりあふべしなどいとま乞していでぬ驛馬にまだがりける頃は朝もよひの東の空もまた暗くて十五夜の月のかつら西の山端に半みえて流も木木の間にひびきて山中の宿に馬よりおり半道ほどへて峰にのぼり周長の界石の表をみる大なる松ありこれをわりご松といふ此あたり人多く集るの處はそのかたわらに大なる石の地藏を安じ下に三界萬靈の字をかけり是は六道能化の菩薩人道にさまよふものやしふべきにあらず尾郡の町には山口へと志しけるが足のいたみつよくしておもふ程にはかゆかず今朝よりかきくもりて覺束なき空也しが雨しきりにしのをつきておしからぬ衣ながら雨に濕ひ道よりひとりのはかりやを伴ひ山口の町を横にぬけ竪小路なる寡婦の老女の家に入る是より半道ほどあと溫泉あり

十七日　山口より宮市へ五十町道　四里

宮市より富海迄　二里

きのふ夕部の日和には似ず朝日窓にうつろひてければ杖にさそはれ大神宮へと志しける情地勢を考れば四面山かこみ中間地平なり町もやや長く民のかまども烟たつされど

大内家の全盛をおもへば千分が一なるべし義隆の覇たりしや中國を掌に握り中原を睨めし南面してくひきをあらそふもの換り星うつりむかしの衣冠さりつきて鶯花にあそび鳥林に村がるのみ誠や石火のひかりの内の身は蝸牛の角の上にあらそふにて如露亦如電の觀をなす石垣のうへに竹の森あり松などみえたり爰をつき山といふ定て古蹟なるべし是よりかねのてに左へめぐる一の土橋を過多嘉のみや嚴しまの明神あり鳥居を入板はしをわたるこのあたり神につかふる人の家あまたつくりならべて手水場に漱手洗ひ又鳥井をへ自然石の壇をよぢ祇園の社を望猶小き社數數めぐり猶一層をこへて玉垣を隔て内外の二宮をふし拜むみやはかや葺の何となう殊勝におぼえ繁れる松の下影を斜に下りてじやうゑんじ瑠璃光寺に遊ぶ二蘭若の景ほぼ相似たり松は百年の緑を

ふくみ杉は千尋の雲を摩しゆふべの雨の木ずへにのこりてしたゝる雫池に落幽徑の苔滑なり五重の塔波にうごき百八の華鯨かせに吼ふ高の峰は猶朝霧につつまれて義隆の古城は此峰の松くらう生たる所と敎られてもとの宿にかへり朝飯たうべ茶にやすみ初瀨清水石清水八幡大通院へはゆかできのふ伴ひけるはかりや年は若かりしがねもごろなる男にてけふも宮市までは連となるべしとて祇園の旅所を過橋にかかる爰にひとつの石有長さ六七間もや有べし上に七八尺四方の石をすえたりかさね岩と云又鰐石と云むかし鬼女有てかつぎ來ると云誠しさにはあらずとも聞るままに書附けるこゝを過て右のかた陶尾張守晴賢入道全姜が第宅のあとなり大なる沙川をわたり行事しばらく道のほとりに小き社ありその名をとへば柊とことふ是より前つじみせに小き鳥井をこし

らへうる所甚多しここに又子供集り鳥井かうて神に獻れといふ因て神前にのぞめばあけの鳥居十間ばかりの内に六七たて猶小き鳥井はかたへに山のごとく積立たり人にとへば神の好む所なりしといふかねて聞つたへし日上山は東照宮の御廟ありこの十一日になん萩より能士來りて能ありしよし人にとへば半道ばかりあとになりぬ鳴瀧は馬場長く溪聲高く灑ぎ雙樹陰濃なり第一の門に月光山とあり是を過て洞門あり毘盧峰とかけり寺は尙高くかまへて大松前を遮るうしろに流るる瀑布のうへ童一といふ天狗すむといへり寺を泰雲と號す半里ばかりへて佐波山の精舍あり寺前の茶店に綠茗を酌盃中の物をかふ　たをこへをこし鯖（サバ）川を船橋かけて宮市の町に入宮市は周防の府中にして又防府と云錢かはん迚ひとつの家に入日影のうつる迄物語しけりあるじの曰さば川もとにしき川と名づく俊乘坊重源大佛建立の時東大寺の材木をこの川上の山にとる役夫食につき　俊乘坊きくづをとり鯖の字を書川に投ずきくづ盡く化して魚となり役夫の飢をすくふ是より錦川をあらためて鯖川といふとおもふに郡佐波と號す故に川もさばといへるなるべし俊乘坊はじめ渡宋して勸進す金そこばくを得てここにいたる年の登ざるにあうてこの金を盡く散じて飢をすくひ又もろこしにいたるもろこし人うたがひ是をとらへて地にうづむ久しくてほりてみるに死なずよつてはなちかへす是より行事一里ばかり左のかた山にそうて阿彌陀寺あり俊乘坊これをひらく東大寺に先だづ事久しされど所の鄙なれば埋木とのみ年月のふりにつもりて俊乘坊の影よりも猶いにしへの跡をとどむ又このほとりのみや天満宮あり是は菅原公つくしさすらへのとき此湊

麻里布の濱へ船をよせ給ふ則是を祭るなりなどこまかにかたりける是を辭してかの男の語りし天神の廣まへに暫くぬかづく宮殿たかく市鄽を出松綠の枝をたれ樹間の眺望淺からず石壇幅ひろく石燈爐左右につらなる鳥井にあかがねの額かけたるが年へて今はみどりにみえ金字に天滿宮と書るは鮮にできたり町に家あり是去去年朝鮮人に供するの餘なり國分寺の門よりあみたじのかたを望みうけのの宿に足もとどめずうけの坂をこへすへ田といふを過是全姜が戮につきし所なりおとと日吉田よりけふ宮市にいたる迄海を離れうけの坂にのぼり南のかたを望めば古里ちかくみえて四極の山も遠からず足びきや兩子の峯夫と定にはわかたねど霞のひまにほのみえて姫島は春の朧に打たくる地つづきたるがごとく二人もこなたのかたや詠らんと望鄕のおもひをはせ富海の宿に宿をこひあるじの名をとへば文七と答ふ

十八日　富海より呼坂まで　九里半

朝くもりの空ものどかに足の痛もくつろぎぬ富海を出椿だををこし下手の宿をへたにあゆみて赤坂をこへ彌次市といふ所に白魚の美にむすびなどとき路を南に出周防の諸島を望むに景物豐の壇の浦に似たりおきの島をとへば黑髮とことふ島定めて若かるべしまたくろかみのすへ賴もしく富海より四里强半毛利山城守の居せる德山を出松間の粉壁を菩提所とおしへられといしといふ驛にいたる町の中に大なる石あり四方に屏をまふけ前に七五三を引一の石に刻て日本朝四所八幡別宮影向石老人にとへば砥石と云定て由來有べし宮が坂をこへ山又山驛又數の驛をへて呼坂のとある家に呼こまれ日はまた中の初刻なりし枕によれば峯よりつた

ふ春雨の客裡の哀をそふに似たり亭主名は莊左衞門赤馬の關より防州小瀨川に至つて三十六里是藝州の界なり一里一里木堠子を立たり山はげて草を生せず松のみ有て餘の木をみず道は並松をうへつづけて藝州のさかひにいたる風景好らざるにはあらねど櫻花甚稀に桃李も多からず春色故山に及ざるに似たり周防は長門より山多くして山も亦嶮なり水田多くみえて長門より周防の半に至て麥もさのみ麗しからず上一半は地もまた肥たり

十九日　呼坂より岩國をへ

小方迄　九里（あきの内壹里四　是より十八丁）

夜の雨枕のほとりに音信て旅寐はいぶせかりけり春の夜の短かきも八聲の鳥を待かねて驛路の鈴の聲すれば雨や晴ぬらんとつぶやくを友立おきて空はいとう曇りつれど雨はやみぬといふに力を得蓐にさらばとて立出ぬ呼坂より三里半七曲といふ峠あり左に折て五步六步右に轉じて九步十步頂は岩をうがつて路を闢く行先は猶谷ふかく雲は草鞋の下におこり松は笠のうへに響く流にそうて行行下り氏西といふ所より海道をはなれ一の板橋をわたりとある峠を越松杉檜の木繁りあひて峯たかく崕なだれ鳥も飛にや倦なるべし周防なる岩國山を越んにはいのりよくせよあらきその神といにしへ人もよみし事されば社とおもひつづけ坂を下り十路盤橋にいたる此橋や世間の橋とことなりその橋上下する事五ツ中に四の石の柱脚を築く兩方に角あり中程大にして水の怒勢をさく兩の橋ふたつは柱あり中の三は置ずすべてその長き事百間橋板のつぎめ銅を以て是をはれり暫く橋の上に大あぐらかきて衣冠の士堂堂乎としてよぎるをも彼しらず吾しらず暫く勞を忘るる事傍若無人岩國川の

流長う續きてその穩なる事海のごとし水に沂り水に沿て船の往來すくなからず山麗しく流清く地も又膏腴也西北東の山木を伐て敵を禦ぎ一方の要害を固めば一夫百夫にあたるべし山川の明媚に心を移し暫く時をうつしけるを船頭どもが橋のほとりに來り嚴島へわたれ金毘羅へや詣づるむろ迄おくらんなどいふに隙いれて流に沂る事半里關戸といへるにして本道と合す山をこへ小瀬(ヲゼ)川をわたり藝陽の地に入關より爰迄三拾六里されど吾徒は山口にむかしを問岩國に橋をみしかば行程四十里ばかり成べしこの里のあたりは農のいとま紙をすきて生業とす苦の坂は市杵島姫西より來り給ふとき自機の具を携へ爰にしてあら苦しとてその具をすつその處ひとつの社あり坂を下りにみや島のうしろを望み小方の濱に船をとへばけふは船なしあす社とてかどや孫四郎といふ者の所につきぬこの里のうしろに一大墟あり大木繁りあへり是福島正則域をきづかれん爲已に山をたち石を集けるされど台命によつて是をこぼつ今尚本丸かんの丸なしの丸などゝ云所あり他國の者この山に登る事をゆるさず

二十日

花ぐもりの空鬱陶としてわたりに船の日和もなく旅ねいとはぬ雨のいたうふりければあるじの翁と首つきよせめづらしき物語もなくその日はくれぬいつくしまの神はふかく世の汚をいとふの由父死して百二十日母死して百日産して七十日地にわたりてすむ元より此島墳墓なしと云

二十一日　小方より嚴島へ　三里

嚴島より廣島へ　五里

夜より朝にわたりてすさまじく風吹しきり雨も小休まずけふも枕や友ならんと佗しく

おもひし折から空はれいつくしまへわたる船ありときき草鞋むすぶもそこそこにして船にうつりぬ誰かぬぎ捨しかぶと島はあたた島に遠からで山颪に船ゆられ片帆にむすぶ帆の手もはや嚴しまの岍によせぬ嚴島俗に宮島といふ古に恩賀島といふ文人稱して蓬萊と號す誠に三千世界も眼中につくる覽、虹きへ雲はれて丹青も筆を擲にたへたり平相國淨海の建られし百八の廻廊龍の波に蟠るがごとく濱の手の鳥居のたかく潮の中にそびえ五重の飛閣霞に映じ千疊敷波に映らふ大濱の石燈爐行をみださず大元の櫻ちりもそめず峰奇に岍あやしく松媚草芳し神鴉彌山のかたに飛さり鹿は小路に人を恐れず一歩に輿を轉じ一歩に望を改ため千端萬狀みざらん人にはかたるべからずされど船の便のいそがれて尙目のとどく迄詠めける、のうみ島、あきの小富士と詠來て、ゐば島と云に汐を待、夕春日影の西の波間にかたぶきて萬頃の金波山をうごかす楫枕の夢を山端の月に驚され舩によつて四方を望めば微風はだへをおかして秋の夕部の心地しき潮にしたがひ本川口に近る廣島は淺野少將の城にして一大藩なり太夫の邸水に臨みおもしろうつくりたる松は春の夜の朧にたゞへて文目もわかたねどかすかに詠めてねや橋の下に泊す

二十二日　廣島より田萬里（タマリ）へ拾里　藝州の内　四十八丁道

眠ゆり起されて見れば江口萬家朝氣の烟打なびく友人のいざといふに誘引れ夫より町を一筋ぬけて東照宮の廟にいたる松馬場は常盤の緑春ふかく櫻馬場に盛過て殘の雪衣をうつ朱の玉垣石垣のうへにそびえ糸さくらの二本鳥井を隔てて芝をなづ石燈のぼり盡して門の扉右に鐵拐左に蝦蟇僊をゐる廟

の壯麗工をつくし眺望眸をさかんとす誠に神祖一度戎衣をぬぎてより三尺の劍匣に動かず我曹ごとき蒼生のすゑ迄もその恩澤に浴する事ふかきが如くたかきに似たりすぢかひに繩手を見わたし松原口に出かい田市に朝支度し千山の霞萬樹の春柳の經櫻をぬきの機もおちこち山の錦きてあきの大山といふにかかる是海道なりといへども西海遊觀の客あるは金毘羅のかたへ船よそほひしあるは室路の波に棹し又は尾の道に近道して多くは此路を經ずたつきもしらぬ山中を覺束なくも打過てさいせうの宿に休み又ひとつの坂をこえ田萬里なる夷や十三郎といへるをこよひのあるじとさだめける所より二三里ばかり海邊只海といふ所の客とおなじくかへり船ならば鹽がかりなどする事あらん、かならずとへなど挨拶してふすまを隔てて臥けり

二十三日　田萬里より尾道迄　九里四十八町

彼岸臺とやいふ羊頭（サウヅ）とやいふ天もくらかりしが唯海の客に伴ひ輪光庵と云精舍の門前迄伴ひ一樹の下一河の流も他生の緣ゑにしあらばかさねてなど互に笠とりてぬまの本郷にあやしき橋をわたり三原の城に入淺野家の長臣淺野甲斐の居城にして往還二の丸の内に入隍ふかうして水藍をもみ塀高して壁練をさらし要害疎ならず海を右山を左に濱をつたひ藝州の界この濱をへ備州尾道にいたる尾道備州の内なりといへども安藝少將是を領す主人山根や源四郎小瀨川より爰に至て行程二十八里一里塚は塚を道の左右に築きて松をうゑたり此湊は海路に便よく海をへだてて島をかさね江は一條の流のごとく風興あたかも湖水に似たり西海北陸の舟帆を卷岸につなぎて數をしらず其繁榮下

の關よりこのかた爰につげるものなし旅窓の下に枕を欹れば東奔西走の客友をよび友にこたへ馬士は馬を叱し漁人は魚を擔ひ巡禮は歌にこび旅客は舟を尋ぬ山臥は堂塔の建立とさけび拔まいりは柄杓に慈悲とかなしむ憂を吊し慶にはせ絡繹として晝夜を分たず尾の道むかし玉の浦といふ千光寺のほとり烏帽子岩といふ有此内玉をかくす唐人是をゑり取てその國にかへるこの岩夜夜光を放ちし所是よりひかりを失すそののち菅公昌泰の纜をよせ給ひ玉なきさとなれば玉の浦ともいふべからず苧の多くあるを見て苧の道と社云べしとの給ひしと或人の曰已が道と菅家がなどいへる女の家に入給ふその子孫長くつづきて今ながへ町かなや吉郎右衞門といへる富家は正しくその末なり西國寺行基菩薩の開基にして西三十三國の僧祿たりしも世は年とうつり物は星とかはりて巳に廢しけるを某法印靈夢を感じ讃岐善通寺弘法自刻の七佛藥師一軀を得て寺を再建すといへりこの鐘樓はうだの西白寺の門にして和泉式部が工になると云淨土寺は足利尊氏是をひらく猶多田滿仲の建し寺等名梵刹四十有餘高低參差として鐘磬相通ずこの地に遊ん人は搜りてよく尋ぬべし我ごとき忽忽たる征途のかく道に聞て塗に記て謬語さだめて多かるべし

二十四日

きのふの暮かた船人の來りて室への便あり風も追手なり一晝夜にははしりなんといふを主がうけ取て備中のあたりは人の心もこころよからず難所の川も多しなど只管にすすめける海路三十八里陸路三十八里いかがすべきとはかりけるを友人も長途の勞船に慰めんといふにぞしかるべしとて朝より船の便待けるが日もいたふたくるまで音信さ

りけり旅はうかりけり迯るも迎るも皆面染の人にして肱を曲る隙ぞ故郷なりし日午の頃船よりの便して伊勢御師の手代加藤文藏爰より華洛へと志す宮本七兵衛などいへる男と本よし丸といふ船にのりうつりぬ船は荷もおもう積しに船頭が慾に耽りて廣島あたりの道者二十餘人のせてこみに込でその夜は矢の島のほとりに漂ふ

二十五日

壽永のむかし平家已に戰まけて此處に支へける能登守教經憤のあまり矢とつて打つがひ島のかたに箭をはなつよつて地のかたを能登原といひ島をやのしまと云今猶箭竹を出すといふ俚俗のつたふる處湘江の竹令公竹きつね崎の笹など皆同日の談なるべし阿太は福山阿部伊勢守の領地なり峰尖にして松茂れり岸邊に巖そびゆ石垣をまふけ堂を築き觀音大士を安せり去々年鷄林の客ここをへて岩の奇なるを賞し石垣をみて殺風景と歎せしと加藤氏がかたりけるむかし漁人網を沈めて石を得たり是をすつる事數度ややもすれば網に入よつて爰に祭りて觀音とす故熊本侯の鷁舟こゝを過る船板節穴有て潮是より入舟既に覆らんとす侯心中に大士にいのる忽牡蠣殼ありて孔を塞ぐ侯奇異のおもひをなし渇仰淺からず今猶往來金壹兩を納むを常とす修覆肥後より加ふといふやがてかの寺より小船おし來り一散錢をこふおもひ／＼に錢擲て予も舷によりかゝり所の名をとへば船人歌うつて曰

はしり出てはかまきて宇治をながむるむしま山

又櫓拍子をとりて

水島にまなべを入てたくたきゞ
しやくはなきかくめや三郎

又我をかへりみて廣島のうた有とて

瀬戸をこしくれ〳〵行はかれい崎、高すを入てのうみ島皆地名なり

鞆の浦はむかし神功皇后の跡をとゞめ祇園は山城の祇園と一體なり波にうかめる青螺は筆も及ばず是をせんすいと云福山は夕陽を斜に帶て茫々たり加藤子一爐に綠茗を煎じ樽をひらき肴をつくりて日の暮るも白石の瀬は海中に突兀として右のかたかうの島に接す是南海道の地にして今新四國と號し八十八所の札所ありとかやその夜水島の洋中に碇をおろせば驚濤船をたたいて夜自蕭條たり

二十六日　此間　海上　十五里

山ねやがいひしは草臥足の甘言にて日日の東風やむ間もなく水島は波あれてむかしの鼓鼙をきくがごとく志度の浦も遠からずとまもる雫つれ〳〵に夜の夢を妨るに似たり

二十七日　下津井より岡山迄　九里八町

夕部は舟のものども集りて大にさわぎて博奕しけり吾等はしらぬ事なればみる事も面白からでかたへのかたに屈りふしぬ夜もふけてかのものどももふしけるがおきわすれて日の出るも知ざりけり友人と相はかりけるは舟中の欝陶甚しまして心いぶせき客のみなり春の空の定なきを安閑として暮さんよりは去來又道にとらん迚下津井の町にあがり兒島郡をへ天城といふに至る是古城の跡は城墟ともいふべき山暗ふ茂れり池田泉州三萬石こゝに居す早島は幕下戸川三郎左衛門の領なり此あたり道ぬかりて足をなやます小わせは同じく幕下板倉右近の領地なり日は傾ぬ雨はふる雨雲のそこともしらず引つつみけるに黛のごとくにみへし山を岡山ぞと教られ日暮て中島川島屋安右衛門と宿へぬれわらぢをときぬ此内ひとつの橋を經橋も又大なり百間には過べし夜に入といへ

ども往來憧憧としてたへず今夜は備中の道者そのほとりの修驗神主商人旅客打集り四方山の物語しける佐々木もり綱が渡りし藤戸をとへばけふ過し天城の橋の上なりといふ今は殊の外淺くみへて荻あしなどの枯葉みへたりしらざりし事を惆悵し跡の感を催せり

二十八日　おか山より三石迄　九里

是は宇喜田秀家の築く處の城にして備前少將ここに居す平城にして大川の流をうけ樓櫓霧横たへ烟うごきて一都會なりよし井川の流を一葉の航(コブネ)に泝り加賀戸に晝休しいんべにして古里にて見なれし陶(スヱモノツクリ)備前焼するを見いそのかみのこなたなる大なる池を過とある坂をこえ片上の驛は雨にそぼぬれ又ひとつの坂にかかる山を下る僧の頭に烏巾をいただき身に三衣をまとひ傘をもてるにあふ吾等にあひて若き衆へ頼み度事の候と云にぞ定てあとより來る友ありて是に言傳せんとの事ならんとおもひけるにかの僧いふ様吾は江戸より長門に下る僧なりかねても聞や及れん世に一休と稱せらるるは吾事なり二人して六錢をあたへ候へさあれは子孫長久のおこなひその身の加護故郷安全のいのりしてとらせん哀しひかな六道の街にさまよひて世の善知識に逢ざる事を六錢纔なりといへどもその德無量にして六萬錢にもかふべからず吾今行事の序かかる結緣にあふ事抑旅客の幸なりとしたり顏して云ける六錢の鵞眼おしきにはあらねどもあまりにいふ事のつらのにくければ我等は錢もてるものにあらず穴賢さないひぞ迚通りければ苦り切てぞ下りける世には希代の馬鹿ものも有ものぞとて大笑ひし是を力に山をこしぬけふは雨を帶る風も有けり定て舟ならば室のかたにもつくべき歟されど王孫草緣に

して遠興すくなきにあらず杖の帆ばしら半かたぶき合羽の帆風斜にして道や海坂や浪と眞帆かた帆にはしりければ三ッ石と云驛なりける橋本屋源太郎といふ人の家をよき湊ぞといかりをおろしぬ三石は海を離れ山に入事三四里山高く地寒し三石とはいかなれば名付けると人にとへばこたへて云ける此驛に神有三石明神と號す神體則石なり高さ二三尺ばかりその石の內又石三ッ並んで有是を海石川石山石といふ是を神と仰ぎつかふ備前公のこの道を經るや必代參あり又右のかた大なる石三ありむかし大石山丸が湯立をせしの跡なり緣記あるよし見まくほしけれど旅路にいそがれ祭神さへふかく問さりきたのかたの高き山村上昌通伊藤大和次郎村上村宗などいへる人爰に城をかまへて在けるよし城隍のあとなどものこりて俗つたへて城山とよぶ

二十九日　三石より書寫の麓迄　十里
　　書寫のぼり　十八町　下り
　　同

ゆふべ同じく宿かりける備中のぬけ參り迚ひとりの男の妹を倶して參りけると夜籠てたち半道ほどへて一の峠に登る是備播の堺なり石表を立て字を刻まず深川のわたし船にのり片島へ出赤穗のおしへ木を餘所になしひる過て路傍にひとつのみやをみる馬場は線のごとく長くつゞきて松の木陰も濃なり處の名をとへば班鳩（イカルガ）といふ神をとへば上宮太子とこたふおほぎみの御名を忘れで村邑春秋の祭りもおこたらずや青山のかたより木槿茨ようのものの枝に紙のゆひ附たる細路をたどり書寫山圓敎寺へと志すがふ川をかちわたりして小山をこへ書寫の西坂下につく是書寫西面の路なり女人堂を經荒たる馬場を過山王の社前へ出づ是より上方

巖そびへ松瘠て岸崩れ路欹ちて左にめぐり右に回り窈窕崎嶇とし谷をへ蘿をよぢ隱見出沒其狀萬端なり漸く山の巓にのぼれば僧房軒をつらね扉牢とざして唯僧のみ少しく往來す間雅まことに人間のものともおぼへず步を移して本堂にいたれば處處の巡禮異口同音にうたをとなへ大悲の號を讃嘆す閑によつて望をはすれば檻外數樹の櫻あるひは葉のみに繁りのびあるひは今をさかりとあらそひ松杉雲を宿して烟霞ふもとに起る人をして塵を出風にのるの興を催さしむ折から鶯など來なきて幽興も唯ならずおくの院など尋けるに谷に望む梵院漢をはらふ高樓のきに夕陽の纔にかがやき雲も無漏の色を具し嵐も無常を唱るがごとし下界は遠く南海の潮をただへ山陽の山林ひきく羅る笠を解杖をおきて悠然としてかへる事をわする山城なりける巡禮に伴ひ東面の路を下る

さきにへし路には似ず路清くはらひておりされど一曲一曲相めぐつて前の行は左に行がごとく後の行は右に行がごとく笠のうへに草鞋の音し草鞋の下に笠のうごきて麓のかたも近く見ゆれども行事やや遠く誰彼過て東坂本あるじをば儀右衛門とやいふ爰にとめられてける關東の巡禮とて三人さきに宿して同じく夢見川のほとりに夢結びしけふの道船わたし多し

三十日　東坂本より姫路迄　五拾町

姫路より賀古川迄　四里

賀古川より大久保迄　五拾町道

四里

日たけておき春に名殘れる霜をふみ遠く天守を目あてにして姫路の町に出この處去年國政美ならざる歟一揆おこり故の大守松平大和守所がへあり酒井雅樂頭交代あり今城普請などありて役夫城隍のほとりに往來す

黒田羽柴の二公もかつて爰に居し給し地なれば町城中にあり城も大なり豆崎は忠(マメ)にして本道をわかれ右のかた曾根の天神に詣所づから神さびて神殿むかしなづかしく感古のおもひ淺からず松は御殿の左にあり株大にして高からず枝たれて地にはへりほとりは高くいかきして逶迤として池に臨めり巳に千年になんなんとして青葉朽せず榮る事神や宿るらんと有がたかりし所は海にちかうして小き町をほとりにせり靜窟(シヅノイワヤ)（俗に石の寶殿と云）に行路を雨に遮られて人家にやすみ小路をへて松林に入斜に石壇をよぢ靜に油單をおろし又一段あがり御殿をのぞむに一社にして二社作りなり中に額をかけて高御位大明神生石子大明神とかけりみやの下をくゞりてむかふに石の寶殿有横ざまに池の内に安じて上には樹など生たり四方の石壁崢嶸としてまのあたりに鬼工を見る大巳貴(オホナムチ)少彦名(スクナヒコナ)のおはします靜の窟はいくよへぬらんと詠し時よりもまたいく世かへけんあせ路を經るとて道したたかに踏まよひ賀古川のほとりに出出雲侯松平羽州の泊と宿札うつて川には馳走のわたし船酸漿(カタバミ)のもんの幕風にそよぎ上流に繋ぎたり是よりさきは道など人のはらふがみへけり野口をすぎあたらし町に休み長池より大窪の淸左衞門といふものの宅にいりぬ備前は一里塚榎の木をうゑ木もあまり大ならず所所小松もみえたりはりまの入口猶しかり姫路より巳東松をうゑたり此邊は山遠く地平にして四面渺茫たり蕓薹(タネ)の花のみ村より村に咲つどひて流黄の機とやいふべき

三月朔日　大くぼより茨木住吉　九里

壹里過て爰は明石の浦なりし朝霧の間に淡路島も間近く行かふ船も帆などみえて古歌の心を目前にみる事のうれしく城は町より

みえず是松平左兵衛督の城下なり城の東にあたつて人麿のみやあり門に正一位柿本明神と書て内の左のかた一の石碑あり石の亀あつて是をいただく右にいかきして盲杖櫻二株あり社はあまり大ならず垂水村に仲哀天皇の御陵を拝し五色塚を尋けるに草をわかつて纔に小き路あり暫く登りけれども夫とさすべき所もなく唯數の土饅頭壘々として相ならべりとかく捜す内にひとりの男は早苗のくろをつたひて出たり是にいそがれ麥の浪をわかち同じく町に出たり鹽やといへる里是攝播のさかひ也さかひ川とて中に石表を立たるがあり三里濱は渚にして舞子松原の松はまふに似たり山はひよどりごへ、てつかいが峰につづきて道已に須磨に入遠く南海をのぞめば天はれ雲つきて釣する船のいくらともなく波に漂ふのみにして松風ばかり音信ける爰に敦盛の卵塔あり畔に小

石など集り沙半は塔を埋む右のかたへは茶店などおもしろくかまへたる爰にしばらく嘯き三の谷二の谷一の谷の古戰場をへ閻魔堂の左より須磨寺へいたれば寺に福祥寺といふ額をかけ石段の下に若木の櫻ちりそめて天にしられぬ白雪も客子の笠をうつに似たり庭前に義經の腰かけ松あり爰を辭し東にたかき峰有、頂に松老たり高とり山とて平相國清盛福原遷都のとき愛宕の山になぞらへたり堤あまたある中に池の中心に小高き洲ありて榎の木ことぎの木ありて木村源五重あきらのうたれし跡を殘したり池の西の端松の木三本有り小笹など繁りし中に新しく石塔は築て前武藏刺史平知章之墓とあり兵庫は福原の地にして經の島に詣ける折ふし六部など集りて縁記をよみけり予によみきかせよといふ手にとりて是をみるに新京所せばかりしかば鹽打山といふをこばち此

處を埋けるに朝潮暮汐　　崩され事ならざりしかば三拾三人の人ばしらを埋めんとさわがれしに松王といふもの是を歎き衆人の命にかわり入水せり清盛一切經を石にうつして埋ける故經の島といふつねに築島寺といふ經島山來迎寺と號す別に不斷院といふ門前直に南濱の濤をのみはし左に臥船右に維く湊川はおもひしとは事かわり兩に土手を築けるがごとく松是に生て遠より望は馳道のごとしあるひは松の林に似たり沙ばかりうづたかくして水はたへてなかりけり（このあたりの川すべて平地より高く水なし）生田の森に春の來て木木もややうす綠のふかくなり馬場は櫻の兩行にうゑていまだ久しからずや木も若かりしその上のかたしげれる山の中布引の瀧にして此上より連綿として法道上人のひらかれし摩耶山忉利天上寺につづけり摩耶は高くそびへて寺は最高の峰にあり生田川は森

より西にして湊川のながめに左のみかわらず水纔に流れたり夢野のさとは鹿や住鬪雞野氷室圓心が古城などとひしかどもよき人にあはで聞ざりし烟波杳に隔りて是や敏馬の浦といへば故郷の望もたへぬ海邊にはべる松有法然上人のいざり松と云昆陽野の里は爰とかや茨木住吉のみやに詣拜殿長くかまへ本社は四社なり山の手より牛車して御影石を御殿の濱（御殿相つどふ神功皇后西征の時かりに皇居をかまふ）に運ぶ跡にしたがひ宮をすこし過加右衞門といふものの家に入れば追追阿州の巡禮も來り大阪なりける源兵衞といへる男も同じく宿かりける源兵衞とおなじく火燵にかかり雜談夜を深しける委しく明日の路など教られけるゆへ鼻紙の裡にしるし尙此あたりの事をとへば是新田左中將尊氏と戰しの地にして求馬塚西にへだて雀の松原その下にあり今尙小山田が青麥かりし跡を殘すか此身

なげくらん津の國の生田の川とよみしうなひおとめの塚東明村にあり懸想しけるふたりの男の塚は西と東とに隔れり俗につたふ丹波太郎和泉二郎五百崎やあふぎ村といふは波間より現れ出しといひつたふ青木が原の舊蹟なり物語の序に古馬のはやしをとへば半道ばかりあなたなるよし遺憾少からざりし

三月二日　住吉より尼崎へ六里

尼崎より大阪へ三里河舟

同じく宿しける阿州の巡禮などはとく立けれと限しらるる道なればとて家の婦人におこさるるまでねてけりすみよし川をわたり壹里ばかり過あしや川はあしもぬらさずこの西に纔にながる水ありかたた川といふあしや川なる螢か淵は夫とさすべき所もみへず山の手を猿丸太夫の社と詠あしやの里に入る武庫山は北にそびえていかるがごとく打出の濱は松くらふ烟もかなたにたなびけり畠の中へ一の岡あり松數株生たり阿保親王の墓といふ俗傳に金と瓦とをここに埋めて

朝日さす夕日かかやくこの塚に
金千枚瓦千枚

といふよし因て寶塚と名づくとは定て嬰兒の談なるべし西のみやは宮いみじくいとなみて境内ややひろし社頭にさける櫻の枝に

けふこずはみずややみなんかみ垣の
白ゆふかけし花の盛を

見てもあかず歸るさは猶忘られぬ
神のいがきに櫻さく頃

と短冊を誰人か附ける拜殿のかなたに怪しき魚二喉をかけたり魚の長さ三寸ばかりよこ二寸計りうろこあらく背につののごときもの三ありいかなる物にや外の參詣人も立つどひて眉をひそめけり庭に池あり池中に假山あり中心辨才天を安んず松繁く水淸し

て和光の塵もいさぎよし門外にいかきしける松をとへば夢の松といふ爰より本海道をわかれゑた川をわたりなるは村より小松村にいたる道の右の田の中に松あり重盛松と云東にならびて榎の木の本に百文ばかりもするらん社あり小松塚と云定て子細あるべしおかの社は神さびて詣る人もすくなきが繁れる草むら露ふかく哀そふる體なりき尼が崎郭西田の中に竹や松などあばらに生て物ふりたるほこらあり融大臣六條河原に千賀の鹽がまをうつされし時鹽をくまれし舊蹟なり尼が崎はむかしの大物の浦とかや城のほとりにして大阪への船をとへばのり手もみへず今出すべき船もみえずわづかに三四人の旅人を見附闇取にしてあらそひけり是はか〴〵しかりしいざ陸せんとて爰を過けるに已に出なんとする船にあひ城楼を舷よりのぞみておわだむらに源廷尉義經の手づからうゑし松をみる松は春ながら樹老て蔭も繁からず堀川なれば潮通じて柳蔭に舟を棹し鹽梅よしの舟につけられ夫より傳法に泝りほどなく杵築侯の藏本ある中の島にいたり往來あらためさせ常安(ジャウアン)町の田横町山田五兵衞是を主人とす柱をたき玉をかしぎて早明日は桃花の節となりぬ此地は西國一の湊にして誠に楊州にも劣るべからねど郷園の春ぞしたわれし

三日

大和もろこしけふは上巳の佳節と祝ひ悦ぶ事なる所は難波津の空も朧に雨もよひして旅心は安からねど男女衣紋引つくろひ大道の塵をおこす住吉の汐干おもしろきよしなれど用などありて得行ずなりぬ肥後の病僧知豐といへると同じくふしぬ

四日　大坂よりならへ　八里

屋敷にして故郷への文したため久米氏へた

のむ大坂の城をみるちかく追手のかたへ行んとしければ番のものどもきびしくとどめける城外春ふけても道けぶりを簇し行行吊古哀をそふ玉造口を出河内の國を過大和に入くらがり峰上下二里樹繁く道嶮なり行かふ人の編笠は遙に峰に連りて天津星かとあやしまる春の日のうららかにほゐきて三伏の暑さを催し漸く峰へ上れば茶屋どもしつらひて女ども大勢あつまりて人を留る事飢雀の囀るがごとしむろのき峠は微雨そぼちてならの地にいたりぬ爰に池ふかくほり廻し筆にも及まじき山の松くらう生きたるに塒もとめて鷺のしらうなる程集りけり湖山の風興をここに縮たるはさだめて舊帝都のほとり誰人の舊跡かきかまほしく一僧の過るに追附子細をとへば是を蓬萊山といふ武烈帝の御陵なり今通る道はむかしの三條通禁裡は北のかたに遠からず西大寺は右のかたに林を隔つ暮雨客衣にそそひで三笠の山におろす雲の若草に連れり今御門町白金屋清三郎といふ宿にぬれ支度おろしぬ夕飯しまふ頃はや當所の名物に候とて畧やかな物やさらし賣又は所の繪圖名所附などもち來りてしばらくつかれを妨げる

五日　奈良見物所　六十四丁

ならより大野迄　十里

大坂の道者は多くは上巳を過して立事なれば夕部は南都のかた一盃の人込上を下へとかへしけるあかつきおきて神に詣んとさる澤の池にのぞめば宿雨新にはれさざ波はかなたのかた衣かけの柳のいとをよるかとみへて雨の帝の上わらはうねめのみや池の西にありて面影や水に映らん淺香山松ふかく茂りて楊貴妃櫻　の森を詠め大鳥居を入春日野は妻やこもれる小男鹿のいくらともなく群り集り谷にのみ草に戯れ參詣人の跡を

追てせんべいを求るに似たり北則飛火の野邊なり此神はふかく山を惜み給ひて木の葉だに人のとる事をおしみ給ふゆへ木は大に繁り合杉ひのき桧のごときは霜皮雨をしぢ黛色天に參るに似たり御旅所右の一段たかき所なり故郷橋せんしゆ橋を過左のかたにはらへどのの小社あり社前に白幣あり參詣の人人是をとつて身をはらひ行事なり神體瀨織津比咩神なり神かきの森際の鳥居につづき廻廊をめぐりゐの本の神を拜す是當山の地主なるよし御手洗川に手をきよめ春日の神を拜す武雷命いわひぬしの命あまつこやねの命姫おもん神といふ外に石燈爐森羅として內には金燈籠相ならび相映ず御供殿にのぞきむすぶの神に詣れば誰とはなしはもとゆひの心をこめて結びしが白うなるほどにみえしうらわかみ根よげにみゆる若草山よりぬさとりあへぬ手向山をへ良辨の

建立せし法華堂俗に三月堂といふ瀧ありいとすぢのごとし二月堂四月堂良辨杉俊乘坊の影堂鐘樓是等を過このかね口幅九尺壹寸三分あつさ八寸高さ一丈三尺六寸かね目四萬八千九百貫目と云撞木はわざとうごかぬ樣にこしらへたりつけどもならずといふは非なるべし是よりさきは朝比奈力饅頭とてことごとしくさわぎて賣けり其ことばにむかし朝比奈の義秀此かねをつきけるに音出ずかたへのもちをくひつきけるとき浩然としてなりしとかや好事のものしわざなるべし大佛殿堂の高さ十五丈六尺東西五十間南北三十一間廻廊東西九十間南北百間佛の高さ五丈三尺五寸と云後光のあたりつくろひ有かとみへて竹垣たかくゆひまはしたり右のはしに虛空藏のつくりかけたるが有是も餘程の古佛なり興福寺は七堂伽藍の地なりといへどもかつて祝融氏の災にかかり只

望茫々然たるのみなり五重の塔斜に南圓堂のかたにむかふこれは三十三所の一にして巡禮の札はうづむるばかりおし附たりこれより白かねやにかへり草鞋のひもしめ直し上宮太子の建立の元興寺は見すむべくもみへず一のもとといふ處に鳥居を松の打おほひて前一の石表をたて人丸歌塚とかき脇のかたへ此歌塚の事柿本講式清輔家集長明無名抄等委出とかけり是をば尋て在原寺の鐘樓を入本堂に觀音大士を拜めば天井に龍おどり孔雀かけり右のかた在原明神と書き二社ありひとつは定て紀ありつねの娘の社なるべし一もとすすき堂の右にあり本堂のうしろへ廻り竹の林の間に淺き四角なる井ありくらべこしふり分髪の肩過し井筒の筒井是なめり法隆寺の道をわきに布留の社大和の社穴師の神も餘所にみて行行途中の景を弄べば山四面に周遭して往來平なる事砥のごとし白波の立なる立田山は朧にして伊駒の山はたかくそびへ金剛山は黛の如く二條が岳は突兀たり丹波市のかたわらにして一盃髪の男いかめしき相口さして年は五十を前後の樵に武家の老人とみへて水涯立し男の人と物語しけるを待合せて楠が千早の城の跡をとへば是は金剛山のかなたにしてこなたよりはみへず南にひきき山二有ひとつは天神山さきのかたに在社神武天皇の都し給ひしうねび山なり順慶が沒し筒井は遥あとのかたにして順慶が幕下トウ井某が古城の跡東に高うそびえたり辰巳のかたへ人家群り森ふかうみえたる社人皇十代崇神帝の御陵柳もと也吾伴ひゆかばこま〴〵と語るべきになど念頃に會釋してわかれけるみわのまへにしてひとつの小山うつくしうしげりて山をめぐりて一段づつの階級あり人にとへばはしつか山といふこのあたり三輪の舊

跡おだまき塚あるよし尋ねあたらで神前の茶店にのぞけば面の皮のあつき女どもが客とめて素麵くへと囀るもかまびすしく松雨面に連れる馬場を遠く過てける神木は折て往來のうへにふしたり禰宜が鈴ふる音のみ亮々たり本殿は今普請なり近道して山をつたひ金屋といふに出是迄路を南に行是より三輪山をめぐり丑寅にむかひこもり日の初瀨の山は峰たかく泉清く木老たりそぼふる雨もいとはずとめ女の手をふりきり自然石のおもしろくしつらひたる手水鉢に手をすすぎ坂は廻廊の中に過竹妻手のかたに茂りうらてに山吹の今すこし笑ほころびたるも處づからおもしろく本堂にいたれば貴賤群集引もきらず折から本尊開帳ありけりかけ造りは雲を踏烟を凌がごとく闌の下にはいくばく樹の櫻か開謝の色をあらそひ仙境のおもひ淺からずはい原の驛にいたれば日もまださのみ遲からざりしを例のとめ女にかかへこまれ無禮に引ずりけるを漸にげ出丹はてのかたへゆかでおうの源兵衛といふもとを宿すいせをとへば二十里とことふ夜に入はおびただ敷雨ふり啓蟄の頃しり貌に雷など暫なりけりはい原より爰に來るの道山邊といへる處赤人の塚などあり海道よりも遠からずとなんしらば立よるべき物をのこり多かりき

六日　大野より二本木迄　十一里

宿雲谷を埋めて山路蒼茫たり山をこして一の寺あり慈尊院大野寺と云春日の作とて岩に五丈四寸の彌勒佛をゑれり川を隔ててむかふに立つ牛の舌といふは大和伊賀の界にして漸峰峰の霧もはれ　田村に源空上人の碑をとどめ黒谷といふかたをながめ名張の町は藤堂宮内爰に居す新田と云より限りなき長き松原へへてあをの伊勢路の驛に足を

やすゐ青ごへにかかりける此山はさのみ嶮にはあらねども仰げば彌高して峰に峰をかさねたり栢植の木多く繁りて青山の名にそむかず此頂伊賀伊勢の堺なり鶯多くすみて麓より上る道すがちほのきくに實に彼もおのがさまざまに啼聲もひとしからず峰をくだり又ひとつの峠より望めば伊勢は一望の中につきて宛も掌中の菴摩羅菓をみるがごとし上る事二里有餘下る事二里有餘却てあとのかたを望めば諸山雲はるるといへどもひとり此山のみ雲の鎖してあけやらで行行洞下の僧に逢是を勞送の月草としかいとうの宿をぬけ二本木にとどまるあるじ清五郎

七日　二本木よりおはた迄　九里

ねざめにめしたけとて家のものをおこしければまだ鳥も啼ぬよし大笑ひしてふしけるがさまざま故國の事など夢みて醒れば窓も白みけりかの僧どもに爰を辭し六間茶屋迄は伴んとて猶青山の麓を下り野原を過雨を催す雲千山の腰を擁し風をいたむ遅櫻は孤村の垣根に露をおもみ眺望一方ならずされどかの僧も風月の情にとめる人にもあらで俗談する内六間茶屋に出ぬ爰にして京海道と合す是よりわかるべしとて笠とる間も女どもにはしたなくとりさへられてわかれけり是より上下の參詣も多くて三寶荒神に夫婦親子の袖をつらね二寶に馬子と駄賃あらそひ山駕籠の睡に幾ばくか山をこしのり物のすきまに衣紋なまめかしくうらわかき初もとゆひ　道をいたみ頭に三秋の雪をいただきながら杖も携へず西國のぬけ參りは寐むしろを春におひ關東の巡禮は金剛杖もいとりりし笈摺は白かるべきをくれなゐの一入染もへしも有迷故三界城悟故十方空何の國の何がしと笠は反故にかきちらせり是は時めく人なるべし鑓に主人の威光をてらし

前驅後騎をしたがへ世捨人の身をいづかたともなくうかれありく墨のころも中荷騎のあき人は心に大利をかんがへ百姓の一つれは苗代の物語比丘尼は袖をとらへ歌うたうてつきしたふに乞食のめし行李に錢壹文と人をむかへ千種萬變傴僂提携しけふをかへり初と西にむかひ明日を社參と東をのぞみ世はさまざまなりけりまたるる人はなけれども松坂にのぞけば髮ゆへ月代せよせかまれまた日もくれぬに新明星を過明星に出笠はあるのに笠めせよ烟草すわぬを烟草入と雨わきよりよばれゆたのといへる原を過おはた半九郎といふものへ宅をかり旅装を解けり

八日　おはたより　外宮　壹里

處處見物　五拾町道　七里のよし

七里はなかるべし

朝まだき大夫の許につくべしとて宮川のほとりにゆけば早代垢離とらんとて子供ぞ袖にもつれける是を始として船ばかりは神よりの馳走にして垢離場にむしろの賃をせめぐ比丘尼に錢擲て福島御鹽燒大夫にいたる爰は豐肥の檀那多くして障子を隔我隣邑のものどもも多かりき又豐府生石(イクシ)村の名主與左衛門といふ人にあふ三人連なり是も陸路へて大和めぐりし爰にいたり猶信濃なる善光寺へと志など談る内朝餉出來て追追挨拶人に宮めぐりせよと會釋せられ笠持ながら玄關へ出れば馬子どもが馬引よせ玄關にて道者の笠をはたはたと爭ひとりてその笠をしるしに彼是をのせて外宮へ參りぬ去年造營有て宮の金碧日に映じ霞をおこすにたり是國常立の命にして誰かその澤に浴せざるものあらん何事の内に有かはしらねども忝さに涙こぼるゝと西行法師のよみし如くかしこまるしでに涙のかかるばかり有難く

おぼへたり四十末社といへるはすずきの垣をたかくゆひ廻し木の閑を曲らし屈曲長短一ならず小きみやにきこえざる繪をかけ禰宜どもが或は帆かけ烏帽子にひる過のかけ衣を着しあるひはひだつぶれたる袴きて扇ひろげ手をささげて疫神にて候厄はらひの神明星三ヶ月目のかみ鼻の神とさまざまにいきすぢはりて叫ぶかたてに神前のかねに自の袂より錢を擲て人をせたく性來恍惚として目のまふ程めぐり雨のみや風のみやなど過天の盤戸に攀上る山高く樹ふかく道つくりとて鶴嘴を携へ帚を握りて錢もろふ盤戸は洞の奥にして燈明をかかげ禰宜ども集りて是も同じく錢を乞右に轉じて高間の原の茶屋に休み爰を回て馬に跨り人はおしへねど相の山の名もしるく比丘尼は鞍にすがりいつくしくこしらへたるたり子どもの啼啼つきてはしる乞食雨の脇より笠をささげ

杉や玉やなどいへるが三味線胡弓をかなでる子どもはささらの客まつもいたひげなり御裳濯川の流きよくうぢはしをかかる時節に逢あひて天照すおほん神の廣まへに謹み敬ひ奉幣し八十末社をめぐりけり御手洗川に酌水の影さへすみて五十鈴川や天の浮橋雲に架しうごきなき世のためししる外宮はちぎ九本片そぎ外よりそぎたり内宮はちぎ十本片そぎ内よりそぎたりあさくまの山はあさからで上る事五十一丁下る事五十丁櫻花さかり過て鶯の聲老たり壹丁壹丁に石瑑子を立たり半過て茶店に遠目がねあり二見の浦をあけてみるごとく阿漕のかたに迚りて白波天を蹴て尾張のかたに茫茫たり二見のかなたに松あり和泉三郎と植る處と云て伊勢の大湊にかかる船定て限りなき客愁をのせてそうかふならん烏羽海道の馬子かとりなり迄も鮮にみへて面白かりし難波のあ

しといへるはかたはなるよしかなたのかたにありと案内に教られ程なく寺にいたることしは本尊福一萬虚空藏の開帳なるが坊主どもの墨染の衣きながら赤面になりて擲錢をすすむるもおかし山下に太夫より馳走の茶店有此に休しもとの所に來りふしぬかの生石の名主けふ終日の友なりし

九日　伊勢山田より松坂まで　五里

今朝もいろいろともてなされ太夫出られ盃など有て日已に午に垂とす中川原松兵衞と云かたへ太夫よりの祖席あり生石の人人へ爰にてわかれ故鄕のかたへむかひけるおもへば路程二千有餘里を隔て幾度か金鳥の西にかけるを見き月二度圓ならんとする迄舊里の消息も打たへける諺に地獄を捿のたとへにや蓬生の宿戀しく杖かきならして松坂や清兵衞といふかたへ宿を投ず暮になんなんとして雨蕭蕭たり

十日　松坂より坂下迄　拾壹里半

殘んの星空にきらつきて北斗漸く闌干たり夜は六間茶屋のあたりにあけ曉の風肌を侵し山山の高根高根に雪積れり雲津川といへば渡れる橋鵲の橋ならん藤堂泉州の城下安濃津の橋より大手のかたを望み町は烟草入のかざりて錦をさらせるに宛然り、くぼたよりとうくののかねかけ松は今はかれてその株に注連をはれり下關に孫六が流の鍛冶有立よりて尙西の方へむかひける是むかし鈴鹿の關の舊跡が今その跡ともみえず數の客亭相連り誰とがむる人もなく坂の下にして例の女どもに引ずられて動されずあるじさのや安左衞門

十一日　坂下より草津迄　拾壹里半

鳥羽を立ここにとまりけふ京へかへるといふ客ありいざ伴んといひけれどもとかく遲なわりければ此男は先に出けり町を出て山

に上るひとつの宮あり石垣もたかく築きて雲樹森森たり道の傍に禰宜が鈴もちて居たるにとへば鈴鹿權現とて天照皇神のあらみたま也と云云是に詣。又坂を攀るに樹ふかく掩ひ巖尖くそびえ道ふかく濕ひ霜白く置り谷ふかく松老てそこともしれぬ山中に鳥の聲さへ幽なり是田村將軍東夷を亡すの地なり誠に風景の勝世の常ならず上に茶店有此ほとりに小きみや有往還ちかく散錢箱をすゑて坂上田種仁とかけり朝げの霜の寒さをも土山の朝陽に忘れ水口にわらの穗むしろの細工をみてなつみの里に水機を見る我やすみけるそばの床几へ是も三人連なるが風呂敷おろしぬ物がたりするをきけば慥に豐後なりと聞なしてとへば豐の眞玉といふさては遠からざりしいざ是より伴んとて石部より梅の木の里に來るこれ和中散の出る處なり家のまへには馬立をしつらひ泉水假山心をつくし三上山を見込にして表のかたには車轆轆として藥を磨す風呂に湯をたぎらして過客の足をとゞむ手代多く集りて物ごととりしらべ居たり日西に春く頃伴ひける客の喜兵衛といふもののかたへ宿かりける所に同じく宿す是草津の驛なり

十二日　草津より瀨田迄　壹里半

せたより石山寺　拾八町

石山より大津迄舟　二里

大津より坂下迄　貳里

坂下より比叡　上五十丁 下五十丁

修覺寺より京三條迄　壹里半

合拾里半

天晴風おどろかず草津を眞玉なりける客とともに立出ればうばが餅とて女どもうる聲かまびすし瀨田の長橋虹のごとく湖水の中を横ぎれり是をわたりて眞玉の客にわかれ大道を左に石山寺へと志しける寺門たかく

かまへ兩行の櫻盛過てか葉もやうやう緑ふかく木陰れて鶯など友を呼けり石燈數十級石奇に巖のごとく丹青も筆を擲つべし是は是はとのみ別に賞する言葉もなし寺院幽にふかく溪水清くそゝぎ尙さきのかた大觀亭に遊ぶ是俗に八景堂といふ琵琶の水海天をひたしたなかみ山よりかがみ山につゞく緑の黛を綰ね東南に連綿たり瀨田は一條の帶のごとく比良のかたに雪はあらでかたたの浦にたつ雁も文字書捨てかへるならん日枝の峯よりかなたは霞鎖してあやめもみえず寺前より湖水に棹して一葉のゆく所にまかすれば虛をしのぎ風に御するがごとく今こしかたの道に小き石橋あり是夢のうき橋なり湖上風しづかにしてふな引綱ものどかなり三上山を舟子が問ずがたりしてむかし富士權現一夜に此處の土を駿河にはこび富士をなす今一簣にして夜あけければ是をす

つる處此山なり故に近江小富士ともいへり俵藤太がいたる百足この山にすみけるゆへむかでで山とも是を稱すあるひは鏡山といへば旅のやつれも耻かしく淡津が原に松もあばらに一株の松一株の櫻石のしるしのみえたり今井四郎兼平が墓なりと指點して敎ける膳所の城は湖にうかめるごとく高抵曲直逶迤連連たり城南のひとつのかまへは隱居所と云すずみの亭あり本多下總守ここに居す長柄山より西のかたより比叡比良野遠く若狹のかたにつづき長き事二十四里行行舩を敲いて大津の濱に上ればここは湖水の湊にして處も自にぎはしく茶屋の女は父君が風流にはあらねども壚にあたりて客をとめ銀座は天秤のはり口に眼をすかむ日午の鐘響きて園城寺に攀むかしの繁榮にはあらざれども寺門淡海に臨み樓閣たかくそびゆ處は海道にほとりすれば往來の過客爰に過ら

ざるはなし堂塔玲瓏として風景世の常にあらず爰にも一の堂あり湖水眺望の所となす角に遠目がねをおきて辛崎の松若狹海道をみせしむ寺院竹間にふかく鎖して寺門の石垣むかしをしめすさゞ波や志賀の都はあれはてて夫と訪ふべき處もなく鄙びたる枝折戸より山吹の綻び青柳のしだれたるやむかしのまゝの姿なるべし滋賀山寺へはまいらで辛崎のひとつ松見に行けりこのあたりも茶店八九間もふけ好事のものゝ松見にゆくを待なるべしからさきは湖水にさし出めぐりを石垣にてまろく築廻し前は鏡山に對す松下から崎の明神居ます徐に歩して松のかたへ行けるに跡より男來りて松下貴客あり必率爾あられなどいふゆへゆきて苦しからずやといへば行分はくるしからずと答ふさらばとて社の後はめぐりしばらく松を賞す偃蓋亭亭として長枝湖の上にかけ千歳の緑

袂にみつ表のかたへ一乘寺の宮うす紫の衣にて僧一兩輩扈從兩三人麻上下ため附何やらん興じ給ひける長居は恐れと爰を辭し東坂下におもむきけるこゝは多く烟管を以て經營とす町中に柳八本大木あり下平にし芝生たり目代よりの高札として此芝損さすべからずと也人にとへば山王の神輿舟にめすの地なり比叡は傳教大師の開基にして王城鎮護の爲都の鬼門に相あたり峰峰そびえて攀べからず谷ふかく松たかく時として山鳥の聲するより外に物なく道は掌を立たるに似たり建武のむかし新田左中將義貞鳳輦を護し奉り此山により足利勢を引うけしの地耳にきく事の久しかりしがこゝに臨みて倩おもへば誠に萬夫も破る事能ざるの險なるべし山深して尚櫻のこる雪袖をはらひ坂は半過ぬらんとおもふ頃かへりみて湖上を望めばかねてきけるに違はず日枝の谷あい

より水海は扇のごとくみえて辛崎の松かなめの如し尙松の木蔭より流遠くつづきて見おくる烏の影さへ霞の内に立かくれ杳渺として限なし山八九分已上は杉ふかくしげり吾たつそまに契ありてここに來ぬ寺院は谷の間間に木蔭れて高下隱見見がたく數へがたしこんぽん中堂二十四間十八間棟雲をさへ甍霞を起し四面の廻廊龍の蟠るがごとく鳳のかけるに似たり兩方に竹あり石のいかき有藥師の杖なりと云講堂のわきに老たる男の茶をうりける所に休み道などとひ戒壇院より雲母坂といふおしへ木におしへられ四明の頂に至る仰げば雲に上るがごとく下れば谷に陷るがごとし雲母坂はおもひしよりもはげしくしてやう〳〵修覺寺のさとへたとりつき雲母寺のかたより京をさして急ぎける春の日の長きも繫れぬ駒のあゆみに院院の鐘磬處處にひびきて月とくに寺町を過三條かしわや三右衞門ここにやどる家あやしくしつらひたり客は二階にあり家のもの中間にすむ其下則諸用を便ずるの所

十三日　五里半ばかり

柳馬場二條下る處島本何がしに家君などの文もあればとてここへ暫く腰かけ先内裡へと志ける外ほりは水淺くたたへて松をうゑたり公家の門ふとく洞にしてかなたこなたと敎られ爰にて案内やとひ東門俗に日の御門といふ仙洞この南に居まして藐姑射の山ぞ常盤なる鴨川の水この堀にわづかに流るるのみ南門ふかく鎖して淸涼殿の棟ほのかにみえたり西のかた紫震殿を望み西門は洞に開たりのぞきて内をうりたへて窈窕として物靜なり誠に人間天上の文物を詠る事の有がたくいみじくぞ覺ける德に在て險にあらず堯階三尺とかやいふ城高きにあらず堀ふかきにあらねども千年の星霜をへて北極

魏魏として移らず四輔三台めぐりめぐつて衆星のむかふがごとく今尙むかしに異ず豈異國羯皷の生臭き朝には犬羊と稱し夕部に君主と稱すると日を同して語るべけんや上中下立賣は富家のみ多くつづきて八間茶やの遊里に臨む北野の廟は文墨の太祖として一夜の松雲をはらふ繪馬堂はいやが上にもしほ草の書あつめて拜殿深沈たり珠簾ふかく隔てて神殿ふかく閉たり西陣のかたに至て絹をおる機杼の音家家に札札たり大德寺より今宮に出笠を千本松の下にとり戌亥のかた愛たごの峰にはゆかでこの峰の麓を嵯峨うしろを丹波とおしへられおもひしよりも淺かりき蟬の小川をうちわたりて神垣の内に入是上賀茂のみやなりあけの鳥居玉垣に連り老木若木もろともに深く繁り境内殊にひろく芝生て秋草黄なつしか靑くなりぬこのあたり海道にあらざれば車輪馬足の塵もいたらず自閑雅の氣象有又一の鳥居をこえて賀茂川の水せき入し溝のおもしろう遶り流れたるに橋をわたして神殿は小高かりけり廻廊簾をおろしてすべて丹靑の飾なし南方の橋は楠の石となれるをかけたる又川を西にわたり土手を下る洛陽のはしばしはことごとく竹をうゑて川や渭川の竹にも比すべし戀塚は川をへだて林を隔ててそこともしれず下賀茂の神社陰として糺の森に楓の若葉しげり合景物上賀茂に亞べし定念佛の聲亮亮たり是百萬遍なり本殿六角にかまへ内外の二宮を初日本六十餘州の神神中をかこみ宮殿あたらしくみえたるは吉田なり眞如堂を過て新黑谷にいたる諸侯士庶人となく墳墓壘壘としてその限をしらずその中間に金佛四軀あり刈宣桑門親子三人のしるしは地藏なり赤穗義士のしるしは石碑有源空上人の堂のまへ敦盛熊谷の五輪相對

して立り蓮生房が影堂の傍房が兜をぬぎすてし跡とてかぶとなりの池有寺前に房がよろひかけの松とて半かたぶき半くちて中程は丁寧に板にてしつらひたる有つぎに小き松のおなじ形に傾しは定て此松の家督なるべしと戯れ青蓮院門跡より田の中の道を過むかし延暦寺全盛の頃このあたり迄寺院ありしよしゑの木の老たる株ありて五重の塔のあとと云々悲田寺は跡のみ殘りてしが谷のあたりも遠からず是則大文字山にして大の字のあともみえたりやうくわん堂南禪寺は遙に詠めて知恩院のうら門に入淺黄櫻あり是より梢々につきて花は雲をぞおこしける樓閣たかく大にして洛の一大梵刹なり撞鐘是を日本一と稱す門前華頂石より天より下ると云山門華頂山の額は仙洞震筆となん白川の流もほそく祇園のかたにいたる爰は貞觀年中に草創の地にして參詣の袂引もきらずあとをおし前をすりて憧憧ことして蟻のごとし門前に茶店弓場揚弓芝居路三街九陌に接して少年遊樂の所なる八坂五重の塔をながめ安井の宮の内に入今大日の開帳有て菊桐の幕のほとり女は姸媸となく男は貴賤となく相過り相去る四條通をなわてのかたへされば朱簾夕陽のまへに半塞げて青樓の紅粉袖をつらぬ今夜は三條大橋を過大和や吉兵衛が亭にやどる日はよしみねのかたに沈めども樓外忽忽として雪踏の音たへず

十四日　京よりふしみ迄左之通にて五里ばかり伏見より　大坂迄　川舟十里

終夜ふりける雨も今朝ははれぬ誓願寺に遊び泉式部の石塔をみる軒端の梅は實をむすべり後に二十五の菩薩あり石佛なり老たる柳一樹あり此處三條六角堂なり大谷にいた

りうら門より出で日觀上人の墓を見行行音羽山をのぼればいくばくの墳墓ぞ長臥の人を擁し花も露に啼鳥も風にいたむに似たり景清の影堂より清水の門に登りてのぞめば二條の城突兀として洛中一望の中にあり藥師堂の開帳より舞臺の欄にのぞめば音羽山の暗き程しけり其下は千尋の谷にのぞむ奥の院東にあたりて遙にひきく涓涓として落る水是鳥羽の瀧なり觀音大士陶を好るにや清水燒の工をきわめて町のかたに連れり秀頼再造の大佛堂廻廊石垣飄渺として雲おこり霞わく盧遮那佛南都の像よりも大也南門を過て鐘ありおもへ慶長元和の大阪の役此かねにおこり四海の紅塵天をかすめしも久しきにあらず三十三間堂より東西本願寺に出町をはなれて尼寺に入いかきの内に水通ひひとつの甕をすへ水を湛ゆ誕生辨才天也池に鯉鮒のあつまりておくに見入しれたるは六孫王の宮也東寺はむかしの繁榮には似ず礎のみ多く殘りて堂堂いにしへにあらずといへども境内甚ひろし松間に高く秀るものは五重の塔也南に仁王門ありおもふに妻我の孫三郎勇をふるひしの地は九條を東に通れば名のみ殘りて菜園に水をそそぎ麥隴の草をとる人のみみえたり東福寺は七堂伽藍具足の地なり門を入て上る事數丁廻廊をわたり通天橋より谷を臨めば楓樹千重ふかくおほふいなりのみやに笠とりて暫く勞を休けるは神もゆるさせ給ふべし少將なりける人のすみし深草の里よりすみ染にはゆかで藤の森の神社を過いそがぬ日もここにくれて伏見の船場にいたれば流にそうて下る客我のみならず漸舟にうつり暫纜もとかで込合けるに茶よ酒よ餅よ菓子よと岸のかたよりかまびすし月に乗じ流に順ひ一睡の中に淀のあたりは夢にみて八間茶やに着は日已に出

十五日

前の宿を尋ねて湊橋のほとりに來りけふは恙あればあなたこなたとへめぐり御堂へ詣宿にかへりぬ出雲の道者もおなじく來りて宿をかりける暮かた豐の今在家といふ處の船來りければ此船に約束してける

十六日　路程三里ばかり

春の日のあたたかなる旅の心もうららかにして雲州の客もおなじくあるじにさそわれて天滿宮を拜し繪馬堂に時をうつしうしろにいたれば種木やは種種の心をつくし蘇鐵の老て矮き松の曲りて疲たる躑躅の露笑へる楓葉の春に紅葉せる春菊のほとりに淵明はあらねど海棠の眠に楊貴妃の俤もみえつさくら草のあたりに駒繋ぎ草の覺束なく鼓子花は咲ざるに蒲公英うつくしう綻びてちりぬる梅の木蔭に立やすき日影もしばしば柳の絲に繋れて池中の金魚など詠めやや時をうつしける天滿の長橋に淸き流をながめ上町の太神宮高津のみやいくだまの神にぬかづく此邊はいろ〳〵の觀多く煩囂甚し四天王寺にいたれる折から望日山東福寺の出開帳ありて色色の寶物多かりし中にも兆殿司の涅槃像は聞しよりも尙まさりて沙羅雙樹の梢雲井の月をささへ羅漢聲聞生けるが如く動くがごとし呉道士が墨妙も恐るるにたらず精をきわめ筆を鼓し龍躍り雲わくに似たり龜井の淸水汲手隙なく聖德太子の影堂は燈を點じて窈窕たり五重の塔雲を畫ひて足處をふみ身天にあるが如し高樓洞院人間の眼を迷はす實や太子守屋を打てその戰功をあらはすの地なれば世に威を立る事まことにかくの如くなるべし遙にみえし茶臼山は權現公の陣所なり淸水の蘭若や音羽の景をうつしえて舞臺の闌によれば難波津や民のかまどに立けぶり粉壁瓦閣は一面にして

東西の御堂亭としてたかく秀づ闌下山吹など面白ふ咲みだれさかり過ぬるの櫻の青葉の雪とちりぬるも無常迅速のをしへなるべし此ほとりの家は樓つくりに立ならべなつならば涼しかるべし千日は大阪の茶毗所なり道頓堀にからくりみて尚市廓をめぐり家にかへれば衣をうるほす雨微々たり

十七日

けふは芝居みんと出雲のものと約せしかど船今夜出べきよしなればかたゞゝ荷など形附船におくりて屋敷にいたり切手などうけとりさまざまの仕廻して誰彼ふなと橋のほとりにして船にのりぬ

十八日

殘月沈沈として西の海に沈み漏皷丁丁として城のほとりにきこゆ難波津にむすぶ夢もこよひばかりにして流れにしたがひ櫓聲靜也大阪は無雙の湊にして余五の湖の流をうけ山陽南海九國二島のごときはいふに及ばず東海北陸の舟迄も纜を爰につなぎ帆を爰に卷て筥軒をつらぬ檣林のごとく潮に乘じて下り潮に從てのぼる朝嵐の空ものどかにこしかたの山にもさきの面俤つゝがなく一の谷のあたりに棹をとゞめて萬里の眸をさく晝より西風のすこしく吹ければ船をこぎて濱をつたひ陸路の人と物語するばかりちかく須磨あかしの風景は船こそ猶まさりて面白く覺ける夕陽影うすくなりてとまり鳥のねぐら求むる聲のみして鐘の聲遠くひびく船人にとへば高砂なるべしといふ是や響の灘ならん漸十八夜の月の船にさし入て東風もつようなるまゝはりま灘をば夢にわたしぬ

十九日　讃州丸龜より金毘羅往來　六里

船ものにとへば灘は過ぬ枕をあげて望をはすれば月は小豆島のかたに傾き日は江島の

かたにかがやく旅はうし窓もはやいぬ島と氣もいさみ八島壇の浦のかたも黛のごとくやくりが岳高く聳え大づち小づちの島を過ればこの頃へし下津居のかたも遠からず靜に峽中の風景を弄べば無雙の眺望なりいわんや風おもむろに天はれて鯛つる船は沖のかたに所も得がほに舩をたたきうかれ行七島六島などかぞへて日いまだ未なるべし讃州丸龜の川口に船をよせ岸にあがれば城はたかくそびえて松ふかく鎖せり飯山はさぬきの冨士と名にきこへ南に向て行事數里象頭山をのぞむに宛然として象の臥たるにのれり是金毘羅の神鎭座ます山なり市場はこの頭の塵芥引ちらして島井に象頭山とかけり町は男どもの出て客をとどむる事しきり也杖に扶られて山をのぼれば雲樹深沈として谷ふかく峰そびえ木閣石閣曲り遠りて宮殿木ずへを出小ふし閣にうかみて下界拾ふがごとく一絶景の地也釣鐘は人のつくにまかせて二六時中の堺もなし殊にこの神は舟人のたうとく仰ぎて南去北來の船客爰に過るもの往てその冥助をいのらざるものなし山頭日漸おちて暮烟麓をうづむ暮を帶星をいただき船さへ我屋と急がれてもとの湊にかへりぬれば漏鼓五ッを報ずあまの原ふりさけみれば月も朧に船もやひをときさしくる汐に船は出ぬ夜嵐の雨をつれて海の面も霧ふかく船よばひする聲のみかすかにきこえてける曉がたにとへばゆけにきたりぬと云

二十日

いわきに鹽がかりして笘もる雨を友とせり此ほとりの船は皆吾國の人にして呼かふ物がたりも遠からず雨はれ雲飛で西風いたふふきあれけれぱ唯まぎりにまぎりてはなくり瀬戸にいかりをおろしぬまへに松おもしろふ生る青螺有舟のものにとへば天城とて

古城の跡と答ふ

二十一日

空ははれぬと四方の山山かすみつつ西風の吹つのりてければ枕を欹てて波瀾をきくのみ折から隣の船よりしれる人の問きたるゆへ又かなたの舟に遊び象の戯などさしける

二十二日

朝なぎに殘れるかつらのかたにむかひはなくりの瀬戸をへて四五里ばかり書寫の性空上人の遊女と酒盛せられし時實相無漏の大海には五塵六慾の風は吹ねど隨緣眞如の波たたぬ日はなしと詠せし周防の御手洗の澤邊の風も音信れてささ波立や霧ふかくいつきてみんとおもひけるいつき島より灘にのぞみ藍の島を過櫓聲に眠を催されふたといふ濱に鹽がかりして戌の刻ばかり沖のかぶろに泊りけり春の夜の暗はあやなしその所ともみえ分て雲井にまがふ沖津波の波間に星の影すみて天の河原に吟ふらんと狂興を催せり

二十三日　今在家より　富永　三里半

出る日に背き傾く月の跡を追て霞の隙にかまどの里を望む今上の關と云是なりいわふ島うわしまやしまを出て西を望めば木綿が嶽よりつづく綠の足曳や兩子の峯に濕ひて程なく今在家の浦につきぬ故鄉のかわらぬ色も命なりけりとつぶやき櫻八幡の廟を拜し馬場を出ればはや麥秋の里に來て日暮に茅門にたどりつき桑梓萱堂依然として三徑の松竹も淸陰を改ざりけり

大阪より海路おもふに百貳拾里ばかり

海陸四百里ばかり

陸路貳百三拾九里

船中百六拾壹里

東遊草 終

歸山錄上

孖山　三浦晉安貞　著

安永戊戌秋七月。西肥深山妙宣寺衞上人。遣使。曰。當所營枕肱亭成。幸一來臨。灑掃而待。晉以詩代簡。曰。來雁繫書度萬山。書中爲許欵仙關。祇林豫掃閑雲待。幽洞松蘿踏月攀。以八月十有三日出山。以九月朔至。留六日。愛其風景。題一律。曰。紺園西北一仙關。縮得乾坤藏此間。磵戶有雲風自掃。煙波無路鳥飛還。海門通海別開海。山際隔山猶望山。滿地桂花香不鎖。憑闌獨對夕陽閑。去遊瓊浦。十月一日將歸又過精舍。而斯詩已勒石。晉蹙然謝曰。石塹終無盡。既去。本月十有三日歸家所聞見十而一二。錄供遺忘。本不期傍人之觀。則非置稿舐筆者。故雖非祕之於帳中。不願人之覽。

○求菩提山橋之坊に過て緣起を見、來由を聞く、其祭る神は顯國靈神、白山權現、役小角の遺跡にして行善和尚中興賴巖、聖武の比の開基、大友の比、破郤、小倉に小笠原侯入國の後、氏族小笠原源八郎其嗣齋より今に相繼で座首たり、知行三成千石

○此山に籠水あり壁立の嶽中瀑布を聞く實に奇跡なり求菩提は上毛郡なり求菩提より澤田シバカミ峠を踰ゑ帆柱迄上毛郡小坂の上分界壕子あり是を過れば高羽郡高羽今作田河此路より北に巖石の古城見ゆ松生ひ茂れり

○彥山鬼石坊は舊知たるを以て訪つて山の來由を問ふ中岳、當所岳、即上宮、伊弉冊尊を祭る女體權現と稱す南岳伊弉諾尊俗體宮と云北岳天忍骨尊、法體宮と云是本座にして三岳三尊を併せ祭る此三神降靈八角三尺六寸水晶石上崇神天皇二年水精石現瑞光照帝闕帝以勅使祭之十二所權現とは

白山宮　菊理媛命
中宮　市杵島命
大行事　高皇産靈尊
北山　大巳貴命（アナムチ）　田心姫命（タゴリ）　湍津姫命
大南窟　大聖童子
玉屋窟　金杖（カナ）童子
智室窟　福智童子
鷹巢宮　都良（トラ）童子

三所權現と共に十一社十二所權現とも云下宮は遥拜の處素盞烏尊を相殿に祭る又其說に曰當山は後魏の善正上人爰に來る時に豐後日田郡藤山恒雄と云者白鹿を追て此山に入り上人に遇ひ弟子となり忍辱（ニンニク）比丘と云共に力を合せて此山を開くと云今上宮の道恒雄の祠あり神宮の創建は欽明七年玉體加持の事は嵯峨天皇十年より今に至つて斷えず座首妻帶の始は後伏見帝第六の御宮助有法親王を座首となし奉るより始ると云云

○彥山志、肥前釋ノ大潮著す

○宰府神廟の樓門は石田三成建立の由先年詣でし時六度寺の泰賀上人語りき

○天拜山は麓に天滿祠あり新天神と云祠前に衣懸けの石あり頂に小社あり庭に草生ひ最荒凉たり社東に向ふ菅家登望の地にてもありしにや

○筑後上妻郡江戸村の水道とて大渠あり草野又六と云者の經營する所と云其工甚壯なり渠の末派の溝皆よく舟を通ず

○筑後久留米郭門の外に今の少將五穀神の社を造立す其寺を神田山圓通密寺と云造營甚壯麗なり而して國中の民家風日を蔽ふ者稀なり

○肥前佐賀の城を出でて小田と云驛大木の楠枝葉茂れり其木に行基の刻める馬頭觀音あり殿小なりといへども甚麗はし

○大郡領國豐に農賈饑渴の患あるべくは見

えず士皆士著故古風見る様に思はる

○長崎にして長崎縁起と云書を見る光壽山正覺寺禿法眼記とあり是を見るに長崎は元彼杵郡大村四十八箇村の一昔は深江浦といへり應永の比下總國佐倉より長崎小太郎爲直と云者こゝに來り代代住せしより長崎と云とあり瓊浦と云ことを人に問しに玉浦と云一名ある由也

○同書日慶長八年癸卯東照公長崎奉行として小笠原一庵を下さる今年始めて邪宗を嫌ひ玉ふ翌年有可改邪歸正之命長崎奉行の始なり

○同書を考ふるに此比長崎は天主教盛にして神社佛閣破壞して一宇も殘らず居民盡耶蘇の徒也この時森都と云盲目あり田原紹忍の徒にして專邪法の棟梁なりしが元和二年辰五月五日始めて心を翻し佛法に歸すこれ轉(コロビ)の始也奉行長谷川權六江戸に注進しこれが白狀に因て其徒しれたり是台德院殿の時にして寺方門徒帳の始也

○采覽異言に耶蘇の徒を誅し玉ふ事二十七萬とあれば島原の一戰は僅の事也今に云傳へて耶蘇の法を修すれば自由自在を得虛空をも飛行し人の心の內の事をも知り日に金七厘宛生ずるなど云り天地の間に斯る事なし皆彼方邪人に惑はされて妄想したるなり此杵築藩にも百餘年前一向の徒今在家と云村より法義に託し夫婦の緣組を屛風を立て男女を兩方に置き帶を是に懸け其取り合ひたるをば老弱貴賤を隔てず彌陀の引合せなりとて配偶しける其勢甚盛なり國守其首惡を磔にして其徒數人を戮し家臣胥吏をして改宗せしむ衆民旨を承て皆改宗せり管內の教寺唯寺院のみありされども頑人薰執を改むる事能はず中の原と云處にして死刑に就し者多し今猶其徒ある者は再興せし者也是

皆他の蟲説に妄想を生じ其妄想を眞と認め邪行を正と思ひ父母に孝し君上に忠を盡すよりも猶廣大無邊の事ありと心得違ひたるより起るなり

今在家傳照寺府内光西寺の末寺にして鸞徒なり秘事法門と云を始めて大に人を誘し惑はす秘事法門に入者は其秘蜜其盟に預らざれば父子の親夫婦の蜜といへども之を語らず毎月數度の會合あり讃佛了りて酒食の事あり夜深け人靜まりて秘事法門に及ぶ事秘すれば知る者なし漸にして聞に男女兩列に分れ其間屛風を隔つ婦人帶を解て屛風に懸く男子列中を立て其帶を冥捜して取る其相得るの男女是卽無量壽佛の媒する所として子母姑姉妹に論なし奸を行ふ其風愈盛なりこの村に眞言家の僧あり佛法を亂り風俗を誤るを見るに忍びす官に告ふす時の領主松平市正直次命じて其黨六十人を搦捕て拷問す張本處の名主中島九左衛門夫婦を磔にして外に七人の首惡を戮し其他を赦し改宗せしめ寺を毀ち奸僧二人を追ふ奸僧怒を含み訴人眞言僧を山中に出あひ石を以てうち殺せり是寛文四年甲辰の春なり領主鸞徒の衆を惑はし彜倫を亂るを憎んで家臣及群有司をして他宗に歸せしむ群有司旨を承て各其下をして宗を代しむ是君侯の令に非ず君侯の意による也此時田染高田見目眞玉の四組公料にして杵築侯預りなり田染組陽平の莊屋四郎右衛門上野村助三郎衆を結んで改宗せざらんとす侯これを戮す因て皆宗を改む爾後田染組竊に鸞徒を賴んで親を葬る者一人子を葬る者二人あり侯亦これを捉へて戮す豐前中津妙蓮寺隱居素石法橋竹翁鸞徒なり其黨の頹廢を悲み或は本願法主寂如上人に詣つて此事

を歎き或は杵築藩に來つて此事を請ひ終に有馬左衛門佐清純吉良若狭守義冬を賴み屢託を入れ自勸めて情願する者をして鸞徒に復らしむ眞玉組十ヶ村見目組十二ヶ村竹田津十三ヶ村來浦十ヶ村富來十二ヶ村横手十二ヶ村小原十九ヶ村兩子十一ヶ村復歸する者一萬千百八十九人安岐守永の二組は情願の者なき由にて素石中津に歸る爾後安岐守永にも稍稍復歸する者あり田染高田は後松平主殿頭領となるに及んで盡く鸞門に復る領中復宗の事は寛文十年庚戌杵築の國老加藤助左衛門橋本伊織田中與左衛門郡奉行大河內五大夫宮內仁左衛門寺社奉行石田半助佐藤小次郎寛文八年以前は郡奉行寺社を兼帶公料奉行は澤與市右衛門原大右衛門今に是を帶解佛法と云天下の大道と云者は日月天に懸るが如し暗夜曖昧の間に相結ぶ者は奸徒のなす事愚昧の惷民を紿き己が私を逞ふす近世江戸にて土藏佛の崩れあり豐に擢破眞妄の訟あり皆鸞徒にあり天明辛丑春我小倉中津に遊ぶ此二藩中妖僧暗夜蜜誓をなし泉下の幽魂を現して之を見せしむるを以て愚民を惑し金を掴む二藩皆其妖僧を追ふ是は淨徒なりとかく世間文盲なる時は死生幽明の故に罔し罔ければ惑ひ多しここに於て邪說風靡す故に有國者この弊を改めんとならば世をして文明に赴しむ世文明の化行るれば人死生幽明の故に惑はずここに於て僧徒も其奸をやめて漸く其祖訓に近づく唯奸僧虛に乘じて人を魅するの徒は在家の書を讀むを惡む

西洋の法も國政などは聞くにしほらしき事のみ多し彼國も我國の神あり儒あり佛あり其佛も流を異にし派を分ち一樣ならざるが如くにして一種人を蠱惑するの道あるにや

すべて愚民の態は奇異の我不測に出るに氣を移すもの也元の頃外國より來る僧は色色の人の目を驚すことをして人を傾けし也今伊綱と云類也伊綱とて造化を我手に入れて自由にすることはならず畢竟は障眼機なり西人支那に來り口より火など噴て見せしことあり是も其方ある由法苑樹林にも說けり今度吉雄にきくに是も唯方あることにて口ばかりにてはあらず手にて物をすりても光出る方ありと云り世の人の心は利慾に迷ふ者也正覺山大音寺は長崎にて佛法中興の先魁にて徂徠大音寺の碑あり今石碑の經營ならんとする寺僧に請てこれを讀むに西洋我國を奪はんとして我愚民を欺き人心を移したる謀にして我民に酒食を與へ財貨を贈り或は鏡を示して其面を異形に變し火を口より噴くなど云樣の事をして人を靡かしたりと見ゆ吉雄話の序に曰我竊に國家の爲に東北を患ふ西域の人の人の國を奪ふや多く干戈を動かさず我國東北は蝦夷の地也蝦夷の北邊已に西洋に得らる若蠶食して蝦夷を有せば我國當に北顧の患あらん蓋西洋の人の佗の國を奪ふ或は色を放ち或は酒食を饗し財貨を予へ人心を移し其內己が要害を固め人心已に移るの後一擧して其國を取る干戈を用ゆるを大下策とす某の國某の王名も聞き其書も見しかども忘れたり其王の夫人に弟あり國王最財貨に富めり夫人の弟國王を弑して國を奪ふ夫人宮女の美にして才略ある者八十人を撰み貨財を携へ地を一島に避く而して島民に酒食財貨を予へ出入を縱にす爰に於て男子自然と來りて配偶をなす二十四年を經て壯男數百を得是より兵を募り此精兵を以て終に其弟を亡ぼし其國を復せしとぞ西人の智巧かくの如し今蝦夷我東北にあり帶るに山河の險を以し射に長じ水に得

たり其國金銀必多けん土人採ることを知らず而して其國智巧未開けず若我西人の術を用ひ我國の威武により恩を以て撫し敎を以て開き穀食の美を知らしめ彼平生好む處の煙酒を贈り人心我に歸する樣にせば彼悅んで歸伏せん已に蝦夷の地を有せば金穴開くべし財貨據るべし北門是に由て固かるべし只萬國の地圖を展べ萬國の情態智巧を考へ其事跡を知りて其事いふべしかく取り易き國を取らず若西洋に蠶食せられば國家豈北顧の憂なからんや我竊に西人人の國をとるの術を知て國家の爲に怖懼を抱くといへり是に由てこれを思ふに實にこれ西人の意測り易からず國家防嚴に怠らず可謂其要を得と然して其國の人智巧萬國に勝るよく思ふべし

○吉雄名は永章字は耕牛幸作と稱す此亭にして松村君紀に會ふ君紀は其字名は元綱安ノ亟と稱す其に阿蘭陀の舌人耕牛西學に通ず西洋の書を儲ゑて架に滿つ甚客を愛す一日我を招ひで酒を飲しむ其酒數品

一、ゴルトワートル。ゴルト翻金ワートル翻水。

一、マーガワートル。マーガ翻胃是能養胃者。

一、セルデレイ。

一、カルエー。其不聞其說

一、ゼネーフル。ゼネーフルとはヒムロの實と云こと也ヒムロのみにて造れる酒也

一、オランエワートル。オランエ翻相子ワートルの語下にあるべし

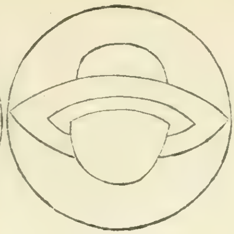
酒は右の如く草木の精英を以て造るセネーフルオランエその外は皆葡萄にて造れり其說に曰穀は人の生命を續く者酒は人の本心を亂るの狂藥人命を續くの良物を費して人心を亂るの狂藥とすべからず酒色同じからず氣味も亦これに從ふといへども燒酒の類

を出す
○混圓たる一天地畢竟始も無く終も無し各國天地の開闢を說く其說同じからず是其國の譚士異意匠を以て其窺窬殊なれば也耕牛子架上の書を檢するに我邦神代の卷とも云べき書也其說を聞くに始天よりアーダムと云が肉を取りてエーハルとなれりアーダムとは雄と云が如くエーハルとは雌と云が如し此二神身に光あり終に子を其間に生じ食慾を生じ色色の物を食ふに由て身光出ず終に人となれり以下說長きを以て略す我邦諸冊の二尊を說が如く又佛氏光音天人地膩を食つて身光滅するの說と髣髴たり彼國是を開闢として以來我安永戊戌の今年に至つて五千七百二十八年耶蘇降誕以來千七百七十八年彼國にては其時の國王一世を以て數へ又の王立つ時は新に數を起し又年號を改元して舊算を棄て別に數を起す樣に數へかけて又數へ始むる樣なる事なし年號もなし甲子も無し唯開闢と耶蘇降誕とよりひた數へに數ふるの二法のみ也最日など數ゆるに七の數を用ゆる事あり今服藥灸治湯治など七日を以て一周と云事あり西洋の習俗より移れる事にてあるにや其七と云は經星の外は唯日月五星也五星本辰星太白熒惑歲星塡星素問等に五行を主張してより辰星は即水太白は即金熒惑は即火歲星は即木塡星は即土終に舊名を失して性を五行に求む五行本人造人造を以て天に求む愈其眞を失す西洋本漢學と相關涉せず故に甲子も無く五行も無くして天眞を見るに損なし漢學の固習を破るべし西洋は七曜を七金に配す是も亦配當にして漢說と魯衞の政也といへども其人造の異に依て天眞に非ざることは識るべし西洋七金の配當は日。金。月。銀。辰星。汞（ミツカネ）。太白。銅。熒惑。鋼。歲星。錫塡星。鉛。

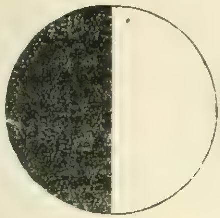
○天經或問渾輿外記等にも西洋の四行の事を說り四元行ともあり漢の木火土金水天竺の地水火風空西洋の四行水火土氣其說同じからずといへども畢竟共に造化を說くの具にして同一日の譚也耕牛阿蘭陀には不レ用二四元行一と語れり

○西洋天象の圖を見るに日體は燄燄として火もゆるの象也兩邊連山の如き象あり其山間の如く或は山頂の如き處火もえて火山の如し山の如きもの無き處は火體洋をなすが如し其間火井とも謂べき象あり火もえて其內より出るが如し而して處處煙を起す象あり月の圖は周圍黄赤道あり微茫の中歷歷として山海江湖の勢をなす蓋これ地體水陸の影と是に於て逐一其地名を記す書中必其故を說くならん然して其字讀こと能はず身自學の博からざるを憾むる而已月中の翳其說多多皆迂怪論ずるに足らずこれを山海の影とするも西陽雜俎かにありと覺ゆ先年綾部璋菴藩に在し時璋菴此說を取らずして日水及鏡の物の影を含む己光無して物の象を含む也己光を放つて暗物を照らす暗物の彩己を照すの光體に入ること其徵を見ずと云し事今猶記せり兎にも角にも月中の翳は何物なるを辨せず今晋をして孟浪に放言せしめば日及五星各其內物を布く事地表山河を羅ぬるが如し月中の體必玲瓏透徹無瑕の珠の如くならんと思ふも推量也月體を無瑕の珠の如くならんと思ふを土臺にして推量る故是を翳となして兎とも蟾蜍とも桂とも閻浮檀樹とも或は嫦娥とも吳剛とも又山河の影とも云ふ也天一面に碧なる事能はず日月星漢あり日體一面の燄燄なること能はず物有つて連山の如し地一樣の體なること能はず山島江海の紛雜あり熒惑太白歲星塡星各其文あり唯辰星のみ文なきが如きも日に近う

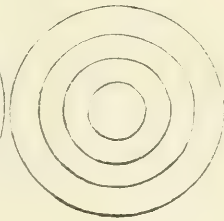
して其體小なるを以て其分明を盡さざるかも知る可らず然れば天地四曜皆文あれば月體元玲瓏透徹の無瑕の珠にあらず地球に由島江海の兩體雜はり居るが如く月表亦如此二體文をなして能地の文に類するかも知るべからず五星の象如左



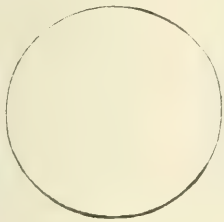
土星



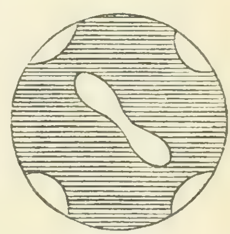
金星



木星



水星



火星

○吉雄亭奇貨多し只此時長崎熱鬧其奇貨を遍く見其説を詳に盡す事能はず今に是を憾む亭上阿蘭陀琴、望遠鏡、顯微鏡、天球、地球、ヲクタント、タルモメートル、其外奇物種々を見るタルモメートルは蠻書を考えて吉雄自製する器と云譯せば寒熱升降器と云べし其形

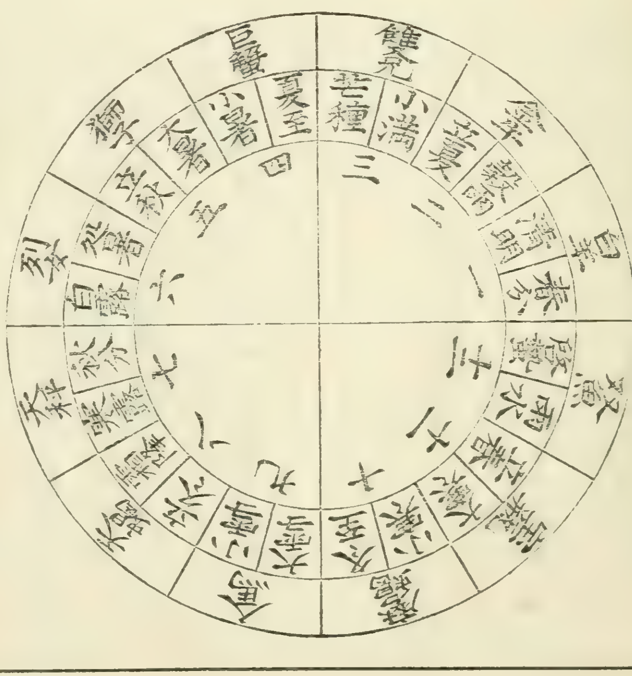


ビイドロにて如此拵たる物也此內藥水ありイベリコンの油を見る樣の色也是を立てて見るに熱盛なれば水上口に著く寒盛なれば水動かず溫冷の分に從つて升降す試に手を

溫めて下の珠を握れば其人の手の溫まりに從て水下より升る畢竟寒暖をはかる等子と謂んも可なり

○顯微鏡にてうかがふに人の髮はひらみ有り獸毛はまるし小兒の髮は中一條すく

○天球は星の圖也星の統屬漢法と大に同じからず曆算全書に由て考ふるに黃道に十二宮を分ち星を南北兩部とす北部二十一象南部十五象されども極南の天は北地より見えざるを以て知れず明の弘治の頃西洋の人吳默哥安德助など云人極南にゆき其星あるを見萬曆の比西人胡本篤再たび行て其星を測定して十二象をまし二十七象合せて六十象を天球に繪がく架上四脚を設け地平環を設け極軸これを貫くことは兩球共に同じ但天球黃極を主とし地球赤軸を主とす共に印圖也天球をヘーメルゴローピス地球をアールドゴローピスと云ヘーメルは天也アールドは地也ゴロウビスとはまるると云ふこと也



西洋は我邦節を冬至に起すが如く節を春分に起す故春分の宮より數へ始むる也

○國家耶蘇の亂に懲りて古人といへども猶

西洋の書を讀ことを許さず況や其他をや故に西洋の學の書一切に之を禁ず其禁目

天主　耶蘇　西洋　歐邏巴　利瑪竇　利太西（太一作秦）　利山人　陽瑪若　湯若望　游藝字子六　景教　彝學夷　西學

書に三十四種の禁書あり

○天學書函　、天文略　天主實記
天主續編　○計開　畸人
十慰　西學記　、交友論
辨學遺牘　七克　、幾河原本
彌撒祭義　、泰西水法　代疑篇
表度說　三山論學記　三山學記
教要解略　唐景教碑附　聖記百言
二十五言　、職方外記　靈言蠡句
、同文算指　況義　、圜容較義
、渾蓋通憲圖說　勾股義　、測量法義
萬物直原　簡平儀記　滌平儀記
滌罪正記

其外語禁目にわたる書は悉焚塗す是を査する役は聖堂豫りの向井氏春德寺の和尚兩人也右の外焚塗に及ぶ者

寰有詮
貞享二年乙丑拾五番船持來官命船上焚之
天經或問後集　游子六著
貞享四年丁卯廿二番船塗抹
福建通志
貞享三年丙寅拾五番船持來船上焚之
地緯
貞享三年
帝京景物略
元祿八年乙亥拾六番船持來
譚友夏合集　共六本廿三卷
同年第四卷七言律有過利泰西墓而吊之
西堂全集
元祿九年丙子六拾二番船塗抹（晋按疑船下當有共字）
三才發秘

元祿十二年塗抹
顧學集　共十本八卷　鄒元標著
元祿十二年己卯廿三番船塗抹
西湖志　共八本 志八卷 志餘十八卷　田汝成輯 姚靖增補
同年塗抹
禪眞逸史　俗託小說也雖レ有二天主事一非二耶蘇所レ謂天主一惡二其名一斥レ之而已
元祿十三年庚辰六番船持來塗抹
方程論　四本四卷　勿菴梅文鼎著
元祿十四年辛巳四拾二番船持來算學也序
及餘論存右序中載西學算法之題名及黌徒
之名號並禁書題號塗抹
西堂全集
寶永三年丙戌五拾五番船持來塗抹
西湖志後集
寶永四年丁亥四十一番船持來塗抹
、增定廣輿記　二十四卷　蔡九霞先生增定
寶永七年十六番船持來塗抹
、名家詩觀　康熙戊午漢鄧儀選二淸詩一

元祿十五年持來第六卷有下贈二太西洋湯若望一
詩七言律一首上吳統持詩也
○增補山海經廣註　六本十八卷仁和吳任臣
注
元祿十五年
檀雪齋集　十二本四十卷
勾股義　二本
享保十二年　晋按此三部下必脫二焚塗抹等字一
これ禁目の外西學に觸ることある也其內只贈二西士一過二西士墓一の詩一首を出すも其集これが爲に廢すれば國禁の嚴なることを知るべし晋聖堂に詣し向井氏に過つて此事を問ふに此禁も亦古今、あり國初耶蘇一亂の後深く懲り給ひて一言天主に及ぶも忌み給へりされども西洋の學は天文地理に深く通ずれば其書國禁なる時は天文曆術の學缺事たるに因て享保二年官命有て其禁ゆるぶ曰暗と名目とは免ず唯其教を說の書のみ禁レ之云これ

によつて西學稍稍世に出て禁書の內天文略交友論幾河原本泰西水法職方外記同文算指圜容較義渾蓋通憲圖說測量法義等皆世に行はる已來曆算全書等官禁にあらず西人の名目を出せる詩集世に行ふことを得ざる時と大に異なり國家の學者に賜する事大也これより世の學者稍稍西書を讀む事を知つて開臟の翻書等頻頻として出づ吉雄子の宅にして西書を覽るに其書我尾とする處彼書の開卷にして其板は銅を用ゆ精巧言ふべからず表紙獸皮をなめし漆にてぬる壯夫といへども十卷を擔ふ事能はず大册なる者は一卷の價金四五十片に至る天象地理の書より物產の書には天竺本草阿蘭陀本草を見たりこれを見て和漢本草の類物產の窄狹なるを覺ゆ諸國の志亦多しケンフルと云書は暹邏と日本との志なり初に日本の總圖ある客館中明の新安の胡宗憲所著の籌海圖編を見る一套十卷あり日本の事を記せる書なり明人の國圖は布置位を失する者多し西人の圖は漸く正し長崎上關大坂京師江戶の圖は言ふに及ばず西海山陽畿內東海道等の山川歷歷として見るが如し三十三間堂には的射あり東都の殿中には將軍家簾を垂れて紅毛人の舞を覽給ふの圖あり草木禽獸魚鼈の如きは訓蒙圖彙如き書によつて寫したりと見えて正しからず神には大黑惠比須壽老人元三大師又位牌數珠寶貨は壹步判小判大判豆板鋌銀錢大名の諸道具定紋いろは片假名もあり代代の帝統治亂沿革もある由也櫻蔭比事の評書などもある由耕牛語りき

○阿蘭陀にては字の事をベットルと云此字皆西洋に通ずベットル總て二十五昔は二十四今は二十五眞行草あり則活字板を出して印して我に贈る其墨をエンキと云其板をドカクベッテルと云也其所謂二十五字は

H ハ	G ゲ	E (ヱ)フ	D ヱ	D デ	C セ	B ベ	A ア
Q (キ)ワ	P ペ	O ヲ	N (セ)ン	M (ヱ)ム	L (ヱ)ル	K カ	J イ
Y (ヱ)イ	X (ヱ)(キ)ス	W (ド)(ブ)(ル)(ト)(エ)フ	V ユフ	U ユ	T テ	S (ヱ)ス	R (ヱ)ル　Z (セ)(ダ)(ツ)ト

此時艸々其説を盡すこと能ず今に以て憾とす大抵文字の不足は反切を以て足す吉雄席間に於て我姓字を寫して

LA（ラ）　U（ウ）　MI（ミ）
JF（ティ）　T　NA（アン）

予依て吉雄幸作の字を書して出すに吉雄領せり（セダット松村はセイダトいへり然ればトと云も濁音なるべし）Q松村はキユヱといへりFフVフの別Fフは中聲Vフは口を閉て火を吹く勢をなす聲Hハは半濁Lルは半濁Rルは馬の子を呼ぶ様に舌を口裏に轉ずる聲（ヱムなどと〇を用ひたるは助聲と見えて實用無しと見えたり條理たちたる事は萬國を隔てても一轍に出づ我邦天竺と域を隔てて古昔相通せずされども悉曇字記などを見るにアイウヱオ長短呼を以て音韻をたつ我古語を察するも此五音の反切詳略也漢人三十六字母も此藩閣の内にあり松村に聞くに其字經緯あり其アベセデヱは緯也五音を以て經とす五音の次第はアエイヲユと立つと也西洋にも詩あり或は三百篇の詩の如く又梵書の偈の如く五音相類を韻とし踏と同人いへり詩の事をゲティキ又ハアルスとも云晋次に因て思ふに本邦の古字ありと云説あり先達とらず今の國字は漢字より來る者也梵字は則悉曇(シツタン)也蒙古字は正字通に出せり我未得要領朝鮮

字藤原明遠の學山錄に出せり其說曰朝鮮國世宗莊憲王設諺文廳命申高靈成三問等製諺文其字正音合十三行一行各十一字又有九字旁音以旁音迭合於正音而變通曲折無處不合天下萬國語音文字所不能記者悉可譯而通之矣(朝鮮字略す)

右旁音九字正音一百四十三字其字體依梵字爲之是本書誤りあり今改正すこれは竪文字也阿蘭陀は横文字也蒙古字も横文字と見ゆ又反切に依て文字變化すること梵字の如しと見ゆ正字通十二韻の首字を擧て兒童に字體を示す(蒙古字略す)

子細に看來れば經緯條理ある事朝鮮字と同じ和字と其撰元より別也今清明の地を有してより故國韃靼を滿洲と云今の中には清語滿語兼用ひ清字滿字雙べ行ふといへり

○松村翠崖曰今南懷伯仁の渾輿外記は西洋のプリニウスと云人の造れる書の抜書の樣なるもの也本書甚廣し直に其書をプリニウスと云

○翠崖又曰西洋百年來の說は日動くに非ず地止まるに非ず日よく止まり日の外なる者皆動ひて日を周る其製の渾天儀ありローベンデアードコロートと云クトロメンスと云人これを造れりと云ローベンデとは動の義也コロートと飜珠

○明祚已に衰へ韃靼入て支那を有す即清也長崎の施藥院直野英伯と云が語りしは清帝后妃必明國より迎ふ文官は清に求む武官は滿人を用ゆと韃靼は大國也其版圖に歸する處を松村に問ふ其對に曰韃靼即タルタリヤ其地最洪廣大槩七分也清國與るの地靖慶府を置て鎮す即所謂滿洲にしてこれ支那より東北にあたるの韃靼其佗支那に屬せず內中滿語文官漢語といへども雜へ用ゆべしとの上諭也大韃靼小韃靼あり大韃靼は西北にありゴロートタルターリヤ小韃靼はケレイニータルターリヤ西にあり今ムスコービヤの者之を有す又ムスコービスタルターリヤ又スネースタルターリヤスネースは支那也支那韃靼と云亦一種也それに東西の二韃靼あ

り
○欧邏巴の地阿蘭陀などの組合の國七箇國あり其帝統は右の七箇國の王輪番にて入てこれを嗣ぐ國王葬禮圖一卷あり其禮甚盛也棺郭喪服大に備はる兵器は皆倒に持つ當年カピタン船中に死し長崎に葬る葬儀墳墓最壯也俗に阿蘭陀は死すれば之を海に投ずとは久しく海上に浮む時船中藏め難きを以て兼て沙を船に貯へ置き若死する者あれば棺中沙を以てこれをつめ浮まざる樣にして水葬する也長崎の人も朝暮其人を見るなれども世の常の人は其實をば知らず阿蘭陀人は短壽也といふも虛說也クロンボは身輕捷にして色黑く殆猿などの樣なる者の樣に云思へどもやはり常の人也最熱帶一條は人色黑く性暴に聰慧も亦劣れりクロンボも就て見るに少し黑き面にて替れる事なし松村曰輕捷江戸トビの者ほどの働はなし即閣龍渤(クコンボ)印度あたりの國也即齊狼(セイロン)の地也西洋の大臣キリストフスコロビスと云者齊狼(セイロン)の地を開きたり是故に齊狼の城下をクロンボと云コロンビスの轉音にして和語の黑ン坊と云にあづからず閣龍(コロン)渤(ボ)崑崙(コンロン)渤(ボ)古(コ)龍盤(ロンバン)皆一音の轉、漢人の所謂烏鬼是也

○阿蘭陀にては故きつつれ故足袋等の樣なる物にて紙を造り出す紺に染たるは紙色青し

○阿蘭陀文武の二官あり武官は甚落たる者也カピタンも文官也

○阿蘭陀の醫治內療に長ず內科外科の別あり自血や疵の取なやみする者は人斬と同じく品流甚卑し本科の人能さし圖をなして之を役使す其人平人と同席を許さず牛豕を殺す人は還て然もあらず

○阿蘭陀には灸法なし熨法有りノシ灸と云其法燒酒壹升樟腦拾貳錢大茴香紅花各四戔

一度に燒酒に浸し置き用ゆる時布にて漉し用ゆ熨し樣は木綿手拭位のきれを疊み右の藥水に浸しノシガネは壁を塗る鏝の樣に長さ五寸厚さ三分程さきを圓くし三枚火鉢の上にて燒ききれの上を取り替へ取り替へ熨す肌に熱を强く覺ゆればひく折傷死血積聚筋骨痛等に用ふ

○肘中の血を取るを俗に尺澤の血を取るといへり尺澤を必とする事に非ず尺澤の邊靑筋隆起する處を見て針を下す針する法病人の手に杖を握らせもめん切にて臑をまき筋にうらかかさる程に針す紫黑血をさり眞血を見ば速に止むべし血を止るの法酢を指につけ瘡口をもむ也夫人身活すれば血充滿すといへども死すれば一滴を見ず只其靑筋の內血を見る然れば筋は血の宗血溢るることあれば病をなす是に於て血溢の症有餘を漏す是を以て吐血衂血又血上つて面紫黑を發し血鬱憒憒を致すの諸症すべて此法を用ふ

○脚部は血出難し脚を溫湯中にひたし其內にて血を取るべし以上五條耕牛の說也

○耕牛又曰先年獨嘯菴崎陽の一豪家を吐す然るに吐氣やまず纔に血を以てす氣息奄奄として漸く絕んとす獨嘯菴來つて我に謀る我曰又有術頻頻湯を與へ間斷なかるべし因て此方に因て生る事を得たり耕牛曰是乃西洋吐瀉の方也蓋其意に謂ふ人吐止ず而して吐すべき者なし吐すべき者無して吐氣やまず是を以て纔に血を以てす血を吐して吐氣やまず終に死に至る是用法の詳ならざる也蓋吐瀉は吐瀉すべき物なきに依て不測の事ある也吐瀉すべき物あれば腸胃敗を受ず腸胃物なく誅求急なるに因て誅求に給する者なく終に死を致す吐といへども飮めば吐く物あり物よく胃を滌ひて雨の滯瀆の穢物を洗ひ去るが如し瀉劑も肛門澁滯の氣味を覺

ゆるものは湯水灌漑の功なく穢汚の氣腸中に在れば也と此論甚面白く覺ゆ晋按ずるに人天に資て繼ぐものは呼吸の天氣と飲食の地質と也脈は地質營養の動也息は天氣衛護の動也晋久しく息を閉て天氣を絶てば暫時にして死す飲食を絶者は猶十二十日を經て死なざるを疑ひしに吐瀉の劑に由て殪るる者を見又自吐瀉の劑を服して親しく試る事有て始て能く其理を喩る夫氣は動物其新內を養へば其故直に外に出づ質は靜物大抵昨日の故今日の新を得て瀉すといへども猶陳陳相依るに似たり故飲食せずといへども猶飲食の質內に在て營養をなす其ひだるしと思ふものは飲食の精氣の營養する者の乏しく成たるを覺ゆる也是に於て胃中地質あつて生これに依て立つこと足の地によつて立つが如し足地を離るれば立ず胃飲食の儲を盡さば踵を旋らさずして死する事其迅速息と同じ是を以て吐瀉して死ぬる者は胃中物盡る也是故に中毒の吐瀉等にも此灌湯の用心第一なるべし

○晋按ずるに藥味製を好む人あり無製を藥力鋭しとて好む人あり又藥はもと毒物なれば製して毒をまさば製すべし製して毒を鈍くせば製すべからずと云人あり其効も端的に見えざれば我思ふ樣に効も思ひなさるる程に歸一の論も終にあらず無製と云も煎ずる時は水火の製を一度は經る也且物は製するに由て彼此の氣味相得て一種の氣味功能をなす也譬へば酒は米麴相得て釀す釀し得ての氣味功能大に舊時の米麴に非ず其糟を水火に釀して燒酒を得るに其辛又糟と別也馬牙硝火を引ず麻莖(アサガラ)の灰も火を引ず兩物相得れば其火を引こと電光石火の如し今草葉木實生にして異能なし燒て霜となし其才奮物にあらざる物多し巴豆生よく瀉し燒て霜

となせば瀉をやむ蛤殼生なる者鈍物の如し燒て水を澆けば暴悍あたるべからず製造の用大也西洋の藥品は多製造の物にして一種の能を醸し出せる者也此故に和漢の劑は穀肉菓菜を集めて一種の調膳成るがごとし西洋の方は敗屋下の土を漉して焔硝を得米麴を醸して酒を得るが如し此選異なるを以て服藥の道も亦同じからざること多し西洋毒藥を製造する時先其事を官に訴ふ官其家内親族及鄰里出入の人藥品の量製造の日數盡く簿に記し又其法を知れる人知らざる人を記しわかち毎月これを官に申し他日不測の變に備ふと可ㇾ謂愛ㇾ人之意悉矣

○吉雄曰折傷金瘡は宮藥宜しからず洗ひ藥よし其法は燒酒（スピイルテスヒーニイ）百六十四匁樟腦（カンフル）拾貳匁即腦の末燒酒に入れ器に入れ口をよく封じ七日程天日にあて用ゆる時わかしてかくる也金瘡折傷骨折疼痛無名の腫物又よく鬱を開く

○瘀血なきには酢よし瘀血あるには酢を忌む瘀血あるの人酢を用れば忽痛を覺ゆ

○耕牛よく西書を讀む又西洋の律を好む其所ㇾ聞左に記す西洋の禮夙に興き盥漱し先天を拜し次に國王を拜し次に父母を拜す教孝を以て主とす故に彼國開國已來君を弑する者なし百年前始て君を弑する者あり始て弑ㇾ君の刑を作れり殺の禁あり偸の禁あり不信の禁あり淫亂の禁ありこれを佛の五戒に比するに只飲酒の戒を闕くものゝ如し配偶の禮父母媒妁の輩其事を議す議定つて是を官に訴ふ官其男女を召び是情願に出るや猶遺憾あり他心ありやを問ひ父母に及び兄弟に及び六等の親に及び隣里に及び遺憾無きの旨を聞てこれを簿に記し而して後昏ず是故に大抵離縁と云ことなし若己ことを得ずして出せば夫の家産を半を分つてこれに遣す

其法也鰥寡孤獨の如きは集めてこれを一所に養ふ飲食の料は國中よりこれを給す而して其各其能する所の業をいとなむこのいとなみを賣て費用に給す小兒輩の如きは各其好む處の業に就て學ばしむ故に古より往往此中より名士を出せり

○六等の親とは禮に上は父祖曾高の四に殺（サイ）し下は子孫曾玄の四に殺し旁は兄弟從兄弟再從兄弟三從兄弟の四に殺すこれを上殺下殺旁殺して親盡くと云皆四等にて殺ぐ西洋の律書を見るに其圖漢圖の通り也只漢圖は方に畫するを圓形に畫したるばかりの事也而して漢は四等にして殺するを上下と旁と猶二等を加へて親族を六等に定むる也因て思ふに今俗語に罪七從兄弟に及ぶと云ことをいへり和漢に七從兄弟に及ぶの刑なし西洋旁六等なれば兄弟を己が位に屬して六從兄弟までを親屬とす猶無服の親にも及ぶと云語なるべし耶蘇宗行はれし頃など云習はせし言にや有るらん

○西洋は專人の生殖することをつとめて人を殺すことを甚重んせり女子一旦姙娠することあれば墮胎を許さずもし墮胎する事あれば絞めこれを三日さらす棄子も其身貧窮にして養育する事能ず人の集り會ふ所富貴の人の家に棄たるが如きは其罪輕しもし山野無人の境に棄るが如きは死刑也君父を殺せる者は先其四肢を折り處處引ずりまはし牛裂きにする也

○人を殺す者罪活べからず自殺も亦大罪とし屍を山野にさらす日本の人の君を諫め或は事に臨み自裁するごときを見て日本の人愚也人の君父の爲とも成り萬の事を遂んには命こそ大切なる者なれ小辱を忍び大計をなすべき也何を以てか我大切の身を捨んと也彼國いかが立たるやらん委しきことを知

らず聖人の法も戰戰競競として深き淵に臨める如く薄き氷　ふめるが如しとあり只義と云者ありて義によりて命を棄るの外死するの道なし生て不義の辱を受じと也彼邦の道は一向自殺を許さざるにや怪し記錄に小西攝津守行長とらはれに就く時我は吉利支且なれば自死なじとて縄目の恥を受しは歐邏巴の人の評は知らず日本の人にては後代までの恥辱也

○西洋の人日本をばヤアハンと云由釆覽異言に見えたり

○流刑は遠流は飯料衣類五穀菓木の類の種子を與へ地を得て留り居らんことを希ふ故にもし罪人中女人あればこれを伴はしめて去らしむ

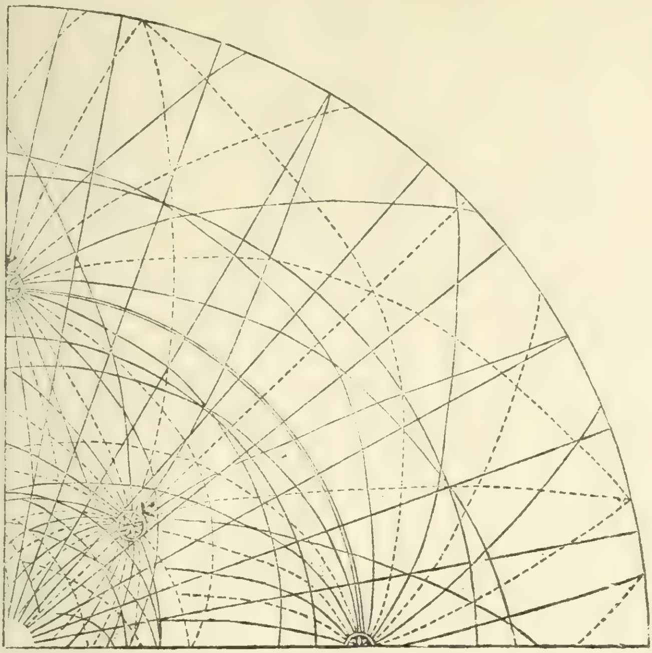
○阿蘭陀等は經濟の道生殖を主とす又鬼神を信ず故に災に逢ふに至つて願を結ぶの法乃天に祈つて天慈愍を垂れ能災を除く事を得せしめば或は家産の半を分つて是に賽せん或十金を以てせん百金を以てせん某件の物を以てせんと誓ひ畢つて是を書に認め函にして災の除くを待つ既にして其災去りて後これを官に歸す官得てこれを天に報じ國の窮乏艱苦のものに頒ち與へて曰天これを賜ふと今世の中を見るに佛神に信心なると云は皆私慾の人也其故は朝暮寺社に詣し稽顙百拜して己が子孫の繁榮を願ひ息災を祈り死してよき處に行ん生れかへりてよき者にならんと唯私を以て佛神を我使者の樣に意得たる也故に其百金を擲ち千金を擲つもそれに百倍の利を得んと商人の翌年の儲せんとて今年數十百金を擲つて仕入をする樣の市井の意也神の道は黑き意なく淸き意をもてとあり佛の道には貪嗔癡を三毒とて戒めたり貪とは物を貪ること也今の佛神に媚び諂生て得取んとする人の意根只物を貪る

黒き意なり佛の道は乘と云ものあり無我になりて諸慾なくなれるを羅漢乘と云それより大慈大悲の心を以て衆生の苦を拔き樂を與へんと誓願するを菩薩乘とす是乃佛の教也佛を信ずる人は佛の教に從ひたき事也今の信心と云人は只其貪慾の丸かせのみにて現世の富貴繁榮を祈るに非ざれば未來己よき處に行き樂みたきことを親方に是式する也佛の教とは大ひなる的違ひなり故に天地の間に生ずる五穀布帛金銀香油皆無用に費す民庶は自然と困乏に及ぶ也僧も己生業の爲なれば只佛に物をあげ寺院の結構をすすめて仕方ばなし聲色遣ひ帳をつくり廻向袋をくばり己が業の立つ樣にと說きて大事の三毒を制し慈悲の事をば說ず今人の己を容られんとて媚諂ひする者を賣僧と云は此僧に似たれば也斯くいふを不信心とも誹謗ともいふべけれども今の信心者其一身現當の爲に擲つ金銀を以て隣里鄕黨の飢たる者凍えたる者には與へず結句少少の借しつけなどは無理無體に取り立て佛神にへつらふ也不直の吏の民に聚斂して權門に金遣ふと同樣也信心とは佛の道を厚く信じ貪る心を止め慈悲を行とすべし是乃檀波羅密の行也今の信心と云は貪心なり信心とは昔天竺に一比丘あり乞食して大なる家に行しに內に入るべき由いふに何心なく內に入りければ家內人無して只女子一人ありやがて戶を閉ぢ切に戀慕の言を通ず比丘此時思惟しけるは今戶閉たれば出る路なし如女子の言に從へば戒業をすつと思ひ定め飲をこひ且女子の在ざる隙を伺ひ剃刀を出して自滅せりと是等の人は變化なきと論ずる人もあらんかなれども是乃其道厚く信じて死しても違へじと思ひこみたる是ぞ信心なるべし其信心と云にも正見に從はず邪見に從はば彼耶

蘇の徒の君命に背き身を熱湯爐炭に入れても翻さず國家を動搖さする如き惡信心にも陷るべし暹邏國の僧の風を聞に僧室の內水瓶の外物を儲へず日日人家に行き鉢を持して物を乞ふ有肉無肉を論せず人の施す物を得て喫す一手鉢を持し一手團扇を持す女子に逢ふ時は團扇を以て我面を掩ふと殊勝なる風なり

○地圖に二つあり平圖と圜圖と也圜圖をラントカアルトと云平圖をゼーカールトと云カアルトとは書たる者の惣名也今の世に陋しき者の博具にカルタと云ふ者あり是は耶蘇徒發向の節持來り愚民を欺きたぶらかせしものの今に遺れる也是外タバコ黴瘡などよからぬものを持來りて今の世まで毒を施せり其カルタと云はカールトの轉訛也本スペールカールトと云を上略せりスペールとはなぐさみもてあそびなど云ことと也さてラントと云は地と云ふこと也ゼーとは海と云ふ事也圜圖の用は地理を察するに在り平圖の用は海を知るにあり故にラントカアルトはこれを地平環中に置き經緯を三百六十（支那の法はすべて三百六十五有奇にわかつ西洋の法は只三百六十に分ち只日をはかるのみに三百六十五有奇を用ゆ）一棊枰の罫の如くにわりて觀るゼエカールトは海を主とし舟に乘るの用に儲けたれば此罫の上に羅針（ジシャク）のたて場をしめして海路に便す和漢羅經（ジシャク）の制は方を十二に分つ西洋は分つて三十二方とす如此ならざれば大洋中舟の向ふ所毫釐千里を誤まる其上風の來る所を詳にすること能はず夫西洋の人の船に乘るや一地球を以て海路とす故に天に於ては日月星辰の行度時節の蚤暮地に於ては東西南北度數の低昂萬國の形勢山川波濤の險夷迄我方寸にをさめて而して後舟に乘ることとなればここ等あたりの大坂通ひの川舟同前に乘るとは大に異なり松村君紀

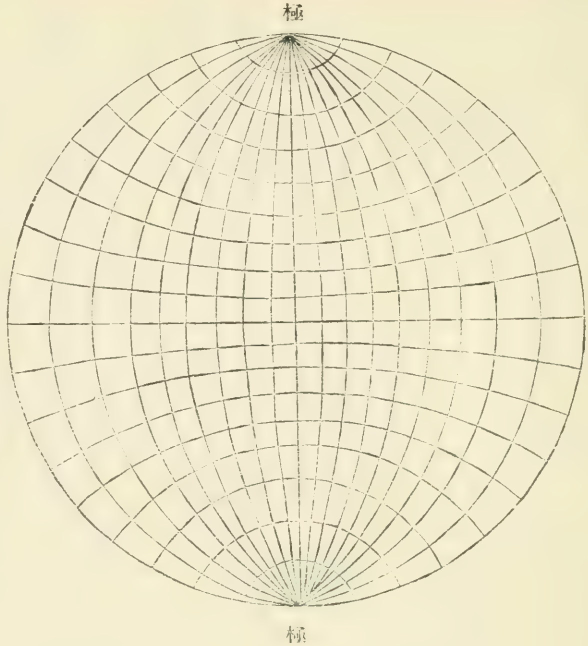
和蘭航海略記と云書を著して和蘭陀其本國の都城アムステダムを開帆し我長崎に至るの海路を書り其書に曰西船處處の海上に於てヲクタントガテドボーゴ等を以て日輪の



高度を測り黄道の距離と參考して北極の出地を知り吾船の所在赤道の何度なることを辨じて志す所の針路より進む時は退き退く時は其船を進しむ是舶師第一の學問にして其法別にあり今此に記せずとあり故に平儀は磁石のたて場を經緯の罫の外に引て其路を定む今一半の四半面を圖して示す

右の通りに天に察し地に測り方角を分つて舟に乘る也さきに四半面といへるは半面の四半面なれば畢竟八分一なりゼーカアルトの書を見たるに最初に總地圖を擧て奥に分圖あり其處處の山野眺望正斜の圖委しくあり山野眺望正斜の圖とは譬へば彼舟長崎に來らんとして二十里も隔て西面より望めば如此南面より望めば如此西南の隅より望めば如此漸くいく十里になり正斜の形勢如此五里になり正斜如此と萬國の港口すべて如此なり海潮各至る處其勢異なるも悉書わけ

たる精細天工を奪ふ様に覺ゆフラントカアルトは此の如くして地圖を此上に布けり



是又半面也天球も亦如此只地球は赤道の一帶を中線とし赤道の極を南北の兩極とす天球は黃道一帶を中線とし黃道の極を南北の極とする而已

歸山錄上終

歸山錄下

孖山　三浦晋　安貞　著

○渾地の六大洲と云は亞細亞、利未亞、歐邏巴、南亞墨利加、北亞墨利加、墨瓦臘泥加なりこれを地圖に考ふるに島にして海中に布散する者數多しといへども畢竟大壤は三つなり先北壤中壤南壤などとも謂べし亞細亞利未亞歐邏巴の三大洲は北の一壤也赤道の北にあり南亞墨利加北亞墨利加の二大洲は南北に横はつて中の一壤也南の大洲を墨瓦臘泥加と云亞墨利加の如きは彼細腰蜂の如く中絶なんとして僅につづきたれば南北に分てるもさもあるべし利未亞の一洲も地中海深く入こみてこれより分てるも然もあるべし亞細亞歐邏巴は何ゆへ其界を分ちたるか且大洲五の名目これを我邦の言飜せば何と云譯にや前よりしばしば人に問ひ此度も古人に問へども其故を知る人なし利未亞は誤にてアブリアよしと采覽異言に出たり吉雄は利未亞は古の稱にして今はアブリア亞夫利加と云といへり歐邏巴其呼國によつて異なりといへども阿蘭陀の呼はヱロッパ也ヱロッパと呼べりと謂り亞墨利加亞墨泥加とも云南壤は探索未審事蒼茫に屬す采覽異言に墨瓦臘尼加は小國にして人の性馴れ難しマゴラアンスと云といへり吉雄はマゴラアンスは南亞墨利加南邊の島といへりいづれ南壤は未詳湯若望渾地の圖などにも南壤風景不詳として大概は餘程ある心持に書けり晋輿地の學を好むに由て心に忘られず長崎に赴く前かた書を發して浪華の故人麻田剛立に問しに歸らざる內返書達す披いて是を見るに月食の闕るを見て南地大壤あるを知る是に於て西人をして美を天下擅にせざらしむ實に天下の奇才なる哉其書に云

南方の事ここ元にて眞の經圖微細を盡し候を見候是にも南方は大國と相見候湯若望崇禎曆書の圖も大國と見え候小圖ども日蝕を測り候處に景稿にて款を引き寫し見し處に食圖員圍に無之候日中の蝕の入にあらず地景南極下のさし候處並に蝕細蝕の中さしたる處なと地景日蝕分杪に於て數杪の增減をなし候甚歐西洋の說にて見來らず候懸測に見付候處十州の片圖直六部も見出候望遠鏡にて出候ここ西洋も亦見出し候半遠鏡の製に依て淺蔵も片圓門八考出し日月蝕分合擬に寫し申候具製又可申上候星宿海の水數千里東流仕候流候者は自然と下地に可有之候しかれば少々宛の句配にしても宿海の島は餘程高地に候半歟南地は餘程の大國に候得者是又中心は至高地には候半歟しかゝ地景に少少宛の中分出來候位に御座候御考御覧可被成候

外二答問の數條遺忘に備へんと左に記す

一、黄道極見出候て西暦を考候處西也に始て用候は依巳谷と申者にて暦法を出し實測密精しく御座候黄極は西人の極にしてとも赤の入赤極といゝ同じと相聞候萬事黄極にてかぞえし赤極はあまり不用候其後多祿某と申者出候九重天を定むともあり其後歌白濟といふ者出候九重天の上に又東西歲差南北歲差の二天をまし其に十一天と定めたり萬暦年間にあたり邇谷といふ人出て右の二天を用ひずと有之候

一、戊戌の歲之を日躔授時は箕の三度五十四分半貞享は二度五十五分時憲暦黄道箕一度八十六分餘也是は黄極より線を出たる度にて赤道に直

し候も弧呉弦にて無之ては相しれ不申候其内直し候て可申上候とかく直し候ても箕の二度三十一分位に相成可申愚測未決定候土州名家に尋候得共未一千測にも不滿候へばいかがとも難申由御座候當時頒曆しかと相しれ不申候

一、如仰閏月は無中氣と申事定說に候しかるに乙未十二月閏中氣有之候に付御不審御尤至極に候是は此日の合朔午の七刻に候（卽日食甚の時刻曆に出そろ）大寒は巳の六刻に候しかれば中氣は合朔已前に有之候故前月の中氣になり候と申事かと存候乍然是迄彼是箇樣成例覺え不申候一理御座候樣にて却而面白からず候尤一月は大小と分ち二十九日と三十日とに極め朔日の晨前夜半子の正刻晦日昏後夜半子の正刻に至つて三十日を大の月と定めたる物に候得ば午の七刻合朔なれば則朔日午の七刻にて御座候七刻前を前月とは申がたく候半歟時憲法も唯大小を用ひ　合朔を不用候しかし定氣日を用ひて恒氣日を不用故に乙未の年など十月の閏と成候

一、杵築の出地は三十三度八十五分大坂城中は三十五度二十九分にて御座候皆小拙數測をかさねこころみ候

一日一周地を本として諸圖算考仕候樣被仰下奉承知候小拙彙而持中曆に推考仕置候處悉捨候て未一決も不仕其故は古に試むべきものは春秋の三既食詩の十月之交耳に御座候乍去其加時も無之候得ば大方を合たる曆術を立置候　然處此度西洋曆に右實測加時迄御座候得ばこれを證として法を立候に又又色色不思議の妙も有之甚面白最中兩三年かかり居候近年の內決定仕候て早速可申上候古實測に合候術西洋にも未得之と相聞候西洋術にて推步仕

見候得は依巴谷の實測と暦法にて得る所と相差事日躔冬至天に後るる事三日令二刻弱合朔天に後るる事四刻弱授時貞享の如き皆合朔の天に差ふ事數十刻半日にも及候へば一向に天に不合と申ものに御座候しかる處小拙かねて立置候持中のまゝにて推步仕候處に冬至十刻程先だち合朔一刻餘を後れ候樣に相見是迄に符合近く候へば此上改め候も易く御座候何樣近年の內略成就仕候はゞ書に仕立可申候夫迄の壯健を祈申候

一、回回暦法明史に御座候是又西洋と同脈にて御座候小拙暦法も亦西法と同脈にて只支那の法のみ別流にて御座候實を得る者は必萬里同符と存候乍然西法皆日を用ひずして度を用ひ候交終日轉終日のごとき皆其一周を三百六十として十二宮に分け申候是等は處により持中は日を用ひ候て支那法に從ひ候も簡便に覺

一、西洋暦書に恒星の表有之全天の星南規內の星迄も一星宛盡黃道の經緯赤道の經緯星の大小迄一々はかり有之候小拙こゝもとにて大器を制し彼是測り見候處黃道經緯のごときは分秒も不差西法の精密恐入候

文長きを以て其他略之

○阿蘭陀の暦は西川如見の教童暦談にあり其法正月元日我冬至後十日に當る正月三十一日二月二十八日三月三十一日四月三十日五月三十一日六月三十日七月三十一日八月三十一日九月三十日十月三十一日十一月三十日十二月三十一日一歲三百六十五日四年めに一日の閏を二月に置て閏年とす三百六十六日也かくの如くなれば歲ごとに春分は三月二十一日秋分は九月二十四日夏至は六月二十二日冬至は十二月二十三日と當る月

の盈虚にはかかはらず是を以て我邦は閏を中氣なき月に定め西洋は四年に一日の閏を置く而して先秦は十月を歳首とする故にいつにても歳尾九月に閏を置くなり

○松村和蘭航海略記に曰亞夫利加洲の地方より七十里程西にカナーリセヱイラントと云島あり總て八島あり此島金銀其他の產物其豐饒の地なるが故に一名をゴロツキーヱイラントとも云漢に其義を譯して福島と云此八島の一テネリフハアと云島にヒイコと云へる世界第一の高山あり彼方度數の學者天下地圖をつくり東西の經度を定むるに此山を以て經度の始とすと云

○西洋はよく其地の大形を見て物に形容するにや同書に伊斯巴爾亞國の形は廣ごりたる牛皮に譬ふと又曰拂郎察國の渚と諳厄利亞との中間の峽を拂郎察人はマンセ阿蘭陀人はモウ舶師の言にカナーリと云譯しては袖と云義なりこの峽の形衣服の袖に似たる故に此名ありとぞ耕牛我に意太里亞國の圖を贈つて曰意太利亞の大形よく韈に似たり韈を呼んでラールスと云故に此國の總名をラールスと云

○左にしるせる萬國圖は西洋の湯若望の圖なり

○肅愼國の名は支那にも古より通じ我國の古の文にも往往出たれども今は其國の沙汰も無し昔在し國の今とて無るべき樣なし人に聞けども知れる人にもあはず先年葛陂に書を遺はしたる次にも此事に及びしが葛陂も程無く鬼錄に登られたれば裁復も無し其後浪華の中井履軒に白石の蝦夷志かりて不審なる事共問て遺はしける頃かなたより蝦夷の辯を書て贈られたり甚痛快を覺ゆ其辨に曰

今人所稱蝦夷即古之肅愼國矣。非蝦夷蝦夷

本在吾域中。而今亡矣乃妄指海北之國爲蝦夷。是誣之甚者。今松前一縣。斗入肅愼之地。謂之拓斥疆壤則可謂之吾邦域則不可肅愼漢謂之挹婁元魏謂之勿吉唐謂之靺鞨五代始稱女眞。後避契丹諱更爲女直。吾國史仍以肅愼稱之讀爲安史法世征蝦夷之後屢與交兵。或遣軍襲其國。以絕蝦夷外援若齊明帝末年荐與舟師奉蝦夷伐肅愼史筆歷歷可徵奧壺碑記靺鞨道里又記蝦夷道里則知弗若今人之憒憒也今海商往來肅愼者稱爲安幾阿邇卽安史法世之轉音按後漢東夷傳曰挹婁國。古肅愼之國也。在夫餘東北千餘里東濱大海。南與北沃沮接不知其北所極。善射發入人目弓長四尺。力如弩矢用楛。長一尺八寸青石爲鏃。鏃皆施毒中人卽死。又按通典曰。蝦夷國。海島中小國也。其使鬚長四尺。尤善弓矢唐顯慶四年。隨倭國使人入朝。漢人斥吾邦爲海島。曰海島中小國也。顯慶四年。當吾　齊明帝五年國史載。是歲遣使聘唐。以陸奧蝦夷男女二人往。註。唐主問蝦夷在何方。使人對曰在東北。蝦夷幾種對曰三種遠者爲都加留。次生蝦夷近者熟蝦夷今所將者爲熟蝦夷蝦夷遠者。莫遠於都加留則固不出吾邦域也。海外安得有蝦夷焉哉。

北沃沮何の地か未知といへども肅愼の地無きに依て思へば蝦夷と云者肅愼なるべし是等の紛紛蝦夷の稱明ならざるによるとみえたり蝦夷蝦蛦とも書たり

齊明紀阿倍臣簡集飽田渟代津輕膽振鉏蝦蛦。率船師一百八十艘。至肉入籠。時問菟蝦夷。膽鹿島。菟穗名二人進曰可以後方羊蹄爲政所焉。隨膽鹿島等語置郡領。而歸。註肉入籠此云之之梨姑問菟此云塗毗宇。菟穗名此云宇保那後方羊蹄此云斯梨蔽之。政所蓋蝦蛦郡乎。此云と云は漢人梵語を譯するの言也後方羊蹄今いふ蝦夷にある由蝦夷志にあり其上蝦夷志を考るに彼國東部西部

北部あり南部は我國にあり彼是相考るに蝦蛦の蝦はヱビと云字にてビミは通音ゾジ又通じス亦通ず故に蘇我入鹿が父は蝦夷と書てヱミジと呼べりヱミジヱビス一音の轉にして薩摩の隼人あるが如し國に別はなけれども人の種類に異ある事春秋列國の中に戎子あるが如し我聞く吉利支丹御禁止の時此方の人或は逐れ或は遁れ呂宋國には今の世にも聚落あり我國の風俗を改めず呂宋人と衣服言語を別にして其國に居ると也今の世は如何あるや申叔舟の海東諸國記を見るに其頃は日本人餘程朝鮮に住たりと見ゆ蝦夷はヱビスにてヱビと云言に蝦の字を假りてしるせる計りにて此種類東國海外の地にあり九州の隼人も此一種の異族ありしと見ゆ故同記の内に蝦夷隼人率衆内屬詣闕朝獻とあり然れば海の北は肅愼海の南は日本にして此一種のヱビスは海の南北に據有したる故道奥(ミチノクノ)蝦夷とも越(コシノ)蝦夷とも問菟(トヒウ)の蝦夷とも云なるべし畢竟ヱゾを地名と見たる故六つかしく成れり又肅愼の地にもせよヱゾ居る故終に其地に名づけしも苦しからじと思はるる也

○晋西洋の萬國圖を見るに朝鮮より地勢東に走り日本盡る處の北に入つて盡き其間にヱゾの地あるを見て疑を含む事久しく其故は日本北濱の國風波に漂蕩せられ西北洋中に往來する者北を塞ける舟あれば必其地に漂著する者あるべき也今東南西海に漂ふもの多く漂着する地あり北海の漂船北にある國に至らざる豈怪しからずや蝦夷志を讀むに至て西人地理の圖猶未盡さざるを知る蝦夷志によるに朝鮮の東末幾して海となり迤(ナヽメ)に蝦夷の地に接す蝦夷の地は諸島陸續として東北の諸島亞墨利加の地に接す故北海漂流の舟運日昏濛たる中に至る者あり西圖の

誤をただすべし
○回回ウイウイと覺えたりしが吾人はホイホイといへり圖によるに北高海の濱の國也北高海は海と通ずる者に非ずして其水鹹し西人シシリアと云
○西土の教大槩三つと見えたり一は回回これは隋の頃已に支那に沙汰ありマゴメツテと云ふ人建立の法也西邊は耶蘇東のかたにヤウト有りヤウドと耶蘇とは其徒于今中よからずと也今此方に用ゆるハリツケと云は耶蘇かうけし刑也耶蘇の教大に盛なりしかばヤウトの徒是を惡み捉ゑてハリツケにかけしと也
○阿蘭陀の書阿蘭陀語也といへども往往ラテン語を雜へたるによりラテン語に通せざれば蠻書讀むべからずラテン語は雅にして簡なり故に通じ難し我其故を松村に問ふ松村曰和語中に漢語を雜へ用ふるが如し

○いつの比かもはや年久しき前の事の樣に思る清人九つになる童子を携え來れり童子の詩に

夢裏分明還二故鄕一　雙親向レ我問二扶桑一
華鯨樓上一聲響　撫レ枕猶疑在二大唐一

古來人口に在る詩也
○翠崖詩を好む賜谷の門人也賜谷は高君秉也賜谷清風を好む故に翠崖も亦清詩を好む几上に清四大家集（王元禎施愚山朱）あり晋其趣を問ふ清詩唐による宋に東坡をとる明に高季廸をとる七子中謝榛穩なり只明人佶屈只意を字句の間に刻む百年萬里紫氣黃金人を送れば豐城の劍僧に對すれば衣裏の珠幾首を重ねても畢竟一意富貴壯麗を好む故に窮山荒野にも冠冕黼黻を以て臨む是清人の厭ふ處也故に舊套の拘拘として株を守るは清人の好まざる所也
○清人程赤城に扇面の書を賴みけるに扇の

上をとめたる箔紙をば別に紙につつみ上に締の字を書て返したり

○西洋の畫見て解し難き事のみ多し風吹く所の圖は皆雲間に人面を畫き其口より風を吹出す樣に書きたり是風師雷公などの說の類にやと松村に問けるは西洋鬼神の說ありや曰專鬼神を尊む曰其圖中人の頭のみ有て風を起す所謂風師の類か松村曰しからず彼國船にのり交易して天下に至らざる所なし船の入用は風より急なるはなし風に依舟を行るの道見頭僅に違へば其失我志す處を失す故に針盤方を三十二に分つ故に風を畫くに三十二の方角を分つ也其三十二の方角は東西南北を以て綱とす是をヲートフトビントと云ヲートフトとは頭の義也ビントとは風也東西南北四つの頭の風を立て其一方を又八方となす也故にヲートフトビント譯して四頭風と云べし東をアフスト西をウエスト南をソイド北をノールトと云これを頭と云より人頭を畫き其方角を分ちさす也といへり又いろいろの事のなる處に雲間より大なる手を出して所作するあり造化の所作にてあるや裸體の人羽翼を生じ虛空を飛行する圖あり智の行届く所を示したるなるべし人面のみ畫けるは其明を示すと云人あり滿天の星象を嚴然とさも有るべき樣に畫き彩色まで加へたるは詼諧に近し日月五星より諸天に至つて皆神象を畫きたるは通天下鬼神の情狀を知らざる窺窬に起る事にして西洋人の智にしても此一關は打徹せず此一關を打徹せざる故天主と云敎も立ち愚民をして本來の面目を失はしめ其毒引て我日出の良民に及ばしむ彼もし其愚民を惑はすの神道を施さず上にして天文下にして地理中にして人事則を天地にとり孝悌忠信以て人を導かば誰か敢て是を禦がん此左道の爲に其よき者

も亦擁塞すること久し國家一旦其道を禁ずといへども年久しく人の耳目已に改まるを待て禁を開て其行ふべき者を行ふ火器の如きは其利顯然たるを以て始より禁なし其書世に施すことを得て天文地理人身の臟腑筋骨の微も人よくこれを諳ずることを得て天地を掌中の菴摩羅菓を見るが如くならしむ亦愉快ならずや只烟草飲とならず食とならず人をして朝暮に相思はしめて動すれば火を人家に引とカルタ人利を思ふの心を長じ養はしむと黴瘡人の筋骨に淫し終に父母の遺體を闕き人をして人と交はることを得ざらしむるの三害は天地と共に長く傳ふべし烟草寛永の頃嚴禁有しかどもやまずカルタは今に禁あれども絶ず身を修め德を愼むの君子豈禁めざらんや

○松村曰北高海はマーレデサマラ榮覽異言の譯誤れり

○西書中日蝕の圖



○長崎逗留の內に某の町に娵を盜みたりとて罵しりあへり如何なる事にやと問ふに長崎の風俗に下賤の者は妻をもち其家に娵とらんと思ふに其町の若き者にたのめば意得て其町此町見回はりこれぞと志したるは其家の娘妹又は下女にても夜若者ども偕に駕籠を用意し隱し置き窺ふ也長崎は夜も女の出て往來する處也其志す女隣ありき町遣ひにても出るを伺ひ引捉ゑ取て駕籠の中に押

籠みやりのばして跡に殘れる者某町の某の女子は某の町の某の妻に盗みたりと高聲に呼ばりてさるこゝに於て其町の若者それ逝すなと追かけ其家に至れば兼て奪ひ得たる惡少年ども手をつき膝を折り色々わび事し手を引き腰を推し座に上げ酒をすゝめ肴吸物など種々に馳走す始は荒たる氣色なるもいつしか酒に窕(クツロ)ぎさしたりをさゑたり醉を盡して歸る也女子決して處るまじと思ひ籠たるは夫家の食を食はず是は父母の家より食を給す右の變にあひても處の風なれば其父母もそれにてすます也又家貧しく嫁すべき支度もならざる人は雙方合點の上なるもある由也尤人毎に然あるには非ず稀には白晝にも有る由也又見咎められ駕籠打碎かれ人も打たゝかるゝ事も有りとぞすべて長崎末々の者は氣悍にして人を陵ぐ動すれば庖丁をつとり人を斬りはつる也よからぬ風也

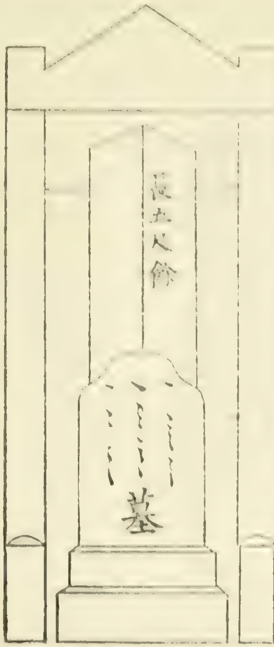
女子右の濫妨をふせぐとて女子は早く齒を染る也長崎は餘所と異なる事多し八朔の禮他の節より重し然ありて其八朔の禮其日に限ることにあらず是歲八朔の禮とて淸人阿蘭陀人鎭臺に出しは九月十五日也餘の沙汰は聞ず阿蘭陀代官高木作右衛門の方へ八朔の賀儀定額砂糖九千九百六十三斤と也是一長崎は婦人年老ても眉を拂はず是二饗飲卓子を用ひ酒コツプを用ふ是三卓子は一脚に六人を饗す可し始め中に鉢を置く水煮鉢と云其次は大なる茶碗の樣なる鉢なりドンブリと云四隅に皿に汁なきものを盛り出す小菜と云ドンブリ六碗八碗十二碗に至るを盛膳とすその時は八菜もあり初ドンブリに味噌汁出ず味噌汁出でては後は一ドンブリにてしまふもの也本勸酒のものにて本法なれば味噌汁の時飯出る也八碗十二碗など云時は味噌汁の前指味等出すと也

○長崎役所の書法ツウジの字猜には通事と書く阿蘭陀には通詞と書く

○晋長崎にて小比賀伯麟子を主とす宅八百屋町にあり常に良介と稱す代官高木氏の佐なり讃岐の人なり公官に佐として佐渡の金山にあり因て金山の物語共聞けり其金を掘るものを大工と云其大工と云者は諸國無賴亡命の狡兒所謂死生しらずのもの共也其故如何となれば金穴に入る者は壽六七年に過ず金穴の毒に中る故毒發して死する也此死は覺悟の前にて行也故に餘命は保たずと定めたる故酒肉は勿論榮耀は望の儘なり金山の入口をマブと云其さきをシキと云砂金と餘の金とは出處別也何れの金も銅氣あり金は銅を去り銀を去りて精金を得る也ほり出したる石の白きわきに黑き處あり是より採る者也金も造り出せる始は色好らず其後藥などとあてゝかくなる也山より出る所年々同じからずといへども大槩金壹萬兩餘銀六七百貫目ばかり出る也偖金の次第は慶長金を百兩の位と定め次第に劣りて三拾兩まで有り其位甚見分け難し此故に三拾兩より百兩までの金を物に繫ぎ試金石(シケイシ)につけくらべて次第を分つこれを筋(スヂ)金と云此故に佐渡にて造り出せる金には一兩と云字のわきに筋の字の刻印あり此あたりにては餘り筋金は見ずといへり伯麟本州多田氏に從學して算術に善し其自著せる勾股便蒙あり序を予に請ふ予序して曰く(序文ハ文集ニアリ茲ニ略ス)

○本邦は古より座棺也漢土は于今臥棺也然るに我國東郡田深と云所の北の海邊に古墓壘々としてあり何れの世の物なるを知らず已にすかれて田となるもあり皆臥棺と見えて長ざきにし槨の代りには閣を石にて疊み朱など入れたるにや赤き土なども少し宛つきて見ゆるもある上は土を高く封じて實に

上陵田也異國の人拵帶りし跡にや又昔かかる例もありしにやしれず長崎寺院の後は墓所也田詰い人の墳墓とも多し書に見ゑ此方にて好事の人の彼方の制を考へてしたるには似ず人に問へば漢土の製と云人もあり長崎の寺僧金をとりよき程にしたりと云人もあり未聞達者之決姑俟他日



兩頭には請皇とも國請とも又は圓邑などゝも之墓とも之の字略したるも前に水奠るべき池花立つべき穴有るも無きも右には彼國年號左は月日何月吉日立と多くあり孝子と書たるは無し碑銘ある者なし待贈の二字あるもあり木行は金字にてわきは朱字なる多し碑頭は



如此いろいろあり又和人の用ふるごとく圖如此又石のほこらの様なるもあり

○歸途唐津の方に出て鏡宮に詣る殿前に宣旨を掛けたり其文如左

宗源　宣示

鏡尊廟宮 肥前國松浦郡

宣授大明神號者

右依

今上皇帝　聖勅　神宣

御表之神璽如件
天文十二年六月廿日神部任沒ノ宿禰本
神祇道ノ管領長上卜部ノ朝臣
とあり任沒の字讀めず社僧に逢てとへばコレモチと讀む由也大宰小貳藤原廣嗣の社も此境内に在り此社地の後に寺澤志摩守の墓あり中に前志州大守休甫宗可居士兩脇に寛永十年癸酉孟夏十一日とあり手を以てはかり見るに下基三間四面其上一丈四面下基二尺其上二尺五寸穗の高一丈二尺周圍五尺四面蓋雨の滴より考れば一丈四面に僚なり高さは五尺も有るべし下基より蓋まで一丈七尺も有るべし大なる墓也長崎春德寺の後に東海氏の墳墓あり結構壯麗言べからず庶人中祖龍とも云べし慶安年中の營なり
○高木氏の宅に畜へる鳥は　白鷴　孔雀　駝鳥　尾長雉　文鳥　相思鳥　喜雀　インコ阿蘭陀鳩　テウセウ鳩　ジウシバイ

又水犬ありよく水に沒して物をとる公儀より阿蘭陀へ仰付られ取よせ給ひしハルシヤ國の馬厩に繫ぎたり一は五尺三寸八分一は五尺一寸八分其馬の飼料ハルシヤより持渡りしを見るに綠豆黍小麥糀は强て異なる事もなし豆は大に形異なり一種ボヲンと云穀あり裸麥の樣にて小さし稗の樣にて大し厩の邊に生たるを見れば稗の苗にも似たり實を請て人にも分ち與ゑ置り生殖しては人の益に成る物にや
○吉雄耕牛の家にロヤールと云獸を畜り銅鋼の内に居れり傍に藁にてまろき巢を作りてあり明を嫌ひ暗を好む獸なり晝は終日巢の中に入りて出ず暗夜中には巢を出でゝ遊ぶを燭をともして見る也獸つくづくと燭の明を見て又隅の暗き方にかゞみ伏す也猫程有りて全體面部手足獼猴の如し面の色白し
○長崎に公義の藥園あり甚寥落たり唯黄

荊樹　使君子　益智　草菓　黄芩　楓樹
天門冬　大葉麥門冬　何首烏　杜仲　茴
桂　白蘞　烏藥　枳殻　山漆　佛手柑
方竹　大明竹　對青竹　等あるを見る

○象は大獸也象牙の大なる事人知れり吉雄亭にて象齒を見るに齒の根の方は鋸にて挽て取たるが長さ六寸餘横五寸甚重し

○吉雄曰アンテスハスモーテイカモト小兒つり氣の藥なりしが其用廣く成りて穩結毒等の筋など釣りつけたる類によし疥瘡によし三分宛一日四度白湯にて用ゆもと毒藥にて製したる者なれども瞑眩の患なし

○同人曰蠶豆黑く炒り毎朝三五椀を喫すよく濕を去り小便を利す

○琉球は舜天王一統して其舜天王は鎭西八郎爲朝の子なる由白石の五事略に詳に說けり我國に近き風にて言語も粗通し我國字をも用ひ馴れたる山也先年伊勢の僧安樂坊薩摩より歸る時茅屋に十餘日留りし頃琉球人の歌もち來りしを書とめたるを書を檢するとて反故堆中に得て左に記す

尚（シヤウ）朝孝

のどけしな民の烟に立そへて
霞むうるまの千代のはつ春

尚朝齊

白妙の雪ぞかさねてよもの山
霞の衣はるはきに見

惣慶親雲上

鶯

曙やゆふべにきくも百鳥の
聲にまさりてあかぬ鶯

まかひの親方北京へ行て

誰も見よ今ぞまことの唐錦
きくの都を立出る袖

遊女の歌

月やあらぬ春やむかしの春春（る）て（か）あやすか
かはりやすきは人の心

さあかたりたやかたりたや月の山端に
かゝる迄さおかたりたや
風や雲つれていきよるいきなるきもちしんなりきや
げさわん我はにやむそなしみの人むしまじきりつれてゆ
かぬしんきゑ

○筑前怡土郡高持村に藤架あり處にて名高かき藤なり初冬の頃雷山に登りこゝにも立寄りて見たり冬の藤見は我ながら珍らしく覺えて一絶を題せり

不問花時節不知花主人徒尋花所在想像憶餘春

○賀來玉淵は名は元龍字は子登中津豊後町に住す我四十年來の相識也將に西遊せんとして中津に留まる事數日因て共に語る玉淵和書を好む且當世俗間の流布の書に及ぶ眼ある人は魚眼を珠に混ぜざれども知ざる人は燕石を以て連城の珍に當つ今僞書多く出で蒙者を誤り其日月を費さしめ其識鑒を誤らしむ當代諸家の事故興廢を説くの書慶安太平記殺報轉輪など云數至る處の人掌を抵て談ず頗聞くに厭く近頃又雙島志なる者有て出づ武藏岩流の始末を記せり我因て其實説を問ふ玉淵微笑して廣壽山法雲和尚の撰する武藏の碑文を出して示す予悦んで思ふ此一隅を反して三隅を知らば童蒙野史を讀む者取舍する所を知て學道の葛藤に惑はざらんと取て書尾に記す

兵法天下無雙播州赤松末流新色武藏玄信
二天居士碑

正保二乙酉暦四月十九日於肥後熊本卒于時承應三甲午四月十九日孝子謹建焉

臨機應變者良將之達道也講武習兵者軍旅之用事也遊心於文武之門舞手於兵術之場而逞名譽人者其誰也播州英産赤松之末葉新色之後裔武藏玄信號二天想夫天資曠達不拘細行蓋斯其人乎爲二刀兵法之元祖也

父號新色無二。爲十手之家。武藏受家業。朝鑽暮研。思惟考索。灼知十手利倍千萬。其以夥矣。雖然十手非常用之器。二刀是腰間之具。乃以二刀爲十手。理其德無違。故改十手爲二刀之家。誠舞劍之精選也。或飛眞劍。或投木戟。比者走者。不能逃避。其勢恰如發强弩。百發百中。養由無踰于斯也。夫惟得兵術於手。彰勇功於身。方年十三而始於播州與新當流有馬喜兵衞者進而決雌雄。忽得勝利。十六歲春。到但馬國有大力量兵術人名秋山者。亦決勝負反掌之間打殺其人。芳聲滿街。後到京師。有扶桑第一兵術吉岡者。請決雌雄。彼家之嗣淸十郎。於洛外蓮臺野爭龍虎威。雖決勝負。觸木刄之一擊吉岡倒臥于眼前而息絕。預依有一擊之諾。輔弼命根矣。彼門生等。助乘板上去。藥治溫湯而漸復。遂弃兵術。薙髮畢。然而吉岡傳七郎。亦出洛外決雌雄。傳七郎。袖五尺餘木及來。武藏臨其機奪彼木及擊之。伏地立死。吉岡門生含寃。密語曰。彼非以兵術之妙。所可敵對。乃吉岡又七郎與門生數百人。運籌於帷幕。寄事兵術會。于洛外下松邊。以兵杖弓箭。忽欲害之。武藏平素有知機之才。察非義之働。竊謂吾門生曰。備等爲傍人。速退。縱怨敵成群成隊。於我視之如浮雲。何畏之有。散衆敵也。似走狗之追猛獸。震威而歸。洛陽人僉感嘆。勇勢智謀。以一人敵萬人者。實兵家妙法也。先是吉岡代々爲　公方之師範。有扶桑第一兵法術者之號。當靈陽院義照公之時。召新色無二。與吉岡決兵術勝負。限以三矣。吉岡一獲利。新色二決勝。於是賜新色無二以日下無雙之號。故武藏到雒陜與吉岡數決勝負。遂吉岡兵法泯絕矣。爰有兵術達人名巖流者。求與武藏決勝負。武藏曰。備揮白及盡其妙。我提木戟顯此秘。堅結漆約。長門豐前之際。海中有島。謂舟島。兩雄相會。巖流手三尺餘白及來。不顧命盡術。武藏以木及一擊殺之。電光猶遲。故舟島曰巖流島。凡從十三至壯

年兵術勝負六十餘場無一不勝且定云不打敵眉八字之間不取勝每不違其的矣自古決兵術之雌雄人不知其數幾千萬雖然於都鄙向英雄豪傑前打殺人古今不知其名唱武藏一人耳兵術威名遍四方其譽也不絶古老口令人銘肝誠奇哉妙哉力量雄玄異於世武藏常云兵術手熟心得一毫無私則恐於戰場領大軍亦治國豈難矣豐臣太閤嬖臣石田治部少輔謀叛之時或於攝州大阪秀頼公兵亂之時武藏勇功佳名縦有海之口溪之舌寧說盡簡略不記之加旃無不通禮樂射御書數之文況小藝功業殆無爲而無不爲者歟蓋大丈夫之一體也於肥之後州卒時自書天仰實相圓滿之兵法逝去不絶字以遺言爲遺像焉孝子立碑以傳于不朽令後人見嗚呼偉哉

○西洋惟薄治まらざるの刑男妻あり女夫無ければ女罪輕くして男罪重し女夫あり男妻なければ女罪重く男罪輕し男妻を出せば夫の身帯を半を分ち與ふ

○眞野英伯曰當今清の乾隆帝四庫全書を上木せらるるの沙汰ありと蓋四庫は經史子集也

○予此旅行すべて十二人兒鶴をも携へたり内に阿州麻植圓通寺の徒元微と云あり其物語に阿州川田村といへる處の大庄屋に住友喜七郎と云あり其從弟何某なる者古物店にて至つてふるく煤氣たる瓢の胴金入て眞黒なるを得ならずや思ひけん四十文出して買ひよくよく洗ひすゝぎ見れば胴金は銀にして金の毛ほりに一休とありて

酒のみのこしにふらふらあふなひそ
床にかゝりて花のやとせよ

○此僧の舅に山本文安とて醫を業として長崎に在しが平生觀物に疑團ある人故條理の天地に有る事を得て盃酒の間甚相歡しきある時譚醫事に及びし時自按腹自得の驗ある

處後來試よとて試りけるを其儘に書つけたり其言に曰鳩尾下にかたき物あるは氣聚也中脘の位深く按へて硬きは食滯也上に浮みて軟にあるは多くは憂思念慮の結ぶ也臍の兩脇は疝也さて右の不容のあたりを按へ動氣三日以上散せざるは死症決す又鳩尾より兩傍肋肋相接する處を腹の方より肋に循ひ其肋と肋と相接するの際梅核などの如きものを生じ風も引ずどこ惡しきとも覺えずふらふらとして此物を按しても強て痛むにもあらず眞頭と思ふ處を按せば痛む類三五年を經て勞を發し骨蒸發熱等となり治すべからず畢竟内には此もの潰え氣血潰亂したる上表に發する也と云り予も腹部に心を用ゆここに記して他日の試檢を待つ

○明和二年甲申十月筑前志摩郡韓泊（カラトマリ）浦十右衛門船、奥州箒浦より鹿島洋を過んとして大風にあひ葛刺合牟（カラカン）につき蘇祿にいたり終に淳泥（ホルニテ）の港口蠻約刺秣辛（ハンヤルマツシン）に蒋の賈客の僑居するに賣られたり清人之を憐み阿蘭陀人と議り甲必丹（カピタン）烏意列摸歇伊篤と云者に從ひ六年を經て長崎に回る路咬喇吧（カラツパ）を經る時錄錢五文にて木綿二匹紬一匹を買ひ歸裝をせしと也日本は金銀多き故物價高し今長崎にて公儀よりの直段は砂糖斤にて二三分今年占城（チヤンパン）より持渡る所の鮫千七百枚一枚の價三匁五分と聞けり

○道小なるに非ず人これを小にする也世の學者門戶を立て區域を畫するより大にしては儒とも佛とも道とも神とも分れ佛中には顯と云密と云禪と云淨土と云一向と云法華と云儒には朱子王陽明徂徠仁齋など枝又枝を生じ派又派を分つ廣き天地の誰惜む者世界をへりきりて人に與ふ柳をば綠にさせて其綠を愛し桃をば紅にさかせて其紅を愛する時は火の燃えて上るも水のぬれて下るも

皆用をなす也或人手習も机離れせざる内は不自由也學文も　離れ難き物といへり書を讀めば書に泥み門によれば門に泥む机離れせんとならば天地に達觀すべし天地は容れて遺さぬ者也門戸を張る上には我學は禮義に從ふ心を論ずるは彼が學也理を談ずるは古にあらずなど夫を避る事ありてへりきり學問となれり天地よりして觀る時は理を論ずるも一學問心を修するも一學問楓葉蘆花何れか秋の色ならざらん世に處するに大同と各好尙とを知らざれば泥み出來りて行ひ難し古人人心不同如面といへり千人に千樣の面萬人に萬樣の面なれば淸もあるべし和も有るべし任も有るべしよく座禪して見性したりとて我道にあらずとて惡み窮理は古聖の說にあらずとて嫌ふ姑く是を我學ぶ所に非ず我意にあらずとせんは勝手次第也古聖の說にあらずとも天地に並べて見るべき

也只大同とは孝悌忠信禮義廉耻これを離れ天地の化育を害し王者安民の道に害ある者是惡むべき者也又今の學者かづら學を好む人あり其葛と云はたとへば朱子の新註を見付たれば我も我もとかづらを出してまくまきつく所を見て本木を見る本木倒るればかづらも亦倒る是に於て今の學文は誰にてもちと孤立する者あらば我も我もとかづらを出して卷く也得失は姑くかづらと成らんよりは卷かるる木の勝なるべし今かく言ふもかづらなるべしと我もをかしく思ひ侍りぬ右いう如く宋儒窮理の學を唱ひしより今に至つてよる者多し窮理の字本文の外に學の基を立たるを堯舜已來の法と言んも誣たる也窮理を務めん事は天地の大觀に於ては一助あるべし松村と西洋の事を語るに因て松村曰西洋の學畢竟窮理の學也務めて物の性を知るに在り性を知るにて能物を成すと

いへり此窮理の字も性の字も宋儒の所謂と同じきにも非ざれども西洋の學は能くものの理を推し極め物の性を盡す能く道を小にせず物を天地の如く容れ天地に達觀せんとならば能く天地の條理をしり是非を大同上に分ち各好尙を海の如く容るべし是乃天地を師とする也

匆匆草草一寫而已免園冊子兒輩勿下爲二成書一以論レ之

歸山錄下畢

名字私議

豐 二子山 三浦晉 安鼎 著

山人名ハ晉寸寸武ト訓ズ字ハ安某安ノ字ノ下ノ一字 幕府 公子ノ假名タルニヨリテ令有テ禁ズ噫名ハ先考ノ賜フ所字ハ先師ノ命ズル所師父已ニ世ヲスツ曲禮ニ若子已ニ孤ナレバ名ヲ更メズトイヘリ父然レバ師モ亦宜シク然ルベシ晉ガ初心拳拳トシテ服膺シテ身ヲ沒ルマデ奉ゼントス然ルニ今 公朝ノ爲ニ避ベキニアフ心ニ兩ナガラ失セザランコトヲ思フ字ノ近キ者ヲ擇ブニ鼎ノ字ニ如ハナシ竊ニ聞ク國ノ執法音訓近キ者ヲ併セ諱ムト依テ又竊ニ思フ執法ハ世ニ諱ム者也文ニ臨ンデ嫌名ヲ諱ム事、禮ニ於テコレナケレバ安鼎ヲ以テ翰墨ノ間ニ通ジ父ヨリ命ゼラル、ノ晉ヲ以テ稱セン冀クハ 上 公法ヲ廢セズ下師父ノ命ヲ棄ザルニ近カランカト之ヲ友生ニ議ル友生非トシテ曰寸寸武頗流俗ノ稱ニ異リ俗耳ニ親シカラズ唯世ノマヽニ從ヒテ異ラザランコソ愛（メデ）タカルベケレ奇異ヲ好ムベカラズト山人曰予ガハカル所ノ者ハ自決セズ斷ヲ子ニトラントス然ルニ子師父ノ事ヲ置テ流俗ニ異リ奇異ヲ好ムベカラズト云ハ鄙吏ニ於テ未穩ナラザル所アリ流俗ニ希ナリトハ云ベシ無ニハアラズ今此擧已事ヲ得ズシテナセバ奇異ヲ好ムニハアラズ姑流俗ヲ以テ言トセズトモ義理上ニ就テ說ケ麻冕ハ禮也純（イト）ハ儉也豐儉義ニ害ナケレバ孔子衆ニ違ヒ給ハズ堂下ニ拜スルハ禮ナリ當時ノ堂上ニ拜スルバ泰レル也義ニ害アレバ衆ニ違フコトヲ辭シ給ハズ今義理ヲステヽ事ヲ可否セバ何ヲ表據トセン大槩人ノ稱四ヲ以テス四トハ姓ト氏ト名ト字トナリソノ外ニ謚ト號トアリ日本ニハ字ナシ近來假名ト云者アリ假名ハ實名ニ對シテ

云ナルベシ昔ハ人臣名ノ外ニ尸(カバネ)ト云者アリ尸ヲモ姓トモイヘドモ姓トハ各別ナルモノ也今ハ朝臣ノミ衆ハ知レル樣ニナレリサテ姓氏ノ事周已前ハ別義アレドモ周已後ノ制姓トハ始メテ出ル所也氏トハ姓ヨリ分ルル者也姓ハ氏ヲ統ル者ナレバ萬古不易也氏ハ姓ノ分ニシテ各相分ツ時ハ氏猶姓ノ如シ譬バ姓ハ猶木ノ幹ノ如ク氏ハ猶木ノ枝ノ如シ幹ヨリシテ枝ヲミレバ幹枝ハ各別ナレドモ枝ノ身ニナリテ見レバ枝即幹ナルガ如シ譬ハ舜ノ後ノ嬀姓陳氏トナリ田氏トナリ陸氏トナリテ陸ハ田ニアラズ田陳ニアラズトイヘドモ嬀ナルコトハ一ナルガ如シ族ハ氏ノ別稱俗ニハ苗字ト云本邦ノ姓甚多シ　允恭天皇姓氏ノ濫ヲ歎キ給ヒ改定シ給ヒテ其後萬多親王ノ姓氏錄アリ近古世戰國ニ赴キ稽紳衰廢シ士庶ニ學絶エ唯僧徒ノミ書籍ヲモ見ケル程ニ士庶ノ類皆僧家ノ說ノミ聞慣ヘリサレバ天竺ニ刹帝利、婆羅門、毘舍、首陀、ノ四姓アリコノ姓ト云ハ種族ノ事ニシテ各別ノ義ナリ然ルヲイツシカ聞馴テ我國モ源平藤橘ノ著姓ヲミテ彼此混ジテ四姓アル樣ニ覺エ他姓ノ人モ本姓ヲバ探題エ失ヒテ源平藤橘ニ託スル樣ニナレリ其後各地ノヨル處ヲ姓ノ上ニ稱シケリ其頃マデハ未コレヲ氏族トスルニモアラズ故ニ父ヲ北條ト云子ヲ江間ト云父ヲ和田ト云子ヲ朝比奈ト云フガ如シ夫ヨリ稍ク世變ジ何ノ地ニヨリテモ父祖ノ稱スル地名ヲ呼程ニ地ト稱ト離レ氏族トナリヌ畢竟彼方ノ望ト云樣ナル者氏トナリ姓ハカクレヌ今族ニ非ザレバ繁キヲ紀シ難ク半ハサカ上ッテ姓尋ネ難ク半ハ彼此雜ハッテ姓混ズレバ今族猶昔ノ姓ノ如シ我　天子ハ天孫相繼デ他ニ對スル事無ケレバ姓無シ我國ノ人隋ニユキケルニ我　天子ノ姓ヲ問ケレバ天(アメ)ト云ケル善キ對ナリ隋人會セズ

シテ日本ノ王姓ハ阿毎（アメ）トイヘリ唯　清和天皇　御諱ノ下ニ仁（ヒト）ノ字ヲ用ヒ給ヒテヨリ近世大方仁ノ字ヲツキ給ヘドモ急度キハマレル例トモミエ侍ラズ然ウシテ公家ハ今ニ姓濫レズ二條近衛ナド家ノ號有テ族ヲ分ツトイヘドモ氏族ノ稱ニモアラズ武家以下ハ或ハ姓ハ失ヒシ程ニ父祖ノヨレル地名族號トナレリココニ於テ子孫又地ニ從テ號ヲ立レバ立ル者更ル者トナリテ轉屢カフル者ノ樣ニナリ行ヌココニ於テ氏族ヲ輕ク思フ氏族ヲ輕ク思フ程ニ姓ヲモ輕ク思ウテ甚愚ナル人ハ昨日和田ヲ名乘レバ平ト稱シ今日武田ト改レバ源ニナレリト思フ輩モアリ今ノ氏ハ昔ノ姓ノ如クナレバ隨分固ク相守リ子孫ニ傳フベシ姓ノ知レザル人ハ苗字ヲ以テ姓ヲ附會スベカラズ然ルヲ近世族號ヲ輕ンズル事玩物ノ如シ朝ニ變ジ夕ニ更メ或ハ兄弟其稱ヲ分チ或ハ內ヲステテ外家（ハハカタ）ニ從フ族ヲ

稱スルトイヘドモ族稱ノ用ヲ失ヘリ故ニ傍ヨリ聞テハ兄弟モ內外モ分ラズ人倫ノ亂レ是ヨリ大ナルハナシサレドモ流俗ノ風習ナレバコレヲ歎ク人モナク苗字ヲ轉ズル人アレバヨキ呼形（ヨビナリ）ナド云テカヒヤリ侍ルコソ心得ネ稱呼ノ亂レタルコト實ニ今ヨリ甚ハナシサレバ闕典ノ第一ハ　天子　天皇ノ號ヲ停メ給ヒテヨリ院ヲ以テ稱シ奉ル　天皇モ院也　大樹モ院也諸侯モ院也陪臣モ院ナリ僧モ院ナリ尼モ院ナリ醫人モ院ナリ山伏モ院ナリナレバ朝廷ノ官名モ武家ノ世トナリテハ制作ノ道講ゼズ職掌ハスタレテ空名ノミ殘リ諸侯已ガ好メルニ從ヒ何トナリトモツク程ニ士農工商思ヒ思ヒニ官名ヲツク今ノ人ノ名ノヨル所ヲイフニ源ト云平ト云藤ト云橘ト云ハ四姓ノ文字也サテ三善ヨリ善ノ字出大伴ヨリ伴ノ字出文屋ヨリ文ノ字出清原ヨリ清ノ字出ヅ中三權ノ守ハ中原也長谷

部長兵衛トハイヤ言ノ様ニ聞ユレドモ渡部ニモ長七アレバ長幼ノ義ナルニヤ不審シ内ハ内舎人(ウドネリ)藏ハ藏人也何ノ進トハ昔ノ官人ハ進士ヨリ官ニ進ミケレバ藤氏ノ進士ヲ藤ノ進ト云源氏ノ進士ヲ源ノ進ト云タルニヤト思ハル太郎作治郎作ノサクハサクハンナルベシト徂徠モイヘリカミ、スケ、ゼウ、サクハンハ、何ノ官ニモ有テ其長官ヲカミト號シ次官コレヲタスクルニヨツテスケト云ソノ次ヲゼウト云其次ヲサクハント云カミスケゼウサクハントモニ官名ニテ文字カハル故其字數アリ太郎次郎三郎ハ兄弟次第ノ目ニシテ人ノ名ニ非ズ榮華物語ニ中納言長良ト聞エケルハ大政大臣冬嗣ノ御太郎ニゾオハシケルト云類ニテ知ルベシ彼ニテ唐ノ代ニ專アリシ事也次第ノ上ニ大ノ字長ノ字モアリ彌ノ字又ノ字小ノ字モアルハ同族ニ其次第ヲ稱スルコトアルニ分ツナルベシ六彌太ノ六

ハ父ノ次第ニ非ンバ六郎ニ次第ヲ立テタルガ與一ノ與ハ與參ノ與ナラバコレモ彌太郎小太郎又太郎ノ類ト覺ユ餘五將軍維茂ハ父上總介兼忠子餘多養ヒテ十五ノ次(ツイデ)ナリケレバ十五郎ニ立テテ餘五ノ君ト云ケル故也梶原源太左衛門景季ハ平太ナルベキニ源ト云猪俣小平六ハ小野氏ナルニ平ト云コトハ先輩モ疑ヒ置ケリ一說ニ源太ノ源ハ賴朝ヨリ賜ハルトモ云養子ニテ本姓ヲ稱セシトモ云審ナルコトハ知ラズ梶原ハ族也源ハ姓ナリ太ハ次第也左衛門ハ官也景季ハ名也姓ト次第ト官トヲ除ケバ梶原景季バカリ也三浦平六左衛門義村モ姓ト行第ト官トヲ除ケバ三浦義村バカリ也然ウシテ梶原三浦ハ擧族同ジク稱スレバ唯景季ト義村バカリ己一人ニトドマル也梶原平三トイヘバ景時は三男ト見エタリ其子又源太平次ト數レバ平二ガ弟ハ又平三ナリサレバ行第ハ纔太郎ヨリ十郎

マデナレバ同名多ク出ル故ソノ稱ヲカユルト見エタリサレバ景時ガ三男ハ平三トコソ稱スベキニ父ヲ平三ト云程ニ三郎ト唱ヘシナルベシサレド亦同ジキモアリ三田源二綱ガ父ハ武藏守仕ガ子ニシテ三田源二宛(アツ)ト云シ由宇治大納言隆國ノ物語ニモ見エタリ伊賀源内左衛門ハ内舍人ニシテ左衛門也是等ノ類行第ヲ略シテイハザル人モアリ又左衛門太郎、監物次郎ナドト行第ヲ下ニ稱スルハ己ガ官ニアラズ左衛門ニ任ズル人ノ子ヲ左衛門太郎、左衛門次郎ト稱シ監物ニ任ズル人ノ子ヲ監物太郎、監物次郎ト稱ス義經記ニ舍那王熱田ニテ元服ノ時左馬ノカウノ殿ノ子供嫡子惡源太、二男新朝長、三男兵衛佐、四蒲殿、五郎ハ源氏ノ君、六郎ハ京ノ君、七郎ハ惡禪師ノ君、我ハ左馬ノ八郎トコソイハルベキニ保元ノ合戰ニ伯父鎭西八郎名ヲ流シ給ヒシニトナレバソノ跡ヲツガル事ヨシナシ末ニナルトモ苦シカルマジ我ハ左馬ノ九郎トイハルベシ實名ハ祖父ハ爲義父ハ義朝兄ハ義平ト申ケル我ハ義經トイハレントアリ是其時早ク行第ヲ濫リシ例モアルニヤ嫌ニ因テ行第ヲ濫リシハ義經ノ僻事ナリ且此頃モハヤ行第ヲミダレシニヤ曾我ガ兄ヲ十郎ト稱シ弟ヲ五郎ト謂シ類アヤシムベシサレバコノ頃マデモ氏族ト名ヨリ外ニ自己ノ稱トスル者ナシサレド鎌倉ノ面面モ朝廷ノ官ヲバウケ其職ヲバ掌ドラネバ官名己ニ職ヲ離レス然レドモ其官ニ任ゼズシテ妄ニ稱スルコトハアラザリシサレバコソ佐藤四郎忠信ガ兵衛ニナリテコソ鎌倉ノ勘氣ヲバ受シナレ昔ノ賤キ者ノ名ハ能ノ狂言ノ武惡イグヰ、大和物語ノマカナ、源平物語ノ老竹若竹曾我物語ノカタカキ、淺草ノ觀音取上シ川成竹成ナドノ類ナルベシト可成談ニモミエタリサレド賤シキニモ限ラズ蝦夷(エミジ)、入鹿(イルカ)、不比等(ヒト)、枳莒喩(キコユ)、細(ホソ)

日ナド皆此類ナリ近キ頃ニテモ太閤秀吉ノ幼名日吉丸、信長ノ子茶筅、古新、明智光秀ガ子古阿古自然ナドノ類アリシ也然ルニ世衰ヘ俗陋ニシテ官姓ノ文字俗人ノ名ニツク字ト云者一種出來リ其首ニハ本姓ヲ置シヲバ變亂シテ松トモ梅トモ竹トモ蔦トモツケテ醫人隱人ノ名トハ遙ニ隔タル者ニナリ姓ノ分チモナク行第ノ序モナク庶人ニ官ヲ稱シ唯呼形ノ響ノ物數寄五性吉凶ノ忌諱ニヨレリサル程ニ馬追モ兵衛ト稱シ魚賣モ衛門ト號ス如何ニ淺猿キ世ノ果ゾヤサレバ姓氏ハ爵ニアラズ然ルヲ今ノ制ハ氏族ヲ爵ノ如ク庶人ニハ稱スルコトヲ許サザル程ニ親戚内外ノ分モ混ジ禽獸ノ倫理ヲ分タザルニ近カラントス彼氏ナキ者ハ名モナシ假名バカリニテ通用ス假名ハ今日趙三ガ稱トナリ明日李四ガ名トナレバ一二十年ヲ經ズシテ親疎内外分ツベカラズ其一ツノ假名サヘ弱シ翁サビタリトテ幾度モ心ママニカヘ或ハ祖父モ父モ子モ孫モ一ツ名ヲ稱シ或ハ兄弟ニ讓リ師弟子ニ與フレバ次第同異モ無クナリテ時代モ世數モ相分ラズ生涯名ナシニテシマフ事人衆ヲ漫滅スルノ道也下トシテ上ヲヲカスヲ僭ト云上ヲ僭スルハ非禮ナリワケテ東百官ハ承平ノ頃將門ガ建テシ官名ナレバ僭ノ僭也魯ノ三家雍ヲ以テ徹セシヲ相維辟侯、天子穆穆トコソ雍ノ詩ニアルヲ三家ノ堂ニ何ゾ此事ヲトラントテ孔子モソシリ給ヘリサレバ胡元ノ世ニハ蒙古文盲ニシテ名分ノ吟味モナク鑷工ヲ待詔磨工ヲ博士師巫ヲ太保ナドト稱セシ事有サレドコレハ實ノ名トセシニハアラズ後明天下ヲトリテハ急度禁ジラレシ也名ト器トハ人ニカス可ラズト古人モ深クイマシメ置レタリ然レバ兵衛衛門ヲ馬追魚賣ノ室ニトランヤ然レドモ源平藤橘清伴文善中長藏助介佐作等ノ類ハ姓官ヲ

ヲカスニ似タリトイヘドモ各一字ノ義アル者ナレバ俗稱中若(カ)有ル文字ヨリ僭濫ニナラザル字ヲ加ヘ通ジ用フベキ事トゾ思ハル其他官名トスレバ雅稱ナレドモ俗稱トスレバ甚陋シ今ソレ書ヲ閲シテ鐵木眞、窩闊台、帖木兒ナド云ヲミレバ俗氣心ヲ衝クノミナラズ讀モ亦ナシ難シ他邦ノ人ヲシテ我名ヲ見セシメバ彼此何ゾ擇バン前ニ云如ク本邦ニハ名有テ字ナシ古ヨリ名字共ニアル人ハ翰墨中ノ人ノミ也唐ニテハ名字ノ事甚吟味アルコト也名ハ親ヨリ命ズ字ハ冠賓ヨリ命ズ内則ニ子生レテ三月妻子ヲ以テ父ニ見シム父子ノ右ノ手ヲ執リ咳シテ名ヅクトイヘリ此故ニ名ハ父ヨリ命ズル者ナルニヨリ他ヨリミダリニ是ヲ稱セズサレバ君長トイヘドモ貴ム人ニハ名ヲ稱セズ故ニ曲禮ニ國君ハ郷老世婦ニ名イハズ大夫ハ世臣姪娣ニ名イハズ士ハ家相長妾ニ名イハズ是故ニ父兄ノ列ヨリト自ヨリトハ名ヲ稱スレドモ他人ヨリシテハ決シテ名ヲ稱セズ他ノ言ニテモ誤テ其名ニフルレバ大ニ不恭トスル事也他ヨリ稱スル者ハ冠賓ノ命ズル字也名ハ稱スルコトヲ忌者故ニ諱ト云故ニ郊特牲ニ冠シテ之ニ字スルハ其名ヲ敬スル也トアリ長沮ガ輿ヲトル者ハ誰(タツ)ト子路ニ問シニ孔丘トスト答シハ長沮ヲ敬スル故ニ孔子ヲ内ニシテ丘トハ稱セシ也長沮ガ魯ノ孔丘カト云シハ孔子ニ据レル言也檀弓ニ曾子ノ子思ヲ伋ト云シハ弟子ナレバ也子夏ヲ商ト云シハコレヲ叱シテ也サレバコソ門ニ入テハ諱ヲ問トテ預無禮アランコトヲ慮レバ也婦ノ諱ハ門ヲ出ズトテ家内バカリニテ諱ム禮也此故ニ夫人ノ諱ハ君ノ前ニ質(ムカ)ヘリトイヘドモ臣イマズト云リ又名ハスベテイム者ナレドモ亦諱ザルコトアリ禮ニ詩書不レ諱臨レ文不レ諱廟中不レ諱ト云リコレヲ釋スル者ノ言ニ文王諱ハ昌ニシ

テ箕子爲武王陳洪範テ使差其行而邦其昌ト云厲王諱ハ胡ニシテ其子宣王ノ時ノ詩ニ胡不相畏ト云ハ詩書不諱也周頌ハ文武ヲ祀レル樂歌ニシテ雝詩ニ克昌厥後ト云噫嘻詩ニ駿發爾私ト云是廟中不諱也春秋僖公名ハ申ニシテ戊申ト書シ定公名ハ宋ニシテ書宋仲幾莊公名ハ同ニシテ同盟ト書スコレ臨文不諱也トアリサレバ其人ニ對シ其家ニテイハヌト云程ノ事也ソレガ次第ニ向上ニナリ漢ノ頃ニハ餘程嚴重也家諱皆著書ニ避ル也淮南王劉安ガ父ノ名長タルニヨリテ其鴻烈ヲ著スルニ長ノ字ヲサク司馬遷ガ父ノ名談タルニヨリ史記ニ談ヲ同ニカヘタリ希ニ談ノ字ミエタルハ後カヘタルニヤト思ハル後カフルト云コトモアル事也譬バ韻鏡ノ舊名韻鏡ナリシヲ宋ノ翼祖ノ諱敬ナルニヨリ鏡嫌名ナルヲ以テソノ時ハ韻鑑ト云シニ祧シテ後ハ諱ヲ除故ニ其主ヲ祧廟ニ移シテハ又韻鏡ト云シ也此故ニ杜甫ガ父ヲ閑ト云シカバ杜甫一生ノ詩ニ閑ノ字ナシ今傳ヘテ隣家閑不違ト云ハ間ノ字ヲ誤リ曾閃朱旗北斗閑トハ般ノ字ヲ誤レル也一說ニハ杜甫ガ母ヲ海棠ト云シ故子美生涯海棠ノ詩ナシトモイヘリ漢ノ時ヨリ天子ノ御諱ニハ之字ト云者アリ近キ字ヲ求メテカヘ字ニスル也譬バ漢ノ武帝ノ名ヲ徹ト申セシカバ徹ノ之字ヲ通ト定ル故ニ蒯徹ヲバ何クノ人ニテモ蒯通ト稱シ徹侯ヲバ云合セズシテ皆通侯ト云後漢ノ明帝ノ諱莊ナリシカバ莊ノ之字嚴ノ字ニテ嚴助嚴子陵トイヘバ莊助莊子陵ガコトト天下皆シル也カクノ如ク名ヲ諱ムニヨリ馬援ガ交阯ヨリ子ニ遣シケル書ニモ汝ガ曾、人ノ過失ヲ聞テハ父母ノ名ヲ聞ガ如クセヨ耳聞コトヲ得ベクシテ口ニハ云ベカラズト有サレバ子タル者ハ口ヲ絕テ父母ノ諱ハ云ザル事也唐ノ太宗名ハ世民コノ失ヲ監ミ給ヒ卽位

ノ始侍臣ニ宣ヒケルハ禮ニ準ズルニ名ハ其人終テ後將ニ諱ントスレバ前古ノ帝王生ケルニ其名ヲ諱ズ周詩ニ克昌二厥後一ト作リ魯莊ノ十六年ニ齊侯宋公同二盟于幽一ト書リ雖近代ノ諸帝妄ニ節制ヲナシヒトリ生ルニモ諱ヲ避シム理通ゼズヨツテ詔シテ曰禮ニ二ナル名不二偏(カタニ)諱一トアリ尼父猶避給ハズ近世兩字ガ子避ク經ニ違ヘリ宜ク禮典ニヨリツトメテ簡約ニ從ヒ仰ヒデ光哲ニナラヒ法ヲ將來ニタルベシ官號人ノ名及公私ノ文籍世民ツヅケ讀ザル處ハ避ザレトアリ劉淵戴淵等ハ高祖ノ諱ニサカフ故劉淵ハ元海、戴淵ハ若思ト改メテ世ト民ト別別ニ用フルコトハ貪着ナカリシカドモトカク風習ニテ内分憚リケルトミヱテ李世勣ガ如キモ常ニ李勣ト稱シケル太宗生ルニハ諱ズト宣ヒシハ檀弓ニ卒哭シテ諱ムト云公叔文子ガ卒セシニ其子戍論ヲ君ニ請テ曰日月有レ時將レ葬矣以テ其名ニカヘン所ノ者ヲ乞ト云本文アレバ也禮ハ中ヲ制スル者故ニ過ルモ及ザルモ失禮也サレバ宋ノ哲宗ノ朝ニ程伊川侍講タリ哲宗始藩邸ニ在セシ時ノ舊名ハ傭即位ノ後ハ煦ト申セシ也時ニ伊川ノ講ズル書ノ中ニ容ノ字有ケレバ容傭音同キ故中人黃紙ニテ其上ヲ覆ヒ置リ伊川ニ嫌名ヲ犯サシメント也伊川講果テテ夫人主ノ勢ハ尊カラザルヲ患ス臣下尊ムノ過ンコトヲ患ス講コレヨリ舊名嫌名ヲ避ケ玉フコト勿レト奏シケリ流俗ノ風習ハ改メガタキ者也サレバ唐ノ韓退之ガ李賀ヲ進士ニ擧ケルー李賀ガ父ノ名ヲ晉肅ト云シカバ時ノ人ソシリテ父ノ名ヲ晉肅ト云者晉進音同ジ進士ニハ擧セラルベカラズトテサミシケリ退之諱辨ヲツクリテ二名不二偏諱一トテ孔子ノ御母徵在ト申セシカドモ孔子分テハ徵トスルハ足ズト宣ヒ樂在二其中一トモアリ律ニ嫌名ヲモ諱ズ若父ノ名晉ト云ヘバ其

子進士ニ擧セラレズンバ父ノ名仁ト云者ノ子ハ人タルコトヲ得ザランカ法制ヲ作リテ世ニ教シ者ハ周公孔子也其周公ノ詩ニモ昌ノ字モ發ノ字モアリ嫌名ノコトヲイハバ康王釗ノ孫ヲ直ニ昭王ト云ヘリ曾參ノ父ヲ晳ト云シニ曾子昔ノ字ヲ諱ス君子今周公孔子曾參ノ道ニ從ハズ宦官宮妾等ニ從フヤト云ケル退之ガ云所正據確實事理的當ナレドモ唯流俗ノ退之ヲ強辨也トテ謗レリソノソシル人ニハ和スル者多シ其ソシル人ハ義理ニ考ヘ禮制ヲ闇ニハ非ズ唯流俗ニ違フト云コト也其後元ノ代ニハモト胡ニテサ樣ノ貪着モナカリシガ後ハヤヤ諱ケレド文ニ臨ンデ略點畫ヲ缺ホドノ事ナリシトカヤ胡人ノ風ナレドモ先王ノ禮ニ近カルベシ字ハ元服ノ時冠賓ヨリ其人ニ授クル者也此故ニ溢美ノ言モ佗ヨリ名ヅクル者故堯夫トモ舜功トモ樂天トモ攀龍トモ云コトニテソノ主ノ倨レルコトニハ非ズモトヨリ不敬ニモナラザル也而シテ多ク名ノ字ニ連綿スル字ヲ用ル也仲尼ノ尼ノ字名ノ丘ノ字ト續ケリ由字ハ子路ハ由路也上ヨリ下ニ與ルヲ賜ト云下ヨリ上ニ與ルヲ貢ト云ヨリ賜子貢ト云陶ガ名潛ニシテ淵明トハ淵ノ字ヲ主ニシテ明ヲ加ル也是易ノ乾ノ繫ノ辭ニヨリテ龍ノ字ヲカクセルトミエタリ古名字今盡考フベカラズトイヘドモ子細大略カクノ如シ今ノ氏ハ猶古ノ姓ノ如クナレバ固ク守テ變ゼザルベシ是人倫分別ノ本也其故ハ姓ハ竪ニ貫ク者也名字ハ横ニ貫ク者也姑一二ノ例ヲ擧テイハンニ陸崇、陸德遷、陸有程、陸寅、陸戠、陸賈、陸九思ト姓ヲ以テ其竪ヲ貫ク也兄弟ハ横也九思字ハ子疆九叙字ハ子儀九皐字ハ子昭九韶字ハ子義九齡字ハ子壽九淵字ハ子靜ト云ガ如シ又邵氏ノ兄ヲ雍ト云弟ヲ睦ト云シハ堯典ニ九族既睦ニシ黎民於變リ時雍クト一章ニ出タレバナ

リ朱子ノ三子塾埜在トハ皆土ト云字ニテ貫ヌケリ孫男七人鑑鉅銓鐸銍鉉鑄トハ皆金ニテ貫ヌケリケ様ニ義ノ取様ハサマ〲ト替レドモ貫ク理ハ同ジ事ナリ然ル程ニ杜鴻漸ガ父ヲ鵬擧ト云ケレバ時ノ人兄弟ノ名ノ如シト云ケルニテ考ヘ知ルベシ日本ニハ名アツテ字ナシソノ名ト云者元服ノ時ツク者ニテ行第モ此時ヨリ稱スル也ソレマデハ童名有リ牛若、箱王ナド云ガ如シ時宗義經トハ元服ノ時ヨリ也然レバ日本ノ名ハ彼國ノ名ト字トヲ兼タルニ似タリサルニ依テ自佗共ニ稱スルコト也翰羣中ノ事故名字ノ義定レル義ナシ假名ノ首字ヲ名ニシタルモアリ山崎嘉（嘉右衛門ト稱ス）安積覺（覺兵衛ト稱ス）ナドノ類也假名ハ別ニ設ケテ名字ヲバ別ニ稱スルモアリ宇野三平名ハ鼎字ハ士新ノ類也名ヲ實名ニシテ字ヲ別ニ稱スルモアリ服氏元喬字ハ子遷ノ類也名バアレド自佗共ニ字ヲ稱スルモアリ

物氏雙松ノ名ヲバ稱セズ茂卿ノ字ニテ行フ也コレハ唐ニモアル例也コノ名字ヲ制スルモ今始マレル事ニモ非ズ菅原道眞名ハ三、文屋康秀名ハ琳ナド各名字ナリシ也コレハ世ニイハユル名ナル者ヲ字ニシテ名ヲ別ニ設ケタル也俗呼ノ猶意義ナク覺ユルハ名二字ノ内ヲ通リ字ト云フ者ヲコシラヘテ云事アリ今僧家ニテ日蓮宗ノ日、淨土宗ノ譽、一向宗ノ如ノ字ノ如キハ同ジク釋ヲ姓トスレドモ其祖ヨリ一字ヲ傳ルハ在家ノ氏ノ如ク其字ヲ見テ其派ヲシレバ一向意義ナキ事ニモアラズ在家ハ氏堅ニ貫ケバ名ニ堅ニ貫ク者ハ贅ナリ況父ノ諱ノ字ヲ偏名ニツクコトハ禮ニ無キ事也近頃伊藤維楨字ハ原佐其子長胤字ハ元藏、次長英字臧、次長衡字ハ正臧、次長準字ハ臧五男長堅字ハ才臧ト云ガ如キ最モ條理ニ適ヘリ醫人モ彼淨土日蓮ナドノ風ヲ學ビテ専玄ノ道ノト云字ヲ上ニ置キ連綿ノ熟

不熟ヲモ問ハズ聞ナリヲ考ヘ字形ヲ考ヘツク也ソレヨリ一先師アレバ其名ヲ多ク一字ヅツ配領スル也コレモ武家ニ此陋アリシ也本三位中將重衡ノ家臣平左衛門尉モ重衡幼キヨリ不便ニ思ハレ白烏帽子ヲキセ片名ヲ賜リテ重國ト呼レケレバ其事モ久シキ事也ワキテ甚多キハ大友家ナリ義鑑ノ時ノ人ハ皆鑑ノ字ヲ配領シ義鎮ノ時ノ人ハ皆鎮ノ字ヲ配領シ義統ノ時ノ人ハ皆統ノ字ヲ配領ス聊意義アルニ似タリトイヘドモ禮制ノナキ所愈名ノ雅ヲ失シテ俗ニ走リ陋ヲマス所ナリ國初ノ頃干戈盛ニシテ士人學ニウトク朝倉義景ノ弟朝倉六兵衛在重神君ニ仕ヘ子孫ニ至リ三代共ニ朝倉六兵衛在重ト稱シ植村新六郎家次ハ其父ト子ト同ク出羽守家政ト稱シ內藤右京進正成父ヲ四郎左衛門正成ト稱セリココニ至テ濫甚ト謂ツベシサテ醫人ハ足利家ノ比ヨリ大已貴少彥名ノ敎タル事ヲ失シ和氣丹波ノ風ヲ改メ圓頂方袍ニシテ僧官ヲ受ル者トナリケル故名モ呼ナリヲ僧家ニ擬セリコレヲ以テ名ニ官ヲヲカサザル事失中ノ一得ナルベシ然ウシテ其內又二種アリ呼名ヲ云モアリ菴齋舍亭ナドノ號ヲ云モアリ愚ナル人ハ同ジ樣ニ覺エタルモアリ近來治平久シク文敎世ニ廣マリ浮屠ノ徒タル事ヲ耻テ風ヲ士人ニ還シ後藤左一香川太沖ナド云樣ナルモ出來レリ醫ハ本人アレバ病ナキ國ナケレバ佛中ニモ藥師藥王ナドアレドモ畢竟今ノ醫學ハ儒ニ近ク佛ニハ遠キモノナレドモ流俗ノ風習ナレバ怪ム人モナシ意義ハナシ時ノ風俗ナレバ昔ハ大名モ士モ勝手次第ニ頭ヲ髠セシ程ニ藤惺窩林道春ナド歷歷ノ儒者モ髠人ナリ惺窩ハ僧ヨリ歸俗セラレタレバ容ヲソノママニテ置レタルナラン道春ハ林又三郎ト謂ヒシガ慶長十二年四月命ゼラレテ薙髮法印位ニ叙シ民部卿

タリ子春齊又法印タリ春齊ノ次子春常　憲廟　髪ヲ蓄ヘ從五位下ニ叙シ大學頭ニ任ゼリソノ時ニテハ無尤ラシク見ツラメ唯後世風俗アラタマリテヨリ觀レバ世ノ怪ヲバ取レル也名ヅクル事必言ベクス言事必行ベクストコソアレ今ノ稱呼ハ文辭ニ施スベカラズ禮ニ議スベカラズ事ニ行フ可ラズサレバ假名トテ附贅懸疣ノ如ク思フベケレドモ實ヲ錄スル日ハ假名モ假ニアラザレバ實ナリ實ヲ記シテ世ニ傳フ借ト陋トノ名遁ルベカラズ之ヲ惡ンデ文辭ニアグル日始メテカノ名ヲ稱セントスレバ其家ノ奴僕サヘ主人タル事ヲシラズ然レバ面面唯一ツアル名ヲ稱スル事サヘ能ハズ漸花押ノ首ニ小字ニ書シ印ニ篆字ナドニテアヤシクヱリテ通ズレドモコレニ用ナケレバ氣ヲツケテヨム人モナク親戚朋友ハ更ナリ妻妾奴婢サヘ知ラズナリモテ行クハ餘リニ嘆カシキ事ナラズヤサテ今ノ制ニ諱ヲバ忌ム沙汰ハナク假名ヲ忌ム事ニナレリソノ上常ニ假名ヲイムノ令ヲ聞テコレヲ除クノ令ヲ聞カザルモ如何ナル故ニヤト疑ヒ侍ル且如何ナル嗚呼ノ者カ始メケン名ヲカヘスト云コトヲ拵ヘテ五性ヲ考ヘ歸納ヲ改メ畫ヲ數ヘ卦ヲ立テテ吉凶ヲ論ズル事ニナレリ太宰春臺ハ寛永以來トイヘリ何レ久シキ事ニハアラジ世傳ニハ左馬督源義朝ノ名梟ノ字ニ反リテ父ヲ殺セシト云義朝ノ反ハゲウノ音アツテ字ナシ濁母豈清音ニ通ゼンヤ笑フベシ某少年ノ時コレヲ人ヨリ傳ヘテハ今日ノ後悔トハナリ侍リヌ已ニ通リ字ハ定リテ忌諱ハ多シ文字愈狹クナル程ニ他姓ハ勿論同族ニサヘ少年ハ同名也コレヲ一大缺事トイハンモ可ナリ今ノ儒者假名ヲバ禮敎是非ノ外ノ者ニナシ總右衛門トモ彌右衛門トモツクハ世ヲ慢スルニ近カラズヤ今時ノ執法ノ文ニ宣ク

人倫ノ條理ヲ濫ルコトヲ傷マズ强テ制センハ力ナシ唯子義ヲ考フベシ禮ニ從ヒ名ヲ正シ人倫ノ條理ヲ修ムルコトヲ是トセズ流俗ヲ憚リ其子細ラシ異ヤウナリナド云ノ嫌ヲサケバ道ヲ行フノ日無ケン所謂力ノ非之無擧也刺之無刺也同乎流俗合乎汙世ヲ以テ是トシ悦ヲ時俗ニ容レンハ子ニ求ムニ所ニアラズ今試ニ世ニ一二コレヲ行ウテ執法ノ尤アルコトヲ聞ザレバ正ヲ以テコレニ繼ニモ亦可也執法モシ禁ズルコトアラバ又圖ツテ避ル所ヲ求メン若執法ノ禁ナクンバ令ヲヤブラズ父師ノ命ヲ全ウセンニハ如何冀クハ流俗汙世ノ看ヲナサズ義理上ニ於テ商量セヨ飯生謹ンデ命ヲ奉ゼン友生曰世ニ號アリ宋元以來達人君子モ皆稱ス取舍ニ六ツカシカランニハ號モ亦可也曰號ハモト人ノ自然ト唱ヘテ名トナレル也宋以來ハ多ク皆自制スレドモ號ヲ以テ人ニ臨ムハ不敬トス曰本ノ人ハ知ラデセシ事モ多ケレドモ其尤ニ倣フベキ事ニハアラズ今人ノ知ラザルニ乘ジテ不敬ヲ尊長ニ行ハン事自欺イヅレカ是ヨリ甚シカラン今一等ヲ上セテ議セヨ曰然ラバ則子以往ヲ非トシ風ヲ正シ禮ヲ議セントスルカ恐ラクハ子ガ力ノ及ブ所ニアラズ曰否位ナキ者ハ禮ヲ議セズ是豈我責ナランヤ唯是非ヲ辨ジ身ヲ措ク所ヲ擇バンハ又人ノスベキ所也師ノ命ズル所今行フベカラザレバ父ノ命ズル所ヲ用ヒン自恣ニ造命シテ嫌ヲ流俗ニ避ンヨリ師父ノ賜ハル者ヲ失墜セズシテ正シキニ從ハン者愚意ニ於テ勝レルガ如シ願クハ義理上ニ於テ議セン義ノ失スル所謹ンデ改メン道ノアラザル所謹ンデコレヲ避ン

右寶暦十二年癸未三月晦識之而後

公子卒、以復舊字

先考三浦虎角居士行狀

先考道徹野梅堂虎角居士名は義一字は快順幼名は新六後壽益と稱し又多田幸元と稱し松谷廻は純といふ常に野梅堂主人虎角と號す道徹はその法諡なりその先相州三浦の族某正治二年庚申いかなる故にてや有けむ鶴岡供奉のうちより官をすて豐後國東に來り薙髮して丸小野村にとどまり丸小野を以て族號とす法諱法道そののち幾ばく世を經てや丸小野十郎追て按ずるに將監なるもの始て富永にて來り其子兵部其子十郎なり富義秀といふものあり始て富永に來り住してより年記を詳にせず其子彥兵衞又の名掃部始て苧畑友成氏市之助村長を退くによつて村の長たり掃部即市之助妹婿なり宮畑天神の社記にみえたり市之助薙髮して下山といへり四男二女あり嫡男孫左衞門義次次は女子鶴崎某氏に嫁し次の女子隣家上原氏に嫁す上原は播磨より來り東屋敷に住すその商今にあり次の男子淸末覺右衞門肥後に遊官しのち（又按ずるに孫左衞門次角右衞門繼に二人の女子あり）家にかへり故あつてそれの年同族の爲に父子一時に害せらる其靈を祭れるほこら今天神の社側にあり今宮と號す次倉成茂左衞門次丸小野久介なり孫左衞門秋吉久左衞門薙髮して意信といふ兩子拂に住す三齋公より命ぜられて大庄屋たり其弟仁左衞門孫左衞門妻は其妹なり秋吉氏をめとり五男一女をうむ嫡喜左衞門義繼法名自休父に繼て村長たりその長子次左衞門三男孫右衞門その子喜兵衞その子仁左衞門その子彌曾は相繼で村長たり次利右衞門義重法名自閑その裔中山屋敷に住す一支は又見村に移り住す次半右衞門義久そののち諸田村にうつる今は斷絕次淸兵衞義正次兵介義利法名自心その子孫松か下屋敷に住す末の女子富來吉田氏に嫁す淸兵衞義正即先考の祖父なり始同郡拂田村都甲氏の養婿となりけり程なくかなたへ男子出來にければ養家を辭し祖母とともに慶安三年ふたたび此地へかへり一町畑屋敷に居をトし元祿元年戊辰三月十五日法諡高山項雲居士辭世同七年甲戌十月七日都甲

氏沒去法諡離雲大姉秋空その腹に兩女一男あり長女自閑の長男孫左衛門に嫁し永松にうつり村長となりしが今はたへぬ次女自休の次男金右衛門に嫁し諸田にうつり村長たりしが故ありて富來はだ屋敷にうつりとどまれり男子與四郎義房晩年暫父の名を襲ひて清兵衛といふ慶安三年庚寅を以て生る此時擧族又丸小野ををひて三浦に復す紋みつ引なりしが天神の氏子たりとて梅ばちをつけけり性剛毅にして撓まず且機巧の技に工にかねて數術によし享保四年削髮して石翁徹山居士と號す子孫の放恣ならんことを恐れ七百餘首のうたをつらね遺戒をとどめうたごとに世の有さまをつらね置身はあだし野の露のかたみにとして閣浮置土產と名づく外に自あめる處の算書合て二卷家におさむ徹山居士はじめ辨分秋吉氏秋吉氏もとは岩田はじめ兩子村におるその祖秋吉久左衛門法名意信細川越中守忠興公小倉にましませし時はじめて兩子手永の大長に命ぜられのち辨分にうつり世世相繼しが今はたへぬ久左衛門子勘右衛門の弟權兵衛勘右衛門子長介四代大庄屋たり長介子早く死して繼たへぬを娶りて一女一男あり秋吉氏名は因元祿十三年庚辰六月廿六日沒去法諡自性淨光再たび踏懸村柳氏をとりて子なし柳氏清信女享保六年辛丑九月二十日居士に先だつて歸泉法諡錄嚴貞順大姉居士同十五年庚戌十二月二十六日享年八十一辭世女子名はまん同郡高田銅孫兵衛に嫁す寛文十一年辛亥に生れ寛保三年癸亥四月十三日高田に沒す享年七十三法名繹妙祐その子貞右衛門寶曆三年癸酉富永にうつる男即先考道徹居士貞享三年丙寅十一月二十七日平且に出誕ひととなり遊をこのみ上士大夫より僧巫農工俳優技人交らざる處なし二度南勢に遊び一度京城にとどまり三度崎陽に趣き足九州に遍して碁を好み俳諧をたのしび卒爾として出偶然としてとどまり孤雲の意にしたがひてうつりとどまるに似たりされば延享三年丙寅四月巡撫吏神谷左內君茅屋に宿し給ひし時扇とり出し發句ひとつと望給

ひしかば空はなを曇らぬ暗の螢かなと書て奉りかなたより枯魚の拜領にも預りける先祖以來此宅にして上使宿り給ふ事丙寅にいたり五度されば人の困苦をみることと身これにあたるがごとしわかうして貧しくさていさゝかあへり享保十七年壬子西國蝗をこる事夥し人民死すること數をしらず西藩の諸侯皆金粟を官府に仰ぎ給せしかどもその困をすくふにたらず大人此事をふかく歎かせられしかども大堤の決ずる隻手のささふるにあらねば自ふるひ施し衣をとき食を推し千端百計活をうるもの十數家つひて寶暦丙子年また大に荒侍りしに大人自先資を出し誠を推し邑里の故老人家をすすめ互に相救けるに此風ひろく傳へ郡中各相たすくされば鰥寡孤獨の人艱難困苦の事あれば醫藥を携へ飲食を推し慈惠を以て本とししつて心を盡さざる事なし同じき春の事なりし隣村兩子の一民飢にくるしむよしきこへければ例のごとく糧いろ〳〵のもの取揃へ遣し猶も心やすくましまさざりけんかつて相しれるにもあらねど杖を引つその門に至り給へば飢人今朝ははや果ぬるよし偕は速くも傳へ聞てぞかく淺ましき死をばさせけるとて涙兩眼に潛然たりきされば人の難を救ふに知と不知となく聞くに随ひ給ひける誠に吾輩の龜鑑ながくこの遺敎にそふかましかば不孝の兒孫なるべしとかしこみ奉るさきの元旦男安貞村の禮つとめてかへり來り某なるものの母老さらぼひて初春の有様とも見えずつづれうちきて居たるよし申ければ何にぞや人は改玉の春とて時めくものをいかに心のくるしからんとて言下に衣をときておくり遣されしも四年ばかりの跡なるべし人の難に忍びず急にあまねき事かくのごとしこの故に人の不正をにくみ及ざるをすすめ人難あればゆきてとき

身過あれば退ひておもふ是によりて郷里事あれば人來りとふとふ事主命のごとしつねに人に教るの道勤を本とし儉を柄とす勤儉の道に怠る時は祖先の祀父母の養親子夫婦の愛敬長幼朋友の交誼心ならずして是にそふくとて故なければ寸貨もすてず事あれば尺璧も惜まずされば酒と烟とをば損有て益なしとて遺戒ありき假山草木の數奇あれども籠鳥池魚の苦しきを我玩とする事をばふかくいとひ給ひける中年みづから養生の道を省して夫人の病變化百端なりといへども本弱して末衰ふ本を固うするの道房中の愼に有房中禮あれば四體自强しとてつねに帷幕を遠け給ひきされば齡七旬をこえて目明に耳とく歯かたく精神爽にましましける老後晋に對して夫人老ぬれば耄るもの也耄たるものは自耄たるをしらずよつて自耄すとす我已に考ていまだ耄たりとせず耄つ

つかくおもふにや是非は汝は附す是は汝を是非は汝ただせ我達はじとこそ有し平生碁をこのませられしが死生を碁面に省してそれ生は碁の局面になるがごとし生をなすものは子と局とのごとし子局はその形を認ていふにあらず碁局面になる時窮あり達あり喜あり憂あり窮達憂喜子局になりて子局しらず子局に歸して子局有せずとの遺訓も空しく肝に銘じ耳にとどまりかなしき數と書つけ侍るさりし寳暦八年戊寅の冬馬より落給ひしばらく心地も例ならずおはしませしかども程なく常に復し睦月のいとなみ相かはらずつくろひ殊にこの年は祖先已來この處に住居し侍りて軒端の松の色もかはらず百とせあまり十年かくぞすみ侍る賀宴とて同族うち集りわれも壽盃を献せしにその冬己卯十二月五日氣短かく言語しふり九日といふには精神脱し廿六日には病勢大にすす

み面容つかれおとろへさせて眼底に涙を含ませけるこれやわなみ百年思愛の暇乞なるべし夫よりひたすら變症出看病の床に夢のごとく春をむかへ頼なき月日猶もたのみて有けるに庚申正月二十九日夜半宛然として我蜚をばすてさり給ひけり享年七十五先考寳永五年戊子夫人を千燈矢野氏にむかへ（矢野氏諱はふさ處角府君に後るゝ事十年明和七年庚寅五月二十九日沒し給ふ行年八十法名妙覺智還大姉）子六人あり長女名はかや（始の名はたん）同七年に生れ田澁横嶺村小田原増右衞門が妻となり寛保二年壬戌六月十五日父に先たつ（法諡清月智淨信女）次女くめ正德二年壬辰に生れ雨子村財前卯十衞門が妻となる次の男萬勝正德五年に生れ享保四年己亥正月十五日に夭す（法諡智乜童子）次の女よの享保二年に生れ享保六年辛丑九月二十二日に夭す（法諡芳蘂童女）次の男晉字は安貞享保八年癸卯八月二日平旦に生れ祭祀を奉ず次女りく同十一年丙午に生る杵築古川氏の子舛を去年四月養婿とし安貞が弟たらしむ安節と字す俳諧文珠水一卷さきに世に公にし同硯の海十卷家に藏む二月三日墓所を宅の南岡にトし一堆の墳墓地下八尺冥魂を安じ奉る

寶暦十年庚辰三月　男晉泣血識

先考三浦虎角居士行狀（終）

梅園全集上卷 終

大正元年八月七日印刷
大正元年八月十日發行

梅園全集上卷奥付

檢印欄

上卷

編纂者　梅園會

發行者　辻本卯藏
東京市神田區北神保町十一番地

印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地

發行所　弘道館
東京市神田區北神保町十一番地
振替口座東京八壹五番
電話本局三四三二番

梅園會會則

一、本會ハ梅園先生ノ學說ヲ江湖ニ紹介シ世道人心ニ裨益シ學術界及敎育界ニ貢獻センコトヲ期ス

二、本會ハ前項ノ目的ヲ達センカタメ『梅園全集』ヲ編纂シ且之ヲ刊行ス

三、本會ニ總裁一名會長一名顧問若干名編纂主任一名理事二名及主事三名ヲ置ク

梅園會

總裁	貴族院議員子爵	松平親信
會長		元田直
顧問	拓殖局總裁	元田肇
顧問	文學博士	物集高見
顧問	大分縣知事	昌谷彰
編纂主任	大分縣立杵築中學校長文學士	藤井專隨
理事		高橋文六
理事		阿部七五三吉
主事		加藤依永
主事		大林龜太郎
主事		岡島保男